

戦姫絶唱シンフォギア  
×MASKED RIDER 『X』  
～忘却のクロスオー  
バー～

風人Ⅱ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

『神の力』を巡るパヴァリア光明結社との戦いから暫くが経ち、立花 響ら装者たちが暮らす街で謎の怪事件が起こり始める。

闇の中から人々を襲う、血のように赤い眼を持つ謎の異形。

ネットや噂で都市伝説として広まる、“仮面ライダー”と呼ばれる謎の存在。

頻発して起きる本来ならありえない異変、謎の怪異を巡る事件の中で戦姫達と仮面が

邂逅したその時、世界は”改竄”と共に崩壊へのカウントダウンを刻み始める――

こちらはオリ主／オリライダー主役のシンフォギア小説です。小説の形式は試験的に今までの台本形式からテイストを変えてみようと思います。

また、こちらの主人公はゼルガーさんのサイトにて私が投稿する『仮面ライダークロス』からの続投となりますが、色々な意味でリセットされてほぼ別キャラと言っても差し支えない為、こちらだけ読んでいても愉しめるように構成していく予定です。

# 目次

## プロローグ編

第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ラ

イダー | 1

第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ラ

イダー① | 10

第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ラ

イダー② | 32

第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ラ

イダー③ | 53

第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ラ

イダー④ | 90

第二章／邂逅×存在を赦されない存在

第二章／邂逅×存在を赦されない存在 | 122

① | 144

第二章／邂逅×存在を赦されない存在

② | 180

第二章／邂逅×存在を赦されない存在

③ | 211

第二章／邂逅×存在を赦されない存在

④ | 248

第二章／邂逅×存在を赦されない存在

⑤ | 273

登場人物&設定一覧(随時更新予定)

295

立花響編（前編）

第三章／改竄×断ち切られた繋がり

384

第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆①

307

第三章／改竄×断ち切られた繋がり①

394

第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆②

316

第三章／改竄×断ち切られた繋がり②

409

第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆③

328

第三章／改竄×断ち切られた繋がり③

444

第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆④

347

第三章／改竄×断ち切られた繋がり④

476

番外編①

370

立花響編（後編）

第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆

穂の芽

517

雪音クリスマス編（前編）

メモリア01／ヒーローの食生活×不

第五章／不協和音×BANGBANG	GIRLの憂鬱	541
第五章／不協和音×BANGBANG	GIRLの憂鬱①	559
第五章／不協和音×BANGBANG	GIRLの憂鬱②	593
第五章／不協和音×BANGBANG	GIRLの憂鬱③	633
第五章／不協和音×BANGBANG	GIRLの憂鬱④	672
第五章／不協和音×BANGBANG	GIRLの憂鬱⑤	701

弾の二重奏(デュエット)③(後)	GIRLの憂鬱⑥	740
弾の二重奏(デュエット)③(前)	雪音クリス&五等分の花嫁編(後編)	
弾の二重奏(デュエット)②	第六章／五等分のDestiny×紅	802
弾の二重奏(デュエット)①	第六章／五等分のDestiny×紅	838
弾の二重奏(デュエット)	第六章／五等分のDestiny×紅	867
弾の二重奏(デュエット)	第六章／五等分のDestiny×紅	911

- 949 第六章／五等分のDestiny×紅  
弾の二重奏(デュエット)④(前)
- 983 番外編②  
メモリア02／亜空間の死闘×竜の仮面ライダー  
1010
- 1029 第六章／五等分のDestiny×紅  
弾の二重奏(デュエット)④(中)
- 1085 第六章／五等分のDestiny×紅  
弾の二重奏(デュエット)⑤(前)
- 1125 第六章／五等分のDestiny×紅  
弾の二重奏(デュエット)⑥(中)
- 1149 第六章／五等分のDestiny×紅  
弾の二重奏(デュエット)⑥(後)
- 1181 第六章／五等分のDestiny×紅  
弾の二重奏(デュエット)⑦(前)
- 1051 第六章／五等分のDestiny×紅

第六章／五等分のDestiny×紅

暁切歌&月読調編（前編）

弾の二重奏（デュエット）⑦（中）

第七章／離Yy式・解答不能×切り離

1230

されたaカ吊奇のウタ

1423

第六章／五等分のDestiny×紅

第七章／離Yy式・解答不能×切り離

弾の二重奏（デュエット）⑦（後）

されたaカ吊奇のウタ①

1448

1247

第七章／離Yy式・解答不能×切り離

第六章／五等分のDestiny×紅

されたaカ吊奇のウタ②

1469

弾の二重奏（デュエット）⑧

1296

第七章／離Yy式・解答不能×切り離

番外編③

されたaカ吊奇のウタ③

1480

メモリア03／急なお誘い×キミに伝

第七章／離Yy式・解答不能×切り離

えたい気持ち（前）

1365

されたaカ吊奇のウタ④（前）

1502

メモリア03／急なお誘い×キミに伝

第七章／離Yy式・解答不能×切り離

えたい気持ち（後）

1373

されたaカ吊奇のウタ④（後）

1532



第七章／離 Y y 式・解答不能×切り離

された a カ吊奇のウタ⑤

1567

第七章／離 Y y 式・解答不能×切り離

された a カ吊奇のウタ⑥（前）

1590

第七章／離 Y y 式・解答不能×切り離

された a カ吊奇のウタ⑥（後）

1603

第七章／離 Y y 式・解答不能×切り離

された a カ吊奇のウタ⑦

1634

暁切歌&月読調編（後編）

第八章／繋 x X 式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも m e 侶

スは駈 k e 走ル

1654

第八章／繋 x X 式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも m e 侶

スは駈 k e 走ル①

1677

番外編④

メモリア 04 / 漆黒の戦姫×通りすが

りの

1702

暁切歌&月読調編（後編）

第八章／繋 x X 式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも m e 侶

スは駈 k e 走ル②

1724

第八章／繋 x X 式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも m e 侶

スは駈 k e 走ル③（前）

1761

第八章／繋 x X 式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

又は駈 ke 走ル③ (中)

1799

又は駈 ke 走ル④ (中)

1872

第八章／繋 x X 式・調 (ツキ) が読み解

第八章／繋 x X 式・調 (ツキ) が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

又は駈 ke 走ル③ (後)

1818

又は駈 ke 走ル④ (後)

1895

第八章／繋 x X 式・調 (ツキ) が読み解

第八章／繋 x X 式・調 (ツキ) が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

又は駈 ke 走ル④ (前)

1841

又は駈 ke 走ル⑤ (前)

1910

第八章／繋 x X 式・調 (ツキ) が読み解

第八章／繋 x X 式・調 (ツキ) が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

又は駈 ke 走ル④ (幕間)

1858

又は駈 ke 走ル⑤ (後)

1935

第八章／繋 x X 式・調 (ツキ) が読み解

第八章／繋 x X 式・調 (ツキ) が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

又は駈 ke 走ル⑥ (前)

1962

第八章／繋XX式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

スは駈 ke 走ル⑥（後）

第八章／繋XX式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

スは駈 ke 走ル⑦（前）

第八章／繋XX式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

スは駈 ke 走ル⑦（中）

第八章／繋XX式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

スは駈 ke 走ル⑦（後）

第八章／繋XX式・調（ツキ）が読み解

くわたしの答え×黎明・それでも me 侶

スは駈 ke 走ル⑧

風鳴翼&マリア・カデンツァヴナ・イヴ編

（前編）

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

the load

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

the load①（前）

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

the load①（中）

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

the load①（後）

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

2113

2150

2167

2180

2204

2011

2027

2066

the load ② (前) | 2225

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

the load ② (中) | 2253

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

the load ② (後) | 2280

番外編⑤

メモリア05／Die Geburt

der Trag・die×SINの

墮天使 (前)

メモリア05／Die Geburt

der Trag・die×SINの

墮天使 (中)

メモリア05／Die Geburt

der Trag・die×SINの

墮天使 (後)

風鳴翼&マリア・カデンツァヴナ・イヴ編

(前編)

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

the load ③ (前) | 2363

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

the load ③ (後) | 2375

第九章／運命ノ少女×破壊者†on

the load ④ (前) | 2397

## プロローグ編

### 第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ライダー

「ハアツ、ハアツ、ハアツ、ハアツ……!!」

——深い霧に覆われた深夜の海沿いの公園。昼間には大勢の人達が家族や友人、恋人との一時を楽しむ人気スポットとしてそれなりに有名なこの場所も、夜の闇に包まれる今はその見る影もない。

街灯の光が点滅し、公園内は不気味な静寂に包まれ、時間帯的にも当然の事ながら人気などありはしない。

そんな公園の中を、一人の女性が息を切らしながら必死の形相で何かから逃げようように走る姿があつた。

髪や服が乱れるのも構わず、形振り構わずに逃げ続ける彼女の顔に宿るのは“恐怖”の感情のみ。

まるで悪鬼にでも追われているかのような様子で後ろを気にするように何度も何度も背後を振り返り、公園の中を逃げ回った先で彼女が滑り込んだのは石造りのベンチの裏。

息切れした酸素を取り戻すかのように胸を抑え何度も深呼吸を繰り返すと、女性はある恐る石造りのベンチの穴の隙間から周囲を見回し、誰も追ってきていない事を確認して漸く安堵の溜め息を漏らした。

「はあっ……はあっ……何だったの……一体、”アレ”はっ……」

呼吸を整えて幾許かの落ち着きを取り戻しても、女性の心の内を占める疑問や混乱までもが消えてなくなった訳ではない。

——”アレ”はなんだ？何故自分が追われていた？

誰かが応えてくれる筈もない疑問を心の内で何度問うても、やはり返ってくるものは何もない。

思い出すだけでも心の底から震え上がる。しかし最早自分にはどうする事も出来ないのなら忘れてしまった方が楽になれるか、それも無理なら今から警察署にでも駆け込んで相談するしかないかと未だ心に根付く恐怖を振り払うようにそう考え、女性は持参のバッグを乱雑に漁り、飲み残しの水で乾いた喉を潤そうと震える手でキャップを開けようとし、

——ペットボトルの中で揺れる水越しに、血のように赤い瞳を輝かせて自分の顔を見  
き込む”悪鬼”の顔を見た。

「ツ?!い、いやああああああああっつ?!?!」

『アヒツ、ヒツ……アハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハアツ!!』

開きかけのペットボトルの水を投げ出し、耳をつんぎくような悲鳴を上げる女性。悪鬼はその悲鳴にまるで耳心地がよさそうに歓喜し、狂った噛い声と共に女性へと迫っていく。

恐怖で泣き叫び、腰が抜けたのか女性が身を起こす事もままならないまま地を這いずるように無様に逃げるしか出来ない中、悪鬼はそんな姿をも愉しむかのように不気味に噛いながら口から夥しい量の涎を垂らし、その両手から生える凶悪な爪で女性の四肢を引き裂こうと勢いよく駆け寄り爪を振り上げ、そして……

「……………うっ……………っ……………え……………?」

……一瞬の後にはズタズタに引き裂かれていたであろう筈の女性の身に、いつまで経っても痛みが降り掛かる事はなかった。



最早此処までなのかと、絶望のあまり涙で濡れた目で痛みからも目を逸らそうとした女性には不思議に思い、恐る恐る背後を振り返ると、其処には……

『…………ギ、ガツ…………ギギギツ、ギギイツ…………?!』

『……………』

——彼女から少し離れた場所に、二つの影が蠢く姿があった。

一つは女性を襲おうとしていた筈が、何故かいつの間にか遠くに倒れて痛みにも身悶える悪鬼の影。

そしてもう一つは、女性に背を向け、僅かに見える横顔から赤い瞳を輝かせているの



『アグウツ?!ギツ、ギギツ、ギギイツ……!』

『……これで、エンドマークだ』

受け身すら取れず、地面に思い切り叩き付けられて悶え苦しむ悪鬼を見据えそう呟くと、赤い瞳の影は左腰に備え付けられているカードケースからカードを一枚取り出し、腰に巻かれているベルトのバックルから上部に露出してるスロットにカードを装填しバックルに戻すように掌で押し込んだ。

『Final Code x……clear!』

バックルから鳴り響く電子音声と共に、赤い瞳の影が右足を悪鬼に向けて突き出す。

直後、足の裏から放たれた蒼い光が悪鬼に直撃すると共に捕縛し、自分の全身を駆け巡る蒼い光を見て悪鬼が戸惑う中、赤い瞳の影は地面を軽く蹴り上げて跳躍すると共に流れるような動きから空中で跳び蹴りの態勢を取り……

『——ハアアツ!!』

『イツ、ギツ……ギャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ?!』

空中に浮いた赤い瞳の影の全身が蒼く発光し、直後にその身を蒼い閃光と化した跳び蹴りが悪鬼の身体を貫いた。

そして閃光から元の姿に戻った赤い瞳の影が悪鬼の背後に現れたと共に、悪鬼は断末魔の悲鳴を上げながら爆散し完全に消滅していったのだった。

「ツ……な、なんなの……?」

その一連の流れを目にし、爆発の勢いから思わず顔を逸らしていた女性は呆然と赤い瞳の影を見つめていく。

……雲の隙間から差す月の光に照らされて輝く、蒼い仮面と黒のアンダースーツの上

に纏われる蒼い装甲。

全身の至る所にXの意匠が施されるその姿を目に焼き付け、女性の脳裏にふと数週間前からネットで話題になっているとある都市伝説が過ぎった。

闇に潜む怪物から人知れず人々を守る、謎のヒーロー。

顔を隠す仮面を纏って怪物を倒し、バイクを駆って颯のように立ち去るその姿から人々が名付けた、その名は確か――

「――仮面……ライダー……？」

『……………』

月が照らす光の中で赤い瞳を輝かせる影……仮面ライダーを女性が呆然と見つめる中、仮面ライダーはそんな女性を一瞬一瞥するだけで特に何も語ろうとせず、そのまま背を向けて何処かへと歩き去っていったのだった。

# 第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ライダー①

— S. O. N. G. 本部 —

— S. O. N. G.。それは超常災害対策機動部タスクフォース（Squad of Nexus Guardians）の略称であり、認定特異災害『ノイズ』に対応するため日本政府が設けた組織。

その活動内容は先史文明期の人類により作り出された人間のみを大群で襲撃し、触れた者を自分もろとも炭素の塊に転換してしまう特性を持つ異形の存在『ノイズ』、そのノイズの自然発生が終息した今、S. O. N. G. と敵対する錬金術師の組織がノイズを改良して運用する『アルカ・ノイズ』の殲滅は勿論のこと、『聖遺物』と呼ばれる世界各地の伝説に登場する超古代の異端技術の結晶の回収・保護を主な目的としている。

そんな彼等の本部となるのは、ここ政府が保有する埠頭の敷地内にて現在整備作業が

行われる巨大な潜水艦であり、その艦の発令所のブリッジにて今、S. O. N. G. に所属する『シンフォギア』の装者達がとある議題で集められていた。

「——ノイズとは違う、謎の怪物……ですか？」

議題の内容を聞かされ、開口一番に疑問げにそう口を開いたのは、襟足が広がった栗色の髪のボブカットの少女……聖遺物『ガングニール』の装者である”立花 響”だった。

そんな彼女の疑問に同調するように響と共に集められた他の装者の少女達もそれぞれ訝しげな反応を浮かべる中、彼女達の前に立つ赤のカッターシャツとピンクのネクタイが特徴的な大柄の男性……このS. O. N. G. の司令官である”風鳴 弦十郎”は両腕を組んだまま静かに頷いた。

「うむ……昨夜未明、深夜の警察署に駆け込んだ女性から気になる証言を得たらしい。何でもノイズとは異なる姿の、血のように赤い眼をした正体不明の謎の怪物に突然襲われた、と」

「正体不明の謎の怪物……」

「ち、血のようになって……また随分物騒な特徴デスね……」

弦十郎から聞かされる正体不明の怪物の話の内容に、黒髪のツインテールの物静かな少女……聖遺物『シユルシヤガナ』の装者である”月読 調”は険しげに眉を潜め、彼女の隣に立つ髪留めをした金髪の少女……聖遺物『イガリマ』の装者である”暁 切歌”はその不気味な特徴に気味が悪そうに顔を引き攣る。

そんな中、発令所にて情報処理を担当するオペレーターの二人の男女……藤堯 朔也”と”友里 あおい”が弦十郎の話に補足説明を加えていく。

「念の為、女性の証言を元に昨夜彼女が被害に遭ったという公園周辺の索敵レーダーのデータを時間を遡って洗い直してみました……」

「ノイズ、アルカ・ノイズの反応は勿論の事、それらしき不審な反応は特に感知されてま



せんでしたね……」

「だったら襲われた本人の勘違いだったんじゃないか？それっぽい覆面を被ってた暴漢だったとか。いきなり襲われて混乱してたつてもあるだろうし、暗がりじゃ相手の顔なんて良く見えないだろ？」

オペレーター二人の話から、襟足の左右を長く伸ばした銀髪の少女……聖遺物『イチイバル』の装者である”雪音 クリス”はそもそも怪物など存在せず、襲われた被害者のただの勘違いだった可能性を指摘するが、その指摘に対し弦十郎の隣に立つ小柄な少女……S・O・N・G・の技術面を担当する”エルフナイン”が手元のパッドを操作しながら答える。

「その可能性もあるとは思いますが、実はそれだけじゃなく、この件と何か関わりがあるんじゃないかと思われる噂があります……これなんです……」

「……？何だこりゃ？」

「……『新たな都市伝説発見！人知れず怪物から人々を守る、影のヒーロー！』？」

エルフナインが見せる液晶画面を覗き込むと、其処にはとあるサイトのまとめで紹介される都市伝説のスレッドが映し出されていた。

淡々とした声音で調がタイトルを読み上げたそのまとめには、夜な夜な人を襲う怪物を謎のヒーローが駆け付けて颯爽と倒したという、まるで特撮ヒーローの中の話のような信じられない体験談が幾つも報告されており、その内容に怪訝な反応を浮かべる他の三人とは対照に、そのスレッドを目にした響が過敏に反応を示した。

「あ、それ知ってる！確か、『仮面ライダー』の話だよな？」

「……はあ？仮面ライダー？何だよそれ？」

「私も今朝学校で友達から聞いたんだよ。素顔を仮面で隠し、何処からともなく颯爽と現れて怪物を倒し、バイクに乗って颯のように去っていく謎のヒーロー！その姿から誰が呼んだか、仮面ライダー！……って」

「ほんとに何だそりゃ、アホらしい……もしかしなくてもその友達ってあのアニメ好きのお前の友達だろ？別に悪く言うつもりはねえけど、この手の眉唾物にまで手を出し始めたらいよいよ終わりだぞって伝えとけ」

「えー……私はそんなに悪くないと思うけどなあ……」

身振り手振りで友達に教えてもらった仮面ライダーの噂を説明するも、そのあまりに荒唐無稽な内容に馬鹿馬鹿しげに溜め息を吐くクリスから呆れ気味に一蹴され若干気落ちする響だが、その話を聞いていたエルフナインは「いえ」と首を横に振った。

「響さんの話、あながちただの噂話と切って捨てられないと思います。実際のところ、ここ数週間の間で昨夜の女性と同様の事件が幾つも報告されており、被害者が皆、口を揃えて証言してるんです……『ノイズじゃない謎の怪物に襲われ、仮面を身に付けた何者かに助けられた』と」

「……って言われてもなあ……それでこんな無茶苦茶な話を信じろって言われてもよ

……」

「そもそもその話、その報告されてる被害っていうのが実は被害者側の悪戯って可能性もないデスか？このネットの掲示板とかを見て、誰かが最初にやり始めたから自分もやってみよう！なーんて流行りに乗って、ホントにやってしまった困ったちゃんな人達かもしれないデスよ？」

未だクリスが仮面ライダーの話を受け入れられず困ったように頭を掻く中、切歌が実は報告される被害そのものが被害者側の自作自演ではないかと推察するも、弦十郎は首を振ってそれを否定する。

「その可能性も最初に考えられたが、事情聴取を行った警官達の話では、被害者の中には実際に腕や足に何かに引つ搔かれたような深い傷を負った者も何人かいたらしい。……何より、被害者達の様子は皆普通ではなく、聴取を受ける間も何かに怯えているようだった。その様子からして、彼等が嘘を言っているようには見えなかったと」

「マ、マジでデスか……」

「……ただの悪戯にしても、その為だけに自分の体に傷を入れるなんて、普通だったら有り得ないよね……」

言葉を失う切歌の隣で、調は顎に手を添えて冷静に分析する。

もしも仮に今までの話が本当だと仮定すれば、今街にはノイズとは別に人を襲う怪物が潜み、その怪物を倒す謎の勢力が存在するということになる。

敬遠しがちな噂や都市伝説の内容から有り得ないと否定しそうになるも、それが仮に本当だとすれば確かに由々しき事態かもしれない。何せ自分達の預かり知れぬ所で人々の身に危険が降り掛かっているのだから。

「今のところ死傷者の報告は出ていないが、だからと言ってこのまま放置する事は出来ない。今後その被害が出る可能性もある以上、現在S・O・N・G.の方でも事件の調査を進めてはいるのだが……」

「情報が少ないのもあって、今のところ調査の方もかなり難航しているみたいですね……何分頼りとなる手掛かりが被害者の証言とネットの情報だけなのもそうですが、証拠も殆どなく、今までの事件が信憑性の薄い都市伝説レベルの話で留まっていた辺り、もしかすると件の怪物側にも証拠を隠滅する工作人員のような存在がいるのではないかと……」

「人を襲って、しかも証拠も消し回ってんのかよ……やってる事のタチの悪さは錬金術師の連中とどっこいどっこいだな……」

「でも、だったら余計にほっとけないです！理由もなしに人を襲ってるなら、尚更……！」

正体が不明であっても、事実人が襲われて被害も出ているのは確かだ。ならば何であれ捨て置くことなんて出来ないし、拳を握り締めて力強い眼差しを向ける響に対し、弦十郎も同意の意を込め頷き返す。

「現状、手掛かりが少ないのは事実だが、かと言って何も掴めていない訳でもない。昨夜

の怪物の被害に遭った女性だが、一夜明け、事件当時の記憶を落ち着いて思い出せるようになった彼女の口から気になる証言を得られた」

「女性の話では、怪物に襲われ掛けた所を例の仮面ライダーに助けられ、彼が怪物を見てこう口にしたそうです……『ノイズを食べ過ぎて、狂ったか』、と」

「ノイズを……食べる……？」

耳を疑う内容に、装者四人は目を見開き困惑してしまふ。

ノイズとはその特性として、触れたものを炭素や塵に分解する危険な能力を持ち、シンフォギアのような特殊な兵装を持たなければ触れる事すら出来ない存在。普通ならあり得ない事だ。

なのにそのノイズを喰らえるという話が事実だとすれば、それはノイズと同等か……いや、仮にもし食らった分強くなるとすれば、それはノイズ以上の脅威となりうるかもしれない。

まだ不確かな情報ではあるが、想像していたよりもその怪物が遥かに危険な存在である可能性が仄めかされ、装者達の間にも改めて緊張が走る中、それが伝わったのか弦十郎も真剣な口調で発令を掛ける。

「真偽の程は分からないが、この証言が事実であればこのまま放っておく事は出来ない。よってS・O・N・G. は今後の方針としてこの謎の怪事件の真相を追うと共に、件の怪物の捕縛、又は撃破を視野に調査する事とする。尚、件の怪物については被害者の証言を元に、仮称として『ノイズイーター』、仮面ライダーと噂される謎の存在を『マスクドライバー』と称する事となった」

「ノイズイーターと、マスクドライバー……」

「うーん……私としては仮面ライダーの方がしっくり来るんだけどなあ……」

「あー、分かるデス。何故か分かりませんがそつちの方がなんと言うかこう……キュピーン！と身が引き締まる感じがするデスよ」



「お前ら、緊張感が長続きしなさ過ぎだろ……」

今さっきまでノイズ喰いという未知の能力の敵の存在を知って緊張の面持ちだった筈なのに、早くもいつもの調子に戻り仮面ライダーの呼称について盛り上がる響と切歌を見てクリスも呆れ、調も似たような反応で溜め息を吐いてしまっている。

そして弦十郎もそんな気の抜ける光景にやれやれと肩を竦めるも、すぐにまた表情を引き締め話を進めていく。

「一先ず、今回のブリーフィングは此処までだ。相手の正体が掴めていない以上後手に回ざるを得ないが、気を逸らせても仕方がない。今後情報が入り次第君達にも逐一報告せ、場合によっては緊急で出撃してもらおう場合もある。その時は宜しく頼んだ」

「分かりましたッ！……あ、ところで師匠、今の話って翼さんとマリアさんには……」

「あ、お二人には先に僕の方から伝えてあります。ただ、お二人にもまだお仕事があるら

しいので、急に帰国するのは中々難しいかと……」

「あー、そつか……二人とも今は海に向こうだしね……」

残念そうに呟く響の脳裏に浮かぶのは、装者達の中でも年長組の二人……聖遺物『天羽々斬』の装者であり、弦十郎の姪である”風鳴翼”と、聖遺物『アガートラム』の装者である”マリア・カデンツァヴナ・イヴ”の顔。

どちらも世界に誇るトップアーティストとして活動しており、現在も海外での活動に勤しむ彼女達にこちらの都合に合わせて直ぐに帰ってきてもらうのは確かに難しいだろう。

しかし欲を言えば二人の顔を見たかったなあと後ろ髪を引かれながらも、とりあえずその場を解散となった響は他の装者の三人と共に本部を後にするのであった。



——同時刻、とあるビルの屋上にて二人の青年の姿があった。

一人は赤いジャンパーを羽織り、屋上の手すりに寄りかかりながら目付きの悪い眼差しでビルの真下を行き交う人々を見下ろす金髪のツンツン頭の男。

もう一人は青い革ジャンを着込み、屋上の手すりに背中から持たれ掛かりながら気怠げに空を見上げる青髪の青年。

一見大学生程の普通の人間にしか見えない二人組だが、ビルの上から街を見下ろしていた金髪の男は突然「チツ」と舌打ちし、何やらイライラした様子で青髪の青年に目を向けた。

「おい、そつちは何か掴んだかよ？例の件の犯人をよ」

「……うん？いや、こつちもゼーんぜんダメ。事後処理のついでで色々捜してみたけ

ど、それらしいもんは特になーんもナシ」

「またかよ……クツソ、もう何週間もこの調子だぞ！一体何人目だよこれで！」

青髪の青年からの報告を聞いて余計に苛立ちが増したのか、金髪の男は思わず手すりを蹴り付けて毒づき、そんな男の姿を横目に青髪の青年は自身の爪を弄りながら飄々とした口調で宥める。

「ま、焦ったところでどーにもなんないでしょ。僕達に今出来んのは、野放しにした連中が強くなって戻ってくんのを待つ事ぐらいなんだし」

「だからっ、その野放しにした連中がドンドンドンやられてってるから焦ってんだろうがよ！ここまで作るのにどんだけ時間が掛かったと思ってるんだ！やつぱ俺が言った通り、地道に餌を食わせて力付けさせんのが一番だったんじゃねえのか?!」

何処か適当な調子の青髪の青年の口振りに思わず凄んで食って掛かる金髪の男。だが青髪の青年はそんな男のガン飛ばしも何処吹く風と無視しながら自身の爪を弄り続

け、そんな青年の調子に金髪の方も余計にストレスが増すばかりで「あーッ!!」と頭を掻きむしるが、其処へ……

「——それではただ肥えるだけで、駒は駒としての域から脱せられない。最初に言ったハズだろう？俺達が欲しいのは『同士』であり、駒の製造はその過程でしかない」と

——そんな二人の下に、屋上の入り口の方からもう一人の男が悠然とした足取りで姿を現した。

黒のスーツを着込み、黒い髪をオールバックにし、インテリ眼鏡を掛けた瞳からは人間らしい暖かみを一切感じられず、その男の全身からただならぬオーラが滲み出ている。

恐らく男二人のリーダー的な存在なのか、オールバックの男の姿を捉えた途端、金髪の男は「ゲツ……」とあからさまに嫌そうな顔をし、青髪の青年は一瞬意外そうに目を見開くもすぐに微笑を浮かべた。

「なーんだ、デュレンも来たんだ。てつきり今回も何もせずには後ろでふんぞり返ってるだけだと思ってたよ」

「お前たちだけで順調に事が運んでいけばそうするつもりだったさ。だが、そんな悠長な事を言っていられる状況ではなさそうだからな……」

「……チツ、また十八番の小言かよ……」

二人の顔を冷たく一瞥するデュレンと呼ばれた男に対して金髪の男はめんどくさそうに舌を打ち、青髪の青年は相変わらずだなあと脳天的に笑いつつも、手すりの上で頬杖を着きながら彼自身が気になっていた疑問をデュレンに投げ掛けた。

「けど、そつちから来てくれたなら話が早いよ。聞きたい事もあったし……今回の件、デュレンは何が起こってるのかある程度掴めてるのかな？」

「さあな。俺もまだ全貌の全てを掴めてる訳じゃない。だが、我々を完全に滅ぼせる存在は決してそう多くはない……その力を持たない『この物語』の主要人物である装者や、

その敵対勢力を候補から外すとするなら、答えは自ずと一つしかないだろう」

「……まさか……」

「おい……それってまさか、『アイツ』が実はまだ生きてたって言うんじゃないだろうか?!」

デュレンが言わんとしてることを汲み取ったのか、青髪の青年は今まで浮かべていた微笑を消し、金髪の男もあからさまに動揺を浮かべてデュレンへと詰め寄っていくが、デュレンは落ち着き払った雰囲気のままそんな男の横を素通りし淡々と語り続ける。

「今回の計画を始動する前に、必ず障害となるであろう”奴”を我々の手で罠に嵌め、この目で事の成り行きを見届け、確実に息の根を止め始末した……そう思い込んでいたが、どうやら我々の予想以上に、奴自身もしぶとかったという事かもしれないな」

「悠長なこと言ってる場合かよ……!どうすんだ?!奴が生きてたんじゃ、せつかく作ってた今までの駒も結局奴に消され回って計画の進めようがねえだろ?!」

それなのに何故そんなにも落ち着いていられるのかと、金髪の男は予想外の事態に焦りを露わにデュレンに食って掛かるが、それに対し青髪の青年は微笑を浮かべたまま軽く手を振って男を宥めた。

「まあまあ、落ち着きなよ。まだ可能性の話ってだけで、本当にそうと決まった訳でもないんだし。……けど、デュレンの方はそう思ってるってことは、これから何か事を起こそうと考えてわざわざ此処へ来たんでしょ？」

「無論だ。集めた駒を無為に消されるなどこちらにとつて何一つ得などないからな。このまま手を拱くつもりもない。……正体がなんであれ我々の障害となるなら、これを排除する……その為にも先ず、奴を炙り出さねばならない」

「炙り出すって……どうやってだよ……？」

何か考えがあると言うのか、金髪の男がデュレンに怪訝な眼差しを向けそう問うと、デュレンは無言のまま人差し指で空を指した。



「奴の目的が我々なら、奴が必ず食い付くであろう餌となる捨て駒を用意する。その為にも先に、捨て駒を釣る為の餌を用意しなければならぬが、ここには丁度先の物語で既に使い終えたモノが幾つも転がっているからな。それを再利用させてもらうのさ……先ずは、ノイズからだ」

「ノイズって……ああ、バビロニアのなんとかって奴から出てくる有象無象の方か……」  
「けどアレ、確かこの物語の装者達が前の戦いで宝物庫を閉じたせいで使い物にならないんじゃないかなかったっけ？」

バビロニアの宝物庫。それは異世界に存在し、無限とも言える広さを備えた武器格納庫にしてノイズのプラントでもある。

しかし嘗て『フロンティア事変』と呼ばれる事件の終盤にて、装者達の活躍によりその次元の入り口も既に閉ざされている。

以降は特異災害として、それまで人々の脅威の対象であったノイズの出現自体はなくなったものの、錬金術師と呼ばれる者達が新たに使役する新たなノイズ……アルカ・ノイズの出現により、この世界では未だに装者達とノイズの戦いが続いているというのが大まかな流れだ。

そんな経緯から、宝物庫を開ける事はほぼ不可能に近く、其処からどうやってノイズを引っ張ってくるつもりなのかと首を傾げる二人に対し、デュレンは眼鏡を抑えて何でもないように告げる。

「この物語のルールに沿った正規の方法では、確かに無理だろうな……だが、俺達は既にあらゆる物語から追放された身だ。わざわざそんなものを守る義理はない」

「……ああ……つまり、お得意の『改竄』ってことね」

「まったく、いいよなあコイツは？世界のルールにまで干渉し放題でさ……俺もとつとつその領域にまで上りたいぜ……」

不貞腐れるようにそう言いながら金髪の男は手すりに頬杖を付いてそっぽを向き、青髪の青年もそんな男の様子を横目にニヤニヤと爪弄り再び始める中、デュレンは手首を摩り鋭く細めた目付きで街を睨み付けていく。

「この物語も所詮、俺達からすればただの通過点に過ぎん……我々の目的を成就させる為にも、この物語には踏み台になってもらうとしよう……」

パキイツ！と、冷淡な言葉と共に無骨な指の節を鳴らすデュレン。

次の瞬間、まるで心臓の鼓動のような振動が世界に轟き、街の空に火花が走り、巨大な異次元の穴が開かれた。

そして其処から溢れ出ようとする殺戮の化身達の姿を一瞥する事も無く、デュレンは踵を返し、他の二人をその場に残し何処かへと歩き去っていったのだった。

## 第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ライダー②

——街の上空に次元の穴が開かれる、少し前……

——お好み焼き屋『ふらわー』——

「——それじゃ皆は、今度はその都市伝説と事件を追う事になったってこと？」

S・O・N・G.の本部を後にした響達は、それぞれの家への帰路に付く道中で空腹気味な腹に何か入れてから帰ろうという話になり、彼女達の学校からさほど離れていない商店街の一角に建つ馴染みのある店、お好み焼き屋『ふらわー』を訪れていた。

注文したお好み焼きの芳ばしい匂いが鉄板の上から店中に漂う中、響達にそう疑問を投げ掛けたのは、響から連絡を受けて彼女たち四人と同じ席に同伴する黒髪ショートに

後頭部に大きな白いリボンを結んだ少女……響の小学校時代からの幼馴染でS・O・N・G・の民間協力者でもある”小日向 未来”であり、彼女からの質問に対しクリスはテーブルの上に頬杖を着いたまま、もう片方の手で割り箸を器用に回しつつ不満げに口を尖らせていた。

「正直、あたしとしてはただの悪戯程度であつて欲しいつて感じだけども……。ただでさえ今でもアルカ・ノイズだの錬金術師だのでてんでこ舞いだつてのに、これ以上厄介事に増えられてたまるかよっ」

「……私もそう思いたいけど、実際に被害が出る以上、司令の言う通り放置は出来ないと思います……あとクリス先輩、食事してる最中のテーブルの上で頬杖付くのはお行儀悪いです」

「うっ……う、うるせーな……わーっつてるよっ……」

自分の意見にそうであつて欲しいと調に同意されつつ、同時に行儀の悪さを注意されてバツが悪そうに顔を逸しながらも言われた通り頬杖を止め、飲み物を口に含んでい

くクリス。

そんな彼女の乱暴な口調とは裏腹に素直な所に思わず苦笑いしつつ、響は箸で自分の皿のお好み焼きを切り分けながら未来に質問を投げ掛けた。

「それで私達も、少しでもその都市伝説や事件の情報を集めようと思ってるところなんだけど、未来は何か聞いた事ない？弓美から他にも噂話を聞かされたりとか」

「うーん……私も響と同じ話を聞かされたぐらいで、そういうのはあまり聞いた事がないかなあ……」

「……そつかあ……やつぱりそう簡単には行かないよねえ……」

何せS・O・N・G.の優秀な課報員ですらその足取りを未だ一切掴めていないのだから、普段は普通の学生でしかない自分達の手で簡単に見つけられるならそもそもこんな苦労はしていないだろう。

ならば一体どうしたものかと、頭を悩ませる響が難しい表情のまま椅子に背もたれ店の天井を仰ぐ中、よほど空腹だったのか、お好み焼きを一心不乱に口に詰め込んでいた切歌が突然ハイテンションに口を開いた。

「だったら此処はやっぱり、さつきアタシが提案した作戦を実行するしか手はないですよ！」

「って、まだ言ってるのかよっ。それはさつき却下だつて言つたらっ！」

「？切歌ちゃんの作戦って……？」

割り箸を手に挙手する切歌と間髪入れずにそれを一蹴するクリスのやり取りを聞き、先程合流したばかりの未来は何の話？と頭上に疑問符を浮かべる中、お茶を啜って一息吐いていた調が少し困った顔で代わりに説明し始める。

「此処へ来る前の道すがら、皆で例の事件の謎の怪物とその怪物を倒すヒーロー……マスコイドライダーをどうやって探そうかって話し合ってた時に、切ちゃんが作戦を一つ思

い付いたんです。その作戦と言うのが……」

「ズバリ！『怪物に襲われるフリをして、影のヒーローをおびき寄せる作戦』デス！」

「……そ、そのまんまだね」

「ざつきあたしもそう言った……」

中身がそのまま名前に出てしまつてる作戦を自信満々に口にする切歌に未来も苦笑いを返すしかなく、彼女の隣に座るクリスも疲れた溜め息と共にお茶を啜りまともに相手にしようとしなが、切歌の方も退こうとせず、眉を八の字にして食い下がる。

「で、でもでも、怪物も仮面ライダーも何処にいるのか分からないならそれぐらいしか向こうから来てもらう手はありませんし、直接会つて話せるならわざわざ話が通じるか分からない怪物より、人助けをして話を通じやすそうな仮面ライダーの方に来てもらうのが一番だと思うデスよっ」



「それはまあ……」理あるとは思うけど……」

実際の所、怪物を発見して仮に捕えられたとしても話が通じない獣だったなら、怪物の身体の構造が判明する以外にその目的や出自などの得られる情報は限られてくるかもしれない。

ならば比較的話が通じそうで、且つ怪物の正体を知っていそうな仮面ライダーにこちらから会おうとすれば怪物騒ぎを意図的に起こし、向こうから来てもらうのが安全面も考えて角が立たない方法だろうかと調が少し納得し掛ける中、その反応から手応えを感じ取った切歌が更に畳み掛ける。

「だからアタシ達で怪物に襲われるフリをして、仮面ライダーがノコノコやってきた所を皆で一斉にふん捕まえてやるんデスよ！　獅子は兎を食べるにも全力投球デース！」

「切ちゃん、それを言うなら獅子は兎を捕らえるにも全力を尽くすだよ。兎は食べちゃダメ」

「だからそんな陳腐な作戦が上手くいく訳ないだろつてつ。そこまでやって肝心のマスコドライダーが来なかったら、あたし等が馬鹿をみるだけじゃねえか。大体、フリつて事は偽物の怪物も用意する訳だろ？誰がやるんだよそんなの」

「勿論、其処はやつぱりリアリティーが大事デスからね。この役にはやはり普段からプリプリ怒りやすい、迫力ある演技が出来そうなクリス先輩にしか……」

「何で其処であたしなんだよツ?!ふざけんなあツ!!」

誰がやるかそんなもんツ!!と偽物の怪物の配役についてテーブルから立ち上がったクリスと切歌が口論を始める中、そんな二人を宥めようと間に座る未来がオロオロしてしまうも、其処で響が先程から天井を仰いだまま何やら考え込んでいるのに気付き、首を傾げた。

「響?..どうかした?」

「……へ?あ、ううん。別に大した事じゃないんだけど……仮面ライダーの正体って、ど

んな人なのかなあって考えちゃって」

「……仮面ライダーの？」

「うん。だってほら、怪物を倒すだけなら襲われる人を助けたりする必要もないし、今までの事件で死傷者が誰一人出ていないって事は、それだけ仮面ライダーが一人で頑張ってたって事でしょ？ならきつと悪い人じゃなさそうだし、もし話し合えれば、怪物と戦う為に協力し合う事も出来るんじゃないかなって……」

もしもそうなれたならば、噂の仮面ライダーの姿を想像しそんな先の未来に思いを馳せる響。その横顔を見て相変わらずだなあと微笑み、未来は瞼を伏せながら弾むような声音で応える。

「だったらそれを叶える為にも、まずは仮面ライダーさんに会う所から始めないとね？」

「うーん……問題は其処なんだよねえ……こうなったらいつそのこと、切歌ちゃんの作戦に本気で乗っかっちゃうっていう手も……」

「はああツ?!冗談じゃねえぞふざけんなツ!誰がなんて言おうとあたしはぜってえーやらねえからなツ?!そんな役も作戦もツ!」

「どうしてクリス先輩は其処まで嫌がるんデスカツ!ちよつと覆面被って、それっぽく振る舞ってアタシ達を襲ってくれればいいだけの簡単なお仕事デスよツ?!」

「その覆面を被るのが嫌なんだってさつきから何度も言ってるが馬鹿ーツ!!」

「二人とも、そろそろその辺にしないと。お店にも迷惑が……」

未だに言い合いを続けようとする二人にいい加減調も店の迷惑を考えて止めに入ろうとし、それを見た響と未来も互いに顔を見合わせ苦笑いを浮かべながら調の加勢に加わり仲裁に入っていく。

これが彼女達の日常。数多くの過酷な戦いを乗り越える為の支えとなる守りたいモノ。

そんな何時もの風景が此処にある事、束の間の幸せに喜びを噛み締め、こうして今日も一日が終わるのだらうと漠然と誰もが信じて疑わずにいた中、

——その平穏を打ち壊すかのように、ノイズの出現を報せる避難警報のサイレンが前触れもなく街中に鳴り響いた。

「…………ツ！コイツは…………！」

「避難警報…………！」

突然のサイレンに響達の間、緊張が走る中、彼女達が携帯する通信機にも緊急通信が入った。すぐさま通信をONにし応答すると、先程本部で別れたばかりの弦十郎の張り詰めた声が通話口から響く。

『緊急事態だツ！皆、すぐに本部に戻ってくれツ！』

「師匠！一体何が……！」

「アルカ・ノイズか?!それともまさか、例の怪物が……！」

『いや、そのどちらでもない。しかしまさか……いや、そんな事が……』

「……？」

何やら弦十郎の様子が可笑しい。その声には何処か動揺が滲み出ており、響達も怪訝な表情で首を傾げる中、直後に弦十郎の口から信じ難い一言が飛び出た。

『ノイズだ……アルカ・ノイズではない、ノイズが再び街に現れたッ!』

「……なっ……」

……それは本来、この世界で起こり得ない筈の事象の一つ。

そして同時に、それはこの世界の本来の流れが崩壊するカウントダウンの始まりを意味していた――。



「ひっ、ひ……うわあああああああッ?!」

「た、助けっ……ぎやあああああああッ?!」

——大勢の人々が行き交っていた繁華街の中心区。其処は今、阿鼻叫喚の地獄と化して絶え間ない悲鳴が響き渡っていた。

逃げ惑う人々を執拗に追い、僅かでも触れた人間を自ら諸共炭素の塊と化し消滅する殺戮だけが目的の傀儡達。

——それがノイズ。この物語の中では永久に閉ざされていたハズの宝物庫の奥から再び姿を現した、人間を殺す為だけに存在する災厄そのものだった。

「——あーらら、惨いことしちゃつて。相変わらず目的の為なら容赦しないよねー、デュレンはさ」

無抵抗の人々が何も出来ずに一方的に殺戮されていく。そんな残忍で無慈悲な光景をとあるビルの螺旋階段から静観しながら他人事のように呟くのは、ノイズを呼び出した張本人であるデュレンの仲間である青髪の青年だが、その表情には先程同様飄々とした笑みが張り付いている。

そんな彼の後ろで階段に腰を下ろす金髪の男も目の前の惨状に特に興味を移そうとはせず、膝の上に頬杖を立てて青年の口ぶりに鼻を鳴らして笑った。

「心にもない事を良く言うぜ。お前にとつちやこれもどうでもいい細事、だろうよ?」



「まーねー。人が死ぬとこなんて飽きるほど見てきたし、今更心を揺らすほどの特別な何かなんて感じないさ。君だってそうだろう？」

「そりやな。けど、俺としてはもうちよい控え目な作戦にしてもらいたかったぜ……こんな派手めに動いて、本当に大丈夫なんだろうな……？」

「ハツハハツ、君つてば本当に慎重派だよねえー。見た目はそんなヤンキーっぽい外見なのにさあ？」

「うるせえなあッ！俺はただ失敗すんのが嫌いっただけ——あ？」

ケラケラと笑う青髪の青年にムツとして怒鳴る金髪の男だが、その時、何処からともなくヘリのローター音が聞こえてきた。

その音に釣られ二人が空に目を向けると、其処にはS・O・N・G.の潜水艦がある方角から飛来して現場上空に浮遊する機体……S・O・N・G.のヘリの姿があり、開かれたヘリのドアからS・O・N・G.の制服を身に付けた四人の少女達……S・O・

N・G・と合流した響達が顔を覗かせ、ヘリの真下で人々を襲うノイズの姿を捉え目を見開いていた。

「ノイズ……!」

「マジかよ……! 何でアイツ等がまた湧いて出て来てんだっ?!」

先の通信で弦十郎からある程度 of 状況の状況を聞かされたとは言え、やはり実際に自分の目で直接見るのでは衝撃の度合いが違うのか、四人は二度と現れる筈のないノイズの出現を前に明らかな動揺を露わにしてしまう。

「い、一体どうなってるデスカ……! もしかして、バビロニアの宝物庫がまた開いたって事デスカっ?!」

「でも、宝物庫を開くのに必要なソロモンの杖は、確かに宝物庫の中へ消えたはず……」

『ソロモンの杖』、それはバビロニアの宝物庫を開く鍵であり、ノイズを任意に発生さ

せる事が出来る能力を持つ聖遺物でもあった。

しかしその鍵も嘗てのフロンティア事変の終盤で消滅した筈であり、それは同時にバビロニアの宝物庫から生まれるノイズの発生も二度と起きない事を意味していた筈だった。

だが、ならばこのノイズ達は何処から現れたのか？

考えても分からない疑問が装者達の胸の内を占めて沈黙が広まる中、それを最初に破ったのは、片手にまるで宝石のように輝く赤いペンダントを手にした響だった。

「何が起きてるのか分からなくても、今私達がやるべき事は変わらないよ……！行こう！みんなを助けないと！」

「……だな。考えたって分からないなら今は後回しだ。まずは奴らを残らさず潰す……！原因を探るのはその後だ！」

何処までもまつすぐな響の力強い言葉に触発され、幾許かの落ち着きを取り戻したクリスも彼女と同様の赤いペンダントを首元から外して握り締めると、同じく冷静さを取り戻した切歌と調もそれぞれペンダントを手に力強い眼差しで頷き返し、四人は一斉にヘリのドアから飛び降りた。そして……

「Balwisyall Nescell gungnir tron……」

「Killiter Ichaiival tron……」

「Zeios igalimar raizen tron……」

「Various shul shagana tron……」

空を舞う少女達の口から、それぞれ異なる詠と詞が美しい声音で紡がれる。

次の瞬間、彼女達の身体が橙色、赤色、緑色、桃色の眩い光に包まれ、まるで流星のように凄まじいスピードでノイズ達が入り乱れる地上へ急降下し、爆発じみた衝撃波で粉塵が舞い上がる程の地響きを轟かせながら戦場へと降り立った。

そして、突如空から落ちてきた星々を見て人々を襲っていたノイズ達も一斉に足を止めて振り返ると、視界を阻む粉塵がヘリの突風に煽られて掻き消され、まるでボールを剥がされるように少女達の姿が露わになっていく。

風に揺れる白いマフラーを靡かせ、白と橙色のナツクルを両腕に纏い力強く拳を握る響。

赤いヘッドギアに覆われた銀色に煌めく髪を揺らし、無言のまま両手に握るマシンピストルの照準をノイズ達に狙い定めるクリス。

互いに肩を並べ、その身に纏う装甲と同じ色合いをした身の丈を軽く越える黒と緑の大鎌を手にする切歌と、ツインテールの部分に纏われる白とピンクの装甲の基部から分離したヨーヨー型の鋸を構える調。

それぞれがそれぞれの色を現すアンダースーツと装甲を纏い、文字通り『戦姫』へとその身を変えた四人のヘッドギアに、本部からの通信が届く。

『装者達の到着を確認！しかし、周辺にはまだ民間人の多くが取り残されています！』

『逃げ遅れた人々の避難誘導はこちらで行う！お前達は出来るだけ其処からノイズ達を遠ざけてくれ！頼んだぞ！』

「「了解ッ！」」

最優先事項は民間人の避難完了までノイズを一匹たりとも此処より先へ通さないこと。

弦十郎からの指示に力強く応えると共に、一步前へ踏み出した勢いから地を蹴り上げて飛び出し、右拳を振りかざして先陣を切る響を筆頭に他の三人も後に続いていき、シンフォギアを身に纏った装者達とノイズ達の戦いが再び火蓋を切つて落とされたので

あった。

「あらら、先に装者達の方が釣れちゃったみたいだねー。どうしよつか？」

「どうもしねえよ……どーせ元々どつちかが釣れるまでの無限湧きだったろうし、わざわざ俺らが手を貸すまでもねえさね」

ほつとけほつとけと、金髪の男はそう言って駆け付けた装者達とノイズの戦いに目もくれず、後頭部に両手を回し階段の上に寝っ転がる。

そんな男の姿を見て青髪の青年も先程と変わらない微笑を浮かべると、けたたましい戦闘音が響き渡る戦場の方に目を向けていく。

「まあ確かに、こんだけ大騒ぎしてくれれば向こうから来てくれるのは間違いないだろうしねえ……餌が欲しい駒はともかく、果たして『彼』は来てくれるのかなあ？」

笑いながら装者達とノイズの戦いを見守りつつも、青髪の青年は着実にこの場所へと

近づいてくる”禍々しい気配”を感じ取って更に口元の笑みを深めていき、これから起こるかもしれない『未知』に対して密かに胸を踊らせていくのであった。



## 第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ライダー③

「はアああああああアアツツ!!!」

そして場所は戻り、ノイズ達が蔓延る戦場ではギアを身に纏った装者達が紡ぐ『歌』が鳴り渡り、徐々に戦闘力を上げてその勢いを増しながらノイズ達を蹴散らしていく姿があった。

本来なら欠片程度の力しか持たない聖遺物の力が戦姫達の歌で高まると共にその威力も増していき、ノイズが密集する地点に空から降下した響が地面に勢いよく拳を叩き付けた瞬間、拳の衝撃が橙色の凄まじいエネルギーの波動と化して拡散し、ノイズ達を飲み込んで木っ端微塵に消し飛ばしていく。

それに続くように、両手のマシンピストルの銃弾を周囲にばら撒くように五月雨撃つクリスの乱射、大鎌を大きく振るい、まるで芝を狩るかのような勢いで広範囲のノイズ

を纏めて斬り裂く切歌の斬撃、両足のブーツに内蔵された小型の車輪で滑走し、すれ違  
い様にツインテール部分の装甲に装着された円形の鋸で引き裂く調のヒット&アウエ  
イの戦法が確実にノイズ達の数を減らしつつあった。

……が、直後に減らされた数を補填するかのように何処からともなく新たなノイズ達  
が出現していき、あつという間に装者達に撃破された数を上回り四人に再度襲い掛かっ  
ていく。

「ッ！倒しても倒しても、また次が現れるっ……！！」

「ああもうっ、これじゃキリがないデスよッ！」

「いいから、口を動かすより先に手え動かせ！まだまだ増えてきてんぞッ！」

自分達が倒すスピードよりも速くその数を増やし続けるノイズ達に早々に嫌気が差  
して思わず音を上げてしまう調と切歌に喝を入れつつ、クリスは両手の銃をマシンピス  
トルから大型のガトリングガンに切り替えて周囲のノイズ達を薙ぎ払っていく。

「ハッ！たアああッ！やあッ！」

一方で、先陣を切る響も軽快な立ち回りで首元のマフラーを靡かせながら次々とノイズ達に拳を叩き込んで撃破していき、霧散するノイズに目もくれず次へ次へと前に突き進んでいく。

が、不意に頭上から巨大な影が現れて辺りを覆い尽くし、空を見上げれば、其処にはビル一つ分程のサイズがあるであろう巨大なノイズが腕を振りかざす姿があり、そのまま周りのノイズ達ごと巻き込むように巨腕が振り下ろされ、凄まじい震動を起こしながら他のノイズ達もろとも押し潰されてしまったかに思われたが……

「——うおオおおおおおおおおッ！！！」

……ノイズの巨腕に風穴が開かれ、其処から右腕のギアの形状をドリルのように変化させた響が腰部ユニットに装備するバーニアで加速して猛スピードで飛び出し、そのまま巨大なノイズの頭を回転するドリルで貫き撃破していったのだった。

そして、ガトリングガンを乱射させながらノイズの群れからある程度の距離を取ったクリスは背部のギアを徐々に変形させながら大型化させていき、背部に形成した固定式射出器に左右それぞれ3基、計6基の固有の形状の大型ミサイルを連装して生成させてゆく。

「いい加減ちよせえっ……！纏めて吹っ飛ばええええええッツ!!」

— M E G A D E T H S Y M P H O N Y —

数の減らないノイズ達に痺れを切らしたクリスの雄叫びと共に、6基の大型ミサイルが一斉に発射され空を翔ける。

そして飛翔中に大型ミサイルが分裂し、無数の散弾と化して地上を埋め尽くすノイズ達の頭上へとまるで雨のように広範囲に降り注ぎ、纏めてノイズ達を消滅させていったのだった。しかし……

「ううっ、また出てきたデスよっ……!!」

「流石に、数が多過ぎる……」

クリスの広範囲攻撃のおかげで大部分を削り切ったかと思いきや、更に何処からともなく新たなノイズ達が現れて周囲を埋め尽くしていく。

その光景を前に調や切歌、一度下がった響の表情も苦いものに変わっていき、クリスも舌を打つと共にヘッドギアに内蔵された無線から本部へと呼び掛けた。

「オイ、どうなつてんだよッ！たださえノイズが出たっただけでも異常なのに、この数は普通じゃねえだろッ！」

『原因はこちらでも現在調査中です！しかしノイズの出現地点の反応は検知出来ていますが、何故かそれらしき発生源が何も……一体どうして……？』

本部の方でもノイズの異常発生の出処を掴めていないのか、オペレーターのおおいの声には戸惑いの色が滲み出ており、装者達の間でも困惑の感情が更に募る中、そんな四

人の耳に司令官である弦十郎の声が届く。

『原因の詮索は今後は後回しだ！現在民間人の避難誘導と負傷者の救助活動を同時に行っているが、崩落や炎上で建物内に取り残された人々や負傷者の数が想像以上に多い……！苦しい状況だとは思いますが、避難救助が完了するまでどうにか持ち堪えてくれ！』

「っ、つつてもなあ……流石にこのままじゃジリ貧だぞっ……」

「せめて、イグナイトが使えていたら……」

自身の掌を見下ろし、調の脳裏を過ぎるのは先のパヴァリア光明結社との戦いの中で失われてしまったシンフォギアの決戦機能の一つ、『イグナイトモジュール』の力。

嘗てエルフナインの手により齎された聖遺物『魔剣ダイスレイフ』の欠片から作られ、今までの激戦の中で幾度となく自分達の助けとなってくれたその力も、先の事件での最終決戦の折に自分達のギアを強化させる為に燃え尽きて消滅してしまった。

あの力が残ってさえいればこのノイズの大群を相手でも……と、改めてイグナイトを失ってしまった痛手を此処にきて痛感する一同に対し、響は未だ闘志の衰えぬ眼差しでノイズ達を見据えて告げる。

「イグナイトがなくなつて、戦い様はまだある……！皆、S2CAでいこう！」

「え、S2CAデスカ……！」

「バカ！奴らの発生原因も分かってない内から、そんな大技ここで使える訳ねえだろッ！」

『S2CA』——正式名称は「Superb Song Combination Arts」

それは『絶唱』と呼ばれるシンフォギア装者の最強最大の攻撃であると同時に、使用した人間の肉体にとつともない負荷を与え、下手をすれば命を落とす事も有り得る諸刃の剣の力を「他者と手を繋ぎ合う」特性を持つ響を中心に据える事によつて威力を増幅

させるばかりか、パートナーの身体を蝕むバックファイアを抑制する効果も併せ持つ事が出来る連携攻撃。

その一撃必殺の威力はイグナイトに勝るとも劣らないが、欠点として詠唱によるチャージに時間が必要なこと、何より連携の中心に立たされる響の身への負担が大きい事であり、それを考えてまだこの局面で切るのは早いとクリスが一蹴しようとするも、響は彼女の心配を払うように明るげな笑顔を向ける。

「大丈夫。私だって此処まで訓練を重ねてきてるし、一度くらいなら平気だから。それより今はこの勢いを止めないと、このままだと後ろにいる人達が危ないよ……!」

事実、ノイズ達はその進行の勢いを緩めずに未だ多くの人々が取り残されている被災区域に向かおうとしている。

ここでS2CAを使っても確かに一時凌ぎにしかならないだろうが、その一時で一人でも多くの人が助かるかもしれない。



その為なら自分は大丈夫だと言い切る響の目を見てクリスは言葉に詰まり、僅かに逡巡する素振りを見せた後、「あーっ、ったくコイツはっ！」と頭を振ってガトリングガンを両手に響達の前に踏み出していく。

「だったら速く準備しろ……！それまでの時間があたしが稼いでやる！」

「クリスちゃん……！」

「感動してんなっ！いいからとつとしろっ！後輩共も、そのバカちゃんと見張つとけよっ！無茶をし出したら後ろから頭ぶん殴つても止めに入れっ！」

「了解……！」

「響さんのお世話ならお任せデース！」

S2CAを使うには最低でも二人以上の装者が必要となるが、この数を一気に削り切るとなれば三人分の装者でなければその威力を発揮出来ない。

ならば此処は範囲攻撃に長けた自分がそれまでの時間を稼ぐしかないと率先して前に出たクリスがノイズ達の目を引きつける中、響は自身の背後に回って準備に入る調と切歌に目を向けていく。

「S2CA・トライバースト……！切歌ちゃん、調ちゃん、いくよ！」

「任せるデス！」

「私達の絶唱を、響さんに束ねる……！」

力強い響の呼び掛けに頷き、二人が瞳を伏せて響の肩にそれぞれ片手を乗せていくと、響も二人の手の感覚が伝わると共に瞼を閉じ意識を集中させていく。そして……

「Gatrandis babel zigurat edenal……Emus  
tolronzen fine el baral zizl……」

三人の口から、寸分違わぬメロディーで紡がれる詠唱。

何も知らない者が一度耳にすれば誰もが聴き惚れるであろうその美しい旋律とは裏腹に、切歌と調から流れる暴力的なエネルギーの波が響の中へと流れ込んでいく。

響の中でまるで濁流のように行き場のない力が外へ溢れ出ようと暴れ回るのを抑え、バラバラに違う方向へ向かおうとする不協和音の力を一つに繋ぎ、束ね合わせ、嵐が過ぎ去った後の川の流れのように美しい調律へと変えていくと、それは三人の身体から放出される虹色の柱という形となって現出され始めていた。

「Gatrandis babel ziggurat edenal……Emus  
tolronzen fine el zizzl……」

「クツ……あと、少しツ……!」

S2CA発動までの準備が完了するまで、両手のガトリングガン、腰部からのミサイ

ルを乱射しとにかくノイズ達の目を引きつけていくクリス。

そして、三つの絶唱の力を束ね合わせた響は右腕に力を収束させていき、脚幅を広げて構えを取ると共にクリスに呼び掛けた。

「クリスちゃんッ！」

「ッ！出来たかッ！」

乱射を続けたまま肩越しに聞こえた響の声を耳に、すぐさまその場から下がるクリス。そしてそれと同時に、響は右腕に束ねた虹色の光を渦のように回転させながら右拳を引いていく。

「セット！ハーモニクス——！！」

頭の中で想像するのは、虹色の奔流を正面に放ってノイズ達を飲み込み、そのまま空へと打ち上げるイメージ。

S2CAはその強力な一撃から本来市街地向きの技ではないが、意図的に狙いを逸らせれば街への被害を回避する事が出来るハズ。

そのイメージを元に、雄々しい雄叫びと共に右腕を一気に振り抜き、そして……

——装者達とノイズ達の間で突如地面からドーム状の巨大な爆発が巻き起こり、ノイズ達だけでなく、装者達をも飲み込んでしまったのであった。

「なっ——グツ、うわあああああああああああああああああツツ!!!?」

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ!!!」

「な、何だっ……?!ぐあああああああああああツツ!!!!」

何の前触れもなく巻き起こった爆発を前に、力を放出する寸前だった響達もクリスも咄嗟に反応が出来ず爆発の中に吞まれてしまう。そして身を焼くような激痛と共に受け身も取れず、四人は爆発の中から飛び出し地面に叩き付けられてしまった。

「ぐうっー……ううっ……」

「あつ、ぐっ……お、お前らっ……無事かっ……？」

「ッ……な、何とか……」

「な……何だったんデスカ、今のはっ……？」

突如発生した謎の爆発に困惑を隠せず、爆炎に焼かれたダメージが残る身体を引きずりながらも何とか身を起こし、四人は顔を上げて辺りを見渡していく。

其処には、今の爆発により発生した炎が街のあちこちで燃え盛り、先程まで周囲を埋め尽くす程の数が跋扈していたノイズ達の死骸と思われる炭素の塊が辺り一面に転がっ

ており、そして……

『——アああああ……ハハツ、ハハハハツ！コイツアいい！まさかこんだけの餌が一気に喰らえるだなんて！ツキは俺に回ってきてるようだなああッ！』

——炎の向こうで、生き残りのノイズ達を片腕を振るっただけで次々と屠り、霧散するノイズの残滓を口から吸って吸収していく謎の異形の姿があったのだった。

「な……何だ、アイツ……?!」

「ノイズを……食べてるっ……?」

『……ああ……?』

突如現れた異形の姿を目にし、装者達も目を見開き驚愕する中、四人の視線に気付い

た異形がゆつくりと装者達の方へと振り返り、背中しか見えなかったその姿を露わにしていく。

白く濁った体色に、何処か蜘蛛を連想させる外見をした禍々しい姿。

そして何より装者達の目を引いたのは、ノイズ達を吸収し終えたと共に不気味な輝きを放つ、その血のように赤い眼だった。

「赤い眼……も、もしかして、アレが例の怪事件の……?!」

「……ノイズ、イーター……?!」

ノイズを喰らう能力、血のように赤い眼と、事件の被害者から聴取した証言と合致するその特徴からあの異形が例の怪事件に出てくる正体不明の怪物……ノイズイーターである事を瞬時に理解する四人だが、一方のノイズイーターはまるで品定めするかのよう響達の顔を順に見回し、軽く鼻を鳴らした。



『なあんだ、誰かと思えばシンフォギアの連中かあ……性懲りも無く、また人の餌を横取りしようとしたのかよ』

「……？餌……横取りって……？」

「と、というかアイツ、普通に喋れるデスか?!」

妙な言い回しをするノイズイーターの言葉に調が小首を傾げる隣で、流暢に言葉を発するノイズイーターに驚きを浮かべる切歌だが、そんな反応を他所にノイズ達を一通り喰い終えたノイズイーターは首の骨を鳴らしながら装者達の方へと向き直っていく。

『けど、これはこれでちょうどいいか……？どれだけ喰って力が増しても、ノイズ相手ばかりじゃそれほどの程度のものか測り切れないしなあ……』

何処か気だるげにそう呟き、ノイズイーターが一步前へ踏み出した瞬間、

『——せっかくだ……練習台に使わせるよ、お前ら……』

——音もなく一瞬で装者達の中に現れると共に、そのまま目の前にいた切歌に強烈な前蹴りを叩き込み、彼女の身体を弾丸の如く勢いで蹴り飛ばしてしまったのだった。

「うあああああああッ?!」

「ッ?!き、切ちゃんッ!!」

「コイツっ、いつの間につ……?!」

まるで瞬間移動でも使ったかのように、予備動作もなく装者達の懐に潜り込んだノイズイーターを見て動揺するも、反射的に両手のマシンピストルで狙いを定めたクリスがノイズイーターに発砲していく。

だが、ノイズイーターはその場に佇んだまま全身に銃弾を浴びせられてもビクともせず、グルリッと不気味に首を捻らせクリスに目を向けた。

『なんだア……？次はお前が相手してくれるのかア？』

「ツ！このっ……!!」

「うおおおおおおおおおおッ!!!」

不気味な笑みと共に挑発するノイズイーターの背後から、背部のバーニアで加速した響が拳を振りかざして殴り掛かる。

しかし、ノイズイーターはまるで背中に目でも付いているかのように振り向きもせず、僅かに上体を逸らして響の拳を避けながら素早い裏拳を響の顔面に打ち込み、更に顔を抑えて怯む響にリアアットを叩き込んで勢いよく振り回すと、そのまま攻勢に出ようとしていた調に目掛けて投げ飛ばし、二人を激突させてしまう。

「ぐああううっ!!」

「うあああつ?!」

『ハハハッ！ハハハハアッ！読める、読める！読めるぞオ！お前達の動きが手に取る様に解るッ！これがそうか……！』『物語』を超越した力ッ！俺は今、神すらも超える力を手に入れたんだアあああッ!!』

「くっ……！ワケ分かんねえこと言ってるんじゃねええッ!!」

— M E G A   D E T H   P A R T Y —

両腕を広げ、まるで歌うように狂った雄叫びを高らかに上げるノイズイーターの背中に目掛けて左右の腰部アーマーを展開し、内蔵の多連装射出器から追尾式小型ミサイルを一斉に発射するクリス。

そして小型ミサイルはそのままノイズイーターに次々と直撃して爆発を起こしていき、その姿を視認出来なくなる程の黒煙に覆われていくが、直後に黒煙の向こうから腕を伸ばした無傷のノイズイーターが勢いよく飛び出し、そのままクリスの首を掴んで彼女の身体を持ち上げていってしまう。

「ガッ……?!アッ、ウツ……オ、マエツ……何なんだっ、一体ツ……?!」

『ヒヒヒツ……俺？俺が何かあってえ……？そうだよなあ、分かるワケがないよなあッ！お利口さんに物語のルールに沿って生きてるだけのお前らにはさアあアッ?!』

「う、くっ……クリス先輩ッ！」

—α色式 百輪廻—

「ごんのオおおおッ!!」

—切・呪りeツTお—

ギリギリッ、と首を絞める力が徐々に増していくにつれて呼吸もままならなくなり、顔が青白くなっていくクリスを助け出そうと態勢を立て直した調と切歌の投擲攻撃が同時にノイズイーターに炸裂する。

だがやはり、ノイズイーターは身構える事もせずその身一つで無数の小型の鋸、三枚に分離してブーメランのように飛ばされた大鎌の刃も全て弾き返してしまい、クリスを乱雑に投げ捨てながら何かを掬い上げるように指を動かした瞬間、二人の足元から爆発が発生して調と切歌を纏めて吹っ飛ばしてしまった。

「キヤアアアアアアアアアアアアアアアッ!!」

「っ……し、調ちゃんっ……！切歌ちゃんっ！」

『オイオイ、オイオイどうしたんだよお？もつと抗ってみせろやアッ！ただのサウンドバッグじゃつまねえだろオオおおおおおッ!!』

爆風と共に吹き飛ばされる調と切歌を見て身を起こそうとする響の声を掻き消すように、ノイズイーターが狂気に満ちた雄叫びを上げながら力を溜めた右腕を荒々しく振るった瞬間、雷状のエネルギー波が四人を襲い、立て続けに発生した爆発が装者達を飲み込んでしまったのだった。



「——クソツ……！何なんだあの化け物はツ?!」

一方その頃、S・O・N・G.の本部では突如現れたノイズイーターと装者達の戦いをモニターから見守っていたが、とてつもない猛威を振るうノイズイーターの力の前に為す術がない装者達の姿を見て弦十郎も思わずデスクに拳を叩き付けてしまう中、装者達の状態を測るオペレーター組から切羽詰まった声がかかる。

「装者達のバイタル、危険域に突入……!」

「このままでは危険です……!司令ツ!」

「ツ……やむを得ん……!装者達の回収を急がせろツ!救助部隊の突入を——!」

『……ま、待つて下さいっ……!』

「?!」



手遅れになってしまいう前に装者達を急ぎ回収すべく指示を出そうとした弦十郎だが、それを遮るように止めに入った静止の声に本部の職員達の目がモニターに向けられていく。其処には……



「——まだ……まだやれます……！此処で、引く訳には行かないっ……！」

全身傷と泥だらけになり、ボロボロになった身体をそれでもふらつきながら起こして立ち上がる響と、そんな彼女の姿に続くようにクリス、調、切歌も力が入らない身体を強引に起こしていく姿があった。

『……へええ……う？あんだだけやられて、まだ立てるだけの力が残ってたかよ？』

『待てお前達っ……！無茶は止すんだッ！その相手は危険過ぎるッ！一度撤退して態勢

を立て直すんだッ!』

「っ、聞けません……! 私達の後ろには、まだ大勢の人達が残ってるんですっ! 此処で私達が退いたら……!」

そうだ。此処で自分達が退けば、今も逃げ遅れた人達や救助を待つ負傷者達にまで危害が及ぶかもしれない。その危険性がある以上、こんな所で身を引く訳にはいかない。再起する装者達の姿を目にし、ノイズイーターは肩を揺らして不気味に笑い、

『そうだ、そうだよー。そうでなくっちゃ面白くないッ! ほおらアっ……皆を守る為に気張ってみせろやアあああああッ!!』

人々を守る為に立ち上がるその姿を嘲笑い、地面を踏み付けた衝撃で装者達の周りに爆発が巻き起こる。それに対して響達も一度目の爆発から反応して咄嗟に散開しノイズイーターへの接近を試みようとするが、それも無駄だと言わんばかりに再び腕を振るい放たれた雷状のエネルギー波がクリス、調、切歌を纏めて飲み込み、爆発を発生させて地面に叩き付けてしまう。

「ぐああああつ!!」

「ううつ……!!」

「あううつ!!」

『ハツハハハハツッ!馬鹿が!考えも無しに突っ込んで俺に勝てるでも……うん?あと一人は……?』

倒れ込む三人の姿を見回し愉快げに笑うノイズイーターだが、其処にあと一人、響の姿だけがない事に気付いて首を傾げた、その時……

「——どおおりやああアあああああああツツ!!」

『!』

爆発により発生した黒煙に覆われる空の向こうから、煙を切り裂いた響が猛スピードでノイズイーターに目掛けて急降下で迫る。

振りかざすその右腕はギアをドリル状に変形させ、バーニアで最大まで加速した一撃はノイズイーターの反応速度を超え、その胸に強烈な刃を叩き込んだ。が……

『……なんだア、それは？』

「ツ?!なっ——うあぐううっ?!」

完全に不意を突き、全力を乗せた確かな一撃。しかし、その胸に打ち込まれたドリルはまるで厚い岩盤に阻まれたように手応えがなく、何事も無かったかのように自分を見下ろすノイズイーターを見て驚愕のあまり声も上げられない響の顔に、ノイズイーターの裏拳が直撃して他の三人の下へと殴り飛ばされてしまった。

「ひ、響さんっ……!」

「うあ……ぐっ……うつ……！」

『ハアアア……つまらねえ、つまらねえなあ……此処まで人を期待させといて、その結果がこれかア？ ああ？』

心底ガツカリしたと、肩を落として首を振るノイズイーターが煽るようにそう告げるも、響達は悔しげに唇を噛み締めて立ち上がりうとしても力が入らないのかその場に再び倒れ込んでしまい、その姿を見て、ノイズイーターも今度こそ興味を失せたように右手を掲げていく。

『だったら此処までだ……。練習台にもならねえサンドバッグなんざ、ノイズだけで事足りるからなあ……。餌を刈り取るだけのお前らの存在なんて、必要ねえ……。！』

「クツソツ……ぐうつ……！」

「うつつ……！」

ノイズイーターが掲げる右手に膨大なエネルギーが蓄積されていき、発光していく。

その様子を目にし響達もどうか再起を試みようとしてもやはりその場から動く事が叶わず、そして、

『じゃあなあ、シンフォギア……お前達の『物語』も、これで終わりだアツ!!』

「「「……ツ!!」」」

凄まじいエネルギーが蓄積され、禍々しい光を身に纏うノイズイーターの右手が響達に向けて振り下ろされる。

最早その一撃を避ける事も、防ぐ余力も残されていない響達は目を閉じて痛みから目を逸らすしかなく、本部で見守る弦十郎達も届かぬ叫び声を上げる事しか出来ない中、狂気に満ちた笑みを深めるノイズイーターの一撃が遂に装者達に襲い掛かろうとした、その時……

——建物が崩落して積み重なった瓦礫の山をジャンプ台代わりに飛び越え、空を駆け抜けるかのように一台の蒼いマシンが何処からともなく現れた。

『ツ?!なんつ——ガハアアアツ?!』

「……………え……………?」

「な、何事デスカつ……………?」

突如乱入してきた蒼いマシンを見てノイズイーターが一瞬動きを止めた瞬間、蒼いマシンはそのままノイズイーターに目掛けて突撃し、響達に向けて振り下ろされようとしていた攻撃を阻止したのである。

響達も突然鳴り響いたエンジン音から思わず目を開け、いきなり現れノイズイーターを跳ね飛ばした蒼いマシンを唾然とした表情で見つめる中、地面に上手く着地した蒼いマシンの搭乗者はバイクを止め、徐に頭に被るヘルメットを取り外していく。

「——見付けたぞ……」

ヘルメットを外し、乱入者が開口一番に口にしたのはそんな無機質な一言だった。

体格からして性別は男か。灰黒い薄汚れたロングコートに、ボロボロの黒のジーンズという見窄らしい格好。

ヘルメットを脱いだ顔は何故かフードを被っているせいで良く見えないが、僅かにチラつく黒髪、そして何よりもノイズイーターをまつすぐ見据えて離さない真紫の瞳の鋭い眼光を一身に受け、ノイズイーターもただならぬ何かを感じたのか僅かに声を震わせた。

『だ……誰だお前……いきなり出てきて、何なんだッ?!』

「……………」



動揺が収まらぬまま乱入者の男に疑問を投げ掛けるも、男は無言を貫く。

しかしゆっくりとコートを翻すと、男の腹部にはバックルの上部からスロット部分が露出された蒼いベルトが巻かれており、ベルトの左腰に備え付けられたケースからカードを一枚取り出した。

「……………あのベルトは……………」

「カード……………？おい、そんなモンで何を……………」

あのノイズイーターはただの人間が太刀打ち出来るような相手ではない。

あの男が何者で、何をするつもりかは知らないが、誰であれこのままむざむざ殺されるの見逃す訳にはいかないとクリスも止めに入るが、男はその声が聞こえているのか、無言のまま取り出したカードを徐に構え、そして……

「……………変身」

『Code x…clear!』

カードをバックル上部のスロットに装填し、掌でバックルに押し戻すと共に電子音声が鳴り響く。

直後、男の全身を青いラインの入った黒のライダースーツが身に纏い、更に男の周りに出現した無数の蒼い装甲が一度に装着されていき、全く別の姿へと変身していったのであった。

「なあっ……?!」

「へ、へへ……変身しちゃったデスよっ?!」

「……仮面の、戦士……?もしかして、アレが都市伝説の……?」

「……仮面、ライダー……?」

黒のラインが走る丸みを帯びた蒼いボディと仮面ライダーファイズに近い青のラインが入ったレッグ、仮面ライダーカブトとアクセルトリアルを足して二で割ったような仮面に赤い複眼を持ち、ボディの様々な箇所にはXの意匠が用いられた戦士。

変身した男のその姿を見て驚愕するクリスと切歌の横で、調がその異質な形貌と赤い複眼が輝く仮面から都市伝説や噂話と照らし合わせて推察し、響が呆然とその戦士の名……仮面ライダーの名を口にする中、その様子を螺旋階段から静観する男達の様子も一変していた。

「どうやら、デュレンの予想は的中だったみたいだねえ……」

「……野郎……ホントに生きてやがったっ……!」

変身した男の姿を見て、今まで顔に貼り付けていた飄々とした笑みを消す青髪の青年の隣で、いつの間にか手すりに身を乗り出した金髪の男が忌々しげに顔を歪めて仮面の戦士となった男を睨み付けていく。

そして、そんな三者三様の視線を浴びる仮面の戦士へと変身した男はジャリツと砂を踏み鳴らすと、僅かに響達の方に顔を向ける。

『……後は任せろ……』

「……………え？」

ボソツと、風が吹けば掻き消えてしまいそうなほど小さな声。

あまりの小ささに他の装者達もノイズイーターも聞き取れていないが、唯一その声を拾えた響が反応して思わず聞き返すも、既にノイズイーターに意識を向けた戦士……仮面ライダーは手首を軽くスナップさせ、その右手でノイズイーターを指差す。

『さあ、顧みろ……お前が歩んできた物語を……』

赤い複眼でノイズイーターを捉え、流暢でない無機質な声音で静かにそう告げると共

に仮面ライダーはゆっくりと前へ踏み出し、一歩ずつ徐にノイズイーターへと近付いていくのであった。

## 第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ライダー④

『顧みろ、だと……？急に出てきておいてっ、カツコつけたこと吐かしてんじゃねえッ！！』

変身して迫る仮面ライダーを前に幾許かの冷静さを取り戻したのか、ノイズイーターは土壇場で邪魔をされた憤りがフツフツと湧き上がり、力を凝縮した両腕を突き出して仮面ライダーに目掛け光弾を乱射していく。

だが、仮面ライダーは僅かに首を左右に逸らしただけで光弾を避けながら一息で肉薄し、ノイズイーターの胸部に素早い二の打ちを叩き込んで後退りさせると、更に怒りが増したノイズイーターが荒々しげに振りかざした拳を軽く掻い潜って背後に回り込み、ノイズイーターの背中に裏拳を打ち込み怯ませた。

『グッ?! テ、テメエッ!』

まるで自分の一挙一動を先読みしてるかのように手玉に取って翻弄する仮面ライダーの立ち回りに苛立ちが募り、拳を振るうノイズライダーの動きが目に見えて力任せに乱雑なモノに変わっていくが、仮面ライダーも冷静にノイズライダーの攻撃を捌きながらカウンターの主体とした動きで圧倒していく。

そして鋭い横蹴りを突き刺してノイズライダーを強引に後退させると、仮面ライダーのベルトのバックル部分から両脚に向かって突然青白い光がスーツの上のラインを走り、光が両脚に到達したと同時に仮面ライダーが左足で地面を軽く蹴り上げた瞬間、まるで縮地でも使ったかのように宙に浮き、右足を振り上げた姿勢でノイズライダーの眼前にまで一気に距離を詰めた。

『な、なにイ?!ガッ?!』

驚く間もなく、仮面ライダーが振り抜いた光を纏う右足が蒼い線を宙に描きながらノイズライダーのこめかみに叩き込まれ、ノイズライダーを横殴りに吹っ飛ばす。

更にそれだけで終わらず、着地と同時に今度はバツクルから両腕に向かって青白い光がラインを走り、光を纏った拳を振りかざしながら追撃しノイズイーターにストレートを叩き込んだ。

そして吹っ飛ばされるノイズイーターを追尾しながら更に高速の連続ラツシユを打ち込み続けていき、トドメに全力で振りかぶった一撃を叩き込み、ノイズイーターの身体をきりもみ回転させながら勢いよく殴り飛ばしていったのだった。

『ガアアアアアアアッ?!』

「こ、攻撃が通じてるデスよ?!」

「何なんだ……アイツ……」

「……………」

先程の戦いではギアを用いた攻撃が一切通じなかった筈の相手に、何故か仮面ライ



ダーの攻撃が通じる状況を前にクリス達は困惑を露わにし、響も無言のまま二人の戦いをジッと見つめる中、仮面ライダーに追い詰められて地面を転がるノイズイーターも顔を抑え、ダメージを受ける自分の身体に混乱を極めた様子で頭を振っていく。

『コン、なっ……！こんな事が有り得てたまるかっ……！お、俺は物語を超越した力を手に入れたんだぞっ?!なのに、何でお前なんかによいッ!!』

『……俺を知らないという事は、お前もこの世界の中で作られた個体か……となると、得られる情報も今までと同様変わり映えしないか……』

『……なにつ……?』

奇妙な言い回しをする仮面ライダーの発言に首を傾げるノイズイーター。だが仮面ライダーは感情の機微を変えることなく、空手のままノイズイーターへと近付いていく。

『俺も、お前も、この世界にとってはただの「異物」でしかない……本来あるべき世界の

流れを逸脱し、歪める存在はいずれ排他される……それがお前にとつての、この俺だ……』

『ツ……何だそりやつ……意味が分かんねえんだよオツ!!』

全く意図が掴めない発言に更に苛立ちを募らせ、ノイズイーターは思わず頭を掻きまわりながら再び仮面ライダーに殴り掛かる。

それに対して仮面ライダーも即座に身体の重心を横にズラしてノイズイーターの突き出す拳を避けると、そのまま相手の手首を片手で掴んで引き寄せながら鳩尾に目掛けて膝蹴りを突き刺し、ノイズイーターが腹を抱えて怯んだ隙にその場で身を捻らせながら跳躍、流麗な後ろ回し蹴りをノイズイーターの頭へと叩き込んで蹴り飛ばしていった。

『ウグアアアッ!』

『……もう止めておけ。この場にあのノイズなんて化け物が異常発生したのも、恐らく

餌に釣られたお前に俺が食いつくと見越しての意図的なモノ……使い捨ての罠に使われたんだ、お前は……』

「ツ！それって、つまり……？」

『ツ……おと、り……だと……？この……オレがつ……？』

この状況は偶発的でなく、誰かの意図で作られた作為的なモノだった。

その内容に彼の言葉の意味を早くに理解した調や響達も衝撃で目を見開き、ノイズイーターも困惑と戸惑いを露に自身の両手を見下ろしていく中、仮面ライダーは改めてノイズイーターと向き直っていく。

『使い捨ての駒として扱われた今、仮にこの場を切り抜けられたとしても、お前を待つのはこの状況を作った奴らに死ぬまで使い潰される未来だけだ……だから、そうなる前に

——』

「……………あの人……………」

今の今まで無機質的な口調だった仮面ライダーの声が、何処か不安を帯びているように一瞬震えたような気がする。

その微妙な変化に気付いた響が仮面ライダーに怪訝な眼差しを向けるが、その時、頭を両手で抱えるノイズイーターの身体が突然ワナワナと震え出し……

『……………る、せ……………うるせえ……………うるせえつ、うるせエつ、ウルセエつ、ウルセエエエエエエエツツ!!!!どいつもこいつも俺をつ、何処まで俺を馬鹿にすりや気が済むんだアアアアアアアアアアアアツ!!!!』

『……………!』

天を仰ぎ、地を震わせる程の激昂の雄叫びを上げた瞬間、ノイズイーターの全身から凄まじいエネルギー波が放出されて周囲に無数のスパークを撒き散らしていき、ノイズイーターが佇む地面が徐々に軋んで陥没し始めていた。



ねエツ!!俺を否定する奴はみんなっ、お前らみんな死んじまえよオオオオオオオオオオ  
おオオオオオオオオオオオオツツ!!!』

『ツー!』

突如変容したノイズイーターの右腕の砲撃を見て調が驚きの声を上げるのを他所に、  
ノイズイーターは狂った雄叫びを上げながら仮面ライダーに突き付けた銃口から高出  
力のエネルギー弾を放って襲い掛かった。

それを見て仮面ライダーも咄嗟に上空へと空高く跳んでエネルギー弾を回避し、その  
ままノイズイーターの頭上を飛び越えながら背後へと着地すると共に、振り向きざまに  
放った拳で再攻撃を仕掛けようとしていたノイズイーターの顔を殴り飛ばし砲撃の手  
を強引に中断させようとするが……

『グウツーギツ、ギイツ……コロスつ……コロスコロスコロスウウウウウウウウ  
ウウウウウツツ!!』

『ツ！クツ……！』

「な、何か様子が変わってない?! うわわっ?!」

「あぶねっ?! あ、アイツ、急に手当たり次第かよっ?!」

仮面ライダーに殴られても殆どダメージを受けている様子もなく、右腕の砲撃を乱雑に振るいながらエネルギー弾を見境なく乱射するノイズライダーの変貌ぶりに混乱してしまふ響達だが、仮面ライダーは飛来するエネルギー弾を手刀で払い除け、ノイズライダーの変容した右腕を見つめながら頭の中で思考していく。

『（形状変化……ノイズ達を一気に喰らった事で急成長したのか……? いや、だとしても此処までの目に見える変化は今まで戦ってきた奴らには一度も……）』

あの突然変異は仮面ライダーにとっても初めて出くわすケースなのか、今までにない変化を遂げたノイズライダーを見て内心困惑するも、正面から迫るエネルギー弾を見てすぐに我に返り、咄嗟に左に避けながら左腰のホルダーに指を掛けていく。

『（いや、今は考えるのは後回しだ……ともかくまた狂い出した以上、もう俺の言葉も届く事はない……こうなれば俺の手で……ッ?!）』

これ以上被害が広がる前に奴を倒すしかないと覚悟を改め左腰のホルダーを開こうとした仮面ライダーだが、その時、何かに反応を示して何故か急にその場に踏み止まり、ノイズイーターから放たれるエネルギー弾を両腕で防御し動かなくなってしまった。

「…マスクドライバーが………!」

「え?!」

『アヒツ、ヒヒツ………! ヒハハハハハハハハハハハツ!!! 死ね死ね死ね死ねエツ!!! 今度こそ死んじまえよオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!』

『………ツ………!』



「乱れ狂いながら無差別にエネルギー弾を乱射するノイズイーターの攻撃を避け続ける装者達も、何故か突然回避も切り払う事すらもせずガード一択で踏み止まる仮面ライダーを見て怪訝な反応を浮かべる中、ノイズイーターは卑しい笑みと共にその姿を見て無差別に放っていたエネルギー弾の狙いを仮面ライダーへの一点に絞り、エネルギー弾の集中砲火を浴びせていく。」

それにより仮面ライダーも更にダメージが増して全身が傷付きボロボロの姿に変わり果てていくも、何故かそれでも仮面ライダーはその場から動かず防御のみで耐え続けていた。

「な、何だかあつちも様子が変デスよ?!」

「何やってんだアイツっ……………!このままじゃ一方的にやられちゃうぞっ?!」

「……………?」

攻撃を受ける度に装甲が削られ傷付いていくというのに反撃に転じようとしな

面ライダーを見て装者達も焦燥感を募らせる中、クリス達と共にその様子を見守っていた響がある事に気付く。

ノイズイーターのエネルギー弾の嵐を一身に受け続ける仮面ライダーが、防御を取りながら何度か自身の背後へと目を見遣っているのだ。

その視線の先を追って響も振り向いていくと、其処には仮面ライダーの遥か後方の建物の一角に積み重なる瓦礫の山があり、その瓦礫の山を目を凝らしジツと凝視していくと、瓦礫の一角が音を立てて崩れ穴ができ、その向こうで何かが僅かに蠢いているのが見えた。

「——ッ！もしかして……!」

「?!響さん?!」

「お、おい！何する気だお前?!」

何かに気付いた響が突然地を蹴って飛び出し、瓦礫の山に目掛けて一直線に走り出す。

いきなり飛び出した響を見てクリス達も驚き慌てて呼び止めようとするが、響はそれを振り払い瓦礫の山へと躊躇なく飛び込んでいき、数泊の間を置いた後、瓦礫の山が突然内側から弾け飛んで吹っ飛ばされていった。

そして、瓦礫が取り除かれて周囲に漂う粉塵の向こうには拳を突き出す響の姿があり、その背後には……

「——うっ……ううっ……」

「お父さんっ……！お父さんっ！しっかりしてっ……！」

「ッ！あれは……?!」

「負傷者……?!瓦礫の中に取り残されてたのか?!」

そう、響の背後には頭から血を流して倒れる負傷者の男性と、その男性の息子と思われる土まみれの幼い男の子が涙目で父親の傍に寄り添う姿があったのだ。

恐らく、ノイズ達が出現した際に避難しようとした矢先に建物の崩落に巻き込まれ二人諸共瓦礫に埋もれてしまったのか、それを見たクリス達もすぐさま負傷者達の下へと駆け付け、響が残りの瓦礫を取り除く間にクリスと切歌が負傷者の男性を、調が男の子を抱き抱えて救出し、急ぎ全員でその場から離れながら響が仮面ライダーに向けて呼び掛けた。

「仮面ライダーさんっ！この人達は大丈夫、二人とも無事ですっ！」

『——ッ！』

二人を安全地帯にまで運ぶ響の声が届き、男性と子供の安否を伝えられた仮面ライ

ダーはすぐさま次に放たれてきたエネルギー弾を手刀で払い除け、前傾姿勢でエネルギー弾の嵐の中を素早く掻い潜りながら一気にノイズイーターとの距離を詰めていく。

そして、ノイズイーターに肉薄すると共にその右腕の銃口を掴んで上に逸らし、再びバツクルから走らせた青白い光を右手に纏わせ、拳を握り締めた仮面ライダーの一撃がノイズイーターの顔面にめり込み殴り飛ばしていった。

『アグウウウツ?!グツ、ギツ……チ、クシヨオオオオオツ……ナンデダヨツ、ナンデエエエエエエエエツ……!!!』

『……………』

仮面ライダーに殴られた顔を抑え、まるでこの世の全てを憎むかのように呪詛の呻き声を漏らすノイズイーターだが、仮面ライダーの方は既にその声に耳を傾けるつもりもなく、ポロポロに傷付いた腕の汚れを手で払いつつ左腰のカードホルダーからカードを一枚取り出し、バツクルから立ち起こしたスロットに装填して掌でバツクルに押し戻していった。

『Code slash::clear!』

電子音声が鳴り響いた瞬間、仮面ライダーの蒼い装甲が分離して新たに朱色のアーマーへ変わっていき、再び仮面ライダーに身に纏われると共に複眼の色も赤から緑色へと変化し、両手に二本の黄金の剣が出現していく。

全ての変身シーケンスを完了し、黄色くシャープなラインが特徴の朱い鎧に緑色の複眼、両手に黄金に輝く双剣を逆手に持った姿へと変わった仮面ライダーを見て、響達は目を見開き再び驚愕の表情を浮かべた。

「色が変わったデスよ?!」

「あれは……もしかして私達のギアと同じ、変容（リビルド）……?」

『グウウウウツ……ガアアアアアツ!!』

新たな姿に変貌した仮面ライダーに装者達が各々反応を示す中、ノイズイーターも警戒心を露わに唸り声を上げ、砲撃の銃口を仮面ライダーに突き付けてエネルギーを再充填しようとするが、それよりも速く先程とは比にならない速度で仮面ライダーが距離を詰め、素早く振り上げた左手の刃がノイズイーターの砲撃の銃口を斬り裂いた。

『ツ?!ナ、ニツ?!グアアアツ?!』

『ハッ……!ハアアアツ!』

銃口を斬り裂かれた自身の右腕を見てノイズイーターが動揺する中、仮面ライダーは続けざまに両手の双剣を目にも止まらぬ速さで振り翳していき、朱色の雷光を纏う斬撃がノイズイーターの身体を何度も切り刻んで怯ませ、トドメに放った後ろ回し蹴りでノイズイーターを蹴り飛ばし、ゴロゴロと異形の身体が勢いよく地面を転がっていく。

『ガアツ!アツ……ウ、ソダツ……コンナハズツ……?!』

「は、ハチャメチャに速いデス!」

(劍筋が全然見えねえ……キレも先輩と同等か、もしくは……)

一気に形成を逆転され、信じられないと頭を振るノイズイーターを見て切歌とクリスも思わず目を奪われる中、仮面ライダーはノイズイーターを見据えたまま両手に持つ双剣を片手に束ねると、空いた手で左腰のホルダーからカードを一枚再び取り出し、バツクルのスロットに装填して掌で押し込んでいった。

『Final Code x……clear!』

再度鳴り響く電子音声と共に、両手に持ち直した双剣の刃に朱色の雷光が火花を撒き散らして纏われていく。

そして仮面ライダーは腰を徐に落として双剣を身構えると、右手に持つ片手剣をノイズイーターに向けて勢いよく投擲し、投げられた剣はブーメランのように高速回転しながら朱色の光の軌跡を宙に描きノイズイーターへ一直線に突き進んでいった。







であった。

「ツ……ノイズイーターを、倒した……？」

「終わった、のか？……はあああつ……何だったんだ一体つ……」

「うう……もうクタクタデスよっ……」

あの難敵だったノイズイーターを倒した仮面ライダーの力にも驚きだが、今はそれ以上この局面を乗り切れた事への安堵から溜め息と共に緊張感から解放されていくクリス達。

一方で仮面ライダーもノイズイーターが爆散した跡の炎を暫しジツと見つめた後、そのまま踵を返しながら元の蒼い姿へと戻り、自分が乗ってきたバイクの下へと向かおうとするが……

「ま、待って下さいー！」

『……………？』

ノイズイーターを撃破して立ち去ろうとした仮面ライダーを呼び止める声が聞こえ、仮面ライダーが訝しげに振り返ると、其処には傷付いた身体で駆け寄ってくる響の姿があり、仮面ライダーの前で足を止めて息も絶え絶えに口を開いた。

「あ、あのっ……………さっきは助けて頂いて、ありがとうございました！おかげで負傷者の方々も助ける事が出来て、本当に助かりました！」

『……………』

活発な笑顔で一礼と共に、自分達や先程の親子を助けてくれた事への感謝をの言葉で口にする響。一方でそんな彼女に対し、仮面ライダーはジツと響の顔を見つめたまま何も語ろうとせず、マスクのせいで表情が読めない仮面ライダーに響の方も若干やり難そうになりながらも言葉を続けていく。

「ええ、と……そ、それで何ですけど、良ければさっきの怪物の事とか、仮面ライダーさん自身の事とか、もつとお話を聞く事つて出来ませんか……？ 私達も、色々と話したい事が——ツ！」

あのノイズイーターの正体や、仮面ライダー自身の事、街で今起こっている事件の事を何か知っているなら話を聞かせてもらえないかと願い出ようとする響だが、その時彼女やクリス達の下に通信が届き、回線を開くと、それは本部にいる弦十郎からの通信だった。

『お前達、全員無事か?!』

「師匠……！はい、私達は大丈夫です！現場に取り残されてた負傷者の人達も、今さっき近くの救助の人達にお願いして運んでもらいましたから」

『そうかつ、良かった……。突然発生した謎のジャミングのせいでモニターも通信も途絶えてしまった時は、一時はどうなる事かと思ったが……』

「……………え？」

「ジャミング……………？」

「どういう事だ？と、装者達が互いに顔を見合わせ不思議そうに首を傾げる中、彼女達の口にしたジャミングというワードに仮面ライダーはピクッと反応を示し、僅かに考える素振りを見せた後、そのまま自身のマシンに乗ってエンジンを掛けていく。

「…ま、待って下さい、仮面ライダーさんっ！まだ聞きたい事が……………」

『何？仮面ライダーだどっ？マスクドライバーが其処にいるのかっ?!』

弦十郎の驚きの声が通信から聞こえるが、それより今は彼を引き止めなければと仮面ライダーを慌てて呼び止める響。するとそれに対し、仮面ライダーは僅かに響の方に顔を向け……………

『……………俺も……………さつきは助かった……………』

「……………え？」

漸く口を開いた仮面ライダーが告げたのは、短い感謝の言葉。

そんな思わぬ一言に思わず響も呆気にとられる中、仮面ライダーはそれだけ伝えるとマシンを発進させて何処かへと走り去っていき、残された響は遠ざかる背中に虚しく手を伸ばし、呆然と立ち尽くす事しか出来なかった。



「——で、どう思う？ やっぱアレ、彼って事で間違いないのかなあ」

——場所は変わり、ノイズの出現によって今は人気のない路地では、先程の場所を後にした金髪の男と青髪の青年が何処かへ歩く姿があった。

ノイズ達が暴れ回ったせいで至る所に破壊の痕跡が残る街並みを眺めながら、後頭部に両手を回す青髪の青年は呑気な口調で先程ノイズイーターを倒した仮面ライダーの正体について正面を歩く金髪の男にそんな疑問を投げ掛けるが、金髪の男は明らかに苛立ちを露わにした足取りで先を歩いて何も答えず、目の前に転がる破片を乱雑に蹴り飛ばしていく。

「クツソツ、マジで生きてたとか笑えねえぞこりやつ……。どうすんだよつ、これじゃ俺らの計画もホントに潰され兼ねねえぞつ……！」

「ホントびつくりだよねー。アレでまだ生きてたつて言うんだし、これじゃ苦労して尻に掛けたのが水の泡だよ」

やれやれー、と青髪の青年は肩を竦めて露骨にガツカリし、金髪の男も焦りを露わにした様子で街を歩く足取りにも何処か余裕がなくなり始めていた。其処へ……

「——なに、まだ気を落とすのは早いかもしれんぞ」



「……………ッ！」

何処からともなく冷たい声が響き、驚く二人がその声の主を探して辺りを見渡すと、路地の裏の方から革靴の音を鳴らして一人の男……デュレンがゆっくりと闇の中から姿を現した。

「デュレン……?!お前まで来てたのかよ?!」

「当然だろう。何せ我々の計画の根幹に関わる事態なのだから、この目で直接確かめる必要がある……それに念の為、裏工作の必要もあつたからな……」

「?裏工作?」

「こつちの話だ」

お前達には関係ないと、短く返し切って捨てるデュレン。その仲間内にまで必要以上

の事を語ろうとしない口ぶりに金髪の男も内心疑心感を覚えながらも、今はそれどころではないかと自分を諫めて溜め息を吐き、デュレンにジト目を向けて問い掛ける。

「んで？さっきの、気が早いみたいと言いい口はどういう意味なんだよ？実際問題、奴が生きてたんなら結構な一大事だろ、コレ」

「……奴が生きていた、だけの話なら確かにその通りだろう。だが、恐らく今の奴は——」

口元を手で覆い、デュレンの脳裏に蘇るのは先程戦場でノイズイーターを相手に戦っていた仮面ライダーの戦闘スタイル。

一挙一動、『以前の奴』を知っていれば何もかもが違い過ぎるその戦いぶりに一つの推測が頭を過ぎり、クツ、と声を殺して笑うデュレンの表情に嬉々とした笑みが浮かび上がる。

「——どうやら、ツキはまだ俺達の方にあるかもしれんな……」

「……………」

口元を覆う手で笑みを隠しながらそう告げるデュレンの言葉に、二人も訝しげに眉を顰めるが、デュレンはそんな二人を他所に歩き出していき、僅かに口端を吊り上げ不敵な笑みを浮かべながら自分達が破壊に導いた街並みの間を過ぎ去っていくのであった。



「……………」

ノイズの異常発生、そしてノイズイーター撃破から数時間が経ち、黄昏時の空がよく見える海岸にて、仮面ライダーから元の姿に戻った青年がバイクを脇に停め、海へ沈むように消えていく夕陽を無言のまま見つめる姿があった。

「……………」

フードで顔を隠したその横顔からは表情は一切読めない。だが、僅かに俯いて自身の右手を見下ろし、ジッと己の掌を見つめるその様は何処か物悲しげに見える。

「…………シンフォオ…………ギア…………か…………」

拙い口調で声に出し、頭に思い起こすのは先程の戦場で出会った少女達の姿と美しい歌。

何度口にしても、その音を耳にするだけで胸の内を締め付けるような感覚に襲われながらも、青年は顔を上げて海の向こうの夕陽を見つめ、戦場で聴いた歌のメロディーを思い出しながら小さく口ずさんでいく。

「……………♪……………♪……………」

風が吹けば飛ぶような、波の音が響けば簡単に掻き消せるようなか細い歌声。

戦場で彼女達が歌っていたような力強さなどないが、それでも青年は歌い続ける。

誰に届く事はないと分かっているけど、誰かに聴かせ、求めるように小さく、か細く、沈む夕陽を見つめて歌い続けていた――。

第一章／戦姫達の物語×忘却の仮面ライダー　E N D

## 第二章／邂逅×存在を赦されない存在

—S・O・N・G・本部—

——ノイズの謎の大量発生、そしてノイズイーターの出現から三日経ったその日、響達は学校終わりに弦十郎からの招集を受けてS・O・N・G・本部の発令所に集められていた。

「皆、よく集まってくれた。早速ブリーフィングを始めたいと思うが、その前に先日的一件はご苦労だったな。皆の奮闘のおかげで取り残された人々や怪我人を救う事が出来た。改めて感謝したい」

「……でも、結局ノイズイーターには歯が立たなかった」

「そうデスね……彼処で仮面ライダーが来てくれてなかったから、アタシ達もやられて

たかもしれないデスよ……」

先日の一件での響達の活躍を労う弦十郎だが、調と切歌、響とクリスも何処か浮かない様子で元気がない。

その原因はやはり、先の戦いでノイズイーターを相手に手も足も出せなかった事を未だ気にしているのだろう。

四人のそんな心境を察し、弦十郎は何か考えるように一度瞼を伏せた後、響達の顔を見回して言葉を続けていく。

「確かに前回は不測の事態も相まって、ノイズイーターに遅れを取る事になった……。だが、何も敵に打ち勝つ事だけが全てじゃない。未知の敵を相手に民間人を守り切り、戦い抜けただけでも上々だ」

「そうですね……それにこれまで足取りを一切掴めなかったノイズイーターや、マスクドライダーの情報を得られたのは大きな進歩と言えます。皆さんにお話する以前から

既に調査を進めてはいましたが、調査部の方も難航している様子でしたから……」

だからそう気を落とさないで欲しいと響達を励ます弦十郎とエルフナイン。そんな二人の気遣いに気落ちしていた響達の表情も僅かながら和らいでいく中、気を取り直したクリスが気になっていた疑問の一つを二人に投げ掛ける。

「それで、あれから結局何か分かったのか？ノイズがいきなり現れた事とか、あのマスクドライバーがそれっぽく言ってた黒幕の件とか」

「うむ。実はその件について一つ、気になる情報を掴んだ……エルフナイン君」

「はい。先ずは皆さん、これを見て頂けますか」

弦十郎に促され、エルフナインはその手に持つパッドの画面を響達に見せていく。

其処に映し出されているのは、三日前にノイズが出現した街の一角を映す監視カメラの映像。



大勢の人々が街を行き交う中、何も無いハズの街の上空に突如無数の火花が走り、直後に異次元の穴が開かれて無数のノイズが大量に現れる瞬間が捉えられていたのだ。

「これは三日前、市内の監視カメラがノイズ出現の瞬間を捉えた映像だ。この映像から様々な解析を重ねた結果、どうやら先のノイズの出現はこれまでのパターンとは全く異なるもの……つまり、ソロモンの杖や錬金術師達がアルカ・ノイズ召喚の際に用いる道具などを一切介していない方法でこちらに現れていた事が分かった」

「これまでにない出現パターンって……」

「で、でも、バビロニアの宝物庫は閉じられている訳だし、ソロモンの杖も使わずに出てくるなんて有り得るんデスか？」

そう、そもそも錬金術師が特殊な装備を用いて呼び出すアルカ・ノイズならともかく、門を封印されているバビロニアの宝物庫から鍵であるソロモンの杖も無しにノイズを呼び出す事など可能なのか。

仮に可能だとするならば、嘗て死に物狂いでノイズを封印したと思っていた自分達の戦いは無駄だったのか？

そんな不安を覚える切歌からの疑問に対し、エルフナインはパッドを操作しながら話を続けていく。

「其処までの解明には未だ至ってはいませんが……でも一つだけ分かるのは、この次元の穴を開く際に用いられたエネルギーは聖遺物に由来する物ではない、という事です」

「聖遺物は使われてない？」

「ならもしかして、哲学兵装か？」

『哲学兵装』、それは長い時を経て積み重なったコトバノチカラが宿り、ソレそのものの在り方を捻じ曲げる想念が力と化したモノである。

例を上げるとすれば、響達が以前に関わった事件の発端となったツタンカーメンは呪いの力を持つという迷信を多くの人が信じ込み、長い年月の間に信念が積層した事で死の呪いを撒き散らす哲学兵装と化してしまった。

聖遺物に由来するエネルギーでないなら、もしや哲学兵装が原因で宝物庫が開かれたのか？と疑問を口にするクリスだが、エルフナインは「いえ」と首を横に振った。

「此処で使われたエネルギーは、聖遺物や哲学兵装、そのどれも異なる全く別の物でした。過去のあらゆるデータベースのデータと照合してみても、合致しない謎の力……もしかしたらコレは、この地球上には存在しない未知の力が作用してバビロニアの宝物庫が開かれたのではないかと思われれます」

「地球上には存在しないエネルギー……？」

「地球にはないって、じゃあええつと……もしかして宇宙からの力、だったりとか？」

「お前なあ……適当な事言う前にちゃんと考えて——」

「いいえ、響さんの言ってる事もあながち間違いとは言い難いと思います」

「マジかよ?!」

「な、ならホントに、コズミックなパワーのせいでバビロニアの宝物庫が開いたって事デスか?!」

首を捻る響の発言にクリスが呆れて一蹴しようとするも、エルフナインからのまさかの肯定に切歌や調までも驚きを浮かべてしまうが、そんな一同の反応に弦十郎も苦笑と共に補足を加えていく。

「宇宙から、と言うと語弊があるが、この世界には存在しないという意味では確かに間違いとはいないかもしれない。バビロニアの宝物庫を開いた力の正体は、我々の世界に存在しないモノ……恐らく、異世界から来訪した何者かによる干渉を受けたのかもしれない」

「?いせ、かい……ですか?」

弦十郎から補足説明を受けるも、突然出てきた異世界というワードに響達も怪訝な反応を浮かべて揃って首を傾げてしまう。

そんな四人にエルフナインがパッドを再び操作して画面を見せていくと、其処には先日の戦闘で四人が戦ったノイズイーターのデータが映し出されていた。

「これは、先日の戦闘で得たノイズイーターのデータです。あの事件以降、彼等の正体を探る為に連日解析を進めていたのですが……」

そう言いながらエルフナインは更にパッドを操作して画面を進めていくが、ノイズイーターを解析する為にデータを読み込もうとした瞬間、突然『DATA ERROR』の文字が表示されてしまった。

「……今お見せした通り、ノイズイーターのデータを解析しようとしても、これ以上はエラーが発生して進める事が出来ませんでした。他の方法やアプローチを変えてみても

結果は同様……そして検証に検証を重ねた結果、僕達は一つの結論に至ったんです。恐らくノイズイーターとは、この世界に存在するシンフォギアや聖遺物等を含めた技術を受け付けない特殊な存在……つまり、この世界のルールとは全く異なる並行世界からきた存在ではないかと」

「へ、へいこう……せかい……?」

「所謂パラレルワールドのようなものだ。この世界と似ているようで、全く違う歴史を歩んだもしもの世界といったな」

「……うう、分かったような、分からないような……」

「だああっ！へーこー世界だの何だのの話は今はどうだっかっていいんだよッ！ようするに、バビロニアの宝物庫が開いたのはそのノイズイーターの仕業って事でいいんだろッ?!」

頭上に？の数を増やして未だ理解が追いつかずゲンナリとする響に痺れを切らし、ク

リスが要約してノイズ出現の原因がそのノイズイーターにある事を纏め強引に話を進めるも、弦十郎とエルフナインは何処か難しげな顔を浮かべてしまう。

「半分は正解だが、もう半分はまだそうとは言いきれないかもしれん」

「先日の戦闘の際、突如発生したジャミングによりマスクドライダーが出現して以降のモニターが不可能になった為、現場に居合わせた皆さんの証言を元に聴取を取らせて頂きましたが、その時のマスクドライダーの話では、あの時現れたノイズイーターは彼を釣る為の餌だったという話でした……という事は、あのノイズイーターの裏にはまだ黒幕がいる可能性が高い」

「……つまり、バビロニアの宝物庫を開けたのはその黒幕の仕業で、その力は私達の世界に存在しない未知の物かもしれない、ということ……?」

エルフナインの説明を聞き、真つ先に答えに辿り着いた調がそう答えると、エルフナインはそれに頷き返し、弦十郎は腕を組んで眉間に皺を寄せながら険しげな表情になる。

「恐らく、例のジャミングを発生させたのもその黒幕側による妨害工作だろう。目的が何なのかは未だ不明だが、タイミング的にマスクドライダーを狙ったものか……いずれにせよ、マスクドライダーがノイズイーターを撃退した事を見てもその二つの勢力が敵対関係にあるのは明白だろうな」

「ですがデータが解析出来ない以上、これ以上の情報を探る事は僕達だけの力では困難かと思われれます……このまま解析が出来なければ、ノイズイーターの対策を取る事も叶いません……」

「そんな……それじゃ、アタシ達はノイズイーターと戦う手段はないって事デスか?！」

ノイズイーターの対策が取れなければ、次にまた奴等が現れても自分達はノイズイーターに太刀打ちする術がなくまともに戦う事も出来ない。

それでは一体どうすればいいのか……。戸惑う響達に対し、弦十郎は組んだ腕を解いて言葉を紡ぐ。



「確かにこのままでは対策の打ちようがないのは事実だが、何も手がないという訳ではない。先程も言ったように、ノイズイーターは別世界から来訪した存在かと思われる。つまりはそのノイズイーターを倒したマスクドライダーも同様の存在であり、彼は奴らに対抗する術を持っているという事になる。となれば……」

「……仮面ライダーさんに協力してもらえれば、私達もノイズイーターと戦えるようになるかもしれない、って事ですね！」

弦十郎が言わんとしている事を察した響が真っ先に反応すると、弦十郎とエルフナインも静かに頷き返す。だが、それに関してクリスは若干心配を帯びた表情で溜め息混じりに口を開いた。

「けどよ、ホントにアイツを信用しても大丈夫なのか……？正直正体が分かんねえってとこじゃノイズイーターとそう変わらないし、戦ってる敵が同じだからってあたし等の味方になつてくれるとも限らないだろ？」

「そ、そんな事ないよ！前の戦いの時だって私達を助けてくれたし、逃げ遅れた人達も身を呈して守ってくれたんだよ？だから話せればきつと、協力する事だって……」

「確かに、悪い人って事はないと思うけど……」

「でも、それならどうして何も言わずに帰っちゃったんでしょね……何か事情を知ってるなら、ちゃんと話してくれても良いと思うデスよ」

「それは……」

そう、切歌の言う通り、自分達に協力してくれる気があるなら前回の時点で事情を聞かせてくれても良かった筈なのに、何故か仮面ライダーはそのまま去ってしまった。

因みに本部の方ではあの後、仮面ライダーを追跡しようとした彼の反応を追い掛けたものの途中で消滅し、後を辿る事は出来なかったようだ。

恐らく仮面ライダー側が追跡対策の為に何か仕掛けを行ったのかと思われるが、其処

までして他人との接触を避けようとするのは何か理由があるのか？

それすらも分からないが為に仮面ライダーへの疑心を募らせるクリス達に響も言葉を濁らせる中、弦十郎もそれに関しては否定せず重々しく頷いた。

「確かに、向こうの素性も分からない内から無警戒で接触するのは早計だろうが、彼が唯一この状況を打開してくれる貴重な情報源である事も確かだ。下手にこちらが身構えて向こうに警戒心を与えるのは得策ではないが……どちらにせよ、先ずは彼と直接会って話す事が重要だ」

「けど、マスクドライダーの居場所も分からないのにどうやって……」

本部が追跡を試みても失敗してしまった以上、仮面ライダーが今何処にいるのかも分からない。仮に会えるとすればノイズライダーが再び現れた戦場でしか確実な方法はないが、一体どうするつもりなのか。

調が訝しげにそう問い掛けようとした瞬間、オペレーター藤堯が不意に弦十郎に呼

び掛けた。

「司令！発見しました！」

「む、漸くか。だがちょうどいい、モニターを回してくれ！」

「[[[[?]]]]」

二人の不可解なやり取りに響達が首を傾げる中、弦十郎の指示と共に発令所のモニターに映像が映し出された。

それは市内の大通りの様子を映す監視カメラの映像であり、大勢の人々が行き交う中、街中のベンチに背もたれて腰を下ろす人物がズームアップされていく。

心なしか薄汚れた灰黒いロングコートに、ボロボロの黒のジーンズという見窄らしい格好。

顔を隠すようにフードを深く被ったその姿は間違いない、先日の戦闘の最中にも現れた仮面ライダーに変身した青年の姿だった。

「アイツは……?!」

「仮面ライダーさん?!」

「やはりか……。君達から聞かされたマスクドライダーの特徴を元にこの数日間、市内の監視カメラを張って捜索し続けていたが、漸く足取りを掴めたようだな」

「ほんと、大変でしたよ……。何十もあるカメラを二十四時間体制で交代しながら見張り続けるの……」

「とか言いながら、二日目の夜中辺りで眠りこけてたのは何処の誰だったかしら？」

「ちよっ……!その事は司令の前では黙っててくれって口止めただろお?!」

職務中に居眠りしてしまった件を、ジト目を向ける友里にバラされ慌てふためく藤堯。

そんな二人の会話に弦十郎も呆れて肩を竦めつつ、モニターに映し出される青年に目を向けていく。

「ともかくマスクドライバーの居場所は判明した。ただ、此処からどう彼に接触するべきか……交渉のテーブルに着いてもらう為にも、あまり事を荒立てる真似はしたくはないが……」

何せ今現在、彼だけが唯一のノイズイーターに対抗する術を知る情報源だ。

此処で自分達が彼とのファーストコンタクトを見誤れば、ノイズイーターに太刀打ちする術を失い、これから先起こるかもしれないノイズイーターの事件を防ぐ事が出来なくなってしまう。

故に慎重に事を進めなければならないが、一体自分達はどう出るべきか。

弦十郎が思考に思考を重ねて考える中、そんな彼の背後で何やら考え込んでいた響が顔を上げ、一步前に踏み出した。

「あの、師匠！仮面ライダーさんとの交渉、私達に行かせてもらえませんか！」

「！何だと？」

「おまつ、急に何言い出すんだよ?!」

仮面ライダーとの交渉をいきなり申し出た響に弦十郎も戸惑い、クリス達も驚愕してしまうが、響はそんな一同の反応に構わず、胸に手を当てて弦十郎の目をまっすぐ見つめていく。

「私、前の戦いの後に仮面ライダーさんとちよつとだけ話せたんですけど、あの人は正面から向き合ってちゃんと話す事が出来れば、きつと私達の気持ちを汲んで応えてくれる……そういう優しい人だって、確かにそう思えたんです」

最初にもしかしたらと思ったのは、仮面ライダーが戦闘の中でノイズイーターに戦いを止めるように呼び掛けた時、声が僅かに不安を帯びてるかのように震えていたのに気付いたのがきっかけだった。

恐らく彼は、例え相手が敵であったとしても分かり合える可能性があるならそれを捨てない。

別れ際に自分に感謝の言葉を伝えたあの時に、きっとそんな人なのだと確信を持ち、だからこそもう一度会って彼と話がしたいと思った。

「戦う目的が同じなら、話し合えば分かり合える。手を取り合えないなんて事はないと思います。だから、私が……!」

「ううむ……響君の言いたい事は分かるが……しかし……」

響の気持ちを尊重してやりたい部分はあるが、今は自分達にとっても今後に関わる大



事な局面なのもまた事実だ。

そう簡単に責任を委ねられる問題でもない以上、一体どうしたものかと悩む弦十郎の隣でエルフナインは顎に手を添えながら何やら思考した後、視線を上げて響達の顔を見回していく。

「そうですね……此処は響さん達に任せるというのも手かもしれません」

「本当に?!」

「エルフナイン君?!しかし……」

「確かに、失敗が許されない交渉を任せるのはリスクもありますが、彼と直接面識があるのはこの中でも響さん達だけです。顔見知りの人間が相手なら少なくともファーストコンタクトに失敗する事は先ずないでしょうし、響さんに対して悪印象を抱いていないのなら警戒心を持たれる事もないかと思えます」

ただし、とエルフナインは一拍置く。

「先程も言ったように、マスクドライバーは未だ正体が分からない部分が多い相手ですから、何がきっかけで決裂が起きるかも分かりません……ですので皆さんには、いざと言う時の為にこちらから指示を送れる通信機を身に付けていて下さい。万が一皆さんが交渉に失敗した場合、こちらからリカバリー出来るようにフォローします……それなら問題ありませんよね？」

「……ふむ。交渉が成功する可能性が僅かでも上がるなら、賭けに乗るのもアリか……分かった。だがくれぐれも慎重に頼むぞ？今の状況を打破する為にも、彼から齎される情報だけが頼りだからな」

「了解です！」

「了解」

「うう、何だかとてもなく責任重大な任務を任せられたデスよ……」

「つたく、相変わらず一人で突っ走りやがってコイツはっ……」

ちよつとはこつちの意見も聞きやがれ、と頭を抑えて愚痴をこぼすクリスだが、何だかかんだ言いながらも響が率先してこうなる事を分かっていたのか、口ではそう言いつつ彼女の表情に其処までの悪感情の色はない。

その辺を響も察し、後頭部を搔きながら苦笑いを浮かべてクリスに謝ると、モニターに映る青年に何処か決意を秘めた眼差しを向けていくのであった。

## 第二章／邂逅×存在を赦されない存在①

— 繁華街 —

「……………」

それから数十分後。市内ではS・O・N・G。本部のモニターに映っていた監視映像と変わらず、大勢の人々が行き交い賑やかな風景が広がっていた。

そんな中、市内にある一つのベンチの上ではフードを深く被った青年が何をする訳でもなく座り込み、顔を俯かせて無言のまま身動き一つも取らないでいた、その時……

「——あの……仮面ライダーさん、ですよ？」

「……………」

不意に目の前から誰かから声を掛けられ、青年はピクツと僅かに反応を示しながら徐に顔を上げていく。其処には、何処となく緊張した面持ちで青年の前に立つ少女と、その背後には少女と同じ制服姿の三人の少女達……響達の姿があった

「お前達は……」

「どうも……」

「まさか顔を忘れた、なんて言い出さないだろうな？この前の戦場でガッツリ会ってたんだ、忘れたとは言わせねーぞ」

「ちよ、クリス先輩……！もう少し抑え気味に抑え気味に……！」

腰に手を当てて初っ端から高圧的な口振りになるクリスに切歌が慌てて横から宥めに入る。一方で青年は頭上に疑問符を浮かべながら四人の顔を一人一人見回し、響の顔を見て何かを思い出したように僅かに息を拒んだ。

「お前達は……そうか……三日前の戦場にいた……」

「あつ、思い出してくれました？あの時は助けて頂いて、本当にありがとうございました！」

自分達の顔を思い出した青年に、響は快活な笑顔と共に改めて前の戦いの件について感謝の言葉を口にする。

青年もそんな響の顔をジッと見つめた後、周囲を見渡して近くの店の前の天井に取り付けられた監視カメラに目を向けていく。

「成る程……監視カメラの映像で俺の居場所を探り当てたんだな……」

「えっ？そ、そんな事まで分かるんデスかっ？」

「……お前達が、あのノイズとかいう化け物と戦ってた事は以前から知っていたからな

……その時の迅速な対応から、恐らくは市内のカメラから街の様子を探ってるんじゃないかと予想はしてた……実際に当たってたのは自分でも驚きだが……」

「あつー！」

（切ちゃん……）

（馬鹿！余計な情報を与えてどうすんだ！）

これでは仮に交渉に失敗してしまった場合、彼の後を追跡するとしても監視カメラで追う事は出来なくなるかもしれない。思わず口を抑える切歌のポカで余計に失敗が出来なくなりクリス達の緊張が増す中、青年はそんな空気も露知らず言葉を紡ぐ。

「それで、此処へは何しに？俺に何か用か……？」

「え、えつと……私達、仮面ライダーさんに会ってもう一度話がしたくて此処まで来たんです。仮面ライダーさん自身の事とか、あのノイズイーターの事とか、色々お話を聞か

せて欲しくて……」

「ノイズイーター……ああ、そうか……お前達は奴らの事をそう呼んでるんだな……確かに、アレの醜態はそう呼ぶのが相応しいか……」

「……?」

ノイズイーターの呼称を聞き、何かに納得するように頷く青年の反応に響達は揃って首を傾げ怪訝な反応を浮かべていく。そして青年も暫し思考する素振りを見せた後、不意にベンチから腰を上げて立ち上がった。

「分かった……だが此処だと人も多く、会話を掻き消されるかもしれない……話は場所を移してからにしよう」

「え……あ、あの、話を聞かせてもらえるんですか?」

「……?その為に来たと言っていたのはそっちだろう……?違うのか……?」



「あ、いえっ！違わない事はないですけど……！」

「この間は何も言わずにいなくなつたから、てつきり私達の事も警戒して話したからなかつたんじゃないかと思つてたから……」

故に想像よりもすんなり話に応じてくれた事に響達も逆に戸惑つてしまつた中、青年は無表情のままそんな四人の顔をジツと見つめると、僅かに俯いて口を開く。

「成る程……気付かない内に誤解を与えてしまつてたようだな……すまない……。あの時は”見られている”可能性を考えて、あまりあの場に長居が出来なかつたんだ……」

「？見られてるって、誰にだよ？」

「……それも含めて話す……先ずは場所を移そう……」

話はそれからだと、青年は人混みの間をすり抜けて先へと進んでいき、響達も互いに

顔を見合わせた後、青年の後を追って走り出していくのだった。



そして数分後。響達は青年と共に近くに見えた適当なカフェに入り、テラスのテーブルを囲むように席に着いてから軽い自己紹介を済ませた後、注文を聞きに来たウェイトレスに飲み物を注文していく。

「私、カフェラテで！」

「私も同じ物を」

「アタシはモカでお願いするデース！」

「あたしは普通の珈琲でいい。……そっちは？何頼む？」

「…………俺は…………」

クリスに促され、青年は手元のメニュー欄に目を落とすと、何やら懐をガサガサと漁り出した。そんな青年の様子を見て響達も小首を傾げると、青年は小さく溜め息を吐いて響達に向け首を横に振った。

「俺はいい…………お前達だけで頼むといい…………」

「え、でも…………」

「気にするな。俺はこれだけで十分だ…………」

そう言って青年はウエイトレスが運んできた水の入ったコップを手にとって揺らし、注文を受けたウエイトレスが去っていった後に調と切歌はお互いに顔を近づけてコソコソと小声で話す。

(もしかして、あまりお金がなかったのかな……)

(ドードスかね……案外ただのケチンぼだったりするかもデスよ?)

(お前らなあつ……無駄話してないで今は目の前に集中しろっ!)

(うっ……はい……)

クリスに注意され、若干渋々ながらも positioning に戻る切歌と調。そんな中、響がちびちびと何処か大事そうに水を飲む青年に気になっていた最初の疑問を投げ掛けた。

「あの、それで早速なんですけど、仮面ライダーさんの事って聞かせてもらってもいいですか?名前とか、あの姿の事とか!」

「お、おい……!其処はもうちよい慎重に……!」

「……名前……」

駆け引きとか無しにガンガン質問を投げ掛ける響の飛ばしっぷりにクリスも慌てて抑えようとするが、響からの質問を受けた青年は逡巡するように俯いた後、意を決した様子で徐にフードを脱いでいく。

露わになったその素顔は中性的な顔立ちをしており、細く切れ長な真紫の瞳、フードを脱いだ拍子に揺れる長く黒い髪が特に目を引き付ける。

何処か触れれば散ってしまいそうな儂さを抱かせる青年の素顔を目にした響達も一瞬目を奪われる中、青年は若干たどたどしい口調で口を開いていく。

「名前は……多分、黒月蓮夜……年は18……だったと思う……」

「黒月、蓮夜さん……？でも、多分とか、思うって？」

「……………」

自分の事の筈なのに、何故か自信なさげに自己紹介する青年……”黒月 蓮夜”の口ぶりに疑問を覚える響からの質問に対し、蓮夜は言い難そうに目を逸らした後、一度目を伏せてから響の目を見据えていく。

「持っていた僅かな荷物からそう名乗ってるだけで、実際にそれが本当に俺の名前なのかは分からないんだ……自分自身の事は、何も……」

「自分の事が分からないって……」

「まさか……」

蓮夜の話から何かを悟った調とクリスがハツとなり、それに対して蓮夜も数拍の間を置いてから重々しく頷いた。

「記憶喪失、という奴なのだろうな……自分の名前は疎か、記憶を失う以前の事が何も思いつけない……。だから、俺が何者なのかは俺自身にも良く分からないんだ……すまない……」

自分は記憶喪失で、自分自身が何者なのかも覚えていない。申し訳なきように謝る蓮夜からの衝撃的な話に響達も驚きで一瞬固まってしまいが、先に我に返ったクリスが目を細めて蓮夜を睨み付けていく。

「記憶喪失って、そんな話をいきなり信じろつての？単にそつちが話したくない事を隠したいが為に、都合の良い事を言つて誤魔化そうつてんじやないだろうな？」

「ちよ、クリスちゃん……！そんな言い方しなくても——！」

「良いからお前は黙つてろ……！コイツの話が信頼出来るかどうかはあたし等の判断に掛かつてんだ。一度助けられたからって、無条件で何でもかんでも鵜呑みにする訳にはいかねえんだよっ」

現に響は既に蓮夜を半分味方だと踏んでるし、切歌と調にその判断を任せるにはまだ歳若いし、荷が重過ぎる。

故にこの場では自分のみが彼が信頼に足る相手か見極めなければならぬと、クリスが蓮夜を見つめる目を更に鋭くさせる中、蓮夜は僅かに俯き、自分の手を見下ろしている。

「そうだな……自分でも突拍子のない話だとは思うが、言葉で伝える以外に信じてもらえる方法がない……だから、最終的な判断はそちらに任せる……俺の話が信用に足らなければ、このまま去っても構わない……」

「……………」

他に信じてもらう方法がない以上、嘘か真かの判断を委ねる事ぐらいしか誠意を見せられないと目を見つめ返してくる蓮夜に対し、クリスも暫しジツと蓮夜の目を見つめると、やがて溜め息と共にテーブルに頬杖を突いて目を逸らした。

「まあいい……そつちがその気なら、取り敢えず話を聞いてからでも遅くはないだろうしな……」



「……俺の話は信じてくれるのか？」

「一先ずは、だ。別にそつちの話を鵜呑みにした訳じゃねえから、勘違いするな」

「ク、クリスちゃん！もう……蓮夜さんもすみませんっ、クリスちゃんも悪気がある訳じゃなくて……！」

「いや、分かってる……寧ろ正体不明の相手が素性を明かせない以上、警戒を覚えるのも無理はないだろうからな……」

だからクリスの反応も当然だと語る蓮夜に、クリスも目を細めてそれ以上の追求はせず口を閉ざす。そんな若干ピリ付く空気の中、調が控え目な拳手と共に蓮夜に問い掛ける。

「あの、さっきの……記憶がないって話でしたけど、一体何時からそんな事に？」

「何時から……そうだな……覚えている限りだと、数週間ほど前になるか……見知らぬ

路地の裏に何故かボロボロの格好で倒れていて、目覚めた時には何故か自分の事も、それ以前の記憶の事も思い出せなくなっていた……」

「数週間前……」

（都市伝説や噂が流れ始めた時期とは、一応は合致するな……）

となると、やはり彼が件の噂の仮面ライダーである事は間違いなさそうだが、そもそも何故記憶喪失の蓮夜がそんな力を持っていてノイズイーター達と戦っているのか。

そんな四人のその疑問を察したのか、蓮夜は懐の内ポケットから一枚のカード……仮面ライダーの絵が描かれたカードをテーブルの上に置いていく。

「手元に残っていたのは僅かな荷物と、このカードと腰に巻いていたベルトだけだった……最初は俺自身も、記憶を失った事や自分が何者なのかも分からず混乱していたが、奴らを止めなければいけないという事だけは分かって、これまでもあの姿になって戦い続けていた……そして奴らと戦い続けていく中で、少しずつではあるがこの力の事や、

奴らの事を思い出せるようになっていった……」

「思い出せ……じゃあ、やっぱり蓮夜さんはノイズイーターの事を知ってるんですね？」

僅かに身を乗り出す響からの問いに、蓮夜も小さく頷くと共にテーブルの上のカードに目を落としていく。

「俺が変身していたあの姿は、『クロス』……そしてお前達がノイズイーターと呼ぶあの怪物の名は、『イレイザー』……物語から追放された、存在を許されざる者が変わり果てた姿だ……」

「クロス……イレイザー……」

「そのクロスってのは、一体何なんだよ？あたし等のシンフォギア……とは違うんだろ？」

蓮夜の口から告げられた仮面ライダーとノイズイーターの本当の名前……『クロス』

と『イレイザー』の名を聞いて響達の表情が真剣味を帯びる中、クリスがクロスについての説明を求めると、蓮夜は懐から変身に使用していたベルトを取り出していく。

「俺もまだ、其処まで詳しい事は思い出せてない……ただこのベルトとカードを使えば超人的な力を得られる事や、これが奴らに対抗出来る唯一の力である事……そして、俺がこの世界の人間ではないという事だけは思い出せた……」

「この世界の、人間じゃない？」

「……もしかして……貴方は並行世界の……？」

意味深な蓮夜の言葉に響が訝しげに小首を傾げると、調はふと先程の本部での弦十郎達との会話を思い出し、目の前にいる蓮夜が並行世界の存在なのではないかと察して問い掛ける。

それに対し蓮夜も数拍の間を置いた後、肯定の意味を込め頷き返し、響達は目を開いて息を呑んだ。

「記憶を失ってから暫くの間ずっと、何処か周囲との差異、違和感のような感覚が拭えなかった……そう感じる理由も分からないまま何故か奴らの気配を感じ取る事が出来て、戦わなければならぬという衝動のままに変身して戦い、モヤが掛かっていた記憶が少しずつ蘇って、分かった……俺は元々奴らを追い掛けてこの世界を訪れ、そして何者かに襲われて記憶を失った……恐らく、イレイザー達の手によって……」

「イレイザーって……さっき言ってた奴の事か」

「物語から追放とか、存在を許されざる者って言ってたデスよね……あれってどういう意味デスか？」

蓮夜が記憶を失った原因……それがさっき彼も言っていたイレイザーと呼ばれる怪物にあるかもしれないと話す彼に、切歌は先程蓮夜が口にした『物語から追放された』、『存在を許されざる者』というワードが気になって更に追求すると、蓮夜は水を口に含んで口内の渴きを潤してから話を続ける。

「言葉通りの意味だ……あらゆる世界、物語から何かしらの理由で存在を許されなくなつた者の成れの果て……奴らは元々、その世界を生きるただの人間と変わりはなかつた……だが、世界のあるべき流れやルールから逸脱し、物語を歪める危険性を持ったが為に追放者の烙印を押され、醜い異形の存在となつて故郷である物語を追われた存在……それが奴らの正体だ」

「?ええつと、つまり……?」

「まさか……奴らの正体は、元は人間だつてのか?!」

「え?!」

いきなり話が難解になり響や切歌が置いてけぼりを食らう中、蓮夜の話聞いて信じられない様子で声を荒らげるクリスの言葉に驚愕を浮かべると、蓮夜は瞼を伏せて小さく頷き返した。

「でも、世界から追放つて、誰がそんな事を……」

「誰か、なんて明確な存在はいない……いや、強いて言えば、”世界”そのものがそういう決めたと言うべきか……」

「その辺りの説明が難しいな……」と小声で漏らすと、蓮夜は頭の中でどうやって話を纏めるか思考しつつ、説明を続けていく。

「さつきも説明したように、世界には、本来そうあるべき流れというものが存在する……この世界で言えばお前達、『シンフォギアを纏う装者達が世界を脅かす様々な敵やノイズと戦い、コレを倒し、平穏を守る』……それがさつきも言った、『物語』……この世界の本来あるべき流れ、歴史の姿だ……しかし……」

カランツと、蓮夜の飲む水の中の氷が音を立てる。その音に響達も一瞬釣られコップを目を向けると、蓮夜もジツとコップを見つめて話を続けていく。

「その主軸となる流れを、直接的にしろ間接的にしろ歪める。或いは致命的な支障を来たと判断された者は、この世界にとって”不必要な存在”とされ、ある日前触れもな

く物語から追放されてしまう……その瞬間から、自分が生まれ育った世界や人々は仮初の現実と人間……”フィクション”と”キャラクター”とされ、戻る事は許されなくなる……それがイレイザーと呼ばれる者達の末路だ」

「そんな……」

「あ、あんまりデスよそんなのっ！世界の都合で問答無用で追放とか、理不尽にも程があるデスっ！」

その話が本当だとすれば、イレイザーもまた世界の都合で居場所を追われた被害者という事になる。

これまで戦ってきた数々の敵やノイズと戦う自分達の障害になり兼ねないから問答無用で世界から追放される。そんなあまりにも理にかなわない話に調や切歌、響も納得がいかない様子でイレイザー側に肩入れしてしまう中、クリスは腕を組んで冷静に聞き返した。



「けど、だったら何で世界から追放された筈のノイズイーター……イレイザーがまたこつち側に戻って来てるんだよ？」

「あ、確かに……それは、どうして？」

「……物語から追放されたとしても、戻って来られる方法が決してない訳じゃない……追放された先の外にも、彼らにとつて新たな“現実”となる世界が存在し、其処で堅実に生きて烙印された罪を償えば、イレイザーから元の人間に戻り、故郷である自分達の世界に帰る事が赦される……だが、中には烙印された罪を謂れないモノだと受け入れられない者、手にした力を悪用しようと画作して、強引に物語の中に戻って来る者もある……」

説明の最中、響達が注文した飲み物を運んでウェイトレスがやって来る。

しかし蓮夜の話に集中し切っていた為に軽い会釈の応対しか出来ず、飲み物がテーブルの上に並び終わったのを見計らい、蓮夜は話の続きを語っていく。

「しかし、強引に物語の中に戻ってこれたとしても、それで話が済む訳じゃない。不正な方法で戻ってきた事が世界に……物語にバレれば、再び追放され、今度こそ二度と戻って来られなくなるか……最悪、その存在をその場で消される事もある……だからそうならないように、奴らは身を隠しながら少しずつ物語を自分の都合の良いように書き換えていき、最終的に自分達の存在が許される世界に作り替える……それが奴らの能力、『改竄』の力だ」

「……改竄？」

新たに出てきたワードに、四人の頭上に疑問符が並ぶ。

「改竄とは、その世界の”本来の歴史の流れ”では決して起こり得ない事象を人為的に引き起こし、物語を歪める力……例えるのなら、既に存在する元々の本に後から勝手に文字を書き加え、気に入らない話を自分好みに変えるというルール違反みたいなもの……本の本来の主人公が、全く別のキャラクターに変わっていたり、そんな主人公と結ばれるヒロインが違う、物語の内容が変わって登場人物が次々に命を落とすなど……そうやって徐々に世界の歴史、物語を書き換えていき、やがては物語そのものに乗っ取る

事こそが、奴らの主な目的だ……」

「んな、馬鹿なっ……」

「それってつまり、歴史改変？まるでサイエンス・フィクションみたい……」

「え、えーつと……？」

「うう……何か話が滅茶苦茶過ぎて、頭がオーバーヒートしそうデスよう……」

イレイザーの恐ろしい力。その驚異的な能力にクリスと調も目を見開いて驚愕を禁じ得ない一方で、響と切歌もスケールの大きい内容に理解が追いつかず頭から湯気を立ち上らせてしまっている。

すると蓮夜もそんな二人の反応を見て説明が適切でなかったかと思ひ、もつと分かりやすく説明する為に話を噛み砕こうと試みる。

「例えば、この前のノイズの出現が最も分かりやすい例かもしれない……アレはこの世界で起きた以前の事件で封じられ、本来なら二度と現れない筈だったらしいから……」

「！お前……あたし等の今までの戦いの事まで知ってんのか……？」

「簡単な情報だけで、実際に何が起きたのかまではこの目で直接見た訳じゃない……僅かな荷物の中に、この世界で起きた今までの事件の年表らしきモノが書かれたノートが入っていた……恐らく、記憶を失う前の俺はこの世界で起きた今までの出来事や事件について色々調べていたんだと思う……どうやってそんな情報を調べたのかまでは、今の俺には分からないが……」

そう言つて後ろ腰から蓮夜が取り出したのは、ボロボロに薄汚れた一冊のノート。

それを響に差し出して中身を見せると、ノートには響達がこれまで関わってきた戦い……ルナアタクやフロンティア事変、魔法少女事変、更にはつい先日終息したばかりのパヴァリア光明結社の事まで載っている。

事件の細かい部分まではどうやら載っていないようだが、如何にして事件が始まり、終息したか、組織の人間である自分達にはしか分からない情報が簡潔に書かれているそのノートを見て響達は驚き、クリスはこんなノートを持つ蓮夜に更に疑心を深める中、蓮夜は気を取り直して話を続ける。

「話を戻そう……さつきも説明したように、物語のルールに縛られないイレイザー達からすれば、ノイズを呼び出す正規の方法である扉を開く為に必要な”鍵”とやらもいらず、閉じられた次元の向こうから再びノイズ達を呼び出せる……改竄の力を行使すれば、奴らにとってそれも造作もないという事だ……」

「改竄の力でノイズを呼び出す……つまりそれが、前回のノイズ発生真相……」

「そ、そんなのインチキ過ぎデスよ！チートじゃないデスか！チートツ！」

ソロモンの杖も必要がなく、イレイザーは己自身の改竄の力のみでバビロニアの宝物庫を自在に開く事が出来る。

そんなあまりにもな出鱈目さに切歌が思わず異を唱えたと、蓮夜も目を伏せて両手の指を絡めるように組んでいく。

「だが、奴らの力も其処まで使い勝手が良い訳じゃない……あまりにも分かりやすい、或いは大規模な改竄は世界に探知されやすくなる……そうなれば奴らも為す術もなく追放されるしかない為、あまり無茶はして来ないとは思うが、中にはそれも承知の上で力を行使用する者……もしくは、世界を御する程の強大な力を持ったイレイザーもいる……恐らく、先日の事件でノイズを出現させたのはそういった連中の仕業だろうな……」

「何だそりゃ、追放すら跳ね除ける奴もいるって事かよつ……！ますますインチキ度が増してんじゃねーかつ！んなのに出張られたら、どんだけの被害がつ……！」

「いや、単純にこの世界を乗っ取るだけのつもりなら、もつと早く進行が進んでる筈だ………なのになにそうしないという事は、他に何か別の目的………多分、仲間を集めてるんじゃないかと思う………」

「な、仲間集め、デスか？」

「……そういえば確か、この間のイレイザーと戦っていた時に、貴方は『この世界の中で作られた個体』って言ってたけど……」

三日前の戦場で、蓮夜がイレイザーに対して告げたあの時の言葉を思い出して調がそう問いつけると、蓮夜は小さく頷いて答える。

「お前達がノイズイーターと呼んでいる連中は、恐らく他の世界から来たイレイザー達がこの世界の人間を元に人為的に生み出した、人工型のイレイザー……ようするに養殖された個体なんだろう……そして生まれたばかりの連中にノイズを喰らわせ、手っ取り早く力を付けさせようとしてる……あの赤い眼も、きっとその影響によるものなんだろうな……」

「ノイズを食らうイレイザー……それがノイズイーターの正体……」

「けど、仲間なんか集めてどうするつもりなんだよ？改竄なんて力を持つてるんなら、誰

にも気付かれないように裏でコソコソ隠れながらちよつとずつ世界を書き換えてくつただけで十分だろうに、なんでわざわざ……」

クリスの言う通り、仲間を作つて数を増やせばその分目撃される危険性も増える。

それなら寧ろ数が少ない方が逆に動き回りやすいのではないか？と疑問を口にする彼女に対し、蓮夜は水を含んで話を続ける。

「真つ先に考え付く理由としては、恐らく自分達の改竄の力をより強固なモノにする為じゃないかと思う……少ない人数なら確かに発見され難いが、その分、物語を完全に乗っ取るまでにそれなりに時間も掛かる……逆にレーザーの数が多ければ、一斉に力行使して一度の改竄のみで物語を乗っ取る事が出来るから……最もこれもあくまで俺の予想でしかない為、奴らの本当の目的は未だ検討が付かないのだが……」

どっちにしろ、前回の事件でノイズを呼び出したレーザーがこの街の何処かで今なおノイズイーターを作り出しているのは先ず間違いない。



そう言い切る蓮夜の言葉に一同も口を結んで無言になる中、響がスカートの裾をキュツと握り締めて口を開いた。

「……正直、私はイレイザーの事とか、改竄の力とか、何となくでしか理解出来ない部分が多いですけど……でも、イレイザーが放っておくには危険な存在だって事は分かりました。なら、蓮夜さんと私達が手を取り合って協力すれば、イレイザーを倒す事も、被害を事前に防ぐ事だって……！」

これまでの説明で、イレイザーの危険性やその力の脅威は理解出来た。しかし、それも自分達が力を合わせれば何とかなる筈だと、改めて蓮夜に協力を持ち掛けようとする響。

だが、蓮夜はそれに対し何処か複雑げな表情を浮かべた後、再び無表情となつて響の目を見つめ返す。

「すまないが、お前達と一緒にイレイザーと戦う事は出来ない……」

「え……ど、どうしてですか？」

「……さつきも説明したように、イレイザーは既に世界のルールから逸脱した存在だ……本の中の登場人物が、本の外の読み手を傷付けられないように、物語のルールの中を生きるお前達が物語の外に追放されたイレイザーを傷付け、滅ぼす事は出来ない……現にお前達も、既にそれを先の戦いで実感している筈だ……」

「……………」

蓮夜に言われ、響達は三日前の戦闘でイレイザーに傷一つ付けられず、攻撃の手応えも得られなかった事を思い出し、そんな四人の反応を見て蓮夜もテーブルの上に置かれたクロスのカードに目を向けていく。

「俺はこのカードとベルトのおかげか、イレイザーによる改竄の影響を受けず、奴らを倒す事は出来る……しかし、この世界の人間であるお前達はそうはいかない……奴らがお前達を明確な敵と認識して改竄の力を用いれば、自分でも気付かない内に記憶や人生も操作され、全くの別の人間にされるか、或いは存在そのものがなかった事にされるか

……何れにせよ、そんな危険の伴う戦いにお前達を関わらせる訳にはいかない……」

「で、でも、蓮夜さんはイレイザーについて詳しいんですね？ だったら、その対策も何か……！」

イレイザーに詳しい蓮夜なら奴らと戦える術も、改竄を防ぐ術も知っているかもしれないと考え、その方法を教えて貰えないか頼もうとする響だが、蓮夜は無言のまま首を横に振っていく。

「奴らの改竄を未然に防ぐ術はない……いや、記憶を失う前の俺ならその方法を知っていたかもしれないが、残念ながら今の俺にはそれも知る由もない……だから今の俺に出来るのは、このまま奴らを倒しながらイレイザーを作り出している黒幕を追う事と、これ以上お前達が事件に足を踏み入れないように警告する事だけ……それを伝える為に、こうしてお前達と話そうと思っただけ……」

「……そんな……」

蓮夜が自分達の話に応えてくれた真意を聞かされ、響は肩を落として落ち込んでしま  
い、クリスも両腕を組みながら目を細めて蓮夜を睨み付ける。

「ようするに、あたし等は足を引つ張るだけだから余計な首を突つ込むな……そう言い  
たいのかよ？」

「……お前達はこの世界を守る守護者……つまりこの物語にとつて重要な要となる存在  
だ……そんなお前達の身に何かあれば、この世界は一瞬で奴らの手に落ちる事になる  
……それを避ける為にも、お前達を奴らに近付けない事が一番安全で、一番ベストな方  
法なんだ……」

「つ……ふざけんな！人様の世界が他所から来た連中に好き勝手に荒らされてるつての  
に、それをただ黙って指を咥えて見てろつてのか?！」

「お前達が下手に手を出しても、この前の戦いのように返り討ちに遭うのは目に見えて  
いる。そうなつては奴らの目論見通りになるだけだ。……はつきり言えば、お前達に出  
来る事は何もない」

「！てめえっ……!!」

「クリス先輩、落ち着いて……!」

ハッキリと、実質戦力外通告をされたも同然の言葉を無愛想に突き付ける蓮夜の物言いにクリスも憤って身を乗り出し、周囲の奇異の視線を集める彼女を落ち着かせようと調達が宥める。

蓮夜もそんなクリスの怒りを受け止めて何も言わず、ただ何処か、自分でも今の言いに後悔を滲ませるように目を伏せた後、再び無表情に戻って続きを語っていく。

「勿論、理由はそれだけじゃない……先日のあのノイズの異常発生も、それに引き寄せられたイレイザーを餌に俺を誘き出す為の黒幕側が仕込んだ罠……恐らく、俺が生きている事を確かめる為のものだ……あの時お前達が言っていたジャミングが黒幕の手によるモノなら、俺が生きている事は向こうにもきつと既に知れ渡ってる……となれば、俺を消す為に様々な刺客が今後送り込まれて来るかもしれない……その危険性も考慮し

て、俺達は一緒にいるべきじゃない……」

「ツ……でも、それなら尚更……！」

「それに其処の少女が言っていたように、俺も奴らもこの世界にとつて部外者……本来在つてはならない異物だ……何も思ひ出せず、分からない状況下で互いに無遠慮に接触し続けられ、お前達にどんな影響を及ぼすかも分からない……それを避ける為にも、俺達は必要以上に干渉し合うべきじゃない……」

決して彼女達を蔑ろにしてる訳じゃない。しかし彼女達がこの物語にとつて重要な役目を補う存在である以上、イレイザーへの対策も無しにこれ以上この件に関わらせる訳にはいかない。

そもそもこれは他所の世界から来た部外者である自分達の問題だ。これ以上は関係ない彼女達を巻き込む訳にはいかないと、水を飲み終えた蓮夜は店の近くの時計台の時間を確認し、徐に椅子から立ち上がっていく。

「表立った協力は出来ないが、イレイザーについての情報はそちらが求めれば提供するつもりだ……だが、何があっても奴らと戦おうとはしないでくれ……他に方法がない以上、奴らの始末は俺が必ず片をつける……これ以上、この世界の人間やお前達にも迷惑を掛けないように努力すると、約束する……」

「蓮夜さん……」

「……大して力になれず、すまない……だが、話す事が出来て良かった……それから、そのノートはお前達に譲る……処分するなり、好きに扱ってくれ……それじゃ……」

何処か申し訳なさそうに響達に謝罪すると共に別れを告げ、蓮夜はフードを被り直しながらその場を後にし人混みの中へと消えていく。

それを見て響も一瞬蓮夜を呼び止めようとして手を伸ばすが、引き止めてから何と言えば良いか分からず躊躇してしまい、結局遠ざかるその背中を黙って見送る事しか出来なかつたのだった。

## 第二章／邂逅×存在を赦されない存在②

「――奴が記憶を失ってる……だって？」

とある廃屋内。元は何かの工場だったのか、長らく放置された錆まみれの機械が多く見られる屋内にて、デュレンにより金髪の男と青髪の青年が集められ、彼から齎された情報……自分達が敵対している連夜に関わる情報を聞き、金髪の男は怪訝な反応でデュレンにそう聞き返していた。

「そうだ。先日の戦いを観察した際、奴の戦闘スタイルが目に見えて変わっているのが分かった……恐らく、我々が以前毘に嵌めた際に一命こそ取り留めたものの、代わりにこれまでの記憶を失う事になったのだろうよ」

「うーん……って言われてもさ、デュレンがそう言うてるだけで実際そうなのかなんて分からないでしょう？まあ彼と何度か交戦経験があるのはこの中じゃデュレンが一番



多い訳だから、僕らも強くは否定出来ないけど……」

「確かにな……大体、記憶を失ってるからってソレが何になるんだよ？ 奴の力が厄介なままなのに違いねえし、実際に奴のせいでこれまで何人もの駒を消されちまってんだぞっ？」

記憶を失ったせいで戦えなくなったのならまだしも、蓮夜はそれでも変身して自分達の駒であるイレイザーを倒している。どっちにしる自分達にとつて驚異でしかないのは変わりないではないかと吐き捨てる金髪の男に、デュレンは両手をポケットに突っ込んだまま淡々と語る。

「記憶を失っただけとは言え、それは奴にとつて死活問題なのに変わりはない。忘れたか？ 奴が変身するクロススの力の本質は繋がりに……『他者との絆』をその身に具現化し、己の力とするだけでなく、奴と繋がりを得た人間にまで我々と戦える力を恩恵として与える……」

「知ってるよっ。そのせいで本来、フィクションの連中には倒されねえっていう俺達の

強味も打ち崩されちゃうし、だから計画を動かす前に奴と装者共が合流しないように先に潰そうって話になったんだろっ？それが何の……」

「……分からないか？記憶を失ってる今、奴は嘗ての仲間の記憶も失い、これまでの繋がりも絶たれた事になる……つまり今の奴は、俺達と戦った時よりも遥かに弱体化しているという事だ」

真剣味を帯びた口調のデュレンにそう言われ、彼の話を半ば聞き流そうとしていた二人の表情も僅かに変わる。仮にもしデュレンの話が本当だと仮定すれば、今の蓮夜は確かに自分達にとって大した驚異になり得ないかもしれない。しかし……

「けど、奴がマジで記憶を失ってるって確証は本当にあんのか？もしかしたら向こうも俺達の事を欺く為に、わざと記憶がない素振りを見せてこつちを釣り上げようだなんて考えてるかもしれないだろ？」

「ハハッ、相変わらず用心深いねえ……でも、僕も同意見かな。まだ一度しか彼の戦いを見てない訳だし、もう少し様子を見てから判断するべきじゃない？」

「分かっている、その為の次の一手を既に用意済みだ。先の使い捨ての駒とは違い、奴の力を測るのに適当な駒をな……アスカ、お前は其処で奴の力を見極めろ」

「ハアツ?!何で俺なんだよツ?!お前の方が奴の事に詳しいんだから、お前が直接確かめてくりやいいじゃねえかツ?!」

「そうしたいのは山々だが、俺は欠けた駒を補充する為に色々と動かなければならないのでな……俺の代わりとなると、後は慎重派のお前ぐらいしか適任はいない」

お前の目なら奴の一挙一動を見逃す事もないだろうと、見透かすように語るデュレンに金髪の男……アスカも嫌悪感を露わに顔を歪め、舌打ちと共に頭を掻きながら廃屋を後にしていく。

「ハハッ、口では何だかんだ言いながらも仕事はちゃんと全うするよねー、アスカって」

「後は命令に忠順であつてくれれば話も早く助かるんだがな……まあいい、俺は新たな

駒集めに戻る。お前は引き続き、S・O・N・Gの動向を見張れ……奴と装者共が合流すると踏めば、即座に潰しても構わん」

「りよーかい……つと、そうだった。一つ伝え忘れた事があつたんだけど、この間の彼に倒されたイレイザーの事で興味深い発見があつたんだよ」

「……発見？」

アスカに続いて廃屋を後にしようとするも、青髪の青年の台詞に怪訝な反応を浮かべて振り返るデュレン。

そして、青髪の青年が語った内容……三日前の戦場で蓮夜が倒したイレイザーの変容を聞き、デュレンは僅かに口端を吊り上げた。

「ほう、窮地に追いやられたイレイザーが進化を……」

「混じりっ気のない僕らの時に比べたら微々たる変化だったけど、それでもこれまでに

比べれば目に見えて分かる変化だ。ノイズを喰らったイレイザーに短期間で力を付けさせて、僕達とは異なる進化の可能性を探る……正直前例のない試みだから失敗で終わるんじゃないかと危惧したけど、此処に来てやっと日の目が見えて来たんじゃない？」

「……そうだな。しかしその話が本当だとすれば、進化の引き金となるのは——」

顎に手を添え、深く考え込むデュレンの脳裏に過ぎるのは嘗て相対した蓮夜の顔。暫し思考した後、廃屋の入り口に顔を向けて目を細めていく。

「もしかすると、少しばかり計画の進行に修正が必要になるかもしれない……」



「——それじゃあ、結局その仮面ライダーさん……蓮夜さんって人と協力を取り付ける事は出来なかったの？」

「……………うん……………」

一方その頃、蓮夜と別れた響達は本部に帰還した後、協力こそ取り付けられなかったが蓮夜から齎された情報を整理する為に一先ず今日は解散という事になった。

その後、四人は本部で皆の帰りを待っていた未来を加えて行き付けのクレープ屋に寄ろうという話になり、その道中で蓮夜との交渉の経緯を未来に説明する中、クリスが掌に拳を打ち付けた。

「クソツッ！アイツ、あたし等の事を足手纏いみたいに扱いやがって……………！今思い出しても腹が立つっ！」

「ま、まあまあ……………でも、私もその人の言ってる事はあながち間違つてるとも思えないかな。対抗策もない状態で皆が戦って、それで怪我をするなんてあつて欲しくないし……………」

「それは……確かに……」

皆を心配して不安げに呟く未来に、調も同調して頷く。

「正直、今イレイザーと戦うのはギアも無しにノイズと戦うみたいなものでもんデスしね……戦える方法も無しに、またあんなのと戦うのはアタシも気が引けるデスよ……」

「そんな事は言われなくても分かってたんだよ！けど……あー、クツソツ……」

イレイザーと交戦してその危険性を身をもって実感したし、蓮夜が自分達をこの件から遠ざけようとする気持ちは分かる。

だが、今まで自分達が必死に守ってきたこの世界がイレイザーの手によって明日にでも乗っ取られるかもしれないと聞かされたのに、戦う手段がないから手を引けと言われて簡単に引き下げられるほど大人にはなれない。

故にクリスも蓮夜への怒りと言うよりも、何も出来ない事に対しての苛立ちを抑えら

れない意味合いの方が大きく、切歌と調も口では納得してるように呟きつつも実際の所は内心割り切れてないのが本心だったりする。

そんなクリス達の様子に未来も複雑げな顔を浮かべる中、隣を歩く響は浮かない様子で肩を落としており、顔を上げて空を仰いでいく。

「私……蓮夜さんと話せればきつと協力出来るって思ってたけど、もしかして考えが甘かったのかなぁ……」

「響……さつきも言ったけど、その蓮夜さんって人も響達の身を案じて事件から手を引くように言っただけで、別に協力が嫌で断った訳じゃないんでしょ？ 実際、直接協力は出来ないけど情報提供はするって聞いたし……」

「それは分かってるんだけど……でも……」

イレイザーに太刀打ちする術がない以上、蓮夜が言うように自分達が事件から手を引くのは妥当な判断だ。



それは弦十郎達も理解してるのか、本部に戻った後のブリーフィングでは一先ず情報の整理の為にあの場では解散となったものの、仮にこのまま対抗策が見つからなかった時は……と、直接口には出さなかったがそんな雰囲気醸し出していた。

無論そうせざるを得ない事は頭では理解しているのだが、それでも自分が望んでいたのとは違う現状に響も未だに納得し切れず気落ちしており、そんな響の様子を見た切歌は不意に拳を掲げて叫び出した。

「まあ、もう終わった事デスし、今日はこれ以上あれこれ考えてもしょーがないデスよ。こーゆーモヤモヤつとした時は、甘い物でも食べて気分を変えるのが一番デースー！」

「……そうだね。気分転換は大事」

「つつても、正直今はそんな気分にもなれねえんだけどな……」

「まーまーっ。とにかくGOデスよGO！ほらほら、お二人も早くー！」

「あ、うん。私達もいこ。ね、響?」

「……うん、そだね」

気落ちする皆を励まそうと敢えて明るげに振るう切歌の気遣いを悟ったのか、真つ先に同調した調に背中を押されながら半ば不本意げなクリスも仕方なさそうに先へと進んでいき、そんな三人を見た未来に促され響も若干ぎこちなくも笑って頷き返し、皆と共に目的地のクレープ屋へ向かう足取りを速めていくが……

「——さっきの店員さんって、新しく入った人かなあ?」

「結構カツコよかったよねー! 私、あの店通っちゃおうかなあ〜」

「……?何か、今日はやけに人多くないか?」

「デスね……というか、この辺じゃあまり見掛けない他校の生徒までいるデスよ?」

クレープ屋に向かう道中、何やら何時もに比べて響達と同じりディアンの生徒やこちら辺ではあまり見ない制服の他校の女子生徒と行き交い、クリス達は頭上に疑問符を浮かべる。

そして漸くクレープ屋の前に辿り着くと、其処にはやはり黄色い悲鳴と共にクレープを持って店から出てくる女子生徒達の姿があり、その姿を見送りながら小首を傾げつつ、五人が取り敢えずクレープ屋に入っていくと、其処には――

「――いらっしやいませ。ご注文は何に致しますか」

「「「……………」」」

――其処には響達も見覚えのある顔……というか、先程別れたばかりの筈の蓮夜が何

故か店のショーケースの向こうに、クレープ屋の店員の格好で真顔のまま佇む姿があったのだった。

「……って、れ、蓮夜さあんツ?!」

「?……ああ、誰かと思えばお前達だったか。奇遇だな、まさかこんな所で会えるとは……」

「き、奇遇だなんて、お前つ、こんな所で何してんだよっ?!」

「何、と言われても……見ての通り、此処でバイトをさせてもらってるんだが……」

「バイト……?」

両腕を軽く広げ、自身の格好を指しながら包み隠さずに答える蓮夜に響達は啞然とした表情を浮かべている一方で、未来は響達と蓮夜の顔を交互に見比べながら若干状況に付いていけず困惑しており、そんな未来の存在に気付いた蓮夜は訝しげに首を傾げた。

「初めて見る顔もいるな……お前達の友人か……？」

「え……あ、は、はいつ。小日向未来つて言います。えつと……もしかして、貴方が黒月蓮夜さん、ですか？」

「？俺の事を知ってるのか……？」

「あ、はい。実は私、民間協力者つて言う体で響達に協力してるんです。それで、蓮夜さんの事も一通り皆から話を聞いてて……」

「成る程……民間の協力者なのか……確かに学業をこなしながらノイズと戦うなんて並大抵の苦労ではないだろうから……良い友人を持つてるじゃないか……」

「え、えーつと……そ、それほどでも……」

「言ってる場合かッ！つてかさそんな事より聞きたいのは、何でお前がこんなところでバイ

トなんかしてゐるって話だッ！イレイザーを作つてゐる黒幕を追つてたんじゃねーのかよッ?!」

そう、今知りたいたのはそれだ。先程の交渉の際にイレイザーの件は任せて自分達には手を引けと言つておきながら、何故こんな所でクレープ屋の店員なぞやっているのか。

勢いよく問い質すクリスからの質問に対し、蓮夜は真顔のまま小さく頷き返す。

「勿論、イレイザーや黒幕の搜索は今も続けてる……たださっきも言つたように、俺はこの世界の人間じゃないから身寄りもなく、金銭も大して持ち合わせがなかったからな……最初の頃はその事にも気付かずひたすらに奴らと戦い続けていたんだが、所持金が底を尽き、飲まず食わずで過ごすのも流石に限度が来て、遂に行き倒れてしまったんだ……其処へたまたま通りがかつた此処の店の店主に救われて、事情を説明したら此処で働かせてもらえるようになった、という事情があつてこうなつた……」

「い、行き倒れたデスか……」

「何ていうか……影のヒーローも世知辛いんだね……」

思いのほか現実的且つ納得のいく理由に切歌と調も何とも言えない表情になり、クリスは呆れて最早物も言えないと頭を抑えて溜め息を吐いてしまう中、店の奥から店員の格好をした一人の女性が顔を出した。

「あれ、どうかした蓮夜君？何かトラブル？」

「ああ、店長……いや、たまたま顔見知りが来たから少し話し込んでるだけで、大した事は何も……」

「顔見知り？あ、もしかして、蓮夜君が記憶を失う前の知り合いとか……！」

「いや、そういう訳ではないんだ……此処に来る前に知り合ったというだけで、特別何か親しいという訳じゃ……」

「そうなの？そっかあ、てつきり蓮夜君を知ってる人が漸く現れたのかと思ったけど

……あ、すみませんね？いきなり出てきて話に割り込んでやって」

「あ、い、いえ！全然気にしてないですから！」

「そう？なら良かった……あ、因みに彼、人付き合いとか結構不器用なところがあるけど、根はホントにいい子だから、どうか仲良くしてあげて下さいね？」

そう言って響達に微笑み掛け、店長はその場を蓮夜に任せ再び作業の為に店の奥に戻っていき、その背中を見送りながら蓮夜はたどたどしい口調で語る。

「今の人がこの店の店長でな……素性も分からない俺の話を信じて雇ってくれただけでなく、行く宛がないなら暫く自分の家に住み込んでもいいと言ってくれたんだが、流石に其処まで世話になる訳にはいかなないと断った……いざという時、俺の問題に巻き込まれないとも限らないからな……」

「……蓮夜さん……」



苦笑いを浮かべる蓮夜のその言葉に、響は眉間に皺を寄せ複雑な表情を浮かべてしま  
うが、蓮夜はそれに気付かず真顔に戻って響達の方に向き直った。

「まあ、俺の話は置いておくとして……それより注文はどうする？今ならオススメはイ  
チゴ系、ガトーショコラ系も人気だと店長も言っていたから、その辺のメニューの味は  
保証するぞ……」

「注文って……もしかして、蓮夜さんがクレープを焼くんですか？」

「大丈夫なのかよ……下手に注文してゲテモンが出てきたりとかしないだろうなっ……  
？」

意外そうな顔になる未来だが、そんな彼女の隣で蓮夜に向ける疑心の眼差しを隠そう  
ともしないクリスに、蓮夜は何処か自信ありありにこくりと頷く。

「任せて欲しい。店長に教えを乞いて基礎から徹底的に叩き込んでもらい、お墨付きも  
貰ってる……商売をやる以上、顧客の期待を裏切るような物は出せないから……必ず

満足させてみせると約束する……」

「ムム、この多くのクレープを食べ尽くしてきたアタシを前に其処まで言い切るとは、これはクレープ覇者のアタシへの挑戦と受け取ったデスよ！」

「いや一人で勝手に盛り上がってんじゃねえよ、なんだクレープ覇者って」

ビシイツ！と、蓮夜を指差しながら良く分からないテンションでノリノリになる切歌に冷静なツツコミを入れるクリス。

そんな二人を横目に調は溜め息を吐きながら無言で財布を取り出し、響と未来と共に自分達の分のクレープを先を選び始めていくのであった。



それから数十分後。結論から言えばあの後、蓮夜が作ったクレープは自称舌が肥える切歌や響達にご満悦だった。

寧ろ、甘さのバランスが良く考えられたクレープの出来に彼女達から賞賛を貰い、切歌やクリスも「悔しいっ……！でもおかわり！」と満足させる事ができ、彼女達が去って閉店時間が過ぎた店の片付けを行う蓮夜も、表情こそ真顔のままだったが内心ではホツと胸を撫で下ろしていた。

(……店長直々に仕込まれて自信があつたとは言え、実際に食べてもらうとなるとあんなにも緊張を覚えるものなんだな……記憶を失ってから初めて理解した……)

無論それだけじゃない。自分が苦勞して作った物を美味いと言って褒めてもらえるのは、あんなにも心満ちる感情を覚える物なんだなと実感して小さく微笑み、その余韻を胸に蓮夜がダンボールを抱えて店の片付けを進めていくと、その時……

「——あの、蓮夜さん！」

「……………」

店の後片付けを行っていた中、後ろから不意に声を掛けられてダンボールを抱えたまま振り返る。其処には、夕日の日射しが差し込む店の入り口の前に立つ一人の少女……クリス達と共に帰った筈の響の姿があった。

「お前は……確か仲間達と一緒に帰った筈じゃ……」

「未来達には先に帰ってもらいました……私やつぱり、蓮夜さんともっとちゃんと話をしたくて……」

「……………」

そう語る響の目を見て彼女が言わんとしてる事を察したのか、蓮夜は口を閉ざし、響に背を向けながら抱えたダンボールを片付けて作業を続けていく。

「もうすぐ日も暮れる……ノイズと戦ってるお前には要らぬ心配かもしれないが、女子

高生が一人で夜道を歩くのはあまり宜しくない……暗くなる前に帰った方が——」

「お願いします！イレイザーに対抗する為に、私達と一緒に戦ってもらえませんか！」

「……………」

帰宅を促して遠回しに話を切り上げようとするも、向こうもそれを悟ったのかこれ以上ないほど一直線に再度協力を申し出られてしまった。

先手を打とうとするもそれも封じられ、蓮夜は臉を伏せて溜め息を漏らすと、響の方に振り返って困ったように目尻を下げる。

「その話は昼間にもした筈だろう……？イレイザーに対抗する手段を持ち合わせていないお前達を奴らと戦わせる訳にはいかない……危険が伴う以上、無謀な真似をさせる事は出来ない……………」

「それは、分かっていますけど……………」

「分かっているなら、納得は無理でも理解はしてくれ……これがお前達や、この世界を守る為にも一番の最善の方法なんだ……」

だからどうか諦めて欲しいと改めて響の頼みを断わり、蓮夜は今度こそ話を切り上げて片付け作業に戻ろうとするが、響はギョツとバッグの持ち手を握る手に力を込めた。

「——確かに、その方法なら私達は危険な目に遭わないし、安全も保証されるかもしれない……でも……けどそれじゃ、蓮夜さんが独りっきりのままじゃないですか……」

「……？俺……？」

響の思わぬ発言に怪訝な反応と共に振り返る蓮夜に対し、響はそんな蓮夜の目をまっすぐ見つめ返しながら告げる。

「さつき皆で話してた時もそうだったけど、蓮夜さんの顔、何ていうか……寂しそうっていうか、悲しそうに見える事が時々あるんです……私も昔、色々あったせいかなそういう

のが分かるっていうか、感じ取れちゃうっていうか……だからずっと気になって、放っておけなくて……」

「……………」

何か辛い過去を思い返してるのか、暗い影を落としてそう告げる響の顔をジッと見つめると、蓮夜も自分の顔を手で触れて物憂い表情を浮かべた

「寂しそう……悲しそう、か……確かに、あながち間違ってるとは言い切れないかもしれない……」

「えっ？」

自嘲気味に笑う蓮夜の言葉に響が思わず聞き返すと、蓮夜はダンボール運びを再開しながら話を続けていく。

「自分でも理由は良く分からなかったんだが……何というか、記憶を失ってからずっと、

胸に穴が空いたような感覚が拭えなかったんだ……何か大事な物が自分から抜け落ちたようで、落ち着かなくて……時々理由もなく泣き出したくなるような時もあった、自分でも困惑を覚える事も多々あったが……多分、あれは悲しかったんだ……記憶を無くした事もそうだが……恐らく、大事な人達の事を思い出せないのが……」

「大事な人達……家族とか、友達とか、ですか？」

「……其処までは分からないが、多分そうなのかもしれない……その人達の事を思い出そうとしても、出来なくて……こんなにも悲しく、切なくなる……だからきつと、記憶を無くす前の俺は余程大事で、大好きだったんだと思う……その人達の事が……」

顔も名前も思い出せない誰かの事を此処まで想えるのも、きつと過去の自分がそれだけその人達の事を大事に想っていたのだろうと、何処か羨むように微笑んで俯く蓮夜。その横顔を見て、響は僅かに逡巡する素振りを見せた後、何かを思い付いたようにハツとなった。

「そうだ……もしかしたらソレ、エルフナインちゃん……えつと、私達の仲間に相談すれ



「ば何とかなるかもしれないです！難しい事は良く分かんないですけど、そういうのに詳しくて私達も何度も助けられた事があるし、蓮夜さんが無くした記憶も取り戻せるかも！」

「そうなればイレイザーへの対策も何か思い出せるようになり、自分達も一緒に戦えるようになるかもしれない。」

「我ながら名案を思い付いたと喜びを露わにする響だが、それを聞いた蓮夜は少し考える仕草を見せるものの、直後に目を伏せて首を横に振ってしまふ。」

「え、ど、どうしてっ?！」

「……もう少し前なら、その提案に乗ってたとは思……だが、今は俺もイレイザー側に生きてると知られてしまってる。となれば、奴らも俺とお前達が合流する事を良しとせず今も警戒してるかもしれないし、お前達の拠点も見張られている可能性がある……其処で俺が出入りしている事が知られれば、奴らがどんな手を使ってくるか想像に難くない……」

「で、でも、そうなった時こそ一緒に戦えば！蓮夜さんがいれば、イレイザーを倒す事も出来る訳ですし！」

だからきつと大丈夫だと、前向きな笑顔と共に語る響。しかし蓮夜はそんな響の笑顔を見て一瞬複雑げに表情を歪めながら俯いた後、改めて響の目を見つめながら口を開いた。

「立花響、だったか……お前には、家族や友人……その身を削ってでも、守りたいと思える大切な存在はいるか……？」

「……う？えつと、はい、それは勿論！お母さんやおばあちゃん、お父さんとか……未来やクリスちゃん、切歌ちゃんに調ちゃん、今は海外にいる翼さんとマリアさん、師匠やエルフナインちゃん、S. O. N. G. の皆さんも……みんな私の大切な家族で、友達で、仲間です！」

「……そうか……ならもし、その大切な人達の命が失われてしまった時……その時、お前

ならどうする……?」

「…………え…………」

彼女達の命が失われたら……。そんな考えたくもない問いを突き付けられた瞬間に響は声を詰まらせて思わず黙ってしまおう中、そんな響の反応を予想していたように蓮夜も物憂い表情で話を続けていく。

「大まかな事件の流れこそ知れ、お前達が今までどんな敵と戦ってきたかまでは俺には分からないが……。少なくとも、お前が戦おうとしているイレイザー達はそのどの敵よりも厄介で、残忍である事だけは言い切れる……。今はまだ脅威対象外として見ているかもしれないが、奴らが一度お前達を障害と判断すれば、どんな手を使ってでも潰そうとする筈だ……。お前の家族や、さつき一緒にいたお前の友人の命を改竄の力で奪う事になっても、奴らは一切躊躇しない……。その筆（ゆび）を軽く振るうだけで、奴らは簡単に人の命を奪う事が出来てしまうからな……」

「お母さん達や……。未来達をつ……。?」

本にたつたの一文を書き記すようなそんな簡単な感覚で、自分の大切な家族や親友達  
の命が奪われるかもしれない。

考えもしなかったその可能性を仄めかされ、響は一言も声を発せず口を閉ざす中、蓮  
夜も意地の悪い問いを投げ掛けた事に対して申し訳なさそうに瞼を伏せるも、それでも  
響に事の重大さをしっかりと伝える為に語り続ける。

「俺が頑なお前達との協力関係を拒むのは、その危険性を孕んでいると思ったからだ  
……奴らがそんな手段を取るようになれば、改竄を防ぐ術を持たない俺にもどうする事  
も出来ない……失われるかもしれない命に責任を負う事も出来ない以上、安易に頷く事  
にはいかない……大切な何かを失う事の辛さは、俺も少なからずは分かるから……」

「……蓮夜さん……」

イレイザーの冷酷さや残忍さを、何より大切な物を失う事への悲しみを理解している  
が為に、響達の大切な人達にも危害が及ぶ事を考慮して協力関係の提案を簡単に受け入

れる訳にはいかない。

何処か沈痛の面持ちで視線を逸らしながらそう告げる蓮夜の顔を見てその心情を察し、響もそれ以上は何も言えなくなってしまう中、不意に響の携帯に着信が入る。

蓮夜に一言断りを入れてから携帯に出ると、弦十郎の緊張に張り詰めた声が届いた。

『響君、緊急出勤だ！ノイズがまた市街区に現れた！』

「ノイズ……！」

弦十郎からの連絡を聞き、響の顔が強ばる。アルカ・ノイズでない通常のノイズという事は、恐らくまたイレイザーによる差し金か。

S・O・N・G から送られるヘリが降下する合流地点を聞かされながらそう考え、携帯を切り響が蓮夜の方に振り返ると、其処には既に蓮夜の姿はなく彼が着ていたエプロンだけがいつの間にかショーケースの上に脱ぎ捨てられていた。

「蓮夜さん……っ……っ……！」

恐らくイレイザーの気配を察知して先に現場に向かったのか、誰もいない店内を見回した響も急いで店を飛び出し、弦十郎が指定したヘリの合流ポイントへと駆け出していくのであった。

## 第二章／邂逅×存在を赦されない存在③

「ツオラアアアアアアッ!!」

「はあああああッ!!」

「デーースッ!!」

市街区の中心部。再び出現したノイズ達の猛威により街は戦火に包まれ、燃え盛る炎から立ち上る黒煙が茜色の空を黒く染め上げていた。

だが、今回は前回と違い現場にいち早く駆け付けたクリス、切歌、調の奮闘によって被害は最小限に留められており、クリスが乱射するガトリングガンが火を噴いて次々とノイズを蜂の巣にし、切歌と調の阿吽の呼吸のコンビネーションによってノイズは確実にその数を減らしつつあった。

「コイツで四十！前ん時に比べて随分と数は少ねえが……！」

「きつとすぐ近くに、ノイズを呼び出したイレイザーがいるハズ……」

「今度は何企んでるか知らないデスけど、これ以上アタシ達の世界で好き勝手はさせないデスよ！」

蓮夜にはイレイザーとの戦闘を避けるように言われているが、ノイズが出てきて人々を襲うのなら自分達が戦わない訳にはいかない。

例え直接戦って勝てないにしても、せめてイレイザーの目的だけでも阻止する為、三人はそれぞれの得物を振るって戦場を舞うように駆け抜け、ノイズ達を次々と蹴散らしていく。

そして、次第に数も残り少なくなったノイズ達を纏めて撃破し、周囲の安全を確認したクリス達が一息吐いて一箇所に集まろうとした、その時……



「——やはり、ノイズ程度では長くは持ちませんでしたか……」

「?!」

「誰だ?!」

何処からともなく不意に聞こえてきた謎の声に、クリス達は驚きと共に瞬時に互いに背中を合わせてアームドギアを構え、警戒を露わにする。

すると其処へ、半壊した建物の物陰から一人の人物……外見的に二十代前半程の歳若い黒髪の青年が現れ、クリス達の前に歩み出ていった。

「人? どうしてこんな所に……」

「もしかして逃げ遅れたデスか? だったら今の内に早く——」

「待て！」

「…………え？」

逃げ遅れた民間人かと思ひ、青年に近付こうとした切歌と調を呼び止め、クリスは両手に構えたマシンピストルの銃口を青年に突き付けた。

「ク、クリス先輩っ？」

「お前、普通の人間じゃねえだろ……一体何モンだ？」

「ほう？この姿のまま私の正体に勘付くとは、随分と鼻が良いようだ……それとも、そういう匂いが嗅ぎ分けられる生き方でもしてきたのでしょうかね、貴女は？」

「んだとツ！」

クスツ、と顎に手を添える青年の嘲笑にクリスも険しい顔付きになる。そんな二人の

やり取りに切歌と調が戸惑う中、青年の姿が突如歪み出し、徐々にその身が変貌して赤い瞳のコウモリのような姿をした紫と灰色が入り交じった体色の異形……バットレイザーへと変化していった。

「?!す、姿が変わったデスよ?!」

『生体反応のパターンが変化!これは……先日現れたノイズイーターと同じ反応です!』

『という事は奴もレイザー……人間に擬態出来るタイプか!』

レイザーが元々人間である事は蓮夜から聞かされていたが、こうして直接人間から姿を変える瞬間を目にして驚きを露わにするクリス達とS・O・N・Gの面々の反応を他所に、バットレイザーは徐に歩み出していく。

『困るんですよ。折角の雑兵を狩り尽くされては私の目的にも支障を来たす……私の狙いに貴女がた装者は含まれてはいないのだから、大人しくしていて欲しいものです』

「貴方の、狙い？」

「目的って何デスカ！また何か良からぬ事を企んで……」

『ハツハハハツ、私が律儀に答えるとお思いで？何とも可愛らしい事ですが……生憎、貴女達に費やす時間は私にはないので……』

スット、バットイレイザーの雰囲気が一瞬に冷たく変わる。その変化を肌で感じ取ったクリス達が咄嗟にそれぞれのアームドギアを構えていくと、バットイレイザーは両腕の羽根を広げるように身構えながら態勢を低くし、

『私の邪魔をするのであれば何者であれ容赦はしない……奴が来る前に、貴女達を先に片付けるとしましうかッ！』

ダアンツ！と、勢いよく地を蹴り上げて飛び出したバットイレイザーの身体が豪速球の如く勢いでクリス達に迫る。

それを目にした三人も慌てて散開してバットイレイザーの突撃を回避し、クリスが振り向き様に両手のマシンピストルを乱射してバットイレイザーを背後から狙い撃つが、バットイレイザーは両腕の羽根を広げながら上空へと空高く飛翔し、そのままクリスの弾を振り払いながら再度空からの突撃を仕掛けてクリス達に襲い掛かっていく。

「くうっ！そ、空が飛べるなんて反則デスよッ！」

『お前たち、此処は一旦引くんだっ！イレイザーへの対抗策も無しに奴と戦うのは危険過ぎるっ！』

「それは分かっているけど……！」

「このまま奴をほっとけば街にも被害が出ちまうかもしれないだろっ！気に喰わねえが、せめてアイツが駆け付けるまでは……！」

奴の目的が何であれ、ノイズを利用して此処まで街を破壊したバットイレイザーを放

置いて撤退などすれば、またノイズを呼び出されて街への破壊活動が始まるかもしれない。  
い。

奴が再び街を襲う可能性もある以上、此処で自分達が退く訳にはいかないと通信越しに撤退指示を出す弦十郎の命令を振り払い、せめて蓮夜が駆け付けるまでの時間稼ぎの為、猛スピードで滑空しながら何度も向かって来るバットイレイザーの突撃を切歌と調と共に必死に回避しながら、クリスは左右の腰部アーマーを展開していく。

「ちよこまかちよこまか飛び回りやがってっ……！コイツでも食らってろオツ!!」

— M E G A   D E T H   P A R T Y —

装甲に内蔵された射出器から一斉に追尾型の小形ミサイルを放出し、バットイレイザーに目掛けて放つクリス。

無論イレイザーに通用する事はないだろうが、少なくともミサイルが直撃して発生する爆煙で奴の視界を一瞬でも奪う事は出来る。

その隙にバラけて三方から攻める戦法を仕掛けようとすると三人だが、迫り来る小型ミサイル群を目にしたバットトレイザーは僅かにほくそ笑んだ瞬間、突如滑空したまま勢いよくドリルのように回転し、その羽根から無数の真空波を放つて小型ミサイル群を斬り裂き爆散させ、更に爆煙の中から立て続けに真空波が飛び出し三人に襲い掛かった。

「何っ?! うっ、ウグアアアアアッ!!」

「うわああああアッ?!」

「あううッ!!」

爆煙の中から飛び出してきた真空波を見て思わず動きを止めてしまうクリス達に、立て続けに真空波がモロに直撃して三人を纏めて吹っ飛ばしてしまい、地面にユラリと着地したバットトレイザーは倒れるクリス達の姿を見回し不気味に嗤っていく。

『無駄な事を……貴女達と私では根本的なルールの違いがある。貴女達に私を傷付ける術などないのですよ、始めからねえ』

「くっ……くそッ……この、化け物が……ッ！」

クツクツと肩を揺らして嗤うバットイレイザーに、地面に倒れ伏したまま毒づき何とか立ち上がろうとするクリスだが、バットイレイザーはそんなクリスに一瞬で肉薄すると共に彼女を容赦なく蹴り飛ばし、建物の壁に叩き付けてしまう。

「がはあっ!!」

「ク、クリス先輩……!!」

『さて、先ずはその鬱陶しい飛び道具使いの貴女から潰させてもらいましょうか……』

「や、止めろデスよッ!!」

醜い異形の手から伸びる鋭利な爪をチラつかせてクリスに迫るバットイレイザーを見て慌てて起き上がり、阻もうとする切歌と調だが、それを見越していたかのように二



人の足元から突如ノイズ達が現れ、切歌と調の身体に巻き付き動きを封じてしまう。

「ノイズ……?!」

「ま、まだこんなに残ってたデスカ?!う、ううっ!」

「お、お前らっ……!」

『なに、命までは取りませんよ。私が直接貴女達を手に掛けては、物語側に私の存在がバレてしまいますからね……まあ最も、それも命さえ取らなければ他は何をしても構わないという事なのですが』

ニヤアツと下劣な嗤みを浮かべると共に、バットイレイザーは壁に背もたれて座り込むクリスに悠然とした足取りで歩み寄っていく。

『先ずは抵抗出来ないようにその手足から引き裂くとしましょうか? 嗚呼、この一方的に蹂躪する感覚……やはりたまりませんねえ! 否が応にも高揚せざるを得ないですか』

らアツ!!」

「クリス先輩ツ!!」

「くっ!」

恍惚の笑みを浮かべながら勢いよく飛び出し、バットイレイザーは両手の爪を振りかざしてクリスへと襲い掛かる。

迫り来る異形を見てクリスも咄嗟に両手に握るマシンピストルを突き付けて近づけまいと抵抗するが、バットイレイザーは赤い弾丸をその身一つで弾きながら構わずクリスに突っ込んで爪を振るい、振り下ろされる凶爪を前にクリスは両腕を交差させて思わず目を背けるが、

……何故か、彼女の身に痛みが降り掛かる事はなかった。

(……………?なん、だ……………?)

何時まで経っても予想してた痛みに襲われず、顔を背けたクリスは恐る恐る目を開けて目の前に視線を戻していく。すると其処には、ギラリツと妖しげに光る爪先がクリスの目と鼻の先で寸止められており、そして……

『——お前、はっ……!!』

「……………」

——バットイレイザーの手首を掴み、クリスを切り裂こうと振り下ろされた爪を止めるフードを被った青年……蓮夜がいつの間にか傍に佇む姿があり、突如現れた蓮夜を見て目を見開くバットイレイザーに蹴りを打ち込み後退りさせていった。

「これ、蓮夜さん!」

「お前……………」

『グツ……………き、貴様……………!』

「……………相手を一方的に蹂躪するのがそんな好みか……………なら、好きだけ味あわせてやる……………」

蹴られた箇所を抑えて睨み付けてくるバットイレイザーを見据え、淡々とそう告げると共に蓮夜はあらかじめ手にしていたカードを腰に巻いたベルト上部のスロットにセットし、掌でスロットをバツクルに押し戻した。

「変身……………」

『Code x:clear!』

バツクルからの電子音声と共に、蒼い無数の粒子がベルトから舞って蓮夜の身体を覆いながら黒のアンダースーツを形成し、更に蓮夜の周囲に出現した蒼のアーマーが一斉

に身体に纏われていく。

全ての行程を完了し、その姿を蒼い戦士……『仮面ライダークロス』に変身した蓮夜を目の当たりにしたバットレイザーは驚きから目を見開くも、次第にその顔に不敵な笑みを浮かべていく。

『漸く姿を現しましたか、クロス……随分と待ち侘びましたよ、この時を……！』

『……待ち侘びた？まさか、また俺を誘き寄せる為だけにこんな騒ぎを起こしたのか……？』

『ええ、それが私に与えられた役目でしてねえ……。貴方が私達の気配を感じ取れる事も聞かされていますよ。なのでこうして時間潰しに街を破壊しながら、貴方が来るのを待っていたという訳です。目印が派手な分、此処まで道に迷う事もなかったでしょう？フフフツ』

悪びれもせず、バットレイザーは破壊された街並みを指すように片手を広げながら

愉快げに微笑む。

クロスはそんなバットレイザーの話を聞きながら仮面の下で眉間に皺を寄せていくと、周囲を見渡して傷付いたクリス達、ノイズに襲われて炭素の塊となった人々、怪我を負って苦しげに地面に横たわる負傷者達の姿を視界に捉え、無意識に右手の拳を強く握り締めながら鋭い眼差しでバットレイザーを睨み付けた。

『……………どうやらお前に温情を掛ける必要はなさそうだ……………自身の快樂の為に、無関係な人間を巻き込んだ落とし前は付けてもらおうぞ……………』

『ハハッ、如何にもヒーローが言いそうな癪に障る台詞ですねぇ……………では、その言葉を有言実行出来るか見せてもらいましようかアッ!!』

そう言つて耳障りな嘲笑と共に、両腕の羽根を大きく広げてバットレイザーがクロスに飛び掛かる。

それを見たクロスも体当たりが当たる寸前に頭から倒れる勢いで後ろへ飛び退くと

同時に、真上を過ぎ去ろうとしたバットイレイザーにサマーソルトキックを叩き込んで打ち落とし、そのまま両手を地面に付きバク転の要領で態勢を立て直しながらすぐさま地上に落とされたバットイレイザーに突っ込み右拳を飛ばすが、バットイレイザーも素早く身を起こしてクロスの拳を両手で受け止めてしまう。

『お前達の裏にいる連中の居場所も、此処で全て吐いてもらおう……！』

『出来るものならやってみるといい！最も私も口が堅いのでねえ、そう簡単にはいきませんよお！』

受け止めたクロスの拳を払い除け、バットイレイザーは身を翻しながら両手の爪を振るいクロスに襲い掛かるが、クロスもバットイレイザーの爪、足払いを避けながら反撃の肘打ちを相手の胸に叩き込んで後退させると、怯んだ隙を逃さず畳み掛けて攻勢に出ていくのであった。

「……蓮夜さん……やっぱ強い……」

「クツソツ……結局アイツに頼るしかねえつてのかつ……」

クロスがバットイレイザーの相手を引き受けている隙に、身体に纏わり付くノイズ達を駆除した切歌と調は一進一退の攻防を繰り返すクロス達の戦いを関心の目で見守り、クリスも脇腹を抑えながら身を起こしバットイレイザーと戦うクロスを悔しさを滲ませた表情で見つめる中、其処へ……

「——みんなあー!!」

「「……………」」

不意に聞き慣れた声が三人の耳に届き、声がした方へと振り返ると、其処にはギアを身に纏った響がクリス達の下へ駆け寄って来る姿があった。

「響さん！」

「おせえーぞ！何やってたんだ今まで！」



「ご、ごめんっ。ヘリが途中でノイズに落とされちゃったから、パイロットさん達を安全な場所まで運んでたら遅れちゃって……それで、皆は大丈夫？状況は？」

「ノイズの方はアタシ達で何とかなつたデスよ。でもノイズを呼び出したイレイザーと戦う事になって、その後……」

そう言いながら切歌が視線を向けた先にはバットイレイザーと交戦するクロスの姿があり、クロスを瞳に捉えた響は複雑げに眉間に皺を寄せた。

（蓮夜さん……やっぱ一人でイレイザーと戦うつもりで……）

『ハアツ……！ハツ！』

『ガフウツ！お、のれえええツ！』

そんな響の心境も露知らず、クロスはキレの鋭い身のこなしから放つ打撃の手数で

徐々にバットイレイザーを押しこめ、トドメに放った横蹴りでバットイレイザーを勢いよく蹴り飛ばす。

だが、地面を滑るように倒れながらも身を起こしたバットイレイザーは忌々しげに唸りながら正面切つての肉弾戦は分が悪いと踏んだか、両腕の羽根を払って再度飛翔すると低空滑空で何度もクロスに体当たりしていき、それに対しクロスも飛び退いて突撃を避けながら左腰のケースからカードを一枚取り出した。

『素早いな……だったらこっちもコレだ……！』

『Code slash::clear!』

バックルにカードを装填して再度電子音を鳴らし、直後にクロスの蒼い装甲がパージして朱い装甲に変化し、再度クロスに纏われて仮面と複眼の色が変わり、両手に黄金色の双剣が握られる。

それは先のノイズイーターとの戦いでもクロスが変身した双剣使いの姿……機動力

と感覚に特化した形態である『仮面ライダークロス・タイプスラッシュ』にタイプチェンジし、両手に握る黄金色の双剣、スパークスラッシュを手の中で回転させながら構えた。

「あれは、この間の……」

『ハッ、色が変わった程度で何がっ!』

タイプスラッシュに変化したクロスを見て調が反応する中、バットイレイザーは姿を変えたクロスを鼻で笑いながら方向転換して構わずクロスに再度突撃を仕掛ける。

だが、クロスは正面から迫るバットイレイザーを見据えたまま徐に腰を落とすと、思いつき地面を蹴り上げた瞬間に残像のように消え、バットイレイザーの頭上に双剣を振りかざしながら一瞬で姿を現した。

『ツ?!何っ?!』

『ハアアツ!!』

『ガツ、アアアアアアアアツ?!』

移動する軌跡すら見えず一瞬で肉薄したクロスを見て吃驚するバットイレイザーの両肩を、まるで雷鳴のように振り下ろされたクロスのスパークスラッシュの刃が斬り裂いて激痛を走らせる。

それによりバランスを崩したバットイレイザーはそのまま地上に墜落して何度も地面を転がっていき、それとは対照に悠然と地に着地したクロスは徐に身を起こして倒れ伏すバットイレイザーを見据えていく。

『グツ、グウウツ……!これがクロスのつ、貴方の力ですか?……』

『……此処までだ。これ以上続けた所でお前に勝機はない……お前が知っている全てを吐いてもらうぞ……』

斬り裂かれた肩を片手で抑え、僅かに上体を起こすバットレイザーから黒幕の情報を聞き出す為に歩み寄ろうとするクロス。しかし……

『……フ、フフツ……ククククククツ……』

……バットレイザーの肩が震え、劣勢に陥っているにも関わらず何故か不気味な笑い声を漏らしていた。

『……何がそんなに可笑しい？』

『フフフツ……いえ、ただ話に聞いていた通りだと思い、つい笑みがこぼれてしまいましたねえ。今の貴方は嘗ての貴方とは違う……記憶だけでなく、力の大部分も失ってしまっているというのは本当のようだ』

「！アイツ、まさか……」

「も、もしかして、蓮夜さんが記憶喪失だってバレちゃってるデスか!？」

クロスが記憶を失っている事を突き付けるバットイレイザーの言葉に響達もどよめき思わず互いに顔を見合わせてしまうが、当のクロスは特に反応を返す事もなく淡々と切り捨てる。

『お前との無駄話に付き合う気はない……そんな事よりも答えろ。お前達を裏で操っている連中は何処だ、一体何が目的でこの物語を狙う？』

『フッフッフツ、もう勝ったつもりでいる気ですか？何をそんなに急いているのか知りませんが……勝負はまだ此処からですよおおツ!!』

バシユウウツ！と、愉悦に満ちた雄叫びと共にバットイレイザーが掲げた右手からエネルギー弾が放たれる。

しかしそれはクロスや響達を狙ったものでなく、戦場から僅かに離れた場所の物陰で蠢く影……ノイズ達の目を盗んで逃げ延びようとしていた一般人達を狙ったものだった。

「あ、危ないッ!!」

「?!う、うわあああああああッ!!」

『ッ!』

それを見て響達も慌てて飛び出すが、あまりに距離が開き過ぎて彼女達の足では間に合わないと思つたクロスはすぐさまその身を朱い閃光と化しながら素早く一般人達の前に先回りし、片手のスパークスラッシュでエネルギー弾を弾いて彼らを守ると、悲鳴と共に逃げていく一般人達の安否を確かめてバットイレイザーを鋭く睨み付けた。

『貴様っ……!!』

『ハハッ、此処に来て僅かでも可笑しいとは思いませんでしたか？前回の時と違い、今回はやけにノイズ達の数が少なく勢いも弱いと。それも当然……こうなる事を予期して、ちゃんと保険を用意しておいたんですよオオッ!!』

高らかに叫び、天を仰いだバットイレイザーの口から光弾が打ち上げられ、空を翔ける。

直後、光弾は遙か空で分裂して無数の散弾と化し、怪我で動けない人々や逃げ遅れた一般人を意図的に狙って街へと降り注いでいったのだった。

「あ、あの野郎ッ！」

「ッ！皆ッ！」

『チッ！』

無数の光弾の狙いに気付いた響達は咄嗟に散開して近くの怪我人や物陰に身を隠していた人々を抱え、光弾が着弾して巻き起こる爆発を背に急いでその場から離れていき、クロスもタイプスラッシュの機動力を全力で駆使して光弾の大半を次々と叩き切り人々を救っていくも、一人ではカバーし切れない程の数の光弾を前に次第にクロスの顔



も険しくなっていく。

『ハハハハハハハツ!! どうしましたかあツ?! 動きが目に見えて鈍くなって来てますよおツ!! ホラホラホラアツ!!』

『っ、クツ……!』

そんなクロスの奮闘を滑稽だと嘲笑い、休まる暇も与えまいと立て続けに一般人や怪我を負って動けない人々を狙った悪質な攻撃を嬉々として行うバットイレイザー。

その悪辣さにクロスも仮面の下で顔を歪めながらも必死に駆け回って光弾を切り払っていくが、バットイレイザーが指摘した通り徐々に募る疲弊から光弾を追う身体が追いつかなくなりつつあり、このままではギリ貧になると感じ取ったクロスは次の光弾を切り払うと共に一息でバットイレイザーへと迫り、スパークスラッシュでバットイレイザーをすれ違い様に斬り裂いた。が……

『ガアアアアアッ……なーんてねえ』

『ツ！何……?!』

全力で振るったクロスの双剣に斬り裂かれて苦痛の悲鳴を上げていたバットイレイザーの身体が、無数のコウモリに変化し一斉に羽ばたいていつてしまう。

それを見てクロスが動揺を浮かべる中、無数のコウモリは上空で一つになるように集まると、バットイレイザーの姿を形作ってほくそ笑んだ。

『私の力があの程度だと思いましたが？ざあんねん、貴方の力を測る為だけに本気を出す訳がないでしょう？今まで貴方が倒してきた連中とは違うのですよ、私はねえツ!!』

そう言って優位に立っているつもりでいたクロスを滑稽だと言わんばかりに嘲笑すると共に、バットイレイザーの手から再びエネルギー弾が放たれた。

その標的となるのは、今正に近くの会社の入り口から逃げようとしていた一般の社員達であり、それを目にしたクロスはすぐに素早く飛び出して光弾の前に回り込むと同時

に両手の双剣でエネルギー弾を弾き返そうとするが、先程とは比べ物にならないエネルギー量に弾く事も叶わず、爆発した光弾の威力に吹っ飛ばされてガラス張りの窓に叩き付けられてしまった。

『ガツ、ハツ……!』

「ひ、ひいいいいっ?!」

「は、早く逃げろっ! 急げえっ!」

無数のガラス片と共に力無く地面に倒れるクロスに怯え、急いでその場から逃げ出していく社員達。

そしてバットトレイザーは倒れるクロスの前に着地すると、自分達を守ってくれた筈のクロスに目もくれず走り去る社員達の背中を見つめて鼻を鳴らした。

『愚かしいですねえ……何をそんなに必死に守る必要があるのか理解に苦しみますよ。』

所詮アレも貴方とは関わりのない異世界の人間、我々からしてみれば仮初の現実を生きるフィクション如きに過ぎない……そんなものを守る為に身を削らなければならぬとは、ヒーローとは本当に難儀な生き物ですねえ』

全く同情しますよ、と口元に手を添えて馬鹿にするように嗤うバットレイザーだが、それを聞いたクロスは近くに転がるスパークスラッシュを取り、徐に顔を上げて口を開いた。

『っ……俺、は……お前の言うヒーローなんて呼ばれるような、そんな大層な人間なんかじゃないっ……』

『……ああ？』

そう言つて背中からガラス片を落としながらふらつく身体を起こしていくクロスの反論に、バットレイザーは訝しげに眉を顰め、クロスは覚束無い足で地を踏み締めながら逃げ遅れた民間人を守る為に今も奔走する響達を見つめて言葉を続けていく。

『本当にヒーローと呼ばれるべきなのは、誰かの為に身を張る事を恐れない、アイツらのような人間だ……俺はただ、自分が知っているから戦ってるだけだ……唯一俺に残された役目を……大切な何かを失う、悲しみや辛さをつ……』

「……蓮夜さん……」

助け出した人々の避難を促す中で、風に乗って聞こえてきた彼の言葉を耳にし響が思わずクロスの方に振り返るが、クロスはそれに気付かぬまま傷付いた腕でバツトレイザーに向けて双剣を身構えていく。

『お前達の暴挙を見過ごせば、また俺のように大切な何かを失う苦しみを味わう人間を生み出すと知っているっ……それが我慢出来ないから戦うっ……もうこれ以上、誰かの人生（モノガタリ）をお前達のような連中に侵させてたまるかっ……!!』

『……ハッ、ようするにくだらない感傷ですか？それなら尚のこと救い難い。だつたらこの場にいる全員を救ってみせるといい……貴方一人の力で為せるのならねえええッ!!』

クロスの戦う理由を馬鹿馬鹿しげに一蹴し、ならば救ってみせろとバットイレイザーが再び放ったエネルギー弾が先程クロスが身を呈して庇った社員達の背中に目掛けて襲い掛かる。

それを見て慌てて飛び出そうとするクロスだが、先のダメージが想像以上に響いているのか一瞬足に力が入らずスタートダツシユが遅れてしまい、その間にもエネルギー弾が社員達に迫り最早直撃は免れられないかと思われた、その時……

—ARTHEMIS SPIRAL—

——社員達の背中にエネルギー弾が当たる寸前、真横から矢の形状をしたミサイルが猛スピードでブチ当たり、エネルギー弾を撃ち抜いてかき消したのだった。

『!』

『何?!』

その光景を目の当たりにしたクロスとバットイレイザーも驚愕で目を見開き、エネルギー弾を落とした今の矢が放たれてきた方へと振り向く。

其処にはアームドギアをロングボウの形状に変形させ、矢を放った態勢で佇むクリスの姿があり、動揺するバットイレイザーに向けてクリスはしてやったりと不敵に笑って見せた。

「ハッ、生憎だったなあコウモリ野郎。さっきの仕返しだ、気に入ってくれたかよ？」

『ツ………！貴様あつ、フィクション風情が私の邪魔を——！』

「はあああああああッ!!」

—切・呪りeツTお—

—α式 百輪廻—

自分の邪魔をしたクリスに怒りを露わにし、拳を握り締めてバットイレイザーが思わず歩み出ようとした瞬間、其処へブルーメランの如く飛ばされた大鎌の刃と無数の小型の鋸が飛来してバットイレイザーの足を止めていき、クリスの前に切歌と調が飛び出しアームドギアを身構えた。

「これ以上、貴方の好き勝手にはさせない……！」

「アタシ達を舐めて掛かったこと、後悔させてやるデスっ！」

『……そうですか……死よりも恐ろしい目に遭いたいと……ならば、お望み通りにしてあげますよオツ!!』

『待てっ……！グッ！』

怒りに震えるように息を深く吸い込み、最早容赦はすまいとクリス達に目掛けて羽根を広げながら滑空して襲い掛かっていくバットイレイザー。



それを止めようとクロスも後を追おうとするが、急に身体を動かしたせいで痛みが走り思わずその場に膝を付いてしまう中、そんなクロスに響が駆け寄り身体を抱き起こしていく。

「しつかりして下さい蓮夜さんっ！大丈夫ですか……！」

『ツ……俺の事はいいっ……それより早くお前の仲間達を止めて、民間人と一緒に此処を離れるんだ……！イレイザーとは戦いを避けるように言っただろう……！』

「……………」

このままではクリス達の身が危険だと焦燥を露わにこの場からの避難を促すクロスだが、それに対し響は僅かに考える素振りを見せた後、クロスの目を見つめ返しフルフルと首を横に振った。

「すみません……やっぱり私、蓮夜さんだけに戦わせる事は出来ません」

『……………何……………？』

響からの思わぬ返答に戸惑うクロス。響はそんなクロスの前に出ると、ギアを纏った右手を握り締めて拳を形作っていく。

「蓮夜さんの言う通り、イレイザーを倒す方法を持たない私達じゃアイツには勝てないかもしれない。でも、だから戦わないって選択肢を簡単には取りたくないんです……………！自分や自分の身の周りの人達を守る為にとって言い訳して、蓮夜さん一人に重荷を全部背負わせて逃げ出したら……………きつと、そんな自分を許せずにこの先も後悔し続けると思うから……………」

『……………』

「例え出来ない事が多くても、せめて限られた中で出来る事をしたい……………自分に胸を張れない後悔はしたくない……………今は蓮夜さんも、この世界を生きる一人の人間だから……………力になりたいんです」

それが今後悔しない為の自分の選択なのだ、クロスに顔を向けて微笑み、マフラーを靡かせながらクリス達と戦うバットトレイザーに目掛けて駆け出していく響。

その背中を止めようと思わず手を伸ばし掛けるが、何故か彼女を呼び止める言葉が出て来ず、中空で止めた手の平をジッと見つめていく。

（自分に胸を張れない、後悔をしない為に……）

その言葉に何か感じ入る物を得たのか、クロスはゆっくりと拳を握り締め、何か意を決したように顔を上げてふらつきながらも身を起こしていくのであった。

## 第二章／邂逅×存在を赦されない存在④

「ちよせえええツ!!」

ババババアッ!と、クリスの両手に握る大型ガトリングガンの銃口が火を噴き、バットイレイザーの身体に無数の銃弾が浴びせられていく。

しかし、バットイレイザーは両腕の羽根で自身を覆ってクリスの放つ銃撃を受け止め、そのまま勢いよく羽根を広げて凄まじい突風を発生させると共に銃弾を跳ね返すだけでなく、クリスをも強風で吹っ飛ばしてしまった。

「グッ、うあああッ?!」

「まだッ!」

「てえやあああああッ!!」

強風で吹き飛ばされるクリスと入れ替わるように、今度は調と切歌がそれぞれ左右に散開してバットイレイザーへと飛び掛り、左から調のツインテール部分の装甲に備わる円形の鋸が、右から切歌が大きく振りかぶった大鎌の刃が挟み撃ちをする形で襲い掛かるが、バットイレイザーはそれらをも左右に伸ばした腕で難なく受け止めてしまう。

「くうッ!」

「こんのおおおッ!」

『姦しい……!雑魚が私の手を煩わせるなアあッ!!』

「うあうッ?!」

「がはあッ!」

「うおおおおおおおおおッ!!」

左右から挟み込む二人の得物を力づくで払い除け、まるで踊るように身を翻したバットレイザーの素早い蹴りが調と切歌の腹を蹴り飛ばして弾丸の如く吹っ飛ばす。

其処へ背後から右の拳を振りかざす響が雄々しい雄叫びと共にバットレイザーに殴り掛かるが、それもバットレイザーに振り向き様に片手で受け止められてしまい、それでも残った左拳で続けて殴り掛かるもやはり受け止められ、響の顔が険しげに歪む。

『まだ分からないか?……! 貴女たち如きでは私の身体に傷一つ付けられない、足掻いた所で無駄な抵抗にしかならないとッ!!』

「ッ……だとしてもっ、目の前で傷付けられる誰かに背中を向けて逃げ出すなんて私には出来ないっ! 倒せる可能性が例え0でも、この手を伸ばして救える命があるのなら守り切るっ! その為の拳っ、その為のシンフォギアだああッ!!」

『轉るなツ!!筆を振るえば消える命如きがあッ!!』

未だ闘志を絶やささない瞳で力強く叫ぶ響の言葉を煩わしいと吐き捨て、バットイレイザーは容赦ない前蹴りで響の腹を蹴り飛ばしてしまう。

「ぐあうっ!」と苦悶の声を漏らして吹っ飛ばされる響を追走し、バットイレイザーがその鋭い爪で響の身体を引き裂こうと振りかざすが、それを阻むように真横から黄金に煌めく剣……クロスが伸ばしたスパークスラッシュの刃がいきなり割って入り、バットイレイザーの爪を受け止めた。

『ツ!クロスウツ!』

『ぜええああッ!!』

左手の剣でバットイレイザーの爪を受け止めたまま、右手に握るスパークスラッシュを振るってバットイレイザーに斬り掛かるクロス。

だがバットイレイザーも咄嗟に身を引いて紙一重で斬撃をかわしながら後退し、それ  
を逃すまいと追い掛けるクロスの双剣と目にも止まらぬ速さで両手の爪で打ち合つて  
いくが、徐々にクロスの方が剣を振るう速さで上回っていき、爪を弾かれて仰け反る  
バットイレイザーの隙を突きクロスがすかさず双剣で相手の喉を狙うも、バットイレイ  
ザーは寸前の所でその身を再び無数のコウモリと化してクロスの一撃から逃れてしま  
う。

「ま、またコウモリになったデスよっ！」

『ツ……！』

あの姿になられてはこちらも攻撃しようがない。

コウモリの大群となつて散らばるバットイレイザーの勢いに圧されて切歌や他の装  
者達も各々が腕で顔を庇い立ち尽くすしか出来ない中、クロスは何かを探すかのよう  
に忙しなくコウモリの大群を見回すと、大群の中に一箇所だけ多くのコウモリ達が密集す  
る部分を見付け、その奥に他のコウモリ達に守られるように囲まれる一体のコウモリ



……他の黒い体色の個体と違い、赤みがかった紫色のコウモリの姿を捉えた。

『……アレか……！赤い銃使い！あの辺一带を飛ぶコウモリを高い火力で纏めて吹き飛ばせないか！』

「はあッ?!何だよ急に?!つつーか、あたし等の攻撃は奴に通じねえって——!」

『ダメージは通らなくてもノックバックは通る！いいから急げ、頼む!』

「ツ……!ああッ、クソツ……!こうなりやヤケだあッ!!」

クロスに言われるがまま、彼が指差す地点に目掛けて腰部アーマーから立て続けにミサイルを射出し、続けて両腕のガトリングガンでミサイルを撃ち抜き故意に爆発を起こすクリス。

それにより凄まじい勢いで巻き起こった爆風がコウモリ達の大半を攫って吹っ飛ばし、周りに纏わり付いていた他のコウモリ達を剥がされた紫色のコウモリに目掛けてク

ロスが素早く疾走し、両手のスパークスラッシュを構えた。

『?!な、何いッ?!』

『デエエアッ!!』

爆風に怯んでいた隙に迫るクロスを見て慌てて逃げ出そうとする紫色のコウモリに接近し、クロスは双剣による斬撃を次々と叩き込んで紫色のコウモリを吹っ飛ばした。

そして紫色のコウモリが地面に叩き付けられるようにゴロゴロと転がると共に、その姿が無数のコウモリに化けていた筈のバットイレイザーへと変化し、周囲を飛び回っていた他のコウモリ達もまるで幻のように消滅していった。

「コ、コウモリが消えた?」

『グッ!な、何故私をつ……?! 『本体』が別にいると気付いた?!』

『……俺がお前達の気配を追える事は、さつきお前自身も口にしていた筈だぞ。最初に今の能力を目にした時も、あのコウモリの大群からお前の気配を察知する事は出来なかった……其処から推察して、お前がまだ何か隠しているだろうと考え付くのは当然だ……』

だから二度目は注意深く観察してお前の気配を探り、本体が別にいた事に辿り着いたのだと語り、クロスは右手の剣をバットイレイザーに突き付ける。

『こうしてタネを明かした今、あの能力ももう通じない……覚悟してもらおうぞ……』

『ぐうううううっ……！頭に乘るなあッ!!』

最早後はないと突き付けるクロスの宣告に激昂しながら、乱雑に振るった右腕から無数の光弾をばら撒くように放つバットイレイザー。

それを見てクロスも咄嗟にその場から飛び退き光弾を回避し、その隙にバットイレイザーは体勢を立て直す為に上空に逃げようと両腕の羽根を羽ばたかせ宙に浮くが……

「逃がさないッ!!」

『……なあ?!』

そうはさせまいと、響がすぐさまバットイレイザーに飛び掛かって両足にしがみついた。そして両腰のバーニアの噴出口を真上に向けて全力で火を噴き、バットイレイザーが飛び立てないように地上へと徐々に引きず落とそうとする。

『き、貴様アツ!!放せえええッ!!』

「調ッ!!」

「うん!」

バットイレイザーが両足にしがみつく響を必死に振り落とそうとする中、その隙に切歌と調が互いにアイコンタクトを送り、バットイレイザーの頭上へと一息で跳び上が

る。

そして空中で調のアームドギアのヨーヨーを切歌のアームドギアの鎌の柄の先に接続し、巨大な刃が付いた車輪状に変化させ、勢いよく回転させながらバットイレイザーに目掛けて突撃していく。

—禁合β式・Zあ破刃惨無うNN—

『んなっ——グッ、ぬうあああああッ!!』

「うわわっ!」

切歌と調のユニゾン技である刃の付いた車輪がバットイレイザーに直撃し、バットイレイザーの身体を車輪の回転で切り刻みながら吹っ飛ばしていった。

無論ダメージ自体はないだろうが、仕切り直しを阻まれたバットイレイザーはそのまま仰け反るように吹き飛び、響も慌てて両手を離して何とか体勢を整え地上に着地する



目的だ……奴らは今何処で何をしている……?』

返答次第ではこちらも容赦はしないと、剣の切っ先をより首元に突き付けながら脅しを掛けるクロス。

その様子を響達も不安と心配が入り交じったような表情で見守る中、バットイレイザーは憎悪の眼差しでクロスの顔を睨み付けて叫ぶ。

『ゆる、ささいっ……許さないっ……許さない許さない許さない!! 貴様如きが私のっ、私が漸く手に入れた羽根をよくもオっ!! 貴様なんかにイイイイイイイツツ!!』

『……お前の許しなんて必要ない。それより、俺の質問に——?』

バットイレイザーの恨み節も無視して再度質問を投げ掛けようとするクロスだが、その時、足元に妙な揺れを感じて訝しげに下を見る。

足の裏に感じる地震のような振動。其処には足元に転がる瓦礫が小刻みに震え、破片

が幾つも宙に浮いては粉々に碎け散るといふ異常な光景があった。

『これは……う？』

『あぐつ、ギツ……ギギイツ……ガギツ……!!ギイアアアアアアアアアアアアツツ  
……!!!  
!!!』

「——ッ！蓮夜さん危ないッ！逃げてッ！」

『！』

その異常にクロスが僅かに目を見張る中、背後から悲鳴にも似た響の叫び声が聞こえて思わず顔を上げると、目の前で倒れるバツトレイザーの身体から突如エネルギーが溢れ、凄まじい勢いで衝撃波が放たれた。

それに対してクロスも咄嗟に両腕を交差させどうにか衝撃波を受け止めて踏ん張るが、それ以上は踏み止まる事が出来ず吹っ飛ばされてしまい、何とか空中で体勢を立て





身体全体が筋肉質な巨大な姿に変化し、クロスに斬られた筈の左腕が生えて生成された禍々しい姿……。

赤い瞳が不気味に輝き、白い吐息を吐き出しながら異常な姿に変貌したバットイレイザーは徐に身を起こし、クロスだけを赤い眼で捉え真つ直ぐ見据えていく。

『ゴ、ロ……ジテヤルウウウウウウウ……!!!キサマダケハアアア……ワタシノテ  
 デエエエエエエツ……!!!クロスウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
 ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
 ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
 ウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウ  
 !!!!!!』

「れ、蓮夜さんッ!!」

『ッ!』

ズシンッ!!と重々しく地を踏み締め、憎悪の込められた雄叫びと共にクロスに目掛けバットイレイザーが勢いよく突っ込んでいく。



の間でも動揺が広がり、クロスも先日のノイズイーターに続いて急激にパワーアップしたバットイレイザーの変化に困惑を露わにする中、建物が崩れて舞い上がる粉塵の中から勢いよくバットイレイザーが飛び出し、再びクロスに向かって突進を仕掛けてくる。

思考に浸っていたクロスは我に返り慌てて身を翻しバットイレイザーの突進を回避すると、左腰のカードホルダーを開いて一枚のカードを取り出す。

(っ……奴は目に見えて理性を失っている……これ以上の問答は無意味にしなければならないか……仕方がない……)

一目で最早正気ではないと分かる様子で暴れ回り、発狂するバットイレイザーから情報を聞き出すのは不可能であると見切りを付けたクロスは腰のバックルから立ち上げたスロットにカードを装填し、掌でスロットを押し戻した。

『Code Blaster::clear!』

ベルトから電子音声が響くと同時に、クロスの纏う装甲がパージされて宙に浮き、朱



が、クロスは振り下ろされた拳を防御も回避もせずにその分厚い装甲だけで受け止め、ズザザザアツ！と僅かに後退る足で踏み止まる。

そして右手に握るウェーブブラスターの銃口をバットレーザーの脇腹に突き付けて引き金を引き、放たれた銃弾でバットレーザーを二十メートル先の建物まで吹っ飛ばし壁に叩き付けていった。

「レーザーを一発で吹き飛ばした……！」

『グアアアツ?!ガッ……アアアツ……?!』

あの巨体を銃の一撃だけで吹っ飛ばしたクロスの力を見て響達も驚きを浮かべ、バットレーザーも脇腹に走る激痛に顔を歪めながらも何とか身を起こそうとする中、クロスはウェーブブラスターの銃身のパーツを三枚の羽根のように外側に展開して砲撃形態に変形させていき、バットレーザーに照準を定めながら左腰のホルダーから取り出したカードをバツクルに装填していく。



『ツ!!!? ガツ……アツ……!!!?』

『……それがお前のエンドマークだ』

『ウ グア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!?』

銃剣を持つ腕を徐に下ろしたクロスが静かにそう呟いた瞬間、バットイレイザーは悲痛な断末魔を上げて身体の内側から爆発を起こし、跡形も残さず完全に消滅していったのであった。

「や、やったデス！イレイザーを倒したデスよ！」

「良かった……今回も何とかなったね」



「…………まあ、あたし等は殆ど裏方だったけどな…………」

爆散したバットイレイザーの撃破を見届け、飛び跳ねて喜ぶ切歌と安堵の溜め息を漏らす調の後ろで、クリスはそう言いながら険しげに眉を顰めクロスを見つめていく。

そしてクロスはそんな視線にも気付かないまま通常形態の蒼い姿に戻ると、バットイレイザーが爆発した跡の炎を見下ろしながら仮面の下で目を細めた。

（漸く掴めると思った手掛かりも無くなり、また振り出しか…………一体なんなんだ、あれは…………ノイズを喰らった事と何か関係があるのか…………？）

自分の知らないイレイザーの謎の進化。いや、どちらかと言えば暴走と呼ぶに近いあの変貌の原因も分からず、新たに情報を得られなかった事も含めて増える謎にモヤモヤばかりが募るクロスの背後から、響が歩み寄って声を掛けた。

「蓮夜さん、あの…………」

『……………』

恐る恐る声を掛けられて僅かに振り返るも、クロスはそれ以上は何も答えず無言で口を開かない。やはり、自分達が忠告を聞かずバットイレイザーと戦った事で怒らせてしまったのだろうかと暗い表情で俯いてしまう響に対し、クロスはそんな響から視線を逸らし、

『……………さつきはまた助けられたな……………お前達がいなければ、俺も今頃危なかったと思う……………』

「！蓮夜さん……………」

『ただ、あんな無茶はこれつきりにして欲しい……………今回はどうにかなったが、次もまた同じように上手くいく保証はない……………もつと大勢の人達を救いたいと願うなら、自分の身も大事にしてくれ……………』

「うつ……………す、すみません……………」

感謝の言葉を口にされて一瞬顔色が明るくなるも、直後に釘を刺されてげんなりと肩を落としてしまう響。

そしてクロスもそんな彼女の姿を横目に仮面の下で苦笑いを浮かべると、そのままその場を立ち去ろうと前を向いて歩き出していくが、その背中を見て響は僅かに逡巡する素振りを見せた後、クロスの背に向けて叫び出す。

「蓮夜さん……こんな事言ったら怒られるかもしれないけど、やっぱり私、蓮夜さんと手を取り合うのを諦め切れません……！」

『……………』

「今は一緒に戦えないかもしれないけど、でも……もしもその方法が見つかった時は、また一緒に戦ってくれますか……？」

何処か不安を帯びたような声でそう問い掛ける響。クロスはそんな響の言葉に足を

止めて一瞬何かを言い掛けるも、それを呑み込むように口を詰んで俯き、何も言わずに再び歩き出して何処かへと去っていつてしまう。そんな中……

「——目障りだな……あの小娘……」

遠ざかっていく背中を無言で見つめる響が物憂げな表情を浮かべる中、その様子を崩壊したビルの物影から事の成り行きを見届けていた一人の男……アスカはクロスと、そのクロスを見つめる響を交互に見て険しげに眉を顰め、誰にも気付かれぬように静かにその場から立ち去っていくのであった。

## 第二章／邂逅×存在を赦されない存在⑤

— S・O・N・G・本部 —

あれから数十分後。苦戦を強いられながらも何とかバットイレイザーを撃破し、助力を借りた蓮夜とも別れて一先ずS・O・N・G・の本部に戻った響達。その後、戦闘で負った傷を治療し終えた後に発令所に集められた四人は、弦十郎の口から先の戦闘でのブリーフィングに加え、撤退指示を無視して戦闘を続行した件についてもすっかりとお灸を据えられる羽目になった。

「——うう……司令のお説教、長過ぎてもうへとへとですよく……」

「まあ、先に命令破ったのはこつちだから文句言える立場じゃないがな……アイツが駆け付けた後も成り行きとは言え、結局そのまま戦い続けちゃったし……」

「……………」

やれやれ、とクリスは両手を後頭部に回して疲れたように溜め息を吐き、弦十郎の説教を終えて家に帰ろうと艦内の通路を歩く一行。

そんな中、クリスと切歌の後ろを歩く響はボーツとした様子で何処か覇気がなく、隣を歩いてきた調はそれに気付いて不思議そうに響の顔を覗き込んでいく。

「響さん……………？どうかしましたか？」

「……………え？な、何が？別に何でもないよ、うん！」

調に顔を覗き込まれて漸く我に返ったのか、慌てて両手を振りながら笑って誤魔化そうとする響。しかし、普段の響を見慣れている三人からしてみれば明らかに無理して笑顔を作っているのが見て取れて分かり、クリスは肩を竦めて溜め息を吐きながら響にジト目を向けていく。

「お前、もしかしくなくてもまだアイツのこと気にしてんだろ？」

「へ？え、えーつとー……」

「やつぱりな……。つたく、あたしが言うのもなんだが、いつまでも考え込んでたつてしょうがねえだろ？いい加減切り替えねえと、そんなんじやまた帰つてからあの子に心配されんぞ」

恐らく今も響の帰りを待っているであろう、彼女のルームメイトである未来の事をチラつかせて忠告するクリス。本人もそれを自覚しているのか、未来の事を持ち出された響は「うっ……」と言葉を詰まらせながら頬を掻き、目を泳がせていく。

「そ、それは分かっているんだけど……でも、私達がこうしてる間にも蓮夜さんは一人でイレイザーや事件の黒幕の事を今も追ってるのかなって、一度考えたら色々気になりだしちゃって、つい……」

「それこそお前が気にしたつてだろ……まあ、住むところも無けりや飯もままならないっ

て話聞いた後じゃ、不安になんのも分からなくもないけどよ」

そんな生活をしていて本当にイレイザー達の目的を止められるのだろうか、若干呆れた様子のクリスの言葉に切歌も顎に人差し指を当てながら考える素振りを見せる。

「そういえば蓮夜さんって、普段何処で寝泊まりしてるんデスかね？こつちに身寄りはないって言ってたデスけど……」

「うーん……多分安い所の宿を使ってるか、ネットカフェ……もしかして、野宿……？」

「……何か急に不安になってきたな……アイツ、イレイザーをどうにかする前に自分が先に野垂れ死んだりとかしないだろうなっ？」

「そ、それは流石につ……」

「ない、と言い切りたい所だが、如何せん彼の私生活を知らないが為に響も断言が出来ず言い淀んでしまい、また別の意味で一同が蓮夜への不安と心配を覚える中、其処へ



……

「——皆さあーん！ちよつと待つて下さい！」

「……え？」

発令所の方から、何やら慌ただしい様子でエルフナインがやって来た。不意に呼び止められた響達が足を止めて振り返ると、一同に追いついたエルフナインは胸を抑えて呼吸を整えていく。

「良かった、皆さんが帰る前に間に合つて……」

「エルフナインちゃん？」

「どうしたんですか、そんなに慌てて？」

「一体何事？、とエルフナインのただならぬ様子に響達が頭上に疑問符を浮かべると、

呼吸を整え幾許か落ち着きを取り戻したエルフナインは手に持っていたタブレットの画面を響達に見せていく。

「実は、今さつきS. O. N. G. 宛に匿名でメールが届いたんですつ。文脈から推測するに、恐らく例のマスクドライダー……黒月蓮夜さんからの」

「え?」

「蓮夜さんから?!」

噂をすれば何とやら。一同が話題にしていた件の蓮夜からのメールが届いたと聞かされた響達は目を剥いて驚きを露わにし、エルフナインの下に集まってタブレットの画面を覗き込んでいく。其処には……



「——蓮夜さんからの協力の依頼？」

立花響と小日向未来がルームシェアする学生寮の一室。

本部から戻った響は、彼女の帰りを待つていた未来に早速エルフナインに見せてもらった蓮夜からのメールの内容を知らせ、それを聞いて怪訝な口調で返す未来に対し響は何処か浮かれた様子で頷き返した。

「そつ。『前回に続いてまたレーザーが街を襲ったのは自分のせいだから、その責任を取りたい』って、レーザーを探す為にS. O. N. G. の力を借りたって要請が来たんだって。……まあ、表立って一緒に動くのはお互いに危険だから、情報でのやり取りが主になるのは変わらないんだけど……」

「そうなんだ……あれ？でも蓮夜さん、S. O. N. G. に連絡する方法って知ってたの？」

「あ、うん。それもさつきエルフナインちゃんから聞いたんだけど、実は昼間に私達と話して別れた後、お店の近くで見張りをしてた諜報部の人を通して、情報交換の為の連絡手段を渡してたんだって。まあ、最初は私達の時みたいになんて断られそうになつたらしいけど——」



『——はつきり言えば、君の持つシンフォギアに匹敵する力は我々は勿論、政府にとつても無視出来ない超技術だ。もし仮に政府側に君の存在が露見され捕縛するように命令されれば、こちらの場合によつては、それに従わざるを得なくなるやもしれん』

『……まあ、そうだろうな……だが、イレイザーを止める為にも俺は戦い続けなければならぬ……申し訳ないが、もし仮にそうなつた時には俺も、貴方達と……』

『勘違いしないでくれ。響君達を……いや、それ以前から人々を影で守り続けてくれた

君の事を、我々も本当は信用したいと思っている。だからそう言った際には、君へこちらから情報を伝える為、何らかの方法で連絡手段を取れるようにしておきたい。君に渡す通信機は、暗号文でやり取りが出来る仕様になっている。これなら我々と密に情報交換も可能だ。ついでに限度額内なら公共交通機関が利用出来るし、自販機にも使える。便利だぞ？』

『……何故、其処まで俺の事を……？俺はこの世界の人間ではない余所者で……』

『そうかもしれない。だが、そんな君に助けられた人間が多くいるのもまた事実だ。我々も含めてな。その見返りを受けるぐらい、君は許されてもいい筈だ』

『……………』

『君が響君達に話した事情も理解出来る。その考えを否定するつもりも、無理強いをしなくても協力を乞うつもりもない。イレイザーへの対策も無しに、彼女達を危険な目に遭わせるような真似は出来ないのは我々も同意見だからな。……それでも本音を言えば、何時か、君と共に戦える日が訪れる事を俺も望んでいるよ』



「——って、そんなやり取りがあつたみたい」

「流石……相変わらず抜け目ないね……」

しっかりと蓮夜と連絡が出来るように密かに手を回していた弦十郎達の手際の良さに感心を覚える未来。響も苦笑いを浮かべて頷くと、彼女が容れてくれたココアのカップを両手で包みながら話を続けていく。

「でも、こうして向こうから連絡してくれたって事は、これでちよつとは蓮夜さんと手を取り合える未来に一步近づけたって事なのかなって。そう考えたら、いつか一緒に戦えるようになるのも夢じゃないのかな……」

誰かを守る為に戦う者同士、きつと手を取り合つて分かり合えらと思つていた自分の考えは甘かつたのか？

一度はそう考えてしまふ事もあつたが、こうして蓮夜が自ら協力を申し出てくれたのは、もしかしたら今日の戦いを通して彼の心を動かすきっかけとなる何かを示す事が出来たからなのか……。

確かな理由は分からないが、それでもコレが自分が望んだ未来に一步近付ける前進になるかもしれないと前向きに捉える響の横顔を見つめ、未来は瞳を伏せながら穏やかに微笑んだ。

「そうかもね……私も、響達と蓮夜さんがそうなれるように応援してる。だから響も、この機会をちゃんと次に繋げられるように頑張らないと、ね？」

「うん、未来が応援してくれるなら百人力だよ〜！」

やっぱり未来は私の陽だまりだと、自分の背中を後押ししてくれる彼女に元気良く抱

き着く響に、未来もハイハイと受け流しつつも満更でもない様子で微笑む。

そしてその後、二人は夕食を終えて明日の学校の準備を済ませた後、共に寝台に就き、響は隣で眠る未来の顔を見て笑みを浮かべながら見慣れた天井を見つめていく。

（未来も応援してくれるって言うてくれるんだ……何時までも悩んでいるより、未来が言ってたように、このチャンスを次に繋げられるように頑張らないと……）

親友が背中を押してくれているのだから、何時までも気落ちしている訳にはいかない。気持ちを変え、決意を新たに響は目を伏せて眠りに付いていくのであった。

——直後に自身と未来の間に走った、デジタルノイズのような謎の現象に気付かぬまま。





「……………んん……………」

——翌日の朝。カーテンの隙間から射し込む陽の光に当てられ、響は僅かに眩しそうに顔を歪めながらも徐に目を開き、若干気だるげにベッドから上半身を起こしていく。

「んー……………よく寝たあ〜……………未来〜、起きてるうー……………う？」

腕を上にも大きく伸びをし、隣に眠る未来に目を向けて声を掛ける響。だが……

「……………あれ、未来……………？」

呼び掛ける声に応える返事はなく、響が目を落とした隣には、いつの間にか未来の姿はなくなっていた。

頭上に疑問符を浮かべて辺りを見回し、もしや自分が寝てる間に二段ベッドの下の方に移ったのかと思ひ下のベッドを覗き込んでみても、其処にも誰もおらず空っぽだった。

「あれえー……？未来ー？」



「——おつかしいなあー……今日は一緒に登校しようって昨日言ってたのに……」

響達を通うりディアンに向かう朝の通学路。他の生徒達が学院に向かう姿がチラホラ見られる中、彼女達に混じって一人学校に向かう響は訝しげに首を捻っていた。

あの後、もしや先に起きてるのではないかと思いつつ部屋中を隈無く探し回って見たものの、未来の姿は何処にも無く、彼女の通学用のカバンも部屋にはなかった。

だとすれば、やはり先に部屋を出て学校に向かったのかと思われるが……

（何か予定があつたのかな？日直とか……いや、でも今日は未来の当番じゃないし……あれ？）

未来が先に出ていった理由を考えて響が頭を悩ませる中、その時、前を歩く登校中の生徒達の中に見覚えのある後ろ姿を見付け、足の爪先を立てて背伸びをし人混みの向こうを覗き見る。其処には……

「——あつははつ。えー、ほんとに〜？」

「あ………未来！」

人混みの向こうに、他の生徒達と楽しげに会話をしながら歩く女子生徒……朝には部屋に姿のなかった未来の姿があった

彼女の姿を見付けた響はぱあつと明るい笑顔を浮かべると共に一目散に走り出し、生徒達の間をすり抜け未来の下へと駆け寄っていく。

「未来ー！おい、待ってよ未来ー!!」

「……………え？」

大声で呼び止められ、一緒に登校していたらしき他の女子生徒達と共に足を止めて振り返る未来に追い付き、響は手を膝に付き呼吸を整えながら顔を上げる。

「もおー、酷いよ未来っー。何も言わずに先に行っちゃうなんてさっー。一緒に学校に行こうって昨日約束してたでしょっ？」

「……………」

「先に出るならせめて一声くらい掛けてくれても……………う？未来？」

一緒に登校すると約束してた筈だったのに、置き去りにされてしまった事に対し愚痴をこぼす響だが、目の前に立つ未来の様子が何処か可笑しい。

何故か戸惑いを露わにした瞳で響を見つめ、周りの生徒達と何度も顔を見合わせている。

そんな彼女の様子を見て響も訝しげに眉を顰める中、未来は響に向き直って恐る恐る口を開き、

「えっ、と……………ごめんなさい……………確か、”立花さん”だよな？何の話をしてるのかさっぱり分からないんだけど……………私に、何か用事？」

「……………え……………？」

……まるで赤の他人に向けるような他所他所しい眼差しと共に、困惑を露わにした表情でそう口にした親友である筈の彼女の思わぬ言葉に響は目を剥いて絶句し、呆然と立ち尽くしてしまうのであった――。



「――！何だ……？？」

同時刻。クレープ屋のバイトで店で作業を行っていた蓮夜は、クレープに使う材料の準備中に何かを感じ取ったかのように顔を上げ、怪訝な表情で周りを見渡していた。

（今の、感覚は……まさか……？）

突然感知した不可解な感覚と、それに呼応するかのように胸でざわつく嫌な予感。

理由は分からないが、此処で無視すれば『取り返しのつかない何かに繋がる』という確かな確信が胸中を過ぎり、蓮夜は僅かに思考する素振りを見せた後、何かを決意した表情で顔を上げながらエプロンを外し、店長の下へと急いで走り出していくのだった。

第二章／邂逅×存在を赦されない存在 E ■ ■

『ERROR.』

『LOADING...』

第二章／か iii 逅×存在を#・\$@

『ERROR.』

『LOADING...』

だ▲ニ§／\*@こ☆??♪♭※Σ∩>●△



『  
E  
R  
R  
O  
R.  
』

『  
E  
R  
R  
O  
R.  
』

『  
E  
R  
R  
O  
R.  
』

『  
E  
R  
R  
O  
R.  
』

『  
L  
O  
A  
D  
I  
N  
G.  
…  
』

『  
E  
R  
R  
O  
R.  
』



E  
N  
D

## 登場人物&設定一覧（随時更新予定）

黒月蓮夜

性別：男

年齢：18（自己申告）

容姿：前髪を横に流した黒の長髪と切れ長の真紫の瞳。

解説：仮面ライダークロスに変身する記憶喪失の青年。

立花響達が無事シンフォギアの世界とはまた別の世界の住人であり、記憶を失う前は響達の世界に現れたイレイザーを追って来たのだと思われるが、何らかの理由でそれまでの記憶を全て失ってしまっている。

性格は一見物静かで何処となく冷たそうに見えるが、実際は記憶喪失の影響で感情表現が乏しいだけであり、わりと素直で他人想い。しかし偶にズレた発言や行動をしたりと何処か天然な面も。

異なる世界から訪れた為、響達の世界では行く宛もなく家無し金無しのホームレスのような生活を送っているが、今は所持金が底を尽いて行き倒れた所を救ってくれたクレープ屋の店長のご好意により、アルバイトとして雇わせてもらっている。

記憶を失ってから唯一残った『イレイザーを止めなければならぬ』という使命感、そして自分のような大切な何かを失う人間をこれ以上増やしたくないという一心から手元に残されたベルトとカードを使い、仮面ライダークロスとして人知れず都市伝説の怪物と戦い続けている。

## 仮面ライダークロス

解説：黒月蓮夜が変身ベルト、クロスベルトと変身カードを用いる事で変身する蒼と黒がメインカラーの仮面ライダーだが、その力の正体や出自は不明。

全ライダーの中でも平均的な強さを持ち、オールマイティに戦う事が出来る。

外見は黒のラインが入った丸みを帯びた蒼いボディと、ファイズに近い蒼のラインが入ったレッグ、カブトとアクセルトリアルを足して二で割ったような仮面と赤い複眼を持ち、ボディの様々な箇所にはXの意匠が用いられてる。

### クロスベルト

解説：記憶を失って倒れていた蓮夜が意識を取り戻した際に手にしていた、クロスに変身する為の出自不明の蒼いベルト。

ゼロノスベルトとマツハドライダーを足して二で割ったような外見をしており、身時や必殺技発動時にもマツハドライダーと同様のギミックでバックル右部分を上げてカードを装填する為のロットを露出させ、カードを装填した後ロットを押し戻す事でその効果を発揮する事が出来る。

## 初期フォーム一覧

### タイプスタンダード

解説：クロスの基本形態。手足に伸びたスーツラインに光を通して瞬間的に身体能力を増加させる事が可能であり、パンチ力やキック力、跳躍力を一時的に強化する事も出来る。

必殺技は右足に収束させた蒼のエネルギーポインターを敵に放って捕縛し、全身を蒼い閃光へと変化させて捕えた敵にライダーキックを放つ『ライダーブレイク』

### タイプスラッシュ

解説：近接戦闘と機動力に特化したフォーム。外見はシャープなラインが特徴の朱い

鎧と緑の複眼、武器は金色のラインが走った双剣、『スパークスラッシュ』を用いて戦う。

必殺技は高速移動で生み出した分身で相手の目を欺きながらスパークスラッシュで連続で斬り裂き、トドメに渾身の刃を叩き込む『ライトニングスレイド』と、分身したスパークスラッシュの刃を相手に向けて雨の如く降り注がせる『スラッシュレイン』

### タイプブラスター

解説：火力とパワー、防御力に特化したクロスの遠距離射撃形態。外見は青く角張った分厚い装甲と黄色い複眼が特徴であり、通常弾と砲撃を使い分ける事が出来る青白い銃剣、ウエーブブラスターを用いた射撃を得意とする。

必殺技は通常形態時に用いる一秒間に385発撃ち込む『ストライク・ブラスト』と、砲撃形態時に用いる収束したエネルギー弾、或いは砲撃を発射する『レイジング・ブラスト』

## イレイザー

解説・物語から何かしらの理由、罪を問われて存在を許されなくなった者の成れ果て。

物語を追われた事で世界のルールに縛られないという性質を持っており、響達の操るシンフォギアは勿論、その他の世界の武器や能力でも傷付ける事が出来ない。

また、個体差はあれど物語を改竄する能力を持っており、人間の記憶や性格、歴史そのものを弄って全く別の物語に変えてしまう恐ろしい能力を持つ。

ただし、本来の物語の流れでそうなる筈がない登場人物の生死や物語の根底を揺るがすなどあまりに分かりやすい改竄は「世界」に探知されやすくなり、見付かれば為す術なく再び追放されるか、最悪その場で存在ごと消される可能性がある為、無茶な改竄を行う事は多くない。

唯一の例外としてクロスのベルトを持つ蓮夜は改竄の影響を受けずにイレイザーを



倒す事が出来るが、その関連性は不明。

イレイザーの中にもクラスが存在しており、動物の姿を形取るイレイザーは下級、其処から更に進化し、数ある物語の中で最古とされる神話・伽嘶上の生物の姿へと変貌した者を上級の『神話型』と呼ばれているが、本作にて登場する純粋なイレイザーは上級に位置する三人だけとなっている。

## ダスト

解説：上級イレイザーがその身から際限なく生み出せる分身体であり、彼等が意のままに従えられる戦闘員的存在。

外見は仮面ライダーオーズの戦闘員である屑ヤミーと、仮面ライダーウィザードの戦闘員であるグルルを掛け合わせたような外見をしている。

基本的には知能が低く、動きもまるでゾンビのように鈍重な為に戦闘力に関してはノ

イズには到底劣る。

しかし真に厄介なのはその性質であり、元のイレイザーと同様にクロスか、クロスから齎される『記号』の力を与えられた者にしか倒し切ることは叶わず、欠損した部分から再生し何度も復活する能力を持つ。

加えて、ダストを生み出す側の上級イレイザーの力の強大さによつては知能が変化する事もあり、武器を手にして戦う、並の怪人並の身体能力を得たりと通常のダストとは異なる個体が生まれる事もある。

イレイザー達側からは総じて『屑』と呼称されており、グールのように実体化前の屑を通常のイレイザーに予め持たせておく事でばら撒き、使役する事も可能。モチーフは消しゴムのカスから。

デュレン

解説：上級イレイザーの三人グループのリーダー格である男。

外見は黒い髪をオールバックに纏め、インテリアの眼鏡を掛けて黒いスーツを着込んでいるが、人間の温かみを感じさせない冷徹さから仲間の一人であるアスカからもあまり信用されていない。

シンフォギアの世界で暗躍を進める首謀者であり、仲間の二人と共に新たなイレイザーの進化を探りつつ、自分達の手駒となる存在を求めている。

また、記憶を失う前の蓮夜と何かしら関わりがあるらしい。

アスカ

解説：上級イレイザーの一人である、赤いジャンパーを羽織った金髪のツンツン頭が特徴の男。

ヤンキーのような見た目通り口調は乱暴だが、計画の始動前に始末したと思われた蓮夜の生存に誰よりも焦りを浮かべたりなど、見掛けに寄らず慎重派な模様。

### イグニスイレイザー

アスカが変身する神話型と呼ばれる上級イレイザー。

仮面ライダーウイザードの敵幹部であるフェニックスに酷似した紅の身体と、パイルバンカーのような杭が肘の部分から突き出た巨大な右腕を持ち、ビルすら一撃で倒壊させる程の強靱なパワーとクロスの必殺技すら弾く絶対的な防御力を誇る。

火炎放射や炎弾など炎を用いた技を得意とし、行動に制限さえなければ街一つを簡単に灰に変えてしまえる程の危険な力を秘めている。

### クレン

解説：上級イレイザーの一人である、青の革ジャンを着込んだ青い髪が特徴の青年。

飄々とした性格から掴み所のなく、普段は気怠そうにしているが、その裏では人知れず計画を進めていたりと抜け目がなく、デユレンに続いて底が見えない。

### ポセイドンイレイザー

解説：クレンが変身する神話型イレイザー。

全身の所々に魚の意匠が見られる海のように深い青の体色。その上から青と黒のローブを身に纏い、右手には金色に光輝く三叉槍を手にし、バイザーのような青い瞳が特徴的な頭部には幾つもの耳飾りと、王のような冠が見受けれる。

自在に水を生成・変容させる事が可能であり、自身と全く同じ姿形・能力を持った水分身を生み出せる他、自身の肉体をゲル状に変化させて物理攻撃を無効化する事も出来る。

海神の武器として有名なトライデントを彷彿とさせる黄金の三叉槍を得物とし、近接

戦闘は勿論、遠距離からの雷撃攻撃も行える。

## ノイズイーター

解説：本編開始前の数週間前から街で噂される『血のように赤い眼を持つ怪物』の都市伝説と、実際の事件の証言からS・O・N・G. が呼称する赤眼のイレイザー。

その正体はデュレン達がシンフォギアの世界の人間を人工的にイレイザーに変質させ、その上でノイズを喰らわせて短期間で力を付けさせようと試みるイレイザーの亜種。

ノイズを喰らえば喰らった分だけ力を増していき、その影響で瞳の色も禍々しい赤色に変質するようだが、ノイズを喰らい過ぎれば徐々に理性も失われて暴走する危険性が高まる模様（アスカ曰く、暴走すれば捨て駒にしか使い道がないらしい）

しかし、戦いの中で追い詰められ感情を昂らせた際に謎の急激なパワーアップを果たしたりなど、その力の全貌は未だ謎が多い。

## 立花響編（前編）

### 第三章／改竄×断ち切られた繋がり

—リディアン音楽院—

私立リディアン音楽院高等科。響たち装者が普段通う学校であり、その名の通り音楽教育を中心としたカリキュラムで、私立芸術系ながら学費は安いらしい。

元々はシンフォギア装者の選出、並びに音楽と生体から得られる様々な実験データの計測も秘密裏に行なっていた施設だったが、後にそれらの機能は停止されて今は普通の学園として運営されており、ノイズを始めとする数々の熾烈な戦いに身を投じる響達にとって、この学園に通う事は平穏な日常を噛み締められる大切な場所の一つでもある。

—その筈だった……。

「……待つてつ、ねえ待つてよっ！クリスマスちゃんってばっ!!」

「だあああーっ!!いい加減しつけーぞお前っ?!つか気安く名前呼ぶなって言っただろっ!!」

早歩きでそんな怒号を上げながら学園の廊下を歩くのは、何やら迷惑そうに険しい顔を浮かべるクリスだ。ズンズンと何かを振り切ろうと歩くスピードを速めてチラツと振り返る先には、そんなクリスを何処か必死な形相で追い掛け回す響の姿があり、響はどうかクリスに追い付いて彼女の手を後ろから掴んだ。

「なっ……!こんのっ、離せってっ!」

「良いから私の話聞いてっ!皆の様子が可笑しいんだよっ!未来も、調ちゃんも切歌ちゃんもっ……!友達も皆、私の事を覚えてないのっ!コレって絶対に可笑的い——!」



「可笑しいのはおめーだろっ?! ってかそもそも、お前一体誰なんだよっ?!」

「……………?!」

混乱した様子で泣き続けるかのようにクリスの手を掴むも、知らない赤の他人に向けるかのような目付きで睨みながらハッキリとそう告げたクリスの言葉に響は絶句し、徐に彼女から手を離しながら後退りしてしまう。

「も、もしかして……………クリスちゃんも、私のこと……………?」

「ああっ……………? だから何の話だよさつきからっ? 遠慮無しに人の腕取りやがってっ……………大体何なんだよお前? お前にあたしの名前なんか名乗った覚えねーぞ?」

「……………っ……………!」

いってえなーと、思いのほか響が掴む手の力が強過ぎたのか手首を摩りながら不審げ

な眼差しを向けるクリスからの質問に対し、響は動揺を露わにした瞳を震わせて後退りすると、そのまま背を向けて逃げるようにその場から走り出した。

「あ、おいコラっ?! 待てよオイっ! 逃げんなっ!」

(ツ……………どうして……………一体何が、どうなって……………?!)

後ろから呼び止めるクリスの怒鳴り声に応じる余裕もなく、治まらない動揺を抱えたまま響はすれ違う生徒達にぶつかりそうになるのも目もくれず踊り場の階段を駆け下りていき、自分のクラスがある階に降りて漸く足を止め、トボトボと意気消沈した足取りで自分のクラスに戻り扉を開けていく。

「それでねー?……………あ」

「……………」

響が扉を開けてクラスの中に足を踏み入れた瞬間、今し方まで賑わっていた筈のクラ

スの賑やかな雰囲気は急に静かになり、冷やかな空気が流れる。クラスメイトの全員が全員、響を一瞥した後に気まずげに目を逸らしたり、あからさまに関わり合いたくないが為に席を立ってクラスから退出したりなど、明らかに響という存在を疎んじて避けているのが手に取れて分かった。

(この感じ、空気……あの時と……同じだ……)

その光景に、空気に、響は嫌というほど身に覚えがあった。

それは数年前、彼女と同じシンフォギア装者である風鳴翼と当時のガングニールの装者だった“天羽 奏”の二人が組むツインボーカルユニット、『ツヴァイウィング』のライブ会場に観客として居合わせた時、会場に突如現れたノイズと、それを迎え討つ装者との戦闘に巻き込まれ、生死をさ迷う大怪我を負った事がきっかけだった。

あの時はどうか一命を取り留めたものの、事件でただ一人が生き残ったことで死者の遺族から生じた妬みが社会現象となり、居宅の物的被害に及ぶほどの迫害や、響本人は学校内でのいじめを受ける事になった。

結果、そのせいで家族はバラバラになり、自身も辛い思いをずっとしてきた。

それでも、奏が遺してくれた「生きることを諦めない」という言葉を糧にそんな苦難を乗り越え、リディアンに入学して多くの仲間を作り、家族の絆も取り戻してあの過去を乗り越えた筈だったのだ。なのに……

「……………未来、あのさ」

「……………あ」

ふらふらと、何処か覚束無い足取りで席に着く未来の下に歩み寄る響だが、いつも陽だまりのような笑顔を浮かべて自分を受け入れてくれる彼女の姿は其処にはなく、未来は他の生徒達と同様に気まずげに視線を泳がせて響と目を合わそうとせず、教室の外から慌てて手招きする別の友達を視界の端に捉えて席から立ち上がる。

「ごめんね立花さんっ。私、用事があるから……………それじゃ……………」

「み、未来っ……………」

そうやって未来は逃げるように響の横を通り過ぎ、教室の外で待つ友達と一緒に何処かへ行ってしまう。その背中を止めようと一瞬手を伸ばし掛けるが、先程のクリスのように未来にまで明確に拒否される事を恐れて中空で手を止めてしまい、やがて腕を下ろした響は力無く俯き、自分の席に座り込んで腕の中に顔を埋めてしまう。

(…………どう、して…………未来も、クリスちゃん達も、皆もっ…………何で急にこんな事につ…………) つい昨日まで一緒に笑い合っていた筈の親友、仲間や友達が前触れもなく自分の事を避け出したり、自分の名前や顔を忘れるなど有り得るハズがない。

きっと何か理由がある筈だと、この事態に至った原因が何なのかを必死に思考して洗い出そうとするが…………

(…………あれ…………なんで…………思い、出せない…………? ううん、そんな筈ない…………! こうなった

原因を私は知ってる、聞いてるハズ!……でも、誰に……?)

そうだ、自分は確かに知っている筈なのだ。

未来達があんな風が変わってしまったと思われる原因を、その元凶を、ある人から教えられて。

……だのに、どんなに思い出そうとしてもまるで『靄』が掛かったかのようにそれらの記憶を何故か思い出す事が出来ない。

知っている筈なのに思い出せない、そのもどかしさにも似た気持ち悪さに辛そうに頭を抱え、響は唇を噛み締めてしまう。

(駄目だ……何も思い出せないっ……どうしてっ? 一体、私に何が起きてるのっ……?!)

未来やクリス達は自分の事を覚えておらず、自分の記憶も霧が掛かっているかのように肝心な事を思い出せないなど、明らかに普通じゃない状況に響も沈痛の表情を浮かべ

てしまうが、その時ふと、何かを思い付いたように勢いよく席から立ち上がった。

（そうだ……本部に行けば、師匠やエルフナインちゃん達が何か知ってるかも……！）

きつと弦十郎達ならこの異変に気付いて何か掴めているかもしれない。そう信じて思い立った響は鞆を手にとると、S. O. N. G. の本部に向かう為に教室から勢いよく飛び出していったのだった。

「——へえ……まだ元の記憶が残ってたんだあ、あの子」

——その様子を学園の外から見つめる怪しい影……校門から出てきた響を見て面白そうに笑い、踵を返してそのまま何処かへと転移するように姿を消した青髪の青年の存在に気付かずに。

## 第三章／改竄×断ち切られた繋がり①

「——そうか、やはり先日 of 戦闘で現れたアルカ・ノイズの出処は未だ分からず終いか……」

「はい。現段階での調査の結果では、恐らく錬金術師が何かしらの目的でばら蒔いた可能性が高いと思われませんが……それにしたって、何故何もない街中に何の前触れもなく……」

S. O. N. G. の本部である潜水艦が停る埠頭の敷地内。艦の停泊中は表向きではダミーカンパニーの名前で港を使用しており、その間に多数の整備員やスタッフが潜水艦の補給と整備の為に今も忙しなく動き回っている。

そんな中、敷地内を共に歩く弦十郎とエルフナインは艦に向かう道すがら、先日のバットトレイザーの事件……否、"アルカ・ノイズの出現"について話し合いを行って



おり、エルフナインの見解を一通り聞いた弦十郎は「ふむ……」と顎に手を添え何やら考え込んだ後、エルフナインの顔を見つめ小さく頷いた。

「何れにせよ、アルカ・ノイズを発生させた犯人の正体と目的が読めない以上、まだ気を抜く訳にはいかなそうだ。今後も警戒態勢を怠らず何が起きてもいいように備えておかななくてはな」

「そうですね。僕も調査報告書を見直して、気になる点がないか洗い出しておきます。クリスさん達にも朝方に連絡して本部に集まってもらえるようお願いしていますから、其処で今後の事も——」

「——違うんですっ！お願いだから話を聞いて下さいっ！」

「だから、関係者以外の立ち入りは許可出来ないんですって！」

「………うん？」

アルカ・ノイズの謎の発生と今後の対策について弦十郎達が話し合いを進める中、遠くから何やら揉める声が聞こえ振り向く。すると其処には、出入り口のゲートにてリディアン製の制服を着た女子生徒が二人の警備員に取り押さえられる姿があり、騒ぎが気になった弦十郎は警備員達の下に近付いていく。

「どうした、何かあったのか？」

「あ、司令……！実はこの娘が無断で敷地内に侵入しようとしてたので引き止めようとしたのですが、強引に中へ入ろうとして……！」

「ッ……！師匠っ！」

「……？師匠？」

「司令？何かありましたか？」

警備員達に取り押さえられる女子生徒……響が弦十郎の顔を見て安堵するも、弦十郎

は彼女が口にした師匠という呼び方に訝しげに小首を傾げてしまい、更に其処へ弦十郎を追ってきたエルフナインを見て響の表情が柔らかくなる。

「エルフナインちゃんも！良かったつ、二人が来てくれて……！」

「え……？どうして、僕の名前を？」

「その制服はリディアンの……という事は、もしかやクリスマス君達の友人か何かか？」

「え……ま、まさか、二人まで私の事をつ……？」

学校でのクリスマス達と同様、自分の顔を見てまるで初対面の人間に出会ったような反応を見せる弦十郎とエルフナイン。

そんな二人の反応にシヨックを隠せない響だが、其処でハツと何かを思い出したように自分の胸元に手を伸した。

「そうだ……！コレ！私の事を覚えてなくても、コレさえ見てくれれば……え……？」

そう言つて、響は首に掛けたギアのペンダントを弦十郎達に見せようとするが……伸ばした手は何故か空を切り、思わず首元に目を向けると、其処には朝に忘れず身に付けていた筈のギアのペンダントがいつの間にか何処かへと消えてしまつていたのだ。

「な、何でっ?!私、ちゃんとガ……ガ、ン……あ、あれっ……？」

驚愕と共に制服のポケットも慌てて漁り、ペンダントを探しながら自分のギアの名を弦十郎達に告げようとするも、何故かその名前を思い出す事すら出来ない。

……いや、それどころかそのペンダントが一体何だったか、そもそもそれが何の為のモノだったか……。

今の今まで覚えていた筈の事が突然思い出せなくなり、響は戸惑いを露わに頭を抱えて更に混乱してしまうが、弦十郎達はそんな響の様子を見ても不審を覚えるばかりだった。

「よく分からんが……此処は関係ない人間が立ち入るには些か危険な場所だ。それに君、その制服を着ているという事はリディアン生徒だろう？この時間帯ならそろそろ授業が始まつてる頃だが、学校はどうしたんだ？サボリはいかんぞお、サボリは」

「いや司令つ、それより一般人がこの場所へ立ち入った事を問題視すべきでは……」

「なに、別に不味いモノを見られた訳でもないんだ。俺達がこの場で注意して、この娘が外で口外しなければさほど問題にはならんだろう。そういう訳だから女子生徒君、敷地内に勝手に入った事は俺達も大目に見るから、君も此処での事は無闇に人に話さないでいてくれると助かるんだが……」

「……………」

勝手に敷地内に侵入した件を目を瞑る代わりに此処での事を他言無用にして欲しいと穏便に事を済ませようと頼む弦十郎だが、そんな弦十郎の声が聞こえている様子もなく、響は表情を隠すように俯いており、ただ無言のままゆっくりと頭を下げていく。

「すみません、でした……私の勘違いだった、みたいですよ……それじゃ……」

「お、おい」

そう言いながら踵を返し、響はまるで幽霊のように覚束無い足取りで来た道を引き返していく。

そのただならぬ様子に流石に心配になり思わず引き止めようとする弦十郎の声も聞こえていないのか、響は一度も振り返る事なくその場を後にしていき、そんな響の背中を見送りながら弦十郎も何処か腑に落ちない様子で頭を掻いてしまうのであった。



「……つまり、立花響に関する物語を書き換えた、と？」

とある市内に存在するバーの席。酒気の仄かな匂いが漂う中、店のカウンター席でグラスに入った酒を傾けながらデュレンが隣の席に同席するアスカにそう投げ掛けたのは、今の響の身に起きている異常……彼女自身やその周囲の人間の記憶が改変されている件についてであり、アスカはグラスの酒を揺らしながら淡々と答える。

「アイツはクロスの周りをうろちよろしてやがったからな。あのまま奴に付いて回られてたらマジで装者達と手を組み兼ねない……そうなる前に手を打っておいたのさ」

「……成る程……だが立花響はこの物語における主人公だ。そんな重要なキーパーソンに手を出すのなら、一言相談を寄越せ……今のところ問題はないようだが、貴様が下手な手を打っていればどうなっていた事か……」

「わーってるよつ、だから念の為に保険も用意して今回の改竄に及んだって何度も言ってるんだろつ。毎度毎度小言が多いんだよ、お前はっ」

釘を刺すように横目で睨み付けてくるデュレンに向けて鬱陶しげに片手を振り、アス

力は酒が入ったグラスを一気に飲み干していく。そしてデュレンも軽く鼻を鳴らしながら自身も酒を口にしていくと、二人の背後から青髪の青年が現れて飄々とした笑みで声を掛けた。

「あーらら、真つ昼間から酒浸りなんて悪いなあ。酒臭い男はモテないよー?」

「クレンか……」

「うーるせーよっ。こっちは一働きしてきた後なんだ、ちつとの酒ぐらい味わわせろっ」

「カリカリしてるねえ。ま、君とデュレンが二人で飲んでて場の空気が和む訳もないか」

ケラケラと笑いながらアスカの隣の席に座り、青髪の青年……クレンはバーテンダーに軽い飲み物を注文すると、デュレンがグラスを置きながらクレンに向けて口を開く。

「それで、立花響の今の様子はどうなっている?」



「ちゃんと改竄の影響はあるようだよ。彼女の周りの人間と、立花響との関係性は完全にリセットされている。ただ、彼女自身はまだ改竄前の記憶が残ってるようだ……やっぱり僕達の知らない所で彼と交流があったのか、改竄の進行は他よりもだいぶ遅れているみたいだね」

「そら見るよ、あのままあのガキを放置してたら奴以外にも厄介な敵が増えてたって事だろう？早い内に対処してて正解だった訳だ」

「俺が問題視してるのは貴様の独断行動についてだ。幾ら結果がマシだろうと、その過程で足が付けば今までの蓄積とこれからの動向すら無意味になり兼ねないと何度も……」

「あーっ、もういい分かったってっ！俺が悪うござんしたよっ！」

再び始まろうとしたデュレンの小言を遮るようにわざとらしく声を大に叫ぶと、アスカはグラスを置いて席から立ち上がる。

「つたく……ただまあ、此処まで分かりやすい異変は奴も既に勘付いてる筈だ……そろそろ次の手の準備を始めとくとするか」

「働き者だねえ。まあ今回は君が主導の改竄だし、僕達は適当に酒のつまみにでもさせて楽しませてもらうよ」

「チツ、自分は無関係だからって余裕かましやがって……とここでデュレン。もし仮に奴と戦う事になったら、別にやっちまっても構わねえんだよなあ？」

「……貴様の勝手にすればいい。わざわざ俺の許しを得る必要もないだろう」

「そーかよ……なら後から文句つけて来ても俺は知らねえからな」

今の内に忠告しなかつた事を咎めるなよと、アスカはそのまま二人に背を向けて店を出ていく。そしてアスカを見送ったクレンは注文して出てきた飲み物のグラスを手にとると、デュレンを横目に口を開く。

「いいのかい？彼は現状で唯一イレイザーを追い詰められる相手だ。前回僕が教えた、ノイズ喰らいのイレイザーの進化の条件が君の予想通りだとしたら……」

「……確かに奴を利用する手もあるが、それは同時に俺達の計画が破綻する危険性をも抱えねばならない事になる。わざわざそんなリスクのある手段に拘るよりも、もつと手堅い方法で研究を進める方がより効率的だろう」

そう言いながらデュレンは脇に置いてあるタブレットを手にし、画面に触れる。直後、タブレットの画面にノイズが走って幾つかの映像が表示されていくのを見て、デュレンは僅かに目を細める。

「この戦姫達の物語に拘らずとも、研究と実験を進めるだけなら他の物語でもこなせる……それまで奴らには、この物語の中で好きなかだけ英雄気分を堪能させておけばいい……」

## 第三章／改竄×断ち切られた繋がり②

— 噴水公園 —

—— 視界が繰り返し何度も点滅し、まともに前が見えない。

頭に鈍い痛みが走り、自分の中身が少しずつ違う『何か』に塗り替えられていくのが分かる。

「うつ……くつ……頭、がつ……」

覚束無い足取りで弦十郎達と別れてから宛もなく街をさ迷い、響がその足で辿り着いたのは学校帰りに仲間達と共に良く買い食いなどして寄り道に使っていた公園だった。

ふらふらと見るからに危うい足取りで公園内を歩き、すれ違う人々も気になって思わ

ず目線で追ってしまっているのにも気付かず、公園の噴水の近くまでやって来た響は足を止めると、近くのベンチに力なく座り込んでしまう。

(ツ…………ダメだ…………やっぱり、どんどん記憶が薄れ始めてるんだ…………私ももう、さっきの人達の顔が…………)

頭を抑えながらつい先程までの記憶を思い返そうとするも、別れてそう時間が経っていない筈の弦十郎達の顔でさえもう思い出す事が出来ない。

恐らくこれも、自分がある人から聞いた元凶の仕業である事だけはまだ覚えてる。

しかし、いずれこの記憶すらも忘却し、時が訪れれば自分も為す術もなく未来達のように別人に変わってしまうのだろうか。そうなれば、未来達を元に戻す事も…………

(…………それだけは、ダメだ…………でも、記憶を無くしてる今の皆を頼る事は出来ない…………何とか、私だけでもこの異変を止めて…………でも、どうやって…………?)

自分にはその力があつた筈だ。誰かを守る為の力。自分の大切な約束を、大切な人達を守る為の力が。

……だが、胸元にあつた筈のソレは今は何処にもなく、胸に手を伸ばしても掴むモノはなく空を切るだけだった。

(っ……今の私には、何も出来ないの……？未来達を助けて元に戻す事も、この異変を解決する事も……私だけじゃ……)

今まで自分を傍で支えてくれてくれた親友も、共に戦う仲間も、誰かを救う為に力を貸してくれていた輝きも今の自分は持たないと自覚した途端、響の心の内から薄暗い感情が溢れ出し、それに呼応するかのように頭の痛みが更に酷くなる。

「イツ、たっ……！ア、タマがつ……割れるっ……痛いっ……アッ……！」

自分を嘲笑うかのように不快なノイズが脳裏を駆け走る。

自分の目に映る全てを塗り潰さんとばかりに、視界が点滅して砂嵐が走る。

それは忘却へのカウントダウンを意味するのか、それとも次の一瞬には何もかも忘れてしまう予兆なのか。

ただ分かるのは、今の自分には受け入れ難いその運命から逃れる術がない事だけ。

何も出来ず、ただ何者かの悪意に蝕まれる事を受け入れるしかない無力感と悔しさのあまり、響の目頭に熱いモノが込み上げて来る。

(いやだ……いやだっ……!! 忘れたくないっ……!! 忘れたくないっ!! 大切な親友をつ、大切な人達との記憶をつ……!! こんな簡単につ……渡したくないっ!!)

仲間達との思い出を、記憶を、繋がり奪われたくない。たまるものか。

見えない何かに必死に抗うように強くそう想い、しかし、それで痛みが和らぐ事はない。

寧ろ抗えば抗う程にノイズの酷さが増していき、身に覚えのない”別の記憶と感情”が頭の中に流れ込んで来る。

——自分は孤独だ。心配してくれる人なんて誰もいない。

ノイズを憎め。奴らの存在が自分の全てを奪ったんだ。

繋がりなんて必要ない。そんなものを期待した所で、自分に手を伸ばしてくれる人間なんて……

(違う……違うっ！これは私の記憶じゃないっ！私の本心じゃないっ！私の中に入って来ないでえっ!!)

まるで嘔くように内から溢れ出てくる、薄暗い声なき声をこれ以上聞くまいと耳を塞いで頭を振り、必死に拒絶するあまり思わずベンチから立ち上がって逃げるように走り出してしまふ。



だが急に立ち上がったせいで足が纏れてしまい、そのまま前のめりに倒れてしまいそうになる響を、真横から突然飛び出してきた誰かが寸前の所で抱き留めた。

「つ……大丈夫かつ……？」

「うっ……へ、へいきですっ……すみません……ありがとうございます——」

辛そうに顔を俯かせながらも、助けてくれた誰かに謝罪とお礼を口にして徐に身を離すと、その人物の顔を見上げたと共に、響は目を見開き息を呑んだ。

顔を上げて最初に視界に飛び込んできたのは、まるで宝石を彷彿とさせるような真紫の瞳。

額から汗を流し、何処か息が上がってるように肩を僅かに揺らす黒髪の青年の顔を見た瞬間、知らない筈なのに、何故か良く分からない強烈な既視感を感じた。

「あなた、は……確か……」

「……………」

思わず口から溢れたその言葉を聞き、青年……蓮夜は何かを察したように眉を潜め、一瞬哀しげに目を伏せる。しかしすぐに真顔に戻り、響の目をまっすぐ見据えながら重々しく口を開いた。

「ずっと探してたんだ、お前を……幾つか質問をする前に、一つだけ聞かせてくれ……お前は今、何処まで元の記憶が残ってる……？」

「え……」

傍から聞けば、突拍子のない発言にしか聞こえない蓮夜の問い掛け。だが、それが何を意味するか理解出来た響は思わず声を漏らし、気付けば、あれほど自分を苦しめていたノイズや薄暗い声はいつの間にか収まっていた。



「――黒月蓮夜、さん……？」

「ああ。昨日、お前やお前の仲間達と出逢った時にそう名乗って、戦場でも何度か成り行きで一緒に戦った事がある……覚えているか？」

「……すみません……何となくそんな事があつたような気はするんですけど、その辺りの記憶も今は朧げで……」

「……そうか……もう其処まで奴らの改竄が及んで……いや、それでも記憶が残っているだけまだマシかもしれないな……」

その後、何とか落ち着きを取り戻した響は蓮夜とベンチに並んで座り、今の自分や未来達の身に起きている異常事態……イレイザーによる改竄や、彼女が忘れ掛けていたシ

ンフォギアやS・O・N・G、お互いが出逢つてからの経緯について話を聞かされていた。

元の記憶の名残りが残っていたおかげか、普通なら有り得ないと切つて捨てられるような話をすんなり受け入れる事が出来た響だが、彼女の今の状態を聞かされた蓮夜は口元を手で覆いながら何やら熟考し、響はそんな蓮夜の横顔を見つめて恐る恐る問い掛ける。

「あの……それでつまり、私の記憶がどんどん薄れ始めて違うものに変わり出してるのも、未来達が可笑しくなってるのも、そのイレイザーっていう怪人の力のせい……つて事なんですよね……？」

「……そうだ……俺もその異変を感じ取つて色々調べてみたが、昨日のイレイザーとの戦いはアルカ・ノイズの発生という事にされていて、もつと以前の事件も別の内容にすり替わっていた……それでこの物語が改竄に晒されていると知つてお前達の様子を確かめに行ったら、リディアン……だったか？お前が通う学園の校門で生徒に話を聞いたら、お前が急に早退したと聞いてずっと探し回つてたんだ……急いでたあまり後ろ姿が

よく似た女子生徒に声を掛けて、警官に職務質問をされたりと要らぬ時間を食ってしまったりはしたが……」

住居不定の身での職質は流石に焦ってしまったと、此処に辿り着くまでにあつたトラブルを若干落ち込みながら語る蓮夜に思わず苦笑してしまう響だが、僅かに目を逸らして何か考える素振りを見せた後、何やら暗い表情を浮かべて俯いてしまう。

「でも今までの話を聞くと、私達がこうなってるのはイレイザーが私達の事を脅威と見なしたから、って事なんですよね……」

「……そうなるな……それで予想通り、奴らはお前達を潰す為に改竄を施し、ご丁寧に自分達に関する情報だけでなく俺とお前達の繋がりまで消した……恐らく大なり小なり、向こうも俺達の関係性に気付いていたのかもしれない」

「……だとしたら、やっぱり私のせいなのかな、それ……私が蓮夜さんの忠告をちゃんと聞かなかつたから、私だけじゃなく未来達まで……」

「それは違う」

蓮夜が危惧した通り、自分だけでなく未来達にまで被害が及んでるのは自分が彼と協力する事に拘り過ぎたせいかもしれないと責任を感じる響に、蓮夜がハッキリと否定する。その思わぬ言葉に響が驚いて思わず蓮夜の顔を見ると、蓮夜は真剣な眼差しで響の目を見つめながら言葉を続けていく。

「俺もお前も、確かに奴らに対する警戒が足りていなかったかもしれないし、他に上手い方法があったかもしれないが、少なくともお前が協力を持ち掛けてくれた事は間違っていない。俺も昨日の戦いのように、奴らが未だに大勢の無関係な人間を巻き込む事を厭わないと分かった以上、その被害を少しでも抑える為にS・O・N・Gとの協力は必然になると思ってた……だから昨日もお前達の司令である風鳴弦十郎とも情報を交わしながら、奴らに悟られないように水面下で少しずつ対策を講じていこうと話を進めたんだ」

「……………そうだったんだ……………」

ならば尚のこと、自分が余計なお節介を焼く必要ななかったのではないか？

記憶を弄られている影響か、或いは親友や仲間達があなつてしまったシヨツクを未だに引きずっているからか、何時もよりも消極的な思考から抜け出せない響の心情を察し、蓮夜はそんな響の横顔を見つめて僅かに考える素振りを見せると、両手の指を絡めるように握り合わせていく。

「そのきっかけを作ってくれたのは、お前だ……最初にお前が歩み寄ってくれたから、俺もそうするべきだと迷う事なく決断する事が出来たんだ……だから決して、一緒に戦って欲しいと言ってくれたお前を疎んじた事は一度もないし、そう言つて手を差し伸べてくれた事にも、感謝して……」

「……蓮夜さん」

「寧ろ、俺はお前達に謝らないといけない……この世界の住人であるお前達や、無関係な人間をこれ以上巻き込まないように努力すると口では偉そうに言いながら、結局お前達の手も借りないと被害を最小限に抑える事も叶わず、今もお前や仲間達が改竄に晒され

てるのに食い止められなかった……本当に、すまない……」

「そ、そんなつ！頭を上げて下さいっ！私はぜんぜん気にしてませんからっ……！」

自らの力の足らなさを謝罪し頭を下げる蓮夜に響も慌ててしまい、止めに入る。そして促されるまま申し訳なさそうに頭を上げる蓮夜の顔を暫し見つめた後、響は突然小さく噴き出し顔を背けてしまう。

「？どうかしたか……？」

「あははっ、いえ……私、てつきり蓮夜さんつてもっと気難しい人なのかなって思ってたんですけど、何ていうか……案外素直っていうか、実は思ってたより純粋な人なのかなって思ったら、つい可笑しくなっちゃって」

「……気難しい、か……確かに、店長にもよく表情が固いと注意されて叱られる事がある……俺としては普通になっているつもりなんだが、どうにも俺が思っているより無愛想に見えるらしい……慣れない頃はそれでよく顧客を怖がらせてしまう事も少なくはな



かったし、仮にもしそれで気分を害した事があつたなら、すまない……」

「いえいえ、そんな事ないですよ、大丈夫！あ……でも今ちよつと思ひ出したけど、カフェで蓮夜さんと話し終えた後で、確かクリスちゃんがぷりぷりはしてたかも？」

「……そう、だったか……いや、自分でも固すぎたとか、イレイザーの件から手を引いてもらいたいあまり乱暴な言い方をしてしまったと自己嫌悪も覚えたが、初対面で、しかも真面目な話をしながら愛想を振り撒くのもどうかと……しかし、そうか……だとしたら本当に申し訳ない事をしてしまった……」

「あ、で、でも、一応クリスちゃんも蓮夜さんの言い分には納得してましたし、あまり気にしなくても大丈夫ですよ、きつと！」

「そう、だろうか……そう言ってもらえると助かるが……」

余程自分の愛想の悪さを気にしているのか、僅かに目尻を下げて安堵しつつも苦笑する蓮夜に釣られ、響も柔らかな笑顔と共に声に出して笑う。その横顔を見て、蓮夜は微

笑を浮かべたまま安心したように口を開いた。

「やっと少しだけ、調子が戻ってきたみたいだな……」

「……へ？」

「いや……初めて戦場で会った時、そうやって笑っている顔が印象に残ってたからな……だからこうして改めて見ると、やっぱりお前は笑ってる時の顔が一番似合うと思う……」

「そ、そうですかね？あははっ、何だか照れちゃうな……」

「ああ。特に一番輝いて見えたのは、仲間達と一緒にいた時だった……だから、それを取り返さないとな……」

「……え？」

穏やかな口調が不意に真剣なものに変わり、ベンチから徐に腰を上げる蓮夜を呆然と見上げる響。そんな彼女と向き直り、蓮夜は再び言葉が続けていく。

「今のこの世界は、イレイザーによる改竄を受けて誤った歴史を歩んでる……だがその改竄を行ったイレイザーを倒しさえすれば、改竄された歴史は消え去り、元に戻る。そうすれば……」

「……未来達が……記憶を書き換えられた皆が、元に戻る……？」

つまりはまだ、未来達を救う手立てがあるという事。目を見開いて呆然と呟く響の言葉に蓮夜は無言のまま頷き返し、それを見て、響もベンチから勢いよく立ち上がった。

「だったらっ、だったら私にも手伝わせて下さいっ！未来達を助けられるんなら、私も何か……！」

「いや、今のお前を戦いの場に連れていく事は出来ない……シンフォギアも消えて戦う術がない以上、戦場に居合わせるのは返って危険だ。お前は此処に残っておいた方がい

「い

「うっ……それ、は……そうかもしれないけど……でも……」

蓮夜の言う事も最もだし、未来達を助けたいのもそうだが、もし今此処で蓮夜と離れ離れになってしまえばまた先程のように記憶の改竄に苛まれてしまうのではないか。

蓮夜と再会したおかげか今はその影響も収まってるようだが、また独りになればあの苦しみに襲われるのではないかと思うと恐怖と不安が押し寄せて暗い表情を浮かべてしまい、そんな響の様子を見て彼女の心境を察した蓮夜は俯き僅かに思考すると、ズボンのポケットから一枚のカードを取り出し、響の手を取ってソレを握らせていく。

「？これって……」

「御守り……と呼ぶには心許ないかもしれないが、持っていて欲しい。例え離れていても、ちゃんと繋がっている……俺なりの、その証だ」

語気を強めてハッキリとそう断言する蓮夜の『繋がり』という言葉聞き、響は彼に手渡された何も描かれていない空白のカード……蓮夜が変身の時に使うのと同じブランドカードをジッと見つめ、両手で大事そうにカードを握り締めながら蓮夜の顔に視線を向けると、蓮夜は小さく頷いてそのまま公園の出口に向かって歩き出していくが、途中でふと足を止め、響の方に振り返った。

「……少しだけ待っていてくれ。必ず、奪われたお前の繋がりを取り戻してみせる……約束する」

「……蓮夜さん……」

彼なりの励ましのつもりなのか、響の中の不安を少しでも和らげようと不器用ながらも微笑み、蓮夜は今度こそ立ち止まらず元凶のイレイザーを探しに公園を後にしていく。

そして響も手の中のカードを握り締める力を強めてその背中を見送る中、その背後には……

「……………」

響から少し離れた場所にある雑木林の中。其処にはフードで顔を隠した何やら妖しげな風貌の男が遠巻きに響を見つめる姿があり、男は響を見据えたまま彼女に悟られぬようにゆっくりと木の影の中へと移動し、そのまま何処かへと姿を消してしまったのであった……。

## 第三章／改竄×断ち切られた繋がり③

市内の繁華街。信号の音が鳴り渡るスクランブル交差点では外回り中のサラリーマンやシヨツピングを楽しむ若者など多くの人々が行き交い、近くのデパートの壁に取り付けられた大画面には、海外で活躍する風鳴翼のステージでの盛り上がるの様子を彼女のファンである番組出演者が熱く語る特集番組が流れている。

そんな街の風景を後目に、響と別れて改竄を行った犯人であるイレイザーを探す為に街に出た蓮夜はある路地の裏に訪れてその場に屈み、何かを探るかのようにジツと何も無い地面を見つめていた。

(……気配は此処で途切れている……こうもあからさまに痕跡を残しているという事は、やはり俺を誘ってるつもりなのか……)

顔を上げると、路地の奥は暗闇に覆われていて此処からでは何も見えない。追ってき

た気配……イレイザーの痕跡が此処で途切れているという事は、恐らく此処で人間態に戻りこの先に行く場所に潜んでいるのだろうか。

（この先には確か古い市街区があつたか……成る程、人を寄せ付けないという意味では持つてこいの場所だな……）

人に聞いた話だが、十年以上前この街には表通りの繁華街とは別に、あちらより以前に活気づいていた大型のモール街があつたと聞く。

しかし、ちようど特異災害として確認されたばかりの頃のノイズが現れて猛威を振るい、政府側もまだノイズに対抗する術を確立していなかった事もあつてまともに太刀打ち出来ず、街は著しい被害を受けてしまったらしい。

その後、政府はノイズの情報を隠蔽する為に人体に危険な有毒ガスの漏洩を理由にモール街を放棄し、まだ発展途上だった表通りの街に開発計画を集中して建て直したと聞くが、それも噂や憶測が入り交じっていて何処まで本当かは分からない。



ただ政府が一向に復興再開発を行わない事から噂を鵜呑みにする人間も多く、破棄された旧モール街に寄り付くのは素行の悪い不良達や行き場を失ったホームレスぐらいしかいないらしい。

(……もしかすると、奴らはそういった場所に集まる人間を使ってイレイザーを生み出しているのか……?)

ノイズによって棄てられた街に集った人間をイレイザーにし、ノイズを喰らわせて理性を犯す力を付けさせる……。

……何とも趣味の悪いと、想像するだけでも気分を害して不快感に眉を顰め、蓮夜は徐に身を起こして立ち上がっていく。

(とにかく、この先に犯人がいる可能性は高いが、こんなわざとらしく痕跡があるのはどう考えても怪しい……罠、と考えるのが妥当だが……)

この先に何が待ち受けているかは分からない。リスクを考慮して一度引き返す手も

あるが、そうなるに異に気付かれた事を知ったイレイザーに逃げられる可能性もある。そうなれば次に発見出来るまでに一体どれだけの時間を要する分からないし、何よりも響の今の過酷な状況を考えると不必要に時間を掛ける真似は避けたい。

……ならば答えは一つしかない、蓮夜はゆつくりと路地の奥へと進み出し、そのまま闇の中に溶けるように姿を消していった。



—旧モール街—

寂れた廃ビル群が何処までも広がる旧モール街。ノイズの被害を物語るかのように当時の傷跡がそのまま残されてる建物や、不良達がこの場所で好き放題に荒らした落書きの跡などが多く見られるが、今は人気は一切なく寂れた風が瓦礫を揺らして鳴らす不気味な音が反響し、まるで怪物の叫び声のような怪奇音が街中に響き渡る。

そんな音を耳に、一際目立つビルの跡地の中で山のように盛り上がる瓦礫の上に腰を下ろす金髪の男……アスカは薄暗い闇の中で、何かを待つように顔を俯かせていた。

「………………。よう、やつと来たかよ」

ニヤリと口端を吊り上げ、徐に顔を上げたアスカがビルの入り口に目を向ける。すると其処には、ジャリツと地面に散乱するガラス片を踏み鳴らし、光が差し込む入り口からビルの中へと足を踏み入れる青年……蓮夜の姿があり、蓮夜も瓦礫の山の上に座り込むアスカを見付けて険しげに目を細めた。

「お前だな、此処までの足跡を残していたイレイザーは……」

「へえ、ご丁寧な俺の臭いを嗅いで此処まで辿り着いたのかよ？ ハハッ、まるで犬っころみてーだなあ」

「……否定しないのなら肯定と受け取らせてもらうぞ……これ以上、この狂った物語を

長続きさせる気はないからな……」

鼻を鳴らして挑発するように笑うアスカの話にも聞く耳を持たず、目の前の男をイレイザーと認定し何処からか取り出したクロスベルトを腰に巻き付けていく蓮夜。それを見て、アスカも重い腰を上げて立ち上がりながら瓦礫の山を降りていき、蓮夜と対峙してスッと目を細めていく。

「記憶を失っててもソレか、相変わらず俺達を潰す事にご執心みてえだな……そういうところがムカついてたぜ、昔からな」

「……? 何の話だ?」

「ハッ、何だよそんな事まで忘れちゃったのか? 悲しいねえ。アイツほどでないにしろ、俺もテメエとは何度もやり合って煮え湯を吞まされてきたつてのによお」

肩を竦めてわざとらしく悲しそうな反応を見せるアスカに対し、蓮夜は訝しげに眉を顰める。だが、彼の口振りから何かを察したかのようにハツとなり、僅かに身を乗り出

し口を開いた。

「お前、まさか……記憶を失う前の俺の事を知ってるのか……!!」

「知ってるも何も、此処まで話してりや察しが付くもんじゃねえか?それなりによ」

「……何だと?」

「どういう意味だ?と蓮夜が思わず聞き返す。アスカはそんな蓮夜の問いに対しニタリと笑みを深め、右手を広げながら飄々とした口調で告げる。

「俺達なんだよ、お前が記憶を失った原因は……この手で一度、お前を殺したが故にな」

「……なっ……」

「あつさりど、本当に大した事がないように簡単にそう答えたアスカに対し、蓮夜は衝撃を隠し切れない様子で目を見開き驚愕してしまうが、アスカはそんな蓮夜の反応も他

所に軽い口調で話を続けていく。

「本当に何も覚えちゃいねえか……いいぜ、なら教えてやる。記憶を無くす前のお前は、この物語の中でイレイザーを作り出す俺達の計画を嗅ぎ付けて此処まで追ってきたんだよ。そしてそれを予見していた俺達の罠にまんまとハマリ、孤立無援となったお前を仕留めた筈だった……だって言うのに、まさかアレで生きてたとは思ひもしなかったよ。無駄にしぶてえって噂はマジだったようだなあ」

「……そうか……つまり、この物語の中でイレイザーが生み出されてるのもお前達の仕業かっ……」

自分が記憶を失った元凶、そしてこの物語の中で作られたイレイザーの出処が目の中の男とその仲間達の手によるモノだと分かり、蓮夜は敵意を剥き出しにアスカを睨み付けながら更に疑問を投げ掛ける。

「だったら何故今更になって、この世界の物語を改竄した……！イレイザーを生み出す事と、アイツに関わる物語を改竄する事に何の関係がある?!」

「関係？別にんな大層な理由なんかねえよ……ま、強いて言えば、テメエらに組まれるとめんどくせえからってのが一番の理由かもな」

「……………何……………？」

今回の改竄は蓮夜と響達が手を組まれるのを阻止する為の物。アスカはそう語りながら地面に散乱するガラスを踏み鳴らしてブラブラと歩き出し、天井を仰いで気だるそうに言葉を続けていく。

『戦姫絶唱シンフォギア』……あの立花響はこの物語の主人公でな。奴はこれまでの戦いの中で敵対していた連中と手を束ね、あらゆる逆境や難敵を幾度となく打ち倒してきた……。そんな奴がお前に目え付けたとなりや、俺らにとつて面倒事になるのは目に見える。だから真っ先にその芽を潰させてもらったってだけの話だ」

「つ……………それが……………そんな事の為にアイツだけでなく、周りの人間の人生を故意に歪めたというのか、お前達は……………！」

「人？ハツ、違うねえ！俺達にとっちゃあのガキも、この物語の住人も全部フィクション！非現実上のキャラクターだ！この手で筆を振るえば、簡単に記憶も人生も書き換えられるモノを同じ人間だなんて思える訳がねえだろ？俺達にとつての人間ってのはな、テメエらがイレイザーと呼んで身勝手に追い出した連中の事を指すんだよッ！」

突然語気を強めて声を荒らげ、アスカは忌々しげに蓮夜を指差して叫ぶ。

「それにこっちからしてみりゃ、何より度し難いのはテメエの方なんだよ！イレイザーと見なせばその手で容赦なく幾つもの命を屠ってきた……！自分がさも正しい側だと正義面して、テメエが倒してきた連中の願いを尽く踏み躪ったっ！」

「何が願いだ……！無関係な人間の命を危険に晒しておいてどの口でほざく！何よりお前達が行つてる改竄は大勢の人間の物語を歪める行為だ！そんな事をしなくても、物語の外の現実で罪を償えば……！」

「それが度し難いつつてんだよっ！ただ普通に生きてただけで、ある日突然手前の物差



しで身に覚えのねえ罪を押し付けられた上に勝手に人を追い出して、何で一方的に俺達の側が悪いと決め付けられなきやなんねえんだっ?!それが世界の決めた事っつーなら、そんなクソみてえなルールの世界に従う義理なんざねえっ!だから決めたんだ!俺達から何もかも奪った世界をこの手で壊して、犯して、俺達が嘗て失った物語を取り戻すってなあっ!」

「……その為にこの世界の人間をイレイザーにしたのか……自分達の復讐の為に……!」

記憶を失ってから、これまで自分が倒してきたイレイザー達を思い出す。その元となった人間達をもそうやって自分達の復讐の為に利用したのかと問い詰める蓮夜だが、それに対しアスカは馬鹿馬鹿しげに笑ってみせた。

「早とちりするなよ。奴等は別に俺らが騙した訳でも、無理矢理にイレイザーにした訳でもねえ。奴等の方からそう望んだからあんなったのさ」

「っ!何だとっ……?」

「ハッ、意外だったか？だがこの世界じゃ別にそう不思議な事でもねえのさ。この物語にはノイズに人生を狂わされ、居場所を失った人間なんざごまんといる。この廃れた街にもそういつた連中が良く集まってたからな。そんな連中にイレイザーの事を教えて、誘いを持ち掛けたら二つ返事で領いたぜ？」

「……彼等は……自分からイレイザーに……？」

アスカ達の甘言に乗せられた訳でも無理矢理にでもなく、彼等は自ら進んでイレイザーになる事を受け入れた。その事実には衝撃を受ける蓮夜を見据えながら、アスカは両手を広げて高らかに語り続ける。

「この物語じゃ幾度となく世界が危機に陥り、その度に装者共が世界を救って来たが、それが必ずしも万人にとつての救いとは限らねえって訳だ。最初から希望も何も持たない連中からしてみれば、終わり損ねた、寧ろ余計な真似をしてくれたと受け取る連中だっている……そんな奴らに俺らから機会を与えてやったのさ。世界を書き換えられる力を、嘗て夢見て挫折した希望を叶える術を。そういつた連中の中から新たな同志を

見付け出す事こそ、俺達の計画の一つって訳だ」

「……それで生み出したのがあのノイズ喰らいのイレイザー達か……あんな正気すら持たない獣同然の個体を作り出して何になる？ いやそもそも、前の二度の戦いで見せたあの異常な進化は一体——」

「さてなあ。其処まで話してやる義理はねえさ。寧ろ此処まで話してやつただけ十分サービスしてやつただろ」

あんな到底まともな進化体とは思えないノイズイーターを作り出した真意を聞き出すとうとする蓮夜の疑問をはぐらかし、アスカは改めて蓮夜と向き直りながら徐に右手を中空に掲げていくと、その手から火の粉が立ち上り出していく。

「それに、どうせそんなもん知った所で全部無駄になる……テメエは此処で、今度こそ俺の手で始末するんだからなあッ!!」

ゴオオオオオオオ……ツツツ!!!と、アスカの感情の昂りに呼応するかのようにその全

身から突如勢いよく炎が噴き出し、凄まじい熱風が吹き荒れた。

そのあまりの熱量にアスカの近くに転がる瓦礫が一瞬の内に灰となつて焼却し、天井や壁に大きく亀裂が走つて軋み、音を立てて崩れ落ちていく。

「ツ……これはっ……?!」

嵐が如く吹き荒れる熱暴風に思わず両腕で顔を庇う蓮夜の顔が驚愕で歪み、全身の鳥肌が総立した。

今まで戦つてきたイレイザーや進化したノイズイーターの暴力的なソレとは力の質も量も違う、とてつもなく強大で圧倒的なまでのプレッシャーがこの空間を一瞬で支配して呑み込んでいく。

力を解放した余波だけで既に圧倒的な力の差を感じ取つた蓮夜が思わず後退りしてしまう中、業火にその身を包まれるアスカの姿が徐々に露わになっていく。

まるで炎のように捻れた四本の角を頭から生やし、外見は何処か仮面ライダーウィザードの敵幹部であるフェニックスを彷彿とさせる造形をした深紅に染まった体色をしているが、何より目立つのはその巨大な右腕。

異形に変貌したアスカの身の丈を越す程の大きさを誇り、複雑な金色の紋様が刻まれた紅い腕の肘の部分からはパイルバンカーのような巨大な杭が伸びている。

身体から溢れる残り火を払い退けるアスカが変貌した紅の魔神を目にし、蓮夜は一瞬の驚愕の後に険しい表情を浮かべてアスカを睨み付けた。

「上級クラスのイレイザーっ……『神話型』か……!」

『……ほう? その辺の知識はまだ残ってたようだな? そう、イレイザーには基本的に二種類が存在する。イレイザーとして目覚めたばかりの姿である『下級』クラスと、其処から力を付けて伝説や伝承の物語に由来する力と姿を手に入れた『上級』クラス……別名、『神話型』……その内の一人がこの俺だ』

「ッ……………」

エコーが掛かった自信に満ちた強気な口調と共に、親指で自身を指差す紅の魔神……アスカがその姿を変えたイグニスイレイザーと対峙するだけで、戦慄が身体を突き抜ける。

上級、神話型を名乗るに相応しく、これまで戦ってきたどのイレイザー達とも違う威圧感を肌で感じ、今の自分では勝てないと、身体が『逃げろ』と必死に訴え掛けるが……脳裏に過ぎった響の苦しむ姿を思い返し、後ろに引き掛けた足を踏み止まらせて左腰のカードケースからクロスのカードを取り出した。

「神話型だろうが何だろうが関係ない……アイツの物語を……仲間達との繋がりを返してもらおうぞ……！ 変身ッ！」

『Code x……clear!』

バックルにカードを装填して電子音を鳴らし、クロスに変身して手首を軽くスナツ

プさせる蓮夜。そして変身したクロスを前に、イグニスレイザーはクツクツと笑いながら調子を確かめるように右肩を軽く回していく。

『やれるもんならやってみろよ。前はデュレンの野郎に美味しい所を搔つ攫われたが、今回は違う……今度は俺の手で、テメエの息の根を止めてやる……!』

『ツ！ハアアアツ!!』

掛かってこいと、人差し指でジエスチャーするイグニスレイザーの挑発に応じるようにクロスは自身のバックルから左脚に向けて蒼い光を走らせる。そして光が左脚まで伸びたラインを通して足の裏に到達したと同時に軽く地面を蹴り上げ、瞬間的に強化された跳躍力で一気にイグニスレイザーへと飛び掛かり、全力を込めた右拳をイグニスレイザーの顔面に目掛けて叩き込んでいった。が……

『——んだよ。それで終わりか?』

『ツ?!クツ！バキイイイインツツ!!——がはアああツ?!』

イグニスレイザーは顔面にクロスの拳を打ち込まれてもビクともしない所か、平然とクロスを見つめながら軽い動作でクロスの腕を払い除けただけでなく、左腕でクロスを横殴りに殴り飛ばしてしまったのだった。

そのまま勢いよく真横に吹っ飛び、クロスはノーバウンドで壁に叩き付けられて地面に倒れてしまうが、即座に身を起こしながら今度は両腕と両足の先端に光を走らせ、一息でイグニスレイザーに肉薄して瞬間強化した両拳で高速のラッシュを叩き込んでいく。

だが、どれだけ強くイグニスレイザーの身体に拳を打ち込んでも甲高い金属音が鳴り渡るばかりで手応えを一切得られず、逆に胸に拳を打ち込んだ右腕をイグニスレイザーに掴まれ、そのまま手首を捻られてしまう。

『ぐううつ?!』

『なんだよ、まさかこの程度なのか? ったく……ガツカリさせてんじゃねえよオツ!!』



紅蓮の炎がイグニスレイザーの巨大な右腕に集い、拳に纏いながらクロスの右腕を払い除ける。そして腕を払われ仰け反るクロスの胸に目掛けて炎を纏う巨腕の一撃を叩き込み、クロスを勢いよく殴り飛ばしてしまった。

『ぐあああああああツツ?! うつ、ぐうつ……!! やはり真つ向からじゃ太刀打ち出来ないかっ……!!』

だったら……!と、ゴロゴロと地面を転がりながらも何とか身を起こし、拳を叩き込まれて赤く染まる胸の装甲を抑えながらクロスは新たに取り出したカードをバツクルに装填していく。

『Code Blaster……clear!』

『……ほう?』

電子音声が鳴り響くと共に、クロスはタイププラスターへと姿を変えながら目の前に

出現したウェーブブラスターを素早く手に取る。

そしてイグニスイレイザーもタイプチェンジしたクロスを興味深そうに見つめる中、クロスは更に新たなカードを取り出しバツクルに装填した。

『Final Code x……clear!』

『今ある最大火力で一気にケリを付けるっ……!!ハアアアッ!!』

再び鳴り響く電子音声と共にウェーブブラスターの銃口に膨大なエネルギーを収束させながら狙いを定め、イグニスイレイザーに向けて引き金を引き、最大火力を込めた巨大な砲撃を放つ。

それに対してイグニスイレイザーは迫り来る砲撃を前にしても何故かただ佇むだけで身動き一つ取らず、そのまま砲撃の直撃と共に発生した巨大な爆発の中に呑み込まれていったのだった。

『ツ……どうだ、これでっ……』

『——まあ、悪かねえーんじゃねえか？俺に効くかは別としてな』

『……ツ!!?』

砲撃の直撃を確認してウエーブブラスターを下ろし一息吐こうとしたクロスだが、目の前から聞こえたつまらなさそうな声に驚愕し、弾かれたように顔を上げる。

すると其処には、炎の中から悠々とした足取りで姿を現す紅の魔神……クロスの最大の一撃を受けながら全くの無傷のイグニスレイザーが、胸の汚れを手で軽く払い平然としている姿があつたのだった。

『なっ……通じていないっ……?!』

『ハッ、今更そんな技で俺の身体を傷付けられると思ったのか？記憶を失う前ならともかく、殆どの力を失った今のテメエが俺に敵う筈がねえだろオオオッ!!』

『クッ!』

螺旋を描いて収束する業火を左手に集め、クロスに向けてイグニスイレイザーが巨大な火炎弾を乱雑に撃ち放つ。

それを目にしてクロスも咄嗟にウエーブラスターを乱射して火炎弾を撃ち落とそうとするが、クロスの銃弾が撃ち込まれたと同時に火炎弾が分かれたれて無数の炎弾となって散らばり、クロスを包囲するように周囲を取り囲んでしまう。

『ッ?!何っ……?!』

『……爆ぜてなくなれ』



## 第三章／改竄×断ち切られた繋がり④

——同時刻。クロスとイグニスレイザーが激闘を繰り広げるその頃、蓮夜と別れて公園を後にした響は一人帰路に付いて住宅街を歩いていたが、道中でふと足を止め、何かが気になる様子で来た道を振り返っていく。

「蓮夜さん……一人で大丈夫かな……」

先程は彼に説得されて一度は引き下がったものの、やはり自分の為に蓮夜が一人で戦っている事が気掛かりなのか、響は心配を帯びた表情を浮かべてペンダントを失った胸に手を当てながら徐に拳を握り締めていく。

「……やっぱり、私も何か手伝いを……でも、今の私に何が……？」

やはり蓮夜一人に事態の解決を任せてただ待つなんて我慢出来ない。

しかしシンフォギアを失っている今、自分にイレイザーと戦う術がないのも確かだし、今の自分ではきつと足手纏いにしかならないだろう。

……だけど、それでも、それでも今の自分に出来る何かをしたい。

悩むように瞳を伏せ、胸に拳を当てながらそう考えると、目を開けた響は僅かな迷いを滲ませる足取りで一步踏み出そうとした、その時……

「——お前が……立花響、か？」

「……へ？」

響が来た道を引き返そうとしたその時、背後から不意に声が聞こえた。驚きと共に振り返ると、其処には木の影から徐に姿を現す謎の人物……先程の公園で蓮夜とのやり取

りを覗き見ていたフードの男の姿があった。

「?えつと……あなたは?」

「……………お前が……………何で……………お前だけ……………」

「え?」

ボソボソつと、フードの男は顔を俯かせて何やら小声で囁いているが、あまりに声が小さく、距離もそれなりに開いている為に上手く聞き取る事が出来ない。

そのため思わず訝しげに聞き返してしまう響だが、それに対しフードの男は何やらワナワナと身体を震わせながら顔を上げていき……

「——どうして、お前が……………**!!!!!!**なんで、なんで、なんでつ……………なんで生き残ったの  
がお前なんだアあああツツツ  
**!!!!!!**」



「……………え……………?」

フードの下に見えたのは、響を捉えて離さない憎しみと哀しみが入り交じったような妖しげに輝く、赤い瞳。

突然の激昂を上げるフードの男のその瞳を見て響も何故か直感的に嫌な予感を感じ取り思わず後退りする中、フードの男の身体が禍々しいオーラに包まれて徐々にその姿を変えていき、カエルのような姿をした白と黒緑色の異形……フロツグイレイザーへと変貌していったのである。

「ツ?!イ、イレイザー……?!何で此処に?!」

『お前がつ……お前でさえなかつたらアアあああああああああああツツツツ  
!!!』

フードの男が突如姿を変えたフロッグイレイザーを見て驚愕してしまふ響に対し、フロッグイレイザーは支離滅裂な発言を繰り返して凄まじい殺気を放ちながら響へと問答無用で襲い掛かり、それを見た響も慌てて背中を向けてフロッグイレイザーから逃げ出していくのだった。



『Code slash……clear!』

『グツ……!!ぜえええあああああッ!!!』

一方その頃、場所は戻ってクロスとイグニスイレイザーが戦いを繰り広げる廃ビル内では劣勢に陥るクロスがタイプスラッシュユへと姿を変え、両手に出現したスパークスラッシュユを身構え、その身を閃光と化しいグニスイレイザーへと挑み掛かっていた。

目にも止まらぬ光の速さでビル内を縦横無尽に駆け巡りながら、イグニスレイザーの首筋や関節部などの急所を集中的に切り刻んでいくが、それに気付いたイグニスレイザーは鼻を鳴らしてほくそ笑んだ。

『成る程、真つ向からじゃ勝てねえから脆い部分を狙って弱点を探ろうって腹つもりか……が、甘えええツツ!!』

『——ツ?!がはアアあああああツツツ?!?!?』

そう言いながらイグニスレイザーは右腕の巨腕で拳を形作り、背後から首筋を狙って再度斬り掛かろうとしたクロスの気配を察知して振り向き様に右ストレートを振り抜き、完全にクロスを捉えたその一撃はクロスの腹に思い切り叩き込まれて派手に殴り飛ばしてしまったのだった。

柱を破壊しながら吹っ飛ばされて瓦礫と共に地面を転がり倒れ込むクロス。イグニスレイザーはそんなクロスへと悠然と歩み寄り、自身の紅の身体を親指で軽くなぞり

ながら余裕に満ちた口調で語る。

『生憎、俺の身体はくまなく固く柔軟だ。幾ら悪足掻きしようが、テメエが想像してるような弱点なんざハナから俺には存在しねえんだよ』

『ツ……………ぐつ……………！』

ハッキリとそう断言するイグニスレイザーの絶望的な言葉に、ふらつきながら双剣を構え直すクロスも仮面の下で苦虫を噛み潰したような顔を浮かべてしまう。

最大火力で真つ向から挑んでも傷一つ付けられず、弱点を見付けようとしてもそれらしきモノが存在しなかったのは直接奴の身体に刃を叩き込んだ時の手応えだけで分かってしまった。

今の自分の力で奴に挑むには力不足に過ぎる。それを否が応でも理解させられてしまいが、だとしても、此処で自分が引けば響の繋がりを取り戻せないのもまた事実。

ならば勝機が無くとも、どうかその方法を見出すしか打つ手はないと必死に思考を巡らせるクロスだが、その時、何か遠くから嫌な気配を感じ取って思わず動きを止めてしまう。

『?なんだ……この気配は……?』

『あ?……ッ!まさか……!』

思わずポツリと声に出して気配を感じる方へと振り向くクロスの呟きを聞き、イグニスレイザーも最初は訝しげに首を傾げるが、直後に何かを察した様子で慌ててクロスが顔を向ける先へと意識を集中させ、忌々しげに舌打ちした。

(あの野郎っ……あんだだけ釘を刺しておいたのに先走りやがったな……!)

『この気配は……イレイザー……?しかし何故……ッ?!まさかっ?!』

クロスが察したのは、目の前のイグニスレイザーとは別の新たなイレイザーの気

何故もう一つのイレイザーの気配が……？と怪訝な表情を浮かべてしまうクロスだったが、僅かな思考の後に、此処に辿り着くまでに引つ掛かりを覚えていた疑問が線と線で繋がっていき、其処で一つの可能性に辿り着いたクロスが何かに気付いたようにハツとなるが、それを目にしたイグニスイレイザーが舌打ちと共にクロスへと巨腕を振りかざして襲い掛かり、クロスは寸前の所で拳を回避しながらイグニスイレイザーを睨み付けた。

『貴様つ、最初からコレが狙いだっただのか……！』

『……さあな。何の話だ？』

『惚けるなっ！今回の改竄はお前の手による物じゃないっ！別のイレイザーに改竄の力を使わせて隠し、お前自身は此処で俺を足止めする為の罠だったんだろうっ?!』

そう、思えば此処に辿り着くまでに不審な点は幾つもあった。

この場所に至るまでにあからさまに残されていた痕跡、そもそも街から離れたこの場所にわざわざ自分を誘い込んだのも今にして思えば疑問だった。

つまり、この戦い自体がイグニスイレイザー達の仕掛けた罠。

改竄の力を使ったイレイザーから唯一対抗策を持つ自分を遠ざけるのが目的だったのだと気付いたクロスの指摘に対し、イグニスイレイザーは僅かに沈黙するも最早言い逃れは出来ないと悟ったのか、三度目の舌打ちをしながら面倒そうに溜め息を吐いた。

『此処まで勘付かれたからにや、これ以上シラを切るだけ無駄か……』

『なら……!』

『……そうだよ。今回の件を指示したのは確かに俺だが、別に俺が直接手を下したって訳じゃねえ。改竄自体は手駒にやらせて、俺自身はテメエを釣る為のデコイって訳だ』

最早隠し通すのは無理だと分かったからか、イグニスレイザーは開き直った様にそう語りながらクロスが感知するもう一つのレイザーの気配がある方向を指さしている。

『お前とあの立花響が何かしらの関係を築いてるのは見て取れて分かってたからな……其処であのガキの身に異常が起きれば、お前が顔見知りの人間の為に動くのは目に見えていた。だからそれを利用してもらったんだよ。お前は事態解決の為にどんな僅かな手掛かりでも欲しがる筈だ。その為に痕跡を残し、此処まで誘導してお前をあの手から遠ざけた……本当ならお前を始末した後で、あのガキも改竄で自然に消すつもりだったんだがな……肝心なところで人選を見誤ったようだが、俺も』

『消す……だと……？まさか、お前達は俺だけじゃなくアイツまでっ……！』

『当然だろ。お前も知ってる筈だよな？奴はレイザーの改竄を受けながらも、その進行は他より遅れてる……お前と少なからず繋がりを持ってしまったが為に、その影響が奴にも出始めてんだ。そんな奴を生かしておく訳にはいかねえ……だから俺達の脅威に成る前に、あの小娘も消す。奴の存在をこの物語から抹消した上で、な』





『これでも俺は慎重派でなアツ!!そんな俺が何でテメエにベラベラ計画を喋ったか、分かるかアアツ?!』

ガガガガガガガガガガアツ!!!と、クロスの頭を巨腕で鷲掴んだイグニスレイザーは背中から炎のブースターを噴出し、猛スピードで飛び出しながらクロスの頭をビルの壁にめり込ませ勢いよく引きずり回していき、そのまま廃ビルの壁を突き破って外へと飛び出しクロスを乱雑に投げ捨ててしまった。

地面に打ち付けられたクロスの仮面はボロボロに傷付き、複眼も割れて痛ましい姿へと変わり果て、身を起こす事もままならないその惨い姿を見据えながらイグニスレイザーは巨腕の掌に炎を宿していく。

『これは俺なりの意思表示だ……テメエは此処で俺が必ず殺す。絶対に逃がしはしねえ。俺達の復讐を果たす為にも、今度こそ此処に墓石を建てやがれ……黒月蓮夜あ……!』

『うああアツ……ぐうつ……アツ……!!』

炎に包まれる掌を固く握り締め、イグニスレイザーは改めてこの場でクロスを完全に始末する事を宣告する。

割れた複眼の間から血粒を落しながら、その言葉に宿る決意の強さから奴が本気で自分の命を奪おうとしている事を感じ取ったクロスはどうか震える身体を起こしてこの場から離脱し響の下に向かおうとするが、震える腕に力が入らず再び倒れ込んでしまう。

そして、その間にもクロスの真上に跳躍したイグニスレイザーが倒れるクロスの背中に目掛けて落下し、そのまま背中を勢いよく踏み付けたと同時にクロスの身体が巨大なクレーターの中へと沈んでいき、黄昏色に染まろうとしている旧市街地にクロスの痛な雄叫びが木霊したのであった。

第三章／改竄×断ち切られた繋がり E N D

## 立花響編（後編）

## 第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆

イレイザー達が仕掛けた罠により絶体絶命の窮地に陥ったクロスと響。

イグニスイレイザーの圧倒的な戦闘力の前にクロスが手も足も出せず一方的に蹴られる中、響も突如現れたフロッグイレイザーの襲撃に遭い必死に街中を逃げ回っていた。

「ハアツ、ハアツ、ハアツ……!!何でっ、どうしてイレイザーが私をつ……?!」

イレイザーの改竄の影響を受けてシンフォギアも使えない自分が何故狙われているのか。困惑を隠し切れぬままとにかく脇道などを利用してがむしやりに走り続ける響だが、フロッグイレイザーは驚異的な跳躍力で高層ビルの壁を素早く飛び跳ねながらそんな響に一気に追い付いてしまい、そのままビルの壁を蹴り上げ響へと飛び掛かった。





からして恐らくこのイレイザーの元となった人間はあの事件で家族を失った遺族。

加えてこのタイミングで自分を襲ってきたという事は、つまり……

「もしかして……貴方が未来や、皆を……私が憎くてっ……？」

『許せないっ……！許さないっ、許されないっ!!俺は全てを失ったのにつ、あの子達は帰って来なかったのにつ……!!何故お前ばかりが幸福なんだっ?!どうしてこんな世界になってもお前に手を差し伸べる人間が現れるっ?!そんな不平等がまかり通ってなるものかアアあああああッッ!!』

「っ、くっ!」

皆の中から自分に関する記憶が消えたのはこのイレイザーによる仕業なのか。戸惑いを帯びた声音で響が問い質そうとするも、フロッグイレイザーはやはり依然として錯乱し話を通じず、響に問答無用で再び襲い掛かって来た。

それを見て会話は不可能だと悟った響は咄嗟に真横に飛び退き再び全速力で逃げ出していくが、フロッググレイザーはそんな響に目掛けて口から連続で水弾を乱射する。

壁に着弾して飛び散る水しぶきを見て響も慌てて鞆で頭を庇いながら路地の裏へと逃げ込むが、フロッググレイザーもそれを追って素早く路地の裏へと飛び込み、逃げる響の背中に向かって口から水弾を放ち追撃を続けていくのであった。



「——それで、そのシーンでの主人公サイドの逆転っぷりが凄いのよ。今までの伏線を一気に回収してのあの攻勢っぷりがまた気持ちがいいの何のってー！……ふあああ」

「成る程、そのアニメに熱中し過ぎてまた寝不足って訳ね……。弓美らしいと言えばらしげぞ」



「ですがあまり夜更かしするのは感心致しませんわよ？寝不足はお肌の天敵と言いますから」

「……………」

同じ頃、下校時刻となり学院を終えたりディアンの生徒達が帰路に付く中、未来も友人の生徒達に遊びに誘われ共に下校していた。しかし、友人達と共に歩くその表情は何処か優れなく暗い顔を俯かせており、彼女に話を振ろうとした友人の生徒もその様子に気付き小首を傾げた。

「ヒナ？何か元気ないよ？どうかした？」

「…………え？あ、ううん。ただ少し、気になる事があるって言うか…………」

「気になること？」

？と、要領を得ない未来の発言に友人達も頭の上に疑問符を並べると、未来は視線を

足元に向けたまま鞆を持つ手を落ち着きなく動かしながら言葉を続けていく。

「何ていうか、その……私たちって、本当に『こんな』だったかなって……何か、大事な事を忘れてるっていうか……足りない、っていうか……」

「?忘れてるって……別に何時も通りじゃない?特に可笑しなところは無いと思うけど」

「そうですね……放課後は何時もこの四人で下校してましたし、可笑しな点はないと思います……」

この普段通りに思える日常に違和感がある。何処か落ち着かない様子でそう語る未来の言葉に友人達は互いに顔を見合わせて怪訝な表情を浮かべ、そんな友人達の反応を見て未来は釈然としないのか暗い顔のまま俯いてしまう。

「ヒナ、もしかしてどつか具合悪い?何か顔色もあんまよくないし……今日は先に帰って休んだ方が良くないじゃない?」

「……………そう、かな……………そうなのかも……………ごめん、折角誘ってくれたのに……………」

「良いって良いって、体調が悪いならあたし等の事なんかより自分のこと優先しないと。遊びに行くのはまた今度でも出来るしね」

「そうですよ。今はご自身のお体を労わって上げてください、未来さん」

「うん……………ありがとう、皆……………」

自分を氣遣って優しい言葉を掛けてくれる友人達の厚意に感謝し、三人と別れて先に寮へと戻る事にした未来。

そしてひとり帰路に付く並木通りの照明灯の光が点灯し始める中、下校する他の生徒達とすれ違う際に二人の女子生徒が談笑しながら一緒に帰る姿を何故か自然と目で追いつけていき、同時に鈍い痛みが胸に走って締め付けていく。

（まただ……………何なんだろう、これ……………あの子達みたいな人達の姿を見ると、無性に胸が痛

くなる……)

恐らく親友同士なのか、仲睦まじく笑い合うあの少女達の姿を見ているだけで理由の分からない痛みが胸に飛来し、何か大事な物が欠けたような喪失感を覚える。

そんな身に覚えのない感覚に戸惑いを隠せない未来だが、その事に対して何故か不快感を感じない。

寧ろ、その感情を覚えるのが当然で、自分は今こんな事をしている場合ではないのだという謎の焦燥感に駆られる。

一体この感情は何なのか……。言葉にし難いが故に答えも出せずより一層悩んでしまい、やはり友人達が言うように今日の自分は疲れているのだろうか。

(やっぱり皆の言う通り体調が悪いのかな……。今日はもう早く帰って休んだ方がいいのかも……)

どれだけ考えてもこのモヤモヤとした感情の正体が分からず終いで気疲れしてしまい、友人達に言われた通り今日は早めに休もうと溜め息をこぼし寮に向かう足取りを速めていくが、その時、ドオオンッ!!と何かが破裂するような音が何処からか鳴り響いた。

「っ?!え?な、何っ?」

突然の大きな音に思わず肩をビクツと震わせて未来が辺りを見回す。すると、遠方に見える建物の向こう側からいきなり水弾が勢いよく打ち上がって空で破裂し、水しぶきが雨のように街へ降り注ぐ光景が視界に映った。

「あれって……?」

空に打ち上がった謎の水弾を目撃して驚きで目を丸くし、呆然と立ち尽くしてしまふ未来。だが、次第にその表情が険しくなっていく、それと共に何故か彼処に行かなくてはならないという衝動に駆られ、気付けばまるで何かに弾かれたようにその場から走り出していたのだった。

## 第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆①

『——どオーしたアアツ?! さっきまでの威勢の良さは何処行つたんだよ、ええッ?!』

『グッ……!! がはアああああアッ!!』

場所は戻り、旧モール街ではイグニスレイザーの猛攻の前にクロスが苦戦を強いられ、一方的に痛め付けられていた。

凄まじいパワーで振るわれる巨腕の一撃一撃の余波だけで建物の壁が次々と粉砕されていき、肩を掠めただけでも装甲の一部が大きく削り取られてしまう。

真つ向から立ち向かうにはあまりにも力の差があり過ぎるイグニスレイザーを前にひたすら防戦に徹するしかなく、隙を見て戦線を離脱しようとしてもタイプスラッシュを上回る機動力で回り込まれ、逆にその隙を突かれて殴り飛ばされてしまう。

逃走すら叶わず、防戦一方でこれ以上の致命傷を避けるように立ち回る事しか出来ないクロスも仮面の下で苦虫を噛み潰したような表情を浮かべながらも何とかこの状況を打開しようと考え、とにかく距離を取ろうと朱い閃光と化して廃墟の街中を素早く駆け回り続けるが、それを予想していたかのようにクロスが逃げた先の頭上で待ち構えていたイグニスレイザーが拳を握り締めた右腕をハンマーの如く振り下ろし、クロスの後頭部を思い切り殴り付けて地上に叩き落としてしまった。

『がああうっ!!ぐあつ、あ……頭がつ……!』

『ボーツとしてる場合かよおおおおおッ!!』

『ッ?!』

凄まじい力で後頭部を殴り付けられ、意識が揺らぎ眩暈を覚えるクロスの頭上からイグニスレイザーが怒号と共に紅蓮の炎を纏った右足突き出して急降下で迫る。

それに気付いたクロスも眩む意識を頭を振って振り払いながら慌ててその場から飛び退きイグニスイレイザーの蹴りを辛うじて回避するも、滑り込むように地面に着地したイグニスイレイザーが左手に形成した紅い光球をクロスの腹部に押し当てた瞬間、光球が爆発を起こしてクロスを吹っ飛ばし、後方のビルの壁に勢いよく叩き付けてしまったのだった。

『ぐあうううっ!!グッ……クッ、ソッ……!!』

『ハッ、無様なもんだなあオイ。昔はあんだだけ俺達の事を苦しめてくれたってのに、今やソレも見ると影もなしか……』

叩き付けられた壁から剥がれるように倒れ、地面に両手を付くクロスの情けない姿を見て拍子抜けしたように溜め息を漏らすイグニスイレイザー。

そして左手を振るって残り火を払いつつ、イグニスイレイザーはクロスを見据えながら巨腕の拳を握り締めしていく。



『けど、だからってこっちも容赦はしねえぞ。テメエの力の恐ろしさは俺たち自身嫌ってほど身をもって知ってるからな……テメエとの因縁も、此処で俺が幕を引いてやるよオツ!!』

『ツ……!』

ゴウウウツ!!と、イグニスレイザーの全身から凄まじい殺気と共に勢いよく業火が噴き出し、未だ高まり続けるエネルギーのあまり轟音を轟かせて地面が陥没していく。

そのとてつもない熱気は離れていても装甲から白い蒸気が立ち上る程であり、加えて恐らく、あれだけの強大な力を放出していながら未だ全力でない事は確かだろう。

『(今の俺の力じゃ、逆立ちしても奴には勝てないという事か……それに急がないと、アイツが……)』

絶体絶命の窮地に追いやられるこの状況下で脳裏に思い起こすのは、あの公園のベンチで話した響の哀しげな横顔。

それを思い出すだけで圧倒的な力を前に半ば萎縮し掛けていた闘志が蘇り、クロスは拳を握り締めてふらつきながらも身を起こしていく。

『へえ？まだやる気かよ、そんなボロボロの状態で』

『ツ……諦めるつもりは毛頭ない……言った筈だぞ、アイツの繋がりを返してもらおうと……！』

今は奴に勝てなくても構わない。

だがせめて、奴らに奪われた響の物語を取り戻すまで死ぬ訳にはいかない、クロスは傷付いた身体を奮い立たせて左腰のホルダーから取り出したカードをバツクルから露出させたスロットに装填し、掌でスロットを押し戻した。

『Code Blaster::clear!』

鳴り響く電子音声と共に、クロスは再度タイププラスターに姿を変えて右手に出現したウエーブプラスターを力強く握り締めるが、イグニスレイザーはタイプチェンジしたクロスを見て馬鹿馬鹿しげに鼻を鳴らし首を振っていく。

『何をするかと思えば、またそれか？んなもん俺には通じねえってまだ分かんねえのかよ？』

『……………どうかな……………とも限らないぞ……………？』

『あ？』

『Final Code x:clear!』

不敵に微笑みながらクロスは新たにカードを取り出しバックルに装填する。そして電子音が鳴り響いた直後、クロスはバックルからスロットを露出させてカードを差し込み直し、再びスロットを掌の底でバックルに押し込んでいく。

『Final Code x…clear!』

(！二段重ね……?)

そう、クロスは必殺技発動の為のカードであるファイナルコードを二度使用し、それに伴いクロスの全身から緑色の閃光が雷の如く放出され無数のスパークを激しく撒き散らしていく。

その光景は先程イグニスレイザーが目にしたソレの比ではなく、クロスから放たれるスパークが周囲を駆け走ってビルや壁や地面を大きく抉り取っていく様が凄まじい威力を物語っている。しかし……

『グッ、アアッ……!!ぐううっ!!』

それはクロス自身にも制御出来ない程の強大な力なのか、バチイツバチイイイツ！と、クロスから放たれる無数のスパークは周囲だけでなく、クロス自身にさえ牙を剥き彼の身体を傷付けていた。

スパークが曲解してクロスの身体を外側から傷付けるだけでなく、身体の内側から溢れ出した雷が装甲を徐々に欠いてズタズタに引き裂いていく。

それでも尚、クロスは痛みに歯を食い縛りながらウエーブブラスターを重々しく構えていき、銃口に荒れ狂う無数のスパークを充填してイグニスレイザーに何とか狙いを定め、額から汗を伝わせながら挑発するように笑う。

『来るなら来いっ……但し、今度はさっきのように行くと思わない事だ……！』

『……ハッ、面白えじゃねえか。そのザマで何処までやれるか、俺が試してやるよオツ！』

炎が螺旋を描き、イグニスレイザーの右腕に凄まじいエネルギーが収束されていく。

それに対しクロスもスパークの充填で揺れる銃口を修正しながらイグニスレイ

ザーに狙いを固定しつつ引き金に指を掛け、そして……

『Heat cannot be separated from fire, or beauty from The Eternal. (熱さと火は切り離すことできない。美しさと神も) ……灰塵に還れ、その存在ごとなアアあああああああ  
ああつつ!!』

『ハアアアアアツツ!!』

僅かな詠唱を口にすると共に、イグニスレイザーが勢いよく突き出した右腕から発生した爆発から巨大な火炎放射が放たれ、それを迎え撃つ様に撃ち出したクロスの緑色の砲撃が二人の中心で耳を劈くような激突音と共にぶつかり合っていたのである。

凄まじい衝撃と共に衝突した砲撃と火炎放射が互いを押し退けようとするように、一進一退を繰り返す。

一見互角に見える拮抗。

しかしそれも一瞬の事であり、イグニスイレイザーが放出する火炎放射は徐々にクロスの砲撃を押し返し始めていき、クロスの顔が険しく歪んでいく。

『そらどうしたアああッ!! さっきのようには行かないんじやなかったのかアああッ?!』

『ウツ……クツ……ぐうううっ……!!』

苦痛に顔を歪めるクロスとは対照に、イグニスイレイザーはまだまだ余裕だと言わんばかりに火炎放射の威力を更に強め、地面を焼き尽くしながらクロスの砲撃を押し返す勢いが増していく。

その度にクロスの足が地面を滑るように徐々に後退りしていき、それでも何とか足を踏み留まらせて耐えるも火炎放射の勢いは止められず、炎は遂にクロスの目前にまで迫り……





大爆発から発生した空を覆うキノコ雲を見据え、イグニスレイザーから人間態の姿に戻りながら何処かつまらなさそうに目を細めるアスカ。

そして、アスカは火炎放射が破壊した焼け跡を辿って徐に足を進めていくと、道中でビルの瓦礫に混じって転がる見覚えのある破片……見るも無残な姿に変わり果てた血痕がこびり付くクロスの仮面の残骸を発見し、邪魔なビルの瓦礫を足で払いながら、クロスの仮面の残骸を掴んで持ち上げていく。

「しぶとく生き残ってるんじゃないかねえかと思ったが、この有り様じゃ先ず助かりはしねえか……」

バリイツ！と、クロスの仮面の残骸を掴む手に力を込めて完全に残骸を破壊してしまい、粉末状になった破片を手の平からこぼしながらアスカは未だ空に浮かぶキノコ雲を見つめていく。

「恨みたけりやあの世で存分に恨め。俺達はテメエの屍を超えて、俺達の物語をこの手に取り戻す……その行く末を指をくわえて見てるんだな」

これで自分達を邪魔する障害なくなつた。クロスの死亡を確認し、後は裏方に引つ込んで手駒のイレイザーに事の成り行きを任せておけば大丈夫だろうと踵を返し、アスカは静かにその場を後にしていくのだった。

——その影には……

「——ッ……悪いが……まだ、そのつもりはないっ……」

——アスカの死角となる物陰の壁に付いた手を滑らせて赤い血の跡を塗り、ふらつきながらも身を起こす一人の青年……額から大量に血を流し、服も焼き焦げてボロボロの有り様に変わり果てた蓮夜の健在の姿があつた。

荒い呼吸を繰り返しアスカの背中が遠ざかるのを物陰から覗いて確かめると、安堵の溜め息を吐いたと同時に全身に駆け走る激痛に苦痛で顔を歪め、袖の隙間から血が伝う左腕を抑えながら壁に背中を付いたままズルズルとその場に座り込んでしまう。

(上手くいくかどうかギリギリだったが、ツ……何とか成功してくれたかつ……ウツ……)

息をする度に軋むような痛みに苛まれながら、空を仰いで溜め息を漏らす蓮夜の脳裏を過ぎるのは、先程の土壇場で成功した自身の賭け。

——あのイグニスレイザーとの真つ向勝負。奴との圧倒的な力の差からして、どう足掻いても自分に勝ち目がないのは分かり切っていた。

故に賭けたのは、イグニスレイザーとの撃ち合いに”敗北したその後”。

イグニスレイザーとの撃ち合いに敗北してあの火炎放射に飲み込まれる寸前、相手に悟られぬように予めベルトにセットしていたカードを装填して素早くタイプスラッ

シユとなり、身体からパージしたプラスターの装甲を盾にして火炎放射を僅かに受け止めた隙に、タイプスラツシユの機動力である場から離脱するという寸法だった。

……それでも唯一誤算だったのは、イグニスレイザーの火炎放射の威力がタイププラスターの装甲の強度を上回り、タイプスラツシユの機動力を持つてしても回避が間に合い切れなかったこと。

後僅かでも遅れていれば今頃どうなっていたか……。火炎放射を掠めただけで重度の火傷を負った自身の右足を見下ろしながら最悪の事態を想像して寒気を覚えつつ、蓮夜は激痛を堪えて起き上がり、前を見据えていく。

(ツ……これ以上、お前達に奪わせはしないっ……アイツや、他の誰かの大切なモノを……これ以上はっ……！)

自身が背中を付いて座り込んでいた壁にこびり付く夥しい量の血に見向きもせず、蓮夜は響を襲うレイザーの気配を探り、彼女を助けに向かう為に火傷を負った右足を引きずりながら街へと急いで戻っていくのであった。

## 第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆②

『逃がすかアアあああああああッッ!!』

「くうっ……!!」

蓮夜がアスカの目を欺き辛うじて逃走したその一方、フロッグイレイザーに追われる響は周囲への被害を避ける為に夕暮れ時の時間帯で人気の少ない公園に向かって全力疾走しながら、何とか追っ手をやり過ぎせないか試みていた。

だが、響に対し異常な執念を燃やすフロッグイレイザーは周りへの被害もお構い無しにその口から立て続けに水弾を乱射し続けていき、持ち前の鍛え抜かれた反射神経で紙一重で水弾を避けながら何とか公園に辿り着いた響の横合いに素早く回り込み、そのまま強烈な体当たりをかまして吹き飛ばしてしまう。

「ぐあううっ！」

『逃がさないと言った筈だぞっ……！お前だけは俺の手で始末するっ！絶対に逃がしはせんぞオオオオオッ!!』

「っ、ぐうっ……！」

拳を握り締めて憎悪の雄叫びと共に迫るフロッググレイザーを前に、響は痛みの走る身体を引きずり後退りしていく。

そしてフロッググレイザーがそんな彼女に徐々に歩み寄りながら拳を広げ、響に容赦なく殴り掛かろうと右腕を振りかざした、その時……

「——立花さん?!」

「……えっ……？」

『ツ！なに……？！』

不意に何処からか響き渡った驚愕の声。その声に釣られて響とフロッググレイザーが思わず振り返ると、其処にはフロッググレイザーに襲われる響の姿を見て驚きのあまり目を見張る少女……街中で偶然にも空に打ち上がるフロッググレイザーの水弾を発見し、言葉にし難い謎の胸騒ぎに導かれるまま現場に駆け付けた未来の姿があったのだった。

「み、未来っ?! どうして此処につ……?!」

『何だア……お前え……？！』

「な、何これっ……？ノイズ、じゃない……怪物っ……?!」

今は他の装者達やS・O・N・Gと同様にイレイザーやノイズイーターに関する記憶を失ってしまった為、今この場で初めて目にしたノイズとは違う異形の存在であるフロッググレイザーを見て戸惑いを浮かべる未来。

そんな彼女の思わぬ登場に響も焦りを露わにし、急ぎこの場から逃げるように呼び掛けようとするも、響が動こうとしたのを察知したフロッググレイザーが咄嗟に足の裏で響を踏み付けて動きを封じてしまう。

「があああうっ！ぐっ、ううっ……み、未来っ……！」

「た、立花さん！」

『……嗚呼、成る程……そういえば確か親友がいるとか何とか聞いていたっけ……』

踏み付けられても尚、未来を案じて視線を向ける響の必死さに一瞬疑問を抱いて冷静になるフロッググレイザーだが、今回の改竄を行う前に協力者であるアスカから聞かされていた響の身近な人間の中に、彼女にとって唯一無二の親友がいた事を思い出して納得する。

『（確か以前に一度だけ装者になった事があったらしいが、その戦いでギアは砕かれたと



言ってたはず……だったらこの場で俺の脅威になる事はないだろうが……」

そうだ、それも何もかも過去の話。自身の改竄が施された今、この立花響を慕う人間など黒月蓮夜を除いてこの物語の何処にも存在しない。

それは改竄前に響と親友であった筈の小日向未来も例外でなく、この物語の中では彼女との繋がりが絶たれ幼馴染であったという過去すらも書き換えたのだ。

故にこの二人は正真正銘、この改竄された世界では赤の他人という事になっている筈。なのに……

『お前はコイツと何も関係ない、寧ろ関わり合いたいと思わない存在の筈だろ？なのに、何故お前は此処にいる？』

「え……そ、れは……」

それだけが理解出来ず、もしや記憶を取り戻したのではないかと懐疑的な眼差しを向

けるフロッググレイザーにそう問われるも、未来は咄嗟に言葉を返せず言い淀んでしま  
う。

此処へ来た理由なんて、自分にだって分からない。

ただ何故か、勝手に足がこの場所に急いで、此処に来なければならないという謎の衝  
動に導かれただけ。

そうして辿り着いた先にあったのは、学院の皆から腫れ物のように扱われて避けられ  
ていた響が謎の怪人に襲われているという状況で、どうして自分がそう思い、この場所  
に来なければならないと思ったのか。

自分にもそれが分からず困惑を浮かべる未来を見て、彼女にもしつかり改竄が及んで  
ると再確認して興味を失ったのか、フロッググレイザーは未来から響へと視線を移して  
彼女の首を掴み、身体を持ち上げていく。

『まあどっちだっていい……俺にとって重要なのはコイツを始末する事だけ。関係ない

奴はすっこんでろ……!』

「くああつ、うつ……!ああつ……!」

「立花さんっ!!……え?」

ギギギイツ!と、響の首を掴むフロッグレイザーの手に力が込められていき、呼吸もまともにも出来ない響の顔が苦痛で歪んでいく。

その苦しむ顔を見た瞬間、何故か自分の身体が自然とあの怪人に飛び掛かろうとして踏み出したのに驚き、未来は自身の足を見下ろして怪訝な表情を浮かべてしまうが、そんな疑問を抱いている間にも響の顔色がフロッグレイザーに首を締め上げられていく毎に青ざめていき、それを見て慌てて周囲を見回し、近くの修繕工事現場にあった鉄パイプを両手で掴みフロッグレイザーに向けて身構えた。

「はっ……放してっ!立花さんから離れてっ!」

『……………あ?』

「ツ!み、未来つ…………?!」

未知の怪物を前に恐怖で鉄パイプの切っ先を震わせながらも、響を解放するように呼び掛ける未来の姿を見て、響は首を締め上げられながらも目を見開き、フロッグイレイザーも訝しげに眉を顰めながら未来の方へと徐に振り返っていく。

『お前、何のつもりだ……………?今のお前にはコイツを助けたいという感情は一切湧かない筈だろ……………?それが今のこの物語、俺が定めた絶対のルールだろうがアツ?!』

「……………ツ……………!」

ザザザアツ、ザザザアツ!と、フロッグイレイザーの怒号に呼応するかのようにな意に激しいノイズが頭を駆け走り、脳内に流れ込んで来る自分のモノではない別の感情の波に凄まじい頭痛を覚え、未来は思わず頭を抑えてしまう。

——そうだ。私とあの娘は何も関係ない。赤の他人だ。

彼女は誰からも必要とされていない嫌われ者。だから此処で見捨ててしまっても、誰も私を責めたりなんてしない。

だってそれが、”この世界では当たり前前の事だ”——。

「——ち……がうつ……！」

『……あ……？』

頭を抑え、まるで自分の心を染め上げようとするその声を否定し苦しげな声を絞り出す未来の言葉に、フロッググレイザーは険しげに顔を歪めて思わず聞き返してしまう。

その声音に宿るのは明らかな苛立ち。だがそれでも、未来は頭の痛みと恐怖が伝わって切っ先が震える鉄パイプをフロッググレイザーに向けたまま、苦しげながらも言葉を続けてゆく。

「理由、なんて……私にだってわからないっ……貴方の言う通り、私と立花さんは何も関係ないっ……けど……でもだからって、それだけで危険な目に遭ってるクラスメイトを見捨てて良い筈がないっ！」

『……なっ……』

「み、未来っ……」

響との関係性をリセットされ、彼女が嘗て疎まれた過去を再現しその役割の一人に落とし込んだにも関わらず、未来はハッキリと、フロッググレイザーの改竄を跳ね除けて響を助けようと身を張り、そう断言したのだ。

その姿に響だけでなくフロッググレイザーも驚きを禁じ得ない中、未来はキツ！とフロッググレイザーを鋭い眼差しで見据えて鉄パイプを両手に臆する事なく対峙している。

「立花さんを放してっ！これ以上彼女を傷付けたらっ……絶対に、絶対に許さないっ！」  
『(ツ！な、何だコイツっ……？どうして関係ない奴の為に此処まで……まさか、俺の改竄の影響が薄れてる?!)』

いや、そんな筈はない。イレイザーの改竄能力には装者ですら抗えない。

現に他の装者達やS・O・N・Gの面々も今までの記憶を失い、響とのこれまでの関係性が一切なくなってる事は陰で確認済みだ。

故に自分の復讐を邪魔する者は誰もいないと踏んでこのタイピングで動いたというのに、何故この女は自身の改竄を跳ね除けて未だ立花響を救おうとする？

元装者と言えど、他の装者達が改竄の影響を受けているのを見るに恐らくシンフォギア装者だったから、などという理由とも思えない。

ならばやはり元の記憶が僅かでも残っているのか。

或いはそれすらも関係ない、ありつただけの悪意でこの物語を塗り潰した改竄を受けても尚、この少女の元々の善性の方が勝って……。

『——ふざけるな……そんな……ありえないっ……そんな事があつてたまるかあああああッ!!』

「ッ?!う、わあああああッ?!」

その可能性が脳を掠めた瞬間、フロツグレイザーは突然激昂の雄叫びを上げながら響を乱雑に投げ飛ばした。

ガシャアアアアッ!!と、けたたましい音を立てて公園の一角に設置されてるベンチを壊し、身体を思い切り叩き付けられた響はベンチの破片の上を転がって呻く。

「た、立花さんッ?!—バキイイッ!!—うあああッ?!」



倒れ込む響を見て思わず駆け寄ろうとする未来だが、そうはさすまいとフロッググレイザーが未来の持つ鉄パイプを掴んで強引に引き寄せ、未来の頬を手の甲で張り倒してしまおう。

凄まじい力で殴り付けられて身体が浮き上がり、一瞬何が起きたのか理解が追い付かぬまま地面に倒れた痛みが身体に走り、次に遅れて頬に激痛を感じ思わず頬に触れると、今ので唇が切れたのか赤い血が指にこびり付いている。

驚きで目を見張り、思わず顔を上げれば、其処には赤い瞳を不気味に輝かせて自分を見下ろすフロッググレイザーがまるで幽鬼のように目の前に佇んでいた。

「ひっ……」

『ありえないっ……ありえてたまるかそんな事っ!!この世界には悪意しかないっ!!誰かに手を差し伸べる優しさなんてっ、誰かを慈しむ思いやりなんてっ!!そんなモノがこの世界に存在するものかアアあああああああッッッ!!!』

「——ハアツ、ハアツ……ッ?!あれは……!」

今までの関係性を奪われ、赤の他人である上に関わり合いたいと思わぬ筈の響の為に身を張る未来の行動が何か忌諱に触れたのか、フロッグイレイザーは狂乱して頭を激しく掻き毟り、有り得ないと何度も何度も否定の言葉を繰り返す。

そのただならぬ様子に未来も思わず口を噤み怯えてしまいう中、其処へ蓮夜がフロッグイレイザーの気配を追って傷付いた身体を引きずりながら公園の入り口前まで辿り着き、未来に徐々に迫るフロッグイレイザーを見てすぐさまクロスベルトを手に二人の下に向かって走り出すが、その間にもフロッグイレイザーが徐に右手の拳を振り翳し、

『赦さないっ、認めないっ、在ってたまるかっ!!俺の人生にお前みたいな人間なんかいなかったっ!!助けてくれる人間なんか誰もいなかったのにつ!!なのに何でっ……何であの女にばかりイイイイイイイイイイイイイイイイイッッッ!!』

「ッー」

「やめろおっ!!ぐっ、あっ……!!」

激昂の雄叫びと共に掲げた手を勢いよく振り下ろすフロッググレイザーを見て、未来は思わず顔を逸らしてしまう。

それを見て蓮夜もクロスベルトを腰に巻き付け変身しようと試みるも、直前でアスカとの戦闘で焼かれた右足に激痛が走り動きが鈍って一瞬立ち止まってしまおう中、フロッググレイザーの拳が未来の顔を再び容赦なく打ち付けようとした、その時……

「ミシイイツ!!と骨が軋むような嫌な音と共に、未来の前に咄嗟に飛び出した響が身構えた左腕の側面でフロッググレイザーの拳を受け止めたのであった。

「?!」

「ツ！た……立花さん?!」

『お前えええつ……!!』

「ぐっ、ううっ!!」

全力でその場で踏ん張り、強靱な力で振るわれたフロッグイレイザーの拳を正面から受け止めて苦痛に顔を歪める響。

その姿を目にした蓮夜と未来が驚きで目を見張り息を拒む中、響はフロッグイレイザーの拳を受け止めたまま徐に未来の方へと顔を向け、小さく微笑んだ。

「つ……心配してくれてありがとう、未来……でも、私は大丈夫だから。今の内に離れて」

「立花さん……?で、でもっ……!」

「大丈夫。私は全然へいき、へっちゃらだから」

「っ……」

そう言つて、未来を安心させるように明朗な笑顔を向けて笑う響。

その顔を見た瞬間、未来もズキッと謎の痛みが胸に飛来し複雑な顔を浮かべるが、同時に何故かその言葉に宿る力強さを信じたいという思いが湧き、一拍置いて迷う素振りを見せるも戸惑い気味に小さく頷き返し、急いでその場から離れていくが、走り去る未来の背中を見てフロッググレイザーは忌々しげに響を睨み付けた。

『お前、何のつもりだっ……?! アイツはお前の事なんかになんか一つ覚えてちやいないつ!! お前に関わる記憶を何も持たない赤の他人っ、お前に冷たく当たった憎むべき相手の筈だろうかっ!!』

幾ら身を張つて庇つてくれた人間とは言え、親友どころか親しい人間ですらなくなつた未来を未だに助けようとする響の行動を理解出来ないと困惑を露わにするフロッグ

イレイザー。だが、

「——そんなの、関係ない」

『………何っ？』

顔を俯かせ、ポツリと静かにそう返した響の言葉に思わず訝しげに聞き返すと、響は僅かに顔を上げる。その顔には、先程までフロッグイレイザーに襲われて怯えていた色はなく、力強く、何処までもまつすくな眼差しでフロッグイレイザーを睨み据えていた。

「私も最初は皆に忘れられて、皆が違う誰かに変わってしまったと思って、シヨックだった……何より、親しかった友達からあの時と同じように扱われるのが辛くて……私の知っている人は誰もいない、独りなんだって……そう思っ、孤独に震えてた……」

自分が知っている世界がイレイザーに改竄され、皆との繋がりを失い、過去の辛い思い出を彷彿とさせるこの世界に独り残され、シンフォギアも失くし、戦う術を持たない無力な自分は蓮夜に助けられるのをただ待つ事しか出来ないのかもしれないとも思っ

た。でも……

「でも、そうじゃなかった……！ 変わらないものもあつたんだ……！ 今この世界の中で、私を助けようとしてくれた未来の優しさが変わらなかったように、私の存在が皆の中から消えてしまっても、皆は私の知っている皆と変わらない部分があつた！ 貴方の力でも、皆の全てを変える事なんて出来なかつたんだっ！」

『何、だどっ……！』

フロッグイレイザーの顔が苛立ちで険しく歪む。だが響は臆する事なく、フロッグイレイザーの不気味に輝く赤い瞳を負けじと睨み返した。

「さっきの未来を見て、そう確信して、漸く分かった……私に出来る事、貴方を倒す事だけが戦いじゃないって……！ だから決めた！ 皆が私を忘れてしまっても、シンフォギアがなくなっても……！ 私はこの手で自分に出来る戦いを……もう一度、皆と手を繋いで結び直す！ 未来とも、クリスちゃん達とも、師匠達とも！ 皆っ！」

『ツ……何が、何がもう一度だっ！そんな事が叶うものかっ！いや、例え上手く行つたとしても俺がまた書き換えるっ！お前なんぞに安寧など与えてたまるものかっ！』

「だとしても……！私は何度でも、この手で皆と手を繋いでみせるっ！何千回、何万回、皆の記憶から消されて、例え世界から見放されたとしてもっ！何度だつて皆との繋がりを取り戻すっ！世界（アナタ）の悪意と戦い続けるっ！この胸に響く、歌がある限りっ……」

私はっ、生きるのを諦めたりなんてしないツツ!!!

『ツ?!』

「……アイツは……」

世界を歪める絶対者を真っ向から見据え、あらゆる悪意と戦い続けると宣戦布告する響の言葉の力強さに気圧され、フロッグイレイザーは思わず後退りしてしまう。



そして、響のその姿に蓮夜も目を奪われて呆然となるも、次第にその表情が徐々に力強いものへと変わっていった。

『……ッ……！何が諦めない、だっ……今の俺に敵う力を持たない分際で、どの口でえええッ!!』

「ッ！」

響の迫力に圧されて一瞬だけたじろぐも、所詮相手は戦う術を失った小娘一人。超人的な力を得た今の自分の敵ではないとその氣迫を振り払い、再び殴り掛かろうと拳を振り翳すフロッググレイザーを見て響も咄嗟に身構えるが、其処へ横合いから飛び掛かった蓮夜がフロッググレイザーの横っ面に拳をめり込ませ、不意打ちで思いつ切り殴り飛ばしていったのだった。

『ふいっアああッ?!』

「つ?!れ、蓮夜さん?!」

真横にいきなり吹き飛んだフロッグイレイザーと、思わぬタイミングで現れた蓮夜を交互に見て二重の意味で驚く響。すると、フロッグイレイザーを殴り飛ばして響の目の前に着地し、背中を向ける蓮夜は徐に身を起こしながら振り返り、

「——すまない……俺はまた、お前に謝らないといけない……」

「……え?」

響と向き合い、そう言って何故か申し訳なさそうに頭を下げたのだ。そんな蓮夜からの突如の謝罪に響の方も呆気にと取られてしまうが、蓮夜は頭を上げ、響の目を見つめ返しながら言葉が続けていく。

「俺はシンフォギアを失ったお前を……いや、それ以前から、イレイザーの改竄に抗う術を持たないお前達を守る対象としてしか見ていなかった……この異変は、元を辿れば俺がイレイザー達に敗れて奴らの跋扈を許したせいだ……だからこれ以上誰も巻き込め

ない、俺がやるしかないんだと思ってた……」

——今回の改竄に気付いた時、響の前では気丈に振る舞ってはいたが、本当は内心焦燥感に駆られてばかりだった。

記憶がないとは言え、自分の不甲斐なさが故にイレイザーの蛮行を赦し、響がそれに巻き込まれてしまった。

何もかも自分の責任……。やはりこんな自分に、無関係な彼女達を巻き添えにして共に戦うなど出来る筈がない。

大切な繋がりを失って苦しむ響に記憶を失ったばかりの頃の自分の姿を重ね、拍車を掛けた焦りに駆られてイレイザーの罠に陥り、響を更に危険な目に遭わせ、無様を晒しながらも駆け付けた先でフロッグイレイザーに真っ向から立ち向かう彼女の姿を目にし、吃驚した。

「でも、違った……そうじゃなかった……シンフォギアの有無なんて関係ない……お前

はレーザーの悪意に晒されて、改竄に苛まれても、自分を見失わずに貫き通す強さを持っていた……特別な力がなくても、お前は何も変わらない……この世界を守るヒーローだった……」

「……蓮夜さん……」

「……お前も、お前の友人も、俺なんか思っているよりずっと強い存在だった……そんなお前達を意図せず無力な存在だと決め付けてしまった浅はかさを、許して欲しい……すまなかった……」

そう言いながら再び頭を深く下げ、謝罪の言葉をもう一度口にする蓮夜。そんな姿を見て響も僅かに考える素振りを見せると、フルフルと首を横に振って微笑んだ。

「謝る必要なんてないです。だって、今の私が在るのは蓮夜さんのおかげでもあるんですから」

「……? いや、俺は何も——」

「約束、してくれました」

否定しようとする蓮夜の言葉を遮り、響は制服のスカートのポケットから取り出した一枚のカード……蓮夜が御守りとして響に渡していたブランクカードを見せていく。

「改竄された世界に残された私が折れ掛けて、駄目なのかもしれないと思った時に立ち直れたのも、此処まで希望を繋ぐ事が出来たのも、蓮夜さんが助けてくれたおかげだった……私がもう一度戦うと決心出来たのは、蓮夜さんと交わした約束が支えになってくれたからなんです」

「…………お前…………」

「だから、ありがとうございます。やっぱり蓮夜さんは、皆が言うようにヒーロー……仮面ライダーなんだって、改めて思いました！」

「……………」

カードを握る手を胸に当てて、まるで太陽のように明るい笑顔を浮かべる響の顔を見て蓮夜も一瞬呆気にとられてしまうが、直後に苦笑し、臉を伏せて俯いた。

この少女の善性は間違いなく『本物』だ。何処までもまっすぐで強く、そして何処までも人を思いやる優しさに満ちている。

——ああ、彼女にはきつと敵わない。

そう思った自分の直感は恐らく間違っていないだろうと確信し、同時に何故か胸に飛来する穏やかな気持ちに釣られて微笑み、響と顔を見合わせる中、蓮夜に殴り飛ばされたフロッググレイザーがふらつきながら起き上がり蓮夜を睨み付けた。

『なんつ、なんだっ……!!いきなり出てきて邪魔をオオおっ!!何だっつんだお前エエえええええっ!!』

自分の復讐を邪魔されて怒り狂い、怒号を撒き散らすフロッググレイザーに対し、蓮

夜は響を一瞥すると、彼女の前に出てフロッググレイザーと対峙していく。

「お前のお仲間からとつくに聞いてるだろう？ 黒月蓮夜、クロス……いや、” 仮面ライダークロス” だ」

「！蓮夜さん……？！」

フロッググレイザーを鋭い眼差しで見据え、自ら仮面ライダーの名を呼称する蓮夜の言葉を聞いて響は驚きで眼を見張り、蓮夜もそんな響の方へと振り返って小さく頷いた。

「俺も決めた。もうお前達を守るだけの対象として見ない。お前達の強さを信じる……今更虫の良い話なのは分かっているが……それでも、頼む……奴らを止める為に、一緒に戦って欲しい」

「……！」

そう、この名前は自分なりの決意と自戒の証だ。

別世界から流れ込んだ異物でしかない自分を信じてくれた彼女達の事を、自分も信じるといふ誓いであり、もう二度と、彼女達を軽んじるような真似はしないという自罰。

自分がヒーローなどと呼ばれるに値しないのは自覚している。

それでも、彼女のようにそう呼んでくれる誰かの信頼と声に応え、二度と同じ過ちを繰り返さない為に敢えてその仮面を被ると決意した蓮夜の願いを聞き、響も最初は驚きで目を見張ったが、次第にその顔に嬉しさを滲ませ、力強く「はい！」と頷き返し、

——次の瞬間、響が胸に当てていたブランクカードが淡い光を放ち始めた。

「…………ツ！何だっ?」

「え…………?カ、カードが?!」



突然前触れもなく発光し出したブランクカードを目にし、蓮夜と響は何事かと戸惑って動揺を露わにしてしまいが、その間にもブランクカードは徐々に光を強めていき、響がブランクカードを胸から離しカードを見ると、其処には何も描かれていなかった筈のカードに橙色のガングニールの拳の紋章が浮かび上がっていたのだ。

「?!絵が現れた……?!」

「これって……私の……?」

ブランクカードに出現した絵を見て蓮夜は驚きを隠せず、響も呆然とカードに描かれた自分のシンフォギアを模した紋章を見つめる中、今度は響の首から胸に掛けて再び光が出現し、徐々に何かを形作りながら輝きが薄れていくと、それは赤いペンダント……フロッグイレイザーの改竄の力によって失われた筈のガングニールのペンダントになつていったのである。

「ッ?!ガングニール?!」

『なっ……装者の、ペンダント……？馬鹿なっ、それは俺の力で完全に消した筈だっ！なのに、何故っ?!』

消された筈のガングニールの突然の復活に響だけでなく、改竄を行使してペンダントを消した張本人であるフロッググレイザーも動揺を浮かべて困惑の声を荒らげてしまふ。

そんな中、響と共に呆然と復活したガングニールのペンダントを見つめていた蓮夜は彼女の手に握られるカードに視線を移すと、カードを見つめている内に脳裏に知らない筈の知識が自然と蘇っていき、目を見開きながら頭を抑えていく。

「そう、か……本のしおり……それがカードの……」

「……？蓮夜、さん？」

響が握るカードを見つめて何かを知っているかのような眩きを漏らす蓮夜。そんな

蓮夜の様子に響が不思議そうに首を傾げると、蓮夜はその声で我に返りながらすぐに真剣な表情に戻り、フロッグレイザーの方へと振り返った。

「……………奴を倒すぞ。今の俺達を奴には止められない……………取り戻すんだ、お前の繋がりを」

「……………はい！」

理屈は分からない。何が起きてるのかもさっぱりだ。

しかし、ガングニールをこの手に取り戻した今、やるべき事は一つしかない。

戦うべき相手を見据えてそれを示す蓮夜の言葉に、突然の事態に混乱していた響はハツとなると、徐々に力強い表情を浮かべて頷きながら蓮夜と肩を並べるように隣に立っていく。

そして蓮夜はバックルから立ち上げたスロットにカードを装填し、その手でフロッグレイザーを指差すように身構えていき、響は復活した赤いペンダントを握り締めなが

ら瞳を伏せ……

『Code x……』

「Balwisyall Nescell gungnir tron……」

「……変身ッ！」

『clear!』

響の口から紡がれる美しい唄に合わせて力強く叫び、蓮夜が撫でるように左手でスロットを押し戻したバツクルから電子音声が響き渡る。

直後、二人は蒼と橙色の光に包まれながらそれぞれスーツと装甲を身に纏っていき、蓮夜は複眼を赤く輝かせるクロスに、響は首元から出現した長いマフラーを棚引かせながら輝きを放つ両腕のナツクルを構え、両者同時に変身を完了させていったのだった。

「?! た、立花さん……?!」

『シン、フォギアっ……?! あ、ありえない……俺の改竄はまだ生きている筈なのにつ……?!』

ガングニールを身に纏った響の姿を目にし、フロツグイレイザーは信じられないと首を振りながら吃驚の声を荒らげ、三人から離れた場所に位置する遊具の物陰で響を心配して残っていた未来も、ギアを纏った響を見て驚愕し我が目を疑っていた。

「……ガングニール……」

ギアに覆われた自身の右手を見下ろし、響は取り戻した相棒の感触を確かめるように拳を握り締める。

イレイザーの改竄によりこの手から消されて一日も経っていない筈なのに、何故か不思議と懐かしさすら覚える。

そんな感傷を覚える自分に思わずクスツと微笑み、響は隣に立つクロスの顔を見上げて力強く頷いた。

「行きましょう、蓮夜さん！今の私達なら、誰にも負ける気がしません！」

『それに関しては同意だな……これ以上、お前達にこの物語を弄ばせはしない……！』

『グツ、ぐつうううつ……!!お、まえがつ……よくもつ……!!お前等さえいなければアアあああああツツ!!!』

想定外に次ぐ想定外にいよいよ追い詰められているのか、フロッググレイザーは最早余裕がなく忌々しげにクロスと響を睨み付けて恨みがましく唸る事しか出来ずにいる。

そんなフロッググレイザーに向けて、クロスはスナップを効かせた右手で指差し、

『此処からは俺達のターンだ……さあ、顧みろ！お前が歩んできた物語をッ！』

「はあああああッ!!」

今までの無機質さとは違う、確かな力強さを込めた叫びと共にほぼ同時に地を蹴り上げ、クロスと響はフロツグレイザーへ踏み込みながら互いに拳を振りかざしていくのであった。

## 第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆③

『ハアアアツ！ハツ！ぜええああツ！』

『ぐつ、ごおうつ?!おつ、まえエエええええツ!!』

ガングニールを取り戻した響と共に変身し、戦いの流れの中で公園内にある雑木林へと戦場を移したクロスはフロッググレイザーを相手にカウンターを主体とした動きで立ち回っていく。

一方でフロッググレイザーは想定外の事態の連続による動揺、そして自分の思い通りにならないクロスと響への怒りが未だに収まらないが故か、その動きは憤りのあまり感情が先走って乱雑になっていた。

まるで平手打つようにカエルの手酷似した巨大な異形の手を荒々しく振りかぶり



クロスに何度も襲い掛かるも、一発目、次いで二発目の平手を歩くような後退と共に顎を引かれるだけで回避される。

そして三発目の平手をクロスが咄嗟に伸ばした右腕で容易く受け止められた直後、彈丸の如く放たれた素早い左拳が顔に突き刺さり後退りさせられた。

『がああううっ?!ぐっ……だったらアあああッ!』

鼻を抑えて痛みに悶え、湧き上がる怒りのままに今度は地面に張り付くように身を低く屈めると、フロツグレイザーは両足をバネの如く用いて勢いよく真上へと跳び上がり、そのまま降下の勢いを利用してクロスに殴り掛かった。

振り翳された拳が目前にまで迫る。しかしクロスは片足軸回転でフロツグレイザーの拳と突撃を紙一重で回避すると同時に左脚を突き上げ、フロツグレイザーの溝尾に鋭い膝蹴りを叩き込んでいった。

『ゴッ、アアアアッ?!おっ、まえっ……!!』

『ハアアアアアアッ!!』

腹を両手で抑えながら数歩後退るフロッグイレイザーの顎に続けざまに放たれたアッパークットが突き刺さり、フロッグイレイザーの身体が簡単に宙に浮き上がる。

更に追撃はそれだけで終わらない。クロスはバックルから右腕に掛けて伸びたライオンに瞬時に光を走らせて拳に蒼い輝きを纏い、瞬間的に強化された右ストレートを身動きが取れないフロッグイレイザーの腹に思い切りブチ当て、炎のように揺らめく蒼いオーラを周囲に拡散させながら殴り飛ばしていったのだった。

『ギイイイイイイツ?!ごっつ、っ……こ、のっ……!!オマエっ、なんか……!!お前が邪魔さえしなければアあああッ!!』

物語を改竄し、立花響を孤立させるという自分の目論見は確かに叶っていた。

なのにこの黒月蓮夜というイレギュラーをきっかけに計画の全てが瓦解し、あと少し

というところで改竄で蝕む事が出来た響の復活に繋がってしまった。

コイツさえいなければ……!と、自分の復讐を邪魔したクロスへの憎悪を糧に痛みを振り払い、ふらつきながらも身を起こして再度クロスに襲い掛かろうとするが……

「ううおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおつっ!!!」

『……?!』

その時、天をも貫かんばかりの猛々しい咆哮が何処からともなく響き渡る。驚きと共にフロッググレイザーが咄嗟に振り返れば、其処にはフロッググレイザーの側面に回り込んだ響が後ろ腰のスラスターで加速しながら猛スピードで木々の間を駆け抜け、右拳を振りかざして迫る姿があったのだ。しかし……

『ハッ、馬鹿が……!俺にはお前達の技は通じないとまだ学習してないかアツ!!』

そう、あらゆる物語から追放され、異なる現実の存在と化したグレイザーには物語の





て飛び出し、息を吐かせる間も与えまいと高速のラッシュを仕掛けていく。

そして二人の後を追い掛けて雑木林を抜け出したクロスは、フロッググレイザーに拳を打ち付けていく毎に確実にダメージを与えていく響を目にしてある確信を得ていた。

(やはりそうか……だとしたらさつきあのカードも……これなら……！)

先程生まれたカードを見た時に蘇った知らない筈の知識。あれにより響がイレイザーと対等に渡り合えている理由を理解出来たクロスは納得するように小さく頷き、そのまま響の下に駆け付けて彼女と共にフロッググレイザーに挑み掛かっていった。

「ダアアアアアツ!!はあああああツ!!」

『ハッ!ぜえいやあああツ!』

『グウツ!コ、コイツ等アアアツ!!』

目にも止まらないラッシュを浴びせつつ、フロッググレイザーにこちらの動きに慣れさせないように舞うように飛び交って何度も立ち位置を入れ替え、アクロバティックな動きで翻弄しながら休まる間を与えず拳を打ち込み続ける。

これが初めてとはとても思えない、まるでお互いの思考を読み取っているかのような手練の動きにフロッググレイザーも追い詰められながらただ目を見張るばかりだが、驚きを感じているのはクロスと肩を並べる響も同じだった。

（動きやすい……次にどう動けばいいのか手に取るように分かる！合わせてくれるんだ、私の動きの癖に……！）

身体ごと当たる勢いで全力の拳を振り抜けば、それに合わせて先に動いていたクロスが敢えて回避されやすい攻撃を仕掛けて自分の拳が確実に当たる位置に敵を誘導し、相手が放った拳に咄嗟に前蹴りを合わせ、その力を利用し後方へとバク宙して離脱する自分の真下を素早く潜り抜けながらフロッググレイザーに殴り掛かり、空いた隙をフォローしてくれる。

自分の一挙一動、自分と呼吸を合わせてくれているのが言葉などなくても伝わり、今漸く本当の意味で一緒に戦えている嬉しさを滲ませて響は口元を緩めながらクロスと顔を見合わせて頷き合うと、二人の間に割って入るように飛び掛かったフロッグイレイザーの攻撃を捌きながらクロスと共にフロッグイレイザーの顔面に正拳突き、トドメに横蹴りを胴に打ち込んで吹き飛ばしていった。

『グッ！クツ、ソオツ……！だったらこれでどうだアッ！』

格闘戦では二人に分があると踏んだのか、フロッグイレイザーはクロスと響から距離を離すように後方へと飛び退きながら口から水弾を乱射し始める。

それを見たクロスと響も咄嗟に身を屈めて初撃をかわしながら左右に駆け出して散開し、フロッグイレイザーが二人に目掛けて交互に放つ水弾を疾走して回避し続けるが、その時、ズキイツ！とクロスの右足に激痛が走った。

『ツ！足、がつ……！』



先のアスカとの戦いで負傷した火傷が激しい戦闘の影響で再び疼いたのか、思わず足を押さえるクロスの動きが目に見えて鈍る。其処へ響から標的を変えたフロッググレイザーの水弾が直撃し、クロスは大量に撒き散る水と共に吹っ飛ばされてしまった。

『グアアアッ!』

「ツ！蓮夜さんッ!」

『貰ったアあッ!!』

地面に叩き付けられるクロスに目掛け、この隙を逃すまいとフロッググレイザーが立て続けに水弾を発射する。それを見た響はすぐさま腰と両脚のスラスターを噴かせて方向転換し、フロッググレイザーの頭上を飛び越えながらクロスの前に着地すると共に地面を思いつき踏み付けた。

瞬間、響の震脚により衝撃が走ったアスファルトの地面が大きく捲れ上がり、巨大な盾となって無数の水弾から二人を守っていく。

「これ以上はやらせないッ！」

『チイツ！小癩な——！』

『Final Code x……clear！』

『——?!』

ならばこちらも威力を上げて盾ごと粉碎してやると大きく息を吸って身を反らすフ  
ロツグイレイザーの耳に、不意に電子音声が届いた。

直後、アスファルトの盾から真上へと跳び上がったクロスが雑ぐように左脚を振る  
い、蒼いポインターをフロツグイレイザーに当てて拘束する。

『し、しまっ——?!』



かべてクロスがフロググレイザーを睨み据える中、そんなクロスの下に響が慌てて駆け寄っていく。

「蓮夜さん……！大丈夫ですか！」

『……ああ。だがすまない、奴を仕留め損じた……足さえ万全ならっ……』

僅かに右足を動かしてみるが、それだけで激痛が走り顔を歪める。

戦いの中で足の怪我が徐々に悪化していた所に、決着を急いで技を使ったのが仇になったのだろう。こんな状態ではまともに戦えない所か、響の足を引っ張ってしまう。

ならば他の形態に姿を変えて……と一瞬考えを巡らせるも、遠距離を得意とするタイププラスターはその高い火力とパワーから反動も強く、この足では銃を一度放つ毎に踏ん張る事が叶わずまともに扱えない。

高速戦闘を得意とするタイプスラッシュはそもそもその前提として両足がまともに機

能しなければ、その強味を活かせない。

思考すればする程、ハンデイを負った今の自分ではどれも十全な能力を發揮出来ず奴を仕留め切れる決定打にはならないという結論に至り、クロスは足を抑えて悔しげに唇を噛み締める。

響はそんなクロスの顔を心配そうに覗き込むと、突然「あ……！」と何かを思い出したように顔を上げて懐を漁り、一枚のカードをクロスに差し出した。

「そうだ、これ……蓮夜さん、これって何かお役に立てませんか……！」

『？それは……』

そう言つて響が差し出したのは、先程彼女の手の中で GANG ニールを模した紋章が浮かび上がった新たなカード。

それを見たクロスは差し出されるカードと響の顔を交互に見比べ、戸惑い気味に響の

手からカードを受け取っていくと、その瞬間、まるでクロスに共鳴するかのよう  
に描かれたガングニールの紋章が淡い光を放っていく。

『！カードが反応して……？！』

『っ……？何をするつもりか知らんが、みすみす見逃すと思っているのかっ!!』

光を放つカードを見て驚きを浮かべるクロスに目掛けて、フロッグレイザーが口か  
ら再び水弾を連射して容赦なく襲い掛かる。だが其処で響がクロスの前に飛び出し、無  
数の水弾を拳で素早く弾き凌いでいく。

「私があのにレーザーの攻撃を抑えますっ！今の内につ！」

『っ……すまない……お前の力、借りるぞ……！』

響の背中を見て頷き、彼女の助けを借りてふらつきながら立ち上がったクロスはバツ  
クルから立ち上げたスロットにカードを装填し、左手でスロットを押し戻した。

『Code Gunnir……clear!』

鳴り響く電子音声と同時に、クロスからパージされた装甲が周囲をグルリツと回転してその姿形を変化させていき、更にクロスの周りにも腕部や肩等の幾つもの装甲が追加で出現していく。

そしてそれらの装甲が次々とクロスに全身に纏われていくと、最後に両肩の肩甲骨部から橙色に美しく輝く二翼の光のマフラーが飛び出し、風に靡くように揺らめいた。

全ての変身を終えたその姿は、頭部左右に角のように頂く黒と白のヘッドギアと、金に近い煌めきを放つ橙色の複眼が特徴的なオレンジと白の仮面。

滑らかさと刺々しさが溶け込むように両立した形状のオレンジ、白、黒の三色が入り交じったボディの背部と両足の左右には、響のスーツと同様に複数のスラスタが付属されており、両腕は右腕が純白と橙色、左腕が漆黒と橙色という左右非対称のアンシメトリーな色合いとなっている。

それは、一人の少女と紡いだ『繋がり』の証。

立花響という少女の想いと交錯する事で誕生した新たな形態、『仮面ライダークロス・タイプガングニール』にその身を変容（リビルド）させたのであった。

『ッ?!な、何だ……?あの姿は……ッ?!』

「……………ガングニール……………蓮夜さんも、私と同じ……………!」

新たな姿に変身したクロスを目の当たりにし、フロッググレイザーから驚愕の、響からは感嘆の声が上がる。

『……………これは……………』

クロス自身もその姿を予想だにしていなかったのか、凄まじい力の奔流を感じる新たな形態に呆然と自分の両手を見下ろすが、クロスと同様、予想外の事態に困惑を浮かべ



ていたフロッグイレイザーはハッと我に返り、頭を振った。

『今更そんなもんを出した所で何になる……！どっちみち足が使い物にならなきや役に立つものかよオツ!!』

そうだ、クロスが足をまともに使えないのは既に分かっている。ならば今更どんな姿形に姿を変えようともその力を十全に扱える筈がないと動揺を振り払い、フロッグイレイザーはその跳躍力で遙か上空へと一気に跳び上がりながら、クロスと響に目掛けて水弾を素早く連射していく。

「ツ！蓮夜さんツ！ぐっ！」

『！』

まるで雨の如く降り注ぐ水弾の数を前に響がクロスを助けようと咄嗟に飛び出すのが、狙われているのは彼女も同様であり、立て続けに襲い掛かる水弾を弾くのに精一杯でその場から動く事が出来ない。

響の援護を得られず、空から迫る水弾の雨の前にクロスは空手のまま佇むばかりだが、それでもフロッグイレイザーを見据えたまま僅かに踏み出した左脚のスラストアタックが火を噴き出し、水弾の一発が額に直撃する寸前……

その姿が残像のように乱れたかと思われた次の瞬間、降り注ぐ水弾の雨の間を一瞬で飛び抜け、上空に浮遊するフロッグイレイザーの眼前に右腕を振りかざしたクロスが姿を現したのだった。

『ツ?!?なん——?!?』

「蓮夜さんッ?!」

『ハア  
アアア  
ツツツツ!!!』





イレイザーを蹴り落とし巨大な爆発を巻き起こしていったのだった。

「きやああああっ!!」

「ぐううっ!っ……あれが……蓮夜さんのガングニールの力……!」

フロッグイレイザーが地上に叩き付けられて発生した爆発の衝撃波が公園内に吹き荒れる。そのあまりの突風に遊具に身を潜める未来も思わず悲鳴を上げ、両腕を十字に組んで衝撃波に耐える響もクロスの新たな形態の力に驚きを隠せずにいた。

そして二翼の光のマフラーを棚引かせ、パワージャツキを利用し右脚を底いながら地上に着地したクロスもフロッグイレイザーが墜落して巻き上がる土煙を見つめた後、左右の脚に備え付けられる装備を見下ろしながら自身の右脚に撫でるように触れていく。

（この装備のおかげで足の負傷をカバー出来てる……これが、アイツの……）

「蓮夜さん!」



える響も驚愕する中、フロッググレイザーは傷付いた腕を荒々しく振るいながら二人に向かつて叫ぶ。

『赦さないッ……!!! 赦してたまるかお前達の存在をオオオッッ!!! 絶対に消してやるッッ!!! 今度こそ消してやるッッ!!! お前達が存在したという痕跡すらもこの手で書き換えてやるウウウウウウウッッッ!!!』

まるでその怒りに呼応するかのようには、フロッググレイザーは不気味に輝く赤い瞳を激しく発光させて怒り荒ぶる。

しかしクロスは臆する事なく左腰のホルダーから取り出した一枚のカードを構え、響を一瞥しながら首を横に振っていく。

『残念だがコイツが——いや、コイツ等と俺がいる限り、それは不可能だ……!』

『Final Code x……clear!』

バツクルにカードを装填して電子音声で鳴り響き、クロスの両側頭部のヘッドギアに内臓された歯車が高速度で回転し始める。

瞬間、身体の内から凄まじい量のエネルギーが湧き上がると共に、両肩の縁、両腕と両脚の側部、胸部中央の各部の装甲が花開くように展開されていき、露出された内部装甲から過剰に高まるエネルギーを外へ逃がすように橙色の輝きが放出されていく。

そしてクロスの両肩のアーマーが独りでに変形してドリルのような武器を備えた形状に変わっていき、クロスが両腕を伸ばし両肩のアーマーとナツクルを連結させ肩から切り離れた瞬間、両腕のナツクルに装備したドリルが起動し、火花を撒き散らしながら激しく回転し始めた。

『ツ?!なん、だ……?ドリルっ……?!』

『ハアアアアアアアアアアアッ……!!ぜえええええやあッ!!』

新たな武器を取り出すクロスを見てフロッググレイザーが警戒し身構える中、クロス



は両腕のドリルをナツクルごと交互に投擲する。

スラスターから火を噴いて放たれた二つのドリルナツクルは互いにぶつかり合いながらフロッググレイザーに目掛け飛来していき、迫り来る白のドリルナツクルを前にフロッググレイザーは慌てて身を翻し紙一重で回避するが、直後にフロッググレイザーの背後にクロスが瞬時に回り込んだ。

『ッ?!何だとッ?!』

『おおおおおおッ!!』

避けられた白のドリルナツクルを拾い上げるように右手に再装着し、グルリと回転して勢い付けたクロスのドリルがフロッググレイザーの背中に炸裂した。

『ガアアアアアアアッ?!』と、背中を襲う削り取られるような痛みにフロッググレイザーが堪らず悲痛な雄叫びを上げ、そのまま殴り飛ばされた先でもう片方の黒のドリルナツクルが飛来し、フロッググレイザーの胸に抉るように突き刺さっただけでなく、

「やあああああああああああッ!!」

『?!なんつ……?!—ガギイイイイイツ!!—うぐあああああああッ!!?』

正面から腰のスラスターで加速した響が猛スピードで突進し、フロッググレイザーの胸に突き刺さる黒のドリルナツクルの接続部に殴るように左拳を挿し込み、その勢いでドリルの先端を更に深く食い込ませていったのだ。

そして響はフロッググレイザーの胸から引き抜いた左腕に装着した黒のドリルナツクルの刺突と右腕のパイルバンカーを組み合わせた連撃を立て続けに打ち込んでいき、響が右腕のバンカーで殴り飛ばした先で待ち構えていたクロスが左脚のスラスターを噴かせ、フロッググレイザーを上空へ打ち上げるように蹴り飛ばしていった。

『ガハアアアアッ?!』

『続けて行くぞッ!』

「はいッ！」

二人の猛攻はまだ止まらない。

後部のスラスターに火を灯して勢いよく飛び立ち、まるで天翔ける流れ星のように空に打ち上げられるフロッググレイザーを飛び越えるほど速く飛翔した二人は遙か上空で合流し、互いに向けて空いた右手と左手を伸ばし繋ぎ合わせていく。

「蓮夜さんッ！」

『ああ……！コイツで決めるッ！』

握り合わせた手と手を起点に立ち位置を入れ替えるようにその場で一回転し、クロスと響はドリルアーマーを纏ったそれぞれの腕を合わせるように構えていく。

すると次の瞬間、二人のそれぞれの腕に纏われるアーマーが分離・連結して徐々に一



だっ………こんなっ

!!!!?  
』

『ハア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
!!!!!!  
』

響と共に全力のエネルギーを豪腕に注ぎ込むクロスの仮面のクラツッシャーがガ  
ギイツ！と音を立てて開かれて発光し、内部装甲が露出するクラツッシャーと全身の装甲  
から凄まじい熱量と共に発せられる橙色の光が輝きを増していく。

そしてフロッググレイザーに打ち込まれる豪腕があまりのエネルギー量に耐え切れ  
ずに徐々に罅割れていき、やがて硝子のように粉々に砕け散った豪腕の中から飛び出し  
たクロスと響の全力を込めた拳がフロッググレイザーの両脇を穿ち、異形の身体に巨大  
な二つの風穴を開けながらクロスと響は地上へと滑るように着地していったのだった。



その一言と共に仮面のクラッシュヤーが最後に閉じられた瞬間、フロツグイレイザーの全身から一際大きい火花が撒き散り、悲痛な叫びと共に公園の上空で巨大な大爆発が巻き起こったのであった。

## 第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆④

『——うあつ……う、ぐつ……い……アツ……』

——クロスと響の渾身の一撃を前に巨大な爆発に吞まれ、完全に倒したかに思われたフロッグイレイザーは未だ辛うじてその息を繋ぎ、力無く地面に倒れ込んでいた。

しかし二つの風穴が開かれたその肉体は既に瀕死であり、ボロボロに黒焦げた身体を引きずるフロッグイレイザーの下にクロスと響が歩み寄っていくと、倒れ伏すフロッグイレイザーを見下ろしてクロスが口を開いた。

『一つだけ聞かせてくれ……お前は本当に、奴らに望んで自分からイレイザーになる事を選んだのか?』

「……………えっ?」



それはアスカの口から聞かされた、この世界の行き場を失った人間達が自らイレイザーになる事を受け入れたという衝撃の事実。

その真相を直接フロググレイザー本人に問い質すクロスの問い掛けに、初めてその話を聞く響は目を見開いてクロスの顔を思わず見上げ、戸惑いを顕わにフロググレイザーに視線を戻すと、フロググレイザーは顔を俯かせて一拍置いた後、渴いた笑い声を漏らしていく。

『そう、だよ……あの二人を失ってから、俺の人生は毎日地獄だった……どれだけ時を経ても疵は癒えなくて……俺が助けを求めても、周りの連中は手に負えないとみんな離れていった……』

「……………それは……………」

『こんな世界に、救いなんてないと思ってたよ……そんな時だ……何もかも諦め切ってた中で、知ったのさ……そいつの存在を……！』

拳を握り、顔を上げたフロッグレイザーの赤い瞳が目の前に佇む響を睨み据える。

その瞳の奥に宿るのは、何処までも深く薄暗い嫉妬と憎悪の念。

二人に敗北しても尚、内なる激情の炎が未だに揺るがないフロッグレイザーの視線を受けて響も息を呑み、クロスもそんな響を庇うように僅かに前に踏み出していく。

『妻と娘を差し置いて生き残ったそいつには大勢の仲間がいて、家族がいて、支えられて……しかもその時に得た力がきつかけでヒーローになったって……？何だよそれ……ふざけるなよ……！あの二人は誰にも救ってもらえなかった……！俺を助けてくれる人間は誰もいなかった……！なのになんで……なんでそいつにばかりっ……！』

『……だからレイザーの力を求めて、コイツに関わる物語を改竄したのか……』

動機は全て、家族や友人……自分が失った全てを持つ響への妬み。

その憎しみから人である事を捨てて、イレイザーとなつてまで彼女に復讐する道を選んだフロッグイレイザーに対しクロスも目を僅かに細めると、フロッグイレイザーは悔しげに拳を地面に叩き付けて項垂れていく。

『今この世界は、俺が嘗て味わった地獄を再現した筈だった……なのに、それでもそいつには手を差し伸べる人間が現れた……！何故だ……?!俺はそんな人間に出逢えなかつたのにつ、同じ世界でどうしてそいつばかりが救われるつ……?!俺やあの二人と何が違うつ……?!何処まで理不尽なんだこの世界はあつ!』

同じ事件の被害者で、周囲の人間から疎まれてきた過去も同じ筈だった。

なのに、響には其処から掬い上げてくれた親友がいて、シンフォギアの力に目覚めてからも多くの仲間を支えられながら今を幸せに生きている。

物語を改竄して皆との関係を断ち切つても、結局その親友との繋がりは完全に断つ事が叶わず、響の復活にも繋がってしまった。

どうしてこんなにも違う？

何故自分にはアイツのように手を差し伸べてくれる誰かがいない？

響だけじゃない、何処までも不公平なこの世界への憎悪を募らせて吠えるフロッグイレイザーの姿にクロスも無言で口を閉ざすが、そんなクロスの前に響が静かに歩み出ていく。

『！おい……！』

「大丈夫です」

思わず止めに入ろうとしたクロスに笑顔を向けて短くそう言い切ると、響はフロッグイレイザーの前に立ち、徐に両膝を着いていく。

『ツ……オマエえツ……！』

「……………」

最早彼女に襲い掛かる余力も残っていないのか、フロッググレイザーは目の前で膝を着く響を忌々しげに睨み付ける事しか出来ない。

だが響は臆する事なくそんなフロッググレイザーの眼光を見つめ返し、そのまっすぐな眼差しにフロッググレイザーも僅かに圧されながらも声を震わせて呪詛を吐いていく。

『お前さえっ…………お前さえいなければっ……………！』

「…………あの日…………ライブ会場で生き残ったのが私じゃなければ、貴方の大切な人達が生き残ってたかもしれない…………？」

『…………ツ…………』

そう問い掛ける響の言葉に、フロッググレイザーは咄嗟に反論出来ずに声を詰まら

せ、目を泳がせる。

そんなフロッググレイザーを見つめたまま響は物哀しげに一度目を伏せると、僅かに目を開き、

「確かに、何か一つでも違っていたら、そうなつてた未来もあつたかもしれない……でも、ごめんなさい……私にはどうする事も出来ません……」

フロッググレイザーに深く頭を下げ、謝罪の言葉を口にしたのである。

自分を憎んで殺そうとした相手に対してのその意外な行動を前にフロッググレイザーもクロスも目を見開く中、響は僅かに頭を上げて胸の内の想いをポツポツと語り出す。

「あの日を境に、私の人生も大きく変わりました……私だけが生き残って、その事を沢山の人から責められて、それがきっかけで家族もバラバラになって……もしも未来が……親友の存在がなかったら、私もきつと貴方と同じになつてたかもしれない……今で

も時々、親友と一緒にいてそう思う事があるんです……」

蓮夜と再会する前、フロッグレイザーの改竄に苛まれていた際に自分の中身を塗り潰そうとした、あの薄暗い声を思い返す。

最初は強く否定し続けていたあの声も、今思えば、あれも恐らく一つ違えば自分がそうなっていたかもしれない i f の一つ。

陽だまりである未来の存在があつたおかげで自分は今笑っていられるが、彼女がいなければあの声のように誰も信じられず、胸のガングニールで、全ての元凶であるノイズを憎んで先の見えない戦いに身を投じていた事も有り得る。

そう考えれば、目の前の怪人は自分が歩んでいたかもしれない可能性……ある種、有り得た未来の姿とも呼べるのかもしれない。

「貴方や蓮夜さんは、私の事をヒーローと言ってくれたけど……私自身、そんなつもりはないんです……寧ろ、そんなものがいらなくなる世界に少しでも変えていきたい……も

う二度と、私や貴方達みたいに、あんな悲劇のせいで誰かに涙を流させたくない……だから伸ばすって決めたんです、この手を。あの日、奏さんが助けてくれたこの命と、この手に握るシンフォギアで、助けを求める誰かの手を繋ぐって……」

『ツ……そんな事です……!』

「……それで許してもらえる、なんて思ってます……。貴方が私を憎む気持ちも、哀しみも痛いほど伝わって、分かるから……。だから……」

そう言いながら響は徐に両手を伸ばし、地面に打ち付けられたフロッグレイザーの傷付いた拳を手にとって握り締めていく。

『ツ?!なに、をっ……?』

「……貴方の怒りも、憎しみも、私が全部受け止めます……。だからもう一度、立ち上がって生きて欲しい……。レイザーになってしまった罪を償って、もう一度、人として……」



『なっ……』

自分の憎しみを全て受け止める代わりに、もう一度人間としてやり直して欲しい。

耳を疑うような響のその言葉にフロッグイレイザーだけでなくクロスも驚きを浮かべてしまうが、我に返ったフロッグイレイザーは慌てて響の手を振り払おうとするも力強く握られた手を払えず、戸惑いを露わに響を睨み付けた。

『正気かお前っ……！そんな事をしてお前に何のメリットがあるんだっ！そんな、お前が傷付くだけのっ……！』

「……それで貴方の生きる意志になれるなら、私はへいき、へっちゃらです。初めは憎しみを糧にしてもいい。怒りもぶつけてくれても構わない。どれだけ長い時間が掛かっても、いつかその憎しみや哀しみが晴れて、前を向いて立ち直れるようになるまで、私が貴方の手を握り続ける……！だから、どうか……生きるのを諦めないでっ……！」

『…………ツ…………！』

握り締めた手を更に強く握り締め、何処までもまつすぐな眼差しを向けてそう言い切る響にフロッググレイザーはただただ言葉を失い、絶句してしまふ。

自分が罪を償い、立ち直れるようになるまでその憎しみの全てを受け止め続ける。

あれだけの世界の悪意に晒され、あれだけの憎悪を叩き付けられても尚、一方的な憎しみをぶつけてきた相手にまで手を差し伸べる響の優しさに嘘偽りが一切ないのだと、固く握り締められる両手の暖かみから否が応でもソレを感じさせられてしまふ。

あの二人を失ったあの日から二度と誰かに掴まれる事のなかった自分の異形の手を優しく包み込む響の両手を複雑げに見つめると、フロッググレイザーはやがて肩を落としながら響の手から目を逸らし、力無く項垂れていく。

『コイツは、何処まで……………いや……………だからこそ、なのか……………は、はつ……………そりやそうだ……………俺とは違うに決まつてる……………敵うワケがない、はず

だっ……………」

『…………お前…………』

自嘲するフロッグレイザーから、憎しみの念が薄らんでいくのが分かる。

憎んでいた相手の響から此処まで言われて何か感じ入る物があったのか、フロッグレイザーの変化を悟ったクロスがジツとその顔を見つめると、フロッグレイザーは徐々に顔を上げてクロスを見据えていく。

『…………奴らには気を付けろ…………アイツ等は今も俺達の他に、仲間を増やし続けてる…………お前達が思ってる以上に、奴等は危険な存在だ…………』

『!』

「それって…………」

それはノイズイーターを生み出しているアスカ達の事を指しているのか、敵対していた筈の自分達に奴らへの警告を口にするフロググイレイザーにクロスと響も驚きを浮かべると、その時、響が握るフロググイレイザーの手から無数の粒子が溢れ出していく。

「ツ?!手がっ……!」

『嗚呼……いつつもこうだな……俺は……後になって後悔してばかりで……もつと周りを信じていれば……お前みたいな強さが……俺にもあれ……ば……』

「あつ——!」

掴んだ手が、すり抜けるように消えていく。

それでも尚手を掴もうと伸ばした響の手は届かず、フロググイレイザーは後悔の念を口にしながらその身体が無数の粒子となって消滅していき、夕暮れの空へと立ち上り消えていく粒子を呆然と見上げながら、響は悔しげに拳を握り締めていく。

「蓮夜さん……あの人は……」

『……ノイズを喰らったイレイザーは個体差はあれ、理性を失い、正気でいられなくなる……奴もそのせいでお前への激情を暴走させていた以上、止めるにはこの方法しかなかった……』

「……っ……」

だからお前が気に病む必要はないと暗に伝えるクロスだが、それでも割り切れないのか、響はフロッグイレイザーの手がすり抜けた自分の両手を握り合わせて後悔を露わに俯いてしまい、クロスもそんな響の震える背中を見つめて僅かに逡巡した後、顔を上げて彼女に歩み寄ろうと一歩踏み出し掛けた、其処へ……

「……立花さん……？」

「……っ！」

二人の背後から不意に声が聞こえ、その聞き覚えのある声に響はハツとなり、顔を上げ振り返る。

其処には、戦いの終わりを察して遊具の陰から出てきた未来が胸に手を当て、僅かな戸惑いを露わに響を見つめて佇む姿があつた。

「未来……!」

「あ、あの……立花さん、今のつて……—ザザザザアツ!……ツ?!い、たつ——!」

今の怪人は何だったのか、響が身に纏うギアの正体は何なのか問い詰めようとした未来だが、直後に未来の頭に先程と同じ激しいノイズが駆け走って頭痛が走り、頭を抑えてその場に跪いてしまう。

「み、未来っ?!」

辛そうに地面に座り込む未来に慌てて駆け寄り、響が彼女の肩を掴んで呼び掛ける。

それに対し未来も苦しげに何度か呻き、暫し間を置いて徐々に瞼を開いていくと……

「——ひび、き……？あれ……私、なにを……？」

「ツ！未来……今、私の……！」

心配そうに顔を覗き込む響の顔を見て、彼女がぼんやりと口にしたのはイレイザーの改竄の影響で忘れてしまった筈の親友の名前。

長らく彼女の口から聞く事のなかった自分の名前を呼ぶ未来を見て響が目を見張る中、そんな響の反応を他所に未来は周囲を見回し、頭上に疑問符を浮かべていく。

「とうか……え……？此处、どこ？私、確か部屋で寝てた筈じゃ……？」

「みつ……未来うーっ!!良かったあつ、未来が元に戻ったああああくっつっつ!!!」

「え……え、ちよつ、響?!どうしたのいきなりつ、ええ?!」

改竄を受けていた間の記憶がないのか、いつの間にか公園にいる事に疑問を抱く未来に目を潤ませた響がガバアツ！と思いつき抱き着いた。

あまりの勢いのそのまま危うく倒れそうになるも、何とか響を受け止めた未来は一向に状況が飲み込めずに戸惑ってしまいが、響は構わず記憶を取り戻した未来に強く抱き着きながら目尻に涙を浮かべるほど喜びを露わにしていた。

そしてクロスもそんな二人の様子を遠くから見守りながら静かに微笑むと、バックルからカードを抜き取って蓮夜へと戻り、懐から小型の端末……弦十郎から密かに受け取っていた通信機を取り出し、S・O・N・G・に通信を繋いでいくのであった。



「———なっ……では、我々全員揃ってイレイザーの改竄を受けていた、という事か……」



「?!」

それから数十分後。蓮夜から連絡を受け取ったS・O・N・Gの本部から黒塗りの車と大型車が数台駆け付け、事後処理の為に封鎖された公園内にて、蓮夜は他の職員達と共に駆け付けた弦十郎に今までの経緯を一から説明し、その内容に驚愕する弦十郎に小さく頷き返した。

「その様子だとやはり、改竄を受けていた間の記憶はないか……なら今日一日、自分が何をしてきたのかも全く記憶にないんだな……」

「ん……あ、ああ、そうだな……俺が覚えている限りだと、最後の記憶は確か昨夜、研究室で君から貰ったイレイザーの情報に関してエルフライン君と話し合っていた所までだ……それ以降の記憶は途切れていて、気付いた時には一日が過ぎていた。其処へ君からの連絡が来て、今に至る、という感じだな」

「つまりイレイザーの改竄が始まったのは少なくとも昨日の夜……俺が気付けたのが今朝となると、アイツの周りの人間の記憶を少しずつ改竄して発見を遅れさせたという事

か……」

それだけ自分に見つかるのを危惧していた、という事なのだろうか。確かに自ら慎重派を名乗るだけの事はあると、アスカの顔を思い返して蓮夜が小さく溜め息を漏らす中、弦十郎は眉間に皺を寄せていたたまれなさそうに頭を掻いていく。

「しかしそうか……響君が危険な目に遭つてる間、俺達はまんまとイレイザーの改竄に苛まれていたとは……彼女達の安全を預かる身の大人が、なんと情けないっ……」

「いや、奴らの改竄を受けて全員無事でいらただけでも上々だ……寧ろ、早い段階で異変に気付けなかった俺の方に非がある……これでもし誰かが犠牲になっていたとしたら、いよいよ本当に貴方達に顔向けが出来ない所だった……」

イレイザーの改竄への未来の反抗、それに触発された響と GANG ニールの復活、そして新たな力の発芽と、これらの要素が一つでも欠けていれば今回の事態の異変解決は叶わなかったかもしれない。

結局自分一人の力では異変の解決を果たせなかった事に自己嫌悪を覚え、申し訳ないと頭を下げる蓮夜に対し、弦十郎は首を横に振って否定した。

「だが、君がいてくれたおかげで事態を解決出来たというのもまた事実だ。もしこれが我々だけだったなら、奴らへ対抗する術もなく響君が犠牲になつていたかもしれない……だから君には感謝こそすれ、非難するような事は決してしないさ。少なくとも、今回の異変発生に際して何も出来なかつた俺達にそんな資格はないからな……」

「……風鳴司令」

蓮夜の心境を察してくれてるのか、そう言つて目を伏せる弦十郎からの励ましに蓮夜も意外そうな顔を浮かべると、弦十郎は公園の入り口……フロツグイレイザーに殴られた怪我の治療と検査をS・O・N・G・本部の医療機関で診る為、S・O・N・G・が用意した車に乗せられる毛布に身を包んだ未来と、彼女に付き添う響に視線を向けていく。

「それにしても、響君がイレイザーに傷を負わせたという話は本当なのか？ 君の話では、

奴らに対抗出来る術はそのベルトとカードの力のみだったと聞いていたが……」

「……俺もずつとそう思っていた……だが、アイツに持たせていたこのカードが変化した際、俺の中である記憶が蘇ったんだ……」

「記憶？」

訝しげに聞き返す弦十郎。それに対し、蓮夜も小さく頷きながら手に握るガングニールの紋章が描かれたカードに目を落としていく。

「イレイザーに対抗出来るのはクロスだけじゃない。このカードが変化した起因を調べれば、恐らく俺以外にも奴らと戦える力……いや、イレイザーの改竄も無効化出来る術が見つかるかもしれぬ……」

「改竄が無効化、だど？それはつまり……ぬっ、ぐっ……！」

詳しく話を聞き出そうと身を乗り出す弦十郎だが、不意に眩暈を覚えて身体をぐらつ

かせてしてしまい、それを見た蓮夜は咄嗟に腕を伸ばして弦十郎の身体を支えていく。

「……詳しい話はまた後日にしよう……そちらもまだイレイザーの改竄から解放されたばかりで、身体が本調子じゃなさそうだ」

「むう……そう、だな、面目ない……しかし、そういう君は大丈夫なのか？見たところ、外傷も酷く辛そうに見えるが……」

蓮夜の手を借りて何とか態勢を整えながら、弦十郎が痣や血が滲む蓮夜の顔、ポロポロの服と黒焦げた右足を眺めて心配を露わに問い掛けると、蓮夜は一瞬「？」と頭の上疑問符を浮かべながら自分の傷付いた身体を見下ろした。

「俺は……そうだな……怪我の見掛けに比べて痛みは少ないから心配いらぬ。こちらは気にしなくても問題ないから、まずはそちらの回復に専念して——「駄目です！……え？」」

司令の不調でS・O・N・G.の活動に支障を来さないようにする為、弦十郎に静養

を勧めようとした蓮夜の言葉を遮るように声が響き、その声に釣られて二人が振り返ると、其処には公園の入り口の方から何やら厳しい顔をして早足で歩いてくる響の姿があった。

「お前……?」

「響君? まだ本部に戻っていなかったのか? 未来君は……」

「未来にはまだ車の中で待ってもらってます。それより、蓮夜さんも一緒に怪我を診てもらわないと! 未来より酷いじゃないですか、その怪我!」

「え」

イグニスレイザーとの戦いで負った蓮夜の全身の怪我と火傷を指して詰め寄る響の迫力に抑えれながらも、蓮夜はもう一度自分の身体を一瞥し、破れたズボンの間から痛々しい火傷が見える右足を後ろに下げて隠しながら、何処か慌てた様子で首を横に振った。

「いや、俺は本当に大丈夫だからこっちの事は気にしなくていい。俺の事なんかより、先ずお前の友人を先に——」

「全然大丈夫じゃないですつ！さっきの戦闘の時も動きが鈍つてたし、右足を庇つたりしてたじゃないですか……！いいからほらつ、行ーきーまーすーよつ……！」

「い、いや、待て……本当にいいんだ……俺はこの通り平気でつ、痛つ——！」

「ほら痛いつて言った！やつぱり全然大丈夫じゃないじゃないですか！」

「ち、違う！今のは思わずつ……まっ、人の話を——！」

何故か頑なに動向を拒否する蓮夜の話を見無視し、S・O・N・Gの本場で未来と一緒に怪我を診てもらおう為、響は強引に蓮夜の背中を押して車に押し込めていった。

「……珍しいな……響君が人助け以外で、彼処まで誰かに強引に迫るとは……」

そうして、一人その場に残された弦十郎も三人を乗せた車が本部に向かつて走り去るのを見送りながら、人助けや戦場以外でそうそう見られない響の強気な一面に意外そうな顔を浮かべ、ポツリとそんな感想を漏らしたのだった。



—S・O・N・G・本部—

それから約一時間後。完全に日が落ちてすっかり夜となった頃、S・O・N・G・の医療機関で診てもらった未来の怪我は大した外傷ではなかったらしく、一先ず跡が残るような心配はないだろうと医師にも診断された。(その結果に響は一先ず安堵していたが、改竄された間の記憶が残っていない未来はそもそも何故自分が怪我をしているのか分かっておらず、治療を終えてからも終始頭の上に疑問符を浮かべていた。



因みに、それとは同時進行で蓮夜の診断も一緒に行われていたのだが、問題は寧ろこちらの方にあつた。

イグニスレイザーの炎に焼かれ重度の火傷を負った右足を始め、どうやらそれ以外にも身体の至る所の骨に罅が入っていたり、中には骨が折れる寸前の重傷まであつたらしく、そのあまりに酷い診断結果に医師達も揃つて血相を変え「寧ろ何故そんな平気そんな顔をしていられるんだ?!」と驚きを露わにしていたが、当の本人の蓮夜が真顔で返した「ラ……ランナーズ、ハイ……？」の返答には一同ポカンと開いた口が塞がらない様子だった。

ともかく蓮夜の怪我の具合は想像以上に酷いらしく、完治するまで少なくとも三ヶ月は入院して治療に専念しなければならぬと診断され、その場にいた医師達の全員や診断結果を知つた響からも強く入院を勧められたが、当の蓮夜は……

『「……入院はいい！入院は困る！今日のバイトを途中で抜け出してしまった以上、明日のシフトにまで穴を空ける訳にはいかないんだ！」』

『ダメですつてばっ！私のせいで怪我をしたんだからちゃんと治療していかないとっ！このまま帰したら私も色々気になり過ぎて、晩ごはんも二杯しかおかわり出来ないじゃないですかあッ！』

『十分に食べれているんじゃないのかそれは……！いいから大丈夫だ！気にしなくていい！寧ろ恩人の店に迷惑を掛けてしまう事の方が大丈夫じゃないんだ！頼むから帰してくれえ！』

『だあーめえーですつてばあああーっ!!』

……などといった具合に入院を全力で拒否りまくり、強引に出ていこうとする蓮夜の手を響が全力で引き止めたりと、医務室内はしつちやかめつちやかな状態が暫し続く羽目になった。

そしてその後、そんなやり取りが約三十分も続いた頃合であまりの蓮夜の拒否りよう

に医師達が先に折れてしまい、入院は無理でもせめて一日だけ仮入院して様子を見させてもらえないかと頼み込んだ所、蓮夜も「それなら……」と一応納得し、今日は本部で仮入院する事になった訳なのだが……

「——なあ……そろそろ機嫌を治してはもらえないだろうか……？」

「むうー……」

体中に包帯を巻き、右足と左腕にギブスを付けて松葉杖を突いた蓮夜は本日泊まる事になる病室が用意されるまで、医務室の外の待合所のソファーに座って待たされていた。

その隣には付き添いを申し出た響の姿もあるのだが、入院を蹴った事がそんなにお気に召さなかったのか、響は先程から膨れっ面を浮かべて蓮夜と視線を合わせようとはしてくれず、困り果てた蓮夜は目尻を下げて再度響に声を掛ける。

「その、なんだ……さつきから言ってるように、怪我の見掛けに比べて俺は全然大丈夫な

んだ……だからお前が其処まで気にする必要はなくて、つまり……」

「むうー！」

「……………」

何とか機嫌を宥めようとするも、余計に膨れっ面が増し、言い訳無用、断固拒否と言わんばかりに響の上半身が蓮夜とは反対側に仰け反り離れてしまう。

——参った。どう切り出しても話を聞いてもらえない。

所在なさげに伸ばした手を宙に泳がせたままどうしたものかと悩み、蓮夜は暫し思案を繰り返して他に切り口がないか考え込んだ後、一つだけ、先程から気になっていた疑問を恐る恐る響に投げ掛けてみた。

「そう、いえば……お前の友人はあの後どうしたんだ……？俺達が医務室でごねてた間に、いつの間にか姿がなくなってたみたいだが……」

「……………ねてたのは蓮夜さんだけのような……………未来は発令所の方に移動して、さつき招集を掛けたクリスちゃん達と一緒に今回の異変の説明を師匠から聞かされてるみたいですよ……………私達以外は改竄を受けてた間の記憶がないから、混乱を避ける為に情報の共有だけでも一足早くしておいた方がいいだろうって、師匠も言っていましたから……………」

「……………そう、か……………それもそうだな……………」

何か最初の方でボソツと聞こえた一言が気になるが、それはともかく一日の大半の記憶がなく、気付いた時には明日が終わろうとしていたなどと普通なら混乱して当然だ。

余計な騒ぎを避ける為にも先に説明だけでも済ませておくという弦十郎の判断は確かに間違っていないと納得すると同時に、蓮夜は臉を伏せて安心するように溜め息を吐いた。

「けど、良かった……………お前の友人に大事がなくて……………」

「……………」

怪我の容態もそうだが、もし仮に一生顔に残る傷痕なんかが残ってしまったらどうなっていたか。

自分が間に合わなかったが為に彼女に要らぬ傷を負わせたかもしれないと内心気がでなかったが、診断の結果を聞いてから漸く胸のつかえが取れて安堵する蓮夜の顔を横目に、響も何か思案する素振りを見せるように暫し俯いた後、徐に姿勢を正しながら蓮夜に向けて口を開いた。

「蓮夜さん……………その……………あのイレイザーは……………あの人は結局、イレイザー達に利用されてただけだったんでしょか……………」

「……………」

そう疑問を投げ掛ける響からの突然の問いに、蓮夜は咄嗟に言葉を返せず押し黙る。しかしそれも一瞬であり、蓮夜は無言のまま空を仰いで天井を見上げていくと、先の戦

いで散ったフロッグイレイザーの最期を思い返してポツポツと答えていく。

「利用されていた、という点ではそうだろうな……奴も元々は、この世界で虐げられた被害者の一人に過ぎなかった……だがイレイザー達と出会ったばかりに、ただの被害者から加害者になってしまった……奴の改竄に晒された人達、お前達への被害を鑑みてただの被害者とは言い切れなくなったが……少なくとも、イレイザー達と関わったが為に奴の人生は狂わされたと言っても過言じゃない……奴にはもう、罪を償ってやり直すという選択肢すら選べなかったんだからな……」

「……………」

フロッグイレイザーを直接手に掛け、その命を奪ったのは確かに自分達だ。それは間違いない。

しかし、そうせざるを得ないまでに彼を歪めてしまったのは、他ならぬ彼の心の傷につけ込んだイレイザー達のせいだ。

奴らに出会いさえしなければ、彼だけでなく今までイレイザーにさせられた人達も人の道を踏み外す事も、その手を汚す事も、果てに命を失う事もなかった筈なのだ。

そう考えるだけで、尚更やるせない気持ちになる響の横顔をジッと見つめると、蓮夜はギブスを巻いた自分の左腕を見下ろしてアスカと邂逅した際の奴の言葉を脳裏に思い返していく。

——ただ普通に生きてただけで、ある日突然手前の物差しで身に覚えのねえ罪を押し付けられた上に勝手に人を追い出しておいて、何で一方的に俺達の側が悪いと決め付けられなきゃなんねえんだっ?!——

「——だからと言って、それが誰かの心の弱味につけ込んでいい理由にはならない……」

「……ええ?」

物語の都合で今までの生活のある日突然奪われ、人でない怪物にさせられた挙句に世界から追放させられたアスカ達が、こちら側の世界を憎む気持ちも分からなくもない。



しかしだからといって、その復讐の為に関係のない人間を巻き込むような横暴を許していい理由になる訳がないのだ。

そう考えながら重い腰を上げてソファから立ち上がる蓮夜を見て響が首を傾げると、蓮夜は響の方に向き直っていく。

「俺は必ず奴らを止める。奴らを最初に止められなかった負い目や償いだけじゃない……もうこれ以上、関係のない人間を巻き添えにさせない為にも、だ……」

「蓮夜さん……」

「……だから改めて、お前達の力を貸して欲しい……イレイザー達の目的を阻止する為にも、お前達の力が必要不可欠だ……頼む」

アスカ達の目論見を阻止する為に、彼女達の力を借りる事を改めて申し出て頭を下げた蓮夜。それを見た響は笑みを浮かべ、ソファから立ち上がり迷いなく頷く。

「勿論です。寧ろ力を借して欲しいのは、私達のほう……だから、力を合わせて戦いましよう！ 私達、みんなで！」

「……すまない……いや、ありがとう……」

響ならきつとそう言ってくれるだろうという確信はあったが、それでも緊張は拭えなかったのか安堵の溜め息を漏らす蓮夜に、響が笑って右手を差し出した。

蓮夜は一瞬その意図が読めず目が点となるも、それが握手を意味すると察して白い包帯を巻いた自分の右手を見つめ、そのまま彼女の手を取って握りながら響と顔を見合わせて僅かに微笑むと、其処で何かを思い出したように口を開いた。

「そうだ……すまない。協力にあたって一つ、頼みがあるんだが……」

「はい、なんでしよう！」

「…………名前、を…………」

「…………へ？」

要望があるという蓮夜からの申し出に二つ返事で領き返す響だが、急に歯切れが悪くなる蓮夜を見て小首を傾げる。一方で、蓮夜は所在無さげに何度か視線をさ迷わせながら…………

「名前を呼んでも、構わないだろうか…………？これから一緒に戦う相手を、流星にお前呼びわりし続けるのもどうかと思つてな…………駄目か…………？」

「え、あ、は、はい。それは勿論…………というか、名前くらい別にもつと前から呼んでくれても…………？」

「いや、初めて顔を合わせたその日にイレイザーから手を引け——などと言つてしまった手前、いきなり気安く名前を呼ぶのはあまりに不躰過ぎると思つたんだ…………」

だから長らく名前を呼ぶ事を躊躇して出来なかつたと恥ずかしげに告白する蓮夜。それを聞いて響も一瞬呆気にとられるも、彼が其処まであの日の事を気にしてた事が意外で可笑しそうに噴き出し、直後に「あつ」と何かを思い付いたように口火を切った。

「だったら、試しに私の名前呼んでみて下さいよ。これから皆の名前を呼ぶ練習と思つて、ほら、響って！」

「……ひびき」

「はー」

「ヒビキ」

「はー」

「ひびき」

「……あ、あのお、ごめんなさい……そんなまつすぐ見つめられながら名前を連呼されると、私も流石に照れちやうかなあーってっ……」

「?ああ、そうか……すまない……中々納得のいく発音にならず、つい……」

初めての名前呼びに自分でも幾らか緊張を覚えているのか、名前の発音が上手くいかに悪戦苦闘するあまり熱い視線を送ってしまったらしい。

ジツと見つめられて恥ずかしそうに狼狽える響に謝罪すると、蓮夜は何度か響の名前を繰り返し口にして徐々に正しい発音に近付けていき、漸く納得のいく発音を言えるようになり、コクリと小さく頷いた。

「——響……ウン、これだ……なら改めて、宜しく頼む……響」

「……はい!それじゃあ、私からも一つだけ、蓮夜さんをお願いしてもいいですか?」

「?ああ、こっちの頼みを聞き入れてくれたんだ。俺に出来る事なら何でも——」

「良かった！じゃあ、今から先生達に言つてちゃんと入院させてもらいましょう！今後の為にもしつかり怪我を治療してもらつて——！」

「仮入院」

「ちゃんと入院！」

「一日だけだ」

「入い」

「入院はしない」

「……むうう——！」

「いや、其処でむくられても俺にも退けない理由があつて——待て、おい待て。何か手

に力が籠ってないか？しかも段々力が強まってないか……？おい、ちよつと、まっ……痛っ、痛痛痛痛っ！待てっ！握り締め過ぎだっ！骨が軋むっ！待て響っ、響いいいっ！」

未だに蓮夜の入院を諦めてなかったのか、響は要望を聞き入れた代わりに入院してもらうべくもう一度説得しようとしたものの結局取り付く島もなく、こうなればと頬を膨らせた『◇ H ◇』のむくれ顔で握手したままの蓮夜の右手をがっしり両手で握り締めて抑えに掛かるものの、その緩い顔に反してギギギイツ！ととんでもない音が鳴る腕の痛みに蓮夜の悲鳴が待合所に木霊したのであった。

……そしてその後、弦十郎から一通りの説明を受けたクリス達が始りに響を迎えに行つた所、困り果てた顔の医師達に囲まれながら「んんー！」と蓮夜の手を全力で引つ張る響と、その手から抜け出そうと蓮夜が声にならない雄叫びを上げながら必死に腰を引いて抵抗しているという良く分からない状況に居合わせ、開いた口が塞がらず呆然と立ち尽くす事となつたのであった。

第四章／蘇る聖拳×束ねられた絆

E  
N  
D



## 番外編①

## メモリア01／ヒーローの食生活×不穩の芽

——フロツグレイザーを倒し、響達に及ぼした改竄を解決してから一日が経過した。昨夜は響が散々食い下がり強引にでも入院させようとしたものの、恩人であるバイト先の店長に迷惑を掛けられない一心から文字通り息も絶え絶えにソレを突っぱね、蓮夜は仮入院を終えた翌日の朝に本部を後にした。のだが……

「——どうしてこんな事になってしまったんだろうか……」

……時刻は夕方の四時過ぎ。本来ならまだクレープ屋でバイト中である筈の時間帯の今、S・O・N・G。本部内にある病室のベッドの上にはズーンツとヘッドボードに背を預けながら気落ちする蓮夜の姿があり、その左足には昨夜にはなかった筈の包帯が

何重にも巻かれていた。

何故彼が未だ此処にいるのか？ 事の発端は数時間前の今朝にまで遡る。

最初は予定通り仮入院を終え、最後に身体検査をした後に医師から再度入院を検討してもらえないか尋ねられたものの気持ちは変わらないと断り、本部を後にしてそのままバイトに向かおうとした筈だった。

だが本部である潜水艦が停泊する埠頭を歩いていた道中、S・O・N・Gの作業員達が潜水艦に運んでいた補給物資のコンテナを運送中に倒してしまうというアクシデントが発生。

コンテナが逃げ遅れた作業員を下敷きにし掛けるも、偶然にもその場に居合わせた蓮夜が飛び出して作業員を救い、アクシデントは起こったものの怪我人は何とか一人も出さずに済んだ。

……いや違う。訂正しよう。正確には一人怪我人が出た。作業員を救った筈の黒月

蓮夜である。

たださえ幾つか身体の骨が折れ掛かっている重症の身体なのに、作業員を救う為に無理に激しく身体を動かしたせいですが、それがトドメとなり、折れ掛かっていた左足の骨が完全にポツキリと逝ってしまったのだ。

結果、蓮夜はその場から動けなくなる程の重体悪化。為す術もなく情けない格好です。トレッチャーに運ばれ病室に逆戻りとなった。

その後、バイト先の方には事態を聞き付けた弦十郎達がクロスやレイザーの事を伏せて怪我の事を説明してくれたらしく、話を聞いた店長から「ちゃんと安静にしときなさい！うちの店は怪我人に無理をさしてまで働かせるようなブラックな会社じゃないんだから！」と至極真つ当なお説教を頂く事となり、蓮夜も流石に店長からの言葉には逆らえず「……了解……」と渋々ながらも聞き入れ、足が動けるようになるまで静養生活を強いられる事となったのである。

「ほらー、だから言ったじゃないですかー。しっかり治療に専念した方がいいってー」

「……いや、確かに忠告を聞き入れなかった俺が全面的に悪いんだろうが……それはそれとして、何故お前達が此処にいる……？」

「あつははっ……」

「言わんこつちやない、と呆れたようにそう呟くのは、学業を終えて蓮夜の見舞いに訪れた響だ。その隣には訝しげに響に目を向ける蓮夜の反応に対し、苦笑いを浮かべる未来の姿もあつた。」

「何でって、師匠から連絡を貰ったからお見舞いも兼ねて様子見に来たんですよ？蓮夜さんの事だからもしかすると、先生達の目を盗んで病室を抜け出したりとかするかもつて心配だったし……」

「……ストレッチャーで運ばれてた時はそのつもりだったが、今はその気はないから心配する必要はない……店長にも散々釘を刺されたしな……」

「むー……私が言っても聞いてくれなかったのに店長さんの言う事はちゃんと聞くんですね……あー！じゃあこれから蓮夜さんの事で困った時には、店長さんに相談して叱ってもらって——」

「それは本気で困るから止めてくれ」

それ程までに嫌なのか、首を横に振る蓮夜の顔はいつもの無表情のままだが、額から汗を滲ませて何処か焦っているように見える。そんな蓮夜の慌てぶりに響くと未来が可笑しそうに笑うと、其処で未来が何かを思い出したように椅子の下に置いてある鞆を掴んで膝の上に乗せ、中から包みに入ったクッキーを取り出した。

「そうだ。蓮夜さんコレ、良かったらどうぞ」

「……？それは……？」

「今日の調理実習で未来と一緒に作ったんですよ。未来が昨日の件で、蓮夜さんに何かお礼がしたいって言うんで」

「お礼って……俺は大した事は何もしていないぞ？お前を救ったのは響であって、俺は何も……」

実際の所、フロッグレイザーに襲われていた彼女の窮地を救ったのは響であり、自分はいくまで響と共闘して事態解決を手伝ったに過ぎない。

故に響はともかく自分は感謝されるような立場の人間ではないと遠慮する蓮夜だが、二人は首を横に振ってそれを否定した。

「何言ってるんですか！蓮夜さんがいてくれたから、私はもう一度立ち上がってイレイザーと戦う事が出来たんですよ？」

「私も、昨日の事は全然覚えてなくて響から聞いた限りの事しか分かりませんが……でも、蓮夜さんが響を助けてくれて、私達の繋がりを取り戻してくれたって事は分かります。だから、蓮夜さんには本当に感謝してらんです。響を救ってくれて、大切な親友との繋がりを取り戻してくれて……本当はこれだけじゃ足りないくらいだと思うけど、

「迷惑じゃなければ、受け取ってもらえませんか？」

「……………」

そう言つて未来がそつと差し出すクッキーの入った包みをジツと見つめると、蓮夜は僅かに逡巡する素振りを見せた後、未来の手から包みを受け取つて小さく頷いた。

「すまない……………ああいや、この場合はありがとう、だな……………正直こういつた甘味は貴重だから、個人的に物凄く有り難い」

「貴重つて……………あれ？でも、蓮夜さんが働いてるバイト先つて確かクレープ屋さんでしたよね？だつたら甘い物とか、沢山食べる機会が多そうに思えるけど……………」

「ないとは言い切れないが、其処まで機会が多いという訳でもないんだ……………他はどうかは知らないが、うちの場合はあつたとしても少ないおこぼれだったり、実験して作ったモノを偶に試食したりぐらいしかない……………だからこういう品を貰えるのは正直嬉しい……………本当に感謝して……………」

店先以外でこういった菓子やそうそう食にする機会のない生活を普段送ってるからか、嬉しそうに笑う蓮夜の反応を見てホッと安堵し、響と未来はお互いに顔を見合わせて笑い合った。

「……それにしても、折角見舞いに来てくれた上にこんな貴重なものまで貰っておいて、全然もてなしも出来ず申し訳ないな……何か、お返しになれるものが荷物に入っていないか……」

「え、あつ……！ 気にしないで下さい！ 私達はただお礼をしに來ただけですから、そんな……！」

「いや、此処までしてもらって何も返さないというのは俺も気持ちが悪い。せめて土産になりそうな……ああ、そういえばこれがあつたな」

と、蓮夜はベッドの脇に掛けてある私物の荷物の中を漁り、其処から何かを取り出して二人に差し出すようにベッドテーブルの上に置いていく。それは……



「……………え？サバ、缶……………？」

「え、ええつと……………こつちはカニ缶に、いわしの缶詰……………？」

そう、蓮夜が二人に差し出したものの正体は、何故か大量の缶詰の品々だったのだ。

サバやいわし、ツナや焼き鳥系など種類豊富な缶詰の山々を目の当たりにして響と未  
来が目を白黒させる中、蓮夜は心做しかふんすつ、と得意気に胸を張る。

「どれでも好きな物を持っていってくれ。其処にあるのは他のと違って、1000円以上  
はする高級なモノばかりだ……………。特にそのカニ缶はスーパーのタイムセールで勝ち  
取った最後の一個で、味は絶品だと野宿先で知り合ったホームレスの先輩もお墨付きの  
品物。貴重な甘味を貰った以上、今の俺が返せる最大のお返しはそれぐらいしかない  
が、それでももし良ければ……………」

「……………い、いや、ちよ、ちよつと待って下さい！あの……………そもそもの話、何故缶詰なんで

しょうか?というか、どうしてこんなに缶詰が一杯……?」

「?何故、と言われても……缶詰は長期保存が効くから長持ちする上、サツと食べて食事に時間を掛けないだろう?仕事以外の空いた時間は一秒でも多くイレイザーの探索に使いたいから、毎日缶詰が投げ売りされている最寄りのスーパーには大変助けられるんだ」

「え……あ、あの、違ってたらごめんなさい……もしかしてですけど、蓮夜さんって食事はいつもこの……?」

「ああ。これ(缶詰)だけだ」

お前達も食べるか?などと呑気に言いながら、何処から取り出したのか若干錆び付いた缶切りを取り出す蓮夜。一方で響と未来は蓮夜の衝撃的な食生活を知り揃って唾然としていたが、先にハツと我に返った響がベッドテーブルに身を乗り出し声を荒らげた。

「だ、駄目ですよそんなのっ！ちゃんとき美味いごはんを食べないとっ……！……！……！こんな  
ばっかり食べてたら身体壊しちゃいますよっ?!」

「?……いや、しかし、味はしっかり付いているしこれめちゃんと美味いんだぞ……?そ  
れにさつき言ったように食事あまり時間を掛けずに済むし、そういった点も効率的で  
……」

「効率とかそういう問題じゃないですよ！食事はもつと美味しく、楽しくでないこと！こ  
んな質素に時間を気にして片付けるものじゃないですから！」

「……?食べる事に楽しみなんで必要あるのか?」

心底不思議そうに首を傾げる蓮夜。そんな蓮夜の反応に響も一瞬呆気に取られてし  
まうが、やがてガクリツとベッドテーブルに両手を付いて肩を落とした。

「うう……最初に出会った頃は都市伝説のヒーローって感じで不思議な人だなーって  
思ってたのに、知れば知るほどまさか此処まで自分を省みない無頓着な人だったなんて

……」

「いや、無頓着と言われる程では……それに食べる楽しみは分からないが、自分が作ったモノを食べてもらう楽しみならちゃんと分かるぞ……うちは顧客のニーズや流行りに応えるのが仕事だからな、手応えを感じた時は俺も内心達成感を覚えて……」

「そういう事じゃないんですっ！怪我の事もそうだけど、もっと自分を大事にして欲しいというか、そういう喜びを自分自身にも向けて労わって欲しいっていう話で……！」

「今も十分喜んでるぞ。100円以上の缶詰を開けた時とか特に」

「そお〜〜ゆ〜〜ことじゃなくてえ〜〜っ……!!」

身振り手振りを使って蓮夜に自分の身体をもっと労る事を伝えようとする響だが、いまいちピンツと来ない様子の蓮夜の反応を見てテーブルに突っ伏してしまい、見兼ねた未来が缶詰を一つ手に取って口を開いた。

「ええつとですね……響が言いたいののは、こういうのばかり食べるのは良くないとか、もつと健康に気を使って欲しいって事なんじゃないかなって。実際缶詰って基本的に塩分が多いらしいから、ちゃんとお野菜とかそういうのも取らないと栄養も偏るし、身体にも悪いですから……」

「成る程、そういう事か……なら心配はいらない、たまにだが缶詰以外のモノもちゃんと摂取するように心掛けてる」

「あ、そうなんです。それなら……」

「ああ、時々このゼリー飲料で一日の食事を済ませる日もあるから心配ない。野菜味もあるから必要な栄養も取れるし、時間も取らないからより効率的で助かるんだ」

「もつと酷くなってる?!」

食べ物どころかちゃんとした固形物ですらなくなったゼリー飲料を取り出して胸を張りながら語る蓮夜。そのあまりにも酷い食への無頓着ぶりに未来も衝撃を受けて驚

きを隠せない中、隣で二人の会話を聞いていた響が突然身を起こしながらパンツ！とテーブルを叩いた。

「やっぱりこのままじゃ良くないです……！蓮夜さん！この入院を機会に荒んだ食生活を改めましょう！私と未来もお手伝いしますから！」

「……………え……………？」

「え、ひ、響?!いきなり何言って……………！」

「だってあまりに酷過ぎるしほつとけないよこんなの！これからは一緒に戦う事になるんだから、仲間の私達が今の内に悪い所を指摘して直させないと！此処でちゃんとさせないと、蓮夜さんがもつとダメダメになっちゃうよ！」

「……………ダメダメ……………？」

ビシィッ！と蓮夜に人差し指を向けながら戸惑う未来に熱弁する響。一方で蓮夜は

響から「ダメダメ」と評されて少なからずショックを受けてしまうが、響はそんな反応を他所に蓮夜の方に振り向きながらベッドテーブルに身を乗り出し、グツ！と拳を握り締める。

「入院中はちゃんとした病院食も出るだろうし、退院後は私達と一緒に美味しいものを食べに行きましょう！偶におかずとか作って差し入れに持っていきますし、ちゃんとした食生活を送っていけば今までの荒んだ生活も自然と改善されていく筈ですから！」

「……あ、いや、別に其処まで面倒を見てもらう必要は……俺自身特に今の生活を不憫には思っていないし、コレだけでも十分満足して……」

「ダメです！今後缶詰は一切禁止ですっ」

「」

（す、すごい……缶詰を禁止って言われただけで、この世の終わりみたいな顔してる……）

實際今の生活の生命線の殆どと言っても過言ではないからか、缶詰の禁止を言い渡された蓮夜はイワシの缶詰を両手に持ったまま顔面蒼白し絶句している。そんな蓮夜を見て未来は若干不憫さを覚え、響も流石に一切禁止は言い過ぎたと思ったのか、若干口をもごつかせながら言葉を続けていく。

「え、つと……流石に二度と食べちゃダメって言いませんけど、せめてちゃんとしたごはんを食べられるようになるまで控えましょう？ただでさえ怪我の事もあるし、これ以上身体に負担が掛かるような事になったら本当に心配になっちゃいますから……」

何も蓮夜が憎くて此処まで言ってる訳じゃない。寧ろその逆で、蓮夜は改竄された世界で一人きりだった自分を支えてくれて、未来や仲間達との大切な繋がりを取り戻してくれた大事な恩人だ。

故に自分の傷や身体の健康を全く気にしない蓮夜を見るとどうしても口煩くなつてしまうし、その身体で無茶をされると本気で心配になるし居ても立ってもいられなくなるのだ。



だからどうか自分を労わってあげて欲しいと願う響の心境を少なからず察したのか、蓮夜は両手に握る缶詰をジツと見つめると、やがて薄く溜め息を漏らしながら控え目に頷き返した。

「そうだな……お前の忠告を聞かなかつたせいで今もこんな状態になってしまつてる訳だし……分かつた。暫くの間、今の食生活は改める……」

「ほんとですか！」

「ああ。……だからその代わり、今ある分の缶詰だけはちゃんと食べ切らせて——」

「ダメです。缶詰は暫く没収です」

「——」

（す、すごい切なそうな顔してるっ……）

もしかするとただ単純に缶詰が好きなだけではなからうか、バツサリと切り捨てる響を物悲しげな顔で見上げる蓮夜を見て未来は苦笑いを浮かべながらそんな考えが過ぎる。その後、缶詰を全部没収した響と未来が帰るまでの間、蓮夜は心做しか寂しそうというか、悲しそうな顔をずっと浮かべていたのであった――。



「――蓮夜君の身体に異常が？」

「はっ」

一方その頃、S・O・N・G. 本部内にあるエルフナインの研究室にて、弦十郎とエルフナインがホワイトボードを前に何やら神妙な様子で話し込む姿があり、弦十郎はエルフナインから告げられた蓮夜の身体に関する「異常」というワードに眉間に皺を寄

せて怪訝な表情を浮かべていた。

「それはつまり、蓮夜君の怪我の具合は想像以上に酷いという事か？俺も経過報告などは担当医から一通り聞いてはいるが、其処まで深刻とは一言も……」

「いえ、異常というのは蓮夜さんの怪我の事を指してる訳ではありません。……寧ろ、そちらの方がまだ事は穏便に済んだかもしれないです」

「……？…どういう事だ？」

エルフナインの話の意図が汲み取れず、弦十郎の怪訝が深まる。するとエルフナインは手に持っていた茶封筒から数枚のレントゲン写真を取り出し、ホワイトボードに写真を貼り付けていく。

「これは昨日、本部に運び込まれたばかりに撮影した蓮夜さんのレントゲン写真です。そして右側が、今朝の検査の際に撮ったもの……何か違いが見られませんか？」

「?.....?!罅が入っていた筈の負傷箇所が、幾つか消え掛かっている……?」

ボードに貼り付けられた蓮夜の二枚のレントゲン写真を比較し、その相違点に気付いた弦十郎の顔が驚きに染まる。

昨夜撮影した左のレントゲン写真には腕や足の骨、肋骨などに痛ましい無数の罅が入っていたが、今朝撮った写真にはそれらの箇所にあつた筈の罅が小さくなっており、中には殆ど治り掛けているモノも見られたのだ。

「ご覧頂いた通り、通常なら完治するまで数ヶ月は掛かるであろう筈の怪我が、昨日の今日で此処まで回復が進んでいました。外的な治療薬の投与も殆ど無しに、蓮夜さん自身の治癒能力だけで……」

「そんな馬鹿な……特別な要因も何も無しに、一晩で此処まで回復したと言うのか?」

有り得ない、と弦十郎は戸惑う。人の身で異常な回復力と聞くと、嘗て響がその身に宿していた聖遺物（ガングニール）の力で欠損した左腕を修復していた記憶が過ぎるが、

あれはあくまで聖遺物由来の力によるモノ。

ただの人間の自然治癒のみで、しかも短期間で此処まで傷を治せるなど確かに普通ではない。

困惑を露わに弦十郎が顎に手を添えて二枚のレントゲン写真をジッと見つめると、エルフナインが脇に抱えていた液晶パッドを手にして画面を操作していく。

「僕もそう思い、蓮夜さんの身体を改めて詳しく調べ直してみたいです。……そうしたら、蓮夜さんの身体に幾つか不審な点が見られました」

「不審な点……?」

問い返す弦十郎に、エルフナインは無言で頷きながら液晶パッドの画面を弦十郎に向けて。其処にはレントゲン写真同様、蓮夜の人体図が映し出されており、全身のあらゆる箇所に赤いマーキングが記されていた。

「解析を進めてみたところ、蓮夜さんの全身の様々な部分に人の手が加えられてる痕跡が多く見られました……その影響か、視覚や聴覚、筋肉と言った身体機能が並の人間と掛け離れた発達をしており、身体能力が大きく底上げされているようなんです。異常な速さの回復力も、恐らくこれが関係してるんじゃないかと……」

「人体に、人工的に手を加えられた人間……つまり、彼はサイボーグ、改造人間の類かもしれないと……?」

「其処まではまだ分かりません……ただ僕が一番疑問を感じてやまないのは、蓮夜さんの脳髓の方なんです……」

「脳?」

再度頷き、エルフナインは液晶パッドの画面を切り替えて弦十郎に見せる。其処に映し出されるモノを目にし、弦十郎は驚きで目を見張り絶句してしまう。

「これはっ……?!」

「……見ての通りです。これが何かの間違いでなければ、今蓮夜さんが普通にしていること自体、”まず有り得ないんです”……本来ならもつと以前に死んでいても可笑しくない……」

「つ……いや、しかし、これはつ……まさか、彼が記憶を失ったのはこの影響で……？」

「いえ、恐らくその件とコレは関係してないと思います。仮にコレが関係してたとすれば、今頃記憶の喪失だけじゃ済まない……彼の人格や思考、感情の消去……いえ、此処まで酷いと”脳死”していたとしても可笑しくありませんから……」

そう語るエルフナインの表情が暗く沈んでいく。無理もない。これは蓮夜の過去にも関わる重要な痕跡かと思われるが、同時に恐らく、彼の過去にとって最も深い闇の側面だ。

その記憶を持たない今の蓮夜に果たしてこの事実を伝えるべきか否か、エルフナインが自分だけを此処へ呼んだのは恐らくその相談をする為であろうと瞬時に察した弦十

郎は腕を組んで険しい表情を浮かべ、液晶パッドの画面に視線を向けていく。

(我々と出会う以前から、ライダーシステムなんていうシンフォギアにも匹敵する力を  
持つて戦いに身を投じていた彼だ……その失われた過去にも唯ならぬ何かがあつても  
可笑しくはないと思つていたが……蓮夜君、君は一体……)

液晶パッドの画面に映るのは、脳のレントゲン写真。

其処には脳の大部分が人工的に手を加えられた痕……普通の人間なら先ず生きてい  
られるとは思えない、最早一から作り変えられていると言つてもいい無数の痛ましい”  
手術痕”が残る蓮夜の脳を見つめ、弦十郎は口元を片手で覆いながら複雑げに眉を顰め  
てしまうのであつた。



雪音クリス編（前編）

第五章／不協和音×BANGBANG GIRLの憂鬱

「――奴が生きてただってっ?!」

薄暗い廃墟ビルの中間フロア跡地。床に無数のガラス片が散乱し、薄汚れたデスクなどが辺り一面に転がる中、先のフロッグイレイザーに関する改竄の件についてデュレンにクレンと共に呼び出されたアスカが彼から聞かされる話の内容に驚愕を隠せず、動揺を露わにする姿があった。

「事実だ。奴は貴様から逃げ延びた後、合流した立花響に『記号』を与えてイレイザーと共に撃破し、お前達が行った改竄を見事打ち消したそうだ」

「そんな、まさか……!」

「ああ、全く本当に最高だ。血気盛んなお前にこの件を任せられた結果、俺達に対抗出来る戦力が向こうに一人増えた訳だからな……実に素晴らしい結果だ。おめでとう、アスカ」

「っ……！てめえっ、おちよくってんのかよデュレンっ！」

パチパチッと、長らく放置された錆び付いたパイプ椅子に足を組んで座ったままやる気のない拍手を送るデュレンのふざけた態度にアスカが苛立ちを覚えて詰め寄るが、デュレンはそれに対して臆する事なく、冷やかな眼差しをアスカに向けて淡々と口を開く。

「現状を鑑みれば嫌味の一つも言いたくなるというものだ……物語の改竄は俺達にとつて有利なフィールドを作る強力な武器だが、それは同時に我々という癌の存在をこの世界に自ら知らしめる諸刃の剣でもある。そんな切り札を俺達に無断で切った挙句に失敗し、脅威を増やしただけとあつては世話もない。おかげで奴と装者達が合流した今、改竄の力で影から奴らを始末するという手も使えなくなつた訳だから……貴様に僅かでも期待していた己の馬鹿さ加減に呆れて涙が出てくるよ」

「このっ……！」

「ハイハイ、二人とも其処までにしところよ。デュレンも煽るような事は言わないでさ、ね？」

肩を竦めるデュレンの言葉に思わず手が出そうになるアスカを、クレンが横から割って入って二人を引き離す。しかし、クレンは溜め息を一つ漏らしながらアスカを見つめる。

「でも、言葉は悪いけどデュレンの言ってる事も間違っていないと思うよ。改竄を施して失敗した以上、暫く力は使えなくなる。立て続けに物語の改竄を行えば僕達の存在が見付かって、問答無用で物語から追放され兼ねないからね。そうなったらデュレンはともかく、僕や君、他のイレイザー達は抗う事は出来ない訳だし」

「っ……わーってんだよそんなのっ……！だから保険を用意して俺が囿になったつてのにつ、あの野郎が勝手に立花響を襲って先走ったからっ……！」

「貴様が選んだ人選で監督も碌に出来なかったのであれば、それは貴様の過失だろうよ。……ともかくほとぼりが冷めるまでの間、物語の改竄は行えない。その間、貴様にはこちらの仕事を手伝ってもらおうぞ」

「……仕事……?」

アスカが訝しげにそう聞き返すと、デュレンはスーツの内ポケットから一枚の写真を取り出し、アスカに目掛けて投げ渡した。

「こいつは……?」

「つい先日覚醒したばかりのイレイザーだ。覚醒して以降の経過観察を続けた所、他のイレイザー達にはなかった“兆し”がソイツに見られた」

「兆し……? お前が前から言ってた、ノイズ喰らいのイレイザーが進化する際に出る前兆って奴か?」

「今の時点ではまだ断定出来ん。それを含めて確かめる為にも、お前にはソイツのお守りをしてもらう。また空振りの可能性もあるが、もし万が一当たりなら俺達の下に連れ帰って来い……必要なデータを取る前に、また貴様の独断で台無しにされては叶わんからな」

「ツ……一々嫌味が絶えねえヤツめっ」

「先の失態を思えばこの程度で済ませるだけ有情に思つて欲しいな……次に動く際にはこちらから指示を出す。それまで勝手に動くなよ」

「……チツ……」

横目で睨み付けながら念押しで釘を刺すデュレンに舌打ちし、アスカは受け取った写真を手を苛立ちを露わにその場を後にしていく。

「行っちゃったなあ……ちよつと言い過ぎなんじゃない？独断行動で失敗したって点は確かに悪いと思うけど、他の研究が順調に進んでる今となつては、別に彼と装者達が合

流した所で大した障害にはならないでしょう?」

「だとしても、奴の独断行動は目に余る。同じ轍を踏むのを防ぐ為にも、今の内に釘を刺しておく必要はあるだろう……そんな事より、お前に任せた例の件はどうなっている?」

「海の向こうの件? そっちは今のところ順調だけど、想定よりも成長の速度が速いかな……今は僕の力で何とかごまかしてるけど、正直いつ蓮夜君に気配を悟られても可笑しくはないと思うよ。まあ一応国外な訳だし、バレてすぐにどうこうって事にはならないだろうけどさ」

「成る程……ならそちらから気を逸らす陽動も用意せねばならないな……お前にも何れこちらで動いてもらう事になるだろうが、それまでは向こうで奴を隠し続ける。その後は俺の方で見る」

「ハハッ、相変わらず人使いが荒いねえ……でも、彼らの事はホントに放っておいていいのかい? 立花響がクロスの記号を得たという事は、恐らく他の装者達も芋ずる式に記

号を手に入れていく筈だ。そうなら遅かれ早かれ、装者全員が僕達に対抗出来るようになってしまう……手を打つなら今の内だと思っただけ？」

薄汚れたデスクの上にヒョイッと腰を下ろし、蓮夜と彼に手を貸す響達が脅威になる前に排除する事を薦めるクレンだが、デュレンは徐にパイプ椅子から立ち上がってズボンのポケットに両手をつ込み、感情の読めない無表情のままクレンの方に振り向く。

「黒月蓮夜はともかく、改竄の力も無しに装者達を手を掛けるのはリスクが大きい。仮に始末自体が上手く言ったとしても、その後の隠蔽工作が叶わねば俺達の存在が明るみに出された挙句、奴の仲間がこの世界の外から駆け付けてくる危険性もある。……今はまだその刻ではない」

「……ふーん。ま、君がそう言うんならこつちも従うだけだぜ」

「……不服そうだな。何か引つ掛かる事でも？」

「いいや？僕達のリーダーは君なんだ。その君が止めろと言うなら僕達は止めるし、や

れと言われればやるだけだ。……それが僕達全員の目的に辿り着く一番の近道だと信じてるからね」

「……………」

肩を竦めて戯けるように笑いながらそう語るクレンだが、デュレンはやはり表情一つ変えず何も答えない。そしてそのまま無言で踵を返してその場を後にするデュレンの背を見送り、クレンは飄々とした今までの様子からふと真剣味を帯びた表情に変わっていく。

（今はまだその刻ではない、ねえ……彼を罠に嵌めて最初に倒した時、記憶を失った彼が生きていると分かった時、立花響が改竄に侵された時……チャンスなら幾らでもあった筈なのに、口では排除すると言いながら一向に動く気配を見せない……本当にそのつもりがあるのか？）

今ならまだ自分達側に有利な状況で事を進められるにも関わらず、何時でも対処出来る相手を前に胡座をかいているようにしか思えないデュレンの方針にクレンも懐疑的



な思考に浸り、デスクの上へ上げた膝の上で頬杖を着いていく。

（アスカの嗅覚も馬鹿には出来ないかもね……まあでも、今はまだ動く刻じやないのはこちらにとつても同じだ……その間に、彼の狙いが何処にあるのか探りを入れる必要がある……）

恐らく、いや、十中八九デュレンは自分達にまだ何かを隠している。それが何なのかを突き止めなければと密かに画作し、クレンはその身を水と化して地面に散らばり、そのまま地面に浸透し何処かへ姿を消したのであった。



「——えーつと、確かこの辺に……あ、あつたあつた！確かこの歩道橋を渡つてすぐだつたハズ！」

「ほほう？つまり目的地はすぐ其処……！ならば一番乗りはアタシが頂くデスよー！」

「ああ?!ま、待ってよ切歌ちゃん！」

「響！それ一つ前の奴！蓮夜さんのマンションはもう一つ先の歩道橋を行った先だから  
！」

「へ？あ、そ、そつか。ごめんごめん、ついうっかり……！」

「切ちゃん、もう半分以上渡ってるけどそっちじゃないんだって、戻ってきてー」

「ええ?!」

——フロツグレイザーの事件が収束してから約一週間半が経過したある日の休日。  
日。

先日の戦いの際に皆に忘れられたのがまるで嘘だったかのように元の関係に戻った

響、未来、切歌、調の四人は現在先の一件からS・O・N・Gの民間協力者となり、弦十郎の計らいで用意され、つい先日引越したばかりのマンションで暮らす蓮夜の家に遊びに向かう道中にあつた。

多くの車が橋の下を行き交う歩道橋を響の早とちりで渡り掛けたりなどプチトラブルを挟みつつ、少し遅い蓮夜への引越祝いのお土産が入ったビニール袋を皆で手に談笑しながら歩く中、調がふと口を開いて件の蓮夜の事を話し出した。

「それにしても、蓮夜さんが素直に司令が用意したマンションに引越したのはちよつと意外でした。てつきり前に話した時みたいに、周りを巻き込めないからって断るんじゃないかと……」

「あ、それアタシも思ってたデス。前はなんと言うか、警戒心が強かったというか……誰も頼らない？みたいな感じに見えたから、司令からその話を聞いた時はちよつと驚いたデスよ」

「ああ、うん。本当は蓮夜さんもそのつもりだったみたい……でも、司令がその辺りの不

安要素を自分達が何とかしてくれるって言うてくれたり、後は私と響が説得してって感じで聞き入れてくれたんだよ。このままもし冬とか来たら、野宿生活のままじゃ絶対に凍え死んじやいますから！って言うて」

「野宿生活って……や、やっぱり今まで宿無しで生活してたんデスねっ」

以前にも「身寄りのない蓮夜は普段どんな生活をしているのか？」と皆で話していた際に話題に出た事があったが、まさかほんとに野宿生活をしていたとは思っていなかった切歌が顔を若干引き攣らせていると、未来の隣を歩く響が三人の話に加わっていく。

「でもこれで何時でもこつちから会いに行けるようになる訳だし、未来と作った献立も持って行きやすくなるから私達も大助かりだよー。毎回お店の方にまで持っていくのは流石にアレだし……」

「ほえ？……も、もしかしてお二人、蓮夜さんにごはんを作ってるデスか?!」

「そういえば、未来さんの持つてる袋に入ってるのってタッパー入りのモノが多いよう

な……」

「あ、えつと、まだ二人に言っただけ？ 実は前に響とお見舞いに行った時……」

「みんなあー！ 早く早く！ 蓮夜さんち、もうすぐ其処だよー！」

驚愕する切歌、じーつと未来の持つビニール袋を見つめる調に以前響と蓮夜のお見舞いに行った時の事を話そうとした矢先、響の大声を耳にして未来は振り返る。

其処にはいつの間にも先へ進んでいたのか、歩道橋の階段の中腹まで登っている響が未来達に手を振りながら歩道橋を渡った先を指で差す姿があり、その指差す先の方を見ると、四人の目的地である蓮夜の引越し先のマンションが目と鼻の先にまで見えていた。

「おお、思ってたより立派なマンションデスよ?!」

「外観も綺麗だし……家賃も凄そう」

切歌と調が驚嘆の声と共に見上げるマンションの見た目は、白と黒のツートンカラーが映える八階立て。

所謂高層マンションと呼べる立派な造りが遠目からも分かる外観をまじまじと眺めながら歩道橋を渡り、反対側の歩道に出てマンションの前まで辿り着いた四人はエントランスホールを通り、そのままエレベーターに乗ってボタンを押し上の階に上がっていく。

「此処のマンションは警備システムもしつかりしてて、警備会社がS・O・N・Gとも関わりがあるらしいから、何かあればすぐにS・O・N・Gにも異常が知らされるようになってるんだって。だからもしもの時はすぐに避難勧告が出せるし、本部でモニターも出来るからレイザーの反応もいつでも検知が出来るみたい」

「そうなんですネ……」

「でも、どうしてお二人そんなに詳しいんですか？もしかして前に来た事でも……？」

「うん。蓮夜さんが此処の物件を紹介された時、実は私と響もたまたま一緒にいて一度だけ付いていったの。その時に今の話も聞いてただけど、私達はその後他の用事があつたから、部屋の中まではまだ知らなくて……」

そんな話を交わす中、目的の階層に到着した音がエレベーター内に響き渡る。扉が左右に開かれ、一先ず話の続きは降りてからにしようとする四人がエレベーターを降りて目の前に視線を向けると、

「——黒月さんさあ……頼むからいい加減学習して下さいよおつ。もうこれで十一回目ですよ、十一回目！」

「面目ない……決してわざとではないんだが、つついっつかりして……」

「いやもううつかりとかのレベルで済む話じゃないですよ！うちは玄関の扉がオートロックになってるから、一回閉まったらカードキー無しじゃ締め出し食らうって何回も

説明したじゃないですか！」

「申し訳ない……此処までハイテクな設備はどれも前の生活にはなかったものばかりで、中々慣れず……」

「それだけならまだいいですよ？事情は軽く伺ってますし……でも、強引に扉開けようとしたらセキュリティの警報機が鳴るから無茶な真似しないでって注意したでしょう！何でうちに連絡する前に扉こじ開けようとしてんのアナタ?!」

「いや、ウン……事ある毎に何度も呼び付けてしまい申し訳ないとも思つて……もしかしたら完全にロックされていなくて、ちよつと扉を引けば実はイケるのではないかと僅かに期待して……」

「それで警報機ビービー鳴らしてたら世話ないでしょーがよ?!寧ろどうやったのこれ?!完全にロックされてる扉をこじ開けるとか並の力じゃ無理ですよ！一体どんな馬鹿力してんですかアンタア?!」



「どんな、と言われても……こう……普通にドアノブを掴んで、そのまま軽く引つ張ったら扉が開いて……」

—ガシヤアアアンツ!!—

「オイイイイイイイイツ?!なに軽い調子でまた扉こじ開けてくれてんのアンタアあああああアツ?!ほらアああツ!!また警報機鳴り出したじゃないのよどうしてくれんのさアあああああアツ?!」

「[[[[[.....]]]]」

……其処には四人の目的地である部屋の前にて、何やらマンションの管理人らしき男性からお叱りを受ける額や腕に白い包帯を巻いた男、黒月蓮夜が自分の部屋の扉を強引にブチ開けてセキュリティの警報機を鳴らしてしまう姿があったのだった。

ビービービーツ!と、蓮夜が扉を無理にこじ開けたせいで異常を報せるけたたましい警報機が廊下中に鳴り渡る。その音を聞いて今度は何事かと、迷惑そうな顔の住人達が一斉に部屋から顔を出す。

アーツ!!と、目の前で立て続けに起こる事態にいよいよキャパオーバー気味な管理人が頭を抱えて悲鳴を上げる中、この事態の元凶である蓮夜も焦った様子でこじ開けた扉を何度も開け閉めして警報機を止めようと試みるが、一度作動したら簡単には止められないのか音は一向に鳴り止む気配がない。

そんなカオスな状況を前に、一度エレベーターから降りた響達は暫し呆然と固まった後、無言のまま後ろ歩きで再びエレベーターに乗り込み、扉を閉じて何も見なかったかのようにスーツと下の階へ一度避難したのであった。

# 第五章／不協和音×BANGBANG GIRLの憂鬱

①

—symphony・405号室—

——八階立て高層マンション『symphony』の一室、405号室。

この世界に来て記憶を失って以降、イレイザー達の襲撃を恐れて出来る限り人目を忍ぶ宿無し生活を送っていた蓮夜に、晴れてS・O・N・Gの協力者となってくれた計らいとして弦十郎達が与えてくれた住居だ。

間取りは2LDK、家賃は七万ほど。その外観から察する通り部屋の中も綺麗で設備が新しいのは勿論、建物の構造も強く、6帖半の部屋が三つ、最新の防犯セキュリティまで備わっているという至れり尽くせりぶり。

だがそれ故に、蓮夜も初めてこの物件を紹介された際にはあまりの多機能さと広さ、そしてそれ相応の家賃の高さに「無償でこんな高額な所には住めない」と申し訳なきが勝つて最初は断ろうとした。

しかし、此処のマンションを運営する管理会社にS・O・N・Gが一枚噛んでる事や、此処の防犯設備なら例えイレイザーの襲撃があつても即座に対応・対処が可能な事。何よりもその頑丈さから周囲への被害も他よりも抑えられる利点がある。

敵に居場所がバレていて、改竄の力で一網打尽にされるかもしれない危険性がある。S・O・N・Gの本部で寝泊まりするよりも、まだ敵に居場所がバレていない此処は蓮夜や周囲にとつても安全圏だろうと薦める弦十郎と話し合い、悩み抜いた末に納得して此処のマンションと契約し、一週間前から住み始めたというのが簡潔な経緯だ。

此処の管理人にも軽い事情は通してあるらしく、挨拶を交わした最初の頃は人当たりも良く、困った事があれば何時でも頼つて下さい！と入居時にも言ってくれて、慣れない暮らしでも上手くやっていけるかもしれないと、一週間前までは思っていたのだが

……

「——すまない……………来てもらって早々見苦しい所を見せてしまって……………」

「い、いえ、大丈夫ですよ！私達も今さつき来たばかりでしたし、全然気にしてませんか……！」

「まあ、ホントは落ち着いた頃合を見計らってずっと影から見てたデスけどね……………」

「切歌ちゃん……………！しいっ！しいっ……………！」

……………そんな予想とは裏腹に、最新の設備を使いこなせずに自身の不注意から起こしてしまった先の騒動の後、蓮夜はいらぬ騒ぎで迷惑を掛けてしまった管理人やご近所の方々にも謝罪して回り、漸く事を終えてへとへとになりながら部屋に戻ろうとした所で、つい今しがた来たばかりの（体を装った）響達と部屋の前でバッタリ会っていた。

管理人からこつてり絞られたのが余程堪えているのか、せっかく遊びに来てくれたのにとっても人様にはお見せ出来ない様を見せてしまったと若干やつれた顔で申し訳なさ

そうに頭を下げる蓮夜だが、それに関しては触れないであげた方が蓮夜の為だろうと、響達は何も見なかった振りをして優しい嘘を吐く事にした。

その嘘を信じたのか、或いは彼女達の気遣いを察しているのか、蓮夜は「……そうか」とどちらとも取れる眩きを漏らしながら管理人にマスターキーで開けてもらった部屋の扉を開け、四人を中に招き入れていく。

「今朝のゴミ出しでバタバタしたせいで少し散らかってると思うが、ゆっくりしていただく……とは言え、客人を饗せるような大した物は何も無いんだが——」

「おお、では早速お邪魔するデスよ！今度こそ一番乗りは頂くデースー！」

「あ、ちよつと切ちゃん……！」

「ま、待つてよ切歌ちゃん！」

初めて訪れる高層マンションの新居を前にマンションが上がっているのか、子供のよ

うにはしゃいだ切歌が我先にと靴を素早く脱いで部屋の中へ上がり込み、響達もその後を追うように玄関をくぐって切歌の後を追いつけるが、三人が追いつく前にリビングへと続く廊下の先へ進んだ切歌が扉を開け放った。

「お邪魔しますデース……って、ほんとに何にもないデースよ!」

快活に扉を開けてリビングに足を踏み入れた切歌が開口一番に口にしたのは、ガビーン! などという擬音が聞こえて来そうな驚愕の声だった。そんな彼女の反応に響達も怪訝な様子を浮かべるも、切歌の背から顔を出し、その理由をすぐに理解した。

四人が目にしたリビングは広さ的に10畳以上はあるだろうか、室内のフローリングの床が窓から差す陽射しを受けて反射しており、隣接してるカウンターキッチンの方には食器棚や冷蔵庫が並んでいる。

ただ、リビングの方にはカーペットも何も敷いてない床の上にテーブルが。隅っこには薄型のテレビが台も何もない床の上に寂しくポツンと置かれているだけで、それ以外の家具らしい家具は一切見られない。強いて上げるとすれば、畳まれた洗濯物が積み重

なつて部屋の隅に置かれているぐらいだ。

「すんごいガラガラ感……え、確かS・O・N・G・からイレイザーを倒した謝礼金貰つたつて前にも話してましたよね？他の家具とかは……」

「ああいや……謝礼金は確かに貰つたんだが、ここ最近検査の為に本部に入り浸りでな……中々時間を取れなくて、家具を買い揃える暇もなかつたんだ……そもそもそれ以前に、家具とかどうやって選べばいいのか良く分からない……」

「ええー……」

ズウーンツと、ホームレス生活が板につきすぎた弊害で部屋に合う家具すらも分かつたらず気落ちする蓮夜に、響達も何とも言えない表情を浮かべてしまつた中、調は今の蓮夜の話の聞いて顎に手を添え小首を傾げた。

「検査……そういえば蓮夜さん、怪我が完治するまで数ヶ月は掛かるつて聞いてたのに、もうすっかり治り掛けてますよね？包帯の数も前に見た時より減つているし……」



落ち込む蓮夜の腕等をジッと見つめ、調は一週間前の蓮夜の姿を思い返す。

あの時はギブスを巻いていて松葉杖も突かなければならない程の重体だったのに、約一週間半が経った今ではそれも取れて包帯を軽く巻いているだけで良い状態にまで回復し切っている。

普通なら有り得ない回復速度に響達も最初は驚いて疑問を抱かずにはいられなかったが、当の蓮夜はキッチンの方に移動しながら人数分の湯呑みを食器棚から取り出し、バイト先の店長から差し入れて貰った新茶のパックを開封していく。

「恐らくベルトかカードの力の恩恵か何かなんだろう。俺が最初にイレイザーと戦った時も、力を上手く使いこなせずに苦戦して怪我を負ったが、ベルトを巻いたまま疲れ切って眠った翌朝には傷の殆どが治り掛けていたしな……他にそれらしい理由も思い付かない以上、ベルトかカードにそういった機能でも備わっているとは思えない……。俺が入院は必要ないと言った訳、分かっただろう？」

「……でも、それってほんとに大丈夫なんですか？ベルトやカードの機能で身体が治るなんて普通じゃ有り得ないですし、もし何か副作用とかあったら……」

「……まあ、エルフナインにベルトの構造を調べてもらった際にも、ブラックボックスになつている部分があつて全部は調べ切れなかつたらしいな……分らない事は未だ多いが、だとしてもイレイザーと戦う以上は今後もきつと傷は絶えない。奴らと戦い続ける為なら、使えるものは何だつて使わせてもらうさ……」

敵はそれぐらいの無茶を通さねば勝てる相手ではないと、先の事件でのイグニスイレイザーとの戦いで嫌というほど思い知らされた。

もし仮に奴の他にも仲間がいるなら、まず間違いなく奴と同じ神話型のイレイザーである可能性が高い。ならば副作用があろうとなかろうとも、使えるものは有り難く使わせてもらうと割り切る蓮夜に対し、響は「むう……」と納得し切れてない不満顔を浮かべ、未来もそんな響を見て苦笑いしつつ持参したビニール袋を蓮夜に差し出した。

「まあ、その辺りの話はまた後にして……取りあえずコレ、今日の分の献立と、私達から

の引越しのお祝いです。美味しそうなお菓子のお店があったので、良かったら」

「ん、そうか……何から何まですまない……お返しと言うのもアレだが、お茶も容れたし、良ければ皆も一緒に食べていってくれ」

「ありがとうございます……切ちゃん、今からお茶とお菓子運ぶから、布巾でテーブルふいてくれる？」

「りよーかいデース！」

「じゃあ、タッパーに入ってるのは冷蔵庫に入れておきますね……って、冷蔵庫の中もガラガラっ！」

「そっちは俺がやろう。客人に其処までやらせるのは忍びない」

「あ、なら私もお手伝いします！未来はお茶をお願い」

「そう？じゃあ、お願いしようかな」

そう言つて人数分のお茶を乗せたトレイを蓮夜から受け取り、未来はお菓子を詰めた箱をビニール袋から取り出した調と共にリビングの方へ移動していく。

そして切歌がせっせと布巾で綺麗に磨いたテーブルの上にお茶とお菓子をセツティングしようとした直前、布巾を動かす拍子に切歌のズボンの後ろポケットからポロツとカードのような物が落ち、それに気付いた調は床に落ちたカードを拾つて切歌に差し出した。

「切ちゃん、カード落ちたよ。はい」

「ほえ？ああつと、危ない危ないつ。ありがとーデス調！危うく大事なカードを失くすところでしたっ」

「カード……あ、それって確か、前に蓮夜さんが皆に渡してた奴だよね？」

「はい……いつカードに力が宿るか分かりませんから、普段から肌身離さず持つてるんです」

「何せ現状、イレイザーに太刀打ち出来る唯一の対抗策って話デスからね。アタシ達が戦えるようになるかは、コイツに掛かつてる訳デスから！」

そう言いながら切歌は調から受け取った絵柄が何も描かれていないカード……以前響が蓮夜から貰ったのと同じブランドカードを見せると、調もスカートのポケットから切歌のと同じブランドカードを取り出したのを見て、未来はふと一週間半前に蓮夜から聞かされた話を思い出していく。



一週間前、S・O・N・G・本部……。

「——栞……？響君から生まれた、そのカードがか？」

フロッグイレイザーを倒して事件を解決した直後、発令所に響達と共に集められた蓮夜は自身が思い出したというイレイザーへの対抗策の一つ、そして響がフロッグイレイザーと対等に戦えるようになったその理由を一同に説明していた。

そんな蓮夜の手には、先の戦いにて響が持っていたブランクカードが変化したガングニールの紋章が描かれたカードが握られており、そのカードを手に蓮夜が説明する話に響達や弦十郎も訝しげな反応を浮かべていた。

「栞って、アレですよ？本と本の間のページに挟んで、何処まで読んだか分かる目印にする、あの……」

「ああ……このカードはその役目を担っていて、コイツがある限りイレイザー達の改竄を受けず、奴らと戦う事が出来る力を手に入れられる……響がイレイザーと戦えるようになったのも、このカードによって物語の流れに左右されない栞と化した影響からだ」

「栞と化すって、何なんだよそりゃ……そもそもそれで、何でこのバカがイレイザーの改竄の影響を受けなくなったのか全然説明になってないだろっ……」

栞と呼ばれるそのカードの力で響が改竄の影響を受けなくなったのは分かるが、一体どういう理屈でそうなっているのか全く理解が出来ずクリスが怪訝な眼差しを向けてそう問うと、蓮夜は少し考える素振りを見せた後、近くのテーブルの上に積み重なるエルフナインが持参した資料用のファイルを見付けて一冊拝借し、カードと合わせて解説していく。

「例えば、このファイルを本としよう……イレイザー達はこの本を好き勝手に書き換え、自分達にとって都合のいい内容に改竄する事が出来る……そうなればその改竄されたページを起点に、それまで読んだ過去のページの内容も変わり、それ以降の物語の内容も変わってしまう……先の改竄の際に、お前達の記憶や人格、今まで歩んできた過去が改変されたようにな……しかし——」

「……そうか、だから『本の栞』なんですネ？僕達という存在は本の内容の一部だから、物語を改竄されればその影響に左右されてしまう。本の内容、世界の法則には逆らえな

い……でも、葉は本の内容に組み込まれていない物語の蚊帳の外の存在だから、どんなに本のページが書き換えられたとしても影響を全く受け付けない。ブックマークとして元の物語の情報を保持したまま、同じ蚊帳の外の存在であるイレイザーにも対抗が出来ると？」

「ああ、その理屈で間違っていないと思う」

「??え、ええつと……」

「ブ、ブックマーク、蚊帳の外……うえ……?」

「……ようするに、本のページと違って葉自体には落書きが出来ないから、イレイザーの改竄が効かないって事。図書室の本とかに紐のタイプの葉があるけど、アレにペンを走らせるなんて出来ないでしょ?」

「お、おお、成る程デス……」



「響……自分の事なんだから、せめて響自身は理解出来てないと駄目でしょ……？」

「うう、そう言われてもお……」

蓮夜とエルフナインが交わす怒涛の情報量の波についていけず困惑するも、調が分かりやすくフォローする事で何とか理解出来た響と切歌を他所に、弦十郎は腕を組んで話を続けていく。

「要約するとつまり、響君はそのカードによってイレイザー達の改竄能力に晒されても無効化出来る力を得たという訳か……だとしたら、他の装者達もその葉の力に覚醒すれば、イレイザーに対抗出来るようになるのか？」

「……恐らく。イレイザーは此処だけでなく、様々な物語にも現れては改竄の力で世界を書き換える。その対策として、物語の中で戦う力を持つ人間にイレイザーを倒せる力……『記号』を付与する事で奴らに対抗する術を与えるのも、クロス役目の一つだ……今はまだ響だけしか力に目覚めていないが、同じ方法で他の装者達にも記号の力を付与する事は可能だと思う」

「成る程……では、その方法というのは一体どんな？」

「……………」

「……………？蓮夜さん？」

一体蓮夜はどんな方法で響に記号と呼ばれる力を付与したのか。その方法を改めて問うエルフナインの質問に対し、蓮夜は何故か突然真顔のまま口を閉ざしてしまう。そんな蓮夜の様子に響達も訝しげな反応を浮かべる中、蓮夜は僅かに目を泳がせ……

「……………すまない……………葉や記号の力の事は思い出せたんだが、どうすればその力を目覚めさせられるのかまでは思い出せていないんだ……………」

「エエー!？」

「そ、そうなんです。それなら仕方ないと思います……………それじゃあ、響さんは？力が目

覚めた時、何がきっかけになったのか覚えてたりとかは……」

「へ？……え、えーつと……どうだったかなあ……？あの時は私も無我夢中で……」

「ようするに全然覚えてねえって事だな……」

頬を搔きながらいたたまれない様子で目線をそらす響の反応から期待する答えは返ってこないと察し、クリスは頭を抑えて呆れた溜め息を漏らしてしまい、他の面々も同様の反応を浮かべてしまう中、蓮夜は若干気まずそうに軽く咳払いをしながら懐から数枚のブランクカードを取り出した。

「取りあえず、その方法を探る為にも他の装者達にもこのカードを渡しておこうと思う……響がカードを所持してた事で力が目覚めたのなら、何かしらのきっかけでまた同じ現象が起きるかもしれない……それが分かりさえすれば……」

「同じ方法でイレイザー達の改竄能力を凌ぐ術を手に入れられるかもしれない、という事か……分かった。こちらでもそれが探れないか調べてみよう。それからクリス君、切

歌君、調君は彼からカードを預かって、記号の力とやらを目覚めさせられないか試してみてくれ」

「分かりました」

「了解デス！」

「……………」



「——あれからもう一週間以上経ったんだよね……エルフナインちゃんも一緒になつて、力に目覚める方法を探ってるっていうのは私も何度か耳にしてるけど、あれから何か進展とかはあった？」

「それが……」

「蓮夜さんのベルトやカードも借りて色々調べ尽くしたみたいですけど、てんで何も分からず仕舞い、カードの方も未だにうんともすんとも言わないから困ってるですよ……」

「そうなんだ……」

蓮夜からカードを渡されてからそれなりに日にちが経った筈だが、未だに例の記号の力とやらに目覚める手掛かりが得られていない。肩を落としながら気落ちする様子を浮かべる調と切歌を見て、あまり事は上手く進んではいないのだろうと察した未来は二人の前にお茶を並べていく。

「まあでも、気を逸らせてもどうにかなる問題じゃないだろうし、焦らずにいきましょう？ 響に出来て、二人やクリスに出来ないなんて事ある訳ないんだから」

「それは……はい、頭では分かってるんですけど……」

「でも、少しでも早く皆の力になりたいって思うと、どうしても焦っちゃうデスよね……」

現状イレイザーと戦えるのが蓮夜と響だけとなると、このままだと戦う手段を持たない自分達は二人の足を引っ張ってしまう事になる。そう思うとやはりどうしても急いで力を身に付けなければと焦ってしまい、そんな二人の心境に装者でない未来も少なからず共感を覚えて何とも言えない気持ちになるが、其処でふと、お茶を啜っていた切歌が何かを思い出したように不意に顔を上げた。

「あ……：そういえば話が変わるデスけど、さっきのタツパーに入ってたのって蓮夜さんの為に作った奴なんデスよね？どうしてお二人が蓮夜さんにごはん作ってあげてるデスか？」

「うん、私も気になってた。響さんと未来さん、確か料理は其処までやらないって前に聞いてたから……」

「え？あ、そういうえげさき話しそびれたんだっけ……実はこの間、蓮夜さんが入院した時に響と一緒にお見舞いに行ったの。其処でちよつと蓮夜さんの普段の食生活っていうか、食への無頓着ぶりを知った響が「ほつとけない！」ってなつちやつたのがきっかけて、ちよつと前から料理にも挑戦するようになって……」

「……無頓着？」

「どういふこと？、と未来の説明に切歌と調が小首を傾げて怪訝な顔を浮かべる。するとその時、キッチンの方から突然響と一緒に冷蔵庫の整理をしていた筈の蓮夜が、何やら慌ただしい様子で三人の下に駆け込んできた。」

「未来……！未来！頼む助けてくれ！」

「へ？」

「こーらあー！逃げないで下さいよ蓮夜さあーん！」

妙に慌てた様子の蓮夜を見てポカンとしてしまう未来だが、そんな蓮夜を何故か頬を膨らませたご立腹な様子の響が追い掛け回し、蓮夜は咄嗟に未来の後ろに隠れてしまった。

「ど、どうしたの二人とも？何かあった？」

「聞いてよ未来うゝ！蓮夜さん、あんなに駄目って言ったのにまたこんな買い込んでたんだよー?!」

「……………それって……………」

「缶詰……………デスか？」

そう、響が未来に見せたのは、『赤貝』や『たこやき』のラベルが貼られた二つの缶詰だったのだ。

調や切歌はそれを見て、何故響がこんなにご立腹な様子なのか理解が追い付かず小首



を傾げてしまうが、響は構わず缶詰を蓮夜に突き付けて叫ぶ。

「前にも言ったじゃないですかあ！暫くは缶詰は封印して食生活を改善していこうって！それなのに隠れてこんなの食べてたなんてあんまりですよ！」

「だから違うと言っているだろう……！それは店先で俺の生活事情を知ってる顔見知り貫つただけで、親切心を無下に出来ずについ受け取ってしまっただけだと……！」

「そ、そうなんです。だって別に良いんじゃない、響？人の厚意を大事にしたって言うなら悪い事じゃないし、取りあえず受け取っただけで、缶を開けて食べた訳じゃないのなら其処まで怒る事でもない訳だし。そうですね、蓮夜さん？」

自分達に隠れて食べていたのならともかく、人から貰ったものだから捨てずに保管していただけなら大丈夫だろうとフォローし、蓮夜に同意を求めて振り向く未来。が……

「……………」

……何故か、振り向いた先で蓮夜はそんな未来の視線から逃れるように顔を背けていた。思いっきり。明後日の方を向いて。

「……蓮夜さん？」

「……………いや、その、なんだ……貰ったモノの中に、見た事のない缶詰が幾つか入っていて……一体どんな味がするんだろうか？という好奇心を抑え付けられなかったというか……まあ、つまり、」

「開けたと。缶詰」

「開けた。缶詰」

「食べてるんじゃないですかほらあああああーっ!!」

響、激おこである。最初の方で下手に言い逃れしようとしたのも相まって余計に怒りがマシマシな響に対し、蓮夜は冷や汗を流しながら激しく首を横に振る。

「ただ勘違いはしないでくれっ。確かに缶詰を開けたのは認めるが、何もそればかり食べてた訳じゃないっ。お前達に言われて俺もきちんと自分を改め、ここ最近缶詰や飲料食以外もちやんと食べるように心掛けてるっ」

「むむ……。じゃあ、私達のいない所でもちやんとしたごはん食べてるんですね？それだったら——」

「勿論だ。ついこの間も買い出しに行った店先で興味深いものを見つけて、最近はこのを主な主食にしてる」

そう言いながら、ふんす、と何処か得意気に胸を張り、蓮夜は自信満々に最近のお気に入りのお食を取り出し響達に見せた。

それは幅20、奥107、高100mmの少し大きい箱。

明るい色合いの黄色が特徴的な、箱のパッケージ表面にはお洒落なロゴの商品名が描

かれていた。

——『カロリーメイト』と。

「つて、結局栄養食に逆戻りしちゃってるじゃないですかあつ?!」

「え……いやしかし、ゼリー飲料と違ってこれはちゃんとした固形食ではあるし、食を楽しむという点でも味の種類が豊富で……」

「そういう問題じゃないんですっ!あくまでこういうのは補助食であつて、そもそも主食にするようなものじゃないんですからっ!もーっ!目を離すとすぐに横着し始めるんだからっ!」

「……………要するに、こういう事が頻繁に起きるから私達が代わりにごはんを作らないとどんどん駄目になっちゃうから、放っておけなくて料理を始めるようになったの……………」

「な、成る程……納得したデスよ……」

「蓮夜さん、戦いの時は頼りになるけど、私生活の方は全然駄目な人だったんですね……」

まるで片付けが出来ない女である翼のようというか、仮に此処に MARIA がいれば一緒にお説教をしてそうだと、カロリーメ〇トの箱を没収されて正座で響に叱られる（というかもう小さな子供にお説教するソレ）蓮夜の意外な一面を知った切歌と調は若干顔を引き攣らせつつ苦笑いを浮かべ、未来も頭を抑え深々と溜め息を吐いた。

「響も響で目が離せないのは同じだけど、蓮夜さんは蓮夜さんで自分に無頓着過ぎるのがある意味響よりも酷くて……なんていうか、響が二人になったみたいで私も目が離せなくなってきたっていうか、最近心配事が増えちゃったんだよね……」

「おおう……何だか、日々子育てに奮闘するお母さん味のある台詞デスね」

「あんな大きな子供、二人もいりませんっ」

ただでさえ響だけでも普段から気苦労が多いというのに、これ以上増えられてはホントにストレス過多で胃に穴が開き兼ねない。わりと本気で嫌そうに否定する未来の言葉に切歌と調も苦笑を深めると、未来は未だお説教中の蓮夜と響に目に向けてため息混じりに呟く。

「はあ……こういう時、クリスがいてくれたら私も負担が減って助かるんだけどなあ……」

「しょうがないデスよ、今日は本部で訓練する予定が先に入ってたらしいデスから」

「それにこの後、皆で本部に来るように招集掛けられてるし、終わったら改めて一緒にお茶するのも良いと思う……クリス先輩の分のお菓子もちゃんと買っておいたし」

でん！と、クリスの為に用意したお菓子の包みを取り出して見せる調。彼女の言う通り、午後にはS・O・N・Gの協力者となった蓮夜の仮面ライダーとしての能力・性能データを取る為、蓮夜や装者達に招集が掛けられている。

本来ならそれも蓮夜の怪我の具合を考慮し、ベルトやカードの解析のみで留める予定だったのだが、蓮夜の傷の回復が想像以上に早かった事、今後の戦いで装者達との連携やベルトの整備、機能向上のアップデートを可能とする為に出来るだけ情報を共有しておきたいという蓮夜からの申し出で急遽決まったそうだ。

なので今日はそれまでの間に、皆で蓮夜に引越し祝いを渡すついでに新居もどんな感じなのか見てみた後、蓮夜を交えて本部へ一緒に行こうと思っていた。

しかし、クリスは先約があると断って先に本部に行ってしまった、それならば仕方がないと四人だけで蓮夜の新居を訪れた訳なのだが、未来はその時のクリスの顔を思い返し今更ながら疑問に思う。

（でもなんだろう……今思うとあの時のクリス、何だか何時もに比べて様子が可笑しかったというか、何処か余所余所しかったような……私の気の所為？）

「とにかく、缶詰は今後絶対禁止です！どうしても守れないなら全部没収しますからね

「！」

「横暴だ……！それは流石に横暴が過ぎる！暁、月読！頼む、お前達からも何とか説得してくれ！」

「ええ、と……この場合、響さんの言い分の方が正しいと思う。バランスの偏った食生活はダメ、絶対」

「デスねー……あ、それからアタシ達のことも名前呼びで大丈夫デスよ〜」

「ぐうの音も出ない正論と明るい笑顔でバツサリ切り捨てられたっつ……!!!」

クリスの事が気に掛かる未来を他所に、調と切歌からもド正論を叩き付けられて『○r z』の格好で意気消沈してしまう蓮夜。

そんな蓮夜の大袈裟すぎる慟哭の声で現実を引き戻された未来はヤレヤレと苦笑し、取り敢えず今は彼を慰めつつお茶の準備を再会しようと腰を上げるのだった。





—トレーニングルーム—

「ウオラアアアアアッ!!」

ガガガガガガガアツ!!と、S・O・N・Gの本部の訓練所内に間断のない銃声が鳴り響く。シユミレーションによって投影された市街地、蔓延るアルカ・ノイズを次々と銃弾で撃ち抜いて霧散させていくのは、ギアを身に纏って訓練中のクリスだ。

両手に握る大型ガトリングガンを乱射して目前から迫るアルカ・ノイズの大群を一掃し、背後からも出現したアルカ・ノイズの不意打ちにも対応して上空へと跳躍し攻撃を回避すると共に、左右の腰部アーマーを展開して撃ち出す小型ミサイルの雨をアルカ・ノイズ達に降り注がせ、爆発が巻き起こる。

ドゴオオオオンツ!!と耳を裂くような爆発音が響き渡り、地面に着地したクリスに熱と煙と突風が纏めて吹き付け、髪を揺らす。

ギアに備わる耐熱フィールドによって爆発の熱は肌に伝わらない筈だが、燃え盛る炎を見据えるクリスの顔は厳しく、眉間に皺を寄せ険しい表情が張り付いていた。

(まだだ……前に戦ったイレイザーの力はこんなモノじゃなかった……)

炎を睨むクリスの頭上から、今度は葡萄の実のような紫色の肉塊が無数に襲い掛かる。

それを視界に捉えたクリスは即座にガトリングガンと小型ミサイルの同時掃射で紫色の肉塊を撃ち抜いて起爆させると、両手のガトリングガンをスナイパーライフルに変容させ、更にヘッドギアからスコープレンズを起動し、空を覆う黒煙の向こうを探る。

サーモグラフィードビルの上から再度肉塊を飛ばそうと試みるアルカ・ノイズ達の姿

を捉え、身構えたスナイパーライフルで素早くアルカ・ノイズを狙撃して反撃の隙も与えず撃破していき、今度はクリスの周囲に新たなアルカ・ノイズ達が出現して囲まれてしまうも、クリスの表情に焦燥の色は一切ない。

（そうだ、これぐらいあたしには何でもない……！今だつて色んなピンチを切り抜けてきた……なのに、あたしは……）

アルカ・ノイズの大群が左右前後から同時に迫る。しかしクリスはスナイパーライフルからマシンピストルに切り替えた両手の銃を左右一直線に構えながら引き金を引き、銃撃を放ちながら360度回転して射線上のアルカ・ノイズ達を薙ぎ払っていく。

それでも撃ち漏らし、接近戦を仕掛けてくるアルカ・ノイズを近接射撃で迎撃し、大した苦戦もなく撃破スコアを重ねていくクリスだが、その顔は反して徐々に苦虫を噛み潰したような表情へと変わりつつあった。

（イレイザーの改竄に蝕まれた時、あたしは何にも出来なかった……それどころか、改竄に苦しんで助けを求めてきたアイツの存在にも気付かずに、あたしはっ……）

ギリイツ……！と、無意識に嘔み締めた奥歯が音を鳴らす。

眼前のアルカ・ノイズをどれだけ撃ち抜いても、胸の内のモヤモヤが一向に晴れない。

寧ろ、こんなシミュレーション上の敵を相手に燻る事しか出来ずにいる今の自分の姿に言葉にし難い苛立ちばかりが募り、同時に、自分達の危機に幾度となく駆け付け、レイザーを難なく倒してきたクロスの姿が何度も脳裏を掠めていた。

(ツ……クロスだの記号だの知った事か……！そんな力がなくなつてあたしはやれる！このイチイバルだけで！)

脳裏を過ぎる記憶の残像を頭を振って振り払う中、更に増援で現れたアルカ・ノイズの群れが正面から迫る。それを目にしたクリスは即座にアームドギアを弩弓に変形させ、クラスター弾としての性質を持った大型矢を放ち、アルカ・ノイズを範囲攻撃で纏めて撃退し訓練を続行していくのであった。

## 第五章／不協和音×BANGBANG GIRLの憂鬱

②

数時間後……

『——ゼエアアアアッ!!』

——S・O・N・G・本部のトレーニングルーム。普段は装者達の訓練に使われるこの訓練所内にて、今現在、蓮夜はクロスに変身して投影された市街地を縦横無尽に駆け回り、トレーニングシステムで次々と出現するアルカ・ノイズ達を相手に奮闘していた。

勢いよく振り抜いた拳で一番動きの鈍いアルカ・ノイズを狙って殴り飛ばし、奥で密集するアルカ・ノイズの群れに目掛けてまるでボーリングのピンが如くぶつけ、纏めて霧散させる。

塵となつて消えていくアルカ・ノイズを見て薄く息を吐き出すクロスの左右から、今度は続け様に他のアルカ・ノイズ達が挟み撃ちで襲い掛かるが、クロスは即座に右足の先端に蒼い光を走らせてその場で身を捻らせながら軽く跳躍し、瞬間的に脚力が跳ね上がった右足を鋭く振るい、周囲のアルカ・ノイズ達を薙ぎ払った。

回し蹴りをまともに喰らったアルカ・ノイズは頭と胴体が真つ二つに割かれて消滅し、その余波を受けて吹き飛んだアルカ・ノイズ達もビルの壁に次々と激突すると共に霧散し消え去っていく。

それらの光景を尻目に、地上に着地して前を向くクロスの目線の先には地面に現れた方陣から更に続々と出現するアルカ・ノイズの増援の姿があり、クロスは間髪入れずに再度両足の先端に光を走らせて脚力を強化すると、地面を吹き飛ばす程の勢いで蹴り上げて飛び出し、アルカ・ノイズが完全に現出する前にすれ違い様に次々と正確に急所を打ち抜き、素早く撃破していった。

「——アルカ・ノイズの数、更に減少。増援のスピードがまるで追い付かない……なんて

殲滅速度なの……」

「すごい……！本当にアルカ・ノイズともちゃんと戦えてる！」

「これがクロス……マスクドライダーの力、か……こうして間近で見ると、改めてその凄まじさが分かるな」

訓練所の隣のモニタールームにて、機器でクロスのデータを収集する友里の報告を耳にその様子を見守る響達や弦十郎も、アルカ・ノイズ達を寄せ付けないクロスの戦闘力に瞠目を禁じ得ずにいる。

ノイズ、アルカ・ノイズの特性の一つである『位相差障壁』は自分の存在を異なる世界に比率を置く事で、人類側の攻撃を無効化するという厄介極まりない能力だ。

過去にあつたノイズとの交戦記録において、位相差障壁を打ち破れたのはノイズがこちらの世界に対して存在比率を増した瞬間にタイミングを合わせて攻撃し撃退出来た例や、効率を無視した間断のない攻撃を仕掛ける事で駆逐した例など、いずれも有効的

とは言えない対処法しか存在しない。

故に本来であれば、シンフォギア・システムを介した攻撃で異なる世界に跨るノイズの存在を調律し、こちらの世界の物理法則下に引きずり出す事でしか位相差障壁を無効化出来ず、ダメージを与える事も不可能な筈なのだが、その事実に対しクロスはその手でアルカ・ノイズの突進攻撃をもともせず受け止め、逆に他のアルカ・ノイズ達に目掛けて蹴り返し反撃に転じている。

シミュレーション上とは言え、位相差障壁を破れなければ即座に訓練が終了されるように設定されてるにも関わらずアルカ・ノイズを相手に一方的に立ち回るクロスの性能に一同の目が釘付けになる中、友里と共にデータ収集を行っていたエルフナインが椅子ごと弦十郎の方に振り返った。

「データ解析、一通り完了しました。前にベルトを調べた際に蓮夜さんから教えて頂き、構築したアルゴリズムのおかげで以前まで解析不能だったクロスのデータも大分調べられるようになりましたね」



「流石だなエルフナイン君。それで、解析の結果は……」

「はい、先ずはこれをご覧下さい」

そう言つてエルフナインは手馴れた手付きで端末機器を操作していく。

モニター画面が切り替わり、クロスに変身している状態の蓮夜のパーソナルデータが映し出されていき、更に腰部部分のベルトをズームアップしていくと、ベルトから蓮夜の全身に掛けてエネルギーらしきモノが流れているのが分かる。

「これが今の、クロスに変身している蓮夜さんの状態です。腰のベルトから放出される未知のエネルギーが蓮夜さんの全身を巡り、アルカ・ノイズの炭素転換を無効化しているだけでなく、ノイズの位相差障壁をも無力化している……恐らくこれが蓮夜さんも以前に言っていたクロスの能力の一つ、”あらゆる世界の敵や法則に順応する為に必要な能力を代換する機能” かと思われます」

「能力を代替する機能……要するに蓮夜さんは今、シンフォギアの機能の代わりになる

別の力を使って、アルカ・ノイズの位相差障壁を無力化してらって事なのかな……」

「ま、またとんでもな機能デスね、それ……」

「ああ。本来シンフォギアの調律でしか打破出来ないノイズの位相差障壁を別の力で代替して突破し、ノイズの撃退を可能とする……それが解析不能のブラックボックスの正体となれば、そんな物を易々と外部の人間に明かせる容易なセキュリティになってる筈もないか……」

何せそんな技術、日々ノイズへの対抗策や聖遺物の研究を進めるこの世界からしてみれば画期的となる。

シンフォギアは適合した人間にしか扱えないというある種のセーフティーと呼べる物が存在するが、このクロス……仮面ライダーの力が仮に誰にでも扱える物なのだと思えば、その技術が広まれば万人がノイズと戦えるようになれるかもしれない。しかし……

「このベルトを開発した方のその判断は、確かに間違っていないかと思えます。……  
仮にこの技術が世界中に広まればノイズへの対抗策になるかもしれませんが、同時に――」

「新たな火種となり得るかもしれない危険性もある、か……ノイズという人類共通の敵を前にしても人間同士の争いが絶えない現状、こんな強大な力、今の我々人類の手には確かに余るものだな……」

自分達の世界という括りだけで見ても、聖遺物の研究を巡り各国の間でしのぎを削る今の現状の中、ライダーシステムという新たな投石が投げ込まれれば更なる混乱を招くのは目に見えている。

ルナアタックの事件後にシンフォギアシステムの存在が世界中に知れ渡った際も、技術を秘匿していた件やシンフォギアの保有を巡って国際規模の問題になり掛けた事や、聖遺物の新エネルギーを巡って人類間の闘争が加速するという結果を生んでしまった事もある。

故に蓮夜もその危険性を危惧し、S・O・N・G・との協力を取り付ける条件として必要以上のベルトのデータや技術は開示しない事や、S・O・N・G・と仮面ライダーが繋がっている事は表向きには伏せ、黒月蓮夜はあくまで民間の協力者として扱って欲しいと希望された。

無論それは弦十郎達を信用していないからでなく、自分やクロスが存在が万が一この国の外にまで露見すれば、蓮夜を匿っていたS・O・N・G・が矢面に立たされるのは間違いなく、あくまで人間を守る為の物であるライダーシステムの技術が広まり、人間同士の争いに利用されるリスクを避ける為だ。

いつ如何なる事態に陥つてもS・O・N・G・の面々だけは自分の問題に巻き込まないように努めると語り、自分のせいで組織にとつて不測の事態になった際には全ての責任を押し付けてくれても構わないと告げた蓮夜の以前の言葉を思い返し、弦十郎は複雑げに眉を顰めて小さく溜め息を漏らした。

(まだ歳若い若者に自ら蜥蜴の尻尾切りを進んでやらせるなど、あつてなるものか……  
そんな事態にならぬように、せめて大人である俺達が彼の助けになつてやらねば)

この事はまだ響達にも話していない。語れば彼女達が必要以上に気に掛けてしまうやもしれないと思い、弦十郎はアルカ・ノイズと戦うクロスの戦いぶりに釘付けになる響達を横目で一瞥し、トレーニンングルームに視線を戻す。

アルカ・ノイズの数は既に残り僅かまで減っており、クロスは正面から迫るアルカ・ノイズ三体を回し蹴りで纏めて粉碎すると、右腕の先にまで伸びたラインの上に光を走らせて拳に蒼い光を纏い、地面に勢いよく拳を叩き込んで蒼いオーラを孕んだ衝撃波を発生させ、周囲を囲む残りのアルカ・ノイズ達を吹っ飛ばして完全に撃破していった。

『ふうッ……一応、これで全部になるのか……?』

「はい。お疲れ様です、蓮夜さん。おかげさまで対アルカ・ノイズ戦のデータもある程度取れました」

『そうか、良かった……それで確か、この後も別のシュチュエーションでの戦闘データを取るんだったな……?』

「あ、はい。次は対人戦でのデータ収集にもご協力をお願い出来たらと。三十分の小休憩を挟んだら、その後データ収集の再開を……」

『いや、このまま続行してもらって構わない……体力の方もそれほど消耗はしていないし、身体も温まって今の状態が一番調子がいいからな……』

エルフナインにそう言ってクロスは身体の調子を確かめるように右手を何度か開閉し、このまま次の段階に進む意向を伝えると、エルフナインは弦十郎に成否を求めて視線を向け、少し考えた末に頷いた弦十郎の了承を確かめた。

「……分かりました。ではこのまま次の段階に移行しますね。次のシミュレーションでは先程話した通り一対一での対人戦となりますので、蓮夜さんにはこちらで選んだ装者と実戦形式での戦闘を行ってもらいたいと思います」

『そちらの装者と……？それは構わないが、一体誰と——「あたしとだ」……！』

首を傾げて聞き返そうとした中、それを遮るように横合いから声が聞こえて思わず振り返る。すると其処には、いつの間にか赤いギアを身に纏い、クロスと対峙するように佇んでいるクリスの姿があつた。

「えっ、クリスちゃん？」

「さつきから姿が見えないと思つたら、いつの間に……」

「ああ。実は君達が来る前に此処で先に訓練していたようなんだが、蓮夜君のシミュレーションに備えて色々調整と準備をしていた際、たまたま訓練終わりで居合わせたクリス君にその話をしたら、その相手を自分にやらせてもらえないかと申し出られてな」

「クリス先輩がデスか？」

クリスが自ら蓮夜との模擬戦を願い出たと聞かされ、響達は意外そうな眼差しでクリスを見つめていくと、エルフナインは端末機器を弄りながら弦十郎の説明に補足を加え

ていく。

「急な話ではありませんが、マスクドライバーと装者の仮想シミュレーションは興味深いと思います、承諾したんです。今後はレイザーやノイズイーターとの戦闘が激化すると予想されますし、彼等と同等以上の戦闘力を持つクロスとの戦いで得たデータを使ってギアにアップデートすれば、少しでも皆さんのお役に立てるかもしれませんから」

説明を続けながらエルフナインが端末を操作していくと、クロスとクリスが佇むトレーニングルームの周囲の景色が変化して何処かの寂れた廃都市へと変わっていく。

その光景を物珍しげに見回すクロスとは対称に、クリスは最早見慣れたものだと周囲に目もくれず腕に纏ったギアの装甲の位置を調整し、クロスはそんなクリスに向けて徐々に口を開いた。

『そういえば、こうして二人だけで顔を合わせるのは何気に初めてだったな……改めて、宜しく頼む』



「……………」

『……………？』

軽く会釈をして改めてクリスに挨拶するクロスだが、対するクリスは無言のままクロスを見つめるだけで何も返さず、その眼差しも何処か猜疑的な色を含んでいるように見える。

そんなクリスの様子にクロスも仮面の下で怪訝な顔を浮かべて小首を傾げる中、訓練スペースを新たなフィールドに切り替えたエルフラインからのアナウンスがルーム内に響き渡った。

「空間シミュレーターの設定テイング、完了しました。間もなく戦闘開始の合図を鳴らしますので、合図開始と共に戦闘を始めて下さい」

「……………先に断つとくぞ。シミュレーションとは言えあたしは最初からマジでいく……………  
そつちも手を抜いたりしたら承知しないからな……………」

『……何?』

エルフナインのアナウンスが訓練所内に響き渡る中、何処か重々しい口調でそう告げるクリスの言葉にクロスが思わず訝しげに聞き返した瞬間、模擬戦の開始を告げるブザーが鳴り響き、直後にクリスは両手に出現させた大型ガトリングガンの銃口をクロスに狙い定めると共にいきなり発砲し始めた。

『ツッ!いきなりか……!グッ!』

慌てて真横に飛び退いて銃弾を回避し、受け身を取って即座に身を起こしながら真横に疾走するクロスだが、クリスもそれを逃すまいと大型ガトリングガンを乱射し続けクロスを追撃していく。

(此処でアイツに勝って証明してやる……!アイツの力なんかなくなつたって、あたしはお荷物なんかじゃないって事を!)

『チイ……！』

背後から迫る銃弾の嵐を一瞥し、クロスはそのまま近くの建物の中へと窓を突き破って飛び込んでいき、建物の壁を盾代わりにしてどうにか銃撃を凌ごうとする。が……

「それで隠れたつもりかよっ!!」

—MEGA DEATH PARTY—

『！』

クロスは大型ガトリングガンを発砲し続けたまま左右の腰部アーマーを展開し、クロスが逃げ込んだ建物に目掛けて多連装射出器から小型ミサイルを一斉発射したのだ。

ドゴゴゴゴゴゴオツ!!と、ミサイルはそのままクロスが逃げ込んだ建物に侵入して立て続けに巻き起こる爆発が全ての窓ガラスを内側から吹き飛ばし、建物は粉塵を巻き上げながら激しく音を立てて崩壊していったのである。

「ク、クリス先輩、初っ端からいきなり飛ばし過ぎではないデスカっ?」

「幾ら蓮夜さんも強いって言っても、あれだけの攻撃を受けたら流石に……」

「いや、そうとも限らん」

「え?」

崩れ落ちる建物を見て流石にクロスの身を案じる切歌と調に対し、弦十郎は腕を組んだまま悠然と呟く。

まるで何かを見越しているかのようなその口振りに未来や響達も頭の上に疑問符を浮かべる中、舞い上がる粉塵の中を一筋の朱い閃光が目にも止まらぬ速さで駆け抜け、クリスの左手のガトリングガンの銃身をすれ違い様に斬り裂いた。

「何ッ?!くっ……!!」

銃身を斬られた左手のガトリングガンを見て目を丸くし、クリスは慌てて朱い閃光の残光を目で追いながら残った右手のガトリングガンを乱射し続けるが、朱い閃光は素早いジグザグの軌道で銃弾を回避し続け、朱い閃光……タイプスラッシュに姿を変えたクロスはクリスの目前に肉薄して姿を現すと共に、右手に握るスパークスラッシュを振りかざした。

『もう片方の得物も貰う……!』

「ちッーやらせつかよっ!」

右手のガトリングガンに狙いを定めてスパークスラッシュを振るうクロスの斬撃を咄嗟のバックステップでギリギリで避け、クリスは左右の腰部アーマーから先程のミサイルとは形状の異なる無数の弾頭ミサイルをクロスに撃ち放った。

しかしクロスは最小の動きで全ての弾頭ミサイルを回避しながら構わずクリスの得物を切り落とそうとするも、クロスに避けられた弾頭ミサイルはいきなり爆発を起こし

て煙を撒き散らし、クロスの周りを一瞬の内に覆い尽くしてしまう。

『(ツ?!何だ……? 煙幕……?!)』

爆発の衝撃で一瞬動きが鈍り、足を止めてしまったその隙にクリスは煙幕の向こうへと後退し姿をくらましてしまう。それを見て慌てて後を追いつけようとするも、煙の向こうから更に新たな弾頭が投げ込まれて次々と爆発し、煙の量が増して完全にクリスの姿を見失ってしまった。

『(ツ……!これでは視界が確保出来ない……!どうか此処を抜け出して——)』

幸い、この視界の悪さなら向こうも煙に阻まれてこちらの姿を捉えられない筈。ならばこの気に乗じて身を隠し態勢を整えようと、クロスはその場から離脱しようと動き出す。煙の向こうから赤い線を描いて一発の銃弾がクロスの頭を狙い、飛来してきた。

『なっ……?!ぐうっ!』

慌てて首を横に傾け、紙一重で赤い銃弾を回避するクロス。しかし直後に更なる銃弾の数々がクロスの居場所を正確に捉えて次々と襲い掛かり、両手のスパークスラッシュによる薙ぎ払い、バックステップと側転で銃弾を回避しながら偶然背に付いた建物の壁に身を隠した。

『(ツ……こつちの姿を捉えてる……？暗視スコープの類か……！)』

「——生憎だったな。こつちからは全部丸見えなんだよ……！」

シンフォギアの装備ならそれぐらい造作もないだろうと予想するクロスの読み通り、煙幕を利用して姿をくらましたクリスは手短かな建物の屋上へ移動し、狙撃モードに変形した頭部バイザーの暗視スコープで建物の影に隠れるクロスをサーモグラフィで視認し、スナイパーライフルに切り替えたアームドギアで狙いを定めていた。

様子を伺うようにクロスが影から僅かに顔を出した瞬間に引き金を引き、放たれた銃弾が鼻先を掠めてクロスが顔を引っ込める。

しかしクロスもそれでクリスの位置を察したのか、左腰のカードホルダーを開きつつ思考する。

『(弾道からして上……建物の上層辺りか……方角と位置さえ大体で掴めてしまえば……！)』

『Code Blaster……Clear!』

取り出したカードをバックルに装填し、タイププラスターに姿を変えながら即座に物陰から飛び出す。

無論表に出してしまえば銃弾の雨を浴びせられてしまうも、タイププラスターの分厚い装甲の前にはライフル弾程度の威力では傷一つ付かず、銃弾をその身一つで弾きながら右手に出現したウェーブプラスターの銃口を変形させて砲撃形態に切り替えると、銃弾が飛来する煙の向こうの方角にウェーブプラスターを構えていき、引き金を引いた瞬間、巨大な緑色の砲撃がクリスが陣取る建物の屋上に目掛け一直線に放たれた。



「なんつ……?!クソツッ！」

煙幕をかき消すほどの勢いで迫る砲撃を見てクリスが咄嗟に屋上から飛び退いたと同時に、緑色の砲撃は建物の三分の二を飲み込んで跡形もなく消し飛ばしてしまい、ゾツとなる。

恐らくギアの耐久力でも耐えられるように加減はされてるだろうが、それでもあんな威力をまともに喰らっていたらどうなっていたか。

想像しただけで戦慄を覚える自分の情けなさに腹ただしさを覚えつつも空中で態勢を整えて地上に着地し、クリスはクロスボウを両手に握りクロスを見据えるが、砲撃の余波で掻き消された煙幕の向こうに既にクロスの姿はなかった。

「いない……?!何処に——『Final Code x……Clear!』……ツ?!」

クロスを探して辺りを見回すクリスの頭上から不意に電子音声で鳴り響く。それを聞きすぐさま上を見上げると、其処にはいつの間にか通常形態に戻ったクロスが上空に

跳び上がり、右脚を振るってクリスに目掛けてポインターを放とうとする姿があった。

『コイツで決めさせてもらおうツ……!』

「ツ！舐めるなあツ！」

放たれた蒼いポインターを前に、クリスも即座に装甲を部分展開して黄色い無数の粒子……エネルギーリフレクターを放出して周囲にばら撒き、障壁を展開してポインターを打ち消した。

だがそれでもクロスは構わず攻撃を続行し、蒼光を纏う右脚を突き出しながらリフレクターを展開するクリスへと急降下して飛び蹴りを叩き込んでいき、二人の間で無数の火花を撒き散らしながら僅かな拮抗の末、お互いに弾かれて勢いよく後方へと吹き飛ばされていった。

『ツ……！大した対応力だな……今ので勝負を決めようと思っただけ……流石は歴戦の装者だ……』

「つたりまえだっ……！あの程度でやられるくらいなら此処まで生き残っちゃいないんだよ、こっちは……！」

自身の技を耐え切ったクリスを素直に称賛するクロスに、クロスは軽く鼻を鳴らして憎まれ口を返す。

その息を呑む一進一退の攻防にモニタールームで見守る響達も固唾を呑む中、二人の一連の戦闘データを収集していたエルフナインが不意に口を開いた。

「クロスの近接形態、遠距離形態のデータの更新完了です。やっぱり凄まじいスペックですね……以前の映像データだけでは分かりませんでした、まさか此処までとは……」

「ああ、それに尽く対応してみせるクロス君も流石だな……よし、エルフナイン君」

「分かりました」

弦十郎が言わんとしてる事を察し、エルフナインはシュミレーションルームとの通信を繋いでいく。

「蓮夜さん。先日入手したガングニールの力を模したというクロスの新しい姿、使ってみせて頂いても構いませんか？」

『！アレを、今此処でか……？』

「はい。その力が発芽した当時、僕達はイレイザーの改竄能力に侵されてたせいでその時の様子を目にする事が出来ませんでした。なので、此処でその力と能力を改めて記録させて頂けたらと」

『それは……いや、しかし……』

「余所見してる場合かよッ！」

エルフナインからの突然の要望に戸惑う中、クリスが両手のクロスボウを連射して光の矢がクロスへと襲い掛かる。

それを見たクロスも咄嗟に反応して光の矢を全て躲しながらバックステップで後退すると、左腰のカードホルダーからタイプガングニールのカードを取り出し一度はバックルに装填しようとするも、何処か踏み切れない様子でカードを持つ手を直前で止めてしまう。

「……………？蓮夜さん……………？」

「どうした……………！来ねえならこっちから煽り立てていくぞオツ!!」

何故かタイプガングニールのカードを使う事を躊躇するような素振りを見せるクロスに響達も怪訝な反応を浮かべ、クリスは痺れを切らしたようにアーマーを稼働させて巨大な二つの大型弾頭ミサイルと射出機を展開し、クロスに目掛けて大型弾頭ミサイルを同時射出したのである。

迫り来る二つの大型弾頭ミサイルを前にクロスもカードとミサイルを交互に見ると、僅かな葛藤の末にバツクルへとカードを装填するが、直後に大型弾頭ミサイルがクロスに直撃してしまい、巨大な爆発を連続で巻き起こしていった。

「今のつて、完全に直撃……」

「……これは流石にひとたまりもないのでは……?!」

明らかにノーガードで大型弾頭ミサイルの直撃をまともに喰らったようにしか見えないクロスを見て思わず息を拒み、調と切歌はその安否を気にし不安げな面持ちになる。

しかし、クリスは何かを待ち構えるかのように燃え盛る炎を睨み据えながら両手のクロスボウを構えていき、直後、炎の中で僅かに何かが蠢くのが見えた。

そして炎に覆われて影しか見えないシルエットが徐々に露わになり、業火の向こうから身体に纏わせる橙色に光輝くマントを収縮させてマフラーの形状に戻していく、オレ

ンジ色のライダー……ミサイルが直撃する寸前にタイプガングニールに姿を変え、二翼のマフラーを身体に纏ってミサイルの威力を抑えたクロスが現れたのである。

「ツ！アレが……あのバカのカードの……！」

「ほ、本当に響のギアにそっくり……」

「ガングニールのカードを発現したクロスを確認。測定機の反応や出力も、確かにガングニールと酷似してるわ……これが響ちゃんから力を得たっていう姿……？」

「あれがああのベルトの力なのか……クロス……交差する力、か……」

炎の中から現れた、初めて目にするタイプガングニールのクロスのその姿から響のガングニールを連想し、各々驚きや関心を示す響以外の面々。

そしてクロスは二翼のマフラーを熱風で靡かせながら燃え盛る炎を背に足幅を広げて身構え両拳を握り締めていき、そんな未知の形態に姿を変えたクロスと対峙するクリ

スも僅かに緊張で張り詰めた顔を浮かべながら、両手に握るクロスボウをクロスに突き付けた。

「漸くその気になったみてーだなあ……だが、虚仮威しの力じやあたしには通用しねえぞッ！」

ババババババアッ!!と、クロスの新たな姿に臆する事なく啖呵を切りながら発した無数の光の矢がクロスに目掛けて放たれる。

が、クロスは襲い来る光の矢を素早く振り抜く拳で次々と殴り落としていき、すかさず両足の脛部のパワージャッキを稼働させ凄まじい瞬発力でクリスの懐へ潜り込んだ。

(ツ?!なんつー速さつ——!!)

『ハアアアアアッ!!』

肉薄すると共にクロスが咆哮を上げて振りかざす拳が迫り、クリスはその瞬発力に驚



きつつも咄嗟に身を逸らして拳を躲す。

だがクロスはすかさず右脚のスラストに火を灯し、空中で半ば強引に身体を半回転させた勢いでクリスに回し蹴りを放ち、クリスはそれもギリギリで身を屈めて頭の真上をクロスの右脚が薙ぐが、その余波だけでクリスのすぐ背後に建つ廃ビルが綺麗に真っ二つに切り裂かれてしまった。

（風圧、だけで……ビルを蹴り裂きやがったあつ……?! デタラメの限界突破にも程があるだろつ?! どんだけやばい力を渡してんだあのバカつ!!）

ただでさえこちらは近接戦闘に持ち込まれば不利になると言うのに、こんなデタラメな奴の間合いで戦うなどそれこそバカを見る。

思わず内心舌打ちし、クリスは即座にその場から飛び退いてクロスから距離を取りつつ部分展開したギアから無数の黄色い粒子を再度散布し、それを逃すまいとクロスが拳を伸ばして追撃を仕掛けるが、クロスの拳が届く寸前、リフレクターの壁が二人の間に構築されて弾き返されてしまう。

『ツ！さっきのバリアか……！』

「簡単に通せると思うなよっ……！そして此処は、あたしの距離だアツ!!」

— QUEEN ’ s INFERNO —

身体ごと大きく右腕を反るように後方へと弾かれ宙を漂うクロスを捉え、クリスは瞬時に連装型の弓に変形させたアームドギアに光の矢を番わせ、リフレクターを一時的に解除したと同時に一齐に光の矢を撃ち放っていった。

視界を埋め尽くす程の数の光の矢が、空中で身動きの取れないクロスに一度に迫る。

誰の目から見ても回避不可の絶体絶命。次に皆が瞬きした瞬間には全ての矢がクロスの身体を撃ち貫くと誰もが思い、クロスが撃ち落とされる姿が一同の脳裏を掠め、それが現実になるかと思われたが、しかし……

『っ……………こういう、時は、確かっ……………こうだったかっ……………!』

その逃げ場のない光景を前にクロスは諦めず、背部と両足のバーニアスラスタターを吹かせて半ば強引に空中で態勢を立て直す。直後、両足のパワージャツキを用いて何も無い空を蹴り上げる事で宙を自由自在に動き回り、飛来する光の矢を次々と回避し出したのであった。

「何っ……………?!」

「凄……まるで響さん……………というか、響さんの動きを完全にトレースしてる……………!」

「正に完コピって奴デスよ!響さんのカードであんな事も出来るようになるデスか?!」

「……………ううん。多分そうじゃなくて、響の戦ってる姿を観察して覚えたんだと思うよ。前に皆が訓練してる姿を私が見学してた時、検査を終えた蓮夜さんも何度か様子を見て来たの覚えてるし……………もしかしたらその時に、響の戦い方をずっと観察してたのかも」

「そ、そうだったの？う〜っ……な、何か恥ずかしいなあそれえっ……」

まさか自分が訓練している姿を密かに見られていたとは露知らず、しかも自分の動きを真似て光の矢を回避していくクロスを見て恥ずかしげに顔を両手で包む響。

だがそんな彼女とは対照的に、クロスと相對するクリスのその心中は決して穏やかではなかった。

確かにあの動きは響そっくりだ。自分も十を超える数の訓練をあのカと何度も熟し、その度に自分の技をあのを回避パターンで避けられた挙句、其処からの反撃で何度も何度も煮え湯を飲まされた事も少なくない。

—— 故に、気に食わない。

そんな刺々しい感情が胸を刺し、無意識に奥歯を噛み締めるクリスの攻撃の手が更に激しさを増していくが、クロスもギアを上げて高速で空中を跳び回り、光の矢の嵐を避

けながら黒のナツクルを纏った左腕をクリスに向けて振りかぶった瞬間、黒のナツクルがクロスの腕から分離し、クリスに目掛けて投擲されたのである。

「ハッ、破れかぶれかよッ！そんなもんで……！」

遠距離で対応出来る技がアレしか持たないのか、苦し紛れにしか見えないクロスの一手に鼻で笑いながら一時的に解除していたリフレクターを再度構築し、黒のナツクルを弾こうと試みる。

そしてリフレクターを解除した後の特大の一撃をお見舞いしてやろうと密かに次の一手の準備を進めていくクリスだが、直後、その顔が驚愕の色に染まってしまう。

何故なら、クロスが苦し紛れに投げ放ったと思われた黒のナツクルが空を舞いながら徐々に変形していき、黒の烈槍……ガングニールの槍へと形状を変えたからである。

「なっ?!」

「黒いガングニール……!!」

「あ、あれってもしかして、前にマリアが使ってた奴デスか?!」

そう、その黒い烈槍の外見は細部は異なるが、以前マリア・カデンツァヴァ・イヴが使用していたガングニールのアームドギアに酷似しており、思わぬ姿に変容した黒のナツクルを見てクリスや他の面々も驚きを隠せない中、黒い烈槍はそのままリフレクターの障壁に直撃すると同時に槍に備え付けられたブースターで更に加速し、障壁内へと食い込むように徐々に内側へ侵入しようとしていた。

「グッ、ぐうっ……!!この程度、でえっ……!!」

不意を突かれて僅かに動揺はしたが、それでもまだ取り返せる範疇だ。クリスは黒い烈槍が突き破ろうとする範囲にリフレクターのエネルギーを集中させ、障壁の強度を補強し黒い烈槍を跳ね除けようと試みる。

しかしその直後、黒い烈槍の先端だけが障壁の内側に僅かに侵入した瞬間、槍の先端

が左右に裂けるように展開し、エネルギーを収束していきなり砲撃を撃ち放ったのである。

「なっ……クツソツ！」

黒い烈槍の先端に収縮されるエネルギー光の煌めきを目にした瞬間、クリスは慌てて身を屈めながら障壁を解除した。

リフレクターを維持したままでは回避した砲撃が障壁内で反射して跳ね返るか、或いは爆発が籠って身を焼かれる危険性がある。

それがクロスの狙いの一つだと瞬時に悟ったクリスは頭の上を掠める砲撃をギリギリで回避するが、そんなクリスの目前に不意に残像が現れたかと思いきや、それは右腕を腰の後ろに引いたクロスとなり眼前にいきなり現れた。

「ツーしまっ——！」

『ゼアアアアアアッ!!』

まるで瞬間移動でも使ったかのような驚愕の速さ。息を拒み、反射的に身を引いて逃れようとするクリスだが、それよりも速くクロスの拳が放たれる。

その直撃は避けられないと悟り、咄嗟に両腕を十字に組んで拳を何とか受け止めるも、拳を打ち込まれた衝撃が両腕だけで収まらず、身体までも突き抜けてクリスの背中から凄まじい衝撃波が吹き抜けた。

「うッ、アッ……!! (こ、この馬鹿力つ……マジであのバカみてーじゃねえかつ……!!)」

クロスの拳を受け止めた両腕がビリビリと痺れる。しかしクロスは追撃を緩めず右腕のハンマーパーツを起動させ、クリスの腕の上に拳を押し当てたままバンカーを打ち込み、その凄まじい破壊力の衝撃でクリスを思いっきり吹っ飛ばし近くの建物の壁に叩き付けていった。

「ガアアッ!!ぐっ、っ……ま、だっ——?!」



『——いや……悪いが此処で詰みだ……』

痛みに顔を歪めながら尚も立ち上がろうとしたクリスの目の前に、いつの間にかクロスが黒い烈槍を手にして矛先を突き付ける姿があった。

だがそれでもクリスは構わずクロスに銃を向けようとするも、先程の拳撃とバンカーのダメージを立て続けに受けたせい、両腕はどちらとも痺れが走って震え、すぐにはまともに動かさそうにない。

これではロクに銃も構えられない。戦闘続行は不可能だと自覚したクリスが悔しげに唇を噛み締めて俯いたと共に、戦闘終了を告げるブザーが鳴り渡り、シユミレーターも停止して周りの景色も元の訓練所の風景へと戻っていった。

(ツ……負けた……クツソツ……)

震える右手を拳を握って無理矢理止め、悔しさを露わに床に叩き付けるクリス。

そんなクリスを見つめながらクロスも黒い烈槍を左腕のナツクルに戻してバックルからカードを抜き取り、蓮夜へと戻りながらクリスにそつと手を差し伸べた。

「大丈夫か……？ 立てるか？」

「……………」

「……………やっぱり無事で済む筈がない、よな……………すまない……………本当はあの力を使うつもりはなかったんだが、何処か怪我とかは……………」

「……………使う気が……………なかったっ……………？」

謝罪の言葉を投げ掛けクリスの身を案じる蓮夜だが、その言葉を聞いた瞬間クリスはピクツと反応し、差し伸べられる蓮夜の手を払い除けながらいきなり起き上がり、その胸ぐらに勢いよく掴み掛かった。

「ツ……………！お、おい……………！」

「お前つ……………！あたしは最初に手え抜くなつて言つたハズだぞっ！始めつからあたしな  
んかと、まともにやり合う気なんてなかつたつてのやつ?!」

「つ……………いや、俺はつ……………」

「おい、何事だ！」

「クリス？どうしたの?!」

シユミレーションを始める前に全力で戦えと告げたにも関わらず、最初から蓮夜がガ  
ングニールのカードを使わずに戦うつもりだったと知り憤るクリスに、二人の会話の内  
容を知らない響達が駆け付けて慌てて止めに入ろうとする。

しかしクリスはそんな一同を横目に舌打ちし、蓮夜を突き放してそのまま響達に目も  
くれず早足でトレーニングルームを後にしてしまう。

「クリスちゃん……？ね、ねえ待つてよ！クリスちゃんつてばー！」

「……一体どうしたんだ。何かあったのか？」

「……………」

何も言わずに苛立ちを露わにして出て行ってしまったクリスと呆然と立ち尽くす蓮夜を交互に見ると、響はクリスを急いで追い掛け、未来達もその後を追いかけてトレーニングルームから出ていってしまう。

そんな響達の背中を見送りながら弦十郎が残った蓮夜に原因を問い詰めるが、蓮夜は何も答えず無言のままクリスに振り払われた手を複雑げに見下ろし、力無く拳を握り締めていくのだった。

## 第五章／不協和音×BANGBANG GIRLの憂鬱

③

— 繁華街・某雑居ビル屋上 —

「……………うう……………」

一方その頃、とある雑居ビルの屋上にて何やらソワソワと落ち着きがなく動き回る挙動不審な男の姿があった。

両手の指を絡めながら特に意味もなく屋上を歩き回るその姿は何処か心配そうな、心許なさそうに見える、何かをする事で自分の中の不安を紛らわそうとしているにも見える。

すると、そんな男のいる屋上の扉が不意に音を立てて開き、一人の青年……………アスカが

現れて誰かを探すように屋上を見渡すと、男の姿を見つけて面倒そうに頭を掻きながら歩み寄っていく。

「お前か？俺が面倒見る事になった、新人のイレイザーってのは……」

「ツ……あ、ああ、そうだ……もしかしてアンタが、あの人の言ってた……？」

アスカに不意に声を掛けられ一瞬ビクツ！と肩を震わせるが、イレイザーというワードを聞いて彼も自分の仲間だと察したのか、男は挙動不審ながらも恐る恐るアスカにそう問い掛けると、アスカも屋上の手摺に寄り掛かって適当に手を振りつつ答える。

「一応俺の事も聞かされてるみてーだな……。アスカだ。ま、あんま構えないでくれていいぞ。こっちは前の件でやらかした負債で今回の仕事任されたようなもんだから、テキトーにタメで接してくれていい」

「え……そ、そう、なのか？なら、えと……わ、わかっ、た……？」

目に見えて適当な調子のアスカの態度や言葉に若干戸惑いつつ、男は言われた通りタメ口で頷き返す。そしてアスカも手摺に背中を預けて暗くなりつつある空を仰ぎ、溜め息を一つ吐きながら男の顔を横目に観察していく。

（コイツが例の”兆し”が見られたっていうレーザーか……ノイズ喰らいにしちや確かに他よりまともそうに見えるが、ぶつちやけ見た感じそんな風にも見えねーと言うか……ホントにコイツがそうなのか……？）

正直信じ難いとしか言いようがない。見た目からして既に常に自分に自信がなさそうで、何だか冴えない顔付きの凡人。パツと見て観察し、アスカが男に抱いたのはそんな印象だ。

正直こんな奴と一緒に大丈夫なのだろうかと、その頼りなさそうな風貌から一抹の不安を感じずにはいられないアスカの意味有りげな視線に気付いたのか、男は不安そうな眼差しをアスカに向けていく。

「な、何か？」

「……いいや。今更グチグチ言ってもしょうがねーよなって思ったただけだ」

「……?」

そうだ。コイツがなんであれ面倒を任された以上、自分はただ仕事を全うして汚名を雪ぐだけのこと。それ以外は考えるだけ無駄だと雑念を切つて捨て、アスカは頭の上に疑問符を浮かべる男に顔を向けて本題に入る。

「んで、話は大体聞いてるんだよな?今回はお前の力の覚醒を促すのが目的だ。其処から成長すれば、お前は俺らと同じ上級か、或いは別の進化を辿つて別種のイレイザーになれるかもしれねえって話だ」

「……そうすれば、俺の望みも果たせるかもしれない……つて、ことなんだよな……?」

「お前次第で、だけどな……最初にイレイザーになった時に聞かされるとは思うが、仮にお前が失敗したつてなりや、俺達はお前に見切りを付けなきやなんねえ。今までの連



中もそうなつては逆恨みして俺達に復讐しにくる奴もいたにはいたが、大抵返り討ちにされて俺らに消されるのがオチだ……それでも構わないって覚悟、出来てんのか？」

「……………」

腕を組み、まるで男を試すように投げ掛けるアスカからの質問に対し、男は口を閉ざして俯いてしまう。

……やはり見掛け通りの奴かと、少し圧を掛けただけで何も言い返さそうともしない男を見て早くも半ば見切りを付けようとしたアスカだが、男は手摺に片手を乗せ、もう片方の手で首に掛けたロケットペンダントをそつと握り締め、街の遠く眺める。

「……約束、したんだ……必ず俺が救うつて……例え悪魔に魂を売る事になったとしても、俺の手でつて……だから……！」

何か大切な物が仕舞われてるのか、ロケットペンダントを握り締めたまま男はアスカの方に振り向く。その顔はやはり不安げで頼りなさそうにしか見えないが、アスカを見

つめるその眼差しの奥には何処か力強い決意が宿つてるように見える。

「だから……お、俺はやる……！どんなに辛くて、この手を汚す事になったとしても……それでアイツを救えるんなら、俺は……！」

「……………」

己の中の揺るがない覚悟を口にする男の言葉に、アスカは何も答えない。ただ無言で腕を組んだまま圧を感じさせる眼差しを向けるだけのアスカを見て、彼の意にそぐわない答えだったかと思いい口を閉ざし気落ちして俯いてしまう男だが、そんな男の反応を見てアスカは瞼を伏せ溜め息を漏らしてしまう。

「其処で引き下がってどうすんだよ……其処はもつとこう、何かあんだろ？その為にお前よりも強くなる！とか言つて啖呵を切るなりよ？」

「す、すみません……」

「いやだから……はあ……まあいいか……」

言った傍から素直に謝罪する男に呆れて再び溜め息が出てしまうアスカだが、今は話の続きを進めようと気を取り直す。

「まあ、なんであれやる気があんのは良い事だ。他のイレイザーになった連中は大抵、過去に失ったもんを取り戻そうとしたり、自分達を蔑ろにした今のこの世界の在り方が許せねえって私怨が理由の奴が多いが、そんなでお前みたいなの、失う前に守りたいからって理由の奴に出会ったのは俺も初めてだ。……だからまあ、お前ならもしかしたらって、ちつとぼつかしは期待してるよ」

「……そ、そつか……ありがとう」

もしや今のは彼なりの励ましのつもりなのか、不良っぽい見た目に反してそんな思わぬ言葉を投げ掛けたアスカからの激励に一瞬戸惑ったが、理解が追い付くと同時に男はぎこちなく礼を告げる。

そんな男をアスカはジト目で睨むと、そっぽを向いて軽く舌打ちし、後頭部を雑に搔いて先程自分が出てきた屋上の扉を顎で軽く指した。

「時間までやる事がないのなら、今の内に下で身体休めてろ。次の戦いはお前に掛かってんだ。お前が下手を打てば俺が責任取んなきゃなんねえってこと、忘れんなよっ」

「え、あ、ああ……わかった……」

突然乱暴な口調になるアスカに戸惑いつつ、言われた通り時間まで身体を休めておこうと一瞬アスカを一瞥した後、男は屋上を後にして下へ降りていった。

その背中を見送ると、アスカも気が抜けたように薄く溜め息を吐き、空を仰ぐように屋上の手摺に背中からもたれ掛かるが、其処へ……

「——相変わらずイレイザーの事情に入れ込むよねえ、君。そんなんじゃ身が持たないよって、前に警告したのもう忘れたかい？」

おちやらけた笑い声が何処からともなく響く。しかしアスカは動じる様子もなく、投げやりに虚空に向けて言葉を返した。

「別にそんなんじやねーよ。つか、盗み聞きなんて趣味の悪い事やってるお前が人の事を言えた義理じゃねえだろうが」

「ハハッ、それは確かに言えてるかもねえー」

アスカの隣の地面から、無数の水泡が湧き出て人の形を形成していく。そして水泡は徐々に完全な人の姿……クレンと化してアスカの隣に現れるが、アスカの方は特に驚く様子もなかった。ジトリとした目付きでクレンを睨んでいく。

「んで？急にきて何なんだよお前。こっちは前回の失敗を取り返せるかどうかって時でピリピリしてんの……水を差しにきたってんならわりとマジでキレるからな……？」

「お？僕が水属性だから水だけにつて？やだなー、案外余裕あんじやんこのこの〜」

「殺すぞマジで」

「恐つ。まあまあ、冗談言つたのは謝るからそう噛み付かないでよー。こつちはただ君達が緊張してないかなーと気になって、声援を送りに来たってだけさ。後はまあ、そうだなあ……ちよこつとだけ、君に僕からアドバイスを送ろうかと思つて」

「……アドバイスだあ？」

「?」、と頭の上に疑問符を浮かべるアスカに、クレンは軽く微笑みを浮かべて手摺に寄り掛かりながら光が灯り始める街並みを眺めていく。

「正直さ、あのイレイザー君を抱えたままクロスと装者を相手にするだなんて無茶無謀が過ぎると思うんだよ、僕は。クロス……蓮夜君は勿論の事、記号の力に目覚めた立花響は数々の戦いに文字通り、その手で終止符を打ってきたこの物語の主人公だ。他の装者達も僕らに対抗する術を持たないとは言え、それでも高を括るには油断ならない相手なのは変わりないしね」

「……………」

「或いは、次の戦いの中でまた装者の誰かが記号の力に目覚めないとも限らない……：うなつたら、流石に今の君だと危ないんじゃない？僕もそうだけど、君もまだ記憶を失くす前の彼との戦い以降、完全に力を取り戻せてる訳じゃないんだしさ」

グー、パーと調子を確かめるように、しかし戯けてるようにも見える仕草で手を何度も開閉させるクレン。アス力はそんなクレンの手の動きをジツと見つめると、薄い吐息を吐きながらクレンから視線を逸らした。

「ハンデを抱えてんのは向こうだって同じだろ……。仮にそうなつたとして、今の奴と装者達が束になって掛かってきた所で俺に敵う筈ねえ」

「君一人ならそりや、ね……でも、今回君と組むあのイレイザー君の場合はそうは行かないかもよ？前に君が選んだイレイザーも、立花響が記号の力に目覚めた途端手も足も出せず返り討ちに遭つたんだ。なら次もそうなるかもしれないと、最悪を想定するのは自然だろ？幾ら君が強いと言え、仮に装者達の中から新たに僕達に対抗出来る存在が現れ

た時、クロスと立花響を抑えながらあのレーザー君を守れると言い切れる自信があるのかい？」

「……それは……」

話が後半になるにつれて何処か真剣味を帯びていくクレンからの指摘に、アスカは口を閉ざして俯く。そうして自分の掌、男が出ていった屋上の扉を順に見て暫し思考する素振りを見せた後、屋上の手摺から徐に背を離してクレンと向き直った。

「……そんなに言うなら、何か上手い方法があるつてのかわよ」

「あるにはあるよ。まあでも、それに君が乗るかはまた別の話で……」

「前置きはいいんだよゴチャゴチャとつ。俺の意見なんかどうでもよくて、ハナっからテメエの案に俺を乗せるつもりで来たんだらうが」

「……ハハッ。そうだね。君相手に出し渋るだけ、時間の無駄にしかなんないか」



悪かったねと軽く謝り、クレンは徐に掌を上に向けてアスカの前に右手を差し出す。

すると、クレンの掌の上にデータ状の0と1の数字が無数に現れて何かを形作っている、淡い光を一瞬放った直後、光の中から半透明の一冊の本が現れた。

「それは……?」

「この『戦姫絶唱シンフォギア』とはまた別の物語……に繋がる、僕たち専用の裏口だ。コイツを使えば物語に僕達の存在が感知される事なく、この本の中の世界に転移する事が出来る」

「別の物語って……ようするに平行世界か? そういえば、デュレンの奴はお前に色々と役目を押し付けてたか……確か、この物語を中心に他の物語にもノイズ喰らいを送って、奴らにその物語の改竄をやらせるとかなんとか……」

「ここがもしダメだった時の為の保険って奴さ。今は取り敢えず新しいイレイザーを育

てる為の実験所つて意味合いの方が大きいけど、デュレンは機会を見てことは別に新しい拠点を置くつもりでいるみたいでね。その為にも今、あるイレイザーにこの物語の改竄をやらせてて……つて、今はそんな話どうでもいいか……」

何だか本題から逸れそうになったので軌道修正しつつ、クレンは半透明の本をアスカに手渡ししていくが、アスカは一先ず受け取った本をまじまじと眺めて訝しげに首を傾げた。

「で、コイツを俺にどうしろつてんだよ？こんな渡されたつて今の俺には大して意味ねえーし……まさか、奴らにやられそうになったらアイツを連れてこん中に逃げろとか言い出すんじゃないやねえだろうなっ？」

「逆だよ、逆。君達が、じゃなくて、彼等をその物語の中に飛ばしてしまえばいいって話  
「さ」

「………何だとっ？」

「アスカが訝しげに眉を顰める。クレンはそんなアスカに更に分かりやすく伝えようと、話を噛み砕いて説明を続けていく。」

「例えばの話だけどさ？記憶を失う前の彼が以前倒したイレイザーが改竄した物語……『魔法少女まどかマジカ』、だっけ？の主人公がこのシンフォギアの世界にいきなり現れたとして、その場合、彼女はこの物語にとって一体どういう扱いになると思う？」

「どういうつて……普通に考えりゃ異世界からの来訪者つて事になんだろ。俺達からしてみりゃ、厄介な敵が増えるだけの最悪のコラボにしかなんねえけど」

「そーだよねえ。でもこの場合、僕達にとつてはもつと別の観点から見れる部分もあるんだよ。例えば、そう……この時の彼女には、『元いた物語の監視の目つて奴が存在しない』のやい」

「？……ツ！そーか、つまり……」

クレンが言わんとしてる事を察したのか、アスカはハツとなって半透明の本を見つ

め、クレンも笑みを深めて小さく頷く。

「例えば献血とかでさう？自分の身体から流れた血が他人の身体に移ったとして、その血がその後どうなったかなんて自分じゃ分からないじゃない？……それと同じように、元いた物語から離れたキャラクターが別の物語に移り、仮に其処で存在が消滅した所で元の物語にそれが分かる術はない……つまり、このシンフォギアの世界から離れた装者が別の世界で殺されたとしても、この世界はそんなこと分かる筈ないんだよ。だって違う世界の中で起きた出来事だからね。寧ろその世界の本筋と関わりのないキャラクターなんて逆に異物でしかないんだから、消した所で罪を問われるなんてある筈がないのや」

そう、言わばこれは物語のルールの穴を突いた裏技のようなモノ。

このシンフォギアの物語の中で、その存在を赦されないイレイザーである自分達が不用意に装者を手に掛けてしまえば、それはこの物語の本来の流れを阻む大きな矛盾・違和感を生じさせる大罪になってしまう。

当然だ。『戦姫絶唱シンフォギア』の物語にイレイザーなんて存在はそもそも現れないし、いない筈の存在に装者達が命を奪われるなど物語として破綻してるにも程がある。

物語として破綻すれば、この世界の未来の可能性は全て行き詰まり、遠からず世界にはあらゆる形で理不尽な滅びが迫り、最終的にBAD ENDという最悪な形で終焉を迎える事になってしまう。

故に世界はそんな最悪の事態を避ける為にその矛盾を一つずつ修正しようと、真つ先に一番の矛盾であるイレイザーの自分達を抹消しようとする筈だ。

デュレンはともかく、自分達にはそれに抗うだけの術をまだ持たない。一度この世界の“目”に認識されれば、抵抗する間もなく物語の外に弾き出されるか、その存在を抹消されて完全に消え去るしかない。

要するに『世界』という強大な存在の監視の目が光るこの物語の中で、自分達が装者を殺めるには返って来るリスクがあまりに大き過ぎるのだ。

……しかし、その監視の目が届かない外の世界で装者達が命を落としたとしたら？

シンフォギアも装者もノイズも、そもそも『戦姫絶唱シンフォギア』のキャラクターが存在しない、全くルールの異なる別の物語へ装者達を跳ばしてしまえば、仮に其処で彼女達の命を奪ったとしても咎める者など誰も存在しない。

物語が違えばその世界に敷かれるルールも異なる以上、その世界の住人ではない彼女達がどうなろうと、跳ばされた先の物語にとっては彼女達の死など些事にしかならない筈だ。

「つまり、この世界の監視の目が届かない別世界にクロスの野郎と立花響を飛ばして、其処で奴らの息の根を止めりゃいいって事か……けど、ホントに大丈夫なのかよそれ？あのガキは仮にもこの物語の主人公だ。主役の不在なんて異変、この物語が見逃すとは到底思えねえんだが……」

「まあ、多少の違和感程度は勘付かれても可笑しくはないかもね……けど、それだけです

ぐに僕達の仕業だとは思われないだろうさ。それにこの世界は、装者が一人欠けるだけでも物語の破綻は少しずつ進んでいく。そうなれば僕達が改竄を行える隙も作れるって訳さ」

「……それで次の改竄が行えるまでのスパンを短く出来る、って事か……確かにそいつは俺がやらなきゃ、だわな……」

何せ暫く改竄の力が使えなくなってしまったのは前回の自分の失敗のせいだ。それを取り返す事が出来るなら確かにやってみる価値はあると、アスカは半透明の本を手を頷いた。

「いいぜ、乗ってやるよその話。どうせ奴らを野放しにしておく訳にはいかねえんだ。二人纏めて始末出来るってんなら、確かにやってみる価値はある……」

「そう言ってくれて助かるよ。んじゃ、僕は別の仕事があるから、後は任せたよ?」

アスカが自分の案に乗った事に機嫌を良くしたクレンは彼の肩をポンポンと軽く叩

き、そのまま屋上を後にしようと扉の方へと歩き出していく。が……

「……………んで、なんでいきなりこんな話を俺に持ち掛けた？ わざわざ俺を手助けする為に……なんて殊勝な心掛けからじゃねーだろ、お前？」

「……………」

まるで何かを見透かしているかのようなそんな疑問を投げ掛けるアスカからの不意の問いに、クレンは足を止めて立ち止まる。そうして数拍を置いて無言になった後、アスカの方へと振り返って僅かに微笑んだ。

「別に君を貶めるような考えなんてないから安心していいよ。……………ただちよつと、個人的に気掛かりな事があってね……………」

「気掛かり……………？ なんだよそれ」

「それは判ってから話すよ。ともかく君はデュレンの機嫌を損ねないように頑張る事



だ。じゃ、期待してるよ？」

「お、おい！」

そう言いながらクレンは呼び止めるアスカの声を背に手を振って屋上を後にしていき、残されたアスカは「何なんだよ……」と不服そうに呟きながら彼を引き留めようと伸ばした手で後頭部をワシワシと掻き、彼から渡された半透明の本をただただジツと眺めていくのであった。



—クリス宅—

「——クツソツ！何なんだよアイツはっ……！！」

ボフンツ！と、苛立ちを露わに自宅に戻ったクリスが思わず投げ付けたカバンが、リビングのソファアーの上のクッションに深く埋まる。

そのまま下へ下へとずり落ちてソファアーの下に滑り落ちてしまうカバンを尻目に、クリスは部屋の電気も付けぬまま構わずソファアーの上に飛び込み、両腕を頭の後ろに回して仰向けに寝っ転がるが、その顔には未だ抑えようのない苛立ちの色が浮き出していた。

（馬鹿にしやがって……何処まで人を下に見りや気が済むんだ……！）

あの後、蓮夜が何気なく口にしたあの発言をきっかけに怒りが爆発したクリスは慌てて追いかけてきた響達の声にも耳を傾けず、結局そのまま本部を後にして帰路につき自宅にまで戻ってきてしまった。

家に着いた頃には時刻は既に夜になり、本部を飛び出してからそれなりに時間が経っているにも関わらず怒りは未だ治まる気配がなく、ムシヤクシヤするあまり頭の下に敷かれたクッションを掴んで起き上がり思わず投げ付けてしまいそうになるが、すんでの所で手を止めて思い留まり、そのまま膝の上にクッションを乗せて項垂れるように顔を

埋めてしまう。

「……何やってんだ、あたしは……ダサ過ぎにも程があんだろっ……」

ふと我に返り、今の自分の姿を顧みたクリスは膝の上に乗せたクツションに顔を埋めたまま、自己嫌悪のあまり深々と嘆息を吐いてしまう。

……そうだ、分かっている。先程のシユミレーションを始める前のやり取りだって、元を辿れば自分の一方的な感情から勝手に突っかかっただけだし、それを知らない蓮夜からすれば、わざわざこちらの都合に付き合う義理なんてないに決まっている。

だからこの怒りだって本当は筋違いでしかないし、それを蓮夜にぶつけるなんて理に叶っていないと頭では分かっている。なのに……

（理屈じゃ分かっていたんだ、そんなの……けど、それでもどうしても、アイツを認めるのが癪に障り過ぎるんだよっ……）

今までこの世界を必死に守ってきたのは自分やその仲間達だ。なのにそれをいきなり後から出てきた余所者に委ねるなど認められる筈がないし、自分達にはイレイザーと戦う力がないからと、一度は自分達との共闘を蹴った奴と肩を並べて戦うなんて今更虫が良すぎるといふ我ながら器の小さい考えが拭えず、どうしても抵抗感を覚えてしまふ。それに何より……

(……イレイザーがこの世界を改竄した時、一人きりで苦しんでたあのバカを救ったのはアイツだった……あたしじゃなくて……アイツが……)

嘗ては嫌いだった歌を今一度好きになる事が出来たのも、多くの仲間や信頼出来る大人に囲まれる今の幸せな日々を送れるようになったのも、全ては響が敵だった自分に手を伸ばしてくれた事がきっかけだった。

素直に認めるのは正直癪だし、本人の前で口にすれば絶対に調子に乗ると分かり切っているから決して口にはしないが、今の自分があるのは彼女の存在があったからだとも今でも思う。

……なのに、そんな彼女の危機に自分は何も出来ず、知らず知らずの内に事態の解決を蓮夜に任せるしかなかった。

それが何よりも悔しく、腹立たしく、情けなく、仲間を助ける力を持たない無力な自分が嫌で嫌で仕方がないという負の感情が際限なく沸き出てくる。

そんな自分とは対照に、仮面ライダーの力を持ち、彼女を救ってみせた蓮夜への羨望、そして醜い嫉妬の感情も……

（何が本気であたしと戦え、だ……そもそも最初から勝負になんてなる筈ねえのに……見てらんないのは今のあたしの有り様じゃねえか……）

今の自分のみっともなさを自覚した途端、ただでさえ重くのし掛かる自己嫌悪の感情が更に重さを増していく。クツションに埋めた顔を何気なく横にそらすと、ソファアの後ろに置かれている両親の仏壇がふと視界に入った。

「……分かってる。あたしはあたしがやれる事をやるしかないんだって……分かってる

筈なのに、な……」

きつと自分を見守ってくれているであろう両親を心配させまいと仏壇に微笑み掛けようとするも、そんな気力も余力もないのかぎこちない笑みを作る事しか出来ない。

ろくに笑う事も出来ない今の自分の有り様にクリスは更に思い詰めた表情を浮かべ、そんな顔を隠すように再びクツシヨンに顔を深く埋めてしまい、暗がりの静寂中、部屋の壁に立て掛けられた時計の針が進む音だけが虚しく響いていた。



— S. O. N. G. 本部・食堂 —

一方、それなりに夜も更けてきた時刻にも関わず S. O. N. G. の本部では職員達が未だ忙しなく動き回る姿が多く見られ、食堂には自宅や寮にも帰らず本部に泊まつ

てまで残った仕事を片付ける予定の職員が同僚と共に食事をする者も何人か見受けられる。そんな中に……

「」

……ズウーンツと、傍から見るとそんな重々しい擬音が聞こえてきそうなほど酷く落ち込んだ様子の蓮夜が、食堂のテーブルの上に顔を突っ伏す姿があったのだった。

どんよりしてる、とでも言えればいいのか、彼の周りの空気だけが淀んでいてただならぬ落ち込みようだ。

職員達もそんな蓮夜の姿が気になるのか、チラチラと近くを通り掛かる間際に彼を気にするような視線を送るも、あまりにも重い空気を漂わせる蓮夜の様子に気を遣って声を掛ける者は一向に現れない。

そんな周囲の人間の反応に気付かぬまま、蓮夜は突っ伏した顔を横に向けて溜息を漏らし、テーブルのシミをジッと見つめながら先程のクリスの言葉を脳裏に思い返してい

た。

—あたしは最初に手え抜くなって言ったハズだぞっ！始めっからあたしなんかと、まともにやり合う気なんてなかったってのかつ?!—

(……また言葉選びを間違えてしまった……一体何度同じ失敗を繰り返せば気が済むんだ、俺は……)

別れ際に彼女に吐き捨てられた言葉が未だに頭の裏にこびり付いて離れず、またやらかしてしまったと、蓮夜は鬱々とした気分から再び溜め息を漏らしてしまう。

あの時は彼女の不興を買うつもりなどなかったし、彼女に手を差し伸べたのも単純に身を案じてからのものだった。

しかし、彼女は自分と本気で戦う事を望んでた。理由は分からないがそれが彼女の希望だったのだとしたら、最後に自分が掛けた『ガングニールの力を使う気はなかった』などという言葉は余計な一言で、自分と真っ向から戦う事を望んでいた彼女からしてみれば



ば始めから手を抜いて戦うつもりだったと受け取られても無理からぬ事だ。

嗚呼、これでは初めて彼女達と面面向かって話した時の焼き直しではないか。相手に気を遣い過ぎるあまり下手な発言や態度を取り、不興を買ってしまう自分の至らなさに嫌気が差す。

因みにそんな自分の心境を察していたかのように、つい先程学生寮にいる響から自分の端末に『クリスちゃんには私達の方からフォローしておきます！蓮夜さんは気にしないで大丈夫ですから！』とメールで一報が入っていた。

恐らくこの間の改竄事件の際に、公園で己の愛想の無さを気にしていると話したのを律儀に覚えていて気を遣ってくれたのだろう。その心遣いは嬉しいが、同時にそんな気遣いを響にさせている自分が余計に情けなく思える。

(やはり明日にでも俺の方から謝罪を……いやそもそも、昨日の今日で俺とまともに口を効いてくれるかどうか……)

す。  
クリスとシユミレーションを始める直前に、彼女が自分に向けていたあの目を思い出す。

今思うと、あれは恐らく未だに自分の事を信用し切れていない、受け入れる事が出来ていないという眼差しだ。

以前響から聞かされた話からクリスが自分を快くは思っていないだろうとは何となく察しは付いていたが、今回の件をきっかけにそんな彼女の感情に余計な拍車を掛けてしまったとしたら、謝罪以前に果たして自分とまともに口を効いてくれるかどうか……。

どんどん深まる自己嫌悪の沼から一向に抜け出せないあまり自信までなくなってきた、蓮夜が何度目か分からない溜め息を吐いて頭を悩ませてしまう中、其処へ……

「——あつたかいもの、どうぞ」

「……………え」

コトツと、不意にテーブルの上に何かが置かれたような振動と共にそんな一言が聞こえた。驚きと共に思わず顔を上げると、其処にはS・O・N・Gの制服を纏う二人組の男女……オペレーター組の友里あおいと藤堯朔也がそれぞれ湯気立つコーヒーカップを手にして立つ姿があり、テーブルに突っ伏す自分の顔の横にも、二人が手にしているのと同じコーヒーカップが置かれていた。

「コーヒー……ええつと、確か……」

「発令所の方では何度か顔を合わせてましたよね。オペレーターを担当してる友里あおいです。それでこっちが……」

「同じくオペレーター、情報処理を担当してる藤堯朔也です。……何か大分参ってるよ  
うな感じだけど、大丈夫？」

「え……あ、ああ、大丈夫だ、心配いらぬ……コーヒー、どうも……」

姿勢を正し、わざわざ容れてくれたコーヒーのカップを手に取って二人に軽く会釈する蓮夜。すると二人も蓮夜の近くの席に着き、友里が蓮夜の顔を見つめながら小首を傾げる。

「大丈夫、という割には顔色の具合が優れませんけど……もしかして、さっきのクリスマスちゃんのこと、まだ気にしています？」

「う……」

「あー、こりや当たりつぼいかなあ……」

わりと分かりやすく声に出して反応する蓮夜を見て、藤堯も思わず出た苦笑いが隠せずにいる。と其処へ……

「まあ、アレは恐らくクリスマス君なりの対抗意識って奴だ。君が其処まで気に病む必要はないだろう」

「……………風鳴司令」

友里と藤堯に続き、今度は二人と同様、その手に湯気が昇るコーヒーカップを手にした弦十郎が蓮夜達の座るテーブルへやって来た。

思わぬ人物の立て続けの登場に蓮夜も意外な目を向ける中、友里が席を譲ろうか一度立ち上がり掛けるが、弦十郎はそれを手で制して蓮夜から斜め左に見える位置の席に着いていき、コーヒーを一口飲んで口内の渴きを潤し、話を続けていく。

「普段はあんな言動で分かりづらいつらいとは思いますが、彼女はああ見えて責任感が強く、後輩想いな一面があつてな。年長組である翼やマリア君がこちらにいない今、自分が先輩としてしっかりしなければならぬと神経質に陥りやすい節がある。其処ヘイレイザーやマスクドライバーである君の出現、改竄事件などの思わぬ事態が立て続けに起きて尚更責任を負いがちになつてるのやもしれん」

「……………責任……………仲間を想うが故、か……………」

言われてみれば、先程自分と戦っていた時のクリスは以前に比べて何処か余裕が無さそうに思えた。てつきり今日はたまたま虫の居所が悪かったのか、或いは自分を快く思わないあまりそれが今日の戦いに出ていたのではないかと思つたが、元々の責任感の強さが前のめりに出ていたのだとしたらあまり好ましい状態ではないのかもしれない。

何れにせよその要因が自分にもあるのだとすれば、やはり一言謝罪をすべきか？……いやしかし、自分が不用意に出しゃばれば逆にそれが彼女に余計なストレスを与えてしまふのではないか？

考えれば考えるほどグルグルと思考が負のスパイラルに陥つて答えを見い出せず、蓮夜は悩むあまりコーヒーカップを両手で包んだまま「ぐう……」と力なく項垂れてしまひ、三人はそんな蓮夜の様子が気になり心配そうに顔を見合わせ、此処は話題を切り替えた方が良さそうだと弦十郎が蓮夜に向けて口を開いた。

「ところで、シュミレーション後の身体の調子はどうか？約一週間振りの戦闘だったと思うが、何処か身体に不調を感じたりなどはしなかつたか？」

「?……ああ、それなら問題ない……傷はまだ所々残ってはいるが、それほど大した物でもないし、戦闘中に激しく動いても痛みが走るといった事もなかった……戦闘での動きのキレも以前とは変わりなかったし、次に出撃があれば俺も出られると思う……」

「ふむ、そうか……」

「でも、未だに信じられないわよね。全治数ヶ月と聞かされてた怪我がたったの一週間で此処まで治るだなんて……本当にあのベルトとカードにそんな力があるのかしら……?」

「他の人間がベルトを巻いても、そういった効果は見受けられなかったって報告書にも書いてましたよね?他は駄目なのに蓮夜君だけがそうなるなんて、何か特別な仕掛けがあったりとかするのかな……」

「それは……ううむ……」

「……………」

蓮夜の驚異的な治癒能力の正体が本当に彼の持つベルトやカードによるものなのか。首を捻る友里と藤堯からの指摘に対して自分でも力の全容が分かっていない蓮夜も明確な答えが返せず言い淀む中、無言で三人の話を聞く弦十郎は顔を俯かせて一週間前にエルフナインと話した内容……レントゲンで撮影した蓮夜の身体の謎について思い出ししていく。

『——正直、この件はまだ不明瞭な部分も多々ありますので、不用意に本人に告げるのはあまり好ましくないとします。下手に記憶の核心を突いて不完全な記憶を取り戻せば、却って蓮夜さんがその記憶に苦しめられてしまう可能性もありますし……何より、その記憶を取り戻す事が果たして蓮夜さんの為になるのか、僕にも判断が出来ませんから……』

(……人工的に手を加えられた強靱な肉体……それが彼の驚異的な身体能力と治癒能力に由来しているとすれば確かに納得だが、同時に疑問も残る……彼はいつ、何処でそんな非人道的な手術を受けたのか……)



それに、調べた限りでは彼の改造手術は脳にまで深く及んでいるとの事。エルフナインの見解では其処まで手を加えられていては普通の人間なら先ず生きていられる筈がないと断言していたが、ならば、目の前にいる彼は何故こうして普通にしていられるのか。

友里と藤堯と会話を交わす蓮夜を遠巻きに見つめながら尽きない疑問が胸中を占めるが、今持つ少ない情報量だけではそれを紐解く事は叶わない。なら……

「……ベルトやカードの件もそうだが、蓮夜君、記憶の調子はどうだ？新しい生活で心機一転、環境も変わり身も心も落ち着いてきたとは思うが、何か些細な事でも思い出せるようにはなつたかね？」

今は彼から記憶に関する情報を少しでも集め、その内容次第では、記憶を取り戻す協力をすべきか否かの判断を考えねばならないかもしれない。当たり障りのない話題を振り、蓮夜が今何処まで記憶を取り戻しているのか確認も兼ねてそう問い掛ける弦十郎に対し、蓮夜は……

「あ、いや……記憶は一向に蘇る気配はないんだ……ただ、新生活の方は少々ままならな  
いというか……トラブルを起こし過ぎてちよつと……ウン……」

「「……？」」

そう言つて、とてもいたたまれなさそうに冷や汗を流しながら弦十郎達から目を逸ら  
す蓮夜を見て三人は訝しげな顔で首を傾げる。

もしや、新しい入居先で何か問題でもあったのだろうか？もごもごと言葉を濁す蓮夜  
の様子からそう思い、もう少し話を掘り下げようと弦十郎が蓮夜に次の質問を投げ掛け  
ようとしたその時、艦内に突如けたたましいアラートが鳴り響いた。

「ツ?!これは……!」

『——市街区にノイズの反応を検知!位置は第17区域、南西CポイントとNポイント  
!数は現在50から70、更に増え続けている模様!総員、速やかに配置に——』

「ノイズ?!まさか!」

「……………イレイザーか……………」

警報と共に艦内に流れる放送からノイズの出現、即ちイレイザーの襲撃を瞬時に悟った蓮夜はすぐさま食堂を飛び出して自身のマシンが収容されてる格納庫に向かい、弦十郎達も互いに顔を見合わせて頷き、急いで発令所へと走り出していくのであった。

## 第五章／不協和音×BANG BANG GIRLの憂鬱

④

—第17区域・南西Cポイント—

「う、うわあああああッ?！」

「た、助け——ギヤアアッ?！」

S・O・N・Gがノイズ出現の反応を検知した南西の二つのポイントの内の一つ、南西Cポイントでは突如街中に現れた無数のノイズで溢れ返り、偶然その場に居合わせた市民達が容赦なく襲われるという阿鼻叫喚の地獄絵図と化していた。

逃げ惑う人々がノイズに背後から襲われて共に炭素となり、道の至る所に人だったモノの炭素の塊が辺り一面に散乱していく。

そんな凄惨な惨状を、アスカと二手に別れてノイズ達の殺戮の一部始終を傍らで眺めるイレイザーの男は瞳を震わせ、青ざめた顔を浮かべていた。

(これが、俺の役目……覚悟もしてたし、予想もある程度してたハズなのに……いざ目の前にすると、こんなにもっ……)

自分の目的の為に他の誰かの命を奪い、殺める。イレイザーになると決心したあの瞬間からその覚悟をとうに決め、腹も括ったつもりだった。

が、いざその瞬間を前にすると想像を遥かに上回る惨劇に目の前の視界が揺らぎ、人間だった物の炭素の塵が目の前を舞い散るだけで腹の奥から何かがせり上がり、口から吐き出しそうになるものを手の甲で抑えて必死に堪える。

人を初めて殺める感覚とは、こんなにも凄まじい不快感が生じるものなのか。自分には一生縁のない物だと思っていた様々な感情の波が一気に押し寄せ、いたたまれない罪の意識にすり潰されそうになり、たまらず涙が滲む。

『——あなたたつて昔から争い事に向いてないつていうか、優し過ぎるのよ。人を傷付けるような事、口ですら一度も言った事ないでしょ?』

——何時だつたか昔、”彼女”に笑いながらそんな事を言われたのをふと思い出す。

ああそうだと。争い事なんて本当は嫌いだし、ない方がいいに決まつてる。傷付け合わなくて済む方法があるのならそっちを取りたいと、人の身を捨て去つた今だって、心の何処かでそんな想いを捨て切れずにいる自分がいるのも確かだ。

……でも、ダメだ。それだけでは、思うだけでは守れない物があると知ってしまった今、こんな事で足が竦んでいては望みは果たせない。

(もう後戻りは出来ないんだ……俺はもう人の道を踏み外した……! 此処までやった以上、もうやり遂げるしかないっ!)

罪の意識から訴え掛ける呵責を振り払うように涙を拭い、男は獣の如く雄叫びを上げ

てその身を徐々に異形の肉体へと変質させていく。

そして男は灰色の羊の異形……シープレイザーと化して自身も動き出し、ノイズ達に混じって逃げ遅れた民間人の一人の男の肩を背後から掴み、強引に建物の壁に押し付けながら拳を振りかざした。

「ひ、ひいいいいいっ!! た、助けてっ——!!」

『うっ……ッ……ウ、アアアアアアアアアアアアアアッ!!』

泣きながら助けを乞う民間人の男の顔を見て、思わず振りかざした拳を止め躊躇してしまうシープレイザーだが、此処でやらねば自分の望みは果たされないと自分自身に強く言い聞かせ、悲痛にも聞こえる雄叫びを上げながら今度こそ民間人の男の頭に目掛け拳を振り下ろそうとした、その時……

「Balwisyall Nescell gungnir tron……」

『……?!』

捕えた民間人の男の頭が砕かれ、トマトの如く鮮血が辺り一面に撒き散らされようとした寸前、不意に何処からともなく美しい歌が聞こえた。

それを聞いたシープレイザーが振り下ろした拳を民間人の男の顔の前でギリギリで止め、歌が聞こえてきた方へと振り返ると、其処にはノイズ達の群れの向こうから橙色、桃色、緑色の光の煌めきが見え、直後にノイズの何体が空へと吹き飛び、切り刻まれて塵となり霧散していく光景が視界に飛び込んできた。

『な、何だ……?!』

「——うおおりやああああああああああああああっ!!!」

消し飛ばされるノイズ達を見てシープレイザーが驚倒する中、ノイズ達の群れの向



こうから烈々たる雄叫びが響き、反射的に身体をビクつかせてしまう。

その声を頼りに目をよく凝らして見れば、ノイズ達の群れの向こうに鋭い拳と蹴りを駆使してノイズを打ち負かすマフラーを靡かせた栗色の髪の少女と、巨大な鎌を横薙ぎに振るいノイズ達を纏めて始末する金髪の少女、そしてツインテールに纏う装甲から無数の小型の鋸を飛ばしてノイズ達を切り刻んでいく黒髪の少女……S. O. N. G. からの知らせを聞いて急ぎ現場に駆け付けた響、切歌、調の三人の姿を捉えた。

一人一人が一気呵成の勢いで無数のノイズ達を蹴散らしていく無双ぶり。そんな響達の姿を目の当たりにし、シープイレイザーは作戦開始の前にアスカから説明された自分が戦う相手について思い出していく。

『歌と共に戦う戦姫……あれがシンフォギアなのか……？あんな、子供が……?!』

「う、うわっ！ひいいいいっ！」

つまりはあれが今回、自分が戦わなければならない相手。クロスと共に自分達の障害

となるその存在については予め聞かされてはいたが、まさかその正体がまだ年端もいかぬ少女達だとまでは知らされていなかったのか、シープライレイザーは響達を見て衝撃を受けたかのように呆然と佇み、壁に押し付けていた民間人の男の胸ぐらから手を離してそのまま逃がしてしまう。

そんな中、襲い来るノイズ達を次々と蹴散らしていた響がシープライレイザーを発見し、ヘッドギアから本部に通信で呼び掛けた。

「師匠、赤眼のイレイザー！ノイズイーターを見付けました！やっぱりノイズの発生と関わりがあつたみたいです！」

『やはりか……！響君はそのままノイズイーターとの戦闘に入ってくれ！切歌君と調君は周辺のノイズを掃討しつつ、響君の援護を頼む！』

「了解！」

「悔しいデスけど、今のアタシ達じゃイレイザーとは戦えないデスからね……響さん、援

護は任せて欲しいデス！」

「うん、背中はお願ひ！ハアアアアアッ！」

本部にいる弦十郎からの指示を受け、響は切歌と調の助力を借りながらシープレイザーの下に辿り着くまでの経路を塞ぐノイズ達を殴り飛ばし、持ち前の突貫力を活かして先へ先へと突き進んでいく。

そんな響の怒涛の進撃を阻止しようと周りのノイズ達も響の背後や死角から一斉に飛び掛かろうとするも、後方からの切歌と調が即座に放った鎌の刃と小型の鋸がそれを阻み、ノイズ達の身体を引き裂き霧散させる。

そして響も二人を信じて一切振り返る事なく眼前のノイズ達を尽く薙ぎ倒して群れを容易く突破し、未だに響達を見つめて呆然と佇むシープレイザーと対峙すると、其処でシープレイザーも漸く我に返り、慌てて両脇を締め拳を身構えた。

「貴方が今回の騒動を引き起こしたレイザーさんですよね……？どうしてこんな事を

したのか、貴方の目的と理由を教えてください！」

『う、ううつ……（こ、こんな子供とも戦うのか……？やれるのか、俺に……?!』

目的を問い質そうとする響の呼び掛けに耳を傾ける余裕がない。先程初めて誰かを手に掛けようとした際も相当な覚悟を決めなければならなかったというのに、今度はこんな子供とも戦わなければならないなど、ただでさえ争い事に向いてない性格のシープレイザーからしてみれば戦い辛いにも程がある。しかし……

『（ツ……でも、それでもやるしかないっ！）う、うわあああああああああああああああ  
あああツ!!』

「え、ちょ、ちょつと待つ……?!うわわっ?!」

例えば女子供が相手であろうと、立ち塞がる以上戦うしかない。今度こそ腹を括つてそう決心したシープレイザーはがむしゃらに両腕を振るい響へと挑み掛かり、響もいきなり襲ってきたシープレイザーの攻撃を慌てて回避しながら背後に飛び退くと、再度

迫るシープレイヤーに向けて身構え戦闘を開始していくのであった。



—第17区域・南西Nポイント—

『ハアツ……！ハツ！』

一方その頃、響達が駆け付けたCポイントとは別にノイズが出現したNポイントの公園でも、民間人がいきなり出現したノイズ達に襲われて逃げ惑う混乱状態に陥っている。

其処へ蒼いマシン……クロスライダーに乗って現場に駆け付けたクロスに変身する蓮夜が逃げる人々を執拗に追うノイズの大群の進行を一人で食い止め、民間人の避難と救助に奮闘する中、本部から藤堯と友里の通信が届く。

『本部からクロスへ！敵イレイザーを南西Cポイントにて確認！』

『現在 GANG ニール、イガリマ、シウルシャガナが戦闘中です！』

『ツ！こっちは外れか……！しかし、何故わざわざ別々の場所にノイズを……？「きゃあ  
あああツ!!」……?!』

敵の意図が読めない。戦力を分断させてまで、何故別々のポイントにノイズを展開したのか敵の狙いが分からず困惑するクロスだが、耳を劈くような悲鳴が聞こえて慌てて振り返る。

すると其処には、カップルと思わしき二人組の男女が三体のノイズ達に囲まれて逃げ場を失い追い込まれる姿があり、ノイズの一体が怯える二人に飛び掛かろうとした瞬間、其処へクロスが素早く三体のノイズの背後から蒼光を纏った右脚を振るって飛び掛かり、鋭い回し蹴りでノイズ達を纏めて蹴り裂いた。

「ひいつー！……え？だ、誰……？」

『誰でもいい……！早く此处から離れるんだ！急げ！』

「え、あ、は、はいっ！」

動揺と困惑を露わにしながらも領き、二人の男女は慌てて公園の出口に向かって走り出していく。クロスはそれを見送る余裕もなく逃げ惑う人々を襲うノイズ達に突っ込んで殴り飛ばし、蹴り碎いて一体ずつ撃破していくが、倒しても倒しても湧いてくるノイズの数を見て思わず舌打ちしてしまう。

『（響達の下へ駆け付けようにもノイズの数が多い……！逃げ遅れた民間人がまだこれだけ残ってる以上放っておく訳にはいかないが、かと言って彼等を守りながらこの数は……！）』

『Code slash……Clear!』

幾ら数が多かろうと所詮烏合の衆でしかないノイズを相手にするだけなら大した問題ではないが、如何せん未だ多くの民間人が逃げ遅れているこの状況下ではノイズの殲滅に専念する事が出来ない。

バツクルにカードをセットしタイプスラッシュにその身を変化させ、素早い軌道ですれ違い様にノイズ達を斬り裂いてそのまま攻勢に出ようとするが、視界の端でまた別の民間人が襲われようとしている姿を捉えてすぐさま救出に向かい、走り出していく。

『(ツ……俺だけでは手が回らないっ……せめてあと一人、ノイズを引き付けてくれる戦力があれば——!)』

「Killlitter Ichhainival tron……」

『……この歌は……』



民間人を守る事に精一杯で内心焦りを浮かべ中、空から不意に聞き覚えのある歌声が響き渡った。

その歌に釣られるように空を見上げれば、其処には公園の遥か上空で停空するS・O・N・Gのヘリコプターから一筋の赤い光が落下して来る光景があり、弾けるように霧散した光の中から赤いギアを身に纏ったクリスが現れたのだ。

そしてクリスは落下しながら眼下に広がるノイズの大群に向けて両手に構えたクロスボウから無数の光の矢を乱れ打ち、雨の如く降り注ぐ紅の矢がノイズ達をあっという間に一掃していった。

『赤い銃使い……！イチイバルか！』

『イチイバル、Nポイントに到着！』

『クリス君、そちらはまだ民間人の避難誘導が完了していない！蓮夜君と協力し、出来る限りノイズを引き付けてくれ！』

「分かつてる！ウオラアアアッ！」

言われるまでもないと、クリスは本部からの指示に短く答えながら両手のクロスボウを構え直して光の矢を再び乱射していき、周囲のノイズ達を次々と矢で撃ち抜き撃破していく。

それを目にした他のノイズ達もクリスを危険対象と認識したのか、民間人の殺戮を中断して一斉にクリスへと標的を変えて押し寄せていき、中には身体を紐状のように変質して特攻するノイズもいるが、クリスは冷静に身を翻してノイズの特攻の初撃をかわしつつ、更に続け様に突っ込んできた別のノイズを回し蹴りだけで蹴り飛ばし粉碎した。

そして四方から迫るノイズの大群に向けて両手のクロスボウを左右一直線に構えながら引き金を引き、銃撃を放ちながら360度回転して光の矢をばら撒き、射線上のノイズ達を薙ぎ払っていく。

『やはり凄まじいな……………これなら……………！』

まるで赤子の手をひねるかのように次々とノイズを簡単に撃破するその戦いぶりに感心する。ともかくクリスが来てくれた事で状況が好転した。これなら彼女にノイズの相手を任せて逃げ遅れた人々の救助に専念出来ると、クロスもノイズ達の相手を彼女に任せて民間人の避難を手助けする為に動き出す。

そして、ノイズを引き付けるクロスもクロスボウから大型ガトリングガンに切り替えた得物から弾丸を乱れ打ちノイズを迅速に撃破していくが、あちらもこのままでは分が悪いと踏んだのか、他のノイズ達は突如紐状にその姿を変質しながら一箇所が集まって巨大な塊となり、更に形状を変容させて巨大なノイズへとその身を変貌させていった。

「ちっ、束になりがった……！だがそんなもんでえッ！」

無数のノイズの集合体である巨大ノイズが巨腕を振るいクリスに襲い掛かる。しかしクリスも怯む事なくその場から跳躍し巨腕の一撃を回避すると、巨大ノイズの腕を踏み台にして更に空高く舞い上がり、両手の大型ガトリングガンを瞬時に変容、連結してロングボウの形状に変形させながら、ミサイルを思わせる矢を弓に番わせ、巨大ノイズ

の頭に狙いを定めていく。

「コイツで、ぶち抜けえええッ!!」

—ARTHEMIS SPIRAL—

クリスの手から放たれた矢が、まるで流星の如く赤い閃光となって空を駆け抜ける。そして、矢の先端の形状が独りでにロケットの弾頭のように展開、末矧部分が変形してスラストーとなり、火を吹いて猛スピードで加速しながら巨大ノイズの頭を凄まじい貫通力で撃ち貫いていったのだった。

頭に巨大な風穴を空け、その巨体が塵となり崩れ落ちていく巨大ノイズの撃退、そして周囲に他に残敵がないのを肉眼で確認したクリスは地上に降りて一先ず軽く一息を吐くと、其処へ民間人の救助と避難を終え、通常形態に戻ったクロスがクリスの下へと駆け寄っていく。

『すまない、助かった。俺一人じゃ現場をフォローし切れなかったし、おかげで民間人に

余計な犠牲が出ずに済んだ』

「……………」

ノイズを引き付け、民間人の避難に協力してくれたクリスマスに感謝の言葉を掛けるクロス。だがクリスマスは険しい顔付きでクロスを一瞥するも、すぐに視線を逸らして何も言わず背中を向けてしまい、そんなクリスマの様子からやはり先のシユミレーションでの一件を引きずっているのだろうと察したクロスは気まぎれに俯き、何か言葉を掛けようと口を開き掛けるが、その時……

「——やっぱノイズ程度じゃ糞の役にも立たねえか……まあでも、お前らを釣り上げてくれたってだけでも上々かね」

『……………ツ?!』

不意に背後から溜め息混じりの声が響き、二人は反射的に拳と銃を構えながら咄嗟に振り返る。すると其処には、木の影からゆつくりと金髪の青年……アスカが姿を現すのが見え、クロスは仮面の下で驚愕の表情を浮かべた。

『お前は……?!』

「よお、暫くぶりだなクロス。まさかホントに生きてたとはな……こうして直接テメエの顔を見ると、改めて自分の間抜けさに腹が立ってくるぜ……」

「?何だ、知ってる顔なのかよ……?」

『ツ……前にも話した、響の記憶を改竄した事件の際に俺が戦った上級レイザー……さっきのノイズを操る黒幕の一味の一人だ……!』

「ツ?!コイツが……?!」

つまりこの男こそ、自分達の世界に再びノイズの脅威を齎した元凶の一人であるとい

うこと。嘗て自分達が死にも狂いで終わらせた事件を掘り返すような真似をしているのが目の前の男だと聞かされ、クリスは驚きと同時に湧き上がる怒りを露わに両手のクロスボウの銃口をアスカに突き付けるが、アスカはクロスの隣に立つクリスを見て軽く舌打ちした。

「んだよ、立花響じゃねーのか……チツ、いきなり外れを引くとは幸先の悪いスタートだなあ、オイ……」

「なっ……ふざけんなっ！誰が外れだッ!!」

「吠えるなよ。こちとらテメーなんぞにハナから用はねえんだ。俺が用事があんのはお前のお友達と……其処にいるいけ好かねえ仮面の野郎だけだ」

『ツ……』

ギロツと向けられた瞳に宿る重苦しい殺気が、クロスの全身に突き刺さる。無意識に流れる冷や汗が額を伝い、手の汗が滲み出る。ただ睨まれただけで以前の戦い……否、

そもそも戦いとすら呼べなかった一方的な蹂躪の記憶を身体が思い出して圧倒されるクロスの反応を他所に、アスカは一步前へ踏み出てその身から火の粉を撒き散らしていく。

「本当ならテメエと立花響を一気に釣り上げれば無駄な手間も減って助かったんだがな……まあ、どっちみち先に任された仕事がある以上、そっちが無事に片付かない事は結局後回しになんのは変わりねえか」

『釣る……？まさか、わざわざ別の場所にノイズ達を置いたのはお前の差し金か……！』

「そういうこつた。前回は俺の失態でテメエを逃して、そのせいで駒をまた一人失う事になった訳だから……前の失敗を取り返す為にも、今度は逃しはしねえぞつ」

『……駒、だと……？』

駒と、そう吐き捨てたアスカの言葉に反応するクロス。



同時に、以前の事件の今際に己の所業を後悔して逝ったフロググレイザーの最期と、その手を掴み損ねて後悔していた響の悲しげな背中が脳裏に蘇り、無意識に唇を噛み締めた。

『ふざけるのも大概にしろっ……そうやってお前達は、一体何人の人間の人生を弄んできたッ?! 貴様がこの世界に何を想おうが勝手だが、其処に生きる人々にも生命があるッ! 心があるんだッ! それを駒などと呼んで簡単に掃いて捨てる権利なんてお前達にはないッ!』

「……ハッ、テメエこそ惚けた事を吐かしてんじゃねーよ。前にも言ったぞ? 俺達はあくまで誘いを持ち掛けただけで、手を取るか取らないかを選んだのは結局のところ奴ら自身の意志だ。誘いを断って跳ね除ける事も出来ただろうに、それをやらなかった時点で奴らの責任になるんだよ。イレイザーになった後で奴らが何を想おうが、後悔しようが俺達には何の関係もねえ……そうなるくらいなら、そもそも半端な覚悟で手を取ったソイツ等が悪いのさ」

「コイツっ……!」

『人の心の傷や弱味に付け込んでおいて、どの口でっ……!!』

自分達はあくまでも選択肢を与え、彼等の意志を尊重して力を与えただけだといけ  
図々しく語るアスカの態度に、クロスとクリスも憤りを隠せない。

しかしアスカはそんな二人の怒りに満ちた眼差しも何処吹く風と涼しげな顔で気にも止めず、全身から紅い炎を立ち上らせてその身を徐々に包み込ませていく。

「生憎こっちも禅問答なんてやつてる時間も余裕もねえんだ。……今度は初めから容赦無しで行かせてもらう……!!」

そう宣告すると共に、アスカの全身が業火に覆われ激しく燃え盛る。直後、アスカを中心に凄まじい爆発と衝撃波が発生して地面を吹き飛ばした。周辺の照明がその余波だけで大きくへし折れ、公園のオブジェやベンチが炎に包まれ徐々に溶解していつてしまふ。

「グウツ!!な、何だよこのプレッシャーっ?!」

『そ、測定器が全て限界値を突破!計測が振り切れて、正確な数値を観測出来ません!』

『何だと?!』

『(ツ……威圧感が前回の比じゃないっ……!まだ力が上がるのかっ……?!)』

断続的に熱を帯びた衝撃波を連続で発生させるアスカから、以前に戦った時とは比較にならない圧倒的な威圧感が放たれ、周囲の空気が濃く、紅く染まる。全身を保護しているハズの二人のスーツとギアを凄まじい熱が突き抜け、肌がジリジリと焼かれるような痛みが走って止まない。

そうして、一際大きい衝撃波がアスカから放たれたと同時にその身に纏う紅蓮が霧散し、巨大な右腕が特徴的な紅の魔人……イグニスレイザーが姿を現し、クロスに人差し指を突き付けた。

『前回のリベンジだ……その命、今度こそ貰うぜッ!』

『ツ……イチイバル……お前は離脱して響達と合流しろ……コイツは俺が引き受ける……』

「ッ!お前、何言ってるんだ……?!あんなの一人で戦える相手じゃねえだろっ!」

こうして相対してる間にも伝わってくる重圧、プレッシャーを肌で感じて分かる。あのイレイザーは今まで戦ってきたノイズイーターとは比にならない敵だ。仮に二人掛かり、いや、例え装者全員を交えたとしても勝てるかどうか分からない相手を一人で受け持つなど、自殺行為に他ならない。

一度戦った事があるなら尚更それが分からない筈がないのに、クロスはそれでも徐にクリスの前に出て構わず告げる。

『奴の狙いは俺だ、奴の言葉からして恐らくお前の命まで狙う気はない……それに奴は響の事も狙ってる……他に何か策を弄してる可能性も考えられる以上、今は響を守る事

を優先するんだ……』

「だけど！」

『良いから言う通りにするんだ！此処にお前が残っててもどうにもならない！』

「……ッ……！」

イグニスイレイザーと対峙しているだけで既に余裕がないのか、一向に引き下がろうとしないクリスに痺れを切らすあまり語気が強くなってしまうクロスの言葉に、クリスはシヨックを隠せず息を拒んで目を見開いてしまう。

一方でクロスもそんな彼女に顔を向ける余裕すらなく、ゆっくりとクリスから離れながらイグニスイレイザーとの間合いを測るように慎重に動き出していく。

『（コイツを響達に近付けさせる訳にはいかない。装者の身に何かあれば、漸く見付けたイレイザーに対抗する術も失われる……！奴を倒せるかは分からないが、とにかく今

は響達<sup>が</sup>がもう一体のイレイザーを倒すまで、どうにか此処で食い止めて時間を稼ぐしかない……!』

『本気で一人で俺を相手するつもりか? 前に俺に散々痛め付けられたこと、まさかもう忘れたって訳じゃねえだろ?』

『……忘れたくても忘れられるものか……こっちはお前に負わされた怪我のせいで私生活でも散々な目に遭ってるんだ……ついでにその借りも返させてもらおうぞっ……!』

『ハッ、軽口を叩ける程度には余裕が出てきたか? なら今度は途中でへばるんじゃねえぞぞおおおおおッ!!』

背部から勢いよく炎を噴き、凄まじい速さで飛び出すイグニスイレイザーが掌を広げた右腕を伸ばしてクロスに掴み掛かろうとする。

それを見たクロスはすぐさま腰のバックルから両足に向けて蒼光を走らせて脚力を瞬間的に強化し、片脚の裏で地面を蹴り上げ側面に回り込むようにその場から飛び退く

と、かわされたイグニスレイザーの右腕が地面を叩き付けて粉碎する。

その隙にクロスは地面に着地すると同時にもう片方の脚で再び地面を蹴り上げ突撃し、イグニスレイザーの横つ面に目掛けて飛ばした拳がドゴオツ!!と鈍い音を立てて直撃する。が……

『……前にも言っただろーが。今のテメエじゃ、俺の身体には傷一つ付けられねえつてよオツ!!』

『チイツ……!』

前回と同様、やはりイグニスレイザーは顔面に拳を打ち込まれてもビクともせず、手応えも感じない。ダメージを受けた様子もなく、まるで蠅でも払うかのように鬱陶しげに巨腕を横薙ぎに振るうイグニスレイザーから咄嗟に離れて距離を取ろうとするクロスだが、イグニスレイザーはそんなクロスへと瞬時に距離を詰めて肉薄し、紅蓮の炎を纏う左拳を飛ばして殴り掛かる。

それに対しクロスも咄嗟に左拳に蒼光を纏い、クロスカウンターを狙ってタイミングを合わせるように拳を鋭く放つが、イグニスレイザーの胸に打ち込んだ拳はその強靱な防御力の前に容易く弾かれてしまい、逆に紅蓮の炎を纏うイグニスレイザーの剛拳が胸のボディにめり込み、そのまま数十メートル先の森林すら突き抜けて弾丸の如く勢いで殴り飛ばされてしまった。

「あつ……いっつ、クツ……ああつ、クツソオツ！」

森林を抜けて吹っ飛ばされたクロスを追うように、イグニスレイザーも再び目にも止まらぬ速さで駆け出し追撃していく。その様子を離れて見ていたクリスも慌てて二人の後を追おうとするが、先程のクロスの言葉を思い出して一瞬迷ってしまった。僅かな逡巡の末、やはりクロスの窮地を前にこのまま見捨てる事は出来ない、二人の後を追って急ぎ走り出していったのだった。





条の大橋で立ち回る牛若丸の姿を彷彿とさせる身のこなしのようだ。

『チイ……い……ちよこまかちよこまかとツ！猿かテメエはツ?!逃げ回つてばかりいないでちつたあ戦えやアツ！』

地面に叩き付けた右腕を引き抜き、隠し切れない苛立ちを露わにイグニスレイザーが堪らず叫ぶ。

先程から怒涛の猛攻を仕掛けるも、対するクロスはイグニスレイザーの攻撃を避けるばかりで一向に反撃に転じようとしなない。

まともに戦う事を放棄し、逃げの一手に徹しているようにしか見えないクロスにイグニスレイザーもイライラが募る一方、イグニスレイザーから離れた場所に着地したクロスはその心中、緊張で張り詰め余裕が一切ない状態にあった。

『（攻撃を避けても、拳が僅かに掠めただけで装甲の一部が簡単に削り落とされていく……前に戦った時は此処までではなかったのに、今度こそ本当に仕留めるに来るつもり

か』

此処まで自分が避けてきた、イグニスレイザーの破壊の痕跡を見遣る。其処には奴の凄まじい一撃の威力を物語るかのように小規模のクレーターが無数に作られているだけでなく、拳に纏う炎の高温のせいも、クレーターの中はあまりの高熱度で岩や瓦礫が溶解したマグマで煮え滾っている。

前回戦った時とは比較にならない破壊力。人間態からレイザーへと変貌していた際の圧倒的な破壊の様子や威圧感から薄々感じ取ってはいたが、やはり以前の戦いでは相手を加減されていたという事なのだろう。

先程のクロスカウンターの時にも強烈な一撃を貰った際、胸のボディに瞬間強化を施して何とかダメージを軽減出来たが、そう何度も使える手ではなし、あんなのを一撃でもまともに喰らえばひとたまりもない。

『（響の力を此処で切るべきか？ いや……）』

ガングニールの力は現状、今の自分が持つ中で最高戦力だ。奴の力の上限が分からない今のタイミングで早々に切り札を切るのはあまりに早計が過ぎる。

ならばやはり、今は別働隊の響達がイレイザーを撃退するまで時間を稼ぐ方が無難だ。本部からその報らせが届くまで持ち堪えるべく、身構えるクロスを見て何かを察したのか、イグニスイレイザーは軽く舌打ちして自らの胸に左手の爪を這わせていく。

『そうかよ、時間稼ぎのつもりって訳か。だがこっちもそんなもんに律儀に付き合う気はねえんだ。二人一気に釣り上げられなかったなら、テメエだけでも此処で仕留める……！』

—ガギギギギギギギイツ!!—

『……！何だ……？』

そう言いながら、イグニスイレイザーはいきなり胸に這わせた爪を立てて自らの胸部を引つ掻き、胸に五本の爪痕を作っていく。

そんな不可解な行動を取るイグニスレイザーを見てクロスも怪訝な反応を浮かべ  
る中、掻いた胸から無数の塵屑がこぼれ落ちて足元に転がっていき、イグニスレイ  
ザーが合図を送るかのようには左手で何かを掬い上げる動作を行う。

瞬間、イグニスレイザーの足元に転がる塵屑の一つ一つが大の人間サイズへ徐々に  
巨大化しながら人型に変化していき、灰色に近い白の体色の上に黒の線が全身に走る、  
無数の異形の怪物へと変貌していった。

『コオアアアアアアッ!!』

『シャアアアアアアアッ!!』

『ッ!コイツらは……!!』

「ハアッ、ハアッ……ッ?!な、何だよ、あの気持ち悪い奴らは?!」

謎の塵屑から生まれた無数の異形達が、まるで産声を上げるかのように耳障りな奇声を一齐に放つ。そんな不気味な異形達を前にクロスは目を見開き、二人を追ってクロスの背後からその場に駆け付けたクリスも謎の異形達を見て戸惑いを浮かべる中、イグニスレイザーは自らの周りで蠢く異形達を顎で指して告げた。

『上級レイザーの事を思い出してんなら、コイツらの事も当然知ってんだろ？俺ら上級だけが、この身から際限なく生み出せる屑共……ダストをよ』

『ツ……上級レイザーの、分身体……！』

「分身だと?!」

そんなものまで生み出せるのかと、クロスを威嚇するように奇声を発する異形達……上級レイザーだけがその身から生み出せる分身体、ダストの正体をクロスの口から聞かされたクリスが上げる驚愕の声も他所に、イグニスレイザーは指を軽く振るってダスト達に指示を出す。

『奴を逃がすな、行け!』

『ウウウアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

『チツ……!』

イグニスイレイザーの号令と共に、まるでゾンビのように腕を大きく振りかぶりながら一斉にダスト達がクロスへと迫る。それを見たクリスはすぐさま両手に握るクロスボウを乱射して迎撃に出るが、光の矢に撃ち抜かれたダスト達は頭や腕などの欠損した部分が独りで修復されていき、そのまま何事もなかったかのように構わずクロスへと襲い掛かった。

「なっ、再生しやがった?!」

『無駄だ。俺の塵屑とは言え、そいつらにもイレイザーの特性が備わってる。『記号』の力を持たないお前じゃ倒せねえよ』

「…………ツ!!」

『クツ……下がれイチイバル! 此処は俺が——ドゴオオオオツ!!——ぐううつ?!』

『人の心配なんかしてる場合かアツ?!』

押し寄せるダスト達の攻撃を捌きながらクリスを下げらせようと呼び掛けるクロスに、イグニスレイザーが死角から巨腕を振るって容赦なく殴り掛かる。拳が当たる寸前に反射的に身を翻し直撃こそ免れたが、それでも凄まじい威力を誇る拳が掠めただけで身体がぐらつき、其処へダスト達が一斉に飛び掛かって身体に組み付かれてしまう。

『ぐっ……………このっ——!!』

正面から低く腰にしがみつくダストの背中に鋭い肘打ちを叩き付けて沈め、左足に組み付く別のダストを強引に振り払う。しかし、ダスト達の相手に気を取られるあまりイグニスレイザーが続けて放った拳に反応が遅れて回避が間に合わず、咄嗟にスーツ上のラインを通して両腕に蒼光を走らせ、瞬間強化を施した蒼色に輝く両腕で防御態勢を



取るが、その上から打ち込まれた一撃に耐え切れず盛大に殴り飛ばされてしまった。

『グアアウウツ!!』

「おいつ！クソツ！」

「ミシイイツ!!と、両腕から骨が軋むような嫌な音を立てながら吹っ飛ばされて受け身も取れず、地面に叩き付けられるクロスを見て慌てて助けに入ろうとするクリスだが、障害となるダスト達を排除しようとクロスボウを幾ら撃ち込んでも、僅かに身体をぐらつかせるだけでやはり攻撃が通じている気配が薄い。

「チツ！」と舌打ちし、それならばと動きが鈍いダスト達の足を狙って撃ち抜き、地面に転ばせていく。

撃たれた足はやはり欠損した部分から忽ち再生されてしまうようだが、一度転がしてしまえば飛び越えて先へ進む事は容易になる。クリスはその隙に何としてでも先へ進もうと両手のクロスボウを発砲させながらクロスの下まで突き進んでいくが、倒れたダ

ストの一体にその足を掴まれ、更に一瞬だけ動きを止めた隙に他のダスト達もワラワラとクリスに群がり組み付いていつてしまう。

「は、放せっ！このっ……！づあああっ!!」

『……端っこでちよこちよここと鬱陶しい……目障りだから動けない程度に痛め付けろ。殺しさえしなきゃ、手足の骨の1、2本はへし折っても平気だろ』

『ッ！止めろオツ!!』

臆面もなく残酷な指示を下すイグニスレイザーに対してクロスが止めに入ろうと飛び掛かるが、イグニスレイザーはそんなクロスに見向きもせず、虫でも払うかのような簡易な動作からの横蹴りを突き刺し蹴り飛ばしてしまう。

その間にもダスト達は地面に押さえ付けるクリスのギアに四方から手を伸ばしてバラバラに引き剥がそうとし、必死に抵抗し続けるクリスのギアを掴んで徐々に亀裂を入れていく中、受け身を取って態勢を整え、腹部を抑えながらどうにか身を起こしたクロ

スはその光景を目にしすぐさま左腰のカードホルダーからタイプガングニールのカードを取り出す。

『（もう出し惜しみをしてる場合じゃない……！向こうが数で攻めてくるなら、こっちは質で迎え撃つ！）』

それが今のこの状況下の最適解と信じ、クロスはバックルから立ち上げたスロットに素早くカードを装填し、掌でスロットをバックルへ押し戻した。

『Code Gungnir……clear!』

鳴り響く電子音声と共に、クロスの装甲がパージして新たに生成された橙色のアーマーと仮面が身に纏われていき、最後に肩甲骨部から二翼の橙色に輝く光のマフラーを出現させてタイプガングニールに姿を変える。

そしてクロスは瞬時に両腕のナツクルを分離させ、純白の烈槍と漆黒の烈槍に変形させながら二振りの槍を手中で勢いよく回転させていき、そのまま二振りの槍を投擲し

て自身の周囲、そしてクリスに群がるダスト達を切り裂いて消滅させていったのだ  
た。

「ツ……………あれは……………」

『なつ……………チツ、それが例の新しい力つて奴か！』

『はあああああああああああツツ!!』

ダスト達をほんの数秒足らずで全滅させたタイプガングニールの力の一端に驚嘆す  
るイグニスレイザーに目掛け、クロスはブルーメランのように回転しながら戻ってきた  
二本の烈槍を再びナツクルとして両腕に纏いながら突貫し、拳を飛ばして殴り掛かっ  
た。

それを見てイグニスレイザーも咄嗟に身を逸らしてクロスの拳を躲し、拳を固く握  
り締めた右腕の巨腕で反撃して殴り返そうとするが、クロスは素早く身を屈めながらイ  
グニスレイザーの巨腕を受け流し、そのまま流れるような滑らかな動きでパワー

ジャツキを稼働させた右脚による強烈な上段回し蹴りをイグニスイレイザーの顔面に叩き込んでいった。

『ぐううつ?!クツ……テ、メエエエエエエツ!!』

パワージャツキで威力を強化した技が効いているのか、顔面を蹴り飛ばされたイグニスイレイザーの頬に微かに傷痕が残っている。

これなら行ける。内心そう確信したクロスが攻撃の手を休めずに回し蹴りの勢いを殺さずその場で回転し、軸足を入れ替えてからの上段後ろ回し蹴りを再度仕掛けるも、イグニスイレイザーは素早く態勢を低くして蹴りを躲しながらクロスの腹に目掛けて左拳を振り上げる。

それを見たクロスも負けじと瞬時に腹部を両手で庇って相手の拳を受け止めると、そのまま拳を払うように上へ押し上げながら両腕を後ろに引き、地を強くえぐるように踏み込み、イグニスイレイザーの胸に押し当てた両手の掌から相手の内部にエネルギーを流し込み、直後、イグニスイレイザーの身体の内側から橙色のエネルギーが爆発して盛

大に吹き飛ばしていった。

『ガアアウウツ?!グツ……! (ちゅ、中国武術だどっ……?コイツっ、オリジナルのバトルスタイルまで会得してんのかっ?!)』

『(響の戦い方を見て学んだ技が通用する……!これなら奴にも……!)』

奴の持ち前の防御力には関係ない、内側からダメージを与えられる発勁を叩き込まれて苦しげに呻くイグニスレイザーを見て僅かな勝機を見出し、クロスは即座に左腰のホルダーから新たに取り出したカードをバックルから立ち上げたスロットに装填し、掌で素早く押し戻した。

『Final Code x……clear!』

再び鳴り響く電子音声と共にクロスの全身の装甲が部分展開されていき、最後に仮面のクラッシュャーが開かれて内部装甲が橙色に発光していく。

EXCEED DRIVE。他の形態とは違ってタイプガングニールだけが持つ、必殺技発動時にもみ発動するフルパワー形態だ。

全てのリミッターを一時的に解除する事で元々のあらゆるスペックが数倍にまで上昇されたクロスは、勢いを付けてイグニスレイザーへと飛び掛かりながら素早く突き出した右脚に橙色の雷光を纏い、渾身の飛び蹴りを放った。

『ぜえええあああああああああッッ!!!!』

『チイツー！そんなもんでえッ!!』

先程の発動のような内部攻撃ならともかく、真正面からの攻撃なら自分の防御力を突破出来る筈もない。新たな力を過信して悪手を踏んだなど内心ほくそ笑み、イグニスレイザーは敢えて回避行動を取らず、クロスの技を正面から打ち破る気概で右腕の巨腕を盾にして待ち構え、雷光を撒き散らしながら迫るクロスの渾身のライダーキックを真っ向から受け止めた。が……

——…ジャキイツ!!——

『……?!な——?——ドゴオオオオンツ!!——ウオオオオオオツ?!』

クロスの強烈な一撃を巨腕で受け止めた瞬間、クロスの右脚のパワージャッキが不意に稼働を始め、イグニスイレイザーの右腕をいきなり弾き飛ばしたのだ。

それによりイグニスイレイザーは右腕を大きく反ってガードと体勢を同時に崩されただけでなく、クロスは右腕を弾かれた際のイグニスイレイザーのパワーと勢いを利用して上空へと空高く舞い上がる。

同時に右脚に纏う雷光を右腕の拳に向けて伝わらせ、ハンマーパーツを起動させた橙色の雷光を纏う右腕を振りかざしながらイグニスイレイザーへと急降下していき、無防備のその顔面に全力の鉄拳を叩き込み、殴り飛ばしていった。

『ツアアアアツ?!グツ、ツ……ハッ、やつてくれるじゃねえかあつ……!その姿ならちつたあ愉しませてくれるって訳かあ?ええツ?!』



『……お前を愉しませるつもりは毛頭ない。此処で決着を付けさせてもらおうッ!』

ふらつきながらも殴り付けられた頬を軽く拭うイグニスイレイザーの挑発を聞き流し、クロスは両拳を構え直して再度イグニスイレイザーへと挑み掛かった。

切り札を切ってしまったからには、此処で奴を逃す訳にはいかない。次にまた戦う時に同じ力や技が通用する保証がない以上、勝負は此処で、この熱が冷めない内に付けるしかない。

互いに鋭く振り抜く拳の応酬が無数の火花と衝撃波を撒き散らし、クロスとイグニスイレイザーは一進一退の拳戦を繰り広げていく。

——そんな二人の激戦を離れた場所から見つめ、クリスは地べたに座り込んだまま無意識に拳を強く握り締めていた。

(くそっ……クツソツ……何をやってんだあたしはっ……! 結局なんにも出来てねえ

じゃねえかつ……！アイツの力に頼りっぱなしで、助けられてばかりで……何にもっ……！）

『記号』の力を持たない今の自分では、あの紅の魔人どころか塵屑と呼ばれた先程の怪物達にも太刀打ち出来ない。

なのにそんな自分とは対照的に、クロスは最初に対峙した際には本能的な危機を感じ、遥か格上の相手と思われたイグニスレイザーとも真っ向から戦えている。

その事実が更に自分を惨めにさせ、とてつもない無力感がのしかかり、クロスは俯く顔を徐に上げてイグニスレイザーの背中を鋭い目付きで睨み付けていく。

『そらそらどーしたアツ?!こっちはまだまだギアが上がるぞツ!それとももう付いて来れねえかあツ?!』

『チッ！（奴の力が徐々に増してる……！これ以上パワーを上げられたら流石に厳しくなるか……！）』

一方で、徐々に拳戟の応酬に激しさを増していく二人の戦いも激化するにつれ、戦況は次第にイグニスレイザー側に傾きつつあった。

タイプガングニールのおかげで力の差をある程度埋める事が出来たとは言えど、元々自分に合わせて加減していたイグニスレイザーがその実力を解放していけば、折角狭まった力の差は再び開かれてしまう事になる。

このままではいずれ追い込まれる。奴が全力を出してそうなる前に早々に決着を付けるべく、互いにクロスカウンターを打ち込んで距離を離れたクロスは再びハンマーパーツを起動させた両腕を引き締め、一撃必殺の構えを取る。

一方でイグニスレイザーもそんなクロスの構えを見て何かを悟ったのか、渦状に舞う紅蓮の炎を巨腕に収束しながら拳を握り締め、今までとは明らかに毛色の違う膨大な力をその身に宿していく。

恐らく向こうも勝負を決めるつもりなのだろう。奴が身に纏う気配の変化からそれ

を察し、ならばこちらも今ある全力で迎え撃つただけだとクロスが身構えると同時に、イグニスレイザーが真正面から突っ込んで来る。

業火を纏う巨腕の拳を振りかざす魔人の姿を睨み据えながら、クロスも右拳を振り抜き、相打ちも覚悟に全力でそれを迎撃しようとした、その時……

— M E G A   D E T H   P A R T Y —

『……ッ!?!』

二人の必殺を込めた技がぶつかり合う寸前、イグニスレイザーの真横から突如無数の小型ミサイルが飛来し、直後に凄まじい爆発音が連続で響き渡った。

ドオゴゴゴゴゴゴオオッ!!と、鼓膜を裂くような轟音を轟かせながら立て続けに打ち込まれる小型ミサイルがイグニスレイザーの身体を焼き尽くし、爆炎と黒煙がその姿を覆って視認出来なくしていく。

吹き荒れる爆風が辺り一帯に広がり、イグニスレイザーの間近にいたクロスも両腕で顔を庇いながら爆発の衝撃に押し出されて後退りしていき、それでもどうかそれ以上吹き飛ばされないようにその場に踏み止まりながら今のミサイル群が放たれてきた方へと振り返ると、其処にはミサイルを放ったと思われる空の射出器を露わにした腰部アーマーを展開し、その背にはもう二基、巨大な大型ミサイルを背負うクリスの姿が見えた。

『イチイバル……?!』

(このまま何も出来ずに終われるか……! アイツの力なんか無くたって、やりようは幾らでもあるっ!)

役立たずのまままで終わる気なんてない。ダメージを与えられないのならせめて、奴の目を引き付ける囿になってでも役目を全うしてやる。灰暗い感情に押されるまま背中を積む大型ミサイルを展開し、イグニスレイザーを包み込む黒煙に向けてクリスがミサイルの照準を合わせていくが、その時、煙の中で何かが妖しく蠢いた。



ドゴオオオオオツツ!!!と、横殴りに振るわれた巨腕の裏拳がクリスの全身を容赦なく叩き付けた。

バキイツ!と、何かが割れたような不穏な音が耳に届くが、それが自分の骨が折れた音なのか、はたまた反射的に庇った両腕で相手の攻撃を受け止めた際にギアが破損した音なのかも検討も付かない。

ただ殴り飛ばされた自分の身体が面白いほど簡単に宙を舞っている事だけは分かり、地面に勢いよく打ち付けられた身体がゴロゴロと何度も地面を転がっていき、勢いが徐々に弱って漸く止まったかと思えば、胸の内から込み上げてくる急な吐き気を抑え切れず、口から吐き出した塊が地面に撒き散らされ、赤く染め上げてしまう。

『イチイバルツ!!』

悲痛な叫びと共にクロスが慌ててクリスの下へ飛び出す。しかし、イグニスイレイザーに向けて放たれた二基の大型ミサイルが何も無い地面に落ちて着弾し、凄まじい爆

発が背後からクロスを攫って吹き飛ばした。

嵐のように吹き荒ぶ衝撃波が周辺の公園の木々を根元から引きちぎれそうなほど激しく揺らし、アスファルトの地面に無数の亀裂が走り、巨大な地割れを引き起こしている。

暗転する意識の中、クリスは僅かに力が入る両手で地面を這うように掴み、ギアを含めた全体重を掛けてどうにか衝撃波に攫われないよう必死に耐える。

遅れてやってきた身体の激痛が響いて身を起こす事もままならない今それしか出来ないクリスのそんな姿を見つめ、イグニスレイザーは嵐の中でも何事も無いように悠々と佇み、その右手に炎を灯した。

『しつこく邪魔立てするってんならこつちだつて容赦はしねえぞ。フィクション如きが頭に乗ればどうなるか、その身をもって教えてやる……！』

「ぐっ……ぐっ……あ……っ……」



物語の重要なキャラクターに危害を加えるリスクを重視して命までは取らないと決めていたが、こうも何度も水を刺されてはいい加減我慢も限界というモノ。そんなにも死に急いでるなら望み通りの死の恐怖を植え付けてやるべく、イグニスレイザーの右手に宿る炎が更に激しく燃え盛り業火と化す。

その熱は離れた場所に倒れるクリスの肌にも吹き付け、本能的な危険を感じ取り身体を起こそうとするも、体の芯が「動くな」と痛烈な刺激を全身に流し起き上がる事を拒否する。

（ク、ソツ……ちつくしうっ……い……こんな、寝てる場合じゃねえってのにつ……！起きろ、起きろ……！起きろよ！こんなところで終われない……！あたしには、まだっ……！）

早く動け、早く、早く、早く。

必死に自分の身体に命じる。危機はすぐ其処まで迫ってる。なのに、身体が別の何かに支配されてしまってるかのように自由が利かない。

早くしろ、早く、早く、早く！

此処で立たねば本当に取り返しが付かなくなる、何も果たせぬまま終わる！

ぼやけた視界のまま深く息を吸う。小指が僅かにピクリと引き攣った。その感触を頼りに震える手で先程よりも強く地面を掴む。

熱が更に強まる気配がする。

それに誘われるように地面を掴んだ手を支えに震える身体を無理矢理に起こし、明滅する視界が遅れて漸く戻った視線の先に、自分を遥かに上回る直径10メートルの炎の塊が目と鼻の先にまで迫っているのが見えた。

(……………くっそっ……………なんだ結局、あたしは……………何処までも中途半端なっ……………)

死の予感が明確な確信に変わる。

足は動かない。腕もこれ以上は動かさず、鉛のように重い。

駄目だ、無理だ。今の自分にアレは避けられない。

唯一の防御策のリフレクターを使う余力もまだ戻らない。このままでは死ぬ。間違  
いなく。

呼吸が不規則に乱れる。無意識に嘔み締めた唇から暖かく濡れた感触が伝う。

力を持たないなりに己の役目を全うしようとして空回り、並のノイズイーターすらも  
倒せない身で無謀にも上級のイレイザーに挑んで、挙げ句に迎えるのがこんな無様極ま  
りない結末なのか。

瞼に熱い何かが込み上げて来るのは、目の前の敵に一矢報る事も叶わない悔しさから  
か、それとも無力な自分を恥じてのものか。



「……………」

絶叫にも似た悲痛な咆哮と共に突き出す、橙色に輝く雷光を身に纏ったクロスの右拳が火の塊を防ぎ止める。その雄叫びを聞いて恐る恐る目を開き、炎の塊の前に立ち塞がるその姿を目にしたクリスが息を呑む気配をクロスも背中越しに感じ取るが、背後にいる彼女を省みる余裕がない。

拳で受け止めた炎の塊の勢いが止まらず、押し返される。それでも地を深く抉るように両足で踏み込み、パワージャッキも稼働させて必死に持ち堪えようとするが、それでもまだ押し返される。やはり咄嗟に技を切ったせいで、炎の塊を押し返すだけの力の溜めが圧倒的に足りていないのだ。

このままでは押し返し切れず、二人諸共火達磨になって灰になるしかない。

どうする、どうすればせめて被害を最小に抑えられる？ 限界が間近にまで近付いている事を知らせるかのように、焦げ臭い匂いと共に黒い煙が噴き出す自身の右腕のナック

ルと正面の炎の塊を交互に見ながら必死に頭の中で思索を繰り返し、考えた末、クロスは炎の塊の中に自らの右腕を躊躇なく振り込んだ。

「ツ?!お、いつ……なに、をつ……?!」

ジュウウウウツ!!と、肉が焼ける不快な音がクリスの耳に届く。

とても正気の沙汰とは思えないその行動を見てクリスも思わず身を乗り出すが、クロスは構わず凄まじい激痛が走る右腕を左手で抑えながら唇を強く噛み締めて耐え、EXCEED DRIVEの発動によって部分展開された全身の装甲の隙間から外へと放出される過剰エネルギーを外部へ逃がさぬように操り、炎の塊の中に挿し込んだままの右腕に一転集中で注ぎ込んでいく。

莫大なエネルギーが集まるにつれ、炎の塊の高熱度で徐々に溶解されていくクロスの右腕が激しく発光していき、それに伴い炎の塊全体が内側から徐々に橙色に染め上げられて閃光を放つ。

——直後、限界値を超えたエネルギーの吸収に耐え切れずにオーバーロードを起こしたクロスの右腕のナツクルが暴発し、溢れ出た膨大な量のエネルギーが炎の塊を内側から飲み込み、木っ端微塵に霧散させていったのだった。しかし……

『ぐっ——アアアああッッッ!!』

ビシャアアッ!と、右腕から飛び散った夥しい量の鮮血で地面を汚しながら、クロスは白煙が立ち上る右腕を抑えて膝を突き、そのまま崩れ落ちるように倒れ込んでしまった。

「お、おいつ……?!」

倒れたクロスを見て、漸く身を起こせる程度にまで身体が回復したクリスが覚束無い足取りでクロスの下に慌てて駆け寄り、その身体に触れようと手を伸ばし掛け、彼の右腕を見てぎよっとなる。

あの高熱度の炎の塊の中に掬い込んだ事で皮膚が焼き爛れた重度の火傷、加えて右腕

に纏っていたナツクルを暴発させたせいで肉がズタズタに裂け、骨が微かに見えるほどの無数の傷口からとめどなく血液が溢れ出ている。

これではまともに腕を振るう事が出来ない。素人の目から見ても一目でそれが分かり、鼻先を掠める人の肉が焼き焦げた悪臭と鉄錆の匂いにクリスの顔からも血の気が引いていく中、イグニスイレイザーはそんなクロスの姿を見て肩透かしを食らったかのようにな鼻を軽く鳴らした。

『阿呆が、大局を見誤ったな。そんなガキ、見捨てておけばまだ勝機を掴めた可能性もあつただろうによ。その甘さがテメエの限界だ、黒月蓮夜』

ゆらりと掲げられたイグニスイレイザーの右手から紅の炎が再び灯り、直後に業火と化して右腕全体を包み込むように走り、覆い尽くしていく。闇を照らすその炎を目にしたクリスは咄嗟に倒れるクロスの前に出るが、まともに動かせない身体を無理に引きずり、唇の端から血を伝わせるその姿はイグニスイレイザーからして見ればあまりにか弱く、貧弱なモノにしか映らない。



『退いてろ。テメエにはムカ付かされたが、一番の邪魔者を消せるチャンスを作ってくれた点に関しては感謝してやってもいい。大人しくソイツを引き渡せば、お前だけでも見逃してやるよ』

「ふざけんなっ……！お前の指図に大人しく従うワケねえだろっ！」

『……これが本当に最後通告だ。とつとつ其処を退けろ。さもなきや——』

「くどいっ！」

何度言われようとも答えは変わらないと、クリスはその手に握り締めたクロスボウの銃口を突き付けるが、イグニスレイザーは何も答えない。ただその身から漂う空気が静かに一変し、確かな殺気を孕んで周囲一帯の空間を支配するように徐々に大きく膨れ上がり、とてつもない威圧感となってクリスの身にのしかかかっていく。

『警告はした。それでも引かねえってんなら容赦はナシだ……諸共に灰に還れ……!!』

「くっ……!!」

掌を上にも右腕を頭上に掲げ、その手から放出した炎が先程よりも巨大な炎の塊を形作り、風船のように更に大きく膨れ上がっていく。

ギアの防護フィールドで保護されてる筈の肌にジリジリと焼けるような痛みが吹き付けるのを感じながら、クリスは腕を十字に組んで部分展開したアーマーからエネルギーリフレクターを散布して障壁を張ろうと試みるも、イグニスレイザーは構わず巨大な炎の塊を掲げたまま大きく腕を振りかぶり、二人に投げ放とうとした、その時……

——……アスカ。アスカ、聞こえてるかい？——

『……ツークレン……？』

炎の塊を投げ放つ寸前、不意に頭の中にクレンからの念話が届いた。突然の横槍にイグニスレイザーも思わず動きを止めて怪訝な反応を示し、炎の塊を掲げたままクレンの念話に伝えていく。

『（急に何の用だ？こっちは今立て込んで……つかお前、さっき別の仕事があるとかで別れたばっかだろ？何でまた連絡なんか……）』

—その僕が出張らなきゃいけないぐらいのつぴきならない状況って事だよ。それよ、今は急いで例のイレイザーの彼を回収して戻ってきて欲しい。一刻も早く、だ—

『（はあ？いきなり何言ってるんだ、こっちも立て込んでるって言っただろ！今漸くあの野郎の息の根を止められそうなんだ……！この機会を逃す訳には行かねえ！）』

クレンの指示を振り払い、何がなんでも此処でクロスを仕留めるといふ意志を曲げようとしないイグニスイレイザー。その頑なっぷりにクレンも溜め息を吐くと、一拍置いて真剣味を帯びた口調となり、

—……”覚醒”したんだよ、彼が。ノイズ喰らいのイレイザーの中で初めて、他とは違つて暴走を乗り越えてね—

『……………なっ……………』

——シープレイザーが覚醒した。クレンの口からそう聞かされ、驚きのあまり息を拒んだイグニスレイザーの手から炎の塊が消滅していく。

『まさかつ、マジかよ……………！アイツが初めての成功体になったつてののか?!』

——そういうこと。ただ状況はあんまり宜しくなくてね。彼は戦い慣れしていないよ。うで押され気味だ。このままじゃせつかくの成功体一号が装者達に倒され兼ねない。だから近くににいる君に彼の回収を頼みたいって訳さ。もしクロスに拘るあまり彼を失って貴重なデータの一つも取れなかったとなれば、デュレンも今度ばかりは小言一つで済ませてはくれないかもだし……………ね？——

『……………チツ……………！』

「……………何だアイツ……………急にどうしたんだ……………？」

撃てばそれだけで終わっていた筈の攻撃を中断し、一人で何も無い空に向かって喋っているようにしか見えないイグニスレイザーを見て困惑を露わにするクリスだが、イグニスレイザーはそんなクリスを一瞥しながら舌打ちし、掌を上突き出した左手から半透明の本を取り出していく。

『予定変更だ。テメエ等の始末は後で付けてやる……邪魔の入らない、此処とは違う所でな』

「……何?」

クリスが訝しげに眉を顰める。だがイグニスレイザーは何も答えぬまま半透明の本を開き、パラパラと独りでに頁が開かれる本から無数のデータ状の光の文字が浮き出てクリスとクロスの下へ飛来し、二人を囲むように周囲をグルグルと回り始めていく。

「な、何だ?! くっ……!」

周りを囲む光の文字に向けてすぐさま銃撃するも、銃弾は光の文字をすり抜けて直撃

せず、手応えすらない。その間にも無数の光の文字は徐々に回転の速度を速めながら黄金色に発光し始めていき、眩い光が二人の姿を掻き消していく。そして、

「ぐ、あつ……！身体がつ、吸い、こまれっ……?!なんだよコレっ……!!う、うあああああああああああああああアツツ!!」

誤って直視すれば肉眼が焼かれ兼ねないほど眩い光に包まれたクリスの叫び声が木霊し、直後、一際大きく光が発光したと同時にクリスとクロスの姿が一瞬で何処かへと消え去ってしまった。そして無数の光の文字は独りでに半透明の本の頁へと戻っていき、最後の一文字を収めたのを確認したイグニスレーザーは雑っ気に本を閉じる。

『束の間の異世界旅行を楽しみな。次に会った時こそ、テメエの本当の最後だ……黒月蓮夜』

吐き捨てるように眩き、イグニスレーザーは街の方を見遣る。未だ戦闘は続いているのか、街の方から僅かながら爆発の光が見える。その光を頼りに方角を定め、イグニスレーザーは全身から紅の炎を放出して身体能力を向上させ、地面に炎を撒き散らし

ながら並外れた跳躍力で街の方へと飛び出していったのだった。

## 第五章／不協和音×BANG BANG GIRLの憂鬱

⑥

時間は遡り、少し前……

「ハアアアアアーツ!!」

—△式・艶殺アクセル—

「マスト、ダアアアーツ!!」

南西Cポイント。シープレイザーと戦闘を開始した響達はそれぞれ二手に別れ、調と切歌は民間人を襲うノイズの大群を受け持つて手練れた戦いぶりを発揮していた。

まるでフィギュアスケート選手のように両足のローラーで滑らかに地表を滑り、鋸に



変形したスカートを回転させながらノイズ達に突撃して次々に引き裂いていく調が撃ち漏らした残敵を切歌がイガリマの範囲攻撃で刈り取り、問題なく着実にノイズの数を減らして民間人の避難誘導を手助けしていく。

『この……この、このつ、このオおおおッ!!』

「ちよ、ちよつと待って?! うわわっ!」

その一方で、響はまるで駄々っ子のように両腕をブンブン振り回して襲い掛かるシープレイザーの拳を連続で飛び退いて躲し続けていた。壁や地面、乗り捨てられた車などに拳で穴を開けられていく様を目にしながら、しかして反撃には転じず防戦に徹し、回避を続けながら何とか彼から話を聞こうと説得を試みようとしていた。

というのも、先程からシープレイザーの戦い方を観察していて確信したのだが、彼は恐らく戦い慣れしていないただの素人だ。

型も何もない、ただがむしやらに腕を振るうだけの大振りな動き。全力で振るった自

分の腕に振り回されてバランスを崩してしまったりなど、とてもじゃないが戦場に立つにはあまりに立ち回りがお粗末過ぎる。

正直この有様では本気で反撃に出るのも忍びなく、殆ど回避や攻撃を受け流すだけに留まっている響に対し、シープレイザーは力任せに殴ったせいで抜けなくなってしまう腕を何とか壁から抜き取りながら情けなく叫んだ。

『く、くそっ……何でさっきから戦おうとしないんだよっ?!俺をバカにしてるのかっ!!』

「バカになんてしてません!さっきも言ったように、私はただ貴方と話がしたいだけで……!」

『そんな事をして何の意味があるんだっ!いいから戦えっ、戦えよおっ!』

このままでは戦いを通して己の力を進化させる事も、望みを果たす事も叶わなくなる。焦燥感に駆られるままに地を蹴って飛び出したシープレイザーが再度拳を振るって響に襲い掛かるが、響は素早く身を屈めて相手の拳を受け流し、そのまま背中

体当たりを打ち込みシープレイヤーを後退りさせると、続けざまに強烈な頂肘を相手の胸に叩き込んで吹っ飛ばした。

『ぐあああうっ?!う、ううっ……』

「もう止めて下さい……! 私は貴方を傷付けたくない! 貴方だって、本当は戦いたくないんじゃないんじゃないですか?!」

『ッ……な、なにをっ……!』

響の肘を打ち付けられた胸を抑えてふらつきながらも起き上がり、何とか両腕でファイティングポーズを取ろうとする。しかし響はそんなシープレイヤーを見て徐に構えを解き、複雑げに眉を顰めて胸に拳を当てていく。

「貴方の攻撃からは、他のイレイザーと違って敵意も、誰かを傷付けたいっていう悪意も感じられない……本当は、進んでこんな事をしたとは思っていないんじゃないですか……?」

『……………！』

まるで自分の心を見透かしたかのようなその一言に、シープレイザーは咄嗟に言葉を返せずに声を詰まらせる。その反応から響も自分の直感が間違っていないかつたと確信し哀しげな眼差しを向けるも、シープレイザーはそんな響の視線から逃れるように何も言えず顔を俯かせてしまうが、響はそれでも言葉を続けて呼び掛ける。

「迷っているなら、本意でないのならまだ引き返せるハズです！あの人のように後戻りが出来なくなる前に……貴方の目的を聞かせてくれたら、私達にも何か出来る事があるかもしれない……！こんな事をしなくても済むかもしれないんです！だから——！」

この世界で生み出されたイレイザー達が、並々ならぬ事情から人間を止め、イレイザーの力に手を伸ばした事は蓮夜からも聞かされている。あのフロッグイレイザーもその一人であったと。

ならば相手の事を何も知らぬまま、分からぬままこの拳を相手に振るう事は出来ない

い。

フロツグイレイザーの時のような悲劇を二度と繰り返さない為にも、その手を掴めるのなら今度こそ掴みたい。話し合いで戦わずに済むなら、その可能性を探りたいと望む響の言葉から嘘偽りのない実直さを少なからず感じ取ったのか、シープライレイザーも僅かに腕を解いて動揺を露わにするが、しかし……

——…この子の事、お願いね？私は無事に産んであげる事しか出来ないけど、大丈夫。例え私がいなくなっても、二人のこと、ずっと傍で見守ってるから……—

——不意に脳裏を過ぎったのは、窓から寂しく吹き抜ける風で膨らんだ白いカーテンが揺れる、とある病室の風景。

ベッドの上で大きくなった腹を優しく撫で、しかし哀しげに微笑む最愛の人の姿を思い浮かべた瞬間、シープレイザーは息を拒み、力無く首を横に振った。

『ダメ、だ……駄目なんだ……そんな悠長にしてられる時間なんて、ない……俺にはもうつ、この力に縋るしか道はないんだアあああああッッ!!!』

「ッ!?くっ!」

頭を掻き筆っていきなり絶叫を上げた直後、シープレイザーは再度両腕を伸ばして響へ飛び掛かっていく。それを見て響も咄嗟に構えを取り、慌てて飛び退いた響が立っていた場所にシープレイザーの拳が突き刺さるが、シープレイザーはそのまま地面を捲りあげるように刺した腕を振り上げ、響に巨大な破片を投げ飛ばした。

(地面を……でもこの程度ならっ!)

一瞬驚きはずれど怯む事なく、力強く地を踏み締め、握る拳を勢いよく振り抜いて正面から迫る巨大な破片を意図も容易く粉碎する。が、それは向こうにとってただの目眩

し。粉微塵になった無数の破片の向こうからシープレイザーが飛び出し、そのまま伸ばした両手で響に掴み掛かり捕らえようとするが、響はその腕を掻い潜るように瞬時に身を屈め、シープレイザーの溝に再び頂肘を叩き込んで膝を着かせた。

『がああッ!!ッ……ま、だ……だあッ……!』

「も、もう止めて下さいっ!どうして其処まで——?!」

それでも尚、シープレイザーはふらつきながら起き上がり、平手打つように両腕を振りかぶって何度も何度も響に襲い掛かっていく。それらを避けながら必死に説得を続けようとする響だが、シープレイザーは聞く耳を持たず何かに取り憑かれたかのようにな執念深く平手を振るって響を捉えようとし、話が通じない。

……こうなったら致し方ない。響は素人同然の動きで髪の毛一本触れる事さえ出来ずにいるシープレイザーの攻撃を身軽に躲し、相手の首筋に手刀を打ち込み気絶させようとするが、シープレイザーは身体をぐらつかせながらも歯を食い縛ってそれに耐え、響に乱雑に裏拳を放つ。

しかし素早く身を屈めて裏拳を躲し、真下から打ち上げるように放った響の掌底が顎に打ち込まれ、膝から崩れ落ちて意識を一瞬手放し掛ける。が、それでもシープイレイザーは完全に意識を手放す寸前で踏み止まり、再び響に腕を伸ばして懲りずに襲い掛かっていく。

(ツ！何度打ち込んでも起き上がって来る……この人っ——！)

『ま、けっ……！まげられない、い……！負けられないんだっ、俺はっ……！！絶対にイイイイイイイイイイイイイイツツツ!!』

負けられない。負ける訳にはいかない。

湧き上がる感情が高まる毎に、心臓の鼓動が、全身の血の巡りが早く、早く、早く、力が増して強くなる。がむしゃらに振るうだけの両腕が速さを増し、翻弄されてばかりだった響の動きにも次第に目で追えるようになり、何処へ予測して攻撃すれば的確にその動きを捉えられるか掴めるようになってきた。



突き出した爪が躲されるが、それでも僅かに響の頬を掠め血を吹き出す。着実に相手の動きを捉えて攻撃を当てられるようになりつつあるシープレイヤーに対し、響も頬を伝う生暖かい感触を感じながら内心驚きを禁じ得ずにはいられなかった。

（こっちの動きに付いて来れるようになって……！成長してるんだ……私と戦いながら、少しずつ……！）

少し前まで目も当てられぬ程の有様だったシープレイヤーの動きが戦いを通して少しずつ、しかし着実にキレが増して鮮麗されつつある。その成長度合いは目を見張るものがあり、相対する響から見ても、何れこちらが押されるようになるかもしれないと焦りを覚える程だ。

このままでは拙い。そう感じた己の直感は恐らく間違いでないと悟った響は急ぎシープレイヤーとの勝負を付けなければならぬと逸り、先程よりも力を加えて相手の急所を狙い彼の意識を狩ろうと試みる。

しかし、どれだけ急所を打ち込まれ、何度気を失い掛けそうになってもその度に起き上がり、無様に這いつくばりながらも響に食らい付こうとするただならぬ執念、その不屈の精神を折る事が叶わない。

やがて響の狙いが急所だけだと向こうも気付き出したのか、シープレイザーは響の放つ手刀や掌底を次第に躲せるようになり、回避と同時に咄嗟に放った拳がまぐれにも響を捉え、響が瞬時に構えたガードの上に叩き込まれ後退りさせた。

「ぐううっ!!」

『あ、当たった……?!よ、よしっ、これなら……!!』

戦えている。これならやれるはずだと己を鼓舞し、シープレイザーはこの流れを逃すまいと響に突撃して更に畳み掛けようとする。

対する響も苦い表情を浮かべて痺れが走る両腕で構えを取るが、立て続けに振るわれる打撃の嵐の前に徐々に余裕が失われていき、シープレイザーが放った貫手を紙一重

で躲した瞬間、反射的に振り抜いた鋭い拳がシープレイザーの鳩尾に突き刺さり、勢いよく殴り飛ばしてしまった。

『ガ——アアツ……!!?』

(つ?!し、しまった!つい咄嗟につ……!?)

追い込まれるあまり、無意識に放ったカウンターの一撃に想定以上の力を込めてしまった。

響は焦りを浮かべて自分の拳と殴り飛ばされたシープレイザーを交互に見ると、シープレイザーはグツタリと地面に倒れたままピクリとも動かない。もしや今の一撃で気を失ったか、或いは……。

脳裏を一瞬掠めた最悪の事態を想像して寒気を覚え、響は一先ずシープレイザーの安否を確かめるべく慌てて彼に近付こうとするが、しかし……



「い、一体何事デスカ、これは?!」

荒れ狂う稲妻が街を破壊していく中、ノイズを掃討して響の元へ駆け付けた調と切歌はその惨状を目の当たりにし、稲妻の発生源であるシープレイザーに目を向ける。

其処には溢れ出るエネルギーを抑制出来ずに全身から稲妻を放つシープレイザーがユラリと上体を起こし、顔を上げたその瞳が濁った血のように赤く輝き、腕や足などの筋肉が不気味に流動して変質しつつある姿があった。

「あれってまさか、今までのノイズイーターみたいに暴走を始めてる……?!」

「と、という事は、またあのとんでもパワーアップをするって事デスカ?!」

「ツ……! 気をしっかり持って下さい! このままじゃ、貴方が貴方である事さえ無くなって……!!」

『ウウウウウウウウウウウウウウウウウツツ……!!!』

このままでは今までのノイズイーターの時と同様、自我を失ってしまった彼を倒す事  
でしか止められなくなってしまう。

そうなる前にどうか正気に戻そうと響が必死に呼び掛けるも、先の響の一撃で既に  
意識を手放しているシープライレイザーは高まり過ぎた力だけが暴走し、溢れ出るエネ  
ルギーに自我までも飲み込まれ掛けている状態にある。

響の必死の声も届かず、強まる力に身体を突き動かされてシープライレイザーはユラリ  
と起き上がり、一歩踏み出した足から赤い光が拡散して地面に亀裂を走らせていき、直  
後に耳を聳する程の炸裂音と共にアスファルトが破裂し無数の破片が宙に飛び散る。

稲妻を散らす膨大なエネルギーを全身から発し、離れていても気を抜けば押し潰され  
てしまいそんな重圧感を放って徐々に迫るシープライレイザーを目にした調と切歌は顔  
を強ばらせながらそれぞれアームドギアを構えて迎撃態勢を取るが、響は臆することな  
く、諦めずに叫び続けた。



息を漏らし、両角にエネルギーを溜めていく中、不意に、目の前に映る視界が別の景色へと移り変わった。

何処かの病室。

優しく撫でられる膨らんだお腹。

哀しげに微笑む女性の顔の顔がノイズ混じりに過ぎる。

まるで、今の自分を踏み止まらせようと訴え掛けているかのように。

——煩わしい。目障りだと、怪物としての本能がその情景を不要と断じる。

欲しいのはより強い力。何者をも振り伏せられる絶対の力のみ。その邪魔立てをす  
るといふのなら、この情景すらも焼却してより強い力に変え……



—……………やめ……………ろ……………—

……心の内から、何か、微かに声が聞こえたような気がする。

羽虫が飛び回る羽根の音よりもか細い声。目の前の煩わしい光景を汚そうとする己を制しようとするかのように。

—やめろ……………やめてくれ……………やめろっ……………!!—

声が再三、内から響く。が、どうでもいい。構うものか。

壊し、殺し、犯し尽くす。

美しく、鮮やかに彩られた、自分達を排他しておきながら続いていく物語が憎い。黒く濁った墨をぶちまけて汚してやりたい。

脳に絶え間なく響く声なき声。レーザーとしての本能に突き動かされるまま限界までエネルギーを凝縮した光弾を響達に放とうと大きく身を反らしていくと同時に、身体の底から漲る強大な力で全身の筋肉を膨張させ、レーザーとしての本来の姿に、新たな自分に生まれ変わろうと変容していく様に身を委ねようと……

『——やめろと言っているんだアあああああああああああッ!!!』

——人格や心、人間だった頃の記憶の名残りに亀裂が走り、全てを塗り潰されてただの獣に墮ちようとした直前、それに抗うように胸の内の奥底から響いていた声が口を衝いて絶叫した。

直後、全身から溢れ出ていた禍々しく輝く赤いエネルギーが弾けるように拡散し、そのまま消滅するかと思いきや不自然に宙でピタリと止まり、再びシープレイヤーの体中に纏わり付くように集まってその全身を赤く染め上げた瞬間、シープレイヤーの肉体が内側から弾け飛ぶように木っ端微塵に吹き飛んだのであった。

「なっ……?!」

「い、一体何がっ……?!」

「イ、レイザーがいきなり爆発したデスよ?!」

今度は何が起きているのか、思わぬ事態に驚きと困惑を隠せない響達。これまでもノイズイーターが暴走する様を目にした事は幾度となくあったが、ノイズイーターの身体

が前触れもなく爆発するなど初めてだ。

まさか、暴走して耐え切れずに自壊したのか？

そんな一抹の不安を覚える響の視線の先、爆風で舞い上がった土煙の向こうで何かが蠢いた。

切歌と調にもそれが見えたのか咄嗟にアームドギアを構え、響も固唾を呑む中、土煙が少しずつ風に攫われて消え去り、視界がクリアになっていく。其処には……

『……………え……………なん、だ……………これ……………？』

土埃が晴れた先に居たのは、地面に両膝を着き、戸惑い気味に自分の両手を見下ろす

大木のように太い巨体を持った、薄緑色の肉体を持つイレイザーだった。

その姿は竜か、或いは悪魔か。背中から岩のように剛強で巨大な翼を生やしたその外見はそのどちらとも取れる異形の姿をしており、まるでのつぺらぼうのように何も無い顔には紋様だけが描かれ、辛うじて目と口の位置が分かるような面貌をしている。

「な、何デスかアイツは?!」

「さっきのイレイザー……?姿が変わってるけど、でも今までの暴走みたいな感じじゃない……まさか……」

「前に蓮夜さんが言ってた、ノイズイーターが進化した姿?!」

頭から後頭部に掛けて刺々しい角を生やし、顔に描かれているのは違う赤い紋様が全身にあるその異形……シープイレイザーがその身を変貌させたノイズイーターの進化態、ジャバウォックイレイザーを目にした響達は吃驚を露わにし、一方のジャバウォックイレイザーも己の顔をなぞるように両手で触れ、変貌した自身の姿に動揺を隠

せずにいた。

『これ、まさか……変わった、のか……？俺が、ほんとにつ？』

まさか本当に自分が進化出来るとは思っていなかったのか、ジャバウオックイレイザーは動揺するあまり思わず後退りする。

瞬間、地を踏み締めた足から凄まじいエネルギーが放出されて地面を駆け走り、ジャバウオックイレイザーの背後に建つビル四棟を一瞬で木っ端微塵に吹き飛ばしてしまった。

『なっ……』

「う、動いただけでビルが……!?!」

「あ、あんなの放っておいたらヤバいってレベルじゃないデスよ?!今の内に何とかしな  
いとー!」

「進化したばかりの今ならまだ、私達だけでも倒せるかもしれない……！切ちゃん！」

アレがまだ力の一端だとするなら、此処で倒しておかねば後々自分達でも手に負えない脅威になり得るかもしれない。そうなる前にと、恐ろしい破壊力を見て気を逸らせた調と切歌はジャバウオックイレイザーの動きを封じる為に勢いよく飛び出した。

「ふ、二人とも！待って！」

「やらいでか、デエエーースツ!!」

「はあああああアツ!!」

『ツ！う、うわああツ?!』

イガリマとシウルシヤガナを振りかざして突っ込む二人を見て響が慌てて呼び止めようとするが、切歌と調の刃は既にジャバウオックイレイザーの首級に狙いを定めて振

り下ろされ、迫るザババの刃を前にジャバウオックイレイザーは反射的に顔を両腕で庇って怯んでしまう。

そして大鎌と丸鋸がその首に直撃する寸前、二人とジャバウオックイレイザーの間の地面から突如紅の業火が噴き出し、切歌と調を吹っ飛ばしてしまった。

「ウアウウツ?!」

「うあああツ!!」

「き、切歌ちゃん?!調ちゃん!」

『…………え…………な、何が…………?』

二人揃って地面を滑るように吹き飛ばされ、倒れ込む切歌と調に響が慌てて駆け寄る。



一方のジャバウオックイレイザーも吹っ飛ばされた二人といきなり出現した炎を見て困惑を浮かべていたが、炎が少しずつ薄れ消え去っていくと、中から巨大な右腕を振り上げた態勢で佇む紅の魔人……イグニスイレイザーがその姿を露わにした。

「！イレイザーが、もう一体……?!」

『あ、アンタは……』

『……………』

前触れもなくいきなり現れたイグニスイレイザーを前に、響は驚愕と共に警戒を強めて倒れた二人を守るように庇い、ジャバウオックイレイザーは目を見張って戸惑いを浮かべていた。そして、イグニスイレイザーは徐に右腕を下ろすと、背後に振り返りジャバウオックイレイザーの姿をまじまじと眺めていく。

『まさか本当になつちまうとはな……。嬉しい誤算っちゃあそうだが、それにしたつて間が悪いにも程があんだろ、お前っ』

『?え、と……すみません、それは、どういう……?』

『……こつちの話だ。それより一旦引くぞ。お前が進化態になった今、これ以上此処に留まる必要はねえ』

『え?い、いやでも、俺まだ敵の一人も倒せていないし、何の役にも立って……!』

『余計な気遣ってんじゃねえよ。こつちは新しい進化態のお前のデータが取れりやそれでいいんだ。……手前は手前の願いを叶える事だけ考えてろ』

『……!』

相変わらず乱暴な口調だが、最後の一言で彼が自分の身を少なからず案じてくれているのだと察したジャバウォックイレイザーは口を閉ざし、イグニスイレイザーもそんなジャバウォックイレイザーを横目に鼻を軽く鳴らすと、切歌と調を庇う響に目を向けていく。

『お前もお前でタイミングの悪い奴だぜ、立花響……いや、そつちからしたら逆に運が良い、って言った方がいいのかもなあ?』

「! 私の名前を? それに運が良いって、どういう……?」

名乗った覚えのない相手から自分の名前を指された事にも驚きだが、何やら意味深な発言をするイグニスイレイザーに対して怪訝な反応を返す響。しかしイグニスイレイザーはその疑問に答える事なく、自身とジャバウオックイレイザーの周囲に再び紅蓮の炎を灯していく。

『今回の所は見逃してやるが、忘れるな。テメエとクロスは必ずやる……それまでその首、今は預けとくぞ』

直後、炎が二体のイレイザーを包み込むように激しく燃え上がった。そして響が瞬きをした後には二体のイレイザーの姿は何処かへと消え去り、炎の勢いも徐々に弱まって完全に消えてなくなってしまった。

「消えた……逃げた……ううん、見逃されたって言い方の方が正しいのかな……」

向こうがどういうつもりだったかは知らないが、もしあのまま二体のイレイザーを相手にする事になっていたら危うかったのはこちらだったかもしれない。

ノイズイーターが進化した新たなイレイザーもそうだが、睨まれただけでも思わず身が竦む程の重圧感を放っていたあの紅のイレイザーと戦わずに済んだのは正直運が良かったと思う。張り詰めた緊張感が抜けて密かに安堵の溜め息を漏らす中、切歌と調が漸くふらつきながらゆっくりと上体を起こした。

「うっ……な、何が起きたデスカっ……？」

「二人とも！大丈夫？何処か怪我とかしてないっ？」

「は、はい、何とか……でも少し、意識が朦朧として……一体何が……？」

先程のイグニスイレイザーの不意打ちで軽い脳震盪を起こしていたのか、二人は先程のイグニスイレイザーに襲われた事も、二体のイレイザーが撤退した事も覚えていないようだ。

見た感じ大した怪我はなさそうだが、一瞬とはいえ気を失っていたのだ。本部で他に身体に異常がないか一応でも診てもらった方がいいかもしれないと考え、響は二人に手を貸して一先ず本部へ帰還しようとした矢先、響達のヘッドギアに本部からの通信が届いた。

『こちらら本部！装者各員、聞こえていますか?!』

「？はい、こちらら響です。どうしましたか？」

三人の元に届いたのは、何処か切羽詰まった声音の友里の声。そのただならぬ様子に響達の頭上に疑問符が浮かぶ中、別の回線から弦十郎の慌ただしい声が届いた。

『イレイザー達が撤退したとの報告をこちらにも今聞いた。お前達は深追いをせず、至急

南西Nポイントに向かってくれ！こちらも情報部と共に現場に向かってるが、現場で上級イレイザーと交戦中だったクリス君と蓮夜君の反応が突然途絶えた！今もまだ二人の安否を確認出来ていない！』

「っ?!」

「クリス先輩達が…?!」

Nポイントで戦っていた筈のクリスと蓮夜の安否、消息が掴めないという不穏な報せ。弦十郎の口からその報せを受けた響達は思わず息を拒み互いに顔を見合わせると、本部からの通信を繋いだままその場から走り出し、二人が戦っていたNポイントへ急ぎ現場へと向かっていくのであった。



——冷たい風が柔肌を撫で、体の芯から震える程の寒さで意識が覚醒する。目が覚めた先に見えたのは、音を立てて地面を転がる空き缶と、その傍を走り回る小汚いネズミの姿だった。

「……………は……………」

薄汚れた地面の上に私服姿で横たわったまま重い瞼を上げ、臍気にそう呟いたのはクリスだ。いつの間に倒れていたのだろうか、ズキズキとやけに鈍い痛みが頭の裏で疼く。後頭部を抑えながら冷え切った身体を起こそうとするが、何故か酷く身体が重い。それでも地面に手を突いてどうにか立ち上がり、漸く身を起こしたクリスは怠そうに溜め息を漏らした。

「つ……………なんだ、一体……………あたしは確か、さっきまで……………」

妙だ。急に意識を失っていたのもそうだが、やけに頭痛が酷く目眩もする。視界がぐにやりと歪んで焦点が定まらず、俯いた顔を手で覆いながら深呼吸を繰り返し気分を落ち着けて回復を試みようとするが、深呼吸を繰り返していく内に何やら酷い悪臭が鼻を

突き、うつ、と思わず鼻を抑えた。

(く、くっせえっ……何だよこの臭い……！)

あまりにも酷い臭いに鼻が曲がりそうだ。しかしその刺激臭によって目覚めたばかりで覚醒し切ってなかった頭が少しずつ冴えていき、同時に目の前の視界が徐々に元に戻り、目眩も治まっていく。どうやら一時的なもので、ある程度時間が経てば自然に回復出来る程度の症状だったようだ。

ホッと安堵の溜め息を吐き、クリスは漸く視界が戻った顔を上げて前を向くが、直後、その目が徐々に大きく見開かれていき、顔色も次第に驚愕へと染まっていつてしまう。

何故なら彼女が目にした視界の先は、先程まで自分達がイグニスレイザーと死闘を繰り広げていた筈の夜の公園ではなかったのだ。

消え掛けの証明が心持たない光で暗闇を照らす、何処かの街中の薄暗い路地裏。



ゴミ捨て場に積み重なるゴミの山と、排水口から漂うドブの臭いが入り混じったようなキツイ悪臭が鼻を突く。先程から漂っていた臭いの正体はこれだったらしく、クリスは鼻を抑えたまま険しい表情で周りを見渡していく。

「何だこゝろ、どうなってんだ……？ 確かあのイレイザーと戦ってて、それで……」

見覚えのない場所でのいつの間にか倒れていた事に困惑し、目覚めるまでの事を思い出そうとする。

意識を失う前、覚えている限りでは、確か自分は負傷した蓮夜を庇いイグニスイレイザーの前に飛び出したまでは良かったが、イレイザーに対抗する術を持たない自分が奴に勝てる訳もなく、危うく蓮夜と共に消し去られ掛けた筈だった。

しかし、何故かイグニスイレイザーは寸前の所で自分達にトドメを刺すのを取り止め、奴が取り出した透明な本から放たれた無数の謎の光る文字に自分達は包み込まれたハズ。

眩い光が視界を覆い尽くした所までは微かに覚えてはいるのだが、其処から先の記憶は全く思い出せず、恐らくその時に意識を失ったのだろうとクリスは推測する。

(そういえばあのイレイザー、確か此処とは違う所で決着を付けるとか言ってたような……まさか、あの光でどっか別の場所に跳ばされたってのか?)

あの口振りからして、奴は何が何でも蓮夜を仕留めようと固執している感じだった。

ともすると誰の邪魔も入らない、S・O・N・Gの介入が届かない場所にあの透明な本を使って自分達を転移させたという事だろうか。以前自分達が戦った錬金術師達も転移の道具を使っていたし、そういった力を奴らが使えても不思議ではないが、しかし、何故蓮夜を倒せた筈の場面で奴はそんな回りくどい事を……

「……いや、待て……そういえば、アイツは?!」

あの時、傍には自分を庇って負傷した蓮夜が倒れていた筈だ。

意識を失う寸前で一緒にあの光に包まれていたのを覚えているし、共に跳ばされていたらとしても可笑しくはない。彼が急いで治療をしなければならぬ程の危うい状態だった事を思い出し慌てて周囲を見回すが、周りには自分以外に誰もおらず、蓮夜の姿も見当たらない。

「まずいぞ、あのままじゃアイツ……！とにかく本部にも連絡取って、早くアイツを見付けねえと……！」

此処が何処かは分からないが、一緒に転移させられたのだとしたら近くにいるかもしれない。そう思い至ったクリスは蓮夜を探す為に明かりが微かに見える路地の方に向かって急いで走り出しつつ、本部に連絡して今の自分の現位置を調べてもらおうと、懐から取り出した端末を操作してS・O・N・G・に通信を繋いでいくのであった。



クリスが街へ飛び出した所、周りは知らない建物ばかりが建ち並び、一切見覚えのない街風景が広がっていた。

途中で通り掛かった立派な校舎の高校の学校や、遠くに見えるメゾネットタイプのタワーマンションなど自分が暮らしていた街では見掛けなかったし、何よりも街中に漂う空気からして何もかも違う。最初に感じたその違和感だけで此処が自分の慣れ親しんだ街ではないとすぐに分かり、やはり何処か別の場所に跳ばされたかもしれないという読みは間違っていないかったようだ。

携帯の時刻を見ると、現場に着く前にチラツと確かめた時間から三時間近くは経ち日付も変わっていた。

自分達が突然消えてからこれだけの時間が経っていれば本部もきつと血相を変えて自分達の所在を探しているだろうし、何より自分達が消えてからイレイザーと戦った後輩達の安否や街の被害も気になる。蓮夜を探し回ってる内に人気の少ない夜の住宅街に迷い込んだクリスは、先程から本部と連絡を取るべく耳に当てた専用の端末から通信を繋ごうとしているのだが……

「…………畜生、全然繋がんねえぞ…………！何だってこんな時に！」

「ザザザザー！と、耳から離れた端末から聞こえてくるのは耳障りなノイズばかりで、クリスは思わず毒づく。先程から何度本部に連絡を取ろうとしてもこの調子だ。」

「もしやあの転移の際に、故障でもしたのか？携帯の方から連絡しようとしても似たような状態になって使い物にならず、端末を仕舞ったクリスは忙しなく周りを見渡している。」

「（本部と連絡が取れないんじゃ、仮にアイツを見付けられたとしてもすぐに応急処置が出来ななきゃ意味ないぞ…………！あたしはそこんとこてんでだし…………ってかアイツもアイツで何処いったんだ！あんな怪我じゃそう遠くへは行けねえ筈だろうに！」）

「跳ばされる前に近くにいた事から、自分が転移したあの場所の周辺近くに同じように倒れているかもしれないと思ひ必死に探し回ったものの、それらしき人影は見当たらなかった。」

まさか此処へ跳ばされたのは自分だけで、蓮夜はまた違う街に転移していて分断させられたのではないか？焦る気持ちからそんな嫌な想像まで掻き立てられてしまうが、それを振り払うように激しく頭を振り、胸に手を当てて深呼吸を繰り返す。

（落ち着け、焦るな。今此処にいるのはあたしだけなんだ。冷静さを欠いたって何にもならない。本部の助力が望めないなら、現地にいるあたしが落ち着いて対処するしかない）

「いやあああああああ—————っっ!!」

「……………?!何だ……………悲鳴?」

焦る気持ちを落ち着けて行動方針を改めようとしたその時、何処からともなく絹を裂くような悲鳴が聞こえてきた。

驚きと共に思わず振り返った先には薄暗い闇しか見えない。

クリスは一瞬此处で時間を労するべきか否か躊躇するも、やはり声の主を放って素知らぬ振りは出来ず、悲鳴が聞こえた方へと急いで走り出していった。



「——な、何なんですかあ！何なんですかあの変な人達?! どうして私達を追い掛けて来るんですかあ?!」

「俺が知るかそんなこと！良いから走れ！何か見た目からしてヤバそうだぞアイツら！」





達を蒔こうと走るスピードを更に上げるが、しかし……

「あ、きやああッ?!」

「ッ!五月?!」

次の曲がり角を曲がった瞬間、目付きの悪い少年に腕を引つ張られる少女が角を曲がり切れず、勢いあまって足をもつれさせ転倒してしまったのである。少年は倒れた少女を見て慌てて駆け寄るが、其処へ角の向こうから這うように顔を出したダスト達に二人に追い付いてしまう。

その不気味な挙動で迫る異形の群れを前に少女も「ひいっ……!」と短い悲鳴を上げて涙目になりながら見る見る内に顔色も青ざめていき、小刻みに身体を震わせながらその場に力無く座り込み、動けなくなってしまった。

「お、おい!腰を抜かしてる場合じゃないだろ?!奴らがもうすぐ其処に……!」

「む、無理ですう！あ、足が震えて……！」

「っ……！」

両腕を軽く引つ張つて起き上がり、そうとしても立ち上がる事が出来ない少女に、目付きの悪い少年も躊躇った様子で彼女とすぐ其処にまで迫るダスト達を交互に見る。

拙い、拙い。どうするべきか。焦りを浮かべながら瞼を閉じて僅かに悩む素振りを見せた後、少年は額から汗を滲ませながら目を開き、彼女を庇うように前に出て両手を広げた。

「う、上杉君……?!わ、私の事は良いですから！貴方だけでも……！」

「良いワケねえだろ……！ただでさえアイツ等もいなくなつたつてのに、その上お前の身にまで何かあれば、俺はいよいよ教師としてお前らの父親に顔向けが出来ん！」

「で、ですが……！」

よく見れば、少女を庇う少年の手は恐怖が滲み出て微かに震えている。

普段の彼らしくもない、危険を前に身を張って自分を守ろうとする少年のその背中を見て赤髪の少女は悲痛な表情を浮かべ、そんな二人へと地獄の底から漏れるような呻き声を上げてダスト達が一斉に襲い掛かる。迫り来る異形の群れを前に、少年も思わず目を背けて歯を噛み絞めた、その時……

「Killlitter Ichhival tron……」

「……は……?」

「え……歌……?」

不意に何処からともなく、美しい歌が響き渡った。

この危機的状況に似つかわしくない、場違いとも取れるほど透き通った歌声を耳にした少年と少女が思わず顔を上げた瞬間、二人の頭上を誰かが赤い光を弾かせながら信じられない跳躍力で飛び越え、そのまま少年に襲い掛かろうとしたダストの顔面に飛び蹴りを叩き込んだのだった。

そのまま力強く蹴り飛ばされたダストはまるでボウリングの球のように後方にいる他のダスト達に当たって薙ぎ倒していき、少年達の前に着地した赤い光……シンフォギアを身に纏ったクリスは二人を守るようにダスト達と対峙していく。

「どうにか間に合ったみてーだな」

「え、えっ……ええっ?!」

「な、何だ……? 誰だお前?!」

「誰だっというい！それよりも早くソイツを連れてとつと逃げろ！巻き添え喰らっても責任取れねえぞ！」

いきなり現れてダストを蹴り飛ばしたただけでなく、やけに肌気の多いアンダースーツの上に仰々しいアーマーを纏うクリスの格好を見て驚きと動揺が隠せない少年の問い掛けを無視し、クリスは両腰部のアーマーから射出した二丁のハンドガンを掴み取り、すかさずダスト達に目掛けて発砲した。

「うおお?!」「きゃあ?!」と突然の銃声に驚く声が背後から聞こえるが、そちらに意識を向けている余裕はない。

銃弾に撃ち抜かれ、身体に風穴を開けられたダスト達のダメージがたちどころに修復されてしまう。

やはり『記号』を持たない自分では倒し切る事は不可能なのか、クリスは己の力の足らなさに思わず舌打ちしながらもダスト達を近付けまいと銃撃を続けていき、それでも近づくダストは足払いを掛けて転倒させ、足を撃ち抜いてほんの僅かでも動きを封じて

いく。

一方で、目の前で繰り広げられる現実離れした状況を未だ飲み込めていない少年と少女はそんなクリスの戦いぶりを見て呆気に取られた顔で固まっており、立ち尽くす二人を見てクリスが銃撃を続けたまま怒号を飛ばす。

「何やってんだっ！今の内に早く逃げろっ！」

「……………っ！あ、ああ……………！五月、いくぞ！」

「え？で、でも……………！」

「いいから！」

状況は何一つ分からなくとも、クリスが自分達を助ける為に必死に戦っている事だけは分かり、少年はクリスの身を案じる少女の手を取って反対側の道へと一目散に走り出した。

「行つたか……にしても、何でコイツらがこんな所に……!」

二人が逃げたのを確認し、クリスは改めてダストの群れと対峙する。蓮夜とあのイレザーの話からして、コイツらは上級イレザーから生み出される分身体。ならば自然発生で現れたという線はないだろうが、だとしたら何故こんな所にこれだけの数が？

何かキナ臭い物を感じつつも、コイツらに真直直からその疑問をぶつけても、それに答えてくれるような知性を欠片でも持っているようには見えない。

ならば今は無駄な疑問に思考を割くよりもあの二人が逃げ切るまで此処でコイツらを足止めする事だけ考えねばと、クリスは両手のハンドガンの狙いをダスト達に定めて再び発砲しようとするが、その時……

「ぐあああつ!？」

「上杉君!!」

「?!」

背後から悲鳴が聞こえ、振り返ったクリスは目を見開く。

先程逃がせたと思えた少年が血が伝う口元を抑えて壁にもたれ掛かるように座り込み、そんな彼の傍に赤髪の少女が目尻に涙を浮かべながら駆け寄っていく姿が見えた。

そして、暗闇に包まれた曲がり角の向こうからゾロゾロと新たなダスト達が現れて二人に迫る姿も。

「別の群れ?!まだ行つたつてのか!クソッ……!」

すぐさま二人の救出に向かおうと走り出す。だが、それを阻むように今まで足止めをしていたダスト達に囲まれて思うように身動きが取れず、その間にも二人の方に現れた別のダスト達はジリジリと少年と少女に迫り、二人を壁際にまで追い詰めていく。



『コオオアアアアアアアツツ……!!』

「う、上杉君っ……!!」

「ぐっ……!!」（クソツ、どうするっ？ 扉の向こうになら逃げられるだろうが、二人一緒にじゃ間に合わねえっ……ならせめて、コイツだけでも……!!」

醜い口から白い吐息を漏らしながら迫るダスト達を前に、少年は恐怖で震えるあまり自分の服を強く掴んで放さない少女と、自分達のすぐ後ろの扉の向こうを一瞥する。

自分が踏み台になれば、彼女一人を持ち上げて逃がす事ぐらいは辛うじて出来るか。

さしあたっての問題は踏み台になる自分の腕の筋力が、果たして彼女の体重に耐えられるか否かだが……などと失礼な考えは今頭の片隅に退け、少年は少女に扉の向こうへ逃げるように伝えようと口を開き掛けた、その時……

『Code x:clear!』

先程の歌とは違う、無機質な電子音声が鳴り響く。

直後、少年と少女へ迫るダスト達の身体を背後から蒼い一筋の光が横薙ぎに斬り裂き、ダスト達は断末魔を上げる間もなく爆散し、消滅したのであった。

「ひうツ！……え、ええっ……？」

「こ、今度は何だ……?!」

いきなり爆散したダスト達を見て何が起きたのか分からず混乱し、少年はクリスの方を見やった。

もしや今のは彼女の仕業かと一瞬思ったが、クリスは未だ周りを取り囲まれて自由に身動きが取れず、爆散したダスト達を見て同じように驚きを浮かべている。つまり、彼

女の仕業ではない。

ならば一体？と、少年がダスト達が爆発した跡の炎に再び視線を戻すと、徐々に火の勢いが弱まっていく炎の向こうで何かが微かに動くのが見えた。

燃え盛る炎の向こうに俯き加減に佇み、深く静かに呼吸を繰り返す蒼い影。

赤い複眼を闇夜の中で輝かせ、仮面で覆った顔をゆつくりと上げる戦士の姿を目にし、クリスが驚きと共に叫んだ。

「お、お前?!」

『……………』

驚くクリスの声に応えず、蒼い影の戦士……クロスに変身した蓮夜は無言のまま少年と少女に顔を向けると、視線を向けられた二人はビクツと身を竦ませる。

ジツと二人を凝視し、少年の口元以外に外傷がないのを確かめて視線を外したクロスは二人を背に隠すように前に出ていくが、スーツで肌が擦れた右腕に引きちぎられるような激痛が走る。

仮面の下で顔を歪め、あまりの痛みで思わず漏れそうになる声を噛み殺し、瞬時に蒼い光を纏った片脚で地面を軽く蹴り上げたクロスはダストの群れの中へ飛び込むと共に、クリスの近くに立つダストの一体に左腕で肘打ちを打ち込み吹っ飛ばした。

『ガアアアアアアッ!?』

「ツ！お、おい……！お前、動いて平気なのかよ?! さっきの怪我は——！」

『……彼等を頼む……この場は任せてくれ……』

「は？や、じゃなくって怪我……！オイ、ちよつ、人の話聞けよツ！」

全然噛み合わない会話で少年と少女の事をクリスマスに任せ、勢いよくダスト達に向かつ

て飛び出したクロスは鋭い回し蹴りを振るい、戦闘を開始していく。

対するダスト達も突然現れたクロスに標的を絞って奇声を上げながら襲い掛かるが、クロスは蹴りを主体としたスタイルで対抗し、背後から飛び掛かろうとした数体のダストを上段回し蹴りで纏めて粉碎した後、また別のダストをサイドキックでコンクリートの塀に押し付けたまま右脚に蒼い光を注ぎ込んで脚力を強化し、そのままダストを踏み潰し絶命させた。

そしてダストを潰した右脚をゆらりと下ろし、鈍い輝きを放つクロスの赤い複眼をゆつくりと向けられて他のダスト達も後退りする中、クロスは左手で左腰のホルダーからカードを取り出しながらバツクルから立ち上げたスロットにカードを装填し、片手でスロットを押し戻した。

『Final Code x……clear!』

電子音声が鳴り響いた直後、クロスの全身が蒼く発光して凄まじい速さで動き出す。目にも留まらぬ速さでダスト達の間を素早く駆け抜けながら、すれ違い様に鋭い左フツ



『…………ツ…………グツ、ううツ…………!』

—ドシヤッ!—

「…………?!お、おい!」

残り火をジツと見つめていたクロスが突然右腕を抑えながら呻き、そのまま変身を解除して蓮夜に戻りながらその場に蹲ってしまった。いきなり苦しみ出した蓮夜を見てクロスも慌てて彼の下に駆け寄ると、蓮夜が抑える右腕を覗き込んで息を拒んだ。

まともに応急処置すらしていなかったのか、重度の火傷で焼き爛れた皮膚は時間の経過で最初に見た時より更に酷く悪化し、肉が裂けて骨が覗き見えていた傷口も今の戦闘で激しく動き回ったせいか、傷が広がって夥しい量の血が肌を塗り潰していた。

「お、まえ……………こんのつ、馬鹿っ!…こんな状態で戦う奴があるかよっ!死にたいのかっ?!」

「ツ……そんなつもり、は、ないんだが……それよ、り……お前は、無事かつ……？ 奴に受けた傷はっ……？」

「あんなの傷の内に入るかつ！ こっちはあれ以上に死ぬような目に何度も遭つてんだっ！ あれくらいでどうにかなる訳ねえだろっ！」

「……そ、か……要らぬ心配、だったか………よかつた……」

「っ……お前っ……！」

額から脂汗を滲ませて顔色も青掛かり、相当に辛そうなのが分かる。そんな怪我を負わせた要因を作ったのは自分なのに、その事を責める所か、無事を聞いて心底安堵したように溜め息を吐く蓮夜の横顔を見て、クリスは苛立ちとも何とも言えない感情に苛まれて顔に険しい色をひらめかせるが、其処へ……

「……あ、あのっ」



「……………」

背後から緊張で上擦ったような声を掛けられ、振り返る。

其処には先程自分と蓮夜が助けた、頭頂部からピヨコンと一本だけ生えたアホ毛と前髪に付けた星型のヘアピンが特徴的な赤髪の少女が緊張と戸惑いの入り混じった面持ちで佇む姿があり、そのすぐ後ろには、事の成り行きを見守るように彼女の傍らに立つ目付きの悪い少年の姿もあった。

「お前ら、まだ……………」

「その…………危ない所を助けて頂いて、ありがとうございます…………おかげで私も彼も助かりました……………」

ペコツと、未だ目の前で起こった現実離れた状況に困惑を隠せていない様子だが、それでも律儀に頭を下げて助けてもらった事に対して赤髪の少女は感謝の言葉を口にする。

しかし傍らに立つ少年が所在なげに視線を泳がせているのに気付くと「ほら、貴方も！」と怒り気味に促し、叱られた少年は「うっ……」と気が進まなさそうな反応を見せた後「……どうもな」と無愛想そうに頭を下げるが、クリスはそんな二人から顔を逸らして眉間に皺を寄せた。

（拙いな……本部とも連絡が取れないんじゃないや事後処理も望めない……秘匿のシンフォギアをこれ以上無関係な人間に知られる訳には——）

こういった事件に巻き込まれた人間の保護や口止めなどは本来S・O・N・G.の役目なのだが、本部と連絡が付かない現状、これ以上この二人と関わり合いになる訳にはいかない。

口を閉ざして黙り込むクリスの背中を見て、赤髪の少女は頭の上に疑問符を浮かべながら「あの……？」と再び声を掛けるが、目付きの悪い少年はクリス達に向ける懐疑的な眼差しを隠そうともしない。

そんな二人を無視し、クリスは持参していたハンカチを取り出して蓮夜の右腕の傷口に巻いた後、蓮夜を背中に背負ってすつと立ち上がり、そのまま二人に何も応えず蓮夜を抱えながら空高く跳躍し家の屋根から屋根へと跳び移りながら逃走していった。

「あ、ああ?! 待って下さい! 貴方達にはまだお聞きしたい事が!」

「おいつ、もういいだろ五月……! あんな見るからに変な連中に関わったら絶対口な事になんねえぞ、またさつきみたいな目に遭ったらどうすんだ!」

「でもあの人達なら何か知ってるかもしれないじゃないですか! ずっと手掛かりも掴めないし、もしかすると一花達もさつきみたいなのに巻き込まれて……!」

背後から聞こえてくる少女と少年が何かを言い合う声にも振り返らず、クリスは夜の街を翔けながら背中に抱える蓮夜の顔を覗き込む。

先程の戦闘で少ない体力を使ったせいか、呼吸も心做しか荒らく、先程よりも弱まってるように見える。やはり一刻も早く怪我をどうにかせねばならないが、本部とも連絡

が繋がらない以上、今は現地の何処か大きな病院を頼るしかない。

(頼むからそれまで待つてくれよ……お前に死なれたら、あたしは——っ)

思わず口を衝いて出そうになる言葉をグツと堪え、クリスは跳び移った次の屋根を先程よりも強く蹴り上げて夜空を翔けながら、空から目を走らせる。

街を駆け回っていた時にも遠くから見えていたメゾネットタイプのタワーマンションを超えた先に、病院の看板が見えた。彼処なら蓮夜を担ぎ込めるだろうか。問題はこの夜も深い時間に急患を受け入れてもらえるかどうか……。

気掛かりは拭えないが、足を止めてる時間も惜しい。仮に駄目なら次を探すしかないと考えながらクリスは蓮夜を担ぎ直し、スピードを速め、漸く見付けた病院へと急ぎ向かっていくのであった。

第五章／不協和音×BANGBANG  
GIRLの憂鬱  
E N D

## 雪音クリス&amp;五等分の花嫁編（後編）

## 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）

——頬に触れる風の感触に起こされるように、蓮夜は目覚める。何だか随分と長く眠ったような感覚が体全体を支配して心地のよい痺れさがあり、重い瞼をこじ開けると、最初に視界に飛び込んだのは見覚えのない白い天井だった。

「……………?……………?」

見慣れない天井を見て、最初はただ瞬きを繰り返していただけだった蓮夜の表情が段々と訝しげに歪んでいく。

何だ此処は……自分は今何処にいる？

いやそもそも、自分はいつの間に眠っていた？

頭の中が次々と浮かび上がる疑問で埋め尽くされ、状況が飲み込めず、困惑の感情が先立って実際に口に出す余力もない中、再び風が吹き抜けて頬の軟肌を撫でた。

視線だけ動かすと、開け放たれた部屋の窓から吹く風が清潔な白いカーテンを揺らしているのが見える。

カーテンの隙間から微かに差し込む陽射しに目を細めながらも更に視線を辺りに巡らせると、自分が一週間前にS・O・N・Gの本部で寝かされていたのと同じような大きなベッドの上に横たわっている事、更には薬品のような鼻を突く匂いが微かに部屋中に漂っているのに気付いた。

「此処は……まさか、病院……？」

「——目が覚めたみてーだな」

「！」

薬品独特のキツイ匂いと、部屋の様子を観察して得た少ない情報から蓮夜がそう推測する中、聞き覚えのある声を耳にして振り返る。其処には病室の扉を開け、片手に何かが入ったビニール袋を手にして部屋の中に入ってくるクリスの姿があった。

「イチイバル？お前、どうして……」

「その様子だと、昨日の事は何も覚えてないみたいだな……ま、あたしに運ばれてる途中で意識失ってたし、しょうがねーけど……」

ほらよと、そう言いながらわざわざ買ってきてくれたのか、クリスはビニール袋を漁って取り出したペットボトルのミネラルウォーターを蓮夜に差し出す。

それを見て自然と彼女の手からペットボトルを受け取るうとするも、蓮夜は其処で違和感を感じた。動かそうとした右腕が何故か胸の前で固定され、右腕自体も何か窮屈なモ



ノに締め付けられているように感じる。

思わず視線を落とすと、左肩には腕つり用の白いサポーターが掛けられ、更にそのサポーターの中に収まる自分の右腕にも、一週間前まで左腕に付けられていたのと同様の白いギブスが付けられていた。

「これは……？」

「何処から話したもんかな……取り敢えず、あのレーザーにやられたお前の腕の傷は相当酷かったんだよ。さっきも言ったように、お前も氣い失うくらいだったし……。それで、あたしに担ぎ込まれたお前の腕を診た医者達が血相を変えてすぐに手術って事になって、そのまま数時間、朝まで治療が続いてな」

ベッドの傍らに置かれた椅子に腰掛けながら蓮夜の分の水を彼の左手を掴んで手渡し、クリスはビニール袋から自分の分の水を取り出してキャップを開けていく。

「その後、どうにか無事に手術も終わって、此処までお前を運んでもらった後にあたしも

身体を休めろって看護師に言われてな……其処のソファを借りて少しだけ休もうとしたんだが、気付いたらいつの間にか寝落ちしてて、目が覚めたら半日も経ってた。んで、気付けに水でも買ってこようと思つて下の売店に行つて戻ってきたら、お前が目エ覚ましてて今に至るって訳だ……」

「……そうだったのか」

だからなのか、クリスの髪も若干乱れてて寝癖もチラホラ見られるし、声にも何処か覇気がなく、目の下にも隈がある。その様相からどれだけ彼女に相当な負担と心配を掛けてしまっていたかを察して蓮夜は申し訳なさそうに項垂れ、ギブスに巻かれた右腕を抑えながらクリスに頭を下げた。

「すまない、迷惑を掛けて……それと、おかげで助かった。礼を言わせてくれ。ありがとう」

「……………お前がソレ言うのかよ……………」

「……………」

頭を深く下げて謝罪と感謝の言葉を口にする蓮夜だが、クリスはそんな蓮夜から顔を背けてボソツと何事か呟いた。その声があまりに小さく、上手く聞き取れなかった蓮夜が首を傾げると、クリスは顔を背けたまま小さく溜め息を漏らし、気を取り直すように水を一口飲んで蓮夜の方に振り向いた。

「礼なんていい……んな事より、一大事だ」

「？何かあったのか？」

「本部と連絡が取れねえんだよ、ずっとな。お前が手術している間とか、さつき起きた時にももう一度通信しようとしても全然駄目だった……何がどうなってんだ一体っ」

そう言ってクリスが通信機を取り出して起動させると、端末機からはノイズが掛かったような耳障りな雑音だけが流れて来る。やっぱり駄目かと、クリスは落胆から思わず軽く舌打ちしながら端末機を停止させ、席を立って辺りをうろろ歩き回っていく。

「昨晚の戦いでギアを使つたし、本部もその反応を探知してる筈だ。なのに未だに応援も連絡もないってのは可笑しいだろ。まさか、あたし等が抜けた後で何かあったのか……?」

幾ら響がイレイザーと戦えるようになったとは言え、仮にもしあのイグニスイレイザーが自分達と戦つた後に彼女達と相對したとなれば、響達の身に何かあつても不思議はない。

もしやあの後、響達やS・O・N・Gも奴に目を付けられて自分達の行方を追えない程の大きな損害を受けたのではないかと、本部と連絡が取れない不安と心配から嫌な想像を膨らませるクリスの顔をジッと見つめた後、蓮夜は彼女から視線を逸らし、ベッドの脇に設置されている床頭台の上に置かれたミニカレンダーを見付ける。

（あれから半日以上も経っているなら、確かに既に俺達の居所を掴んでも可笑しくはない……それなのに本部と一向に連絡が付かないとなると……うん……?）

思考しながらたまたま視界に入ったミニカレンダーの日付を眺めていると、適当にここ一週間の日付を目で追っていく内にふと気付く。

一見可笑しな所は何もないミニカレンダー。しかし細部まで細かく読み込んでいくと次第にある違和感を覚え始め、蓮夜は僅かに眉間に皺を寄せながら目を細めていく。

「……イチイバル、今は西暦何年だ」

「……は？何だよ急に？」

「いいから教えてくれ。お前達の世界は今何年だ」

「何って、2045年だろ？それが一体……」

「……そういう事か」

クリスの答えを聞き、蓮夜は得心が得たとポツリと呟く。そんな蓮夜の問い掛けと反

応にクリスマスも意味が分からず訝しげな表情で小首を傾げると、蓮夜は何も言わずに床頭台の上に置かれてるミニカレンダーに手を伸ばして掴み、そのままいきなりポイツとクリスマスに投げ渡した。

「うおおう?! な、何すんだいきなり!」

「見てみる。それが多分、今年のカレンダーだ」

「はあ? こんなのが何だって——」

若干強引な物言いに不服さを覚えながらもクリスマスは言われた通りミニカレンダーに目を落とすが、別にこれと言って特に可笑しな点は一見見当たらない。

何の変哲もなく普通にしか見えない、ただのカレンダーに何かあるのかと文句を言いたい気持ちを抑え込みながらジツとカレンダーを睨み付けていると、ここ一週間の日付を目で追っていく内に、彼女もある違和感に気付いた。

（ん……？今日は、火曜の祝日？何だこれ……確か昨日は土曜だった筈じゃ……？）

そう、”曜日が違う”。確か昨日は土曜日で、あれから日付は変わって今日は日曜になっていないと可笑しい筈なのに、何故だかこのカレンダーは今日の日付を火曜日と示しているのだ。

どういう事だ？と困惑を隠せぬまま視線だけを動かし、カレンダーの月の上に表記されてる暦を見ると、其処に書かれている西暦は201——

「……な、んだこれ……お、おい、これって——！」

信じられないといった様子で動揺を露わに顔を上げ蓮夜を問い質そうとするも、ベッドの上に蓮夜の姿はなかった。

「は？」と、思わず乾いた声が口を衝いて出て一瞬呆気にとられるが、すぐに正気に戻り慌てて周囲を見回し振り返ると、部屋の扉の前にかいつの間にか私服に着替えた蓮夜が病室の戸に手を掛け、部屋から出て行こうとする姿があった。

「お、おい?!お前、何処に……!」

「こんな所に居座ってる暇はない。すぐに出るぞ。どうやら急いで戻る方法も探らないといけないらしいからな……」

「ちよ、待てよ!おい!」

そう言って最低限の言葉を残した蓮夜は戸を開けてさっさと部屋から出て行ってしまい、クリスマスも慌てて少ない荷物を片手に部屋から飛び出し、蓮夜の後を急いで追いつけた。





「待て……！おい待て！聞こえてんだろちよつと待てつてっ！」

病院の一階。部屋を後にして廊下をズンズン進んでいき、出口に向かつて止まることなく先を行く蓮夜の後ろからクリスが追い付き、その腕を掴んで引き止めた。

「?どうした、こんな所に長居してる暇はないぞ」

「ぜえつ、ぜえつ……だ、だから待てつて何度も言つてんだろ！こつちは分かんねえ事ばつかで混乱してんだ！何か知ってる風なお前が説明してくんなきゃ、こつちはずつと訳分かんないままでモヤモヤしっぱなしだろうが！」

「……………ああ、そうか……………すまない、先を急がねばと焦るあまり失念してた……………申し訳ない……………」

「(っ)、(っ)……………」

「すまん、忘れてた」と、本当に悪いと思つてるのか分からない無表情のまま謝る蓮夜

の反応に対して青筋が浮かび上がるほどイラツとするクリスだが、此処で話を遮ってはそれこそ時間を無駄にするだけだ。

思わず口から飛び出そうになった文句の言葉を何とか飲み込み、どうにか気を落ち着かせようと深々と溜め息を漏らした後に深呼吸を繰り返すと、幾分かの冷静さを取り戻したクリスは改めて蓮夜に疑問を投げ掛けた。

「それで、一体全体何がどうなってんだよっ？ あたし等が今何処にいるのか、何が起きてるのか、これがどういう事なのかちやんと説明しろ！」

聞きたい事が多々あり過ぎて、一度に疑問を投げ掛けながら、クリスは蓮夜を追い掛ける事に夢中でつい誤って持ってきてしまったミニカレンダーの暦……『2017年』の部分の強調するように蓮夜に突き出す。

それを見て蓮夜もどう説明するべきか言葉を探すように僅かに逡巡した後、感情の機微が分かり辛い仏頂面のまま説明をし始めていく。

「俺も正確には、まだ全てを把握してる訳じゃない。ただ一つだけ言えるのは、此処は間違いない、お前の知る世界じゃないという事だけだ」

「っ？あたしの知ってる世界じゃ……ない？」

「そうだ。あの炎を操るイレイザーと戦ってた最後の瞬間、俺は記憶が曖昧でその時の事はあまりよく覚えていないが、此処は恐らく奴の手によつて跳ばされた、お前のいた物語とはまた別の物語……分かりやすく言えば平行世界、パラレルワールドじゃないかと思ってる」

「平行、世界……？」

その話は以前、弦十郎の口から聞かされた覚えがある。自分達の世界とは異なる歴史を歩んだ、if（もしも）の世界。

確か蓮夜もその違う世界から来たという話だったが、正直あまりにも突飛過ぎる内容に漠然としか受け止めておらず、イレイザー達と戦うようになった今でも深く考えた事

はない。そんな世界に、今自分が此処にいると聞かされた今もクリスは実感が持てず訝しげに眉を顰め、蓮夜もその反応からクリスの心境を察し目を伏せた。

「信じられない、と言いたげな顔だな。まあ、すぐに納得しろと言われても無理からぬ話だとは思うが」

「当たり前だろ！ そんな、平行世界だの平行ワールドだの突拍子のない話、いきなり言われたってっ……」

「突拍子のなさで言えば、お前達の世界のシンフォギアやノイズも大概と言えるだろ。お前達の今までの戦いも本部の記録で閲覧させてもらったが、正直、俺からしてみればどっこいどっこいもいい所だ」

「いや、そうは言ったってなっ……」

確かに、今まで自分達が関わってきた事件、ルナアタックやフロンティア事変、魔法少女事変などの顛末もよくよく考えれば常識を飛び抜け過ぎてると言われても返せる

言葉を持たない。

特に先のパヴァリア光明結社との戦いでは、『神の力』なんて物を巡った激戦を繰り広げたし、その中で戦った強敵達の中には確か並行世界を利用した不死身の化け物もいたハズ。

言われてみれば、平行世界の存在の有無など今更驚く程の事ではない。

「……まあ、分かった。他に納得しようがねえし、百歩譲って平行世界云々の話は取り敢えず呑むとしてだ……それはそれとして、あのイレイザーはそんなとこにあたし等を跳ばしてどうする気なんだ？ 一体何が目的でこんな……」

「其処までの真意は俺にも測り兼ねるが……ただ一つ、俺を今度こそ始末するつもりでというのは先ず間違いない。響が覚醒してイレイザーと戦えるようになった今、これ以上奴らと戦える装者を増やさない為にも、俺の存在は向こうにとつて今まで以上に邪魔に思われてるんだろからな……ともすれば、今回の件も俺とS・O・N・G.を引き離して、孤立無援になった所を叩くつもりなのかもしれない」

「……つまり、あたしが巻き込まれたのは偶々だったって事か？」

「かもしれないし、或いはそれも奴らの狙い通りだった線も捨て切れない。『記号』の力が発芽する可能性を秘めている以上、お前や切歌や調も、奴らにとつて同じように危険因子と見られていても不思議はないからな……」

小さく息を吐き出し、蓮夜はギブスに巻かれた自分の右腕を見下ろしながら話を続けていく。

「いずれにせよ、この世界にあまり長居をするのは危険だ。わざわざ俺達を此処へ飛ばしたという事は、奴は既に俺達を仕留める算段をこの世界の何処かに用意してる可能性がある……関係ない他の世界の人間を巻き込まない為にも、俺達は一刻も早く元の世界に戻るべきだ」

「それはまあ、言いたい事は分かるけどよ……けど、戻るつたつてどうやって？もしかして元の世界に帰る手段とか持つてるのか？」

「いや、俺は持つてない。というかそもそも覚えてすらいらないから、仮に持つてたとしても使い方が分からないから意味がないな……」

「駄目じゃねえかよ！じゃあどうすんだ一体?!」

「心配ない、目処は他にある。俺は持つてないし覚えてもいないが、代わりに敵がその手段を持つてる筈だ。……俺は氣を失っていたせいで覚えていないが、此処へ跳ばされる時、奴がどうやって俺達をこの世界に跳ばしたか覚えていないか？」

「どうやって……あ」

そう聞かれて、クリスは思い出す。確か自分達がこの世界に跳ばされる前、イグニス・イレイザーが半透明の不思議な本を使っていたのを。

「そーいや……何か、変な本みたいなのを使ってたな、スケスケで透明なヤツ。そつから出てきた光つてる文字みたいなのに囲まれて、眩しい光を出したと思ったらいつの間

か気を失つて、気付いたらどっかの路地裏で寝てて……」

「透明な本、奴らが物語の間を行き来する為に使うゲートか……成る程。なら奴を見つけて出してその本を奪い取ればいい。慎重派と語っていた奴の性格上、俺達を他所へ跳ばしただけで満足するような奴じゃない。きっと俺達の息の根を直接止める為にわざわざ追ってくる筈だ。だからその時に奴からその本を奪いさえすれば、それで元の世界にも戻れる筈だ」

「いや奪うって、簡単に言い過ぎだろ！お前もあたしも、奴の力に全然太刀打ち出来てなかったじゃねえか！そんな奴と戦いながらあの本を盗めだなんて……！」

「敵が強いから無理、とは言つてられないだろう。無茶でもなんでも、現状それしか手段がないならやるしかないんだ。……出来なければ、この世界から抜け出せずに一生此処で生きていくしか道はなくなるぞ」

「っ、それは……」



それはそれで困ると、クリスは言葉を詰まらせて押し黙り、蓮夜はそんなクリスから視線を外して病院の出入り口に目を向けていく。

「ともかく今は、早く此処から出て奴が既にこの世界にいないか探し出すぞ。向こうの狙いが俺達なら、此処もいつ襲われるか分からないからな。出来るだけ周りを巻き込まないように考慮して、人気が多い場所も避けて……」

（……一人でとんとん拍子に話進めやがって……せめて一言「お前もそれでいいか？」って聞くぐらいあっても良いだろうに……）

「……？イチイバル？どうかしたか？」

「……何でもねえよ」

自分の意見も聞かずに一人で今後の方針を決めていく蓮夜に内心不満を募らせるクリスの様子を察したのか、蓮夜が首を傾げて不思議そうに問い掛けるも、クリスはぶつきたらばうに言葉を返しながら顔を背け、一人出入り口に向かって歩き出していく。

「要するに、あのイレイザーを探し出してとつちめりやいいんだろ？ならとつとその怪我の治療費払って来いよ。あたしはその間外の空気吸って待ってつから、手続きとか終わったら声を掛けて……」

「……………治療、費？」

「…………？」

鬱屈とした気分を変えようと蓮夜が手続きを終えるまで病院の外で待とうとしたクリスだが、何やら間の抜けた声が返ってきて思わず振り返る。

見れば、蓮夜は何故かポカンとした表情で立ち尽くしており、徐にズボンのポケット、服の内ポケットなどに左手を伸ばして隈無く漁った後、その顔からサーツと血の気が引いて青くなりながらクリスを見た。

「ナイ……」

「は？」

「財布……そういえば、出撃前に荷物を全部本部に置いてきてしまってたな、と……今思  
い出した……」

「は……はアああああああああっ?!?!?!」

大絶叫のクリスの声が木霊する。病院内に似つかわしくないその悲鳴に通り掛かる人々も何事かと振り返り、それに気付いたクリスはハッと口元を抑えながらそそくさと蓮夜の下へ駆け寄り、声を潜めて怒鳴った。

「ば、馬鹿かお前っ……!!何でこんな大事な時に限って忘れてんだよ、タイミング悪いにも程があんだろっ?!」

「いやそうは言われても……戦いの場に持ってきてても邪魔になるだけだし……まさか俺もこんな事になるとは思っていなかった、し……」

言葉尻が少しずつ小さくなっていく蓮夜のテンションが目に見えて沈んでいく。そんな彼の姿を見てクリスも思わず額を抑えて盛大な溜め息を吐き出してしまおう中、蓮夜は申し訳なさそうな顔でクリスに頭を下げた。

「すまないイチイバル、申し訳ないんだが、代わりに立て替えてはもらえないだろうか……後で必ず一括で返すので、頼む……」

「……はあ……まさかこんな形でお前に借りを作る事になるとか、想像もしてなかったぞっ」

何とも締まらないと、二度目の溜め息を吐き出しながら仕方がないと了承し、クリスは懐を漁り財布を取り出す。開いた財布の中に収められているのは、千円札が二枚とちよびつとの小銭が……

「……………」

「……イチイバル？」

「……悪い……あたしも金を下ろすの忘れてて、そんなに持つてなかったわ、今……」

「」

目を泳がせながら、気まずげに顔を背けるクリスのその一言で、蓮夜の顔から一切の感情が消え失せた。そんな蓮夜の表情を直視出来ずクリスは視線を左右にさ迷わせながらそつと財布を仕舞うと、暫し考え込む素振りを見せた後、引き攣った笑みを浮かべながらわざとらしく声のトーンを上げてパンパンと蓮夜の肩を叩いた。

「ま、まあ大丈夫だつ、心配しなくても何とかかなんだろ、こんぐらい！」

「」

「か、金が足りないなら、アレだ、その……こ、口座から足りない分を下ろしてくりや済む話だしな！うんっ」

「……お前達の世界のATMは、平行世界の隔たりを超えて金を下ろせるハイテクマシーンなのか？」

「すまん忘れてくれ。言ってみただけだ……」

この何とも言えない重苦しい空気を少しでも和らげようとして慣れもしないボケをかましたつもりだったのだが、わりと本気のトーンで継るような目を向ける蓮夜にそう聞かれて速攻で取り消してしまった。

ハアツと、最早何度目かも分からない溜め息を深々と漏らしてクリスは蓮夜に背中を向けると、廊下の向こうで何やら自分達を怪しむようにチラチラとこつちを見ながらヒソヒソ話す看護師達の姿が見え、慌てて蓮夜の方へと向き直った。

「お、おい、ホントにドーすんだこれからっ……！払う金がないなんてバレたら、元の世界に帰るところの話じゃなくなるぞコレっ?!」

「……………仕方がない。此処は素直に事情を話して、支払いを暫く待ってもらえないか交渉を……………」

「いや無理に決まってるだろっ…………?! 大体あたしもお前も今は住所不定で身分証明すら通るかどうかもぶつちやけ怪しいってのに、そんなんでどうやって説得すんだよっ! 馬鹿正直に異世界から来ましたとでも言うつもりかっ?!」

「……………? それしか説明のしようがないか?」

「こんな余裕がねえ時にいきなり天然爆発させてんじゃねーよ頭痛くなるわアツ!!」

もう何なんだよこいつはーツ!!と、ただでさえこの切羽詰まった状況に限界まで頭を悩ませているというのに、さもこつちが可笑しいみたいな顔をして首を傾げる蓮夜に対し「ぐあああーツ!!」とクリスも頭を抱えながら絶叫してしまう中、そんな二人の背後から音もなく誰かが近付き、声を掛けてきた。

「そんなにお困りでしたら、その費用、こちらで肩代わりしても構いませんよ?」

「?!なっ?!」

—ドグオオオツ!—

「お”ぶおおうツ?!ひ、肘、があ……っ……!」

不意に後ろから声を掛けられ、てつきり遂に看護師が自分達を不審がって問い詰めに来たのかと思ひ驚きのあまり勢いよく振り返ったクリスの肘が鋭いエルボーとなり、背後に立つ蓮夜の脇腹に突き刺さってしまった。

完全に気を抜いていたが為にモロにその一撃をもらってしまった蓮夜も堪らず撃沈して崩れ落ちてしまうが、当のクリスはそんな蓮夜の様子に気付く余裕もなく、驚愕で瞳を震わせながら目の前の人物の足の爪先から頭まで見上げていく。

「お、お前っ……確か、昨日の夜の……!」



「随分と探しましたよ。……それにしても、まさかこんな身近な所にいたなんて驚きでした。まあ、こちらとしては探す手間が省けて大助かりでしたけど」

そう言つて頭頂部から生えたアホ毛を揺らすのは、前髪に星型の髪留めを身に付け、廊下の窓から射し込む陽の光で映える赤髪のロングヘアーが特徴的な少女……昨夜、クリスと蓮夜が倒したダストの群れに目付きの悪い少年と共に襲われていた、赤髪の彼女だったのだ。

意外な人物との思わぬ場所での再会にクリスもたじろぐ中、脇腹のダメージから漸く復帰した蓮夜がクリスの背中からぬつと顔を出し、赤髪の少女の顔をまじまじと見つめて訝しげな表情を浮かべる。

「誰だ……？ お前の顔見知りか？」

「いや何でだよ、お前も昨日の夜に会つてんだろ！ ほら、あの薄気味の悪い化け物共に襲われてた……！」

「……ああ、ダストに襲われていた二人組の。奇遇だな、こんな所で会うなんて」

「ええ、本当に。私も正直期待半分のダメ元でしたけど、本当に会えるとは思っていませんでした。どうやら今日の私、少しだけツイてるのかもしれないね」

「……ツイてる？」

「どういう意味だ？と、二人が頭の上に疑問符を浮かび上がらせると、赤髪の少女は僅かに視線を上げて廊下の天井を見上げていく。

「……この病院、私の父が経営を務めてるんです。昨日の夜、そちらの方が腕に怪我をしているのがチラツツと見えたので、もしかしたら怪我の治療の為にうちの父の病院に担ぎ込まれたのではないかと思っただけで確かめに来たのですが、案の定でしたね」

「……マジかよ……」

「世の中は意外と狭いものなんだな……しかし、何故今更俺達を？礼なら俺の聞き間違

えじゃなければ、昨晚助けた時に既に耳にしたような気がするんだが……」

親が病院の経営者というのも驚きだが、まさかその病院が此処だったなんて一体どんな巡り合わせなのかと、出来過ぎた偶然に顔を引き曇らせるクリスの横で蓮夜が呑気にそんな疑問を投げ掛けると、赤髪の少女は真剣な眼差しで交互に二人の顔を見る。

「貴方達にお聞きしたい事があつたからです。昨晚、私達を襲つたあの化け物の事や貴方達の事、貴方達が変身していたあの可笑しな姿が何なのか……教えて頂けませんか？」

「……それは……」

「……生憎だが、部外者のお前に話せる事なんて何もねえよ。つまんねえゴシップ目的なら他を当たれ」

「ッ……！ そんな浮ついた目的で貴方達に会いきた訳ではありません！ 私と昨日の彼も、数日前からずつと探してる人達がいるんです！ その人達の行方について昨日の怪物

が何か関わっているかもしれないなんて、だからあの怪物について何か知っていそうな貴方達に話を聞こうと……！」

「?それはどういう……—グイイツ!—うおおつ!」

クリスに冷たくあしらわれた途端、急に必死な形相を浮かべて怒鳴る少女の話の内容が気になって思わず聞き返そうとする蓮夜だが、後ろから強引にクリスに左腕を引っ張られて赤髪の少女から引き離されてしまう。

(馬鹿……! 耳を貸すな! シンフォギアやクロスの事は気軽に話せる事じゃねえし、第一今、あたし等がああのイレイザーに狙われているかもしれないって言つたのはお前だろ! 下手に関わつてしつこく付き纏われでもしたら、コイツまで巻き添え喰う事になるぞ!)

(……それはそうなんだが、しかし……)

「……勿論、無償では言いません。もしお話を聞かせてもらえるのでしたら、支払いに

お困りの様子のそちらの方の治療費の件も私の方で肩代わりします。それなら、貴方達にとつても悪い条件ではないでしょう？」

「ツ！おまつ、人の話盗み聞きしてたのかよ！」

「不可抗力ですよ。貴方達を見付けて声を掛けようとしたら、偶々会話の節々が聞こえてしまっただけです」

先程の激昂した様子から落ち着きを取り戻して毅然とした態度でそう言うと、交換条件を提示した赤髪の少女は懐から取り出した財布を開き、中から黒光りする一枚のカードを取り出し二人の前に突き付けた。

「さあ、どうしますか？一応断っておきますが、父の病院は治療費もそれなりに掛かります。先程小耳に挟んだ貴方々のお話では支払いの目処がないような口振りでしたけど、此処で私の提案を蹴った所で、それだけの費用をすぐに用意出来るアテがあるのですか？」

「ぐツ！コ、コイツ、露骨に人の足元見やがって……！」

「まずいぞイチイバル、どうする？今の俺の目には、あの黒いカードが御老公の印籠に見えるぞ……」

「お前はお前でもう平伏する気満々の見え方になってんじゃねえかよ！もうちよつこの場を切り抜ける方法とか、自分の力でどうにかしようって考えはねえのか?!」

「又、心外だな。俺は俺なりに金を工面する方法を考えているし、既に一つ、その方法に思い至っているとも」

「なあっ……」

「な、何だよそんなのか……ハツ、そういう事だ、残念だったなあ！お前の思惑通りになってやると思うなよ！おい言ってやれ、その思い付いた方法ってヤツ！」

「ああ。先ず、闇ブローカーを探し出して俺の腎臓を売り付けるんだ。その後、」

「悪い待った今のナシだ。……え、なんだって？」

「？人の腎臓ってそれなりに高く売れるモノなんだろう？前にホームレスの仲間から噂で聞き齧った覚えがあつて、ある相場だと確か数万円は固いとか何とか……」

「お前の思い付いた方法ってそれなのかよっ?!なに人が必死こいて拾った生命いきなり無下にしようとしてくれてんだお前っ?!」

「いやしかし、俺のせいでお前に迷惑を掛けられないし、高額金をすぐにでも稼ごうともなればそれぐらいは身を削らないと……」

「文字通りに身を削ってどうすんだよおっ!!それじゃ結局元も子もねーだろうがあっ!!」

此処で止めないと本気で自分の身を売り兼ねない真剣味を漂わせる蓮夜に対してクリスも流石に必死になって止めに入る中、赤髪の少女も顔色も変えず腎臓を売るだの何

だのと真顔で語る蓮夜の話聞いて若干ドン引きした様子で顔を引き攣らせていたが、すぐに咳払いを一つして気を取り直し、ずずいっと黒光りするカードを更に突き出した。

「まあ、私はどちらでも構いませんよ。選ぶのは結局貴方々次第ですから。さあ、どうします？ 私が治療費を立て替える代わりに知っている事を全て話すか、それともその方が仰つてた通り腎臓を売つてでもこの場を切り抜けるか……二つに一つです」

「安心しろ、人の腎臓は片方失くしても大丈夫らしいぞ。つまり肉体的にも懷事情的にも実質ほぼノーダメージだ。やったなイチイバル」

「お前はもう頼むからホントにちよつともう黙つてろつっ……!!!」

何ゆえコイツは自分の身体の一部を売る事にこんなにも前向きなのかと、人の気も知らずに訳の分からない謎のポジティブ精神でグツ！とガッツポーズのように拳を握る蓮夜のせいで逆に追い詰められていき、頭痛は疎か、心做しか胃まで痛み始めてきた。



突き付けられる二者一択、いや、事実上一択しかない選択肢を前に暫しの間考え込んだ末、クリスはやがて盛大に溜め息を吐き出し、項垂れる顔を上げて目の前の少女の眼差しをまっすぐ見つめ返すと、やけに重たく感じる唇を徐に開いていく。答えは――

# 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）①

それから約三十分後……

「——五月っ！」

「上杉君、こっちです！」

赤髪の少女と共に彼女の父親が経営する病院を後にし、蓮夜とクリスが彼女に連れられて市内の雑踏の中を進んでいると、人混みの向こうから血相を変えて一人の人物……昨晩、赤髪の少女と共にダスト達に襲われていた目付きの悪い少年が息を切らしながら駆け寄ってきた。病院を出た際に彼女は携帯で何処かに電話していたようだったが、どうやらその相手は彼だったらしい。

余程急いで駆け付けたのか、少年は息も絶え絶えに赤髪の少女の前で両膝に手を付きながら荒れた呼吸を整えようとするも、何度もゲホゲホツと苦しそうに咳き込んでい

る。

「そ、そんなに急がなくても良かったのに。ただでさえ体力がないんですから……」

そんな彼の様子を見て流石に心配を覚えたのか、赤髪の少女が手を伸ばして少年に近付こうとする。が、少年はその手を勢いよく掴み、顔を上げながらいきなり少女へと詰りめ寄った。

「ちよ、顔近づ……！」

「お前つ……！危険だから一人で動くのは止めろつてあれだけ釘刺しただろうが！なに忠告も聞かずにマジで一人で探しに行きやがってつ、その耳は飾りかつ！」

「で、ですからそれは大丈夫だと何度も言ったじゃないですか！彼等は私達を救ってくれたんですから、少なくとも悪い人達じゃないでしょうし、何か手掛かりを知っている

可能性があるから、いなくなられる前に早く見付け出した方がいいと思つて！」

「だからつて一言相談も無しに一人で行く奴があるかつ！昨日の今日であんな危険な目に遭つたばかりだつてのに、危機感無さ過ぎにも程があるだろつ！普段は馬鹿が付くほど真面目なクセになんだつて今回に限つて抜けてるんだこの馬鹿つ！」

「なあーっ?!」

大層ご立腹な様子の少年の物言いに、赤髪の少女の方も流石にカチンとなる。その後、二人はそのまま売り言葉に買い言葉で声を大に口喧嘩を始めてしまい、そんないい歳して公共の場で言い争いを始める二人を前にクリスはヒクツと顔を引き攣らせていく。

「おい、目的地も何も言わず付いてこいつて言つておきながら何で人をほっぽいて喧嘩始めてんだアイツらつ……」

「これが世に言う痴話喧嘩という奴か。……前にドラマで見た奴ほど壮絶という訳では

ないんだな、実際は」

「いやお前もお前で興味深げに静観してんじゃねーよ」

口論する二人を物珍しそうに眺めながらズレた発言をする蓮夜にクリスが冷静にツツコミを返すが、それから暫く待っても二人の口論は止まる所か徐々にヒートアップして更に加熱化していく様子だ。

このままでは日が暮れるまで続くかもしれないと、二人の言い争いの様子を蓮夜と共に傍観していたクリスは額を抑えて深々と溜め息を吐き、声に苛立ちを含ませて二人の口論に口を挟んだ。

「おい、いい加減その辺にしとけよ。お前達はともかく、あたし等まで周りの見世物になるのはゴメンだぞっ」

「……………アンタ達が、昨日の……………」

「元氣そうだな。昨日はパツと見でしか分からなかったが、その様子だと大した怪我もなさそうで安心した」

「ヨツ」と、そう言いながら左手を軽く上げて蓮夜は少年に呑気に挨拶する。しかし、少年の方はそんな蓮夜とクリスの顔を交互に見て訝しみ、赤髪の少女の手を取って二人に背を向けながらヒソヒソと小声で話し始めた。

（おい、ホントにアイツ等を頼って大丈夫なのかよ……！）

（ですからそれに関しては何度も話したじゃないですか。現状有力な手掛かりを持っていそうなのは彼等しかないんですから、もうあの二人を頼る以外に一花達を見付け出す方法はないんです……！）

（だからって碌に正体も確かめもせず信用するのは早すぎだろ……！あんな訳の分からない格好やら力を使うような奴らが普通な訳がないし、怪しいにも程がある！もし下手してお前の身にまで何かあつたら——！）

「今度は内緒話かよ、何なんださつきからっ」

「まあそうイライラするな。短気は損気とも言うだろう。ほら、昨日うちに遊びに来た切歌から貰ったガムでも食べて落ち着け。まだ俺も手を付けていないから、一緒に食べよう」

「……まあ、くれるってんなら貰ってやってもいいけどよ……」

両腕を組んだままトントントンと二の腕の上を人差し指で叩くクリスの苛立ちを察し、気を遣って懐から取り出した袋に入ったチューインガムを差し出す蓮夜の厚意に一瞬戸惑いながらも、クリスは徐に手を伸ばしてガムを一枚摘む。

——が、次の瞬間パチンツ！と音を立てて、袋の中に仕込まれていたバネにクリスの親指が挟まれてしまった。

思いつきし、しかもよりもよって一番痛い爪の真ん中辺りに食い込むように、だ。

「……………」

「……………」

「おい」

「待て。違う。誤解だ。こんな仕掛け俺も知らない。……おい、おい待て。何故俺の手を握る？何故無言のまま力を込めるんだ？待ってくれ、何だこの既視感……?!ついこの間も同じ目に遭ったぞ何なんだこのデジャブっ！」

「——分かりました。ではその方針で行きましょう。それなら貴方も納得してくれるんですよね？」

「何でそんな仕方なさそうな感じで俺が悪いみたいな空気になってんだよっ。……まあ、一先ずの妥協点としてはそれで妥当だろ。もしあの二人が信用出来ず危険だつて確信した時は——」





「四人で」

「かしこまりました。お席の方へどうぞー」

数分後。一先ず通りに面したファミレスに入った四人は朗らかな笑顔で歩み寄ってきた女性店員に口頭で人数を伝え、店の奥に通してもらう。店内は休日とあって子連れの客が多く賑わっており、適当な席に着いた四人は奥の席からクリスと蓮夜、少女と少年と対面になるように座っていく。

「先ずはお互いに自己紹介といきましょうか。私は中野五月。それでこちらの彼は……」

「……上杉風太郎だ。五月とはクラスメイトで、コイツとコイツの姉貴達の家庭教師をやってる」

初めに名を名乗った赤髪の少女……”中野 五月”に視線で促され、目付きの悪い少

年……”上杉 風太郎”も無愛想そうな口調で自己紹介をする。

その不遜な、というか、何処か棘があるようにも聞こえる口振りにクリスも内心引つ掛かるモノを覚えて不服そうに片眉を上げる中、蓮夜は頭の上に疑問符を浮かべて小首を傾げた。

「クラスメイトで家庭教師、なのか？あんなに彼女の事を気に掛けて心配もしていたし、てつきり恋人同士か何かなのかと……」

「ぶっ！」

「だ、誰が恋人ですかっ!?変な思い違いは止めて下さいっ!!」

「お、おお、すまない……まさか其処まで怒るとは思わなかった……」

「いやアレ、怒ってるっつか、なんつか……」

率直な疑問を投げ掛ける蓮夜に狼狽し、テーブルに身を乗り出してまで風太郎との「恋人」という関係を強く否定する五月だが、僅かに朱が差すその顔が何処となく満更でもなさそうに見えるのは果たして気の所為か否か。

……まあ本人も自覚しているか怪しいし、わざわざ興味のない話を追及する必要もないだろうと、隣で何やら「また余計な事を言つて怒らせてしまったか……」と呟きながら心做しかシユンツとなる蓮夜を他所に、クリスはテーブルに頬杖を突いたまま何処か面倒そうに口を開く。

「あたしは雪音クリス。んで、こっちの腕に怪我してるのが……」

「……黒月蓮夜だ。宜しく頼む」

「ああ。……ところでアンタ、その怪我どうしたんだ？まさか、昨日俺達を助けた時に……？」

「？ああいや、これは……」

「……………」

ちらりと横目でクリスの顔を伺うと、彼女はバツが悪そうな顔で口を閉ざしている。それを見て少し思考した後、蓮夜は風太郎の目を見つめ返してフルフルと首を横に振った。

「実はお前達と出会う前、俺が彼女と合流しようと思ったあまり、道中でドジを踏んで転んで怪我してしまっただけ。その時に打ち所が悪く、骨をやってしまったんだ。だから誰のせいでもないから、気にしなくてもいい」

「……………」

「なんだそういう事だったのかよ。だったらまあ別にいいんだが……………」

「ああ、気に掛けてくれて有り難う。正体も分からない人間を心配してくれるだなんて、案外優しいんだな」

「つ、案外つてのは余計だろ。そもそもそんなんじゃねーし……」

恥ずかしげもなく感謝の言葉を掛ける蓮夜からふい、と顔を背けながら憎まれ口を返す風太郎。

そんな風太郎の反応に蓮夜も首を傾げ、もしや何か彼の気に障る言い方をしてしまったのだろうかと不安が過ぎて隣に座るクリスに思わず目を向けるも、クリスもそんな蓮夜とは顔を合わせまいとそっぽを向いてしまう。

……まさか、目もまともに見られないほど酷かったというのか。そんな不安がより増して全然目を合わせようとしめない風太郎とクリスを交互に見てどうするべきかと蓮夜が困り果ててしまう中、五月が三人の注目を集めるようにわざとらしく大きめに咳払いをした。

「ん、んんっ！……とりとめのない話もその辺でいいでしょう。それで早速ですが、貴方達の事や、昨晚私達を襲った怪物について詳しく話を——」

「ああ……いや、すまない。話をする前に一つ良いだろうか」

互いに自己紹介も終え、いい加減本題に移ろうとした五月の話を蓮夜が胸の前で軽く挙手をしながら遮り、五月は訝しげに眉を寄せた。

「何でしょうか？一応断っておきますけど、私達は既に取り引きを交わした後です。今更事情を話すのはナシというのは——」

「？取り引きって、何の話だ？」

「え……あ、それは、えーつと……」

「いや、そんな大した話ではないんだ。単に俺の腎臓を売るか話を聞かせるかどうかの二択を、其処の彼女に迫られたというだけで」

「腎つ……お前、どんなヤバい取り引きでこの二人を丸め込んだんだよ……」

「ご、誤解です！決して疚しい事はしていません！貴方も人聞きの悪い事を言わないで下さいー！」

「……フオローしたつもりが怒られてしまった……」

「寧ろ今ので助け舟出してたつもりだったのに驚きだわ」

てっきり先の取り引きの時の意趣返しの告げ口かと思つたが、どうやら本人としては全くの善意100%だったらしい。

とは言え今の言い方では相手にその旨が伝わる筈もなく、クリスは五月に叱られて更に凹む蓮夜に呆れた眼差しを向け、風太郎もドン引きしつつも取り引きの内容が気になり隣に座る五月を懐疑的に見つめるも、すぐに気を取り直して蓮夜に視線を戻していく。

「それで、さつきアンタが言い掛けてたのって何だったんだよ？」



「ああ、いや……話の前に、何故お前達が其処まで俺達の事や、あの怪人の正体にこだわるのか理由を聞いておきたかったんだ……。説明するにしても、正直こちらの話も複雑で一からとなると長くなる。せめてそちらの知りたい事を教えてもらうと、俺達も話の内容を纏められて助かるんだが」

彼らがただの興味本位から自分達の事を知りたがってる訳ではないというのは、先程の病院での五月の剣幕から何となく伝わったが、その時に彼女が口にしていた「探している人達がいる」という言葉の真意も気になる。

最もらしい話の流れからそれとなく向こうの事情を探ろうとする蓮夜の真意を察し、クリスも無言のまま視線だけで同意の意を示すように風太郎達の顔をジッと見つめると、風太郎と五月は一度顔を見合わせた後、仕方がないと五月が小さく吐息を漏らして蓮夜達に視線を戻し、口を開いた。

「先程病院でもお話したと思いますが、私と彼はここ数日、ある人達をずっと探し回ってるんです。それが先程彼も話していた、私の姉達で……」

「探してるって、行方が分からないって事か？ただの人探しなら別に警察とかにでも頼めばいいだろ」

「警察にももう相談して捜索届けも出したし、今もアイツらの事を探してもらってる。……ただそれでも手掛かりは全然掴めてねえみたいだし、俺達もここ数日間、色んな奴に聞き込みしてアイツ等を最後に見掛けたっていう場所を虱潰しに探し回ってたんだ。それで昨日の夜も、その場所を探し回ってたらいきなりあの化け物達に襲われて……」

「成る程。其処へイチイバルと俺が駆け付けた、という事か」

ダスト達に襲われていた二人が何故あの時間あんな場所にいたのか、疑問が一つ解けて納得する蓮夜。そんな彼とクリスの前に、五月が懐から数枚の写真を取り出している。

「行方不明になっているのは私の四人の姉達で、此処に写っているのがその彼女達……長女の中野一花、次女の二乃、三女の三玖、四女の四葉です」

そう言いながら、五月はテーブルの上に四枚の写真を横並びに並べていく。蓮夜とクリスもその写真をよく見ようと僅かに身を乗り出していくが……

「……なあこれ、全員顔一緒じゃね？」

「……どれが誰だかさっぱり分からない……」

写真を見たクリスと蓮夜の顔が揃って無表情になる。何故なら五月に見せてもらった写真に映る少女達は服装や髪型などの差異は異なるが、どれも同じ顔で誰が誰なのか全く分からないのだ。

「ま、コイツら五つ子だから顔も当然一緒だからな。学校の連中でもよく間違ってくるから分からないのは無理もない。……俺も最初の頃は相当苦労したもんだ……」

「何か急に哀愁漂う目で語り出したぞ、何だアイツ……」

「いえまあ、一応彼も姉妹達の事で色々あった身なので……といつか今でもそうなんですよ」

「？」

「人知れぬ苦勞が、という奴か。色々大変だったんだな……因みにだが、もしやこの物静かな雰圍氣の彼女が長女か？」

「いえそれは三玖です。一花はもつと髪の毛先が短いのが特徴ですよ」

「成る程。勉強になる」

「なる訳ねーだろ4分の3がそれじゃねーかよどうやって見分けろってんだそれで」

全然助言になっていない助言に馬鹿正直に頷く蓮夜を他所に、4人の内3人目もショートヘアの行方不明の姉妹達の写真を見てクリスが真顔でツッコむ。そんな二人のやり取りに五月も苦笑を浮かべながら姉達の写真を見下ろし、説明を続けていく。

「最初は長女の一人花が仕事先で突然いなくなつたと連絡が届いて、皆で彼女を探していません。でも彼女の行方を追う内に今度は四葉が、その次に三玖、二乃と……皆、まるで神隠しにあつたみたいの前に触れもなく消えてしまつたんです……」

「消えたつて……誰もいなくなつた所を見てないのか？」

「……ああ。四葉が消えた後、念のため三玖と二乃には俺や五月が傍にいて一緒だった。なのに三玖も……」

「二乃も私と学校を出てから一緒でしたが、ずっと一緒にいた筈なのにカバンを残して消えていたんです。人が近づく気配なんてしなかつたのに、いつの間にか……」

その当時の記憶を思い出しか、顔を俯かせる二人の表情には後悔の念が滲み出ている。そんな二人を見るとこれ以上の追求は若干気が引けてしまうが、それでも事件の全容を把握する為に蓮夜が更に疑問を投げ掛ける。

「その後、家に身代金の要求とかの電話は？」

「……全くありません……ですから姉達の無事を確かめる術もなく、もうどうしたらいいのかわからなくて……」

（……金目当ての誘拐が目的なら、向こうから何かしらの連絡がないのは確かに可笑しいか……ともすると……）

顔を俯かせ、両手でスカートを握り締めながら辛そうに呻く五月から話を聞いた蓮夜も事件の不可解さに顎に手を添えながら考え込む素振りを見せる中、風太郎は蓮夜とクリスをまつすぐ見据えて口を開いた。

「正直、俺はまだアンタらの事を其処まで信用出来てない……それでも、もしアイツ等がいなくなつた事とあの化け物が何か関係しているなら、教えて欲しい……頼む」

「上杉君……私からも、どうかお願いします……！」

「いや、そうは言われたってなあ……」

正直、あのダスト達と彼女の姉達がいなくなった事が関係しているのかなんて自分達にだって分からない。確かな事も分からないのに揃って頭を下げる二人にこちらの事情を話した所で、果たしてそれが彼らの望む手掛かりになるかどうか……。

一体どうしたものかとクリスは頭を悩ませてチラリと隣に座る蓮夜に視線を向けると、蓮夜は思考に浸ったまま瞳を伏せ、瞼を開けて二人の顔をジッと見つめた後、深く頷き返した。

「分かった。俺達が知っている範囲で良ければ話そう」

「っ！本当か！」

（お、おい……！マジで話すつもりなのかよ?!）

蓮夜の腕を引っ張り、二人に背を向けてクリスが慌てて耳打ちする。しかし蓮夜は真

顔のまま静かに頷き、

(どの道取り引きを交わした以上、こちらもある程度事情を話すしかないだろう。……それに恐らく、彼女の姉達が巻き込まれたのはただの失踪事件じゃないかもしれない)

(……どういう事だ?)

小首を傾げて聞き返すクリス。蓮夜は怪訝な表情でこちらの様子を伺う風太郎と五月を一瞥し、

(あの炎使いのイレイザーはこの世界に繋がる移動手段を持っていて、しかもこの世界には既に上級の分身体であるダスト達が蔓延って、彼らを狙っていた……つまり此処はお前達の世界と同様、既に奴らの標的の一つとして狙われている可能性が高い。だとすれば、彼女の姉達の失踪の件も……)

(……まさか、イレイザーがこの世界を改竄する為にやったのか?ただの学生を狙って?)



正直、誘拐された彼女達がシンフォギア装者のような特殊な人間とは思えない。一見何処にでもいるような普通の学生にしか見えない彼女達を何故イレイザーが狙うのか理解が及ばないと狐疑深い目付きになるクリスに対し、蓮夜はその疑問に答えるのも兼ねて話を続けていく。

（奴らが改竄の為に狙うのは、必ずしも特別な力を持った人間ばかりという訳じゃない……そうだな……）

キヨロキヨロと、蓮夜は何かを探すように店内を見回し、遠く離れた席でヘッドホンをしてながら読書をする女性客に目を付けて、彼女が読む本を指差す。

（例えば、彼女が読んでいる本が恋愛小説だとしよう……あの本の結末が仮に主人公とヒロインが結ばれる事なら、奴らは改竄の為にその結末を変えようとする筈だ。その場合、奴らはどういう風に動くと思う？）

（どうって……あー……主人公とヒロインの二人が結ばれないように引つ掻きますと

か、引き離す……とわかか?)

不意の質問に戸惑いながらもそう答えると、クリスは其処で「ハッ」となる。その反応に蓮夜も無言で頷き返し、肩越しにチラッと風太郎と五月に目を見やる。

(まさかつ、アイツらがそうだったのか?)

(例えばの話だ。俺にも確信はない。ただ、奴らが普通の学生を意味もなく誘拐するとも思えない……攫われた彼女達に何かしらの共通点があるのだとしたら、つまりはそういう事なんじゃないかと俺は思うんだが……)

(いやだからって、お前それってつまり……)

「……?」

二人して振り向き、風太郎の顔をジーツと見つめていく。穴が空きそうなほど二人から凝視されて風太郎も困惑を隠せない中、暫し風太郎の顔を観察していたクリスはやが

て顔を背けながら溜め息を吐き、

「四人も攫われたって事は、全員が「そう」かもしれないって事だろ……？ 姉妹揃って男の趣味悪くねーか？」

「おい下手な事を言うもんじゃないぞ。人は見掛けに寄らないと言う。きつと彼女達にしか分からない魅力というのがあるんだ。……多分」

「……何の話か分かんねーが、何となく喧嘩売られてるつてのは分かるぞ、オイッ」

「何故でしょう……何だか私まで不本意な纏め方をされているような気が……」

人の顔を見てわりとド失礼な発言を口走るクリスと蓮夜に風太郎は額に青筋を浮かべ、五月も激しく反論したい思い違いをされているような気がしてモヤモヤした心境になる。そして蓮夜は今のやり取りを二人に聞かれて若干気まずげな様子でクリスと風太郎達を交互に見て二人に軽く会釈すると、再びクリスと小声で会話を続けていく。

(ともかく、ダスト達に襲われた彼らがイレイザーの標的になつてゐる可能性は十分にある。もしあの二人の身にまで危害が及んでこの世界が改竄されでもしたら、俺達もこの世界からの脱出が困難になるかもしれない……だから、)

(……アイツらに事情を話して、そんで攫われた失踪者達も助け出す……そう言いたいのか?)

(……出来ればそうしてやりたい、と思つてる……無論、その分元の世界に戻るには大分遠回りする事になると思うが……)

(……………)

何処か言い難そうに若干顔を俯かせながらそう告げる蓮夜をジーツと睨み、クリスは何も言わない。だが暫しその顔を凝視した後、クリスは仕方なさそうに小さく溜め息を吐いた。

(ま、此処まで事情を聞かされて無視するつてのもそれはそれで後味は悪いわな……い

いぜ、あたしも乗る)

(……いいのか?)

(いいも何も、アイツの取り引きに乗ったのはあたしだ。それをこつちから切るって訳にはいかないだろ。……それにあのイレイザーの狙いがあたし等なら、少なくとも此処にいる間は元の世界にいる後輩共に危害が及ぶって事もない。なら焦って帰る必要もねーだろ)

(……)

(?何だよ、人の顔ジロジロ見て)

(……いや。お前は本当に仲間想いなんだな、と……その一面が見られて、少し嬉しく思ってる……)

(は、はあっ?!何だ急に?!あたしは別に、そんなっ……!)

「……おい、まだ話は終わらないのか」

「ん……ああ、すまない待たせてしまって。そう、だな……先ずは俺達の事から話そう。  
俺と彼女は——」

(ツ……何なんだコイツ、ほんとにつ)

本当に調子を狂わされると、こっちの気も知らずにマイペースに二人に自分達の事を説明し始めていく蓮夜をジト目で睨むクリス。その後、蓮夜の口から語られる突飛な内容に風太郎も五月も呆気に取りられる様を横で見えていてクリスは溜め息を吐き、蓮夜の説明を補足する為に三人の会話に加わっていくのであった。

## 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）②

「——ほう。これがノイズを喰らったイレイザーの進化態の姿か……実に素晴らしい」

『……………』

一方、シンフォギアの世界にある薄暗い廃工場内。屋根の隙間から僅かな光が射し込む工場の中心には、何やら居心地が悪そうにジャバウオックイレイザーがソワソワと身じろぎながら佇む姿があった。

そんな彼を囲むように、人間態に戻ったアスカとクレン、そして二人から報せを聞いて駆け付けたデュレンがまるで品定めでもするかのようにジャバウオックイレイザーの身体を眺めながら彼の周りを歩いていた。

「お前のお望み通りの新種だ。これで、前の俺の失態は帳消しって事でいいんだよなあ？」

「……そうだな。素直に役目を全うしたのであれば俺から咎める事は何も無い。今回は良くやったよ、お前は」

「そーかよ。そりゃどーも」

そう言いながらも、アスカは大して嬉しくもなさそうに手をヒラヒラさせデュレンからの慰労の言葉を適当に流す。一方でデュレンもそんなアスカから興味なさそうに視線を逸らし、ジャバウオックイレイザーの全身に刻まれた紋様をジツと眺めると、彼の腕の紋様を人差し指で軽くなぞっていく。

「この紋様……いや、文字か……？ 解説は今すぐには無理だが、これも俺達の進化の際にはなかった物だ。やはりノイズを——物語の産物を喰らえば、我々とは異なる進化を辿るようだな」



「ふうん……つまり、デュレンの見通しは間違つてなかつたつて事かなあ？」

『うう……』

デュレンと同様、クレンもジャバウオックイレイザーに好奇の眼差しを向けながら顔を近付けるが、当のジャバウオックイレイザーはそんな二人の視線に耐え兼ねて完全に萎縮してしまい、それを察したアスカが後頭部を掻きながら呆れた口調で口を開く。

「おい、あんましジロジロ見てやるなよ。ソイツもお前らの視線が薄気味悪くて居心地悪いってよ」

「おつと……ごめんごめん。僕らも初めて見るタイプのイレイザーなものだから、珍しくて遂ね。別にとって食べようだなんてしないから、そんなに怯えなくても大丈夫だよー？」

『い、いえ、えと……はい……』

アスカに咎められても尚、クレンはヘラヘラとした笑いを浮かべながら謝罪して距離を離す。それに対しジャバウオックイレイザーも気まずげに肯くと、クレンはデュレンに目を向けて不思議そうに自身の顎を撫でる。

「それにしても疑問だよねえ。彼の進化は何がきっかけになったんだろ？ 戦いの中で追い込まれてっただけなら、今まで暴走した彼等とそう変わりない筈だし」

そう、これまでもノイズを喰らったイレイザー達が暴走して歪な進化を辿った事は幾度となくあったが、今の彼のように正しく進化を果たした者は誰一人としていなかった。

一体彼らと何が違ったのか？ その疑問をクレンが口にするのと、ジャバウオックイレイザーは人間体の男の姿に戻りながら自身の両手を見下ろしていく。

「正直、あの時は俺にも何が起きたのか分からなくて……ただ、身体の奥から凄い力が湧き上がった時に、自分の事とか何もかも分からなくなり掛けたんです……それで大切な記憶を消されそうになった瞬間、それを奪われたくなくて全力で抗ったら、いつの間に

かあの姿に……」

「……？ようは、暴走した時の衝動を意志の力だけで抑え込んだって訳かよ？そんなんで進化態になれるってのか？」

「さあね。僕達が進化した時とはどうにも勝手が違うようだから、判断が難しいし……デュレン、君なら何か分かって——」

と、男の説明を聞いても釈然とせずデュレンの意見を伺おうとしたクレンだが、彼の顔を見た瞬間、クレンの表情が怪訝な物に変わった。何故なら、

「……そういう事か……成る程……ククツ……」

……顔を手で覆い、デュレンはクツクツと意味深な笑みを漏らしていたからである。

(…………デュレン…………?)

「…………では、後は俺の仕事だな。此処からは彼の身は俺が預かるう」

「…………へ？」

「あ…………? 預かるって、んだよ急に？」

普段の冷淡な彼からは考え付かないようなただならぬその様子を見て訝しげに眉を顰めるクレンを他所に、突然そんな申し出を口にするデュレン。いきなりの事に男とアスカも怪訝な反応を返すが、デュレンは構わず男の顔を見つめて目を細める。

「漸く苦勞して手に入れた新たな進化態、その能力や進化に至る為のメカニズムを解明するには然るべき場所と機材が必要になる。もしもの保険の為、この物語の中で予め用意しておいた研究用の施設に彼を連れていき、一から彼の肉体を調べ上げる。正しい進化の為に必要な条件を究明出来なければ、他のノイズ喰らいのイレイザー共を進化させるのにも余計な時間が掛かるままだからな」

「それは……まあ、そうかもしんねーけど……」

「あ、あの、調べるって、どれくらい掛かるんですか？俺には今、他の事に時間をかまけてる余裕なんて……！」

自分には一刻も早くこの力で助けねばならない人達がいる。故に今は悠長に実験や調査に付き合っている暇はないと断りを入れようとする男だが、デュレンは眼鏡越しに男の目を見つめ返し、

「確かに今の君なら、大切な人達を救う事は出来るだろう……が、それは飽くまで力を正しく行使出来ればの話だ。進化したばかりで、力の制御もロクに出来てない今の状態で君の大切な人達にその力を用いれば、君の大切な人達の身に何が起こるか……俺にも保証は出来んぞ？」

「それ、は……」

淡々とした声音のデュレンにそう言われ、男は思わず言葉を詰まらせてしまう。確かに、先程の戦闘でも自分は力の制御が叶わず街に余計な被害を出してしまった。仮にもし、あんな恐ろしい力を彼女に向けてしまった時には……。

そんな想像する事すら拒む最悪の事態が頭を過ぎる男に対し、デュレンはそつと彼の肩の上に手を置いていく。

「そう不安がる必要はない。我々に任せていけば、直ぐにその力をモノに出来るようになる……。君の大切な人達を守る為にも、暫しの間辛抱してくればいい」

「……………わかり、ました」

僅かに逡巡する素振りを見せた後、男は渋々ながらも了承してデュレンに頷き返した。その返答にデュレンも何処か満足気に笑うと、再び無感情に戻った眼差しをアスカとクレンに向けていく。

「そういうワケだ、彼の身はこちらで預かる。お前達はこのまま黒月蓮夜とS・O・N・

Gの動きを監視し続けろ……異論はないな？」

「……ハッ。異論も何も、どうせこつちが文句言った所で聞き入れる気なんざ更々ねーんだろ？」

「分かっているなら減らず口を叩くより先に、とつと次に動け。こちらには時間を無為に労する暇なぞ何一つないのだから……特に、漸く手に入れた進化態の研究を奴等に邪魔されるなど、以ての外だ」

「……………」

ジロリツと、デュレンの眼鏡越しの鋭い眼差しがクレンにだけ向けられる。その意味深な視線に気付いたクレンも無言のまま僅かに目を細めて見つめ返すと、暫しの交錯の後、デュレンは静かに目を伏せてため息混じりに言葉を続ける。

「この際だ。奴等の足止めが叶うのならこちらも貴様等のやり方に口出しするつもりはない……が、これ以上手駒を無駄に浪費してはくれるなよ？」

「……そりゃあ勿論。そうなたらまた一から駒探ししなきゃならないのは僕らなんだし、余計な面倒は僕らだつて御免だしね」

だからそうならないように出来るだけ頑張るよと、クレンは人当たりの良い笑顔と共に片手をヒラヒラさせるが、デュレンもそんなクレンに大して目もくれず視線を逸して男と一言二言会話を交わすと、例の施設とやらに行く前に一つ用事を済ませたいという男の希望を聞き、それが済むまで外で待つと先に廃工場を出ていった。

(……さっきのあの感じ……こつちが探りを入れ始めると気付いているのか、それとも……)

「——おい、おいクレン？何だよんな難しい顔して、どうかしたのか？」

「ん……いや、何でもないよ。別に気にしなくていいって」

「や、何にもつて「あ、あの……！」……あ？」



そうは言っても、何処か神妙な面持ちを浮かべるクレンのその様子は何時もの飄々として掴み所のない普段と何処か違って揺らいでいるように見える。その違和感が気になりアスカが追及しようとするも、それを遮る様に背後から声を掛けられ振り返ると、其処にはアスカの下に駆け寄ってくる男の姿があつた。

「お前……?」

「別れる前に、どうしてもお礼を言っておきたくて……。俺がこの力に目覚められたのも、アンタのおかげだ。本当に、ありがとう」

「……別に、礼を言われる筋合いなんかねえよ。こっちはこっちの都合で手を貸しただけなんだし、大体俺は大した事なんて何も——」

「そんな事ないよ。アンタの励ましもあつたから、俺は大切なものを見失わずに済んだ。失い掛けた自分自身を保つ事が出来たんだ……だから本当に、ありがとう」

「……………」

そう言つて素直に感謝の言葉を口にし、男はアスカに穏やかな笑みを向ける。一方でアスカはそんな彼のお人好しぶりに呆れた眼差しを向け、バツが悪そうに頭を掻きながら軽く舌打ちする。

「んな事わざわざ言いに来る暇があんのかよ……。まだお前の目的は何一つ叶っちゃいねえんだ。こんな所でグズグズしてねーで、さつさと力を制御出来るようになって来い。その後は手助けした借りも返してもらうんだからな。忘れんじゃーねえぞ」

「あ、うん。それは、必ず……。それだけ言いたかったんだ。それじゃ、俺はいくよー！」

本当にありがとうと、アスカとクレンに一礼して男はデュレンが待つ廃工場の外へ走り去つていく。そんな男の背中をジツと見送るアスカに、クレンが横から顔を覗き込んだ。

「キミも相当捻くれ者だよねー。折角の感謝の言葉ぐらい、素直に受け取つてあげても

バチは当たらないと思うけど？」

「そんなもんで一々一喜一憂してられる状況じゃねえだろ？別にデュレンの野郎に同調する訳じゃねえが、奴が言うように俺達にとつての脅威はまだまだ残ってる。……黒月蓮夜と、奴から力を分け与えられた装者共をどうにかしない限り、仮にアイツの改竄が成功したとしても結局はなかつた事にされ兼ねねえんだからな……」

「だからまだ気を抜くには早い、か……ま、それに關しては確かにつて思うよ。現にこんな厄介な状況に陥つたそもその原因だって、僕らが彼の死をきちんと確かめなかつた驕りからなんだし」

新たな進化態を覚醒させられたとは言え、それがまだゴールという訳ではない。寧ろ此処で油断してあの男を倒されでもすれば、折角の苦勞が水泡に帰す事となる。

そうなる前に蓮夜と、奴から『記号』を与えられた装者達を何とかしなければならぬいとアス力は強い決意を内心新たにし、クレンもそんな彼に同意を示すと共に近くの古い木箱の上に腰掛けていく。

「それで、そっちの首尾はどうなんだい？僕が提案した策は上手くいったんだろ？」

「……まあな。予定はちと狂ったが、取り敢えず黒月蓮夜と装者を別世界に跳ばす事は出来た。後は其処で奴らを始末しちまえば……」

「この世界に異変を察知される事なく、装者の数を減らし、クロスも倒してこれ以上の脅威が増える事もなくなる……。一先ずそれだけの結果を出せば、デュレンも今以上に口煩くはなくなるよ、きつと」

「だといけどよお……つか、お前の話だと奴らを跳ばした先の世界にもイレイザーがいるんだったよな？そいつとも連絡を取りたいんだが、何処にいる？一応こっちの動きは事前に伝えてあんだろ？」

「それはもち……あれ……？」

人差し指を立ててその心配はないと言い切ろうとしたクレンだが、不意にその表情が

凍り付いて固まってしまふ。

「……おい、何だよそのリアクション？お前から言ってきた作戦なんだから、向こうにもちゃんと事情説明くらいしてあんだろ？」

「あー……いやそれが、実は向こうにも説明しようと思ってたんだけど、ちよつとやる事が出来てすっかり忘れてたと言うか、何と言うか……」

「なんつ、はああつ?!何だそりやつ……！お前が話を通してなきや連絡しようがねえだろうがつ！つてかそもそも、あの二人が現れたつてこと知らせなきや不味いんじゃないのかつ?!」

「うーん、だろうねー。事情知つてなきや混乱するだろうし……下手したらそのせいで蓮夜君に倒されちゃう可能性もあるかあ……アスカ、悪いけど彼を探して自分で事情を説明しておいてくれる？僕はほら、すぐにまた元の任務に戻らなきやいけないから」

「つ、つたくつ、相変わらず適当なところあるなあお前……！」

「まあまあ、そうカツカツしないで。上手く行ったら僕から何か奢ってあげるからさ。ホットミルクとかでいい？」

「ガキじゃねーんだよ！いらねーわ！」

クソツ！と、何処までも飄々とした態度でからかってくるクレンに毒突きながらアスカが掌を上にして右手を中空に掲げると、掌の上に透明な本が出現する。

そしてパラパラッと本のページが勢いよく開かれると共に淡い光が放たれてアスカの身体を包み込んでいき、光が止むと、其処には既にアスカの姿はなく例の世界へと転移し消え去っていった。

「行っちゃったか……。後の事は彼に任せれば問題ないとして、こつちもこつちでそろそろ仕上げに掛からないとなあ……」

アスカの転移を見届けた後、一人残ったクレンはそう呟きながら首筋を軽く摩り、月

の光が隙間から差し込む天井を見上げていく。

（……さっきのあの様子からして、やはりデュレンは僕らにもまだ話していない何かを隠してる……そいつを暴く為にも、やっぱり『彼』にも動いてもらうしかないか……）

先程デュレンが見せたあの妖しげな笑み。以前から自分が感じていたデュレンへの疑心は晴れる所か、寧ろ深まるばかりで嫌な予感を拭い去れない。

仮にもし、彼が自分達にとって良からぬ事を画作しているのであればその企みを明るみに出す為、二人にも何も告げず呼び寄せた『彼』に裏で動いてもらう必要がある。

（蓮夜君とも関わりが深い『彼』の力さえあれば、いざと言う時にはデュレンを止める為の戦力になれる……。まあ残る不安としては、蓮夜君と同じライダーである『彼』が僕らに何処まで力を貸してくれるかって事と——）

——この世界が彼という存在により、『破壊』されてしまわれぬかという懸念。

良くも悪くも予測が付かないあの男が、果たして何処まで自分の思惑の通りに動いてくれるか否か。

下手をすれば自分達にとって新たな脅威にもなり得るが、それもデュレンの企みを暴く為にも多少のリスクは仕方がないと割り切り、クレンは薄い溜め息を吐き出しながら自分が任された持ち場へ戻る為に歩き出していくのだった。



「——着きましたよ。此処が私達の家です」

ファミレスで風太郎と五月に諸々の事情をある程度説明した後（シンフォギアに関しては連絡が取れないS・O・N・Gへの配慮と秘匿の為、クロスシステムのシステムを人間でも扱えるように設計した別系統の装備であるという扱いで通した）、店を出た四人は—先ず姉達が行方不明になった時の状況などについてもう少し詳しく話を聞きたいとい



う蓮夜の希望の元、五つ子達が共に暮らしているという自宅に向かう事となったのだが  
……

「……………なあ。これ、ほんとにお前らの家か……………」

「?ええ、そうですけど、何か?」

「……………何だか、想像していたのとは大分違うな……………」

案内された五月ら五つ子達の自宅前に立ち、彼女の家を見上げるクリスと蓮夜の顔は  
何処か肩透かしを喰らったかのように呆気にとられていた。

何故なら、父親が大病院の経営者であると聞かされた五月達の自宅は、何処にでもある  
ような川辺の近くにポツンと建つ、寂しい二階建てのアパートだったからである。

「親が病院の経営やつてるって聞いてたからってつきりこう、なんだ……………もつとThe・金  
持ちみてーな豪勢な家を想像してたっつーか……………」

「……医者つて職業は、実はそんなに儲からなかつたりするのか……？もしやそれを上回る程の多額の借金を背負っているとか、何か並々ならぬ事情があつてこんな寂れた生活……？」

「そんな侘し過ぎる家庭事情なんてありませんから！どんな想像してるんですか?!」

失礼な！と、心底心配そうな目を向けて恐る恐るそんな疑問を投げ掛ける蓮夜の質問をバツサリと否定する五月。するとそんな三人のやり取りを横で聞いていた風太郎が溜め息を吐き、五月の代わりに説明していく。

「この家はコイツら五つ子が個人的な事情から借りてる仮住まいで、実家は別にある。前に色々あつてな、今はこの家で姉妹五人で暮らしてんだよ」

「む、そうだったのか」

「つてか、お前はお前でやけにコイツん家の事情に詳しいいな……」

「これでもコイツらの家庭教師だからな。それにまあ、こうなっちゃまった元々の原因は俺にもあるし……」

「……………」

顔を逸らしてポツリと意味深な発言をする風太郎の口振りに、蓮夜とクリスは思わず目を見合わせて怪訝な表情を浮かべるが、アパートの前で立ち往生している四人の間を何処からか肌寒い風が吹き抜けた。

「サツムツ！お、おいつ、もう何でもいいからさっさと家にながらせてくれよっ……………」

「だなっ…………。五月、家の鍵頼む」

「はあ…………というか今更ですけど、どうしてよりによって私達の家なんですか？集まるなら別に上杉君の家でも…………」

「仕方ねえだろ、ウチにはらいはがいるんだ。仮にこの二人の事を誤魔化して説明出来たとしても、らいはの前でアイツ等が拐われた事とか話す訳にいかない。なら消去法で後はお前らの家しかないだろ？」

「それはそうかもしれませんが……」

風太郎の言い分も確かに一理あるのだが、こうもぶつきらぼうに言われるとそれはそれで幾分かの不服さを覚えてしまう。

ムツと口を真一文字につむぐそんな五月の横顔を見て、クリスが何かを察したようにバツが悪そうな顔で頭を搔いていく。

「あー……けどまあ確かに、年頃の女子の家に急に男共が押し掛けるってなったらそりや色々困る事もあるわな……何か都合が悪いなら家の中が片付くまで待つか、どつか他の場所に移るとかでもいいんだぞ？」

「え……あ、い、いえそんな、別に其処まで気を遣って頂かなくても大丈夫ですから。あ

りがとうございます」

「そうか？ならいいんだけどよ……」

「……何か俺の時と大分対応が違わね？」

「同性にしか分からないデリケートな問題というのものもあるんだろう。その辺は理解してやれ。……ところで急かすように申し訳ないんだが、このまま中に入るのか入らないのか早くに決めてもらえると助かる。さつきからファミレスでドリンクバーを飲み過ぎたせいか、トイレを我慢し過ぎて冷や汗が止まらなくてだな……」

「何かさつきからガタガタ妙に震えてんなあつて思ったらそんな理由かよっ?! だからあんまガブ飲みし過ぎんなってあれほど言っただろうがっ!!」

「いやせつかく奢ってもらったのだし、少しでも腹を満たして元を取らねばもつたいないだろうと考えるあまり、つい……あ、拙い。最後に飲んだコーラが食道をせり上がって逆流してきた……」

「ちよつ?! こゝ、こんな所で吐いたりしないで下さいねっ?!」

キュルルルルルツと下腹部の辺りから怪しげな音を鳴らし、卑しい貧乏性を発揮したせいで絶賛胃の中が緊急事態な蓮夜の青白い顔を見て最早渋ってる場合ではないと急ぎ家の鍵を開け、五月は玄関の扉を開けて三人を家の中へ招き入れていくのだった。



「——しかし、並行世界にシンフォギア、仮面ライダーにイレイザー、ねえ……正直まだにわかには信じられんというか、眉唾が過ぎてどう受け止めたらいいのか分からんな……」

——それから約十分後。家に入り込むと共に即座に廁へ駆け込んだ蓮夜がトイレ

から出てきた後、話の続きの前にお茶を用意しようと五月が台所で人数分のお茶を容れていた。

そんな五月を横目に、蓮夜とクリスと共に居間のテーブルを挟んで座り、漸く落ち着ける場所で今までの情報を頭の中で幾分か整理した風太郎がテーブルの上に頬杖を付きながら溜め息混じりにそんな呟きを漏らす中、クリスも肩を竦める。

「まあ、こんな突飛な話、すぐに信じろって言われても簡単じゃないのはあたし等だつて分かつてるさ。実際あたし自身、まだ自分が異世界にいるだなんて実感なくて半信半疑が抜け切れてねーしな……」

「ただ、行方不明になった姉妹達を探すに当たってはどんなに信じ難くても受け入れてもらう他ない。先の夜の時みたくダスト達がまた襲つて来る危険性がある以上、いざという時に危険が及ぶのはお前達自身だから……。難しいとは思いますが、受け入れてくれる努力をしてもらえるとこちらも助かる」

「いやまあ、実際にこの目で見ちまった以上、今更常識に遠慮する気はこつちも更々ねえ

けど……」

自分達の身に危険が降り掛かっているかもしれないという予感、あの四人が行方不明になった時点で既に感じ取っていた事だ。

それがまさかパラレルワールドだの別世界のヒーローだのと、そんな常人の発想を飛躍した話になって現れるとは予想だにしていなかったが、これが現実で、この目で実際に見てしまった以上どんなに非現実的な話でも飲み込む努力をする他ない。

それはきちんと理解してる旨を伝える風太郎の前に、台所からトレーに乗せたお茶を運んできた五月が湯呑みをテーブルの上に置き、続けて蓮夜とクリスの前にも湯呑みを起きながら不安げな口調で問う。

「あの……また昨晩のように襲ってくる危険性があるってさっき言っていましたけど、私達って、本当にあの怪物達に狙われてるのですか？だとしたら、どうしてそんな……」

「それは……あー……なんて説明すりゃいいんだろなあ、これ……」



彼女達に自分達の事を説明する際、イレイザー達が行う物語の改竄やその仕組みについてはまだ説明していない。

というのも、ただでさえ並行世界の事や、シンフォギアや仮面ライダーの件についてだけでも情報量が多過ぎる為、二人が困惑するのを避ける為に敢えて説明を省いた訳なのだが、はてさて、このややこしい話をどう噛み砕いて話すべきか……。

クリスがテーブルに肘を付いた右手で頭を抱えながら「うー……」と唸り、脳内で何とか話を簡潔に纏めようと難しげな顔で悩む中、蓮夜は少し考える素振りを見せた後に顔を上げていく。

「簡単に言えば、奴らは歴史を改竄しようとする怪物だ。決まってる未来を無理矢理捻じ曲げ、其処に生じる綻びを利用し、その世界を自分達の物にして手に入れる……それが奴らの目的だ」

「歴史を改竄する、つて……」

「ようはなんだ、タイムパラドックス的なアレって事か？マジで話がSF染みてきやがったなっ……いやそれでも、結局それでなんで俺達が狙われる羽目になるんだ？俺もコイツも、アイツ等もただの学生でしかないんだぞ？」

「理由なんて、奴らからしてみればあつてないような物だ。本来この世界の存在ではないイレイザーがこの世界の住人を襲えば、それは本来有り得ない矛盾となつて積み重なり、やがて大きな綻びとなる……。表立つて動けば世界から異物として弾き出され兼ねないから、裏でココソコソ人を襲つて少しづつこの世界の綻びを大きくしようとする。だからお前達で足りなければ、奴らはすぐにでも他の多くの人間を襲い始めるだろうさ」

「そ、そんな……」

昨夜襲つてきた怪物はそんなにも恐ろしい存在なのかと、何処かおどろおどろしい口調で語る蓮夜の話をも固唾を飲んで聞いていた風太郎と五月は顔を引き攣らせている。

一方で、隣で話を聞いていたクリスは「またそれっぽい感じにぼかしやがって……」

と、物語だの改竄だのややこしい話を抜きに簡潔に話を纏めて説明した蓮夜にジトーとした目を向けていたが、此処は話題を先へ進める為に敢えて乗っておこうと溜め息を一つ吐き、風太郎と五月の顔を交互に見ていく。

「そんな訳だ。だからこそ急いで奴らを止める為に前等からもつと詳しく話を聞きたいところなんだが、構わないか？」

「えっと、はい……それは全然構いませんけど、でも……」

「一花達を攫ったのがそんなヤバイ連中だつて言うんなら、アイツ等は……一花達はまだ、無事なのか……？」

「其処は恐らく大丈夫だ。事件が公になる事は、奴らにとつても自分達の存在を明るみに出す事になるから避けたいと思つてる筈だ。だから仮にもし、攫われた彼女達の身に何かあれば、奴らは今頃自分達に繋がる事件の痕跡の一切を消す為に、前達や周囲の人間の記憶を操作し、あたかも誘拐自体が最初からなかったかのように改竄を行う筈……なのに未だにその兆候が見られたいという事はその必要性がないから。つまり、攫



「本当か？」

「ええ。……正直、貴方達の話の殆どを理解出来たとは言いがたいですが、でも、今は一刻も早く姉達を助け出さねばならない事だけは分かりましたから。そうですね、上杉君？」

「……まあな……正直お前らの話を聞けば聞くほど突拍子が無さすぎて、尚更俺達だけの力じゃ解決は無理そうだとしか思えん。幾ら怪しくても、お前達がいないと身を守る事すら出来ないならそれしかないだろ」

「コイツは一々余計な一言添えなきや喋れねえのかよっ」

「まあそう言つてやるな。一先ずこつちの話を受け入れる努力はしてくれと言つてくれているのだし、此処から信頼も一緒に少しずつ得ていけばいい」

今はそれだけで十分だと、蓮夜は風太郎の言い回しにカチンとなるクリスを宥めつつ

二人の目を見つめ、攫われた姉妹達が行方不明になった当時の状況についての説明を無言で促す。

そしてその視線の意図を汲み取った風太郎と五月もお互いに顔を見合わせた後、神妙な顔付きで蓮夜達を見つめながらポツポツと当時の事を語り出した。

先ず始めに二人の口から語られたのは、最初に行方不明となった長女、中野一花の失踪の件。

彼女は女優業をこなしているらしく、行方知れずになった当日も風太郎達が通う学校近くの公園にて撮影に参加していたようだ。

しかし、夜間での撮影の休憩中に突如彼女の姿が見えなくなったらしく、現場は大騒ぎ。現場のスタッフが公園周辺を数時間にも及ぶ大規模な搜索をしたものの見付かる事はなく、その話を彼女のマネージャーから聞かされたのが風太郎達が事件の事を知った最初の経緯らしい。

次にいなくなったのが、四女の中野四葉。

一花が行方不明になった後、特に血眼になって彼女を必死に探していたのは彼女だったらしく、皆が寝静まった深夜になっても凍える寒空の下で一花を捜していたようだ。

その後も一花がいなくなった夜の公園を捜していた中、放課後に勉強を見ていた彼女が寝不足気味で様子が変わると気付いた風太郎がその場に駆け付け、彼女を説得して半ば強引に家に帰そうとした直後、少し目を離れた隙に忽然と姿を消した模様。

そして最後は、同日に行方が掴めなくなった中野二乃と中野三玖の二人。

一花、四葉と二人が立て続けていなくなった事から、これがただの失踪事件ではないと不穏に感じ取った風太郎達は警察に四葉の失踪の件を伝えた後、念のため普段から外を出歩く際には常に誰かと一緒にいる事を心掛けていたらしい。

しかし学校が終わったその日の放課後、バイトを掛け持ちしている風太郎が三玖と共に職場先のパン屋に向かう道中、靴紐が解けたという三玖が紐を直すのを待つ一瞬だ

け背を向けた瞬間に彼女の姿が忽然と消えた。

その数分後には、五月と共にバイト先のケーキ屋に入ろうとした二乃も店の前で突如失踪してたらしく、どちらも姿が消えた瞬間を誰も目撃していないとの事。

「——今までのあらましとしては、大体こんな感じつてところだ……」

「成る程……行方不明になった日付は二人を除きバラバラだが、一先ずの共通項は四人がいなくなったのは比較的日子が降り始めてから、という所か」

「人攫いが目的なら、昼間つから堂々とやるよりそつちの方がある程度人目に付かずやりやすいってのはあるだろうし、分からなくもないな。けど、それだけ分かった所で攫われた四人の居場所まで分かるかつつと難しいな、コレ……」

「それでも、情報を突き詰めれば何か見えてくるかもしれない。二人共、すまないがこの街の地形が分かる地図か何かないか？ 四人がいなくなった場所も照らし合わせて少し調べてみたいんだが……」



「え、あ、はい。携帯のアプリの地図で良ければ……」

「助かる。ならばは……」



その後、事件の情報の整理を始めてから二時間程が経った。

五月に見せてもらったスマホのマップを見ながら簡素に書き上げた地図をテーブルの上に広げ、風太郎と五月の証言を元に四人がいなくなった場所を赤い丸で囲んで他にも事件の共通項がないか会議を進めていたが、風太郎は窓の外の陽が落ち始めて暗くなりつつあるのに気付き、スマホで時間を確認して「げっ」と思わず声を上げた。

「もうこんな時間かよ、随分と話し込んでたみたいだな」

「そうだな、今日はこの辺りにしておいた方がいいか……しかしすまないな、急に押し掛けた上に長居までしてしまつて」

「あ、いえ、それは全然構いませんが………そういえば、お二人は今日、何処で寝泊まりするか宛てはあるのですか？」

「宛ては………まあねーよな………そもそもこつちに知り合いなんざいる訳ねえし、宿を取ろうにも先立つもんが………」

「俺も無一文だしな………ぶつちやけてしまえば、イチイバルはともかく俺は現状彼女のヒモみたいな立場だからどうにもならん」

「いやぶつちやけ過ぎだろ。こんなにも堂々とヒモ宣言するヤツ初めて見たわ」

「つてかそれ以前にもうちよつと言葉選べよつ、その言い回しだとあたしまで変な誤解受けんだろうがっ」

「気にしないでくれ。場を和ませようと思っただけのほんの軽いジョークだ」

「分かり辛れーんだよっ！冗談言うならせめてそのど真顔は止めるやあッ！」

ただでさえ普段から表情どころか眉一つ動かさないせいで感情の機微が分かり辛いというのにややこしい真似すんなど、冗談を言いそうにない真顔のままふざける蓮夜にクリスがガアーツ！と吠える。

そんな二人の愉快なやり取りを前に五月も口元に手を添え微笑ましげにクスクスと笑うと、僅かに思案した後、両手をピタリと合わせて二人にこう告げた。

「あの……もしも行く宛てがないようでしたら、暫くの間、家に泊まっていきませんか？」

「え」

「え……いや、そりゃこつちとしては願ってもない申し出だけど、いいのかよ?」

「はい、元々五人で暮らしていたので寝具も十分に揃っていますし……それに、一花達がいなくなつてから一人で夜を過ごすのが不安でしたので、正直誰かがいてくれると私としても安心出来ると言いますか……ふふ、ちよつと子供染みて恥ずかしいですね、こな」

「……………」

そう言つて若干恥ずかしげに苦笑いを浮かべる五月だが、そんな彼女の自虐を誰も笑う事が出来なかつた。

実際の所、自分の家族が行方不明になっている状況下で不安になるなどという方が難しいだろう。

しかも姉達が攫われた以上、次に狙われるのは最後に残つた彼女という可能性が高いと分かっているのだから、尚更怖がるなどという方が無理からぬ話だ。

そんな彼女の心境を察してか、風太郎も無言のまま意味ありげな眼差しで蓮夜とクリスの目を見つめ、それに気付いた二人も顔を見合わせると、蓮夜がコクリと控えめに頷いた。

「確かに、何度も言うようにイレイザーがまだお前達を狙ってる可能性は高いからな。そうなつてくると、護衛も兼ねて、此処で寝泊まりした方が理に叶わっているかもしれない」

「それはそうなんだが……けど、お前は大丈夫なのかよ？ あたしはともかく、そうになると男のコイツまで同じ屋根の下でつて事になるんだぞ？」

「その点は大丈夫です。こっちも上杉君と一緒に泊まっていつてくれますから」

「……はあぁッッ?!?!?!」

二人が五月の護衛に付いてくれると了承してくれて密かな安心感から完全に気を抜

いていた所に、思わぬ方向からの奇襲。笑顔でサラツととんでもない発言をかました五月に風太郎の首がグルンツ！と勢いよく回るが、そんな彼の反応に五月がジトーとした目を向ける。

「何なんですかその反応？ 今日会ったばかりの男の人を家に泊める訳なんですから、貴方にも同伴してもらわないと困るに決まっています」

「いや勝手に決めてんじゃねえよつ。大体あんな化け物と戦えるこの二人が揃ってるんなら、別に俺なんかいなくても——」

「いや、それは困る。イレイザーが狙っているのが彼女だけとはまだ確証がないし、仮にそうでなくても、お前は既にダスト達の姿をその目で直接見てる。イレイザーが口封じの為に接触してくる可能性も捨て切れない。だから家においては、関係ないお前の家族にも危険が及ぶかもしれない。出来るだけ二人には同じ場所に一箇所に固まってもらえると、こちらも護衛がしやすく助かるんだが……」

「う、ぐっ……」

戦えもしない自分が此処にいては邪魔にしかならないだろうと、もつともらしい理由を述べて断ろうとした風太郎の言葉を空気を読めない蓮夜が横から遮ってしまふ。

自分が家に戻っては家族にも危害が及ぶかもしれない。そんな風に言われてしまつてはこのまま素知らぬ顔で家に帰るなど出来よう筈がなく、何も言葉を返せずに顔を引き攣らせる風太郎に蓮夜が膝立ちでススツと近づく。

「まあそれを抜きにしても、流石に俺も会ったばかりの異性の家に世話になるといふのは気まず過ぎる訳なので、どうか一緒にいてもらえると助かるな、と……」

「そつちは完全にアンタの都合じゃねえかよつ。そもそもアンタ一人ならともかく、お仲間も一緒に世話になるんなら別に其処まで後ろめたくなる必要もないだろうっ」

「ああいや、俺としては寧ろそつちの方が悩ましいというか……イチイバルとは今は事件の事で普通に話せてはいるが、それ以外だとどう接したらいいものか分からないというか……」

「?それはどういふ……」

チラツと、五月と話しているクリスを横目に言い淀む蓮夜の様子に一瞬頭の上に疑問符を浮かべる風太郎。

だが、そんな蓮夜の気まづげな視線とクリスの顔を交互に見ていく内に次第に何かを察し始めたのか、風太郎はめんどくさそうに蓮夜の顔を見て少し悩む素振りを見せ、クリスと話す五月を一瞥すると、やがて大きく溜め息を吐きながら頭を掻いていく。

「しょうがねえな……まあ、アンタには昨晚助けてもらった恩もあるし、それで貸しはチャラつて事にしてくれよ……」

「おお。案外寛容な所もあるんだな」

「案外は余計だ。……それと言つとくが、俺が此処に残つたとしても別にアンタ達の仲を取り持つとかそういう手助けが出来る訳じゃないから、その辺はあまり期待しないで



くれ」

「……何故あわよくばと頭の片隅に思っていただけの事まで言い当てられるんだ。エスパークか？」

「そんなもんなくても、ちよつと見て考えればそうなのかもなって粗方の予想は付く。……まあ、単純に前に似たような経験があつたから、察しが付いたつてのもあるけどな……」

「？」

何だかうんざりするように、だが何処か懐かしでいるようにも聞こえる風太郎の言葉に蓮夜が訝しげに小首を傾げるが、風太郎はそれ以上は何も語らず黙って自分の空のコップを手に取り、台所へと向かつていってしまう。

一方で残された蓮夜はそんな彼の背中を怪訝な眼差しで見送ると、五月と共に襖を開けた押し入れの前で誰がどの布団を使うかで話し合うクリスの方に振り返り、物憂げな

顔を浮かべて小さく溜め息を漏らしてしまうのであった。

## 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）③（前）

—S・O・N・G・本部・発令所—

その頃、ノイズとイレイザーの襲撃から一夜が明けたシンフォギアの世界では、今現在S・O・N・G・がイグニスイレイザーとの戦闘の最中に行方が途絶えた蓮夜とクリスの足取りを追う最中であつた。

クリスのギアの反応は勿論、蓮夜のベルトにも組み込んである発信源を辿り、残された装者達を搜索に駆り出してどうにか二人の行方を探ろうと試みていたが、幾ら搜索範囲を広げても二人の足取りすら掴めず難航しているのが現状だつた。

次第に日も傾き始め、交代で搜索に出てもらっていた装者達にもこれ以上は無理をさせられないと帰還を命じ、今日は何の成果も得られぬまま探索を打ち切り解散するしか

ないのかと思われた矢先、何か話があるらしきエルフナインに突然呼ばれ、装者達と未  
来は本部の発令所に招集されていた。

「エルフナインちゃん、何かあったの?」

「もしかして、クリス先輩達の行方について何か分かったデスか?!」

もしや、という一抹の希望と期待から朗らかな笑顔を浮かべる切歌。だが、エルフナ  
インはその問いに無言のまま申し訳なさそうに首を横に振った。

「いえ、残念ながらお二人の足取りについては未だ何も分かっていません……。ただ、そ  
れらしき手掛かりになりそうな発見があったので、皆さんにもお伝えした方が良いかと  
思ってます」

「発見……?」

「はい。先ずはこちらをご覧ください」

怪訝に聞き返す調に頷くと、エルフナインは発令所の大型モニターに映像を映し出す。其処には本部の格納庫に収納されている蓮夜の愛機である蒼のマシン、クロスレイダーが映し出されていた。

「あれって……確か、蓮夜さんのバイク？」

「ええ。先日の戦闘の際、蓮夜さんが現場に急行した際に使用していたもので、現場の事後処理の際にこちらで回収し、格納庫にそのまま待機させておいたんです。ただ、皆さんに見てもらいたいのはこの後の映像で……」

エルフナインがそう言うと、大型モニターに映し出される格納庫の映像の続きが再生され始める。

最初の数秒は倉庫内の映像に変化はなく無音が続くばかりだったが、そのすぐ後、クロスレイダーに突如変化が起きて機体が蒼く発光し始めていき、直後、クロスレイダーの機体先頭から一筋の蒼いビームのような光が放出され、格納庫の一角に照射されると

共に空間が捻れていき、光の靄のようなモノが出現したのである。

「え、ええッ?!何あれ?!」

「バ、バイクから何か出たデスよ?!」

「エルフナイン、あれって……?」

「今のは皆さんが搜索に出ていた間、格納庫内で起こった出来事をカメラに捉えた映像です。この直後に、格納庫に異常な反応を検知してボクらが駆け付けると、大きな光の回廊が格納庫の一角に形成されているのを発見したんです」

「光の回廊……回廊って事はもしかして、彼処から何処かに繋がってたりするの?」

わざわざ回廊などという呼び方をする事から、もしやあれは何かの出入り口なのでは?と予想してそんな疑問を投げ掛けける未来に対し、エルフナインは小さく肯き返す。

「格納庫に発生したあの光を発見した後、その正体と原因を探るべくこちらでも解析を進めてみたんです。その結果、あの光の先には此処とは違う別の次元に繋がっているのが分かりました」

「別の次元って、つまり……」

「はい。恐らくは別世界……以前にもお話した、並行世界に繋がっているのではないかと予想されます」

「[[[[[」

あの光の正体が、並行世界に繋がるゲートである可能性がある。エルフナインの口からそう聞かされ、響達は目を見開いて驚きを顕わにしながらモニターの映像に再び目を向けていく。

「恐らく蓮夜さんが使っていたあのマシンには、並行世界間を自由に行き来出来る次元転移を可能とするシステムが搭載されているのかもしれませんが。元々、違う世界の住人

である蓮夜さんがどうやってボク達の世界に来る事が出来たのか疑問ではありませんが、きつとこの機能を使う事で今までもイレイザー達を追って戦い、ボク達がいるこの世界にもやって来たんだと思われれます」

「次元転移……そんな機能があのバイクにあつたなんて……」

「で、でも、どうして急にその次元なんちゃらが動き出したデスか？蓮夜さんもないのに、勝手に動くんなんて可笑しいデスよっ」

持ち主である蓮夜も不在の中、何故あのマシンが独りでに起動してそんなゲートを突然生み出したのか。勝手に動き出したという事はシステムの暴走か、或いは第三者の介入によるものなのか。何れにせよ只事ではない予感を感じてしまう響達の疑問に、エルフナインは首をフルフルと横に振る。

「マシンのシステムが突然起動した原因に関しては、残念ながらもまだ明確には分かかっていません……。ただ、もし仮に蓮夜さん達がいなくなったこのタイミングで動き出したのが無関係でないとするなら、一つだけ、ある仮説に思い至る事が出来ます」



「仮説……?？」

「はい。何故蓮夜さんのマシンが突然異世界へのゲートなんて開いたのか。それ以前に、何故蓮夜さんとクリスさんの反応を今なお探知する事が出来ないのか……その理由は恐らく、お二人がこの世界に存在しないから……先の戦闘の際、上級イレイザーによつて別の世界に跳ばされてしまい、それに伴いマシンが自動追尾で蓮夜さんの居場所を探知したからではないかと予想されます」

「べ、別の世界デスカっ?！」

並行世界。これまでも弦十郎やエルフナイン、蓮夜の口から度々聞かされた事はあったが、まさか消えた二人の行方がその異世界にあるとは想像すらしていなかった響達も驚きを隠せない中、エルフナインは神妙な表情で話を続けていく。

「元々イレイザーには、単体でも世界の間を移動する能力を持ち合わせていると、前に蓮夜さんから伺った事があります。恐らくあのイレイザーはその力を利用し、違う世界に

お二人を転移させる事で、S・O・N・Gのバックアップやレーザーと戦えるようになった響さんから引き離すのが目的だったのかもしれない」

「じゃ、じゃあもしかして、あの回廊の先に繋がってる世界に、蓮夜さんとクリスが……？」

「はい、現状を鑑みるとその可能性はあるかと」

「だったら、今すぐにも助けにいかないと！あの回廊を辿っていけば二人が跳ばされた先の世界にいけるんだよね?!」

二人がいなくなってから既に一日が経とうとしている。別世界にいきなり跳ばされてしまったのなら向こうに宛てなどある筈がなし、何よりも先のイグニスレーザーとの交戦で二人が負傷したらしき報せも受けてる。

二人の安否の確認の為に、居場所が掴めたのなら一刻も早くあの回廊を利用して二人の救出に向かうべきだと提案する響だが……

「いや、あの回廊の使用を今すぐ許可する事は出来ん」

「え？」

不意に背後から声が響き、一同は思わず振り返る。其処には今まで姿が見られなかった弦十郎が発令所の入り口を抜けて歩いてくる姿があり、弦十郎はそのまま響達の間を抜けてエルフナインの隣に並ぶように足を止めた。

「師匠……！許可出来ないってどうしてですか！居場所が分かったのなら、早く蓮夜さんとクリスちゃんを……！」

「焦る気持ちは分かる。だが、あの回廊に関しては未だ謎の部分が多い。君達がギアを纏った状態でも、無事にあの中を抜け切る事が可能なのか……それすら分からない現状、せめて最低限の安全が保証されるまでは、こちらも安易にあの回廊を使用する許可を出す事は出来ん」

「それは何となく分かるけど……」

「それに、仮にもし向こうの世界に無事に渡れたとしても、その後こちらの世界に帰って来られるのかも不明なままです。何の準備も知識もないまま皆さんを行かせて、万が一にも二次遭難にでもなればボク達にもどうする事も出来なくなってしまう……そういうった最悪の事態を避ける為にも、今現在、格納庫にて回廊や蓮夜さんのマシンの解析を調査班にお願いしている所なんです」

「システムが稼働した為か、蓮夜君のマシンにも次元転移に関するデータが解放され、閲覧出来るようになっていたらしい。そのデータの解析を進めれば、あの回廊を自由に解放出来る術や、君達のギアで回廊を渡れるように出来る方法も見付けられるかもしれない。それが分かるまでの間、どうか君達には辛抱して欲しい」

二人を助ける為に事を急いだ結果、二次被害に遭って失敗したとあってはそれこそ目も当てられなくなる。

絶対に失敗が出来ない、尚且つ危険も伴う作戦であるからこそ、万全の状態を心掛け

て救出に挑む必要がある。

だから今は冷静に事を待てと、落ち着き払った口調で逸る気持ちで前のめりになる響達を宥める弦十郎に対し、響達も弦十郎の言葉が間違いでない事を理解しているのか僅かに逡巡した後に渋々ながらも納得して頷き返す。

そしてその後、回廊とクロスレイダーの調査結果は追って報告するとして今日の所は解散となり、響は未来達と共にその場を後にする間際、大型モニターに映る回廊の映像をもう一度見上げていく。

（蓮夜さん、クリスちゃん……今すぐ助けにいけなくてごめん……でも絶対に迎えに行  
くから、それまでどうか無事でいて……）

違う世界に跳ばされた二人は果たして無事なのか。考えれば考えるほど胸の内の不安と心配が膨らんでいくが、今は弦十郎の言う通り、冷静さを欠く事なく解析班の調査が上手く進んでくれるのを待つしかない。

自分にそう言い聞かせるように納得させ、響は二人の無事を内心祈りながら未来達の後を追ひ発令所を後にしていくのであった。



「——んで、あたし等の今の状況はどういう事なんだよ、これ……」

——蓮夜とクリスが五月達の家泊まった翌日。

昨晩は女性陣が寝室、男性陣がリビングに別れて就寝してどうか身体を休める事が出来、早速この世界で暗躍するイレイザーの行方を追う為に行動を開始しようとしたのだが、今日は平日で学生である風太郎と五月は学校に登校しなければならないのと。

流石にイレイザーに狙われている可能性の高い二人を放って動く訳にはいかず、彼等

の護衛の為に同行し、二人が学校を終えるまで近くで見張りをする事になったのだが……

「せっかく此処まで付いて来たんだ。手持ち無沙汰でただ見張りで時間を潰すより、少しでも怪しいと思つた所を調べて回つた方がよっぽど有効だろう？」

「だからって、勝手に学校に忍び込むってどうなんだよ。しかもわざわざこんな格好までさせられてっ」

そう言つてクリスは今の自分の格好……五月から借りた彼女達の通う学校の女子生徒用の制服を着ている己の姿を指してうんざりするようにボヤキ、目の前で体育倉庫内を窓の外から覗く制服姿の青年……こちらも登校前に風太郎に頼み、彼の家に取りにいつてもらつて貸りた男子用の制服に袖を通した蓮夜をジト目で睨む。

現在、蓮夜とクリスは二人の護衛も兼ねて彼等が通う学校内に潜入している所だ。

何でも蓮夜曰く「学校に気になる事がある」らしく、どうしても一度調べておきたい

との事で風太郎と五月に無理を言つて頼み、彼らから制服を借りて一般生徒に扮し、授業中で誰もいないこの隙に校内を調べ回つていたのである（因みに制服を借りる際に学校潜入の件を風太郎達に告げたら渋い顔をされたが、攫われた姉妹の手掛かりを掴む為と言つて何とか納得してもらつた。

「この格好をしておいた方が、万が一にも学校関係者に見付かつた時に言い訳も出来て都合がいいからな。そつちも制服姿が様になつていて似合うし、これなら怪しまれる事もないだろう」

「そういう問題でもねえし、別にこんなの似合つてようがなかろうがどうだつていいんだよそんなのつ。……まあ、アイツから借りた制服のサイズが思いの他ピッタリだったのは確かに驚きはしたけど……」

「サイズ……?」

ポツリとそんな呟きを漏らしながら、自分の胸元を指先で摘むクリス。蓮夜もそんな彼女の視線を思わず追うと、白いシャツなのも相まって形がくつきりと分かり、ユサツ



と僅かに上下に揺れる豊満な胸を視界に捉えて……

「……？何だよ、いきなり顔逸らしたりなんかして？」

「……いや、すまない。自分の不用意さを少し恥じてるだけだ。気にしないでくれ」

「はあ？」

突然無駄に勢いよく自分から顔を背ける蓮夜の言葉の意図が分からず、クリスは可笑しな物を見るような目を向けて怪訝な顔を浮かべてしまう。一方で蓮夜は邪念を払うべくわざとらしく咳払いをして一度気を取り直し、いつもの無表情に戻ってクリスに向き直っていく。

「それより、今は他に校内に怪しい場所がないか調べるのが先だ。他の生徒や教師達が授業で拘束されている今、周りの目を気にせずに調査するには今しかない」

「んなの何度も言われたくても分かっている。けど、ホントにお前の予想当たってんのか

？学校なんかにはイレイザーの手掛かりがあるかもしれないなんて……」

頭を掻きながら蓮夜が先程まで覗いていた体育倉庫を一瞥し、クリスは半信半疑な眼差しで蓮夜の顔をジーツツと睨み付ける。

そもそも何故、蓮夜がこの学校を怪しいと踏んでこうして潜入しようと思ったのか。

その訳は昨晚にも行った中野姉妹の誘拐事件の情報を整理していた際、蓮夜が街の地図を見ていてある事に気付いたのがきっかけだった。

「消えた四人がいなくなつた時の場所、それらがどれも上杉達が通うこの学校から一定の距離で近い場所だった……。これが偶然なのか、それとも俺のただの深読みに過ぎないのか、一度調べてはつきりさせておいた方がいいと思つてな。俺ならイレイザーの気配の残り香を辿れるし、もし仮に攫われた四人が此処に囚われているのだとすれば、他の人間の目に付かないように改竄の力を使って何処かに隠してるものと思つたんだが……」

「けど、外回りはここ以外殆ど探し回っただろ？他に探せる場所と言ったら後は校舎の中ぐらいいしかねえし、真つ昼間の学校の中に忍び込むってのも……」

「流石に授業中で見付かったら誤魔化しようもないしな。休み時間にでもなれば、他の生徒に紛れて中を調べる事も……いや、それでも目立つ可能性はあるか……」

「……何であたしを見ながら言うんだよ」

自分だけならまだ目立たずに済むかもしれないが、髪色が目立つクリスが校内を歩き回れば忽ち生徒達の注目を集めて、潜入どころではなくなるかもしれない。不服げに見つめてくるクリスの顔を眺めながらその可能性を考慮し、蓮夜は首を横に振って「なんでもない」と返しながら校舎を見上げていく。

「取り敢えず、午前中の探索は此処までにしておいた方がいいか。もうすぐ授業も終わる頃だし、校舎内の探索は放課後にでも上杉達に頼んで中に――」

「――おい、お前ら其処で何やってる？」

「?!」

そろそろこの辺りで学校探索を中断して戻ろうかと思った矢先、背後から不意に声を掛けられて慌てて振り返る。其処には校舎の方から黒スーツを着た教職員と思われる男性が歩いて来る姿があり、それを見た二人は咄嗟に背を向けた。

（この学校の教師か。まずいな、まさかこのタイミングで見付かるとは……）

（お、おいどうすんだよっ！こんな状況じゃ誤魔化し切るのは無理だろ流石に?!）

（大丈夫だ、任せろ。こんな事態になった時の事もきちんと考えてある。一先ず俺の言う通りに一芝居売ってくれ。まず――）

「お前達、こんな所で一体何をやってるんだ？今は授業中の筈だぞ？」

予想外のアクシデントに慌てふためくクリスに蓮夜が小声で口裏を合わせる中、そん

な二人に教師が腰に両手を添えて不審げな眼差しを送りながら疑問を投げ掛ける。すると、クリスは徐に教師の方に顔を向け、

「い、いや……別にサボってたとかそういう訳じゃないんだ。ただその、コイツが授業中に急に体調崩して、保健室に連れていこうと思つたら途中で吐き気がするって言出し  
てさ……」

「吐き気……?」

「そ、そう！流石に廊下のご真ん中でぶちまけるのは気が引けるってんで、外まで連れ出したんだよ！ほ、ほら、大丈夫かよお前……!」

「うぷ……ム、ムリだアああつ……持病の癩がアああつ……俺はもうダメなのかもしれ  
なードスツ！ーぬこふつ！」

（演技が迫真過ぎんだろツ!!もうちよい抑えろツ!!）

(すまん……少し気合いが入り過ぎた……)

結構オーバーめに苦しそうな演技をかます蓮夜の腹に教師に見えぬよう、隠れて素早く手刀を打ち込みながら甲斐甲斐しく背中を摩る演技を続けていくクリス。

そんな二人の密かなやり取りを前に教師も若干半信半疑な眼差しを向けていたが、やがてやれやれと溜め息を吐き出して首を横に振った。

「風邪なのかどうか知らないが、体調が悪いならこんな所にいないで早く保健室に連れていけ。今の時期は受験生もラストスパートに掛けてピリピリしている頃だし、誤って彼らに移したりでもすれば一生恨まれ兼ねない。どうしても駄目だと思ったら早退届を出すように、いいな?」

「あ、ああ。ほら、いくぞっ」

どうやら上手くやり過ぎせたらしく、呆れた様子の教師に促されてクリスは蓮夜を連れその場を後にしようと歩き出していく。

が、クリスに連れられて教師とすれ違った際、蓮夜は何故か急に足を止めてしまった。

「?おい、どうしたんだよ?」

「………………。いや、何でもない」

「っ?」

突然立ち止まったかと思えば、何事もなかったように再び歩き出す蓮夜。そんな蓮夜に対してクリスも訝しげに眉を顰める中、二人と別れて校舎に戻ろうとした教師もふと足を止めて振り返り、遠ざかる二人の背をジッと見つめて目を細める。

（そういえば……あんな生徒、前からうちにいたか……?）

男子の方とはかく、あんな目立つ髪色の女子がこの学校にいただろうか。蓮夜に連れ添うクリスを見て教師は暫し考える素振りを見せるも、結局はどうでもよくなったの

か「まあいいか……」とすぐに思考を切り、校舎へと再び足を進めていくのであった。



放課後になった夕暮れの校舎。校庭のグラウンドから運動部の部員達の威勢の良い掛け声が聞こえてくる中、校内では友達と共に帰る生徒、下校する前に勉強の為に図書館へ寄る生徒、遅れて部室に向かう生徒の姿などが多く見られる。

そんな生徒達の雑多な声を耳にしながら、女子トイレから両手をハンカチで拭いながら出てくる女子生徒……五月が何処か疲れた様子で溜め息を吐く姿があった。

(全くつ、ホントにあの人にはデリカシーという物が欠けてるんですからっ……)

心内でそうボヤきながら脳裏に思い返すのは、約数分前に自分の教室で交わした風太郎とのやり取りの記憶。



本日の授業も無事に終わったものの、姉達を誘拐したイレイザーと呼ばれる怪人が自分や風太郎を狙っているかもしれない可能性を蓮夜の口から聞かされており、遅くまで校内に残る事は避けるように言われている。

なので学校に残つての勉強も暫くは避け、下校時もあるだけ風太郎とは離れず互いに目を離さないようにして欲しいと頼まれた訳なのだが、下校する前にお手洗いを済ませようと教室を出る際、余計な詮索せず察してくれたらいいのに風太郎から「何処へ行くのか」、「用事があるなら付いていく」としつこく言つて聞かなかつたのだ。

（結局それで口喧嘩になつて時間を無駄にしてしまふし、恥ずかしいのを堪えて正直に言えば「それならそうと早く言えばいいだろ？」だとか、何で私の方が悪いみたいな感じになるんですか、全くっ……!）

今思い出してもカチンとくると、教室で見せた風太郎の心底呆れた顔を思い返し、鎮まり掛けてた怒りがフツフツと湧き上がってしまう。

……まあ、あれでも一応彼も彼なりに自分の事を気に掛けての事というのも分かつてはいるし、こんな非常事態なのだから一人にはすまいと気を遣ってくれてるのだろうとは分かつてはいるのだが、如何せん彼と話してるとどうしても無駄に意地を張ってしまふと言うか……。

（はあ……まあ、こんな一大事に些細な事で喧嘩してる場合ではありませんし、きつと雪音さん達も私達の護衛の為に外で待っているだろうから、これ以上遅くならない内に早く教室に戻らないと……）

何時までも野暮用に時間を掛けて、あの二人をこんな寒空の下で待たせるのも忍びない。暗くならない内に教室で待っているであろう風太郎と早く合流しようと、制服のポケットにハンカチを締まって教室に戻ろうとした、その時……

「——ああ、やっと見付けた。中野、少しいいか？」

「？」

教室に戻ろうと足を踏み出した矢先、不意に階段の踊り場の方から誰かに呼び止められた。思わず振り向くと、其処には教材を片手に階段を上がって五月の下に近付いてくる一人の教師……昼間に蓮夜とクリスを見付けた男性教師の姿があり、五月は僅かに目を見開いて驚く。

「神楽木先生？」

「まだ帰ってなくて良かったよ。実はお前に大事な話があつて、ずっと探していたんだ。今、少し時間いいか？」

「え、あ……えーつと……」

神楽木と呼ばれた教師から突然そんな誘いを受け、五月は少々困った様子で頬を掻く。

今は風太郎を教室に待たせている所だし、何より蓮夜とクリスも護衛の為に外で自分達が出てくるのを待っている筈だ。流石に自分の私用の為に、これ以上彼等を待たせる

のは忍びない。

「その……すみません先生。実は私、今日はちよつと人を待たせているんです。なので大変心苦しいのですが、今日は都合が……」

「そうなのか？弱ったな……お前の進路についてちよつと話しておきたい事があって、急いで知らせなきゃと思つて慌てて飛んできたんだが……」

「……へ？進路つて、それはどういう……？」

神楽木の誘いを申し訳なきげに断ろうとするも、神楽木が残念そうに口にした不穩を帯びた言葉を聞いて戸惑い気味に聞き返してしまい、神楽木はそんな五月に何処か言い難そうに答える。

「実は、お前が希望していた進学先の大学の件でちよつと問題が起きてな。どうしても本人であるお前に知らせなければならぬ事があるんだ。それでも駄目か？」

「……………」

五月の目を見据え、深刻げにそう語る神楽木の言葉がずっしりと胸に重く押し掛かる。

まさか、大学試験に関して何かただならぬ一大事が起きたのか？ もしくは自分が何かへマをした……？

全く心当たりが浮かばない。一体どういう事なのだろうと、胸に襲う不安感から早鐘を打つ心臓を抑えつつ、五月は何処か怯えた様子で思わず風太郎が待つ教室に続く廊下を見た。

（う、上杉君にも一言連絡を……いえ、まだ何も分かっていない段階で彼にまで余計な不安を与える訳には……）

ただでさえ今は気の抜けない状況が続いているというのに、其処に来て自分の進路で問題が起こったなどと聞けば家庭教師である彼にもいらぬ心配と負担を掛けてしまう。

風太郎に知らせる前にまずは自分だけで話を聞くべきか。神楽木がいれば一人にはならないし、風太郎の方も教室を出る際には確か生徒が何人かまだ残っていた筈だから、話を聞くだけならそれ程時間も掛からないハズ。

僅かに逡巡する素振りを見せて考えた末、五月は神楽木の顔を見上げながら小さく頷き返した。



進路先の大学について重大な話があると言われ、五月が神楽木に連れて来られたのは何故か実習練の校舎だった

文化部の部室などもある為、校舎内にはチラホラ生徒達の姿も見られるが、神楽木の後を付いていくと段々と人気が少なくなっていく、周囲を見回して違和感を覚えた五月

は頭の上に疑問符を浮かべ、口を開いた。

「あの、先生？ 一体何処まで行くのですか？ というか、何故職員室や生徒指導室でもなく、わざわざ実習棟に……？」

「ああ、すまん。そつちの方は両方とも他の生徒と先生が先に使ってたな。他に空いている教室がこの先の空き部屋しか見付からなかったんだ」

「はあ……」

首を傾げながら一応納得してみせて曖昧な返事を返す五月だが、正直そんな事があるのだろうか？ と疑問を抱かずにはいられない。

しかしそんな五月の心境など他所に神楽木はどんどん先へ進んでいき、奥の使われていない空き教室の扉を開けて、五月を中へ促す。

「さ、此処だ。中へどうぞ」

「あ、は、はい。失礼します……」

とは言え、流石に先生相手にその疑問を直接口にするのも憚られる。向こうにもきつとやむを得ない事情があつたのだらうと、五月は神楽木に一礼しながら自分をそう納得させて教室の中に足を踏み入れた。

……のだが、五月が入室した教室の中には面談の為の机どころか、椅子一つすら何処にも置いていなかったのである。

「あ、れ……？先生、教室の中に机も椅子も……」

見当たらない、と言ひ掛けて神楽木の方に振り返る。が、振り向いた先につい先程まで扉の前にいた筈の神楽木の姿は何処にもなく、忽然と姿を消してしまつていた。

「え……？せ、先生？何処に——？」



さつきまで一緒だった筈の神楽木が突然いなくなり、五月は動揺を露わに教室から顔を出して廊下を見回すが、教室の外を見ても神楽木の姿は何処にも見当たらない。

廊下を見渡しながら訝しげに眉を顰め、一先ず彼を探そうと戸惑い気味に教室の外へと踏み出そうとし、

——教室の中からゆっくりと伸ばされた異形の腕が背後から五月の肩を掴もうと忍び寄り、それを阻むように、何処からともなく現れた蓮夜が横から異形の腕を掴み取ったのである。

「……意外と早く化けの皮を剥がしてくれたな。手っ取り早くて助かる」

「なっ……?!」

「……へ……?く、黒月さん?!」

何の前触れもなく突然現れた蓮夜の登場に、教室内に驚きと戸惑いの声が響く。

一つは五月の声、もう一つは蓮夜に掴まれる異形の腕の主……右腕がまるでサメの体表のように変質させた神楽木のモノであり、蓮夜に腕を振り払われる神楽木の右腕を見て五月は目を剥き驚愕してしまう。

「か、神楽木先生、その腕……?!」

「チイツ……!」

五月に異形の腕を見られ、腕を隠しながら忌々しげに顔を歪める神楽木。すると其処へ、クリスと風太郎が一足遅れて駆け付け、教室の中に駆け込んできた。

「五月! 無事か!」

「ツ! う、上杉君、雪音さん……? 皆さんどうして……」

「お前が全然戻って来ないって、コイツが連絡寄越してきて慌てて飛んできたんだよっ。ってか、一人で勝手に動くなつてあれほど言つたらろ！」

「あ、す、すみません……でも、どうして先生が……」

「簡単な話だ。コイツはお前を狙つて此処まで連れてきた……ようするに、消えた四人を攫つたイレイザーの正体はコイツという訳だ」

「なっ……」

「先生が……一花達を攫つた犯人……?!」

目の前の教師が、四人の姉妹を攫つた誘拐犯であるイレイザーだった。淡々とした声で蓮夜が告げた衝撃的な事実。風太郎と五月も驚きを隠せない中、蓮夜は鋭く細めた眼差しで神楽木を見据え言葉を続けていく。

「気になっていた疑問はもう一つあつたんだ。そもそも、今回の犯人であるイレイザー

がどうやって此処までスムーズに四人を攫う事が出来たのか……。どんなに規格外の力を持つてるにせよ、改竄の力も無しにたった数日で四人も誘拐出来るだなんて手際が良過ぎる。何らかの方法で彼女達の動向を探り当てていたのではないかと思つていたが……。成程、教師とは納得だ。多方、陰で彼女達の話盗み聞きでもしていたか、相談とでも称して話を聞くなりしてその日の動向を探つていたんだろう。教師という立場を利用すれば、生徒であるコイツ等も信賴して疑いを持つ筈がないのだしな」

「ツ……。な、何なんだお前……。どうして其処まで……。?!」

いきなり現れたかと思えば、自分の正体や犯行の方法まで見抜いた蓮夜に戸惑いを抑え切れない神楽木だが、其処で五月と風太郎を守るように佇むクリスの顔を見てハッと息を呑んだ。

「お前たち、確か昼間の……。?学校生徒じゃなかったのか?!何故俺の正体を知つてる?!」

「それに関してはたまたまだ。昼間に別れる間際、お前とすれ違う際にイレイザーの気

配を感じ取った。人間態の姿じやイレイザーの気配も薄れて判別が難しくなるが、彼処まで距離が近ければ俺でも分かる……まさか手掛かりを探すどころか犯人本人を見付けられるだなんて、制服を借りてまで潜入した甲斐があったよ」

「イレイザーの気配を……読めるだつてっ……？」

「どういふ事だ、と困惑を露わにする神楽木。しかし蓮夜はそれ以上は答えず、神楽木と対峙しながら右手を差し出していく。

「コイツらにも正体が知られてしまったんだ。観念して、攫った四人を解放しろ……今ならまだ、後戻りだって出来る筈だ」

「っ……ふ、ふざけるなっ！ 急に出てきて偉そうにつ、バレてしまったなら改竄の力でそいつらの記憶を消してしまえばいいだけのこと！ 俺の邪魔をするなあああああっ!!」

誘拐した中野姉妹を解放し、これ以上の犯行を止めるように呼び掛け説得しようとする蓮夜だが、神楽木は聞く耳を持たず激昂の雄叫びを荒らげながらその身を徐々に変質

させていき、全身に背鰭が生え、両肩や胸に巨大なサメの顔が施された禍々しき姿の赤眼の怪人……シャークレイザーへとその身を変貌させていった。

「せ、先生?!」

「マジかよっ……!」

人間がレイザーへと変わる瞬間を直接目の当たりにし、風太郎と五月も我が目を疑ってしまふほど驚愕してしまふ中、蓮夜も説得が通じず一瞬何処か悲しげに瞼を伏せるも、すぐに決意を決めた表情に切り替わりながら腰にクロスベルトを巻き付け、左手でカードを取り出していく。

「そつちがその気なら仕方がない。こちらも力付くで行かせてもらおうぞ……変身!」

『Code x:clear!』

バックル上部へと露出したスロットにカードを装填し、掌でスロットを押し戻すと共

に電子音声か鳴り響く。直後、蓮夜の姿が蒼と黒のアンダースーツを纏い、周囲に現れた蒼色のアーマーが立て続けに蓮夜に覆われ、最後に灰色の複眼に光が灯って赤く輝かせるクロスへと変身していったのであった。

『ツ?!な、何だその姿……変身したっ……?!』

クロスに変身した蓮夜の姿を見て大きく動揺するシャークイレイザーだが、クロスは構わず無言のまま悠然とした足取りで近付いてくる。

それを見てシャークイレイザーも戸惑いを引きずりながらも咄嗟に尾鰭を模した刃が生えた両腕を振るってクロスに襲い掛かるが、クロスは最小限の動きで刃を回避しながら左手だけで相手の腕を捌き、そのままシャークイレイザーの背後に回り込みながらその背中に思いつき後ろ蹴りを叩き込んで吹っ飛ばしていった。

『ぐううツ?!ぐっ……クツソオツ……グウッ!』

予想外の展開の連続に見舞われたせいで未だ動揺を引きずっているせいか、冷静さを

欠いて思うように戦えない。

ならば此処は一度態勢を立て直すべきかと、シャークイレイザーはクロスに背を向けると共に教室の窓に飛び込んでガラスを突き破り、そのまま学校の外へと逃げ出してしまう。

『ッ、逃がすか……！俺は奴を追う！二人は任せたぞ！』

「はあ?!お、おいつ、待てっつー!」

呼び止めるクロスの制止も聞かず、クロスはシャークイレイザーが突き破った窓から躊躇なく飛び降りてしまう。

それを見て慌てて窓に駆け寄ると、シャークイレイザーを追って既に学校から飛び出すクロスの姿を捉え、クロスは「クソッ……!」と窓の縁を拳で殴りながらすぐさまクロスを追って教室を飛び出していった。



## 第六章／五分分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）③（後）

『ハツ、ハアツ……ここ、此処まで来れば、一先ずはっ……』

学校から離れた場所に位置する街の広場。人気の少ない裏路地を抜けてその場所に出たシャークイレイザーは何度も背後を振り返って追手の姿がないのを確認し、漸くその場で足を止めて乱れた呼吸を整えようと息を深く吸っていく。

が、其処へ裏路地の闇の向こうから蒼い残光……両足に蒼い光を灯らせて脚力を瞬間強化したクロスが目にも止まらぬ速さで壁を蹴りながらジグザグの軌道で追い付き、シャークイレイザーの頭上を軽々と飛び越えて目の前に立ち塞がった。

『?！き、貴様っ……!』

『誘拐した中野五月の姉達を何処へ隠した？』

『つ……そんなもの答える訳がないだろっ！』

『……そうか。なら無理やりにも吐いてもらおうぞ』

『誰がああッ!!』

両腕から生えた尾鰭を模した刃を振るい、激昂の雄叫びと共にシャークイレイザーがクロスに目掛けて水色の斬撃波を飛ばす。

それを目にしたクロスは即座に再度両足に蒼い光を灯して瞬間強化を施し、迫り来る斬撃波を飛び越えて回避すると共にシャークイレイザーへと左拳を飛ばして殴り掛かった。

『舐めるなあッ!』

しかしシャークイレイザーも身を翻して拳撃を避けながら振り向き様に両腕の刃を振るい、ギリギリで身を引いたクロスの胸の装甲を刃が掠めて火花が散る。

クロスはそのまま大きく後ろへ飛び退いてすぐ横へ素早く滑走していき、追撃の手を緩めずに連続で斬撃波を飛ばしまくるシャークイレイザーの攻撃を紙一重で回避しながら一息で肉薄し、身を翻して放った鋭いサイドキックをシャークイレイザーの腹に突き刺し吹っ飛ばした。

『ガアアッ！グッ、コイツっ……!!』

『ハアアアッ!』

足で地面を削りながら何とか踏み止まり、腹を抑えて唸るシャークイレイザーにクロスが再度仕掛ける。

着地と同時に再び地を蹴って飛び掛かり、右脚を勢いよく振り上げてシャークイレイザーに飛び回し蹴りを叩き込もうとするが、クロスの蹴りが当たる寸前、なんとシャーク

クイレイザーの身体が不意に沈み、そのまま地面に吸い込まれるように消えていつてしまった。

『(?!地面に沈んだ……?!)』

『——ウウラアアアッ!!』

驚愕するクロスを他所に、背後の地面からまるで水面から獲物を狙って飛び出す恐魚が如く、シャークイレイザーが体当たりで襲い掛かる。

だがクロスもその殺気を感じて反射的にその場から飛び退き、シャークイレイザーの不意打ちを回避しながら瞬時に相手の懐へと飛び込んで反撃の手刀を放つも、シャークイレイザーは素早く地面に潜り込んで再び姿を隠してしまう。

『(ツ……地面へ水のように潜る能力……成る程、四人が誘拐された際に目撃情報が一切なかったのはこの力を利用していた為か……!)』

恐らくこれが中野姉妹を立て続けに誘拐出来たトリックなのだろう。

確かにこんな能力を用いられれば人目に付く事なく四人を攫えた筈だ。自分だけでなく人を引きずり込む事も出来るなら、まさか誘拐犯と被害者が地面の下を潜って移動しているなど誰も思うまい。

残っていた疑問が解消されて全てが繋がりが納得するクロスだが、シャークイレイザーはそれを他所に地面から何度も飛び出してクロスに突撃を繰り返していき、何処から敵が現れるかも分からない攻撃を紙一重で回避しながらクロスも思わず舌を打つ。

『（幸い地面に潜っていても奴の気配はある程度追えるが、姿が見えない上にすぐさま地面に逃げるせいで反撃する暇がない……）』

相手の気配の動きを読む事で攻撃の回避自体はさほど難しくはない。しかし、向こうと違ってこちらには地面の中に逃げ込むシャークイレイザーを追撃する手段がない為に、このままではジリ貧にしなければならない。

思考を駆け巡らせながら何度目か分からないシャークイレイザーの突撃を地面を転がって回避し、受け身を取って態勢を立て直したクロスは左腰のケースから一枚のカードを抜き取る。

『このまま回避ばかり続けても体力を無駄に浪費するだけか……ならコイツだ……！』

『Code Blaster::clear!』

バツクルにカードを装填し、電子音声と共に全身のアーマーをパージして新たに現れた緑色の重厚な装甲を身に纏う。

そして左手に出現した銃剣・ウエーブブラスターを握り締めたクロスがタイプブラスターに完全に姿を変えると共に、背後から再びシャークイレイザーが地面から飛び出して片腕の刃を振りかざしクロスに飛び掛かるが、気配の流動でそれに気付いたクロスは振り向き様にシャークイレイザーの刃を肩で受け止めた。

『ッ?!な、何ッ?!』

『捉えたぞ……!』

肩で刃を受け止めたクロスの防御力に驚愕するシャークイレイザーの腕をそのまま脇で抑え込む。そしてウエーブブラスターの銃口をシャークイレイザーの腹に突き付けると共に、ゼロ距離からの銃撃を容赦なく浴びせてシャークイレイザーを派手に吹っ飛ばしていったのだった。

『ガアアアツ!?ぐつ、クソツ……!—ジャキツ!—……ツ?!』

『……詰みだ。少しでも動けば身体が沈む前に、先にその頭が吹き飛ぶ事になるぞ』

叩き付けられた地面の中に再び逃げ込もうと身を起こすシャークイレイザーの鼻先に、クロスがウエーブブラスターの冷たい銃口を突き付ける。

シャークイレイザーはそんなクロスの顔を見上げて忌々しげに睨み返すが、クロスは構わずウエーブブラスターを突き付けたまま冷淡な声音で再び質問を投げ掛けた。

『この数日間、中野の姉達を影で誘拐していたのはお前の仕業だな……彼女達を攫った後、何処に隠した?』

『つ……ハッ、そんな馬鹿正直に答えるとも思ってるのか? だとしたらお気楽にも程があ——』

懲りずに攫った少女達の所在を自分の口から吐かせようとするクロスを嘲笑混じりに馬鹿にしようとするシャークイレイザーだが、その言葉は最後まで紡がれること無く遮られる。

鼻先に突き付けられたウェーブブラスターの銃口が不意に下へ下がり、一切の躊躇もなく発砲してシャークイレイザーの脇腹を穿ち、風穴を開けたからだ。

『イギツ——!!!?』  
!!!?  
!!!?』

『……生憎だが、こっちも人命が掛かっている以上容赦はしてられない。話す気がない



なら、今すぐ此処でお前を消滅させるだけだ』

『イ、アアッ……!!しよ、正気かッ?!お、俺を消せば攫った中野の姉達の居場所が分からなくなるんだぞッ?!それでもいいのかアッ!!』

『だとしても、少なくともお前の手によつて彼女達がこれ以上危険に晒される事はなくなる。発見は遅れるかもしれないが、それでも彼女達を見付ける事は決して不可能ではないハズだ ……お前自身の命を盾に使おうが、俺には通じんぞ』

『うっ、ぐうううっ……!!』

淡々とした口調を変えずそう言つて苦痛で悶えるシャークイレイザーの顔に再び銃口を付け付けるクロスだが、正直この脅しも半分はハツタリだ。

五月の姉達が隠されている居場所を知るのがこのイレイザーしかない以上、彼女達が捕らわれてる場所の手掛かりは何としても欲しい。

その為にも今は非情に徹し、動けないシャーケイレイザーに銃口を突き付けたまま引き金に指を掛け直していく。

『仏の顔も三度まで、と言うんだったか。次で答えなければ、今度はその頭が吹き飛ぶ事になるぞ……』

『う、あつ……ま、待てつ、俺だつて別に好き好んでこんな事をやってた訳じゃ——！』

『3』

カウントダウンが始まる。と同時に、引き金に掛けられた指にも力が込められていく。

『ま、待てつてつ！そ、そうだ！アンタも俺を手伝う気はないか?!この物語をモノにすれば何でも好き放題出来るようになる！アンタにもその恩恵を分けて……！』

『2』

ウエーブブラスターの銃口に徐々にエネルギーが蓄積されて緑色に発光してゆき、それに気付いたシャークイレイザーも焦りを露わに尻餅をついたまま後退りしていく。

『よ、止せつ……!?俺はまだ死にたくないっ!!こんな所で終わる訳にはつ——!!』

『……』

——話を引き伸ばせるのも此処までか。

カウントダウンと共に銃を突き付けても命乞いしかないシャークイレイザーからこれ以上情報を引き出すのは無理だろうと悟り、やむを得ないと覚悟を決め、クロスは銃口にエネルギーが充填されたウエーブブラスターの引き金を引こうと指に力を込めていき、

——引き金が完全に引かれる寸前、クロスの横合いから不意に炎を纏った巨大な拳が

迫り、クロスに突如襲い掛かったのであった。

『ツ?!チイツ!!』

—ガギイイイイイツ!!—

前触れもなく殺気と共にいきなり現れた巨大な拳に気付き、クロスも反射的にシャー  
クイレイザーに向けていたウェーブプラストーを咄嗟に振り上げて巨大な拳とぶつけ  
合わせた。

ズサアアアアアアツ!!と、巨大な拳に力負けして身体が吹き飛ぶクロスは両足で地面  
を削りながら何とかブレーキを掛け、左腕に走る痺れで顔を苦痛で歪めながらも目の前  
に視線を戻す。其処には……

『——よオ。わりと元気そうにしてるじゃねえか? ついこの間俺にズタボロにされてた  
わりにはよ』

——腕に纏う炎を豪快に振るって消し去る、紅の魔人……蓮夜とクリスをこの世界に跳ばした張本人であり、アスカがその身を変貌させたイグニスイレイザーがシャークイレイザーを守るように佇む姿があつたのだった。

『炎使いのイレイザーっ……！』

『あん？何だよその呼び名……っつて、そういやお前にはまだ俺の名前ちゃんと教えちゃいないんだっただか。まあ、別に教えてやる義理もねえけどよ』

そういえばそうだったな、と軽い調子で呟きながら今更ながら思い出したように呑気に頭を掻くイグニスイレイザーだが、そんな異形とは対照的にクロス的心中は穏やかではない。

シャークイレイザーから誘拐した中野姉妹の居場所を聞き出す、それが無理ならせめて此処で倒すと決めていたのに、まさかこんなタイミングでイグニスイレイザーと再び

相対してしまうだなんて想定外が過ぎる。

内心大きく動揺を浮かべながらも、それを臆面には出さずに仮面で表情を隠し、平静を装ってイグニスレイザーを睨み据えていく。

『やはりこの世界に来ていたか……俺達を追い出すだけで満足してればいいものを、わざわざこんな所まで追ってくるだなんて、其処までして俺の命が欲しい訳か?』

『当然だろ。前にも言った筈だぜ? こう見えても俺は慎重派なんだ。別世界に追い出したくらいでテメエらが諦めるとは到底思えねえ。何らかの手段を用いて戻って来ないとも限らないからな……だから今度こそ、誰の手助けも望めないこの世界でテメエらを纏めて始末してやるよ……!』

『……それはそれは……其処までご執心頂けて光栄だ、とでも返せば満足してくれるのか?』

相手に心の内を悟られぬよう、憎まれ口を返しながら視線だけで周りを見渡す。

響達の世界に帰還する為にも奴から転移用の本を奪うのは当初からの予定ではあったが、流石にこの状況、右腕もロクに完治してない状態で奴と戦うのはリスクが高過ぎる。

一度この場から離脱する手も一瞬考えてしまうが、今此処でシャークイレイザーを取り逃してしまえば、次にまた戦う時に今度は奴と二人掛かりで襲ってくる可能性がある。

そうなってしまうては自分とクリスだけで五月や風太郎を守り切るのは難しいかもしれない。

幸いにもシャークイレイザーは重症で未だにまともに動けず、今なら奴を仕留めるだけならそう難しくはない。

ならばやはり、此処は無理を押し通してもシャークイレイザーだけでもどうにか仕留めるべきだろうと判断するが、周囲にはイグニスイレイザーの隙を作れそうなのにか

用出来そうなモノが見当たらず内心焦りを募らせる中、そんなクロスの心境を他所にイグニスレイザーは全身から無数の火の粉を立ち上らせていく。

『何にせよ、此処で俺に会ったのがテメエの運の尽きだ。今度はもう邪魔する物は何もねえ……存分に殺し尽くしてやるよオオオッ!!!』

『クツ……!』

全身から炎を勢いよく噴かし、凄まじいロケットダッシュでイグニスレイザーが巨大な腕を振りかぶりながら目前から迫る。

それを目にしたクロスは銃剣の刃でイグニスレイザーの拳を受け流しながら真横へと飛び退き、受け身を取って態勢を立て直す共にウェーブブラスターの銃撃をイグニスレイザーの全身に浴びせていくが、イグニスレイザーはその身に銃弾を受けてもビクともせず、身体の汚れを手で払いながらほくそ笑んだ。

『相変わらずの豆鉄砲だなあ。今更そんなもん俺には効かねえって分かってんだろ？前



に俺とやり合えてた立花響の力はどうした？』

『ツ……切り札は最後まで取っておく物だろう？奥の手を早々に切るほど俺は馬鹿じゃない』

ウエーブブラスターを構えたまま強気な態度を崩さないクロスだが、無論これもただのハツタリだ。

右腕が万全に使えない現状でタイプガングニールの真価を十全に発揮出来る筈がない、何よりもそれを奴に悟らせてしまえばこちらの弱点を突いて来ない筈がない。

今はとにかくそれを悟らせないように振る舞いつつ、奴の隙を見てシャークイレイザーを倒す方法を思い付くまでどうか時間を引き延ばそうと試みるクロスだが、イグニスイレイザーは鼻を軽く鳴らしながらその巨大な右腕に再び炎を灯していき、

『出し惜しみなんぞしてて俺に勝てるとは到底思えねえがなあ……ま、こつちとしては楽が出来てそれでも構わないけどよオツ!!』

横薙ぎに振るわれたイグニスイレイザーの右腕から、無数の炎弾が扇状に放たれクロスに襲い掛かった。それに対しクロスも咄嗟に地面に向けてウエーブプラスターから銃弾をばら撒き、土埃を発生させてイグニスイレイザーの視界から消えると共に炎弾が土埃を切り裂き、一瞬でクロスが消えた何も無い空を突き抜けていく。

『今度は目眩しか？んなもん俺に通じる訳が——』

『Final Code x::clear!』

『ゼエアアアアツ!!』

イグニスイレイザーの言葉を遮るように鳴り響く電子音声と共に、目眩しを利用してイグニスイレイザーの背後に素早く回り込んだ朱い影……タイプスラッシュにその姿を変えたクロスが朱色の雷光を纏った右脚を振るって後ろ回し蹴りを放つが、イグニスイレイザーはそれを読んでいたかのように身を屈めて蹴りを回避しながら拳を下から振り上げ、クロスを殴り返した。

……が、イグニスレイザーの拳が直撃した瞬間、クロスの身体が残像のようにブレて完全に消え去ってしまった。

『?!分身だど?—ズシヤアアアアアッ!!—グオオオオツ?!』

何の手応えもなく消滅したクロスの残像を見て目を丸くするイグニスレイザーの両肩に、何処からともなく飛来した二振りの剣……スパークスラッシュがブルーメランのように勢いよく回転しながら突き刺さった。

思わぬ不意打ちを受けてイグニスレイザーの身体が前のめりにグラつき、其処へ遙か頭上からタイプスラッシュからスタンダードへとアーマーを素早く切り替えながらクロスが急降下で落下していき、すかさずカードをバツクルに装填していく。

『Final Code x::clear!』

『はあああああああああッ!!』

『うっ——グオオオオオッ!!?』

鳴り響く電子音声と共に右脚を蒼く光り輝かせ、クロスが放った渾身の蹴りがイグニスイレイザーの頭上から炸裂しそのまま凄まじい轟音と共に地面へと踏み付けていったのだった。

『(奴からダウンを取った……!この隙に……!-)』

舞い上がる粉塵を背に地面に着地し、クロスは気を緩めず即座に両足に向けてスーツの上のラインに蒼い光を走らせる。

基本形態三つを全て利用して奴の意表を突く事は出来たが、この程度の攻撃が奴に通じない事は既に分かってる。

故に奴が態勢を立て直す前にシャークイレイザーを先に仕留めなければと、両足の先端に蒼い光を灯したクロスは地面を蹴り上げ、未だ腹を抑えて動けずにいるシャークイ

レイザーに目掛けて跳躍し一気に跳び掛かるが、

——クロスの目の前に不意に残像が現れ、巨大な拳を振り上げたイグニスレイザーとなつて立ち塞がった。

『逃がす訳ねえだろッ……!!』

『ッ?!グッ……ドゴオオオオオオッッ!!——ウグアアアアアアッ!!』

目にも止まらぬ速さで回り込まれた上、勢いよく振り下ろされる拳を前に咄嗟に左腕で防御姿勢を取るクロスだが、そのあまりの威力に防御も意味をなさず猛スピードで地面に叩き落とされてしまった。

そのままともに受け身すら取れずに背中から叩き付けられ、罅割れた地面からふらつきながら身を起こそうとするクロスの目の前にイグニスレイザーが瞬間移動で現れ、クロスの首を掴んで無理矢理起き上がらせてしまう。

『さっきのは思ったより効いたぜ。お前を相手に慢心すんのは足元掬われるって分かってた筈なのになあ……つたく、俺もまだまだ甘いってこったアああッ!!』

『つ、ぐううッ!』

巨大な右腕に紅い炎を収束して纏い、固く握り締めた拳を振りかざして殴り掛かろうとするイグニスレイザーの胸にクロスが右足を押し当てながら思い切り蹴り上げ、その反動を利用してイグニスレイザーの手から強引に逃れギリギリで拳を回避した。

だが、イグニスレイザーは自分から離れようとするクロスの足を咄嗟に掴んで強引に引き戻してしまい、そのまま力任せに離れた場所に留まる乗用車に目掛けてクロスを投げ付けて激突させてしまい、乗用車の車体が歪にひしゃげ、窓ガラスが全て砕けて無惨に飛び散ってしまった。

『ぐうッ!!う、つ………ク、ソッ………!』

激痛で震える身体に鞭を打ち、クロスはどうにか身を起こそうとする。だがその間にもイグニスレイザーは右手の掌の上に炎を収束して炎の塊を形成させていき、クロスに狙いを定めながら腰の後ろに徐々に右腕を引いていく。

『そろそろ終いといこうじゃねえか。今度こそトドメを刺してやるよ……この手でなア  
あああああッッ!!』

『…………ッ!!』

右腕を突き出して炎の塊を放とうとするイグニスレイザーの姿を視界に捉え、クロスも慌ててその場から離れようとする。

がしかし、乗用車に激突した際に傷に響いたのか右腕に凄まじい激痛が走り、苦痛で顔を歪めながら腕を抑えて動きを止めてしまうクロスに目掛けて、イグニスレイザーの手からトドメの一撃が問答無用で放たれようとするが……

その時、突如何処からか無数の弾頭が飛来してクロスとイグニスレイザーの周囲に次々と撃ち込まれていき、地面に全て着弾したと同時に黒煙が発生して二人の視界を覆い尽くしていったのだった。

『ツ?!な、んだこりゃ? 煙幕……?!』

思い掛けない横槍に動揺してしまうイグニスレイザーを他所に、弾頭は更に立て続けに周囲に降り注いで煙の量を増やしていく。

それによって視界が満足に確保出来なくなっていく、クロスの姿も煙幕に遮られ狙いが付けられないイグニスレイザーは困惑を露わにしながらも鬱陶しげに舌打ちすると、手の中の撃ち損ねた炎の塊をカン頼りに煙幕の向こうへと投げ放った。

直後、ドオオオオオツツ!!!と耳を劈くような爆発音と共に凄まじい衝撃波が発生して周囲を覆い尽くしていた煙幕を一気に吹き飛ばしていき、視界が漸く拓けていくと、目の前には爆発の発生源である乗用車が轟々と燃え盛り炎上している光景が広がっていたが、先程までそのすぐ近くに倒れていた筈のクロスの姿は何処にもなかった。



『（奴がいねえ……！何処に行きやがった?!）』

まさかあの煙幕に乗じて逃げたのかと、慌てて周囲を見回してクロスの姿を探しているくと、遠方に建物の屋上から屋上へと飛び移りながら遠ざかっていく不審な人影を視界の端に捉え、イグニスレイザーは目を凝らしてその人影を見つめていく。それは……

「——おいっ、おいっっかりしろっ！っっかり立てっつてっ！」

『っ、ぐっ……！』

足元が覚束無いクロスに肩を貸し、半ば強引に彼の身体を引きずりながら次の屋上へと飛び移る少女……イチイバルのギアを身に纏ったクロスの姿があり、影の正体が彼女だと気付いたイグニスレイザーは忌々しげに毒づく。

『またあのガキか……！何度も何度も横槍をつっ！』

先程の弾幕も恐らくあの少女の仕業だろう。前回の戦闘に引き続きまたも自分の邪魔をしたクリスに苛立ちを覚え、このまま逃がしてたまるかと全身から炎を噴き出し二人を追撃しようとするが、しかし……

『……う、ううっ……た、たすけっ……たすけてくれえええっ…………！』

『っ！』

背後から不意に掠れた呻き声が聞こえ、思わず足を止めて振り返る。

其処には地に倒れ伏し、クロスに穿たれた脇腹の風穴から無数の光の粒子が立ち上って今にも消滅し掛かっている様子のシャークイレイザーの姿があり、それを目にしたイグニスイレイザーは徐々に遠ざかっていく二人の後ろ姿とシャークイレイザーを交互に見ると、僅かに逡巡する素振りを見せた後に舌打ちし、全身から噴き出す炎を消し去った。

『(流石にこのままアイツを見殺しにする訳にもいかねえか……だが、次こそは絶対だ。』

この手で必ず息の根を止めてやるっ！』

このまま瀕死の状態のシャークイレイザーを放置する訳にはいかず、二人の追跡を諦めたイグニスイレイザーは倒れるシャークイレイザーの下に歩み寄って身体を抱き起こす。

そして、足元から放出した炎に包まれて二人は何処かへと消え去り、後には炎に包まれる乗用車と、クロスとイグニスイレイザーが争った跡の惨状のみが残されていたのであった。



—中野姉妹宅—

一方その頃、クリスがクロスとシャークイレイザーを追い掛けた後、学校から五月達

の家に戻ってきた風太郎と五月はリビングで待機し、二人が戻ってくるのを何処か落ちて着かない様子で待ち続けていた。

「黒月さんと雪音さん、大丈夫でしょうか……」

「さあな……あのイレイザーとかいう怪物に関しては正直俺達に出来る事は何もねえし、今はアイツ等が無事に帰ってくるのを待つしかないだろ。こっちから探しに出ていった所で、もしかたあの怪物と出くわしたりでもしたら俺達じゃどうする事も出来ないしな……」

「それはそうですが……」

風太郎の言う事も最もだが、やはりこうしてただ待つしか出来ないというのはどうにももどかしく思う。

自分達を守る為に危険な戦いに向かった二人は無事なのか、怪我を負ったりはしてないだろうか。

リビングの壁に立て掛けられた時計の秒針が進む音と共に、そんな不安感が胸の内でも膨らんで無意識に膝の上で祈るように両手の指を絡ませてしまう五月に対し、そんな彼女の不安げな表情から風太郎も五月の心情を察し、何か彼女の気を紛らわせる話をしようとして口を開き掛けたその時、玄関の方から突然ドンドンと扉を何度も強く叩く音が響き渡った。

「ッ！な、なんだっ……？」

『おい！早く開けてくれ！』

「！今の声……雪音さん？」

一瞬、もしや先程のイレイザーがこの場所を突き止めたのではないかと身構えてしまふ風太郎と五月だが、扉の向こうから聞こえてきたクリスのただならぬ様子の声を聞き、互いに顔を見合わせた二人は玄関に出て鍵とチェーンを外し、恐る恐る扉を開ける。

直後、扉が勢いよくバンツ！と開かれ、頭から血を流した蓮夜を背負ったクリスが中へ駆け込んできた。

「雪音さん！良かった、二人ともご無事で……って、黒月さんその血つ……?!」

「説明は後だ！今はとにかく治療器具を持ってきてくれ！早く！」

「あ、ああ……！五月！救急箱！」

「は、はい！えと、確かこの辺に……！」

額から床に血粒を落とす蓮夜の姿を見て動揺しながらも、五月は慌てて戸棚から救急箱を探し始め、風太郎もクリスを手伝って蓮夜を奥のリビングへ運ぼうと肩を貸すが、蓮夜は何故かそんな二人からふらつきながら離れ、玄関の扉に背中を預けた。

「俺の事は、いいっ……それより今は、あのイレイザー達への対策を考えっ……ぐっ……！」

「んなの後から幾らでだって出来んだろうがっ！今は自分の身体の事を先に考えろっ！」

「そ、そうですよ！酷い怪我なんですから、今は無理をしない方が……！」

「そんな悠長にしていられる時間なんてないっ……。お前の姉達を攫ったイレイザーを仕留め損なっただんだっ。その上奴まで現れたんじや、今のままだとこの二人を守り切れるかどうかっ……。奴等がまた動き出す前に、何か対抗手段を……っ……。！」

「お、おい……。無理に動くなっ！」

怪我の治療も後回しに無理に動こうとする蓮夜に風太郎が慌てて支えに入るが、蓮夜は構わず歩くのもままならない足取りで玄関に上がって今後の対策を話し合う為によりビングへと向かおうとし、そんな蓮夜を見てギリツと歯齧みをしていたクリスが蓮夜に詰め寄り、その胸ぐらを掴んで壁に勢いよく押し付けた。

「ツ……！イチイバルっ……？」

「いい加減にしろよっ……！この間もさつきも、今もっ！お前一人が無茶すればどうにかなる訳でもねえだろっ?!いつまでそうやって自分一人で戦ってるつもりでいる気なんだよっ！」

「ゆ、雪音さん！」

「落ち着け！相手は怪我人だぞ！」

「うるせえっ！お前らは口挟むなっ！」

突然のクリスの激昂に戸惑いながらも慌てて止めに入ろうとする風太郎と五月だが、クリスはその二人の声にも聞く耳を持たず壁に押し付けた蓮夜を鋭く睨み付け、一方で蓮夜もそんな彼女から視線を逸らし何処か複雑げな表情を浮かべるも、クリスの目をまっすぐ見つめ返しながら血塗れの手で彼女の腕を掴んだ。



「お前の言う事も、分かる……それでも、多少の無茶を押し通してもしなければ勝ち目のない相手なんだ……。救わなきゃいけない人間がまだいる以上、俺には自分を省みる暇なんてっ……」

「それが間違いだっって言っただよっ！奴らとまともに戦えるのは現状お前だけだっ！そのお前に何かあればそれこそこっちは手詰まりになるっ！誰かを救いてえなら、まずお前がそいつを自覚して自分の足元固めんのが先なんじゃねーのかよっ！！」

「っ……！」

「も、もうやめて下さい二人とも！」

「もういいだろっ……！今はそいつの怪我の治療が先だ！」

「っ、チツ……！」

「……………」

救急箱を両手に今にも泣き出しそうな様子の五月と、蓮夜との間に割つて入った風太郎に止められ、クリスは蓮夜を突き放しながら背中を向けて舌打ちし、壁に背を付ける蓮夜もズルズルと床に滑り落ちて気まづげに顔を伏せてしまう。

そしてその後、蓮夜は怪我の治療の為に風太郎の肩を借りてリビングの方へと覚束無い足取りで運び込まれていき、救急箱を手に二人の後を追いつけようとした五月も一瞬歩みを緩めてクリスの方を見遣るが、風太郎に呼ばれて慌ててリビングへと向かい、玄関に残されたクリスはやり場のない苛立ちに苛まれ、蓮夜に掴まれて血が付いた自分の手を見下ろしながら「クソツ……！」と一人悪態を漏らしてしまうのであった。

## 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）④（前）

—市街の森・廃屋—

「——クソツ、クソオオオオオオオツ!!あと少しっ、もう少しで全てが上手くいった筈なのにイイイイイイツ!!」

ガシヤアアアアアツ!!と、薄暗い闇に包まれた廃屋内に無数の鉄が散乱するけたたましい音が鳴り響く。

地面に幾つもの錆びれた鉄屑を撒き散らし、憤りを露わにそれらを見下ろすのは上半身の服を脱いで脇腹に何重もの白い包帯を巻き付けた神楽木であり、そんな彼から少し離れた場所では、神楽木の怪我を治療したアスカが何処か気まずげに佇む姿があった。

「だから、奴らの事に関しては何かつたって言うてるだろつ。別にこつちだつてわざとお前に連絡しなかつた訳じや……」

「謝つて済む問題な訳があるかあアツ!!俺が今日までつ、一体どれだけ慎重に事を運んできたと思つてるウツ?!本人達に怪しまれないように表では気の良い教師を演じつ、奴らのその日の動向を探つては姿を見られないように注意を払つて此処まで来たんだツ!後はあの五女を攫いさえすれば、今まで攫つた連中と一緒に纏めて消してこの物語を俺の手中に墮とせていた筈なのに……!それをお前らが勝手にあんな奴らをこの世界に引き入れたせいで、全て台無しだアツ!!」

「いや、そうは言われてたつてなあ……」

頭を激しく搔き毟つて計画が頓挫した事に憤る神楽木の怒りも最もなのだが、正直自分もクレンの口車に乗つただけのクチなのでその怒りをぶつけられたつてどうしようもない。

ただまあ、あの二人をこの世界に送つたのは確かに自分なのでそれを強く否定する事

も出来ず、一体どうしたものかと、怒り狂いながら物に当たり散らす神楽木の荒れっぷりを遠目に面倒そうに頭を悩ませるアスカだが、その時……

『——まあまあ、そうカリカリしないでよ。確かにこつちの不手際のせいで向こうに君の正体がバレちゃったけど、まだ取り返せる範囲の失敗だから気に病む必要はないさ』

「……?!」

「この声は……」

怒り散らす神楽木を宥めるかのように、不意に何処からともなく青年の声が響き渡った。

その飄々とした聞き覚えのある物言いにアスカが訝しげに眉を潜めると、アスカが手に持つ半透明の本が独りでに突然開き、ページから発せられた光がアスカと神楽木の間で人型の形を形成して一人の青年……クレンの残像となっていた。

「ア、アンタ……!」

『やあ、すっかり役目を勤めてくれてるみたいで安心したよ。でも悪いねえ、僕が連絡ミスったせいで君にもいらぬ怪我させてしまつて。今回の件は完全に僕の責任だから、どうかアスカの事は責めないであげてくれるかなあ?』

ナツハハツと、そう言いながら屈託のない笑顔を向けてアスカをフォロウするクレンだが、神楽木はそんなクレンを前に「うっ……」と何故か急に口籠らせて先程までの荒れっぷりが嘘のように大人しくなっていく。そんな神楽木の態度の豹変にアスカも訝しげな眼差しを向ける中、クレンがアスカの方に振り向いて口を開いた。

『アスカも悪いねー、余計な手間取らせちゃつて。でも、無事に合流が出来たみたいで安心したよ。これでもし助けが間に合わなくて彼が倒されでもしていたら、流石に僕も夢見が悪くて参つてただろうしねえ。いやあー、ホントに良かった良かった』

「……ハツ、心にもねえ事を良く言うぜ。どうせお前の事だから仮にコイツがくたばつた所で、すぐに代わりになれるような奴を用意してあんだろ?」

『アツハツハツハツ、そりやそーだよ決まってるじゃない。だつてホントにヤバいつて思つたら僕が他人任せになんてする筈がないし、仮に彼が倒されてたらずぐに別の人員をそつちに送る予定だつたし。……あ、となると別に君を急がせる必要もなかつたつて事になるのかな？ いやー、メンゴメンゴ』

「つ、コイツはツ……」

相も変わらずいい加減なまでの適當さを微塵も隠そうとしないクレンに思わず苛立ちが湧き立つアスカだが、それを指摘した所で彼が大して意に介さない事も嫌というほど分かつている為にそれ以上は何も語らず深々と溜め息を漏らしてしまふ。

そして神楽木も自分が死んだ後の話を喜々として語るクレンに怯えた眼差しを向けながら段々とその顔色が青ざめていくが、クレンはそんな神楽木を他所にいつもの飄々とした調子で話を進めていく。

『でもまあ、君が彼を助けてくれたおかげで余計な人員を送る必要もなくなった訳だし、

実際に助かったところがあるのは確かさ。んで、ついでで悪いんだけど君にはこのまま残って、彼の仕事を手伝ってあげてくれないかな？見た感じ、どうやら蓮夜君達にも彼の正体がバレてしまったようだしね』

「っ……っ！」

チラツと、何気ない調子で顔を向けるクレンの眼差しは神楽木の腹に巻かれた白い包帯を射抜く。神楽木もクレンの視線を受けて思わず後退りしてしまい、そんな神楽木の様子にアスカも訝しげに眉を顰めながらも腕を組んで口を開く。

「それに関しちゃうこともその気だったから別にいいが、問題はその為に関後の方針をどうしたらいいかって話だ。コイツの正体や能力が知れた以上、向こうもきつとソレを警戒してる。今までのやり方が通じるか分からねえ以上、下手打てばそれが悪手になり兼ねねえから油断ならないぞ」

『あれ……？意外と慎重的な考えだね。正直彼等も大した脅威にならないし、てつきりこのまま残った最後の一人を奪いに無理矢理にでも攻め入るんじゃないかと思つてた



けど』

「馬鹿言ってるんじゃないよ。そんな強引な手を打ってこの……あーっと……名前なんつったっけか、この物語……？ごと、五等……？」

『五等分の花嫁、だよ』

「ああ、それだそれ。この五等分のなんちゃらの物語に俺達の存在が悟られでもしたら、俺は勿論、コイツも追放されて二度とこの世界に戻って来れなくなんだろ？俺達の敵はアイツらだけって訳じゃねえんだから」

ただでさえ現状、この物語のヒロインである四人の少女達を誘拐するという本来の流れにはない事件を自分達は起こしているのだ。

何時この世界そのものがその異変に気付いて自分達の事に勘づくか分からない以上、下手に派手な動きをして追放されでもしたら全てが水の泡になってしまう。

「何より、俺が一足遅れたせいでコイツもクロスに怪我を負わされてる。一応最低限の治療を施したとは言え、まだ満足に動ける状態じゃない。能力を使わせてもそれは変わりねえだろうし、こんなんで奴らの前に連れ出せば油断した隙に討たれるって事もありえなくはねえしな……」

『成る程ね……ふむ……』

そうなる事を避ける為にも、此処から先はより慎重にならざるを得ないと語るアスカの言葉にクレンも顎に手を添え、少しばかり考える素振りを見せた後、不意に何かを閃いたかのように僅かに顔を上げてこう告げた。

『ならばあ？こつちからわざわざ攫いに行くんじゃないで、向こうから来てもらうってのはどうかかな？』

「……向こうから？」

どういう意味だ？とアスカの頭上に疑問符が浮かぶ。クレンはそんなアスカの反応

に不敵な笑みを返し、まるで悪戯を思い付いた子供のような笑顔と共にその計画の全貌を話し始めていくのであった。



夜のはじめ頃。一先ず蓮夜の怪我の治療を終えた後、この世界で暗躍するイレイザーの正体突き止めた一行は今後どうするべきか話し合った末、今は相手の出方を伺いつつ蓮夜の回復を待とうという方針となった。

どの道イレイザーとまともに戦える蓮夜が負傷している間こちらからは動けない上、蓮夜曰く、敵側も肝心のイレイザーが負傷してる以上今すぐ次の動きに出る事はないだろうと踏んでの結論だった。

その後、取りあえず腹ごしらえに夕食の準備に取り掛かろうとした際に材料が足りてないとの事で、五月から半ば強引に足りない分の食材を買ってきて欲しいと頼まれ、蓮

夜と風太郎の男性陣は近くのスーパーへ買い出しに向かう事となったのだが……

「——いや、ホント……なんでちよつと目を離した隙に新しく怪我作ってくれてるんだよ、アンタ……」

「……すまない……いや、ただ単に軽いスキンシップのつもりで頭を撫でようとしただけだったんだが、まさか俺も彼処までガッツリ噛まれるとは思わなくて……」

ズーンツと、そう言いながら店先の前で酷く落ち込んだ様子の蓮夜が風太郎に差し出す左手からは、えらく深い歯型の傷跡からダラダラと血が流れ出ており、風太郎はそんな蓮夜をジト目で睨みながら持参したハンカチを止血の為に彼の左手に巻き付け、呆れるように溜め息を吐いた。

何故こんな事になってしまったのか。別に元々あつた怪我が開いたとか、いきなり敵の奇襲を受けたからとかそんな深刻な理由からではない。

ただ、風太郎が店の中で買い物をしている間に蓮夜がイレイザーの襲撃を警戒して外

で念のため見張りをしていた際、買い物客の誰かのペットなのか、店先にリードで繋がれていた可愛らしいコーギー犬とたまたま隣り合わせになったのが事のきっかけだった。

この時点で既に察するものがあると思うが、特に異常らしい異常もなく、待つてる間手持ち無沙汰で暇していた蓮夜は何となしにそのコーギー犬とじやれてみようかと思いい、頭を撫でようと不用意に手を伸ばした瞬間に秒でガブリツ！されてしまった訳である。

その後、風太郎が買い物を終えて戻ってきてみれば、外ではザワザワとどめよく見物人達に囲まれて真顔のまま何も出来ずにダラダラと冷や汗と共に手から流血する蓮夜と、わりと本気で彼の手を食い千切らんとばかりの勢いで激しく頭を振って嘔み付くコーギー犬、そしてそんな興奮状態の犬を引き剥がそうと親切な通行人の方々が必死に奮闘するという異様な光景が広がっていたのだ。

そんなあまりに予想斜め上の展開を目の当たりにした風太郎も最初は脳の情報処理が追いつかず呆然と立ち尽くしてしまってたが、その後すぐに我に返って慌てて蓮夜を

助けようと救出に加わったのが先程までの出来事の経緯である。

因みにそんなカオスな事態を終息させたのは風太郎より少し遅れて店から出てきた犬の飼い主さんによる一声であり、蓮夜が解放された後は見てるこちらが申し訳なくするぐらい何度も何度も頭を下げて謝罪してくれた。

「あの飼い主にも申し訳ない事をしてしまったな……一応動物には嫌われ慣れてるから問題ないとフォローはしてみたものの、あまり気にしてないといいが……」

「嫌われてるって自覚してんならそもそも勝手に触ろうとするなよ……!店から出たら滅茶苦茶人集まってたし、てつきりまたあの化け物が襲ってきたんじゃないかって一瞬身構えちまつただろ!」

「いや、まあ……人に慣れてるなら俺でもワンチャン行けるんじゃないかとか、苦手を克服するのなら良い機会なんじゃないかと思っただ……ワンちゃんだけに」

「……………」

「ワンちゃんだけん」

「聞こえなかったんじやないんだよスルーしてんだよ敢えて！気付けよそれぐらい！」

何故かちよつと上手いこと言つてやつたぞ、みたいなドヤ顔までキメて寒いダジャレをしつこく繰り返そうとする蓮夜にツツコミを入れつつ、ギョツ！とハンカチをキツめに結ぶ風太郎。

うぐつ！と顔を擧めて蓮夜が痛みに悶えるが、風太郎は構わず疲れた様子で溜め息を吐きながら地面に置いておいた買いた物袋を手にとって先へと歩き出していき、蓮夜も渾身の洒落を無下にされてちよつと不服げな顔をしながら左手をプラプラさせると、自分の手に巻かれたハンカチを一瞥し、風太郎の後を追い掛けながら声を掛けていく。

「しかし、治療の為にわざわざハンカチまで使わせてしまつてすまないな……これは家に着いたらちゃんと洗つて返して——」

「別にいいそんなの……つてかそういう気遣い、俺にじゃなくてあの子に使ってやるべきなんじゃないか？」

「……え？」

「え？じゃなくて、アンタなあ……なんで俺と五月がわざわざアンタとあの子を引き離れたのか、ちよつと考えれば分からない訳じゃないだろ？」

「……………」

呆れ口調の風太郎に溜め息混じりにそう言われ、蓮夜は一瞬真顔のまま固まった後に僅かに顔を伏せてしまう。

——数十分程前、クリスとのあのやり取りから彼女とまともに目を合わせる事も出来ず、そんな自分達の間の気まずい空気を察してか風太郎と五月も中々口を開く事が出来なideいた。



そんな中、突然五月が半ば自分達を追い出すような形でこうして買物に行かせた訳なのだが、恐らくアレはクリスと一旦距離を置かせて自分達の頭を冷やさせようという五月なりの気遣いだったのかもしれないと、最初は急で気付けなかった事も、今は何となくそうなんじゃないかと落ち着いて考える事が出来る。

「そう、だな……改めて思うと、みつともない所を見せてしまったと思う。そつちも大事な家族を攫われて、しかも自分達も狙われてる大変な状況だというのに、いらぬ気遣いまでさせてしまつて……」

「そういうのもいい……俺が言いたいののは、あの子と早く仲直りなり何なりしてくれつつ話だ。こつちとしてもずつとあの空気の中にいるのは気まずいってもんじゃないし、アンタ等だつてこのままじゃいざつて時に困るだろ？」

「それは……分かつてはいるんだが……」

風太郎の言う通り、自分としてもこのままクリスとの間に険悪なムードが続くのは避けたいと思つてる。

とは言え、自分を快く思っていないクリスとどうやって向き合うべきか。それが分からず思い悩む蓮夜の横顔をジッと見つめ、風太郎も僅かに逡巡する素振りを見せた後に薄く溜め息を漏らした。

「まあ、あの子との間に何かありそうだなってのはアンタ見てて何となく察しは付いてはいたけど……其処まで悩むくらい深刻な事なのかよ？」

「……深刻、に映るかどうかは人の目によると思うんだが、そうだな……解決策が全然思いつかない俺にとっては、結構深刻な問題だと思ってる……」

苦笑しながらそう言つて、蓮夜はポツポツとこれまでの経緯を簡潔に語り始めた。

クリスやその仲間である響達と最初に出会い、其処で彼女達をイレイザーとの戦いから遠ざける為に不遜な言い方をしてしまい、特にクリスから不興を買ってしまった事や、彼女達と正式に協力するようになってからも彼女との訓練で真剣勝負を請われ、本気の戦いを望んでた彼女に対しましたしても自分が不用意な発言をして怒りを買ってし

まった事など。

この世界に来る前に自分がどれだけクリスに対して配慮に欠けた事をしてきたか改めて語る蓮夜の話聞き、若干微妙そうな顔を浮かべていた風太郎も大体の事情を知り納得したように頷いた。

「成る程な……まあ、傍から聞けばどつちが悪いってのも一概には言えないというか、別にアンタだって悪気があつた訳じゃないんだろう？」

「……だとしても、無自覚な悪意が相手を傷付ける事だつてある。俺の場合は特にそういった物が積み重なつて、謝る機会を逃したせいで尚更拗れてしまった訳だし……それに俺自身、此処に至るまでの異常事態の連続を言い訳に、何処かなあなあにしていた部分があるのは否めない……」

上級イレイザーとの遭遇や異世界への転移、更にはその世界で暗躍するイレイザーが起こした事件の被害者と出くわすなど予想外の事態の連続に追われて視野狭窄になり、機会はあつた筈なのにクリスと向き合つて話すのを疎かにしてしまつたのは否定出来

ない。

無論自分なりに別世界に跳ばされて混乱するクリスの心情を気遣い、要らぬ不安や心配を与えまいとしていつも通りの態度を心掛けていたつもりだが、今にして思えばそれも逆効果だったかもしれないと思う。

「俺が良かれと思ってやる事は、尽く裏目に出る。だからいざ彼女と腹を割って話そうとしても、また不用意な事を言つて彼女に不快な思いをさせてしまうんじゃないかとか……そう考えると、中々……」

これ以上要らぬ溝を深めてしまうくらいなら、いつそ彼女の不興を買わぬようにある程度距離を置くのが一番ではないか。そう考えてしまうくらいに深く悩み、沈んだ表情を浮かべてしまう蓮夜だが……

「……別に、嫌われるんなら嫌われるで、それでもいいんじゃないのか」

「……ええ？」

風太郎がポツリと口にした意外な言葉に、蓮夜は僅かに目を見開いて振り向く。そんな蓮夜に対し、風太郎は目を伏せながらぶっきらぼうな口調で話を続けていく。

「人との繋がりとかって、別に最初から良好な関係に拘る必要なんてないだろ。お互いにムカついて、嫌いあつたりとかして、そこから段々少しずつ変わっていく事だつて中にはある。寧ろ問題なのは、そんな険悪な関係のまま変えようとする努力をしない事なんじゃないかって、俺は思うけどな」

「…………それはそうかもしれないが…………しかし、そう簡単な話ではないんじゃないか？」

「そりゃな。マイナスからのスタートなんだから、最初から良好な関係から始めるのじゃ苦勞の度合いが段違いに決まってる。けど後々になって幾ら後悔しようが、自分で撒いちゃった種である以上、自分で何とかしなきゃいつまで経っても解決なんてする筈もないんだよ」

「…………ぐうの音も出ないな…………」

「まあ、簡単な話じゃねえのは確かだけど、其処まで相手の事を思いやれるなら絶対にやれないって事はないんじゃないか？少なくとも、俺達の時よりは十分マシだろうし」

「……？俺達……？」

火の玉ストレートのド正論をぶつけられて何も言い返せずに苦笑いを浮かべていた蓮夜だが、風太郎のふとした発言に疑問を抱き思わず聞き返す。

すると風太郎もそんな蓮夜の顔を横目に一瞬見ると、何かを考え込むように僅かに俯いた後、徐に視線を上げて雲掛かった空を見上げていく。

「俺や五月……アイツら五つ子とも、最初に出会った頃はそりや最悪でな。家庭教師のバイトの為に落第寸前のアイツらの成績を何がなんでも上げなきゃいけないってのに、勉強は嫌い、ついでに俺の事も死ぬほど嫌ってて全然上手くいかなかったんだよ。だから正直、家の事情さえなきやコイツらの家庭教師なんて誰がやるもんかって、最初の頃は何散々愚痴ってたりしたもんだ」

「……そうだったのか……今の二人を見てると全然そんな風には見えなかったから、意外だな……」

「あれから色々あったからな。五月とは最初の出逢いからドジったせいで嫌われまくったし、二乃には薬を盛られたりされて家庭教師を辞めさせられそうになるわ、一花には花火大会を始め散々振り回され、三玖は家族旅行先で偽五月に化けて家庭教師を拒否してくるし、四葉にも部活問題で苦労させられ……ほんと、アイツらにどんだけ苦労させられてきたか数え切れねえけど、今にして思い返すと、それも悪くなかったなっと思うんだよ」

「……それは、何故？」

今までの彼の話を聞いた限り、五月やその姉達に散々苦労させられて良かった点など何もなかったかのように聞こえるが、そんな振り回され続けたハズの過去を何処か穏やかな口調で語る風太郎を見て蓮夜が思わずそう聞き返すと、風太郎は足を止め、地面に視線を落としていく。

「何度もすれ違つて喧嘩して、振り回されて……その度にアイツ等の事を自然と考えるようになって、向き合つていく内に何となく分かるようになってきたんだよ。アイツら一人一人の欠点や面倒な所と同じくらい、それに負けないくらいの長所とか……弱さや、優しさとか……多分、ただの家庭教師と生徒つてだけの関係じゃ気付く事のなかつたアイツらの良さつて奴を、がむしゃらにぶつかつてく内に知る事が出来たんだ」

だから、と風太郎は振り返り、蓮夜の目をまつすぐ見据えていく。

「最初は最悪だったこんな俺達でも、色んなもんを積み重ねて互いを思いやれるくらいにはマシな関係になれたんだ……アンタやあの子だつて、腹を割つて本音でぶつかり合えば、今よりちよつとはマシな関係になれるかもだろ？」

「……本音でぶつかり合う……出来るだろうか、俺にも……」

「出来もしない事なら、俺も最初から無責任に出来るだなんて言わねえよ。今日までアンタら二人を見てきたけど、別に其処まで悩むほど仲が悪いつて感じにも見えなかつた



しな……。さっきも、あの子があんなに怒ってたのもアンタが自分の身を顧みないから心配してたって感じに見えたし、あの子が本当はどう思ってるかなんて、直接話してみなきゃ分からないんじゃないか？」

「……アイツの本心……」

風太郎にそう論され、蓮夜はこの世界に来てからのクリスとの記憶を思い返している。

いきなり違う世界に飛ばされて何も分からない状況の中、重症を負った自分を助けてくれたり、風太郎と五月を助けたいという自分の我儘に付き合うと言ってくれた時は本当は内心嬉しかったし、彼女と気兼ねなく会話をしていた時も自分でも意外に思える程楽しんでいたのを覚えてる。

そんな自分の心の内と改めて向き合い、蓮夜は自身の胸に手を当てて僅かに微笑を浮かべた。

「そうか……そうだな……俺も、本当は……」

「……？何か言ったか？」

「……いや。ただ自分が、これからどうしたいのか少し見えた気がしてな……有り難う、上杉」

「？お、お……」

まだ明確にとまではいかないが、少なくとも、自分の中でクリスとどう向き合いたいかは定まった気がする。

その道を示してくれた風太郎に対して感謝の言葉を口にする蓮夜に対し、礼を言われた本人の風太郎はピンと来ていないのか若干戸惑い気味に頷き返す事しか出来ず、そんな風太郎の反応に苦笑いを浮かべながら蓮夜は再び彼と共に並んで歩き出していく。

「しかし、流石は家庭教師という言うべきか、人の悩みを解きほぐすのも上手いな。この

「まま本職の教師としてやっていけるんじゃないか？」

「冗談だろ？アイツ等の勉強見るだけでも精一杯なんだ、こんな仕事をずっとだなんて俺の身体が持たねえっての」

「そうか？俺は向いていると思うんだが……そうだ、試しに上杉先生と呼んでみようか。形から入れば案外しっくりくるかもしれない」

「やめてくれ、マジでっ」

「むう、そうか。残念だ……では、先生ではなく下の名前で呼んでもいいだろうか？」

「今の会話の流れで何でそうなる?!脈略無き過ぎだろ！会話下手か！」

「いや、せっかくの数少ない相談に乗ってもらえる同姓だし、これを機にもっと仲を深められばなと思ってな……。前に人と親しくなりたいなら名前呼びが一番良いと、知り合いに教えてもらった事があったからソイツを実践してみようかと」

「どんな前向き思考過ぎるアドバイスだよ、コミユカお化けか何かじゃないのかそいつ……」

「まあ、あながち間違いとも言えない。記憶喪失だなんて言う男の事を分かりたいと、進んで手を伸ばしてくるような奴だからなあ……」

「ますますどんな奴なんだよ……つてちよつと待て……今、サラツと記憶がどうかとんでもないこと言わなかったか……?」

「……ああ、そういうええはまだ言つてなかったか。実はこう見えてイチイバル達の世界に来る前の事を全く覚えてないんだ。ドラマや漫画みたいで、ヤバいだろ?」

「……そうだな……そんな大事を真顔のまま顔色変えずに言えちまうアンタの神経の凶太さがヤバーよ……」

最早驚けばいいのか呆ればいいのか、わりと真面目に大変そうな事を冗談混じりに

告白する蓮夜へのツツコミも思い浮かばず、一瞬ドン引きした様子で固まっていた風太郎は深々と疲労の籠った溜め息を漏らしながら話を切り上げ蓮夜を置いて歩き出していく。

そして蓮夜もそんな風太郎の背中を目で追いながら微笑を浮かべていたが、一瞬だけ目を伏せた後に何処か複雑げにも見える笑みを浮かべた後、すぐにいつもの無表情に戻り風太郎の後を追い掛けていったのであった。

## 番外編②

## メモリア02 / 亜空間の死闘×竜の仮面ライダー

——次元の境界線。

其処は異なる世界と世界の間を繋ぐ不確かな亜空間とも呼ばれ、ただの人間ではその身を晒すだけでも危険とされる認知外の異次元だ。

その異質さを証明するかのように、辺り一面の空間はまるで飴細工のようにグチャグチャに捻れて虹色の輝きを放ち、次元の向こうには数多の異なる世界の何処かの景色、何処かの一場面が歪ながら垣間見る事が出来る。

そんな異空間の中を、一両の奇抜な外見をした新幹線が駆け抜けていく姿があった。

二両編成の新幹線とテイラノザウルスをモチーフに、新幹線の先頭がテイラノの頭部



しかし、どれだけ応急の操作を繰り返してもモニター画面に映し出される『Warning』の警告表示は一向に消えず、無数の火花を散らしながら爆発まで起こす機材を前に青年も腕で顔を庇い、額から汗を流しながら険しい表情を浮かべる事しか出来ない中、青年の背後の運転席の扉が突然切り刻まれて微塵になり、直後に扉の奥から巨大な黒い斬撃波が飛び出し青年へと襲い掛かった。

「ッ?!やべえっ?!」

背筋を走った悪寒に釣られるように振り返った青年の目前に黒い斬撃波が迫り、咄嗟に真横に身を引いてギリギリで斬撃波を回避する。

だが、躲された斬撃波はそのままマシンの操縦桿に直撃して爆発を起こしてしまい、青年はそのまま爆風に巻き込まれ、コックピットの入り口から車内へと吹っ飛ばされてしまった。

「グウウッ!っ……コ、コックピットが……!」



「——こんな状況で余所見をしてる余裕があるのか」

「ツ?!—バキイイイイツ!!—ぐっ、ああああッ?!」

爆発するコックピットを見て焦る青年の真横から、冷淡な声音と共に鋭い蹴りが不意に放たれる。青年は反射的に両腕をクロスさせて何とか蹴りをガードするが、そのあまりの威力を受け止め切れず再び吹っ飛ばされて奥の車両の扉に叩き付けられてしまう。

苦痛で顔を歪めながらどうにか顔を上げると、目の前には黒煙が溢れ出るコックピットへ続く入り口を背に振り上げた足を徐に下ろす、オールバックの黒髪にインテリアの眼鏡を掛けたスーツ姿の男……デュレンの姿があった。

「つ……!オマエ、はっ……確か、デュレン……!」

「ほう。俺の名を覚えていてもらえてたとは光栄な事だ……が、此方としては余計な鼠の侵入を前にうんざりしていいな。生憎貴様を歓迎するつもりは微塵もないのだよ」

僅かにズレた眼鏡を中指で直し、溜め息混じりにそう語るデュレン。一方で青年はそんなデュレンを睨み付けながら壁に手を付いて徐に身を起こし、

「やつぱり、なつ……お前が出張ってきたって事は、この世界に目星を着けたのは当たり前だった訳か……」

「……一体何の話だ？」

「惚けんじゃねえよ！アイツは、蓮夜はお前を追って色んな世界を跳び回ってた！なのに急に連絡が取れなくなっ行って行方不明になったのも、お前の居場所を突き止めたアイツに何かしたからじゃねえのか?!アイツを何処へやった！」

そう言つてデュレンを指差し、蓮夜の居場所を問い質そうとする青年。だが、デュレンはそれに対し表情一つ変える事なく僅かに目を細めた。

「黒月蓮夜の居場所、か……それを知った所で何になる？どの道そんな物を知った所で

お前にはどうする事も出来ん……貴様は此処で、この列車と共に藻屑になるのだから」

そう告げるデュレンの全身から、身の毛がよだつ程の凄まじい殺気が膨れ上がる。それを直に肌で感じ取った青年は思わず後退りしそうになるも、歯を食いしばってどうにか踏み留まりながら何処からか取り出したドライバーを腰に巻き付け、携帯型のツールを取り出す。

「そうは行くかよ、何がなんでもアイツの居場所を吐いてもらうぜ……！変身ッ！」

『HENSHEIN! TYRANNO!』

001と番号を入力した携帯をベルトのバックルに装填し、響き渡る電子音声と共に青年の姿が徐々に異形の戦士へと変わっていく。

仮面ライダーオーズ・プトティラコンボのヘッドをティラノザウルスをモチーフにしたような外見の赤い鎧の戦士……『仮面ライダーティラノ』に変身を完了させると共に、

青年は勢いよく地を蹴り上げデュレンへと殴り掛かった。

しかし、デュレンは正面から迫る拳を僅かに顔を逸らして回避し、更に立て続けに繰り出される打撃、足払いを僅かな動きだけで躲しつつテイラノの背後に踊るように回り込み、振り向いて拳を振り翳そうとしたテイラノの腹に黒色のエネルギーを纏った右腕で掌底を打ち込み、派手に吹っ飛ばしてしまう。

『グウアアツ?! うつ、つ……ち、クシヨウツ……!』

「無駄だ……。貴様一人の力で、俺に勝てる筈がないだろう」

『ツ……んなの、やってみなきや分かんねえだろオツ!』

完全に自分を格下として見ているデュレンに啖呵を切り、テイラノはベルトの左腰に備え付けられたテイラノの頭部を模したスイッチを操作し、その手にテイラノザウルスの尻尾を形取った大剣を手にしていく。

そしてすかさず左腰のテイラノ型のスイッチに懐から取り出したメダルを装填し、深く腰を落としながら大剣の切っ先をデュレンに向けて突きの構えを取った。

『charge on! start up!』

『こいつでえッ……どオオオだアアあああああッ!!』

電子音声が響いた直後、テイラノは勢いよく大剣を構えた右手をデュレンに向けて突き出す。その瞬間、竜の咆哮と共にテイラノザウルスの頭を模した赤いエネルギー弾が剣の切っ先から放たれ、その巨大な口を開いてデュレンの四肢を噛みちぎらんとばかりに迫る。

——が、竜の牙がデュレンに食らいつく寸前、デュレンの身体から不意に黒いモヤのような物が噴き出してテイラノザウルス型のエネルギー弾を包み込み、なんとそのままエネルギー弾を飲み込んでしまったのであった。

『ツ?!俺の技が……喰われた……?!』

「——中々の味だ……では、こちらも相応の返礼をさせてもらおう……」

エネルギー弾を飲み込んだ謎の黒いモヤを見てティラノが驚愕する中、デュレンはその身を黒いモヤで包み込んで姿を隠していく。

直後、デュレンを包んだ黒いモヤの向こうから突如巨大なエネルギー弾が放たれ、ソレは黒いティラノザウルスの頭を横した形状に変化しながらティラノへと襲い掛かった。

『なツ?!ぐつ——ツアアアアアアアアアアアツ?!』

自分と同じ技を返されて動揺し、思わず固まってしまったティラノへとエネルギー弾が炸裂する。

反射的に大剣を前に突き出しガードした事で直撃こそ免れたものの、それでもダメー

ジは殺し切れず爆発と共に吹っ飛ばされて床に思いきり叩き付けられてしまい、苦痛で顔を歪めるティラノに黒いモヤで姿を隠したままのデュレンが音もなく近付いてティラノの頭を右手で掴み取る。

すると次の瞬間、ティラノの頭から金色の光が放出されてその右手へと流れ込んでいき、徐々にティラノの全身から力が抜け始めていく。

『なんっ……?! あっ、っ……や、めろおおおおっ!!』

まるで全身の細胞が吸い取られていくような気持ちの悪い感覚から逃れるように、ティラノは無我夢中でデュレンに向けて大剣を突き出した。

それに対しデュレンも咄嗟に身を逸らして大剣の切っ先を避けるが、ティラノはその隙にデュレンに回し蹴りを打ち込んで距離を取らせそのまま追撃しようとするも、先程の謎の攻撃のせいかな、気持ちの悪い感覚に苛まれて頭を抑えながら片膝を着いてしま

『う、ぐっ……！何だ、これっ……俺に何を——！』

「……さてな……しかし、存外拍子抜けじゃないか。あれだけ大口を叩いておきながら、まさかこれで終わりとは言うまいな？」

『っ……そんな訳あるかっ……！こつちにはまだ奥の手……が………っ……？』

挑発めいたデュレンの発言に対し思わず反論しようと思わず声を荒らげるが、其処でテイラノは仮面の下で訝しげな表情を浮かべた。

——奥の手、とは……一体何の事だ？

『なん、だ、これ……？俺は……う、あああああつ?!』

つい今しがたの自身の口からついて出た言葉にそんな疑問を覚えた瞬間、突然頭に頭痛が走り、まともに身体を支えていられない程の激痛に苛まれてその場に蹲ってしま



そしてそんなテイラノの姿を見据え、デュレンは黒いモヤの向こうで自身の手……無数の牙に覆われた悍ましい黒い異形の腕をテイラノに見せびらかすように掲げていく。

「今度は上手くいっただようだな……奴の時は土壇場で抵抗されたせいで記憶を奪えたかどうか不確かだったが、流石にこの状況なら二度も同じ徹を踏む心配もない……」

『ぐっ、ううっ……！な、にを言っただっ……?!記憶って、一体っ……!』

「貴様が知る必要はないさ。仮に知った所で、どうせすぐに忘れ……いや、此処でその命を散らす事になるのだからな」

—ブザアアアアツ!!—

『ツ！グツ!』

テイラノの疑問に何一つ答える事なく、デュレンはその身に纏う黒いモヤで鋭利な刃

を無数に形成していき、一斉に刃の切っ先をテイラノに向けながら立て続けに発射していく。

それを目にしたテイラノも顔を引き攣らせながら慌てて床を転がって無数の刃を避けるが、回避した刃の一部が度重なる爆発の影響で脆くなっていた車両の壁に直撃し容易く吹き飛ばしてしまった。

壁がなくなった事で、不意に襲った走行中の風の強さに引っ張られてテイラノがバランスを崩してしまいう中、デュレンはそんなテイラノに一瞬で肉薄すると共に左手で頭を再び鷲掴みながら、半壊した壁に無理矢理抑え付けてしまう。

『グツ！は、放せツ！』

「この列車が沈むのも最早時間の問題だろう。此処を逃れた所で貴様が生き永らえる術は持たないと思うが、念には念をだ……後顧の憂いを断つ為にも、残りの記憶も全て喰らわせてもらおうぞ」

『な、につ——う、うぐあああああッ!!』

デュレンに掴まれるテイラノの頭から、再び金色の光が放出されてデュレンの手に流れ込んでいく。

デュレンの左手に光が吸い込まれる度に、自分の中の大切な何か徐徐に削り取られていくような不快な感覚に襲われてもがき苦しみ、どうにかデュレンの手を振り払おうとしても信じられない力で押さえ付けられてビクともしない。

このままでは本当に不味い。直感的にそう感じ取った嫌な予感からテイラノはデュレンに気付かれぬようにメダルを取り出し、左腰のスイッチに素早く装填していった。

『charge on! start up!』

「!貴様……!」

再度鳴り響く電子音声を耳にし、テイラノが未だ諦めていない事を悟ったデュレンは





破壊されたベルトを見て一瞬驚愕するティラノだが、直後にその身を襲った凄まじい激痛に意識を塗り潰されて絶叫し、そのまま列車の上から投げ出され変身が強制解除されてしまう。

そしてティラノは青年の姿に戻りながら傷口から大量の血粒を撒き散らし、亜空間の遙か底へと吸い込まれるように堕ちて姿を消してしまつたのであつた。

「…………チツ、また仕損じたか……………奴と言ひ、あの男と言ひ、揃つて何処までも往生際が悪い……………」

本当なら今の一撃で確実に仕留める筈だつたのだが、奴の思わぬ反撃から気を逸らせて手元が狂つたのに加え、あのドライバーに幾分か威力を殺されて即死に至らせる事が出来なかつたようだ。

一人列車の上に残されたデュレンは険しい顔で「これではアスカの奴を笑えんな……………」とボヤキながら異形の腕を元の間態の姿に戻すと、青年が堕ちた亜空間の底を冷たい眼差しで見下ろしていく。

（まあいい……奴と同様、計画の邪魔になりそうな記憶は幾つか奪う事が出来た。仮に無事に此処から生き伸びて奴と合流する事があつたとしても、俺の目的が奴らに悟られる事は決してない……）

奴が掴んでいた計画の支障になり兼ねない記憶を喰らい、ベルトも今の一撃で破壊した。

邪魔者を逃したという点では前回の焼き直しではあるが、少なくともこれで黒月蓮夜のようにすぐにまた自分達の脅威として戻ってくる事もない。

（そうとも、何人たりとも邪魔はさせんさ……もうすぐ実を結ぶこの渴望……その先こそ、俺が求める結末があるのだから……）

火の手が徐々に広まり、燃え盛る業火にその身を包まれながら尚も走り続ける列車を後目に、デュレンはその身から噴き出した黒いモヤを全身に包み込み、何処かへと転移し姿を消した。

直後、列車全体から無数の閃光が放たれて目映い輝きに包まれていき、次の瞬間、機体の内側から発生した凄まじい爆発に飲み込まれ、主を失った列車は時空の彼方で跡形も残さず完全に消滅してしまったのであった――。



雪音クリス&五等分の花嫁編（後編）

第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）④（中）

——中野姉妹宅・キッチン——

「——あ、雪音さん、そっちの切ったお野菜取ってもらってもいいですか？」

「ん……これか？」

「はい、ありがとうございます！」

蓮夜と風太郎が買い出しから戻ってきたから数十分後。キッチンで二人が帰ってくる前に夕飯作りの準備を進めていたクリスと五月は蓮夜達から足りない分の食材を受

け取り、現在本格的に料理の準備を進めている所だった。

因みに、買い出しから戻ってきた風太郎はリビングの方でテーブル拭き等を終えてから暇を持て余して今度は廊下の掃除を行っており、蓮夜は風太郎から貸りたハンカチを洗いたいので洗濯機を使わせて欲しいとの事で、今は洗面所に籠っている。

「ズズウー……うん、味付けはこれくらいがちょうど良いかもしれませぬ！これ以上付け足すと濃くなりそうですし」

「……………」

「あ、良ければ雪音さんも試しに味見してみます？私だけじゃ味に偏りが出るかもしれないから、念の為——！」

「や、あたしはいい。そっちの匙加減に任せる」

「あ、つと……そう、ですか。では、味付けは私の方でやっておきますね！」

「ああ。……後、別にあたし相手に変に無理して明るく振る舞う必要はないからな」

「……………ふえ?!」

スープの味見をやんわり断られ、心做しかシヨンボリした様子で差し出した味見皿を下げようとするも、クリスからの不意の指摘に分かりやすく慌てふためく五月。

そんな彼女の反応を横目に溜め息を吐きつつ、クリスは五月に呆れた視線を送っている。

「其処まであからさまだと、流石にあたしでも分かるっての。大方、さつきあたし等のせいで気まずい空気になっちゃったから気を遣ってくれてるんだろ? ……悪かったな、見苦しいところ見せちゃまって」

「え、あ、いえ、雪音さんが謝るような事では……! そもそも元を辿ればお二人を巻き込んだのは私ですし、寧ろ、彼処まで危険な事にお二人を巻き込んでしまったのが今に

なつて申し訳なくて……」

「……別に、お前が悪びれる必要なんてないだろ。イレイザーの連中に好き勝手されたら都合が悪いのはあたし等だつて同じだったし、どっち道元の世界に戻る為に色々と探つてく内にお前の姉達の誘拐事件だつて突き止めてただらうしな。結局、遅かれ早かれ今回の件にあたし等も首を突つ込んでただらうさ」

「それは……そうかもしれないけど……でも……」

そうは言つても、やはり自分の意思で蓮夜とクリスを引き込んだ事実は変わらないと、五月は本当に申し訳なさそうな表情で俯きながら料理の手を止めてしまう。

まな板の上に乗せて切り刻んだ食材をボウルに移していくクリスはそんな五月の様子を横目に「ほんとに生真面目な奴だな……」と溜め息を吐き、一体どうすれば彼女の中の罪悪感を少しでも和らげる事が出来るだらうかと頭の中で思考する中、五月が不意にクリスに向けて口を開いた。

「あ、の……前から少し気になっていたんですけど……雪音さんって、もしかして黒月さんの事がお嫌いなんですか……？」

「……は？ いや、何だよ急に？」

「いえ、なんというか……初めてお二人にお会いした時から、雪音さんの黒月さんに対する接し方が時々何処か余所余所しかったり、黒月さんの意見に不満げな態度を見せる時があつて……もしかすると本当は普段から仲が悪くて、私達を不安がらせない為に無理をして仲が良いように振るつているのではないかと……もしもそれがさっきの一件の要因として繋がつてるのだとしたら、やはり私の……」

「そ、そんなんじゃないやねえよっ……そもそもお前が気にするような事でもないし、何の関係も——」

「いいえ！ 私達を守る為に無理をして、お二人の関係が余計に悪化したのだとしたらそれは私のせいです！ それを素知らぬ振りだなんて到底出来ません！」

(ぐっ……全っ然話聞かねえっ……! 何処まで生真面目で頑固なんだよコイツっ……!)

ずずいつと身を乗り出してしつこく食い下がってくる五月の勢いに圧倒され、クリスは顔を背けながら口元を引き攣らせてしまう。

やがて、そんな彼女の一步も引く気を見せないまっすぐな眼差しと気概に根負けしてしまい、暫しの思考の後、クリスは顔を逸らしたまま深々と諦めたように溜め息を吐き、シンクの縁に両手を付いて軽く項垂れていく。

「別に、アイツに対して其処までの悪感情を抱いてるって訳じゃないんだよ……ただ何っつーか……人の意見も聞かずに勝手に何でもかんでも一人で決めようとするアイツの考え方が不満っていうか、気に喰わないっていうか……」

「気に喰わない、ですか……?」

「そうだよ……あたし等の世界で最初に顔を合わせて口利いた時も、アイツはイレイ

ザーと戦う手段がないあたし等に手を引けって言ってきたんだ。けど、理屈で分かってもそんなもんすぐに納得出来ないだろ？元々あたし等が守ってきた世界なんだ。それをいきなり余所もんに一人に全部任せて黙って見てろだなんて、簡単に呑める訳ねーだろって……」

「……成る程。つまり雪音さんは自分の気持ちを全然汲んでくれない黒月さんに不満を募らせてて、先程の一件もそういった積もるに積もった不満が一気に爆発してしまった結果だった、と？」

「いやまあ、有り体に言えばそうなんだが……けど、それに関してはアイツの言い分も間違つてはないし、あたしも納得してる所はあるんだ……ただその、何というか……」

「？」

蓮夜への不満が止まらぬかと思いきや突然歯切れが悪くなり、視線を泳がせるクリスの反応に対して五月は不思議そうに小首を傾げる。

そしてクリスもそんな五月を横目に僅かに逡巡する素振りを見せた後、溜め息を一つ挟み、何処か観念したかのような様子で己の内の本心を語り始めていく。

「ホントは、さ……もつと単純な話、あたしはアイツの力に嫉妬してたんだと思う……あたし達にはないすげえ力を持つてて、イレイザーと戦えるアイツに……」

「え……でも、雪音さんも凄い力を持つてるじゃないですか？えと、シンフォギア……でしたっけ？アレのおかげで、私や上杉君も怪物から助けてもらいましたし」

「けど、あの時だつてあたしの力は通じちゃいなかったし、アイツが来なきやお前らもどうなつてか分からない……あたし一人の力じゃ、結局何も守れないんだよ……あのバカの時だつて、何も……」

「……あのバカ？」

クリスの口からポロつと漏れ出た「あのバカ」というワードが引つ掛かり、五月が思わず訝しげに聞き返す。



それに対しクリスも無意識で出た言葉だったのか、五月に言われて思わず「あつ……」と口に手を伸ばし掛けるが、まあ此処まで話したのだから今更かと冷静になり、どうせならいつそのまま話のついでに全部吐き出してしまおうかと、キッチンの天井を仰ぎながら何処か投げ槍な口調で言葉を続けていく。

「あたしさ……昔は色々あつて、二元の世界にいる今の仲間とは敵同士だったんだ。その頃は歌とかも大っ嫌いで、世界から争いを無くせる為なら何だってやってやるつて、荒れに荒れててさ……そんなあたしに手を伸ばして、この手を繋いでくれたバカがいて……今のあたしが変われて此処にいるのも、ソイツがいてくれたおかげでもあるんだ」

「……そんな事が……もしかしてその方が、さつき言つてた？」

「……まあな……こんな小っ恥ずかしい話、本人には直接言えねえけどさ……アイツが最初いきつかけをくれたから、あたしももう一度歌を好きになる事が出来たんだつて思つてる。痛みなんかなくなつて、人と人とは繋がれるんだつて。だからその繋がりを今度こそ守る為に、あたしはこの力で戦うんだつて……そう決めてた、ハズなのに……」

「……………雪音さん？」

不意に言葉が詰まり、目を伏せるクリスのその表情からは何処か後悔の念が滲み出ているように見える。それを察した五月が心配そうに彼女の顔を覗き込むと、クリスは薄目に瞼を開け、シンクの縁に預けた手を握り締める。

「イレイザーがあたし達の世界を最初に改竄した時……………アイツに関する記憶を全て消されたあたしは、あのバカが一人苦しんでた時に何もしてやれなかった……………それどころか、助けを求めるアイツの手を振り払って、何も知らずにのうのうとしてき……………笑っちゃまうだろ？自分らの世界を守るのに余所者の手を借りるだなんてとか散々言ったときながら、いざその時が来たら何の役にも立てなくて……………アイツがいなかったら、あの力は今頃命も、あたし等の記憶からも消えてたかもしれないんだ」

「……………」

「本当はイレイザーと戦うのに、アイツの力が必要不可欠なんだって分かってる。それ

が最善の方法なんだって事も、重々承知だ。けど、あたしには出来なかった事をしてみせたアイツが妬ましくて……いや、それだけじゃない……多分、アイツの力を認める事で、仕方がないって思うのが嫌だったんだ」

イレイザーの改竄事件の際に響を助けられなかったのは、あの時の自分に力がなかったから、無力だったから。

だからあのバカが泣いて、苦しんで、助けを求められても気付けなかったのも、”自分のせいじゃない”、”しようがない事だった”のだと、そんな風に自分の無力さに理由を付けてしまうのは到底容認出来なかった。

だって、自分は孤独の冷たさを知ってる。

両親が紛争で亡くなった時も、痛みでしか人と繋がる事を知らなかった頃、唯一の繋がりと信じていたフィーネに切り捨てられた時もおくびにこそ出さなかったものの、あの芯から凍えていくような感覚も、心の拠り所を失った時の喪失感を今でも鮮明に覚えている。

そんな同じ痛みを、よりにもよってこの手を繋いでくれた彼女に与えてしまったのだという事実を仕方がなかったで片付けるにはあまりに度し難くて、許せなくて――。

「――そうだ……あたしは、あたし自身の不甲斐なさがどうしても許せなかった……ダチを傷付けて、助ける事が出来なかった自分の弱さを……。その弱さを、アイツの力を借りて簡単になかった事にするのが許せなくて、其処にアイツへの嫉妬も縋い交ぜになって、一方的に勝負を挑んで、手加減されてた事に苛立つて、余計に拗れて……あたし自身、アイツへの気持ちいがゴチャゴチャンになって、自分でもちやんと分かってなかったんだな……ハハッ、何か笑えてくるっ」

「……雪音さん」

結局のところ、自分の身勝手な想いや嫉妬から蓮夜に筋違いな八つ当たりをしてた事に変わりはないし、他人の力がなくても自分一人でこの弱さを克服出来ると思いが上がり、その結果アイツにも深い怪我を負わせてしまった。

……何とも情けない話だ。今に至るまで恥の上塗りを繰り返して、それに気付いた今、一体どの面を下げてアイツに大口を叩けるといえるのだろうか。

自分の心の内と改めて向き合い、漸く明瞭になった自身の本心を自覚してあまりの滑稽さに自嘲の笑みを漏らしてしまう中、そんな自分の横顔を無言で見つめる五月の視線に気付いてハツとなり、慌てて顔を上げて五月に謝罪する。

「悪い、あたしばつか喋っちゃまって……。つまらない話で退屈だったろう？」

「ああいえ、そんな事は。でも、雪音さんって何というか……。会ったばかりの頃は全然気付きませんでしたけど、実は結構真面目で、責任感がお強い方なんですわね」

「……別にそんなんじゃない……。単にめんどくさい性格してるってだけだぞ、あたしみたいなのは」

「ふふ。でも私、雪音さんのお気持ちも分かる気がします。何となく、ではあるけど」

「……………え？」

微笑する五月の言葉を一度は否定するも、彼女にそう言われて思わず訝しげに聞き返すクリスに対し、五月は調理の手を再び進めながらポツポツと語り始める。

「自分で言うのもなんですし、私自身は別に其処まで言われる程では！ って思いますけど、私も結構、馬鹿が付くほど真面目って周りから良く言われるんです」

（まあ、だろうな……………）

「納得のいかない事があると、とことん突き詰めてしまふといえますか。そんな性格だから、上杉君とも普段から度々衝突する事も珍しくなくて……………」

「……………ああ。そういうええ取り引きしたばかりの最初の頃とか、何かあたし等ほっぴいて人目も憚らず喧嘩してたっけか」

「あははっ、その節はお見苦しい所をお見せしてすみません。……………まあ、彼とは最初に出

会った頃からそんな感じで、馬が合わないというか、最初はそれこそ毛嫌いしてたくらいなんですよ」

まあそれは他の姉妹にも言える話というか、二乃とかあの頃は特に凄かったですけどねえと、五月は風太郎と出会ったばかりの頃を思い返して懐かしむように微笑む。

「彼が家庭教師として雇われたばかりの頃も、他の姉妹の皆が彼を信用し始めても、私は最初の出会いから彼への印象が悪くて、中々素直になる事が出来なくて……でも、共に過ごしていく内に彼も彼なりに私達の事を必死に考えて、頑張ってくれているのだと分かってから、私も少しずつですけど彼への見方が変わり始めていったんです。……いえ、ホントにほんの少しですけどね？」

「や、其処を強調する意味は分かんねえけど。でも、そうか……そつちもそつちで色々大変だったんだな」

「ええ、まあ。だったというか、今も大してそう変わりはないんですけどね……」

「とうか寧ろ、今じゃ前よりもややこしくなってる部分も多々あるような気も……?と、五月はむむむつと難しげな顔を浮かべながらやたらと風太郎に拘る最近の姉達のことを思い返すが、突然無言になる自分を見て「?」と頭の上に疑問符を浮かべるクリスに気付いてハツと我に返り、慌てて愛想笑いを浮かべながら話を戻していく。

「ま、まあとにかく、そんなこんなで私達と上杉君も色々あつたんですよ。ですから今のお二人を見てると、昔の私達を思い出して他人事のように思えないというか、放つておけなくてどうしても気になるというか……お節介だと分かつてはいても、何かお二人の後押しが出来るお手伝いをしたいって、そう思つたんです」

「……その気持ちは有り難いけどよ……あたしは散々、アイツに喰つて掛かつて散々足も引つ張つてきたんだ。そのせいで怪我までさせちまつたし……アイツだってあたしの事、あんまし快く思つてないんじゃないか……」

「そうでしょうか? 普段雪音さんを見ている時の黒月さんを思うと、あの人が其処までの悪感情を抱いてるようには見えませんが……」



「……は？あたしを見てる時の、アイツ？」

「どういう事だ？と思わず五月に聞き返すクリス。そんな彼女の疑問に、五月は人差し指を顎に添えながら何かを思い出すように宙を仰いでいく。

「本当に偶にしは見せないんですけど、私と話している雪音さんが楽しそうな顔している時とか、黒月さん、遠くから見ても何だか安心したような、ホッとした顔をしている時が時々あるんです。でも、その後すぐに申し訳なさそうに目を伏せたりして……ですから、黒月さんは雪音さんの事を気に掛けているんじゃないか、と思つて」

「……アイツが……？まさか、そんな訳……」

「だって、自分にはそんな風に気に掛けてもらう理由がない。」

「あの上級イレイザーに遅れを取って怪我まで負わせたのは自分を庇ったせいだし、そのせいで別の世界に飛ばされて仲間の手助けもS・O・N・Gの支援も望めないこんな事態に陥ってしまったのだ。」

そんな状況を招いた自分を？そんなハズは……と、クリスは五月の語る可能性をありえないとして否定しようとするが、そんな彼女の心情を察したのか、五月は思い詰めた顔を浮かべるクリスの顔を覗き込んで穏やかに微笑む。

「私も、黒月さんがこういう人なんだと簡単に言い切れるほどあの人の人となりをつかっている訳じゃありませんが、少なくとも、黒月さんは雪音さんを邪険にするような方ではないと思うんです。そうじゃなかったら、雪音さんを見てあんな顔をするとは思えませんし……ですから、雪音さんがあの人に對して感じている引つ掛かりのような物も、直接言葉を交わす事で何か変わるかもしれないよ？……私達と上杉君も、そうやって今の関係に落ち着く事が出来ましたから」

「……言葉を交わす……対話、か……」

それは確かに、とは思う。歌と共に差し伸べられる手を振り払ってきた嘗ての自分も、最初は敵同士だった彼女とそうやって分かり合う事が出来た。

命を取り合う敵同士ならまだしも、彼はそうではない。

寧ろ、イレイザーという強大な敵に共に立ち向かう同士なのだから、彼女の言うように今一度腹を割って言葉を交わせば、自分が知り得なかった、或いは知ろうと思えなかった彼の本心が見えてくるかもしれない……。

五月の言葉の後押しを受け、ふとそんな考えに思い至ったクリスの耳に洗面所の方から不意に青年の声が響いた。

「イチイバツ……!!イチイバールツ!!イチイバルはいないかつー?!」

「!アイツの声……?どうしたんだ急に?」

「何かあったんでしようか?雪音さん、此処は私がやっておくので行ってあげて下さい。……もしかしたら、早速良い機会が訪れたのかもしれないし」

「……お前、生真面目なだけかと思えば案外抜け目ないところもあるんだな……」

蓮夜と二人だけで話すなら今がチャンスだと、実に良い笑顔を浮かべて背中を押す五月にジト目を向けつつ、クリスは仕方がないと溜め息を吐きながら作業を中断し、タオルで濡れた手を拭って蓮夜の声がした洗面所の方へ向かっていく。

(アイツと面向かって、本音で、か……いや、けど今更ながらアイツと顔を突き合わせて落ち着いて話せんのか、あたし？アイツといるとどうにもペースを乱されるっていうか、大体話が脱線したりしてあたしばっか体力削られてる気がするし……)

……いや、だとしても、だ。折角彼処まで後押ししてもらった以上、最初から弱気になっただけはそれこそ話にならない。

寧ろそれが分かっているのだから、相手のペースに呑まれないように自分が気を付ければいいだけの話だ。

今までの蓮夜とのやり取りをふと思い返して不安になり、洗面所に足を踏み入れる前に若干尻込みしている自分にそう喝を入れると、胸に手を当てながら深く息を吸い込



——床一面が水浸しになった洗面所の一角にて、まるで工事現場などで良く見掛けるランマーマシーンが如く、何故か上下に激しく振動しながら大量の水を機体のあちこちからとんでもない勢いで撒き散らす暴走した洗濯機と、全身ずぶ濡れになりながらそんな洗濯機を全力で抱き留めて必死に抑えようとする半泣き寸前の蓮夜（ハイテク音痴）の姿を目の当たりにし、クリスの表情が一瞬で凍り付く。

不動の心、決心してから二秒と持たず瓦解した瞬間であった。

## 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）④（後）

「——この度は誠に申し訳なかつたで候……」

それから約数分後。あの後、思わぬ事態を前に呆然としていたクリスが我に振り返り慌て洗濯機の暴走を止めてくれた事により、事態は何とか終息する事が出来た。

……のだが、洗濯機を完全に止めた頃には既に被害は甚大になっており、暴走した洗濯機から噴き出した水のせいで洗面所はあっちこち水浸しになって悲惨な現場と化し、風呂場に流した事で幾分かマシにはなかったものの、床などは先程まで軽く水かさが出来ていたぐらいだ。

そんな傍迷惑な騒ぎを引き起こした張本人である蓮夜はと言うと、現在洗面所にて騒ぎを聞き付けて集まった家主の五月と被害に遭ったハンカチの持ち主である風太郎の

前でそれはそれは見事な土下座をして深く謝罪しており、そんな蓮夜の隣には頭を抱えながら溜め息を漏らすクリスの姿もあった。

「ま、まあ、私の方もきちんと使い方を教えていなかった責任はありますし、あまり気にしないで下さい。ですからホラ、床も濡れてますからもう立ち上がって……！」

「そうだな……被害に遭った俺のハンカチはこの通り、使い物にならなくなっちゃったけど」

「上杉君っ!!」

せつかくいい感じにフォローしようとしていたのに、あの暴走した洗濯機の中で回され続けたせいで繊維が解れて糸が飛び出たハンカチをデローンと広げながら愚痴を漏らす風太郎。

そんな彼に五月が慌てて怒鳴り、一方でそんな二人のやり取りを申し訳なさそうに聞きながら項垂れる蓮夜を横目に、クリスが仕方がないと溜め息混じりに口を挟む。



「まあ、コイツも反省してるみたいだし、あたしからも頭を下げるから許してやってくれ……。駄目になったハンカチはあたしが代わりに弁償するから」

「ッ！いい、いや、そういう訳にはいかないっ。これは俺の不手際なのだから、此処は俺が弁償を……！」

「いや素寒貧のクセにどうやって弁償するつもりなんだよ。財布忘れて無一文だって、この前自分で言ってただろうが」

「ぐっ……」

そういえばそうだった……と、呆れ混じりのジト目を向けるクリスにそう言われて自分がおけらである事を思い出し、自分一人ではハンカチ一枚の代金すらロクに払えない情けなさに蓮夜は更に気落ちして萎縮してしまう。

そしてクリスもそんな蓮夜を見てもう一度溜め息を吐くと、水が減ったとは言え未だ

に大分濡れている床一面を見渡し、

「取りあえず、この辺も一通りは片しとかなないとだよな。流石にこのまんまつて訳にも  
いかねえし……ほら、そうと決まったら夕飯出来る前にとつとと終わらずぞ。あたしも  
手伝つてやるから」

「……え……?」

「?何だよ?」

「あ、いや……何でもない……」

クリスが手伝いを申し出た事が余程意外だったのか、一瞬彼女の言葉の意味を理解する  
のが遅れてキョトンとした顔を浮かべてしまうも、不思議そうに見つめるクリスの声  
で我に振り返らず視線を逸らす蓮夜。

するとそんなクリスを見て五月は何かを察したかのようにハツとなり、風太郎の両肩

を掴んで洗面所の入り口の方に半ば強引に押ししていく。

「では、私達は今の内に黒月さんの着替えの用意と夕食の残りの準備を進めておきますから、こちらは任せて下さい！」

「お、おい、何だよ急にっ……?!五月っ!」

「?ああ、すまない………よろしく頼む……?」

そう言つて揃つて洗面所から出ていく五月達に若干戸惑う蓮夜だが、それでも氣を利かせて服まで用意してくれると言う五月に感謝して軽く会釈をし、五月も風太郎の背中を押して洗面所から出る直前にクリスと目線が合うと、彼女に軽く意味深にウインクをしてから何処か楽しそうに微笑み洗面所を後にしていく。

そんな彼女の一瞬の顔を見逃さなかつたクリスも不満げな顔を浮かべるが、五月がこちらの意を汲んで氣を利かせてくれるのだと分かっているので怒るに怒り切れず、彼女に文句を言いたい衝動を押し殺すように三度目となる溜め息を深々と吐くと、洗面所

の脇に置いてある青いバケツと雑巾を用意して床の拭き掃除を開始していく。

「にしてもお前、洗濯機もロクに使えないとかどうなつてんだよ一体……。普通はこんな愉快な大惨事、狙つて起こせねえぞ？」

「……面目次第もない……。どうにも俺はこういうハイテクな機械に滅法弱いというが、普通に操作しようとするだけで何故か思わぬ誤作動を引き起こしてしまう事が多くてな……。さっきの洗濯機も、大した事は何もしていない筈なのに急に暴れ出してしまつて……。」

「何もしてないのに、なんてその手の奴の奴の常套句まんまじゃねえかつ。分からないならその時点で他の奴に聞いとけてのっ」

「仰る通りだ……。」

そうしとけば最初からこんな大惨事にならずに済んだんだと、クリスの至極真つ当な意見を前に雑巾掛けを手伝う蓮夜も何の反論も返せずガクリと肩を落とすし、そんな蓮夜

を尻目にクリスはバケツの上で雑巾を絞りながらふと一つの疑問を覚え、蓮夜に問い掛けた。

「けど、そうなつてくると普段どうやって生活してるんだよ？ S・O・N・G の協力者つて事で寝床を用意してもらったつてのはちよろつと聞きはしたけど、自分ん家にそういう家電とか置いてないのか？」

「……そうだな……本部での検査やクロスのデータ収集の手伝いなどもあつて、中々そういうのを買いに行く時間が取れなくて……だから S・O・N・G から住む場所を提供してもらつてからも、家電は冷蔵庫やテレビ以外、未だに買い揃えていないんだ……」

「買い揃えてないつてお前……じゃあ、洗濯とか普段どうしてんだよ？」

「うちのマンションの近くにコインランドリーがあつて、洗い物がある度に其処に通いつめてる。幸い人が使っている所を見て、使い方自体はさほど難しくないので俺でも操作は出来るしな……」

「いやそつちの方が手間も金も無駄に掛かるだろ、素直に洗濯機買ってそつちの使い方覚えろよっ」

「それはごもつともなんだが……いやしかし、仮に洗濯機を買つても俺が下手に触つたらこれ以上の大惨事が起こつたりとかなないか？例えば爆発したりとか……」

「其処まで行つたらもう家電自体に問題ある奴だろソレは！もうちよい日本の電化製品信じろよ！」

どんだけ自分のハイテク音痴っぷりが心配なのか、万が一の事を考えてビクビク震えながら不安な表情を見せる蓮夜に思わずツツコンでしまうクリスだが、直後にまたも彼のペースに吞まれてしまっている事に気付き、「はああああ……」と深々と溜め息を吐きながら肩を落としてしまった。

「なんつーかつ……こうしてお前とただ話してるだけで相当体力を使うっていうか……ホント、口を利けば利くだけ最初に出会った頃のイメージから大分掛け離れていくな、

お前……」

「？最初のイメージとは、どんな？」

「どんなって……そりやまあ、最初の頃は正体も分からなくて信用出来ないとか、あたし等がいなくても問題を一人で解決出来ると思ってる、気取ったいけ好かない奴だつて思ってたというか……」

「……此処までバツサリ言われると逆に清々しいとは良く聞くが……成る程、それも人によりけりなんだな。割と刺さってる自分がいて少し驚いてる」

クリスが抱く自分への印象。ある程度はそうなんじゃないかと予め予想はしていたが、実際にその口で改めて言われると堪える物があるのか、蓮夜は無表情のまま何処となくズーンツと落ち込んだ様子を見せ、クリスもそんな蓮夜を見て流石に無遠慮が過ぎたかと悪びれ「あ……」と気まずげに頭を掻きながら言葉を続けていく。

「けどそれも、こっちに來てから大分崩れてきたところはあるかもな。お前思ってたより

も毒気が抜ける性格してゐるっていうか……正直あたし等の力なんて必要ない、もつと一人でもこなせるような奴だつて思つてたし」

「……それは買い被り過ぎだ。見ての通り、俺一人じゃこうやつて問題ばかり起こして周りに迷惑ばかり掛けてしまうのも珍しくはない……それを改善しようと思つて動けば、その分また余計な被害を出してしまうし……今だつてそうだ」

自分で自分に嫌気が差すと、そうボヤキながら蓮夜は雑巾を動かす手を止め、クリスに向けて頭を下げる。

「お前にも、散々迷惑を掛けてばかりで申し訳ないと思つてる……ただでさえいきなり違う世界に跳ばされて、訳も分からない状況に巻き込んで……こんな時だからこそ、俺がもつとしっかりして安心させなければならぬハズなのに、情けない所ばかり見せてしまつて……本当に、すまない……」

「……お前……」



そうやって申し訳なさそうに頭を下げる蓮夜を見て一瞬呆気に取られるクリスだが、同時に彼の今の言葉と、先程の五月とのやり取りを思い返してハツとなる。

彼女は自分が柔らかい表情を見せる時、蓮夜が安堵と申し訳なさそうな顔を浮かべる時があると saying していた。

最初にそんな話を聞いた時は「そんなまさか……」と思いはしたが、もし本当にそうであるなら、彼がそんな反応を見せていたのも、自分をこんな事態に巻き込んだ事に責任を感じているからなのではないか？

そんな考えがふと頭を過ぎり、クリスは僅かに両目を細めて蓮夜を睨むと、彼から顔を背けてぶつきらぼうな口調で告げる。

「別に、そんなのお前が謝るような事じゃねえだろ」

「いや、しかし……実際俺がもつとしつかりしていれば、お前まで今回の件で巻き添えを喰う事も「そうじゃないだろ」……え……？」

バツサリと、蓮夜の言葉をクリスの鋭い声が遮る。それに釣られて蓮夜が思わず驚きと共に顔を上げると、クリスは濡れた床に視線を落としたまま何処か沈んだ声音で言葉を続けていく。

「今回の件は、元はと言えばあたしがお前の足を引つ張つたところから始まつたんだ……その怪我だって、お前に変な対抗心を抱いて、向こう見ずな真似をしたあたしを庇つたせいでそうなつた訳だし……」

だから……と徐に顔を上げ、クリスの真つ直ぐな視線が蓮夜の瞳を見据える。

まるで宝石のようで、ジツと見つめられているだけでも吸い込まれそうな錯覚すら覚えるクリスのその目に蓮夜も一瞬見惚れる中、クリスは何かを言い掛けて途中で躊躇し、逡巡するように目を泳がせた後、瞼を伏せ、彼に謝罪するように僅かに項垂れる。

「だから……謝らなきゃなんないのはお前じゃなくて……あたしの方だ……あの時、お前の忠告を無視して、一人で突つ走つて……いや……その前から、お前に散々突つ掛か

るような真似をして……悪かった」

「……イチイバル……」

ギョツと、膝の上に乗せた手を強く握り締めながら謝罪の言葉を口にするクリスに、蓮夜も意外そうに目を見開いて驚きを露わにするが、すぐに我に返って慌てて首を横に振っていく。

「頭を上げてくれ……！元々お前達がイレイザー達の脅威に晒されてるのも、俺が奴らに負けて連中の跋扈を許したせいなんだ……！だからお前が謝るような事なんて……」

「だとしても、付けるべきケジメってのはあるだろ。……お前が自分の身を削ってまで、イレイザーの連中と必死に戦ってるのはあたしにだって分かってたんだ……。けれどあたしは、自分の中のお前への嫉妬心やクロスの力ばかり見て、そんなお前自身を認めようとはしなかった……」

そう言いながら徐に洗面所の天井を見上げ、クリスはポツポツと言葉を続けていく。

「イレイザーの改竄のせいで、苦しんでたアイツを救ってみせたお前の力に嫉妬して、何も出来なかつた自分が情けなくて……だからあたしは、お前の力が無くてもイレイザーと戦える事を証明しようとした……そうすりゃ、あたしにだつてあのバカを救えた筈なんだつて証明出来ると思つてた……そんな訳ないのにな……」

「……………」

自嘲気味な笑みを浮かべて初めて己の心の内を吐露するクリスに蓮夜も口を挟めず、ただ複雑げな眼差しを向ける事しか出来ない中、クリスは徐に視線を下げて自分の右手の掌を見下ろしていく。

「今更そんなこと証明したつて、あたしがアイツに何もしてやれなかつた事実は変わりやしない。意味なんてある筈なのに、お前に当たる事で無力な自分から目を逸らそうとしてたんだ……ホント、お前からしたらいい迷惑だったよな」

我ながら痛い奴だったよと、今までの自分を恥じ入るようにクリスは苦笑いを浮かべる。

しかし、そんなクリスの吐露を聞いた蓮夜は顔を俯かせ、フルフルと力なく首を振った。

「そんな事はない……寧ろお前にそうさせてしまったのも、俺が誤解させるような態度を取ったまま、一方的に苦手意識を抱いてきちんと向き合おうとしなかったのが悪いんだ。あの模擬戦の時も……」

「……模擬戦の?」

そう言われ、クリスの脳裏に蘇るのは元の世界での蓮夜とのシュミレータの記憶。

二人の溝が更に深まるきつかけとなったあの件を振り返る蓮夜にクリスが訝しげに首を傾げると、蓮夜は気まずげに目線を逸らしながら当時の事を思い返すように話し出す。

「あの時……お前が俺と本気で勝負をしたいと言い出した時、最初こそ困惑はしたが、お前と戦っている内に本気で俺と競い合うつもりなんだと分かって、俺なりにその気持ちに応えようと思っていたんだ……ただそうなる、俺があの場合で GANG ニールの力を使う事は不公平なんじゃないかと思って……」

「?不公平って……どういうことだよ?」

確かに自分はあの時の戦闘で初めて GANG ニールの力を目にした訳だが、だからと言ってそれで遅れを取る気などなかったし、最終的に負けてはしまったがそれも自分の実力不足が原因だったのだから、蓮夜が気に病む要素など何一つないハズ。

そう考えて首を傾げるクリスの疑問に対し、蓮夜は申し訳なさそうに目を伏せながら言葉を続けていく。

「俺が前の一件から、怪我を負って本部で療養していたのは知ってるか?」

「？あー……：そういうや何か、オツサンから艦への補給物資の積み込み作業中の作業員を庇ったとかで運び込まれたってのは聞いてたな、確か」

「ああ……：当時入院中で何もする事がなかった俺は、暇を持て余して本部のシユミレータへ見学の為に足を運んだ事が何度かあつてな……：其処で、訓練中のお前達の戦いぶりを影から見させてもらつてたんだ。これから共に戦う事になる以上、少しでも早く連携が出来るようにお前達の動きや戦術を学んでおかなければならないと思つて、響達は勿論、お前の動きの癖や戦術、技も全部頭の中に叩き込んでた」

「だから……：」と、蓮夜は懐から一枚のカード……：タイプガングニールのカードを取り出し、複雑げな眼差しでカードの絵柄を見つめていく。

「あの模擬戦の時には既にお前の技量を熟知していたし、お前にも何度か俺の戦い方を見せていたから、きつと良い勝負が出来ると思つていたんだ……。ただ、コイツに関しては響以外にはまだ見せた事はなかったから、お互いに手の内を分かつてる勝負で、お前が知らない力を使うのはあまりにアンフェアじゃないかと迷つてな……：」

(……それであん時……)

あの模擬戦の中、蓮夜がガングニールのカードを使うのを躊躇う素振りを見せていたのを思い出す。

あの時は何を考えていたのか分からなかったが、今の彼の話を書く限り、蓮夜もこちらから一方的に挑んだだけの勝負に真摯に応えようとしたが故にあんな不可解な素振りをを見せていたのだろう。

その結果あの「ガングニールの力を使う気はなかった」の発言に繋がるのかと漸く自分の中で合点がいき、クリスは呆然とした表情で蓮夜の顔を暫し見つめた後、両手を床に着いてガクリツと項垂れながら深々と溜め息を吐き出した。

「お、お前なあつ……そういう事だったんならもつと早くに言えよつ……! その話聞いてりやあたしだって別にお前を目の敵になんかしなかったしつ、此処まで変に拗れる事だつてなかったらっ?!」



「いや、まあ……そう思って俺も何度か弁明しようとはしたんだが、俺が口下手なせいだったり、タイミング悪く邪魔が入ったりして中々その旨を伝える事が出来なくて……すまん……」

「……ああ……あーいや、いい……先に喧嘩をふっ掛けたのはあたしの方だし、それにアレだ……お前に其処まで器用な真似を求めるのは大分酷な事だったんだなって、今になって漸く理解したわ……」

「……？」

此処までコイツと話してみても何となく分かったというか、自ずと理解してしまった。

コイツは多分アレだ、器用な立ち回りとか生き方とかそういうのが上手く出来ない類の不器用な人間というか、何処となくこのめんどくさが自分と同類の匂いをする。

そう考えれば今までのこの男の言動に苛立ちを覚えていた訳にも腑に落ちるモノがあるというか、そりや自分の嫌な所を見ているみたいで気に入らない筈だわなど、今に

なって彼を気に食わないと思っていた新事実気付いたクリスは今まで無駄に頭を悩ませていた自分に呆れ返って深く気落ちしてしまい、そんなクリスを見て蓮夜も困惑を露わに恐る恐る声を掛ける。

「イチイ、バル？すまない、また俺は何か不快にさせるような言い方をしてしまったか？」

「……………なんでもねーよ……………ってか、お前は言い方以前に先ずもつと言葉を付け足せよなつ。前の模擬戦の時もそのせいであたしもいらん勘違いしちまうし、圧倒的に言葉が足りないんだよ、言葉がっ」

「そう、だったのか？……………そうだったのか……………そうだったのか……………」

「……………いや三回言うほど衝撃受ける話か、コレ」

「すまん……………見ての通り愛想も悪いのに加えて、口下手なのも自覚はしてるんだがどうやって直せばいいものかと常日頃から悩んでいてな……………貴重な意見をすまない、イチイ

バル。今後の参考にさせてくれ」

「や、それはいいけどよ……ああ後、ずっと気になってたけど、お前のその呼び方は何なんだよ、それ」

「……それ？」

「名前だよ名前、あたしのつ。あのバカとか、あの二人の事とか名前や苗字で呼ぶクセに、何であたしだけギアの方の呼び方なんだよ。まあ、別に名前呼び合う程の仲でもねーからずっとスルーしてたけどさ……」

正直今でもわざわざ取り沙汰にする程の疑問ではないと思うのだが、この際だ。これ以上余計なしこりを残したまま後からまた苦勞するのも御免なので、気になる疑問は今の内に全部問い質してやろうと考えたクリスは蓮夜にジト目を向けながらそんな疑問を投げ掛ける。

すると、蓮夜の方も意外な質問に驚いているのか一瞬ポカンとした顔を浮かべるが、

僅かに考える仕草を見せた後、頬を掻きながら何処か言い難そうに口を開いた。

「別に、何か大した理由があつて名前を呼ぶのが嫌だったとかではないんだ。単に俺の事を快く思っていないだろうから、急に馴れ馴れしく名前を呼べば不快にさせてしまうかもしれないと思つたのもそうだし、それにお前の名前も……」

「……何だよ、あたしの名前が何か変だつてののか？」

「いや、そうではなく」

もし喧嘩を売つてるつもりなら買うぞ？と、両腕を組みながらジーツと睨み付けてくるクリスの訝しげな視線を真顔で受け止めつつ、蓮夜は彼女の言葉を否定するように右手をヒラヒラさせ、

「雪音クリスつて名前、ほら……響きがとても綺麗だろう？名前と苗字、どちらを取つても可憐だし、そんな綺麗な名前を俺なんか口にするのはどうにも憚られてな。だから便宜上、ギアの方の名前を使わせてもらつていたというか……」

「……………キレ……………は……………なんつ、ぼつ、はアああああっ!!?き、急に何言い出してんだお前えええツ!!」

「……………え……………ツ?!いや待て、違うつ、誤解するなつ!別にお前の名前を貶したつもりはないつ!寧ろ名は体を表すとは良く言ったものだと感心を覚えたというかつ、お前によく似合うと思つたから余計に正面切つて名前呼びするのが恐れ多かつたというかつ、本当なんだつ!何なら此処までのを得た名前を娘に付けたご両親はとても素晴らしい人柄だつたんだろうと感慨すら覚えーバシイイイイツ!!ーブハアアアツ!!」

「フオローするどころか余計に追い討ち掛けてんじゃねーかよこのバカアああツ!!」

顔を赤くして慌てふためくクリスの反応から自分がまた何か言葉足らずな失言をしたと思つたのか、慌てて言葉を付け足して怒涛の勢いで弁明しようとする蓮夜だが、そもそも弁明のベクトルが根本的から間違っているせいで余計に顔を真っ赤に染めたクリスの雑巾が豪速球で飛び、顔面にモロに雑巾が炸裂した蓮夜はそのまま派手な音を立てながら倒れてしまったのであつた。

素朴な疑問から軽く突ついたらとんでもねえ藪蛇が飛び出したと、わりと恥ずかしい馬鹿過ぎる理由にクリスマスも耳まで顔を真っ赤にしながらゼーゼーツツと肩を上下させ、雑巾を顔の上に乗せたまま大の字に沈黙する蓮夜を暫し睨み付けるが、直後にくたびれた様子で最早何度目か分からない溜め息を漏らし、腕を組んで蓮夜から顔を背けながら徐に口を開く。

「名前……クリスマスでいい」

「……ふあ？（は？）」

「くくツツ……だーかーらー……！あたしの事は普通に名前呼びでいいって言ってんだよ！んなこつ恥ずかしい理由でギアの名前で呼ばれてたって知っちゃったら、今まで通りになんかしてらんないだろっ……！だからこれからはきちんとな前で呼べ！いいな？！」

「……………」

若干語気も荒く、念を押すように何度も言うてくるクリスの急な申し出に一瞬理解が遅れてポカンと呆氣に取られてしまう蓮夜。

だが、顔を上げた拍子に雑巾が僅かに下にズレた事で、顔を背けるクリスの耳が赤くに染まっているのに気付き、其処で漸く彼女が自分から歩み寄ってくれているのだと察した蓮夜は一拍間を置いた後に苦笑いを浮かべると、顔から雑巾を退けながら姿勢を正すように起き上がって正座し、コクリと頷き返す。

「分かった、これからは変な誤解をさせないように気を付ける。今まですまなかつた。……それから……有り難う、クリス」

「っ……まあ……あたしの方こそ、な……」

これまでの非礼を詫びて謝罪すると共に、遠回しながらも心を許してくれた事に感謝し改めて蓮夜が名前を呼べば、一瞬動揺しながら若干素直になり切れない口調でそう返すクリスの表情にも何処となく憑き物が落ちたような清々しさが垣間見える。

そうして、二人の間にほんの少しだけ穏やかな空気が流れ、互いの胸につつかえていた蟠りが軽くなったような気がしてどちらともなく思わず微笑を浮かべる中、突然ドダダダアッ！と何やら慌ただしい足音を立てながらリビングの方から五月と風太郎が洗面所内へと駆け込んできた。

「雪音さんっ！黒月さんっ！た、大変ですっ！」

「う、おおおっ?!な、何だよお前ら急にっ?!」

「二人共……?どうしたんだ、そんな血相を変えて?何かあったのか?」

「あつたどころの話じゃねえんだよっ！これ見ろっ！今さつき、リビングの窓にいつの間にか貼られて……!」

そうやって風太郎が焦りを露わに二人に慌てて差し出したのは、一枚の青いメッセー  
ジカード。



それを見て蓮夜も怪訝な顔を浮かべながら青いメッセージカードを風太郎の手から受け取り、表面には何も書かれていないのを確認してカードを裏返すと、裏面に綴られているやけに達筆な字のメッセージの内容が視界に飛び込んだ。

横からカードを覗き込んでいたクリスはその内容を視線で追っていくと、その表情がみるみる内に驚きが変わって目を見開いていき、蓮夜も険しげに眉を顰めてカードの内容を鋭く睨み付けた。何故なら……

『——日付が変わる12時深夜、街の郊外にある○○○工場跡地に中野姉妹の最後の一人を連れて来られたし』

『尚、是の要求を拒否・無視した場合、攫った他の姉妹の安全は保証しない物とする。貴殿らの賢明な判断に期待する』

「——コイツは……!」

二人が目を通したメッセージカードには、目の前にいる五月を指定の場所に連れて来い、従わなければ他の姉妹の身の安全は保証しないという脅迫の要求が記されていた。

その内容にクリスも目を見張らせる中、蓮夜は無言のままカードを裏返して他には何も怪しげな部分がないのを確認し、風太郎と五月に目を向けながらカードを見せる。

「カードに書かれている内容はこれだけか……これ以外には何も怪しい物はなかったんだな?」

「は、はい……さつき上杉君と一緒にリビングに戻ったら、いつの間にかそのカードだけが窓の外に貼り付けられていて……あの、それってやつぱり……」

「ああ。学校でお前を襲ったイレイザー達が送り付けてきたモノで間違いないだろうな……恐らくお前の姉達を誘拐したイレイザーの正体がバレて、その上俺達がお前の傍に

いるせいで向こうも下手に手出しが出来なくなつたから、別の手を打ってきたんだろう……手出しが無理なら、こちらから差し出さざるを得ない状況に仕向けてきたという訳か」

「呑気に状況分析なんかしてる場合じゃないだろ！どうするんだ?!このままじゃ一花達がやべえし、かと言って大人しく五月を差し出す訳にも……！」

「……………」

誘拐された四人の安否に関わる内容の脅迫文を突然送り付けられて動揺が収まらないのか、風太郎は焦燥に駆られた様子を露わに蓮夜に詰め寄り、五月も青ざめた表情で胸に当てた手を不安げに握り締めている。

そんな二人の様子を目にした蓮夜もカードに視線を戻し、カードに書かれている指定された時刻をもう一度確認して洗面所の壁に取り付けられてる時計の針を見ると、時計の針は既に八時半を過ぎようとしている。

指定された時間まで、猶予はあと数時間。その間に何とかこちらでも手立てを考える必要があるが……

(わざわざ向こうから時間と場所を指定してきたという事は、其処には必ず奴らが罠を張って俺達を待ち伏せているハズ……。それが分かっている以上馬鹿正直に奴らの誘いに乗る訳にはいかなかったが、かと言ってあちらに人質がいる以上奴等の要求に従わない訳にはいかない……しかし……)

向こうには恐らくシャークイレイザーだけでなく、あの幹部級のイレイザーも己の分身であるダストを揃えて待ち受けている筈だ。

S・O・N・Gの助力も望めない、奴らにとつて絶好の機会ではないこの状況で自分達の事をみすみす見逃す訳も無し、五月達だけでなく今度こそ自分達を仕留めに掛かろうとして来るに違いないだろう。

そうなつてくれれば無策で正面から挑むには悪手が過ぎるが、下手な策では逆に振じ伏せられて返り討ちに遭うのも目に見えている。

一体どうすれば……と、口元を片手で覆いながら深く悩むあまり思い詰めた表情を浮かべて黙り込んでしまう蓮夜だが、その時、そんな蓮夜の後頭部を後ろからコツンとクリスが拳でこつ突いた。

「ツ?!……クリス?」

「なに一人で考え込んでんだよ。どうすりゃいいのかわかんねえなら、あたしや周りにもっと頼ればいいだろ。……それもあたしがお前にずっと言いたかった、不満の一つなんだぞ」

「……!」

文句アリアリにジト目を向けながらそう告げるクリスの言葉に、小突かれた頭を抑える蓮夜も目を見張ってハツと思わず息を呑んだ。

自分一人の力でどうにもならない事に当たった時は、周りの力を頼ればいい。

イレイザーを倒して攫われた五月の姉達を救う事も、巻き込んでしまったクリスを無事に元の世界に返す事も、自分の力でどうにかしなければと責任感に駆られるあまりその考えに及ぶに至らなかつたが、そう言ってくれたクリスの言葉で自分がまた無意識に一人で背負い込もうとしていたのだと気付き、自嘲の笑みを浮かべながら頷き返した。

「そうだな……今は俺一人で気を張る必要なんてないんだよな……すまない、クリス」

「分かればいいんだよ。……けど、実際のところ今の戦力だけでどうするかって話だよな。連中を倒すだけならともかく、人質も考慮しながらってなると……」

そう、イレイザー達との戦力差を解消する算段も考える必要があるのだが、何よりも先ず人質の問題を解決しなければこちらの不利な立場は変わらないだろう。

このまま奴らと真正面から戦う事になるにせよ、もしも人質を前に出されればこちらも動きを封じられて何も出来なくなってしまう。

そんな最悪の事態を避ける為にも攫われた五月の姉達を先に助け出した所だが、人質が何処に囚われているのか居場所も分からない以上、救出作戦も立てようがない。

故に何としてでも彼女達の居場所を探りつつ無事に救い出し、同時に奴らを退ける方法も考え出さなければならぬのだが、たった二人しかいないこの状況でどうやってその両方を熟せばいいのか。

必死に頭を悩ませて蓮夜とクリスがその方法を考える中、傍らでそんな二人の様子を黙って見守っていた五月が不意に恐る恐る手を上げていく。

「……………あ、あの……………！一っだけ、あの人達の意表を突けそんな方法を思い付いたのですが……………訊いて頂いてもいいですか？」

「……………五月？」

「……………？」

突然そう言い出してまっすぐに二人を見つめる五月の顔には、何処か真剣味が帯び、同時に何かを決心したかのような力強い決意が秘められている。

風太郎と蓮夜、クリスもそんな彼女の真剣な雰囲気を感じて頭の上に揃って疑問符を浮かべる中、そんな三人の注目を浴びる五月も一度気を落ち着かせるように目を伏せて深呼吸を二、三回繰り返した後、意を決した様子で顔を上げ、自身が思い付いたという打開策を三人に語り始めていくのであった。



## 第六章／五分分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）⑤（前）

——町外れの郊外の山奥、薄暗い森に囲まれた場所にひっそりと佇む廃れた工場。

元々薬品やサプリメント食品などの生産を行う製薬会社が所有する工場の一つだったらしいのだが、不景気続きから会社自体が経営が成り立たなくなり、それから間もなくして倒産してしまっただけらしい。

以降は新たな買い手が一向に見付かる事がなく……いや、そもそもこんな人里から離れて人の出入りも面倒な山奥にある工場を買い取る物好きがいる筈もなく、建物自体も年々劣化していき、今ではその不気味な雰囲気から誰も近寄る事がなく、たまに夏場辺りに肝試し気分です浮ついた連中がネット動画のネタの為に立ち寄る事がたまにある程度ぐらいらしい。

「——成る程。奴等が身を隠すには打って付けの隠れ家という訳か……よくもまあこんな場所を探し当てられたものだ……」

そんな寂れた廃工場の前で建物を見上げ、若干呆れ混じりにそんな呟きを漏らすのは、此処に至るまでの道すがらをネットで見付けた地図で書き記したメモを手にした蓮夜だ。

人質の受け渡し取り引き場所として指定されたこの場所の周囲一帯に目を向ける。辺りには密生した木々しか見当たらず、近くに民家らしきものもなく人気は一切感じられない。

（わざわざ人里から離れた場所を選んだだけか、それとも微力ながら改竄の力を使って人を寄り付かないようにしたのか……何れにせよ、これなら仮に戦闘になったとしても周りを巻き込む懸念もないか……残る問題としては、奴らが人質を何処まで利用するつもりなのかだが……）

今まで奴らが攫った中野姉妹は向こうにとつてもこの世界を改竄し、乗っ取る為にも

必要な重要なファクターだ。

自分も記憶がない為にこの世界がどんな物語として成り立っているのかまでは確かには分からないが、少なくとも風太郎がこの物語の主人公で、そんな彼と中野姉妹の誰かが結ばれる事がこの物語の本来の正しいあり方だと思われる。

故に彼と結ばれるヒロイン達の存在を消し去り、この物語の本筋を根底から破壊する。

その為にも最後に残されたヒロイン、中野五月が揃うまでの間は他の人質にも手荒な真似はしないでだろうと信じた所だが、正直その信頼に値する相手ではないとも知っているが為に油断は出来ない。

（それに、最初の被害者である中野の長女が攫われてからそれなりに日も経ってる。本来の物語の本筋にはない流れを作ってしまった以上、向こうもこれ以上は物語の目を誤魔化すのは無理だと踏んでいる筈だ。だからこそ、あんな強硬策に出たのだろうか……）

チラツと、蓮夜は無言で己の背後に目を向ける。其処には……

「……………」

微かに吹く夜風で赤いロングヘアを揺らし、何処か真剣な眼差しで不気味な雰囲気  
を醸し出す廃工場を見上げる少女……此処まで蓮夜に連れられてきた五月の姿があり、  
蓮夜はそんな彼女と向き直りながら若干不安を帯びた眼差しを向ける。

「改めて聞くが、本当にいいのか？正直な話、今回の作戦が上手くいくかどうかは結局俺  
次第でもある。もしも仮に俺が失敗すれば、真っ先に危険な目に遭うのはお前の……」

「……………」

今の自分達の心もとなない戦力だけで、奴らの裏をかくにはこの方法しかないと理解は  
している。

してはいるが、それでもこの策が確實とは言えないし、何よりそんな作戦の為に彼女を危険な目に遭わせる事はやはり忍びなく、幾分かの抵抗はある。

その危険性を考慮し改めて五月に確認を取るが、五月は何も言わずそんな蓮夜の目を黙って見つめ返すと、その瞳の奥には揺るがない決心と力強さ、そして蓮夜に対する信頼が垣間見え、言葉はなくとも彼女自身、既に覚悟は出来ていると伝えているように見える。

「……そうだな……此処まで来たら今更な話だった……無粋な質問をしてすまない。では、行こう」

彼女の身を案じるあまり及び腰になってしまったが、今回の作戦において彼女は肝心な要だ。

正直、これから行う作戦には不確か且つ不安な要素が未だ多く残ってはいるが、その足りない部分は自分がフォローするしかない。

改めて己の気を引き締めるようにそう考えながら覚悟を決め、眼前の敵のアジトを睨み付けながら、蓮夜は五月を引き連れて廃工場の敷地内へと正面から足を踏み入れていくのであった。



——そして、蓮夜と五月が到着する少し前……

「——クツソツ……まだか、まだ来ないのかっ……!!」

薄暗い廃工場内にて、蓮夜達の到着を待つ神楽木は焦りを露わに忙しなく辺りを歩き回りブツブツと独り言を漏らしていた。

そんな様子を薄汚れた木箱の上に腰掛けながら黙って見ていたアスカは呆れた眼差しを向け、ため息混じりに声を掛けた。

「そんな焦った所でどうしようもねえだろ。クレンの奴が連中のとこに文を出したつってたんだ、待ってりやその内向こうから来んだろ」

「つ……い……そんな樂觀視してられる状況じゃないから焦ってるんだろ！お前はまだいいかもしれないが、こつちは中野達を立て続けに攫ってからそれなりに時間が経ってる！これ以上時間を掛ければ物語の目を欺くのは難しくなるしつ、もしそれで失敗したなんて事になればあの人に何をされるかつ……!!」

あああああッ……!!と、何を想像しているのか神楽木は恐怖に震える様子を見せて頭を抱え、そんな彼の姿を見てアスカも怪訝な表情を浮かべてしまう。

（コイツは何をこんな怯えてんだ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：～  
てた気がするが、アイツに何をされてんだ……：：：～）

あの時はクレンとの会話に集中して気に止めなかつたが、此処までの怯えようを見ると流石に何があつたのかと気になってくる。

蓮夜達を待つ暇を潰すついでにその辺の事も聞いてみるかと、そんな気まぐれからアスカが口を開き掛けるが、その時、アスカはピクツと何かに気付いたように表情が険しいものになり、薄汚れた木箱の上から重い腰を上げていく。

「取り敢えず、喚き散らすのはその辺にしとけ。……漸く連中のご到着のようだぜ」

アスカがそう告げると共に、廃工場の入り口の扉が錆び付いた甲高い音を上げながら開かれていく。

その音を聞いて神楽木も慌てて扉の方へと振り返ると、扉の向こうから隙間から差し込む月の光を背に工場内へと足を踏み入れる蓮夜と、その背後から何処か不安げに胸に手を当てて俯く五月の姿があった。

「よオ、ちゃんと時間通り来たじゃねーか。正直こつちの誘いに乗らねえ可能性もちと考えたが、流石に人質を盾にされりやそつちも来ねえワケにもいかないか」



「……………」

指示した時間通りに五月を連れてきた蓮夜に軽薄な笑みを向けながら、アスカが軽口で二人の来訪を迎え入れる。しかし蓮夜はそんなアスカに目もくれず、僅かに目を細めて埃臭い工場内に視線を巡らませていく。

「随分と酷い場所を隠れ家にしたものだ……今まで攫った中野の姉達も此処に捕らえているのか？」

「生憎と其処までバラす気はねえよ。……つーかテメエの方こそ、あの装者はどうした？ 昼間に邪魔してくれた札に一言ぐらい文句を言いてえぐらいなんだが、顔が見えねーじゃねえか」

てつきり蓮夜と一緒に同行して此処へ来るものかと思われたが、蓮夜と五月以外にクリスの姿が何処にも見当たらない。

……もしや、何処かに身を潜めて騙し討ちの機会でも伺っているのではないかと周囲

を警戒して目を走らせるアスカだが、そんな彼とは対照に蓮夜がため息混じりに呟く。

「アイツなら此処には来ない。というのも、彼女とはお前達からの要求の件で意見の相違から袂を分かつ事になつてな……中野を引き渡すと決めた俺の方針に着いていけな」と三行半を突きつけて、一人何処かへ行つてしまつたよ」

「……へえ、お前が仲間割れとは珍しい事があるもんだ……その女を素直に渡す氣になつたつてのも意外だが、てつきり奴と共闘して懲りずにまた俺達に挑んでくるだろうと思つちやいたんだがな」

「今までの戦いで、お前と正面から戦うのは分が悪いと散々に思い知らされたのである……加えて今はS・O・N・Gの助力も望めない以上、そんな状況で無謀な真似をするほど俺も馬鹿じゃない……だから人質の身の安全を考えれば、これが最善の方法だと踏んだだけの話だ……最も、彼女はそんな俺のやり口をお気に召さなかつたようだがな」

「……………」

肩を竦めて自嘲気味に笑う蓮夜だが、アスカはそんな蓮夜に懐疑的な眼差しを向けたまま警戒を解こうとはしない。

すると、そんな二人のやり取りをアスカの隣で黙って聞いていた神楽木が痺れを切らし怒号を上げた。

「一体何時までグダグダと話してるつもりなんだ……！いいからとつと中野をこっちに寄越せ！用があるのはそいつだけなんだ！」

「……ああ、彼女を渡すのは構わない……ただ、その前に一つ条件がある。今までお前達が攫った人質の身の安全を確認させろ。中野を引き渡すのはそれからだ」

「ツ！な、なんだって？」

蓮夜からの思わぬ要求に思わず面食らう神楽木。一方でアスカは立場を弁えないそんな蓮夜の不躰な物言いに、険しげに眉を顰めた。

「お前、今の自分の立場分かって言ってるのか？お前は俺等に指図出来る立場じゃねえだろ。こつちには人質がいるって事、忘れてんじやねえだろうな？」

「……そちらこそ何か思い違いをしてるんじゃないのか？俺は別にお前達に謙ってコイツを引き渡しに来たんじやない。あくまでもこの物語の延命処置……この世界を守るのに最善の方法だと判断したから、そちらの要求に応えただけの話だ」

「……………んだと？」

蓮夜を睨むアスカから威圧感が放たれる。しかし蓮夜は臆せず、正面からアスカを睨み返し冷淡に告げる。

「生憎と俺はお前達の事を信用していない。もし万が一お前達が既に人質を手を掛けていて、中野を明け渡した瞬間に殺されでもすれば、その時点でこの物語はお前達の手に落ちる事になる。それでは元も子もないし、こちらには何のメリットもない。だから最低限、人質の安全を確かめさせろと言ってる」

「な、何がメリットだ！調子に乗るのも大概にしろ！」

「……こいつの言う通りだな。そもそも、捕らえた四人が既に死んでるなら俺らが何の事後処理もしないと思うか？もしそうなら其処の女や周りの人間の記憶を改竄して消し、存在した痕跡すら徹底的に消す。それが無い時点で連中が生きてる証拠にはなるだろうがよ」

「だったら人質の安否をこの目で直接確かめても問題はないだろう？それにさっき言ったように、俺はお前達を信用していない。最初に誘拐した長女の時点で他の姉妹の動向を探る為に、彼女達の情報を得ようと暴力や言葉にするのも憚られるような真似を彼女達にしてたとも限らない。……そんな連中にみすみすコイツを渡したとなれば、流石に俺も夢見が悪いという話だ」

そう言って、まるで戯けるように肩を竦める蓮夜。そんな彼の人を嘗めてるようにしか見えない態度にいい加減業を煮やし、神楽木は近くに転がるガラクタを苛立たしげに蹴り飛ばした。

「ふざけるのも大概にしろと言うんだ……！俺達がお前の戯言に従う義理なんてない！いいからさっさと中野を寄越せえ！」

「……ああ。勿論、俺も無条件でお前達がこちらの要求に伝えてくれるとは思ってはいないさ。……だから、そうせざるを得ないようにさせてもらう」

「あ……？」

「どういう意味だ？、とアスカが思わず間拔けな声を返した瞬間、蓮夜は何処からともなくウエーブブラスターを素早く左手に取り出した。

いきなり武器を抜き取った蓮夜を見てアスカと神楽木も反射的に身構えるが、蓮夜はウエーブブラスターの銃口を二人ではなく、なんと隣に立つ五月のこめかみに突き付けた。

「ひっ……！」

「ツ?!お、お前、いきなり何を……?!」

「……テメエ、何の真似だ?」

「見ての通りだ。こちらの囁かな要求すら飲めないのなら、お前達に渡す前に彼女の頭を撃ち抜く。……もしまだ攫われた四人が生きているのだと仮定するのなら、お前達は出来るだけこの物語の目から逃れる為に、事を大きくしない為に五人纏めて消したい筈だ。ならばこのタイミングで中野を失うのは、お前達にとつても不都合でしかないんじゃないか?」

「あ、ぐっ……」

薄い笑みを向ける蓮夜からの指摘に、神楽木があからさまな動揺を見せる。しかし、アス力はそんな蓮夜の突飛な行動に驚くよりも不可解な眼差しを向けていた。

「お前……自分で滅茶苦茶しか言ってねえって自覚あんのかよ?そいつをお前が殺せ

ば、お前は大罪人としてこの物語から追放されるか、或いはその存在を消されるかもしれねえ。分かってない訳じゃないだろう？」

「お前達と同じイレイザーになる、と言いたいのだろうか？ああ、それに關しては俺としても不本意だとも。しかし現状、俺一人ではお前達を正面から破る術はなく、人質を救出す方法も思い浮かばない。ならばどうすればいいか、思考し、そして思い至った。俺が此処で大罪を犯せば、この物語は必ず異変を察知して俺を見付ける。そうなればこの場にいるお前達も一緒に見付かり、俺と共に消えるしなくなる……つまり最小限の犠牲を持って、少なくともこの世界がお前達の手に渡る最悪な自体は避ける事が出来るといふ訳だ」

(ツ………なんなんだコイツ……頭イカれてるのか……?!)

先程まで人質や五月の身を案じるような口ぶりをしていた舌の根も乾かぬうちに、この世界がイレイザー達の手に渡るぐらいなら、自ら五月を手を掛け、己を犠牲にアスカ達を排除すると蓮夜は言う。



あの男の思考が理解出来ない。とても常人とは思えないやり口に神楽木も戦慄すら覚える中、アスカは僅かに首を傾けながら目付きを更に鋭くさせる。

「正気の沙汰とは思えねえな。記憶を失って別人みたくなつたとは言え、少なくとも、他人の為にその身を削るいけ好かねえとは何も変わっちゃいねえと思つてたんだがよ」

「……そうか。記憶を失う前の俺はさぞかし人間が出来ていたんだろな。決して好かれてはいないだろうと思つていたお前にも、其処まで思われていたのだとも知れて少しだけ感慨深くもある」

ふつ、と僅かに皮肉げな笑みを浮かべるも、そんな微笑みもすぐに消えて再び無表情となる蓮夜。

「だが生憎と、今の俺はそんな過去を知らなければ聖人君子という訳でもない。此処まで切羽詰まつた状況に迫り立てられれば、流石の俺でも非情な手段を取らざるを得なくもなる。……お前達という脅威に大勢の人間の人生が脅かされるのであれば、最小限の犠牲を持つてしてもそれを止めるだけだ」

「……………」

ただただ冷淡で、感情の機微を感じさせない口調で必要な犠牲を出す事に戸惑う素振りすら見せない蓮夜にアスカは何も答えない。そんな彼らに見せ付ける様に、蓮夜は五月に突き付けた銃剣の引き金に掛けた指に力を込めていく。

「それで、結局どうする気だ？俺に人質の居場所を明かすか、それとも此処で俺諸共道連れになるか……………ああ、断っておくが、変身して先に俺を殺そうとしても意味はないぞ。そうなるよりも速く、或いは例えこの頭を潰されようとも、死んでも必ずこの引き金は引く……………お前達を道連れにする為にな」

「っ……………お、おい……………どうする気なんだ?！」

「……………」

蓮夜の言動は最早倫理観も何もない滅茶苦茶でしかないが、事実、此処で五月を失え

ば計画に大きな支障が出てしまう。

この五等分の花嫁の物語のヒロインが、本来の本筋にないハズの場面で命を落とす。

元からそのつもりであったとは言え、そのタイミングを誤ればこちらが改竄の力を使うよりも先にこの物語に見つかって先に消されてしまう可能性が高い。

故に今此処で五月が殺されれば蓮夜は勿論、アスカと神楽木も巻き添えを喰らって開放、最悪その存在を消されてしまうかもしれない。

向こうも追い詰められて後がないあまり最早なりふり構ってはいられないのか、銃口を向けられて俯きながら怯えるように震える五月にも目もくれず、顔色一つ変えない蓮夜の顔をジッと無言のまま見つめて何を思ったのか、アスカは目を伏せ、溜め息と共に頷いた。

「いいぜ。そつちの望みを聞いてやるよ」

「ツ?!な、何を言ってるんだ?!あんたまで気が狂ったのか?!」

蓮夜の要求をアツサリ聞き入れたアスカの思わぬ返答に神楽木も動揺するが、そんな神楽木を横目にアスカは淡々と言葉を続ける。

「どの道、今このタイミングであの女に下手な事されりゃこつちの都合が悪くなるのは事実だろ。それに奴の要求も人質の解放って訳でもなく、ただ安否を確かめさせろってだけだ。それだけならまだこつちが不利になるなんて事にはならねーだろうさ」

「っ、だ、だけど……!」

「それに、記憶を失った今のアイツが何処まで本気かは俺にも計り兼ねるからな。……あんだけ必死に守って、肩並べて戦った筈の正義の味方の装者様から見放されるような奴だ。前までの奴なら絶対やらなかったような事も、今の奴がやらねえって保証は俺にも出来ねえからよ」

言いながら、アスカが軽く指を鳴らす。瞬間、薄暗い闇に覆われていた工場内に微か

な灯りが無数に灯る。

見れば、工場内の至る所の壁に火を灯したロウソクが金具と共に立て掛けられており、さつきまで暗闇のせいで見えてなかったアスカ達の背後の更に奥……上の階層に続くグレーチング状の階段と、その先の壁に張り付けになってる四つの人影が微かに見える。それは……

「……………う……………」

「……………っ……………」

「……………」

手足を冷たい鎖で拘束されて気を失い、壁に磔にされて身動きが取れない状態にされている四人の少女……今まで神楽木の手により攫われた中野一花、二乃、三玖、四葉の

姿があつた。

「ああつ……!」

捕らえられた四人の姿を見て、五月が思わず身を乗り出そうとする。しかし蓮夜はそんな彼女を横から制止し、半眼に閉じた目でアスカを睨み付けた。

「やはりあの四人も此処にいたか……しかし、俺が言うのもなんだが存外不用心じゃないか。人質の受け渡し場所と、捕らえた人質を同じ場所に集めるだなんて」

「かもな。だが生憎と、大事なもんは目の届く所に置いておかなきゃ落ち着かねえタチなんだ。……それに、此処でテメエを始末しちまえば、面倒な仕事を一気に片付けられて楽が出来るだろ？」

そう言つて、アスカは人差し指を軽く横薙ぎに振るう。

それと同時に、蓮夜と五月の周囲に転がる塵屑が一斉に蠢いて巨大化していき、徐々



ていた蓮夜の顔が微かに歪む。

その変化を見逃さず、アスカは間断なく言葉を続けていく。

「俺は昔のお前を知ってるが、今のお前が何処まで別人なのかは分かっちゃいねえ。今までの仲間連中との記憶や絆を失い、人間性も変わったテメエがホントに手段を選ばずその女を手を掛けないって保証は俺にも出来ない。……けどよ、人の根っここの部分ってのは案外そう簡単には変わらねえもんだ」

『ガアアアアアアアアアアアッ!!』

「!」

アスカの言葉と共に、ダストの一体が五月に襲い掛かる。

それを見て五月も咄嗟に身構えようとしますが、それよりも速く蓮夜が彼女を庇うように回り込んでダストを後ろ回し蹴りで蹴り飛ばした。が、直後に蓮夜の表情が露骨に歪



んでしまう。

「……幾ら非情のフリに徹しようが、結局テメエは誰かを見捨てられる人間じゃないって事だ。そんなお前が世界を守るだとか、んなご大層な理由の為に誰かを犠牲にするなんざ出来る訳がねーのさ」

「……………」

本当に五月を犠牲にするつもりがあるのなら、蓮夜が手に掛けようが、ダストが手に掛けようが結果は変わらない。

なのに咄嗟に五月を守った時点で、蓮夜の今までの非情に思えた言動も全てただのブラフでしかないと露呈した。

こうなればもう、蓮夜が彼女を人質にした所でアスカ達には通じない。

蓮夜自身もそんな己の失態を自覚しているのか、先程までの無表情から一転して険し

い顔付きでアスカを睨み付けていたが、やがて何かを観念したかのようになら、その手からウェーブプラスターを消し去りながら目を伏せて俯いてしまい、そんな蓮夜を見て、先程までオドオドしていた神楽木も僅かな戸惑いと共に歪な笑みを浮かべた。

「は、ははは……！なんだよ、驚かせやがって……！無駄にビビったじゃないか……」

「いいからとつとあの女を手に入れる。奴の始末はこつちで付ける」

「つ、分かってるよっ」

安堵から軽口を叩いたところをアスカに咎められ、神楽木は五月に目を向ける。

その視線を浴びて五月も一瞬身を竦めるが、何も出来ずに立ち尽くす蓮夜の背中を見て自分がどうするべきか悟り、顔を俯かせたままゆつくりと神楽木の下へ歩き出した。

「そうだ、いい子だよ中野……！お前はやはり聡い子だ！いい生徒を持って、先生は嬉しいよー！」

「……………先生、か」

「……………？」

今の状況、どうするのか、が正解か素直に従う五月の従順ぶりに神楽木が嬉々として叫ぶが、四方をダスト達に囲まれながら立ち尽くす蓮夜が小声で何かを呟き、アスカが訝しげに眉を顰める中、蓮夜は徐に顔を上げて神楽木を見つめた。

「神楽木、と言ったか……………最後に一つだけ、お前に聞きたい事がある……………」

「……………あ？」

蓮夜からの不意の質問に、完全に悦に浸っていた神楽木が間拔けな声で返す。そんな神楽木に、蓮夜は何処か哀しげな眼差しを向けたまま疑問を投げ掛ける。

「ノイズ喰らいのイレイザーであるなら、お前も元々は響達の世界の住人の筈だ……………」

の世界に教師として潜り込んだのも、この物語を改竄する為に、初めからその為だけに中野達に近付いたのだと理解してる……けれど、本当にそれだけか？」

蓮夜がそう告げると共に、五月が足を止める。

「お前がどれだけの時間、教師としてあの学校にいたのかは俺にも分からない。それでも彼女達に……いや、風太郎や他の生徒達とも教師として接して、何も感じるモノはなかったのか？彼らに対して、情と呼べるモノを少しでも感じなかったのか？……中野と、あの四人を犠牲にして望みを叶える事に、少しも罪悪感を感じないのか？」

神楽木の目をまっすぐに見据え、彼自身の風太郎や五月達への想いを知りたいが為に、真剣な口調で疑問を投げ掛ける蓮夜の問いに、神楽木は一瞬目を見張り、顔を俯かせる。

そんな彼の反応に蓮夜も僅かに物悲しげに眉を顰める、が……



「……………。だから、アイツ等にも何の情も抱いていないと？自分よりも格下だから、自分が特別だからと？」

「そう思う事の何が悪い？事実その通りじゃないか」

悪びれもなく、恥じる事もなく、ただただレーザーである自分を特別だと称して全てを見下す傲慢な態度を隠そうともしない神楽木に、蓮夜は何も言葉を返さず、ただ無表情のまま、その目は何処までも冷たい眼差しになっていた。

そんな蓮夜の冷たい視線も気にも留めず、神楽木は俯いて立ち尽くす五月に冷ややかな視線を向ける。

「そもそも反吐が出るんだよ。コイツらみたいな努力すれば身を結ぶ、結果が付いてくる、夢は叶うだの、そんな青臭い妄言を信じ切ってる連中を見てるだけで虫唾が走る……………！だからこの物語が俺の手に収まった時には全てを書き換えて思い知らせてやるんだよ！努力だのなんだのじゃどうにもならない現実がある、お前達が目指す夢なんて、現実をロクに見てない馬鹿な奴が見る身の程知らずの妄想に過ぎないってなあ！こ

れから消えるお前にその光景を見せられないのが残念だよ、中野お！」

あははははははッ!!と、自分がこの物語を貶めた時の光景を想像して天を仰ぎみながら愉快に嗤う神楽木。だが……

「——それがお前の本心か……安心したよ、神楽木……」

「……………は？」

ポツリと、瞳を伏せた顔を背け、言葉通り安心したように、けれども何処か哀しみが入り交じったような感情が込められた眩きを連夜が漏らす。

意図が読めない、意味が分からない言葉に思わず間の抜けた声で聞き返す神楽木に対し、ゆっくりと顔を上げた連夜は無表情のまま語る。

「もしお前が、僅かながらでもアイツ等に情を抱いていたのだとすれば、もしかしたら普通の人間として生きるように説く事も出来るんじゃないかと躊躇してる部分はあつた

……それに、少なくとも風太郎や中野達が教師と呼んでそれなりに慕っていた相手だ……彼等の気持ちを思えば、お前がもう一度普通の教師としてやり直す……それが皆にとつて一番いい結末なんじゃないか、と……」

けれども……と、神楽木を睨み付ける蓮夜の目が鋭さを増す。

その瞳の奥には、静かな怒りの炎が燃え滾っていた。

「今、お前の本音を聞いてハッキリと分かった……お前は既に人間でもなければ、中野達の教師と名乗るのすらおこがましい……彼女達と真剣に向き合い、教え導き、苦難を共にしてきた風太郎の足元にすら及ばない……ただのくだらない畜生だ」

「……ハッ、だから何だと言うんだ？ 今のお前は孤立無援で多勢に無勢。これだけの数を前に、今のお前に何が出来ると言うんだよ！」

こちらには蓮夜を幾度となく破ったアスカがいる。そんな心強い後ろ盾がある今、蓮夜の煽りを受け惜しみでしかないと吐き捨て、神楽木は蓮夜の周囲を取り囲むダストの



群れを見回し勝ち誇るように叫ぶ。

だが、蓮夜は周りのダスト達を一瞥しても物怖じする素振りすら見せず、

「例え数では負けていたとしても、お前達に負けるつもりは毛頭ない。……何よりお前は、俺とクリスを繋いでくれた恩人を、風太郎と中野達の努力を嘲笑った……そんな貴様を、”俺達は”決して許しはしない……」

「……は？何を言っ——」

「Killlitter Ichhival tron……」

「——ッ?!その女から離れろっ!!」

「……え？」

何処からともなく耳に届いた、美しい旋律の歌声。

その歌声に気付いたアスカが狼狽してすぐさま神楽木に呼び掛けるが、直後、五月の身体から赤い閃光が放たれると共に凄まじい衝撃波が発生し、彼女の一番近い場所にいた神楽木、そして周囲にいたダスト達を纏めて吹き飛ばしていったのだ。

知能の低いダスト達は受け身も取れずに次々と無様に転倒していくが、神楽木は地面を何度も転がりながら慌てて身を起こし、光に包まれた五月に視線を向ける。

其処には赤と白とツートンカラーのアンダースーツを纏い、その上から赤い装甲に身を包んだ赤髪の少女……イチイバルのシンフォギアをその身に纏った五月の姿があったのだ。

「なっ……シンフォ、ギア……？な、何で中野がシンフォギアを——！！」

「……いや、違う！そいつは——！」

「今だッ！クリス”ッ!!」

「——おうッ！先手必勝だアアアアアアアアアッ!!!」

適合者ではない筈の五月が何故シンフォギアを纏えるのか困惑して敵陣営がどよめく中、シンフォギアの装甲とスーツで身を包んだ五月……否、中野姉妹が五月に変装する為に使っていたウィッグを頭から被ったクリスが腰部のアーマーを展開して無数の弾頭を乱射し、辺り一面に手当り次第に着弾させて煙幕を発生させ、アスカや神楽木、ダスト達の視界を遮ったのであった。

「ゲ、ゲホツケホツ！な、何だこれッ?!どうなってんだッ?!」

「煙幕……！そういう事かよ！」

煙を吸い込んで咳き込む神楽木の隣で、何かに気付いたアスカが慌てて周囲を見渡す

も、煙幕が邪魔をして誰が何処にいるのかさっぱり分からない。

そんな中、頭のウィッグを掴んで脱ぎ捨てたクリスは煙幕により周囲が何も見えない中でスナイパーライフルに武器を切り替えながら、頭部バイザーを展開して暗視スコープ越しに上階層の四人に狙いを定める。

「其ツ処だアツ!!」

ダンダンダンダンダンツツ!と、トリガーを連続で引き、銃口から放たれた無数の銃弾が一花達の手足を縛る鎖だけを見事に撃ち抜き、四人はそのまま力無く床に倒れ込んだ。

「やれたぞっ……!今の内だっ!」

「二人とも、頼むっ!」

「——はいっ!」

「任せろっ！」

煙幕で何も見えない中、クリスと蓮夜の呼び掛けに応える少女と少年の声が響き渡る。

それを耳にしたアスカが声が聞こえた方に振り返ると、比較的煙幕が薄い上階に二人の少年と少女……風太郎と五月が一花達を抱えて逃げ出そうとしている姿が僅かに見えた。

「（アイツら、いつの間に?!……まさか、さつきまでのやり取りは全部、奴らが忍び込むまでの間の時間稼ぎ——!!?) 神楽木イツ！」

蓮夜達の真の狙いに今になって漸く気付き、アスカは慌てて神楽木に二人の逃亡を阻止させようと呼び掛ける。しかし……

—ダダダダダダアアンツ!!—

『——クツソツ……!!コイツ、何処まで邪魔をツ!』

「お前の相手はあたしだっ……!こっから先に進めると思うなよっ!」

神楽木の方も一花達を連れて逃げる風太郎と五月の存在に気付き、シャークイレイザーに変貌して後を追おうとしていたらしいが、それを阻むようにクリスが二丁拳銃を使って近接戦闘を仕掛けてシャークイレイザーを足止めし、更に風太郎達を追い掛けようとするダスト達の頭や足などを乱れ撃ち足止めさせながら二人の後を追わせまいと立ち塞がっていたのだった。

「クツソツ……!役立たずがつ!こうなりや俺が——!」

『Code Gungnir……clear!』

「っ?!」

足止めに遭うシャーケイレイザーの代わりに自分が風太郎達の後を追おうとするアスカだが、直後に背後から電子音声が鳴り響き、反射的にイグニスレイザーに姿を変えながら巨大な右腕を横薙ぎに振り回した。

瞬間、イグニスレイザーの腕に鋭いドリルが轟音と共に炸裂して無数の火花を撒き散らし、見れば、蓮夜が変身したクロス・タイプガングニールが左腕にドリルを装備しイグニスレイザーの右腕に全力で突き立てる姿があった。

『グッ！黒月蓮夜つ、テメエツ！最初からコレが狙いであんな猿芝居を仕掛けやがったのかっ！』

『猿芝居とは心外だな。しかしまあ、確かにクリスに比べれば俺の演技も拙いモノだったと恥じる部分はある。中野の一挙一動をこの短時間で彼処まで完璧にマスターしてみせたんだ。仮に俺が審査員であったなら、最優秀の女優賞でもアイツに送り付けてやりたい気分だよ。何せお前の目ですら誤魔化した訳だからなあ……!!』

「吐かせやペテン師がアああッ!!」

クロスは突き出すドリルを苛立ちを込めて弾き返す。そのまま後方へと着地するクロスにイグニスレイザーがすかさず炎を纏った拳を振りかざして追撃を仕掛けるが、クロスは瞬時に身を屈めて紙一重で拳を回避しながら両足のパワージャッキを稼働させてキック力を増強させ、イグニスレイザーに目にも止まらぬ連続蹴りを叩き込み、風太郎と五月が出来るだけ遠くまで逃げるまでクリスと共に時間を全力で稼いでいくのであった。



## 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）⑥（中）

「——ぜえつ、ぜえつ……！クツソツ……！街まであとどんくらい掛かるんだっ！森を抜けるより先にこっちの体力が持たねえぞっ!？」

「仮にも男子なら弱音なんて吐かないで下さいっ！私だって二乃と四葉を抱えながらなんて相当キツイんですからっ！」

クロスとクリスがイグニスレイザー達を足止めしている隙に、攫われた中野四姉妹を救出して廃工場から何とか無事に脱出を果たした風太郎と五月。

街を目指して森を抜けようと全力疾走しながら両肩に抱く一花と三玖を纏めて抱え直しながら思わず愚痴をこぼす風太郎を咎めつつも、二乃と四葉を抱える（というより半ば引きずっている形になってしまってる）五月の表情にも余裕がなく、額から絶え間

なく汗が流れ出て疲労が滲み出ている。

そんな彼女の様子を横目に風太郎も背後からイグニスレイザー達が追って来ているのを確かめると、五月の顔をもう一度見て苦笑いを浮かべた。

「しっかしっ、まさかお前らに散々振り回されてきた変装グッズがこんな形で役立つ日が来るだなんてな……！お前からの発案を聞いた時は正直感心したぜ……！」

「っ、雪音さんに制服をお貸しした時の事を思い出して、何となく思い付いたんです……！私と彼女なら背格好も近いし、上手くやればもしかすると相手の裏をかけるんじゃないかと！」

それはそれとしてこんな騙し討ちみたいなのは正直気も引けましたけれど！と、彼女持ち前の生真面目さ故の葛藤をこんな時になっても口にする五月の相変わらざるにまるで実家のような安心感を覚え、風太郎も苦笑いを深めながら此処に至る前の蓮夜達との作戦会議をふと思いつ返す。

—中野の提案を元に作戦を組んで、俺と、中野に変装したクリスが正面から奴らの根城に正面から突入する。二人が潜入するまで出来るだけ奴らの注目を集めるようにこちらも努力するつもりだが、もし仮に作戦が失敗した時には、俺たち二人で全力で暴れ回って奴らを引き付ける。その騒ぎに乗じて風太郎達は人質を救い出した後に脱出し、街まで全力で逃げてくれ—

—ふ、二人だけでって……それだとお二人も危険なんじゃ……—

—心配すんな。ノイズとは違うが、こつちも化け物退治の専門家だ。ちよつとやそつとでやられるようなタマなんてしてねえよ—

—……正直、奴らに狙われているお前達を敵地に同行させる事に大手を振って賛同は出来ないが、戦力が少ない今の俺達だけじゃ奴らと戦いながら人質を救い出せる可能性が限りなく低いのもまた事実だ……だから……—

—それ以上言わなくていい。……俺達だって、アイツ等が攫われた時には何も出

来なくて、今もお前達の力を頼りにするしかない自分達にいい加減嫌気がさしてたんだ……その挽回が出来るってんなら、願ったり叶ったりってなもんだー

——上杉君……—

——……ありがとう……なら俺達も、全力でお前達を守ってみせる。必ずだー

(——最初の頃は怪しさ満載で、とてもじゃないが信用出来ないって思っちゃいたが……とことん律儀な奴だよ、アイツ……!)

夕暮れの商店街でのやり取りや、たまに飛び出すズレた発言、トラブルを起こしてはあたふたしていた今までの蓮夜の姿を思い出し、風太郎の顔に自然と笑みが浮かぶ。

一花達が行方不明になってから余裕がなくなっていた自分の心を此処まで解きほぐしてくれたのは、偏に一花達を救う為、自分達の力になりたいと二つ返事で受け入れたアイツの底抜けたお人好しっぷりのおかげだ。

ならば自分もそれに応えるしかない。あの二人が安心してイレイザー達と戦えるように安全な場所まで急ぐ風太郎は、視界の端に映った木々が拓けた場所を見付けて五月に呼び掛ける。

「こつちだ五月！こつちからなら障害物も無しに先へ進める！」

「わ、わかりましたっ……！」

此処まで森の木々を避けながら悪路の斜面を下って先へ進んでた為に走りにくく、無駄に体力も浪費して限界が近かったが、拓けた場所へ出られれば少しはマシになれるかもしれない。

そんな希望を胸に五月も二乃と四葉を抱え直して気合を入れ直し、先へ進もうとするが、何故か先行する風太郎が急に立ち止まり彼の背中に思いつき頭をぶつけてしまった。

「あいつたあつ……！きゅ、急に何なんですか上杉君?！」

「……………嘘だろ、おいつ」

「……………へ?」

頭をぶつけて思わず怒鳴る五月だが、風太郎はそんな彼女の声が聞こえていないのか何故か真正面を向いたままその顔は悲痛に歪み、何やら予想外の事態を前に動揺する風太郎の視線の先を五月も目で追うと、彼女の顔も風太郎と同様に動揺と恐怖で歪んでしまふ。何故なら……



『——オラアアアツ！どーしたアツ！さつきまでの威勢の良さはどこ行つたんだよおつ?!』

『っ、ぐうっ……!!』

場所は戻り、廃工場ではクロスがイグニスレイザーの圧倒的なパワーに押されてしまい、凄まじい剛腕による一撃をどうにか左腕のドリルで相殺しようとするも力負けして吹き飛んでしまっていた。

そのまま壁を勢いよく突き破りながら工場の外へと追いやられながらも、咄嗟に大地に突き立てたドリルと両足で地面を削りながら何とか踏み留まるクロスに、壁の穴の向こうから飛び出したイグニスレイザーが拳を振りかざしながら飛び掛かり再び近接戦となるも、負傷した右腕をカバーしながらの戦いはやはり相当にキツイのか完全に劣勢に陥って苦戦を強いられてしまう。更に……

—ダンダンダンダンッ!!—

『——ハッ、どうした銃使いの装者あ！さつきから代わり映えしない戦い方ばかり、遂にネタ切れにでもなったってかつ?!』

「っ……んな訳ねえーだろっつっ!!」

同じく戦いの流れから工場の外へと場所を移し、嘲笑するシャークイレイザーの気に入らない顔面に向けて強気な口調と共に問答無用で二丁拳銃を素早く連続で発砲するクリス。

しかしそもそもクロスから受け取らなければならない『記号』を持たないクリスではイレイザーには傷一つ付けられず、シャークイレイザーは自身の肉体を貫通せず無常にも地面にバラけ落ちていく銃弾を見下ろし非情に嘲嗤つてみせた。

『はっはははははははっ！結局お前一人じゃ何も出来ないんだよっ！俺達に太刀打ちする術も無い、そんな無様を晒すしか出来ない癖によくも此処まで来られたもんだあつ！』

「………そいつはどうだろうな？」



『……は？』

『グルアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!』

劣勢に立たされている筈なのに、額から汗を伝らせながらも何故か笑みを絶やさず挑発的な発言をするクリスにシャークイレイザーが訝しげな反応を浮かべる中、廃工場の中から無数のダスト達が飛び出してクリスへ再び襲い掛かった。

しかしクリスも迫り来る無数のダスト達を前に慌てず、冷静且つ的確な動きで両手の二丁拳銃を乱れ打ち、ダスト達の頭や足を次々と撃ち抜いて動きを鈍らせていくが、やはりレイザーと同じ性質を持つダスト達も撃ち抜かれた箇所から徐々に再生し絶え間なくクリスへと襲い掛かり、そんなクリスの奮闘にシャークイレイザーも馬鹿にするように笑いながら両腕から生えた刃にエネルギーを溜めていく。

『幾ら強がろうが結局は同じだ……！お前みたいな力のない奴が、俺に敵う訳がないだろオツ!!』



両腕から生えた刃を振り翳しながら馬鹿正直に正面から迫るシャーケイレイザーを見てクリスはほくそ笑む。

クロスからの『記号』がなければレイザーやダストを傷付けられない事は、今まで  
の戦いで散々思い知った。しかしだからと言って戦いようがない訳ではない。

レイザーとダストは同じ性質を持つ者同士。であれば、もし仮に互いの攻撃で傷付け合わせればダメージも通るのではないだろうか。

実践も実例もなかった為はその方法を思い付いても実戦で試す他なかったのだが、予想通りレイザーの攻撃でダストは傷付き倒す事が出来た。

それが分かりさえすれば、後は同士討ちを狙った立ち回りで敵を翻弄してやればいいだけの話だと、クリスはシャーケイレイザーの斬撃に近接銃撃で応戦しながら、敵の攻撃が繰り出される度に近くのダスト達を盾代わりにする事で防ぎつつ反撃し、それを繰り返し続ける事で少しずつながらもダストの数を徐々に減らし始めていた。

『……ッ！アイツ、完全に向こうのペースに吞まれてるじゃねーか……！』

『……どうやらまた人選に恵まれなかったようだな。前回の響に関する記憶の改竄の時といい、お前は人を従えるに足る器ではないんじゃないのか？』

『……言ってくれるじゃねえかよ』

それに関しては本人も自覚している部分があるのか、イグニスレイザーはクロスの煽りにしか聞こえない台詞に憤るところか冷静にそう返し、無言のままクロスのだリルで傷付けられた右肩の傷を片手で軽く払った。

『しかし、テメエも難儀な性格をしてるもんだ。記憶を失って知らねえ世界に一人放り出されて、自分の事もなんにも分かつちやいねえ癖にまた他所の世界に跳ばされてまでテメエの事は後回しに、他人の為に身を削って戦う……そーゆー所も、何一つ変わってなくて鼻につくぜ』

『嫌味のつもりなのかどうかは知らないが、其処まで不快感を感じはしないから褒め言

葉として受け取っておこう。……それにしても、随分と余裕を残してんじゃないか。囚われてた人質に逃げられ、今もこうして俺達の足止めを食らってる。そちらに残された時間を考えれば、もう少し焦りを見せても可笑しくはないんじゃないのか？」

　　適当な会話で時間を稼ぎつつ、イグニスレイザーと一定の距離を保ちながら四肢の調子を確かめる。

　　右腕は未だに重度の怪我により不調。

　　両足はパワージャッキでキック力と共に耐久力を補強し、先程からイグニスレイザーの拳と打ち合ってる左腕もドリル型のナツクルを纏っている事で多少の痺れはありつつも、戦闘続行に支障はない。

　　これならまだ、風太郎と五月が人質を連れて街まで逃げ切る時間を稼げる。

　　それまでは何としてでもコイツ等を此処で足止めしてみせると、改めてそう気を引き締め直すと共にイグニスレイザーと対峙しながらドリルナツクルを纏う左腕を構え

直すクロスだが、そんなクロスとは対照的に、イグニスレイザーの方は何故だかまだ何処か余裕のある佇まいでヤレヤレと首を軽く横に振った。

『確かに、テメエらが替え玉を使ってこっちの裏をかいてくるなんて予想出来なかった。それに関しちや、まあ、こっち側の想像力が足りてなかったつてのはあるかもな』

『……………?』

そんなイグニスレイザーの反応に、クロスは仮面の下で怪訝に眉をしかめる。

……妙だ。最初の騙し討ちの際にはあからさまに動揺していた筈なのに、風太郎と五月が人質を連れて森へ逃げてから焦る所か今では泰然とした様子を浮かべている。

今のあちら側が立たされている状況に似つかわしくない、予想に反するその反応にクロスも内心言い知れぬ違和感を抱く中、其処へクリスが盾にしたダストの爆発の巻き添えを喰らって吹っ飛ばされたシャークイレイザーが地面を転がり、イグニスレイザーの下へと倒れ込んだ。

『ガアアアアアツ!!ぐつ、クツソツ……!あのガキイツ!』

『テメーもテメーで何遍同じ手食らわされてんだよ。いい加減学習したらどーなんだ』

もちつと冷静になれよと、頭に血が上るシャークイレイザーをイグニスイレイザーが宥める。その姿を見て尚更訝しげに目を細めるクロスの隣に、二体のイレイザーに二丁拳銃を突き付けながらクリスが並び立った。

「こっちの雑魚共はそれなりに片付いた!思ってたほど大した数でもなかったし、案外やれない事もなかったな」

『……………』

「……………?どうした?」

ダストを倒せる攻略法を掴んでから余裕を取り戻したクリスとは対照に、クロスは何

処か重い空気を漂わせながら顔を俯かせている。

そんなクロスの様子にクリスも異変を察して小首を傾げると、クロスは無言のまま顔を上げてイグニスレイザーを見据え、猜疑心を露わに告げる。

『お前……一体何を隠してる……？』

「……は……？」

クロスの不意の発言に、彼の隣に立つクリスが思わず呆気に取られた声を上げる。しかしその問いを受けた当の本人であるイグニスレイザーは、わざとらしく首を傾げた。

『急に何の話だよ？』

『惚けるな。お前とは既に何度も戦って、お前自身の人となりもそれなりに理解して来てるつもりだ。……今のお前が今までのお前らしからぬと、多少の違和感に気付ける程



度にはな』

『……………』

『よくよく考えればこの状況も可笑しなモノだ……風太郎達にまんまと逃げられたにも関わらず、其処にいるイレイザーどころかダストの一匹すらも追っ手として差し向けようとしな……あの二人に、何をする気だっ』

微かな焦り、怒気を込めて問い詰めるクロス。そんなクロスの様子からクリスも何かを察して思わずイグニスイレイザーを見れば、イグニスイレイザーは暫しの無言の後、深々と溜め息を吐き出しながら己の身体を指をなぞった。

『前にもチョロつと話した筈だよなあ？俺たち上級イレイザーは、際限なく屑共のダスト達を生み出せる。文字通り、この身から幾らでもだ。んで、お前らがわざわざこつちの要求を呑むにしろ、ただで素直に応える訳がねえだろうってのは大体予想が付いてたし、まんまと人質に逃げられちゃうかもしんねえなーって最悪の事態も予想はしててな……だからまあ、此処まで話せばちったあ察せるもんもあるんじゃねーのか？』

『?……………つ?!まさかつ!』



「——う、上杉君つ……………!」

「くつ……………!!」

大木を背に、救い出した四人を纏めて抱き締めて泣きそうな顔と声音の五月に呼び掛けられ、震える足を堪えてその辺で適当に拾った木刀程の大きさの木の棒を竹刀のように構え、彼女達を守るように立ち塞がる風太郎は僅かな恐怖が滲んだ瞳で目の前の光景を睨み付ける。其処には……



「——それじゃあ、初めからこっちは罠で……本命はあたし等から引き離れた後だったって事かよ?!」

クロスとイグニスイレイザーのやり取りから敵側の本命の策を今になって漸く理解し、クロスが焦りを露わに悲痛な面持ちでクロスの顔を見上げるが、彼女と同様に敵の真の狙いを早くに気付く事が出来なかったクロスは何も言い返せずただ無言で顔を俯かせる事しか出来ない中、イグニスイレイザーはそんな二人（特にクロスの）を取り乱しように悦に浸ったような笑みを浮かべた。

『お前らが来る前に森中に屑を相当ばら蒔いて、既に逃げ場は何処にもねえ筈だ。後は屑共が奴らを始末し、物語を改竄してから俺らのホームグラウンドになったこの物語の中でテメエ等を完全に始末してやる……それまでの間は、俺達が適当に遊んでやるよオツ!!』

『クツ……!!』

抜かったと、クロスは再び襲い掛かる二体のイレイザーの攻撃をクロスと共に迎撃し

て捌きながら思わず舌打ちしてしまう。

連中を足止めしていたと思いきや、逆に最初の演技に騙されてこちらが足止めされていた。

このままでは風太郎達の身が危ない。焦燥感に駆られながらも必死に思考を駆け巡らませ、何が一番この状況で最善な方法かを必死に考えた末、クロスはイグニスイレイザーを蹴り飛ばしながらクロスに切羽詰まった声で呼び掛けた。

『クリスっ!!俺が何とかコイツ等をこの場で足止めするっ!!お前はその隙に風太郎達の助けに向かってくれっ!!』

「ッ?!けど、それだとお前が……!」

『今風太郎達を助けられるのは俺達しかいないっ!!何より此処で彼等が殺されてこの物語が改竄されれば、本当に俺達の勝ち筋がなくなってしまうっ!!迷ってる時間はないんだっ、頼むっ!!』

「っ、けどよっ……!!」

『そう簡単にいくと思ってるのか?おいつ!』

今のクロスが怪我のせいで不調であることを誰よりも理解しているが為に、彼を一人置き去りにする事に躊躇してしまうクリスだが、そんな二人のやり取りを黙って聞いていたイグニスレイザーが大声でシャークレイザーに呼び掛ける。

次の瞬間、その一声だけで彼が言わんとしている事を察したシャークレイザーはクロスからの頼みに戸惑って動きが鈍るクリスを両足で蹴り飛ばしながらその勢いで後方へと跳んでクルリと宙で回転し、そのまま地面の中へと吸い込まれるように沈んで姿を消してしまった。

「ッ?!消えやがった?!何処に……!」

『屑共だけに任せても、何があるか分かったもんじゃねえからなあ。……念には念を、っ

「てヤツだ」

『風太郎達のところかつ……!!クリスッ!!』

「~~~~ツ……!!!」

緊迫したクロスの声に、クリスも迷う素振りを見せる。しかしそれも一瞬で振り払い、二人に背を向けて森の中へ一気に駆け出した。

「お前も身の危険を感じたらすぐに逃げろよツ?!絶対に無茶すんなツ!!」

『オイオイ……んな簡単に行かせる訳ねえだろうがアああツ!!』

『Final Code x……clear!』

『それはこちらの台詞だアツ!!』

背中を向けて走り出すクリスを行かせまいとして、業火をその身に纏い、信じられない速さで飛び出したイグニスレイザーがクリスの背中に巨大な右腕を伸ばすが、EXCEED DRIVEを発動したクロスが超強化された速さで追い付くと共に横からその巨腕を蹴り上げて阻止する。

そしてそのまま後方へと一度下がったイグニスレイザーは全身から噴き出す炎の勢いを更に増しながら紅の閃光と化して動き出し、クロスも部分展開された装甲の隙間から橙色の輝きを放ちながら凄まじい速さで駆け出して橙色の閃光と化し、二つの閃光は耳を劈くような炸裂音と衝撃波を何度も発生させながら宙を舞い、常人の目では捉え切れない程のスピードで何度も激しくぶつかり合っていくのだった。



# 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）⑥（後）

『ガアアアアアアッ!!』

「グッ……?! づああああッ!!」

「う、上杉君っ!!」

クロスとイグニスレイザーが激闘を繰り広げるその一方、敵の策に掛かり、拓けた森の中で百を軽く超える数のダストの大群に囲まれた風太郎は木の棒を捨て鉢に振り回し、五月達に近付けまいと奮闘していた。

だが、幾ら知能も低く、動きも鈍いとは言えど相手は常軌を逸した化け物。

ただの生身の人間では敵う筈のないダストに棒切れ程度が通ずる筈もなく、上段から全力で振るわれた木の棒を肩に打ち込まれても動ずる様子もなく即座に乱雑に振るわれたダストの張り手で頭部を殴られ、風太郎の身体が簡単に横薙ぎに吹っ飛ばされてしまった。

その腕力は凄まじく、あまりの衝撃と威力に木の棒を手放してしまいながら痛々しい音と共に勢いよく地面を転がって吹っ飛ばされる風太郎の姿を見て、五月の悲痛な叫びが響き渡る。

『コオアアアアアッ……』

「ひっ……あ、あっ……！」

その声に誘われるように、他のダスト達がまるでゾンビのように鈍重な動きでワラワラと五月に迫り来る。

そんな恐ろしい光景を前に腰が抜けて立ち上がれない五月も、恐怖に染まった表情で目尻に涙を浮かべながら地面に両手を付いたまま後退りして今にも逃げ出したい衝動に駆られるが、後退りした左手の指先に触れた柔らかな感触……背後の太木に背を預けて気を失っている二乃の手と、彼女と同様に気絶する姉達の顔を見て、キュツと唇を強く結んだ。

（そう、だ……こ、こんな所で諦められないっ……せめて、皆だけでも……!!）

漸く救い出せた四人をこんな所で見捨てる訳にはいかない。逃げ出したい衝動を、恐怖を必死に押し殺しながら五月は彼女達を守るようにダスト達の前に出て震える両腕を広げ、そんな彼女に目掛けてダストの一体が徐に醜い右腕を振りかざして……

「——さ、せるかアアああああっ!!!」

『……ガウツ?!』

「……?!う、上杉君っ……?!」

その凶爪が五月に振り下ろされ掛けた寸前、ダストに殴り飛ばされた筈の風太郎が横から全力疾走からの体当たりを食らわせ、ダストを転倒させたのである。

その絶叫にも似た雄叫びを聞き五月が思わず目の前に視線を戻せば、先程と同様風太郎が五月達を庇うようにダスト達と対峙して背中を向けていたが、僅かに見える彼の顔の額からツーツ……と、夥しい量の赤い液体が滴り落ちているのが見えた。

「う、上杉君……そ、それ……！頭、血が……?!」

「ツ……いい、からっ……今は自分の事と、そいつ等を守る事だけ考えてろっ……!!」

青ざめた顔で声を震わせる五月に一喝する風太郎の声に、彼女を、自己を気に掛ける余裕など一切ない。

意識が朦朧とする。視界がボヤける。頭が麻痺でもしてるかのようにジンジンして痛みが止まない。いつそのままたま気を失ってしまったらこれ以上の苦痛を味わう事はな

いのだろうが、それだけは絶対に出来ない。

此処で自分が倒れば五月達の身が危険に晒される。彼女達を守れるのは今は自分しかないのだ。

先程ダストに殴られた頭から流る血を乱暴に拭い、気を抜けば激痛でふらつきそうになる両足をどうにか踏ん張らせる風太郎に向けてダスト達が一斉に襲い掛かった。

「ダメっ……!!逃げて上杉君っっ!!」

「っ……!!」

その光景を前に五月が堪らず悲痛な叫びを上げるが、風太郎は一步も引かず固く握り締めた拳を振りかぶり、こうなれば駄目元で精神でダスト達に殴り掛かろうとしたその時、突如ダスト達の頭上から無数の光の矢が豪雨の如く降り注いで異形達の頭を次々と撃ち貫いた。

「っ…………?!なん、だっ…………?」

——全身凶器でミサイルサーファアのターンだ！

残弾がゼロになるまでバレットのK i s sを！

「……………うた……………?」

「……………ッ！アレは……………!」

魑魅魍魎に迫られ、絶望の中で突如響き渡ったロック調の過激な少女の歌。

その歌に釣られて空を見上げ、驚きの声を上げる五月の視線を追い風太郎も上を見上

げると、其処には縦横無尽に空を器用に駆け回る巨大なミサイルの上に乗りながら、空からクロスボウを乱射しながら歌を紡ぐクリスの姿があった。

「昇天率100パーのヒットガール！」

ハート撃ち抜かれたいチエリーはWhere is?

Bang☆Bang☆yeeah!

『グアアウウッ！』

『ゴアアッ！』

「ッ……マジかよ……ミサイルに乗りながら歌うたって銃を撃ちまくるとか、さっきのシヨックで俺の頭が可笑しなもん見せてんのかっ……ぐっ……!!」

「……っ！う、上杉君っ、今はとにかくこっちにつ！」

まるでサーフボードにでも乗っているかのように大型ミサイルを器用に乗り回し、光





敵ーやつこーさんにも都合があるってんだアろう？

だけど得物をそつちも抜くってんなら、容赦しねええつ！（前にアイツが言つてた通り、イレイザーにノックバックが通るならコイツ等にも通じるツ！だつたらこのまま爆撃怒涛で足止めだアツ!!」

ミサイルを足に森道をショートカットしたのが幸いしたのか、先程風太郎達を追い掛けたシャークイレイザーは見たところ未だに追い付いていない。

ならば既に攻略法を把握してるダストだけが相手なら自分一人でどうとでもなる。このまま風太郎達が遠くまで逃げれる時間を稼げれば或いはと、弾幕の手を緩めずダストを一匹たりとも逃すまいとして唇から紡がれる歌にも自ずと力が増していくクリスだが、しかし……

何もない筈の地面の中から突如水色の巨大な斬撃波が打ち上がり、クリスが騎乗するミサイルを真下から真つ二つに斬り裂いてしまった。

「バキユンと放った銃弾―タマー、がアああああアツツ!!?? (真下からの攻撃ツ?!けど今のはダストのじゃねえ……!まさか……!)」

う。  
ミサイルが爆発する寸前でギリギリ飛び降りたクリスに、背後から凄まじい爆風が襲う。

それでもどうにか地上に上手く着地した瞬間、クリスの背後の地面から飛び出したシャークイレイザーが右腕の刃を振るって不意打ちを仕掛け、それに対しクリスも咄嗟に反応して振り向き様に両手のクロスボウを防御に用いて刃を受け止め、火花を撒き散らした。

「イレイザーツ……!!」

『邪魔をしてくれるな装者ツ!!』

「グツ……邪魔なのはテメーの方だアツ!!」

受け止めた相手の刃を両手のクロスボウで受け流しながら立ち位置を入れ替え、至近距離からクロスボウを放つクリス。

しかし、シャークレイザーも瞬時に上体を大きく後ろに反らして矢を回避し、そのまま地面へ水のように頭から潜り込んで再び姿をくらましたかと思いきや、地面の中から再度クリスに目掛けて水色の斬撃波を乱発し、それを見たクリスも慌ててバックステップで斬撃波を回避しながら思わず舌打ちしてしまう。

（クツソツ……!!地面に潜られたらあたしも流石に応戦しようがねえッ!!）

『コオアアアアアッ!!―ザシユウウツ!!―ギャツ?!』

奴に地面の中に潜られたままでは、襲い来る斬撃波が一体いつ、何処から飛び出してくるのか予想のしようがない。

四方の地面から次々と間断なく飛び出してくる無数の斬撃波を半ば直感頼りに避け続け、直撃しそうなれば考えもなく襲い掛かってきたダストを盾替わりにして凌ぐ



「きゃあああああッ!!」

「こ、今度はなんだッ……?!」

無数のダスト達が蔓延る戦場の中心に、突如何処からともなく何かが凄まじいスピードで落下して大爆発を巻き起こしたのだ。

その衝撃波はクリスやダスト達だけでなく、一花達を連れこの場を離れようとしていた風太郎や五月にまで襲い掛かり、忽ちに煙と粉塵が舞い上がって辺り一面が土埃に覆われてしまう。

やがて数秒で衝撃波も収まり、一同が慌てて今の爆発を起こした何かが落ちた落下地点に目を向けると、其処には……

『ぐつ……うつ……ツツ……!!!』

バチチイッ!と、舞い上がる煙の向こうで辛そうに起こそうとする全身の装甲の間から、明らかに危険だと一目で分かる火花を無数に撒き散らす戦士……身体中が傷と泥で薄汚れ、漆黒の左腕が内部の機械部分が剥き出しになる程ポロポロに変わり果てたクロスの痛ましい姿があつたのだった。

「く、黒月さんッ?!」

「アイツツ……?!」

「お、おいつ!お前つ……!——ズバアアアッ!!——くつ?!」

悲惨な姿になって何処からともなく現れたクロスを見て、五月と風太郎が驚愕と共に息を拒んで絶句する。

そんな二人と同様に顔色を変えたクロスが慌ててクロスの下に向かおうとするも、そんな彼女を阻むように地面から再びシャーケイレイザーの斬撃波が飛び出す。

そして、どうにか上体だけ起こしたものの肩で苦しげに呼吸を繰り返すクロスの近くに今度は空から人型サイズの球状の火の玉が落下し、中から豪快に巨大な右腕を振って炎を払い除けたイグニスレイザーが堂々と姿を現した。

『——なるほどなあ。その強化形態の活動限界時間は五分つてとこか？ソイツを過ぎて酷使し続ければ、それだけデカイ反動が返ってきてボロボロになるって訳か……今のテメエみてーによ』

『……ぜえツ……ぜえツ……ぜえツ……ぜえツ……ぜえツ……！』

飄々とした口調で左手で指差すイグニスレイザーに向けて、傷付いた身体……EXCEED DRIVEの稼動限界を超えてなお、戦闘を続けた反動によって足がふらつきながらもどうにか立ち上がったクロスがボロボロの左腕で拳を握って構えるが、イグ

ニスレイザーはそんなクロスの姿に鼻を鳴らし笑い混じりに言葉を投げ放つ。

『呆れたもんだ。そんなナリになってまでまだ戦おうつてのか？ 勝ち筋なんざ、とうの昔に詰んでるつてのによ』

『ツ……これで勝ったつもりでいるなら、相当おめでたい頭をしているようだ……こうしてまだ息をしている以上、俺がお前達に負けを認める事は決してない……！』

『ハッ、おめでたいのはお互い様だろ？……右腕もロクに使えねえそんな状態で、俺とどうやって渡り合うつもりだったんだ、お前？』

『……ッ！』

イグニスレイザーに負傷した右腕を指摘され、クロスが仮面の下で目を見開いて僅かに息を拒む。

その仕草を見逃さず、イグニスレイザーは悠然とした足取りでクロスへと近付きな



がら言葉を続ける。

『そんだけ右腕を庇う戦い方を続けていりやどんな馬鹿でも気付くだろうよ。そもそも、今のテメエにその傷を短期間で治せる手段がある筈もねえ……今まで気付かないフリしながらわざわざお前の無駄な努力に付き合ってたんだ、少しぐらいこっちの厚意に感謝してくれてもいいだろ？』

『……ああ、そうだな……おかげでお前の悪趣味さを改めて認識したよ……礼代わりに反吐でも吐いてお前のその面に浴びせ掛けてやりたい気分だつ……』

自分が右腕を使えないのを早くに知っていないながら、その弱点を突く事すらしなかったのはその必要もなかった。——要するにそんな真似をしなくてもこちらを組み伏せるのは容易いと、向こうは考えていたという訳だ。

何処までもこちらを格下としか見ていないイグニスレイザーの傲慢さに内心憤り憎まれ口が止まらないクロスだが、イグニスレイザーはそんなクロスの悔しげな反応にこれ見よがしにとほくそ笑んで見せながら、拳を握った右手に炎を纏う。



『今だクリスッ！風太郎達をッ！』

「ッ……!!あ、ああッ！」

イグニスイレイザーの強力な技を逆に利用し、今のでダスト達の多数を纏めて始末した上に、舞い上がる黒煙により敵の視界も同時に奪った。

この際に乗じて風太郎達を逃せと、少ない言葉で声を張り上げるクロスの意図を察したクリスはすぐさま踵を返して走り出し、風太郎達に下へ急ぐが……

『甘えんだよ……取り押さえろッ!!』

—ザパアアアアアッ!!—

『ウルアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!』

「つつつ?!?!—ガギイイイイッ!!—ぐあああううつ!!」

『?!』

「ゆ、雪音さんッ!!」

そんなクリスの死角となる地面からシャークイレイザーがいきなり飛び出し、両腕の刃を振りかざしてクリスに襲い掛かったのだ。

不意を突かれたその一撃を前にクリスも反射的に両腕を十字に組んで防御態勢を取り、攻撃を受け止めようとするも咄嗟の事で踏ん張る事が出来ずに派手に吹っ飛ばされてしまい、シャークイレイザーはそのまま地面に倒れたクリスの上に馬乗りになりながらその首級に目掛けてすかさず両腕の刃を再度振りかざす。

それを目にしたクリスも両手のクロスボウでシャークイレイザーの刃を紙一重で受け止めるが、刃はクリスの首筋ギリギリにまで迫り、彼女の首に徐々に刃が食い込んで赤い一雫が流れ落ちていく。

『いい加減にしつこいんだよお前等ア……!!とつとと消えろオオオオオオオオオオツ!!!』

「ぐっ……ぐううううっ……!!!」

『クリスウツ!!!』

少しずつシャークイレイザーに力負けし、刃が首にめり込んで苦悶に顔を歪めるクリスの下へクロスが必死の形相で助けに向かう。が、そんなクロスの前にイグニスイレイザーが巨大な右腕全体に炎を纏いながら立ち塞がった。

『言つたろーが、今度はテメエが大事なモン奪われるのを見る側だつてよオツツ!!!』

『つつっ!!!』

劫火を纏った巨腕を全力で振り抜くイグニスイレイザーの拳が目前から迫る。しかしクロスはそれを前にしても足を緩める所か逆に加速して真正面からイグニスイレイザーへ呐喊し、炎を纏った拳が顔に直撃する寸前、





ザーの顔面に全力で突き刺さった。

そのまままるでボールのように勢いよくまで吹き飛んだシャークイレイザーは横滑りに地面に叩き付けられて土埃を巻き上げていき、それを見届けたクロスは薄く息を吐き出した後、其処でガクリツと糸が切れた人形のようにその場に膝を着きながら右腕を抑えて蹲つてしまい、そんなクロスを見てクリスが慌てて傍へ駆け寄る。

「お、おいつ！お前、腕が……?!」

『ツ……俺、のことはいいっ……！それより、風太郎達を早く此処から——！』

『シャアアアアアツ!!』

『ガアアアアアツ!!』

悲痛な面持ちで自分を心配するように顔を覗き込むクリスに、今はとにかく風太郎達を早くこの場から離れさせるように促すクロスだが、そんな二人に生き残った他のダス



ト達が奇声を発しながら一斉に襲い掛かった。

『チイツ……！』と、思わず忌々しげに舌打ちしながらクロスは瞬時に左手に出現させたスパークスラッシュの一振りを振りかざしながら痛みを止まない身体に鞭を打って立ち上がり、背後から飛び掛かってきた四体のダストを纏めて切り裂くが、今度は斜め右からダスト達が一斉に襲い掛かる。

刃を振り抜いた体勢から対応が遅れてしまうが、その隙をカバーするようにクリスがすぐさまクロスボウを乱れ撃ちダスト達の頭を撃ち抜いて怯ませ、立て続けに腰部のアーマーから無数の弾頭を乱射して遠方から迫るダスト達を纏めて吹っ飛ばして遠ざけ、その隙にクロスが次々と襲い来るダスト達の首を素早く一閃して纏めて跳ね飛ばしていく。

……しかし、そんな二人が必死に奮闘する中、クロスに殴り飛ばされたイグニスレイザーが土煙の中で僅かに身をふらつかせながら徐に起き上がり、掌を上、右手の上に小型の炎の塊を生み出していく。

『……やってくれるじゃねえかよ……ああ、わかったよ……そんなに死に急ぎてえってんなら、加減はもう一切なしだア……!!!!』

ゴウウウウウツツ!!!と、憤りに満ちたイグニスレイザーの感情に呼応するかのよううに小型の炎の塊が一瞬!の内に大きく膨れ上がる。

大きく、大きく、まだ大きく。

炎の塊が巨大になるに連れて、イグニスレイザーを中心に全方位にまるで洪水の如く勢いで劫火が地面を駆け走り、周囲の木々に炎が燃え移る程の凄まじい熱が戦場を呑み込み、支配してしまう。

「あ、熱っ……!!?」

「こ、今度は何だつてんだっ!!?」

「あれ、はっ……?!おいつ!!!」

『…………ツ!!』

無数のダスト達を相手にどうか奮闘し持ち堪えていたクロスとクリスも、その見覚えのある風船のように未だ膨らみ巨大化し続けていくイグニスレイザーの生み出す火炎弾を目にし、瞬時に直感する。

——アレは駄目だ。撃たれば自分達は勿論の事、背後にいる風太郎達も決して助からない。

この世界に跳ばされる前に奴と戦った時にも感じた圧倒的な力のプレッシャーと殺気を前に、無意識にそう悟って額から一筋の冷や汗を流すクリスに切羽詰まった声で呼び掛けられたクロスも慌てて風太郎達とイグニスレイザーを交互に見遣る中、限界にまで膨れ上がった巨大な炎の塊……直径にして約30メートル程はあるであろう火炎弾を頭上に掲げ、イグニスレイザーが全力で吼える。

『今度は対策もソイツを考える時間も与えやしねえぞつ…………!!この物語の主役とヒロイ



「アンタ、何を——!!?」

今の自分には風太郎達を守りながらアレを凌ぎ切る術はない。

ならば後は、この身を盾に彼らを守るしか手はないと、クロスの形態の中でも防御力に長けたタイププラスターにタイププチェンジしながら風太郎達を守るように両腕を広げ、迫り来る一撃を背中で受け止めるべく歯を食いしばるクロスだが、しかし……

——そんなクロス達の前に瞬時に飛び出したクリスが両腕を十字に組みながらスカート状リアーマー内部に格納された多数のエネルギーリフレクタービットを射出・展開。目前に張った障壁でイグニスレイザーの巨大な火炎弾を真っ向から受け止めた。

『ッ?! クリスつつっ!!?』



葉を紡ぐ。

I g n i s n ō n e x t i n g u i t u r i g n e .

火は火によって消えない

A e q u a t o m n e s c i n i s .

灰は全ての人々を同じにする

『——今度こそ終わりだ……全員仲良く灰塵と消えろオオおおおおおッッッ!!!!』

『ツツツ!!!!』

僅か二節の詠唱を口にすると共に、イグニスレイザーの左手の中に形成された小型のエネルギー弾に極大の赤色のエネルギーが螺旋を描きながら収束して力を増している、クリスが受け止める巨大な火炎弾に目掛けて全力で投げ放つと、エネルギー弾はそのまま巨大な火炎弾の中へ吸い込まれるように取り込まれる。

瞬間、巨大な火炎弾が内部から無数の閃光が放たれてまともに直視すら出来ない程の眩い白い光が周囲一帯に広がっていき、その光景を目にしたクリスは驚愕で目を剥きながらもギアの出力全てをリフレクターへと急いで回し、クロスもすぐさま風太郎と五月を抱えながら一花達の上に覆い被さった瞬間……

巨大な火炎弾が耳の鼓膜を突き破る程のとてつもない爆音と共に破裂し、半径数キロの郊外の森がドーム状の大爆発に呑み込まれてしまったのだった——。





まるで地獄の一端が顕現されたかのようなそんな凄惨な光景が何処までも広がる中、いつの間にか気を失っていた蓮夜が鼻を突く焦げ付いた匂いに誘われるように重い瞼を開けて徐々に意識を覚醒させていき、気怠げに地に伏せていた上半身を徐に起こしていく。

「ツ……………オレ、は……………何が、どうなつてつ……………う？」

意識を取り戻したばかりで頭がボンヤリとしたまま、何が起きたのか状況確認の為に辺りを見回していく。

周囲は何処までも火の海に包まれており、黒煙が立ち込めてまともに呼吸をするのも難しい。

そんな光景を前に蓮夜が辺りに充満する黒煙をふと吸い込んでしまい、思わず口を押えて咳き込む中、その時、視界の端で何かが僅かに蠢くのが見えた。思わずそちらに視線を向けると、其処には蓮夜と同じように全身灰で黒ずみボロボロの姿で倒れる青年達

……風太郎と五月、そして一花達の姿があった。

「っ?!ふう、太郎っ……!中野っ!」

倒れる風太郎達の変わり果てた姿を目にし、覚醒したばかりだった蓮夜の意識も驚愕のあまり一瞬でハッキリと目覚め、同時に其処で漸く、彼等も先のイグニスレイザーの攻撃の巻き添えを喰らってしまった事を思い出した。

一目見た瞬間、彼らを死体と一瞬見間違った蓮夜は慌てて身体を引きずりながら風太郎と五月の下へ近付こうとするが、その瞬間身体に凄まじい激痛が走る。

あまりの激痛に思わず顔を歪めながら自身の身体を見下ろすと、見たところ大した損傷はしてないようだが身体の至る所から流血しており、無理に動こうとすると痛みが走る。

しかし、今は自分の身体を気に掛けてる場合なんかじゃない。痛む身体に鞭を打って引きずりながら二人の下へ近付いた蓮夜は風太郎と五月の肩を掴みながら揺さぶり、必

死に何度も呼び掛けていく。

「おい、おい……！二人とも……！しっかりとろっ！頼むから目を開けてくれ……！中野、風太郎っ！」

「……………っ……………うっ……………」

「ううっ……………」

(っ……………！まだ息はある……………！)

蓮夜に肩を激しく揺さぶられ、風太郎と五月は顔を歪めて微かに声を漏らし、反応を見せた。

意識こそまだ戻らないが、二人から返ってきたその反応でまだ息があるのを確認した蓮夜は次に二人の身体を診て特別酷い傷がないかを確かめると、今度はすぐ傍に倒れる一花達の安否を確かめる。

彼女達一人一人の口元に耳を近付ければ微かながらだが規則正しい呼吸音が聞こえ、念の為、手首に人差し指と中指を合わせ当てれば脈があるのも感じ取れる。外見も多少の傷はあれど、大した外傷などは何処にも見当たらない。

（っ……良かった……軽い軽傷こそしてるが犠牲者は誰もいない……こんな奇跡、本当にあるものなんだな……）

正直あの炎に飲み込まれる一瞬、あんな規格外な一撃からこの身一つで風太郎達を守り切るのとは不可能かもしれないとも思ってしまった。

最悪誰かが死ぬか、もし仮に命を捨てたとしても身体の一部が吹き飛んでいても可笑しくはなかった。何せ、奴に散々痛め付けられてきた自分でさえあの一瞬で死を覚悟した程だ。

なのに誰一人、こうして何も欠ける事なく自分を含めて全員が助かったのは正に奇跡と呼んでも過言はな——

(…………全員…………?いや、待て…………クリス…………クリスはどうしたっ…………?!)

風太郎達の無事を確認して安心感から一瞬気を抜きそうになるも、其処でクリスの姿がない事に気付いた蓮夜は慌てて周りを見渡し、クリスを探す。

しかし周囲一带には自分達以外の人影など一切見当たらず、蓮夜は痛みの走る身体を抑えながら立ち上がりクリスを探して走り出した。

(っ、不味いっ…………あの時クリスは俺達を庇って、最前線で奴の攻撃を受け止めてたっ…………俺達全員が五体満足だったとは言え、アイツもそうだとはっ…………!)

自分や風太郎達がこの程度の傷で済んだのも、恐らくクリスがあの時咄嗟にリフレクターを張って身を呈して守ってくれたおかげだ。しかしその代わり、最前線であんな規格外な一撃を直接受け止めたクリスのダメージは到底計り知れない。

もしかしたら最悪…………などと、嫌な想像が一瞬過ぎってしまう頭を振って払い退け、

逸る気持ちに駆られるまま蓮夜が周囲を忙しくなく見渡しながら必死にクリスを探し、あちこちで燃え盛る炎に遮られるせいで視界もままならない一帯を駆け回る中……

「……………、う……………」

「?!クリスつ…………?!」

たまたま顔を向けた視線の先、黒焦げた大木が幾つも無造作に転がっている木々の間から、僅かに人の手らしき物が見えた。

それに気付いた蓮夜が足を止めて目を凝らすと、木々の間に腕を力無く投げ出して地に伏せる少女……髪や服が灰で黒ずみ、頭から血を流して倒れるクリスの姿を発見し、一目散に彼女の下へと駆け寄りながらクリスの身体を抱き起こしていく。

「クリスっ……！クリスっ！しっかりしろっ、俺の声が聞こえるか……!?クリスっ!!」  
「……………、っ……………うっ……………っ……………」

必死に声を掛ける蓮夜に何度も肩を揺さぶられ、クリスの瞼が気だるげにゆっくりと開かれていく。そして何度か重い瞬きを繰り返し、周りを確かめるように視線を僅かに左右に向けると、自分の顔を覗き込む蓮夜に気付き、徐に顔を上げながら呆然とした表情を浮かべる。

「っ……………?お、まえ……………なん、で……………?」

「気が付いたか……！動けるか?!何処か酷く痛んだりっ、身体に異常を感じたりはっ……………?!」

「?……………あ……………」



意識を取り戻したばかりで頭が状況に追いついていないのか、何処か虚ろな目を浮かべていたクリスの意識が蓮夜の忙しない声で徐々に現実へと引き戻されていき、同時にここに至るまでの記憶も鮮明に思い出していく内に表情が険しくなっていく。

「そうだ……………あた、しは……………っ……………お、おい、アイツらはっ……………？全員、無事なのかっ……………？」

「ああ、皆無事だ……………！お前が咄嗟に俺達を庇ってくれたおかげで……………」

「……………そう、か……………ハハッ……………なら、あたしも……………少しは役には立てた、ってワケかっ……………」

「っ……………お前っ……………」

まともに喋るのも億劫なほど酷い傷を負ってるのか、腕の中でたどたどしい口調でそう言いながら力無くクシャクシャに笑うクリスの顔を見下ろし、蓮夜は悲痛げに眉を顰めてしまう。

彼女の姿は今、右頭部から額に掛けて流れる血が入った右目は赤く染まり、黒焦げて破れた服も所々血が滲み、体中はボロボロで腕や足にも火傷が多く見られる。

恐らくリフレクターを全力で張ったおかげでまだこの程度で済んだのだろうか、もしも一歩間違えていればあの炎にその身を焼かれて本当に死んでいたかもしれない。あの攻撃はそれだけの威力を誇るモノであつたと、周囲の惨状が何よりもソレを物語っている。

なのに、こんな痛ましい姿になりながら尚も他人の身を案じて安堵する彼女に対し、蓮夜も内から沸き上がる憤りの感情のままに思わず口を開き掛けるが、同時に今の彼女の姿が以前に似たような無茶をし、死に体同然の身体で無謀な真似をして憤慨した彼女に激しく叱責された時の自分の姿と重ね合わせた途端に何も言えなくなり、口を閉ざして力なく俯いてしまう。

「……情けない……こんな時に……こんな風になって、漸くお前の気持ちを理解出来るようになるなんてな……」

「…………え…………？」

微かに眉を顰め、自嘲気味に笑いながらそんな呟きを漏らす蓮夜。クリスはその言葉の意図が読めず怪訝な表情を浮かべて思わず聞き返してしまいが、その時……

『——いい加減しぶてえにも程があんだろ……死に際ぐらいせめて潔く出来ねえのかよ、お前らは？』

「…………ツ！」

何処からともなく響き渡る、心底うんざりとしたような男の声。

苛立ちを含んだその声に釣られて二人が声が聞こえてきた正面に目を向けると、其処には黒煙の向こうからイグニスイレイザーが悠然とした足取りで姿を現し、更にその足元の地面からはシャークイレイザーが飛び出し、イグニスイレイザーの隣に立ち並んだ。

「つ……アイツ、らっ……ぐっ!？」

「クリスっ!」

姿を現した二体のイレイザーを目にした途端、クリスは鋭い目付きで蓮夜の腕の中から抜け出ながらペンダントを手に再びギアを纏おうとするも、全身を駆け巡った激痛に苛まれて両膝を着き、身体から滴り落ちた血の点々で地面を赤く染めてしまう。

それを見て蓮夜も血相を変え慌ててクリスに駆け寄り身体を支えるが、イグニスイレイザーはその体たらくを見て鼻を軽く鳴らした。

『いや、案外そうでもねえか……命こそ運良く拾いはしたものの、その女はもう使い物にはならねえし、テメエ自身は右腕もロクに使えない。加えて後ろのお荷物を抱えながら

となりや状況は既に絶望的だ。……今度こそ詰みだつて、とつくに理解してんじゃねーのか?』

「ッ……」

「……………」

冷淡にそう告げるイグニスイレイザーに、クリスは今の自分の有り様を指摘されて何も言い返す事が出来ず唇を噛み締め、蓮夜はクリスを労りながらイグニスイレイザー達から顔を逸らしたまま彼ら側からは表情は読めず、一言も喋らない。

その無言を肯定と受け取ったイグニスイレイザーはハッ、とほくそ笑みながら自らの身体から再び無数のダストを次々と生み出していき、自身とシャークイレイザーの周囲に蔓延らせていく。

『反してこっちの手勢に際限はない、文字通りな。圧倒的な戦力のこっちと違って、そっちは状況も最悪、S・O・N・Gの連中もいなくて孤立無援……そら、そんなお前等



『ツオラアアアアッ!!』

『ツ！ーガギイイイイツ!!ーがああッ!!ぐうっ……!!』

雪崩込むように迫るダストの数々、背後のクリス達ばかりに気を取られたクロスの死角からシャーケイレイザーが奇襲を仕掛けて飛び掛かり、両腕の刃で切り裂かれてしま

う。  
胸の装甲から火花を散らして怯むクロス。それを好機と踏んでダスト達が一斉に様々な方向からクロスへと襲い掛かるが、それでもクロスは負けじと捨て鉢気味に放った蒼光を纏った後ろ回し蹴りでダスト達を纏めて蹴り払い、他のダスト達を牽制するも、シャーケイレイザーはそれに臆する事なく追撃を仕掛けて両腕の刃をがむしやらに振るい、クロスへと襲い掛かっていく。

『ハツハアツ！さつきに比べて随分動きが鈍いじゃないかッ！お前もそろそろ終わりだなあッ!!』

『ツ……勝手に終わらせてくれるなっ!』

耳障りな笑い声と共に両腕の刃で立て続けに切り掛かるシャーケイレイザーの斬撃を紙一重で回避しながら後退すると、クロスは後ろから爪で不意打ちを仕掛けようとしたダストの奇襲を身を翻して避けながらそのままダストの背後に回り込み、その背中を蹴り飛ばしてシャーケイレイザーに思いつきりダストをぶつけ合わせ、二体纏めて転倒させていった。

『うおおうつ?!こ、のっ……!退けよノロマアツ!!』

『トドメだっ……!』

自分の上に覆い被さるダストの頭や背中をバシバシと殴って一刻も早く起き上がるうとするシャーケイレイザー。その隙にクロスはバツクルから左腕に掛けてアンダースーツ上に伸びたラインに蒼い光を走らせ、左拳にエネルギーを凝縮させながらシャーケイレイザー達に向かって勢いを付けて飛び掛かり、未だもたついて動けない二体を纏めて始末しようと空中で左腕を振りかぶるが、



『——おっと、其処までだ』

『……ツ?!なっ……!!』

そんなクロスの眼前に、全身に炎を身に纏ったイグニスレイザーが一瞬で移動し、立ち塞がってしまったのだ。

驚愕と共に慌てて身を引こうとするクロスだが、イグニスレイザーはそうはさすまいと素早く左腕を伸ばしてクロスの首を掴んで締め上げ、更に巨大な右手の掌に小さな炎のエネルギー弾を形成し、クロスの胸に押し当て、

『プレゼントだ、受け取れやアツツ!!』

『——ツツ!!!』

ドオオオオオツツツツツツツツツと、凄まじい衝撃音と共にクロスの胸に押し当てられた炎の

エネルギー弾が爆発し、超巨大なエネルギー波となってクロスの姿を掻き消す程の勢いで飲み込んでしまったのだった。

そして、徐々に勢いが失われていくエネルギー波の中から全身が焼き焦げた装甲から幾つもの白煙を立ち登らせながらクロスが吹っ飛ばされて地面に叩き付けられ、そのままクリスの下にまで地面を何度も勢いよく転がって倒れ込み、変身も強制解除されて蓮夜の姿へと戻ってしまった。

「お、おいつつ!!!」

「うつ……………ツ……………」

自分の下にまで吹き飛ばされてきた蓮夜を見て、漸く僅かにだけ身体を動かせるようになったクロスが覚束ない足をもつれさせながら慌てて駆け寄り、蓮夜の身体を抱き起こした瞬間、ギョツとなる。

あの大火力のエネルギー波の直撃を至近距離からまともに受けたせいで全身に新た

な火傷を負い、体中に巻かっていた包帯は右腕だけを辛うじて残して全て焼き切れ、剥き出しになった怪我から傷が開き、夥しい量の血が流れ出てしまっている。

……とてもじゃないが、これ以上戦い続けられる状態でないのは一目瞭然だ。一目でそれが理解出来てしまう程の重症を負った蓮夜の姿を見てクリスも悲痛げに顔を歪める中、地上に片膝を着いて着地したイグニスレイザーは徐に身を起こし、クリスに抱き抱えられる蓮夜の醜態を見て鼻で笑ってみせた。

『無様なもんだ。そんな連中、とつと見捨てていりやそんなザマになる事もなかったらうによ』

「つ………テメエツ………!!」

『おいおい、なに睨み効かせてくれたんだ?………そもそも、そいつがまともに戦えなくなっただけは元はテメエのせいだって事、もう忘れちまってんじやねーだらうな?』

「…………ツ!」

蓮夜の今の姿をみつともないと嘲るイグニスレイザーを鋭い目付きで睨むクリスだが、その言葉に思わず目を剥き、顔を俯かせて自分の腕の中の蓮夜を悲痛げに見下ろしてしまいう中、イグニスレイザーは何も言い返せず言い淀むクリスを見て鼻で笑いながら容赦なく言葉を続けていく。

『あくまで俺の推測だが、あの時のためえの向こう見ずな様子からして、お前とそいつの間に何かしらの確執らしきもんがあつたんだろうってのは俺もある程度想像は付いてた。そんなお前が今になってソイツと仲良しこよししてらるって事は、その確執自体はそつちで解消したんだろうな。……が、それでテメエの失態が完全に消え去つた訳でもねえ』

そう言つて、イグニスレイザーは徐に左腕を上げて蓮夜を抱えるクリスを指差す。

『現に今、そいつはロクに戦えませずお前らなんかを頼らざるを得ない状況に陥り、それも上手くは行かず返り討ちに遭つてこの有様だ……要するにお前つていう余計な足手纏いじゃなく、此処にいたのが記号の力を手にした立花響だったんなら、俺に殺される

にしても、もうちっとマシな結果にはなつてただらうってハナシだ』

「ツ……………くっ……………」

この場にいたのがクリスではなく響だったなら、今よりきつとマシな結果になつていたかもしれない。傍から聞く分にはただの言い掛かりの戯れ言にしか聞こえない引き合いではないが、それを誰よりも自分自身で理解してしまっているクリスはそのようなグニスレイザーの心無き言葉を真に受け止めて何も言い返す事が出来ず、悔しげに瞼を伏せて己の無力感に苛まれてしまふが、その時……

「……………取り消せ……………」

「……………?!……………」

『……………ん……………』

そんなイグニスレイザーに反論したのは、クリスの腕の中に抱かれる蓮夜だった。

静かな声音で、しかし何処か怒りを滲ませたその言葉に傍らのクリスも呆気に取られるだけでなく、イグニスレイザーも怪訝な反応を返す中、蓮夜は気怠げにクリスの腕の中から立ち上がり、足元をふらつかせながらもイグニスレイザーをまつすぐ睨み付ける。

「取り消せ、と……そう言ったんだっ……何も知らないお前が、クリスを侮辱するんじゃないっ」

『……ハッ。何を急に言い出すかと思えば、俺は事実しか言っていないつもりだけ？ 実際お前はその怪我のせいで俺に一切優勢を取れず、此処まで追い込まれた。そうなった全てのきっかけは、身の程を弁えなかった其処の女がテメエの足を引っ張ったせいだろうがよ？』

それはお前自身も分かってんだろ？ と指摘し、イグニスレイザーは顔を俯かせるク

リスに視線を向けて容赦のない言葉を浴びせ掛け続ける。

そして蓮夜は腕を抑えながらそんなクリスを一瞥すると、正面に顔を向け、脛を伏せる。

「そうだな……この怪我さえなければ、もつと上手くお前達を相手に立ち回る事だつて出来ていたかもしれない……それに関しては完全に、こちらの過失ではある……」

「っ……」

こんな怪我さえなければ奴等を相手に遅れを取る事もきつとなかった。当の本人である蓮夜の口から出たその言葉にクリスの表情は更に陰り、イグニスレイザーも僅かな笑みを漏らす中、蓮夜はゆつくりと脛を開けた瞳で血に濡れた前髪越しにイグニスレイザー達を再び睨み付け、

「あの時、俺達は間違えた……クリスは独断で危険な戦場に飛び入って無茶をし、俺はそんな彼女の力を信じ切る事が出来ずに、逆に危険な目に遭わせてしまった……それは確

かに、”俺達の失敗だった”

『……何？』

「……！」

思わぬ言葉に、イグニスレイザーは怪訝に眉を顰め、クリスは驚きから弾かれたように顔を上げる。そんな両者の視線の板挟みになりながら、蓮夜は尚も力強く言葉を紡いでいく。

「お前も此処まで、幾度となく彼女達と戦って目にしてきた筈だ。記号の力がなくても、クリスはお前達を相手に一步も退かず渡り合った……その力を早くに、この世界に飛ばされる前の戦いの時点で俺が信じる事が出来たのなら、お前に遅れを取る事も決してなかった筈だ」

『……なんだそりゃ。その言い方だとまるで、何か一つでも違っていたら俺に勝ててたみたいに聞こえるじゃねえか』



「そう言ってるんだ。あの時、俺とクリスが組んで万全な状態だったなら、お前を相手取ったとしても勝算はあったとな」

『はあ？何を根拠にそんなホラ吹きを——』

「現に彼女はたった一人で、俺達を本気で殺そうとしたお前の一撃を防いでみせたぞ……お前達がフィクションと見下す彼女が、たった一人でだ」

『……………』

小馬鹿にするように笑うイグニスイレイザーに対し、表情を一切変える事なく強気な発言を返す蓮夜。それを聞いてイグニスイレイザーも思わず笑みを消してしまう中、蓮夜はクリスと、彼女の背後の風太郎達に交互に視線を向けていく。

「クリスだけじゃない。中野は自分の家族を守る為に、お前達に恐れて逃げ出す事もなく自分の姉達を守り抜いた……風太郎は己が傷付く事も顧みずに、勝てないと知ってい

ながらそれでも中野達を守る為にお前達に立ち向かった……」

そう、自分やクリスだけじゃない。彼等の協力がなければ囚われの身の一花達を救出す方法も思い付く事もなく、二人がギリギリまで踏ん張ってくれていなければ自分達が駆け付ける前に全てが手遅れになっていたかもしれない。

クロスやシンフォギアの力もなく、か弱い人の身でありながら大切な人達の為に身を張り、必死に戦った風太郎と五月の顔をジツと見つめると、蓮夜は再びイグニスイレイザーを見据え、鋭い目付きで睨み付ける。

「そしてクリスはそんな彼等を……俺を全力で庇い、その身を呈してこの命を繋いでくれた……誰も犠牲にせず、誰も死なせなかった……！俺一人では決して叶わなかった、此処にいる全員の頑張りがあったからこの結果がある……！今の俺がある！その事実決して変わりはないんだ……！」

奴は蓮夜の力を自分よりも下と見下しながらも、蓮夜だけを警戒してイレイザーと戦う術のないクリス達を大した脅威ではないと捨て置いていたが、それは奴の認識不足

だ。

もしも本当に蓮夜一人だったのなら、そもそも此処まで辿り着く事も叶わず、気を逸らせて無茶を通した結果、もつと早くに奴の手によって始末されていたかもしれない。

そうならず済んだのも、他ならぬクリスや風太郎達が間違いを正し、力を貸して支えてくれたおかげなのだ。

こうして命まで救われた今、そんな彼女達を貶し、唾を吐き掛けるような奴の言葉を決して許してはおけなかった。

「記号の力の有無だとか、フィクションだなんて関係ない……！何物にも替え難い、大事な何かを守る為にその身を削って守り抜いた彼女達の強さを侮辱する事だけは、俺が絶対に許さないっ……!!」

「……っ！」

普段は感情の機微が少ない彼からは想像も付かない、誰かを守る為にその身を粉にした風太郎や五月を、クリスの奮闘を侮辱するイグニスレイザーに対して明確な怒りの感情をぶつける蓮夜。

そんな彼を前に先程まで自身の無力感に苛まれていたクリスも目を点にし呆然とした顔を浮かべるが、次第にその瞳の奥に力強さを取り戻していき、イグニスレイザーはそんな蓮夜の言葉を受けて苛立たしげに舌打ちを返す。

『ごちゃごちゃと鬱陶しい説教を垂れやがってっ……許さなきやどうするってんだよ？今更なにほごこうが、結局この戦力差に変わりはねえ。死に損ないのお前等に、此処からどんな逆転が望める？しかもたった一人、他が使い物にならなくなったお前だけで二人じゃ、ねえっ……！……！』

今更何を吠えた所で、己自身も酷く傷付き、しかも足を引つ張る怪我人まで抱える事となった蓮夜一人に何が出来たのかと、ただの強がりには聞こえない蓮夜の言葉を虚勢だと吐き捨てようとするイグニスレイザーの台詞をクリスが声を絞り出して遮り、グググッ……と震える足に力を込めて僅かに身を起こそうとしていた。

「今のコイツの隣には、あたしがいるんだっ……一人でなんか戦わせる訳ねえだろっ……！ 幾らお前らが強かろうと、数が違ったって、何十何百と打ちのめされたって、何度だって立ち上がるっ！ コイツ等とも交わした取り引きを……約束を守る為にもなあつ！」

「……クリス」

蓮夜の言葉により失い掛けていた戦意が触発され、イグニスイレイザー達を正面から見据えるクリスの眼差しには迷いも淀みも一切ない。

その姿から並々ならぬ気迫を感じて傍に立つ蓮夜も気圧され僅かに目を剥くも、その言葉の頼もしさと嬉しさから微笑を浮かべ、灰で所々黒ずんだ包帯で巻かれた右手をジツと見つめた後、その手をクリスに向けて差し出した。

「！お前……？」

「風太郎達との取り引きを受けたのは俺も一緒だ……だからやるぞ……他の誰でもない……俺と」お前、の、二人でだ……」

「……はっ、つたりめーだ！」

記号の力の有無だとか、奴等との力量や物量の差なんて関係ない。

今までの借りを奴等に返す為にも、元の世界に帰る為にも。

そしてこの見知らぬ世界で出逢い、絆を共に育んだ風太郎や五月達の為にも、眼前の強敵をこの手で必ず討ち倒す。

胸に誓ったその想いと共に、クリスは何処か挑戦的にも聞こえる蓮夜の言葉に強気な笑みを返しながら、差し出されるその右手を躊躇なく掴み取った。

——その瞬間、クリスが伸ばした手の中に握られていたブランクカードに赤い輝き

が灯り、イチイバルを模した赤い弓矢と銃が交差する紋章がカードに浮かび上がったと同時に、二人が繋いだ手と手からまるで波紋のように凄まじい勢いで赤い光が放出されたのであった。

『ツ!!?グ、グウウウウツツ!!?!!』

『ギ、ガアアアアアアアアアアアアツツ!!』

『?!な、何だ、この光?!』

『ツ………あ、れは………まさか?!』

突如発生した二人から放たれる赤い光によってダスト達は目を抑えて悶え苦しみ、シャークイレイザーは困惑を、イグニスイレイザーは明らかな動揺を露わに蓮夜とクリスから目を離せずにいる。

そんな中、クリスを引つ張り起こした蓮夜は彼女から渡されたカード……イチイバル

の紋章が描かれたカードを僅かな驚きと共にジッと見つめてクリスに目を向けると、クリスは何処か得意気な笑みを返し、それに対し呆気にと取られていた蓮夜も何かを悟り目を伏せて微笑しながら力強く頷き返して共にイレイザー達と向き直り、クリスはギアのペンダントを手に、蓮夜はクリスから受け取ったカードをベルトのバックルへと装填した。

『Code Ichaiival……』

「Killlitter Ichaiival tron……」

「……変身！」

『clear!』

クリスの美しい唄声と蓮夜の力強い掛け声が重なり、鳴り響く電子音声と共に二人の姿が赤い光に包まれながら変化していく。



クリスは再びその身にイチイバルのギアを、蓮夜は黒のアンダスーツを纏いながらその上に何処からともなく出現した無数の赤い装甲をその身に次々と装着していき、最後に後頭部から下りてきたパーツが展開されて仮面となり、頭部に纏われると同時にその両手に赤い二丁銃が握られ、変身を完了させた。

白色のラインが所々に走った滑らかなデザインの赤い装甲と交差する二丁銃を彷彿とさせる緑色の複眼、腰部には巨大なX状の赤いリアアーマーを装備したその姿こそ、クリスとの繋がりから得た第二のクロスの新たな形態……イチイバルの能力をその身に顕現させた『仮面ライダークロス・タイプイチイバル』の姿そのものであった。

『ッ?!な、何だよあれっ……?また姿が変わったぞっ?!』

『(ッ……んなバカなっ……此処にきて、二人目が覚醒したってのか……?!)』

『……………う……………ぐっ……………?』

「っ……………あ、れ……………?わた、し……………?」

クロスが手にした新たな未知の形態。これまで自分達が相対してきたそのどれもと  
は明らかに質の異なる力を肌で直接感じ取ったイグニスレイザー達の間にとよめき  
が広がっていく中、二人が変身した際に発生した光に当てられて気絶していた風太郎と  
五月が目を開け徐々に意識を覚醒させていき、周囲の凄惨な光景や、自分達に背を向け  
て佇むクロスとクリスを見て驚愕した。

「って、な、何だこの状況っつ!!?!」

「!お前ら、目え覚ましたのか……!」

「ゆ、雪音さん?に、黒月、さん?え……?ええっ?い、一体どうなってるんですかこれえ  
ええっ?!」

つい先程まで山中の森の中にいた筈なのに、周りはいつの間にか焼け野原、目の前には  
クリスのギアと同じ姿をしたクロスと、少し気を失っていた間に状況が様変わりし過  
ぎてて混乱を隠せない様子の風太郎と五月。



「っ！まだあんだけの数が出せるのかよっ……！」

『こっちの戦力に際限はねえと言っただろーがよっ……このタイミングでそいつが記号の力に目覚めたのは確かに想定外だったが、まだ許容出来る範囲だ。寧ろ運悪く引いた外れが自分から当たりくじになってくれたんだからなあ……そのガキを見逃してやる義理は今度こそ完璧になくなったって訳だ……！』

元々今回の作戦は記号の力に目覚めた響を消す手筈も含まれていたが、戦況の流れからその狙いも頓挫してしまい、クロスを始末する事を優先し妥協してクリスを一緒にこの物語へ跳ばす羽目になってしまったが、クリスが二人目として覚醒したのなら話は別だ。

こうして明確な脅威へと変わった今、クリスも纏めて仕留める事が出来れば残る脅威は響一人だけとなる。

そう考えれば最初こそ驚きはしたものの、漸く当初の目的を達成出来るようになって











えええっ!!」

乗り手の事を一切顧みないクロスレイダーの猛スピードにやられたのか、グロッキー状態に陥って切歌や調と共に顔面蒼白で地面に座り込んでいた響は慌てて駆け寄ってきたクリスとクロスに気付く、二人の顔を交互に見た途端、先程までの気落ち振りがあるで嘘のように瞬時に立ち直ってクリスにガバツ!と思いつき抱き着いた。

そんな彼女を引き剥がそうとクリスが全力で響の顔を押し抵抗する中、そんな二人を前にクロスも仮面の下で僅かに苦笑を浮かべつつ、切歌と調と視線を合わせるように徐に腰を落とした。

『しかし、お前達一体どうやってこの世界に……?まさか、この短期間の間に異世界に渡る術を手に入れて、俺達を助けに来てくれたのか?』

「え……あ、えーっと……別にそういう訳ではなかったのデスけどお……何と言うか、そのお……」

『…………？』

二人の目を交互に見つめながらそう問い掛けるクロスに対し、切歌は両手の人差し指をツンツンさせながら一体どう説明したものかと気まずげに視線を逸らすと、そんな彼女の隣で漸くグロッキー状態からまともに会話出来るまでに回復した調がクロスレイダーに目を向けて口を開いた。

「その……………実は私達、さつきまであのマシンについて調べる為に本部にいたんです……………蓮夜さんが残してくれたあのマシン……………あれが突然、蓮夜さん達がいなくなつた数日前から違う世界へと繋がるゲートのようなモノを開いて……………もしかしたら、それがクリス先輩と蓮夜さんが跳ばされた先の異世界に繋がっているんじゃないかと踏んで、本部の方で調査をずっと続けていたんですけど……………でも……………」

「そのバイクがさつき突然、運転手も無しに勝手に動き出してゲートに向かって突っ込もうとしたんデスよ！それですぐ近くで待機していたアタシ達がじゃじゃ馬みたく暴れ回るバイクを何とか止めようとしたデスけど、全然言う事を効いてくれなくてデスね

……………」

「それでも何とか皆で抑え付けようとしたんですけど、バイクはそのまま私達ごとゲートの中に突っ込んでしまつて、そうしたらいつの間にかこんな場所に……」

『……そんな事が……？』

調と切歌が語ってくれた突飛な話の内容にクロスも流石にその全てを噛み砕いてすぐに飲み込む事が出来ず、呆然とした様子で響達を此処まで連れてきた自身のマシンを見つめていると、クリスに抱き着いて彼女の手で引き剥がされようとしてる響がビシッ！と人差し指を立てながら口を開いた。

「それで私達、暴れるバイクに振り回されながら思ったんですよ。もしかしたらコレ、蓮夜さんがバイクを呼び出そうとしていて勝手に動き出したんじゃないかって！」

『……………え？』

「それならこのまま、バイクに付いていけばクリス先輩や蓮夜さんの下へ運んでくれる

んじゃないかって思ったデス。そうしたら予想通り、ほんとに上手く行ったデスよ！蓮夜さん、実はこうなる事を予見してちゃんと対策残してたんデスね！中々の策士デスよ！」

「出来ればもつと早くに助けに来られれば良かったけど、私達がそれに気付くのに遅くなったばかりに……察しが悪くてごめんなさい」

『……………』

（いや、ぜってえソレ買い被り過ぎっつーか……多分、コイツもそんなトンデモ機能が付いてたとか予想もしてなかっただろ……）

前に病院で元の世界に戻る方法について話し合っていた際、蓮夜自身の口から「俺は異世界間を渡る手段を持っていないし、仮に持ってたとしても覚えてないから無理だ」とキツパリ断言していたのは記憶新しい。

なので、コレも全てクロスの狙い通りだったのだと完全に信じ込んでしまってる響達

に尊敬の念を向けられるクロスにクリスも何とも言えないビミョーな感情を滲ませたジト目を向け、クロスの方も今までただの便利な移動手段程度にしか思っていなかった自分のマシンに備わっていたオーバーテクノロジーに内心ビビり倒しており、盛り上がる響達のハイテンションとは対照にずっと『何それ……知らん……怖っ……』みたいな顔を仮面の下で浮かべて呆然と立ち尽くす中、イグニスレイザー達の間では突如現れた響達を前にどよめきが広がっていた。

『お、おいつ、どうなってるんだ一体っ!? アイツら、元の物語から増援が来る事はなかったんじゃないのかっ?!』

『っ……（どうなってるはこっちの台詞だっ! 奴のマシンにそんな機能があっただどっ? デュレンの野郎っ、そんな大事な情報これっぽっちも話してなかったじゃねえかっ……!!』

クロスが何かしらの方法で異世界を渡る術を有しているのは知ってはいたが、まさかそれが奴のマシン自体に備わっていたなど何一つ聞き及んでいない。

そのせいで完全に分断したかと思われた響達が合流するという最悪の事態に陥り、圧倒的な戦力差によるイニシアチブを覆されてイグニスレイザーも動揺が隠せない中、クロスレイダーに跳ね飛ばされたダスト達が呻き声を上げながら身を起こしていき、その声を聞いて瞬時に我に返ったクロスは両手の銃を構えてイグニスレイザー達と向き直っていく。

『とりあえず詳しい説明は後だ……！来てもらって早々で悪いが、手を貸してくれ！』

「えっ、あ、は、はい！それは全然大丈夫なんですけど……！」

「ところで、こっちにいるこのおにーさん方は一体何処の何方さんデスか？」

「えっ……！」

「あ……わ、私たちは、その……！」

と、響達のいきなりの登場に呆気にとられていた風太郎と五月の方に振り返る切歌に

不意にそう問われ、風太郎と五月は戸惑いを露わにどう答えるべきか迷って顔を見合わせる。せつせつ。

だが、二人がその質問に答えるよりも先にダスト達が一斉に動き出してクロス達へと襲い掛かり、腕を振りかぶりながら迫る無数のダストを見てクリスも咄嗟に両手のハンドガンを乱射し、ダスト達の頭を次々と撃ち抜きながら叫ぶ。

「そつちの説明も今は後回しだ！ともかくこのイレイザー共はそいつ等を狙ってる！お前らはこの雑魚共を蹴散らしつつ、そいつ等を守ってくれ！大元のイレイザー達はあたし達でやる！」

「え、で、でも二人だけじゃ……！」

『大丈夫だ。今の俺達なら奴等に遅れを取ったりはしない。……俺達に任せてくれ』

「蓮夜さん……」

たった二人でイレイザーに、それも上級を相手に挑むなど無茶無謀が過ぎるとしか思えないが、クロスはそんな響達の不安を拭うように安心感に満ちた声音で頷き、それに対し響も今のクロスの新たな姿、そしてクリスの背を交互に見て思案に浸るよう一度臉を伏せて考え込むと、今の二人の姿から何かを思い返して小さく笑い、クロスの顔を見上げて力強く頷き返した。

「分かりました。こっちは私達で引き受けます！だから二人も、後ろは気にせず思う存分やっちゃって下さい！」

『すまない、風太郎達を頼む……！クリス！』

「ああ……！今まで散々好き放題してくれた借り、此処で纏めて返してやる！」

不明な点も多く、気になる事は多々あれど、こうして響達が駆け付けてくれおかげで風太郎達の安全を気にしながら戦う必要がなくなつたのは大きい。

この好機と勢いを逃すまいとして、響達に風太郎達を任せたクロスとクリスは互いに



目配りをして頷き合うと同時に一気に駆け出すと、押し寄せるダスト達の間を上手く駆け抜けながらイグニスレイザーとシャークイレイザーを指して呐喊していき、イグニスレイザーも迫り来るクロスとクリスを目にし忌々しげに舌打ちしながら拳を振り上げ、シャークイレイザーと共にクロス達を迎撃していくのであった。

第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュ  
エット）⑦（中）

「デエエエエエエスッ!!」

「はああああッ!!」

タイプイチイバルに変身したクロスと、記号の力に覚醒したクリスがイグニスイレイザー達と激突し始めたその一方、二人から風太郎達の守りを託された響達は彼等を狙って絶え間なく迫るダスト達を前に多彩な技を繰り出し、突破力に優れた響を主軸に切歌と調も後方から投擲攻撃を用い彼女の援護に回っていた。

切歌と調のそれぞれの得物から放たれる刃や鋸が高速で回転しながら、ダストの首を次々と刈り取って跳ね飛ばしていく。

しかし、記号を持たぬ二人ではイレイザーと同じ特性を持つダスト達を完全に倒し切る事はやはり叶わず、ダスト達は首を切断されてもたちまち切断面から頭を生やし復活してしまう。

「うう……！何なんデスカコイツら?!斬っても斬っても全然倒れないデスよ!」

「ザババの刃が通じないなんて、どうすれば……!」

手応えは確かにある筈なのに、どれだけ斬って切り刻んでも次から次に復活してしまう初めて交戦するダストの不死性に切歌と調も気遅れてしまうが、先陣切って突貫する響がマフラーを雄々しく棚引かせながら多方向から襲い掛かるダスト達に次々と打撃技を打ち込んだ瞬間、肉体が一瞬で霧散し跡形も残さず消滅するダスト達を見て響は僅かに目を見張った。

「（私の拳は通る!という事は、この怪物達もイレイザーと同じ性質を……!）……切歌ちゃん、調ちゃん!敵を一箇所に集めて!コイツらもイレイザーと同じなら、倒すのは無理でも……!」



「今デス！調っ！」

「ハアアアアアッ!!」

抵抗すら出来ず大旋風に攫われるダスト達を見上げながら切歌が大声で呼び掛けると共に、上空に跳び上がって待ち構えていた調が両手のヨーヨーの糸を際限なく伸ばしていく。

そしてヨーヨーの糸を器用に操ってダスト達を一体一体縛り上げていき、ダスト達を一箇所に纏めるように固めて身動きを封じていった。

「これで……！響さんっ！」

「——おおおおおおおおおおおおおおおおおおおっつ!!!」

糸を手繰り寄せながら地上に着地した調が響に視線を向けたと共に、タイミングを見計らい右腕の手甲をドリル状の形態に変形させ待機していた響が腰のブースターを噴

かせながら地面を蹴り上げ、まるでロケットが如く勢いで空へと飛び上がる。

そしてダストの群れの塊に向かってそのまま一直線に突撃していき、橙色の軌跡を宙に描きながらダスト達の塊をドリルで打ち貫き、纏めて木っ端微塵に粉々にしていったのだった。

「す、すげえ……！」

「あ、あれだけの数の怪物を、あんな一瞬で……！」

「ふふーん、どんなもんデス！これくらいの雑魚相手、アタシ達だけでも十分に………ほえ？」

瞬く間にダストの大群を撃破した響達の強さに思わず感慨の声を漏らす風太郎と五月の賞賛を背に、切歌も得意げに胸を張る。

しかし、その顔色もすぐに間の抜けた物に変わり、ダスト達が散った空を見上げて呆







それを目にした響達も慌てて散開して無数の腕を回避するが、かわされた無数の腕は突然急転換し、そのまま分散して響達を執拗に追い掛けていく。

「うえええええッ?!こ、この腕追い掛けてくるデスよっ?!気持ち悪うっ!」

「っ、これじゃ本体に近付けないっ……!——ズガアアアアンツ!!——あああああッ!!」

「調ちゃんっ?!ぐうっ!!」

何処までも執拗に追ってくる無数の不気味な腕を回避、或いは得物で切り落として何とか振り払おうとするも、その度にダストクラスターがその肉塊から新たな腕を生やして切歌と調に攻撃の手を緩める事なく襲い掛かる。

響もどうか二人の助けに向かおうとするも、ソレを阻むように空から降り注ぐ無数の腕の対処に追われて思うように動く事が叶わず、次第に三人はダストクラスターの猛攻に押されて劣勢に追い込まれつつあった。

「クツソツ……！せつかく助けが来てくれたかと思えば、あんなバケモンが出てくるとか聞いてねえぞ……！」

「こ、このままだとあの子達まで……上杉君！何とかならないんですか?!」

「無茶を言うな！あんなデカブツ、俺なんかはどうしろつて……ん……?」

ダストクラスターのあまりの手数の多さに徐々に追い詰められていく響達のピンチを前に、焦りに駆られて無茶ぶりしてしまう五月に風太郎も反論し掛けるが、その時、先程ダストクラスターが着地した際に発生した衝撃波に煽られて転倒したクロススのバイク……クロスライダーが視界の端に映り、それと同時に風太郎の脳裏にある考えが過ぎる。

（いや、待て、何を考えてんだ馬鹿か俺はっ……！俺はアイツ等と違ってただの高校生だぞ……！そんな無謀な真似した所でアイツ等の足をただ引つ張るだけに決まって——！）



く、次第に押され始めてこのままでは不利になると踏み、一度立て直そうと後ろへと飛び退く。

……しかしその瞬間、響の真下の地面から突如ボゴオツ！と勢いよく拳を固く握り締めた黒い腕が飛び出し、響に不意打ちで襲い掛かった。

「っ?!しまっ、うあああああああッ!!」

「?!響さん!!」

迫る拳を前に反射的に両腕を十字に組んで防ぐ響だが、バックステップの最中、身体が宙に浮いている状態では踏み止まる事が出来ず、そのまま殴り飛ばされて地面に倒れ込んでしまう。

其処へ更に追撃を仕掛ける様に無数の手が響に目掛けて一齐に伸ばされていき、どうにか身を起こした響もそれを見て回避は間に合わないかと踏み咄嗟に両腕で顔を庇い、次に襲い来るであろう痛みにも備えて歯を強く食いしばった、その時……



んだよなっ?! 奴に近づければあのデカブツを仕留められるのかっ?!」

「えっ? ええつと、は、はいつ。でもあの腕が厄介なせいで、こっちから近付く事が……」

「それさえ分かればいいつ……! 振り落とされないようにしっかり掴まってるよつ!」

「え? ちよつ、何を?! うええええええええええつ!!」

一体何をするつもりなのかと、そんな疑問を投げ掛けるよりも先に風太郎はマシンのアクセルを全開にして走り出し、急なスピードアップで上半身を後ろに反って危うく振り落とされそうになる響を他所にダストクラスターに目掛けて全速力で走り出す。

そして切歌と調を蹂躪していたダストクラスターも自分に向かってくる風太郎と響を乗せたクロスレイダーに気付くと共に再度無数の腕を伸ばして迎撃を行おうとするが、風太郎はギアを素早く操作しながら無数の手が空から降り注ぐ黒い雨の中を潜り抜けていき、とても普通の人間のソレとは思えないバイクテクで被弾一つなく突き進んでいた。

「す、凄い?! 攻撃を全部かわし切ってる?!」

「フツハハハハハツ!! 今の俺はドーパミンもアドレナミンも何かも全部全身から噴き出しているからなあああつ!! 無事に生きて帰れたらあの五つ子共にあれこれ文句叩き付けた後に速攻でぶつ倒れてやらあああああーっつ!!」

「な、何か物凄くハイになってませんか?! って、あ、危ないっ! 前っ! 上からもっ!」

恐らく限界値を超えた恐怖心や五月達を助けねばならないという使命感などの様々な感情が彼の中でごちゃ混ぜになっているのか、最早半ば、いや、完全にヤケクソになった勢いのままにクロスレイダーを全速前進で走らせて限界以上の力を引き出す風太郎のハイテンションに若干引いてしまう響だが、今度は目前と上空の二方向からダストクラスターの無数の手が迫る。

これでは幾ら風太郎でも避け切れない。瞬時にそう悟った響は後部席の上に爪先で立ち、右腕のナツクルを構えて襲い来る無数の手を殴り払おうとした、次の瞬間、

「やあああああつ!!」

「やらいでか、デエエエスツ!!」

—α式百輪廻—

—切・呪りeツTお—

「!?調ちゃん、切歌ちゃんっ!」

無数の手が目前にまで迫ったその時、真横から無数の鎌の刃と小型の鋸が飛来してダストクラスターの手を次々と切り落としていき、響と風太郎の窮地を救ったのである。

驚きと共に響が振り返れば、其処には遠方から調と切歌が無数の手の攻撃でポロポロになりながらも投擲攻撃を絶やす事なく繰り出してダストクラスターへと向かう響と風太郎を援護する姿があり、二人は際限なく再生し続ける無数の手を切り落としながら



響に向けて力強く頷き返す。

「露払いはアタシ達に任せる。デスっ！だから響さんも——！」

「最速で最短で、まっすぐにっ！」

「ツ……！ うお おお おお おお おお おお おお おお おお おお おお  
 おお おお おお おお おお おお …………… おお おお おお ツツ！！」

二人の後押しを受け、響は右腕のナツクルの形状を巨大なドリルへと変形させながらクロスレイダーの後部座席から一息で飛び上がり、腰部のブースターから火を噴かしながら風太郎が此処まで縮めてくれたダストクラスターまでの最短距離を迷いなく突き進む。

それでもなおダストクラスターも抵抗を続けてその肉塊から絶え間なく悍ましい異形の手を伸ばして響へと差し向けるが、それらも調と切歌が放つ小型の鋸と大鎌の刃により端から全て切り落とされていき、斬り飛ぶ手首が響の頬を掠めて血を噴き出しなが



## 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）⑦（後）

「ウオラアアアアアッ!!」

『ぐうううっ?!こ、のオおおおおおッ!!』

響達が風太郎と協力してダストクラスターを撃破したのと同じ頃、クロスと共にレイザー達に挑むクリスはそれぞれ二手に別れてシャークレイザーを相手に一騎打ちに持ち込み、互いに一步も引かぬ互角の戦いを繰り広げていた。

クリスは一定の距離を保ちながらシャークレイザーと互いを正面に、横走りに併走しながら相手の両腕の刃から放つ斬撃波を右手に握るリボルバーで次々に正確に撃ち落とす共に、即座に左手に握るもう一丁のリボルバーでシャークレイザーの両腕を素

早く狙い撃ち、次の攻撃を阻止し続けていた。

『ガッ?!ぐつ、クソオオオッ!―ズガガガガガガアンツ!!―うあああああああッ!』

イレイザーに対抗出来る記号の力にした今、クリスが放つ弾の一つ一つがシャークイレイザーの身体に撃ち込まれる度に相応のダメージとなつて傷を負わせていく。

撃たれた片腕を抑えて痛みに怯んだシャークイレイザーの一瞬の隙を見逃さず、すかさず両手のアームドギアによるクリスの連続射撃がシャークイレイザーの全身に容赦なく浴びせられていき、シャークイレイザーはそのまま無数の火花を撒き散らしながら盛大に吹っ飛ばされ、何とか受け身を取りふらつきながら身を起すその表情には困惑を隠す事が出来ずにいた。

『ぐつ、ギッ……ど、どういう事なんだっ……?!何故俺が押されるんだっ……?!力に目覚めたばかりのあんな、あんなガキなんかイッ!!』

「……当然だろ。今のあたしには記号の力だけじゃねえ。あたしにはダチが、アイツが——心から信頼出来る仲間が付いてる！そんなあたしがお前に、教師でありながら自分達の未来の為に頑張るアイツ等の努力を嘲笑うような、テメエなんかに負ける道理はねえんだよ！」

『ツ！小娘風情がつ、一丁前の口をほぎくなアアあああああああああつつ  
!!!』

アームドギアの銃口を突き付け、力強く、五月達への侮辱を口にしたシャークイレイザーに対する怒りを秘めたまっすぐな眼差しを向けてそう断言するクリスだが、そんな彼女の言葉を甘っちょろい妄言と吐き捨て、シャークイレイザーは両腕の刃を乱雑に振るって無数の斬撃波をクリスに飛ばしまくる。

それを目にしたクリスも足幅を広げ、腰を僅かに落としながら何か動きを取ろうとしたものの、それよりも速く無数の斬撃波が立て続けにクリスへと直撃してしまい、凄まじい轟音と共に巨大な爆発が巻き起こり炎の中にその姿を消してしまった。

『ふ……フフ……ハツハハハハハツ！ざまあみろお！何がダチだ、仲間だ！偉そうに宣っておきながら、そんなモノが一体何の役に立っつて——！』

——鼻をくすぐるGun powder & Smoke

ジャララ飛び交うEmpty gun cartridges

『——ッ?!』

黒煙が立ち上る空を仰ぎ、炎の中に消え去ったクリスを無様だと蔑んで声高らかに笑うシャークレイザーの声を掻き消すかのように、何処からともなく美しい歌声が鳴り響く。

その声に驚き、慌てて目の前に視線を戻したシャーケイレイザーの目に、炎の奥で蠢く影……両腕を十時に組んで仁王立ち、リフレクターを前方に展開して無傷の姿で佇むクリスが片腕を振るって炎を払い除け、不敵な笑みと共に力強く歌を口吟む姿が映った。

『な……ッ！き、貴様アッ！』

「紅いヒールに見惚れて！う・っ・か・り・風穴欲しいヤツはアアアア、拳手をしなアああっ！！」

確かに自身の技が直撃した手応えがあつた筈なのに、まるで傷一つ付いていないクリスを見て動揺しながらも慌てて両腕の刃を構えようとするシャーケイレイザーよりも速く、クリスが素早くマシンピストルに切り替えた両手の銃を連射して反撃する。

それを見たシャーケイレイザーは攻撃を中断して咄嗟に地面の中に沈み弾丸を回避すると、そのまま地面の中を高速で移動してクリスの背後から地上へと跳び出し突撃を仕掛けるが、クリスは直感のまま紙一重で不意の攻撃を身を翻して避けながら咄嗟に至

近距離からの射撃で反撃を行う。

だが、シャークレイザーも宙で軽かに身を捻って矢を上手く避けながら再び地面の中へと逃げ込み、続けざまにまた別方向の地面から飛び出しクリスに再度突撃を繰り返していく。

「血を流したって、傷になっただってえ！時と云う名の風と、仲間と云う絆の場所があああ！！（また地面の中からの不意打ち戦法かつ……！そつちがそうくるならア！」

—ババババババババアツ！！—

『（……?!何だ……?何を始めやがった？）』

シャークレイザーの地中からの奇襲攻撃に対し、クリスは何を考え付いたのかいきなり辺り一面の地面に向かって手当たり次第にクロスボウを乱射し始めたのだ。

その気配を地中から感知したシャークレイザーも訝しげな反応を見せるが、クリス



が放つ矢が全く見当違いな場所にも撃ち込まれている事に気付き、歪にほくそ笑んだ。

『馬鹿が、適当に撃つてれば俺が出てきた瞬間にまぐれ当たりが狙えるとも思ったのか？生憎とこっちはお前の居場所が丸わかりなんだよ！』

シャークイレイザーはその名の通り鮫の能力も有し、聴覚が異常なまでに進化している。

地面の中を潜っていながらも相手の居場所を探り当てて攻撃する事が出来るのも、標的を立てる足音、僅かな砂利を踏む音すら聞き逃さない感覚器官の正確さが為だ。

故に幾ら無差別に攻撃されたとしても、矢が地面に着弾する音を聞き分けてその場所を回避し、クリスが僅かにでも身動きすれば砂を踏み締める音だけで何処にいるのかも手に取るように分かる。

向こうが地中深くにまで攻撃出来る技でも持っていない限り、こちらが無敵なのに変わりはないと確信して矢が着弾する地面を避けながら地中の中を悠々と泳ぎ、聴覚を澄



——泣いてなんかいねえ、まだ終わっちゃいねえ

……あつたけえ

『  
!!?  
』

状況がまるで理解出来ず困惑するシャークイレイザーの頭上から、不意に歌声が降り注ぐ。

「驚愕と共に思わず空を仰ぐと、空も土埃に覆われて視界が悪いが、シャークイレイザーの超人的な視力を備えた瞳は空を遮る土埃を超え、確かにその向こう側を捉えた。

——遙か上空の星空を背に、背部に形成した超大型の二基のミサイルのブースターで上空を浮遊し、更に左右の腰部アーマーの多連装射出器を展開して地上に向けて照準を狙い定めるクリスの姿を。





猛スピードで頭上から飛来する超大型ミサイルを見て恐怖で顔を引き攣らせながらも、このまま黙ってやられる訳にはいかないと足掻き、シャークイレイザーは空中で強引に身を捻って態勢を変えながら両腕の刃をやぶれかぶれに何度も振るい、斬撃波を飛ばしまくる。

その内の一つが超大型ミサイルに直撃して弾頭の上に騎乗するクリスごと呑み込んで爆発させるが、歌は止まない、途切れない。

超大型ミサイルの爆発により発生した凄まじい衝撃波を逆に利用する事で、爆炎の中から勢いよく飛び出したクリスはそのままシャークイレイザーの下へと激突する勢いで一気に急降下していき、空中で強引に態勢を変えて突き出した両足でシャークイレイザーの身体を思いっきり踏み付けて着地すると共に、両手に握るリボルバー型のアームドギアの銃口を突き付け、がむしやらに弾丸を乱射してその身体を何度も何度も撃ち貫いてゆく。

『がふうふうふうつつ!!?ぐつ……き、貴さ——ぐああうつつ?!!』

「解放オ、ぶっ飛べええええつつ……!!」

無数の銃弾が全身を貫く激痛に身悶えるシャークイレイザーを踏み台に思いつきり蹴り上げ、クリスは上空へとムーンサルトしながら両手のリボルバーを変形、連結させ、スナイパーライフルに切り替えると共に狙撃モードに展開した頭部バイザー越しに、地上に向かつて落下していく全身蜂の巣だらけのシャークイレイザーを捉えながらライフルを構える。

狙いはシャークイレイザーの胴体、そのど真ん中だ。

「全部乗せをオオオオオ——!!」

『ひっ……!!?ま、待てつつ!!?お、俺はまだ、こんなところでつつ——!!!?』

「——喰らいやがれエえええええええええええええええええええええええええええつつ!!!」

—RED HOT BLAZE—





『グッ！オオラアッ!!』

クリスとシャークイレイザーの戦いに決着が付いたその頃、時を同じくしてタイプイ  
チバルに姿を変えたクロスはその力を駆使してイグニスイレイザーを相手に引けを  
取らず、二人の戦いは無数の爆発が入り乱れる激戦と化しつつあった。

クロスはイグニスイレイザーが左腕から連続で放つ火炎弾を両手の赤い二丁銃の光  
弾で次々と正確に撃ち落としながら接近すると共に、瞬時に十文字状の光刃を赤い銃の  
銃口に展開した近接モードへと切り替えながらイグニスイレイザーに斬り掛かる。

それに対してイグニスイレイザーも巨大な右腕を盾に光刃を受け流しながらそのま  
ま巨腕で横殴りにクロスを殴り払おうとするも、クロスは同時に火を灯した腰部のX状  
のリアアーマーと脚部のスラストターを利用して後方へとバク宙で回避しながら再度銃  
撃モードに切り替えた両手の銃で空中から射撃し、イグニスイレイザーの動きを牽制し  
て追撃を阻止していく。

『チイツ！（野郎っ、さっきまでとは力も動きのキレもまるで違うっ……!!?』

『はあああああつ!!』

並大抵の攻撃では傷一つ付かない筈のイグニスレイザーの肉体がクロスの放つ一撃一撃によって削られ、確かなダメージを与えていく。今までもタイプガングニールとの戦闘等で傷を負わされる事は度々あったが、此処まで明確に傷を負わされる事など一度たりともなかった筈だ。

『（これが奴の、クロスの力……!! たった二人の装者との繋がりを得ただけで、もう此処まで力を取り戻したってのか?!）』

新たな繋がりを得ただけでこれだけの力を引き出し、先程までの力の差を一瞬にして詰めてみせたクロスの真の力にイグニスレイザーも内心驚きを禁じ得ない中、クロスはそんなイグニスレイザーの驚きも他所に肩部のアーマーを展開して砲撃形態に変形すると、砲口に収束した膨大な量のエネルギーを一気に解放し、イグニスレイザーに目掛けて巨大な赤い砲撃を放った。

それを目にしたイグニスレイザーは忌々しげに舌打ちしながら左手に溜めた炎で前方に障壁を形成し、クロスの砲撃を受け止めつつ右手に螺旋状の炎を収束させて火炎弾を生み出していく。

『(やっぱり奴は危険だ……！立花響だけじゃねえ、あの小娘……雪音クリスとの繋がりを手に入れただけで此処まで力が底上げされるなら、このまま奴を放置し続ければ……！)』

奴が他の装者達とも繋がりを結べば、それだけ奴は力を増して嘗てのように自分達の脅威として再び立ち塞がる事となる。

それだけは絶対に避けなければならぬと、此処でクロス達を倒す決意を強く新たにしていたイグニスレイザーは炎の障壁と入れ替わりに火炎弾を手にする右腕を突き出し、高火力の火炎放射を撃ち出してクロスの砲撃と真っ向からぶつかり合い相殺させたと同時に、巻き上がる爆発の中を躊躇なく突っ切りながら炎を纏う右腕を振りかざしてクロスへと一瞬で肉薄した。

『テメエだけは此処で絶対に仕留めるッ!!その命、今度こそ貰うぞオッ!!』

『ッ……リフレクタービット!』

眼前に迫る炎の拳を前に力強くそう叫んだ瞬間、クロスの背面装甲の一部が分離して自律的に動き出し、宙に浮きながらまるで薔薇の花弁のような形状の六基の兵装へと変形していく。

そして六基の兵装はそのまま高速で宙を飛び回り、クロスの前面に移動しながら六角形を形作るかのように陣形を組むと、六基の兵装の間で金色の光を発生させてまるでクリスのリフレクターのように障壁を展開し、イグニスレイザーの炎の拳を真っ向から受け止めてみせた。

『何っ?!』

『まだだ!』

自分の拳を受け止めた思わぬ防御手段にイグニスイレイザーが驚愕する中、クロスはその隙に両手の銃を素早く変形させて大型ガトリングガンに切り替え、更に胸部の開閉式装甲カバーが開かれて胸の奥に内蔵された二基のガトリング砲が露わとなり、リフレクタービットの障壁を解除すると同時に両腕と胸部のビームガトリングによる一斉射撃を至近距離から浴びせ、イグニスイレイザーを盛大に吹き飛ばしていった。

『ぐうううっ?!クソッ!まだあんな隠し玉を……!!』

足で地面を削りながら何とか持ち堪えるも、至近距離からの攻撃をまともに受けてしまい、白煙が立ち上る胸を抑えながら苦痛に顔を歪めるイグニスイレイザーへのクロスの追撃の手は緩まない。

自律的に起動する薔薇型の形状をした六基の赤い遠隔兵装……リフレクタービットは縦横無尽に空を駆け巡りながらイグニスイレイザーの周囲を飛び回って四方からのビーム攻撃を絶え間なく浴びせていき、其処に加えて遠距離からクロスが両手に構えたガトリングガンによる弾幕をイグニスイレイザーがビットの射撃を避けた先を読んで直撃させたりと、一切の隙のない波状攻撃を展開する事で着実にイグニスイレイザーに



『ハッ……い……どうやら右腕の怪我まではカバーし切れてねえみてーだなあ！幾ら新しい力を手に入れても、そのザマじゃ十全に使いこなせる筈がねえかア！』

『くっ……い！』

新たな形態、クロスの成長の伸び代は確かに驚異的ではあるが、奴にはまだこれまでの戦いで自分が与えて蓄積されてきたダメージが残ってる。

付け入る隙さえ残っていればまだこちらが優位に返り咲く事は出来る。そう考えながら右腕を抑えるクロスが展開する障壁へと更に拳を食い込ませながら左手に再び炎を収束させていき、至近距離からの火炎放射で障壁ごとクロスを吹き飛ばそうとした、その時……

「——だからあたしがいるんだよ」

『……ッ?!—ズガガガガガガガアッ!!—ぐおおっ!』

イグニスイレイザーの左手が突き出される寸前、側面から突如無数の弾丸が飛来しイグニスイレイザーの横顔に立て続けに撃ち込まれたのである。

不意の一撃に対してイグニスイレイザーも攻撃を中断せざるを得ず、態勢を崩しそうになりながらどうにか立て直してバックステップでクロスから距離を離し今の弾丸が放たれてきた方に目を向けると、其処には、銃口から白煙が立ち上るガトリングガンを両手に構えるクリスの姿があった。

『ツ！テメエ、何で此処に……?!奴はどうした?!』

「あのサメ野郎の事か？アイツならとつくに片付けたぜ。後に残ってるのはお前と、アイツ等が食い止めてるあの気持ちわりー雑魚共だけだ！」

『なっ……クツ……あの野郎っ、フィクションなんか遅れを取りやがってっ……!』



これでは仮にクロス達を倒せたとしても、この物語を一度のみの大規模な改竄で手中に収めるといふもう一つの重要な目的が果たせなくなってしまうた。

計画を台無しにされた上に、記号の力に覚醒したばかりのクリスにアツサリ倒されたシャークイレイザーの不甲斐なさにも思わず舌打ちしてしまうイグニスイレイザーに対し、クロスは僅かに痛みが緩和した右手で地面に落ちた銃を拾い上げながら徐に口を開く。

『これで形勢は一気に逆転したという事だ。仮にまたダスト達を生み出したとしても、それも響達がすぐに対処してくれる。……お前に勝ち筋は既ないぞ』

『ツ……勝手に勝った気になるなと言っただろうが……テメエ等を纏めて始末するぐらい、俺一人でも十分事足りるんだよオツ!!』

そう言って激昂の雄叫びと共に、イグニスイレイザーの身体の内側からまるで爆発するように炎のオーラが放出されてその身に纏い、更に炎のオーラから全方位に向けて無数の炎弾を乱雑に放っていく。

それを見た二人も咄嗟に左右に散開し、飛来する炎弾を軽快な動きで回避しながらクリスはリボルバーを、クロスは左手の銃を主に光弾を放ちながら遠隔操作のリフレクタービットによる一斉射撃をイグニスレイザーに向けて同時に放つが、二人の攻撃がイグニスレイザーの身体に直撃した瞬間、クリスの銃撃だけでなく何故か先程まで通じてた筈のクロスの攻撃まで容易く弾かれてしまった。

「なっ……こっちの弾を弾きやがった?！」

『ッ……!あのオーラの熱で肉体の強度を更に高めたのか……!』

『まだまだこんなモンじゃねえぞっ!昔のテメエに負わされた傷のせいで全力には程遠いが、テメエ等をぶっ潰すだけなら今出せる力の全部で十分だっ!』

シャークレイザーも倒された事で最早取り繕う余裕も捨て去ったのか、イグニスレイザーの繰り出す攻撃は今まで戦ってきた中でも目にした事がないほどその激しさを増していく。

反撃の機会を伺って回避に専念していた二人もあまりの攻撃の密度に次第に避け切る事が叶わなくなっていく、炎弾が直撃する寸前にクリスは咄嗟にリフレクターを、それを補う形でクロスが更にリフレクタービットを重ね合わせて炎弾の嵐をどうにか凌ごうとするが、一発一発が地面を大きく抉る程の破壊力を持つ炎弾の威力を前に障壁を張っている筈の二人の足も徐々に後退り、押されつつあった。

『クツ……まだ此処まで引き出せるだけの力が残ってるのか……！』

「このままじゃ流石に持たねえぞっ……！一体どうすりやつ——」

このまま障壁を展開して凌ぎ続けるのにも限度がある。何れ突破されてしまう前にどうにかして反撃の手段に出るしかないが、この炎弾の嵐を何とか出来たとしても、イグニスレイザー自身の跳ね上がったあの防御力を破れなければダメージを与える事もままならない。

どうすればいい？今ある手で何が出来る？

リフレクターを維持し続けたまま必死に思考を駆け巡らせる中、その時クリスの脳裏にふと、この世界に飛ばされる前にS・O・N・Gの訓練所でクロスと繰り広げた模擬戦の時の記憶が一瞬だけ過ぎり、其処からある考えを思い付いた。クロスは自身のリフレクターを補強するリフレクタービットを一瞥し、クロスに顔を向けて叫んだ。

「おい！お前の操ってるコレ、何かあたしのリフレクターと似ちやいるが、イチイバルの姿してるんならコイツ等もリフレクターと同じ性能してると思っついんだよな?!」

『っ？いや、確かに、この姿は元々お前の力を元にしてている物だからそうだとは思うが……それが一体……？』

「なら耳貸せ……あの野郎に一泡吹かせる策、一つだけ思い付いた！」

そう言っつてクロスは自身が思い付いたという策を簡潔に纏めて説明していくと、その内容を聞く内にクロスは仮面の下で目を見張り、すぐに険しい顔付きで首を横に振った。

『無茶だ！そんな真似をすればどうなるか……！お前自身も此処までの戦いで傷付いて  
いるのにつ……！』

「心配すんなつ、こつちは前に月を穿つような一撃喰らった事だつてあるつ。そう簡単  
に死にはしねえし、そういうお前だつて人のこと気に掛けられる身体してねえだろつ？  
このままじゃどつちにしろ、こつちが先に倒れるのに変わりにはねえんだつ……！」

『それはっ……』

「……これでも一応、お前となら出来るつて信じて決めたんだ……だからお前も、あたし  
を信じてくれよ」

『……………』

正面を見据え、迷いも淀みもない決意に満ちた表情を見せるクリスの顔付きから彼女  
自身の覚悟の、自分に向けられる信頼の強さが伝わったのか、クロスは僅かに顔を俯か

せて考える素振りを見せた後、再び前を見つめて足を一步踏み出した。

『その信頼に伝えられるかは俺の中でも正直半々だが、お前がそう言ってくれるなら俺も全力で応える。……頼らせてもらうぞ、クリス』

「……へっ。そつちこそ、肝心なところでハマしてくるなよな！」

ニヤリと、額から汗を伝わせながらも口元に不敵な笑みを浮かべたクリスがそう叫んだと同時に二人は障壁を解き、飛来する炎弾の嵐を避けるようにクリスは右へ、クロスは左へと散開しながら走り出していく。

『まだ来るかよっ……！性懲りもなく何処までもっ！』

「つたりめーだ！あたし等の諦めの悪さ、舐めんじゃねえぞ！」

『お前が幾ら力を引き伸ばしても、何度でも食らい付く……！お前との因縁もいい加減に精算させてもらうぞ！』

『はっ、それに関しちや心の底から同意して叶えてやるよっ……！俺がこの手でテメエ等を始末する事でああ！』

あの二人が次に何をしでかすつもりなのかは知らないが、このまま黙って見過ごすつもりもない。

二人が次の一手に出る前に仕留めるべく、イグニスレイザーは右手の掌の上に炎弾を形成し、続け様に膨大な量のエネルギーを注ぎ込んで先程の大破壊の一撃をもう一度放とうとする。

それを横目にクロスは大きく目の前へ跳んで迫り来る炎弾を回避しながら着地の瞬間に受け身を取り、即座に態勢を立て直すと共に両手の二丁銃をイグニスレイザーに突き付けながら二つの銃口を突き合わせてエネルギーを収束、クリスもアームドギアをスナイパーライフルに切り替えながらイグニスレイザーへと狙いを定めた。

「同じ手は使わせねえっ!!」

『ハアアアアアツ!!』

ほぼ同時に引き金が引かれた二人の銃から、二つの紅の弾丸が挟み撃ちで放たれる。

撃った反動だけで身体が僅かに後退する程の威力が込められた二つの弾丸が紅の軌跡を宙に描きながら向かう先は、イグニスイレイザーが掌の上に形成してエネルギーを溜めてゆく炎弾、その一点のみ。

『馬鹿が……! 同じ手を喰らわねえのはこっちも同じだ!』

だがそんな二人の狙いにイグニスイレイザーも気付かない筈がなく、僅かに身体を反らした最小限の動きだけで二人の弾を回避してしまい、構わず炎弾に更にエネルギーを注ぎ込もうとする。

しかし直後、躲された二人の銃弾の前に宙を舞うリフレクタービットが素早く回り込んで花開くように赤い装甲を展開すると、ビットの内側に隠された金色に輝く装甲が露



わになっていき、避けれた銃弾がその金色に輝く装甲部分に触れた瞬間、銃弾は勢いよく跳ね返って跳弾と化し、そのまま他のビットへと弾が繋がられて複雑な弾道を描きながらクリスの狙撃弾がイグニスレイザーの炎弾を、クロスのチャージショットがイグニスレイザーの背中へと直撃し怯ませていったのだった。

『グウウツ?!? なっ……なんだとっ?!?』

『今だクリスッ！ 畳み掛けろッ！』

「ツオラアアアアアアアッ!!」

ズギヤギヤギヤギヤギヤアアアッ!!と、イグニスレイザーが思わぬ不意打ちを喰らい動揺している隙に、クロスがすかさず両手の銃から立て続けに光弾を、クリスはりボルバーに切り替えたアームドギアを連射してイグニスレイザーに再度攻撃を仕掛ける。

そして左右から迫る弾丸を前にイグニスレイザーも動揺が収まらぬまま咄嗟に巨



時……

「——今だっ！やれえっ！」

『ツ！リフレクトッ！』

イグニススレイザーに銃撃を続けながらクリスが力強く叫んだ瞬間、クロスは両手の銃を勢いよくかち合わせて金属音を鳴らす。

次の瞬間、その動作を合図にイグニススレイザーの周囲を飛び交っていたビット達の間を繋ぐように金色の光が広がっていき、やがてドーム状の光の障壁を展開してイグニススレイザーを閉じ込めたのであった。

『なっ……?!し、しまっ……ぐっ、アあああああああああああああああああ  
ああつつつ!!!』

ドーム状の障壁の中に閉じ込められた瞬間、二人の目論見に気付いたイグニススレイ

ザーは慌ててエネルギーの放出を止めようとするも既に間に合わず、放たれた大爆発は障壁内で反射され、そのまま内側に閉じ込められたイグニスレイザーに跳ね返ってその身を焼き尽くしていったのだった。

自らの炎をまんまと浴びせられたイグニスレイザーは障壁内で絶叫し、次第に限界まで高まった熱により遂に強度が耐え切れなくなつた障壁がまるでガラス細工のように粉々に霧散した瞬間、障壁内に封じ込められていた爆発が一気に周囲一帯に拡がって土埃を巻き上げていく。

そうして徐々に衝撃の余波が弱まり始めていく中、壊れた障壁の中からガクリッと、重度の火傷を負つたイグニスレイザーが全身から無数の火花を撒き散らしながら姿を現し、力なくその場に片膝を突いた。

『ガアツ……ぐつ………！（まさか、こんなつ………！自滅だなんて間抜けな手に、この俺が引つ掛かるなんてつ………！）』

『——イレイザーアーツ!!』

『Final Code x……clear!』

『……!?』

してやられたと、こんな安易な策を見抜けた己の不甲斐なさを恥じてふらつきながらも身を起こそうとしたイグニスレイザーの正面から、雄々しい雄叫びと共に電子音声が響く。

それを聞き咄嗟に顔を上げて正面を見ると、其処には複眼や部分展開された全身の装甲の隙間から赤色の光を放出する『EXCEED DRIVE』形態となり、更にその両腕には銃を變形、巨大化、連結させた真紅の大型ビーム砲を手にし、砲口に粒子状のエネルギーを満たしながら佇むクロスの姿があった。

『ッ、テメエッ……!』

『これで決まりだ……!はアアああああッ!!』

イグニスレイザーが身を起こすよりも早く引き金を引き、クロスの大型ビーム砲の砲口から巨大な真紅の砲撃が放たれる。

射線上の地面を吹き飛ばしながら猛スピードで迫る砲撃を前にイグニスレイザーも思わず舌打ちし、すぐさま巨大な右手から炎を放出して迎撃しクロスの砲撃とぶつ、真紅の砲撃と紅の炎は僅かな拮抗の末に一瞬の閃光の後、新たな爆発を巻き起こしてしまう。

『ぐううっ!!』

『チイツ! (相打ちっ……いやまだだ! この隙に奴を——!』

吹き荒れる爆風に見舞われてお互いに怯んでしまうクロスとイグニスレイザーだが、この隙を利用すれば奴に一矢報いる事が叶うと踏み、イグニスレイザーはこの視界を覆う黒煙を使つてクロスとの距離を詰めるべく左手から炎を噴き出し、地を踏み締め一気に飛び出そうとした、その時だった。



直後、耳の鼓膜を突き破り兼ねない程の銃声と轟音、巨大な爆発が絶え間なく巻き起こり、至近距離からの超火力による一斉射撃をイグニスイレイザーに浴びせ掛けたクリスは勢いよく黒煙の中から吹っ飛ばされて地面に激突しそうになるも、そんなクリスの下にクロスが急いで先回りし、地面に叩き付けられる寸前の所で両腕を伸ばしてクリスの身体を抱き留めたのであった。

『グッ！っ……クリスっ、おい……！大丈夫かっ?!』

「……いつ……っ……へ、ったりめーだ……言っただろっ……？あんなんで死ぬほど、あたしの身体はヤワじゃねえっ……」

『ツ……お前という奴はっ……』

憎まれ口を叩く口調はいつも通りの調子に思えるが、その声は痛みに悶えて心做しか震えているように聞こえ、何よりもその証拠を物語るかのようにクリスの全身のギアには所々亀裂が走り、今も不敵な笑みを返した拍子に頭のギアの欠片がヒビ割れ、パラパラッと地面に落ちていくのが見えた。



ゼロ距離射撃により避ける事は出来ないダメージを寸前の所でリフレクターを展開し、最小限に抑える事は事前に伝えられてはいたが、それでも軽減し切れない負傷を負って傷付いたクリスの身体をクロスも痛々しげに眉を顰めながら見つめ、険しげな表情で一度目を伏せると、顔を上げて舞い上がる黒煙の向こう……此処までの度重なるダメージや今のクリスのゼロ距離射撃をその身に受けて全身に罅が入り、片膝を突いてダウンするイグニスレイザーの姿を捉えた。

『アツ……ぐつ、ううっ……!? な、何故、だっ……何で俺がっ……フィクションなんかに、此処まで遅れをっ……?!』

『……お互いに見誤っていた、という事だろ……お前達も、俺も……コイツ等の持つ、本当の強さを』

『……な、にっ……っ?』

あれだけフィクションと呼んで蔑み、見下していた筈のクリスに此処までの深手を負

わされた事実にも動揺と困惑を隠せないイグニスレイザーに、クロスが淡々とそう告げる。

何処か自嘲を含んでいるようにも聞こえるその声に釣られてイグニスレイザーが徐に顔を上げると、クロスは傷だらけの身体のクリスを横から支えながら立たせ、イグニスレイザーをまっすぐ見据えながら彼女から離れるように一歩前へと踏み出し、真剣な口調で言葉を続けていく。

『誰かを助けたい、守りたい、信頼に応えたい……そんな様々な想いを重ね合わせ、強い覚悟としてきたからこそ、コイツ等はあらゆる苦難や世界の危機にも幾度となく打ち勝ってきたんだ。その想いの強さが生む力を測り損ねた誤算がお前の敗因であり、俺の勝因になった……これはただ、その違いに過ぎないというだけの話だ』

『グツ……ツ……！』

当たり前のように、淀みのない口調でそう告げるクロスに対し思わず口をついて否定しそうになるも、イグニスレイザーは悔しげに言葉を呑み込んでクロスを睨み付け

る。

癪に障るが、確かに奴の言う通り、自分が最初からクリスや風太郎達に対する認識を改めてさえいければ、此処まで追い込まれた上に貴重な手駒の一つを失う事だつてなかった筈なのだ。

確固たる事実が目の前にある以上、認める他ない。こうなったのは全て、クロス以外をただの有象無象と侮つたが故の慢心。

自ら慎重派と謳っておきながら、奴らに対する警戒心が足りていなかった己自身への苛立ちを今更になつて覚えるイグニスレイザーを見据え、クロスはベルトのバックルから立ち上げたスロットを再度バックルへ押し込み、電子音声を鳴らす。

『Final Code x……clear!』

『その軌跡を、クリスや皆が繋いできた想いを、今度は俺が繋ぐ……！お前を倒す事で、この物語に平穩を取り戻す事だ！』

『つ……いや、まだだ……まだ俺は倒れる訳にはいかねえっ……！お前なんか、やられる訳にはいかねえんだよオオオオオっつ！！！！』

ゴウウツツツツ！！と、絶叫にも似た雄叫びと共に身を起こすイグニスレイザーの全身から勢いよく業火が溢れ出し、直後、イグニスレイザーを中心にとてつもない大爆発と衝撃波が発生し地面を吹き飛ばした。

その余波は遠く離れた場所に立つクロスとクリスの下にまで届き、イグニスレイザーを中心に周囲の温度が高まり、大気はまるで怯えるように振動して紅く染まっている、スーツやギアに保護されている筈の二人の肌がジリジリと焼かれて痛みが止まらない。

天を仰ぎ見て咆哮するその様は、何処か絶体絶命に追いやられた生き物が全てを投げ打って断末魔を上げる姿のようにも見える。それだけ、奴も後がないという事なのだろう。

ならば尚の事、此処でこの好機を、クリス達が繋いでくれた希望を無為にする訳には  
いかない。

全てを押し潰さんとばかりに降り掛かるプレッシャーを払い除けるように心の中で  
強くそう決心し、クロスは再度EXCEED DRIVEへと姿を変えながら両手の銃  
を巨大なビームカノン砲、両肩のアーマーを砲撃形態に変形させ、更に胸部と両脚部の  
開閉式装甲カバーを開いて無数の砲門を展開し、額部分のガンカメラを複眼の前へと下  
ろした瞬間、背中の装甲が一部展開して銃口型の二つのジョイント部分が露わになる。

『クリス！』

「…………ハッ、そーゆー事かっ……………」

クロスからの呼び掛けと、彼の背中に現れた銃口型のジョイント部分を交互に見て瞬  
時に何かを理解したように笑い、クリスは両手にリボルバー型のアームドギアを握り締  
めてクロスの背中のジョイント部分に躊躇なくアームドギアの銃口を接続する。





えええええツツツツ  
!!!!!!

クロスが両脚部からアンカーを射出して地面に固定したと同時に、クリスがジョイント部分に接続したアームドギアの引き金を引いた瞬間、クロスの全身の砲門から無数の閃光が放出されて前方の一点で収束し、とてつもない爆発音と共に超巨大な真紅色の砲撃と化して撃ち出され、イグニスイレイザーの炎の閃光と真っ向からぶつかり合い、拮抗していったのであった。

『ツ!?ば、かな……受け止めやがっただとっ!!?』

『「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッツツツ  
!!!!!!」』

その一撃の前には何者も追隨を許さず、ただ為す術もなく塵芥と化して消え去るしかない絶死の焔を正面から受け止めてみせた二人の力にイグニスイレイザーが目を剥いて驚愕する中、クロスとクリスは決死の咆哮と共に真紅の砲撃の出力を更に底上げして威力を高め、ゴオオオツツ!!!と鼓膜を震わせる程の爆音と共に勢いを増した二人の砲撃が炎の閃光を徐々に押し返し始めていく。









## 第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット）⑧

「——ハア、ハアツ……やれた、のか……？アイツを……？」

『っ……どうやら、そのようだ……漸くこれ、で………っ………』

今まで幾度となく立ち塞がった仇敵であるイグニスレイザーを相手に文字通り全ての力を出し切り、紅の魔人が果てへと消え去った天上より降り注ぐ無数の真紅の粒子を見上げながら未だ激闘の余韻が抜け切れないクリスに何かを言い掛けるクロスだが、そんな彼の身体が不意にフラツとぐら付き、地に両膝を着いてX字型の無数の粒子を全身から立ち上らせながら変身が解除され、蓮夜の姿へと元に戻りながら前のめりに倒れ込んでしまった。

「?!お、おい?!おまつ、あ………っ………!」

「——?!ク、クリスちゃん？蓮夜さん！」

「おい、お前らっ！」

「雪音さんっ、黒月さんっ！」

変身が解除されながら倒れてしまった蓮夜を見てクリスも慌てて近寄ろうとするも、彼女もこれまでのダメージが今になって身体に響き、一歩足を踏み出しただけで立ちくらみを覚え、ギアの変身が解けながら蓮夜と同様に倒れ込んでしまう。

そんな二人の下へダスト達を全て撃退した響達、風太郎と五月が慌てて駆け寄って二人の身体を抱き抱えていき、心配と不安が入り交じった表情で顔を覗き込んでくる一同に対し、蓮夜は額から流れる血のせいで何も見えない片目を伏せたまま力なく苦笑した。

「すま、ない……少し無茶を、し過ぎたみたいだ……身体がもう、まともに動かさそうに

ないっ……」

「あたしも、だ……くっそおっ……もう指一本、動かせねえっ……」

戦いの最中は新たな力の覚醒や響達の救援などで勢い付いたおかげで気にはならなかったのだが、全てが終わったと自覚し安心した途端、張り詰めた緊張が抜けた身体が思い出したように限界を迎えて痛みや痺れなどを一度に起こし、最早ロクに動く事もままならない。

ただそんな二人の口振りから今すぐ命が危ないといった危険な様子はなく、一瞬緊張を覚えた響達はホッと一安心して思わず張り詰めた肩の力を抜き、風太郎も呆れ交じりの溜め息をこぼした。

「全くっ、本当に常識外れな奴らだ……そんな状態であんな化け物相手に勝っちゃうなんて……」

「……俺達だけの力で勝てた訳じゃないさ……お前や中野……それに響達がきてくれな

かったら、今頃どうなっていたか分からなかった……だから有り難う、本当に……」

「何だそりや……礼を言わなきゃならないのは寧ろこっちの方だろ？ アンタ達には返しても返し切れない恩が出来ちまった訳だしな……感謝してるよ、本当に」

「……………そう、か……そう言ってもらえると、ウン……此処まで頑張った甲斐があったんだなって……そう思える……」

何処か穏やかな眼差しを向ける風太郎からの感謝の言葉に一瞬だけ不意を突かれて驚くも、その言葉一つだけで、そう言ってもらえるだけの働きは出来たのだと実感した蓮夜は安堵するように微笑む。

そんな二人のやり取りを横目にクリスも思わず微笑を浮かべると、目の前で膝を折り、何故だか涙をぼろぼろ落としながら顔をくしゃくしゃにしている五月の方に視線を向けて訝しげに眉を顰めた。

「で、お前はお前で何でそんなポロ泣きしてんだよ……」

「うっ、うう……だつてっ、何もかも全部終わったんだと思って安心してたら、雪音さん達が急に倒れるからあつ……一瞬死んじやうかもつて、不安になつてっ……!」

「勝手に殺すなつての……はあ……でもまあ、これでお前との取り引きはちゃんと果たせたつて事になるし……良かったな、ホントに……」

「う、はいっ……はいいいっ……!ぐすっ、ううううっ……!」

「ワァー……お姉さん、凄い泣き顔になっちゃつてるデスよ……」

「流石クリスマス先輩、中々の女の子泣かせ……」

「人聞きの悪いこと言うんじやねえよっ!つてイツタアツ?!叫んだら身体に響くっ、ぐあああああつ!」

「だ、大丈夫クリスマスちゃん?!え、ここ?この辺が痛むの?!よーしよしよしよーしードゴオ



オッ！ーはいたあああつ?!」

「イテエつつてんのにペタペタ気軽に怪我してるとこ障ってんじゃねえよ馬鹿かお前はあツ!!」

「し、しどいいいつ!!」

「……………何か人数が増えてえらく喧しくなったな……………いつもあんな調子なのか、アンタのところは?」

「……………いや、まあ……………どう、なんだろうな……………俺もまだまだ付き合いは短い方だから断言は出来ないが、多分そうなんじゃなからうか……………」

「そうか……………アンタも大概苦労しそうだな……………」

「……………え?」

「ギヤーギヤー!と、不用意に怪我に障れたせいでクリスマスから容赦のない踵落としを頭の上に貰つてしまい、頭を抑えながら半ベソを掻いて文句を口にする響とそんな彼女を怒鳴るクリスマス、そんな二人を宥めようとアタフタしている五月、切歌、調を見回して何だか意味深な発言をする風太郎に間の抜けた返事を返す蓮夜だが、風太郎はそれ以上は何も語らず無言のまま蓮夜に肩を貸して立たせ、蓮夜を支えながらクリスマス達の下に歩み寄っていく。

「おい、何時までもこんなところで駄弁つてる場合じゃないだろ。この二人も重症なんだし、助け出した一花達も医者に診せなきゃならないんだ。さっさとこんな山降りるぞ!」

「!そ、そうでした……!早く皆を病院に運ばないと!ええつと、先ずは一花達を……!」

「?誰か要救護者がいるんですか?だったら私達に任せて下さい、人を運ぶくらいなら手を貸せますから!」

「当然だろ。勿論お前達にも手伝ってもらおう。俺はコイツを運ぶから、五月は雪音を、其

処の緑と桃色は一花達を二人ずつ運べ。お前はあつちに転がってるバイクだ。ほら急げ、モタモタしてるときっきのドンパチを聞き付けて警察とかに来られたら厄介になるぞ！」

「えええ……」

「い、いきなり出てきて人使い荒いデスよ、このお兄さん……」

急に横から指揮り出したかと思えば、響達を色で識別して指示を飛ばす風太郎の傍若無人な振る舞いに若干引いてしまう響達だが、それはそれとして彼の指示もあながち間違いとも断じる事は出来ず、若干渋々ながらも切歌と調は一花達の下に近付いて二人ずつ肩や脇に抱え、響も横転してるクロスレイダーを起こして山を降りる準備を進めていく。

そんな三人の振り回されっぷりに蓮夜も苦笑いを浮かべ、風太郎に支えられながら山を降りようとふらふらと歩き出しそうとし、

その背後から、ドシャアアアアアツ!!と、何かが落下した大きな音が響き渡った。

「「「?!」」」

「な、何だ、今の?!」

「……まさ、か……」

突然の落下音を聞いて一同が驚きと共に振り返ると、彼等の視線の先には何かが落ちた後の舞い上がる土埃が見えた。

それを目にしたクリス達が目を剥いて何事かと呆然と立ち尽くす中、蓮夜は何かを察した様子でその顔がみるみる内に青くなっていき、その間にも土埃が少しずつ晴れて何かが姿を現していく。それは……



ながらフラフラと身体を起こしていく。

「ツ……今のは、マジで死んだかと思つたぜ……久方ぶりだよ……俺が此処まで追い詰められたのはなあっ……」

「っ、くっ……!」

ダラリと力無くぶら下げた両腕を揺らし、覚束ない足取りでアスカが一步踏み出す。そんなアスカを前に響達も慌てて我に返りアームドギアをそれぞれ身構え、蓮夜とクリスも風太郎と五月を離れさせながら何時でも再変身が出来るようにベルトとペンダントを手にしていくが、アスカはそんな一同の慌てぶりを見て喉を鳴らして笑う。

「そう慌てんなよ……こっちはこんなナリで、もうテメエ等と戦うだけの力なんて残さ  
れちやいねえんだ……この勝負は、お前達の勝ちだ……」

「「……え?」」

アスカの口から飛び出たのは、蓮夜達の勝利を認める自らの敗北宣言。そんな思わぬ発言に響達も呆気にと取られて思わず構えを緩めながら間の抜けた返事を返してしまうが、蓮夜はその言葉を疑うように目を細め淡々とした口調で問い掛ける。

「どういふ風の吹き回しだ……？あれだけ俺達を消す事に固執していたお前が、こんなにもあつさり敗北を認めるだなんて……」

「どうもこうもねえさ……実際のところ、お前達の力を見誤ったせいで優勢だった筈の俺達の盤は派手にひっくり返されて、一発逆転のサヨナラホームラン負け……お前達の勝ちを認めるのは癪だが、俺の失態って点から見れば、この結果自体は認めるしかねえだろーって話だ……」

「……………」

そう言って自嘲気味に、乾いた笑みを漏らすアスカの言葉に嘘が含まれてるようには感じられない。しかしだからと言って今すぐその全てを信じ切るべきではないが、一先ず奴にこちらを襲う意思がないのは伝わり、蓮夜は警戒心を僅かに緩めてベルトを持つ

手を下げると、それを見たアスカは僅かに口端を吊り上げる。

「いいのかよ、今の内にトドメ刺さなくて……」

「……本音を言えば今すぐにでもそうしたい所だ……ただ、俺もクリスもお前を倒す為  
に持てる力を全て出し切って余力なんて残っていない……それが出来るとすれば、後は  
……」

「……っ」

隣に立つ響……自分とクリスを除けばこの中で唯一レイザーを倒せる記号の力を  
持つ彼女の方に目を見やると、響は拳こそ握り締めて臨戦態勢を取ってはいるが、その  
表情は複雑げだ。

やはり敵とは言えど、深手を負つてもう戦う事も出来ない相手を一方的に痛め付ける  
など心優しい彼女に出来る筈もないが、だからといってこのまま奴を野放ししておく  
訳にもいかない。



そう考えながら蓮夜は僅かに思考するように一度目を伏せると、瞼をゆっくり開き、アスカをまつすぐ見据えながら淡々とした声音で告げる。

「それにお前は、他のイレイザー達の目論見を知る貴重な情報源でもある。素直に負けを認めるといふなら、このまま大人しく投降しろ……そうすれば命までは取らないし、お前の処遇に関しても、俺の方からS・O・N・Gに幾らか融通を効かせられるように口聞きを——」

此処で奴を拘束出来れば、自分も忘れてしまつてるイレイザー達の最終目的や今後の動きを知る事が出来るかもしれない。

何よりもイレイザー達の行動方針に先手を打つ事さえ叶えば、これから先の戦いで生まれるであろうイレイザー達による被害も最小限に抑えられる事も可能な筈だ。

ならばこの好機を逃す手はない。此処でアスカを倒してしまうよりも拘束してしまひ、響達の世界に連れ帰つてからイレイザー達の目的を一から全て吐かせる。

響の手を汚せられない以上、今はそれが最善の手であると踏んだ蓮夜からの誘いに対しアスカは前髪で顔を隠したまま俯き、何故かクツクツと喉を鳴らして笑う。

「そいつはまた意外なこった……あれだけやらかした俺にそんな寛大な処置を提示してくれるなんて、随分お優しい事じゃないか——

——そんな甘っちょろい考えだから、こうやって命取りになるんだよ……」

—ゴオオオオオオオツツツツツツ  
!!!!!!——

「!!?」

「な、なんだっ?!?」

前髪越しに蓮夜達を睨み付けながらアスカがそう呟いた次の瞬間、アスカの全身から

突如けたたましい爆音と共に紅の衝撃波が放たれ、半径数十メートルがとてつもない熱気に包まれたのである。

思わぬ不意打ちに危うく吹き飛ばされそうになりながらも蓮夜達は何とか踏み止まり、響と調と切歌も咄嗟に出ながらアームドギアや両腕を盾に用いて風太郎達を衝撃波から庇う中、蓮夜は片腕で自分の顔を庇いながら全身から衝撃波を放ち続けるアス力を睨み付ける。

「お前つ、何のつもりだ……?!俺達に負けを認めるんじやなかったのかっ?!」

「ああ……この勝負は確かに俺の負けだ……でもだからってテメエや、記号の力に目覚めた立花響と雪音クリス、そしてその可能性を秘めた其処の装者二人をみすみすあの世界に帰す訳にはいかねえ……何よりこのままテメエ等に生殺与奪の権利を握らせるくらいなら、俺は自分から死を選ばず……テメエ等や其処の連中を巻き添えに、この世界を吹っ飛ばしてなあッ……!!!」

「なっ……」

「それって、まさか……!!」

「じ、自爆するつもりデスかつ!!」

自らの命と引き換えに、蓮夜達を巻き込んでこの世界を丸ごと吹き飛ばす。追い詰められたあまりとんでもない暴拳に出たアスカに流石の蓮夜も絶句し、調や切歌、風太郎達も驚愕と動揺を露わにする中、同じように驚きを浮かべていた響はいち早く我に返り、すぐさま拳を構えた。

「そんな事はさせない!!自爆するより先に、貴方を止めさえすれば——!!」

「ハッ、やめとけよ……今更俺を拘束した所で、俺の意志一つで自爆する事なんざワケねえんだ……まあ、仮に俺を殺しさえせば方に一つにでも止められるかもしれないねえが……その拳でまた殺すのか？前のあのイレイザーみたく、この俺を……？なあ、立花響よお？」

「う……………っ……………！」

「貴様っ……………！」

ニイツと、嘗て蓮夜と響が倒したフロッグレイザーの件を持ち出して不敵に笑うアスカに対し、響の顔が悲痛げに歪んで拳が覚悟と共に僅かに揺らぐ。

そんな彼女の心の傷に触れるような卑劣な真似をするアスカに蓮夜も怒りに満ちた眼差しで睨み付けるが、アスカは構わず蓮夜達を見据えたまま淡々と言葉を続ける。

「テメエ等からしてみれば俺達も、この戦いも外敵から世界を守る為ってだけの戦いしか過ぎねえのかもしれないがな……………俺らからすれば、テメエ等との戦いはいつだって生存競争だ……………俺達が生きられる世界を勝ち取る為に、その未来へ繋げる為なら何を犠牲にしても、どんな汚え手だつて使つてやるよ……………!! 仮にそれが俺自身の命であろうとなあッ!!」

「くっ……………！」

アスカの感情の昂りに呼応するように、紅の衝撃波の勢いが更に増し、アスカを中心に足元から全方位に向けて巨大な亀裂が大地の上を駆け走っていく。

その気迫、その圧倒的な光景からアスカが本気で自分諸共、この世界や自分達を巻き込んで自滅するつもりなのだ と理解し、蓮夜は腰にクロスベルトを巻き付けながら思考を速く駆け巡らせる。

（どうするっ、相打ち覚悟で奴の息の根を止めるかっ？ いや、此処まで力が膨れ上がってる状態で下手に衝撃を加えればその瞬間に爆発を起こす危険性があるっ……響達が乗ってきた俺のマシンを利用して、奴を次元の向こうへと追いやるのは……？ 駄目だ、奴の爆発にマシンが巻き込まれれば結局響達を元の世界へ帰す手段がなくなるっ……どうすればいい、他に何か手は——！）

思考に思考を重ねている間にも、アスカの身体に凝縮されてゆく膨大なエネルギーが増すにつれて辺り一面に広がる亀裂が蓮夜達にも牙を剥き、地面が破壊されて無数の破片が宙を舞い、風が吹き荒んで嵐と化し、負傷でまともに動けないクリスや風太郎達を

必死に守る響達も苦痛で顔が歪み徐々にソレに耐え切れなくなりつつある。

その凄惨な惨状を前にし最早迷っている時間はないと、蓮夜は一か八かの賭けに出るべく、クロスに再変身しようと左腰のケースから取り出したカードをバツクルに装填し掛けた、その時……

「——おいおい、それは流石に破れかぶれが過ぎるんじゃないかい？」

何処からともなく響き渡る、軽薄で、飄々とした声。

直後、アスカの足元から突然巨大な水の柱が溢れ出し、それはまるで意思を持っていくかのように独りでに動いてアスカを包み込み、玉状の水の牢獄と化してアスカを捕らえてしまったのであった。

「なっ……」

「な、何だ……？水が勝手に湧いて出て……?!」

「——っ?!? ——っっ?!?」

突如アスカを捕らえるように現れた水の牢獄を目にし、蓮夜達も予想だにしていなかった展開を前に目を白黒させて戸惑いを隠せずにいる。

アスカ自身も何が起きたのかわかっていないのか、水の牢獄の中で困惑の表情を露わに何かを叫ぼうとしているが、水の中ではまともに喋れる筈もなく、吐き出す言葉はゴバアツ！と無数の泡となつて消え蓮夜達の耳にも届かない。其処へ……

「……全くさあ。苦し紛れに自爆とか、そんなダツサイ真似止めときなつて。人間生きててナンボのもんつて言うし、せつかく拾った命をこんな所で捨ててたらもつたいないよー?」



先程聞こえた飄々とした声と共に、アスカが捕らえられる水の牢獄の背後から誰かが現れる。

歩く度に風で毛先が揺れる青い髪、深い青の革ジャンを着込んだ青年……この五分の花嫁の物語にアスカを誘うきっかけを与え、響達の世界に残っていた筈のクレンが現れ、アスカを捕らえた水の牢獄の前に移動しながら蓮夜達の前に立ち塞がったのである。

「あ、貴方は……?」

「やあやあ。こうして直接会うのは初めましてかな、装者の皆さん? あ、蓮夜君の場合は久しぶりだっけ? と言っても、今の君が僕の事を覚えてる訳がないけど」

「……久しぶり?」

「どういう事だ? と、クレンの言葉の意図が読めず響達の頭上に疑問符が浮かび上がる

が、そんな中一人、蓮夜だけはクレンを凝視しながらその表情は驚愕に染まり、徐々に明確な敵意を露わにした顔付きへと変わりながらクレンを鋭く睨み付ける。

「この、気配は……お前、イレイザーかつ……?!」

「そつ。んー、君も覚えてないようだし、改めて名乗った方がいいかな？ 僕の名前はクレン。んで、こつちがアスカね。今度はちやんと覚えててくれていると嬉しいかなあ……なんて、記憶を失うきつかけを作った僕が言えた義理じゃないかあ」

「ッ……」

あつはははっ！と人当たりの良さそうな笑顔を浮かべて白々しく戯けてみせるクレンだが、蓮夜の方は先程よりも張り詰めた表情を浮かべて額から冷や汗を流していく。

イレイザーの気配を読める蓮夜にしか分からないが、あのクレンからはアスカと同等の力を感じる。つまりそれは、奴もアスカと同じ上級のイレイザーであることを意味するという事だ。

こんな満身創痍でまともに戦う余力すら残されていない状態の中、よりにもよって二人目の上級レイザーが現れるなど予想出来る筈もなし、分が悪いだなんて話じゃない。

もし仮に奴がその気になって再び戦いになどなれば、今のこの有り様では奴に勝てる見込みなんて絶対にある筈がない。最悪、此処にいる全員が奴一人の手によって皆殺しにされるかもしれない。

想定外が過ぎる不測の事態、ピンチに相次ぐピンチに直面し蓮夜も内心追い詰められて焦燥に駆られる中、クレンはそんな蓮夜の心境を悟ったかのように苦笑いを浮かべながら両手を前に軽く振る。

「ああ、そんなに警戒しなくても大丈夫だよ？こっちはアスカを回収しに来ただけで、別に今すぐ君達をどうしようってつもりはないから、安心していいよ」

「「……………え？」」

「なん……………だと……………」

今の自分に蓮夜達と戦う意思はない。飄々とした口調はそのままに、ハッキリとそう告げたクレンの意外な言葉に響達や蓮夜も目を点にして呆気に取られてしまう中、水の牢獄の中に囚われるアスカが呼吸もままならない様子で喉を抑えながらもがき苦しみ、それに気付いたクレンが「おつと、危ない危ない」と軽い調子で指を軽く鳴らした瞬間、水の牢獄は霧散し、中に囚われていたアスカは解放され水浸しの状態で地面に倒れ、何度も激しく咳き込みながら涙目でクレンを見上げ睨み付けた。

「ゲホツ、ゲホツゲホオツ!!ゼエツ、ゼエツ……………!ク、クレンお前つ、一体何のつもりだ……………?!どうして俺の邪魔をしやがるっ?!」

「どうもこうもないよ。今此処で君を失うのは僕達にとつてもかなりの痛手になる。……………それに、彼から伝言を預かってね。それを君に伝える為にこうしてわざわざ足を運んだって訳さ」

「……………？伝言、だと……………？」

クレンが指す彼とは、きつと間違いなくデュレンの事だ。

そんな彼から言伝を預かったというクレンの言葉にアスカも思わず怪訝な反応を返すのを横目に、クレンは蓮夜達の方を一瞥しながら一同に聞かれぬよう顔を近付け、その伝言とやらを淡々とした口調で告げていく。

『新種のイレイザーの検証を重ねた結果、我々の今後の方針が変わった。黒月蓮夜達はまだこの段階で殺すな』……………それが君に伝えるように彼から頼まれた伝言って奴だよ」

「!!? なっ……………あ……………なん、だってっ……………!!?」

驚愕のあまり、思わずクレンから身を離れたアスカは目を剥いて言葉を失ってしまった。  
う。

あれだけ自分達が苦勞して用意してきた手駒を次々に殺し、更には今正に新たな脅威

として覚醒しつつある蓮夜達をわざわざ見逃せなどと、何をどうすればそんなふざけた結論に至れるというのか。

激しく困惑するアスカを他所にクレンはといえば何時もの澄ました顔で飄々とした態度を一切崩そうとせず、それが逆に未だ驚くばかりだったアスカの内から怒りの炎を滾らせて正気に返し、ふらつく足取りで身を起こしながらクレンの胸ぐらを乱暴に掴んだ。

「どういうことだつ、何考えてんだよアイツはっ!!? 奴等の排除は俺達の目的を果たす為にも最優先事項だったハズだろうがっ!!? 記号持ちがもう二人も覚醒しちまつてるんだぞっ!!? 此処でやらなきや取り返しが付かなくなるってのにつ、なのに、なんでそんな……!!」

「さあ? 僕も其処まで詳しく聞かされてる訳じゃないし、生憎君を納得させられる答えなんて持ち合わせていないよ。そんなに気になるんなら、帰って直接本人に問い質すなりすればいいじゃない?」

「今此処で納得出来なきや意味ねえつつてんだよっ!! 奴等を纏めて消すなら今しかねえっ!! じゃなきや、ここまで俺らがやってきた事が全部無駄になるってんだぞっ?!」

そうだ。わざわざこんな別の物語にまで蓮夜達を跳ばすなんて手間を増やし、此処まで無様に敗北した上に手駒の一つのイレイザーを失ってまで得た成果が自分達を殺せる存在を生み出したただけなどと割に合わない過ぎる。

それでは最初にこの話を持ち掛けたお前の意にもそぐわぬのではないかと、あくまで冷静な態度を変えようとしないうクレンを突き飛ばして怒鳴るアスカに対し、クレンやはり落ち着き払った調子で乱れた服を整えながら軽薄に告げる。

「僕だって別に彼の意見に全面的に賛同してるって訳じゃないさ。ただ、此処で彼の意に反するのもそれはそれでリスクが高いだろうなーと思っただけ。……君だって、本気になった彼を敵に回したいとは思わないだろ……?」

「…………ツ…………」

最後の一言の声のトーンは低く、流し目で見つめるクレンの瞳は平時の人当たりの良さそうなソレとは違う。

まるで氷のように冷やややかで、何処までも冷徹な眼差しに射抜かれたアスカは思わず口を噤んでしまい、クレンはそんなアスカを一瞥して突然口論を始めた自分達のやり取りを見て呆気に取りられる蓮夜達の方へ振り返ると共に、先程と同様に飄々とした掴み所のない笑顔で手を軽く振るう。

「まあそういう訳で、アスカはこのまま連れて帰らせてもらうから今回の勝負、君達の勝ちって事にしてくれて構わないよ。その方が今はお互いの為だと思うし……そっちだつていざやり合うつてなつたら、そんなザマで僕を相手に此処から勝てる見込みなんて無いでしょ？」

「っ、くっ……」

それで手打ちにしようよと話を持ち掛けるクレンの提案に何か反論を返したい蓮夜だが、実際のところ、その提案を蹴つてクレンと此処で相對する事になれば自分を含め



て響達の誰が犠牲になつてしまふ危険性は拭え去れない。

風太郎や五月達を救い出すという目的も果たした以上、今此処で奴と敵対するメリットはそんなにはない。

此処まで苦勞して倒した相手をみすみす見逃すなど相当癪に障るが、今はこの場にいたる全員の生命の保証を優先にし、蓮夜はクレンを睨み付けたまま徐にカードを手にした構えを解き、それを合意と受け取ったクレンは微笑を浮かべながら自らの手を中空に掲げ、掌の上に半透明の本を出現させる。

「賢明な判断が出来て助かるよ。……ああ、それからもう一つ。アスカを真正面から倒した君達の健闘を称えて、この物語には暫くは手を出さないって保証してあげるよ。流石に此処まで派手に暴れ回った以上、この物語に僕らの存在が勘付かれるのも時間の問題だしね。それまでは東の間の安寧って奴を享受するといひさ」

「……東の間で終わらせてたまるものか……お前達が何度この世界に魔の手を伸ばそうと、もう誰も犠牲になんてさせない……今の俺はもう一人じゃない、心の底から頼れる

仲間達が付いているんだからな……」

「……お前……」

「蓮夜さん……」

だから決して屈しはしない。何度お前達が立ち塞がろうと、今の自分はもう何もかも一人で背負って戦っていた頃とは違うのだと、クレンとアス力を正面から見据えながら改めて己の決意を突き付ける蓮夜の言葉にクリスと響も一瞬驚きで目を見張るも、すぐにその顔に嬉しさから笑みを浮かべていき、調と切歌もお互いに顔を見合わせて力強く領きながらクレンとアス力をまっすぐ睨み付ける。

そしてクレンもそんな蓮夜達の力強い表情を一人一人見回すと、静かに瞼を伏せて僅かに微笑を浮かべてみせた。

「いいねえ。そうでなくっちゃ張り合いがない。僕個人としても大いに期待しているよ……君の場合は特に、ね……」

「……………」

そう語りながら蓮夜を見つめるクレンの意味深な最後の言葉はあまりにも小さく、上手く声を聞き取れず蓮夜の顔が訝しげに歪むが、それを追求するよりも先にクレンはアスカを連れて転移を開始していき、無数の文字状の粒子と化した二人が消え去ったその場にはクレン達が消えた場所を見つめる蓮夜達だけが取り残されたのであった。



——その後、クレンとアスカの撤退を見届けた蓮夜とクリス、そしてイレイザーに数日間攫われていた一花達は装者達や風太郎等の手を借りて街の病院に運ばれ、厄介になる事となった。

医者の診察結果では一花達の方は大した外傷もなく、数日程して目覚めればすぐに快晴になれるだろうと診断され一先ず安堵していたのだが、問題は蓮夜やクリスの方だった。

元の世界での戦いで負った傷に加えて、この世界でのイグニスレイザー達との立て続けの戦闘で流石に無茶をし続けてしまい、病院に担ぎ込まれた途端体中から血を流す二人を目にした医者達は揃って血相を変え、院内が騒然と化した際には流石の二人も流されるまま気まずげに治療を受け、数日程の入院を余儀なくされてしまった。

因みに二人の治療などが色々落ち着いた後、蓮夜は病室で響から「またこんなボロボロになるまで無茶をして！」とお説教されるハメになってしまい、響のお説教を蓮夜がベッドの上で正座して頂垂れながら申し訳なきような様子で聞いている間、そんな蓮夜の隣のベッドでクリスはお見舞いに来た五月が持参したリング等のフルーツを齧りながら二人のやり取りを見て「無茶するなどのボロボロだの、お前どの立場からソレ言うてんだ……」的な呆れた眼差しを響に向けていたそう。

そして二人が入院で動けない間、響達は蓮夜からの頼みでクロスレイダーの次元転移

システムの起動実験を行ってもらい、元の世界でエルフナイン達から教わった起動手順を頼りに試行錯誤を繰り返しながらも何とか再びシステムを起動させ、元の世界でS・O・N・G・が行っていた稼働実験と同様に時空間を移動する次元転移が再び可能となったようだ。そして、その後……



「——本当にもう行ってしまわれるのですね……」

イグニスレイザー達との激闘から数日が経ち、この世界に来てから何度目かを迎えた早朝。

蓮夜達がお世話になった病院の前にて、何処か寂しげな声音でそう呟く五月と、そんな彼女の隣には何処となく五月と同じ心境を滲ませた表情を浮かべる風太郎の姿があった。

そしてそんな二人に見送られ、未だ身体の各所に白い包帯を巻き付け、頬などにはガーゼを貼り、右腕にはギブスを巻き付けた蓮夜とクリスも風太郎と五月の別れを惜しんでるような反応に目尻を下げて困ったように苦笑いを浮かべていた。

「ま、元の世界に帰れる手段も思いがけず手に入った事だし、二度もお前に入院代を肩代わりしてもらってこれ以上厄介になるってのも悪いからな。……それに、あたし等の世界にはまだあのイレイザー達の問題が残ってる訳だしよ」

「俺のマシンを利用した響達が何度かあつちの世界と往復して、向こうの状況を逐一伝えてくれた感じだとイレイザー達にまだ目立った動きはなさそうだが、それでもきつと奴らの事だ。こうしている間にも水面下で何かしら動いていると思う。それに備えて、奴らと戦える俺達も何時でも対応が効くように向こうで待機しておく必要があるからな……此処まで散々世話になった礼さえ口々に返せず、申し訳ない気持ちで沢山ではあるんだが……」

「い、いえそんな……！お二人は約束通り、一花達を見つけ出してくれただけでなく、私

達の命まで救って頂いて……寧ろ、此処まで身体を張ってもらったのに大したお礼も出来ず、逆に申し訳ないくらいです……」

「相変わらず律儀な奴だなあ……ま、今となっちゃそれもお前の美点の一つだと思っ  
どよ」

「俺から言わせれば、ただの生真面目バカとしか言いようがないけどな——ドゴオツ！——  
ごっつふ?!」

呆れた様子で笑うクリスの言葉に溜め息交じりにやれやれと余計な一言を返す風太郎の脇腹に、五月の高速肘付きが横から炸裂する。

「おおおおおっ……!」と苦悶の声を上げて脇腹を抑えながら悶絶する風太郎を横目に五月も拗ねたような顔を浮かべるも、すぐにまた寂しげな表情を浮かべて蓮夜とクリスの顔を交互に見やる。

「それにお礼とかを抜きにしても、やっぱり寂しく思います……せつかくお二人とも仲

良くなれて、目が覚めた一花達にも紹介したいと思つていましたから、尚更……」

「その気持ちだけでも受け取つておくさ。それに、別にこれで今生の別れになるつて訳でもなさうだしな」

「……え？」

「ああ。あのクレンとかいうイレイザーの言葉に嘘偽りがないのなら、奴らはまだ完全によこの世界から手を引いた訳じゃない……だからこちらも別世界を行き来出来る移動手段が手に入った以上、奴らがまたこの世界で暗躍してないか確認する為に、これからも定期的にこの世界へ様子見しに来ようと思つてる」

「！じゃあ、これからもお二人に会える機会はあるんですね！」

「ぱあつと、これで今生の別れになるかと思われていた二人と今後も再会出来る可能性があると理解した途端、五月の表情が花開くように明るくなるが、そんな彼女の反応に蓮夜は若干複雑げに苦笑いを返す。



「とは言え、それも逆に言えばお前達がまた奴らによつて危険に巻き込まれる可能性が残っているという事だ……そう考えると、あまり大手を振って喜べる物でもないんだが……」

「つ……まあ、確かにこれ以上の厄介事なんぞ俺も御免だな……俺もコイツらの面倒を見るのに手一杯だし、こんなこと、ずっと続けられていちやこつちもいつまで経つてもロクに勉強が進められん」

「……そう、だな……せめて奴らを倒し切れてさえいけば、向こうも痛手を負つてこの世界から完全に手を引かせる事も出来たかもしれない。それが出来なかったのは完全に俺達の力不足だ……すまない……」

本当なら、彼等にはもうイレイザーの脅威に怯える事のない平穏な暮らしを過ごせるようにしたかった。

せめてあの時アスカだけでも倒し切れていればその可能性を掴めたやもしれないの

に、それだけが心残りでならず、蓮夜は己の力不足を悔いて風太郎達に申し訳なきように頭を下げるが、それに対し風太郎は一瞬間を食らったように戸惑った後、何処かバツが悪そうに頬を指で搔きながら目を逸らしす。

「別に、アンタ達を責めるつもりなんてねえさ。……たださっきの口振りから、何か事件でも起きなきや俺達とは会えないみたいない方がどうにも引つ掛かったってだけだ」

「……………え」

「上杉君の言う通りですよ。今度はイレイザーや事件とか関係なく、また何時でも遊びに来てください。その時は取り引きとか抜きに、ただの友人として皆さんをお招きしますから！」

風太郎が言わんとしてる事を補うように、五月はそう言つて両手を合わせながら蓮夜達と次に会える事を気を早く楽しみに微笑む。

そんな二人の予想もしていなかった暖かな言葉に蓮夜とクリスマスも一瞬呆気に取られ

た顔で互いに目を合わせ、直後に可笑しげに嘖き出しながら風太郎達に向けて頷き返すと、病院前に停めてあるクロスレイダーを調と切歌と共に操作し、元の世界に戻る準備を進めていた響が入口の方から蓮夜達に手を振りながら大きな声で呼び掛ける。

「蓮夜さん！ 転移の準備出来ました！ こっちは何時でも出発出来ますよー！」

「ああ、ありがとう。……じゃあ、一先ず此処でお別れだな」

「あたし等が死ぬ気になって、やっと勝ち取った平穏なんだ。これを機に遅れた分を取り返すだけじゃなくて、今まで以上に勉強にも力入れろよ？ もしこれで進学は無理でしたーなんて、後から聞かされた日には流石に目も当てられねえしな」

「も、勿論そのつもりです！ 皆さんが此処まで死力を尽くしてくれた訳ですから、次にお会いする時には雪音さん達が驚く程の成長を遂げてみせます！……多分……」

「其処はせめて嘘でもいいから言い切れよっ」

相変わらず馬鹿真面目な奴だなと、嘘も吐けず両手の人差し指の爪先をツンツンさせながら自信なさげに目線を逸らしてしまふ五月に呆れつつも、そんな彼女とのやり取りにも何処か楽しげな様子で苦笑するクリス。

そしてそんな彼女を横目に蓮夜も安堵を露わに微笑する中、風太郎が蓮夜に顔を寄せて小声で話し掛けていく。

「他人事みたいに笑ってる場合じゃないだろ。アンタもこれから変な誤解されるような振る舞いとかが控えろよ？ 今度また来た時に同じ相談とかされちゃたまったもんじゃないからな」

「……そうだな。その件でお前達にも見苦しい所を見せたり、相談に乗ってもらったりとかと何かと迷惑を掛けてしまったし、今後は俺もその辺に気を配るように心掛けようと思う……それを実践出来るかどうかはまた別の話になるんだが……」

正直また何かやらかしそうで恐ろしいなあ……と、今回は風太郎の助言もあり何とかなったが、元の世界に戻ってからまた自分が余計な失言をして周りに変な勘違いをさせ

てしまうのではなからうかと今から不安がって苦笑いを浮かべる蓮夜。

そんなこの間の戦いで頼もしさも何処へやら、情けなく弱気な姿を見せる蓮夜の顔を見て風太郎も呆れたように溜め息を吐きつつ、両手を腰に当てて言葉を返す。

「今からそんなんでどうするんだよ……。あんだけ相談し合つて、無理かもしれないと思つてたあの子とも腹を割つて話して分かり合う事が出来たんだろ？ だつたらその調子で行けば何も怖がる事なんざないだろ」

「それはまあ、そうなんだが……」

「……まあ、そんなに不安だつてんなら、今の内にまだ言つてない事とか、アンタが思つてる事とか、全部包み隠さずにあの子達に話しておけばいいんじゃないのか？ アンタ、そういうのに恥とか抵抗とか持つてなさそうだし、そうすりや誤解とかもされる事なく人間関係がギスギスする事もなくなるだろ？」

「……包み隠さず……全部、か……」

煮え切らない態度の蓮夜にいい加減痺れを切らし、若干投げやりな口調で適当にしか聞こえないアドバイスをする風太郎だが、蓮夜はその助言に何かを感じ入ったのか真剣な表情で俯いて何やら熟考し、やがて何か得心を得たのか釈然とした様子で力強く頷き返した。

「そうだな。お前の言う通り、余計な軋轢を生んでしまう前にこちらから先に本音を全て打ち明けてしまえばいいだけの話なんだし、やってみようと思う……何度もこうして悩みを聞いてくれてありがとう、風太郎」

「……本当に見掛けに寄らず素直過ぎる奴だな、アンタ……まあ、それでもそんなアンタだから、俺も……」

「……？何か言ったか？」

「……別に。ただ人が良過ぎるのも考えモノだとボヤいただけだ。多分四葉といい勝負になるだろうぜ、アンタ」

そう言つて蓮夜から顔を逸しながら、何かを誤魔化すように憎まれ口を返す風太郎。しかし蓮夜は特に気を悪くする訳でもなく「そうか……」とだけ返しながら小さく微笑み、そんな悪態もロクに通用しない蓮夜の反応を横目に風太郎も何処かバツが悪そうに頭を掻く中、先に五月との別れの挨拶を済ませたクリスが少し離れた所から蓮夜に向けて呼び掛けた。

「おーい、そろそろいくぞー」

「ああ、すまない。……じゃあ、二人共。どうか元気で」

「はい、黒月さんもお元気で。ほら、上杉君も！」

「………………。今度来る時には家にも寄っていけ。その時は、まあ……気が向いたら、親父と妹も紹介してやるよ」

「…………分かった。クリスマス達と一緒に、今から楽しみにしてる」

最後までぶつきらぼうに、しかし不器用ながらも次に会えた時の約束を交わしてくれる風太郎に穏やかな笑みで頷き返すと、蓮夜はその後、一言二言言葉を交わした後にそのまま二人と別れ、クリスと共に肩を並べて響達の下へと向かっていく。

「何か随分と話し込んでたな。何話してたんだよ、最後？」

「別段大した話をしてた訳じゃないんだ。ただ次に会えて気が向いたら、家族を紹介すると風太郎が言ってくれてな……それだけの信頼を得られたんだと思うと嬉しくて、今は何だか別れが物凄く口惜しく感じる」

「……まあ、心配しなくてもどうせまたすぐ近い内に会えるんじゃないか？この世界には様子見しに来るってさつきも伝えたんだし、今度来る時には手土産でも持って邪魔すりゃいいだろうぜ」

「……………もしや、落ち込んでる俺の事を励ましてくれるのか？」



「べ、別にそんなんじやねえよ……！単にお前があまりに辛気臭い顔してっから見てらんなかっただけで、それ以外に他意なんざある訳ないだろっ」

首を傾げる蓮夜に素朴な疑問を投げ付けられた途端慌てふためき、そっぽを向きながら必死にそう否定するクリスの耳の先が仄かに赤く染まつてるのが見え、それが彼女なりの照れ隠しなのだと今なら分かる。

そんなクリスの反応を見て苦笑いを浮かべると、蓮夜は静かに瞼を伏せ、二人でこの世界に飛ばされてからの記憶を思い返していく。

「けれど、お前にも本当に感謝してる……最初は俺も想定外の事態に巻き込まれて、気持ちばかりが焦って空回りしてしまつて……お前の言葉で目が覚めて、自分を見つめ直す事が出来た……お前がいなかったら、今頃きつと俺は奴らに勝つ事も、風太郎達を守り切る事も叶わなかったと思う」

「………………。そんなの、あたしだって同じだ」

「……」

ボソツと、感謝の言葉を口にする蓮夜から顔を背けたままクリスが小声でそう呟き、その声を上手く聞き取れなかった蓮夜が怪訝な顔でクリスの後ろ姿をジツと見つめると、クリスは足を止めて俯き加減のまま何やら逡巡する素振りを見せた後、何処となく神妙な口調で口を開いていく。

「お前に変な対抗心を抱いて、勝手に突つ走つた挙句に知らねえ世界に跳ばされて……もしあたし一人だったら、自分の事だけで手一杯でアイツ等を助ける所じやなかったと思う……。そうなりや、お前とちやんと向き合うきっかけも、その為の教えをアイツから乞う機会だつてなかったかもしれない……。それが出来たのも、色んな不安を拭えなくて燻つてたあたしをお前が気遣つてくれたおかげだつて、そう思つてる……」

だから、まあ、なんだ……と、クリスはガーゼ越しに頬を人差し指で掻きながら言葉を探すように逡巡すると、一瞬だけ目を伏せ、意を決したように蓮夜の方に目を向けながら照れくさく、不器用に微笑む。

「……お前が傍にいてくれた事とか、あたしらの世界に来てくれた事とか……今は本当に、心の底から感謝してる……お前と出逢えて良かったし、あの馬鹿やあたし等を助けてくれて……ほんと、あんがとな」

昇る朝日が遠くのビルの隙間から差す光を背に、改めて蓮夜に今までの事を含めて感謝の言葉を口にしながら微笑むクリスのその笑顔は、とても美しく、まるで一つの名画でも見ているかのように幻想的で目が離せず、思わず見惚れてしまう。

そんな彼女の笑顔に何か高鳴る物を覚え、蓮夜はそつと己の胸を包帯を巻いた左手で抑えて何やら思考すると、やがて何かに納得したように目を伏せて小さく微笑んだ。

「ちゃんと素直な気持ちで、誤解される事なく、か……なるほど、そうか……」

「……？な、何だよ、あたしなんか変な事でも言っつてっ——」

「クリス」

もしや散々あんな態度取っておいて、今更都合がいい事をとでも思われているのかと戸惑い若干身構えてしまうクリスだが、徐に瞼を開いた蓮夜はそんな彼女の目をまっすぐに見つめ、

「俺は、お前の事が好きだ」

「」

.....。

「は？」

ポカんと、何の一切前触れもなく、アツサリと、自分の目をまっすぐに見据えて淀みなくハッキリとそう告げた蓮夜のその一言に、クリスは思わず呆気を取られて思考停止してしまった。

なんだ。コイツ、一体、急に、何言い出した???

脈略もなく、いきなり過ぎる急展開を前に困惑と疑問、その他諸々の感情が停止してしまった思考に反して彼女の中で目まぐるしくゴチャゴチャに入り乱れてしまう中、そんなクリスの複雑な心境など露知らず、蓮夜はクリスの目を真剣な眼差しでジツと見つ

めたまま更に言葉を続けていく。

「本当ならこんな気持ち、俺に告げる資格なんかないと自覚してる。お前からしてみればきつと迷惑にしかならないし、困るとは思うんだが……それでも、俺の素直な気持ちを伝えたい、お前に知っていて欲しいと思っってしまったんだ。すまない」

「……………すつ、すまな、い、ってっ……お、おまつ、おおおまえっ！謝って済む問題かよソレっ!!?い、いきなりにも程があるっつかつ、脈略が無さすぎて意味が分かるねえっていうかつ……!!い、いや、というかつ、そもそも好きってなんだ好きってっ!!?あ、あたしがお前に好かれるような要素なんざ何にもないだろっ!!?あんだだけお前にキツく当たってきたんだぞっ!!?嫌われたって可笑しくないっつかつ、寧ろそっちの方が自然だろ普通っ!!?」

思考停止から復帰した途端、蓮夜からの突然の告白にやつと理解が追い付いたクリスは首元から顔まで面白いぐらい真っ赤に染まりながら、混乱のあまりまともに口も回らないまま堰を切ったように捲し立ててしまうが、一方の蓮夜はそんな彼女の言葉の意味をまるで理解していないかののように頭上に疑問符を浮かべながら小首を傾げ、

「いや、俺がお前を嫌いになる要素なんてないだろう？そもそもお前の反感を買ってしまったのは俺の配慮が足らなかつたのが原因なのだし……それに、お前のソレも元々は響を想ってからの物だと理解してる。仲間を思いやるお前のそれは美德の一つであると思うし、欠点なんかと思わない。きつと、俺はお前のそういう部分にも惹かれたんだと思う」

「そつ、あ……つ……そうは、言つたつて、だなつ……！急にも程があんだろつ?!大体好きつてつ、あたしなんかの何処を見てそんなつ……!」

「その答えの一つなら、今も言つた通りだ。仲間想いで、不器用に優しく、けれど責任を背負いがちな真面目で危うい部分もあつて……鳥濱がましいと理解していても、それでも許されるならそんなお前の助けになれる、傍で支えられる存在になりたい……さっきのお前の綺麗な笑顔に見惚れた時、そう在りたいと思う自分がいる事に気付いた」

「うあつ、あ……!おまつ……う、ううつ……!」

うあうあつ……と、恥も外聞もなくそんな台詞をツラツラと告げる蓮夜の顔をまともに直視する事もままならず、クリスは赤くなつた顔の額から大量の汗を伝らせ、視線も泳ぎまくつて完全に挙動不審になつてしまつてゐる。

そんなクリスの様子から、やはりこんな事を言われても迷惑でしか無かつたかと察し、蓮夜は苦笑いを浮かべながら言葉を續けていく。

「勿論、俺なんかがお前と釣り合いの取れる人間じゃないと重々理解してる。記憶もなく、自分の世話すらままならず、知らず知らずの内にお前に不快な思いをさせてしまうような甲斐性なしだからな、俺は……だからお前が迷惑でなければ、片思い……と、呼んだらいいんだろうか？せめて、お前を好きでい続ける事を許してはもらえないか？」

「ばつっ——  
!!!!?」

伝える言葉に何の飾りも一切なく、風太郎に教わつた通り己の気持ちを誤解しようがない、ありのまままつすぐにそう言い切る蓮夜からの改めての告白。



それを前に何も言葉を返せずにしどろもどろになってばかりだったクリスもオーバリアクション気味に後退りし、その顔はもうこれ以上ないほど真っ赤に染まり切つて目に見えて限界だと人目で分かるのだが、当の蓮夜はと言えばそんな事に気付かず不安げな様子でクリスに顔を近付け、

「すまん、もしやまた言葉が足りていなかったか……？その……俺が言うお前への好きというの、確かに異性としての好きというモノで間違いはなくてだな……あ、いや、もしかしてお前の内面に惹かれたからと言つて外見が劣つているとか、そんな意味合いに聞こえてしまったとかか……？だとしたらそんなつもりはないんだ。寧ろ俺なんかじゃ釣り合いが取れないぐらい容姿も可憐で整つているし、髪色も思わず見蕩れてしまうほど綺麗だと思つて、実際にこうして会話しているだけでも鼓動が不規則に速くなるぐらい魅力があつて、ええと、他にも……」

「~~~~~つつつつつ  
!!!!!!!」



数分後……

「——あー、いたいた！もう遅いよ二人共ー！何時まで待っても来ないから何かあったんじゃないかって心配に……って、ク、クリスマスちゃん？どうしたの？なんか顔が凄く赤く……？」

「何でもねえよほつとけさつさと帰るぞバカアつつつ！！！！」

「え、なんでいきなり罵倒されたの私?! っていうか何をそんな怒って……って、蓮夜さん?! ど、どうしたんですかその顔?!」

「……………いや、ウン、まあ、何といえはいんだろうな……………どうやら俺はまた懲りもせず、彼女の不興を買ってしまったらしい……………」

「??？」

ズンズンズンツ！と、何時まで経っても戻って来ない二人に痺れを切らして迎えにきた響の真横を何処か怒りやそれ以外の感情やらを滲ませた足取りで素通りし、顔を真っ赤に染め、若干涙目になりながら調と切歌の下へと向かっていくクリスと、そんな彼女の後を何故だか頬に赤い手形の痕を残しながら落ち込んだ様子で着いていく蓮夜を交互に見遣り、状況に理解が追いつかない響は頭上を疑問符で埋め尽くし困惑してしまう。

そしてそんな彼女を尻目に蓮夜はジンジンと残る頬の痛みを噛み締めつつ、「また此処へ来た時には風太郎に反省点を指摘してもらおう……」などと、遠い目を浮かべながら胸の内ではそんな情けない決心を密かに固めていたのであった。



——その後、クロスレイダーを用いて風太郎達の世界を後にし、無事に元の世界へ

と戻つて来られた蓮夜とクリスはS. O. N. G. の面々に盛大なパーティーと共に迎えられた。

そんな想像もしていなかった歓迎に二人も最初こそ戸惑つたものの、再び見る事が出来た弦十郎やエルフナイン、藤堯や友里のオペレーター組などの馴染みある顔にクリスも漸く帰つて来られた実感を得たのか緊張が解けたように安心感を覚え、蓮夜もそんなクリスを見て肩の荷が下りたように安堵の笑みを密かに漏らし、その日は二人の無事と帰還を祝つて大いに盛り上がる事となつた。そして……



— symphony・405室 —

「——なん、だ……これは……？」

響達の世界に戻って来てから数日が経ったある日の事。

風太郎達の世界で姿を見せたクレンと呼ばれる新たなイレイザーの出現やクロスレイダーに内蔵されている次元転移のシステムやそのロジックについてなど、弦十郎やエルフナインを交えて連日詳しく話し合ったり、暫く店に顔を出せなかったクレープ屋の店長に頭を下げて謝罪し今まで以上に仕事を精を出したりなど、イレイザーに関する事件が一段落してそれなりに平穏な日々が続いていた中、クロスレイダーの研究の為に数日ほどS・O・N・G・で寝泊まりし、久々に自宅に帰宅した蓮夜は家のリビングに足を踏み入れた途端、目の前に広がる光景に言葉を失い絶句してしまっていた。

何故なら、彼の目の前には身に覚えの無いモノの数々……数日前には簡素なテーブルと薄型テレビしかなかった筈のリビングが、カーペットや大きなソファ、更には女子が好みそうな可愛らしい多数の小物など、何故か自分が買った覚えのない家具で埋め尽くされていたからだ。

「……部屋を間違えた……？ いや、鍵は確かに合っていたし、俺の部屋で間違いは……だとしたら、一体……？」

「——あ！蓮夜さん、おかえりなさい！」

「?!……響?」

ちよつと家を空けていた間にまるで別世界のようになつてしまつている自分の家のリビングを見回し、混乱と戸惑いのあまり硬直してしまつていた蓮夜の背後から聞き馴染みのある声が不意に聞こえて慌てて振り返れば、其処には空き部屋となつている筈の一室から顔だけ出し、いつもの活発な笑顔と共に帰宅した蓮夜を迎えて手を振る響の姿があつた。

何ゆえ彼女が此処に?と、鍵を持つていない筈の響が何故か家の中にいて更に困惑を深める蓮夜を他所に、響はパタパタとスリッパの音を鳴らしながら蓮夜の下へ駆け寄つていく。

「お疲れ様です！確かここ辺りずつと、本部の方で師匠やエルフナインちゃんと一緒にあのバイクを調査してたんですね？あれから何か進展とかつてありました？」

「……いや、それについてはまだ結果待ちで……というか、何故響が俺の家に……？確か家には鍵を掛けてたハズ……」

「へ？あれ……？蓮夜さん、師匠から何も聞いてないんですか？」

「……え……？」

小首を傾げる響からそう問われ、蓮夜はますます困惑を深め思わず間の抜けた声で聞き返してしまう。

何故其処で弦十郎の名が出てくるのか？理解が追い付かない蓮夜の様子から彼が何も聞かされていないと察したのか、響は「あ……」と若干バツが悪そうな顔で頭を掻くと、苦笑いと共に自分が出てきた空き部屋の前まで移動し、部屋の中を指差して蓮夜に室内を覗かせる。其処には……

「——おいコラっ、そつちはあたしのスペースだろっ！もうちよつとそつちに寄せ

ろってっ！」

「ふふーん、こういうのは早い者勝ちデスよクリス先輩！この陣地は既にアタシの手中に有りデス！」

「……と、切ちゃんが得意げに勝利宣言して油断している隙に横から将を討ち取る漁夫の利オチなのです、まる」

「あぁー!!?そ、それは流石に反則なのデスよ調ー!!?」

……響が指差した先には、何やら小競り合うクリス、切歌、調の三人の姿があつた。

だが、蓮夜の目を引いたのは彼女達本人ではない。彼女達が手にしているソレと、その周囲だ。

一体何処から持ってきたのか、6帖半の室内にはこれまた見覚えのない洒落たデザインの大きなパイプ二段ベッドが壁側に一つ、プラスチック素材の洋服ダンスが隅っこに



二つに、付けた覚えのないカーテンには物干しまで掛かっているではないか。

そして何より気になるのは、今正に部屋の中で揉み合っている三人が川の字に敷かれている三枚の敷布団の上で、それぞれ白いシーツを手に行っている事だ。

……彼女達は何をして、いやそれ以前に、この家の有り様は一体ナニゴト……？

「ええつと、ですね……師匠から話を通してくれると思つて言つてなかつたんですけど……実は蓮夜さんが留守の間に、蓮夜さんが使つてない空き部屋を私達が仮部屋として使つちやおうかなー？……みたいな感じで勝手に話を決めちゃいましたっ」

「………………。え、今なんと？」

聞き間違いだろうか。今何か彼女がとんでもない発言をしたような気がする。

しかしそんな蓮夜の困惑も置いてけぼりに、響もちよつと言い辛そうに話を続けていく。

「いえほらっ、この前別世界に行つてた間の事をクリスちゃんから話で聞いたんですけど、実は蓮夜さんが家じや家事もロクに出来てないって聞いてちやつてですぬっ？流石にそれ聞いて心配だなーって皆で話したら、『もし蓮夜さんが使つていない部屋を間借り出来れば、何時でも様子見が出来て安心なのよねー』って、そんな軽い流れから何だか話が段々と進んじやつたというか……それだったら、まだ揃つてない家具とか私達の好みで選んでみたいよねー！とか、皆で盛り上がっちゃつて……」

「ほう、ちやつて……で……？」

「でー、そのおー……その話を実際に師匠にしたら、もしかすると自分達の研究や都合に付き合わせているせいで、まともに家具を選ぶ自分の時間すら作れないのかもしれないなって責任を感じちやつたみたいでっ。それなら蓮夜さんが留守の間、私達が代わりに部屋に見合つた最低限の家具だけでも取り揃えようかなあつて話をしたら、その為の資金まで用意してくれて……で、実際に家具とかを選んでく内にコーディネートが楽しくなって、流れて何やかんや自分達が使う家具まで買つちやつて……えへっ」

「いやえへっではないのだが」

その何やかんやが一番肝心な内容ではないか、何やかんやに何があつたんだと、ちろつと舌を出して可愛いらしく誤魔化そうとする響に流石の蓮夜も虚無な顔を浮かべてしまうが、其処へ切歌と調と布団のスペースで言い争っていたクリスがやって来て呆れ気味に声を掛ける。

「別に何か其処まで不都合がある訳でもないだろ？大体、お前みたいな不器男（ぶきお）にこんなだだっ広い家なんて持て余すに決まつてんだ。それならあたし等がちよいちよい様子見に来た方が少しは管理だつて効きやすくなるだろうし、そうなつて来ると寮や家を一々行き来すんのも面倒になるから、ちよつとでも楽する為に使わない空き部屋くらい貸してくれたつていいだろ」

「いや、その……その気遣い自体はとて有り難くはあるんだが、俺なんかの為に前達が其処までしてくれる必要がそもそもないというか……というか、不器男つてもしや俺の事か……？」

「他に誰がいんだよ。お前みたいな不器用に不器用を重ねて生きてるような奴、ちよつとでも目エ離したら何しでかすかとか分かったもんじゃねえし、洗濯機一つであんなトラブル起こすところなんて見せられちゃこつちだつて安心出来ねえつてのっ」

「う、ぐ……」

先の五月宅での洗濯機事件の一件を持ち出された途端、色々と文句を言いたげな様子だった蓮夜も一瞬で口を結んで消沈してしまい、そんな蓮夜を横目にクリスも腕を組み、目を伏せてため息混じりに言葉を続ける。

「それにまあ、お前には色々世話になつて借りがあんのも確かだし、それを返していくつて考えりや別にあたしだつて世話焼きすんのに異論はねーよ。……でない、あたしが見てないところでコイツ等と何か間違いつたかあるかも分かんねーし……」

「……？すまん、最後の部分が上手く聞き取れなかつたんだが、今なんと……？」

「っ、なんでもねえよっ！いいから黙つて人の厚意素直に受け取つとけつて言つてんだ

「この不器男っ！」

「いや流石に年頃の女子を男の家に平気で泊められる程の責任なんて簡単には持てはしないぞ！というかその罵倒みたいな呼び名はもしや今後固定化されるのかそれは?!」

わりと不名誉な呼び名の件も含めて、流石に歳の近い異性をそう簡単に家で寝泊まりさせる訳にはいかないと変な所で真面目な蓮夜はわりと必死に説得を試みるが、それまでこれまでの蓮夜自身の生活面での失敗談の数々を持ち出されて悉く反論を封殺されてしまい、結局クリス達に言いくるめられて負かされた挙句、半ば乗っ取られる形で響達に自宅を貸し与える事になってしまったのであった――。



——同時刻、都市部から少し離れた場所に位置するとある海岸。

夕日もすっかり沈んだ夜の海の浜辺にて、S・O・N・Gの調査員達がこの辺り一帯を封鎖し、暗がりの浜辺を海岸沿いの車道に停めてある軽装甲車のルーフライトの光などで浜辺の闇を照らしながら何かの残骸らしきモノを探して回収する姿があちこちに見られ、そんな彼らの指揮を執る弦十郎は調査員の一人と何か深刻げな様子で話合っていた。

「——そうか。つまり我々が先程探知した謎の次元震動の反応の正体は、この無数の残骸らしき物である」と

「はい。砂浜のあちこちに散乱する残骸の多さや形状の類似点からして、かなりの大きさの物体が此処に現れた事は間違いないかと思われます。それもこの残骸の惨状からして、恐らく既に破壊された状態から辛うじて不時着したか……或いは予期せぬ形でこの海岸に流れ着いたか、という可能性が高いかと」

「予期せぬ形で、か……だとすれば、砂浜で倒れていたというあの青年も今回の一件とまだ何か関係があると考えるのが妥当だろうな。次元震動によつて現れた何かの不時着にたまたま巻き込まれただけ、という線もまだ捨て切れないが……」

「その事なのですが司令、実はもう一つ報告がありました……」

「む？まだ何かあるのか？」

「ええ。その青年と関連するかはまだ分かりませんが、先程調査員の一人が不時着物を回収している際に、このようなモノを発見しまして……」

「……………これは……………」

神妙な面持ちで調査員がおずおずと差し出した物を目にし、弦十郎は驚きから目を見張り、息を拒んだ。

調査員が見せるそれは現場保存の際に入れられたビニールに包まれたままだが、その形状、その異質な存在感には見覚えがある。

バックルの部分は三本線の爪痕で引き裂かれたかのように破壊され元の形が分から

ないほど悲惨な状態になってはいるが、それは間違いなく自分達が良く知る青年が用いているのと同じ、マスクドライダーのベルトに酷似していた――。

第六章／五等分のDestiny×紅弾の二重奏（デュエット） END



## 番外編③

### メモリア03 / 急なお誘い×キミに伝えたい気持ち (前)

— symphony・405号室 —

「——うあああ〜……もおやだあああ〜……つう〜かあ〜れえ〜たあああ〜つ……」

S・O・N・G・の協力者となって以降、黒月蓮夜が住居とする高層マンション八階立て『symphony』の一室である405号室。

響達の協力もあつてそれなりに家具も出揃ってきたリビングにて、もう日課と呼ぶべきか、最早自分の家の一つみたく思っているのではないかと言うレベルの頻度で、この家に何度も足を運んでいる立花響は休日の真昼間からリビングのテーブルの上に勉強道具一式を広げて熱心に問題集と格闘していたようだが、その集中力も遂に切れたのか、大層くたびれた大声と共にテーブルの上に上半身を預けてダラーんと倒れ込んでし

まう。

そんな彼女の下に、勉強に励む彼女の為にお茶でも用意しようとしてキッチンで作業していた蓮夜が白湯気立つコーヒーカップを乗せたトレイを両手に現れ、響の顔の横にコーヒーカップを乗せながら今の彼女の有様を見て思わず苦笑してしまう。

「大変そうだな……いや、任務と並行しての勉強となれば、実際大変でない訳がないか」  
「うーっ……そうなんですよおっ……とても、凄く、もうハチャメチャに大変なんです……まあ、私の場合はいつもこんな感じなんですけど……あ、コーヒーありがとう……ございます……」

「粗茶ですが、どうぞ」

「あはは……コーヒーに粗茶って普通使いますっ?」

多分蓮夜なりの場を和ます冗談のつもりなのか、何処か戯けているようにも聞こえる

台詞と共にカップを手の平で指して促す蓮夜に思わず嘖き出しつつ、「いただきまーす」の一言と共に白湯気立つカップを両手に、口へ一口。

その瞬間、口の中にほんのりと甘いミルクと砂糖を含んだコーヒーの味わいが広がってゆき、先程までの勉強疲れが少しだけ和らぐ気持ちになる。

「はあく……すつごく落ち着くうっ……」

「少しでも気分を和らげられたのなら幸いだ。……しかし、本当に多いんだな、学校から出たお前への課題とやらは……」

蓮夜が容れてくれたコーヒーの味を噛み締めるように喜悦の声を漏らす響の反応を見て苦笑しつつ、蓮夜が響から彼女のすぐ傍の床に置かれた幾つも積み重なる課題の問題集やノート等に目線を向けると、響もそれを見て後頭部を掻きながら恥ずかしげに笑う。

「あつははっ……まあ確かに勉強は大変ではあるし、正直問題集とにらめっこするのも

いい加減嫌気が差して来ましたけど……でもこうなってるのも結局は私自身のせいだし、任務や人助けを言い訳にこつちを疎かにするのは違うと思いますから、途中で投げ出したりはしません。何より私もシンフォギア装者である前に花の女子高生ですから！青春を謳歌する為にも、課題は全部こなしてみせます！」

「……………とても立派な事を言っているし、俺も出来れば手放しで褒めたい心境なんですが……さつきチラツツと見せてもらった時から、答案用紙の欄が埋まつてる気がしないのは俺の気の所為だろうか……？」

「うっ……」

両腕でガッツポーズを取って「大丈夫！」と笑顔で答える響だが、ものすごくビミョーな顔で空欄が多く目立つテーブルの上の答案用紙を見つめる蓮夜の一言に、グサツと見えない何かが胸に突き刺さる。

そのままぐったりとテーブルの上に突つ伏し、とても声にもならない呻き声を上げてしまう響の背中に、蓮夜もどう言葉を掛けようかと困ったように目尻を下げて肩を竦め

てしまう。

「その、なんだ……どうしても一人じゃキツイと言うなら、未来やクリスマス達を頼つたらどうだ？ 自分に出された課題とは言えど他人を頼るのも悪い事では無し、その方が……」

「あ、その点は大丈夫です。未来やクリスマスちゃんも先約があるから遅れるって言つてたけど、夕方くらいにそれが終わつたら蓮夜さんの家に来てくれるってさつきメールくれましたし、解るところだけは埋めて後は二人に教えてもらおう予定ですから！」

「……あ、そうか、なるほど……何かもう、ナチュラルに俺の家は皆の溜まり場になつてるんだな……」

というか気の所為だろうか、つい先日まで寂しいまでにガランとしていたハズの自分の家に、日に日に増えてゆく家具と共に彼女達の私物も段々と増え始めているような気がする。視界の端にうつすら見える大きなイルカのぬいぐるみとか全然見覚えがない。今気付いた。怖い。

そんな風に思いながらリビングの隅に置かれてるわりとデカめのぬいぐるみと顔を引き攀らせながらにらめつこする蓮夜の複雑な心境も露知らず、響はうーん！と軽く柔軟体操でもするように両手を組んだ腕を頭上に伸ばしてゴリゴリと音が鳴る背中を解す中、其処でふと何か思い至ったように「あつ」と呟きながら蓮夜の顔を見た。

「そういうえば、蓮夜さんは学校とか前に通って……って、そつか……蓮夜さんは記憶喪失だから、その辺の事も覚えてないんですよ……」

「……うん？ああ……そう、だな。こんな俺にも学生の頃があったのかは、正直自分でも想像が出来ない。というか、現に今響の課題の問題集を見せてもらっても思い出せる記憶が何一つないのだから、学校には行けなかったのか、或いはそんな問題すら分からないほど出来ない不良生徒だったのかも分からないな」

「不良の蓮夜さん、かあ……今の蓮夜さんを見てても何か想像出来ませぬ……でも、もし学校に通えてなかったのならもつたいないですよ、若い内にちゃんと青春を楽しんでおかないと！あ、何なら今からでもウチの学校に転校とかして来ちゃいます？」

「それもそれで悪くはないかもしれないが、生憎不器用に足が生えて歩いているような俺には、お前達みたいに器用に学業を両立させる自信はないよ……そもそも、リディアンは女子校なのだから、男の俺は入れないんじゃないかなかったか？」

「えへへ、言ってみただけですつ」

顔を横にテーブルに突っ伏しながら、楽しそうに笑う響。そんな彼女の笑顔に蓮夜も釣られて困ったように微笑んでしまうが、その時、響との今のやり取りをきっかけに一つある思い付きが浮かんだ。

「しかし……青春、か……響、未来達が家に来るのは、確か夕方頃と言っていたよな……？」

「?えと、はい。今は1時半で、二人が来るのは5時過ぎになるって言ってたから……」

「大体あと4時半くらい、か……なら、響」

「はい?」

クルクルと、リビングの時計を見上げながら手持ち無沙汰で何となく手にしてたシャーペンを器用に手の中で回しながら、響は蓮夜の方に振り向く。そんな彼女に、蓮夜は人差し指を立てながら少しだけきこちなく微笑み、

「その時間まででいい。もし響が良ければいいんだが……俺と、デートという奴をしてはくれないか?」

「……………へ?」

サラつと、わりと急でとんでもないそんな誘いを口にした蓮夜のその不意の一言に、一瞬理解が遅れた響の手から、ポロリとペンが音を立てて床へ落ちしまうのであった。



# メモリア03 / 急なお誘い×キミに伝えたい気持ち (後)

—自然公園—

「——おお。実際にこうして足を運ぶのは初めてだが、中はこんなにも広々としてるモノなんだなあ……」

マンションの近隣に存在する、休日を楽しむ家族や子ども達、老夫婦等が思い思いに過ごす姿があちらこちらに見られる広々とした草原が見渡せる公園。

先程の突然誘いの後、響と共に此処へやってきた蓮夜は感慨深げで、声音も穏やかな空気が流れる平穏な光景を前に何処か楽しそうに眩きながら背後から付いてきた響の方へと振り返った。

「意外といい場所だろうか？以前から入り口前を通り掛かる事は何度かあったが、此処ま

でいい場所だとは思っていなくてな。これなら今度、クリス達も一緒に誘って……」

「……………」

「…………？響、どうした？さつき家を出てから何だか妙に惚けてるような気がするが……」

「…………あ、いえ、ダイジョーブデース……なんでもありませんから、ほんとに、うん」

「？…………そう、か…………？」

アハハ、とあからさまな愛想笑いと共に、若干一部カタコトになりながらも手を軽く振って何でもない素振りを見せる響。

そんな彼女の様子に何処となく違和感を感じ小首を傾げる蓮夜だが、まあ彼女自身の問題ないというならそうなのだろうと一人納得して再び広々とした園内を興味深そうに見渡し出したのを見計らい、響はがつくしと肩を大きく落とした。

(はあっ……デートとかいきなり言い出した時はびっくりしたけど、要するに息抜きに遊ぼうってだけかあ……変な勘違いして恥ずかしいなあ、私……)

「……響、響」

「うひゃあいつ?!」

自意識過剰にも程があるなあと、変な期待をしてしまった己を恥じて項垂れながら溜め息を吐く響の肩を、蓮夜がちよんちよんと横から人差し指で突き、完全に油断し切ってた所への思わぬ不意打ちに響も驚いて思わずおおげさに飛び退いてしまう。

「どうした……? 何だかさつきに比べて妙にテンションが低いような気がするんだが……もしや、勉強疲れが今頃になつて祟つてきたか? だとしたら家に戻つてゆっくりしても……」

「あ、い、いえ! 別にそういう訳じゃなくてですね……つて、蓮夜さん、その手に持つてるのって……?」

顔を覗き込む蓮夜がわりとガチ目に心配しているのが伝わり、慌てて両手を振って元気な素振りを見せる響だが、其処で蓮夜が両手に手にする二本のラケット……見るからに安物と分かるバトミントンの存在に気付く。

「これか？ 実はこの間、たまたま興味を惹かれて入った駄菓子屋の片隅にポツンと置かれてたのを見付けた奴でな。何でもその店、昔は色々な遊具も売ってたりしていたらしいんだが、最近じゃ子供達もゲームやネット動画などに需要を持っていかれてこういった道具で遊ぶ子ども年々少なくなってきたらしく、店側もあまりこういうものも取り扱わなくなってきたらしい。……ので、せっかくだから俺が買い取る事にしたんだ。前に此処とは違う公園で、コレで遊んでいる子供達をたまたま目にした事もあったのでな」

「……ええと、それはつまり要約すると……？」

「その子達が楽しんで遊んでる姿を見て、実際にやってみたいと思った、だな。お前と」

「……な、なるほど」

この人は本当に自分より年上なのだろうか、何時もの無表情のままの筈なのに何処か子供のようにキラキラと目が輝いているように見える蓮夜の分かり辛いのはしやぎっぷりを見て苦笑いを浮かべつつも、此処までワクワクしている蓮夜の誘いを無下するのも忍びないし、実際に自分も蓮夜とのバトミントンをやってみたいという欲求が段々と湧き上がり、蓮夜の手からバトミントンとシャトルを受け取りながら後ろにある程度下がって距離を開いていく。

「……わかりました。じゃあ実際にやってみましょう！でも先に断っておきますけど私、バトミントンはこれが初めてって訳じゃないですよー？もしアレでしたら、手加減してあげましょうか？」

「ふふ……舐めて掛かってくれるなよ？こう見えても身体能力、動体視力には自信があるんだ。伊達に何度もイレイザーと戦ってきた訳じゃないと証明してみせよう……！」

「凄い自信……だったらこつちも手加減無しで行きますよー!!どおりやああああつ!!」

此処まで言い切られたからには加減などしない。寧ろそれでは失礼に当たると改め、響は蓮夜に目掛けて宙に軽く投げたシャトルをラケットで全力で打ち込んだ。

そして響の放ったシャトルは凄まじいスピードで蓮夜に迫るが、蓮夜は一切動じる事なく、その瞳は確実にシャトルの軌道を捉えていた。

（流石は装者とあつて大した力とスピードだが、目で追い切れないほどじゃない……！  
これなら俺でも打ち返せる！）

絶対の自信と共にラケットのグリップを握る手に自然と力が込められ、横薙ぎにラケットを思い切り振り切る。

そのあまりの全力に突風が巻き起こって草原が激しく揺れ騒ぎ、その光景を前に響も思わず喉を鳴らすほど圧倒されて固唾を飲んでしまふ中、蓮夜が全力で振ったラケットはシャトルを捉え

……る事はなく、ガットどころかフレームにカスる事すらなく、シャトルはそのまま蓮夜の横を素通りして背後にポトンと落っこちてしまった。

「……………」

「……………」

「あ、あとう、蓮夜、さんっ？」

「待て。言うな。何も言うんじゃない」

あんな自信ありありげに啖呵を切ったにも関わらずこの有様を見せられ、流石の響も気まづげに頬を掻きながらなんと言葉を掛ければいいかと言いつつ淀む彼女の言葉を背に、蓮夜はまるで何事も無かったかのように地面に落ちたシャトルを拾い上げて改めて響と向き直った。

「今のはアレだ、そう、少し手元が狂っただけだとも。此処からが本気の本気だ……全力で行かせてもらおうぞ……！」

「は、はい！」

あまりの滑稽さに一瞬目が点になってしまった響だが、蓮夜の鬼気迫る気迫で我に返り慌ててラケットを構え直す。

そして気を取り直した蓮夜の方も「すう……」と息を吐き出しながらシャトルを軽く宙に投げ、ラケットを全力で振りかぶり、

「そおいつ！」

—スカッ！ポトンッ—

「……………」



「……………」

……先程の焼き直しかのように、蓮夜の振りかぶったラケットにシャトルはカスる事  
すらなく、そのまま真っ直ぐ地に落ちてしまったのであった。

「…………あ、あの、蓮夜さん…………」

「…………待ってくれ。頼む。もう一度やらせてくれ」

非常に気まずげに声を掛けようとする響の台詞を遮るように、蓮夜は手で制してそう  
言いながら、地に落ちたシャトルを再び拾い上げて再度空に投げた。で……

「ハッ！」

—スカッ!—

「又ウンッ！」

—スカッ！—

「ヤアッ！」

—スカッ！—

「トオッ！」

—スカッ！—

「……………」

……何だろうコレは。まるでDVDで早戻しした場面を何度も何度も見せ付けられるかのように、全く同じ動き、全く同じ姿勢で何度となくシャトルをスカル蓮夜の姿に流石の響も呆気に取られてしまう。

んで、最早何度目かも分からないスカツの後、何処か哀愁漂う背中を響に見せながら地面に落ちたシャトルをジツと見下ろし、暫し無言で立ち尽くしていた蓮夜は徐に俯き加減の顔で振り返る。

「……………すまない響……………どうやら俺にはハイテク音痴に加えて、バトミントンの才能すらも皆無だったようだ……………」

「そ、そそそんな事ないですって！ そんなに気を落とさないで下さいよ、大丈夫ですから?!」

フフフツ…………とあれだけ威勢よくカツコつけた手前、無様な姿を何度も晒した自分に自嘲気味に笑う蓮夜の落ち込みっぷりが半端なく、ズーンツと暗い影を落としながら俯く蓮夜の下に響が慌てて駆け寄りながらフォローに入りつつ、蓮夜の手をナチュラルに手に取っていく。

「そもそも蓮夜さん、シャトルの動き自体はちゃんと目で追えていたし、ラケットを振るう動作にも腰が入ってて動きはちゃんとしてるんですよ。ただ少し力み過ぎてて動き

が大振りになってるといふか、こうやって……こうすれば……」

「……ほう……ほほう……ううむ……なるほど……」

肩や腕、足等に触れながら改善点を指摘する響の助言に素直に従い、彼女の指南通りに身体を動かす蓮夜。

それから数分後、やはり普段から戦い慣れしているからか身体の捌き方に関しては飲み込みも早く先程よりかは幾分か動きがマシになったと見計らい、響は芝生の上に置いておいた自身のラケットを拾い上げて再び蓮夜から距離を離していく。

「よしっ。それじゃ、今教えた通りにやってみて下さーい！」

「分かった。……ふう……」

響に軽く頷き返し、一度目を閉じて精神統一。

一拍間を置いた後、蓮夜はもう何度目か分からないシャトルを再び空に投げ、響に指南された動きからラケットを振るい、今度こそシャトルを見事に捉えてみせた。

「おお……！」

「そーそー！その感じですよ蓮夜さん！」

シャトルをちゃんと打てた自分に自分で驚く蓮夜に笑顔でそう返しつつ、響もラケットで軽々とシャトルを打ち返せば、蓮夜もそれに応酬しシャトルを打ち返す。

そうやって何度もラリーを繰り返す内に、蓮夜の表情も段々と柔らかく、何処か楽しそうな顔付きになり始めていた。

「なるほど、なるほど。これがバトミントンか……凄いで響……！俺は今、自分の新たな才能の開花に興奮が冷めやまない！」

「あつはははっ……！ただのバトミントンぐらいでおおげさ過ぎですよー！」

まるで子供のように自身の成長ぶりを喜ぶ蓮夜を見てみると、教えたこちら側も何だか嬉しくなってくる。

そんな感慨深い想いと共にシャトルを打ち返せば、蓮夜は僅かに構えを変えながらグリップを握り直す。

「段々とコツも掴めてきた……！ 指南の礼代わりに、今度こそ俺の本気を見せるぞ！」

(……！ 来る！)

蓮夜の身に纏う空気が変わると同時に、両腕に鳥肌が立つ。

その感覚から彼の言葉通り、とてつもない威力の球が来ると察した響はグリップを両手で握り直して蓮夜の反撃に備えると、蓮夜は先程とは段違いのキレのある動きから全力でラケットを振るい、シャトルを打ち返した。

それは凄まじいスピード、大気すら裂く程の速さとなつて響の真横を素通りし、

遙か遠方に見える、ドッグランの柵をドゴオオオオツツ!!と凄まじい轟音と共にブチ抜き、そのままドッグラン内の中央の地面に着弾すると同時に小規模の爆発を巻き起こしてしまつたのだつた。

「あ」

「……………あつ」

「うわあああああああああああつっ!!?」

「な、何だ今のっ?!爆撃か何かかっ?!」

「キャインキャインツ!!」

「ああーっ?! い、犬が怯えて柵から逃げ出したあっ?!」

「ま、待つてミーちゃんっ?! 何処へいくのおーっ?!」

「あああああああああああああああああーーーーーっっっ!!?!?!?!」

蓮夜が不用意に放った全力球のせい、公園内にて爆発テロか何かが発生したのではないかと園内はたちまち大パニック。

それどころか、蓮夜の球がブチ抜いた柵から爆発に驚いた犬達が全て脱走するというトラブルまで立て続けに起きてしまい、二人は手に持つラケットを投げ捨てながら慌てて事態收拾の為に走り出していくのだった。





——あれから約数時間後。あの後、二人は突然の（シャトル）爆発騒動で混乱に陥った人々のパニックの鎮静化と一斉に逃げ出した大量の犬の捕獲に奔走しまくった。

逃げ出した犬の捕獲自体は当の犯人である蓮夜が終始全力疾走で頑張ってくれたおかげでどうにか全て元の飼い主の下に返す事は出来た（なお捕獲の際、動物に嫌われやすい体質のせいで手や顔等を噛まれまくって歯型だらけになったが）のだが、流石にシャトル爆発の一件に関しては二人の力だけではどうする事も叶わず、民間人の誰かが通報した警察が駆け付けた事から避難する人々に混じって二人も園内を脱出。

その後、S・O・N・G.の方に慌てて連絡して先の騒動の一部始終の説明とその収集を頼み込み、先の一件に関してはあちらがどうか解決の為に手回ししてくれる事となった（無論無用な騒ぎを起こした件に関しては司令から相当なお叱りを受け、二人揃って通信越しにかなり謝り倒した。

「——すまん……本当にすまなかった……ただの息抜きから、まさかあんな大事件を起こしてしまう事になるとは……」

「あつはははつ……あんまり気にしないで下さい。ただのバトミントンからあんな事になるなんて想像出来る筈もないし、そもそも、蓮夜さんの球をちゃんと打ち返せなかつた私にも非がありますから」

S. O. N. G. への連絡が終わり、日も暮れ始め、蓮夜のマンションの近くの繁華街にまでやってきた二人は取り敢えず一息吐く為に街中の適当なベンチに腰掛け、蓮夜がお詫びにと買ってきたジュースを手に談話していた。

先の事件の犯人である蓮夜は先程から先の一件に響を巻き込んでしまった上に司令からのお叱りの巻き添えに遭わせた事を相当気にしており、いつもの無表情ながらもかなり落ち込んだ様子で何度も響に謝罪を繰り返している。

そんな蓮夜に、響は何時もと変わらぬ明るい笑顔で気にしなくていいと言いながらジュースを口にしていき、そんな彼女の横顔をジッと見つめ、蓮夜は僅かに苦笑を浮かべた。

「なんと言うか……お前は本当に変わらないな……」

「……………ふえ？」

「いや、何だ……今のお前の笑顔を見ていたら、初めてお前達と戦場で出会った頃の事をふと思い返してな……」

そう言いながら自分の両手の中でまだ封を開けていない缶ジュースを弄び、蓮夜は日が暮れてゆく茜色の空を見上げる。

「不思議だな……あれからそう時間が経ってる訳でもないのに、何だかもう遠い昔のように思えてくる」

「……………」

響達と初めて戦場で出会った時の記憶を思い返し、何処か懐かしむように蓮夜が小さく微笑むと共にそよ風が靡き、蓮夜の髪が微かに揺れる。

その横顔に一瞬響も目を離せず見蕩れてしまうが、すぐにハツと我に返り、頭を軽く振つて気を取り直しながら若干おずおずとした口調で口を開いた。

「あ、あのお……そういえば蓮夜さん、どうして急にデ……デートしよう、だなんて言い出したんですか？」

「うん？……ああ、それは……」

『デート』、というワードを口にするのも恥ずかしくて照れくさくなりながらも、改めて先程から気にしていたその疑問を口にする響からの問いに、蓮夜も何処か言い辛そうに言葉を濁して一瞬視線を泳がせると、そのまま両手に握る缶ジュースに視線を落としながら口を開いた。

「……さつき家でお前と話してた時、青春を謳歌する！と言っていただろ？その言葉を聞いて、少しだけ思う所があったというか……もしかしたらいい機会かもしれないな、と思っただ」

「……………? 機会って、何の?」

首を傾げる響。そんな彼女の素直な反応に苦笑しつつ、蓮夜はプルタブを上げながら缶を一口飲み、喉を潤してから言葉を続けていく。

「デザートを口実に、気持ちを伝える場を設けたかった、と言うべきか……………この世界に来て、お前達と出逢ってから、今まで沢山の物をお前達からもらってきた……………信頼とか、仲間とか、言葉を交して気持ちを確かめ合うこと……………この手と手を繋ぎ合う大切さを……………ただ一人でイレイザーと戦う事しか頭になかった俺に、こうして誰かと一緒にいられる喜びを覚えてくれたお前達に……………最初にそのきっかけを与えてくれたお前に、いつかきちんと礼を言いたいと思っていったんだ」

「え……………そ、そんなお礼だなんてっ、私は別に大した事なんて何も——」

「……………傍から見れば確かに大袈裟に思うかもしれない……………けど、俺にとってはそうじゃないんだ」

「……………」

缶を手にしたままベンチから徐に立ち上がる蓮夜を不思議そうに目で追う響。そんな響と向き直り、蓮夜は目を伏せながら胸に手を当て言葉を続けていく。

「正直、俺の中には未だ負い目は残り続けてる……記憶を失う前の俺が、奴らの進行を最初の内に止められなかったこと……そのせいで本来、人の道を踏み外す事のなかった筈の人々がノイズイーターなんて呼ばれる怪物になり、お前達や関係のない他の人達が危険に晒されるこの現状に対して……こうなったのは俺のせいだから、止められるのは俺しかいないからと……そうやって余分に、傲慢にも一人で何もかも責任を負って戦い続けようとしていた俺の見え方を変えてくれたのは、他ならないお前達だ」

先の事件、敵の策略で飛ばされた先の異世界でも一人で事態を解決しようと無茶をした自分を責め立てたクリスの言葉を脳裏に思い返す。

今だからこそ過去として冷静に振り返る事が出来るが、多分、あの時の自分は自身では気付けないほど内心焦っていたのではないかと思う。

過去の自分が打倒出来なかったイレイザー達の侵略がこの響達の世界だけでなく、風太郎達の世界、ひいては他の世界にまでその魔の手が延びているんじゃないかと。

実際にその被害に遭っていた風太郎や五月達を前にその事実をまざまざと突き付けられたような気がして、自分の失態の重さを改めて思い知った。

“これ以上、失敗した自分のせいで苦しむ被害者達を出したくはない”

そんな自覚する事すら出来ていなかったエゴに突き動かされるまま危うい戦いを続け、そんな自分が間違っているのだと漸く歯止めを掛ける事が出来たのはあの時のクリスの叱責、そして、誰かと手を繋ぎ合わせて力を合わせる事を思い出させてくれた響の存在だった。

「元々は俺が犯した失敗のせいなのだから、戦うのも、それで傷付くのも、俺一人の方がいい。その方がいいに決まってると考えてた。……どうせ俺にはもう失う物は何も無いのだからと、そう思ってた」

「……蓮夜さん……」

「けど、そんな想いとは裏腹に状況は俺一人の手では収まり切れないほど大きくなって、余計に焦って、自分を省みるという当たり前の事すら出来なくなつて……お前達の存在がなければ、俺はとつくの昔に壊れて、もしかしたら此処にはいなかったかもしれない」

自分一人だけが傷付いて、無茶をして、その結果全ての問題が解決に繋がるならそれでいいと思ひ込んでた。

でも、事態は既にそんな段階をとうの昔に超えていて、奴らの勢力が他の物語にまで及び始めている今、あのまま自己を省みない戦い方を続けていればいずれ身を滅ぼしてたに違いない。

そうなれば、奴らに対抗出来るクロスの方まで共に失われる事になる。其処までの考えに至れなかつた己の愚かしさに嫌気が差したし、彼女達がいなければその過ちに気付かず、今もなお愚直にこの身が傷付く事に何の感情も抱く事すらなかつたかもしれない



い。

「自分で自分の感情にすら気付かず、制御もろくに出来ていない……そんな自分をふと省みて、足りない頭で自分なりに考えて……多分、俺は俺の事がそんなに好きじゃないのかもしれない、と思った……。誰かを助けられる力を持つていながらそれを活かせず、自分が招いた失敗を一人で尻拭いも出来ない……そんな自分から生まれた過ちが赦せないから、消し去ってしまいたいから、あんなにも無様を晒してまで失敗を取り返そうとしてるんじゃないかと……。だから俺は……。純粹に誰かの為とかじゃなくて、そんな独りよがりな理由から戦ってたんじゃないかと、少しだけ——」

「考えるようになった、か。……でも、私はそれだけじゃないって思いますよ?」

「……………」

若干自己嫌悪気味な蓮夜の最後の台詞を盗りながら、ひよいつと軽快にベンチから立ち上がった響が蓮夜の隣に並ぶ。

そんな彼女に驚いて蓮夜が僅かに目を見開く一方、響は何時もと変わらぬ笑顔で蓮夜を見上げながら言葉を続けていく。

「だって蓮夜さん、私が皆から忘れられた時、凄く必死になつてくれてたじゃないですか。イレイザーの改竄に……孤独に苛まれて苦しんでいた私を見付けてくれた時も凄く焦つてて……あの時の蓮夜さんの顔、私、今でもハッキリ覚えてます」

「それは……ウン、そうだな……俺が止められなかった災厄のせいで、また誰かが犠牲になるかもしれないと考えて、焦つて——」

「私の事を心配して、必死に探して、駆け付けてくれた。……あの時の蓮夜さんの表情を見た時、私はそんな風に感じましたよ」

言葉尻に自己否定に入ろうとしていた蓮夜の台詞を再び肯定の意に塗り替えながら、数歩前へ軽快な足取りで歩く響の声音は変わらない。

優しげで、何処か我が子に子守唄でも唱え聴かせる母を思わせる。

そんな彼女の穏やかな声音に誘われるようにその姿を目で追う蓮夜に、響は徐に顔を向ける。

「自分で自分の感情が分からない。もしかしたら独りよがりな理由から戦ってただけかもしれない。蓮夜さんはそう言うけど……私も蓮夜さんの全部を分かっている訳じゃないけれど……でも、『それだけじゃないって』、そう言い切る事だけは出来ます」

「……それは……何故……？」

「うーん……優しくかった、からかなあ……」

「？」

どういう意味だ？、と端的過ぎる響の言葉に蓮夜の頭の上に疑問符が浮かぶ。

そんな蓮夜の反応を見て自分でも今のは伝わり辛かったと思ったのか、響は頬を掻き

ながら苦笑いした後、徐に蓮夜に歩み寄り、その手を取って持ち上げ、軽く握り締める。

「……私が孤独の不安と恐怖で押し潰されそうになった時、蓮夜さん、何も言わずにこうして私の手を取ってカードをくれましたよね。『お守りだ』、って言ってくれて」

「……そう、だったな……それが、何を……う？」

「ふふ、自分じゃ気付きませんでした？……あの時の蓮夜さん、こうやってカードを渡しながら私の手、優しく握ってくれてたんですよ」

そう言つて蓮夜の手をもう片方の手でそつと包み込み、響は静かに瞼を伏せる。

まるで、あの日の記憶を思い返すかのよう。

「あの時の……握ってくれた手の暖かさに、安心感で……今までの日常が、知ってる筈の風景が全部誰かに塗り替えられて、歌や皆を失つて不安だった私の心をどれだけ和らげてくれていたか……どんなに救ってくれていたか……蓮夜さん、ちよつとぐらい想像し

てくれてました?」

「……いや……あの時は俺も気が気でなくて……どうすれば響を少しでも安心させられるかと、必死に考えた結果がアレだった訳で……」

ちよつとだけ困った口調で蓮夜が当時の自身の心境を馬鹿正直に答えると、伏せていた臉が開いて若干ジト目になる響の口先が拗ねるように僅かに尖る。

「むう。無自覚だったなら相当な天然タラシさんかもですねえ、蓮夜さんって。……だけれど、私が『それだけじゃない』ってさつき言い切れたのは、其処なんですよ?」

「……?」

未だ響の言葉の意図が飲み込めないのか、首を傾げる蓮夜の顔は怪訝なままだ。

そんな蓮夜の素つ頓狂な顔に可笑しそうに少し嘖き出しつつも、響は薄く息を吐き、蓮夜の手を両手で包んだまま穏やかに微笑み掛かる。

「貴方はそんなつもりじゃなかったかもしれない。貴方には其処までの意図はなかったかもしれない。でも、だからこそ感じ取れて、分かって、信じる事が出来た……あの嘘で塗り潰された孤独な世界の中で、唯一本物だと思える事が出来た……貴方の無意識な優しさが、この手を通じて伝わってきたんです」

「……………」

「だから『それだけじゃない』って、私は言い切れます。……さつき蓮夜さんの言っていた、独りよがりな理由とかが全部そうだったとしても、蓮夜さんにはそれに負けないくらい誰かを想いやれる優しさがある……自分の気持ちもろくに分からないって蓮夜さんが言うなら、それを知ってる私はその辺きちんと保証してあげないですから」

「……………響……………」

真面目な語りをしていて途中で気恥しくなったのか、最後の方で少しだけ戯けた感じを見せる響。

一方で、蓮夜はそんな響の言葉を真摯に受け止め、自分の手に重ねてくれる響の手の上に右手を添えるように置くと、その温もりに幾分かの安堵感を覚え、思わず笑みを漏らした。

「そうか……それだけじゃない、か……自分の感情一つ、明確にするのにも他人の力を借りないといけないなんてな……本当にどうしようもないんだな、俺は」

「そうですねー。最近だって、家の家具とか蓮夜さんが分からなくい、なんて言うから私達を選んで揃えた訳ですし。それに食生活とか、漸く缶詰から脱却出来たかと思えば目を離れた隙に一瞬で元に戻っちゃうんですもん。おかげで私達も中々気が抜けないというか、元々料理上手って訳じゃない私や未来の苦労も少しは感じ取って欲しいというか……」

「ああ。お前達には本当に頭が上がりません。けれど、そんな俺でも胸を張って言える事が一つだけあってだな……響、」

「はい？」

不満はまだまだありますよくと、普段の談笑のノリのまま思わず軽く聞き返す響に、蓮夜はいつもの無表情のまま、だけど僅かながらに微笑を浮かべて

「俺は……お前の事が好きだ」

「……………」



一瞬の静寂。しかし、響の中では数十秒程の時間が過ぎたような錯覚を覚えた。

「へ？」

.....。

それだけに衝撃で、唐突で。

あまりにもアツサリそう告げられたばかりに、その言葉を脳が理解するのに大分時間が掛かった。

「……………」

「……………」

「……………え、ええつ、と……………あの、蓮夜さん……………？今のつて、どう……………い  
うつ……………？」

「……………？どうも何も、言葉通りに受け取ってくれていいと思うんだが……………」

「こ、言葉通りつて……………えと、えーつと……………あ、あーつ……………！もしかして、仲間とか、友人としてとか、そういう広い意味の方のアレですよね?!よく漫画とかにありがちな勘違

い系のパターンな奴！」

「……まあ、確かにそういう意味も込められてはいるな……」

「で、ですよねー！……って、え……？ 『も』……？」

「うん。『も』だ。仲間としても、友人としても、”異性”としても、俺はお前の事を好ましく思ってる」

「……………」

え？なんでこの人こんな素面（シラフ）なの？

自分が今とんでもない事を口走ってるという自覚がないのか、蓮夜の表情は先程

ちよつと微笑した程度で今はすっかり何時もの真顔のままだ。

え、まさか自分の耳が可笑しくなつて彼の言葉を脳が誤変換してるのか？などと、そんな有り得ない馬鹿げた可能性が脳裏を掠めて思わず両耳に手を当てた途端、耳がとんでもない熱を帯びてるのに気付き。

其処で漸く、自分の顔が茜色に染まりつつある空に負けないほど、真つ赤つかになつてゐる事を自覚した。

「……………」

自覚した途端、其処でもう駄目だった。

何せ思わぬ相手からの、人生初の、異性からの告白だ。

特に備えてすらいなかったこんな不意打ち、いきなり喰らつて心静体松しろという方が無理な話である。

気が動転するあまり視界が回り、ブワアツ!と湧き上がった恥ずかしさから両耳から離れた両腕をあたふたと忙しく動かし、何かを喋ろうとしても動揺が勝って上手く舌が回らない。言葉にならない。

最早湯気すら立ちそうなほど顔を真っ赤にしてパニックになる響とは対照的に、蓮夜はそんな彼女の慌てぶりを見て申し訳なさそうに目尻を下げた。

「悪い……俺なりにちゃんと手順を考えていたつもりなんだが、自分話が過ぎて唐突になっちゃったみたいだ……急に驚かせてしまって、すまない……」

「へあつ……!? あ、あ、いえつ、あのつ、そそ、そそそそんな謝られるような事ではないと言いますか何と言いますかっ!! と、<sup>?</sup>というかど、どどどどつ、どうして急にそんなつ、なん、ナンデエツツ!!!」

「何故、と言われても……ほら、これは『デート』と言っただろう? 俺のせいで大分予定が狂ったが、時間帯的にはデートも既に終盤だ。なら最後には、自分の素直な気持ちを

相手に告白するのが決まり事だと……」

「そんな決まり事なんて特に決まってるませんよいつの時代の話してるんですかそれエえええつつつつ」

「!!!!!!」

この人は一体何処の温室育ちなのかと、聞いてるこつちが余計に恥ずかしくなる程の前時代が過ぎるピュアっピュアっピュアっな発言を真顔でかましてくる蓮夜にトマト並に首まで顔が赤く染まった響が全力でツツコム。

そしてそんな彼女のリアクションで蓮夜も自分の方が可笑しいと気付いたのか、背後に落雷が落ちる程の大ショックを受けて数秒ほど固まった後、フラリと僅かに身体を揺らしながら頭を抑えていく。

「そう、だったのか……すまない……何分俺もデート自体はコレが初めてだったと言うか、映画で聞き齧った知識を鵜呑みにし過ぎていたみたいだっ……」

「うううっ、確かに映画は何でも教えてくれますけどおっ……！それも時と場合に寄る

と言いますかあつ……！それは流石に見様見真似で気軽にやっていい事じゃないんですよおつ……！そ、そもそも何で、私なんか相手にそんな一世一代の告白使っちゃうんですかあつ！」

「……………う？いや、確かに素人知識を晒して恥を上乗りしたと自覚はしてるが、お前に伝えた言葉自体に嘘偽りはないつもりだぞ……………」

「え……………いやだつて、私つて普段から武術で身体を鍛えてたりしてるから普通の女の子より筋肉付いてるし、大食らいだし、クリスちやん達みたいに容姿が特別綺麗つてワケでもないし……………正直、女子としての魅力はそれ程つてワケじゃ……………」

と、蓮夜に異性として見られていると自覚した途端に他の周りの装者達と比べて女子力の低い自己を気にし、筋肉の筋が見える腕や足を隠すように身動きしながら己には魅力がないと卑下する響だが、蓮夜は真顔のまま何も答えない。

ただジツと無言のまま響の姿を改めて見直した後、頭の上に「？」とはてなマークを浮かび上がらせた。

「すまん、お前が何を其処まで気にしてるのかさっぱり分からない……」

「で、ですからあつ！私には他の皆みたいなの女子力なんてなくてですねっ……！」

「その女子力云々が先ず俺には分からないというか……多分、俺が響を好きになったのとソレとは、そんなに関係はないと思うんだ」

「つつつ?!」

少し時間が経って大分気分が落ち着いてきたかと思えば、不意打ち気味に放たれた二度目の『好き』の二言。

更なる追撃に響も再び硬直してしまふ中、蓮夜は少しだけ照れくさそうに言葉を続けていく。

「記憶もなく、名前も素性も本物なのかも分からない俺にだけでなく、理不尽な悪意を叩



き付けてきた相手にまで手を伸ばす底の抜けた優しさも、誰かの為に振り返らず突き進むその愚直なまでのまっすぐさも……胸の内に秘めた悲しみや後悔も、歌で握り締めた拳を掲げて諦めずに立ち上がるその姿は綺麗だけど、何処か痛々しさもあつて……それでも笑顔を決やさないお前が、俺には眩しく感じたんだ」

「あつ……うつ……」

「あと、容姿云々に関しても正直俺としては異を唱えたい。他の装者達とは方向性が違うだけで、お前も普通にしても可愛い方だ。惚れた弱味の鼻屑目が入ってたとしても、俺はそれだけでもお前を好きだと言い切れる自信はある」

「へえああつっ?!?!」

つらつらつらつらと、いつもの口下手は何処へやら、彼の口は何処まで回るのだろうか。

何だか若干、自分の好きな子を貶められてムキになった男子の如く、堰を切ったよう

に蓮夜にあれやこれやと褒めちぎられて顔から湯気を立たせながら真っ赤になって立ち尽くす響を見て、蓮夜もハツと我に返り頭を掻きながら謝罪した。

「いや、悪い、別にお前を困らせるつもりはなかった……それにこの気持ちを伝えたからと言って、男女の付き合い云々をして欲しいだなんて言うつもりもないんだ……」

「あ………はえっ………？」

此処まで怒涛の情報量を洪水のように浴びせられ続け、既に脳のキャパシティを超えてオーバーヒート気味な響の中へ新たな一石が投じられ、間の抜けた声を返す響に蓮夜は胸に手を当てながら己の言葉の続きを語っていく。

「今まで話した通り、俺は、俺自身の感情すらろくに把握出来ない半端者だし、この口下手な性格が災いしてお前達ともすれ違ったり、言葉が足りなかったせいで衝突してしまう事も度々あった……だから今度からはちゃんと自分の気持ちをお前達から貰った感情だけでも一つ一つ明確にして、きちんと言葉にして、好意を返していきたい……俺がお前達の事をどう思っているのか、伝えておきたい、知って欲しいと、そう思ったん

だ」

「……だ、だからデートって……それが今日、私を誘った理由……だったんですか……？」

「この間の異世界転移騒動の際に出会った友人からの受け売りでもあるんだが、俺自身、感情表現が苦手な類の人間だと前の事件で散々に思い知ったからな……。そのせいで半端な気持ちが相手に伝わってしまうくらいなら、いつそ自分から赤裸々に、本心を全部伝えてしまおうと思い、この場を設けた。だからその上で、改めて聞いて欲しい。俺は……」

「え、えっ……あ、あのおっ！蓮夜さん、まつ——!?!」

まずい、これ以上はダメだと、彼が言わんとしてる事を察して自分の中の何か本能に近い部分が危険信号を発しているのが分かる。

しかし残念な事にこの暴走列車、夕チの悪い事に一度走り出せばブレーキが効かない

のかそもそもブレーキ自体が存在しないのか、慌てて止めに入ろうとする響の台詞を遮るかのよう、真剣味を帯びた声音で顔を真っ赤に染める響の瞳をまっすぐに見据え、

「俺はお前が……ああ、いや——俺は、キミの事が好きです……この気持ちだけは、この先何があっても変わりはないと、どうかそれだけは知っていて欲しい」

「」

恥ずかしげもなく、臆面もなく

真正面から馬鹿正直に、改めて己の気持ちを告白しながら不器用に微笑む夕暮れに照らされた蓮夜の顔を目にし、響は今度こそ完全に思考停止して直立不動で固まってしまったのであった。

その一方で、自分の気持ちを伝え切った蓮夜は何処か晴れやかな顔付きで黄昏に染まりつつある空を見上げ、満足気な表情で頷いていた。

「ウン。胸に抱えてた想いをそのまま伝えるというのも、案外気持ちがいいものなんだな。何だかとてもスツキリした気分だ」

「響ももし、俺に言いたい事などがあれば遠慮なく言ってくれ。日頃の俺への不満でも愚痴でも、何だって構わない。此処まで全部包み隠す事なく吐き出した以上、俺も何だって受け止める覚悟は出来て……」

「……………響?」

妙だ。響は先程から一定の、何かを制するかのように両手を前に突き出したポーズのまま微動だにしない。

そんな彼女の様子が可笑しい事に疑問を抱いた蓮夜が響の身体を少しだけ揺さぶる

うと伸ばした右手の指先が彼女の肩に触れた瞬間、響は突然ガクツ！と膝から崩れ落ちるように前のめりに倒れてしまい、思わず反射的に彼女の身体を抱き留めた。

「響……?!なんだ、急にどうし——?!」

「……………きゆううー……………」

「気絶してる……だと……?!お、おい、どうしたんだ……?!何故こうなった?!目を覚ませ響っ！響イツ?!」

立花響、キャパシティの限界を超えて遂にダウン。

これ以上ない、火の玉ど直球の告白を真正面から受けて耳まで顔を赤くした響が目ぐるぐるさせながら「すきってえ……こんなふうかい……あんなかおで……ひ、ひきょうなあつ……」などと微かに謔言のような物を口に行っているが、彼女の顔を胸に抱いて受け止める蓮夜にはそんな響の声は届かず、いきなり響が気を失って倒れた原因が分からず、ただただ困惑するばかりで必死に響に呼び掛け続けていたのであった。



それから約数時間後、蓮夜宅にて……

「……………」

「だから、この問題はこうやってこの公式を使えば簡単に解けて……」

「……………」

「こつちの問題もさつき解いた奴と同じ要領で何とかなるだろ。……あーいや、けどよく見たら途中で一捻り加えないと違う答えになっちゃうのかコレ。この問題考えた奴も底意地わりいーなあつ」

「……………」

「まあ、その辺もケアレミスミスを欠かさなければ間違える事はないと思うけど、響一人だと流石にキツイかなあ……………？響？」

「……………はえ……………？な、なにい……………二人とも……………？」

「いや『なににい？』じゃねえーよつ。お前の課題片付ける為に勉強会開いてんのに、何さつきからポーツとしてんだ！」

「え……………あ、ご、ごめん……………そんなつもりなかったんだけど……………ちよつと別の考え事して……………」

「——コーヒータ持ってきたぞー。進捗の方はどうだ？」

「あ、すみません蓮夜さん」





らしい。

因みに、そんな響の変調の原因が蓮夜にあると早々に気付いたクリスが何故かやけに恐ろしい顔と威圧感と共に彼から話を聞き出そうと問い詰め、蓮夜の方も馬鹿正直に一から経緯を説明しようとした所、首元から耳の先まで顔を真っ赤に染め上げた響に全力で妨害されて何も聞き出す事が出来なかつたとか何とか……。

暁切歌&月読調編（前編）

第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ

「ありがとうございますましたあー」

若干やる気の抜けた間延びした店員の声を背に、自動開閉式の入り口を出てスーパーを後にする。

しかし外に出た途端、ザアアアアアアアアアツ!!と絶え間なく雨が降り続く光景が視界に飛び込み、思わず店の前で足を止めた蓮夜は雨が降る曇り空を鬱々とした表情で見上げていく。

（参った……さつき店の外を見た時には疎らでただの通り雨かと思ったんだが、まさか

此処まで本格的に降るとは……)

雨独特の湿った香りを胸いっぱい吸い込み、溜め息と共に深々とそれを吐き出しながら、蓮夜は左手に持ったそれなりに重みのある大きめのバックを一瞥する。

此処から家のマンションまでそれなりに距離がある。

今日は普段使ってる家のすぐ近くのスーパーがたまたま休業日だった為、仕方なくこうしてそれなりに距離のある店まで遠出する羽目になってしまった訳なのだが、まさか今日に限ってこんな豪雨に見舞われるとは何とも運が悪い。

そう思いながらも一度深々と嘆息すると、蓮夜はもう片方の手に持つ先程店内で購入しておいた安物のビニール傘を徐に開いて差し、自分と同じように傘を差して歩く人、或いは傘を忘れて手荷物や傘替わりにしながら走り去る人々が行き交う通りに出て自宅までの帰路に付いていく。

(しかし、……最近ずっと雨が続くな……この間も……)

足を止め、視界の端に映った光の点滅に気を取られ電器店の方にふと視線を向ける。

店先のショーウィンドウには展示されているテレビの画面にニュース番組が映し出され、登山した男性が数日前から連絡が付かず行方不明になっているという事件の内容が流れていた。

ニュースキャスターの神妙な口調と共に流れる山中でのレスキュー隊員達の搜索状況の映像をじっと見つめながら、蓮夜は数日前に弦十郎から伝えられた“彼”について脳裏に思い返していく。



数日前、S・O・N・G・管轄の医療機関にて――

「——違う世界からの漂流者……?」

異世界から元の世界に帰還し数日が経過したある日、弦十郎から突然呼び出しを受け、蓮夜はS・O・N・G.が管轄する医療機関に足を運び、其処で彼の口から聞かされた内容に驚き目を剥いていた。

そしてそんな彼を伴いながら何処かへ向かって院内の長い廊下を歩く弦十郎も、蓮夜の言葉に頷きながら話を続けていく。

「数日前、市街地から離れた湾岸部にて奇妙な次元振動の反応を探知してな。調査に向かった所、反応があった浜辺のあちこちに謎の漂流物の残骸が散乱しているのを発見した。その全てを回収した解析班の分析によると、その残骸に使われている材質はこの世界に存在しない硬質によって構成されていたらしい」

「…………この世界には存在しない…………つまり俺のベルトと同じように、その漂流物は異世界由来の技術によって作られた物かもしれない…………?」

「未だ不明な点も多く、そう断定し切るには情報も少ないが、エルフナイン君の見解ではその可能性が今のところ高いだろうとの事だった。……というのも、そう納得せざるを得ないという言い方に置き換えるのが正しいのかもしれないが」

「……………」

神妙な口調でそう語る弦十郎の奇妙な言い回しに蓮夜が怪訝な様子で小首を傾げていると、蓮夜の先頭を歩く弦十郎はある部屋の前で止まって扉の端末にカードキーを通し、認証が下り自動で開かれた扉の奥へ進んでいく。

蓮夜もその後を追って着いていくと、二人が進んだ先の奥には部屋半分がガラス板が張られた壁に隔られた病室が存在し、ガラス板の向こう側のベッドの上には頭や腕などに白い包帯を何重にも巻き付け、口にはベッドの傍に置かれる機械にチューブで繋がれた呼吸器を身に付けて眠る一人の青年が横たわる姿があった。

「彼は……………」

「件の漂流物が流れ着いた海岸の傍で倒れていたそうだ。酷い怪我を負っていた所からして、発見した当初は漂流物の落下か何かに巻き込まれただけのただの現地人かと思つたが、幾ら調べを進めても彼の身元が分かる物は何一つ見付けられなかつた。それに……後から発見されたコレの存在もあつて、もしかしたら彼は例の漂流物と何か関係してるのではないかと思つてな……」

そう言いながら弦十郎は自身の胸ポケットから一枚の写真を取り出して蓮夜へと差し出し、それを見た蓮夜もおずおずと彼の手から受け取つた写真に視線を落とすと、其処に映し出されているモノに目を見開いて驚愕した。

「これは……ベルト……?」

そう、写真にはエルフナインの研究室らしき場所の機材の上に、幾つもの有線に繋がれてる半壊したベルトらしきモノが映し出されていたのだ。

形状や雰囲気こそ大分異なるが、それでも自身のクロスベルトと何処か類似した点が多く見られる写真の中の謎のベルトを見て戸惑う蓮夜の反応を目にし、弦十郎は両腕を



組んでため息を漏らす。

「その様子だと、やはり君にも見覚えのない品物だったか。君に目を通してもらえれば、或いは何か手掛かりを掴めるのではないかと思つたのだが……」

「……………どういふ事だ……………もしや、彼も俺と同じライダーの力を……………?」

「それはまだ分からない。ただ、このタイミングで異なる世界から君と同じようにベルトを持った人間が現れた以上、君と全く無関係だとは思えなくてな。その確認の為に、こうして君を呼んで彼と引き合わせた訳なんだが……………蓮夜君、彼の顔に何か見覚えはないか?」

「……………」

弦十郎に促されるまま、蓮夜はガラス板の向こうで眠る青年の顔をじつと見つめていき、己の失つた記憶を取り戻す何かの琴線に障れないか試みていくが、しかし……



——結局あの後、彼に関する記憶を思い出す事は一切なかったな……)

思わず吐き出した溜め息は、雨の音に掻き消されて誰の耳に届かず消え去った。

透明なビニール傘越しにふと空を見上げると、雨が降り頻る雲掛かった空はまるで蓮夜の今の心境と同調しているかのように見えてきて、より憂鬱な気分陥ってしまう。

(彼と対面して何の感情も湧かなかつたのは、単純に彼は俺とは関係がなくて思い出せる記憶が最初からないからか……それとも、彼という人間に対して何も感じる事が出来ないほど、記憶を根こそぎ失ってしまったからなのか……)

もし仮に原因が後者にあるのだとするなら、自分の記憶喪失は其処まで酷く深刻であるという事なのだろうか。

失われた記憶はあのアスカやクレンといった上級レイザーの罠に嵌められ、一度死に掛けた事がきっかけで全て無くしてしまったらしいが、果たしてその時に失った記憶を取り戻せる機会は今後あるのか？それとも眠っている彼が目覚めて、何か言葉を交わせさえすれば変わる物があるのだろうか？

一度不安を覚えては悩み、考え始めると思考がマイナスの方へと段々偏っていき、それに釣られるように気分も落ち込んでしまう。

ただでさえ今は敵側に新たな神話型のレイザーが生まれ、奴らの勢力が風太郎達の世界のように別の物語にまで魔の手を伸ばしつつあるというのに、いつまでもこんな悩みを抱えた状態のままではいけない。

今日の遠出にはその気分転換も兼ねていたつもりだったのだが、それも運悪く見舞われた悪天候のせいで水を刺されてしまった。

(……早く帰るとするか……)のまま長居しても、せつかく買った物まで雨で濡れてし

まうだけだ)

雨の陰鬱な空気のせいか、どうにも鬱々とした気分釣られて思わず口をついて出そうになる愚痴を飲み込みながら深々と溜め息を漏らし、蓮夜は肩に掛けた買物バックを掛け直しながら早く家に戻ろうと再び歩き始めた。そんな時……

「——な——う……な——う……」

「………? 何だ……?」

雨の音に混じって、不意に何処からともなく聞こえてきたか細い声に耳を取られ、思わず足を止めて周りを見回す。

しかし、周囲を幾ら探しても今の声の主らしき影すらも見当たらず小首を傾げて怪訝な顔を浮かべてしまう中、再び雨音に混じって先程と同様か細い声が聞こえてきた。

(この声、人のものじゃないな……うん……?)

途切れ途切れの声を耳を頼りに視線を向けた先、近くの電柱の影からダンボールの端先が見える。気になってそのダンボールの前まで足を運び、中を覗き込むと、其処には  
 ……

「……猫……?」

「……なう……なう……なう……」

雨に打たれ、濡れた毛布の上で小さな黒猫が震える身体を弱々しく丸める姿があった。

こんな場所にダンボールに入れられて放置されてるといふ事は捨て猫だろうか。思わぬ発見をして一瞬戸惑い、こんな時にどうすればいいか分からず周りを見回して誰かを頼るべきか迷うが、道行く人々は誰も彼も雨を逃れて早足に行き交い、とても捨て猫

一匹の為にわざわざ足を止めてくれるような様子ではなかった。

(参ったな……人を頼ろうにも往来する人間も其処まで多くはない……流石にこんな土砂降りの中で見て見ぬふりをする訳にも……)

見たところ、ダンボールの中の子猫はかなり弱り切ってる。恐らく長時間ものの間、この雨に打たれていたせいで身体がかなり冷え切ってしまったてるのだろう。

そんな状態の生き物をこれ以上雨の中に野ざらしにしておく訳にはいかないし、何よりもこうして見付けてしまった以上、こんな小さな生命を平気な顔で見捨てて家に帰るなど出来る筈もない。

子猫を雨から守るように傘をダンボールの上に翳したまま暫し考え込む素振りを見せると、やがて何か意を決したのか蓮夜は小さく溜め息を漏らし、傘を肩と首の間に挟みながら徐にダンボールの前で腰を落としていくのであった。



「——どういう事か説明しろやデュレンっ!!」

——以前に蓮夜とアスカが激突した旧モール街にある、とある廃墟内。

その地下施設に当たる薄暗い空間にて、先の蓮夜達との戦闘で深手を負い、体中痛々しく包帯を巻いたアスカが怒鳴り声を荒らげる姿があり、そんな彼から少し離れた場所にはめんどくさそうに溜め息を漏らすクレン、そしてそんなアスカの激昂に対して微動だにせず、両手をスーツのポケットに突っ込んだまま錆び付いたパイプ椅子に腰掛けるデュレンの姿があった。

「説明とは何をだ？ 伝えるべき言伝は、クレンの口から全て聞かされた筈だろう？」

「あんなんで納得出来る訳ねえだろうがっ！ 連中を始末させる為に散々人を馬車馬みたく働かせといてっ、土壇場になって急に方針変えて奴らを殺すなだあっ?! 何処まで人を

振り回しや気が済むんだてめえはっ！」

「まあまあ、落ち着きなつてアスカ。あんまり喚くと体の傷に障るよー？」「うるせえっ！お前は口出しすんなっ！」おつとと……」

怒りに段々と熱を帯びて熱くなるアスカを横から宥めようとするクレンだが、アスカはそんなクレンも怒号で黙らせると、未だ無機質な表情一つ変えないデュレンが何処かうんざりとした様子で徐に椅子から腰を上げ、淡々とした口調で語り始める。

「お前がクレンの口から聞かされた通りだ。新種のイレイザーの研究を進めた所、黒月蓮夜と奴から記号の力を分け与えられた装者達に新たに利用価値が出来た。……新たな進化体のイレイザーを効率良く生み出す為にも、連中には敢えてノイズ喰らいの駒共を追い詰めてもらうのが手っ取り早いと分かったからな」

「……ノイズ喰らいを彼等に追い詰めてもらうか……確か前にもその提案をしたけど、あまりにリスクが大きいから却下するって話にならなかつたっけ？一体どういう心境の変化があったんだい？」



「新たな実証データを得られた結果、それが最も我々の目的への近道になる可能性が出てきたからだ。見ろ」

怪訝な表情で聞き返すクレンに対しそう言いながら、デュレンは目の前の宙にデータ状のモニターを無数に出現させていき、今までのクロスと暴走したノイズイーター、そしてつい先日響とシープライレイザーの戦いを映した映像を流していく。

「今までのノイズ喰らい共は、黒月蓮夜との戦いで追い詰められた際に昂らせた感情とそれに伴い増大し過ぎた力に呑み込まれて半ば自我を失い、その果てに獣畜生同然となつてその殆どが失敗作となつてしまった……。しかし、先日立花響達と戦った彼も同様の事態に陥り掛けながらも我を取り戻して自我を保つただけでなく、暴走を乗り越え我々も知らぬ未知の姿へと進化を果たした。この事から、彼等のようなノイズ喰らいの進化には一定の条件があるので無いかと俺は睨んでいる」

「つ……？？一定の条件って何の話だよつ？」

「……まだ分からないか？お前達とて散々その目にしてきただろう？特にアスカ、お前はつい先日にならとの戦いでその瞬間を目撃した筈だ」

「ああ？……？」

「——逆境に抗う強い意志の力……暴走して尚、己を塗り潰さんとする強大な力と破壊衝動を跳ね除けるだけの心の強さを持つ者だけが、進化へと至る力を手にする事が出来るって事だろ？」

訝しげに眉を顰めるアスカに代わってそう答えたのは、いつにも増して神妙な口調で淡々とそう告げたクレンだった。

そんなクレンの言葉と変わり様にアスカも面食らって思わず顔を向ける中、デュレンは肯定の意を込めて鼻を軽く鳴らしながら宙に投影した映像の場面を切り替え、シープイレイザーがジャバウオックイレイザーへと変貌した瞬間、そして蓮夜がタイプガングニールとタイプイチイバルの姿へ変身した時の映像を見つめながら言葉を続けていく。

「掃いて捨てるほどある、数々の物語の中でもありがちで使い古されたパターンだろう？ 黒月蓮夜や立花響がそうであったように、強大な敵に追い詰められた主人公が、土壇場で覚醒し人智を超越した強大な力を手に入れる王道……しかし、何もそれは正義の味方だけの特権ではない。強い意志と不屈の精神を兼ね備えた者であれば、出来損ないに至るしかなかった暴走を超え、我らとはまた違う進化へ辿れる事も可能な筈だ」

「……つまり、僕達が散々目にしてきたあのノイズ喰らいの暴走はただの失敗とかじゃなく、次の進化へ進む為に必要な工程。そんな彼らに蓮夜君達を敢えて嚇けて、進化体を更に増やすのが今後の方針って事かい？」

「不明瞭な点も多く必ずしもそうとは言い切れんが、可能性が見えた以上無視も出来ん。少なくとも進化の見込みもない有象無象に無駄な時間を掛けてやる手間暇が減るかもしれないのはメリットとしても大きいからな。先日 of 彼のように、決して折れる事のない強い願いや意志を秘めた者達を見定めて成長を促せば、我々が求める新たな同士が集う事もそう遠い未来ではない。だからこそ、黒月蓮夜達にはその手助けをしてもらう為にもまだ生きてもらわねばならない。俺の見立てが正しいか否か今後とも実験と調査を進めるつもりではあるが、実際の戦場での経験も俺の仮説を証明する手段になり兼ね

ないからな」

試せる手段は全て試し、その為なら敵である蓮夜達をも利用する。それがまだ奴等を生かしておく理由だと淡々と語るデュレンの真意にクレンは無表情のまま無言だが、アスカはそんなデュレンの方針が気に入らないのか苛立しげに舌打ちを返す。

「そんな確実性もない実験の為にわざわざ作った駒を浪費するつてのcaff。仮にてめえが言うように素質を兼ね備えたノイズ喰らいを見付けたとしても、黒月蓮夜や記号持ちの装者共に消されちゃ意味ねえだろうがよ！」

「その為にお目付け役のお前達がいるんだろう。そんなに不安ならお前が連中のお守りでもしてやればいい……それとも、奴等に敗北して自信を失ったか？このまま奴等が順調に力を付けていけば、自分程度では敵わないと痛感したと？……随分と落ちたものだな、貴様も」

「っ、んだとっ……!!」

煽るように鼻を軽く鳴らして嘲笑するデュレンの言葉に憤り、思わず彼に掴み掛かろうと踏み出すアスカだが、そんなアスカをクレンが制するように横から腕を伸ばして止める。

「ツ！クレンっ……?!」

「言葉が過ぎるけど、デュレンの言う事もあなたが間違いとはいいい切れないう。イレイザーの力を与えてから長い目で彼らの様子を監視してきたけど、漸く進化体になれたのは此処まででたったの一人……。こんなペースじゃ何時まで経っても同士なんか集まりっこないし、この調子じゃ肥えるだけ肥えて進化体にもなれず腐らせるだけかもしれない。そうなったら本当に、あれだけ苦勞してイレイザーを増やしてきた僕らの努力も無駄になっちゃうでしょ？」

「っ……それは……」

「なら多少のリスクを背負ってでも、今のマンネリ化した現状を打破する為に蓮夜君達を起爆剤として利用するのは妙案かもしれない。それに……もしこのまま蓮夜君

が以前のように力を取り戻したとしても、その時はデュレンが何とかしてくれるんでしょ？」

「……愚問だな。記憶を失う前の全盛期の奴でさえ、この俺を仕留める事すら出来なかったんだ。そんな俺が、幾分かの力を取り戻した程度の今の奴に遅れを取る道理が何処にある？」

「わあー、自信満々！頼もしい限りで安心したよ。君もそう言ってくれるなら、こっちも心置きなく仕事を果たさせるつてもんさ」

「……………」

「いやー良かった良かった、これで怖い物なしだねー」と、あからさまにわざとらしい飄々とした口調で両手をパタパタさせながら惚けてみせるクレン。

そんなクレンをデュレンも何やら意味深に眉を顰めて険しげな眼差しを向ける中、クレンは飄々とした態度のまま手をヒラヒラさせ二人に背中を向け歩き出していく。

「んじゃ、方針も定まった事だし僕もさっさと自分の持ち場に戻るとするよ。アスカも頑張つて今度こそ汚名返上——」

「待て」

素知らぬ顔でこの場を離れ様とするクレンを、急にデュレンが呼び止める。その声に思わず足を止めてクレンが振り返ると、デュレンはクレンとアスカを交互に見やりながら、

「今回の作戦はクレン、お前が陣頭指揮を取れ。その代わり、アスカには例のアレの守りの為にクレンに変わってロンドンに付いてもらう」

「……は？」

「クレンに作戦つて……ちよつと待てよ、どういう事だ！ 奴らの事は俺に一任させんじゃなかったのか?!」

「貴様はまだ前回の戦いの傷が癒え切っていないだろう。そんな状態で今の黒月蓮夜と装者達を相手にまともに戦える筈もない」

「馬鹿にすんな！んなのやってみなきやつ……ぐっ……！」

自分を作戦から外そうとするデュレンに反論して思わず身を乗り出そうとするアスカだが、先程から大声を荒らげたりなどしたせいかわりに響き、胸を抑えて苦痛に顔を歪めてしまう。

デュレンはそんなアスカを一瞥するだけで心配する素振りも見せず、無言のままクレンの下へ歩み寄っていく。

「見ての通り、この有り様ではアスカは使い物にならない。奴が万全の状態にまで回復するまでの間、お前が代わりにノイズ喰らいを率いて黒月蓮夜達と戦い、俺の仮説が正しいか検証を行ってこい」



「……また急な無茶振りをしてくれるなあ。僕はアスカみたく武闘派じゃないっていうか、戦いはあんま得意な方じゃないんだよ？それに検証つたって、僕が世話してるイレイザー達は全員——」

「試す価値のある検証であれば、被検体がどんな状態だろうと構わんよ。それとも、今日本に居座るのに何か気掛かりでもあるのか？例えば、そう……ロンドンに残してきた例の『破壊者』に己の計画を好き勝手にかき乱されるのではないか、とかな」

「……っ！」

まるで何でもないような口振りで、耳元で囁くようにそう告げたデュレンの思わぬ発言に、今まで飄々とした顔を崩そうとしなかったクレンの表情が初めて驚愕に染まる。

そして次第に険しい目付きに変わっていくクレンの視線に物ともせず、デュレンは無表情のまま淡々とした声音で言葉を続ける。

「お前にどんな腹積もりがあろうと俺は一向に構わんし、奴を関与させる事で俺の利に

なるのであれば敢えて咎めもしない……しかし、忘れるな……？ 貴様が俺の渴望を阻むつもりなら、一切の容赦はせん……今からでも肝に銘じておけよ……」

「……………。ハッ」

瞳を覗き込むように顔を間近にまで近付けるデュレンの目には、普段の冷徹な彼からは想像も付かない明確な殺意が籠っているのが伝わってくる。

いずれ気付かれる事になるだろうとは思っていたが、存外鼻が利く物だ。計画の為に1分の間隙すら見逃さない彼の目敏さにある種の尊敬すら覚えて思わず渴いた笑みをこぼしつつ、クレンはデュレンから離れて二人のやり取りを聞き取れず怪訝な顔で立ち尽くすアスカへと歩み寄っていく。

「クレン？」

「いやー、参っちゃうよねえーほんと。あんまりに急過ぎてぶっちゃけ面倒だけど、うちのボスがああ言うんじゃ仕方ない。そういう訳だからアスカ、悪いんだけど僕の代わり

にロンドンを見張っててくれるかい？まあついでだし、怪我の静養も兼ねて旅行でもしてくるといいよ。案外いい気分転換になるかもだしさ♪」

「はあっ?!何言ってるんだ!奴らの始末を付けるのは俺の役目だろ!大体、このまま奴等に苦汁を舐めさせられたまま引き下がってなんざ——!」

「いーからいーから。今は怪我の治療に専念して、後の事は僕に任せときなつて。……君が万全でないと、いざって時に君を頼れないだろうからさ……」

「……何?」

顔を逸らし、ボソリと小声で何かを呟いたクレンにアスカが思わず怪訝な口調で聞き返すが、クレンはそれ以上は何も答えず、ただ意味深に微笑を浮かべながらアスカの肩を軽く叩き、そのままアスカの横を通り抜けて歩き出すが、二人に背を向けて歩くその顔は険しげに歪んでいたのだった。

## 第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ①

「——家で作ってきたおにぎりと、昨日作った残りの煮付けにお味噌汁が入った水筒。それからさつきコンビニで買ったお菓子と、飲み物も……ヨシ。忘れ物の心配はなさそうだね」

「それじゃ、早く蓮夜さんの家に直行するデスよ。あんまり待たせ過ぎるとカラカラのミイラみたいに干からびて、ひもじい思いをしてるかもデスから！」

「それは流石に大袈裟過ぎると思うけど……でも蓮夜さんの場合、絶対にそうとも言い切れないかなあ……」

昨日の夜まで降り続けた雨が上がり、渴いた水溜まりの跡があちこちに見られる住宅街の道を二人並んでそんな会話を交わしながら歩くのは、自宅で創作してきた料理を詰

めたバックやコンビニで買ったお菓子などを詰めたビニール袋をそれぞれ手に持参する、私服姿の切歌と調だ。

お互いの袋の中身を覗いて何か買い忘れないかしっかりと確認しつつ、道すがら楽しく談笑するそんな二人が向かう先は、ここ最近響達と一緒に足を運ぶ事が多くなった蓮夜の自宅であるマンションだった。

「それにしても、急に向こうから『家に来て欲しい』って連絡してくるなんて珍しい事もあるデスよね。普段ならアタシ達が急に押し掛けてごはんを持っていたり、遊びに行ったりが主流になりつつあったデスけど、もしかしてまた何かトラブルにでもあったんデスカね？」

「どうなんだろう……。でも確かに、電話越しの声は何処となく元気がなかったというか、何だかやつれてるようにも感じたけど」

「うーむ……。……もしやもしやとは思いますが、何処かの悪い人に騙されて多額の借金を背負わされた挙句、払い切れなくなった支払いに追われ過ぎて遂にアタシ達に SOS

を求めてきた……とかデスカね!」

「昨日のドラマの見過ぎだよ切ちゃん。そもそも蓮夜さん、前に本部から貰ったイレイザーやノイズを倒してきた今までの謝礼金を使い道が分からずに今も取ってあるって話してたし、わざわざ他所から借金するほど大してお金には困ってないんじゃないかな」

ピコーン!と、頭の上に豆電球のマークを浮かび上がらせながらさも名推理を思い付いたかのように得意気な顔になる切歌に冷静にツツコミつつ、調は空を仰いで約1時間ほど前の蓮夜からの連絡を思い返していく。



事の始まりは今朝の九時過ぎ。今日は学校も休日、本日の予定はどうしようかと自宅で切歌と他愛のない話をしていた中、不意に調のスマホに蓮夜からの着信が届いたの

だ。

『すまん、すまない……本当に申し訳ないんだが、予定がなければ今から家に来てもらえないだろうか……何と言うか、俺にはもうどうしたらいいのか分からず……』

着信に出て電話越しに聞こえてきたのは、何やら今にも泣き出しそうというか、何だか酷く弱り切った様子の蓮夜の一声だった。

会話の脈略が一切ない、電話に出てすぐの助けを求める第一声に流石に言葉の意図が読み取れず、一体何があったのか調が詳しく事情を聞き出そうとしたところ、電話の向こうで何やらバリーーンツ！ガシャーーンツ！と、突然何かが割れたようなガラス音などの物騒がしい音が立て続けに響いた。その後、大層慌てた様子の蓮夜から

『ともかく頼む……！今はどうしても手が離せない！詳しい話はその時にする！』

と簡潔に告げられたのを最後に一方的に通話を切られてしまい、結局彼の身に何があつたのか最後まで話を聞き出す事は出来なかつたのであつた。



「——何だか凄く忙しなかったし、最初はもしかしたら強盗か、まさかイレイザーが家まで押し入ってきたんじゃないかと思って、本部にも連絡すべきか迷ったけど……」

「その後すぐにメッセージで、『だいじょうぶです』って質素な返事が返ってきたんデスよね。……あんな電話の後のせいとか、いつもと変わらないあの簡単な文章が逆にちよつと事件性を感じて怖く感じたデスよ」

「蓮夜さん、メッセージを送る時とかいつもあんな感じでたどたどしいからね……」

そう言いながら調の脳裏に思い返されるのは、任務以外で普段から連絡を取りやすいようにと自分達に薦められて初めてスマホを買った蓮夜に、響達と共に一から操作を教えた時の記憶だ。



あの時は本当に苦勞した。別段其処まで難しい事を教えてたつもりなかつたのだが、何せ相手は幾つもの機械類を駄目にしてきた前科持ちの超ド級の機械音痴。

それは本人も重々理解していたので、自分達に教わりながら一タスマホの画面をタッチするだけで恐る恐る人差し指でポチポチし、どうにか根気強く教えた甲斐もあつてSNS を使えるまでに至れた時には、何時もの無表情のまま感動で打ち震える蓮夜のシユールな姿を今でもよく覚えている（ただし文字変換は未だに不慣れらしく、送つて来るメッセー지의殆どが大半ひらがなであつたり、一言添えるだけだつたりと質素な内容ばかりなのだが

「まあでも、あんなすぐにメッセー지를返せる余裕があるんならきつと心配しなくても大丈夫なのデスよ。それに蓮夜さん自身も素で強いデスから、仮に強盗なんかに押し入れられても返り討ちにしちゃうに決まつてるデス！」

シユツシユツシユツ！と、まるでボクサーの真似事のようにシャドーボクシングをしながら楽しげに笑う切歌。そんな彼女の変わらぬ自由奔放ぶりにクスツと微笑ましく

思いつつ、調はふと自分の肩に掛けてある買物バックを見やる。

「でもせっかく蓮夜さんの所にいくんだし、どうせなら響さん達とも一緒にいけたら良かったんだけどね」

「あー……それはまあしようがないデスよ。この間出された課題の提出、結局響さんだけ間に合わなかった上に、罰として追加で新しい課題を出されちゃったらしいデスからねー……」

「クリス先輩と未来さんも、今日は響さんの課題を手伝う為に図書館にいくつて話してたしね。……でも私、思うんだけど、ここ最近の響さんって何処か様子が可笑しいような気がする……」

「?響さんがデスか?」

「うん。何ていうか、たまに上の空になる事が多いというか……。この間も、訓練終わりの食堂で一人でお茶してるの見掛けて声をかけようかと思っただけ、何だか一人で

物思いに耽って、時々溜め息を吐いたりとかしてたから話し掛け辛かったし……理由は分からないけど、もしかしたら課題の提出が遅れたのもそのせいなんじゃないかなって」

「うーん……？アタシと一緒にいた時には普段通りに見えたデスけどね……？それにどちらかと言うと、何時もと様子が違うような気がするのはクリスマス先輩の方だと思うデス」

「え……クリスマス先輩が？」

「そーなんデスよ。というか今思い出しました、聞いて欲しいデス調！この間、調と一緒にクリスマス先輩の家で勉強を教わりに行ったじゃないデスか。その時に忘れた復習のノートを取りに、クリスマス先輩の家まで行ったんデスけど——」



『——つたく、わざわざ人ん家に来てまで勉強しておいて肝心のノートを忘れてんじゃねえよ。あたしが骨折って勉強教えた意味までなくなっちゃまうとこだっただろーがっ』

『えっへへっ、面目次第もないデスっ……』

『はあつ、まあいいけどよ……。ノートなら多分、お前らが勉強に使ってたテーブルの辺りにでも転がってんだろ？もうすぐ暗くなるし、とつと見付けて早く帰れよな』

『了解デス！何から何まで感謝するデスよクリス先輩！ええと、ノートノート、確かこの辺のテーブルの下に……。あ、あつたデス！……。あれ？奥にまだ本が……。？』

『男のトリセツ入門書。はじめての恋愛心理学』

『……んん？これは……。？』



「クリスマス先輩に好きな人が出来たあつつつ!!!?」

公私共にお世話になってる先輩に、まさかまさかの特ダネ砲。お互いに顔を突き合わせ、興奮のあまり思わず声を上げてしまった二人の黄色い悲鳴が重なって住宅街中に響き渡るが、ハツと我に返った切歌はほんのり顔を赤くしたまま手で制する。

「ま、待つデスよ調、まだそうと決め付けるには気が早いデス……!アタシが見付けたのはあくまでただの物的証拠だけ。そもそもあの本がまだクリスマス先輩の私物だと決まった訳ではないデスしっ」

「でも切ちゃん……!クリスマス先輩のその反応、どう考えてもただ本を見られたから恥ずかしがってるだけじゃないと思う!」

「う……だ、だとしたら、お相手は誰なんデスカね……アタシ達も知ってる人なんでしょうか……?」

もし仮にそうなら、思い付く限りではやはり S・O・N・G の面々の誰かだろうか。

オペレーター藤堯か、翼のマネージャーである緒川か、はたまた司令の弦十郎、もしくは自分達も知らない S・O・N・G の職員の誰かだろうか。

思わぬ爆弾の投下からクリスの意中の相手は誰だろうかと、いつの間にか恋バナに花を咲かせて盛り上がってしまう二人だが、その時切歌の持つビニール袋の底から水滴が落ち、それに気付いた調は正気に返り慌てて蓮夜の家の方角を見た。

「そうだ……！切ちゃん、こんな事してる場合じゃないよ！早く蓮夜さんの家に向かわないと！」

「……はっ！そ、そうでした！というか、ああつ、いつの間にかさつき買ったアイスまで溶け始めて!? 急ぐデスよ調ーっ!!」

クリスの意中の相手について盛り上がり過ぎてすっかり時間を忘れてしまい、当初の

目的である蓮夜の事まで頭からすっかり抜け落ちてしまっていた。

まだ話を続けたい若干の名残惜しさを感じつつも、今はこの話は一旦頭の片隅に追いやり、二人はそれぞれの持ち物を持ち直しながら急いで蓮夜のマンションに向かって一気に走り出していくのであった。



— s y m p h o n y —

「——や、やっと着いたデエス……」

「大分時間が掛かっちゃったね……蓮夜さん、怒ってなければいいけど……」

先程の住宅街から出来るだけ全力疾走で走り、漸く蓮夜の部屋の前にまで辿り着いた



切歌と調。

流石に重い荷物を抱えながらの走りはキツかったか、切歌は両膝に両手を乗せながらゼエツハアツと息を整えている。

調もいつものポーカーフェイスを保ちつつも額から汗を流し辛そうではあるが、それよりも自分達が遅れた事で蓮夜が怒っていないかを気にし、顔の汗を軽く拭いながら部屋のインターフォンを押していく。しかし……

「……………？出て来ない、デスね？」

「音に気付かなかったのかな……もう一回」

念の為、もう一度インターフォンを鳴らしてみる。

しかし、幾ら待っても扉が開く様子はなく、切歌と調は互いに顔を見合わせて首を傾げてしまう。

「うーん？もしかして留守なんデスカね？」

「……何か急用でも出来て出掛けているのかな……このまま待ちぼうけを受けてもしょうがないし、一応合鍵もあるから先に中に上がらせてもらおうか」

そう言いながら調が懐から取り出したのは、以前蓮夜の代わりに彼の殺風景な部屋に似合う家具を買い揃える為、弦十郎に頼んで装者全員と未来の分を合わせて特注で用意してもらった合鍵のカードキーだ。

これのおかげで蓮夜が不在な時でも何時でも部屋に上がる事が出来、最近では各々好き勝手に私物を持ち込んで自分達が過ごしやすい空間をコーディネートするのが彼女達の中のトレンドになっている（無論、自分も知らない内に家内のスペースが日に日に彼女達に占領されていく事に、蓮夜自身はある種の恐怖を覚えてるようだが

とまあそんなこんなで合鍵を取り出す調を見て「やつぱりこういう時に備えて鍵を持ってて正解だったデース！」と、蓮夜本人が聞けば絶対に複雑な顔をしそうな台詞を

明るげに云う切歌の声を背に、調はカードキーをセンサーに通して鍵を開き、扉のドアノブに手を掛けて玄関へと入っていく。

「おつ邪魔するデース！」

「蓮夜さん、私たちです。いらっしやいますかー？」

玄関先からリビングに向けて蓮夜の名を呼んでみる。しかし先程のインターフォンの時と同様、部屋の主からの返事が奥から返ってくる事はなかった。

「返事がないね……やっぱり留守なのかな」

「それならそれで何時も通り、先にながって中で待たせてもらおうデース。というか早くアイスを冷やさないと、もうかなりヤワヤワになっちゃってるデースよー!!」

「あ、切ちゃん！」

「急げ急げ！」と、既に溶け掛けのアイスが入ったビニール袋の中を覗き込んで早く冷蔵庫に仕舞うべく、履いていた靴も適当に脱ぎ捨てながら玄関に上がりリビングへと直行する切歌。

そんな彼女の後を調も自分と切歌の靴をちゃんと玄関で並べ揃えてから追い掛ける、切歌はリビングへの扉に手を掛けて勢いよく開け放った。

「いえーい！今度もアタシのいっちばんデー……………ス？」

「もう、切ちゃん。仮にも人の家なんだから、靴ぐらいきちんと……………え？」

屈託の無い笑顔と共に最早通い慣れたリビングに足を踏み入れた切歌だが、扉の奥の光景を目にした瞬間に彼女の顔が一瞬で凍り付き、そんな切歌の背中に追いついて注意しようとした調もリビングの光景を目の当たりにした途端、切歌と同様に目を見張って固まってしまった。何故なら……



かあああああああああ—————っっ!!?!?!?!

「切ちゃん落ち着いて!!ふざけてる場合じゃないよ!!蓮夜さん、大丈夫ですか!?!しつかりして下さい!!」

あまりにも凄惨な事件現場にいきなり対面してしまい、ムンクの叫びもかくやな顔芸でたまらず絶叫してしまう切歌を一喝しつつ慌てて蓮夜の下へ駆け寄り、彼の体を必死に揺さぶる調。

するとその振動で意識を取り戻したのか、僅かな呻き声と共に蓮夜は徐に顔を上げ、傍らの床に両膝を着いて緊迫した表情を浮かべる調を見上げて安堵するように微笑んだ。

「あ、ああ……きて、くれたのか……すまないな……いきなりよびつけてしまった上に、こんなみつともない……散らかりようをみせてしまつて……」

「いやそんなの気にしてる場合じゃないデスよおつ!!何なんデスかこの惨状?!一体何

があつたデスかつ?!」

「もしかしてつ、イレイザーに此処がバレて襲撃をつ……?!」

「え……あ、いや……そういうワケではなくて、だな……や、奴、に……」

「や、奴?」「なーう」……ほえ?」

未だ意識が曖昧なのか、口がまともに回せず要領を得ない蓮夜の言葉に二人が揃って頭上に疑問符を浮かべる中、不意に甘えるような可愛らしい鳴き声がどこからか聞こえてきたと共に、切歌の足にスリスリと何かが触れた。その感触に驚きつつ足元に視線を下げると、其処には……

「……猫?」

「なーう!」

切歌の足の脛に小さな身体を何度も何度も擦り付けて甘える仕草を見せる小さな生き物……黒毛の子猫が、つぶらな瞳で鳴き声と共に彼女をじつと見上げてくる姿があったのだった。



## 第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ②

それから約数十分後……

「——本当にすまない……来て早々驚かせて介護してもらった上に、部屋の掃除まで手伝わせてしまつて……」

「いえ。確かにビックリはしましたが、特に大した事件があつた訳じゃなくて安心しましたから」

「どうか、事情を聞いて別の意味でビックリしたデスよ……何でこんな子猫一匹に振り回されただけで此処までの惨状になるデスか……」

「な〜う」

そうやって呆れ気味な口調の切歌が腕の中に抱くのは、可愛らしい鳴き声を上げる一匹の黒毛の子猫。

そんな子猫にソファーに腰掛けたまま酷く疲れ切った眼差しを向けつつ、調の手を借りて頭に何重にも白い包帯を巻いてもらいながら蓮夜は深々と溜め息を吐くと、先程まで調と切歌が掃除を手伝ってくれたおかげである程度綺麗になつたりビングを見回していく。

「本当なら俺もあなる前に止められてたら良かったんだが……ただ元からの体質と言うべきなのか、どうにも俺は動物に嫌われやすいようだな……単に餌を上げようとしただけでこんなにも暴れ回られるとは……」

はああつ……と、もう一度疲れ切った溜め息を漏らしながら大きく項垂れてしまう蓮夜の姿を見て、切歌と調も何とも言えずただただ微妙な苦笑いを返すしかなかった。

そもそも、何故リビングが彼処まで荒らされまくっていた上に蓮夜があんな血溜まり

の中で倒れていたのか。

その経緯を今さつき蓮夜の口から聞かせてもらったのだが、元々この子猫はつい先日  
に雨の中で打ち捨てられていたところを蓮夜がたまたま発見し、そのまま見捨てる事が  
出来ずに取り敢えず家で保護する為、ダンボールごと抱えて連れ帰ってきたらしい。

その後は管理人とも要相談し、取り敢えず里親が見つかるまでの間此処に置かせても  
らえないかと頼み込み、どうにか了承を得た後は一先ず弱り切っていた子猫の介護に務  
め、根気強く世話をし続けた甲斐もあって子猫は元気に駆け回れるまでに回復する事が  
出来た。

……其処まではまだ良かったのだが、問題はその後だった。

元気に走り回れるほど体力を取り戻した途端、子猫は蓮夜の言う事を一切聞かず家中  
を駆けずり回っては暴れ散らかし、家具は壊すわ、カーテンを引き裂くわ、部屋は汚す  
わと散々な事態に陥ってしまったのだ。

それをどうにか止めようと餌で釣ったりなど、様々な方法を試して何とか大人しくさせようと試みたものの、子猫は命の恩人への感謝も何処へやら、蓮夜が近寄ろうとするだけでも全身の毛を総立ちさせながら威嚇しまくり、より酷く暴れ回って家の中が更に大変な事になってしまい、遂には手が付けられなくなって調にSOSの電話を掛けて泣き付いたというのが先程彼女に急に連絡を寄越した経緯だったらしい。

「其処まではまだ分からなくもないですけど、でも、其処からどうしてあんな殺人現場みたいな事に……」

「ホントデスよ！最初見た時は本当に事件が起きたかと、もうビックリし過ぎて心臓が止まるかと思ったデス！」

「いや、まあ……それも元々はその猫が原因と言うか……」

まだ二人には話していない、あの血溜まりの中で倒れていたのは一体何があつてそうなったのか。問い詰める二人の視線から思わず目を逸らしつつ、蓮夜は渋々とその時の状況を説明し始める。その話を簡潔に纏めると……

調に連絡してゐる最中、子猫が再び家中を駆けずり回ってリビングを荒らしまくり、何とか大人しくさせようと必死に捕まえようとす。

←

長い激闘の末に漸く戸棚の前にまで追い込むが、子猫が諦め悪く真横へ逃げようとした際、誤つて戸棚にぶつかつて戸棚の上に置かれていたアンティークのツボが落ちてしまひ、危うく子猫の上に直撃しそうになる。

←

それを見て慌ててヘッドスライディングで子猫の下へ飛び込みながら力加減を考えず、全力で下からツボをハタいて天井にぶつかるほどの勢いで打ち上げるが、いきなり飛び掛かつてきた蓮夜に驚いた子猫が跳び上がつて蓮夜の頭を踏み台にそのまま何処かへ逃げ出す。

←

そのせいで地べたに押し込まれて起き上がるのに遅れた蓮夜の頭の上に、蓮夜の馬鹿力で天井にぶつかり勢いよく跳ね返つた頑丈なツボが見事に彼の頭にクリティカルヒットし、あまりの威力にツボも木っ端微塵。

←

その後は気を失い、切歌と調が駆け付けた頃には先程二人が目にした殺人現場のような悲惨な状態になってたらしく、目を覚ましてから漸く其処で自分がそんな状態になっていて怪我を負つてた事にも初めて気が付いたらしい。

「——とまあ、お前達が来るまでの間にそんなこんながあつた訳で……」

「どんな奇跡的なハプニングデスかそれ……下手なコント職人でも狙つてやれるもんじゃないデスよ……」

「流血沙汰にもなつてるし、あんまり笑えるアクセシデントでもないね……」

ともかく大体の事情は把握した。ようするに今回の騒動は単なる蓮夜のドジと、この悪戯猫の馬鹿げたドタバタ騒ぎが原因だったのかと納得し、呆れ気味に揃つて溜め息を吐く切歌と調を交互に見ながら蓮夜も申し訳なきそうに項垂れた。

「なんというか……無駄に騒ぎを起こしてしまつて悪かつたな……二人にも迷惑を掛けてしまつて……」

「いえ、そんなに気にしないで下さい。心配はしたけど蓮夜さんも無事だったし、別に悪気があつた訳じゃないのもちやんと分かつてますから」

「デスねえ。それに、こーんな可愛いペットに触れ合えるだけで掃除の疲れなんか軽く吹っ飛ばしちゃうデス！せつかくデスから、このままこの子を家で買っちゃつても良いのではないデスか？」

「いや、それは……」

「切ちゃん……この家の有り様を考えたら、蓮夜さんにその子のお世話を任せるのはあまりに酷だと思う……」

「え……あー……」

何とも言い辛そうな調のその言葉で、未だ子猫が派手に暴れ回った痕跡があちこちに残るリビングや、顔や手などに引つ掻き傷が残る蓮夜の痛々しい姿を見て自分がどれだけ無茶な事を言っているのか自覚したのか、切歌はあからさまに目を泳がせながら口を詰むんでしまう。

そんな二人の反応に複雑げに笑いつつ、蓮夜はソファから徐に腰を上げてリビングのテーブルの上に散らばる無数のチラシ……子猫の貰い手を募集する張り紙の一枚を手を取っていく。

「これだけ嫌われているようだし、出来ればもつとマシな飼い主を早くに見付けてストレスのない環境で良い暮らしをさせてやりたい所なんだが、まだ募集をし始めたばかりで未だに連絡の一つもなくてな……一体どうしたものかと、そっちの方でも頭を悩やませてたところだ……」

「ううむ……それは確かに中々にむつかしい問題なのデス……あ、それなら同じマンションの住人の誰かに頼んでみるってのはどうデスか?! 片っ端からインターフォンを押しまくって、かわいい子猫の押し売り営業デス!」



「切ちゃん、それ普通に迷惑行為だから……」

「そもそも、うちのマンションはペットを飼うのは厳密には禁止されているんだ。さつきも話した通り、管理人にもソイツを置かせてもらうのに結構な無理を言つて、次の里親が見つかる間までならとかなり譲歩してもらったしな……」

「あうつ、そうでしたかあ……だとしたら、ウーン……ウーンっ……参ったデス、中々妙案が思い付かないデスよ……」

「こればかりは流石に、私達の力だけじゃどうにもないだろうしね……出来る事があるとすれば、蓮夜さんを手伝って地道にチラシを貼って回るか、もしくは人に配って回るかしら思い付かないし……」

「既に何枚かの募集のチラシを近隣にも許可を得て貼らせてもらってはいるんだが、それも人の目にどれだけ留まつてくれるかだな……運良く猫を飼いたいと思ってる都合のいい人間が現れてくれるか否か、後は天運次第って所か……」

「天運……」

こしよこしよこしよと、切歌の手から離れて床に腹を見せて寝つ転がる子猫の腹を無表情でくすぐっていた調が、不意に何かを思い付いたように子猫を腕の中に抱きながら立ち上がり、二人の方へ振り返る。

「だったら、今からお参りにでも行きませんか？この子の新しい飼い主さんが、早く見付けられますように願掛けに」

「？お参り……？」

「ちようど私達が知ってる神社があるんです。それに確か、彼処には案内掲示板も近くにあった筈だから、その宮司さんをお願いすれば張り紙を貼らせてもらえるかもしれないです。参拝に足を運ぶお客さんも沢山いるだろうから、人の目にも留まりやすいかもしれないし」

「アタシ達の知ってる神社って……ああ、もしかして！」

「うん——」 調神社”。前に私達がお世話になった、あの神社だよ」

## 第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ③

——調神社。

先のパヴァリア光明結社との神の力を巡る事件にて、装者達が神社本庁を通して得た情報を元に現地調査に赴き、其処で出会った神社の宮司の協力により敵の真の目的に近づく事が出来た場所らしい。

加えてその当時、戦いの中である悩みを抱えていた調も彼とのやり取りをきっかけにスランプを脱し、その後のパヴァリア光明結社の幹部の一人との激闘にも風鳴翼との共闘の末、見事撃退するに至ったのだとか。

「——成る程。事件当時の資料を以前見せてもらった時に出てきた、レイライン……龍脈に関する情報を閲覧した際に神社の名前だけは見た事があったが、調個人ともそんな

繋がりがあったのか」

「よつ、とと……！　そう言えばあの時の調、ずっと沈んだ顔をしたまま錬金術師を追い掛けて一人で神社から飛び出しちゃいましたから、宮司さんの顔を見たのもそれつきりだったデスよね。あの後も色々とてんやわんやありまくりで、会いに行く暇なんてなかったデスし」

「うん。だからそれも兼ねて、もう一度顔を出しておこうかと思つて。……元気にしてるといいな」

東京から埼玉行きまでの高速バスを降りて、ターミナルから暫く徒歩で歩き、目的地である調神社にまで続く石段の前まで辿り着いた三人。軽快な足取りで先に石段を登つていく切歌を先頭に、蓮夜と調が事件当時の経緯を話しながらその後について階段を上がつた先には本殿にまで続く参道が見えたが、神社によく見られる鳥居はなく、脇には狛犬……ではなく、狛兔の像が建てられているのを見て蓮夜が首を傾げた。

「珍しいな……此処の神社は狛犬じゃなく、兔が像になつてるのか？」

「そーみたいデスね。アタシも最初見た時は変わつてると思つたデスけど、これはこれで可愛いので断然にアリだと思つてデス」

物珍しげに兎の象を見上げる蓮夜の隣で、ピョンピョンツとまるで兎の耳を真似るように頭の上で両手をヒラヒラさせながら明るく笑う切歌。

そんな二人のやり取りを調も微笑ましげに見つめる中、参道の奥の方から眼鏡を掛けた袴姿の老人が現れ、泰然とした足取りで蓮夜達の下へと歩み寄っていく。

「いやいや、以前にお会いした時からお変わりのない賑やかさ。相も変わらずお元気そうですね、御二方」

「……………？ 貴方は……………？」

「おおー、お久しぶりデス！」

「こんにちわ。蓮夜さん、この人がさつき話したこの神社の……」

「ああ、例の協力者の……初めてお会いします……黒月蓮夜、といいます」

「これはこれはご丁寧に。まだまだお若いのに礼儀正しい御方だ。嗚呼、貴方達を見てみると、生き別れになった娘夫婦の孫を思い出しますなあ……」

「生き別れ……そんな事が……」

「蓮夜さんっ、これは違うデスよ」

「うん、また神社ジヨーク……」

「ジヨーク？……そうか、つまり娘夫婦ではなく、息子夫婦の孫と生き別れになったと……」

「そういう意味でもないデスよッ！」

自分で勝手に勘違いを深めて深刻げに目を伏せる蓮夜に切歌が思わずビシイツ！と横からツツコミを入れ、そんな二人のやり取りに調も呆れ気味に溜め息を吐く中、ジョークを発した当人である宮司はそんな三人のやり取りを見て愉快げに笑いながらペシツと戯けるように自分の額を平手で軽く叩く。

「ただの小粋なジョークを此処まで真摯に受け止めてもらえとは。お話には軽く伺っておりますが、どうやら貴方はお優しく、純真な心持ちの御方なようだ」

「……？俺の事を知ってるのか？」

「ええ。先程月読さんから事前に連絡を頂きまして、その時に貴方の事もお聞きました。何でも捨て猫を拾い、新しい飼い主さんを探しておられるのだとか。そういった事情でしたら、私でよろしければお手伝い出来る事、何でもご協力致しますよ」

「おお、本当デスカ！話が早くて助かるデス！」



「なんのなんの。皆さんが以前うちにいらした際、大勢の方々の為にその身を呈して頂いた事は小耳程度ながらに聞き及んでおります。そんな皆さんの頼みを足蹴にしたとあつてはバチが当たるといふもの。仮にも神職に就く者がそんな事になっては、それこそ笑えないジョークになってしまいますからねえ。私のジョークセンス……もとい、矜恃にも関わる問題ですから、ええ」

「普段の神社ジョークも別にそんなに笑えるものじゃないと思う……」

何故かちよつぱりカツコつけ風にキメ顔まで決める宮司に対して短いながらも割りと辛辣なトーンでツッコミを入れる調だが、宮司は特に気にする素振りもなく「はっはっはっ」と愉快げに笑って流すと、踵を返して拝殿の方に向かって歩き出し、賽銭箱の前にまで蓮夜達を案内していく。

「さてさて、確か事前の連絡では参拝をしたいという話も承りましたな。差し支えなければ、正しい作法を私の方でお教えしますが……」

「それなら大丈夫です。前に宮司さんに教わって、それから自分でも調べてみて一通り

の所作は覚えましたがから」

「おおつ、そうでしたか。勉強熱心な教え子を持って、私も何やら鼻高々な気持ちです  
よ」

「調、調！そのやり方、アタシにも教えて欲しいデス！」

「良ければ俺もいいか？恥ずかしながらこういった場所自体、今まで無縁だったせいで  
右も左も分からなくてな……」

「う、うん。えつと……最初はこうして2回礼をして……」

「こうデスカ？あ、お賽銭はいつ入れればいいンデスカね」

「賽銭か……そういえば前にいいご縁があるようにの語呂合わせで、五円玉を投げると  
良い出会いがあると聞いたがどうなんだろうか……それとも多く出した方がいいのか  
……」

「其処まで深く悩まずとも大丈夫ですよ。真に大切なのは金銭の大小ではなく、神様に向けて真摯に願い、それを強く想う事なのですからね。……それはそれとして、お賽銭を多く投げ入れてもらえるとうちの神社的にも大変に助かりますが」

「前半はいい話風だったのに、急な生々しい話で台無しになったデスよ……」

「勿論冗談ですよ？半分は」

「もう半分は本音なんだ……」

「成る程。つまり見返りも兼ねて多く賽銭を入れろと……一万円を全部五円玉に変えるか……?」

「蓮夜さんも真に受けたら駄目デスよ?!」

「はっはっはっ、申し訳ありません。皆さんのリアクションがあまりに良く、私もついっ

「い年甲斐もなくはしやいでしまいました」

身を蓋もない宮司のジョークに振り回されてげんなりしたり、一万円札を丸々換金しようとする真面目に検討する蓮夜を制止しつつ、調の不慣れな指導の元、何とか無事にお参りを済ませる三人。

その後、宮司の許可を貰って院内にある案内掲示板に蓮夜が持参した飼い主募集の張り紙を貼らせてもらい、一通りの用事を済ませた蓮夜達は一息吐いていく。

「これでヨシ……後はあの子の飼い主になってくれそうな人が、この張り紙を見て連絡してくれればいいけど……」

「お参りもお賽銭もきちんとやったんデス、きっと大丈夫デスよ」

「宮司さんもすまない。わざわざこちらの我儘に付き合ってもらって」

「いえいえ、善行のお手伝いが出来たのでしたらこちらとしても幸いです。ところで、皆

さんこの後は如何お過ごしで？もしご予定がなければ、少し家の方でおもてなしの方をさせてもらえませんか？」

「いや、流石に其処までは……ただでさえこちらが無理を言つて頼みを聞いてもらったというのに、その上もてなしまで受けるというのも……」

「いえ、実はこれでも天涯孤独の身でしてな。神社の事もあり、毎日寂しさに枕を濡らして過ごしているのです。哀れな老人につかの間の団欒を味合わせるボランティアだと思つて、少しだけでも寄つていつてもらえませんか？」

「……天涯孤独……？」

「結局孫はいるのかいないのかどちらなん德斯かね……？」

ヨヨヨつと、何ともわざとらしく悲しげに着物の袖で目元を拭う宮司に対して調と切歌もお互いに顔を寄せながら訝しげにジト目を向ける中、蓮夜は自分の都合を聞いてもらつてゐる以上此処で断るのもどうかと困り顔で少し悩んだ後、遠慮がちに小さく頷き返

した。

「そういう事なら……分かった。どの道次のバスまで時間もあるだろうし、少しだけ寄らせてもらえると有り難い」

「おお、それはそれは。では、こちらへどうぞ。すぐにお茶とカヌレを用意しますからな」

「其処は和菓子じゃなくてカヌレなんだ……」

「おいしければ何でも良いデス！」

蓮夜が承諾した途端コロリと態度を変えて明るくなり、早速自分の家にまで案内をし始める宮司の後を切歌がのほほんとした笑顔で着いていく。

そんな二人の強かさとお気楽さに調も思わず溜め息を吐きつつも、せつかくまた会えた宮司と事件とは関係なしにゆっくり過ぐすのも悪くはないだろうと気を改め、仕方が

ないと呆れ気味に微笑しながら隣に立つ蓮夜の顔を見上げていく。

「私達も行きましょうか。ちよつと変わってる人だけれど、宮司さんが作るお菓子、実際にととてもおいしいから期待してて大丈夫だと思いますよ」

「そうなのか……まあ確かに、掴み所の難しい人だとは思いますが、わざわざ急な頼み事をしてきた俺達をこうして気さくに迎え入れてくれて……お前から話に聞いていた通り、本当にととても良い人なんだと、鈍い俺でもすぐに分かる人柄をしてるんだな」

「ふふ。……?」

宮司の背中を見つめて静かに微笑む蓮夜の褒め言葉に、まるで自分の事のようにくすぐったい気持ちになり思わず口元から笑みがこぼれる調。

そんな気持ちを覚えた自分に一瞬疑問を覚えるが、蓮夜が先に歩き出したのを見て「まあいいか」と深くは考えずに思考を切り、皆の後を追い掛けようと足を踏み出した、その時……

「——へー。子猫の飼い主なんて探してるんだー」

「——?!」

「え……?」

先程張り紙を貼った案内掲示板の方から、不意にそんな声が届いた。

子猫に興味があるかのような好感触な声音。もしかしたら早速子猫の飼い主候補が見付かったのかもしれないと、今の声を耳にした途端顔色が急に変わった蓮夜の反応に気付かぬまま期待に満ちた表情で調が振り返ると、其処には……

「いやあ、とつても興味を引くねー。これって、僕みたいなのでもその気があれば引き取れちゃったりするのかなあ？」



案内掲示板にもたれ掛かるように片手を着き、わざとらしく声を上げて疑問げにそう問い掛けて来る革ジャンを着込んだ青髪の青年。

以前、風太郎達の世界で瀕死のアスカを助けに自分達の前に突然現れたもう一人の上級イレイザー……クレンが軽薄な笑みと共に佇む姿があったのだった。

「ッ?!アナタ、は……!」

「イレイザー……!!」

何の前触れもなく現れたクレンの姿を目にした瞬間、驚愕のあまり顔色を変えて思わず後退りしてしまう調の前に、蓮夜が険しい表情ですぐさま飛び出しクレンと対峙していく。

一方でクレンはそんな二人の反応にケラケラと明るく笑い、案内掲示板から離れて蓮夜と調に交互に視線を向ける。

「まあまあ、そんな顔しないでよ。会つて早々そんなに怯えられたら、流石に僕だつて傷  
付いちやうよ?」

「つ、いけしやあしやあとよくもつ……何故お前がこんな場所にいるつ?今度は何が目  
的だつ?!」

「んー? そうだなあ、気分転換に日光浴しに遠出したら、たまたま君達と鉢合わせた……  
なーんて、言つた所で信じてもらえるはずないよねえ?」

「つ……」

ハツハハツ!と、人をおちよくるような言い回しで話をはぐらかすクレンに対し、蓮  
夜と調は警戒心を露わに緊迫した表情を浮かべながらも何があつても咄嗟に反応出来  
るように徐々に徐々に足幅を広げ身構えていき、そんな二人を見てクレンは更に笑みを  
深めながら言葉を続けていく。

「まあ冗談はこの辺で置いとくとして。此処へは今君が聞いた通り、とある目的があつて足を運んでね。君達とこのタイミングで顔を合わせる事になったのは本当に予想外ではあつたけど……まあ、必要な工程が飛んだと思えば寧ろ好都合になるのかなあ」

「……好都合……?」

「一体何を企んでる……」

「ろくでもないこと♪」

簡潔に、たったの一言で己の目的を笑いながら話すクレン。

そのふざけた態度にいい加減連夜も不快感と苛立ちを露わにしつつある中、いつまでも追い掛けて来ない二人が気になって戻ってきた切歌と宮司がその場に現れた。

「二人とも、ずっと何やつてるデスかー?早くしないとカヌレが……って、オ、オマエは?!」

「どうされましたか皆さん？……おや、そちらの方は？」

「うん？もう一人の装者も揃ったか。んじゃ、もうそろそろ始めてもいい頃合いかな……？」

自分の顔を見て驚愕する切歌を一瞥し、クレンはそう言いながら徐に顔の横に掲げた左手で指を軽く鳴らす。

次の瞬間、クレンの足元の地面から突然大量の水が溢れ出して瞬く間に彼の全身を包み込んでいき、数泊の間を置いた後、水が弾けるように消し飛んで中から青の亜人が姿を現した。

全身の所々に魚の意匠が見られる海のように深い青の体色。その上から青と黒のローブを身に纏い、右手には金色に光輝く三又槍を手にし、バイザーのような青い瞳が特徴的な頭部には幾つもの耳飾りと、王のような冠が見受けられる海神……ポセイドンイレイザーへとその身を変貌させたクレンは、戯けるように肩を竦めながらイレイザー特

有のエコーが掛かった声で飄々と告げる。

『僕は別にアスカみたく恨みがある訳じゃないけど、こちらにも込み入った事情つてもんがあつてね。生憎と加減はしてあげられない。悪く思わないでくれよ?』

「か、怪物……?!」

「つ、宮司さん下がって……!」

「此処はアタシ達が!」

「何を企んでいるかは知らんが、此処で俺達が止めてしまえばそれで済む話だ……!」

いきなり目の前で人間だったハズのクレンが変貌したポセイドンイレイザーを目にして驚愕する宮司を守るように背に庇い、調と切歌はそれぞれの首に掛けたギアのペンドアントを、蓮夜はクロスベルトを腰に巻き付けながら左腰のケースから取り出したカードを手にし、

「Zeios igalimaraisen tron……」

「Various shulshagana tron……」

「変身！」

『Code x::clear!』

二人の装者の歌声と蓮夜の掛け声、電子音声が重なり合って鳴り響き、光に包まれた切歌と調はそれぞれシンフォギアを、蓮夜はクロスへと変身しながら手首を軽くスナツプさせてポセイドンレイザーと対峙していく。

そして三人の変身を見届けたポセイドンレイザーは小さく笑いながら拳を握り締めた左腕を徐に上げて手の平を下に開くと、その手から無数の灰色の塵屑がばら撒かれ、地面に落ちた塵屑の一粒一粒が徐々に巨大化しながら姿を変えていき、無数のダストと化して溢れ返った。



一方で、目の前で突如巻き起こった戦闘を前に戸惑うばかりだった宮司も自分を必死に逃がそうとする調の背中を目にし、未だ動揺は収まらないまでも何とか彼女に領き返しながら神社の裏口を目指して慌てて走り出していき、そんな宮司の姿を目で追いながらポセイドンイレイザーが何やら一人ほくそ笑む中、ダスト達の群れを突破したクロスがポセイドンイレイザーに飛び掛かって右拳を飛ばし、青の亜人が即座に振りかざした金色の三又槍とぶつかり合って甲高い金属音を鳴り響かせていくのだった。



一方その頃、S・O・N・G・本部にて……

「調神社にて、イレイザーとその他酷似した反応を無数に検知！この有り得ない数値……上級イレイザーのモノですっ！」

「神話型だど?!しかも調神社になど、何故そのような場所に奴等が……?!」



「レイザーの反応と共に、イガリマ、シウルシヤガナ、クロスの両三名の反応も近くに検知！交戦中の模様です！恐らく彼等を狙った襲撃かと……！」

「まさか、まだ記号を持たない二人を狙ってきたのか……？すぐに響君達に連絡して二人を向かわせろ！急げ！」

「了解！」

調神社で戦闘を開始したクロス達とポセイドンレイザーの反応はS・O・N・G・本部でも早くに検知され、上級レイザーの突然の襲撃に発令所も騒然となりながらも藤堯と友里のオペレーターコンビが響とクリスを現場に向かわせる手配を早急に行っている、弦十郎もモニターに映し出されるクロス達の反応から目を離さず、響達が到着するまで彼等が無事である事を焦燥と共に祈り続けるのであった。

## 第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ④（前）

—△式・艶殺アクセル—

「やあああああッ!!」

スカートを円状の刃に変形させ、まるでフィギュアスケート選手のように身体を高速回転させながら周囲を駆け回ってダスト達を次々に斬り裂いていく調。

それに続いて切歌が大鎌を大きく振るい、調が打ち漏らした残存するダスト達を纏めて引き裂いていくが、二人が撃退したダスト達は倒した端から蘇ってしまい、呻き声のような雄叫びを上げながら何事もなかったかのように起き上がっていく。

「くうっ……! やっぱり斬っても斬ってもすぐに復活しちゃうデスよ!」

「だけど足止めくらいなら出来てるっ……！響さん達が駆け付けてくれるまでの間、此処で何とか押し留めないと！」

でなければ、この調神社や周辺の民家等にも余計な被害が出ないとも限らない。本部が自分達やイレイザー達の反応を検知して応援を寄越してくれてると信じ、今はとにかくダスト達の足止めに専念しなければと、調と切歌はそれぞれのアームドギアを構え直し再びダストの群れに立ち向かっていく。

『そおおりやつ！よつと、たあああつ！』

『クツ……！ハアアアツ！』

その一方、戦いの流れで戦場を調神社の外の広場に移したクロスとポセイドンイレイザーは一進一退の攻防を繰り返して、互角の戦いを演じていた。

クロスはポセイドンイレイザーが突き出す三叉槍の素早い三連撃を首を僅かに逸ら

すだけで回避し、反撃に相手の懐に潜り込みながら足払いを仕掛けるも、ポセイドンイレイザーは軽やかな足取りで楽々とそれをいなしつつ、身に纏うローブが派手に舞うほどクルクルと身を翻して三叉槍を身体ごと横薙ぎに振るってクロスに叩き付けるが、クロスも負けじと瞬間強化を施した左腕で三叉槍を受け止め、すかさず残った右腕でポセイドンイレイザーの顔面に目掛けて裏拳を放つ。

しかし、ポセイドンイレイザーはそれも読んでいたかのように槍から離れた片手でクロスの裏拳を受け止め、クロスと至近距離で睨み合いながら小さく笑みを浮かべた。

『成る程ねえ……』 戦い方が以前と違う」と前にも聞かれてはいたけど、こうして実際に戦ってみるとその違いってのが良く分かるもんだ……』

『ツ……何の話だ……!』

『なあに、今の君と嘗ての君を重ねて見る必要はないってだけの話さ。実際前に戦った時の君のデータは役立ちそうにないほど、今の君は僕の予想通りには全然動いてくれないしねえ、つと!』

『ぐっ！』

飄々とした口調で疑問をいなし、クロスの腕を掴んだまま無理矢理引きずるように段差から飛び降りたポセイドンレイザーは空中で容赦のない前蹴りをクロスに叩き込み、強引に距離を離す。

クロスは受け身を取って何とか体勢を立て直す、其処へすかさず水を纏った三叉槍を振り上げたポセイドンレイザーが斬り掛かり、咄嗟に身を翻して水しぶきが流れる三叉槍を避けながら回転の勢いを利用し、そのままポセイドンレイザーの肩に目掛けて回し蹴りを叩き込む。

だがポセイドンレイザーの肢体にクロスの蹴りが当たった瞬間、ポセイドンレイザーの身体が突然バシヤアツ！と水のように変質し、クロスの蹴りを通過してそのまま地面に染み込むように消えてしまった。

『(?!)身体を、水に……?!』

『——ちよつとしたマジックつて奴さ』

『ツ——ガギイイイイイツ!!——ぐうううっ!』

水となつて地面に消えたポセイドンイレイザーを見て驚きを浮かべるクロスの背後から、飄々としたそんな声と共に鋭い殺気が背筋を駆け抜ける。

直感のまま右腕に光を灯して瞬間強化を行いながらすぐさま振り返ると、三叉槍の先端の刃が背後から襲い掛かり、右腕で火花を撒き散らしながら何とか槍を受け流したクロスは仮面の下で痛みで僅かに顔を歪めつつ、いつの間にか自分の背後に回り込んでいた青の巫人……無数の水粒を一箇所に集め、右半身のみを形成しながら金色の三叉槍を突き出すポセイドンイレイザーを睨み付けた。

『へえ……? 初見の筈の技をこうもあつさり凌ぐなんて、案外其処まで勘は鈍つてないって事かな?』

『ツ……身体を水のように変質させて、物体をすり抜けるだけでなく自由に再構築出来るっ……それがお前の能力か……!』

『あくまでその内の一つでただけだどね。生憎僕はアスカほど戦いが得意な方じゃないんだ。だからこうして能力に頼らなきゃ、君ともまともにやり合う事もままならないつて訳さ!』

言いながら、右足と右腕だけが繋がっている不恰好な状態から器用にも槍を振るい、クロスに続け様に鋭い突きを放っていくポセイドンイレイザー。

対するクロスも異様な格好で襲い来るポセイドンイレイザーの姿に戸惑いながらも三叉槍を最小限の動きで捌きつつ後退し、次の突きが放たれたのと同じタイミングで相手の懐に踏み込み、ポセイドンイレイザーの頭に目掛けて拳を飛ばす。

しかし、ポセイドンイレイザーも槍を回避されたのと同様のタイミングで三叉槍ごと右腕を再び水化させ、今度は槍を握り締めた左腕を瞬時に腰の後ろに引いた状態で形成し、クロスに向かって躊躇なく槍を突き出しその胸に直撃させていった。

『ぐっ?!何っ……?!』

『まだまだ、こんなもんで驚かれても困るよつと!』

瞬時に形成されたもう片方の腕を目にし、思わぬ一撃を喰らったクロスもその再生力の速さに驚愕を隠せぬまま激痛が走る胸部を抑えて態勢を立て直そうと後方へと飛び退くが、それを逃すまいとポセイドンレイザーは今の攻防の隙に集めた水で左足を形成しながら追撃し、再度三叉槍を勢いよく突き出してクロスに襲い掛かった。

眼前に迫る三叉槍の刃を前にクロスはすぐさまポセイドンレイザーの手から槍を蹴り払って何とか弾くが、回転しながら彼方へと空を舞う槍は再び水化して霧散する。

直後、ポセイドンレイザーは左足を構築する水で右腕と共に三叉槍を形成し、両手で握り締めた三叉槍を横一閃に振るう。

その奇つ怪な反撃にクロスも目を見張りながらも咄嗟に両腕を十字に組んでギリギ



り防御体勢を取るも、槍の斬撃を受け止め切れずに吹き飛び、ゴロゴロと地面を派手に転がっていつてしまう。

『グウウツ！ぐ、っ……！』（幾ら捌いて弾いても、槍や身体の部位を瞬時に入れ替えてすぐに反撃に転じてくる……！それだけでもやりにくいのに、こちらの物理的ダメージが殆ど通らないというのもっ……！』

地面に両手を着いてよろよろと身を起こし、欠損してる身体の部位を水で補い、徐々に再生していくポセイドンイレイザーを睨み付けながらクロスは仮面の下で唇を噛み締める。

こちらから拳や蹴りを繰り返せば瞬時に身体を水化してすり抜け、向こうの攻撃を避けても腕や足を武器ごと水化して入れ替えながら、予想外の方からの攻撃でこちらの虚を衝く。

水質化出来る能力を惜しみなく利用し、尚且つそれを最大限に活かしたトリッキーな戦術でこちらに動きを読ませようとしない。

何とも性根の悪い戦術だ。

これの一体何処が「戦闘は得意じゃない」なのかと小一時間は問いただしい心境になるクロスに対し、残りの水粒を全て集め、完全に元の五体満足の姿に戻ったポセイドン・イレイザーは黄金の三叉槍を器用にクルクルと手の中で回転させながら首を傾げてはくそ笑んだ。

『こんなもんかい？あのアスカを追い詰めたぐらいだからもう少しやるものと思っただけど、これはちよつと期待のし過ぎだったかなあ』

『ツ……嘗めてくれるなよ、こつちもまだ力の全部を出し切った訳じゃない……！』

ケラケラとわざとらしく笑うポセイドン・イレイザーの挑発に敢えて乗っかり、左腰のカードケースからカードを一枚取り出しながら立ち上がったクロスは腰のバックルのスロットを立ち上げ、カードを装填すると共に掌でバックルに押し戻した。

『Code Gungnir……clear!』

電子音声と共にクロスの装甲が一部分離していく。そして新たに形成された橙色の仮面とアーマーが次々に纏われていき、タイプガングニールへとタイプチェンジして身構えるクロスを目にしたポセイドンレイザーは興味深そうに頷いていく。

『それがこの物語で新しく手に入れた力の一つって奴か。噂には聞いてたその力、どの程度のものか確かめさせてもらおうか!』

—バチイイイイイイツ!!—

『チイ……!』

初めて目にする筈のタイプガングニールを前に臆するどころか、寧ろ愉しみを露わに三叉槍を嬉々として振るい金色の雷撃を再び放つポセイドンレイザー。

うねる波のように迫り来る雷撃を前にクロスも咄嗟に両脚のパワージャッキを稼働

させ、目にも止まらぬ瞬発力で雷撃を回避するように真横へと跳び、更に続け様にパワージャッキを連続稼働させて地面を吹き飛ばす程の勢いで地を蹴り、ポセイドンレイザーに一気に肉薄して右腕を鋭く振り抜き、殴り掛かる。しかし、

—バシヤアアツ!!—

『(っ、また水化か……!)』

クロスの拳が触れると同時にポセイドンレイザーの上半身が再び水のように弾け、クロスの拳が虚しく空を切ってしまう。

そのまま勢い余つてすれ違うクロスの背後で、残った下半身の断面部から一瞬で上半身を生やしたポセイドンレイザーがガラ空きのクロスの背中に向けて素早く三叉槍を振りかざす。

それに対しクロスもすぐさま両腕のナックルを分離してそれぞれ純白の烈槍と漆黒の烈槍に切り替えると、二本の烈槍の柄の底をジョイントさせた両刃の烈槍を頭上に掲

げてギリギリで三叉槍を受け止めつつ、力任せに押し返しながら振り向き様の薙ぎ払いでポセイドンレイザーを後退させていく。

『つと、とと……！へえ、応用力もそれなりに兼ね備えていると？確かに厄介な力だ。アスカが退けられたのも頷けるよ』

『……いつまでそうして様子見を続けるつもりなんだ……それで俺の力を計ってるつもりか……？』

『一応はそのつもりだよ。ただまあ、君の力が僕の想定を超える物でなければさっさと見切りを付ける気でもある。……無用な長物を弄ばせておく余裕なんて、こっちにはないからね……』

『……？』

ボソツと、顔を背けて何事か呟くポセイドンレイザーの声を上手く聞き取れず、クロスが怪訝げに小首を傾げる。

そしてそんなクロスの反応を他所にポセイドンイレイザーは顔を背けたまま僅かに小さく微笑んだ直後、その場で派手に身を翻しながら再び大きく横薙ぎに振るう三叉槍から雷の一撃をクロスに見舞い、それを目にしたクロスも咄嗟に両刃の烈槍を振るって雷撃を打ち消し、今の一瞬でいつの間にか回り込んでいた背後から不意を突いて襲い掛かろうとしたポセイドンイレイザーの一撃を振り向き様に烈槍で受け止め、火花を散らしながら鏝迫り合っていく。

『それじゃあ仕切り直しだ。海神の槍と雷神の槍、どちらが上か勝負といこう♪』

『ツ……お前のくだらない酔狂に付き合うつもりはない……! さっさと決着を着けさせてもらう!』

今は調と切歌が止めてくれているとは言え、今のあの二人にはあの数のダスト達を倒す術がない。

きつと本部も自分達の反応を検知して響とクリスを応援に寄越してくれているとは思

うが、この腹の底が読めない男がそれを見越していないとも思えない。

何か嫌な予感に後押しされるまま、今はあの二人の為に一刻も早くコイツを撃退せねばと気を改め、クロスはポセイドンレイザーの顔の横を突き抜ける烈槍の先端を左右に開き、刃の奥に内蔵された砲口から高出力のビームを撃ち出す。

その熱量に驚いたポセイドンレイザーが思わず身じろいで槍に込めた力を抜いた瞬間、クロスはその隙を逃さずビームを放ったまま相手の首に目掛けて三叉槍と鏢迫り合ったまま槍を押し込み、そのままポセイドンレイザーの頭をビームで一閃しようとするが、寸前の所でポセイドンレイザーも咄嗟に全身を水に変質させ、やはり紙一重で回避してしまう。

そして今度はクロスの頭上に無数の水粒を瞬時に集めて実体化し、落下の勢いを利用して三叉槍を振り下ろすポセイドンレイザーに反応し、クロスも両刃の烈槍を振り上げて再び激突していくのであった。



「——ぐあああうっ!!」

「切ちゃんっ! くっ!」

場所は戻り、ダスト達を院内に押し留める為に必死に奮闘し続ける調と切歌だったが、記号の力抜きでは無限の再生力を誇るダストの群れの進行を前に徐々に数で押されていき、体力の消耗から僅かに集中力が途切れた隙を突かれ、切歌がダストの攻撃を喰らい吹き飛ばされてしまっていた。

それを見た調は咄嗟に切歌を庇うように倒れる彼女の前に立ち、ヘッドギアの左右のホルダーから小型の丸鋸を連続で放ってダスト達を近付けまいとするが、ダスト達は調の攻撃を受けて頭や腕を欠損しても立ち所に再生してしまい、歩みを止める事すらなく不気味な雄叫びと共に二人へ迫っていく。



（っ……どんなに傷を負わせても向こうの再生のスピードの方が速い……！前に別世界で戦った個体とは再生力が明らかに違う！）

以前風太郎達の世界で戦ったダスト達も際限のない再生力を有していたが、目の前の軍勢のソレはあの時に戦ったどの個体よりも段違いに上回っている。

恐らく生み出す上級イレイザーによって、アレらにも個体差が出るのかもしれない。

どれだけ傷を負っても構わずに迫るダスト達を前にそう考え、調も出せる力の全てを振り絞って必死に迎撃する中、そんな彼女の背中を横目に切歌も震える手で地面に転がる大鎌に手を伸ばすが、其処へ小型丸鋸の弾幕を潜り抜けた数体のダストが調に突進し、切歌の下にまで吹っ飛ばしてしまった。

「うあああうっ！」

「調っ?!」





ていくように明るくなっていく。

そして突然の闖入者にダスト達も思わず動きを止めて立ち尽くす中、そんなダスト達の頭を次々に撃ち抜きながらも一人の乱入者が空から現れて着地し、少しずつ治まっていく土霧の向こうで調と切歌の窮地を救った二人組……ギアを纏った響とクリスはお互いに肩を並べ、未だ戸惑いを拭いてないダスト達と対峙しながら身構えていく。

「響さん……！クリス先輩！」

「遅れてごめん二人共、助けにきたよ！」

「ナイスタイミングデス！痺れるデス！」

救援に駆け付けてくれた心強い援軍に喜ぶ二人に、響も振り返って頼もしい笑顔を見せて頷く。だがそんなつかの間の安息すら与えまいと、突然の乱入者に足を止めていたダスト達が獣の雄叫びを上げながら一斉に装者達へと襲い掛かり、迫り来るダスト達を前にクリスも忌々しげに舌打ちする。

「急に本部からの報せを聞いて駆け付けてみりやまたコイツ等かよ……！いい加減見飽きてんだよ、お前らの面もっ！」

「クリスちゃん、援護をお願い！はあああああつ！！」

先の異世界転移騒動で散々煮え湯を飲まされた顔触れにうんざりしながらも、先手必勝と言わんばかりに両手のアームドギアを大型ガトリングガンに切り替えて迎撃を開始するクリス。

その弾丸の軌跡を追うように響も勢いよく地を蹴ってダストの群れの中へと勇ましく突貫していき、二人がダスト達と戦っている隙に何とか起き上がった調と切歌のヘツドギアに、本部からの通信が届く。

『響ちゃんとクリスちゃん、現着しました！』

『そのまま交戦状態へ移行！』

『上空イレイザーは破格の脅威だ！先ずは装者全員でダスト達を迅速に殲滅した後、蓮夜君の援護へ向かえ！彼なら上級イレイザーが相手でもそう簡単にはやられはしない筈だ！』

「了解デス！調……！」

「うん……！此処から一氣に形勢逆転——！」

記号持ちの二人が駆け付けてくれたおかげで戦況は一氣にこちら側へ覆ったが、このまま何も出来ずに助けられたまま終わる気などない。

助けられた借りを返しつつ、自分達に出来る最大の援護で二人を手助けすべく、調と切歌もアームドギアを構え直し二人に続こうとした、その時……



察した調はすぐさま両足のブーツに内蔵された小型の車輪を展開し、地面を滑走しながら急いで神社の裏手へと走り出していく。

「調?! 待つデスよ、調ーっ!!」

「切歌ちゃん! 待つ、くうっ?!」

「おい待てっ! いくなっ! もし敵がイレイザーならお前等だけじゃ……!」

調の後を追って走り出す切歌を慌てて呼び止めようとする響とクリスだが、ダスト達はそんな混乱にもお構い無しにと二人に容赦なく襲い掛かり、絶え間なく雪崩込んでくるダスト達に対して響とクリスも迎撃を余儀なくされてしまう。

(今の声、間違いなく宮司さんのだった……! 一体何が?!)

「調っ! 一人で先走るのは危険デスっ! 待つデスよ、調っ!!」



その一方、先程の悲鳴の主である宮司を探し戦線を離脱した調は背後から追い掛けてくる切歌の静止の声にも聞く耳を持たず、靴裏の車輪の回転速度を更に速めて神社を迂回し、裏手へと回り込んでいた。

そんな彼女の聞かん坊ぶりに切歌も「ああもうっ!!」と声を荒げて思わず頭を掻きながら、それでも彼女を一人放っておく訳にはいかず急いで調の後を追いつ、神社の裏手に回ると、其処には……

『ケケケ……ケケケケケケッ!』

「うう………あああつ………」

——裏手に回った二人の視界に飛び込んできたのは、緑と灰色が入り交じったよう

な体色をし、不気味に首を回しながら嗤うカメレオンの姿をした赤目のイレイザー。

そしてそんな謎のイレイザーに首を掴まれ、身体を無理矢理持ち上げられて呼吸もままならず、顔色が見るみる内に青白くなっていく宮司の姿だった。

「ノ、ノイズイーター……?!イレイザーがもう一体いたのデスか?!」

「宮司さんっ!!このっ……!!」

—α色式 百輪廻—

『!ケヒヒツ、ケヒヤヒヤヒヤハッ!!』

イレイザーの気配や反応を探知出来る筈のクロスや本部から何も聞かされていない、新たなイレイザーの出現に切歌が動揺を浮かべる中、宮司の痛ましい姿を見て頭に血を昇らせた調がヘッドギアの左右のホルダーから小型の丸鋸を連続で射出していく。

しかしそれに気付いた新たなイレイザー……カメレオンイレイザーはすぐさま宮司から手を離し、理性の欠片もない狂った笑い声を上げながら無数の小型の丸鋸を軽快な動きで回避してその場から飛び退き、逃げるように後退していつてしまふ。

「逃がさないっ！」

「お、落ちて着くデスよ調っ！今は宮司さんを……！宮司さんしっかりっ、しっかりするデスっ！」

「……………うう……………あああ……………」

後退するカメレオンイレイザーを追撃し、小型の丸鋸を乱射しながら滑走して後を追う調を慌てて呼び止めながら宮司の下へと駆け寄る切歌だが、彼女に抱き抱えられた宮司は気を失ったまま何かに苦しむように悶え、呻き声を漏らしている。

そんな宮司の姿を横目に調も無意識に唇を噛み締め、自分の攻撃をいなしてわざわざ屋根の上に陣取り、首の骨を不気味に鳴らしながら赤い瞳でこちらを見下ろすカメレオ

ンイレイザーを見上げ、鋭く睨み付けた。

「よくも宮司さんをつ……絶対に許さないっ、貴方だけはっ！」

『ゲゲゲゲ……ゲギヤアアッ！』

狙うのならイレイザーを倒す術を持たない自分達を狙えばいいものを、わざわざ何の戦う力を持たない一般人である宮司を襲ったカメレオンイレイザーの卑劣さに怒りを滾らせ、調はヘッドギアの左右のホルダーから二枚の巨大な回転鋸を展開しながら跳躍してカメレオンイレイザーへと飛び掛かる。

対するカメレオンイレイザーもそんな調の激昂を馬鹿にするかのように薄気味悪く嘲笑い、屋根の上から軽快に飛び出して調を迎え撃とうとした、その時……

『——困るなあ……此処で装者と戦うのはNGだって、事前に何度も釘刺しておいた筈

でしょ?』

……不意に何処からともなく響き渡る飄々とした男の声。

直後、調とカメレオンレイザーの横合いから金色の雷撃が突如飛来し、無防備な二人の横腹に轟音と共に炸裂して纏めて吹き飛ばしてしまったのだった。

『ギヤアアツ?!?!?』

「うぐああううツ?!?!?」

「ツ……?!?!し、調っ?!?!」

突然の攻撃に受け身も取れず吹き飛ばされ、地面の上を何度も転がって土埃を巻き上げる調とカメレオンレイザーの姿を目にし、宮司を一旦近くの木陰に避難させていた

切歌も驚きと共に慌てて調の下へと駆け寄り、身体を抱き起こしていく。

其処へ、砂利を踏み鳴らす音と共に誰かが近付いてくる足音が聞こえ、その音に釣られて切歌が思わずそちらに目を向けると、其処には……

『……全く、理性のないノイズ喰らいはすーぐこっちの思惑から逸れるから大変だ。命令に従順なところは評価出来るけど、飼いやらすのにはもうちょっと時間が掛かるかなあ、コレ』

「ツーど、どうしてっ……?!」

「ぐっ……じ、上級イレイザーが……もう、一体っ……!!?」

肩を竦めて「やれやれ」と首を振りながら姿を現したのは、黄金の三叉槍を手にした

青と黒のローブを纏う巫人……。

今も調神社の外でクロスと一対一の激闘を繰り広げている筈の、”もう一人のポセイ  
ドニイレイザー”の姿があつたのだつた。

# 第七章／離Yy式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ④（後）

『Final Code x……clear!』

『ハアアアアアッ……ハアアアアッ!!』

時間は少し戻り、調神社の外の広場ではポセイドンイレイザーから距離を離れたクロスが腰のバックルにカードを颯と装填し、辺りに響き渡る電子音声と共に両肩のアーマーを変容させたドリルナツクルを右腕と左腕にそれぞれ纏い、両腕を交互に突き出して白と黒のドリルナツクルをポセイドンイレイザーに向けて立て続けに放っていた。

ドオオオオツ!!と、クロスの両腕から勢いよく射出された二基のドリルナツクルは刃を回転させながら稲妻状の火花を撒き散らし、ブーストで加速しながらポセイドンイレ



イザーに向かつて一直線に空を駆け抜ける。

それを見たポセイドンイレイザーも即座に真横へ飛び退いて回避を試みるが、二基のドリルナツクルは空中で横滑りに方向転換してポセイドンイレイザーを追い続けている。

『おいおいマジイ？自動追尾付きってまた厄介だなあ、つたくー！』

バックステップを繰り返して何とか振り切ろうとしても、白と黒の二基のドリルナツクルは執拗にポセイドンイレイザーを追い掛けて追撃を止めようとしめない。

やがて痺れを切らしたポセイドンイレイザーは「めんどくさっ！」とボヤキ、このままでは埒が明かないと踏んだのか後退を止めて三叉槍の切っ先を突き出し、槍の先端から雷撃を立て続けに撃ち出す。

宙を奔る雷撃を浴びせられ、二基のドリルナツクルは空中で機能停止しながらそのまま内側から爆発して木っ端微塵に吹き飛んでしまい、追撃を免れたとポセイドンイレイ

ザーが胸を撫で下ろして一息吐いた瞬間、ドリルナツクルの爆発で発生した黒煙を切り裂いてクロスが勢いよく飛び出し、ポセイドンレーザーの懐へと踏み込んだ。

『！やつべ——！』

『ぜえええアあああつ!!』

気を抜いた一瞬の隙を突いて肉薄するクロスを前に慌てて槍を突き出すポセイドンレーザーだが、それに対してクロスも咄嗟に下から突き上げた掌底で三叉槍を上へと弾きながら後ろ腰に両腕を引き、そのままポセイドンレーザーの腹部に押し当てた両手で発勁を叩き込む。

しかし、発勁を打ち込まれたポセイドンレーザーは瞬時に自身の身体を水質化させて弾け飛び、そのまま無数の水粒と化した己自身をクロスから離れた場所に集めて実体化し、無傷の状態で何事もなかったかのようにほくそ笑んだ。

『無駄だよ無駄。水そのものになれる僕に物理的な技なんて何一つ通用しない。幾らや

り口を変えようと、君の攻撃が僕に届く事なんて有り得ないのさ』

『……………』

どんなに技の趣向を変えようとも、あらゆる技を水になつて無効化する自分の前では無意味でしかないと、ポセイドンレイザーは自身の胸を親指で突つきながら自信に満ちた口調で言い切る。

対するクロスは無言のまま何も答えずに左手を前に、右腕を腰の後ろに引いて構えを直していき、そんなクロスを見て彼がまだ性懲りもなく戦うつもりだと察したポセイドンレイザーはやれやれと肩を竦め、三叉槍をクルクル回しながら槍の先端から雷を放出していく。

『何度やつたつて結果は変わらないつてのに、諦めが悪いのも考えものだね……。まあいいさ、君にまだその気があるなら僕も吝かじやない。とことんまで付き合つて、その闘志を根こそぎまでへし折るのも悪くは——』

対策もロクに取らず、愚直にただ向かってくるだけなら所詮その程度。

利用する価値もないのなら此処で始末するだけだと、クロスに見切りを付けるべきか否かの算段を今から考え始めながらポセイドンレイザーが槍を振りかざし、再び雷撃を放出しようとした瞬間、

——ポセイドンレイザーの腹の内側から突如、まるで刃が突き出すかのように橙色の爆発が発生したのであった。

『——ッ?!?!な、につ……?!?!』

ガシャンッ!と、不意に腹部を襲った凄まじい激痛と衝撃に見舞われ、思わずその手から落とした三叉槍が地面に落下し甲高い金属音が鳴り響く。

何だ、今何が起きた？

あまりの痛みに立つ事もままならぬままそんな疑問が脳内を埋め尽くし、片膝を着いて円形状の火傷の跡が残る腹部を抑えながら混乱するポセイドンレイザーを見て、クロスは僅かに構えを緩めながら何かに納得したように頷く。

『成る程……厄介なその力、どうやら意識外に発動する事は出来ないようだな……ある程度は意識しなければ使えないとなれば、こちらが付け入る隙もそれなりにありそうだ』

『ツ……この痛みつ、君の仕業かつ……！ 一体、何をっ……?!』

『別段大した事は何もしていない……。たださっきの攻撃の際、お前が変容した水の中に少し仕込みをさせてもらっただけだ』

先程の攻防の際、ポセイドンレイザーの腹部に打ち込んだ発勁。

一見かわされてしまったかのように見えたあの一瞬、ポセイドンレイザーが変容したあの無数の水粒の中にエネルギーを予め注ぎ込み、奴が油断し切つて実体化している

隙に時限式で暴発させ、ダメージを与えられないか試みた。

奴の能力が無意識にでも発動するものなら無駄にしかならなかったが、どうやら思っていたより効果は靦面だったようだ。

駄目元のもりだった策が幸を成し、奴の能力の穴が露呈したこの隙を逃すまいとクロスはすかさずバックルからスロットを立ち上げ、再度押し込み電子音声を鳴り響かせる。

『Final Code x……clear!』

『ツ！させるか!』

ベルトを操作するクロスを見てポセイドインレイザーはすぐさま手を着いた地面に水のエネルギーを注ぎ込み、地面から巨大な水柱を幾つも噴き出させてクロスへと襲い掛かっていく。

しかし、クロスは迫る水柱を前にしても動じる様子はなくゆっくりと身を屈めながら全身の装甲を部分展開していき、仮面の複眼とクラツシャーの内側から橙色の光を発光させる。

同時に、オレンジ色に光輝く両脚を揃えて勢いよく地を蹴り、水柱を軽々と飛び越えながらパワーージャッキを稼働させた雷光を纏う右脚を突き出し、咄嗟に防御態勢を取るポセイドンイレイザーの三叉槍と正面からぶつかり合っていたのだった。

『はアアアああああああっっ!!!』

『ぐううううっ!!こ、んな……ものでえっつ……!!』

雷光煌めくクロスのパワーージャッキを全力で受け止めながら、ポセイドンイレイザーは身体を再び水に変容させて何とかこの場から切り抜けようと試みるが、先程受けた腹部のダメージのせいで集中が出来ず、上手く身体を変容させる事が叶わず目に見えて水質化の速度が落ちていく。





ああああー………！！！？』

背中を向けて着地したクロスが部分展開された全身の装甲を完全に元に戻したと同時に、ポセイドンイレイザーの胸から一際大きい火花が噴き出し、直後、凄まじい爆発が身体の内側から巻き起こりポセイドンイレイザーを呑み込んでいった。

その熱を背中越しに感じ取りながらクロスも薄い息を吐き出し、元の通常形態に戻りながら徐に身を起こして振り返ると、地面を走る炎の中に力無く仰向けに倒れ、ポロボロの姿で気を失っているポセイドンイレイザーを静かに見下ろしていく。

（手応えは確かにあった。今の一撃で倒せたのは間違いない………しかし何だ、この違和感………本当にコイツはあの上級のイレイザーだったのか………？）

仮面の下で訝しげに眉を顰め、クロスは地面に倒れたまま動かないポセイドンイレイザーをじっと見つめる。

前に戦ったイグニスイレイザーがそうだったように、神話型のイレイザーともなれば

その力は並のイレイザーを上回り、他の追隨を許さない絶大な力を有しているハズ。

なのにそんな難敵を相手に、特に苦戦する事もなくこうもアツサリ倒せるなどと、幾ら自分が以前より力が増してるとは言えそんな事が果たして有り得るのだろうか。

とてもあのアスカと同じ存在とは思えないポセイドンイレイザーの強さに内心疑問を抱かずにはいられないクロスだが、思考の末にやがて深々と溜め息を吐きながら頭を振り、倒れるポセイドンイレイザーに近付いて一步前へと踏み出した。

（まあいい、考えるのは後回しだ。いずれにせよコイツが危険な存在である事に変わりはない。今はこの男を敵の情報源として拘束すべきか否か……いや、あのアスカとかいうイレイザーが追い詰められたあまり自爆しようとした例もある……下手に生かしておくよりも、此処で始末して奴らの戦力を少しでも削るべきか……）

仮に此処で拘束したとしても、この男がそう易々と情報を吐いてくれる保証もなし。何より、このイレイザーの力が今の戦いで見せた全てとも限らない。

不用意にこの男をS・O・N・G・の内部に招き入れ、その力で組織を内側から攻められでもすればひとたまりもない。

その危険性を考慮し、アスカの時の二の舞にならぬように此処で完全に息の根を止めるべきかと考え、左腰のカードケースから一枚のカードを抜き取ったクロスはバックルに装填して再び必殺技を発動しようとし……

——倒れたまま動かないポセイドンレイザーの全身が不意にドロリと、水色のゲル状に変質し始めた。

『ツ?!何だ……これはっ……?』

先程の戦闘で見せた水質化とは明らかに様子が違う異常。

また新たな攻撃の兆しかと思い、慌てて身を引きながら警戒を強めるクロスを他所にポセイドンレイザーの異変は止まらず、その肉体はまるで飴細工のようにドロドロと

溶けていき、そのまま地面に吸い込まれるように消滅し始めていた。

『！おい、待て！』

目の前で身体が崩れていくポセイドンイレイザーを見て驚愕を隠せないまま慌てて呼び止めるクロスだが、その声も届かず、ポセイドンイレイザーは完全に液化化して消えてしまうと共に、イレイザー特有の気配も消えてなくなってしまった。

(ツ……完全に消滅したっ………どういう事だ、死んだのか？いや、仮にも神話型があの程度の傷で致命傷になる筈が………?!)

目の前で起こった突然の出来事に理解が追いつかず困惑するクロスだが、その時、調神社の方から奇妙な気配を感じ取り、驚きと共に神社の方へと振り返る。

(何だ、この妙な気配………？前にも何処かで……)

『——蓮夜君！聴こえているか?!』

『…………ツ！風鳴司令？』

今の今まで感知する事が出来なかった、突然沸いて出たようにしか思えない何処か覚えのある気配にクロスが困惑する中、不意に本部にいる弦十郎からの通信が届いた。

今度は一体何事かと困惑が収まらぬまま聞き返そうとするが、それよりも早く、切羽詰まった様子の弦十郎から衝撃的な事実を告げられた。

『緊急事態だ！君が戦っていた上級イレイザーがもう一人、新たなノイズイーターと共に現れた！現在調君と切歌君が応戦している！今すぐ救援に向かってくれ！』

『…………なっ…………』

先程不可解な消え方をした筈のポセイドンイレイザーが、新たなノイズイーターと共に調と切歌を襲っている。



ドンレイザーの襲撃に遭い、窮地に立たされていた。

ポセイドンレイザーが乱雑に振るう三叉槍から放出される金色の雷が大地を抉りながら調と切歌に炸裂し、二人は纏めて吹き飛ばされてゴロゴロと地面を転がり倒れ伏せてしまう中、ポセイドンレイザーは飄々とした足取りでそんな二人に歩み寄りながら退屈げに告げる。

『この程度なのかい？前の戦いじゃ雪音クリスは記号がなくともアスカを相手にシノギを削ったと聞いていたけど、君達に其処までの期待を求めるのは酷な話だったかな？』

「ううっ……！」

「っ……ど、どうして、此処に……？貴方は蓮夜さんと、戦ってたハズ……！」

『さあねえ。どうしてだと思おう？見事正解したら豪華賞品を進呈しよ。……なーんてね』

ケタケタと、人の神経を逆撫でするようなわざとらしい笑い声と共に三叉槍を振り上げ、ポセイドンレイザーは倒れる調と切歌に容赦なく襲い掛かる。

それを見た二人も咄嗟に左右へ飛び退いて散開しながら槍の一撃から逃れるが、ポセイドンレイザーは躲された三叉槍をそのまま地面に突き立ててエネルギーを流し込み、瞬間、ポセイドンレイザーを中心に凄まじい水爆発が発生し、調と切歌を巻き込み纏めて吹っ飛ばしてしまった。

「うああああっ!!」

「ぐうつつ!!(っ……これが上級レイザーの力っ……今の私達じゃっ……どう、すれば……!」

至近距離からの爆発をともに喰らって地面に叩き付けられてしまい、全身水浸しになりながら調は激痛の走る身体を抑えて何とか上体を起こし、焦燥の入り交じった眼差いでポセイドンレイザーを睨み付けながら額から汗を伝らせていく。



思わぬ形で合間見える事になってしまった上級イレイザーとの初戦。

その力は蓮夜の口頭や以前見た蓮夜とイグニスイレイザーの戦闘記録で知識としては理解していたつもりだが、こうして実際に相對してその脅威度は想像を遙かに超えていた。

このままでは数度の打ち合いもままならずこちらが負ける。

そう確信せざるを得ない程までの力の差を感じて二人が焦りを露わに何とかアームドギアを手に身を起こす中、悠然とした足取りで二人に歩み寄ろうとしたポセイドンイレイザーは視界の端で脇腹を抑えながらこちらを見つめるカメレオンイレイザーの存在に気付き、面倒そうに溜め息をこぼした。

『まだ居たの？ せっかくこうして時間稼ぎしてるのに、君が何時までもそんなんじや意味ないでしょ？ 役目は終えたんだし、さっさと離脱しなよ』

『ギギギ……ゲゲゲゲツ……』

冷たい口調で突き放すように告げるポセイドンイレイザーの指示に、カメレオンイレイザーは一瞬何処か不服そうに俯いた後にその身体を徐々に透明化させていき、やがて周りの景色に溶け込むように完全に消えてしまった。

「い、イレイザーが消えちゃったデスよ?!」

『二人とも、今の内だ！そのまま負傷者を連れて後退しろ！今のお前達ではそのイレイザーには勝てん！奴の相手は蓮夜君達に任せるんだ！』

「!そういう訳には……!——ガギイイインツ!!——うああつ!!」

「調?!ぐあうつ?!」

弦十郎からの命令を無視し、消えたカメレオンイレイザーの後を調がふらつきながら追いつけようとするも、それを阻むように接近したポセイドンイレイザーが三叉槍を調に叩き付けて斬り飛ばしてしまい、更にうつ伏せに倒れる切歌に歩み寄ると共にその背

中を踏み付け、両手に握り締めた三叉槍の先端を真下に向けて彼女に突き付ける。

『悪いけど彼を追わせる訳にはいかないのでね。後々の為にも、此処で一人ぐらい再起不能になってもらおうか!』

「ツ……!!」

「切ちゃん!!」

一切の躊躇なく振り下ろされた三叉槍の鋭い刃が、切歌の背に勢いよく迫る。その光景を前に調も必死の形相で慌てて起き上がるが既に間に合わず、三叉槍が自身の背中を刺し貫く痛みを備えて切歌も目を強く瞑りながら思わず顔を伏せた、その時……

『Final Code x……clear!』

『はあああああつっ!!』

『…………ツ！—ドゴオオオオンツ！！—ぐううううっ！』

「…………うえ?!」

「ツ！蓮夜さん…………！」

何処からともなく鳴り響く電子音声と共に、神社の屋根の上を軽々と飛び越えながら現れたクロスが蒼色に輝く右脚を振り抜いてポセイドンイレイザーに不意打ちの飛び蹴りを放ち、その顔を思いつきり蹴り飛ばして切歌から引き離したのであった。

そうして切歌の窮地を救ったクロスを見て調の表情に喜色が差す中、其処へ丁度ダスト達を片付けた響とクリスも合流し、調と切歌の下へと駆け寄っていく。

「調ちゃん、切歌ちゃん！」

「お前ら、無事か?!」

「響さん……クリスマス先輩も……」

「な、何とか、大丈夫です……。蓮夜さんもありがとうです、助かったですよ……」

『間に合ったのならそれでいい……。それより……』

調と切歌を一瞥して彼女達の無事に内心安堵しつつ、クロスは鋭い眼差しで目の前の青の巫人……クロスに蹴られた顔を抑え、わざとらしく痛がる素振りを見せるポセイドンイレイザーを睨み付けた。

『いつてえっ……。ちよつとさあ、いきなり不意打ちした上に人の顔を蹴り飛ばすとか酷くないかい？もう少しこう、手心つてのをさあ』

「ほ、ホントに上級イレイザーがもう一人……?!」

『どういう事だ……。今さっき倒した筈のお前が、どうしてこんな所にいる……。！』

『え、全無視？わー、流石に僕でもこれは傷付いちやうかなー。幾ら人でなしって言っても、そういうので傷付くだけの人並みの感情ぐらいはまだ残ってるつもりなんですけどー？』

『惚けるんじゃない！いいから答えろ！それにさつきまで感じていた奇妙な気配、ノイズ喰らいも此処にいた筈だ！一体何処へ隠した?!』

「そ、それが……」

「さつき、コイツに邪魔されたせいで逃げられちゃったデスよ……しかも逃げられたその一つのせいで、宮司さんが……」

「んだと……?!」

悔しげにそう言いながら調と切歌が向けた視線の先を追うと、近くの巨木に寄りかかったまま気を失っている宮司の姿を捉え、響は慌てて宮司の下へと駆け寄り、クロス

もそんな宮司の変わり果てた姿を見て仮面の下で険しげに顔を歪めながらポセイドン  
イレイザーに向けて静かに身構えていく。

『どうやらお前には、聞き出さなければならぬ事が山ほどありそうだ……何が目的  
のか、此処で全て吐いてもらおうぞ……！』

『いやいや、そう言われて素直に答える奴っている？まあそれで何かが面白く変わるん  
なら吝かじゃないけど、そうじゃないならこつちには何のメリットもないしさあ？』

「ごちやごちやうるせえんだよ！良いからとつとと武器捨ててプチヨヘンザしやがれ  
！」

後頭部を掻きながらめんどくさそうに告げるポセイドンイレイザーの煮え切らない  
態度に痺れを切らし、クリスが怒号と共に銃を突き付けて投降を促すものの、ポセイド  
ンイレイザーはそれでも余裕を崩さず鼻で軽く笑いながらクロス達の方に向き直る。

『まあそう焦らないでよ。折角仕込みも終わってこれからって所なんだし、どうせなら

君達も楽しんでいくといい。こんな体験、普通に物語の筋書き通りに生きてたら絶対に味わえないんだしさ？ふふ』

『何を——！』

ふざけた事を……！と、軽薄なポセイドンイレイザーの態度に憤って反論しようと身乗り出すクロスだが、その言葉も最後まで言い切れず驚愕で目を見開いてしまう。

何故なら、目の前で唾うポセイドンイレイザーの身体が突然先程と同様徐々に水色のゲル状へと変化していき、全身がゆっくりと溶けて崩壊し始めたからだ。

「な、何だコイツ……身体が急に……?!」

『転移……？いや、違う……まさか、お前はっ……』

『フツ……もう一人の僕の口から聞いてない？僕はアスカのように戦いが得意な方じゃないから、自分の能力を駆使しないと君達とまともに戦うだなんて怖くて仕方な



い。だからまあ、僕自身は安全な所で高みの見物をしつつ、こうして”傀儡”を通して現場を指揮してゐるって訳さ』

「く、傀儡……?」

「クソツ!」

少しずつ身体が溶けていくポセイドンイレイザーの傀儡というワードに戸惑う切歌の横で、クリスがポセイドンイレイザーを逃がすまいと躊躇なく両手のリボルバーを発砲してその頭を撃ち抜いていく。

だが、ポセイドンイレイザーは頭を風穴だらけにされても何事もなくクツクツと不敵に笑いながら完全なゲル状に変化し、地面に粘液状の水溜りを広げて完全に消え去ってしまった。

「ツ!逃げたのか……!」

『……いや……今のはきつと奴が言っていたように、能力を使って生み出した偽物……それも気配が寸分違わない所からしてダストとは比べ物にならない分身だ……本物の奴本人は恐らく、何処か別の場所から俺達の事を見ているんだろう……』

そう言つてクロスはポセイドンレイザー……否、クレンが能力を用いて生み出した分身が消えた後の地面を見下ろすと、顔を上げて険しい表情のまま遠方を睨み付けていく。その視線の先に……

「——こつちに気付いてる……つて訳でもないか。まあ仮にそうだとして、今更S・O・N・G・に追つ手なんか向けさせても間に合う筈ないけど」

——調神社から数キロほど離れた場所にある山岳部の木の太枝の上に、二体の分身を調神社に送り込んだ本物のクレンの姿があつた。

人差し指と親指で作つた輪の穴から、数キロほども距離が離れている筈の調神社の状

況を覗き込み、まるでこちらの居場所に気付いているかのように鋭い眼差しを向けるクロス視線と目が合いながらほくそ笑み、クレンは静かに腕を下ろして青い空を仰ぎ見た。

（一先ず必要な布石は打った……後は芽が開いた時、彼等が思惑通りに動いてくれるか否か……）

内心そう考えながら、クレンは徐に目の前に掲げた右手の掌から水を生み出す。

それは徐々に形を変えながら球状となり、水の中に一人の人物……調神社にて調達に介護されている宮司の姿が映し出されていく。

（まあ、どうせデュレンも大して期待している訳でもないんだ……今回はある程度適当に進めても問題ないだろうし、ならいつその事、この機会を上手く利用させてもらおうとするさ——）



『——了解した。急いでそちらに情報部と救護班を向かわせる。お前達はその間イレイザー達の再度の襲撃に警戒しつつ、負傷者の警護を頼んだ』

『調さんと切歌さんが遭遇したというノイズイーターの映像も、こちらでデータを纏め次第そちらの端末にお送りしますね』

「わかった。頼んだけおっさん、エルフナイン」

その頃、ポセイドンイレイザー達を一先ず退ける事は出来た蓮夜達はカメレオンイレイザーに襲われた宮司を神社内の一室にまで運んで介護しつつ、S・O・N・G.と通信を繋いでいた。

クリスが部屋の外で弦十郎とエルフナインに調と切歌から聞かされた情報も含めて報告する中、未だ目覚める気配もなく布団の上で眠る宮司の容態を蓮夜が確かめ、切歌

と響も不安げその様子を見守る中、宮司の傍らに座る調は顔を伏せて思い詰めた表情を浮かべていた。

「私のせいだ……私が宮司さんを一人で逃がしたりなんかしたから……」

「そ、そんな、調ちゃんに責任を感じる必要ないよ！」

「そうデス！悪いのは全部あの性悪レーザーデスよ！無関係な人間をわざわざ狙うような真似して……！調は何も悪くなんかないデス！」

「……でも、そもそも私がこの神社に行こうだなんて言い出さなかったら、宮司さんが巻き込まれる事だつて……」

あのクレンとかいうレーザーが何の為にこの調神社に現れたのかは定かではないが、もしも自分達を標的として狙ったのだとしたら宮司はたまたま巻き添えに遭ったという事になる。

仮にそうなら、彼がこんな目に遭ったのも調神社行きを最初に提案した自分にもその一因はあると落ち込んでしまう調を見て響と切歌も必死に元気づけようとする中、本部への報告を済ませたクリスが室内に足を踏み入れていく。

「取り敢えずおっさん達への報告は済ませておいたぞ。……そつちの様子はどうか？」

「……一通り見た所、大した外傷は特に見当たらない。脈も呼吸も正常で、一先ずは今すぐに命が危機……なんて事はないだろうと思う」

「！本当ですか！良かったあつ……」

「ああ……ただ——」

「[[[[……？]]]]」

蓮夜の口から命に別状はないと聞かされホッと安堵する響達だが、蓮夜は何故か歯切れが悪く顔を逸らしてしまう。そんな蓮夜の様子に響達が怪訝な表情を浮かべる中

……

「——う……………ううつ……………」

「……………?! 宮司さん?!」

眠っている宮司が不意に苦しげに呻き声を漏らし、苦しげに顔をしかめた。それを見た響達は思わず身を乗り出し、調も宮司に顔を近付けて必死に呼び掛けていく。

「宮司さん！ 私達の声が聞こえますか?! しっかりつ……………!」

「……………ツ……………? こ……………こ、は……………う?」

「良かった、目が覚めた!」

「大丈夫デスよね? アタシ達の事、分かるデスカ?!」

漸く目を覚まし、意識がまだ朧気な様子の宮司に自分達の事が分かるか必死に呼び掛ける切歌の声に釣られ、宮司は切歌や響、傍らの蓮夜の顔を気だるげに見回していく。

「みな、さん……………？はて……………私は……………一体、何を……………？」

「あ、その……………宮司さん、ずっと意識がなくて眠ってたんです……………あの怪物に襲われたせいで、それで……………」

「……………!!!」

困惑している様子の宮司に何とか状況を説明しようと、しどろもどろになりながらも今までの経緯を語る調だが、宮司はそんな調に目を向けた途端、突然目を剥いて言葉を失ったかのように絶句してしまう。

「……………？宮司さん？」

「おい、爺さん？どうし——」



「あ……あああああつ……!!!」

—ガバアツ!—

「「……え!!」」

何だか様子が可笑しい宮司を見て一同が頭上に疑問符を浮かべる中、宮司は急に布団から飛び起きたかと思えば、なんといきなり調に抱き着いて彼女を抱き締めたのである。

「ぐ……宮司、さんつ……?」

「嗚呼……!調、調!よく、よく無事です……!う、うううつ……ううつ……!」

「え、えつ……ええつ!」

「オイオイ……何がどうなつてんだこりやつ……?!」

「……………」

一体何が起きてるといふのか。突然調を力強く抱き締めながら声を詰まらせて泣き始める宮司の尋常ではない様子に響達は勿論、彼に抱き締められる調も状況が飲み込めずただただ困惑するしかない中、ただ一人、蓮夜はそんな宮司の姿を見て何やら沈痛な面持ちを浮かべ、静かに瞼を伏せながら顔を俯かせてしまうのであった。

## 第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ⑤

—調神社・応接間—

「——いやはや、先程は取り乱してしまい申し訳ありませんでした……。皆さんの前で年甲斐もなく、大変見苦しい姿をお見せしてしまい……」

「い、いえいえ、私達は全然気にしてないから大丈夫……なんですけどお……」

——あれから約三十分が経ち、空が夕暮れ色に染まりつつある調神社。

先程意識を取り戻したと同時に、何故か突然調に泣きながら抱き着いて尋常でないほど取り乱した宮司をどうにか落ち着かせた響達は、彼と共に調神社の応接間にテーブルを挟んで集まっていた（因みに蓮夜は本部へ報告する事があるからと、今は一人席を外

して部屋の外に出ている

先程の痴態を恥じてか、恥ずかしげに頭を掻きながら苦笑いを浮かべる宮司のその姿は一見いつもと変わらぬ様子に見えるのだが、響達はそんな彼と対面しながらもその顔には揃って戸惑いの色が浮かんでいた。何故なら……

「ともかく、あの怪物から助けて頂き本当に有り難うございました。……ほら、調も皆さんに感謝しないといけませんよ？おかげでうちの神社もこうして無事だった訳ですから」

「……………あ、あの、宮司さん……………私は、その……………」

「おやおや。人前だからといってそう畏まらずに、いつも通り”お爺ちゃん”と呼んでもらって大丈夫ですよ？でないとうちの神社の狛兎に倣い、可愛い可愛い”孫”にそう他人行儀にされてしまつては寂しさのあまり死んでしまいますよ……………よよよっ」

「え、つと……………あの……………」

「何を做つてなんだよ……そもそもそんなんで死んでたら魔除け像の意味ねえだろうって……」

着物の袖で目元を覆いながらあからさまな嘘泣きを見せる宮司に調も困り果て、クリスも顔を逸らしながら思わずツツコミを入れてしまうものの、一同が戸惑っているのは今の宮司の発言の通りだ。

自らを“祖父”と称し、調の事を己の“孫”と呼んでいる。

意識を取り戻してからの宮司は何故か自分と調の関係をそう認識しており、響達や当の本人の調もどうして宮司がそんな風に調の事を呼ぶのか一切訳が分からず困惑してしまう中、宮司が不意に席を立ててにこやかに微笑む。

「そうそう。せっかくですから、今晚は皆さんうちに泊まって行って下さい。助けて頂いた御恩もありますから、今日は腕に寄りをかけてご馳走様を作りましょう。勿論、食後のデザートにはキツシユやカヌレも大盤振る舞いですよ?」

「い、いえ、そんな気にしないで大丈夫ですよ?!それに宮司さん、今はすっかり安静にしてないと……!」

「そうデス!ただでさえあんな目に遭ったばかりで病み上がりなんデスから!」

「ははは、お氣遣いありがとうございます。ですがご心配なく。こう見えて見掛けに寄らず丈夫でしてね。それにせっかくこうして調のご友人が集まって頂いたのですから、今はゆつくりと、友人同士の時間を楽しんで下さい。その方が調もきつと喜びますから」

ではでは、お邪魔な爺はその間台所にも引つ込んでおりますよくと、響と切歌の心配も他所に宮司は陽気に笑いながら部屋から出ていき、夕飯の準備をしに向かつてしまふ。

そんな彼の部屋から出ていく様子を見送り、宮司が出ていった後の室内では響達はお互いに困惑の表情を浮かべて顔を見合わせてしまふ。

「い、一体何がどうなってるデスか？なんていうか、ホントに調の事をお孫さんみたいに思ってるっていうか、随分と気のいい優しいおじいちゃんみたいになっちゃってるデスよ……………」

「んなのあたしが知りてえよ……………まさか、イレイザーに襲われたせいで可笑しくなっちゃったのか？」

「……………もしかして……………」

「……………？響さん？」

普段と同じ陽気さは変わらぬが、調の事をまるで本当の孫のように見ている宮司の急な変化に切歌もクリスも困惑が収まらない。

そんな中、響だけがあの宮司の今の異常に心当たりがあるかのような深刻げな表情を浮かべ、それに気付いた調が響に追及しようとしたと直前に部屋の襖が開き、蓮夜が顔

を出した。

「皆、少しいいか？話しておきたい事がある」

「え？蓮夜さん……？」

「何だよ、急に出ていったかと思えば話つて……つておい！何処行くんだよ!」

用件を伝えたかと思えば、そのまま無言で踵を返して部屋を後にしようとする蓮夜を慌てて呼び止めるクリスだが、蓮夜はそのまま足を止める事なく何処かへ歩いていく。

それを見て調や響達は慌てて立ち上がってその後を、クリスは相変わらず言葉足らずな蓮夜に「あーったく！」と頭を掻き筆りつつも、皆の後を追い掛け部屋から出ていったのだった。





## — 調神社・拝殿前 —

「——宮司さんが、イレイザーの改竄を受けてる……？」

場所は移り、調神社拝殿前に集まった調達は蓮夜の口から聞かされた衝撃的な内容に驚きを隠せず動揺を露わにし、そんな一同に背中を向け、黄昏の夕日が差す参道の方をじっと見つめ佇んでいる蓮夜は僅かに間を置いた後、重苦しい様子で小さく頷き返した。

「ど、どういう事デスか？何で宮司さんがそんな事に……！」

「それは俺にも分からない……。ただあの人の容態を確かめている最中、彼からイレイザーの力の痕跡を感じ取った。それでまさかとは思ったが、調に対するあの反応を見て、イレイザーがあの人に改竄を施したのだと確信した……。宮司さんの身に起きている異常の原因は、先ず間違いなく奴らの仕業だ」

「……だから私の事を自分の孫……家族だと思い込んで……」

「やっぱりそうだったんだ……前に皆が私を忘れてた時の異変と何となく似ていたから、もしかするとって思ってたけど……」

「そういや、こん中でイレイザーの改竄能力を身を持って知ってんのはお前と不器男の二人だけだったな。あたし等はそんな時の記憶とか全然ねえし……けど、何でアイツらは今になって、しかもよりによってあの爺さんを標的にしたってんだ？」

そう、改竄なんて強力な力を使うなら自分達と大して関係もない一般人の宮司よりも、まだ記号の力を持たない調や切歌、或いはS・O・N・G. そのものを壊滅させる事に利用した方がよっぽど有効な筈だし、わざわざこのタイミングで改竄を仕掛けたのにも疑問が残る。

どうせ力を行使するのなら、それこそ以前、自分達が風太郎と五月の世界に出払っている隙を狙っていればリスクも少なく自分達の戦力を一網打尽に出来た筈だ。

それなのに何故?と、首を捻らせる響達のそんな疑問に対し、蓮夜は顎に手を添えて目を細めながら淡々と語り出す。

「あの人を狙った動機は俺にもまだ分からない……ただあの上級レーザーが先に姿を現して、俺達の注意を引き付けている隙に宮司さんを襲撃した所から見ても、奴らの狙いが最初からあの人にあつたのは先ず間違いはないだろう……」

それに……と、蓮夜は言葉を区切りながら響に目を向ける。

「奴がわざわざこのタイミングで仕掛けてきたのも、恐らく以前の響に関する記憶を周囲から消した改竄の件が今まで尾を引いていたからだと思う……彼処までの規模の大きい改竄、それもこの世界にとつての守護者である響の身に異変が起きたともなれば、この世界もレイザー達存在に勘づき始めてただろうから……だから俺達が別世界へ出払っていた際にも力は使えず、調や切歌に対して改竄の力を行使しなかったのも、そういつたりスクを考慮してからの事なんだろう」

「んで、ほとぼりが冷めるのを待つて、今が落ち着いた頃合いになったからまた改竄の力で仕掛けて来たつて訳か？とんでもない力を持つてる割に、案外せせこましい連中だな……」

「けど、イレイザー達が改竄の力をまた使ったなら、この世界も流石に異変に気付くんじゃ……」

イレイザーがこの物語で改竄の力を行使したのは、前回と合わせてこれで二回目。

ともすればこの世界もいい加減異変に気付いてイレイザー達を追放してくれるのではと考える響の問いに、蓮夜は厳しい顔で首を横に振った。

「残念だが、今回と前回とでは規模が違う。この程度の範囲の改竄では物語側も異変に気付きはしないだろう。……そもそも一個人、それもお前達と違ってこの物語じゃ一般人とそう立場の変わらないあの人の身に異変が起きたとしても、この世界は大して気にも留めようとしな……本の中の物語の主人公達はともかく、それ以外の大衆がどうだろうと、本の筋書きには何の影響も及ばなさないからな……」

「つ、そんなつ……」

「要するに、イレイザー共から自分を守ってくれるあたし等みたいな都合のいいヒーローには過保護で、それ以外の大多数の人間がどうなるうと構いやしないって訳か……随分と良い性格してやがんな、あたし等の世界もっ」

悲痛な顔を浮かべる響の横で、賽銭箱前の石造りの段差に腰掛けたまま片膝の上に頬杖を立てて皮肉げに呟くクリス。

蓮夜はそんな響達の背後で、神社の柱に背中を預けたまま両手を絡めて深刻そうに顔を俯かせる調を視界の端に捉えると、一度目を伏せ、改めて真剣な表情に戻り話を続けていく。

「それからもう一つ、皆に話しておきたい事がある。あの人を襲ったイレイザーの件だ」

「……！」

宮司を襲ったカメレオンイレイザーについて蓮夜が言及した瞬間、深刻な様子で俯いていた調がパツと顔を上げる。

すると、響は傍らに置いておいた液晶パッドを手を取って操作し、画面に映る静止画……先程本部から送られてきた、イガリマとシウルシャガナのギアに備え付けられているカメラ機能で撮影されていたカメレオンイレイザーの画像に目を通していく。

「このイレイザー、確か気配も反応も感知出来なくて、蓮夜さんや本部の方でも出現が掴めてなかったんですよ……？」

「見掛け通り、カメレオンみたいにスーって姿を消せてたデスからね……しかもコイツ、何か言動が変だったというか、全然こっちの言葉が通じてる感じがしなかったデスよ……ううっ……一体何処の何者デスかあのイレイザーっ……」

あの薄気味悪いカメレオンイレイザーの不気味な笑い声の残響が未だ耳に残っているのか、横から液晶パッドを覗き込む切歌は青くなった顔でブルツと身体を震わせて

両耳を抑えている。そんな切歌の疑問に対し、蓮夜も柱に背中を預けながら何処か遠くを見つめて語り出した。

「調と切歌が遭遇したソイツは恐らく、ノイズを大量に喰らい過ぎた事で理性が崩壊したイレイザー……増大し過ぎた力に精神が耐え切れず壊れ、見境なく人を襲うようになったノイズ喰らいの失敗作のような存在だ」

「ノイズイーターにも失敗作なんているのかよ……」

「人を見境なくって……あ、もしかしてネットの都市伝説とかにあった人を襲う怪物の正体って、この……?」

「つまり、このイレイザーも暴走してるって事デスか?前にアタシ達が戦ってきた奴らみたいに」

「確かに似てはいるが、アレとはまた少し違うようだ。お前達と出会う以前に俺も何度か戦った事はあったが、アレらは言葉もまともに通じなければ、お前達の知る暴走した

イレイザー達のように体格や身体の一部が異常に発達して急激に力が増すような事もなかった。……そもそも彼処まで壊れてしまえば、改竄の力すらまともに扱える筈がないのに、奴はどうやって……」

響達と出会う以前から同様のノイズイーター達と戦った事がある蓮夜にとってもあのカメレオンイレイザーは不可解な存在なのか、困惑を露わにした顔で眉を顰める蓮夜に対し、今まで無言だった調が口を開き、疑問を投げ掛けた。

「あの……それで、イレイザーの改竄を受けてる宮司さんは、あのままでいて大丈夫なんですか……?」

「……今の所は、としか言いようがない……例のイレイザーが改竄したのはお前と宮司さんの関係性と、あの人の記憶だけだが、それも恐らくこれから起こる大事の前準備にしか過ぎないだろう……あのクレンとかいう男、どうやら前の炎使いのイレイザーとは違い、地頭を使って狡猾に動くタイプのようだからな……」

「実際奴等にとっても、改竄の力を使うのは相当リスクいっばいな。ソイツを切って



おきながらこのまま何にもせずには退くわけやないだろうが……弦十郎のおっさんはその辺、何か言ってたのか？あだし等が神社の中で話してた間、異変の事とか伝えてたんだろ？」

「一先ず、こちらに向かつてる途中だった応援部隊には命令の変更を伝えて、消えたイレイザー達の行方の追跡と市街地の方にも人員を割くらしい。……前のように、奴等と戦いになればノイズやダストが街中に現れる可能性もある。だから念には念を押して警戒態勢を敷きつつ、俺達はこの神社に残って宮司さんの警護する方針に決まった」

「警護……前に私が襲われた時みたいにも、イレイザーが宮司さんを狙ってくるって事ですか？」

「ああ。風鳴司令も予想していたが、奴らの襲撃がまたあるとすれば、狙われる可能性が高いのは今の所あの人だからな……。酷い言い方になってしまいが、さつき言ったように宮司さんはこの世界にとってさほど重要な人間ではない。お前達と同様、仮に奴等に殺されでもすればこの世界に見付かってしまうリスクは残されているかもしれないが、既にこの物語での重要な役目を終えた人間であると世界に認識されていけば、奴等もあ

の人の命を奪う事を躊躇はしないだろうし、もし宮司さんが死んだとしてもこの世界はその異変に気付かない、なんて可能性もある……それでもあの人がこの物語の一部である以上、あの人死ねば『物語の矛盾』が生まれ、奴等に改竄の力を行使しやすい状況が出来上がってしまう……という訳だ」

「っ……改めて聞くと胸糞悪いな、クソっ」

「っ……」

人の命は、みな等価値であって然るべき尊いものである筈だ。

なのにイレイザーだけでなく、自分達が今まで守り、守ろうとしているこの世界までもが宮司の命を値踏みしている。

聞いていて気持ちのいいものではない蓮夜の話にクリスや響も厳しい表情を浮かべてしまう中、蓮夜は目を伏せて言葉を続ける。

「確かに酷い話に聞こえるが、世界から見れば、人なんて元からそんなモノだ。今こうしている間にも、世界の何処かで人が死に、それでも世の中は何事もなく回り続けていく……人が世界を守る事はあっても、世界が人を守ってくれる事なんてそうそうないからな……だから俺達に出来るのはせいぜい、この目に映る誰かを守り、自分達が安心して暮らせていく為に戦うだけだ。その為にも宮司さんは俺達の手で守る。それに今回に限って言えば、あの人を救う事が、ひいてはイレイザー達の魔の手からこの世界を救う事にも繋がる。そう考えれば、あの人命にもちやんと価値があるのだと、そう思えて少しは気も楽になるだろう？」

「なんだそりゃ、めっちゃくちゃが過ぎんだろその理屈……けどまあ、あの爺さんの命……この世界の未来、みたいに考えりゃ、確かにやる気も沸いてこないって事もないかもな」

「うん。イレイザーの目的が宮司さんなら、私達で守り切ろう！」

「はい……今度こそ……絶対につ」

(……………?調……………?)

皆が改めて宮司を守る決意を固める中、調は一人険しい顔付きで拳を強く握り締めている。

その様子に気付いた切歌が頭の上に疑問符を浮かべながら彼女に声を掛けようとしたその時、砂利を踏む音と共に宮司がその場に現れた。

「おお、皆さんこちらにいらしましたか」

「にゃー」

「あ、宮司さん……って、わあ、猫ちゃんだあ〜!」

現れた宮司の両腕の中には、何故か一匹の黒毛の子猫が抱かれて可愛らしい鳴き声を上げていた。

子猫を目にした途端、黄色い声と宮司の下に駆け寄って子猫にぐりぐりと触れる響の

後に続いて蓮夜達も近付くと、切歌と調はその子猫を見て小首を傾げた。

「あれ？もしかしてその子、蓮夜さんが拾った子猫じゃないデスか？」

「どうしてこんな所に……？」

「ああ、実は先程、黒服の方々が皆さんの着替えなどを送り届けに来まして。その際、この子も一緒に連れて来られたのです。此処を警護する為に自分が家を空けている間、この子を一人にしては心配だから一緒に居させてもらえないかと、彼から頭を下げられましてね」

「こいつについて……いや、ってかそもそもこの猫、お前が買ってんのかよ?!」

「ええ?!だ、大丈夫なんですか?自分の食生活すらロクに管理出来ないのに、他の動物のお世話なんて?!」

「……………お前達は揃って俺を何だと思ってるんだ」

腕の中に収まる子猫の頭を撫でて、微笑ましげに笑う宮司の説明で其処で初めて子猫の主が蓮夜だと知った衝撃のあまり、大概失礼な発言をかましてしまうクリスと響。

蓮夜もそんな二人の反応に大変不服そうな顔を浮かべ、切歌と調もただただ何とも言えない苦笑いを浮かべるしかない中、宮司はそんな蓮夜に近付き子猫を優しく差し出した。

「まあとりあえず、夕飯の支度も済んだので皆さんもご一緒に中へどうぞ。この子用の食事もすぐに用意しますので、気兼ねなくゆつくり寛いで下さい」

「……申し訳ない。では、ご厚意に甘えて——」

「シャアアアアアアア!!」

「——すまん……誰か俺の代わりにコイツを中まで連れて行ってやってくれないだろうか……」

「ええええつ……」

「めちやくちやに嫌われまくつてんじゃねえかよ……何やらかしたんだお前……」

宮司の手から子猫を受け取ろうと手を伸ばした瞬間、全身の毛を総立ちさせて威嚇する子猫の反応から物凄く悲しそうな顔で振り返る蓮夜からの頼みに、響もクリスも顔を引き攣らせてしまう。

そしてその後、蓮夜に代わり響が子猫を抱いて一同が戻ろうと歩き出す中、一番後ろで途中まで一緒に歩いていた調が不意に足を止めて立ち止まり、それに気付いた宮司は振り返り怪訝に小首を傾げた。

「調？どうかしましたか？」

「……いえ……ただ、あの……」

「……………」

何処か複雑そうな顔で、調は宮司と目線を合わせようとせず顔を逸らしている。そんな彼女の反応から何かを感じ取ったのか、宮司は僅かな無言の後、調にゆっくりと近付くと共に彼女の頭に手を伸ばし、まるで子供をあやす様にポンポンと叩く。

「何か悩みがあるのでしたら、私で良ければ話ぐらい聞きますよ？何せたった一人の家族なんです。可愛い孫娘の為でしたら、喜んで力になりますとも」

「……………私、は……………」

優しい声音で微笑む宮司だが、彼が告げる『家族』という言葉に受け止める事が出来ず、調は暫し口を閉ざした後、宮司の手から離れるように一歩後ろに引き下がってしまう。

「調？」



「……私の事は平気だから、大丈夫です……晩御飯、楽しみにしてますね……宮司、さん……」

何故か少しだけ、その呼び方に罪悪感を感じてしまいながらも頭を軽く下げ、調は宮司の横を通り抜けて蓮夜達の後を駆け足で追い掛ける。

その姿がまるで、自分から逃げ出しているようにも感じた宮司は一瞬困惑と僅かな哀しみが入り交じった顔を浮かべるが、それでも一度瞼を伏せて俯き、頭を上げたその顔に少し不器用ながらも笑顔を作って調達の後を追って歩き出していくのであった。

# 第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇の ウタ⑥（前）

—調神社—

深夜。宮司が用意してくれた夕飯をご馳走になった蓮夜達はクレンの次の襲撃に備えつつ、お風呂を交代で頂いたり、寝る前に子猫を相手に遊んで癒されたり（終始嫌われまくっていた蓮夜以外）とそれぞれ自由時間を過ごした後、男女別に割り当てられた部屋に別れ一先ず今日は休む事となった。

「——ぐうつ……何故響達にはあんなにも懐いているのに、俺にだけはあんな辛辣なんだ……」

響達も眠りに付いて静かな夜が訪れる中、トイレから戻ってきた蓮夜は縁側を歩きながら先程自由時間に響達と共に子猫とじゃれてた際に、またも増えてしまった両手の

引つ掻き傷を摩りながら部屋に戻ろうと歩いていると、窓から光が射す月に気付いて夜空を見上げた。

（月がよく見える……そう言えばここ最近、こうやってただ月を見上げる事もなくなってきたな……）

まだ響達と出会う前、記憶を失ってから自分が何者なのかも分からず、イレイザーと戦う事だけを目的としていた日々を過ごしていた際、帰る場所もなく汚い路地に座り込んで暇を持て余していた時も、数々のノイズイーター達を手を掛けてから宛もなくさ迷っていた時も、こうして月明かりに照らされる事で、理由の分からない心に空いた隙間を少しでも埋めようと紛らわしていた事もあった。

だがこうしてあの少女達との出会いを経てからは、そんな暇もなくなるほど騒がしく、しかし心地のよい日々を過ごすようになった。そんな今と昔の自分の違いを思い返し、僅かに微笑を浮かべながら蓮夜が目の前に視線を向けると……

「……………」

(……………あの人……………)

自分の部屋に戻ろうと蓮夜が前を向いた視線の先に、縁側に座り込む宮司の姿を見つけた。その膝の上には、何やら分厚いアルバムのような本が置かれており、ページを一枚一枚捲つていくその横顔には何処か懐かしさと愛おしさが垣間見えた。

(あれは……………「宮司さん……………」……………っ！)

アルバムを眺める宮司を見て蓮夜が彼に歩み寄ろうしたその時、反対側の縁側の方から不意に声が響き、蓮夜は思わず壁の影に隠れる。一方で宮司はその声に釣られて視線を向けると、其処には不思議そうな顔で廊下の向こうから歩み寄ってくる寝巻き姿の調の姿があった。

(調……………?)

「おっと。こんな夜更けにどうしましたかな?」

「……………少し、寝付けなくて」

「おやおや、それはいけない。まだまだお若いとは言え夜更かしは美容の天敵。油断している、あつという間に私のようなほうれい線の目立つシワシワなお肌になってしまいますぞ?」

「……………また変な冗談を言つて」

「はっはっはっ」と、呆れ顔の調の反応に気を良くしたのか愉快げに笑う宮司。そんな宮司の明るい表情を見て調も少しだけ気が楽になったように笑い、僅かな逡巡の後、彼の隣に少し遠慮がちに腰を下ろすと、宮司の膝の上に置かれてるアルバムに気付いた。

「それは…………?」

「ああ、これですか? 皆さんと過ごす調を見ていたらふと昔を懐かしんで、うちの押し入れの中から引つ張り出してきたのですよ。…………私の大切な、貴方との思い出の日々で

す

「……………えっ?」

驚きの顔を浮かべる調を他所に、宮司はアルバムのページを捲る手を進めていく。

其処には、何処かの小学校の入学式の際の校門前で、宮司とランドセルを背負った幼い調と一緒に写ってる写真や、神社での奉納儀式で正装した調が舞台の上で鮮やかに舞う姿が写った写真……………調には何一つ身に覚えのない、存在しない筈の思い出の数々があつた。

「これ、つて……………」

「いやはや、懐かしいものですな。こうして振り返ってみると、今の調は本当に大きくなつたと感慨深い気持ちになります。正に、親心ならぬ爺心、という奴ですか? はははっ」

「……こんな思い出、私の記憶には一つもない……多分このアルバムも、きっと——」

「——イレイザーの改竄が生み出した産物か……」

本来のこの物語には存在し得ない、調と宮司が普通の祖父と孫として歩んだ思い出の  
日々の写真が飾られたアルバム。

そのページ一枚一枚の写真を懐かしむように眺める宮司の姿に調は複雑げな表情を、  
壁の影に隠れる蓮夜も僅かに俯いて眉を顰める中、宮司は月明かりが照らす夜空を見上  
げ、遠い記憶を思い返すように瞳を伏せる。

「それでも鮮明に思い出すのは、やはり、産まれたばかりの頃の貴方をこの腕に抱いた時  
の記憶ですかね」

「……私が、産まれた時……」

「ええ。私の娘……貴方の母親が貴方を病院で産む際、私も貴方の父親もそれはそれは

気が気でなかった。陣痛で苦しむ娘の姿をただ見ているしかなく、出来るものなら変わってやりたいとも思い、亡くなった妻にも娘と生まれてくる子供の無事を必死に祈り続けて……やがて、耳に届いた貴方の産声と、憔悴し切った顔でやり遂げ、愛おしげに貴方を見つめる娘の姿を目にした時は、自然と涙がこぼれたものです」

「……………」

「赤ん坊だった貴方を胸に抱いた時、これ以上の幸せはないと思いました。こんな幸せが、きつとこれから先もずっと続いていくのだと信じて疑わず……あの日までは……」

「……………」

ありもしない筈の思い出を懐かしげに語る宮司の顔をまともに直視出来ず、膝の上に絡めた両手を見つめてずっと複雑な顔を浮かべていた調だが、不意に声色が変わった宮司の顔を思わず見上げると、宮司は何処か哀しげな眼差しでアルバムの写真に目を落としていた。



「もう十年以上も前になりますか……貴方たち家族が旅行中に事故に遭い、娘夫婦を亡くした時、どうして、何故と……私は嘆き、酷く苦しみました……神職の身でありながら、この世に神はいないのかと恨みもしましたが……そんな中、貴方だけが奇跡的に生き残った」

「事故に……私だけ、が」

「ええ。変わり果てた姿で対面した貴方の両親が、何かを守るように庇つたまま亡くなったような姿を見て、すぐに気が付きました。二人が死の間際、その身を呈して貴方だけでも守ってくれたのだと」

「……………」

宮司の語る彼の家族に纏わる話を聞きながら、調も夜空を仰いで思い出す。嘗ては自分も、F・I・S・に連れてこられる以前に事故にあつたらしき事を。

自分の本当の名前も含めて、それ以前の記憶がないせいで実感は持てないが、それで

も何処か、イレイザーに改竄され捏造された物だとしても、宮司の話は何故だか他人事のように思えなかった。

「その時、私は二人に、奇跡に……貴方に感謝しました……絶望の淵で、悲しみに打ちひしがれていた私に希望を与えてくれたのは他の何物でもない、貴方の存在だったのですから」

(……宮司さん……)

「ですから私は、亡くなってしまった貴方の両親にも誓ったのです。あの二人のように、今度は必ず私が貴方を守る。ただ一人残った家族として、いついかなる時にも貴方に寄り添い、幸せにしてみせると……それを今の私の、たった一つの生き甲斐にしよう」と

「……………ッ……………」

ギョツ……と、膝の上に置かれた調の両手が自然と力強く握り締められる。

穏やかな顔で、優しい声音で、調を守ると胸の内の誓いを吐露する宮司の言葉を耳にしながら、締め付けられる胸の痛みに苛まれる。

自分は彼の本当の孫娘なんかではなく、彼は自分の祖父ではなく、血の繋がった家族などではない。

ただイレイザーの改竄によってありもしない記憶を植え付けられ、自分達の関係をそう思い込んでるだけに過ぎないのだ。

普段から冗談を言っている彼に、本当に亡くなった娘夫婦や孫娘がいたかどうかなんて実際には分からない。

ただそれでも、彼の今の言葉には紛れもない自分への愛情が確かに込められているのだと、ひしひしと伝わってくる。

……………だから、もし。

もしも本当に、イレイザーの改竄なんて関係なく、この人に既に亡くなった家族がいたとして、その悲しみや絶望が実際に彼が味わったものだとするのなら。

今こうして、この人に暖かな言葉を向けられている今の自分は、なんて――

「……………ごめん、なさい」

「……………うん？」

「ごめんなさい……………私……………私、にはっ……………」

その暖かな言葉は、優しさは本来自分に向けられるべきモノなんかじゃない。

生きてて欲しかったと心から願った相手。本当に大切な人に送られるべき筈の言葉を、偽りの立場の自分が受け取ってしまったという罪悪感で胸が苦しくなる。

本当なら、今すぐにも事実を伝えたい。自分は彼の家族などではなく、貴方が本当

に大切に想うべき人は他にいるのだと告げてしまいたい。

——けれどそれを、今この瞬間の全てが嘘なのだと言った時……この人は一体どんな顔をするのだろうか。

その先を想像するのが怖く、優柔不断にも真実を伝える事を迷い、ただただ俯いて辛そうに謝罪の言葉を繰り返す事しか出来ない調の姿を見て何を想ったのか、宮司は一瞬戸惑いを見せた後、すぐにまた何時もの穏やかな顔を浮かべて微笑み、そんな調の手の上に自身の手を優しく重ね合わせた。

「そうでしたね……貴方にとっても何より辛い記憶の筈なのに、何故今日に限って私はこちらも無神経におしゃべりなのか……申し訳ありませんでした、調」

「っ……」

「……………」

そう言つて心苦しそうに眉を下げ、謝罪の言葉を口にする宮司の顔を思わず見上げた調は何かを言い掛けて一瞬口を開くも、その先に告げるべき言葉を詰まらせて結局は何も言えず、ただ無言のまま宮司の手を戸惑いながらも握り返してあげる事しか出来なかつた。

そして、そんな二人の一連のやり取りを影で見守っていた蓮夜も何処かやり切れない表情で目を伏せた後、瞼を開いたその顔を険しげに歪め、二人に気付かれぬようにその場から離れるべく静かに歩き出そうとした、その時……

——穏やかな夜の静寂を引き裂くかのように、市街地の方角からけたたましい爆発音と共に燃え盛る火の手が上がった。

# 第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ⑥（後）

—S. O. N. G. 本部—

「——状況は?! 一体どうなっている?!」

同時刻。調神社付近の市街地にて起きた突然の異変はS. O. N. G. もいち早く察知し、絶え間なく鳴り響くアラーム音と共に本部内も騒然と化していた。

状況の報告を求める弦十郎にオペレーターの友里と藤堯も手馴れた速さでパネルを操作し、迅速に状況を纏めて簡潔に報告していく。

「現在、D地区にて位相差障壁反応を多数検知! ノイズです!」

「更にノイズ反応と共に、イレイザーと類似した反応も多数確認……！ダストの大群も破壊活動を行っている模様です！」

「ノイズとダストで混成された軍勢か……！上級イレイザーとノイズイーターの反応は?!」

「レーダーの感度を最大に範囲を広げつつ探っていますが、今の所感知出来ていません……！」

「前回と同様、何処かに姿をくらましているのか……ともかく今は現場に一般市民の避難を優先させろ！調神社にいる二課装者達への連絡は?!」

「既に位置情報を送信した後、現場へ急行しています！」

「ならばこちらは引き続き、上級イレイザーとノイズイーターの搜索を続けろ！このタイミングで仕掛けてきた奴らの狙いが読めない以上、奴らの足影を掴むまで気を緩めるな！」



「了解！」



—市街地・D地区—

『ヴェエエアアアアアツ!!』

「な、何だこのバケモンっ?!う、うわあああああっ?!」

ノイズとダストの大群が突如出現したD地区。街のあちこちから火の手が上がり、爆発音と人々の悲鳴が絶え間なく響き渡るその光景は正に阿鼻叫喚と呼ぶ他ない惨状に陥っていた。

突然の混乱に巻き込まれた住民達も何が起きているのか事態が飲み込めぬままとにかく火の手から逃れるように建物の外に出て逃げ惑う中、夜闇の向こうから不意に飛び出したダストの群れに襲われていき、乱雑に地面に殴り付けられてそのまま馬乗りに首を締められ、呼吸もままならず窒息し掛けた、その時……

「——だあありやああつ!!」

『……ヴア?——ドグオオオオオツ!——グオオオオオツ?!』

「ツ!アツ……ゲホツ、ゲホツ!ゲホツ!つ……な、なん、だ……?」

横合いから不意に飛び出してきた何者かの鋭い膝蹴りが住民の上に跨るダストの頭に炸裂し、ダストをそのまま横殴りに吹っ飛ばして木っ端微塵に爆散させたのである。

いきなりの展開にダストに襲われていた住民も何事かとおっかなびくりした様子で目の前に視線を戻すと、其処にはギアを身に纏って現場に駆け付けた響の後ろ姿があった。





手短に作戦方針を伝えると共に、クリスは両手のリボルバーを発砲して襲い来るダストとノイズを次々に撃ち貫いていき、響はクリスが拓いた道筋を一息で駆け抜けて右拳を振り上げながら異形の群れの中へ勇ましく突貫していくのであった。



—ズガガガガガガガガアツ!!—

「はアあああああッ!!」

同じ頃、D地区南西エリアでは響達と二手に別れ、ダストとノイズの軍勢を相手に奮闘するクロスと切歌の姿があった。

クロスは初手からタイプイチイバルに姿を変えて胸部のアーマーを左右に開き、胸に

内蔵されたガトリング砲を乱射しながら更に両手に構える大型ビームガトリング砲でダストとノイズの群れを横薙ぎに一掃していき、切歌はクロスが撃ち漏らした残敵をイガリマの刃を大振りに振るって纏めて薙ぎ払い、ノイズ達は撃破、ダスト達は後方へと派手に吹っ飛ばしていく。

しかし、吹き飛ばされた敵勢と入れ替わるように後方から更にダストとノイズが大量に押し寄せ、切歌はノイズを数体纏めて切り裂きながらその光景を前に堪らず叫んでしまふ。

「ぬあああああつ！しつこいつ！ほんつとにキリがないデスよコイツ等あ！」

『大元のレーザー達を何とかしない限り、どうにもならないかっ……司令部！上級レーザーと例のノイズ喰らいの居場所はまだ掴めないか?!』

『現在捜索中です！ただ広範囲にレーダーを広げても、僅かな反応すら探知出来ず……！』

『……奴らの居所が分からなければこちらから追跡する事は出来ない……せめてあの  
上級イレイザーの気配だけでも追えれば……』

しかしそれでも奴の事だ。こちらが自分達の気配を探れる事を分かっている筈だし、  
未だにダスト以外の気配を感じ取れない所からして、カメレオンイレイザーは例の透過  
能力で、クレンはイレイザーの気配が薄れる人間態のまま何処かに身を潜めこの惨状を  
静観しているに違いない。

『（奴があのアスカと違って完全に裏で手を引くタイプなら、そう簡単に自分達から姿を  
曝すような真似はしないハズ……。そうなると、奴らが出張ってくるタイミングは恐ら  
く——）』

「——蓮夜さんっ！上デスっ！」

『！』

思考を駆け巡らせながら襲い来るダスト達を大型ビームガトリング砲で掃討するク

ロスの頭上から、数体のノイズが一斉に不意を突いて飛び掛かった。

切歌の声で我に返ったクロスはそれに気付くと共に、すぐさま腰部のリアアーマーを噴射しながら前方へと軽やかにバク転し、ノイズ達の不意打ちを避けながら瞬時にビームピストルに切り替えた二丁銃でノイズ達の急所を正確に狙い撃ち、霧散して消え去るノイズ達を確認して切歌の方に振り向き軽く頷いた。

『すまない、考えに集中し過ぎてたようだ。助かった』

「それは大丈夫デスけど、でもやっぱり二人だけじゃ相当キツイデスよこの状況……いやっぱり、神社に残ってる調にも救援に来てもらった方が——！」

『……いや。奴らの狙いが仮に俺の予想通りなら、宮司さんの傍に調は付き添わせておくべきだ』

「……っ？それはどういう……っ？」



『ガアアアアアアアアアッ!!』

顔を俯かせて意味深な発言を漏らすクロスに怪訝な顔で小首を傾げる切歌だが、そんな彼女の背後からダストが両腕を伸ばして襲い掛かる。

しかし即座に反応して放ったクロスの銃撃が切歌の顔の横を通り抜けてダストの頭部を撃ち抜き、クロスのいきなりの発砲に驚いた切歌も背後で倒れるダストの方に慌てて振り返る中、火の海に包まれる街の奥から更に無数のダストとノイズが押し寄せて来ていた。

『とにかく、今は民間人の救助と避難が先決だ。奴らの進行を此処で食い止めるぞ……!』

「え、あ、りよ、了解デス！」

先程のクロスの言葉の意図は気にはなるが、今は彼の言う通り一刻も早くダストとノイズを殲滅せねばならない。

両手の銃をボウガンに切り替えながら先陣切つてダスト達へと突つ込んでいくクロスの後に続きながら疑問の解消は後回しだと思考を切り替え、切歌はノイズの群れへと勢いよく飛び掛かりながら大鎌を大きく振りかぶつていった。



—調神社—

その一方、官司の護衛の為に神社でと待機を命じられた調は社の外に出て、遠くに見える燃え盛る街の光景を見て複雑な表情を浮かべていた。

(切ちゃん……蓮夜さん……みんな……っ……っ……やっぱり、私もっ……)

遠くから今も聞こえてくる爆発音、街の人達が襲われる悲鳴が離れたこの場所にまで

微かに届く。

皆が今も街を守る為に必死に戦っているというのに、自分だけが此処に残って何も出来ていない事がいたたまれず、調は首から下げたシウルシャガナのギアのペンダントを握り締めて迷う素振りを見せた後、やはり自分も民間人の救援に向かうべきだと考えて神社から飛び出そうとするが……

「——調……！ いけません！」

「……っ?! 宮司、さん……?」

パシッ!と、後ろから不意に手を引かれて驚きと共に振り返ると、其処には家の中に残してきた筈の宮司がいつの間にか駆け付け、額に汗を滲ませながら調の手を掴んで引き止める姿があった。

「姿が見えないから焦って探し回りましたが、こんな所にいたとは……。今は外は危険です。黒月さん達も仰っていた通り、今は下手に動かさず家の中へ……」

「それは……分かってる、けど……でもっ、危険な目に遭っているのは皆も同じなんです……！街の人達も、切ちゃん達も！なのに、戦う力があるのに何もせずにいるなんて、私には……！」

「……調……」

胸のペンダントを握り締めたまま、何かを訴え掛けるように叫ぶ調の必死な様子を見て一瞬驚きから目を見開く宮司だが、その後、何処か複雑な面持ちで口を閉ざしながら視線をさ迷わせると、目を伏せながら静かに俯いてしまう。

「確かに、誰かを守る為に戦う事を厭わない貴方のその心意気はとても立派な物です……そんな貴方を心から誇りに思いますし、本当なら私も、貴方の背中を押して上げるべきなのだと分かっております……分かって、は……いるのですが……」

「……宮司、さん……？」



どうかお願いです、調……私の目の届かぬ所で、危ない目に遭うような事だけは、どうか……お願いしますっ……」

「……………わ……………私、は……………」

痛いほど手を強く握られ、嗚咽の混じった声で懇願する宮司の姿に戸惑い、返す言葉が咄嗟に出て来ない。それでも何かを言わねばならないと、告げるべき言葉も頭の中で纏まらぬまま喉を震わせて口を開こうとした、その時だった。

——何かを突き刺すような嫌な音と共に、宮司の肩を背後から長い舌のような物が貫いたのは……。

「……………ッ!!?ぐ、宮司、さ——?」

「……………あ……………か、はっ……………!!?」

ブシヤアアツ！と、長い舌が容赦なく引き抜かれた宮司の肩の傷口から鮮血が勢いよく飛び散る。

その凄惨な光景を目の当たりにした調は目を見開き、宮司本人も自分の身に何が起きたのか理解が追い付かないまま凄まじい激痛のあまりまともに立つ事もままならず、前のめりに倒れそうになったその身体を調が慌てて抱き留めた。

「宮司さんつつつ!!! な、んで……何が……!?!」

『——ゲヒヒッ、ヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒヒッ』

「?!」

宮司の身体を横たわらせ、血が流れる肩の傷口を必死に抑え出血を止めようと試みる調の耳に、不気味な笑い声が届く。

その聞き覚えのある、耳障りな笑い声に釣られて顔を上げると、其処にはいつの間にも侵入していたのか、昼間に姿を消して以降足取りすら掴めなかつたカメレオンイレイザーが拜殿の柱にしがみつき、宮司の肩を貫いた長い舌を縮めて口の中に収めていく姿があつた。

「ノイズ、イーターっ……?!」

『イヒヒヒヒヒヒツ、イヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤヒヤツ!!』

突然現れたカメレオンイレイザーの襲来に調が目を剥いて驚愕してしまふ中、カメレオンイレイザーは理性の欠片すら感じさせない狂気の笑い声を上げながら宮司の血が粘り付いた口元を拭つて柱から飛び降り、着地と共に徐に腰を落とした直後、そのまま勢いよく地を蹴つて調と宮司に向かって飛び掛かり、鋭角な爪牙が妖しく輝く右腕を振りかざした。

超人的な速さで迫るカメレオンイレイザーを前に調もギアを纏うのは間に合わない  
と判断し、半ば反射的に宮司の身体の上に覆いかぶさり身を呈して彼だけでも守ろうと



した、その時……

上空から六基のリフレクタービットが猛スピードで飛来し、その内の三基が調と宮司の前で陣形を組む。

直後、三基のビットは瞬時に障壁を展開して二人を切り刻もうとしたカメレオンレイザーの一撃を凌いただけでなく、そのまま反発エネルギーの衝撃波でカメレオンレイザーを派手に弾き飛ばしていったのだった。

『ゲエヤアアアッ?!』

「……………え……………う…これって……………」

突然の思わぬ横槍にカメレオンレイザーも吹っ飛ばされながらも何とか空中で態勢を整えながら不格好に着地し、調も目の前に漂うリアクタービットを見て戸惑う中、

残り三基のリフレクタービットが障壁を展開するビット達に遅れて加わり、陣形を組み替えていく。

すると、六基のリフレクタービットは扉の形をした赤い光のゲートを形成し、その奥から赤い装甲のライダー……クロスが勢いよく飛び出しながら両手のビームガンを間髪入れず発砲し、カメレオンレイザーに無数の光弾を浴びせて再び吹っ飛ばしていった。

『ギヤアアアアアッ?!』

「ッ?!れ、蓮夜さん……!」

『遅れてすまない……!状況は……っ……思ったより芳しくないかっ……!』

調の腕の中で、肩の傷口から夥しい量の血を流す宮司を見て苦い表情を浮かべるクロス。

と其処へ、クロスが通ってきた赤い光のゲートの奥からまたも誰かが頭から転がるように飛び出し、新たに現れた人物……切歌は地面にぶつけてしまった頭を抑えながらふらふらと起き上がる。

「あいたたたつ……！れ、蓮夜さん、急にどうしたんデスカ、変な光の中に飛び込んで……つて、はえ？な、何でアタシ達、いつの間に神社に……？」

「切ちゃん！」

「へ？調……つて、ぐ、宮司さん?! どうしたデスカその怪我?!」

いきなり街の中から調神社に跳ばされて辺りを見回し困惑していた切歌だが、調の声で振り返り、彼女の腕に抱かれる負傷した宮司を目にした途端、驚愕のあまり思わず手にしている大鎌を手放してしまいながら慌てて二人の元に駆け寄る。

クロスはその様子を横目に、正面を見据えてよろよろと胸を抑えて起き上がるカメレオンイレイザーに向けて再び銃口を突き付けた。

『街を襲ったのは何か別の狙いがあったからか、或いは俺達を此処から引き離すのが目的なのか……どちらの可能性も捨て切れず迷いはしたが、万が一に備えてコイツらを神社に残しておいたのが功を奏したようだな……』

クロスがそう言うと、赤い光のゲートを形成していた六基のリフレクタービットが陣形を解き、クロスの周りに浮遊しながら変形して射撃形態となり、迎撃態勢を取る。

そしてカメレオンレイザーは獣のような唸り声を上げながら妖しく輝く赤い眼光でそんなクロスを睨み付けるが、クロスは表情一つ変えず、淡々とした声音でカメレオンレイザーに言葉を投げ掛けた。

『問い掛けは無意味だと思うが、一応聞いておく。お前を裏で操ってるあのクレンとかいうレイザーの目的なんだ？何が狙いでこの人の記憶に改竄を施した？』

『ギギッ、ギギギギギギギギギギイツ……!!!』

『……やはりまともに会話が成立する筈もないか……なら仕方がない。今此処で始末を付けて、このタチの悪い悪夢（ユメ）を終わらさせてもらおう……!』

これまでのノイズイーターのように、既に意思疎通は無理と即断したクロスは銃を発砲してカメレオンレイザーに攻撃を仕掛けるが、カメレオンレイザーは俊敏な動きで真横へと飛び退きながら光弾を回避すると共にそのまま走り出した勢いで跳躍し、神社の塀の向こうへと飛び越えて逃走を図る。

しかしそうはさせまいと、クロスも即座に両手の銃を連結、変形させて新たな武器を手にする。

それはまるで、仮面ライダー鎧武の武装の一つであるソニックアローを彷彿とさせる外見をした赤い弓となり、手の中で起用に回転させた弓を構えてカメレオンレイザーの背中に照準を狙い定めながら弦を引き絞り、弦を離れた瞬間、赤い光の矢が闇夜を切り裂きながら放たれて宙で三本の矢に分身し、カメレオンレイザーの背中に全て突き刺さって塀の向こうの森の奥へと墮としていった。

『ゲギヤアアアッ………?!』

「や、やったデスカ?!」

『まだだ………! 切歌はこのまま援護を頼む! 此処で奴を追い込むぞ! 調は本部に連絡して宮司さんの傷の手当ての要請を!』

「! 任せるデス!」

「切ちゃん………!」

「大丈夫デスよ調! あんな奴、すぐにやっつけて全部元に戻してくるデス! だから安心して待って欲しいデス!」

漸く姿を現したカメレオンイレイザーをみすみす逃す訳にはいかない。

此処で完全に決着を着けるべく、クロスは赤い弓を手にしたままカメレオンイレイ

ザーを追って塀を軽々と飛び越え、切歌も不安げな様子の調を安心させるようにいつもの朗らかな笑顔と共にガッツポーズを取ると、地面に落とした大鎌を拾い上げながらクロスの後を追ひ、塀を飛び越えて森の奥への姿を消していった。

「切ちゃん……蓮夜さん……っ……私も、今は出来る事をつ……！」

二人の事は気掛かりだが、今は一刻も早い宮司の治療が先決だ。

自分が着ている寝巻きの袖を肩口まで破った布を宮司の傷口にキツく巻き付けて何とか応急処置は済ませたが、高齢の宮司にこれだけの負傷が何処まで耐えられるかわからない。

急ぎ懐から取り出した通信機を手に取り、本部に連絡しようと通信を繋ごうとする調だが、その時……

「——大丈夫だよ。そのおじいさんには今此処で退場されたら困るから、絶対に死なせたりしないよ」

「…………え…………？」

不意に、調達の背後から飄々とした声が聞こえてきた。その声に釣られて振り返ると、其処に姿があつたのは……

「やー、やつぱり油断ならないなー、今の蓮夜君。ちやんとこっちの狙いも考慮してすぐに戻つて来られる仕込みをしとくなんてさー。タイミングミスしたら危うく鉢合わせになるとこだったよ、あつぶねー♪」

「ツ?! 貴方は…………上級イレイザーの…………!!?」

神社の入口の向こうから、石段を上がつて姿を現したのは青髪の青年…………今回の騒動を引き起こした元凶の片割れであるクレンだったのだ。

いきなり現れたクレンの襲来に調も驚きのあまり一瞬硬直してしまうが、そんな彼女の反応も他所に軽やかな足取りで近付いてくるクレンを見て我に返り、宮司を守るよう



に立ち塞がりながら胸元のギアを握り締め聖詠を口にしようとするも、そんな彼女の警戒心強めな態度を見てクレンは苦笑いと共に両手を前に「待つて待つて」と横に振った。

「そんなに怖い顔しないでよー。こっちは別に、君と戦う為でも、其処のおじいさんの命を狙いに来たつて訳じゃないんだからさー」

「つ……！何を……！此処までの騒動を引き起こしておいて、そんな言葉——！」

「信じらんない？ま、それもそうだよねえ。……じゃあ、こうしたらちよつとは信じてもらえるかな？」

不敵な笑みと共に、軽く掲げた右手の指を軽く鳴らすクレン。次の瞬間、調の傍らに倒れる宮司の身体にデジタルノイズのような乱れが生じた。

「?!宮司さんっ！貴方、何を……！」

「慌てない慌てない。ほら、その人の傷診てみなよ。もう完全に治ってるでしょ？」

「…………え…………」

あつけらかんとした口調でそう言いながら指を指すクレンの言葉に、一瞬理解が追いつかず間の抜けた返事を返してしまう。

彼に言われた通り宮司に目を見やれば、デジタルノイズのような乱れはいつの間にか収まり、先程まで痛みで苦しそうにしていた宮司の顔も穏やかな顔付きで規則正しい寝息を立てている。

恐る恐る手を伸ばして彼の肩に巻き付けていた血が染み込んだ布をゆつくりと剥がすと、カメレオンレイザーの舌で貫かれた筈の宮司の肩の傷はなく、跡すら残っていないかった。

「どう…………して…………?」

「んー。まあ、レイザーの改竄能力の応用って奴? 上級ともなればこれぐらいの芸当

は簡単に出来るよ。といっても、流石に本来の歴史（モノガタリ）に関わるような重症とか治したりなんかしたらこの世界にバレて……」

「違う！ そうじゃなくて……貴方達の狙いは宮司さんだった筈なのに、どうしてこの人を助けるようなこと……?!」

理解が出来ないと、調は動揺と混乱が入り交じった顔で叫ぶ。

イレイザー達にとってそう易々と使えない改竄の力を宮司に用いた所からして、彼等の狙いは宮司にある筈だと自分達はそう思い込んでいた。

蓮夜の説明からして、この世界にとってさほど重要な人間ではない宮司の命を奪う事に彼らにとって躊躇する理由はない筈なのに、どうしてわざわざ自分の味方が傷付けた宮司を助けるような真似をするのか。

目的が読めない。何を考えているのか理解が出来ない。

飄々とした態度を崩そうともしないクレンが自分と同じ人間の姿をしているのにまるで全く別の生き物にすら見えて、ある種の不気味さと言ひ知れぬ恐怖を感じてしまう調の疑問に対し、クレンはやはりあっけらかんとした調子で掴み所のない笑みを浮かべ……

「確かに、最初に此処を襲った時の狙いはそのおじいさんに改竄を掛ける事が目的だった。でも、別にそのおじいさん自体に用があつたつて訳じゃない。僕の目的は、そのおじいさんには初めからないんだよ」

「っ……………だつたら、どうしてこんなこと……………!」

「決まつてるじゃないか。……………君とこうして話す機会を設ける為だよ、月読調ちゃん」

「……………え……………?」

今まで飄々としていたクレンの表情と声音が、視線が不意に冷たい物に切り替わる。

そんな言葉と共に彼の冷たい眼差しを向けられた瞬間、  
調は言葉を詰まらせ、冷やや  
かな汗が自分でも気付かぬ内に額から流れ出ていた。

## 第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ⑦

——走る、奔る、趨る。

木々の隙間から差し込む微かな月の光、奥へ進む毎に遠ざかる街の方から照らされる火の光を頼りに森の奥へ、カメレオンイレイザーは自身の肉体を透明化したまま必死に逃げるように駆け抜けていた。

身体を激しく動かす程、暗闇のせいで目の前が良く見えず木に身体をぶつける度に、背中に走る激痛が痛みを増していくが、そんなものを気にしていられる余裕など既にな  
い。

ノイズを喰らい過ぎた事で人間としての理性は溶け、ただの獣畜生に成り果てても、それでも動物的本能までもが失われた訳ではない。

その本能が先程からずっと、まるで早鐘のように訴え掛けるのだ。”奴”とまともに戦えば、今度こそ殺されると。

人間らしい思考がなくとも、生き物としての最低限の感情が残っている以上、圧倒的な力を持つて弱者を翻る事に快楽と優越感を感じる感情があるのなら、圧倒的な力を持つ強者を前に恐怖と畏怖を感じる感情だつてある。

下手に人間らしい心が残っている理性的な他のノイズ喰らいのレーザーよりも、動物還りした事でその恐怖をより肌身に、原始的な本能で感じる事が出来てしまうカメレオンレーザーが足を止めず、全身を駆け走る痛みも顧みずに走り続けられるのはその為だ。しかし……

まるで闇を切り裂くかのように、カメレオンレーザーの背後の森の奥から赤い光の矢が木々の隙間をすり抜けて一直線に空を奔り、カメレオンレーザーのすぐ足元に着弾し、小規模の爆発を起こしてカメレオンレーザーを転倒させた。

『ゲエアアウツ?!』

思わず悲鳴を上げて、カメレオンレイザーが勢いよく地面を転がる。

その頭上から更に赤い光の矢が立て続けに降り注ぎ、カメレオンレイザーの頭、首、胸等の急所に向かって突き刺さろうとするが、カメレオンレイザーは慌てて身体を横に転がして紙一重で矢を回避し、地面に刺さる光の矢を見てすぐさま身を起こして頭上を見上げれば、其処には空に浮かぶ月を背に木の枝の上に陣取り、矢を放った姿勢のまま弓を構えてカメレオンレイザーを見下ろすクロスの姿があった。

『外したか。流星にこの暗闇の中、大体で狙いを定めて当てるのは至難の業だな……』

『ギツ、ゲツ……?!ゲガツ、ガガガガツ?!』

心做しか落胆した声音でそう呟きながら肩を落とすクロスだが、そんなクロスとは対称に、カメレオンレイザーは困惑を露わに激しく狼狽していた。



何故なら自分は、”透明化をまだ解いてはいない”。

この能力は相手の視覚から消えるどころか、体温すら消し、レーザーの気配を感じる力を持つクロスでさえも感知出来ない程の高度な隠密能力だ。

ノイズを大量に喰らった事で人間らしい理性と引き換えに手に入れたこの強力な力のおかげで、クロスも自分の気配を今まで感じ取れず、実際先程の宮司の襲撃の際にも後手に回っていた筈なのに、クロスは確かに今も姿を消している筈の自分にその眼差しを向けて、何故かこちらを認識出来ている。

訳が分からないと、動揺のあまり挙動不審になるカメレオンレイザーのその様子から彼の困惑を察したのか、クロスは木の枝の上から軽々と飛び降りながら淡々と答える。

『姿はよく見えないが、それらしい動きからして大層混乱しているらしいな。俺が何故お前を認識出来てるか、そんなに不思議か？単純な話だ。見えてるんだよ。幾ら姿を消

そうと、お前に染み付いているその”色”はな』

『?!』

ツンツンと、左手で自身の右肩の上から背中を指さすクロスの仕草を見て、カメレオンイレイザーは己の背中に手を回す。

背中に触れた瞬間、ヌチャリとした感触がし、手を見れば、其処には夥しい量の血が透明化している自分の手を赤く色付けていた。

『お前がさつき神社から逃げ出そうとした時、背中に何本か矢を撃ち込まれたのを覚えていただろうか？あの時に負った傷で、今のお前自身は背中から流れるその血のおかげで何処にいるのかそれなりに見当がつく。……ついでに、此処までの痕跡を残してくれたおかげで道に迷わずに済んだよ』

そう言つてクロスが軽く顎で指す方に視線を向けると、暗闇のせいで見え辛いのが、カメレオンイレイザーが此処まで辿つてきた道筋に赤い点々模様……カメレオンイレイ



カメレオンレイザーが内なる激情に駆られるまま正面から急加速で突進し、右手の鋭利な爪を振るう。

未だ大部分が透明化しているその右手は、先程カメレオンレイザーが自身の背中に触れた事で僅かに赤い血が染み付いている。

その色に目掛けて弓を下から振り上げれば、弓の刃が何かに当たって弾く手応えを確かに感じ取り、続け様に返しの刃で空中で浮いているようにしか見えない、目の前でまるで滝のように下へ流れる赤い血（恐らくカメレオンレイザーの背中から流れ出ているソレ）に向かって弓を振るうと、弓の刃は何もないようにしか見えない空間を斬り裂いて火花を撒き散らした。

『ギャアアアウツ?!』

『……いい加減、その姑息な能力を解いたらどうだ。そのザマではもう透明化も意味を成さないし、流石の俺も他人の血でアートを描く猟奇的な趣味は持ち合わせていない

……』

事実、今の一撃によって傷が更に増えたのか、透明化してて判断し辛い、カメレオンレイザーの胴体と思わしき部分から新たに血が流れ出て下半身にまで滴り落ち、先程よりもそのシルエットは明瞭になり始めている。

此処まで来ては最早、無様を通り越して衰れみすらも覚えるその醜態に敵ながら耐え兼ね、辟易とした様子のクロスのその言葉にカメレオンレイザーも屈辱に満ちた唸り声を上げるも、彼の言うように透明化は既に無意味と判断したのか、徐々に能力を解いてその姿を完全に露わにした、瞬間。

カメレオンレイザーの斜め右の方向から、巨大な大木が不意を突くようにいきなり倒れて襲い掛かった。

『ツ?!ギツ、ゲエツ?!』

カメレオンレイザーはすぐさま反応し、素早くその場から飛び退いて大木の下敷き

から何とか免れるが、其処へクロスの弓矢による追撃がすかさず襲い掛かる。

右。左。上。また右。カメレオンレイザーが矢を避けるであろう移動範囲を予測し、無数の矢による追撃の手を止めないクロスに徐々に追い詰められていき、やがてカメレオンレイザーが一本の大木を背に足を止めたその時、クロスが森中に木霊させるように叫ぶ。

『今だ、切歌！』

「——合点承知之助、デエエエエスッ!!」

何処からともなく響き渡る、気の抜けるようなワードを叫ぶ陽気な声。

次の瞬間、カメレオンレイザーがピタリと背中を貼り付ける大木の頭上から二枚の鎌状の刃が高速で回転しながら降り、そのままカメレオンレイザーの両足にガチッと地面に縫い付けるようにハマった。

『ゲアツ?!』

愕然となるカメレオンレーザーだが、彼にとつての不測の展開はそれだけで終わらない。

カメレオンレーザーが困惑のままに両足の枷を力任せに外そうとする中、木の上から一人の少女……今まで姿を現さなかつた切歌が飛び出しながら大鎌を振るい、カメレオンレーザーの足元を縫い付けているのと同じ二枚の鎌状の刃を立て続けに放った。

右腕と左腕。両方の腕を二枚の刃で捉えられて背後の大木に縫い付けられ、磔にされたカメレオンレーザーのその様は、まるで十字架に掛けられた罪人のようだ。

完全に身動きを封じられて足掻くカメレオンレーザーを前に、クロスの隣に着地した切歌は大鎌を肩に背負い、これ見よがしにと得意げにサムズアップを突き付ける。

「ふふん、どんなもんデスか！今までしてやられた借り、これでバッチリ返してやったデスよ！」

『流石だ、やはり頼りになる……!』

理想通りの働きで敵の動きを封じてくれた切歌に微笑を向けてからカメレオンイレイザーに視線を戻し、クロスは赤い弓を左手に持ち替えながら左腰のカードケースから取り出したカードを颯とバツクルに装填する。

『Final Code x……clear!』

電子音声と共に全身の装甲が部分展開されるEXCEED DRIVEに姿を変化させながら、クロスは弓を構える。

次の瞬間、クロスが構えた弓は扇状に広がるように巨大化して光を放ち、引き絞る矢は赤い雷光を纏って稲妻を走らせた。

『これでエンドマークだっ……!ハアアアッ!』



その手から放たれた雷光の矢が、真紅の衝撃波と稲妻を周囲に炸裂させながら大木に拘束されるカメレオンイレイザーに向けて一直線に突き進む。

その構図はまるで彼の英雄、ウイリアム・テルの伝説を彷彿とさせるが、彼の英雄と違い、その矢は明確にカメレオンイレイザーに命を刈り取る為、その心臓を穿つ為の暗闇を切り裂くように駆け抜ける。そして……

——雷光の矢が異形の胸を貫く寸前、夜空から飛来した巨大な鋸が横から矢を弾いて軌道を逸らし、雷光の矢はあらぬ方向へ飛んで地面に着弾、爆発を起こしたのだった。

『なっ……』

「え……い、今の攻撃は……？」

クロスの必殺の一撃を阻んだのは、二人も見覚えのある巨大な鋸。

思わず固まる二人の前に、一人の少女が何処からともなく姿を現し、カメレオンレイザーの前に降り立つ。

ピンク色のギア、シウルシャガナをその身に纏った月読調だった。

「し、調?! どうして此処に?!」

「……………」

身を乗り出し、戸惑いを露わにする切歌の問い掛けに調は何も答えない。

まるで幽霊のように顔を俯かせ、顔を黒髪で隠す彼女の表情は二人の位置からでは見えず、感情を読み取れない。

そんな彼女のすぐ傍に、螺旋に渦巻く水流が不意に出現し、弾けた水の中から一人の

青年が悠々とした足取りで 現れる。

上級イレイザー、カメレオンイレイザーを裏で操るクレンだ。

『クレン……?!』

「ふー……ギリ間に合ったかあ。ありがとうね、調ちゃん。君がいなかったら、危うく大事な駒をこんなつまらないところで失う所だったよー」

「……………っ……………」

「あ、ありがとうって……な、何デスかそれ？調……！一体何の話をしてるデスか?!」  
 当惑、混乱、困惑、焦慮、様々な感情が切歌の内側を埋め尽くす。目の前の事態を咀嚼する事が出来ず、堪らず叫ぶ。

だって仕方がない、そうではないか。

先程のクロスの一撃を阻んだのも、今の二人の会話のやり取りも……。

“こんなの、まるで、”調が自分からレイザー達を助けたようにしか”……。

『クレン、貴様っ……!』

「……ふふ。そう怖い顔で睨まないでよ、蓮夜君。君とまともにやり合うのは、まだこの時じゃあない」

何かを察したように鋭く睨み付けるクロスの眼光も涼しげに躲し、クレンがそう言つて指を軽く鳴らした瞬間、大木に礫にされるカメレオンレイザーが巨大な水球に覆われる。

そして水が弾けると、大木には拘束されていたカメレオンレイザーの姿は何処にもなく、奴を捕らえていた四枚の鎌状の刃だけが木に刺さって残されていた。

「ノ、ノイズイーターが?!」

「じゃあね、蓮夜君。次に会えるのを楽しみにしているよ。……勿論、調ちゃんとも、ね？」

『ツ！逃がすか！』

クレンの足元から浮き上がる無数の泡が、その身体を徐々に覆っていく。

それで奴が逃亡を図ろうとしているのだと察し、すぐさま弓の両端に刃を展開してクレンに突っ込むクロスだが、しかし、それを阻むように調が両手を広げてクロスの前に立ち塞がった。

『っ、調……!』

「待って下さい……!!まって……お願い、だからっ……」

『…………ツ…………!』

声を震わせ、漸く表情を露わにした調の瞳は、まるで今の彼女の心の内を表しているかのように激しく揺れ動いていた。

そんな彼女を前にクロスが思わず手を止めた隙に、クレンは二人の姿を見つめながら微笑を浮かべて無数の泡に包まれ完全に姿を消してしまい、無数の泡はそのまま夜空に吸い込まれるように浮いて一つ、また一つと、儂く弾けて消え去っていく。

——完全に逃げられた。空へ消え去る泡を力無く仰ぎ、そう判断したと同時にクロスも無言で弓を下ろしながら調から顔をそらす中、切歌が勢いよく調に掴み掛かった。

「調っ!! どういう事なのかちゃんと説明するデスよっ!! 何でイレイザーを庇ったりなんてしたデスっ?! どうしてアタシ達の邪魔をしたデスかっ!!? アイツ等はっ…………!!!」

『やめろ、切歌…………』

調の肩を激しく揺さぶり問い詰める切歌を、クロスは静かな声音と共に制止して調から引き離す。

「蓮夜さん?! 何でそんな冷静でいられるデスか?! 調は今——!!」

「……………(ぎゃ)……………(ぎゃ)……………」

「……………え」

動揺と混乱が未だ収まらず、興奮のあまりクロスの腕を勢いよく振り払う切歌の耳に、微かな声が届く。

その声に釣られて振り返れば、今にも消え入りそうな月の光の中で立ち尽くし、俯く調の顔からポツポツと、小さな雫が溢れ落ちていくのが見えた。

「し……ら……べ……る……?」

「ごめん…………ごめんね、切ちゃん…………ごめんなさい、蓮夜さん…………ごめん、なさ…………う…………っ…………」

『……………』

嗚咽を押し殺し、瞳から溢れ出るソレを無理やり堰き止めるように両手で顔を塞ぎ、ただただ二人に向けて謝罪の言葉を繰り返す。

そのただならぬ様子に、先程まで彼女に詰め寄っていた切歌も目を剥いて言葉を失ってしまい、クロスもまた無言で今の調から視線をそらし、仮面の下で何かを悔いるように静かに瞳を伏せていた。

……戦いの騒音が去った、静寂が戻った夜の森。

その中でただ一人、少女の震える小さな泣き声だけが何処にも行き場がなく、いつま



でも虚しく響き渡っていた――。

第七章／離Y y式・解答不能×切り離されたaカ吊奇のウタ  
E N D

## 暁切歌&amp;月読調編（後編）

第八章／繋XX式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでもme侶スは駄ke走ル

宮司の記憶の改竄、ダストやノイズによる街の襲撃など立て続けに起こる上級イレイザー・クレンの意図が読めない陰謀の数々。

そんな中、遂にカメレオンイレイザーを仕留める寸前にまで追い込んだ蓮夜と切歌だったが、それも思わぬ形で打ち砕かれてしまった。

奴を裏で操る首謀者のクレンと——自分達の仲間である筈の、月読調の手によって。



— S . O . N . G . 本部・発令所 —

「——調ちゃんが……ノイズイーターを庇って、逃がすのを手伝った……?!」

「……………」

街を襲撃したダストとノイズの軍勢を一掃し、カメレオンレイザーとの対決の後、蓮夜達は本部の発令所に帰還していた。

報告では、装者達が寝泊まりしていた調神社から比較的近い地区、襲撃を予期して予め街に配置しておいた情報部員の迅速な避難誘導が功を奏したのか、街の被害や怪我人などを除けば今のところ死亡者は確認されていないらしい。

それ自体は喜ばしい戦果なのだが、生憎と今の発令所に漂う空気はそれとは全く正反対で、一同の間は重苦しい雰囲気でもまれていた。

その理由は勿論、先の戦闘でカメレオンレイザーの逃亡を手助けした調の不可解な行動が原因だ。

「事情は先程、君からの連絡で軽くは聞いた……しかしそれでも解せない。何故調君はそんな事を……彼女は今何処に？」

眉間に皺を寄せ、弦十郎は顔を動かして辺りを見回す。

発令所に集まったのは、本部にいた弦十郎やエルフナイン、銃後のメンバーを除いて蓮夜、響、クリスの三人だけ。

当の本人の調と、蓮夜と共にカメレオンレイザーと戦った切歌の二人の姿は此処になく、その疑問に蓮夜が淡々と答える。

「調はあの後、何も言わず神社に戻った。切歌はそんな彼女を引き止めて何とか理由を問いただそうとしたが、結局何も答えてもらえず……俺達にコレを渡してきた」

そう言つて蓮夜が懐から取り出し、皆の前に差し出したのは彼の掌の上で輝く赤いペンダント……調のギアであるシウルシャガナだった。

「それ、調ちゃんの……！」

「……『今の自分は戦えない』……そう言つて調が俺達の下を去つた後、切歌もシヨックに打ちひしがれて、今はうちで預かつている猫と一緒に俺のマンションにいる。……あんな事があつた手前、調のいる神社にはいられんだろうし、二人で住んでた部屋に戻つても、調の事をより鮮明に思い返して辛くなるらしくてな……」

そう語る蓮夜の表情も、何処か辛く険しげに歪んでいる。

調と切歌のすぐ傍にいながらあの二人のすれ違いに何も出来なかつた事に対して心を痛めているのか、そんな彼や切歌の今の心情を察して響やクリス、エルフナインのその場の誰もか何も言えず沈んだ顔で俯く中、弦十郎は無言で蓮夜の手からシウルシャガナのペンダントを受け取る。

「ギアを返還したという事は、これ以上我々を妨害するつもりはないという彼女なりの意思表示かもしれない。……少なくとも、調君が己自身の意志でイレイザー側に寝返ったという最悪の可能性は除外してもいいだろう」

「……でも、それならなんで尚更、調ちゃんは蓮夜さんと切歌ちゃんの邪魔なんか……あのノイズイーターを倒せば、宮司さんだって元に戻れた筈なのに……」

「……まさか、アイツもイレイザーの改竄を受けてるんじゃないのか？ 前のあたし等の時みたく」

「そうだとしたら、調の突然の心変わりにも納得出来る。だが、蓮夜は即座に首を横に振ってそれを否定した。」

「いや。アイツと対面した時、イレイザーに改竄された痕跡は一切感じられなかった。つまり調が俺達の邪魔をしたのは奴らから改竄の影響を受けたからではなく、あくまで自分の意志で、という事になる」

「つ、マジかよ」

「イレイザーのせいじゃないんなら、どうして……」

一番有り得そうな可能性は蓮夜の口から否定され、ますます調の動機が分からず困惑を深めてしまう響とクリス。

そんな三人のやり取りを睨を伏せ、無言で静かに聞いていた弦十郎は複雑げな表情で告げる。

「いずれにせよ、調君の行いをこのまま無視する事は出来ん。ギアを返却したとは言え、動機が分からない以上、再び土壇場になって彼女がまた我々の邪魔をする可能性もなくはないからな」

「……師匠、それって」

「……事態が収まるまで、調神社に滞在している調君を即刻捕縛し、然るべき処罰を与える  
しかない、という事だ」

「つ……待てよおっさん……！まだアイツからちゃんとした事情だつて聞かされちゃい  
ねえんだ！拘束なんて、そいつはまだ早計が過ぎるんじゃないやねえのか?!」

「そうですよ！調ちゃんは今まで一緒に戦ってきた仲間なんです！なのにそんなの……  
！」

弦十郎の無慈悲に思える決断に反発して声を荒らげるクリスと響。しかし、弦十郎も  
そんな二人の意見にも毅然とした態度を崩さず言葉を返す。

「無論、調君の事を信じたいと思っっているのは俺とて同じだ。……しかし、今の彼女が何  
を思い、何の為にあのノイズイーターを庇ったのか。その理由がもし生半可な気持ちで  
なければ、例えギアがなくても、再び同じような場面になれば彼女が身を呈してノイズ  
イーターを庇わない保証もない。……そうなつては彼女の立場はますます危うくなり、  
今以上に重い処罰を彼女に下さねばならなくなる」



「つ……それはそうかもですけど……でも……」

「それに、彼女がイレイザーに利用されているなら、このまま我々が何もせずにいれば奴らに散々利用された挙句使い捨てにされ、更に危険な目に遭う可能性も考えうる。……処罰は避けられないにしても、その危険性から遠ざける為にも身柄を保護してやる事ぐらいしか、今の俺達が彼女にしてやれる事が思い付かん……」

「おっさん……」

彼女なりにただならぬ事情があつたにせよ、司令という責任ある立場上、今後更なる被害を生む危険性があるカメレオンイレイザーを逃がした調の問題行動をなあなあで許す訳にはいかない。

しかし、それでも彼女は今までも共に S・O・N・G. で一緒に戦ってきた仲間で、多くの人々をその小さな身体一つで身を張って救ってきた功績もある。

敵を助けた理由が分からないとは言え、そんな彼女にも何かしらの並々ならぬ事情を抱えている事を考慮し、これ以上彼女がレイザー達に利用されない為にも即刻身柄を拘束する考えを語る弦十郎だが、その顔にはやはり彼なりの葛藤の色が滲み出ている。

そんな弦十郎の顔を見て響とクリスも内心まだ納得し切れていないが、彼も彼なりに調の事を気に掛けているのだと理解しそれ以上の言及を躊躇して誰もが口を閉ざしてしまう中、

「……………風鳴司令、少し待って欲しい」

その沈黙を破ったのは、相も変わらず感情の起伏が分かり辛い蓮夜の待ったの一言だった。

「蓮夜さん……………?」

「調への処罰、もう少しだけ時間を……………猶予を与えてはもらえないだろうか」

「……訳を、聞かせてもらっても構わないか？」

いきなり過ぎる、突飛な蓮夜からの進言。しかし弦十郎は真顔のままそれを受け止め  
て聞き返すと、蓮夜は僅かに視線を下げ、ポツポツと言葉を続ける。

「今回の一件、あの二人……調と切歌の事は俺に任せて欲しい。俺が傍にいなから二人  
に何もしてやれなかった責任を感じてるといいうのもあるが……一つ、調があんな行動を  
取った理由に心当たりがある」

「ツ！本当ですか?！」

「その理由ってなんだ、勿体ぶらずに聞かせろよ！」

「それは……すまない、俺の口からは言えない……」

「え……ど、どうして——！」

肝心な内容を話せないと言う蓮夜に響もクリスも思わず詰め寄ろうとするが、そんな二人を弦十郎が片手で制し、真剣味を帯びた眼差しを蓮夜に向ける。

「その理由を話せないというのは、もしか、調君の為か？」

「……………それも、ある」

「君に任せた結果、あの二人の苦悩を晴す事が出来る。これ以上、調君や周囲の人々に被害は出させないと、そう言い切れる確証はあるのか？」

「……………それも、今はまだ何とも言えない。ただ、」

弦十郎の目をまつすぐ見つめ返す。要領を得ない蓮夜の返答にその顔は厳しく歪んでいるが、それでも蓮夜は億さず、彼の目から視線を逸らさない。

「少なくとも、この役目は俺でなくてはならないと、そう自負して言い切る事だけは出来る……………確証も不確かなのに無責任だと責められて、ふざけるなど一蹴されても仕方がな

いと思うが……それでもどうか、たの——いや……お願い、します……俺達にもう少しだけ……時間を、下さい……」

「……………」

そう言つて、深々と弦十郎に向けて頭を下げる蓮夜。そんな彼の真剣な姿に響達も誰も声を発せず気圧される中、弦十郎は頭を深く下げる蓮夜を暫し見つめた後、瞼を伏せ、思考に浸る仕草を見せると、やがて目を開き、蓮夜に向けて小さく頷いた。

「分かった。その言葉を信じて、調君達の問題解決の一件は君に一任しよう」

「……………」

「師匠……」

「いいのなのよ……！コイツ一人だけであの二人をケアするだなんて、流石に荷が重いんじゃない」

意外そうな響の眩きとクリスの驚きの声を耳に弾かれたように蓮夜が顔を上げると、弦十郎の視線と再び交わる。

その表情は真剣だが、しかし先程と同様厳しさも残っている。

「しかし、君にもどうにも出来ないと分かれば、我々もすぐに彼女を拘束しに動かねばならない。過去に一度、罪を犯した事がある彼女のこの一件が上に露見すれば、俺達でも彼女の立場を庇い切れるか危うい。そんな最悪な事態を避ける為の処置を待つという事は、我々にとつても、調君にとつてもリスクが高いという事だ。……それでもやると、君は言うんだな？」

「……………」

失敗は赦されないと、言外にそう語っているように聞こえる弦十郎の問い、蓮夜は何も答えない。

ただ真つ直ぐ、弦十郎の視線を返すその眼差しが力強い物に変わり、それを彼なりの返答と受け取った弦十郎は臉を伏せて小さく微笑むと、響達の方へと振り返る。

「では、二人にはこのまま本部に待機して次の出撃まで体力の回復に専念してくれ。今回は初めから上級イレイザーが戦線に加わっているという事は、この後にも引き続き奴と、取り逃がしたノイズイーターとの連戦になるやもしれん。蓮夜君が調君と切歌君の元へ向かつてる間、二人には何時でも出られるように備えておいて欲しい」

「それは大丈夫、ですけど……」

弦十郎からの指示に頷きつつも響が蓮夜の様子を伺って横目を向けると、蓮夜は既に彼女達に背中を向けて発令所を後にしようとして歩き出している。

そんな彼を呼び止めようと響が口を開き掛けるが、クリスが先に蓮夜の腕を掴んで引き止めた。

「お前、何かあたし等に隠し事してないか？」

「……………」

掴んだ腕に指が食い込むほど強く力を込め、何かを見透かすような眼差しを向けるクリス。

蓮夜はそんな彼女と無言で視線を交わすと、そつとクリスの手を取って離させていく。

「心配入らない。今回は俺も前回みたく無茶をする気はないし、お前達が一抔の不安を感じたとしてもそれは杞憂に終わる。奴らとの決戦にはお前達の力を頼りにしているから……………その時が来るまで、俺を信じて任せてくれ」

「……………蓮夜さん……………」

「……………」



何時もの真顔のまま、しかし何処か穏やかな微笑と共に蓮夜は頷く。

その言葉自体に嘘偽りは感じられないが、それでも何故か引つ掛かりを感じてしまうクリスや響に見送られ、蓮夜は発令所を後にした。



— S . O . N . G . 本部・通路 —

「……………」

発令所を去った蓮夜は、通路のあちこちから艦を動かすエンジンの起動音が響き渡る通路を無言で歩き進めていた。

……しかし、不意にその歩みが止まり、誰もいない通路の壁に撓垂れ掛かるように身

体を預け、壁に背を預けると、顔を俯かせながら沈痛な顔を浮かべる。

「……すまない、切歌……すまない、調………すまない………宮司さん………」

その口から漏れ出たのは切歌と調、そして宮司に対する心の底からの謝罪。

顔を上げて天井を仰ぎ、両手で顔を覆うその姿は、まるで神に許しを乞い懺悔する罪人のように見えた。

（「この事」は誰にも知らせてはならない……響達は勿論の事……調には特に……絶対に……）

脳裏に思い浮かべるのは、宮司に改竄を施し、下卑た笑い声を上げていたカメレオンイレイザーの顔。

奴だけは必ず、自分のこの手で始末を付ける。

切歌や響達、特に調には絶対に、奴に手を下させる訳にはいかないのだ。

（こんな重荷を背負わせてたまるものか……この”罪”は、俺が最期まで背負い続けなければならぬ……彼女達の手を、こんな形で汚させる訳にはいかない）

顔を覆う指の隙間から見えた蓮夜の目に浮かぶのは、仄暗い殺意の色。

まるでこれから取り返しの付かない罪を犯そうとする犯罪者のようにも見える危うさを漂わせながら緩かに歩き出し、顔を上げて進もうとした彼の脳裏にふと、何故だか今も医療機関で眠り続けている筈の漂流者の青年の顔が横切った。



— s y m p h o n y ・ 4 0 5 号室 —

「……………」

明かりすら点いていない、窓から差し込む僅かな月の光だけで照らされた蓮夜の部屋では、カメレオンイレイザーとの対決の後に調神社を後にした切歌がソファアの上で体育座りし、顔を伏せて塞ぎ込む姿があつた。

（…………調…………どうして…………）

頭の中で何度もリフレインし、こびり付いて離れないのは自分と蓮夜に泣きながら何度も何度も謝罪の言葉を繰り返す調の痛ましい姿。

残響して耳の底に残るのは、その後、自分達を残して神社に戻ろうとする彼女を無理やりに引き止め、理由を問い詰めようとした際に彼女の口から告げられた、まるで感情を押し殺したような冷え切った声だ。

『——私はもう、戦えない……………こんな迷いを抱えたままじゃ、皆と戦う資格なんて、私にはない……………ごめんね切ちゃん……………ごめんね……………』

「——どうしてデスカ、調……言ってくれなきや……ちやんと言葉にして伝えてくれなきや……あんなに一緒だったアタシにだって、調の気持ちは何にも分かんないデスよっ……」

「……なーう」

まるで彼女の独り言に代わりに応えるかのように、子猫の一鳴きが部屋に響き渡る。

顔を僅かに上げて隣を見れば、其処には尻尾を揺らし、つぶらな瞳で自分を見上げる神社から連れ帰った黒毛の子猫の姿が。

冷たい雨の中に飼い主に打ち捨てられ、これから何処へ行けばいいのかも未だ分かっていない居場所のない哀れな生き物。

その境遇に何処か今の自分を重ね合わせた切歌は下手くそな笑みを浮かべて微笑み、子猫を優しく抱き抱え、まるで温もりを求めるように無言で抱き締めたその顔には、や

はりそれでも晴れない心が浮き彫りになり、切ない表情を浮かべていた。



—調神社—

「……………」

雲がかかった月光に照らされる、調神社の一室。

畳の上に敷かれた暖かな布団の上で、穏やかな寝息を立てて寝る宮司の顔を傍で静かに見守るのは、戦う前と変わらず寝巻き姿のまままで正座する調だった。

（……………私は……………）

眠る宮司の顔を見つめる調の顔は、何時ものポーカーフェイスが崩れ落ち、悲痛に歪んでいる。

心に未だ残り続ける、仲間達やイレイザー達に襲われた人々に対する罪の意識、迷い、自己嫌悪の負の感情の数々。

こんな事は絶対に間違っている。許されていい筈がない。

頭では確かに分かっているながら、それでも”あの言葉”を振り切れる強さを自分は持てなかつた。

『——彼に掛けられた改竄を解きたいだけなら、あのノイズ喰らいを倒せばいい。……でも、これだけは忘れないでね。もしも彼を倒せば、そのおじいさんは——』

——まるで深海の深い底、暗い海の冷たさを思わせる彼の言葉が脳裏にこびり付いて

何時までも離れない。

指先から冷たくなっていくこの感覚は、きつと夜の寒さのせいだけではなかった。

(……切ちゃん……蓮夜さん……皆……私はどうすれば……どうしたら、良かったんだろう……分からない……私には、分からないよっ……)

寒さを。寂しさを。この苦しみから逃れたい一心で、眠る宮司を起こさないように布団の中からそつと彼の右腕を両手で取り、自分の額に当てていく。

……それでも、その温もりが胸の内の痛みを和らげてくれる事はなく。

瞳から不意に零れ落ちた雫が宮司の手から流れ、畳の床の上に落ちる音だけが室内に静かに響き、部屋を唯一照らしてくれていた月の明かりは空の雲に完全に覆われ、弱々しく項垂れる彼女に暗い影を落としていくのだった。



第八章／繫xX式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでもme侶スは駈ke走ル①

「……………」

S・O・N・G・管轄の医療機関。例の意識不明の漂流者の青年が眠る病室。

先程弦十郎や響達との会合を終えて発令所を後にした蓮夜は、一人この場所に訪れて  
いた。

ガラス貼りの壁の向こう側にある病室のベッドの上で、例の青年は口元に呼吸器を繋  
がれたまま、未だ意識を取り戻す兆しは見られない。

（……………どうしてこんな場所に来てしまったんだろうか……………彼を見ている、何も湧き上  
がる感慨すら浮かばないというのに……………）

何故此処へ足を運ぼうと思ったのか、その理由は自分にも分からない。

ただ、自分がこれから果たさねばならない責務。

その覚悟に腹を括る前に一度、一目彼の顔を見ておきたいという気持ちが何故だか不意に湧き上がったのだ。

不思議だと、自分でも思う。彼が一体何者なのか、未だ何も分からないというのになんな気持ちを抱くだなんて。

もしかするとやはり、彼と自分の間には何かしらの関係があるという事なのだろうか……。

(それでも、何も思い出せる物がないなんてな……どうしようもない……本当に……)

もしも彼が自分を知る人間であるなら、その記憶を欠片すら思い出せない自分はなん

て酷い人間なのだろう。

新たにのしかかる自己嫌悪のあまり、胸が苦しく、頭が鉛のように重い。

いつそ誰かに寄り掛かってしまいと、そんな幼じみた甘えを抱く自分に呆れ返ってしまっても、目の前にあるのは自分とベッドの上に横たわる青年の間を隔てるガラス張りの窓だけ。

もうこの際それでもいいと、やけに重たく感じる頭を預けるようにガラス貼りの窓のコツンと額を押し当てながらも、そんな今の自分の姿がより滑稽に思えて思わず自嘲の笑みを薄く浮かべる中、其処へ……

「——此処にいたのか」

「………？」

不意に病室の扉が開く音と共に声を掛けられ、窓から頭を離して振り返る。

其処には先程、発令所で別れたばかりの弦十郎が扉の奥から現れ、病室内へと足を踏み入れてくる姿があつた。

「風鳴司令……？何故此処に？」

「先程、君に返しそびれた物があつてな。それを届きに來たんだ。それら」

そう言いながら蓮夜の下にまで歩み寄り、弦十郎は何かを握り締めた右手を蓮夜にスツと差し出す。

その手と弦十郎の顔を交互に見て、蓮夜が若干戸惑い気味に恐る恐る掌を出すと、掌の上に赤いペンダント……シウルシャガナのギアが置かれた。

「これは……」

「調君と話し合うつもりなら、場合によっては必要になるかもしれないと思つてな。俺も

立場上、今回の調君の問題行動をお咎め無しとする訳にはいかないが、それでも彼女を  
そうさせた事情次第では、情状酌量の余地があるかもしれないと思っっている。だから  
……」

「……ああ。分かつてる」

この事件が片付いた後も、調がまた自分達の戻って来られるようにしたいと、弦十郎  
も本心ではそう願っているのは発令所での会合でちゃんと伝わっていた。

だからこそ、その願いに応えたいという思いと共に蓮夜も迷いなく頷く。

「必ず、彼女の本心を問い質すつもりだ。だから安心して任せて欲しい」

「……本心、か……」

「……?」

渡されたペンダントを固く握り締め、弦十郎の中の不安や心配を払拭させようと微笑む蓮夜だが、弦十郎は何故だか複雑げに顔を曇らせている。

どうしたのだろうか。何か自分は可笑しな事を言っただろうか？

そんな疑問と共に蓮夜が不思議そうに首を傾げると、弦十郎は蓮夜から一瞬目を逸らした後、その顔に何処か真剣味を帯びせて蓮夜の目をジツと見つめ返す。

「俺も、君には聞きたい事がある。……君は何か、俺達に隠し事をしているんじゃないのか？」

「………………。貴方まで何を」

「それでも、人を見る目はそれなりに肥えているつもりでな。先程の別れ際、クリス君に問い詰められてた時の君の言動には些かなぎこちなさを感じた。……あの時は何もないなどと言ったが、本当は何かを誤魔化したかっただけなんじゃないか？あの場にいた響君や、クリス君……いや、或いは俺達にも言えない何かがある為に」

「……………」

弦十郎の顔を見上げたまま、蓮夜は無表情を崩さず何も答えない。

ただ否定もしないという事は、少なくともこちらの見通しもあながち間違いではないのだろうと、弦十郎は言葉を続けていく。

「確かに表向きではないとは言え、君と俺達はれつきとした協力者だ。君が俺達やこの世界の人間を無償で助けてくれたように、君が何か不安視している事や、悩みがあるとこののなら助けたいと、俺はそう思っている」

「……………風鳴司令……………」

「響君達にも言えない事なら、せめて、俺にだけにでも打ち明けてはもらえないか？君からすればいらぬ世話かもしれんが、それでも……………ただ助けられるばかりで、何もしてやれん人間に俺はなりたくないんだ」

「……………」

何かを抱えているらしき蓮夜の心情を察し、そんな彼の身を真摯に案じる弦十郎はお節介と分かっている、それでも力になりたいと申し出る。

蓮夜はそんな彼のまつすぐな眼差しを視線を逸らさずに受け止め、互いに視線を交差させたまま言葉を発さない二人の間を暫し静寂が支配した後、やがてその沈黙に先に耐え切れなくなったのか、蓮夜は根負けしたように溜め息を吐きながら苦笑を浮かべた。

「流石、と言うべきか……味方としてその慧眼は心強いが、いざ自分に向けられるとなるとどうにも居心地が悪いな……」

「……その口振りだと、やはりまだ何か隠しているんだな？」

「……………」



弦十郎からの問いに、蓮夜は顔を逸らして逡巡した後、病室で眠る青年の方に視線を向けて淡々と語り出す。

「今回、宮司さんに改竄を施したノイズ喰らいのイレイザー……ノイズイーターは完全に理性を失っている……彼処まで壊れてしまえば、俺や響達が戦ってきたこれまでのイレイザー達のように知性はない。改竄を行使する為に考える頭すらないのなら、今までのように物語を歪められる心配はないだろうとタカを括っていた。

……そんな根拠もない油断のせいで、俺はまた取り返しのつかない失敗を犯してしまっただ……」

「取り返しのつかない……?」

不穏な発言に、弦十郎の眉間に皺が寄り険しく歪む。

そんな弦十郎の顔を複雑げな表情で横目に、蓮夜は瞼を伏せながらその“失敗”を語り始める。

淡々と、感情を押し殺したような声音で語られていく彼だけが知る「真実」

その内容に、黙って蓮夜の話聞いていた弦十郎の顔もみるみる内に驚愕の色へと染まっついていってしまう。

「そんな……馬鹿なっ……！では今の、ノイズイーターの改竄の影響を受けている調神社の御仁は、以前の俺達のようにただ記憶を改竄されているのではなく……!?」

「……そういう事になるらしい……俺自身、暴走したノイズイーターがもし改竄の力を行使すればどれほどの影響力が齎されるのか……そういった事例に今まで直面した事がなかったから、こんな大事になるだなんて想像すらしていなかった……奴らが強大過ぎる力のせいで自我が崩壊していたとしても、その力までもが失われる訳ではないというのに……」

俺がもつと早くにその事に気付いていたのならと、蓮夜は深く悔いるように悲痛げに目を臥せる。

そんな蓮夜の口から聞かされた衝撃的な事実には弦十郎も未だ動揺が収まらぬまま、それでも何とか口を開く。

「もしや……調君はその事実を聞かされたせいで、あの時……？」

「……それはまだ、分からない……だからこそ、もう一度彼女と直接会って話さなければと思ったんだ……全てを承知の上なのか……それとも、事実を聞かされてないままだ奴らに利用されているだけなのか、それを見極める為に」

「……もし、彼女がその事実を聞かされていなかったとしたら？」

「聞かされていないならそれでいい。知れば調は勿論、響達も奴らと戦う覚悟が揺らいでしまう可能性がある。そんな心的状態で戦いに挑めば、かえって彼女達の身にも危険が及ぶ……」

「それに……」と、蓮夜は静かに顔を逸らす。

「こんな重荷……」 人殺し同然の罪なんて、彼女達に背負わせる訳にはいかない……だからこそ、あのノイズイーターだけは俺がこの手で始末を付ける……必ず」

「……………」

僅かに顔を俯かせながら決意を新たに告げる蓮夜だが、その横顔には何処か、拭い切れない葛藤の色が微かに滲み出ているのが伺える。

そんな今の彼に、弦十郎も一体どんな言葉を掛けるべきなのか今すぐには思い付かない。

ノイズイーターに関する信じ難い新たな事実に動揺しているのもあるが、何よりも、これから彼が行おうとしている重責を思えば生半可な憐情の言葉など気休めにもならない。

沈痛な面持ちで口を閉ざしてしまうそんな弦十郎の心境を察したのか、彼の顔を見た

蓮夜は苦笑と共に首を横に振った。

「そんな顔しないでくれ……元々レイザーの改竄を正すのが俺の役目なんだ。これはその延長線上に過ぎないのだから、貴方が気に病む必要なんてない」

「しかし……」

「それに……正直に告白すると、こうして貴方が話を聞いてくれただけで、思いの外救われてる部分はあるんだ……」

「……………」

そうやって恥じるように苦笑を浮かべる蓮夜は、自身の右手をジツと見下ろす。

……よく見れば、その指先は僅かに、小刻みに震えていた。

「ノイズイーターを倒す。この改竄を正す。それ自体に躊躇もなければ、迷いもない。」

迷う訳にはいかない。……ただ情けない話、これから自分がやろうしている事に少なからずの恐ろしさを感じてしまっているらしくてな……響達に余計な不安や心配をさせまいと強がってはみたものの、どうにも自分自身の事までは誤魔化し切れないみたいだ……」

「……蓮夜君……」

「……大事な話を隠していてすまない、司令。それにこんなみつともない弱音まで吐いて……ただそれでも、役目は必ず果たしてみせるから……どうか、それだけは安心を――」

「そうじゃないだろう」

「……え……?」

咎めるような、しかし何処か論すような声に言葉を遮られ、蓮夜は思わず弾かれたように顔を上げる。

すると見上げた弦十郎の顔には、怒りや悲しみとも、憐れみとも取れる、様々な感情が入り交じったかのような複雑な色が浮かんでいた。

「風鳴司令……?」

「どうして君は、其処まで何もかも自分一人で背負い込もうとするんだ?」

「……………」

「恐怖を感じてしまう? そんなのは当たり前だ。君からただ話を聞かされただけの俺でさえ、あまりに残酷な現実には戦慄している。恐怖すら通り越して、君に手を汚させるしかない己の力量不足に憤りさえ覚える程だ」

口に出す言葉に怒気が孕む。

でも恐らくそれは、目の前の蓮夜だけに向けられたものではない。

きっと彼の言うように、蓮夜の考えを正しいと理解し、でもその上で、彼に手を汚させる事に頼らざるを得えない自分自身に向けての怒りが大部分を占めているのだろう。

そんな自分の中の怒りを落ち着かせるかのように、瞼を伏せて深く息を吐き出した弦十郎は、再び見開いた眼で蓮夜の顔を真剣に見つめていく。

「弱音なんて吐いたっていい。辛く苦しいのなら口にしたっていいんだ。そう思い、感じるのも、君が人の痛みを理解出来る人間だからだ。その証を、どうして恥じる必要なんてある?」

「……風鳴司令……」

「俺はノイズやイレイザーとも戦う術を持たない人間だ。君達のような前途ある若者を戦場に立たせ、ただ安全な場所から偉そうに指示を飛ばす事しか出来ないひ弱な人間かもしれない。……だがそれでも、君が一人で抱える苦しみを共に背負う事なら出来る」



「……………」

「だからどうか、忘れないでくれ……君はもう一人じゃない。俺や響君達もいる。気を張らずに頼ってくれてもいいんだと。例えば君がその手を汚す事になろうとも、何があつたとしても……俺達は仲間で、君の味方だ。絶対にな」

ニイツと、口端を上げて笑う弦十郎に、蓮夜は目を見開いて息を拒む。

その胸を打つ、心強い言葉で心の内で燻っていた濁りがまるで綺麗な水で流されるような、暗闇に一筋の光が射し込むかのように、少しだけ淀んでいた気持ちが無くなった気がする。

そんな自身の胸の内を探るように胸にそつと手を当てると、蓮夜は俯き、眉を八の字にしながら微笑む。

「まったく……響といい、貴方といい……本当に敵わない……」

「……………？すまない、今なんと……………？」

小さな眩きを耳で拾えず、弦十郎は思わず聞き返す。

しかし蓮夜は徐に顔を上げると、ふるふると首を横に振って不器用に笑い返した。

「ただの独り言だ、気にしないでくれ……………ただ……………ありがとう、風鳴司令……………その言葉に少しだけ、心が救われた気がする……………」

「……………感謝の言葉など……………俺には結局、君の為にこれ以上してやれる事が何もない……………」

「そんな事はない。だって貴方は、俺なんかを仲間だと言ってくれた。本当の自分を証明出来る物を何一つ持たない俺を、ただ一人の人間として受け入れて、居場所までくれた。……………そんな貴方や響達が生きるこの物語を救えるのなら、どんな恐怖心にも打ち勝てる、改めてそう思わせてくれたんだ……………」

「……………蓮夜君……………」

普段の蓮夜からは想像も付かない、穏やかな表情と、優しい声音。

そんな人間らしい感情を垣間見せる蓮夜を前に弦十郎も一瞬言葉を詰まらせる中、蓮夜は彼から渡されたシウルシヤガナのギアをジツと見下ろす。

「だから今度は、俺がそれを返す番だ。調だけじゃなく、切歌の事も……あの二人の居場所を奪おうとする存在がいて、それを嘲笑う奴等がいるのなら、俺は戦える……もう何一つ、奴等にこれ以上何も奪わせやしない」

強い決意と共にシウルシヤガナのギアを固く握り締め、蓮夜は弦十郎に軽く会釈して迷いのない足取りでそのまま病室を後にしていく。

その後ろ姿を無言で見届けた弦十郎は病室内で一人、眉を顰めて薄暗い天井を仰いだ。

——……君は何か、俺達に隠し事をしているんじゃないのか？——

「——一体、どの口でそんな事を言えた義理があるのだろうか……」

先刻、蓮夜を問い詰めた際の己の言葉を思い返し、弦十郎は自嘲気味に笑ってしまう。

そんな今も脳裏にこびり付くのは、ここ連日、エルフナインと密かに交わっていた蓮夜の身体の謎についてだった。



『——あくまでこれはまだ仮説の域ですが、もしかしたら蓮夜さんは、イレイザー達とも何かしら繋がりがあつたのではないかと考えられます』

『それはつまり……彼は元々イレイザー側の存在だったかもしれない、と?』

『其処までは言い切れませんが……少なくとも、脳に至るまで身体を此処まで複雑に改造されてしまえば、例えば僕達の知る錬金術師……キャロルやアダム、仮にフィーネであつたとしても、あんな風に寿命に問題もない、健康体の普通の人間として生き長らえさせる事なんて先ず出来ないとします。幾ら改造する本人の技術がどれほど完璧であつたとしても、その素体となる人間がそれに耐えられるとは限りませんから。それが仮に、どんな強靱な肉体を持った人造人間や自動人形（オートスコアラ）……僕のような、ホムンクルスだつたとしても』

『……君に其処まで言わせる程の技術が、彼に……もしやその技術とは……』

『……』 改竄 ……僕達では計り知れないイレイザー達の例の力がその正体だとすれば、ある程度の辻褃は合います……でも、仮にもしそうなら……今の蓮夜さんは……』

『身体を……奴等に改造され……その上で、改竄の力で無理やり死なないようにされていくと……っ』

『断言は出来ません。けれど少なくとも、敵側のイレイザーは明確な殺意を持って、蓮夜

さんを何度も殺害しようと試みていたようでした。そんな彼らが、わざわざ自分達の驚異となる蓮夜さんに其処まで手のかかる非人道的な実験をして、しかも延命させた上に野放しにするだなんて、矛盾しているにも程がある。行動に一貫性がない。……ただ、』

『……ただ？』

『……もし、敵側も一枚岩でないのだとしたら、その前提は覆されるかもしれません……例えば表向き、蓮夜さんを殺す意志を他の仲間に見せておいて、裏では彼を利用して何かを企んでいるか……とか』

『……そう考えるとしたら……奴らを従えるトップ、か……う？』

『あくまで可能性の一つ、ですが……ただ……その可能性がもし限りなく事実に近いのだとしたら、先程の仮説……今の蓮夜さんは、もしかしたら本当の意味で過去のその人そのものではなく……』

『……過去の蓮夜君は……既に、殺されている——？』



臉を伏せ、記憶に浸っていた弦十郎の瞳が開かれ、その顔が悲痛げに歪む。

エルフナインと交わしたあくまでもしももの話。しかし、彼の不可解な身体の謎を思えばある程度の納得がつく、限りなく信憑性の高い可能性。

もしもそんな残酷な可能性が真実だとすれば、敵の黒幕にも利用され、その上、奴等を倒す為に彼を利用して自分達に、一体何の違いがあるというのだろう。

（……有り得て欲しくなんてない……ただ、その可能性を否定出来る材料を俺達はまだ持っていない……）

無言のまま、窓の向こうの隔離室で未だ眠り続ける謎の青年に目を向ける。

浜辺で彼を見付けた時、彼は要救助者だった為に純粋に一刻も早く助け出さねばと、ただそれだけを思った。

しかしもし、彼が蓮夜と何かしら関係のある人間だとすれば……。

(何でもいい……今の彼が、嘗ての蓮夜君と相違ない人間なのだと思付ける何かを得られれば……でなければ……俺達は一体、どうやってこの事実を彼に伝えればいい……?)

そんな打算が芽生えてしまった己自身を汚いと思いつつも、先刻の人間らしい感情と共に自分達の為に戦おうとする蓮夜の顔を思い浮かべる度に、弦十郎は縋るような思いで、漂流者の彼が目覚めるのをただただ願うしかなかった。その時、



「……………れん……………や……………」

——吹けば掻き消えそうな、羽虫が飛ぶ羽の音にすら劣る小さな声が謎の青年の口から溢れ出たのを、この時の弦十郎が気付く事はなかった……。

## 番外編④

## メモリア04 / 漆黒の戦姫×通りすがりの――

――嘗て、霧の都としてその名が悪い意味で有名だったロンドン。

今では最高水準の世界都市として、芸術、商業、教育、娯楽、ファッション、金融、ヘルスケア、メディア、専門サービス、調査開発、観光、交通といった広範囲にわたる分野において強い影響力があり、「世界一革新的な都市」と呼ばれることもある（ネット調べ）

――しかし、そんな革新的とも呼ばれた都市の影でも、暗躍を目論む“闇”とは存在する。

犯罪やマフィア？いや、確かにそれらも驚異ではあるのだが、それはまだ警察の手による収まる範囲で大した事ではない。

”我々”が一番に驚異としているのは、このロンドンに潜む更に危険な闇……一介の錬金術師の手により、アルカ・ノイズの製造技術がブラックマーケットで横流しされている事である――。



「――ハアツ、ハアツ、ハアツ……!!くそう！何故だ！どうしてこの場所が嗅ぎ付けられたんだあ?!」

ロンドンの地下鉄、それも今や電車を通る事もなく使われる事もなくなった廃駅の線路の上を、必死の形相で逃げるように駆ける妖しげな風貌の男の姿があった。

如何にも妖しい黒いローブを纏い、頭に被ったフードで顔を隠すその男の正体は錬金術師。

最近、アルカ・ノイズの製造技術を内戦国の武力組織などに横流しをし、大金を稼いでいる犯罪者だ。

そんな錬金術師を追う二つの影が、背後から猛スピードで迫りくる姿があつた。

一人は青い長髪を和風テイストな髪飾りでサイドテールに纏めているのが特徴的で、全身には青と白が特徴的なアンダースーツの上にコレまた同様に青の装甲を身に纏い、その手には刃が光り輝く刀が握られている。

そしてもう一人は、ピンクの髪色のロングヘアーが特徴的で、全身には白銀をメインとしつつ、赤と青が散りばめられたカラーリングのアンダースーツと装甲を纏っているが、何より目を引くのはその左腕の銀色の籠手だろう。

彼女達の名は、“風鳴翼”と“マリア・カデンツァヴァナ・イヴ”。

世界的に有名なアーティストにして、今現在は全国ツアーで世界を回っている多忙の

身の筈なのだが、彼女達はそれ以外にもとある任務を任されている身でもある。

『ロンドンを拠点に、内戦国や裏組織にアルカ・ノイズの製造技術を流している錬金術師を捕らえ、これ以上の技術流通を何としても阻止すること』

表向きには有名アーティストとして活動しつつ、その裏では翼のマネージャーにして S・O・N・G・調査部に所属する敏腕エージェント、”緒川慎次”の調査によって錬金術師のアジトを見事に突き止め、今現在その錬金術師のアジトを強襲して奴を捕縛しようとして、錆鉄臭い廃駅の中で年甲斐もなく鬼ごっこを繰り返している最中にあるという訳だ。

「っ、思っていたより逃げ脚が速いわね……！ギアの脚力でも中々追い付けないなんて相当よ！」

「恐らく、身体能力を強化する術か何かでも用いているのだろう……！マリア！私が奴の退路を断つ！奴が足を止めた際に即座に拘束を！」

「ええ、任せたわ!」

マリアが答えるより先に、既に翼は脚部のブレードを展開してスラスターを噴かし、ホバリングの要領で急加速して壁へと移動しながら錬金術師の目の前にまで一瞬で走り抜けて、逃亡者の前に立ち塞がった。

「なっ……いっく、くそっ!」

目の前の退路を翼に塞がれて錬金術師が思わず足を止めた瞬間、彼の背後から銀色の刃がまるで蛇のように伸びて体中に巻き付き、そのまま拘束していった。

「ぐあああああつ?! な、んだ、これえ?!」

「お生憎様ね。こっちは散々貴方の事を探し回ったの。此処まで苦労させられて、今更のこのこ逃がす訳がないでしょう?」

溜め息混じりにそう返すのは、錬金術師を拘束する蛇腹剣の刃を伸ばすマリアだ。

そして件の錬金術師の確保を見届け、翼は自身のヘッドギアからある人物……地上で待機してもらっている緒川に通信を繋いだ。

「緒川さん、通信は届いていますか？こちら天羽々斬、例の錬金術師の拘束が無事完了しました」

『——はい、聴こえています。お見事でしたよ、お二人共。流石の手際の良さ。いつものがら感心せざるを得ないですね』

「いえ、任務はまだ完全には完了した訳ではありません。この錬金術師が、闇組織や内戦国に密売していたというアルカ・ノイズの製造器具。そちらも押収しなければ、まだこの事件は解決したとは言い難い」

「翼の言う通りね。……それで？貴方の大事な商品は何処に隠してあるのかしら？さつき強襲したアジトに向かえば、其処に全部出揃っているの？」

「くっ……っ……た、頼む……」

「……………?」

アルカ・ノイズを製造してた技術やその為の器具を何処へ隠しているのか。緒川との通信を切つて改めて問い詰める翼とマリアに返つてきたのは、何かに怯えた様子の錬金術師の懇願だった。

「頼むっつ!!どうかっ、どうかこのまま見逃してくれっつ!!お願いだっつ!!」

「……急に何を言い出すかと思えば……この期に及んで情にでも訴え掛けるつもり?随分と呆れたものね」

「貴様が横流しした技術で生み出されたアルカ・ノイズ達によつて、一体どれほどの罪なき人々の命が失われたと思つている?そんな貴様の訴えに、今更私達が心揺れ動かされるときでも思つたのか?それこそ舐められたものだ」





錬金術師の明らかに異常な様子に翼が一步踏み出そうとした瞬間、天を仰いで震える錬金術師の目がギョロっ！と白目を向いた瞬間、その全身から黒い炎が突如噴き出したのである。

いきなりの異常事態に翼もマリヤも驚愕のあまり固まってしまいが、錬金術師の身を焼く黒炎がマリヤの蛇腹剣の刃を伝って彼女の手元にまで迫り、それを見たマリヤも慌てて蛇腹剣を手離す。

地面に落ちたマリヤの蛇腹剣、そして錬金術師は黒炎によって瞬く間もなく焼却され、灰すら残さずに完全に消滅してしまったのであった。

「……………な、何だったの……………今のはっ……………？」

「っ……………身体から突然、炎が噴き出しただと……………？ 一体何故——っ？」

一体全体、自分達の目の前で何が起きたというのか。あまりに急展開過ぎる錬金術師

の突然の怪死に、翼とマリアも理解も状況も飲み込めずただただ困惑するしかない中、ふと視線を逸らした翼の瞳が、薄暗いトンネルの向こうに潜む“ナニか”を偶然にも見付けた。それは……

「」

――廃駅の奥の闇の中に潜み、ジッとこちらを見つめている謎の少女の姿があった。

しかも、その姿は普通ではない。

身長は遠目に見て調や切歌と同じくらい。だがその全身には露出の多い黒のアンダースーツの上に来るで騎士のような黒鉄の鎧を纏い、何より特徴的なのは両腕の盾と一体化したような長剣、そして顔を隠すバイザーのような仮面を身に付けているが、その鎧の特徴にはとても見覚えがあった。

あれは、まさか……

「……シン、フォギア……？」

「――」

翼が思わず眩きを漏らす中、黒鉄の鎧の少女はまるで錬金術師の死を見届けて用事が済んだかのように、踵を返して廃駅の闇の向こうのトンネルの奥へと何も言わず歩き去っていく。

「ッ！待てっ！」

「え……？ちよ、翼！何処へ行くの?!待ちなさい！」

あの黒鉄の鎧の少女はきつと先程の錬金術師の謎の死と何か関係がある。そうであればあのような格好でこんな場所に居合わせる訳が無いと踏んで翼は慌てて謎の少女を追い掛け、マリアの静止の声も振り切りトンネルの奥の闇の中へと躊躇なく駆け込

んでいった。



――更に奥へと進んだ廃駅は、先程自分達がいた場所よりも更に薄暗い空間だった。

謎の少女を追い掛けてその薄暗い闇の中へ駆け込んだ翼は、辺りを見回して少女の姿を懸命に探していく。

(ツ……！何処へ行った?! 奴は恐らく、あの錬金術師とも何かしら関係があったはず……！それにあの姿、仮にもしあれがシンフォギアであるなら……！)

もしそうなら、奴はこのまま放置していい人間ではない。何としてでも身柄を捕らえて事情を聞き出す必要があると、翼はこの辺りに少女の姿がないのを確認して更に奥へ走り出した、その時……

彼女の横合いから突然、何者かの鋭い蹴りが襲い掛かった。

「ツ?! なっ、くっ!」

いきなりの不意打ちに驚きながらも、身体が反射的に反応し直撃の寸前の所で後退した。

すると、蹴りが飛び出してきた物陰からユラリと何者かが現れ、翼の前に立ち塞がった。

「っ? 貴様……何者だっ?」

一瞬例の少女かと思われたが、体格からしてそれは違うとすぐに分かった。

黒とダークブルーのツートンカラーのアンダーズーツ。

首元には赤いマフラーを身に付け、暗闇の中でも淡く光輝いているのが分かる両目の複眼を持つその仮面は、まるでバツタを模しているようだ。

そして何より目を引くのは、その腰に巻かれたベルトのバックル中央の周りに18つの異なるエンブレムが刻まれた、カメラを連想させるデザインのマゼンタのドライバー。

ひと目で分かる異形の姿。

不審の眼差しを向ける翼からの問いに、ダークブルーのバツタの異形は鼻を軽く鳴らし、ドスの利いた声で淡々と答える。

『通りすがりの仮面ライダーだ……』

「何……？……？——ドゴオオオツ!!——うっ?!?!ぐあああああつ?!」

バツタの異形が口にした『仮面ライダー』という聞き覚えのある名に翼が動揺する中、バツタの異形は有無も言わずいきなり翼に素早い拳を打ち込んで襲い掛かってきた。

突然の不意打ちに動揺する間もなく、バツタの異形は次々と翼に拳を繰り出して追いつめていき、其処へ、翼を追いかけてきたマリアがバツタの異形に襲われる彼女を見て驚愕した。

「翼?!それに、あれは……?」

「くっ!はあああああつ!!」

翼が謎の敵に襲われているという状況に理解が追いつかず、呆然と立ち尽くすマリア。

その間にもバツタの異形の拳を喰らい続けていた翼も自身のアームドギアである刀を抜き、素早く刃を振るってバツタの異形へと果敢にも挑み掛かるが、バツタの異形は



最小限の動きだけで軽々と翼の斬撃を躲し、翼がその顔面に目掛けて放った刺突を首を僅かに逸らしただけで避け、その切っ先を中指と人差し指の間で挟んで抑え込んだ。

「なっ……!」

『剣筋が実直過ぎる……実に読みやすい』

まるで師事でもするように眩くと共に、バツタの異形は刀を払い除けながら大きく身体を仰け反らせた翼の胸に目掛けて瞬速の左ストレートを叩き込み、そのまま派手に翼を殴り飛ばしてしまった。

「うぐああああああっ!!っ……くっ……ならば、これでどうだっ!!」

地面に思い切り叩き付けられて転がり、それでも何とか殴られた胸を抑えながら身を起こした翼は脚部のブレードを展開して刀を構え、そのままバーニアによる縦回転で加速し、まるで風車のように高速回転しながらバツタの異形へと突進していく。

—無想三刃—

『成る程、技の趣向を変えてきたか……しかし……』

ポオツ！と、バツタの異形の右手が炎に包まれる。

そして縦回転の斬撃で何度も迫り来る翼の攻撃を軽快な動きで避けながら何かを見極めるように彼女の動きを観察し続け、やがてその軌道と速さを見切り、正面から再度迫る縦回転の斬撃が上段から振り下ろされる前に素早く炎を纏った右拳を突き出し、翼の腹を抉るように殴り付けた。

「があっつ？!!はっつ……?!!!」

「翼ア!!」

腹に深くめり込んだ炎拳のあまりの威力に、翼は両目をかっ開きながら盛大に殴り飛ばされて地面をゴロゴロと勢いよく転がっていつてしまう。

そんな彼女の下にマリアが慌てて駆け寄るが、バッタの異形は構わずマゼンタのバックルのサイドハンドルを悠然と開いていく。

『流石は歴戦の装者。実力に申し分はない……が……』

そう言いながらバッタの異形は左腰のケースからエンブレムが描かれた金色のカードを取り出し、マゼンタのバックルに装填して両手でサイドハンドルを元の位置に戻すようにスライドさせた。

『……俺に挑むには、10年早い』

『FINAL ATTACK RIDE：FIR・FIR・FIR・FIR・FIRST!』

廃駅中に反響して響き渡る電子音声と共に、バッタの異形は徐に右腕を斜め左上へと静かに構える。瞬間、バッタの異形の複眼が輝き、それを合図のように両脚を揃えて跳んだバッタの異形は空中でのきりもみ回転から右脚を突き出し、翼に目掛けて飛び蹴り



バツタの異形の放つ飛び蹴りはマリアが展開する障壁と拮抗すら叶わず、意図も容易く破壊しながらマリアと翼に容赦なく炸裂し、二人はそのまま地面を転がって倒れ付すと共にギアも解け、元の姿に戻ってしまったのだった。

「う……………つ……………な、何なの……………この、強さは……………！」

「マ、リア……………う、ぐ……………！」

『……………』

あまりのダメージに立つ事すらままならない二人を見据えて、地上に片膝を突いて着地したバツタの異形は両手を軽く叩くように払いながら身を起こし、翼とマリアに交互に視線を向ける。

『この件に関して、これ以上深追いするのは止めておけ……………今のお前達では奴等に太刀打ちするのも叶わず、返り討ちにあうのが関の山だ……………』

「ツ……………！なん、だとっ……………？」

「ツ……………あな、た……………なにを、知ってっ……………?!」

何かを知っているかのような意味深な口振りです。そう忠告するバツタの異形に、マリアが肩を抑えて疑問を投げ掛ける。

しかしバツタの異形はそれ以上は何も答えず、首元のマフラーを靡かせながら二人に背中を向けて歩き出す。途中で足を止め、僅かに二人の方に顔を向ける。

『それでもまだ諦める気がないのなら、そうだな……………せめて日本にいる仮面ライダー……………クロスを頼る事だな……………』

「……………っ……………？クロ、ス……………？」

「どうして、貴方がそれを……………ま、まちな、さいっ……………！」

それだけ伝えると、バッタの異形はマリアの静止も聞かずに廃駅の奥の闇の向こうへと歩き出して姿を消してしまい、辛うじて伸ばした腕がその背中に届く筈もなく、二人の意識は其処でパタリと途切れてしまったのだった。

……その後、二人と連絡が取れない事を不審に思った緒川が現場へと急行し、廃駅の奥で倒れている翼とマリアを発見したのはそれから約三十分が経つてからの事だった。

# 暁切歌&月読調編（後編）

第八章／繋XX式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでもme侶スは駄ke走ル②

— s y m p h o n y ・ 4 0 5 号室 —

「——う、ん……………ん……………?」

切歌が重たい瞼を開くと、窓からの月明かりの光が目を刺すように視界に差し込んだ。

若干の眩しさから目を擦りながら徐に頭を上げ、周囲を見ると、どうやら気付かぬ内に寝落ちしていたらしく、リビングのソファアの上で子猫を傍らに横になっていたようだ。



（ああ……いつの間にか寝ちゃってたんデスね……アタシ……）

目覚めたばかりで未だブーツとする頭でそう考えながら目線を落とすと、黒毛の子猫はまだ眠ったまま規則正しい呼吸と共にその小さな身体を上下に動かして伏せている。

そんな可愛らしい姿にクスツと微笑みながら子猫を起こさないようにそつと毛並みを撫でていると、不意に部屋の明かりが点灯した。

「——こんな時間に明かりも付けなくて部屋にいと、気分が余計に落ち込むばかりだぞ」

「！……蓮夜、さん？」

いきなり声を掛けられて驚きと共に振り返ると、其処にはいつの間にか帰ってきていたのか、部屋の灯りを付ける壁のボタンに手を添えたまま困ったように目尻を下げて笑う蓮夜の姿があった。

そんな彼の手には買物でもしてきたのかビニール袋が握られており、切歌に見せるように袋を軽く掲げる。

「軽い夜食を買ってきた。其処で幸せそうに眠ってる猫への餌のついでに、俺達も何か腹に入れておこう」

「……えと……気持ちはとても有り難いデスけど……今は正直、何も食べられそうにな  
——」

蓮夜の気遣いをやんわりと断ろうとする切歌。しかし、それを遮るように彼女の腹から「ぐゆるるる」と空気の読めない愉快な腹の虫が音を上げた。

「あうっ」

「……胃は口より正直だな。ほら、良いから一緒に食べよう。俺も一人で食事をするのは味気なくて、面白くないからな」

「う……わ、分かったデスよ……」

「ありがとうございますデス……」と、テーブルの上に袋を置いてカーペットの敷かれた床に座る蓮夜に歯切れ悪くお礼を言いつつ、切歌はゴソゴソと袋の中を漁って適当な惣菜パンを取り出していく。

その音と部屋の灯り、或いは人の動く気配に反応したのか、ソファアーの上で眠っていた子猫も耳をピクピクさせながら目を覚まし、顔を上げて蓮夜と切歌の方に視線を向けると、いつの間にか蓮夜が開けて切歌の傍らの床に置いておいたちよつとお値段のする猫用の缶詰を目にし、ピョンつと一目散にソファアーの上から軽快に飛び下りて缶詰に食らいついていく。

「おお……蓮夜さんが用意した餌なのに、ちゃんと食い付いたデスね……」

「きつとお前が用意してくれた餌だとも思ってるんだろう。普段からこの調子なら、俺一人での餌やりにも困らなくて大変助かるんだが……」

「シャー！」

「ああ、分かった分かった。食事の邪魔をして悪かったな」

子猫を覗き込むようにちよつと顔を近付けただけで、全身の毛を総立ちさせて威嚇しまくる子猫に対して半ば諦めたように溜め息を交えてそう言いつつ、蓮夜は開封したホットドッグをパクリと一口食す。

そんな蓮夜と子猫の変わらぬやり取りに苦笑いしながら切歌もモソモソと惣菜パンを食べ続けていたが、ふと、その手が止まって暗い顔を俯かせてしまう。

「……やっぱり、食欲が沸かないか？」

「……そう、みたいデスね……ごめんなさいデス、蓮夜さん……せつかく用意してくれたのに、やっぱりアタシ……」

「まあ、だろうな。正直俺もまだまだ味気なさを感じてしまう所がある。……調が作ってくれた惣菜が、これの何倍も美味かったのを舌で覚えてしまったしな」

「……………」

食べ掛けのホットドッグを冷めた目で眺めながら何となしに口にした調の名に、ピクリと露骨に反応を示して顔をしかめる切歌。

そんな彼女の様子を横目で見逃さず、蓮夜は再びホットドッグを食べ進めながら話を続けていく。

「それで、お前はこれからどうするつもりなんだ」

「……………どう、って……………急に何の……………」

「決まってる。……………これからまた、あのノイズ喰らいのイレイザーと戦う事になった際に、調と相対するつもりはあるのかどうか、だ」

「ッ！」

淡々とした声で蓮夜の口から告げられたのは、切歌が今まで考える事すら逃避していた可能性の話。

息を拒む微かな息遣いと共に目を見張って顔を上げる切歌を他所に、蓮夜は目を伏せながら構わず続ける。

「お前も既に気付いてると思うが、調があの時、俺達からあのイレイザーを庇ったのは奴等に操られているのも何でもなく、あくまで己自身の意思からだ。……であるなら、またあのイレイザーと戦う事になった時、もしかしたら調はまた俺達の邪魔をしに現れるかもしれない。例えばギアを奪われても尚、な」

「っ……そんな、な……そんな訳ないデスよっ！だってそんなっ、あの調が、あんなこと自分からっ……！」

蓮夜の言葉を否定したいがあまり思わず立ち上がって反論する切歌だが、其処から続く言葉が思い浮かばず口ごもらせてしまい、蓮夜はそんな切歌の目をまっすぐ見上げて澁みなく話を続ける。

「勿論、俺も調が進んで自分からイレイザー達に手を貸した訳じゃないとは分かってる。……恐らく彼女をそうさせたのはきつと、自己の利益の為なんかじゃなく、彼女なりに護りたい何かがあつたからだ、俺は思う」

「……？調が……護りたいモノ……？」

真剣な眼差しを向ける蓮夜にそう言われ、切歌の脳裏をふとある人物の顔が掠める。

今もカメレオンイレイザーの改竄に蝕まれ、そのせいで調を自身の本当の孫娘と信じ切っている宮司の顔を。

「……もしかして……調は宮司さんの為に、アタシ達からあのイレイザーを庇って……？」

「そうなんだろうと、俺は思ってる」

「で、でもそれなら、尚更可笑しいデスよ！あのイレイザーを倒しさえすれば、宮司さんに掛けられた改竄も解けて元に戻れるんデスよねっ？なのに何で、調がアタシ達の邪魔をする必要があるんデスか?!」

「……………」

それでは全くの逆ではないかと、調の真意がますます分からなくなり困惑を深めるばかりの切歌の問い掛けに、蓮夜も一瞬口を閉ざしながら切歌から視線を逸らすと、静かに瞼を伏せて何処か逡巡する仕草をした後、溜め息を微かに漏らした。

「あのイレイザーを倒せば、宮司さんを元のあの人に戻せる。それ自体は響の時と同様間違いはないと思う。……ただ今回に限っては、それであの人を救えるかどうかはまた別問題になるかもしれない」



「……………？ どういう、意味デスか……………それ……………？」

何やら不穏な物言いに切歌が訝しげに首を傾げると、蓮夜は一拍間を置き、徐に切歌の顔を真剣な眼差しで見上げていく。

「今回のノイズ喰らいは今まで戦ってきたイレイザー達と勝手が違い、理性と引き換えに強大な力をその身に宿してる。そんな奴が改竄の力を行使すれば、その改竄を受けた人間にどれほどの影響が及ばされるのか、俺にも想像が付かない」

「……………それは、つまり……………？」

「……………最悪、奴を倒した所で万事解決とは行かない……………もしかしたら、宮司さんの中に何かしらの深い後遺症を残してしまうかもしれないという事だ」

「……………後遺、症……………」

呆然と思わず口をついて出た切歌の呟きに、蓮夜は目線を僅かに落としながら言葉を

続ける。

「以前、お前達がイレイザーに記憶を弄られて響の事を忘れてしまった事件が解決した際、俺と響を除いた皆は改竄を受けていた間の記憶を誰も覚えてはいなかっただろう？……だがあのイレイザーの改竄がその時の物より強力なら、例えば事件を解決しても宮司さんは今回の件を一から全て覚えてきたままでいてしまう可能性がある。調を自分の本当の孫娘だと、そう信じていた間の記憶を」

「……で、でも、それって何か問題がある事なんですか？調の事を本当の家族だと思い込んでたって、それだけなら別段大したことなんか……」

「それだけならまだ、な……ただ、神社で皆と話してた時に宮司さんが言っていただろう？自分には以前、死別した家族がいたと」

「そ、それは、宮司さんのいつもの神社ジョークで「本当にそうか？」……え……」

引き攣った顔で否定しようとした切歌の台詞を、蓮夜の淡々とした声が遮る。思わず

蓮夜に視線を向ければ、蓮夜は何処か沈痛と真剣さが入り交じった顔で切歌の顔を見つめていた。

「それが本当にただの冗談だったと、確信を持って言い切れるか？あの人には最初から死別した家族なんていない、だからあのイレイザーを倒しても残るかもしれない嘘偽りの家族の記憶に、宮司さんはそれに何も感じ入る物はなく、これまで通り普通の生活を過ごせていけると」

「……それは……」

「……もしもだ。もし仮に、あの人に死別した娘夫婦や孫娘が実際にいたとすれば、改竄が解けて正気に戻った際にあの人は何を思うのか……一度は乗り越えた筈の、家族を失った心の傷をアイツ等に無理矢理こじ開けられた上、奇跡的に事故から生き残って大切に想っていた調が、本当は自分の孫娘じゃなかったと気付かされた時、あの人がまたどれほど傷付く事になるか……調はそれを知ってしまったが為に、やむなく奴等に手を貸すしかなくなってしまったんじゃないか？」

「…………ツ…………！」

調がカメレオンレーザーを庇った本当の理由。

本人に問い質すまでは推測の域を出ないが、もし仮に蓮夜が言う通りならあの時の調の行動にも納得が付く。しかし、だとしたら……

「もし…………もしも蓮夜さんのその予想が仮に本当だったとして…………あのレーザーを倒すのは調にとって、宮司さんにとつても悪い結果にしかないって…………そういう言い方のデスか…………？」

「……………そうなる可能性は高いと思ってる。ただ、だとしても宮司さんに掛けられた改竄をこのまま放置し続ける訳にもいかない。でなければ、改竄を掛けられた宮司さんの存在を基点に歪みがどんどんシミのようにこの世界全体へと広がっていき、レーザー達もその隙を突いて今より多発的に改竄の力を行使してくる危険性がある。……………そうなってしまったては、俺やお前達だけでそれら全てを対処し切れるかどうか怪しくなってくる」

「……………そんな、な……………」

カメレオンイレイザーを撃退して宮司に掛けられた改竄を解かなければ、他のイレイザー達はその歪みを利用し、これまで以上に改竄の力を活発的に利用してくるかもしれない。そんな最悪の事態は絶対に避けなければならない。

しかしそれは、家族を失った経験を持つかもしれない宮司に、もう一度家族を失う苦痛を味わわせる事になるのも同義だ。

そんな残酷な選択を、自分達はこれから選ばねばならないというのか……………。

「勿論、此処までの話は全てあくまで俺の推論だ。もしかしたら、あの人が家族を失ったという過去自体もイレイザーの改竄によって捏造されたものである可能性だってある。ただそれでも、これから奴らとまた戦う以上は、お前にもその可能性を考慮して覚悟を持ってもらう必要があると思つた。……………そうでなければ、調の苦悩も葛藤も、何一つ理解出来ないままお前を戦場に立たせる事になる。そうなつてはお前は調と向き合えず、

より苦しむ事になると思ったからだ」

「……………」

「だから、その可能性を念頭に置いた上で、お前にも今一度考えて欲しい。それでもイレーザーと戦うか、調の心情を尊重して戦わないか……………どちらを選んだとしても、俺はお前を責めたりなんかしない」

床から立ち上がり、切歌と正面から向き合いながら彼女自身にその答えを委ねるように蓮夜は告げる。

そんな蓮夜からの言葉に切歌も葛藤を露わに苦しい表情で俯いてしまうが、不意に顔を上げ、蓮夜の顔を見上げて口を開いた。

「蓮夜さんは……………蓮夜さんはもう、答えは出てるんですか……………」

「ああ。……………俺はあのイレーザーを倒す。仮にそれで調と敵対し、宮司さんを苦しめる

事になったとしても」

「ツ……どうして……なんでそんな簡単に迷いなく言い切れるデスカ……?! 蓮夜さん言つてたデスよね?! あのイレイザーを倒したら、宮司さんは家族を失つた痛みをまた味わつて苦しむ事になるかもつて……! だから調も宮司さんを傷付けないようにつて、あんな泣きながらアタシ達の前に立ち塞がつて、苦しんでつ! そんなの知つちやつたらつ、アタシだつてつ……!!」

イレイザーの野望を阻止する事は勿論大事だ。そんなのは重々承知の上だ。

けれどその代わり、改竄から解き放たれた宮司にもう一度家族を失つた痛みや絶望を与えてしまう事になるかもしれない。

そんな事情を知つてしまった今、そんな簡単にイレイザーを倒すなどと腹を括る事なんか出来る筈がない。

拳を強く握り締め、意図せず蓮夜を責めるような強気な口調で叫びながら顔を伏せて

しまう切歌だが、蓮夜はそんな切歌と向き合ったまま目を閉じた後、再び瞼を開いて淡々と答える。

「確かに、この戦いを終わらせるという事は、宮司さんに辛い痛みを与える結果になるかもしれない。それは調にとつても望む事ではないと思う」

「なら……！」

「それでも俺は戦う。奴を倒す事に躊躇う事はない。迷う訳にはいかない。

——だって、そうしなきゃ……お前も調も、ずっと苦しいままじゃないか……」

「……………え……………う？」

冷淡に聞こえた声音が不意に柔らかくなり、切歌は弾かれたように顔を上げる。



そうして見上げた蓮夜のその顔には、何処か憐れむように、そして哀しげに眉を八字にしながら不器用に笑っていた。

「蓮夜、さん……？」

「……確かに、調が宮司さんを護りたい気持ちも、宮司さんを傷付けたくない気持ちも分かるし、理解もする……けれどそのせいで、調自身が傷付いて、俺達の前であんな顔で謝りながら泣きじゃくって……アイツにあんな顔をさせている今のこの状況が本当に正しいと、お前はそう思えるか……？」

「……………」

蓮夜にそう言われ、切歌は思い出す。

自分達の攻撃からカメレオンレーザーを庇い、涙を流しながら何度も何度も自分達に謝罪を繰り返して続いていた調の悲痛な姿を。

「きつと今だって、アイツは俺やお前達を裏切ってしまった事を酷く後悔している……まだまだ短い付き合いだが、アイツはそういう人を思いやれる人間なんだって、俺なんかにだって分かるんだ……そんな俺以上に、調が今どんなに悩んで苦しんでいるのか、お前達に対してどれほど罪悪感を抱いているのか……一番付き合いの長いお前の方がきつと分かっているし、アイツの気持ちを理解したから、こうして悩んでいるんだろう……？」

「……………」

まるで小さな子供に語り掛けるように優しい声音で問う蓮夜の言葉に、切歌は俯いて何も答えない。

蓮夜はそんな彼女にそれ以上は何も言わず、ただ静かに切歌の手を取り、シユルシヤガナのペンダントをそつと握らせた。

「……これ、調の……？」

「……俺はな、切歌。お前と調と、笑って一緒に過ごさせてる時間がとても好きだったんだ」

「……………へ……………」

いきなりの告白に、切歌は呆気にとられて思わず間の抜けた声が出てしまう。

しかし蓮夜はそんな彼女の目をまっすぐ見据え、穏やかな顔付きと共に言葉を続けていく。

「今じゃ当たり前同然になってはいるが、こんな俺の家に笑って遊びに来てくれて、一緒に作った料理を食べて食卓を囲んだりもして……本当に楽しかったんだ……ただ戦う事しか能のなかった前の俺には想像も出来なかった、暖かな時間をくれたお前達に、心の底から感謝してた……」

穏やかな顔と共に目を伏せると、瞼の裏に騒々しくもこの家に元気よく駆け込んで朗らかな笑顔を向けてくれた切歌や、そんな彼女を窺めながらも何処か楽しそうにし、わ

ざわざ作ってきてくれた料理を持参してくれたり、時々彼女から料理の手ほどきを教わったりなど、そんな何でもない、けれども不思議と充実した時間を共に過ごせたのはとても嬉しかった。

なのに今、調の姿は此処にはなく、切歌は調の願いと自分達の行いが宮司さんを苦しめてしまうかもしれないという葛藤に悩み、今もその答えを出せずにいる。

そんな苦しい顔を見せる切歌を、蓮夜は無言のままそつと抱き寄せ、腕の中に抱き留めた。

「あれ、蓮夜さつ……？」

「……俺がやろうとしてる事は、傍から見れば非情にしか映らないだろうし、人でなしと罵られても仕方ないと思ってる……それでも俺は、お前にそんな顔をさせて、調を苦しめるこんな世界を認めるだなんて……出来ない」

「……調を……苦しめる世界……」

—ごめん……………ごめんね、切ちゃん……………ごめんさい、蓮夜さん……………ごめん、なさ……………う……………つ……………—

その言葉を受け、脳裏に再び蘇った調が涙する姿を思い浮かべると共に、シユルシヤガナのペンダントを握り締める切歌の手に無意識に力がこもる。

そんな彼女の纏う空気の変化を感じ取ったのか、蓮夜は切歌から離れ、その頬に割れ物に触れるように手を添えていく。

「俺はこれから、調とも会って話してくるつもりだ。アイツの真意が何処にあるか、本当は何を望んでいるのか……………それを確かめる為に」

「……………それなら、アタシも……………！」

一緒に付いていく。そう言い切る前に、蓮夜は首を横に振った。

「お前は此処に残れ。そして、これから自分がどうしたいかをもう一度考えるんだ。例え調の望みを断ち、宮司さんに心の傷を与える結果になること……………万が一、調と戦場で相対する事になったとしても、それでも彼女と向き合える覚悟が出来るのか……………それを己自身の心に問い掛ける為にも」

「……………アタシ自身の心に……………問い掛け、て……………」

それだけ伝えると共に、蓮夜は踵を返し、リビングを後にして部屋から出て行ってしまった。

(……………アタシの……………アタシがこの手で、やるべき事は……………)

部屋に一人残された切歌は、蓮夜に掛けられた言葉を噛み締めるように臉を伏せ、自

分自身の心に問い掛けるようにその胸に手を添える。

蓮夜から手渡された、シウルシャガナのペンダントを固く握り締めたまま――。



――暗がりに支配された、廃棄ビルのとある一角。

其処には、先の戦いから蓮夜達の前から姿を消したクレンの姿があり、そんな彼の前には、意識を失ったまま巨大な水玉に覆われるカメレオンレイザーの姿もあった。

（全く、ほんとに手間を掛けさせてくれるよ……。理性を失う程の力を得たノイズ喰らいは確かに強力だけど、その分、物を考えて動くって思考まで失われる……。並のレイザーならこんな面倒なケアなんてせずに済むのに、ほんつと迷惑な話だなあ……。）

内心そう愚痴りながらクレンが軽く差し伸ばした右手の指を細かく振ると、カメレオ  
ンイレイザーを覆う水玉が僅かに流動し、蓮夜から受けた傷口に水が注ぎ込まれてその  
傷を少しづつ癒し始めていく。

(せっかく打った布石が漸く芽を出し始めたんだ……今後の為にも蓮夜君達にはこの逆  
境を乗り越えるだけの力を付けてもらわなきゃ困るつてのに……はあ……マジでめん  
どくせえ……)

かれこれ長い事そんな作業を繰り返し続け、いい加減飽きも来てウンザリするように  
溜め息を吐き出しながら次の傷を治療しようとクレンが再び水を操作すべく手を動か  
そうとした、その時……

「——随分としてやられたようだな……やはり、力を取り戻し始めた”奴”に獣畜生  
のイレイザーを宛てがうのは荷が重過ぎたか？」

「……?!」



気配もなく、背後から突然聞こえた冷淡な声に驚いてクレンが勢いよく振り返る。

其処にはいつの間に来ていたのか、デュレンが建物の壁に背を付けて腕を組みながら水玉に覆われるカメレオンレイザーに無機質な眼差しを向けて佇む姿があった。

「デュレン……なんで君が此処に……？」

「なに、気まぐれからの様子見だよ。サボり魔の貴様がしつかり仕事をこなしているのか、その進捗を確かめにな」

「……酷い言い草だなあ。僕が君から任された仕事を、一度でも放り出した事なんてあつたっけ？」

「ああ、ないな。だからつい最近まで貴様は俺に従順だと信じて疑いもなかったよ。……あの破壊者を、俺に黙ってこの世界に招いていた事を隠していたまでは、な」

「……………」

何時もの無機質な彼らしくもない笑顔を貼り付けて笑い話のように語るデュレンだが、その目は一切笑っていない。

そんな彼から薄ら寒い不気味さを感じてクレンが無言で固唾を飲む中、デュレンは水玉の中に覆われるカメレオンレイザーの前まで悠然と歩み寄っていく。

「まあ、そんな話は今はどうだっていい。それより今は、この出来損ないを次の作戦までに何処まで仕上げられるか、だ」

「……仕上げるも何も、コレにそんな見込みがないって事は君から仕事を引き受ける時にも言った筈だよ？君が提唱した仮説に基づけば、逆境にまで追い詰められたノイズ喰らいが強い意志の力で暴走を乗り越えた先に、新たな進化体が誕生するって話だった」

けれどこのカメレオンレイザーに、その逆境を乗り越えるだけの理性なんて既に欠

片すら存在しない。

こんな失敗作に何を期待しているのか知らないが、どうせ君が望む結果になんかならないよとクレンは暗に伝える。

だが、デュレンはそんなクレンの言葉を受けて意味深に笑い、

「確かに、コイツには俺の提唱する方法で新たな進化体に至る事など先ず不可能だろうな。そんなのは俺も最初から分かり切ってた事だ。

——であるなら、また別のアプローチを試みればいいだけの話だ」

「……………は……………」

何を言っているんだ？と、思わず口をついて出そうになったその台詞をクレンが発する事はなかった。

——何故ならその前に、デュレンはいきなり何の前触れもなく異形化させた黒い右腕を素早く水玉の中に差し込み、そのままカメレオンイレイザーの胸を躊躇なく刺し貫いてしまったからだ。

「!!? な——何をやってるんだ、デュレン?!」

「……何を? 見て分からないか? 使い物にならない出来損ないを、少しでもお前の役立てるように手伝ってやってるんだよ。……新たな実験も兼ねてな」

「っ、新たな実験、だってっ……?」

『!!!!?』  
 つっつ  
 『!!!!』

薄笑いを浮かべるデュレンの黒い右腕から、何か禍々しい赤色と黒色が入り交じった文字状のオーラが注ぎ込まれていく。

その度に、胸を無惨に貫かれるカメレオンレイザーは水玉の中で口から無数の泡を吐き出しながらもがき苦しみ、必死にデュレンの腕から逃れようと暴れるが、それも叶わず、赤色と黒色のオーラが注ぎ込まれる毎にカメレオンレイザーのその肉体は気持ち悪く変質化し始め、元の姿から更に徐々に徐々に醜悪な姿へと変貌しつつあった。

「なん、だ、これ……デュレンっ！君は一体?!—ジャキツ!……?!」

不可解な力をカメレオンレイザーに施すデュレンを思わず問い詰めようとしたクレンだが、そんな彼の首筋に何処からともなく、何の気配も感じさせず一振りの刃が向けられた。

驚きと共にクレンがその刃と、自分に刃を向ける何者かに目線だけ向けると、其処にはいつの間にも現れたのか、長く美しい白い髪が映える、黒い鎧を身に纏った少女がクレンのすぐ真横に立つあった。

外見は14……いや、下手したらそれを下回る年齢かもしれない。

露出の多い黒のアンダースーツの上に全身をメタリックブラックの鎧で固め、目元を鎧と似たデザインのバイザーで覆ってその素顔は見えない。

両腕には盾と一体化した鋭い長剣を纏い、右腕の剣の切っ先をクレンの首筋に向けたまま沈黙を貫く黒鎧の少女に、デュレンは目向きもせず淡々と言葉を投げ掛ける。

「ソイツは殺すなよ。その男は俺の計画の為にもまだまだ利用価値がある。これまで貴様が”処断”してきた連中とは価値が違うのだから、余計な真似はしてくれな」

「……分かっているとも。ただ君に危害を加えるかもと少し気を逸らせてしまっただけ。ボクとしても、君の不興を買うのは避けたいところさ」

軽く鼻で笑いながら冗談でも言うように言い返すと、黒鎧の少女はクレンに向けていた刃を徐に下ろしながら一歩後ろへ控えるが、クレンの方は未だ困惑を露わに黒鎧の少女から目を離せずにいた。

「なん、だ……この子は、一体……？」

「ソイツは俺が拾ったモノだ。此処とはまた別の次元、平行世界のシンフォギアの物語にて打ち捨てられた哀れな”竜の残骸”であり、誰にも扱えられなかった伝説の騎士の聖遺物をその身に纏う、『異端にして最強のシンフォギア装者』。名は——」

「——”ヴィーヴル”……君たちイレイザーの『処刑人』として遣わされている者さ。今さつきロンドンからこっちに來たばつかで驚かせてしまったけど、まあ、今後とも宜しく♪」

「……処刑人……だつてっ……？」

バイザーで素顔を隠した、黒鎧のシンフォギアを纏う白い長髪の少女……”ヴィーヴル”は先程剣を向けた筈の相手に屈託のない笑みを浮かべる中、クレンは前触れもなく突如現れた自分達の『処刑人』を名乗る少女に明らかな動揺を隠せずにいた、その時……





「これはっ……デュレン……！一体何をしたんだ君はっ?!」

「……囁るなよ。使い物にならない出来損ないを、少しでもお前の役立てるよう仕立ててやったんだ。感謝の言葉の一つでも贈ってくれてもバチは当たらんと思うが?」

「そういう話をしてるんじゃない!!今の”力”はなんだ?!あんなの、僕やアスカも”知らない”!!一体何処でそんな力っ、それにこの女の子もっ——!」

ヴィーヴルを指差しながら、何時もの飄々とした態度をかなぐり捨ててデュレンに疑問をぶつけ続けるクレンだが、そんなクレンの疑問にもデュレンは鼻を軽く鳴らし、

「俺を問い詰めるよりも先に、今は優先すべき事があるんじゃないか……?そら、そろそろ動き出すぞ」

「なんだってっ?」



何かを見透かすかのような眼差しを向けるデュレンに一瞬間何か反論し掛けるが、今は彼の言う通り、カメレオンイレイザーの面影のないあの化け物を放置する訳にはいかな

い。  
喉から出掛かった言葉を飲み込み、クレンはデュレンを睨み付けながらその身を水に変質させていき、カメレオンイレイザーだった化け物を追い掛けて空へ跳んでいった。

「……………行つたか……………ヴィーヴル、お前もそろそろ動け。予定通りにな」

「それは別に構わないけれど……………いいのかい？彼は君の仲間なんでしょう？こんな反感を買うような真似して、後が怖いんじゃない？」

「……………仲間？……………フ、フフフフツ」

「？」

首を傾げるヴィーヴルの疑問に、デュレンはまるで心底可笑しそうに俯き、額に手を

当てて不気味に笑った後、再び上げたその顔に薄笑いを貼り付けて空を仰ぐ。

「ああ、そうだとも。奴もアスカも、俺にとつて大事な大事な“仲間”だからなあ……な  
ら、間違つても奴等が死なないように手を貸してやるぐらい、当たり前前の事だろ？」

「……………」

そう言いながら薄笑いの仮面を貼り付けた顔をゆつくりと向けるデュレンだが、その言葉の中に、彼等に対する親愛など一切ない事をヴィーヴルも感じ取った。

彼にはきつと、何か良からぬ企みがある。

そんな確信を抱きながらも、それは自分が追求すべき事でないと何時も通り感情を殺し、ヴィーヴルはギアの背部面から機械的な両翼を展開し、ジェット噴射でまるで口ケットのよう空へと勢いよく飛び去っていったのだった。

第八章／繫 x X 式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでも m e 侶スは駈 k e 走ル③（前）

—調神社—

切歌とマンションで別れた後、蓮夜は一人クロスライダーを駆って調神社に再び戻ってきていた。

神社に着いた頃には夜もすっかり明けてしまい、神社付近の駐車場に停めたマシンからメットを外して降りた後、入り口前の石段を登って何となしに遠くに見える朝日の方へ振り返ると、灰色がかかった青色の朝の光が眩しく染みて目を細める。

（……二人に連れられて最初に此処へ足を運んだ時には、初めて目にする物ばかりで物珍しさに心を踊らせたりの……それも今じゃ遠い昔のように思える……）

つい昨日の出来事の筈だったのに、あれから状況が二転三転と移ろい過ぎて見るもの全てがあの時と違って見える。

そんな感傷を抱く自分に独り自嘲し、蓮夜は目を伏せて溜め息を吐きながら神社の方へと踵を返すと、ある人物の姿を視界に捉えて目を見開いた。

「——うん？おや、これはこれは。黒月さんではないですか」

「……………宮司さん……………」

蓮夜の視界に不意に飛び込んできたのは、この神社の管理人であり、カメレオンイレイザーの改竄に今も苛まれている宮司の姿だった。

神社の境内にて早朝の掃除でもしていたのか、彼の手には箒が握られ、地面に散乱する落ち葉やゴミなどを掃いて一箇所を集めている。

予想外のタイミングでの再会に蓮夜も内心では少し驚きつつも、臆面には出さず、い

つもの無表情のまま宮司の下まで歩み寄り軽く会釈する。

「おはようございませう……こんな朝早くから掃除だなんて、身体はもう大丈夫なのですか？」

「？ああ、例の怪物に襲われたというお話の事ですか？心配せずともこの通り、すっかり元気で活気に溢れていますとも。皆さんの迅速な治療のおかげだとお聞きしましたが、いやはや、まさかこんな短時間で傷跡も残らない治療法があるとは、あなた方の医療技術の高さには驚きを禁じ得ませんでしたよ。はははっ」

（……そうか……宮司さんの傷は S・O・N・G. の方で治したという体になっているのか……）

昨夜に調から別れ際、カメレオンレイザーによって傷を負わされた宮司さんの怪我を治療したのはあのクレンだったと軽く聞かされてはいた。

何故奴がそんな真似をしたのか。その事を彼女に追求しようとしたものの無言を貫

かれてそのまま別れる羽目になってしまい、結局その事について情報を得られることはなかった。

ただ奴の目論見が何にせよ、宮司がこうして元気な姿でいる事は喜ばしく、一先ず安堵する蓮夜の顔をジツと見つめながら宮司は不思議そうに首を傾げる。

「ところで、黒月さんはこんな朝早くに如何様な用事でしょうか、もしや、例の怪物騒動の件で再び護衛を……?」

「……そんな所です……それから、お孫さん……調は今、何処へ? 実は彼女と少し話した事があります……」

「ああ、調でしたら今頃、朝の水行を行っていると思います」

「……水行?」

「ええ。垢離(こり)、とも言いますね。神仏に祈願する時に、冷水を浴びる行為で自身



が犯した大小様々な罪や穢れを洗い落とし、心身を清浄にするのです。まあ、噛み砕いて言えば滝行のマイルド版、みたいなものですかなあ」

(……罪や穢れを……洗い落とす……)

はっはっはっ、と冗談混じりに頭を搔く宮司から水行の話とその行為の意味を聞きながら、僅かに俯いた蓮夜は今の調の心境を察して複雑げに目を伏せた後、無表情に戻した顔を上げて宮司を見る。

「その……調が水行を行っている場所というのは、何処に？」

「ああ。それでしたら、神社の裏手を回った所に入り口があります。其処を通って森を抜け、暫く進んだ先に滝の流れる水辺が見えてくるでしょうから、きっとあの子も其処にいる事でしょう」

「……………そうですか……………ありがとうございます……………」

森と言うと、昨夜カメレオンレーザーを追って戦った場所だろうか。それだったら自分にも覚えがある。

ご丁寧に調がいる場所までの道筋を教えてくれた宮司の厚意に感謝して頭を下げ、蓮夜はそのままその場を後にし調の元へ向かおうと歩き出すが……

「——黒月さん。その前に少し、お伺いしても宜しいですか？」

「……？」

背後から不意に呼び止められ、振り返る。

其処には、箒を手にしたまま佇む宮司が、何処か複雑げに、哀しげに見える表情で蓮夜の事を見つめていた。

「宮司さん……？」

「……………黒月さん……………貴方は——」



——宮司と別れ、蓮夜は彼に教えてもらった道筋を通って調がいるという滝のある水辺までやって来た。

深い森を抜けた先に最初に目に飛び込んできたのは、向こうの岩場から幾本かの水が糸を下す様に降りる滝。次に、滝から流れる水流で出来た川が見え、その川の中には

……

「……………」

——白装束を身に付け、その身を清めるように朝の冷たい水の中に身を浸し、こちらに背中を向けながら顔を俯かせて瞼を閉じる調の姿があった。

その姿は神や仏に祈る神聖な行為に見えるし、見方を少し変えれば、まるで死装束を纏った儚さを感じさせる美しい幽霊のような姿にも思える。

……いや、なんて縁起の悪い想像をしているのか。

仮にも神聖な場所で不謹慎な画を頭に思い浮かべてしまった己自身を咎めると、蓮夜は一度深呼吸をし、覚悟を改めた真剣な顔を上げて調が身を浸す川の前にまでゆっくりと進み、足を止めた。

「朝から精が出るな。そうしてると、本当にあの神社の巫女さんのように見える」

「ツ?!……蓮夜、さん……?」

バチャツ!と、不意に蓮夜に声を掛けられた驚きのあまり川の水を波立てながら振り返り、調は吃驚の表情で蓮夜の顔を見上げる。

そんな彼女の反応に蓮夜は無言のままただ不器用に微笑みを返し、調も蓮夜に一瞬何かを言い掛けて口を開くが、すぐに思い留まるように口を閉ざし、気まずげに顔を逸らして蓮夜に背を向けてしまう。

「何をしに、来たんですか……ギアも返したし、もう私には、何の用もない筈なのに……」

「そんな寂しい言い方をするな。お前はお前自身の行いを責めているのかもしれないが、俺や響やクリス、風鳴司令達も、みんなお前の事を心配してる。……勿論、切歌も」

「……………」

皆の名前、特に切歌の名に明らかに反応し、調は僅かに肩を揺らして動揺している。

そんな調の背中をじっと見つめると、蓮夜はその場に徐に腰を落とし、滝から流れてくる冷たい川の水に右手の指先を浸していく。

「俺が此処へ来たのは、お前ともう一度話をしたかったからだ。今度はしつかり、ちゃん

と面向かってな……」

「話す事だなんて……今更、何も……」

「お前自身の本心を、俺はまだ何も聞かされちゃいない。それを知るまで、俺もこのまま大人しく帰るつもりはないぞ。お前に幾ら拒否されたとしてもな」

「……女の人にしつこく食い下がる男の人は嫌われるって、前にテレビで言ってるのを観ました……」

「怖い事を言う番組だな」

「蓮夜さんがあまりしつこいと、私もそうなっちゃうかもしれないですよ」

「構わないぞ。それくらい覚悟は持たないとお前の本音なんて聞き出せないだろうからな。それに人から嫌われるなんて、今更慣れっこだ」

「……………本当に？」

「……………すまん。ちよつと、いや、だいぶ見栄を張った。ぶつちやけお前に嫌われると  
思うと無茶苦茶に怖い。多分泣くほど傷付く、ウン」

「ぶつちやけ過ぎだし、さつきまでの男らしさと頼もしさが一気に台無しですね…………」

「面目次第もない」

ぺこりと、背中を向けてる本人からは見えていないのに真顔のまま深々と頭を下げる  
蓮夜。

そんな情けなく、けれども相変わらず毒気の抜ける蓮夜の天然さに調も呆れつつもそ  
の顔が思わず緩んでしまい、少しだけ何かを思案した後、川の中で徐に振り返り蓮夜と  
向き直った。

「私の事情……………蓮夜さんは今、何処まで把握してるんですか…………？」

「……お前が宮司さんを護る為に、あのノイズ喰らいを庇ったんだろうと察してる程度だ。それとあの男……クレンに、お前にそうさせただけの入れ知恵を吹き込まれたんだろうと」

「……凄い洞察力……もしかしたら蓮夜さん、記憶を失う前の職業は実は探偵だったりして……」

「それはカツコイイ前歴だな。もしそうなら、ドラマや小説なんかに出てくるようなハードボイルドな探偵だったら尚のこと嬉しい」

「どうだろ……今の蓮夜さんを見てるとそんなカツコイイ姿想像が付かないから、良くても半人前、ハーフボイルドが関の山かも……」

「半熟探偵って意味か？……なんだかそんなワードを何処かで聞いた覚えがある気がするな……もしかしたら昔の俺に、そんな探偵の知り合いでもいたのかもしれん」



もしそうなら是非とも今こそ力添えを頼みたいものだど軽口を叩く蓮夜だが、そんな蓮夜の冗談にも調は上手く笑い返せず複雑げな笑みを浮かべるばかりだ。

そして調は物憂げに眉を顰めながら川の水面に映る自分の顔を見下ろすと、此処までのやり取りから蓮夜が本当に自分から話を聞き出すまで大人しく帰るつもりはないのだと悟ったのか、一度考え込む素振りを見せた後に何処か観念したような様子で、その重たい口を開き始めた。

「あの晩……宮司さんが刺されて、救援に駆け付けた蓮夜さんと切ちゃん逃げたノイズイーターを追った後、あの人が私の前にいきなり現れたんです……傷付いた宮司さんを治療して、私と話がしたいって言って……」

「……やはりその時か……奴は……クレンはなんと行って、お前に話を持ち掛けてきた？」

「……………」

蓮夜が疑問を投げ掛けると、調は俯いたまま一瞬間を置いて口を閉ざす。やがて徐に顔を上げると、昨晚の出来事の記憶を思い返すように語り始めた――。



―― 昨晚、調神社……。

「―― 決まってるじゃないか。……君とこうして話す機会を設ける為だよ、月読調ちゃん」

「……………え……………う？」

―― クロスと切歌が逃げたカメレオンイレイザーを追って神社を飛び出した後、飄々とした足取りでいきなり調の前に現れただけでなく、宮司の傷を目の前で治療して急にそんな話を持ちかけられ、調は思わず呆気に取られた表情を浮かべる。

しかしクレンの表情と声音は普段の飄々としたものではなく背筋が凍えるような冷たいモノに感じ、調が言葉を詰まらせて自分でも気付かぬ内に額から冷ややかな汗を流す中、クレンは構わず悠然とした足取りで調に近付いていく。

「改竄を受けて以降、君と過ごしてた間のお爺さんの様子はどんな感じだった？大事な大事な愛するお孫さんと一緒に過ごせて、さぞ幸せそうにしてたんじゃないかい？」

「つ………！どの口でつ………元はと言えば、貴方達のせい………！」

「おや、君的にはお気に召さなかったかな？でも、そのお爺さんにしてみれば正に夢のようない時だったかと思うよ。何せ、もう二度と取り戻せる事はないと思ってた家族との暖かな時間をもう一度味わう事が出来たんだ。例えば君が本当のお孫さんでないとしてもね。そう考えたら、僕らがやった事もある種の人助け、ボランティアみたいなもんだと思わない？」

「ふざけないで………！貴方達の企みは、絶対に止めてみせる！もうこれ以上、宮司さんを

利用させたりなんかさせない！」

戯けるようにペラペラと口を回すクレンに抑え切れぬ激情をぶつけ、調は戦闘態勢に入ろうと首から下ろしたシュルシャガナのギアのペンダントを挿んで詠唱の歌を口にしようとするが、そんな彼女をクレンは片手で制止する。

「話くらい最後まで聞きなよ。というか、少しは冷静になれば？蓮夜君もいない、記号の力を持つ立花響や雪音クリスもこの場にはいない今の君一人だけじゃ、此処で戦いになつたとしても逆立ちしたつて僕にかないつこなんかない。君が余程の馬鹿でもなければ昼間に僕の分身と戦つた時、それぐらいの実力差はあるつて既に身を持つて実感してる筈でしょ？」

「っ……っ！」

若干呆れを混じえた口調で諭すよう語るクレンの言葉に、調も詠唱を口にしようとするのを思わず止め、悔しげに唇を噛み締めてクレンを睨み付ける。

酷く屈辱的だし、認めるのも癪だが、確かに、此処でクレンに挑んでも自分一人では  
まともに太刀打ち出来ずに返り討ちに遭うのは目に見えてる。

それにもし此処で自分が倒れば、今も背後で意識を失っている宮司を守れる人間が  
誰もいなくなってしまう。それだけは不味い。

不本意だが、此処はクレンの言う通り冷静に、慎重に行動を選んで移さねばならない。

憤りから先走りそうになる己の感情を何とか律する為、深く深呼吸をしてどうにか落  
ち着きを取り戻すも、ペンダントは何時でも変身出来るように握り締めたまま、調は警  
戒心を残しつつクレンに向けて口を開いた。

「……話をする前に、目的を聞かせて……どうして貴方達は、宮司さんにわざわざ狙いを  
付けて、この人の記憶を改竄したの……? それも、私を自分の孫娘だなんて思わせて」

「目的、ねえ……まあ、その辺りの思惑は色々とあるっちゃあるんだけど、一から説明し  
出すと長くなるから要点だけ纏めて話すよ。ぶつちやけ、君とこれから話したい事って

の説明にもなるし」

そう言いながら、クレンは人差し指と中指を二本立てた手を調の前に突き出す。

恐らくそれが、彼が言う要点とやらの数を示しているのだろう。

「先ず第一に、其処のお爺さんを狙ったのは元々改竄を掛ける”候補者”の一人として、僕が予め目を付けていたから。理由としては、彼はA X Z編……あー、いや、パヴァリア光明結社の事件と言えば君には伝わりやすいか？ともかく、そのお爺さんは前の事件と君達と関わりのある人物だった。尚且つ、其処のお爺さんのこの物語での役目は、先の事件（前作）で既に終えている。この世界からしてみれば、今じゃ数あるモブの一人に過ぎない。なんで、君達や今後の展開的にまだまだ出番の控えてる役者さん方を狙うよりかは、改竄を掛けるリスクは他よりも少なく、けれど、君達的には決して無視は出来ない関係者……ようするに、君達を釣り上げるのには打って付けだったからだね」

「……釣り上げる……？ならまさか、貴方の目的は宮司さん自体じゃなくて、最初から私達……？」

「そつ。まあもつと正確に言うなら、君達の中でも特に大本命だった君を、だ」

「……………え……………」

クレンの狙いであり真の本命、それが調自身と聞かされ、その意外な返答に調の顔が訝しげに歪むが、クレンは構わず中指を折り、人差し指は立てたまま話を続けていく。

「それが僕の目的その二……………。改竄を受けて、君の事を本当のお孫さんだと信じ込んだそのお爺さんと君を接触させる事だ。現に先の事件からその人と深い関わりを持つ君は、その人の身に起きた異変を間近で見ても冷静でいられなくなった。自分の事を失った家族だと信じ切っているその人の事を、完全に拒絶する事が出来なくなっている……………。葛藤はあれど、どうしても告げられなかったんじゃない？ 一切の淀みのない愛情を向けられるその人に、『自分は貴方の孫なんかじゃない』なんて伝えるだなんて、そんな残酷な事はさ」

「つ……………それ、はつ……………」

口端を吊り上げて、今まで調が密かに抱え込んでいた苦悩の的を容赦なく突くクレ  
ン。

調はそれに対し咄嗟に反論が出来ずに言葉を詰まらせ苦しい顔を浮かべてしまい、そ  
な彼女の反応にクレンも両手をズボンのポケットに突っ込み、不敵に微笑んだ。

「けど、お爺さんに真実を伝えなかつたのは確かに最良の選択だったと思うよ。だって  
あのノイズ喰らいを倒した所で、”そのお爺さんが改竄を受けてた時の記憶が消える事  
はないんだからね”。もし君にそんな事を言われてたら、全部終わって正気に戻った時  
のシヨックと合わさって、お爺さんの心は下手したら壊れてたかも分かんないし？」

「……?! イレイザーを倒しても、記憶は残るって……それ、どういう……?!」

「言葉通りの意味さ。……そもそも、何で僕が普通のノイズ喰らいじゃなく、あんな理性  
も失った使い物にならない出来損ないのイレイザーなんかを利用したか、分かる？」



驚愕する調の反応も他所に、クレンは淡々と言葉が続けていく。

「君達がノイズイーターと呼ぶレイザーは物語の産物であるノイズを喰えば喰らうほど、その力を際限なく強化されて改竄の力も強くなっていく。けれど、それだけ強大な力を受け止めるだけの器がないレイザーじゃ、大き過ぎる力に理性が先に耐え切れず崩壊し、廃人同然のただの獣にしかならなくなってしまう。結果、僕らにも連中の完全な制御は不可能になり、そうなったが最後、アイツ等は各々好き勝手に後先考えず、無差別に人を襲う事しか脳の無いただの化け物になってしまう。それが街でも不本意に噂になっちゃった、無差別怪奇事件の真相って訳だ」

（……前にエルフナインに見せてもらった、都市伝説の……）

その辺りの詳細は蓮夜からも聞かされていた。

けれど同時に、彼処まで暴走したノイズイーターには改竄の力を扱えるだけの知性は残っていない筈と、彼は疑問を抱いていた筈だ。

「普通なら、彼処まで暴走したノイズ喰らいに物語を改竄するだけの知性なんて欠片もない。それに關しては当初僕達も頭を痛めたもんさ。せつかくそれだけの強大な力があるのにまともに使えず宝の持ち腐れだなんて、彼等をイレイザーにしてあげた僕らの苦勞にも見合わないし、割に合わな過ぎるってね」

やれやれと、頭を横に振って苦勞話のように語るクレンだが、呆れ顔を浮かべるその口端が不意に吊り上がる。

「でも幸いにも、彼等には知性はなくても、感情が残ってる事が分かった。殆ど動物的なモノに近いけれど、それだったら逆に話は早い。獣同然なら、それこそ猛獸を躡けるように圧倒的な暴力と力で叩き伏せ、恐怖させ、支配すればいいだけの話だからね……。そうすれば幾ら理性がなくなるとも、本能的な恐怖からこっちの指示に従わざるを得なくなり、僕が命じれば改竄の力を何とか行使させる事が出来るようになったってワケ。それが僕の与えられた役目の一つでもあったんだけど、基本的に野良のソイツ等は無軌道に動くから居場所は掴み辛いし、仮に見付けても蓮夜君が先を越して始末しちゃうからボスからお小言貰う羽目になるしで、ほんつと大変なんだよねえー」

「っ……そんな話、どうだっていい……そんな事よりさっきの、記憶が消えないってどう  
いう意味なの……?!」

「おおっと。ごめんごめん。話が乗っちゃって、普段の溜まりに溜まった愚痴までつい  
こぼしちやったよ」

長々と脱線して悪いねー、などと、形だけにしか見えないわざとらしい反省のポーズ  
を取りつつ、クレンは本題を戻して調の背後に倒れる宮司を指差す。

「つまりさ。知性も理性も失う程の強大過ぎる力を手にしたあの手のイレイザーは並の  
ノイズ喰らいとは違う。その改竄能力は強力で、一度その力に掛かった者には、”後遺  
症”が残る。前に君達が立花響の存在を忘れてしまっていた間の記憶は、改竄を掛けた  
イレイザーの消滅と共に痕跡もなく綺麗に消えてしまったけれど、今回の改竄は前回の  
ソレとは比べ物にならないくらい強い。例えアレを倒した所で、前回みたく都合よく記  
憶が消えたりなんかしないってこと。しかも時間が経てば経つほど、お爺さんに掛けら  
れた改竄の記憶は強く強く根付いていき、最終的には完全に馴染んで元の記憶とすり変  
わっていく。……そうになったら最後、アレを倒した所で蓮夜君の力があつたとしても、

お爺さんに掛けられた改竄はもう元には戻らないかもしれないね」

「?!」

例えば、の話をしよう。

とある綺麗なページの本の上から、強い接着力の有るのりをベタベタに塗りたくられた別の紙を貼り付けられたとする。

それを剥がそうとした時、下に元々あった本のページは果たして元の”綺麗な状態”でいられるだろうか？

……否、そんな訳がない。

のりの接着力が強ければ強い程、貼り付けられた紙を剥がされる際の元のページのダメージは大きくなるし、かと言ってそのまま放っておけば、時間の経過と共に紙は元のページと完全にペーストされてしまう。

仮に方が一、綺麗に紙だけを剥がせたとしてのりで汚された痕跡は完全に消えては  
くならず、元のページは無事とは呼べないだろう。

噛みに噛み砕いた何とも頭の悪い例えだが、つまりそれが今の宮司の状態。

今更あのカメレオンイレイザーを消した所で、宮司が傷付くのはどうあつても避けら  
れず、かといってこのまま何もせずに放置し続ければ改竄が馴染み、もう二度と元の彼  
には戻れないという訳だ。

「……最初から……それが判つてて、貴方は……！」

「勿論。こう見えて僕も負けず嫌いなところはそれなりにあつてね。例え負け戦に駆り出  
されたとしても、タダじゃ転びたくはない。どっちに転んだとしても何かしらの得は得  
たい。それが僕のスタンスってヤツ。理解してくれた？」

「ふざけないでっ！今すぐあのイレイザーに命令してっ、宮司さんに掛けられた改竄を

解いてっ!! さもないとっ——」

——最早殺しだつて辞さない。

実際に言葉には出さずとも、そう訴えんばかりの鋭い殺気を込めた眼差しで睨み付けながら胸元のペンダントを握り潰し兼ねないほど強く手に力を込める調からの気迫に、クレンはしかし、いつもの軽薄な笑みを欠片も崩そうとしない。

「随分と必死だねえ……?でも、分かつてる?そのお爺さんは今のままでいた方がずつとずつと幸せかもしれない。今此処で元の現実に引き戻す方が、よっぽど残酷な仕打ちになるかもしれないのにさ」

「……っ……なに、を……言ってるのっ……」

「オイオイ。此処まで来といて気付かないとかあるー?……それとも、とつくに気付いてはいるけど、敢えて気付かないフリとかしてんの……?」

「……………」

此処までの飄々とした口調から打って変わり、突然冷淡な声音に変わったクレンの問いから逃げるように調の足が無意識に下がるが、クレンは構わずその一步を埋めるように歩み寄る。

「そのお爺さんの口から聞かされなかつた？彼は昔、」自分の娘夫婦と孫娘を事故で一度に失った”。彼はそれを冗談だと言つて君達に笑つて聞かせていたようだけれど、それは紛れもない事実で、嘘なんかじゃない。過去に娘夫婦がいたのも本当だし、心の底から愛する孫娘も実際にいた。……無論、嘗ての事故で一度に彼女達を失つて死ぬほど苦しみ、絶望してたつていうのもね」

—もう十年以上も前になりますか……貴方たち家族が旅行中に事故に遭い、娘夫婦を亡くした時、どうして、何故と……私は嘆き、酷く苦しみました……神職の身でありながら、この世に神はいないのかと恨みもしましたが……そんな中、貴方だけが奇跡的に生き残つた—

「……………っ……………」

淡々としたクレンの言葉と共に、宮司の声が頭の中でリフレインする。

その声に苛まれるように悲痛げに顔を歪めて後退りする調に構わず、クレンは更に容赦なく残酷な事実を突き付ける。

「僕はその過去を徹底的に調べ上げて、それが実際にあつた出来事だったと裏を取り、その心の傷に付け込む事にした。強力な改竄の力で、お爺さんには君を事故から奇跡的に生き残った”たった一人の家族”として認識させ、同時に彼の昔の記憶も呼び起こし、蘇らせた。大切な家族を失い、絶望に苦しんでた日々の記憶をね」

「っ…どう、してっ……………どうしてそんな酷いことっ……………!!」



「無論、君のことをより大事に思ってもらうが為さ。辛い記憶がより鮮明であればある程、人は希望という名の救いを目の前に与えられた時にはその喜びも大きくなり、それが失い掛けた物であれば今度こそ失うまいと、より大切にしようとする。……改竄を掛けられたそのお爺さんが意識を取り戻して、君を改めてその目にした時、一体どんな感情を見せた？それはもう、大層泣いて喜んでたんじやないかい？」

— 嗚呼……！調、調！よく、よく無事でっ……！う、うううっ……ううっ……！—

— 身勝手と、情けのない我儘であるとも自覚しています……ですがそれでも、どうか……どうかお願いします、調……私の目の届かぬ所で、危ない目に遭うような事だけは、どうか……お願いしますっ……！—

「っ……くっ……うっ……！」

ダメだ。やめろ。聞くな。

これ以上この男の話を聞けば、”もう誤魔化し切れない”と、心底から警告するようにそう訴え掛けてくるものがある。

そんな確かな確信があるというのに、それでも調の震える瞳は目の前のクレンから外せず、そんな彼女の様子から何かを感じ取ったらしきクレンは不敵に微笑む。

「此処まで話せば、もう流石に察するしかないだろう？嘗ての痛みの記憶を無理矢理掘り返され、君という救いを与えられたこの幸せが終わってしまったえば、お爺さんの中に残されるのは今一度開かれてしまった決して癒されない深い傷痕。大切な家族を失った絶望の苦痛に苛まれる日々がまた始まるだけ。……いや？今回はそれに加えて、君という希望を一度与えられた上でそれすらも奪い去られてしまうんだ。失くしたものの大きさにその心は今度こそ耐え切れず、ある日魔が差して自分から命を……なーんて、そんな”最悪な未来”も、もしかしたら有り得るかもだよね？」

「……………つつつ!!!」

考えていなかった。

——いや、違う……” 考えないようにしてた”

もし仮にも。万が一にも。

そんな事が有り得ると考えてしまえば、” 自分はもう戦えないと確信があったから”

だから必死に見ないフリをした。

だから必死に気付かないようにした。

この人に向けられる愛情も、労りの言葉も、全てが終われば露となり、形も残らずに消えて醒める” 月のユメ” だと信じ切り、頑なに彼から向けられるソレらその全てから目を背け続けた。

………なのに。

それが決して醒めない悪夢（ユメ）であるのなら、私は……。

「……話を一番最初に戻そうか。僕が君と話したいと言ったのは、君がその人を”どうしたいか”、それを直接聞きたいが為だ」

「………え………」

あまりに大き過ぎるショックに、調の声は震え、先程まで彼を強く警戒していた際の覇気は既がない。

そんな調と、彼女の傍に横たわる宮司を交互に見て、クレンは冷たい口調のまま言葉を紡ぐ。

「僕としてはさ、今回の一件に關しては別段其処までやる気がある訳でもないんだよ。だから今回用意したあのノイズ喰らいも、正直君らに倒されようと、物語側に見付かつ

て消されようがどうなったっていい個体を選んだつもりだ。……ただ、ここ最近君達に勝ちを譲ってばかりで面白くないってのもまた事実だね。其処で一つ、君と取り引きがしたいのさ」

「……取り、引き……？」

「そ。……今回の改竄に関しては、スルーしてくんない？つてこと。お爺さんの心を護る為。ひいては、彼の命を護る為にさ」

「……ッー！」

クレンから持ち掛けられた提案に、調は目を見開いて思わず息を拒んでしまう。

それが意味するのはつまり、自分にカメレオンイレイザーを見逃して宮司を護る代わりに、”仲間達を裏切れ”と言ってるのと等しいからだ。

「やる気更々なかったとは言え、僕も此処まで立ち回ったからには無駄足で終わるの

はちよつと思うところはなくてもいい。お爺さんに掛けられた改竄を放置してさえくれれば、この世界に付け入る隙、物語の綻びを作る事が出来る。そうなれば僕らの今後の活動的にも、ちよつとは動きやすくなって大いに助かる訳なんだけど……」

「……そんなこと、言われて……出来るわけ、ないっ……」

「そう？ならこつちもこれで話は終わりだ。さつさと蓮夜君達を追い掛けて加勢するなりして、奴を始末してくるといい。……その結果、このお爺さんがどれだけ苦しむ事になるのか。フツ。その末路を、その目で直接見届ければ？」

「ツ!!」

宮司を標的に巻き込んでおきながら、まるで他人事のようにせせら笑うクレンのあまりの言い草にカツと頭に血が上り、調は思わずクレンの頬に目掛けて手を上げる。

が、クレンはそんな調の張り手を容易く掴み、調を見つめるその瞳には何処か軽蔑が込められているように見えた。

「いい加減、その温い頭で理解したらどうなんだい？ 何もかもが穩便に済まされるハッピーなエンドなんてない。そんなもの、もうとつくに取り返しの付かないとこまで来てるんだ。” 何を守り、何を捨てるのか”。今の君が選べるのはそれだけだ。誰もが傷付かずに済むだなんて、そんな都合のいい退路は既に何処にもないんだよ」

「ツーなに、をつ……元々は全部あなたのつ、あなたのせいであつ！」

「そうだね。でもだつたら何？ 君達が相對してるのは頭の悪い言い方、世界征服だなんて馬鹿げた事をマジでやろうとしてるような文字通りの” 人でなし” だ。その為なら人の命だつて軽く見て奪うし、敵である君達を追い詰める為なら周りの無関係の人間すら容赦なく利用する。そうやって開き直つて、これからも非道を行い続ける奴らと戦い続けるのに、” 何かを犠牲にする” っていう非情な決断を迫られた時に何にも選べない、出来ない君如きが、これからも僕達の企みを阻み続けるだなんて……思い上がりもいいところだ」

「ぐつ……つ……！」

容赦なく吐き捨てるようにそう言って、クレンは掴んだ調の手を振り払いながら彼女の背後に回り込み、その背中を強めに押し出し倒れる宮司と無理矢理向き合うように立たせた。

「仮に此処で君が何もしなくても、いずれ蓮夜君がああのノイズ喰らいを倒せば片はつく。それで今回の一件は終わりだ。そのお爺さんの中に深く残る傷さえ無視すればね」

「う……………ハアツ……………はっ……………！」

「今の彼の力なら、あの程度のノイズ喰らいなんてすぐにも片付けられる。そうなつたら最後、もう何もかも手遅れにしかならない。選ぶんなら、今すぐ此処で選ぶしかないんだよ。彼に掛けられた改竄を解きたいだけなら、あのノイズ喰らいを倒せばいい……………でも、これだけは忘れないでね。もしも彼を倒せば、そのおじいさんは自ら命を断つかもしれないって事だけは」

「……………あ……………あ……………あ、あっ……………！」



「どうする？…このまま何もしないで事の成り行きを見届ける？それとも全部聞かなかつた事にして逃げ出す？僕的には、君に提案を断られた時点でもうどっちだっていい。だから此処から何が起きようと、何の保証も責任も持たないさ。」

「……そのお爺さんの未来にも、命にも、”君”以外はね？」

何処までもどうでもよさそうに、何処までも他人事に。

人を人とすら見ていないような悪魔の囁きに、ただただ呆然と立ち尽くして倒れる宮

司の顔を見下ろすしかなかった調は――

――やがて、気付いた時には既にその身に桃色のギアを纏って深い森の中を全力で駆け抜け、カメレオンイレイザーを仕留めようとする寸前のクロスの一撃を遮るように、その手を自ら下していたのだった。

第八章／繋 x X 式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでも m e 侶又は駈 k e 走ル③（中）

——そして、現在。

「——成る程。奴らの悪辣さはそれなりに理解していたつもりだったが、あのクレンに關しては他の連中よりも頭一つ飛び抜けてたようだ。此処まで来ると、正直感嘆の念すら覚える」

調の口から昨晚でのクレンとのやり取り。そして彼女がカメレオンレイザーを底う事になってしまった今までの経緯を聞かされ、納得する蓮夜。

しかし全ての事情を知って口ではそう言いつつも、その顔と声音には調を口八丁に唆したクレンに対する明らかな嫌悪感が滲み出ており、調も蓮夜に一通りの説明を終えた後、また顔を俯かせて暗い表情のままフルフルと力なく首を横に振った。

「でも……私が蓮夜さんや、皆を裏切ったのは紛れもない事実です……私は、世界を護る事よりも、宮司さんを護る事を選んだ……それがこの世界を危険に曝して、皆を裏切る行為になるって……分かった、はずなのに……」

「……人の命が掛かっていたかもしれないんだ。そんなものを天秤に掛けられた上に執拗に選択を迫られて、それで迷わないような奴は余程のリアリストでもなければ出来ない。それが知人の命であるのなら尚更な。お前があの人を優先したのは間違いだなんて、そんなのは誰にも一概には言い切れない」

「それでも、私はあの人の言葉に耳を傾けるべきじゃなかった……だってそのせいで、宮司さんは今こうしてる間にも改竄に蝕まれて……もう二度と、元のあの人には戻れなくなるかもしれないの……」

「……………」

蓮夜の掛ける言葉も何の慰めにもならず、調は尚も自分自身の愚かさを糾弾しながら

顔を俯かせて悲痛げに歪めてしまう。

そんな調の痛ましい姿を蓮夜もただ複雑げに眉を顰めてジツと見つめるしかない中、調は両手で己の身体を抱き締めるように腕を回していく。

「蓮夜さん……私は自分が100%、正しい選択をしただなんて思っていないです……でも、あの選択をした事を後悔していない自分も心の何処かにいて……私にはもう、そんな自分が自分でも分からないんですっ……」

「調」

「私は、どうすれば良かったの……？何がしたかったの？宮司さんを護る為と言いついて……でも結局、それもあの人犠牲になる行為になるだけで、蓮夜さんや切ちゃんも、皆の事も裏切った……！」

「もういい」

「そんな私に皆という資格も、あの人の為に何かをする資格もない……！私は何処までも半端で、最低なつ……！」

「もうやめろ」

バシヤアアツ！と、蓮夜は川の中に飛び込んで調の元にまで歩み寄り、その両腕を半ば強引に掴み上げる。

それでも、調は顔を俯かせたまま何処までも深い自己嫌悪と罪悪感に苛まれ、苦痛に歪む顔を蓮夜に見せようとしない。

きつとそんな顔をする事も、人に見せる資格すらないのだと、彼女は其処まで思い詰めて己を弾劾し止まないのだ。

そんな調の中の苦悩を察し、蓮夜は調と川の中で向き合つたまま彼女の掴んだ腕からそつと手を離すと、臉を伏せて彼女に掛ける言葉を思索し、見開いた瞳で調をまつすぐに捉え、口を開いていく。

「調……俺は別に、お前に責任を問いたですつもりもなければ、お前の罪を糾弾する為に此処まで足を運んだ訳でもない。ただもう一度、お前と話がしたかった。お前が何をしたいか、これからどうしたいのか……お前自身が一体何を望んでいるのか、それが知りたかった」

「……………それなら、さつき言った言葉が全部です……皆を裏切った私はもう、戦えない……そんな資格なんて……私にはないから……」

今にも消え入りそうな声でそう答え、調はこれで話は終わりだと言わんばかりに蓮夜の横を通り過ぎ、水行を切り上げて調神社に戻ろうと川から出ていく。

しかし蓮夜はこの場から歩き去ろうとするその背中に向けて振り返り、更に言葉を投げ掛けた。

「なら、このまま俺や響達がああのノイズ喰らいを倒してしまっても、お前はそれでも構わないんだな？それで宮司さんが正気に戻った時、あの人がどれだけ苦しむ事になったと

しても、もうどうなったつてもいいと?」

「……………」

何時もの無機質な声音。けれども何処か挑発的な物言いにも聞こえる蓮夜のその言  
い草に調も足を止めて振り返り、キツ!と感情の揺れる瞳で蓮夜を睨み付ける。

しかし蓮夜はそんな調の視線を真顔のまま受け止めて微動だにせず、ただ無言のまま  
見つめ返してくるだけの蓮夜に対して調も僅かにたじろぐも、両手を固く握り締め、そ  
の小さな肩を震わせながら感情を吐き出すように叫ぶ。

「これ以上私に……私に、何をしろって言うんですかっ!」

「……………」

「私はギアを返して、もう装者じゃなくなった……!それでもまだ処罰が足りないなら、  
然るべき罰もちゃんと受けるつもりです!それで、もうっ……もう、いいじゃないです



か……」

最初は怒鳴り気味に荒らげていた口調も次第に弱々しくなっていき、最後にはか細く  
なった声でそう言いながら力なく俯いてしまう調。

そんな今にも消えてしまいそうな彼女の弱々しい姿を見つめながら、蓮夜は川から  
ゆつくりと上がって彼女の前にまで歩み寄っていく。

「本当は……それでいいだなんて、本気で思っていないんじゃないのか？」

「……何を、根拠に……言ってる意味が分かりません……」

「そうやって、自分の本心からまで目を逸らすのは止めろ。……そんな事しても、お前  
が余計に苦しくなるだけだ」

「っ……！」

まるで人の心を見透かすかのような蓮夜の言葉。それが癩に障ったのか調は思わず顔を上げて睨み付けるが、そんな眼差しを向けられても蓮夜は表情一つ変えず、寧ろ、その顔は何処か哀しげに見える。

「此処で何もかも投げ出して、事の成り行きを俺達に全て放り出して、その結果どう転んだとして、お前はそれで本当に納得出来るのか？……此処で何もしなければ、お前はきつとこの先も一生後悔し続ける事になると……俺はそう思う」

「……それは……私にもう一度戦えって、言いたいんですか……あのノイズイーターと……私が犯した罪を、精算する為に……」

「それでもいいし、或いはあのノイズ喰らいを護る為に俺達の邪魔をしに来たとしても、俺はそれでも構わないと思ってる」

「……………え……………？」

——今、彼はなんと言った？

何か思わぬ発言を耳にして調が目を丸くし唾然とした表情で蓮夜を見つめる中、当の蓮夜は構わず語り続ける。

「お前は、お前自身の心の声に従えばいい。仮にそれで俺達と敵対する事になったとしても、それがお前が納得して決めた事なら責めたりなんてしない。……まあ、俺は奴らの目論見を阻止するのに躊躇はしないからその時はお互いぶつかり合う事になるだろうが、こつちも手加減する気はない。それでお前が負けるにしろ、俺が負けるにしろ、お互い恨みっこは無しだ」

「……………どう、して……………だって、そんなつ……………」

「……………ああ、もしや全部が終わった後の事を気にしてるのか？確かに、如何なる理由があるにしろイレイザーを守ったなんて大問題になるしな。風鳴司令も立場上、処罰は避けられないと言っていたし……………仕方がない。その時は俺がお前を焼き付けたとフォロ―しておいてやる。それなら俺とお前で処罰は折半……………になるかは分からんが……………一人で責を負うよりかは、幾分か気が楽になるかもだろう？もしも一緒に独房行きにで

もなつた時、隣同士になれたら会話にも困らず退屈もせずに済むしな」

「違うつ、そうじゃなくて……！どうして其処までして……蓮夜さんは、私を説得する為に此処へ来たんじや……！」

自分がカメレオンレーザーを護る為に再び敵側に立てば、それは蓮夜達に対する明らかでない裏切り行為となる。最早言い逃れなんて出来る筈がない。

なのにそれを止めるどころか寧ろ推奨するだなんて、これでは全くの逆ではないかと困惑を露わに戸惑う調だが、蓮夜は不思議そうに小首を傾げる。

「何か勘違いしてるようだが、俺はただ、お前の本心が何処にあるのかを知りたかつただけだ。それがこうして分かつた今、お前にこれ以上強制して何かをさせようだなんて思っていない。……そんな方法じゃ、お前の心を救う事なんて出来ない、分かっているから」

「私の……心……？」

「そうだ。例えお前のやり方が正しくなかったとしても、お前があの人を守ろうとした気持ち自体は間違いなんかじゃなかった筈だ。だから俺は、お前のその意志も尊重したい。それで俺達とお前が敵対する事になったとしても俺も、きっと皆も受け止めるし、お前はお前が信じるモノのために戦えばいい」

そう言つて、蓮夜は懐から取り出したクロスのカードに目を落としていく。

「無論、俺もお前に間違つた道を歩ませない為に、俺は全力であのイレイザーを倒すつもりだ。……お前が捨てようとする物は全部、俺が全て拾い上げて必ず守る……だから、お前が”本当にやりたい事を選ぶ事”を、何も恐れる必要なんてないんだ」

其処まで自分を狭めて、自責の念に駆られる必要はないのだと、柔らかな口調で諭す蓮夜。

そんな蓮夜の顔を呆気に取られた表情で見上げていた調も、俯き加減に思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「無茶苦茶、です……仮にもヒーローって呼ばれてる仮面ライダーが、怪物に味方していいだなんて、そんなアドバイス……」

「目の前で泣きそうな顔をしている誰かを救うのに、ヒーローなんて肩書きが邪魔になるなら俺には必要ない。……誰に何を言われて、どんな罰を科せられたとしても、それでも俺はお前を助けたい。お前が今まで何度も、俺を助けてくれたようにな」

「……………」

例え調がこの先どんな選択を選んだとしても、自分はそれを否定なんてしない。その上で、彼女が切歌や響達の元へ戻って来られるように全力を尽くして戦うだけだ。

蓮夜は調に迷いのない眼差しを向けてそう言い切りながら、上に羽織っていたジャケットを脱いで水行の後で微かに身体が震えてる調に着せていく。そして調も両肩に羽織った少し大きめな蓮夜のジャケットの襟を掴んでしっかりと着込むように寄せると、少しだけ間を置いた後、顔を上げて蓮夜に恐る恐る問い掛けた。

「蓮夜さんは……蓮夜さんはどうして……そんなにもまつすぐで、迷う事がないんですか……？」

「……？それは、どういう意味だ？」

「だって……あのノイズイーターを倒せば、宮司さんはまた家族を失う痛みを二度も味わう事になって、凄く苦しんで……もしかしたら、今度はその苦痛に耐えられずに自分から命を断つかもしれない……そんな恐ろしい未来が待ち受けているかもしれないのに、蓮夜さんはどうして、そんな……」

そんなにも迷いなく選択が出来るのか。そんな純粋な疑問を投げ掛ける調からの問いに対し、蓮夜は空を仰ぎ見た後、再び調に視線を戻してその答えを澱みなく伝えていく。

「確かに、今の現実には宮司さんにとって幸せな形の一つとも呼べるかもしれない……ただ俺からすれば、それは本当の意味での幸せではないと思ってる」

「…………それは…………どうして…………？」

「答えは単純だ。イレイザー達に与えられたこの現実、一見幸せそうに見えるかもしれない。…………けれどこの現実、イレイザー達が”悪意”で塗り固めた上で作り上げられた、仮初の幸せだからだ」

「…………悪意の上の…………幸せ…………」

繰り返すように呟く調。蓮夜はそんな調から、森林の向こうの調神社の方に視線を向ける。

「お前と切歌と一緒にこの神社に来て、初めて会ったあの人を素晴らしい人だと思った。家族を失った過去をただ昏いモノとせず、それを受け止めた上で、今もこうして笑顔と明るさを絶やさずにいる。…………記憶も何もかも失い、使命すら果たさせずに多くの犠牲者を出してしまつた俺には、あの人の強さが心から凄いと感じたんだ…………」



「……………蓮夜さん……………」

仄かな罪悪感を覗かせ、複雑げに微笑む蓮夜の顔を見て調はハツとなる。

響やクリス、自分達との交流を経て多少はマシになったとは言え、彼の中では未だにイレイザー達の侵略を止められなかった無念。失ってしまった過去に対する後ろ髪引かれる思いが未だ消え去っていないのだ。

そんな彼にとって、大切な人達を失った過去を抱えたままそれでも前を向いて生き続ける宮司の姿は眩しく、同時に尊いモノに映ったのかもしれない。

「だから俺は、そんなあの人のこれまでを嘲笑うように踏み躪ったアイツ等の所業をこのままにはしておけない、させちやいけないんだ……………例えそれが本人にとって、どんなに強く、夢追い求めるほど強く願った幸せなのだったとしても……………あの人の人生（モノガタリ）を自分達の目的の為だけに、横から嗤って書き換えるなんて、許されていい筈がないのだから……………」

「……………」

それが、彼にとつての戦いを曲げられない理由。

宮司がこれまでの人生で苦しんで、絶望して、それでもその足で挫く事なく歩んできたこれまでの道程を消させない。無駄にはさせない為に。

その答えを聞き、理解し、調は微かに息を呑み、しかし、心の内に残る一抹の不安に釣られるように、顔を俯かせながら重々しく口を開く。

「でも……でももし、あのノイズイーターを倒して、全部が元に戻った時……宮司さんの心もたなかつたからっ」

「……確かに、あの人が傷付く事はもうどう足掻いても避けられないかもしれない……だがその時、あの人は本当に独り切り切りになるのか？」

「……………え……………」

その言葉に調が顔を上げて蓮夜を見上げると、視界に映った蓮夜は、まるで道に迷う迷子の子供に向けるような優しい眼差しで調を見つめていた。

「例え家族でなくなつたとしても、あの人と過ごした”月読調”との時間までは消えてなくならない。今のあの人にはお前も、俺や切歌だっている。家族を失つた痛みを完全に癒す事は出来ないかもしれない。それでも……あの人が歩む”これから”を、俺達と一緒に繋いで創る事は出来るかもしれない……それこそ、命を投げ出すだなんてもつたいないと思えるぐらい、一緒にあの人と沢山の思い出を作つていく事も」

「……そんな、こと……私に出来るんでしょうか……？資格があるんでしょうか？私みたいな、罪人につ……」

”当たり前だ”。お前が優しい人間で、実際お前に心を救われた一人の俺が言えるのだから、絶対に間違いない。自信を持って。それはきつと、今を生きる俺達にしか出来ない事なんだから……」

「……………っ……………れん、や……………ざんっ……………」

声にならない嗚咽が、今まで自分に泣く資格はないと堪えてぐちゃぐちゃになっていた想いが、その言葉で堰を切ったように溢れ出し、涙となって瞳からポツポツと流れ出し、地面に吸い込まれるように落ちていく。

両手で顔を抑え、涙を止めようとしても止められず、溢れて溢れて止まってくれない。

蓮夜はそんな調に静かに一歩歩み寄り、その小さな身体を抱き寄せ、背中を優しく摩っていく。

「遅くなって、すまなかつた。今までよく頑張った。よく我慢出来たな。……………もう、一人で背負う必要なんてない……………お前には俺が……………俺達が、傍に付いてる」

「っーう、あ……………あああああつ……………あアアあああああああああつ……………!!!」

蓮夜の背中にしがみつくように両手を回し、その胸に顔を埋めながら、如何にも泣き

慣れていない不器用な泣き声で、全ての感情を吐き出すように幼子のように泣き叫ぶ調。

蓮夜はそんな彼女が泣き止むまで無言で抱き締め続けていき、流れる滝の音に混じつて、調の号哭が昨夜のように森中に木霊してゆく。

——ただ一つ。あの夜のように罪悪感に心を押し潰されていた哀しみの涙とは違い、その涙には自分の心を優しく包み込み、救ってくれた彼に対する心の底からの”感謝の気持ち”で溢れ返っていたのであった……。

第八章／繋XX式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでもme侶スは駈ke走ル③（後）

—市街地—

——一方その頃、調神社から一キロほど離れた場所に位置する繁華街。

昨晚のノイズやダスト達の襲撃から一夜明けた街の様子は、あんな騒動があった後とは思えないほど普段と変わらぬ平穏な日常の風景が流れていた。

それも全てS・O・N・G.の後処理により、昨晚の襲撃事件は失火と付近のガスへの引火による爆発。その混乱に巻き込まれた事で事故が起きたとして多少強引ながらも表向きには公表された事により、昨晚の事件の被害者を除いた人々の大半は昨夜の騒動を日常的にテレビ等で流れるニュースの一つとして特に気にもとめず、今日も今日とて何処か気だるげに会社に出勤するサラリーマンやOL、学生などが行き交う平和な日







——その身に纏わり付く黒煙を鬱陶しいと言わんばかりに豪快に払い除け、姿を現したのは、あらゆる動物の特徴をその身に兼備した醜い姿の化け物だった。

両腕はゴリラの腕。

両脚は太く逞しいゾウの足で、胴体はクマの巨体。

口元はワニの形状となつて大きく突き出ており、無数の牙が僅かに見える開かれた口からは、腹を空かせているのを表して大量の涎が溢れ出ている。

そんな醜悪な姿の化け物……デュレンの謎の力によりその身を大きく変貌させたカメレオンイレイザーだった怪人、キマイライレイザーは唯一変貌前の原型が残るカメレオンの瞳をギョロギョロと動かし、逃げ惑う人々の姿を目で追いながら彼等に近付こうとその巨大な足を一歩進めた、その時……

——……ザパアアアツツ!!——







見境なく放たれる赤黒い雷撃は街のビルやオブジェ、道路を薙ぎ払って崩壊させるだけに留まらず、逃げる人々にも牙を向けていく。

そんな中、ランドセルを背負う女の子を乱暴に押し退けて我先に逃げようとした若い男が背中を赤黒い雷撃で撃ち抜かれ、まるで炎で焼却された本の燃えカスのように黒い無数の灰となつて無惨にも霧散してしまい、ポセイドンイレイザーも迫りくる雷撃を凌ごうと三叉槍を盾にして受け止めたもののその規格外な力を抑え切れず、やがて槍ごと弾かれて吹き飛ばされてしまっていた。



「?!何だ……この気配……?」

「……?蓮夜、さん……?」

場所は戻り、調神社近くの水辺では、蓮夜が泣き止んだ調を連れて一先ず神社に戻ろうと森の中を歩いていた最中、街の方から異様な気配を感知していた。

隣を並んで歩く調も不意に足を止めて険しい表情になる蓮夜の様子の変化を見て不思議そうに小首を傾げる中、ほんの数秒ほど街の方角を鋭い目で睨んでいた蓮夜は突然ハツとなり、慌てて調に羽織らせているジャケットのポケットから端末機を取り出し、本部への通信を繋いでいく。

「本部！聞こえるか!？」

— ザザザアツ……ザザザザザザアツ!! —

「通信が繋がらない……？故障……いや……これはまさか、前の時と同じ……？」

幾ら操作し直しても本部への通信が繋がらず、砂嵐の不快な音しか聞こえて来ない端末機を見て、蓮夜は脳裏に初めて響達と戦場で邂逅した時の異常……謎のジャミングの

件を思い出す中、蓮夜のそのただならぬ様子を見て、調も事態を察して問い掛ける。

「もしかして、あのノイズイーター達がまた……？」

「……そうだと、思う」

「？思う、つて……」

イレイザーの気配を感じ取れる筈の蓮夜にしては、何故だか歯切れが悪い返答。

調が怪訝な顔でそんな蓮夜と向き直ると、蓮夜は端末機を持つ手を下ろして深刻げに眉を顰める。

「この気配は、確かに昨日戦ったノイズ喰らいに似てはいるが……しかし何だ、この感覚？色んな何かが、入り混ざったかのような……っ……」

もつと鮮明に気配を探るべく意識を集中させようとすると、カメレオンイレイザーだ

けの物ではない、まるで”複数の思念”が同時に押し寄せてくるような、言い知れぬ感覚に陥って不快さを覚える。

その気持ち悪さに喉の奥から込み上げて来る物を覚えながらもグツと堪え、蓮夜は端末機を仕舞いながら調を見遣る。

「とにかく、何か街で異変が起きているのは間違いない。俺はこれからそれを確かめに現場へ向かう」

「っ……………！ならわたし、も……………あ……………」

一緒に向かうと口にしかけるが、今の自分はギアを持っていないし、何よりも自分は宮司の為にどうするべきか、未だ踏み切れず答えを決めかねている。

出かかった言葉を飲み込み、視線をさ迷わせて迷うそんな調の様子から彼女の心情を察し、蓮夜は小さく微笑み返す。



「大丈夫だ。街の守りは俺達で何とかする。……その間にお前は、お前がどうしたいかを考えろ」

「……でも、そんな時間は……」

「……そうだな。急を要する事態になれば、その時は問答無用であのノイズ喰らいを倒す。だがそれまでは出来る限り、俺が何とかして時間を引き伸ばす」

「……蓮夜さん……」

「そんな申し訳なさそうな顔をするな。……」待ってるぞ」

「……!」

その言葉は、一体どちらの意味を指すのだろう。

思わず言葉がついて出そうになり口を開き掛ける調だが、蓮夜は表情を引き締めて調

をこの場に残し、森を急いで駆け抜けて自身のマシンの元へと向かつていった。

(……わたし……私の、が……望んでいる、答えは……)

そうして、その場に一人残された調は遠ざかる蓮夜の背中を見送った後、彼のジャケットの襟元を両手で引き寄せながら身を丸め、蓮夜に言われた言葉を脳裏に思い返していく。

「例え家族でなくなつたとしても、あの人と過ごした”月読調”との時間までは消えてなくならない。今のあの人にはお前も、俺や切歌だつている――

――家族を失つた痛みを完全に癒す事は出来ないかもしれない。それでも……あの人が歩む”これから”を、俺達と一緒に繋いで創る事は出来るかもしれない――

「――私……私は……っ！」

今此処に在る自分。その心が何を望み、どんな未来へ繋げたいと願っているのか――

最早何度目になるのかも分からない自問自答の末に、調はゆっくりと顔を上げて森の奥に見える”光”をまつすぐに見据え、最初に先ずは1歩。

其処から1歩1歩確実に足を進めていき、やがて、彼女の足はいつの間にかその光を  
目指して走り出していた。



「——それじゃあ、この周辺一帯に原因不明の通信妨害が起こってるんですか……?」

『ああ、そうだ。恐らく以前、蓮夜君と初めて戦場で出会った際に発生した発信源不明のジャミングと同様のモノ……イレイザー達の手による犯行だろう。こちらも現在進行形でその発信源を調べているが、中々尻尾が掴めん……これも改竄の力によるものなのか……』

「んで、そんな中で通信機が生きてるのが、あたしとこの馬鹿のギアだけって訳か……あたしただけが無事なものも、もしかしたら不器男から貰った『記号』の力の恩恵なのかな……」

同時刻。キマイライレイザーの出現と襲撃はS・O・N・G・本部にもすぐに伝わり、響とクリスの二人を乗せたヘリが現場へと急行していた。

現場に向かうヘリの中で二人は既にギアを纏っている。その理由は弦十郎との会話の通り、今現在キマイライレイザーが暴れ回る街を中心に半径数キロ圏内で謎の通信妨害が発生しており、通常の機器は勿論のこと、二人のギアを除いた特殊機器を用いての

通信連絡が一切出来ない異常事態に陥っているのだ。つまり……

「つまり、その発生源に黒幕……他の上級レーザーがいるかもしれないですね？」

『はい。お二人だけがこうしてボク達と例外的に通信が繋がっているという事は、逆説的に考えればこのジャミングもレーザーの手によるもの。そして前回のジャミングの目的が蓮夜さんが話していた通り、あの人をおびき寄せる為の裏工作だったのだとすれば……』

『この発生源を辿れば、連中を一網打尽、そうでなくても奴らのトップの厚顔を拝んでやる事ぐらいは出来るやもしれん。こちらでその逆探知を行っている間、装者各員は現場のノイズイーターを速やかに——』

と、エルフナインから弦十郎に通信が変わり、彼の口から次の指示が出されようとするも、それが叶う事はなかった。

響とクリスが搭乗するヘリの遙か上空。其処から一人の黒い戦姫が猛スピードで垂直落下して奇襲を仕掛け、両手に装備された盾と一体化する剣を素早く振るい、ヘリのプロペラを一瞬でバラバラにしてしまったからだ。

— ガ シャ ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア ア  
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア  
ンツツツツ!!!—  
!!!—

「?!な、何だ?!」

「襲撃?! つ、まずい!」

「き、機体の制御が?! うわあああつ?!」

プロペラを破壊された事により、ヘリはコントロールを失いグルグルと回転しながら落下を始める。

突然の事態に困惑しながらもこれが敵からの何らかの襲撃だと即座に理解し、響は操縦席のパイロットの首根っこを半ば強引に掴んで引き寄せると、パイロットを脇に抱えながらクリスと共に墜落するヘリから躊躇なく飛び降りた。

無人となったヘリは回転しながらそのまま高層ビルの一角に突っ込んで爆発を起こし、近くのビルの屋上にパイロットを抱えて着地した響とクリスもその様を目にして冷や汗を流す中、通信越しに弦十郎の緊迫した声が届く。

『お前たち、無事か?!』

「は、はい、パイロットさんもちゃんと無事ですっ」

「一体全体何だっつてんだ……!どっからの攻撃だ?!」

まるで魂が抜け出たかのようにグツタリとしているパイロットを地面にゆっくり下ろしながら響が本部に応答する中、クリスは既に二丁拳銃を武装し、警戒心をMAXにヘリを襲撃した敵を探して周囲を見回していく。其処へ……

「へえ。君達がこの世界の装者なんだね」

「——!!」

不意に背後から興味深そうな声音が届き、響とクリスは地面にへたれこむパイロットを背に振り返ってすぐさま迎撃体勢を取るが、その声の主を目視に捉えた瞬間、二人の表情がみるみる内に驚愕の色へ変化していつてしまう。何故なら、

「ふむ……そつちの君が GANG ニールで、そつちがイチイバルか……話には伝え聞いていたけれど、こうして直接対面してみるとそれほど大した性能は見られないね……」

「……黒い……シンフォ、ギア……？」



——背中から展開した機械的な黒い翼からブースターを噴かせて浮遊し、両腕を組んで響とクリスを観察するように見下ろす、バイザーで顔を隠した黒い鎧を纏う幼い見た目の少女。

その鎧の外見、その特徴は明らかに自分達が身に纏うのと同じシンフォギアであり、響とクリスが戦姫の姿を見て衝撃と驚きのあまり固まってしまいう中、通信の向こうで本部の騒然とした声が響く。

『こ、この波形パターンは……？データベースに照合無し！該当する聖遺物が存在しませんっ！』

『馬鹿な……単独飛行能力を持つ……未知のシンフォギア、だとオツッ!』

「……おや。その様子だと、ボクのギアの聖遺物はこの世界には存在しないようだね。まあ、その出典を考えれば無理もない話だけれど」

(ツ！こつちの通信が漏れてやがる?)

弦十郎達の声を聞き取れているような様子で首を傾げる黒い戦姫を見て、こちらの通信会話が向こうにも伝わっているのを察し思わず自身のヘッドギアの耳元を抑えてしまおうクリス。

そんなクリスの隣で、響は未だ困惑が収まらぬままどうにか口を開き、目の前の戦姫に疑問を投げ掛ける。

「あ、貴方は……一体……?」

「ん……ボクかい? そうだね……『処刑人』……『竜の遺物』……どの呼び名でも構わないのだけれど……うん。敢えてコレにしようか」

響からの問い掛けに対して「ふむ」と考える素振りを見せた後、黒い戦姫……ヴィーヴルは掌を上にもるで二人を挑発するかのように右手を差し出し、口端を釣り上げて笑う。

「——『最強最速のシンフォギア装者』……その名に恥じぬ機体性能を、是非、君達にも魅せてあげよう」

「え……な、何をい——？」

「——馬鹿！伏せろオツ!!」

「……へ？」

突然隣に立つクリスが、悲鳴にも似た緊迫した声を荒らげる。響が思わず間拔けな声と共にその声に釣られて振り返った視線の先には、何故か、クリスが顔を引き攣らせてリボルバーの銃口を響に向ける姿があった。

その銃口が向けられる先の狙いは、響……ではなく、今の今まで二人から20メートル先も離れた場所から会話していた筈が、いつの間にか響の背後に瞬く間に瞬間移動したヴィーヴルを捉えており、彼女がその右腕の刃を響の首に目掛けて躊躇なく振り下ろ

したと同時に、クリスのリボルバーが発砲音と共に火を噴いたのであった。



イレイレイザーが黒煙に覆われた暗雲の空を仰ぎながら咆哮する。その様は最早、怪獣映画にでも出てくるような制御不能の化け物にしか見えなかった。

『——ぐっ……っ………まさか此処までなんて……動きを封じるだけでも一苦労じゃないか……!』

そんな化け物から離れた崩壊した建物の壁際には、奴に幾度となく接触を試みるもただ近づく事すら叶わず、キマイライレイザーの暴力的な力の前に何度吹き飛ばされたかも分からず、それでもなお三叉槍を杖代わりに突き立て何とか起き上がろうとするポセイドンレイザーの姿もあった。

しかしこの周辺一帯には既に人々も避難して無人と化した今、ただ見境なく暴れ回るだけの暴走の獣となったキマイライレイザーは視界の端で蠢くポセイドンレイザーを捉えると共に、背中から生えた無数のトゲに再度エネルギーを瞬間充填し、ポセイドンレイザーに向けて放出した。

『ツ！ホントに見境なしなのかよコンチクショウ!!』



『！何……？』

キマイライレイザーの横合いから不意に一台の蒼いマシンが飛び出し、そのままキマイライレイザーの目の前を横切ると共にその顔を蹴り付けたのだ。

思わぬ不意打ちによつてキマイライレイザーは口内に溜め込んでいた黒い光球の発射を阻止されてしまい、ポセイドンレイザーも突然の乱入者に意表を突かれて思わず蒼いマシンを目で追うと、蒼いマシン……クロスレイダーを急ブレーキを掛けて横滑りさせながら停止した蓮夜はヘルメットを脱ぎ取り、ポセイドンレイザー、そしてキマイライレイザーを交互に見て訝しげに眉を顰めた。

「なるほど……あの気色悪い気配の正体はコイツか……」

『つ、蓮夜君か……タイミングが良いのか、悪いのか？……』

『本来ならこんな予定じゃなかったのにな……』とポセイドンレイザーが顔を逸ら





何処か吐き捨てるように投げやりな答えを返すポセイドンレイザー。

その返答の意図が読めず蓮夜が顔色を怪訝に深めて聞き返そうとするが、キマイライレイザーが蓮夜に怒りの矛先を向けて勢いよく起き上がり、背中の無数のトゲから赤黒い雷撃を無差別に拡散させていく。

それを見て咄嗟にその場から飛び退いて回避する蓮夜だが、受け身を取りながらカードを構えた瞬間に視界の端でポセイドンレイザーまでもあの雷撃に襲われている姿を捉え、目を見張った。

「味方まで襲ってる……? どういう事だ、アレをあの姿にさせて街に放ったのはお前じゃないのか……?!」

『ッ!一々こつちに質問吹っかけてる余裕があるのかい?! さっさと変身しないと死ぬぞ!』

「ッ……クソッ……! 変身ッ!」



か身を起こすが、激痛の走る胸を左手で抑えて思わず呻いてしまう。

キマイライレイザーはそんなクロスに追い討ちを掛けて襲い掛かろうとするも、其処へポセイドンレイザーが横合いから飛び掛かり、三叉槍を振り下ろしてキマイライレイザーの顔面に思い切り叩き付けた。

『ギイエエウツ?!』

『?!お前……何の真似だ……?!』

『この際、コイツを止められるなら何だつていいよ!せいぜい君の力を利用させてもらおうつて腹つもりなだけさ!』

そう言いながら、ポセイドンレイザーは三叉槍で続け様に連続突きを放つてキマイライレイザーに仕掛けていく。

一方でクロスは目の前で繰り広げられるレイザー同士の戦いを目の当たりにして





の頭の皮膚が突然不気味に泡立ち、その形状を変化させ始めたのだ。

唐突に様子が変わったキマイライレイザーを見て思わず動きを止める二人だが、その間にも謎の変化は更に進行していき、キマイライレイザーの頭部がまるでサイのように鋭いツノが生えた凶悪な形状に変貌していったのだった。

『?!また姿が変わった?!?!?!?!?!』

『（マージか……ホントに何してくれただよデュレン……!）』

カメレオンレイザーの原型を留めていないレベルに此処まで変化しておきながら、まだ更なる変貌を続けるキマイライレイザーに驚愕を隠せないクロス。

ポセイドンレイザーもその内心ではデュレンへのヘイトを溜める中、キマイライレイザーは新たに生やしたそのツノから大量の青白い光弾を連続で発射していき、二人の周囲に無数の星のように煌めく光芒を発生させた直後、光芒が次々と誘爆して凄まじい威力の爆発がクロスとポセイドンレイザーに襲い掛かったのだった。





『……?!本部からの、通信……?オペレーターか?!』

街が次々に凄まじい速さで破壊されてゆく光景を前に慌ててキマイライレーザーを止めようと起き上がり掛けたクロスだが、突然仮面に取り付けられた通信機にノイズ混じりの通信……S・O・N・G・の銃後、オペレーターの一人である友里の声が届いた。

その声にくロスが応答すると、通信の相手が友里から弦十郎に変わった。

『聴こえているか、蓮夜君?!こちらは今君の反応を何とか捉えられている状態だが、現場の映像が何者かからのジャミング工作により状況を観測する事が出来ない!そちらの今現在の状況を口頭で伝える事は出来るか?!』

『ジャミング……?やはりそちらでも……いや、それよりも響達の到着はまだか?!例のノイズ喰らいが急激な進化を繰り返して、街への被害が甚大化している……!このままだと俺一人での対処が難しくなる!』

『ノイズイーターの急激な進化、だどっ……？いやしかし、響君達は今っ……』

『蓮夜さん、ボクです！聴こえますか?!』

『っ？エルフナイン……？』

今度は通信の相手がエルフナインに変わる。声に焦燥を含ませた彼女のその様子にクロスが疑問を覚えるが、エルフナインは切羽詰まった声音で構わず続けていく。

『響さんとクリスさんは今現在、出自不明のシンフォギアを身に纏った装者による襲撃を受けています！このタイミングからして恐らく、イレイザー側が喉けた『記号』持ちの装者を足止めする為の妨害だと思われれます！』

『出自不明の、シンフォギア装者……？』

『………（あのヴィーヴルって子か……デュレンの差し金だな……）』

困惑した様子でポツリと口から漏らしたクロスの呟きから、ポセイドンイレイザーは昨晚デュレンと共に現れた黒い戦姫、自分達の”処刑人”を名乗っていた謎の装者であるヴィーヴルの顔を思い出す。

そんなポセイドンイレイザーの内心など露知らず、クロスへの通信相手が再び弦十郎に変わる。

『その謎の装者の襲撃により、響君もクリス君も苦戦を強いられ救援には向かえない状況だ……！聞き齧った情報の限り状況は厳しそうだが、何とか君一人でそのノイズイーターを撃破する事は可能か?!』

『……ああ。これ以上はもう、そうするしかない!』

そう答えると共に調との約束が脳裏を過ぎるが、あのキマイライレイザーは現在進行形で尚も進化を続けている。これ以上奴を野放しにするのは危険だ。

ただでさえ厄介な今の状態から更に今より進化でもされれば、もし響達の救援が間に

合つたとしてもその時にはもう手が付けられなくなっているかもしれない。

街への被害も未だ広がりつつある中、そんな最悪な事態になる前に最早悠長にはして  
いられないとキマイライレイザーを速攻で撃破すべく走り出そうとしたクロスだが、そ  
んなクロスを阻むようにポセイドンレイザーが急に三叉槍を横から突き出した。

『?!クレンっ……?!』

『悪いけれど、アレを止めるだけならともかく、倒すのは流石に御免こうむりたいんだよ  
ね』

『っ、正気なのか……?!アレはもうお前達の手で制御出来る範疇を超えている！分かっ  
ていない筈がないだろう?!』

『それでもまだあのおじいさんに掛けた改竄自体は生きてる。それがあつた以上、此処で  
アレを倒させる訳にはいかないんだよ』



第八章／繋××式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでも m e 侶スは駈 k e 走ル④（幕間）

「だあああつ！ハアアアツ！」

クロスとポセイドンレイザーがキマイラレイザーの驚異的な進化スピードに翻弄されるその一方、出自不明の謎のギアを身に纏うヴィーヴルの襲撃を受けた響とクロスも、彼女の戦闘力の前に苦戦を強いられる最中であつた。

クロスが遠距離からの射撃、その援護を受けた響が正面からの近接戦を挑み鋭い拳戟や蹴りを次々に振るっていくが、二人が放つ技や銃弾の全てはヴィーヴルが驚異的な速さで移動した後に残る残像しか捉えられず、一向にダメージを与えられないどころか、明らかに手玉に取られて弄ばれてしまつていた。

—ズガガガガガガガガガガガガガガガガガアツ!!—

「クソツ……！何なんだコイツっ、速すぎる?!」

「っ……攻撃が当たらないどころか、動きも目で追い切れない……!」

クリスの間断のない銃弾も、響の速い拳も確かにヴィーヴルを捉えられている。

しかし、それでもそれらを上回る速度で縦横無尽に動き回るヴィーヴルの姿を捉え切るには叶わず、移動する筋の動きどころか移動の瞬間の予備動作すら見えない。

此処まで一撃らしい一撃も入れられぬままただ弄ばれてばかりで二人が悪戦苦闘する中、息をつく間もなく高速移動を延々と繰り返していたヴィーヴルはそんな二人の戦いぶりを悠々と観察しながら「ふむ……」と頷き、距離を離れた。

「成る程……『記号』の力を烙印された装者が一体どれ程のモノかと思っただけ……案外大した性能はしていないようだね」

「つ、ちょこまかしてるだけのクセして言ってくれるじゃねえかよ……！しかもいつの間にか剣まで収めやがって……！」

「君達を仕留めるのにわざわざ武器を用いる必要はないと判断したまでの事さ。それにボクのスピードに追い付けないなら、これくらいのハンデはあげないとただの弱い者いじめにしなければならないだろ？」

そう思われるのはこちらとしても不本意だからねと、あんなとんでもない速さで動き回った後とは思えない余裕に満ちた様子を崩さず、此処までの戦いの流れから二人に武器は必要ないと踏んで既に刃を収めた自身の盾を撫でるヴィーヴル。

そんな彼女をまつすぐ睨み見据え、響もクリスも額から汗を伝らせながら間合いを測り、次に彼女に仕掛けるタイミングを見計らいつつ疑問を投げ掛けた。

「貴方は一体、何者なんですか……？何が目的でこんな事を……！」

「……？何がって、このタイミングで君達を邪魔しに来た時点で大体の検討はつくだろ



？君達『記号』持ちの装者をイレイザーに近付けさせない。それがボクに与えられた役目だ」

分かりきつてることだろ？と、ヴィーヴルは響からの疑問を愚問だと言わんばかりに小首を傾げながら不思議そうに返すと、クリスはそんな彼女の態度が癪に障りながらも警戒心は緩めず、周囲や足元に目を配らせながら口を開く。

「あたし等が聞きてえのは、何でお前がイレイザーに与するのかつて話だ。それにそのギア、本部が照合してもデータがない聖遺物を用いているらしいが、一体何処でそんなモン手に入れやがった……？さつきは”この世界”じゃ、みたいな言い方してたが……まさか、お前……」

目を細め、戦闘前にヴィーヴルがこぼしていた呟きを言及するクリス。その問い掛けに対し、ヴィーヴルは「ほう……？」と感心を含んだ笑みを浮かべた。

「その口ぶりだと、半分くらいはもう確信を得ているようだね。そうとも。ボクはこの世界の住人じゃない。此処とは違う世界……」君達装者が、フロンティア事変で消滅し

「た後の世界」からやって来たのさ」

「なっ……」

「私達が……消えた後の、世界っ……？」

「何でもない事のようにヴィーヴルの口から告げられたのは、」自身が響達がフロンティア事変で消滅した世界」から、この世界にやって来た来訪者であるという衝撃的な事実。

その内容に響もクリス、通信で三人を観測している本部も驚きのあまり言葉を失う中、ヴィーヴルは自身の顔を覆う黒いバイザーを指先で撫でながら話を更に続けていく。

「それ故に、君達がこのギアやその聖遺物を知らなくとも無理はない。これらは全て、とある機関が君達がいなくなつた後に次なる装者を生み出す過程の中、新たに発見され、造られたモノだからね。……最も、この聖遺物のあまりの力に適合出来る者は現れず、

果てには”適合者がいないのならいつそ作り出してしまえばいい”などと、愚かにも人の道を踏み外した”禁忌”にまで手を伸ばしてしまった訳だけど……”

「……………？」

ふう……と、何処か呆れ気味に溜め息を漏らすヴィーヴルの意味深な言葉に響とクリスは揃って怪訝な反応を返すが、何かに思いを浸らせていたヴィーヴルは顔を上げて気を取り直すように腰に手を当て頭を振る。

「ボクの話なんか今はどうだっさいいさ。それより、こうしてペラペラ話して考える時間を与えてあげたんだ。いい加減、この状況を打開する策は何か思い付いたのかな？」

「っ、ちよ、ちよっと待って！もう少し話し合おうよ！どうして貴方がイレイザーに味方するのか、事情を話してさえくれれば戦わないで済む方法だっ……！」

「理由？そんなのは簡単な話だ。ボクが好き好んでイレイザーに味方しているだけで、そう大したモノでもない。つまり、彼等の邪魔をする君達はボクにとっても敵だという

事だ。分かってもらえたかい？」

「そ、そんな……！」

徐々に徐々に戦闘の構えを取っていくヴィーヴルを制止して話し合いを試みようとするも、取り付く島もなく背中 of 機械的な黒翼を展開するヴィーヴルにキツパリ切り捨てられて響の顔が悲痛げに歪むが、ヴィーヴルは構わず二人に再度狙いを定めて徐に腰を落としていく。

「まあでも、安心はしてもいいと思うよ。幸いにも『記号』を持つ君達にはまだ利用価値があるとの事で、今はまだ生かしておけとも命じれている。事が終わるまで此処で暫く寝ていてくれるだけでいいから、安心してボクに負けるといい！」

—バツ！—

「くっ……！」

勢いよく地を蹴り、正面から再び迫るヴィーヴルの脚は先程までの異常なまでのスピードに比べて、目に見えて段違いに遅い。恐らく二人を仕留めるのにわざわざ本腰を入れる必要もないと高を括ってるのだろう。

説得も通じず、問答無用で襲い掛かってくるヴィーヴルを前に仕方なしに拳を構える響だが、そんな彼女の腕をクリスが横から掴んで一緒に後方へと飛び退いた。

「?!クリスちゃん?!」

「あんなバケモンに一々まともに付き合うな！今はとにかく不器男と合流するのが先だ！」

「逃げる気かい？でも生憎、君達の足程度じゃボクから逃れられやしないよ」

クスツと、この期に及んで自分から逃れられると思っっているクリスの愚かしさを滑稽だと嘲笑い、口端を釣り上げて微笑むヴィーヴル。

クリスは「ちい！」と忌々しげに舌打ちしながらそんな黒い戦姫の顔面に向けてぐさまりボルバーを発砲するが、ヴィーヴルは飛来する弾丸を頭を横に動かし、そのまま無情にも弾丸を軽々とかわしてしまい、

いつの間にか彼女の背後に設置されていた赤いバルーン状の空中機雷に、かわされた弾丸が着弾し、機雷の起爆と共に凄まじい熱風と爆炎が背後からヴィーヴルに襲い掛かったのであった。

「?!なっ……っ?」

(今だ!)

ズダダダダアツ!!と、先の会話の合間に自身がこっそり仕掛けておいた空中機雷が起爆したのを見計らい、クリスはリボルバーを自分達の足元に狙いを定めて素早く床を撃ち抜き、ヴィーヴルを攫う爆発が目前まで迫る直前で響と共に床下……キマイライレ

イザーの出現により、人々が慌てて避難した後の痕跡を物語るように辺り一面に散乱した書類や倒れたデスクなどがあちこちに見受けられるオフィス内へと飛び降りて避難した。

「っ！クリスちゃん、これからどうするの?!」

「奴が不意を突かれてる隙にこっから離れんだよ！今は一刻を争う！このまま何とか奴の目を掻い潜って、不器男と合流を——！」

「——誰が誰の目を掻い潜るって？」

「……?!—ドゴオオオツ!!—ぐあああつ!!」

「?!クリスちゃん——?!—バキイイイツ!!—うぐあうつ!!」

この隙に急いで身を隠し、何とか奴の目を盗んでクロスの下へ向かおうと提案するクリスの言葉を遮るように背後から声が響き、驚きと共に二人が慌てて振り返った瞬間、響とクリスは黒いオーラを纏った強烈な拳と蹴りを喰らってしまう。

二人はそのままデスクを薙ぎ倒しながら派手に吹っ飛ばされて壁に叩き付けられてしまい、床に倒れ伏して痛みで身体を震わせながら顔を上げると、其処には今の衝撃の余波で無数の書類が宙を舞う中、振り上げた足を徐に下ろす全く無傷のヴィーヴルの姿があつたのだった。

「い、こいつ、いつの間に……?!」

「今のは中々面白かったよ。けれど、ボクを振り切るにはまだまだ考えが浅いね。もう少し頭を凝らす事だ!」

—バゴオオオンツ!!—

「っ……!ハアアアッ!!」



そう言いながらヴィーヴルは二人に向けて、足元に無造作に転がるデスクをまるでサツカーボールのように勢いよく蹴り飛ばす。

それを見た響はすぐさま身を起こしながら猛スピードで飛来するデスクを肘打ち、裡門頂肘で粉碎するが、その隙にヴィーヴルが一瞬で懐に肉薄し、鋭い左フックを響の脇腹に容赦なく突き刺してしまふ。

「!!? がっ、は……!!?」

「反応が遅いよ。今のが刃なら一瞬でお陀仏だ」

「くっ、テメエツ!!」

瞬く間に眼前にまで接近したヴィーヴルに向けて慌てて銃を発砲するクリスだが、ヴィーヴルは脇腹を抑えて悶え苦しむ響ごと素早い回転蹴りでその銃弾を蹴り飛ばしながらクリスの目の前まで踏み込み、彼女の腕を左手で掴んで銃口を真上に向けさせつ



外に放り出されて落下中の響とクリスに瞬きする間もなく追い付き、二人の首を掴みながら背中黒翼を展開するヴィーヴル。

瞬間、バーニアを噴かして一気に加速し、地上に目掛けて猛スピードで垂直落下。

そのまま二人を地上に思いっきり叩き付けた衝撃のあまり大爆発が巻き起こり、大地が大きくめくれ上がり地下まで崩落を始めてしまうのであった。



それでも尚も破壊の手を緩めないキマイライレイザーが背中の無数のトゲから赤黒い雷撃を全方向に拡散させて破壊の限りを尽くす中、EXCEED DRIIVEを発動させたクロスは業火に包まれるビルの壁を高速移動で駆け走りながら雷撃の雨を掻い潜って距離を詰め、壁を蹴ってキマイライレイザーへと飛び掛かりながらその顔を全力で殴り付けた。

EXCEED DRIIVEで倍加されたタイプガングニールのパワーをまともに喰らってキマイライレイザーが怯む。その隙に、クロスは橙色の雷光を身に纏う両拳で相手に立て直す暇を与えまいと目にも止まらぬ高速ラツシュを異形の胴体に連続で叩き込んでいき、最後のフィニッシュに全力の右フックをキマイライレイザーの顎に叩き込み派手に吹き飛ばしていった。

『ブルグアアアアアアアアアアアアアアアアアッツ!!?』

（いける………このまま一気にトドメを——!）

—バチイイイイイイイイイイイイイイイイッツ!!—

『……ツ?!なつ……?!?』

キマイライレイザーが体勢を崩したこの隙に決着を付けようと走り出し掛けたクロスだが、横合いから突如金色の雷撃が襲い掛かつて咄嗟に後方へと飛び退き、思わず雷撃が放たれてきた方を見れば、其処にはポセイドンイレイザーが三叉槍の先端をクロスに突き出す姿があつた。

『クレン……!!』

『言つたる?今ソレを倒されるのはこつちとしても困るんだ。ソイツは僕が回収させてもらう!』

『つ、そうはいくか!』

背中を向けて未だ起き上がるのに手こずるキマイライレイザーを捕らえようと飛び



二人が接近する気配を背中越しに感じ取ったのか、キマイライレイザーは倒れたまま頭部の角から青白い光弾を周囲にバラ撒くように立て続けに発射し、更にそれら全てを背中の無数のトゲから放出した雷撃で一度に爆発させ、クロスとポセイドンレイザーを近付けまいとする。

爆発に巻き込まれる寸前でポセイドンレイザーは三叉槍を盾にするも、爆発の衝撃を殺し切れず両足で地面を削りながら大きく後退りし、クロスは持ち前の反応速度から瞬時に後退し爆発から免れる。

しかしその隙にキマイライレイザーも身を起こすと、身体を丸めるように二人に背中を向けながら先程より更に激しい雷撃の嵐を拡散させていく。

その勢いや凄まじく、とてもじゃないがこの雷撃の中を掻い潜って接近するなど出来ず、二人は反撃に転じることも叶わず回避と防御に専念するしか出来ずにいた。

『ぐうっ！ああ！たたくっ！素直に大人しくしてればいいものをつ！ほんつとにめんどく



「さいなあつ!!」

『ツ……!（このままでは街に被害が広がるばかりでジリ貧にしなければならない……!しかもクレンの妨害もある以上、それを掻い潜って奴を仕留めるには——』

EXCEED DRIVE の活動限界時間も既に近い。このまま防戦一方に徹しては、奴を仕留める好機を逃してしまう。

どうすればいい?この状況を打開する方法は……と、キマイライレイザーの雷撃を必死に避け続けながら思考を駆け巡らせていたクロスはふと三叉槍で雷撃を防ぐポセイドンレイザーを視界の端に捉え、ある閃きを得た。

『そうか……ツ!』

—ダツ!—

『チイイツ!……っ?蓮夜君……?ちよつ、何でこっちに突っ込んできてっ?!—ダアア



『うつ……つ……?! 僕を踏み台にして、奴の不意を突いた……?!』

『どうだ……これなら……!』

クロスの必殺技の一つ、絶牙天翔脚をまともに喰らったキマイレイライザーは橙色の火花を全身から撒き散らしながら悶え苦しみ、片膝について着地したクロスもその様子  
と技を打ち込んだ際の手応えから勝利を確信する。

——しかし。

——……………ゴボオツ……………ゴボゴボゴボゴボゴボゴボゴボオオオツツツ  
!!!!!!

『——?! 何っ……………?!』

『なん、だ……？ 奴の身体が……また……？』

クロスの技を受けて苦しんでいたキマイライレイザーの全身が突然、先程の頭部の変化するようにまたも泡立ち始めたのだ。

その光景を前にクロスとポセイドンレイザーが目を見張る中、キマイライレイザーの変化は進行し続け、やがて、全身の皮膚がまるでアルマジロを思わせる強固な甲羅状へと変質していったのだった。

『嘘だろ……また進化した?!』

『クツ……一体何なんだこのレイザー?! 一体何処まで——!』

——……………ザザアツ……………ザザザザザザアツ……………!!!——

『?! なっ、ぐっ……?! な、んだっ……?! 』

此処に来てまたも新たに進化したキマイライレイザーの異常さに戸惑いながらも再び拳を構えようとしたクロスだが、その時、不意にクロスの頭に痛みが走った。

まるで何かの頭の中に流れ込んでくるような、形容しがたい不快な感覚。

そんな突然の不調に襲われてクロスも困惑と共に頭を抑えながら激痛で顔を歪める中、頭の中に流れ込んでくる”何か”が徐々に鮮明になっていく。それは……

——……ケテ……タスケ、テ……クレエエエ……!!——

——イ、ヤダア……シニタ、クナイ……シニタクナイイイイ……!——

——オカアサン……オカアサン……オカア……ザアアアア……!!

『あ…………ツ…………!?（これ、は…………何だっ…………?!声っ…………?あの…………イレイザー、から…………!!?』

そう。クロスの頭の中に流れ込んできていたものの正体は、まるで亡者の呻き声のような、おぞましい”無数の人々の声”だったのだ。

その声の出処が目の前のキマイレイレイザーから流れて来ているのを感じ取り、クロスは更に困惑を深めるも、あまりにも多過ぎる数多の声に脳が負担に耐え切れずまともに立ってられない。

そんな明らかな隙を見逃す筈もなく、全身をアルマジロの甲羅のように強固にしたキマイレイレイザーは獣の咆哮と共にクロスへと突進し、より固く威力を増したゴリラのように強靱な剛腕を振るい容赦なくクロスを殴り飛ばしてしまった。

『ウグアアアアアッ!!』

『っ!?!何やつてるんだ蓮夜君っ!』

『イイイイイイイイイアアアアアアアアアアアッ!!!』

火花を撒き散らしながらキマイライレーザーに派手に殴り飛ばされ、遙か後方の倒壊した建物の壁に勢いよく叩き付けられて地面に倒れてしまうクロス。

そんなクロスにキマイライレーザーは追撃の突進を仕掛けようとするが、ポセイドンイレイザーがすぐさま三叉槍の先端を地面に突き立てて水のエネルギーを大地に注ぎ込み、キマイライレーザーの足元から無数の水の鎖を生やし雁字搦めに拘束していくが、そんな拘束も大して意味を成さないのか、キマイライレーザーが力任せに身動きをするだけで水の鎖の何本かが簡単に引きちぎられてしまう。

『クツソツ……!早く立ってくれないか蓮夜君?!でないかと真っ先に君が殺されるぞ!』

『…………ツ…………お前、に…………言われずともっ…………!』

—ガコンツ!—

「——ひっ…………!」

『…………え…………?』

ポセイドンイレイザーに憎まれ口を返しながら、おぞましい声こそ止んだものの未だ頭痛が走る頭を抑えつつクロスが半壊した建物の壁に手を掛けてどうにか起き上がるうとした拍子に壁の一部が崩れ、それと同時に、壁の向こうから微かな悲鳴のような声が出た。それに釣られて半壊した壁の向こう側を覗き込むと、其処には……

「あ…………う…………ああっ…………」

『(?!子供…………?!何故こんな所に?!)』



半壊した建物内の隅っこで、全身灰で黒ずんだボロボロの姿で縮こまり、目尻に涙を浮かべながらクロスに怯えた眼差しを向けるランドセルを背負った少女の姿があったのだ。

まさか、騒ぎに逃げ遅れずとこの場所に身を隠していたのか。少女の存在に気付いたクロスは驚きと戸惑いを浮かべながらもすぐに我に返り、近くの瓦礫などを押し退かし、少女の下に駆け寄ってその身体を抱き抱えると、外に出て戦場の外を目指し走り出した。

『くっ……っ?!ちよっ、まつ、何処へ行く気なんだ?!』

『逃げ遅れた民間人がまだ残っていた!このまま此処にいては戦いに巻き込まれる!何処か安全な場所へ……!』

『馬鹿なのかい君は?!今は他人の事なんか気にかけてられる状況じゃ——!』





身体を打ち付けた痛みで泣きじやくる少女の声に反応したのか、キマイライレイザーは徐に地面に倒れる少女の方へと振り返り、彼女に狙いを定めて歩き始めた。

それに気付いた蓮夜も地面を掴んで身体を引きずりながら何とか少女の下へ向かうとするも、先程の雷撃のせいかな全身に痺れが走り、身体を上手く動かす事が出来ない。

そうしている間にもキマイライレイザーは徐々に徐々に少女へと迫り、大量の涎を滴らせながらその巨大な口を大きく開き、恐怖と痛みで動けない少女を喰らおうと容赦なく襲い掛かり、

真横から、両肩のアーマーのバーニアで加速しながら猛スピードで飛び出してきた切歌が両脚を突き出し、寸前のところでキマイライレイザーの顔面を横から蹴り付けたのであった。



「う…………へ、へいき…………だいじょうぶ…………」

「つ…………そうか、良かったつ…………。この先に行けば、安全な場所に出られる。一人で逃げられるか…………？」

「つ…………う、うんつ…………」

恐らくまだ化け物に襲われた恐怖が残っているだろうに、気丈にもしつかりと頷き返して少女は蓮夜が指差す方向に向かって走り出し、その後ろ姿を見送りながら蓮夜も一先ずは安堵するが…………

—バキイイイツ!!—

「うぐあああうつ?!」

「!?!切歌っ!」

キマイライレイザーと共に消えた建物の中から、切歌が悲痛な悲鳴と共に宙を舞い勢いよく殴り飛ばされてきた。

それを見た蓮夜は慌てて切歌が吹き飛ばされる先に回り込んで彼女の身体を抱き留めるも、あまりの勢いに受け止めきれず一緒に倒れ込んでしまう。

「ぐううっ！っ……大丈夫、かつ……切歌っ……？」

「っ……へ、へっちらら、デスよ……これくらいっ」

「にへへっ……」と、キマイライレイザーに殴られた痕が残る頬を力任せに拭いながら苦笑いを浮かべてそう返し、切歌は大鎌を杖代わりにしてフラフラと身を起こす。

其処へ、切歌が吹き飛ばされてきた建物の壁を派手に破壊しながらキマイライレイザーが獣の咆哮を上げて姿を現し、蓮夜は鋭い眼差しでキマイライレイザーを睨み据えながら切歌の横に並び立つも、ふとその顔色に影が差し、隣に立つ切歌に目を向ける。

「切歌……お前、戦えるのか……？」

「……………」

何かを察するような、蓮夜の短い言葉。

それだけで彼が何を言わんとしているのかを理解し、切歌は一瞬口を閉ざし俯いた後、徐に口を開く。

「正直……アタシにはまだどの選択が正しいとか、間違いだとか、ちゃんとした答えは出せていないデス……」

「……………」

未だに迷いが心の内に残っているのが分かる、か細い声音。

蓮夜もそれを聞きながら彼女の心情を察して複雑げな顔を浮かべるが、切歌はギュッ





に目掛けて勢いよく突進してくる。

それを見た切歌は瞬時に両肩のアーマーのバーニアに火を噴かしながら先陣切つてキマイライレイザーへと正面から猛スピードで突っ込んでいき、蓮夜もバックルにカードを装填し再度クロスに変身しながら切歌に続き、キマイライレイザーへと挑み掛かつていくのだった。

# 第八章／繫 x X 式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え× 黎明・それでも m e 侶スは駈 k e 走ル④（後）

—調神社—

「——これで、よし……」

市街地でのクロス達とキマイライレイザーの戦闘が激化するその一方、調は調神社の自分の寝室として宛てがわれた部屋に戻り、先程まで身に付けていた白装束や就寝に使っていた布団などを綺麗に畳んで整頓した後、私服に着替えた格好で正座したまま部屋を静かに見渡していた。

（……でやり残した事は、もうない……後は……）

ほんの一晩過ごしたただけなのに、心做しか後ろ髪引かれる感じながらも正座し

ていた畳の上からゆっくりと腰を上げる。

そんな彼女の手には、緑色の薬液が入った銃のような形状をした注射器……切歌が神社に置き忘れた携帯型のLINKERが握られていた。

(切ちゃんが忘れていって助かった……これなら、ギアを返してもらった後でも……)

元々、シンフォギアの聖遺物との適合率が高い響やクリス達とは違い、自分と切歌、そして今ロンドンに遠征中のマリヤも、このLINKERの薬を投与しなければシンフォギアの聖遺物と適合出来ず、ギアを纏う事も出来ない。

自分が常に携帯している分はギアと共にS・O・N・Gに返還してしまっただが、切歌がコレを忘れていってくれたおかげで戦場に向かう事が出来る。

普段は抜けている彼女のそういった部分に今は感謝しつつ、LINKERを懐に仕舞った調は廊下に繋がる出入口に足を向けて戸を開けると、もう一度自分が過ごした部

屋を振り返り、深々と頭を下げてお辞儀する。

そして静かに戸を閉じ、縁側の下の石段の上に予め用意しておいた靴を両足に履いて靴紐をしつかりと締め、腰を上げて神社の鳥居の前まで向かって歩き進んでいた、その時……

「——調」

「……………っ」

背後から不意に、優しい声に呼び止められた。

その声にビクツと調が思わず肩を震わせ、恐る恐る振り返ると、其処にはいつもの穏やかな顔で佇む宮司の姿があった。

「宮司、さん……」

「ふうむ、もしやこれから外出ですか？それでしたらせめて一言ぐらい挨拶を残して欲しいものです。でないところの爺、孫に無下にされてあまりの寂しさに今晚枕を涙で濡らしてしまうやもしれませんぞー？」

よよよつ、と袖で目元を覆いながら、冗談で嘘泣きしてみせる宮司。

しかし、いつもならそんな彼の冗談にも冷静にツッコミを入れる調は口を閉ざして何処か申し訳なさそうに宮司から視線を逸らしてしまい、宮司はそんな調の様子に気付き、嘘泣きを止めて真摯に言葉を投げ掛けた。

「往くのですね？黒月さん達の下へ、あの怪物を倒す為に」

「?!ど、どう、して……?」

「ふふ。伊達に数十年と年を重ねてきた訳ではありませんからな。年の功と呼ぶべきか、その顔を見ればマルつと全てお見通しですとも」

こう見えても察しはいいのだと、宮司は愉快げに笑う。だがその一方で、調は気まづげに彼から目を逸らしてポツポツと口を開き、謝罪する。

「無断で出ていこうとした事は、謝ります……でも……それでも、私は——」

「分かっていきます」

「……………え……………?」

例え此処で引き止められても、それを振り払う覚悟を胸に消え入りそうな声で謝罪しようとした調の言葉を、宮司は優しい声で遮る。

その顔もまともに見れず、顔を逸らしながらたどたどしい口調で言い淀んでいた調は驚き、宮司の顔を直視すれば、彼はまるで何かを悟っているかのように瞼を伏せて穏やかに微笑んでいた。

「宮司さん……………?」

「分かっていきます。分かっていきますよ。とつくに気付いておりました。……私があの怪物に何かをされ、”今の私”になってしまった事も……調が今まで無理をして、私のワガママに付き合つて下さつた事も、全て」

「?!」

どうして……?と、心の内から浮かび上がる疑問が驚きと動揺のあまり直接口には出せず目を見開く調に、宮司は伏せていた瞳を見開きながら空を仰いだ。

「どうやらあの怪物は、中々に意地の悪い方のようにですね……」コレは違う”、”そう思うべきではない”……頭ではそう理解していても、感情までもは私自身にも御する事が出来ない……どんなに頭では強く否定しようとしても、”今の私”の心は貴方を本当の孫娘としてしか思えず、こんなにも愛おしいと想い、戦いに向かおうとする貴女をしがみついても止めたいと今なお思つてしまう……厄介なものですなあ。人の心というもの、中々どうして」



「……………いつ、から……………一体、いつからソレに気付いてつ……………？」

彼がこの異常に気付く素振りなんて、今まで一緒にいて一切見せなかつたはずだ

なのに何故？ 一体いつ、何処から？

困惑のあまり口も上手く回らないほど激しく動揺する調だが、宮司はただ穏やかに微笑むばかりでその疑問には答えず、調に歩み寄つてその両肩の上に両手を乗せながら視線を合わすように腰を僅かに落とす。

「こんな老いぼれの事など気にしなくて良いのです。それよりも、今の貴女にはやるべきこと……………いいえ、貴女が”本当にやりたい事”があるのでしょうか？」

「……………つ……………それは……………でも、私は……………私は今から、貴方を……………つ……………」

自分の肩に置かれた宮司の手の上に己の手を重ね、調は悲痛に歪む顔を隠すように俯く。

自分の心の内は、とうに決まってる。蓮夜と言葉を交わしたあの時に。

けれど……それは今、目の前のこの人を傷付ける行為でもある。

肩に添えられた暖かな手。

優しく微笑んでくれる穏やかな笑顔。

家族として、自分の事を心の底から心配してくれる想い。

……その全てを、自分は今から傷付け、最初からなかった事にしようとしているのだ。

だから、どうか……そんな笑顔を向けないで欲しい。

自分には、そんな顔を向けられる資格なんてない。

貴方に……貴方の優しさに包まれる資格なんて、私には――

「それは違います」

「……っ?!」

心の内を埋め尽くす薄暗い罪悪感を否定するように、宮司の厳しい声が降り注ぐ。

まるで心を読まれたかのようなその声に驚き、釣られて思わず顔を上げれば、其処には悪い事をした子供を叱る親のように眉間に皺を寄せる宮司の顔があつたが、その顔もすぐに何時もの穏やかな表情に戻った。

「それでいいのです、調。貴女が選んだその選択は間違いなどではない。寧ろもつと胸を張り、前を向いて誇るべきものなのですよ?」

「……でも……でも私は、この手でもう一度、貴方から家族の絆をつ……!」

「……そうですね……それは少々……いいえ、正直に申し上げれば、大変悲しくはありません……ですが、それだけではない。それだけではないのですよ、調」

「え……」

怪訝に首を傾げる調。そんな彼女の両肩から手を離し、宮司は慈しみ、しかし何処か申し訳なさを滲ませた眼差しを調に向ける。

「貴女はとても優しい子だ。しかしきつと、そのせいで辛い思いも沢山させたかと思えます……恐らく、私のせいで」

「っ！ちがつ……っ……」

「……さぞ悩み、辛く苦しめてしまった事でしょう……しかしその上で、貴女は“正しい選択”を選ぶ事が出来た……私にはそれが、堪らなく誇らしく思うのです」

そう言って、宮司は己の胸に手を当てていく。

「私達の間繫がれたこの家族の在り方は、嘘偽りの幻で繫げられたモノなのかもしれ  
ません……それでも、こうして貴女に抱いている想いは確かに今此処にある、紛れもな  
い”本物”なのです……かわいい孫娘の成長に、祖父としては喜ばしく思うのですよ」

「つ……宮司……さんつ……」

「ふふつ……最後の最後まで、”おじいちゃん”とは呼んで頂けませんでしたなあ」

名残惜しそうに言いつつも、宮司は笑つて調の頭の上に手を置いて優しく撫でてい  
く。

……その温かさに、優しさに包まれ、瞳の奥から溢れ出る涙を止められずにポツポツ  
と大粒の雫を地面に落としてしまう調を、宮司は何も言わず神社の入り口の方に振り向  
かせる。

「さあ、此処で足踏みなどしてはいられませんぞ？……貴女の帰りを、待つてくれている

方々がいるのでしょうか？」

「……………。」

柔らかい口調と共に、優しく背中を押して促す宮司の声を背に受ける。

涙を流してその場から動けなかった調だが、暫しの涙の後、目元から流れる涙をぐしぐしと拭い、顔を上げたその表情は力強く、赤く腫れた目はまっすぐ神社の鳥居を見据えている。

そして1歩、また1歩と、宮司の下から離れるように足を進め、神社の鳥居に向かって歩き出していき、

「……………ああ……………そういえば一つだけ、言い忘れていた事がありましたな……………」

「……………？」

最後の1歩。あと1歩踏み込めば、神社の鳥居を抜けて外に出てしまう直前、何かを思い出したかのような宮司の声が背後から届く。

頭の上に疑問符を浮かべ、調が振り返ると、其処には宮司がやはり穏やかな顔を浮かべて参道の上に佇み、瞼を伏せながら優しく微笑み、告げる。

「——” いったらっしゃい”。どうか、お気を付けて」

「……………」

ハッと息を呑み、その言葉の”意味”を悟る。

理解した瞬間、反射的に何かを言い掛けて開いた唇が微かに震えて、唇を噛み締めるように強く結ぶ。

——せき止めたハズの感情が、また溢れ出して止まないように。

「……うん……うんっ……」

——  
いつてきますさようなら……宮司さんおじいちゃん……」

目尻に浮かぶソレが溢れ出さないように、万感の思いを込めた一言に、永遠の別離を添えて。

伝えるべき言の葉は、今の二人の間にはそれだけで充分だった。

背中を向けて、迷いなく走り出す調の後ろ姿を宮司は笑顔で見送る。

ふと見上げた空は、何処までも蒼く澄んでいた。

その鮮やかな色を通して、心の内に過ぎつたとある青年の顔と、共に交わした”約束”を宮司は思い返し、悔いなく微笑む。



「あの子の事を……どうかお願いします……黒月さん……」



度素早く突進しながら今度はキマイライレイザーの脇腹に目掛けて横薙ぎに大鎌を振るうも、キマイライレイザーは左腕のみで大鎌を払うように弾き、同時に右腕を振り上げ切歌に向かって巨大な拳を飛ばした。

「っ?! ヤバっ——!!」

『Final Code x……clear!』

武器を弾かれた反動で地から足が離れ、宙に浮いているせいで回避行動に移れず冷や汗を流しながらも咄嗟に防御態勢を取ろうとした切歌。

だがその時、不意に響いた電子音声と共にそんな彼女の左側を一筋の真紅の光線が背後から通り、光線はそのままキマイライレイザーの拳に直撃して暫しの拮抗の末に腕を弾き返した。

『ギイイイイイイツ?!』

『今だ切歌っ！下がれ！』

「っ！」

バアンツ！バアンツ！と、立て続けに背後から響く銃声と共にクロスの指示が飛ぶ。

その声に引つ張られるように後方へと大きく後退した切歌が横を見ると、其処にはいつの間にかタイプイチイバルに姿を変えたクロスが真紅のライフル銃をキマイライレイザーに連射し続ける姿があった。

『あまり一人で突出し過ぎるな……！』

「ご、ごめんなさいです……！でも、おかげで助かったですよ！」

『……そうとも言い切れなさそうだった』

「え？」

ライフル銃から光線を発砲し続けるクロスの声が何処か忌々しげに聞こえる。

そんな彼の視線を追って切歌がキマイライレーザーに再び目を向けると、キマイライレーザーはクロスの光線を防御もせずその身一つで受け止めていた。

矢継ぎ早に撃ち込まれる光線の弾幕とその衝撃により身動き、何度か足を後ろに下げたりはするものの、クロスの光線自体が効いている様子はなく、全身に弾幕を浴びせられても一歩一歩確実に足を進めて二人に迫りつつある。

「ア、アイツ、蓮夜さんの攻撃が全然効いていないデスよ?!」

『ツ……貫通どころかまともに怯みすらしないのかっ……切歌！俺が後方支援で奴に通じる技を幾つか試す！お前は前衛で奴の注意を引いてくれ！ただしまともに打ち合おうとはするな！奴のパワーはまともに受ければ俺ですら危ういぐらいだ！』

「っ、了解デスっ！」

早口のクロスから指示を受けると同時に、切歌は瞬時に背中のバーニアを噴かしてキマイライレイザーに正面切つて素早く突つ込み、クロスは右に駆け出しながらライフル銃を弓矢に切り替え、二人の周りを旋回しながら光の矢をキマイライレイザーに連続で放つ。

光の矢が頭や肩等に全て命中するが、キマイライレイザーは特に気にも留めず向かってきた切歌を迎撃してその剛腕を振り回している。

それに対して切歌はバーニアを用いた俊敏性と機動力で立ち回って何とか上手くキマイライレイザーの強烈な一撃一撃を回避し続け、クロスはそんな二人の攻防を仮面の下で苦々しげな顔で見守りながらも腰部のリニアアーマーからリフレクタービットを全基射出し、ビームガン、ガトリングガンと何度も武器を変えてビットを混えた集中砲火をキマイライレイザーに旋回しながら浴びせていく。

だが、やはりクロスの攻撃はどれも通じず、撃ち込まれた弾の全てがその強固な肉体の前に無足に弾けて霧散するだけだった。

『これでも無理なのかッ……！切歌、下がれ！今度はデカイ一撃を奴に叩き込む！』

『Final Code x……clear!』

「へ?!わ、分かったデスっ！」

必死に動き回る中でいきなりの指示に一瞬戸惑う切歌だが、クロスが振じ込むように自身のベルトのバックルにカードを装填する姿を見てすぐにキマイライレイザーの拳を避けながら、言われた通り距離を離す。

その間に両手のガトリングガンを巨大な砲口のビーム砲に切り替えたクロスは、砲口に真紅の粒子を溜め込んで巨大な光弾を徐々に形成していき、キマイライレイザーもその気配を察知したのかクロスの方に振り返るも、気付いた時には時既に遅く、光弾を完全に形成したクロスは両足のアーマーからアンカーを展開して地面に縫い付けると共にビーム砲の照準を定め……





い、切歌はキマイライレイザーが立っていた場所に目を向ける。

もうもうと立ち込める黒煙のせいで直ぐにはその姿を視認出来なかったが、少しずつ晴れていく煙の向こうにその姿……クロスの渾身の一撃を受けて上半身が綺麗に消し飛び、下半身のみが残り佇むキマイライレイザーだったモノの姿があった。

「や……やった……やったデス……！やりましたデスよ、蓮夜さん！これで宮司さんに掛けられた改竄も……！」

『』

「……………？蓮夜、さん？」

可笑しい。キマイライレイザーを見事倒したというのに、クロスは何故か力無くビーム砲を下ろし、無言だ。

喜ぶどころか、こちらに顔を向けてすらくれない。



アアアツツツツ  
』

!!!!!!!

「!!?」  
「!!え……!!?」

クロスの不穏な言葉に思わず足を止めた切歌の耳に、今度は不快な泡（あぶく）の音と、耳を劈くような絶叫が届く。

驚きと共に振り返れば、其処にはなんと、確実に絶命したかに思われたキマイライレイザーの下半身の断面図から、”上半身がいきなり生えてきたのだ”。

天を仰ぎ、まるでこの世に再び生誕した事を喜ぶかのように獣の雄叫びを上げるキマイライレイザーの思わぬ復活を目の当たりにした切歌も我が目を疑い言葉を失ってしまうち、クロスが動揺を露わに声を震わせる。

『確実に仕留めた筈だ……上半身を……頭部や心臓の急所を丸ごと消し飛ばしたんだぞ……！不死身なのか奴は?!』







——光で弾け飛んだかに思われた視力が。音で消し飛んだかに思われた聴力が、少しずつ力を取り戻し始める。

視力が蘇って最初に目にしたのは、アスファルトの地面の上で燃える炎と立ち込める黒煙、次に遠くに見えるビル群の全てが消し飛び、残ったビルの残骸が燃え盛る光景。

次いで戻った聴力が、轟々と燃える炎の音を様々な方向から拾う。

其処で漸く、目の前の地獄が現実であること。自分がまだ生きていることを、暁切歌は自覚できた。

「…………ツ…………アタ、シ…………は…………？」

視線を落とすと、自分のギアとスーツが黒く汚れ、破れたスーツの隙間から肌に幾つか切り傷があるのが見えるも、大した外傷は今のところ見受けられない。せいぜいちよつと身動きをしただけで、少し身体が痛む程度だ。

「アタシ……無事だった、デスカ……？——ドシヤアアツ——……え……？」

未だに視界が僅かに揺らぎ、頭がぼうつとする中で、自身の無事に一先ず安堵したのも一瞬。

不意に何かが落下する音と共に、切歌の目の前に何か転がってきたのだ。

ボヤけていた視界が、今度こそ完全に元に戻る。そして目の前に転がる“ソレ”を肉眼で捉えた瞬間、切歌は目を剥き、その顔から血の気が引いて青く染まっていく。何故なら……

『——ア……ぐっ……』

「……れ……蓮夜、さん……!!？」



切歌の目の前に転がってきたモノの正体は、全身の装甲や複眼がヒビ割れ、今の切歌の傷の比ではないほどに体中のスーツの隙間から大量に血を流し、仰向けに倒れる通常形態に戻ったクロスだったのだ。

驚愕の中、倒れるクロスの向こう側で何かが動くのが見えた。

其処には、この街を地獄と化した張本人……キマイライレイザーが何かを殴った後なのか振り上げた右腕を徐に下ろす姿があり、傷付くクロスをもう一度見て、切歌はハツとなる。

（ま、まさか……アタシが気を失っている間も、戦ってたデスカ……？アタシを、守る為に?!）

『……………ま、だ……………う……………』

「……っ！蓮夜さんっ!!」

切歌が言葉を失う中、傷付いた身体を無理矢理起こそうとしたクロスが力尽きるように再び倒れたと同時に、変身が解けてポロポロの姿の蓮夜に戻ってしまった。

慌てて駆け寄ろうとした際に体の痛みで顔を歪めるが、そんなものは振り払って蓮夜の傍に寄ると、額から流れる血で片目を伏せる蓮夜も顔を覗き込む切歌に気付き、枯れた声で口を開いた。

「にげ、ろ……切歌……おまえ、だけでもっ……」

「……!」

声を絞り出し、自分にこの場から逃げるよう促す蓮夜の言葉に、切歌は目を見開く。

その間にもキマイライレイザーは蓮夜にトドメを刺そうとしているのか徐々に迫っ

てきており、蓮夜もそれに気付いて何とか身を起こすも、見た目通りに相当なダメージを負っているせいでもともに立てず、血を地面に滴らせながら膝から崩れ落ち四つん這いになってしまおう。

「む、無茶デス！そんな身体で……！これ以上戦ったら蓮夜さんが死んじゃうデスよ!!」  
「は……………あ……………それで、も……………やるん、だ……………お前の為にも……………あの人の為にも……………調の為、にもっ……………!!」

「ッ……………」

鬼気迫る表情で、この程度の傷でもともに動かない不甲斐ない自分の身体を鼓舞するようにそう呟き、蓮夜はキマイライレイザーをまつすぐに睨み据えて外さない。

そんな彼の姿を見て、言葉を聞いて、切歌はあまりの気迫に圧され、同時に、彼が其処までの強い覚悟で自分と調の絆を取り戻す為に戦おうとしているのだと感じ取り、一度目を伏せて俯いた後、顔を上げたその表情に力強さを宿し、蓮夜を守る様に彼の前に

立った。

「……?!きり、かつ……?」

「アタシだつて、守りたいデス。調も、宮司さんも……蓮夜さんの事だつて……!どんなにミソツカスなアタシにだつて、どうしても譲れない、大切モノがあるんデスツ!!」

—ダンツ—

「!まつ、ぐつ……ごぼあつ……!」

取り出した大鎌をブンブンと派手に振り回しながら身構え、キマイライレイザーに正面から突つ込む切歌。

その背中を止めようと慌てて手を伸ばす蓮夜だが、胸の内から込み上げてくる血の塊を吐き出し、再び倒れ伏してしまった。

「だアああああああつ!! はああつ!! やあつ!!」

—ガギギギギギギギギギギギギギギギイイツツ!!!—

一方で、キマイライレイザーに挑み掛かる切歌は大鎌をまるで手足のように巧みに扱  
い、斬撃の嵐を高速で何度も何度もその身体に叩き込んでいく。

だがしかし、キマイライレイザーのその強靱な肉体、そして何よりもの前提としてイ  
レイザーを倒せる『記号』の力をまだ持たない切歌では、ダメージどころか傷一つすら  
負わせられず如何なる攻撃も無慈悲に弾かれてしまう。

（それでも……！コイツを蓮夜さんから遠ざける事ぐらいなら、アタシにも！）

そう、自分ではこの異形の相手にすらならないと分かつてる。

だからせめて、傷付いた蓮夜から遠ざける為にこの不死身の怪物を自分が引き付け、  
まだ到着していない響とクリスが来てくれるまで何とか時間を稼ぐ。今の自分に出来

るのはそれぐらいだ。

(それに、もしコイツが本当に不死身なら響さんの GANG ニールの力……!”神殺し”の力が通じるかもしれないデス!それまでは、アタシが!)

『ギイイイイイイツ……!』

不死の神を殺す力を持つ響の GANG ニールならば、自分達では倒し切れなかったこのイレイザーを何とか出来る可能性がある。

其処に一途の望みを掛けて奮闘し、食い下がる切歌の存在をいい加減に鬱陶しく感じ始めたのか、大した脅威としても見ずに彼女を無視して蓮夜にトドメを刺しに向かおうとしていたキマイライレイザーが唸り声と共に切歌を一瞥し、彼女が振りかざした大鎌を片手で正面から受け止めると同時に、もう片方の手で切歌の胸を殴り付けて派手に吹き飛ばしてしまった。

「うぐああううううう!!ぐつ……あ……!」

「はあっ……っ……切歌……!!」

土埃を巻き上げながら何度も何度も地面を転がり、漸く勢いが止まったと同時にギアの変身も解除されてしまう切歌。

俯せに倒れる彼女を目にし、蓮夜は身体を引きずって血の跡を地面に描きながらも切歌の下へ向かおうとするも、キマイライレイザーは動かない切歌を見つめたまま、その背中に生えた無数のトゲに再び赤黒いエネルギーを充填し始めていた。

「っく、ソツ……!!切歌あ!!立てえ!!立って逃げろ!!」

「う……っ……」

血粒を吐き出しながら大声で切歌に呼び掛ける蓮夜。その声に反応して切歌が僅かに身動きをし、冷や汗の流れる顔を何とか上げてキマイライレイザーが自分を狙っているのに気付く。

身体を動かして立ち、もう一度ギアを纏わねばと震える手の中のペンダントを握り締めるが……

(こえ、が……息も……でき、………！)

声が出ない。それどころか、呼吸もままならない。

恐らく、先程の一撃をまともに喰らったせいだ。これでは、ギアを起動させる為の聖詠すら歌えない。

過呼吸気味に、必死に何度も呼吸を繰り返して肺に空気を送り続けるが、そんな切歌の回復よりも早く、キマイライレイザーの背中に溜まったエネルギーが一気に放出され、切歌に牙を剥いた。

「切歌あああつっ!!!」



「……………」

目前に迫る、死の雷撃。

これは駄目だ。もう間に合わない。

瞬時にそう理解すると共に、蓮夜の悲痛な声を耳に、心の内で彼に謝罪する。

（ごめんなさいデス、蓮夜さん…………ごめん、デス…………しら——）

何も出来なかった、果たせなかった無力な自分を、どうか許して欲しい。

降り注ぐ雷撃を前に静かに目を閉じ、瞼の裏に蘇り、いつもの笑顔を向けて振り返る  
”彼女”に謝り、自分の命を刈り取る雷を受け入れようとした、直前——

「——切ちゃん!!!」

——幻聴か、はたまた死を前に自身の走馬灯が見せた幻影か。

何処からともなく”彼女”の声が聞こえた直後、自分の身体が何かに突き飛ばされる勢いで抱き抱えられ、

”彼女”の声の残響ごと掻き消すかのように、自分の世界は再び爆音と光に支配されたのだった。

第八章／繋 x X 式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでも m e 侶スは駈 k e 走ル⑤（後）

「……………う……………くつ……………う？」

二度目に世界を覆い尽くした白光が、徐々に徐々に薄れて視界が元に戻っていく。

キーンンツ…………と、不快な耳鳴りに混じって耳に届く燃え盛る炎の音を聞きながら  
徐に目を開いた切歌は、気だるげに身体を起こしながらぼんやりと辺りを見渡してい  
く。

「つ…………アタ、シ…………今の、は…………？」

「…………ハアツ…………ハアツ…………ハアツ…………」



堵を浮かべる調だが、キマイライレイザーはそんな二人を見て折角の好機を邪魔された事を憤っているかのように雄叫びを上げ、今度こそ切歌を邪魔をした調ごと仕留めるべく二人に迫ろうとする、が……

『Code x::clear!』

『させる、かあつつ!!』

—バキイイイイツ!!—

『グウウツ!?!』

「!」

「れ、蓮夜さん?!」

鳴り響く電子音声と共に、キマイライレイザーの側面からクロスに変身した蓮夜が一

足でキマイライレーザーへの距離を詰め、身体ごと叩き付けるように蒼光を纏う片腕を振り上げ、その横顔を全力で殴り飛ばした。

思わぬ不意打ちにたじろぐキマイライレーザーだが、それも一瞬。すぐに何事も無かったかのように立て直すと共に尻尾を振り回して迎撃するが、クロスは素早く身を屈めながらソレを回避すると共に自身の四肢へのエネルギー供給を保ったままキマイライレーザーに拳や蹴りを放って何とか反撃するも、敵の異形の強靱な肉体の前ではやはりパワー不足は否めず、まともにダメージを与える事もままならずにいた。

「蓮夜さん……いっつー!」

「し、調?! 待つデスよっ!!」

苦戦を強いられるクロスを見て思わず走り出す調。そんな彼女を止めるべく切歌が慌てて後を追うが、その時……

—ズガガガガガガガガガガガガガガガガガアアアツツ!!!—

「……………ツ?! 調え!!」

「?! うっ、あああつ!!」

そんな彼女達の進行を止めるかのように、真横から突然金色の雷撃が飛来し調の足元の地面を抉るように走つたのだ。

いち早くそれに気付いた切歌は後ろから調の肩を掴んで共に側面へ跳躍し、雷撃の直撃から何とか免れると、二人は今の雷撃が放たれてきた方に慌てて目を向ける。其処には……………

『——これは意外な助っ人だ。てつきりもう完全に塞ぎ込んで、事が終わるまであの神社に引き籠つてるものと思つてたけど』

「ツー！」

「お、オマエは……!!」

『ツ！アイツ……！——バキイイイイツ!!——ぐうううっ！』

雷の残滓が先端に走る、金色の三叉槍を二人に突き付けて佇む青の亜人……切歌が戦場に現れた以降、いつの間にか姿を隠していたポセイドンレイザーの姿があったのだ。

調と切歌、そしてクロスも姿を現したポセイドンレイザーを見て険しい顔になるも、クロスはキマイラレイザーからの猛攻に圧されて意識を戻され、一方でポセイドンレイザーはそんなクロスの奮闘も尻目に淡々とした足取りで調と切歌へ近付いていく。

『今更一体何しに来たんだい？仲間を裏切り、装者である事を自ら辞めた君が』

「……そんなの、分かり切ってる……」



グツと、力強く握り締めた拳を胸に当て、調はポセイドンレイザーをまつすぐ見据える。

「私は、この手で終わらせに来たの……宮司さんを縛る”今”を……あの人を蝕む貴方達の改竄から、解放する為に……！」

「……調……」

迷いなく、ハッキリと己の決意を示して叫ぶ調。そんな彼女の言葉に切歌も驚きから僅かに目を見開くが、ポセイドンレイザーはハツと肩を竦めながら一笑した。

『それが今更だつて言うんだ。君はあのおじいさんを救う代わりに、仲間達との繋がりを自分から捨てたんだろ？その”選択”を、今になってなかった事にするって？それこそ流石に都合がいいにも程があるんじゃないのかい？』

「……それは……」

そんな事で己の罪をなかつた事にするつもりなのかと、暗にそう伝えるポセイドンイレイザーの言葉に咄嗟に何も言い返せず口を閉ざしてしまい、周囲の街の惨状……自分がカメレオンイレイザーを逃さなければ起こる筈のなかつた被害を見渡して思い詰めた顔を浮かべる調の前に、切歌が庇うように出てポセイドンイレイザーと対峙した。

「調だけが悪いように言うなデス！元はと言えば、オマエが調を誑かしたせい……！」

『だから彼女は悪くない……と？確かに僕が原因ではあるけど、自分が何も悪くない訳はないと、そんなのは調ちゃん自身が一番よく分かつてる筈だと思うけどね』

「つ、オマエ……！」

「……………」

淡々と、まるで悪びれもせず己の非を開き直るだけでなく、同時に調の心の内を見透かすかのような物言いに切歌も険しげな表情でポセイドンイレイザーを睨み付ける。

一方で、そんな二人のやり取りを前に口を閉ざし俯いていた調は徐に顔を上げると、切歌の隣からポセイドインレイザーの前に歩み出ていく。

「確かに、貴方の言う事は間違っていないと思う。……この街も、其処で何も知らず暮らしていた人達も……私が選択を誤る事さえしなければ、こんな目にも遭わずに済んだ筈だった……その罪は貴方だけでなく、私も抱えるべき物だつて、そう思う」

「……調……」

『それが解っているなら、その選択を最後まで突き通すのが筋つてもんじゃないかい？  
……君と僕のせいで、犠牲になった者達を思うのなら尚更ね』

「……だから、これから生まれる犠牲者も良しとしろつて……貴方はそう言いたいのか？」

『それが僕の選んだ、“選択”つて奴さ。何もかも失い、地獄の底へ叩き落とされた以上、其処から失った物を取り戻すのは容易な事じゃない。正道を生きて罪を償い、真つ当にやり直すにしても圧倒的に時間が足りない。だから何だつてすると決めたのさ。』





「れ、蓮夜さんっ!？」

蒼の残光を宙に描きながら、高速移動で二人の前に割り込んだクロスがポセイドンイレイザーの雷撃をその一身で正面から受け止めたのである。

無数の火花を全身から派手に撒き散らしながら悲痛な叫び声を上げ、雷撃が止んだと共に足から崩れ落ちるように前のめりに倒れて変身も解除されてしまい、元の姿に戻ったボロボロの蓮夜を見て調と切歌も慌てて傍に駆け寄っていく。

「蓮夜さん……!! しっかりするデスよっ、蓮夜さんっ!!」

「蓮夜さんっ……!!」

「ッ……う……ぐっ……!!」

『……ほんつと、君は何処までも他人他人と、自らを顧みる事をしないね……そのせいで







りにそう言いながら魔法陣に捕らえられて動けないキマイレイイザーを見つめ、蓮夜も血で赤く染まった目でキマイレイイザーを一瞥すると、腕に力を込めて無理矢理に身体を起こし、ふらつきながらも立ち上がる。

「れ、蓮夜さん……！そんな体で動いたらダメデスよっ！」

『彼女の言う通りだ。アレを捕らえられた事だし、こつちとしても君に無理をされて死なれるのは都合が悪い。……其処までして、立ち上がる理由が一体何処にある？』

「ツ……理由なら、あるっ……俺と切歌は、調を迎えに来たんだ……だから、っ……此処でその化け物を逃す訳にはいかないっ……調が元の居場所へ帰れる為にも、だっ……！」

「……蓮夜、さん……」

息も絶え絶えに、絞り出すような声でまっすぐにポセイドンイザーを瞳に捉えて離さない蓮夜。そんな彼の言葉と気迫に調も切歌も息を呑む中、ポセイドンイザー

は首を横に振つて溜め息を吐き出した。

『君までそんな甘い戯言を口にするとは……一度犯した罪は消えてなんてなくならない。取り返しの付かない過ちを犯した人間に居場所なんてある筈がないんだよ。僕たちイレイザーがそうであるようにね』

「……そう、だな……お前の言う通り、罪は簡単に消えるものでも、償えるものでもない……」

「……………」

目を伏せる蓮夜の言葉に、調も顔を伏せて罪悪感を滲ませた表情を浮かべる。しかし、蓮夜はポセイドンイレイザーに目を向けて、真つ直ぐな眼差しと共に言葉を続けていく。

「それでも……その罪と向き合い、背負つて、償い、戦う事は決して赦されない事なんかじゃない……調はその道を、答えを自ら選んで”選択”したんだ……それは弱さからな

んかじゃない、調自身の強さだ……！」

「……………」

「蓮夜さん……」

ハッキリと、力強く断じるようにそう言い切る蓮夜のその言葉に調はハッと弾かれたように顔を上げ、切歌も微笑を浮かべ微笑むが、ポセイドンイレイザーは声色を低く呆れるように返す。

『そんな事で、彼女の犯した罪をなかつた事に出来るとでも？犠牲になつた者たちへの報いになるとでも言う気かい？……あのおじいさんも』

「報いになるかどうかは、分からない。その答えも、選び取つて進んだ選択の先を目にしなければ分からないんだから……そうだろ、調」

「……………蓮夜さん……」

改竄が解けた元の宮司に先はないと信じ切っているポセイドンイレイザーの思惑を否定するかのように、顔だけ向けて振り返る蓮夜は不敵に微笑む。

自身の心の内に微かに残る迷い、恐れを払い除けるような力強いその言葉、その笑みに目を奪われるそんな調に、先に立ち上がった切歌がそつと横から手を差し伸ばした。

その手の上に、蓮夜から預かったシウルシャガナのギアのペンダントを乗せて。

「切ちゃん……」

「二人で悩むなんて、水臭いにも程があるデスよ。ずっと二人一緒だったんデス。これまでも、これからだつて……調一人にそんな重荷を背負わせたりなんてしない。アタシや蓮夜さん、皆が付いてるんデスから！」

「………………。うん」

いつもと変わらぬ、しかし不思議と久しい感覚すら覚えるその暖かな笑顔に安心感を覚え、切歌の手を掴んで握り返しながら彼女に引つ張られるように立ち上がり、彼女から手渡されたギアのペンダントを握り締めた手を胸に当て、調は迷いのない瞳でポセイドンイレイザーをまつすぐに見据える。

「私は、もう迷わない。惑わされない。どれだけ責められて、罵倒されたとしても……私  
は、この”選択”を後悔なんてしない……切ちゃんや、蓮夜さん、仲間達と一緒に……  
あの人の”未来”は、私達が守ってみせるっ！」

『……………ッ！』

「調……………」

「エツへへ……………そうこなくつちやデス！」

己の心の内の決意を淀みなく、未来を見据えてハッキリと告げた調からの気迫にポセイ  
ドンイレイザーも気圧され、蓮夜も切歌もそんな彼女の啖呵に思わず笑みを深めた。

その時……

——……パアアアアアツ……バシユツ——

「……！えっ？」

「カ、カードが?!」

調と切歌の懐から突然淡い光が放たれ、次の瞬間、彼女達のポケットから二つの光……蓮夜が渡していたブランクカードがなんと独りでに飛び出し、宙を舞ったのである。

そして二つの光はクルクルと飛び回りながら蓮夜の目の前に止まると、光を放つ二枚のカードは互いに惹かれ合うかのように一つとなっていく、蓮夜が戸惑い気味に一枚となったカードを手にとると、光が晴れたそのカードには調と切歌のギア……シユルシヤガナとイガリマを模した紋章がまるで対になっているような絵柄が刻み込まれていたのだった。

「これは……」

『そんな……二枚のカードが、一つにつ?!』

二枚のカードが合わさり、一枚のカードとなる。

こんな事態は初めてなのか、ポセイドンイレイザーは戸惑いを隠せず動揺を露わにしており、蓮夜も初めて目にする現象を前に目を見張って呆然と手にしたカードを見つめていたが、それも一瞬。

二人との繋がり証であるカードを握り締めて真剣な表情に切り替わり、左右に並び立った調と切歌にそれぞれ視線を送り無言のまま力強く頷き合うと、調と切歌はペンダントを掲げ、蓮夜は新たに手にしたカードを迷いなくクロスベルトのバックルに装填した。

『Code Z a b a b a……』

「Zeios igalimaraisen tron……」

「Various shulshagana tron……」

「変身……!」

『clear!』

明媚な旋律の歌と無機質な電子音声を重ねて響き渡り、三人の姿が変わっていく。

切歌は再びイガリマのギアを、調は一度は手放したシウルシャガナのギアを。

そして蓮夜は黒のアンダースーツを纏った後、更にその上から何処からともなく現れた無数の緑のアーマーを右半身に、左半身には続けて現れた桃色のアーマーを左半身に次々と纏い、最後には三つの刃の鎌を模した緑色の右目と丸鋸を模した桃色の左目が特徴的な仮面を顔に身に纏っていった。







互いに引けを取らないパワーでせめぎ合うクロスの背中に目掛けて、ポセイドンレイザーが咄嗟に雷撃を放つ。

しかし、その間に調と切歌が素早く割り込むと共にそれぞれのアームドギアで雷撃を全力で打ち払い、ポセイドンレイザーと対峙した。

「貴方の相手は、私達……！」

「蓮夜さん！アイツはアタシ達に任せるデスよ！」

『つ……すまん、助かる！』

得意げにサムズアップをしてポセイドンレイザーの相手を受け持つと言ってくれた切歌と調に感謝しつつ、クロスは左脚側面のランドスピナーを展開し、更に右肩甲骨部の巨大ブースターから火を噴かして戦いの場を別の場所へ変える為にキマイライレイザーを全力で押し出していった。

凄まじい速さで遠ざかっていくクロスとキマイレイザーを横目にポセイドンイレイザーも苦虫を噛み潰したような顔を浮かべると、アームドギアを構えて立ちほだかる調と切歌に目を向けて呆れ混じりに口を開く。

『舐められたものだ……幾ら僕が不完全体だからって、『記号』の力を手にした程度で君達が僕に勝てるよ、本気で思ってるのかい?』

「トーゼン、本気で思ってるデスよっ!」

「貴方から受けた、今までの仕打ち……宮司さんの分まで……此処で私達が、万倍にして返してあげる……!」

『……そうかい……なら見せてくれよ。やれるものなら、さあつ!』

——バチイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ  
!!!!!!——

二人の自信を一笑すると共に、ポセイドンイレイザーが横薙ぎに振るつた雷撃が切歌と調に襲い掛かる。

それに対し、切歌は跳躍、調は雷撃を掻い潜りながら上手く避けてポセイドンイレイザーへ接近すると共にそれぞれのアームドギアを全力で振るい、ポセイドンイレイザーが引き戻した三叉槍の一撃とぶつかり合つて因縁の勝負に火蓋が切つて落とされたのであつた。









ターによる加速を利用して猛スピードで横へ滑走し避け続けていく。

その間にキマイライレイザーの方を見れば、奴はクロスに斬られた両腕からまた新たに腕を再生しようと試みているようだが、その再生速度は先程よりも明らかに、目に見えて遅くなっているのがひと目で分かった。

『（奴の再生のスピードが落ちてる……そうか……これが切歌の、イガリマの能力によるモノか……）』

ならば、と、瞬時にイガリマの力を宿す己の右半身の力の特性を理解したクロスは正面から再びキマイライレイザーへ突進する。

無論、そうなれば光芒による爆発がクロスを捉えてその身が爆炎に包まれてしまうが、クロスは左脚のランドスピナーと背中中のブースターを上手く用いて身体をコマのように高速回転させながら右腕の逆さ刃で光芒を次々に斬り裂きつつ接近していき、異形の目の前まで肉薄すると共に左半身の背中から翼のように生えた桃色の巨大アームの先端をスパナのような形状へと変形させ、そのままキマイライレイザーの首根っこへと



キマイライレイザーはアームに首を締め付けられたまま、自身の両足から地面へと莫大なエネルギーを注ぎ込み、先程のポセイドインレイザーの拘束から逃れた時と同様に大地を爆発で吹っ飛ばしたのである。

その衝撃によりクロスとキマイライレイザーは互いに爆発で吹っ飛ばされてしまうが、距離を取ったその隙に両腕を再生させたキマイライレイザーが着地と共に素早く疾走し、遅れて地を滑るように着地したクロスへその剛腕で殴り掛かる。

完全にクロスの顔面を捉えた一撃。着地の瞬間を狙ったこのタイミングでは回避も出来ず、防御も間に合わないだろう。

そんな確信からニタリと無意識にほくそ笑むキマイライレイザーの拳が、クロスの顔面へとまっすぐ吸い寄せられるように叩き込まれようとした、瞬間……

——クロスが突如、緑色と桃色が入り交じった光を放ちながら二つに分かれたれ

るように左右へ分離し、キマイライレイザーの拳が何も無い空を切ったのであった。

『ツ?!ゲツ、ア——?!』

いきなり目の前から消え去ったクロスに戸惑い、その姿を探し慌てて辺りを見回した、その時……

—フツ……ズシヤアアアアアアツツ!!—

『——!!ギツ、ガアアアアアアアアアツツ!!?!』

背後から音もなく振りかざされる、不意の一撃。

風を切る僅かな風の流れの乱れからソレに気付いたキマイライレイザーがすぐさま振り向き様にバックステップで背後へと跳んだ直後、左肩から袈裟懸けに掛けて何かに切り裂かれて血を吹き出し、激痛に呻きながらもバックステップを繰り返して距離を取った後、今の一撃を繰り返した目の前の人物を視線に捉えた。其処には……

『——今のを躲すか。完全に気配を殺したつもりだったが……それが野生の勘、という奴か？』

ガチャツと、鉄と鉄が擦り合う鎧の音を鳴らしながらその手に持つ巨大な得物……人間の背丈を遥かに超える大、中、小と三枚の刃が先端に並ぶ大鎌を担ぐクロスンの姿があつたが、その見た目は先程とは明らかに違つていた。

左半身がシルシヤガナを象徴とする桃色ではなく、右半身に比べて若干軽装備となつており、更に右の背中からはまるで死神を彷彿とさせる緑のラインが走つた漆黒の羽根を生やした緑色の姿……イガリマの力のみをその身に宿した、『仮面ライダークロス・タイプイガリマ』に変化していたのだ。更に……

—バシユツバシユツバシユツバシユツバシユツバシユツバシユツ!!—

『……?!—ズガガガガガガガアッ!!—ギツ、アアアアッ!!?』

今度は頭上から無数の丸鋸が高速回転しながら雨の如く降り注ぎ、それに気付いたキマイライレイザーは全身を切り刻まれながらも慌てて後方へ飛び退き丸鋸の雨の中から脱出すると、クロスの隣に空から一人の戦士がフワリッと着地した。それは……

『……二段階構えの奇襲も失敗か。まあ、そう簡単にいけば此処まで苦戦する事もないか

……』

『……!!?』

クロスの隣に並び立った戦士を見て、キマイライレイザーは我が目を疑い動揺する。

何故ならその姿はタイプイガリマとはまた違う、桃色の姿をした”もう一人のクロス”だったからだ。

緑のクロスと同様に左半身と右半身が左右対称となり、右脚に左脚と同様ランドスピーナー、右背にはピンク色の巨大アームを装備した、桃色のクロス……シウルシャガナの力のみをその身に宿した『仮面ライダークロス・タイプシウルシャガナ』は、右手の親

指と人差し指を擦り合わせながらキマイライレイザーを見据える。

『しかし、今ので確信も得た。どうやらお前のその不死身に思える超再生も、完璧に無敵という訳でもないようだ』

『この力、ザババの能力はお前の能力には天敵らしい。……現に今、俺が与えた傷が未だ塞がる気配がないのがその証拠だ』

『イツ……ギツ……!!!』

二人のクロス……タイプザババの最大にして最強の能力である、”自身を二つの姿にして分身した”タイプシュルシャガナとタイプイガリマからの指摘に対し、キマイライレイザーは忌々しげに自身の肩から右腰にまで及ぶ斬り傷を見下ろす。

切歌のギアであるイガリマには、”対象の魂を一閃して物質的な防御を無力化”するという正に死神らしい能力が備わっている。





だが、タイプイガリマはそのタイミングを見計らっていたかのように片手のみで大鎌を全力で振るい、緑色の巨大な残撃破を飛ばして全ての雷撃を正面から迎撃し、相殺した。

吹き荒れる爆発と黒煙が一同の視界を覆い尽くす。しかし、タイプシユルシヤガナは構わず背中への二基の大型ブースターのバーニアから火を噴かし、更に両脚のランドスピアの車輪を回転させて猛スピードで爆風の中を駆け抜ける。

強固な装甲は爆発の衝撃や炎ものともせず、タイプシユルシヤガナは爆風の中を突っ切りながら両腕の装甲を変形させていき、黒の刀身に赤いギザギザの刃が煌めくノコギリのような二枚のブレードを展開。

更に刃がチェーンソーのように稼働し殺傷能力を更に高め、黒煙の中を駆け抜けてキマイラレイザーに肉薄すると同時に両腕を振るい、すれ違い様にその凶刃でキマイラレイザーの胴体を斬り裂いていった。







誰かに向けて溢れ出た言葉に、後悔と謝罪、そして、約束に応える決意を込めて。

その囁きを掻き消さんとばかりに放たれた絶叫と共に、背中に残った唯一の遠距離武器である無数のトゲから立て続けに雷撃を乱射しながらその場から離脱しようと飛び退くキマイライレイザーだが、無駄な足掻きだ。

電子音声と共に脚部から順に部分展開される全身の装甲の隙間、そして仮面のクラッシュャーからそれぞれ桃色と緑色の輝きを放ち、『EXCEED DRIVE』を発動させた二人のクロスの方が夙く動き出す。

機動力に関しては特に優れているタイプシウルシャガナが両脚のランドスピナーを用いて先に高速で走り出し、ジグザグの軌道で動き回りながら迫る雷撃の全てを直接自慢の分厚い装甲で受け止めて掻き消していく。

その背後から、背中から生えた死神のような羽根を大きく広げたタイプイガリマが跳躍して空へと飛び上がり、大鎌を振りかざして迫るその姿を視界に捉えたキマイライレイザーは雷撃の狙いをタイプイガリマに集中して撃ち落とそうとするも、雷撃が当たる

寸前、タイプイガリマは羽根で自分を守るように身を包み、そのまま背景に溶け込むように”消えてしまった”。

『ギッ——!!?』

『何処を視てる』

まるで幽霊のように音もなく消えたタイプイガリマを前に驚愕するキマイライレイザーの真下から、冷淡な声が響く。

動揺が収まらぬままキマイライレイザーが慌てて下を見下ろせば、其処にはいつの間にか、足の爪先からスライディングするように眼下に潜り込んだタイプシュルシャガナの姿が。

気付いた瞬間、半ば反射的に真上へ弾かれた様に飛び上がり距離を取る異形に対し、タイプシュルシャガナはすかさず背中から生えた二基の巨大アームの先端をプロペラに変形して前方に突き出し、高速回転を始めた二基のプロペラから桃色の巨大な竜巻を









第八章／繋XX式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでもme侶スは駈ke走ル⑥（後）

「——綺羅綺羅の刃で 半分コの廃棄物—ガーベツジ—！予習したの 殺戮方法……  
！」

「デエエエヤアツ!!」

『チイツ！この……!!』

クロスとキマイライレイザーの戦いに決着が着いたその一方、ポセイドンレイザーと相対する調と切歌は阿吽の呼吸による絶妙なコンビネーションを遺憾無く発揮し、相手に一息吐かせる暇すら与えない連携攻撃を絶え間なく繰り返していた。

あまりの熾烈さからどうにか距離を開こうと後退を繰り返しながらポセイドンレイ

イザーが放つ連続水弾攻撃を、歌でフォニックゲインを高める調が無数の小型の丸鋸による遠距離攻撃で迎撃して全て相殺していき、弾け飛ぶ水滴の中を切歌が全力で駆け抜けながらその懐にまで肉薄し、大鎌による鋭い横振りの一撃をポセイドンイレイザーに見舞う。

迫る刃を前に反射的に自身の身体を水化させて回避しようとするポセイドンイレイザーだが、切歌の大鎌が水と化した己の身体を斬り裂いた瞬間、有り得る筈のない痛みが襲い、苦痛で顔を歪めながらも慌ててバックステップし実体化した自身の胸を抑えた。

『(っ……! 攻撃が透過せずにダメージを受ける……! 彼女のギアの能力のせいか……?! よりにもよって厄介な——! )』

「高出力全開で フィールドを駆けよう! 勝負も夢も 命懸けのダイブ!」

『記号』の力が上乗せされたイガリマの特性の前では、自身の肉体を水に変化させて攻撃を透過させる能力も活かされやしない。

そんな相性の悪い相手とのよりもよってなマッチングに、内心毒づいてしまうポセイドンイレイザーの真横から歌声が聞こえて慌てて振り返ると、其処には両脚のローラスケートで素早くポセイドンイレイザーの側面へと回り込むように滑走しつつ、ツインテールを思わせるアームドギアから展開した巨大丸鋸を振るう調の姿があった。

ポセイドンイレイザーは咄嗟に左手を突き出し発生させた水の障壁で巨大丸鋸を、その隙に反対側から大鎌を横薙ぎに振るって奇襲を仕掛けようとした切歌の一撃を三叉槍で受け止め、防御する。

『ツ！つたく、参ったねえほんと……！まさか君達が此処までやり辛い相手になるとは思わなかったよっ……！』

「今更後悔したって遅いデスよ！」

「今度はもう迷わない……！貴方は此処で、私達が倒してみせる！」

『おー、こわつ。強気に言ってくれるじゃないか。けど前にも言った通り、僕もそれなりに負けず嫌いなんだ。そう易々と勝ち譲らないさあ!』

—バアアアアンツツ!!!—

「つ?!う、あああつ!!」

「調っ?!」

調の巨大な丸鋸を受け止める障壁の水が蠢いて変容し、球状となった瞬間に爆発を巻き起こした。

反応が遅れた調は至近距離からの爆発をもろに喰らって吹っ飛ばされてしまい、そんな彼女の安否に気を取られた切歌をポセイドンイレイザーが素早く身を翻しながら散らせていき、二人に追撃を加え纏めて吹き飛ばしてしまう。

「ぐあああうつつ!!」

『蓮夜君から『記号』の力を得て、二人掛りでなら僕を仕留められると本気で思ってたのかい？生憎これでも上級イレイザー、そう簡単にやられてやれるほど容易くないと自負してるつもりだ——』

『———そうか。なら、こちらも全力で叩かせてもらう』

『——?!—ガギイイイイインツ!!—ぐうううつつ!!』

三叉槍を構え直して更に追撃を仕掛けようとしたポセイドンイレイザーの頭上から、新たな人影が一直線に降下して右腕を振るい、不意打ちを仕掛けた。

ザワツ！と、肌を感じた殺気と直感を頼りにポセイドンイレイザーが三叉槍を頭上に向けて振るえば、甲高い剣戟音と共に火花が散り、ポセイドンイレイザーを襲撃した人

影……クロスは攻撃を弾かれた反動を利用して距離を離し、宙で身を捻って態勢を立て直しながら地上へ着地した。

「！蓮夜さん……！」

『つ……君が此処にいるって事は……まさか……』

『……ああ。例のノイズ喰らいはこの手で仕留めさせてもらった……二人の、この力のおかげでな』

『……ッ……』

左拳を握り締め、キマイライレーザーの撃退を告げるクロスの言葉にポセイドンレーザーは僅かな動揺を見せる。

その吉報に、傷付いた身体を起こした調と切歌も互いに顔を見合わせて喜びを露わに微笑み、力強く頷き合いながら立ち上がってそれぞれのアームドギアを構え直す中、ポ

セイドンイレイザーはそんな三人の顔を静かに見直し、一拍置いてめんどくさそうに溜め息を漏らした。

『あーあ。残念だなあ。これを機に幾つかの目的も纏めて達成しようかと思っただけど、二兎を追う者は一兎をも得ずってホントにあるんだねえー。……これも彼の目を欺けなかった、僕の力不足か……』

『……何をボソボソ独り言を言っている?』

『いや?こつちの話さ。それより、件のノイズ喰らいを片付けたんならこの辺でお開きって事でよくない?おじいさんに掛けられてた改竄も解けた訳だし、お互い、これ以上無駄に体力を使う必要とかないでしょ?』

目的のキマイライレイザーを倒された事で戦う気概も失せたのか、ポセイドンイレイザーはやる気なく肩を竦めて戯けるように停戦を申し出る。

しかし、調と切歌、クロスに警戒と構えを解く気配は一向になく、そんな三人のピリ





掲げる三叉槍の真下に立つポセイドンイレイザーの姿を掻き消してしまふ程の雷の眩しさに堪らず目を細めながらも、調と切歌は矢継ぎ早に襲い来る雷撃の数々を紙一重で回避しながら雷撃の発生源のポセイドンイレイザーを目指し、突き進むが……

——二人が躲した雷撃に紛れて、いつの間にか調と切歌の死角に回り込んだ”二体のポセイドンイレイザー”が三叉槍を突き立てようと振りかぶっていた。

「え……?!」

「なっ……（分身?!コイツ、また増え——!?!」

『気付いたところで……!』

『遅い!!』

回避に専念するあまり、反応が一瞬遅れてしまった調と切歌のそれぞれの後頭部に目

掛け、二体のポセイドンレイザーの槍が容赦なく突き出される。

それに対して咄嗟に振り返り何とか防御態勢を取ろうとするも間に合わず、青の亜人の槍が二人の目に突き立てられようとした寸前、調の前に緑色の光、切歌の前に桃色の光……タイプイガリマとタイプシュルシャガナにそれぞれ分身したクロスが、身を包んだ死神の羽根と両腕の分厚い装甲で三叉槍の刃をそれぞれ受け止めた。

『なっ……』

『成る程。最初に放った大技は姿を晦ます為のフェイントで、本命はそれに紛れての不注意打ちだったか』

『だが生憎、お前の手の内は既に掴めてる』

「え……はえええええ?!」

「蓮夜さんも……増えた……?」

不意打ちを防がれたポセイドンレイザー達だけでなく、窮地を救われた切歌と調も二人となったクロス達を見て驚きのあまり目を白黒させてしまう中、タイプイガリマとタイプシユルシャガナは三叉槍を掴んでポセイドンレイザーを無理やりに引き寄せながらそれぞれ鋭い拳と蹴りを見舞い一箇所に集めると、ポセイドンレイザー達は地面を転がりながら身体を水に変質させて一体へと戻った。

『ぐっ……それが君が新しく手に入れた姿の能力か……また面倒な力を……なら、さあ！』

僅かによろめきながらも身体を起こし、ポセイドンレイザーは三叉槍を再び掲げ先端から雷を放つ。

そして放たれた雷は遙か天上で別れて二つになると、そのままポセイドンレイザーの両脇に落ちて同じポーズを取る二体のポセイドンレイザーとなり、更に三体となったポセイドンレイザー達の槍から再び雷が放たれ、ポセイドンレイザーがまたも増えていく。

それを何度も繰り返していく内に無数のポセイドンイレイザーによる包囲網があつ  
という間に完成し、クロス達を中心に包囲してしまう。

「！か、囲まれちゃったデスよ……！」

『『『これだけの数、一度に狙われれば幾ら君達でもひとたまりもないだろう！』』』

—— シュウウツ……ズドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド  
!!!!  
——

無数のポセイドンイレイザー達が一齐に突き付けた三叉槍の先端にエネルギーが収  
束され、全方位からの雷の弾丸による集中砲火が迫る。

周りを囲まれ、何処にも逃げ場がない絶望的な窮地。

しかし、タイプシユルシャガナは即座に背中から生えたアームの先端を巨大な丸鋸に

切り替え、丸鋸の表面を前に地面に突き立てながら調に目配りする。

『調!』

「……!はい!」

そのアイコンタクトだけで調はタイプシユルシャガナの意図を理解したのか、自身のアームドギアから巨大な丸鋸を展開してタイプシユルシャガナと同様に地面に突き立てる。

そして二人は地面に立てた丸鋸を回転させながらそれぞれの脚部の車輪も稼働させ、タイプイガリマと切歌の周りをグルグルと高速で回りながらあらゆる方向から飛来する雷弾を丸鋸の表面で受け止め、同時に雷弾をそのままポセイドンイレイザー達に目掛けて反射し、分身達に当てて一体ずつ確実に撃破していく。

『(っ! 攻撃を跳ね返してこっちの戦力をちよつとずつ削ろうって算段か? そっちがそうくるのなら——!)』

こちらにもまた趣向を変えて別の策に移るまでだと、未だ雷の弾丸を撃ち続ける他の分身達の中に混ざる本体のポセイドンイレイザーは跳ね返される雷弾を頭に横に避けながら焦らず次の行動に移るべく、分身達の群れから一步引いて離れた、その時……

『——お前が本体か』

——ブオオオオツツ!!——

『ツ?!』

ギイイイインツ!!と、鉄と鉄がぶつかり合う金属音が辺りに響き渡る。

背後から聞こえた淡々とした声に反応して振り向き様に突き上げた三叉槍が、” 視えない攻撃 ” と激突し火花を撒き散らしたのだ。

思わぬ不意打ちにより、分身達を保つ為の集中力を乱されて他のポセイドンイレイ

ザー達が次々に水と溶けて消滅していく中、攻撃を弾いた反動を利用し後方へと飛び退いたポセイドンレイザーがすぐさま前を向くと、其処には何も無い筈の空間からまるでカメレオンのように少しずつ姿を現していくクロス……タイプイガリマが大鎌を振るった姿勢で佇む姿を露わにした。

『透明化つ……成る程、それがその姿での君の力、つて訳かい?』

『お前の裏を搔きつつ意表を突く、という点ではこの姿が一番適用だろうからな。何より、コイツの刃はお前にとっても天敵なんだろう……?』

『……痛いところを突いてくれるねえ。君、案外僕より才能あるんじゃない?嫌がらせって意味じゃ、さっ!』

言いながら、ポセイドンレイザーは三叉槍を横薙ぎに振るって扇状に雷撃を放出する。

それを見たタイプイガリマは即座に大鎌を下段から振り上げて放った緑色の斬撃波



で正面から雷弾を打ち消し、その隙にポセイドンイレイザーが接近戦を避けるべく後方へ飛び退いて再び姿を晦まそうとするが、タイプイガリマはそれを見越していかのよう  
に自身の左腕の装甲を変形させ、先端がクロー状になった鎖付きアームの狙いをポセイ  
ドンイレイザーに定め射出し、ポセイドンイレイザーの足をクローで捕らえた。

『ツ！しまっ——！』

『今だ！切歌！』

「——でええやあああああつっ!!」

クローに備え付けられた鎖に引っ張られて身動きが取れないポセイドンイレイザー  
に向かって、分身達が全て消滅したのを機に切歌が背中のバーニアで加速しながら大鎌  
を構えて飛び掛かった。

振り下ろされた鎌の刃がポセイドンイレイザーの首を完全に捉える。

しかし、ポセイドンイレイザーも己の首に刃が食い込む寸前の所で舌打ちしながら自身の肉体を瞬時に水へと変容させ、更に自ら身体を弾けさせて無数の水粒となり、そのまま水飛沫のように拡散しタイプイガリマの拘束と切歌の一撃から逃れてしまう。

「っ、避けられたのデスっ！」

『ソイツも既に読んでいる……！調っ！』

—α式百輪廻—

「はあああつ!!」

タイプイガリマの短い呼び掛けと共に、空中へ跳躍した調がヘッドギアの左右のホルダーから小型の丸鋸を連続で乱射し、広範囲に飛び散った無数の水粒を尽く撃ち落とすていく。

それに危機感を覚えたのか、残り少なくなった全ての水粒が慌てて1箇所を集まり、

人型を形成して再び姿を形作ったポセイドンレーザーは両足に水を纏い、地上を後ろ向きに滑走しながら後退しつつ立て続けに空から降り注ぐ小型の丸鋸を右手に握る三叉槍を回転させて何とか全て弾き落としていくも、集まった水が足りないせいかその身体は頭や肩などの所々の箇所が欠損しており、多少なりともダメージを負っている事が窺えた。

『（クツソツ！調ちゃんの技も結構効くなコレ……！下手にまた分裂すれば、今みたいに身体の一部を削ぎ落とされてっ——……？）』

い。此処でまた分裂すれば、調の波状攻撃に今度こそ耐え切れず下手を打つやもしれない。

そんな無様な事態は避ける為にそう易々と能力は使えないと思つた矢先、ポセイドンレーザーはクロス達を見ていてある違和感を覚えた。

空中には、未だ連続で小型の丸鋸を連射する調。地上からはバーニアを噴かし自分を追ってくるタイプイガリマと切歌。

——あと一人、タイプシユルシャガナは何処へ……？

そんな疑問を抱いた瞬間、ポセイドンイレイザーの退路の先の大地から突如無数のヨーヨーが地表を突き破って飛び出し、幾つもの桃色の糸を張り巡らせ重糸の壁を作り出した。

『なっ……（糸で、壁を……!? まずいつー）』

それを見て、自身が此処まで追い込まれていたのだと察し、ポセイドンイレイザーは咄嗟に左腕を真横に突き出して掌から水流を放出。

水の勢いを利用してそのままスピードを殺さず、壁に触れるギリギリの距離でカーブして何とか糸の壁に囚われるのを回避したかに思われた、が……

——それを見越していたかのようなタイミングで、ポセイドンイレイザーの死角と

なる地面が勢いよくめくれ上がり、背中の巨大アームを用いて地中の中を掘り進んでいたタイプシウルシャガナが土砂の津波を巻き上げながら飛び出した。

『?!なんつ——?!』

『オオオオオオッ!!!』

完全に意表を突かれ、戸惑うポセイドンイレイザーにタイプシウルシャガナがその両手に握り締める、刀身の刃がチエーンソーのように回転する黒と桃色の大剣を全力で振りかぶる。

対するポセイドンイレイザーもギリギリの所で全身をゲル状にし、大剣の直撃を液体化した身体で受け止めて切断されるのを免れるが、タイプシウルシャガナは構わず大剣を打ち付けたまま刀身の腹部分でゲル状になったポセイドンイレイザーを力任せに持ち上げ、振り回していく。

そして遠方からバーニアで加速して迫るタイプイガリマと切歌に目掛けて思い切り

投げ飛ばすと、そのまま二人がすれ違い様に振るった大鎌の刃がゲル化したポセイドンイレイザーを切り刻み、イガリマの特性によりダメージを喰らって実態化しながらゴロゴロと勢いよく地面を転がっていった。

『ぐううううつつ!! つ……ま、まだだつ……! まだ——!』

——式・卍火車——

「——たあああああつ!!」

『ツ?!—ズバアアアアアツ!!—ぐつ、あああああツ?!』

二振りのイガリマの刃の直撃を貰い、再生が追い付いてない傷付いた身体を引きずるように起こそうと三叉槍を杖代わりにするポセイドンイレイザーだが、空から響いた勇ましい雄叫びに釣られて振り向いた直後、ヘッドギアの左右のホルダーから巨大な二枚の回転鋸を展開した調がその小さな身体をグルグルと回転させながら上空から飛び降り、彼女が振り下ろした二枚の回転鋸がポセイドンイレイザーの両肩から腰の下まで一

気に斬り裂き、火花を撒き散らしながら派手に吹っ飛ばしていったのだった。

『うっ、ぐううっ……!!調、ちや……!』

「……今のは、貴方に大切な記憶を弄ばれた宮司さんの分——」

傷を負った身体を抑え、片膝を突くポセイドンレイザーに向けてそう言いながら徐に身を起こす調の下に、切歌、タイプイガリマ、タイプシユルシャガナが集まる。

そして二人のクロスは一つとなつてクロス・タイプザババへと戻り、左腰のケースからすかさず取り出した一枚のカードをバツクルに素早くセットする。

「——そして今度は……私と貴方のせいで、傷付いた人達の分……!」

『Final Code x……clear!』

『決着をつけるぞ……!調、切歌!』

「任せるデス！調、ザババの刃を……！」

「うん……蓮夜さんに、重ね合わせる！」

クロスベルトから響き渡る電子音声と共に、切歌と調はそれぞれのアームドギアと身に纏うギアの一部を切り離し、武器とパーツを分離、変容、巨大化させながらクロスの全身に次々と合体させていく。

そうして全ての合体を終え、クロスは両腕と両脚、両肩や両腰などに黒のラインが走る緑とピンクの巨大な刃が無数に装備された、正に全身凶器と呼ぶに相応しい凶悪な姿へと変わっていった。

『！あの、姿はっ……!?!』

「——未熟で、未完成でも、逃げないよ……！」

信じて、紡いで越えた 歴史は星に！」



「蓮夜さんっ!」

『ああっ……!』

ギアから流れる伴奏に歌を乗せる調と切歌がそれぞれ片腕を突き出し、フォニツクゲインがピンクと緑色の光として可視化されクロスへ流れ込んでいき、クロスの全身の刃が展開され、刃に内蔵された幾つものマニユーバが一斉に火を灯していく。

ピンクと緑色の光を放つその輝きは、まるでクロスの全身から炎が燃え盛っているかのようにも映り、今までの蓄積されたダメージからまともに動けないポセイドインレイザーも遠巻きからその強大な力を肌で感じて『クツ……!』と忌むように喉を慣らすと、咄嗟に大地に左手の掌を押し当てていく。

Non ducor, ducor.

我は導かれず 我こそが導く

S p e m q u e m e t u m q u e i n t e r d u b i i s .  
 希望と恐れの間をさまようべし

T a m d i u d i s c e n d u m e s t , q u a m d i u v i v a s .  
 私たちは、生きている限り学ぶべきである

矢継ぎ早に紡がれる詠唱と共に、ポセイドンイレイザーの身体が水と化して地面に吸い込まれるように飲み込まれていく。

瞬間、ザパアアアアツ!!と、まるでダムの水が決壊したが如く勢いで大量の洪水が地面から溢れ出し、何かを形作るように敵り、全身が水で構築された、空を大きく仰がねばならないほど巨大で屈強な海神の上半身が大地から生えるように出現したのである。

全長はおよそ100メートル前後か。まるで神話の中の神が現実世界へ現出したかに思わせる圧倒的な威圧感と力の奔流を前に、しかし三人も決して臆する事なく今出せる全ての力を一つにし、調と切歌から託されたありったけのフォニックゲインをその身



それに対し、全身凶器のクロスは避ける事なく真つ向から海神の槍と激突して凄まじい衝撃波と閃光を辺り一帯に撒き散らした直後、まともな拮抗すら叶わず、ピンクと緑の無数の斬撃線を宙に描きながら海神の槍と右腕を瞬く間に細切れにし、霧散させた。

『ツツ  
!!!!??』

『これで……エンドマークだっ!』

「いつ けえ え え え え え え え え え え え え え え え  
えええええええええええええええええええええええええええええ  
えええええええええええええええええええええええええええええ  
!!!!!!」

最後のダメ押しだと言わんばかりに、調と切歌の掌から放出されるフォニックゲインの勢いが更に増す。

それに呼応するようにクロスの仮面のクラッシュヤーが開かれ発光し、全身から放たれる光も徐々に徐々にその輝きを増していき、残る力の全てを最大限に込めた全速力で海



クラツシャーを閉じて静かにそう宣告したと共に、海神の全身に刻まれた無数の斬撃から一斉に閃光が走り、最後に巨大な爆発が発生して全てを呑み込んだ。

弾け飛んだ海神の身体はただの水となり、まるで土砂降りの雨のように天より降り注ぐ冷たい水飛沫をその身に浴びながらクロスは仮面の下でか細い息をこぼし、足元からゆっくりと変身が解けて血塗れの蓮夜の姿に戻ると、そのままプツンツと糸が切れた人形のように力なく前のめりに倒れてしまったのであった。



覗き込んだその顔は血色も悪く真っ青に青ざめており、此処までの戦いから無理を通し過ぎて自らの血を流し過ぎたのだと、彼の全身の至る所から流れ出る流血が否が応にも其れを物語っていた。

「っ、傷がひどいっ……！このままだと……！」

「ア、アタシを庇ったから……蓮夜さんっ……！気をしっかり持つテスよ！蓮夜さんっ！」

「……………っ、う……………」

出血の酷い身体を下手に揺さぶる訳にもいかず、必死に大声で呼び掛ける切歌の声に僅かな反応を示し、目を閉ざしたまま眉間に皺を寄せる蓮夜。

その反応から今からでも治療すればまだ間に合うと確信した二人は急ぎ救護へりを寄越してもらおうべく、切歌が自身のヘッドギアから本部へ通信を繋ごうとした、その時



……

「——まさか、こんな結末になるとはね……理想通りって訳じゃないけど、まあ、ギリギリ及第点つてとこかなあ……」

「……!!?」

不意に何処からか聞こえてきたのは、最早聞き馴染みすらも覚える飄々とした男の  
声。

しかし何処か辛そうにも聞こえるその声に釣られて調と切歌が振り返ると、其処には  
海神が霧散して消えた濡れた地面からどろりとしたゼリー状の流動体が生えて徐々に  
人型を形成していき、やがて全身血塗れでボロボロになり、右腕が欠損した青年……先  
の蓮夜達の渾身の技で撃退したかに思われたクレンが姿を現したのであった。

「貴方は……!」

「オマエ……!?! まだ生きてたデスか?!」

「ははっ、そりや当然……と言いたい所だけど、さっきのは流石にヤバかったかな……咄嗟に身代わりを立てて凌いだはいいけど、それでもこの有り様な……っ……ワケだしっ……」

苦笑い混じりにそう言ってクレンが己の肩口に視線を向けると、失くした右腕を水を用いて何とか再生させようと試みているようだが、再生の途中で腕の形をした水が霧散し上手く復元する事が出来ずにいる。

恐らく先程受けた蓮夜達の技の能力の影響なのか、この分では他の傷を癒すのも当分時間が掛かりそうだと疲れも混じった溜め息を面倒そうに漏らし、クレンは調と切歌、そして調の膝の上に頭を乗せ気を失っている蓮夜を一瞥し僅かに微笑んだ。

「今回の勝負は、癪に障るけど完全に僕の負けだ。それは素直に認めるよ。……けれど、

君達を選んだこの”選択”は一筋縄では行かない茨の道だ。君達は、君達自身の手で、自ら苦難の道への一步に足を踏み入れたといつても過言じゃない」

「……茨の、道……？」

「何またワケのわからないこと言ってるデスか……！そうやって意味深な発言で不安を煽って、負け惜しみのつもりならその手には乗らないデスよ！」

「ハハッ……まあ、若干の負け惜しみの気があるのは否定しないよ……でも、半分は僕なりの親切心でもあり、警告でもある……何せ、君達が相手取ろうとしている”彼”は——」

「——其処までにしておくといい。君は少々おしゃべりが過ぎるにしても、それ以上は流石に看破出来ないよっ。」

「…………っ！」

何処となく真剣味を帯びたクレンの言葉を遮る、少女の声。

その声に釣られてクレンが慌てて振り返ると、空から黒い鎧を纏った少女……………ヴィーヴルが背中の中の機械的な黒翼を閉じ、クレンの背後に降り立った。

「キミ、は……………」

「え……………アレは……………も、もしかして……………!？」

「シン……………フォギア……………?！」

前触れもなくいきなり現れたヴィーヴルにクレンは目を見張り、切歌と調は少女が纏ってる黒い鎧が自分達と同じギアだとその雰囲気から一目で看破して驚愕する中、

ヴィーヴルはそんな一同の反応や奇異の視線にも気にも留めず、ボロボロの姿のクレンの頭から足の爪先まで見下ろし嘆息した。

「それにしても酷い格好だ。仮にも上級イレイザーともあろう者がそんな醜態を晒しているのは、君達が飼ってる他のイレイザー達に示しが付かないんじゃないか？」

「……急に後から出てきておいて、随分な言い草じゃないか……そもそも君達が余計な邪魔さえしてくれなければ、此処までの苦勞に見舞われる事もなかったと思うけど……？」

「そんな愚痴、ボクに言われても困るとしか言いようがないよ。こっちとしてもただ命令に従っただけに過ぎないんだから。というか、君の立場からすれば寧ろボクに感謝の念を口にしてもバチは当たらないと思うよ？ 現に今さっきまで、君が自分の務めを果たせるようにその手伝いをしてた訳なんだし」

「……手伝い……？」

怪訝に眉を顰めるクレン。

と其処へ、遠方の空から二基の大型ミサイルが上空を駆けて猛スピードで現れ、ミサイルの上から二人の少女……先程までのヴィーヴルとの激闘でインナースーツやギア、素肌等が切り傷と土埃で薄汚れた響とクリスが飛び降りて蓮夜達の前に着地し、クレンとヴィーヴルに向けて颯と身構えた。

「…響さん、クリス先輩……！」

「遅れてごめん、みんなっ……！状況は……って、蓮夜さん?!」

駆け付けるのに遅れて謝罪しながら振り返るも、調の膝の上で血塗れになりながら気絶している蓮夜を目にしギョツとなる響。

そんな響の隣に立つクリスも蓮夜の容態を横目に苦虫を噛み潰したように顔を歪め、クレンとヴィーヴルに視線を戻し睨み付けながらアームドギアの銃口を突き付けるも、ヴィーヴルは構える事すらせずにヤレヤレと溜め息を漏らした。

「そんな状態でまだやる気なのかい？あれだけ一方的に痛め付けられておいて性懲りも無いというか……力の差は目に見えて歴然だって、ボクなりに嫌という程分からせてあげたつもりなんだけどね」

「ふざけんのはその舐め腐った態度だけにしろ！してやられたまま帰すほどあたし等は安くはねえし、テメエには聞きてえ事が山ほどあんだよ！」

激昂を露わに今にも発砲し兼ねない気迫でクリスが吠える。

そのやり取りからある程度の経緯を察し、クレンは鼻を軽く鳴らしてヴィーヴルの方に振り向きながら目を細める。

「そういうえば、『記号』持ちの彼女達の横槍が入らないようそつちで足止めしてたんだっけ……それも『彼』の指示かい……？」

「これぐらいの仕事はしないと、幾ら君でもクロスと『記号』持ちの両方を相手しつつ件

のノイズ喰らいを守り切るのは荷が重いだろう?……まあそんなボクの健闘虚しく、まんまと件のノイズ喰らいを仕留められた上に装者二人に『記号』の力を与えられてしまうなんて、これはただの失態って程度で済む話じゃないんじゃないかい?」

「……っ……(元はと言えば誰のせいであつ……)」

元を辿れば、デユレンが余計な茶々を入れさえしなければこんな面倒な事にならずに済んだというのにと、心中では彼への愚痴がグツグツと滾るそんなクレンの横顔も涼しげに一瞥し、ヴィーヴルはクレンの前に歩み出て華やかに微笑んだ。

「まあそんな君でも、”彼”の目的の為に此処で失う訳にはいかない。そういう訳だから装者諸君、彼はこのまま連れ帰らせてもらうよ?」

「!何を言つて……!」

「そう言われて、ハイ分かりましただなんて頷く訳ねーだろっ!」



蓮夜達の奮闘により弱っているクレンをこのままみすみす見逃すなど容認出来る筈もない。

ヴィーヴルの馬鹿げた発言に反発する調の声を背に、クリスもいよいよ我慢がならずヴィーヴル達に向けてアームドギアの拳銃を容赦なく発砲するが、対するヴィーヴルは小さな溜め息と共に、徐に口を開く。

妖の 誘いに

応えたまえ……

—……ドバアアアアアアアアンツツツツ  
!!!!!!

「——!!? なっ……?!」

「な、なに……？この、重圧っ……?!」

ヴィーヴルの小さな口から囁かれる、美しき声の歌。

一見流麗で、されども何処か悲哀が込められているようにも聞こえる歌声が響き渡った直後、ヴィーヴルの全身から凄まじいまでの威圧感と共にオーラが放出され、クリスの放った弾を消し飛ばしたただけでなく、彼女が立つ足元の地面に無数の亀裂が走り大きく陥没する。

そのプレッシャーに肌がビリビリと痺れるモノを感じて圧倒される装者達のヘッドギアに、本部の騒然とした声が届いた。

『正体不明の装者の、フォニックゲインが急激に上昇中っ!』

『これは……不味いっ……!お前達っ!』

「ッ!くっそおおっ!!」

通信越しに弦十郎が指示するよりも速く、直感的に危機を感じ取ったクリスが十字に組んだ両腕を前に突き出しながら即座にエネルギーリフレクターを展開し、背後にいる響と蓮夜達を守る障壁を張る。

その間にもヴィーヴルの歌はギアから流れる不穏且つ壮大な伴奏と共に紡がれ続け、彼女の歌声に呼応するかのようにならぬ肩のアーマーが黒いドラゴンの頭部を模した形状へと徐々に変化していき、更に双頭のドラゴンの口から巨大な砲口が突き出て蒼白い炎のエネルギーを収束していく。

胸の楔に

手向けの 賛歌

深淵の地へ……

— No. F115 龍聯獄 Over Drive —

双頭のドラゴンの砲口から同時に放たれた炎のように揺らめく二閃の蒼白い砲撃が、

クリスが展開するリフレクターの障壁を呑み込む。

その威力や凄まじく、リフレクターの反射で軌道を逸らされ左右へと別れた砲撃の直撃と余波だけで大量のビルを瞬く間に粉碎してゆくどころか、月を破壊する一撃をも凌ぐハズのクリスのリフレクターが数秒とすら保たずに次々に消滅していき、彼女の両腕のアーマーも障壁越しだというのに砲撃の威力に耐え切れず徐々に融解し始めていた。

「ぐうっ！ク、クリスちゃんっ!!」

「がっ、ああああ……!!!!ち、くしよおおおおおおおっ……!!!!……っ?」

リフレクターの数も残り僅かとなり、これ以上持ち堪えるのは無理やもしれないと半ば覚悟を決め掛けていたクリスだが、障壁で受け止める砲撃の勢いが心做しか段々と弱り始めている気がする。

現に正面から障壁と拮抗する二閃の砲撃が少しずつ線が細くなっている様子、リフレクターも残り二つというギリギリの状態で砲撃が完全に止まっていき、最早ともに

維持することすら出来ない障壁を消して目を凝らしながら黒煙が立ち込める正面に視線を向けると……

「くっ、そ……逃げられたっ……」

其処には既に、ヴィーヴルとクレンの姿は何処にもない。

唯一残されたのは、ヴィーヴルの砲撃によつて街の大半が消し飛んだ凄惨な破壊の光景が何処までも続くだけ。

リフレクターを解除し、片膝を着いて項垂れるクリスの元に響が慌てて駆け寄っていき。

「クリスちゃんっ……！大丈夫?!」

「ツ……あたしの事は、いいっ……それより、不器男を……!」

「本部……！本部っ！早く救援のヘリを！急ぐデスよっ！」

「蓮夜さん……？目を開けてください……！蓮夜さんっ、蓮夜さんっ!!」

「」

苦悶の表情で振り返ったクリスの視線の先には、ヘッドギアの通信機から本部に救援ヘリを急ぎ要請する切歌と、完全に意識を失ったのか何も反応を返さず、呼吸音も微かにしか聞こえないほど衰弱している蓮夜に悲痛に呼び掛け続ける調の姿が。

そんな彼女達の下に響とクリスも体中の痛みと疲労から足を纏れさせながらも慌て駆け寄って蓮夜の傍に着き、響は蓮夜の血で赤く染まった手を強く握り締めて調と同じように必死に彼に呼び掛け、クリスは両手を地面に着いてそんな蓮夜の無惨な姿を前に自分達の到着が遅れた事を悔い、悔しさから堪らず地面に拳を打ち付けて「クソッ……！」と悪態を吐き出してしまったのだった。

第八章／繋 x X 式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでも m e 侶スは駈 k e 走ル⑦（中）

—— 暗く、深く。

一筋の光すら差さない闇が、何処までも広く続いている。

前後左右、上下も不確かだ

自分が今、一体何処に居るのか……

……いや、それ以前に、今の自分がどのような状態なのかさえ、分からない。

何も視えず 分からず 指先一つ動かせない

もしかすると、このまま自分という存在が消えてなくなってしまうのではないか。

何も理解出来ない仄かな恐怖心から、そんな不安をも覚える意識すらも徐々に薄れていき、手離し掛けた、その時……

——や……………れ……………や……………

——なにか、暗闇の中で、聞き馴染みのある声が聴こえたような……



—— れんや……蓮夜！ほらっ、いい加減起きないと遅刻するよ?!

—— え……………

—— ヴイ、ヴ■イオさん……流石に其処まで乱暴に身体を揺さぶる必要は……

—— もう、ア■ハル■さんは甘過ぎですよ！これぐらいしないと全然反省しないんですから、蓮夜は！

—— だれ……………いや……………

——ほーら……！リ■やコロ■も外で待っていてくれるんだから！早くしないとホントに置いてくからね!!?

——待て……

待って、くれ……

おまえ、は——



「ま、っ…………て…………あ……………？」

——徐々に視界に光が差し、ボヤけた景色がクリアになっていく。

何かを求めるようにいつの間にか伸ばされた白い包帯が巻かれた片手は、見覚えのある天井に向かって掌を翳すように伸びている。

遅れて、聴覚に届く心電図の規則正しい電子音の音。

次いで思わず眉間に皺を寄せてしまうほどの鈍い痛みに全身を襲われ、其処で漸く、黒月蓮夜は自身がまだ生きている事を実感出来た。

「ハハ、は…………っ…………病室、なのか…………？」

首を僅かに動かすだけでも、全身にまるで電流が走ったかのような痛みが走り、苦痛で顔を歪めてしまう。

それに今しがた気付いたが、視えているのは左目の視界のみで、右目側は何か覆われているのか何も視えない。

恐る恐る手を伸ばして右目に触れてみれば、どうやら頭から右目に掛けて包帯がキツく結ばれているようだ。正直、まだ目覚めたばかりで視界が不明瞭なものも相まって、不便を感じる。

それでも状況把握の為、何とか動かせる範囲で首を動かし見える範囲で辺りを見渡すと、どうやら此処は前にも自分が足を折った際に世話になったS・O・N・Gの医務室内のようで、自分は今ベッドの上に横たわって寝かされているらしい。

(……戦場にいたかと思えば、いつの間にか医務室に運ばれて……クレンとの決着を着けてから先の記憶がないという事は、あの後、限界が来て倒れたのか……?)

だとしたら、あれから自分はどれ程の間気を失っていたのだろうか。

どうにかソレを確かめる術はないかと、痛む身体に鞭を打ちグググツ……と上半身を起こしたところで、蓮夜はベッドの右側から俯せに倒れるようにベッドの上に上半身を預けて眠る、少女の姿を見付けた。

「……調……？」

「……すう……すう……」

整った呼吸音と共に肩を僅かに上下に揺らしながら眠るのは、頬にガーゼを貼り付け、袖の隙間から手首に巻き付けた白い包帯が見える調だった。

一瞬、何故彼女が此処に？と目を見張るが、すぐにそんな疑問を抱くのは愚問だと己を戒めた。

（要らぬ心配、させてしまってたんだな……きつと俺が目覚めるのを、ずっと傍で見守つ

ていてくれて……)

その優しさに申し訳なさを、けれども同時に微かな嬉しさを混じえて思わずソツと調の頭の上に手を置く。

その感触に意識を刺激されたのか、調は「ん、う……？」と微かに目を開け、徐に顔だけ上げてボンヤリと蓮夜の顔を見上げていく。

「……れんや、さん……？」

「ウン。蓮夜サンだ。おはよう」

「おはようございま——ッ！蓮夜さん……?!目を覚ましたんですか！身体、何処か痛む所は……?!？」

言葉を交わす内に次第に意識がハッキリとしていき、ガバッ！と勢いよく上体を起こした調はベッドに身を乗り出し蓮夜に詰め寄る。

そのいつもの物静かな彼女らしからぬ勢いに若干圧されつつも、蓮夜は戸惑い気味に何度も小さく頷き返す。

「あ、ああ……動くとも多少痛みはするが、大して問題は……」

「……本当に……？私を心配させたくないから、強がりを言ってる訳じゃないですよね……？」

「も、勿論だ……。前にも話した通り、ベルトやカードの恩恵のおかげか頑丈さには自信があるからな……問題ないとも」

だから心配しなくてもいいと、「むんっ」と両腕を真横にガッツポーズを取って平気な素振りを見せる蓮夜。

……ホントは今の動作の際、「ビキイッ！」と身体の何処かから嫌な音がしてすんごい激痛が走ったのだが、其処はいつもの無表情を保ち、何事もないように頑張っで見せる。

調はそんな蓮夜の顔を「じーっ……」とあからさまに怪しむように訝しげな眼差しを暫し向けていたが、やがて観念したか、或いは何かを察して追求を止めてくれたのか、小さく溜め息を吐きながら身を引いてパイプ椅子に腰を下ろした。

「分かりました……なら、今は信じます。けど、もし何か異変を感じたらすぐ教えてください。さいね？私、蓮夜さんが傷付く姿なんて、もう見たくありませんから……」

「ああ、分かっている。約束する」

「……はい。お願いします……」

調が納得してくれた事に内心ホッと安堵しつつ、改めて今の状況を確認する為、今度は自分が気を失ってからの事を訊ねる。

すると、調が言うには自分は戦場で倒れた後、そのままS・O・N・Gに運ばれたらしく、その後医療班によって治療を施され、丸一日も眠っていたらしい。



説明を聞き終えて「そんなに……」と、自分が想像していたよりも長い時間昏睡して事に驚き、その分、調達にどれだけ心配を掛けてしまったのかと改めて反省する蓮夜だが、そう言えばと同時に思い出す。

あの時、戦場で戦った相手であるクレンはどうなったのか。

あのあと無事に奴を撃退する事が出来たのか今一度質問する蓮夜の疑問に対し、調は眉間に皺を寄せた顔を伏せ、何処か口惜しそうな声音で答える。

「あのイレイザーは……クレンは倒す事は出来ませんでした……。蓮夜さんが気を失った後もまだ生きて……その後、私達も知らないギアを纏った黒い装者が現れて、そのままクレンを連れ去って……」

「……黒い、装者……？」

どういう事なんだ？と聞き返し掛けて、ふと思い出す。

そう言えば、戦場でキマイライレイザーとの戦闘中に本部と通信を繋いでいた際、響達が謎の装者の妨害を受けてるといふ報せを聞かされた。

もしやそいつが……？と、口元を手で覆いながら熟考する蓮夜に、調は顔を俯かせたまま謝罪するように更に深く頭を下げた。

「ごめんなさい、蓮夜さん……。あれだけ苦勞して漸く倒せたのに、みすみす目の前で見逃して……。私が不甲斐ないばかりに……」

と、悔やみの言葉を口にする調に思考を止めて視線を戻し、蓮夜は首を横に振った。

「お前が謝るような事なんてない。寧ろ、深手を負って倒れてしまった俺の事を、本部にまで運んで助けてくれたんだろう？お前にも、響達にも……感謝こそすれど、責める理由なんてある筈がない」

「蓮夜さん……」

「それに、あいつの事も、今は一旦忘れよう。確かにあいつは憎むべき敵かもしれないが、今はそれ以上に、優先すべき事があるだろう？」

「え……あ……」

不器用ながらも優しく微笑み掛ける蓮夜のその言葉で、調は脳裏にあの人を……自分に優しい笑顔を向けてくれた宮司の姿を思い出す。

キマイライレイザーが倒された今、奴に掛けられていた宮司の記憶に関する改竄も解けた筈だ。しかし……

「俺が眠っている間、あの人には……？」

「……まだ、会えていません……私は先の事件の罰から謹慎処分を受けてて、本部に軟禁状態で動けないから、司令が一応、代わりに神社に人を寄越して様子を確かめに行ってくれたみたいですけど……実際に話してみた感じ、『普段と変わらない』と、それだけし

か……」

「……………そうか……………」

キマイラレイザーの改竄の力は、並のレイザーよりも更に強大だとクレンは言っていた。

例えあの化け物を倒せたとしても、今までのレイザーの様に改竄を受けていた間の記憶は消えてなくならず、残り続けるとも。

何より宮司の場合、娘夫婦と愛する孫娘を事故で亡くした当時の記憶を改竄の力により鮮明に蘇らされた。

その亡くした孫娘の悴に押し込められた調という存在が、嘘偽りであったと知った今の彼の心境は、果たして如何なものなのか。

調自身もそれが気がかりでならず、同時にあの人が臆面には出さないだけで、内心で

は今も絶望に苛まれて苦しんでいるのではないかと、そう考えるだけで単純に恐ろしく……

「……大丈夫だ、調」

「……え？」

不意に、蓮夜が白い包帯で巻かれた手を取り、優しく包み込むように握ってきた。

突然の行動に驚く調だが、蓮夜は気にせず言葉を続ける。

「俺が動けるようになって、風鳴司令に何とか頭を下げた外出許可を貰ったら、切歌と俺と、三人であの人に会いに行こう。独りでは怖くても、三人でならきつと乗り越えられる。そうだろう？」

「……蓮夜さん……」

まるで、何もかも見透かしているような、不思議な力強さを感じる眼差し。

それは何処までも真つ直ぐで迷いがなく、何時だって自分の背中を押してくれる頼もしい光。

その瞳に見つめられて、調の心は不思議と安らぎを覚えていた。

(……ああ、やっぱりこの人は凄い……。私の心の不安とか悩みなんか、全部吹き飛ばしちゃうくらいに、温かい……)

蓮夜の手から伝わる温もりを感じながら目を細める調。そんな彼女の柔らかな表情に安堵し、蓮夜は優しく手を離すが……

「あ……………」

蓮夜の手がすりと抜けた瞬間、調の切なそうな声が口について漏れ出た。

「?どうかしたか?」

「……………え?あ、いえ……………??」

名残惜しそうに中途半端に伸ばされた調の手。蓮夜も、当の本人である調も「?」と不思議そうにその手を見て、互いに顔を見合わせて小首を傾げてしまう。そんな中、

—バァンツ!!!—

突如として鳴り響く轟音と共に部屋の扉が勢いよく開かれ、そこから現れた人物を見て二人は驚きのあまり目を見開く。

そこには、息を荒げて額に汗を流した切歌の姿があり、二人の姿を視界に収めると、安堵したように小さく笑みを見せた。

「れ、蓮夜さん……………目が覚めたデスね……………!良かったデス……………ほんつとに無事で……………」

「！」

「き、切ちゃん!?! どうしてここに? 学校は……?」

突然の来訪者に戸惑う調に対し、「体調不良を理由に早退してきたデス!」と軽く答えながら切歌は蓮夜の方へ歩み寄ると、その手を取って握り締めた。

「蓮夜さんがどうしても心配で、居ても立っても居られず学校サボって来ちゃったんデス。本当はアタシも休んで傍に付いていたかったんデスけど、「お前まで学業を疎かにしてたら不器男が目を覚ました時に罪悪感でいたたまれなくなるだろ!」ってクリス先輩に止められて……」

「……そうだったのか……ありがとう、心配してくれて……それに、すまない……大事な学業を疎かにして、学校を抜け出してまで駆け付けてくれて……」

「いいんデスそんなの……でも、蓮夜さん……もう、無茶しないで下さいよ……? 本当は、ホントに心配したんデスからっ……」



「……ああ、分かった……約束する。絶対に、もうあんな真似はしないと……」

「……はい」

互いに視線を合わせ、優しい声で語り合う蓮夜と切歌。

その様子を眺める調は二人の会話を聞きつつ、少しだけ頬を膨らませて不満げな顔を見せる。

（むう……何だか私、空気になつてるような……？）

いや、まあ、別に嫉妬している訳ではないが……。

ただ、蓮夜の身を案じた自分が先に彼と一緒にいたというのに、自分は蚊帳の外にいらるようで少々寂しかったのだ。

それだけ。ホントにそれだけだ。他意なんてない。はず。

しかし、その感情を素直に伝える勇氣はない為、二人に気付かれないようにそつぽを向いて拗ねるしかないのだが……

「……あー、ところで調、ちよつといいデスカね？」

「……え？……うん……」

そんな調に、苦笑い気味に声を掛けてくる切歌。

一体どうしたのだろうかと首を傾げる調だったが、切歌は何故か蓮夜の隣から調の隣へと移動し、何処となく緊張した様子で口を開いた。

「あのデスね……その……」

何かを言い淀んでいるかのように言葉が途切れる。

言いたい事はあるけれど、それを上手く表現できない。

そんな風に見えた切歌の様子に調は何となく察すると、微笑みながら彼女の手を握って優しく言葉を掛けた。

「大丈夫だよ……ゆっくりでいいから、話してみて？」

「う、うん……すー、はー……」

調の言葉を受け、深呼吸をして気持ちを落ち着ける切歌。

そして意を決したように息を大きく吸い込み、遂にその一言を口に出した。

「調——おかえりなさい、デス……」

「……………え？」

照れ臭そうにはにかみながらも、精一杯の想いを込めて告げられた言葉を聞いて調は一瞬キョトンとするが、切歌は構わずに続けていく。

「戦いの最中も、終わってからでも暫くゴタゴタが続いてて、中々言えずにずっとモヤモヤしながら待つてたんデスよ……調の帰りを、調におかえりつて言う為に……」

「切ちゃん……」

「だから、その……調さえ良ければ、また一緒に暮らして欲しいデス……調と一緒にじゃない生活なんて、アタシ、耐えられないんデスよ……!」

そう言って、涙を浮かべながら調に抱き着く切歌。

突然の事に驚くものの、調は優しく切歌を抱き締め返すと、耳元で囁くように言葉を返した。

「……うん、ただいま……ごめんなさい……それから、ありがとう……私の帰りを、信じて待っていてくれて……」

「調……」

「ふふ、やっぱり切ちゃん匂いが一番安心するな……何だか懐かしい気分になる……」

「ば、馬鹿にしないで欲しいデスね！それでも、結構気にしているんデスよ……！」

「ううん、バカになんかしてないよ……だって、私は切ちゃんの事が大好きなんだもん」

「……へ？し、しらべえっつ!!」

「きやあつ!?!き、きりちゃん、苦しい……！」

感極まったのか、更に強くを抱きしめる切歌。

その勢いでベッドに押し倒されてしまいそうになるが、「こらこら、一応重症人がいるのだから怪我人を困らせるような事をするんじゃないぞお前達」と呆れた表情で蓮夜が注意する事で何とか事なきを得る。

それから何とか切歌を押し退けた調は改めて蓮夜の方へ向き直り、頭を下げた感謝の意を示した。

「蓮夜さんも、改めて、この度は助けて頂いて本当にありがとうございます。貴方のおかげで、私はこうして無事に帰ってこれました。お礼を言うのが遅くなってしまったけど……本当に、ありがとうございます」

心からの感謝の言葉。

調にとって蓮夜は迷っていた自分の心を救ってくれただけでなく、切歌や響達、大切な人達との繋がりを取り戻せる未来を示してくれた恩人だ。

だからこそ、その感謝を伝えたかった。

しかし、蓮夜は調の言葉に対して小さく首を振ると、優しい声音で語りかけるように言葉を紡ぐ。

「俺の方こそ、感謝してる。調が自分自身の意志で”選択”を選んで、戻って来てくれて、本当に嬉しい……こうして、お前と切歌がまた一緒に笑い合えて、幸せでいてくれるだけで、それだけで充分だ。だからそんなに畏まらないで、もつと気楽に接してほしい。調達が無事なら、俺はそれでいいんだ」

「……蓮夜さん……」

まるで親のように慈愛に満ちた眼差しを向ける蓮夜に、調は思わずドキリとしてしまう。

頭から右目に掛けて包帯を巻き、肌にも切り傷の跡が見えてボロボロで格好も付いてない。まるでミイラ男だ。

でも、そんなのが気にならないぐらい、その表情は今まで一緒にいて見た事がない程に優しく、温かな笑顔だ。

そんな彼の顔を見て、調は無意識に頬を染めてしまう。

(?……何だろう……今の蓮夜さんの笑った顔を見ると、胸の奥がドキドキして……?)

初めて見る彼の表情。

そのせいか、調は鼓動が高鳴るのを感じて戸惑ってしまう。これまでに感じた事のない感情だが、それが不快だとは全く思わなかった。

むしろ心地よくすら感じている。何故なのか。理由は分からない。

それでも、調は不思議と満ち足りていた。



「調？どうかしたデスカ？」

「えっ……う、ううん、何でもないよ……」

「何でもないって、でも、顔が何か赤くなってるような……？」

「どうしたんだ？……ッ！まさか、昨日イレイザーから受けた傷の後遺症が今になって出てきたのかっ？！だとしたら今すぐにでも医者に診て、っ……あッ……！！」

「あ……！！」

「ああ！む、無理に動いちや駄目デスよ！」

慌てて起き上がろうとする蓮夜だったが、身体に痛みが走つたらしく途中で動きを止めて苦悶の声を上げ、更にはバランスを崩してベッドから落ちそうになる。

調はそれを見ると慌てて駆け寄ろうとするも、彼女より先に切歌が速く動き出し、倒

れそうになる蓮夜の頭を胸で抱き抱えるようにギリギリで支えた。

「う……………す、すまない……………助かる……………」

「いえ、無茶しないでくださいデスよ……………!」

「……………(じー)」

「……………ほえ?ど、どうしたんデスカ調?」

「別に……………ただ、やっぱり大きい方が良いのかなと思って……………」

「へ?どういう意味デスカそれ……………つて、ひええああつ!ちよちよつ、蓮夜さん……………?!胸の中でモゾモゾしないでください……………!くすぐったいデスよお!」

「い、いやつ、単に離れようとしているだけなんだがつ、今の痛みのせいか身体が上手く動かせな……………うぐうつ」

「ん、あつ……い、今アタシがベッドに戻しますから……！大人しくじつとして下さい  
德斯よ！……もお」

「……………」

顔を赤くしながら「しようがない德斯ねえ……」とボヤきながらも、顔色の悪い蓮夜を優しくベッドに戻す切歌の表情が心做しか満更でもないように見える。

そんな二人を見ていて何故だろうか。先程まで満ち足りていた筈の感情が一転し、妙にムカムカしてしまう調だが、そんな彼女の様子に気付かず、切歌が何かを思い出したようにパチツと両手を合わせた。

「そうでした……！そういえば此処へ来る前、スーパーに寄ってお見舞いのリングを買ってきたん德斯よ！」

「あ、いや……気持ちとはとても有難いんだが、今は少し、固形物は喉に通りそうになく

……」

「と違って、食べやすいようにすりおろしておいたリンゴがこちらデス」

「待てウソだろいつの間に。というか今何処から出したその皿」

「細かい野暮は言いつこなしデス！いいからほら、あーんデスよ、お口あーん！」

「いや今の一瞬でツツコミ所が多すぎて食欲よりも驚きの方が勝っているんだが冷たア?!待てっ、スプーンをグイグイ押し付けるんじゃない!リンゴを買ってきてくれたのは有り難いが自分で食べれる!流石にこれ以上甘える訳には……!」

「何を言ってるデスカ!蓮夜さんはまだ安静にしてないといけない身なんデスから、病人は黙って言う事を聞くものデスよ!」

「スプーンを握れないほど酷い訳じゃない!過保護が過ぎる!俺の母親なのかお前は!」

「ハーイ、ママデスよ〜♡」

「事情を知らない人間が聞けば変な勘違いをされる冗談は止せえ！」

「ぐあああああつ……!!」と、痛みと痺れのせいでまともに力も出せないぷるぷるの両手ですりおろしリングを乗せたスプーンを持つ切歌の手を必死に抑えながら顔を反対側に背ける蓮夜。

そんな普段の蓮夜からは見られない弱々な姿とからかい甲斐のある反応に切歌は終始ニコニコで楽しそうにスプーンをグイグイ押し付けているが、一方で、そんな二人のやり取りを静観している調の方は心中穏やかではなかった。

（何だろう……二人を見ると、凄くイライラする……）

今まで感じた事のない感覚。

この感情は何なのか。

大好きな親友と恩人、二人が仲睦まじくしているのはとても良いことなのに、どうしてこんなにもモヤモヤしてしまうのか。

胸に手を当ててその原因を探ろうとしてみるも、今まで感じた事のない感情に答えを見い出せる筈もなくモヤモヤが深まるばかりな中、蓮夜と切歌のあーん！対決（？）の展開に決着がついた。

「もうっ、蓮夜さんったら強情デスね！……そんなに、アタシの手料理を食べたくないデスカ……？」

「っ、いや、そういう訳ではないんだが……ああ、クソッ……分かった、降参だ……そこまで言うのなら、一口だけ……」

「本当デスカ！なら、あー……」

(……………！)

此処まで強く拒否され過ぎて酷く悲しそうに落ち込む切歌の顔を見て罪悪感に負けてしまい、遂に折れた蓮夜の口に切歌が嬉しそうな笑顔でスプーンを差し出す。

そんな彼女の顔とスプーンを交互に見て、蓮夜も流石に恥ずかしそうに逡巡して目を伏せると、覚悟を決め、切歌の方を向きながら恐る恐る口を開けて、スプーンが口の中に入れられようとした。瞬間、

——今まで静観していた調がいきなり蓮夜へと飛び掛かり、彼の両手首を抑え付けるようにベッドに押し倒してしまったのだった。

「……………え？」

「は……………え……………？し、調……………？」

「あ……………」

ポカーンとする切歌、突然の出来事に呆気に取られている蓮夜、そして自分が何をしたのか理解できずに放心状態に陥っている調。

そんな三者三様の反応を見せる中、調は放心したままふと、ひ弱な筈の自分の力に押し倒されて戸惑う蓮夜の吸い込まれそうなアメジストの瞳を呆然と見つめ、同時に、まるで走馬灯のように色んな記憶が頭の中を瞬間瞬間駆け巡った。

初めて出会った戦場で、彼に助けられたこと。

仮面ライダーとして頼りになるけど、その分私生活が全然ダメダメで、自分達が家に遊びに行けばいっつもトラブルを起こしてたこと。

動物に死ぬほど嫌われてるのに、それでも小さな子猫の為に頑張って里親を探す彼を手伝ったこと。



——あの水辺で、誰にも吐き出させず己を責めてばかりいた自分の罪に耳を傾けて、真摯に向き合い、心の内に抱えていた全てを受け止めてくれたこと。

「——蓮夜さん」

「え……あ、ハイ……？」

調の声色がいつもより低い事に戸惑い、思わず呆然と返事をしてしまう蓮夜。

そんな彼の敬語にツツコミもせず、調はベッドの上に仰向けになった蓮夜に馬乗りになると、そのまま彼の身体に跨り、つま先立った足の先のシーツが「シユルツ」と擦れ、ベッドのスプリングがくすんだ音を立てる。

その衝撃的な光景に切歌が目を見開いて「あわ、あわわわわっ……?!」と顔を赤くして言葉を失い立ち尽くす中、眼下の蓮夜に真剣な眼差しを向けたまま、調は心の内で想いを巡らせる。

わかった。気付いた。

いま、漸く。

……でも、いいの？

自分は罪人だ。

赦されない罪を犯した人間だ。

そんな自分が、彼と釣り合いなんか取れる筈がない。

分かり切ってる事だ。

解ってる。

分かっている。

わかっている。

——  
でも

この溢れる想いを止められる術を、”私はワカラナカッタ”。

「……すきです。貴方の事が。……私と、付き合ってください」

「……………」

「……………」

……………。

「え」

「うえ え え え え え え え え え え え え え え  
ええええええええええええええええええええええええええええ  
ええええええええええええええええええええええええええええ  
!!!!?」

「!!!!?」

静寂に包まれた病室内に木霊する切歌の絶叫。

あまりの衝撃と超展開の連続に硬直する蓮夜。

そして調は、今更になつて恥ずかしくなつたのか、顔を真つ赤にして蓮夜の胸元に顔を埋めてしまう。

だが、それも束の間。

切歌の大絶叫はどうやら外にまで響いてたらしく、何事かと騒ぎを聞き付けた医療スタッフ達が駆け付けた時には、切歌はすりおろしリングが残った皿とスプーンを両手に顔を真つ赤に目をグルグルさせて何事かを大声で叫びながら室内を駆けずり回り、調はとつくに蓮夜の上から退いてベッドの傍らに置かれた椅子に背中を向けて座り込み（ただよく見ると髪の間から微かに見える耳が赤く染まつてる）、蓮夜はベッドの上でただに状況を把握しきれずに『（。 ㇿ。 ）』みたいな顔で調の背中をずっと見つめていくという、何とも力オス極まりない空間が出来上がっていたのだった。

第八章／繋××式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×  
黎明・それでも m e 侶スは駈 k e 走ル⑦（後）

——あれから数日後。

調のあの衝撃的な告白のその後の経緯に関しては、一先ずは割愛させてもらうとして……。

まず蓮夜の容態についてだが、普通であれば全治に数ヶ月の期間を要する怪我はやはり今までの例に漏れず、短期間の間に驚くべき速さで普通に歩けるようになるまで回復した（無論入院してる間、お見舞いにくれてくれた響に加えてクリスマスまでも参戦し、またも無茶した件についてこれでもかどこっぴどく叱られる羽目になったが

その後、何とか歩けるようになるまで快調した蓮夜は弦十郎に調の謹慎処分を一日だ

けでも解いてもらえないかと頭を深く下げて頼み込み、許可が下りるまでの手続きなど長い紆余曲折がありつつも、調の心情を察してくれた弦十郎の鶴の一声により、何とか一日だけの外出が許される事となった。そして……



「——うぐう……な、何だか今更ながらすつごい緊張して、胃がキリキリしてきたデスようっ……」

調神社の入り口前。其処には先の事件から実に数日振りに、バスを乗り継いでこの場所へ足を運んだ調と切歌、そして未だに体中に包帯が巻かれたままで松葉杖を片手に突く蓮夜達三人の姿があつた。

来訪の目的は無論、イレイザーの改竄から解き放たれた宮司の様子をこの目で確かめる為だ。

ただしかし、いざ神社に足を踏み入れようとした矢先に切歌が苦い顔でお腹を抑えて足踏みしてしまい、そんな彼女の姿に蓮夜も思わず苦笑いを浮かべてしまう。

「緊張するのが調ならまだ分かるが、お前まで緊張する必要はないか？」

「うう……そ、それはそうなのデスが、あれから宮司さんに直接会うのはアタシもお久方ぶりになりますし、否が応でも緊張は拭えないものなんデスよっ……！」

「其処は複雑な乙女心を汲み取って欲しいデス！」と両手を前に上下にブンブン振りながら力説する切歌なのだが、正直乙女心はあまり関係ないのでは……？と思わなくはない。

そんな彼女の言葉を苦笑いと共に受け流しつつ、蓮夜はチラツと背後に目を見遣る。

其処には月神社を前に右手を胸に当てて、何処となく緊張した面持ちで無言のまま神社の社を見上げる調の姿があつた。



「……………調、大丈夫か？」

「……………はい。私は平気です」

蓮夜の問いに短く返す調。

しかし、心做しかそう答えた声色は微妙に固く、彼女の身に纏う雰囲気も些かの緊張感に包まれているようにも見える。

それを察し、蓮夜と切歌は僅かに思考する素振りを見せた後にお互いに顔を見合わせ、頷き合うと、切歌は調の左側に、蓮夜は右側に立ち、それぞれ彼女の手を取って握り締めた。

「……………二人共……………？」

「きつと大丈夫デスよ、調！」

「俺達は出来る事をやったんだ。だから信じよう。今は」

「………………。うん、そうだね…………」

先程と同様に短く、しかし、何処か柔らかな声音と共に頷き返した調はギュツと二人の手を握り返す。

そして静かに目を閉じ、何度か深呼吸を繰り返した後、調は意を決したように瞼を開けた瞳で神社をまっすぐ見据え、切歌と蓮夜と共に足を踏み出した。



境内を三人で軽く散策し、暫くした後。

ふと視界の端に見覚えのある後ろ姿が映ったのに気付き、蓮夜は反射的にそちらへと顔を向ける。

其処には予想通り、此方に背を向けたまま境内の片隅に佇む一人の男性の姿があり、恐らく掃除中だったのか、竹箒を手にしたままその人物は蓮夜達に気付かぬまま空を見上げては何か物思いに耽っているように見えた。

「……………宮司さん」

「……………おっと、これはこれは。黒月さんに暁さん。それに”月読さん”まで。いらっしやっていたんですね。いやはや、気付かずに申し訳ない」

「……………っ」

蓮夜が声を掛けた途端にハツとなり、振り返った男性……キマイライレイザーの改竄から解放されてすっかり元に戻った宮司は、あいも変わらざる茶目つ気を交えた人当たりの良さそうな笑顔で恥ずかしそうに後頭部を搔き、三人に向けて頭を下げた。

その変わらぬ姿に半分安堵を覚えつつも、同時に宮司から”月読さん”と呼ばれて胸にズキッと針を刺されたような痛みを覚え複雑げに眉を潜める調を横目に、蓮夜は切歌と共に思わずおすと宮司に向けて頭を下げた。

「ご無沙汰しています。本当ならもつと早くに顔を出したいと思っていたのですが、あの後色々ゴタゴタがあった上に、自分もこの有り様で……遅くなってしまい、申し訳ない……」

そう言いながら、宮司に頭を下げたまま謝罪する蓮夜。

それを見た宮司は一瞬だけ驚いた表情を浮かべるも、すぐに穏やかな笑みで首を横に振ってみせる。

「いえいえ、そんな事は気になさらないで下さい。私としても、貴方達には本当に感謝しているんですから」

「……………えっ？」

予想外の返答だったのだろう。

思わず驚きの声を漏らして頭を上げる蓮夜に、宮司は小さく微笑んで続けた。

「事情は皆さんのお仲間様方から既に大体伺っております。私があのにレーザーとやらの怪物の被害に遭っている間、皆さんが私の為に身を粉にして奮闘してくれた事も……………ですので、皆さんが謝る事などない。寧ろ謝罪せねばならないのは、私の方です。私なんその為に苦勞を掛け、あまつさえ黒月さんには其処までの怪我を負わせてしまい……………ご迷惑をお掛けして、誠に申し訳ありませんでした」

「……………そ、そんな事はないデスよっ！」

深々と頭を下げる宮司に切歌は慌てて両手を左右に振り、否定する。

すると、そんな三人のやり取りを無言で静観していた調が宮司の前に恐る恐る歩み出て、口を開いた。

「あの、宮司……さん」

「?はい、如何しました?」

「あ、えと……その……」

声をかけてきた調に対し、頭を上げた宮司は不思議そうな面持ちで小首を傾げる。

その視線を受けてか、調は言葉を詰まらせて視線を泳がせてしまうち、そんな調を見て蓮夜は一度目を伏せた後、瞼を開いて彼女の代わりに宮司に質問を投げ掛けた。

「俺達が今日此処へ訪れたのは、貴方の様子をひと目確かめておきたかったからなんで

す……。今回俺達が倒した敵の力は、俺達が知るソレとは違って強力なモノで……。なので、奴の被害から開放されたとは言え、貴方に何かしらの後遺症が残っていないかと、どうしても心配で……」

「成る程、そういう事でしたか……。それは大変御心配をお掛けしてしまいましたね」  
蓮夜の言葉を耳にし、宮司は納得したように何度か首を縦に振る。

そして少しの間を置いた後、彼は柔らかな笑みを浮かべて調を見つめ、

「心配なら入りませんよ。私はこの通りピンピンしております。なにより被害に遭ったとは言え、どうにもその間の記憶が曖昧でしてねえ……。実は”何も憶えていないのですよ”、はっはっはっ」

「……………え？」

愉快そうに笑いながら発せられた宮司の言葉に、調と切歌は揃って呆けたように目を

見開く。だが、そんな二人に構わず宮司は尚も朗らかな調子のまま続けた。

「しかし、記憶がないと言うのもこれはこれで恐ろしくはありますなあ。私めもそろそろ良い歳。これでも記憶力がいい事が密かな取り柄だったので、いやはや、痴呆や認知症などが入り始めるとこのような感覚になるのでしょうか？そういうった意味では実に恐ろしい怪物に襲われてしまったと今更ながら恐怖が——」

「…………ちよ、ちよつちよつ！待って下さいデスよー」

「憶えていないって…………ほ、本当に…………？イレイザーの改竄を受けてた間の記憶を、一つも…………？」

「ええ。最後に記憶しているのは、そうですね…………皆さんが捨て猫の里親探しの為にうちの神社へ貼り紙を貼りに訪れ、その後、皆さんがあのにイレイザーとやらの怪物と戦っていた間に逃げた先で他の怪物に襲われたところまで…………でしたかな？」

ふうむ、と、顎に手を添えて空を仰ぎながら自身の記憶を辿る宮司を見て、共に呆け



ていた切歌と調が蓮夜の方に振り返る。

「れ、蓮夜さん、これって……？」

「クレンの話だと、暴走したノイズイーターの力は強力で、仮に改竄が解けたとしても  
ずっと記憶は残り続けるって話だった筈じゃ……」

「……………」

「……………蓮夜、さん？」

切歌達の問いに答えず、ただ俯いて黙り込む蓮夜に調は不安げに声をかける。

すると蓮夜は静かに顔を上げ、宮司を真っ直ぐに見据えると、

「どうやら、記憶が残る後遺症云々に関しての心配は、要らぬ杞憂だったようだな」

「……………へ……………？」

予想外の返答に、切歌と調が間の抜けた声を発する。

そんな二人の反応を見てクスリと笑うと、蓮夜は続けて言った。

「あくまでも俺の推論だが、恐らくお前達が俺にくれたあの力……イガリマとシユルシャガナのお陰なのかもしれない。何せ、二つの『記号』を一つにした力なんだ。その分パワーも、今まで俺が手にしてきたどの姿よりも強力だったからな……。お前達がくれた力だったからこそ、奴の強大な改竄の力をも上回り、改竄の影響から解放された後もその間の記憶が残らずに消えてくれたのだと思う」

「！」

「そっか……………アタシ達の力で……………それなら良かったデスっ……………！」

蓮夜の説明を聞いて納得し、切歌は安堵の息を漏らす。

一方で調も蓮夜のその説明で自分が危惧していた心配が本当に杞憂に終われたのだと安心するが、同時に、偽りだったとは言え宮司と共に家族として過ごしたあの日々も全て無くなってしまったのだと、一抹の寂しさも覚えて複雑げな表情で俯いてしまうが……

「――月読さん」

「え……あ、はい……」

ふと、宮司から名を呼ばれ、調はハツとなつて彼を見る。

宮司の方を見ると、彼は微笑を浮かべたまま調を見つめていた。

「貴女方にも、本当に感謝してもしきれません。皆さんの仲間からの又聞きではありませんが、貴方や皆さんが奮闘してくれたからこそ、今私はこうして無事に生きていられるのだと聞かせて頂きました。このご恩は、決して忘れません」

「……そんな……感謝なんて……私にはそんな言葉、掛けてもらう資格なんて……」

今回の事件。自分が進化前のカメレオンレイザーを逃したせいで、一体どれ程の数の被害者を出してしまったか。

被害者遺族の気持ちを思えば、自分は糾弾されるべき罪人だ。それ以外の何者でもなく、これから先、どんなに贖罪を繰り返しても償い切れるものではない。

それを重く理解しているからこそ、宮司からの謝辞に戸惑い、調は視線を落として俯く。

そんな彼女を見て、宮司はフツと小さく笑みを浮かべると、ゆつくりと彼女の元へと歩み寄る。

「……月読さん、貴女の優しさはとても尊いものだと思います。ですが、あまり自分を責めない方がいい。この世に生きている以上、誰だって過ちを犯します。勿論、それは私にも言える事。だからこそ、人は互いに手を取り合い、赦し合うのです」

「……………」

「勿論、だからと言って誰も人を憎まずにいられる訳ではない。誰もが聖人君子のように在れる訳でもない。むしろ、そのような人間など、きつと世界中を探しても何処にもいないでしょう。それでも……………」

「…………それでも…………前を向いて、歩き続けたいといけない…………犠牲にしてしまった人達の分まで、その命を…………罪を、背負って…………」

調の言葉を聞いて、宮司は静かに首肯し、そのまま彼の手がそつと調の手を取った。

突然の事に驚いて顔を上げると、そこには優しい笑顔があった。

「貴女は強い娘です、月読さん。自分の犯した罪をしつかりと見据え、向き合っている。しかし、その強さを一人で抱え込む必要などありません。どうか、お友達を頼つてあげてください。…………貴方がそうして貰えたからこそ、私は今、こうして此処にいるのです

から」

「——っ」

調はその笑顔に、胸が締め付けられるような感覚を覚え、思わず涙腺が緩み、泣きそうになる。

するとそのタイミングで、調と宮司の手を誰かが握った。

そちらへ目を向けると、そこにいたのは切歌だった。

「そうデス調、アタシもいるんデスよ？調は一人なんかじゃない、皆が傍に付いてるデス。勿論蓮夜さんも！」

「ふふ、まるでオマケみたいに人の事を言ってくれるな……」

「うえっ?!べ、別にそーゆー意味で言った訳じゃないデスよ?!誤解デスからね?!ごー

かーいー！」

慌てて弁明をする切歌を見て、蓮夜はクスリと笑う。

そんな二人を見て、調もまた頬が緩むのを感じた。

（やっぱり……この二人は凄いな）

切歌の明るさは、自分にとっていつだって光だった。

蓮夜の優しさは、行き場を失い己を責める事しか出来ずにいた自分を支えてくれた。

二人がいなければ、自分は今も尚、己の罪に押し潰されていたかもしれない。

調は心の中でそんな二人に感謝しつつ、ふと蓮夜の方へ目を向けてみると、彼は切歌の慌てる姿を見て笑っていた。その様子に、調もつられてクスツと笑ってしまうが……

「……………」

(……あれ……?)

その瞬間、調は蓮夜の表情に違和感を覚える。

切歌と話しながら一見楽しげな様子を見せているが、ほんの僅かな一瞬、どこか憂いを帯びた、切なそうな横顔を見せたのだ。

と、  
普段の彼からは想像も出来ないその表情の変化を見逃さず、調が内心戸惑っている

「——な——う——！」

「！わっ……あれ、この子……？」

突如、足元から鳴き声が聞こえ、調が下を見ると、其処には一匹の見覚えのある子猫



がいつの間にか調の足に体を擦り付けている姿があった。

整えられた黒い毛並みに、無邪気に見上げてくるつぶらな瞳。

間違いない、この子は……

「おやおや。いけませんよ、人の足元に寄つて来ては。気付かれずに踏まれると怪我を  
してしまいます。ほら、こつちへおいで」

「ナアアンツ……！」

宮司がその子を抱き上げると、途端に子猫は不満げに鳴き出す。

そんな子猫の反応を見て、宮司は困つたように微笑を浮かべて肩を落とした。

「やれやれ……。どうにも私は嫌われてしまつているようですね。それでも人には好か  
れる質なのですが、やはり子猫にはこの私から漂うダンスがまだまだ伝わらぬと

「いう事ですかなあ」

「(ダンデイ……?) ……ええと……それより、宮司さん、その子つてもしかして……」

「うん? ああ、ええ。皆さんが里親を探していた子です。実は皆さんが帰った後、いつの間にか境内に居ましたね。貼り紙にあった写真から特徴が似ていることからそうだと思います預かっていたのですが、ここ数日、共に過ごす内に何だか愛着が湧いてしまいました。良ければ私の方で引き取らせてもらえないかと、その件についても皆さんの来訪を心待ちにしてたのですよ」

「! 本当デスか!?! じゃあ……!」

調と宮司の会話が耳に届いていたのか、蓮夜とじやれ合っていた切歌はパアツと明るい笑みを浮かべて宮司の前に駆け寄ると、宮司は子猫を抱いたまま笑顔で頷き返す。

「はい。まだまだ懐いては貰えていませんが、皆さんがお許し下さるのなら、私が責任を持って育てましょう。この老いぼれの身、神社に一人身というのも寂しいので」

「やったデス!!良かったデスねえ、お前〜♪」

「ニヤアウン……」

切歌は自分の事のように浮かれた様子で喜びの声を上げ、宮司の腕の中から子猫を抱き寄せてウリウリと顔を押し付けながら抱きしめる。

その過剰なスキンシップに少しだけ嫌そうに声を上げるが、それでも子猫は抵抗する事なく切歌の腕の中に収まっていた。

「ありがとうございます、宮司さん。何から何まで本当に、何てお礼を言ったらいいか……」

「いえいえ、お気になさらず。私も新しい家族が増えて嬉しい限りです。それに……きつとこれで、あの人も安心するでしょうから……」

「?あの人……?」

「いいえ、何でもありませんよ。それよりも、良ければこの子と遊んでは頂けませんか? 私よりもお二人に懐いているようですし、きつとこの子も喜んでくれるでしょうから」

「分かりました。切ちゃん、一緒にこの子を可愛がろうね」

「勿論デスともーもー揉みくちやになるまで可愛がつてやるデスよー!!」

調の言葉に切歌は大きく返事をして、早速離れた場所で二人で子猫を構い始める。

すると、その様子を見ていた蓮夜は宮司の元へと歩み寄り、神妙な口調で話しかけた。

「……大した演技力、でしたね……正直、傍から見ても脱帽モノでした……」

「……ふふ。そう言いながら黒月さんこそ、私の意図を汲み取って瞬時に合わせて下さるとは、素晴らしいアドリブ力でした。もしかすると、役者としての才能もあるやもし

「れませんか?」

「……………」

宮司からの戯けた賛辞に、蓮夜は特に嬉しさも何も感じさせない無表情のまま口を閉ざしている。

そんな彼を横目に、何処か気まずそうに目線を下げる宮司に向けて、口を閉ざしていた蓮夜が子猫とじゃれ合う調と切歌を見据え、重たい口を開く。

「イレイザーから改竄を受けていた間の記憶が、一切ない。

——さっきの話、”本当は嘘だったのでしょうか”……………」

「……………」

蓮夜の問いかけに、宮司は何も答えずただ沈黙を貫く。

だが、それが何よりの肯定である事は明白だった。

「否定はしない……という事は、その通りだと受け取つても構わないんですね……？」

「……ええ……とは言え、全てを覚えている訳ではありません。ほぼほぼ断片的な記憶しか残っていませんが……それでも、彼女と過ごした記憶だけは、今でも印象に強く残っています」

そう言つて、宮司は切歌と共に子猫とじゃれ合う調に慈愛に満ちた穏やかな眼差しを向けている。

蓮夜はそんな彼の横顔を見て、複雑げに眉を顰めて俯く。

「理由は……何となく察しは付きます……調の為、ですね……」

「…………ええ。あの子はもう、十分に苦しみました…………ですからこれ以上、あの子の重荷にはなりたくないのです…………。勿論黒月さん、貴方に対しても」

「…………え？」

予想外の言葉に、蓮夜は思わず呆けた顔を浮かべて宮司の顔を見る。そんな彼の反応を見てか、宮司は小さく笑いながらも、何処か申し訳なさを滲ませながら続けた。

「貴方は、彼女達に”真相”を悟られぬよう、”あの私”との約束を果たしてくれました…………。そのように身体だけでなく、”心”までも傷付けてまで…………」

「……………」

哀しみ、陳謝…………。そんな様々な感情が入り交じったような沈痛な面持ちを向ける宮司の言葉に、蓮夜は口を閉ざし、静かに目を伏せ、”あの時の記憶”を脳裏に思い返した。



——それは、蓮夜がカメレオンレイザーを庇った調の真意を聞き出す為、調神社を訪れ、朝の水行を行っているという彼女に会いに向かおうとした矢先の話……。

「——黒月さん。その前に少し、お伺いしても宜しいですか？」

「……？」

背後から不意に呼び止められ、振り返る。

其処には、箒を手にしたまま佇む宮司が、何処か複雑げに、哀しげに見える表情で蓮夜の事を見つめていた。

「宮司さん……？」



「…………黒月さん…………貴方は…………」

困惑する蓮夜に、宮司は一度言葉を詰まらせる。しかし、何かを決意したのか、彼はゆつくりと口を開き、真剣そのものの瞳を向けた。

「黒月さん、貴方は…………知っているのですよね？私の身に起きている、この不可思議な現  
状…………この拭い去れない、”謎の違和感”の正体を」

「…………っ!!」

宮司の予想外の言葉に、蓮夜はハツとした様子で息を飲む。

そして、その反応を見た宮司もまた、やはり…………といった表情を見せた。

「もしや、とは思いましたが、やはりそうでしたか…………恐らくこの事は、調や立花さん達  
もご存知なのですね？」

「っ……どう、して……何故……？」

「『分かったのか』、ですか？ふふ、ズバリ年の功……とカツコつきたい所ではありませんが、単純な話です。私もそれなりに長く生きていますので、人の気配を読む事には多少は長けております。ですので貴方達が纏う雰囲気の違いや、仕草の変化……そこから感じる、僅かな違和感も分かかってしまうのです」

宮司はそう言つて苦笑いを浮かべると、軽く肩をすくめる。

そんな彼に向けて、蓮夜は何とも言えない複雑な表情を見せると、静かに目を閉じて深呼吸をする。

そして、目を見開くと真っ直ぐに宮司を見据え、重い口を開いた。

「いつから、その事に気付いていたんです？」

「……最初に違和感を覚えたのは、あのイレイザーとやたらに襲われてから目覚め、あの子

や皆さんと応接間で話していた時のあなた方の反応からでした。私を見て戸惑われる皆さんの様子を見て、何かが可笑しいと感じ、昔のアルバムまで取り出して、其処に映る調との思い出の数々を見て……それでも、内心ではこの違和感を拭い去るには至らず……今朝方から、何かを悔いるように思い詰めた顔を浮かべるあの子の姿を見て、私の中の違和感は漸く確信へと変わりました」

「……………」

「どうか、教えては頂けませんか？私……いえ……」今の私”は、一体何者なのでしょうか……………」

切実なる宮司の言葉に、蓮夜は黙って俯く。

その声音からは仄かな不安と焦燥感が感じ取れ、宮司自身、自分の身に起きた異変に相当な恐怖を抱いている事が分かる。

蓮夜は暫くの間沈黙を貫くと、やがてゆつくりと口を開き、語り始めた。

「貴方を襲った怪物、イレイザーには、物語を……世界を改竄するという恐ろしい力がある……貴方は今、その力の影響で本来ならありえない人生を歩んでいる状態なんだ……その、本来の人生というのは……」

「――」

蓮夜はそこで一旦言葉を切ると、宮司の様子を窺う。

彼は蓮夜の言葉を静かに待っているようで、ただジツと蓮夜の顔を見つめていた。

蓮夜はそんな宮司の視線を受けながらも数秒程黙っていると、意を決したように再び語り始める。

「貴方と調の今の関係は、悪意ある怪物の手によって作られてしまった、仮初……貴方の中に、調と共に過ごしてきた人生も、彼女への愛情も……全ては、イレイザーの改竄によって植え付けられたものに過ぎない……本来の貴方の人生に、月読調という少女

の孫娘は存在しないんだ」

残酷としか言い様のない真実を告げると、宮司は何も言わずに目を伏せる。

それはまるで、その事実を受け入れているかのような反応だった。

しかし、宮司の反応を見た蓮夜は更に言葉を続ける。

この先を語るのは辛いですが、それでも語らなければならぬ。

それが自分に出来る、贖罪の一つなのだから……。

「貴方に改竄を掛けたイレイザーを倒せば、歴史は本来の形に戻り、貴方と調の関係も改竄前の関係に戻るようになる……けれど、今回に限っては、俺も知り得なかった誤算があつた……」

「……誤算、ですか？」

宮司が首を傾げると、蓮夜は小さく息を飲み、重々しく語る。

自分が知る限りの全てを、包み隠さずに伝える為に。

例えそれで、”今の宮司”から恨まれる事になったとしても……。

「……今説明した通り、貴方に改竄を掛けたイレイザーを倒せば、貴方は元に戻れる……ただ、今回のイレイザーはノイズーターと呼ばれ、ノイズを際限なく喰らった事でその力が増し、それに比例して改竄の力もより強大になっている……それによって、奴は俺も知らない力を手にしていた……」

グツ……と、そう言つて蓮夜は無意識に拳を固く握り締める。

己の不甲斐なさを恥じて悔いるように、悔しげに俯き、それでも蓮夜は覚悟を決めると、恐る恐るではあるが……悲痛げな顔を上げて、彼の身に起きている現実を突き付けた。

「今、こうして俺の目の前にいる貴方は、ただ記憶を改竄されただけの被害者じゃない……ノイズイーターの強大な改竄の力の影響によって、完全な『個』を……元の貴方とは全くの別人の、『月読調の祖父であるという、一人の人間としての存在』が確立してしまっているんです……」

「……元の私とは別人の……調の祖父として確立した存在……？」

蓮夜の言葉に、宮司は不思議そうに首を傾げ、何を言っているのか分からないと言った様子で困惑した表情を浮かべる。

そんな彼に向けて、蓮夜は僅かに目を細め、頷き返す。

「簡潔に言えば、今此処にいる貴方は、改竄を受ける前の貴方という存在に、もしもの人生を生きていたかもしれない”可能性”の存在の貴方を重ね合わせたような状態……もつと噛み砕いて説明すれば、ノイズイーターの改竄の力によって生み出された存在である今の貴方と元々の貴方が一つとなり、今は一体化してしまっているような状態

なんです」

「……つまり、ここにいる私は元いた私と、改竄を受けた今の私が合わさって存在している……と？」

蓮夜の言葉の意味を理解してか、宮司は少し考えた後で呟くように言う。

そんな宮司に向かって、蓮夜はゆっくりと首を縦に振りながら答える。

「そういう事になります……そして、貴方はこれからその身体に刻まれた改竄の影響で、様々な変化が起きる事になる……時間の経過と共に、元々の貴方は徐々に消えて最初からなかった存在となり、今こうして俺と話している貴方が”本当”となり、この世界に矛盾という名の歪みが生まれる事になる……イレイザー達が、この世界を支配する足掛けとなる綻びが」

「……………」



蓮夜がそこまで告げると、宮司は無言のまま俯き、目を伏せる。

恐らく、今の自分が置かれている状況を理解したのだろう。

そんな宮司の様子を見て、蓮夜は思わず背けそうになる顔を上げると、真剣な眼差しを向けて問いかける。

「今ならまだ間に合う……貴方は、どうしたいですか？改竄を受けて生まれた、”今の貴方”の人生をこのまま受け入れるか……それとも……」

「……………」

蓮夜の問いかけに対し、宮司は何も言わずに黙り込む。そんな彼の様子を見つめながら、蓮夜も静かに口を閉ざす。

暫くの間、互いに何も喋らず沈黙していると、やがて宮司がゆつくりと口を開いた。

「最後に一つだけ、お聴かせ下さい。もし仮に件の怪物を倒し、改竄が解かれた時……今の私”は、どうなりますか？」

「……………」

宮司からの質問に対して、蓮夜は何も言えずに悲痛な面持ちで俯いてしまう。

何故ならば、答えは簡単だ。

——貴方という存在は、完全に消滅する。

それが、改竄の力によって生み出されてしまった存在である彼が、本来あるべき元の彼の姿へと戻る為に必要な唯一の方法なのだから。

故に、その事実を口にする事がどうしても躊躇われ、それが余計に蓮夜の心を苦しめる。

目の前のこの人は、これまでの人々のようにただ記憶を書き換えられたのではなく、  
”一人の人間”として既に存在してしまい、命を持つてしまったと言つても過言ではな  
い。

件のカメレオンレイザーを倒し、改竄を解いて目の前に”今の宮司”の存在をな  
かった事にするのは、それは最早命を奪うにも等しい行為だ。

だからこそ、蓮夜はその真実を弦十郎以外に調は勿論、響達にも告げる事が出来ず  
いた。しかし……

「——大丈夫です」

「……ッ！」

そんな蓮夜に、宮司は優しく、穏やかに語り掛ける。その言葉を聞いてハツとなり、蓮  
夜は目を見開いて驚きの表情を浮かべながら顔を上げると、宮司は何かを察したかのよ  
うに穏やかな笑顔を蓮夜に向けていた。

「宮司さん……?」

「そんな思い詰めた顔をせずとも、大丈夫ですよ。……しかし、そうですね。そう何かも上手い話はないとは分かつてはいいましたが、いやはや、現実とはやはり、人への試練に情け容赦というモノがないようですね」

「せめて私自慢のキツシユ並に甘くともバチは当たらないと思いますけどねえ」と、宮司は腕を組んで愚痴をボヤきながら難しい顔で何度も頷いている。

そんな彼の軽い調子に思わず呆けに取られる蓮夜だが、宮司は組んだ腕を解き、蓮夜と向き直りながら小さく微笑む。

「私の身に起きた出来事、そしてこれから起こる全てを知る事が出来た。私はそれで満足しています。……ですから、気に病む必要などありません。私という存在が消えてなくなつたとしても、私は誰も恨みなどしない。寧ろ不謹慎ながら、この状況には感謝すらしていますよ」

「……………え？」

予想外な宮司の反応に、蓮夜は思わず呆気に取られた表情を浮かべる。

そんな彼に構わず、宮司は穏やかな笑みを浮かべたまま言葉を続けた。

「だってそうでしょう？改竄を受けたおかげで、私はこうして愛する孫娘と共に過ごす事が出来たのですから。例えどんな形であれ、あの子が本当の家族でなかったのだとしても、二度と叶わないと思っていた幸せをもう一度噛み締める事が出来た……………それだけでも、私にとっては奇跡に等しい出来事だったのですから」

「……………」

「今の私が消えてなくなつたとしても、元の私に戻つた後でも幸せ者だつたと、胸を張つて言える自信があります。……………ですから、貴方も気負う必要はありません。貴方は貴方の思うままに、自分の使命を全うして下さい。それが貴方にとっての最善……………あの子の

心を救う為に、貴方なりに真剣に考え抜いて見出した、唯一の方法なのでしょう？」

「……………」

宮司の言葉を聞き、蓮夜は小さく首肯する。

確かに、自分は自分なりに考えて行動したつもりだ。だが、結局は他人を犠牲にするような選択しか出来なかった。

そんな自分が、誰かに責められるのは当然の事だろうと考えていた蓮夜だったが、宮司は咎めるどころか、逆に励ましてくれた。

その優しさに心救われるモノを得ながらも、それと同時に、そんな人を救ってやれない自分の無力さを恨めしく思う蓮夜に、宮司はやはり、何処までも穏やかで優しい笑顔を浮かべたまま頭を下げた。

「ありがとうございます……貴方のような方に出会えただけでも、『今の私』の人生は報

われたと言えるかもしれませんが……貴方のおかげで、覚悟を決める事ができました」

「……宮司さん……」

「……黒月さん。どうか、あの子を……調のことを……宜しくお願い致します」

「……はい……必ず……貴方の想いに応えてみせると……約束します」

宮司の言葉を受け、蓮夜は力強い返事と共に頷く。

今もきつと、罪の意識に苛まれているであろう調を必ず暗闇の淵から救い出すと、強く誓いながら。

そんな蓮夜の言葉に頭を上げ、心の底から安堵したように柔らかく微笑む宮司の顔に一切の翳りはなく、ただ”調の祖父”として、愛しき彼女の未来を最後まで案じ続ける姿が其処にあったのだった——。



「——貴方は、本当に凄い人なんですネ……」

「おっと……？何やら唐突に思わぬ不意打ちから褒められてしまいましたな。何を指してかは分かり兼ねますが、悪い気は致しませんね」

フツツと、目を伏せたまま今はもういない”あの人”と交わした最後の約束を思い返す蓮夜からの賛辞に、宮司は茶目つ気な笑みを返す。

そんな彼の横顔を見て微笑むと、蓮夜は子猫と遊ぶ調と切歌に静かに目を向ける。

「——俺は大丈夫です。語るべき事、伝えてもらった想いは、今もまだ俺の中にある。だから忘れず、抱え続けてみせます……この罪も、痛みも、貴方がくれた優しさも……絶対に」



「……そうですか……どうやら、私なんかの心配は不要だったようですね。……貴方は本当に強く、お優しい方だ」

「その言葉、そっくりそのままお返ししますよ……」

お互いに笑みを浮かべる二人の間に、穏やかな空気が流れる。

するとその時、境内の方から調と共に子猫と遊ぶ切歌がこちらに大手を振りながら大きな声で呼び掛けてきた。

「蓮夜さーんっ！蓮夜さんもこっちで一緒にこの子と遊ぶデスよーっ！」

「え。……あ、いや、俺は遠慮しておこう……俺が傍に寄れば、また不機嫌になつて暴れるやもしれんし……」

「大丈夫ですよ。ほら、この子もこんな全身を使つて歓迎してくれていますし」

「シャー——！！！！」

「全身の毛という毛を総立ちさせて全力で威嚇してくるそいつの何処を見て大丈夫と思っただ？」

両脇を抱えられてプラーンとされつつも、蓮夜に対する嫌悪感を隠そうともせず威嚇しまくる子猫を突き出す調に真顔のまま冷静なツツコミを入れる蓮夜。

宮司はそんな彼等のやり取りを見て微笑まましてにクスリと笑い、踵を返した。

「では、皆さんが遊んでいる間に私はキツシユでも焼いておくとしましょう。黒月さん、彼女達をお願い致しますね」

「え。や、こっちは今松葉杖でまともに動けな」

「それじゃありハビリがてらの軽めの運動といくデス！いっけーデスよ猫助ーっ！」

「ゴ—」

「フギヤアア”ア”ア”ア”——————ツツ!!」

「ゴ—ではないオイ待てやめろ何故今回に限って逃げずに向かってくるんだ来るんじゃないツツ!!」

「こっちは松葉杖でまともに動けないと言っとうろろうがアッ!」と、地面にゆっくりと降り出した調のGOサインと共に牙を剥き出しにした子猫が猛スピードで蓮夜に向かってくる。

その後、子猫はその小さな身体からはとても想像が出来ない機敏な動きから蓮夜をしつこく追いかけて回り、そんな蓮夜と子猫のドタバタっぷりに調と切歌も微笑まじげな笑みを浮かべて互いに顔を見合わせた後、蓮夜と子猫の元へ走り出して三人と一匹で賑やかなひと時を過ごし、そんな一同を振り返った宮司は調と蓮夜の憂いを感じさせない表情を見て嬉しそうに笑うと、そのまま遊び終えた彼等がお腹を空かせて戻ってきた時の

為にお菓子作りの用意を頑張ろうと意気込んで神社に足先を向けて歩き出していくの  
だった。

## 第八章／繫xX式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え× 黎明・それでもme侶は駄ke走ル⑧

「——うーん……遊びに遊び尽くしたデスね……！しかもお茶とお菓子までご馳走してもらっちゃって、正に至れり尽くせりデス！」

「でも切ちゃん、一人でキツシュを何度もおかわりするの流石に度が過ぎてたと思う……」

「あぐつ……し、仕方ないじゃないデスかつ。宮司さんは大丈夫だったし、あの子猫の里親も無事に見付かって一石二鳥だった訳なんデスから、嬉しさのあまりつついっつい食べ過ぎてしまうのも無理はない話なのデスつ。蓮夜さんもそう思うデスよね！」

「……………そうだな。こっちは無駄に傷が増えたばかりに、痛みが勝って味は何一つ覚

えていない訳なんだが……」

フオローを求めて振り向く切歌に対し、松葉杖を突いてトボトボ歩きながら愚痴つぽくボヤク蓮夜のその顔には元々の傷に加えて、何度も爪で引つ搔かれたような跡が何本線も頬などに幾つも切り刻まれている。

やはりと言うべきか何というべきか、結局あの子猫は蓮夜にだけは何故だか最後まで懐かず嫌われたままで別れてしまい、地味に落ち込む蓮夜に切歌が苦笑いを返す。

「ま、まあでも、本当に良かったデスよね。あの子にも里親が見つかって」

「うん……これできつと、もう寂しい思いはしないはずだから……」

調も切歌と同じく子猫との思い出に浸るように、優しい笑みを浮かべながら呟いた。

その横顔をチラリと見やった蓮夜だったが、すぐに視線を逸らすと俯いて小さくため息を吐く。

「まあ、これでアイツに手を焼かれる必要はなくなったと思えば、確かに悪い気はしないかもしれないな……」

「とか言つて。本当は蓮夜さんだって、あの子猫と離れるのちよつと寂しく思ってるんじゃないデスか〜?」

「……さあな」

「にへへ。案外素直じゃないデスねえ、蓮夜さんは」

悪戯つ子のようにニヤつく切歌の指摘に、そつぽを向いて無言を貫く蓮夜だが、否定しようとはしなかつた事に二人はクスクスと笑い合う。

そんな二人の反応に蓮夜もバツが悪そうに眉尻を下げて困つたように頬を掻きつつ、何か物思いにふけるように青く澄んだ空を見上げ、

「……まあ、あれだけ面倒掛けて世話をしたのだから、少しくらいは名残惜しい気持ちもある……かもな……」

ポツンと、独り言のような小声で零す。

すると、そんな蓮夜の声聞き逃さず、調と切歌が彼の心内を察して目配せした後、互いに微笑んで蓮夜に顔を向ける。

「なら、また会いに行きましょう」

「調の言う通りデス！今度会いに行く時には、あの子の喜びそうなオモチャを持って行ってあげると良いかも知れません。そうしたら今度こそ蓮夜さんに懐いてくれるかもデスよ！……多分」

「……そこはもつと自信を持って断言してくれ」

相変わらず根拠のない事を言う切歌に呆れる蓮夜だったが、その提案自体は悪くない



ものだと思い、次に会う時には子猫の好みに合わせたオモチャを用意してやろうと考えを巡らせ、密かにリベンジを心に誓う。

そんな一件落着な雰囲気と共に三人が他愛もない会話を続けながら帰路に着く道中、調がふと何かを思い出したように「あつ」と声を上げた。

「そういうえば、すっかり忘れてた……蓮夜さん」

「……ん？どうした？」

急に立ち止まった調に釣られて蓮夜と切歌が足を止めると、彼女は何処か無表情のままジーツと不思議そうな表情を浮かべる蓮夜の顔を見上げ、

「——この間の私からの告白、まだ返事を聞かせてもらっていないんですが、何時になったら教えてもらえますか……？」

真剣そのものといった様子で、いきなりそう尋ねてきたのだった。

突然の質問に蓮夜だけでなく切歌までもビクウツ！となり、二人揃って目を丸くしながら固まってしまふ。

しかしそれも束の間、蓮夜はすぐに我を取り戻すと目を泳がせながら頬を搔くと、

「ええ、と、だな……それに関しては、もう少し考える時間を……」

「待てません。蓮夜さんもちゃんとした大人の男の人なんですから、其処はスツパリハッキリ答えを出して欲しいです」

「簡単に出せる答えではないから言ってるんだ……！大体、ちゃんとしたと言いつつお前から提示してきた『付き合う前提条件』があまりに非常識に過ぎるからこつちも頭を悩ませているんだぞ！」

先日、あのいきなり過ぎた調の爆弾的告白発言から暫し時間を置き、お互いに冷静になつてから改めて行われた調と切歌による話し合いの場。



このやり取りの通り、二人の関係を恋人関係に発展させる条件として提示された内容が、なんと調が蓮夜と切歌の両方と一緒に……要するに、蓮夜に調と切歌、両方と交際する事を要求して来たのである。

そんなあまりに非常識が過ぎるぶつ飛んだ提案に理解が追い付かず固まっていた蓮夜も即座に我に返り、流石にそれは無理だと否定しようとしたのだが、

『大丈夫です。蓮夜さんの事は勿論大好きだし、結婚を前提にお付き合いしたいと思っています。だけど切ちゃんのことだって大切な親友として好き。だからどちらか一方じゃなくて、どちらも私のものにしてしまおうと思っただけです』

『……………いや、思っただけではなく……………そういう問題ではなくてだっ……………』

『安心してください。蓮夜さんは私と切ちゃんの両方を平等に愛してくれればいいだけです。何も難しい事はないと思いますよ。二人の事を幸せにしてあげれば良いだけですから』

『倫理観！社会的な常識！道徳観念！そして俺自身の貞操感!!それら全てを丸ごと無視してのその発想がそもそもおかしいという話をしてるんだ!』

『そ、そそそそそうデス！いくらなんでも調のその考えはどうかと思うデス！それにアタシ達はまだ学生の身デスし、そんな不純異性交遊みたいな真似をするなんて絶対に駄目デス！……で、でも、蓮夜さんがどうしても言うのなら……別に、構わないデスけど……』

『切歌アああ?!』

『うわあ……切ちゃん、今の台詞だけ聞くと凄く変態っぽいね』

『ええ?!あ、そ、そう言う意味じゃないデスよ?!変な誤解しないでほしいデスっ!!』

などと、こんな具合に蓮夜の頭では理解できない思考回路を持つ少女二人との話し合いは平行線を辿るばかりで結局結論を出す事が出来ず、こうしてズルズルと今日まで引

き延ばしになってしまった訳である。

「もう、蓮夜さんがそんな態度を取るせいで、私も切ちゃんもあれからずっと悶々とした日々を過ごしてるんですよ……？」

「いや……俺は寧ろずっと常識に基づいた事しか言っでなくないか……？何故俺が悪いみたいな空気になってるんだっ……？」

不服そうな表情を浮かべる調に、蓮夜は最早胃痛すら覚えて疲れた様子で額を押さえながら嘆息する。

すると、今まで傍で大人しく話を聞いていた切歌が蓮夜の隣まで歩み寄ると、おずおずと手を伸ばして蓮夜の服の袖をキュツと遠慮がちに摘んだ。

「っ、切歌……？」

「え、と……そのお……アタシも最初は調が変な事を言い出したのかと思ってちよつと

困ったんデスけど、あれからよくよく考えたら、調の考えも一理あるなあ〜……なんて思ったりもして……」

「……………一理……………」

「ほ、本音を言うとデスけど……蓮夜さんさえ良ければ、二人と一緒にいたいっていうか……その、他の人とかとだったらともかく、この三人でなら一緒にいる時間ももつと欲しいというか……あうう〜！何言ってるんだろう、アタシ!!」

「お、落ち着け切歌……………！本当に何を言ってるんだお前?!」

顔を真っ赤にして混乱しているらしい切歌に蓮夜が困惑する中、調が切歌の肩に手を置いて小さく微笑みかける。

「やっぱり、切ちゃんも同じ気持ちなんだよね」

「デ、デスツ……………！調には全部バレちゃってるみたいデスね……………」

「当たり前だよ。切ちゃんが蓮夜さんを見る時の顔を見ていれば、すぐに分かるから」

「あうっ……!」

親友からの指摘を受けて恥ずかしさに耐えられなくなったのか、切歌が俯いて縮こまってしまふ。

その様子を見て苦笑しながら調は、切歌の突然のカミングアウトにポカンとしている蓮夜へと視線を向ける。

「蓮夜さん、一つ提案があるんですけどいいですか?」

「……え……ア、ハイ……なんででしょうか……?」

何故か敬語になりつつ恐縮気味に蓮夜が尋ねると、調は一度コホンと咳払いしてから真剣な眼差しで告げてきた。



「此処まであれこれ言っておいてあれですけど、この前の切ちゃんも言い分にも一理あるかなって思ったんです。私達はまだ学生だから、結婚を前提とした交際を始める前に、まずは学業に専念すべきだなって」

「……それが当たり前の認識と呼ぶべきというか……此処で本当に付き合いでもし始めたら下手をしなくても捕まるぞ……？俺が」

何せこっちは今、政府お抱えの組織である S・O・N・G 監視下の元の協力者の身だ。

そんな中で、まだ 15 くらい 16 の年端もいかぬ少女達に手を出したなどと知られれば、間違いなく大目玉を食らう。

「だから私達が無事に卒業するまでの間、それまで待つてもらえませんか？蓮夜さんにも気持ちの整理が必要でしょうし、ちゃんと準備を整えてから、蓮夜さんに改めて告白したいと思っていますから。……駄目ですか？」

調が上目遣いで見つめてくる。その瞳はまるで小動物のように不安げで、それでいて熱っぽく潤んでいる。

そんな目をされてしまったては流石の蓮夜でも「うぐつ……」と言葉を詰まらせてしまい、助け舟を求めて思わず切歌の方を見てしまう。

しかしそこで蓮夜が見たのは、先程以上に顔を赤く染め上げてチラツチラツと蓮夜の様子を窺っている切歌の姿。

「……………」

(…………どう、しろとっ…………!!)

調だけでなく切歌からも熱い視線を向けられ、蓮夜が内心で絶叫を上げる。

二人の事は好きではあるし、異性としての魅力もある。

しかしだからといって同時に恋人になるというのはあまりにも不誠実すぎる気がするし、そもそもこの二人は自分なんかより遥かに優れた魅力を持っているのだ。そんな少女達と釣り合うだけの男ではないことぐらい自覚はある。

故に、ここで蓮夜が取るべき選択肢は――

「……分かった。お前達の言う通り、少し時間をくれ……その時に必ず、答えを出すから……」

半ば観念したように蓮夜が項垂れながら声を絞り出してそう答えると、調と切歌が嬉しそうな笑顔を浮かべて互いに顔を合わせる。しかし、其処で蓮夜が掌を前に突き出す。

「ただし……！俺はまだ自分の考えを完全には納得していないっ。あくまで猶予期間を設けるだけで、その間に俺なんかより魅力のある男を見付けたら、迷わずにそっちへ行ってもらっても全然構わないからなっ……！」

卒業するまでの間、この二人なら自分よりもマシな相手を見付ける事も有り得る。

好意自体は嬉しいし、年の差という壁や調が提示した条件がなければ迷う事なく頷いていたかもしれないが、やはり二人にはもつと良い人を見付けて幸せになつて欲しいという気持ちも多分にある。

そういった望みも込めての蓮夜の言葉にしかし、二人は笑顔で頷き返す。

「はい、分かつてます」

「大丈夫デスよ。蓮夜さん以上の人なんて、絶対にいないデスからっ！」

「……一体俺なんかの何処を見てそう言い切れるんだ……こつちはお前達に迷惑を被つてばかりの甲斐性なしでしかないんだぞっ……」

自信満々に胸を張る調と切歌の言葉に、蓮夜が更に深く肩を落とす。

すると、調はクスリと小さく笑いながら蓮夜の腕を掴んで僅かに引き寄せ、つま先で背伸びをしながら耳元まで口を寄せて囁く。

——そういうところも含めて、全部が好きなんです。

「……ッ！」

バツ！と、蓮夜が耳を抑えて慌てて調から離れる。

その様子に調が悪戯っぽい笑みを浮かべながら踵を返して歩き出し、切歌は不思議そうに二人を交互に見てから調の後を追いつける。

「調く？今、何を言ったんデスカ？」

「秘密」

「ええー、教えて欲しいデス〜！」

「嫌」

楽しんでじゃれ合いながら先を歩く二人の背中を暫し呆然と見つめると、蓮夜は片手で顔を覆って俯き、ボソリと呟いた。

「勘弁してくれ……反則にも程があるっ……」

年下の女子にまんまと翻弄され、弄ばれている自分が情けなくて仕方がない。

顔を覆った片手の指の隙間から微かに覗かせる頬は赤く染まり、心臓は思わぬ不意打ちのせいで激しく早鐘を打っている。

そんな自分に深々と溜息を吐くと、蓮夜は徐に空を見上げ、何だか酷く眩しく思える青空を見つめて呟く。

「……法律……とりあえず知識とか色々身にかけておこう……」

何だかもう色んな意味で強過ぎる彼女を前にして幾分かの貞操の危機すら覚えてしまい、一人静かにそんな決意を固めながら空を見上げる蓮夜の目は若干虚ろになっていたのだった。



「……ガシヤアアアンツッ——」

「ぐうっ！……はアっ、はアっ……」

——赤いレンガ倉庫が何処までも続いて立ち並ぶ街の一角。

そこで一人の青年……蓮夜達に敗北し、身体中に包帯を巻いたクレンが道中に躓いた

ドラム缶を倒しながら地面に倒れ込み、苦悶の表情で荒い呼吸を繰り返していた。

「ああ、クソ……マジで痛い……何だよあのカード、インチキじゃん絶対……」

悔しげに毒づきながらクレンは身体を起こし、ふらつきながら壁伝いに何処かへ向かおうと覚束無い足取りで歩き出す。

と其処へ、路地の隙間からアスカが誰かを探すように必死の形相で辺りを見回しながら現れ、クレンの姿を見付けると慌てて駆け寄った。

「此処にいたのかよ……！何やってんだお前?!」

「……ああ、アスカか……すごい……よく僕が部屋から抜け出せたのに気付いたね……」

「こんな時にまでふざけてんじゃねえよ！満足に動ける身体でも無えくせに!!」



いつも通りの口調で話すクレンだが、その顔色は真つ青に染まっており、一目見ただけでも重症だと分かる。

それでも平気そうな素振りを見せるクレンの姿に、アスカが怒鳴り付けながらも肩を貸す。

「良いから今は大人しく部屋に戻って休んでろ!! 傷が開くぞ……!」

「……気持ちは、有り難いんだけどね……ゆっくりはしてらんないんだ……今はとにかく、デュレンから聞き出さなきゃならない事が——」

「——俺がなんだって?」

突然背後から聞こえた声に、クレンとアスカがギョツとして振り返る。

そこにはいつの間にもいたのか、レンガ倉庫に背中を預けて両腕を組みながら二人を睨み付けるデュレンがいた。

その鋭い視線を前にして思わず気圧されるも、クレンが一步前に出てデュレンの前に立つ。

「ちようど良かったよ……君には聞きたい事が山ほどあつたんだ……」

「そうか？俺は特に貴様と話す事はないのだがな。……ああ、もしやあの出来損ないのノイズ喰らいを失った事への謝罪か？それとも、ただの出来損ないをさせるようにしてくれた事への感謝か？何れにせよ、俺には必要のないものだ」

「……ッ！」

「おい、止めとけクレン……！」

クレンが怒りに任せて殴りかかろうとするのを察したアスカが小声で制すると、クレンは不機嫌そうにしながらも渋々と引き下がる。

そんなクレンを見て何処かつまらなそうに鼻を鳴らすと、デュレンが口を開く。

「……それで？ 一体何を聞きたいと言うのだ？」

「……まず最初に、君はどうして僕の邪魔をした？」

「それも先に答えた筈だぞ？ 俺なりに、お前を手伝おうと思っただけの、ただの善意でしかなかったとな」

「嘘だ。そんな言葉を信じられると思う？」

「……………ふん」

クレンの言葉を聞いて、デュレンが不快そうに目を細める。

そしてゆつくりと右手を持ち上げて指差すと、まるで銃を向けるかのように指先を向けた。

「では、どうすれば信じてくれる?」

「……知ってる事を、全部此処で話してくれない?それが出来ないなら……力尽くで吐かせるしかない」

「ほう、面白い冗談だ。この俺に力で勝てると本気で思っているのか?」

「思っていないよ……それでも、僕は……やるしか、ないんだ……」

痛みに耐えながら拳を握るクレンの眼差しは鋭く、決して諦めようとしないう意志の強さを感じさせる。

そんなクレンの態度を見てデュレンが呆れた様子で嘆息し、やがて小さく笑いながら指先に黒炎を集めて臨戦態勢の構えを取ろうとした、その時……

——突如として轟音が響き渡り、空から一筋の光が降り注いでデュレンとクレン達の間には衝撃波と共に何者かが落下した。

「うっ……!?!」

「うおおおっ!!なん、だっ?!」

衝撃で地面が大きく揺れ、近くのレンガ倉庫が砕けて破片が飛び散る中、クレンとアスカは咄嗟に両腕で顔を庇いながら突風のように吹き荒れる衝撃波に耐える。

そして漸く爆風が収まり、二人が恐る恐る目を開けると、其処には……

「——デュレンの気配が急に膨れ上がったから、慌てて駆け付けてみれば……なんんだいこれ？　どういう状況？」

「……？　なんだ、アイツ……？」

「ヴィーヴル……！」

地面に片膝をつくように着地している、全身を黒い装甲のギアに覆われた少女……イレイザーの処刑人を自ら自称する謎の装者・ヴィーヴルが存在した。

ヴィーヴルの姿を前にした瞬間、初対面であるアスカは怪訝な顔を浮かべ、クレンは逆に顔色が一気に青ざめ、冷や汗を流し始める中、デュレンは悠然とした足取りでそんなヴィーヴルの元に近付いた。

「心配はいらない。ちよつとした口論からお互いに熱が入り過ぎただけだ。貴様が気にする事ではない」

「ふうん……? まあ、それなら別に良いけど。それより、こんな所で何をしていたんだい? キミが此処にいるなんて珍しいじゃないか」

「少しばかり野暮用があつてな。だがその話は後だ。今は……そうだな……こいつらの相手をしなければなるまい」

デュレンがクレン達に視線を向けて不敵に笑うと、状況が何一つ掴めていないアスカがクレンとデュレン達を交互に見て戸惑っている。

「お、おい……! マジでどういう状況なんだよコレ! 説明しろよ、クレン!!」

「……それは……」

今の状況を説明する事は容易い。しかし、それを話せば必然的にアスカまでデュレンに目を付けられて危険に巻き込まれてしまうやもしれない。

それだけは絶対に避けなければならないと分かっているからこそ、クレンは何も答える事が出来ずにいた。

そんなクレンの反応を見て何かを察したのか、デュレンが静かに目を細めてクレンに声を掛ける。

「クレン。取り引きをしないか？」

「……………えっ?」

「貴様の知りたい事、俺が知っている限りの全てを教えてやろう。ただその代わりに今一度、俺に協力しろ」

突然の提案にクレンが思わず動揺すると、デュレンは続けて口を開いた。

「今、ロンドンの方で水面下で進めている計画がじきに最終段階へ移行しようとしているのは知っているな? 貴様にはその計画に参加して貰う。無論、拒否権はない。断れ



ば、分かるだろう？」

「ツ……！」

つまりそれは、自分が協力すればアスカを巻き込まずに済むという事なのか。

悩む素振りを見せるクレンを見て、アスカは戸惑い気味に声を掛ける。

「お、おい……！さつきから何言ってるか全然分からねえけど……お前、まさか……！」

「……分かった。協力するよ」

「なっ!?おい、クレン!!本気で言っているのか!？」

あつさりと承諾したクレンに対してアスカが驚きの声を上げるも、クレンはそれを黙殺してデュレンを見つめる。

「それで……？僕は何をすればいいの？」

「簡単な話だ。お前が元々担当していた仕事をアスカから引き継ぎ、以前の通りお前が”アレ”を守れ。力が徐々に増してきている分、黒月蓮夜やS・O・N・Gの連中に気付かれるのも時間の問題だろうからな……やれない、とは言うまい？」

「……それで、今回の失敗を取り返せって言いたいんだろ……？」

忌々しげに呟くと、デュレンは満足げな笑みを浮かべた。

その表情に苛立ちを覚えながらも、クレンはその場から覚束無い足取りで歩き出し、デュレンとすれ違う際に足を止め、小声で耳打ちする。

「……約束は、守ってもらおうよ……必ずね……」

「……ふん」

クレンの言葉にデュレンは鼻を鳴らし、クレンはそんなデュレンの横顔を一瞥し睨み付けると、再びフラフラと何処かへ向かって歩き出していく。

「お、おい……！待てクレンっ！——ジャキイツ！……?!」

遠ざかっていくクレンを引き留めようと走り出すアスカだが、そんな彼の前にヴィーヴルが右腕に纏う盾と一体化した剣を突き出し、止めに入った。

「デュレンの命令だ。君も大人しく従ってもらうよ」

「っ……！何言ってるんだ……！アイツは黒月蓮夜達から受けた傷もまだ完治してねえんだぞ?! そもそもテムエは何なんだ?! おいつ、説明しろやデュレン！」

ヴィーヴルから剣を突き付けられながらもデュレンに説明を求めて吠えるアスカ。

しかしデュレンは両手をズボンのポケットに突っ込んだまま背を向け、ただ冷たい眼差しでアスカを一瞥する。

「貴様が知る必要のない話だ。それより、お前は奴がロンドンで動いてる間に日本に残つてS・O・N・G・の動向を抑えてろ。どうせ連中の事だ。仮に向こうでの異変を察知した所で、こちらに俺達がいる以上、奴らも戦力の全てをロンドンに向ける事は出来ん。未だ万全でない貴様でも、それぐらいの雑用は出来るだろう？」

「ふざけんな！俺が聞きてえのはそんな話じゃねえ！そんなもんで納得が——！」

「そうか。ならばクレンの奴に貴様の分の仕事を回すしかあるまい。……最も、奴もあれだけの死に体だ。こちらとあちらで同時に動いてもらうともなれば、黒月蓮夜でなくとも、他の装者共だけで簡単に仕留められてしまいそうだがな……」

「ツ……………！てめえ……………！」

明らかに煽るように語るデュレンの無慈悲な言葉にアスカは無言で睨み付けるしか出来ず、暫しの熟考の末、ヴィーヴルが突き付けてくる刃を舌打ちと共に乱雑に手で払い除けると、そのまま無言で立ち去っていった。

「……いいのかい？あの二人、君に明らかに不信感を覚えてる。放っておいたら面倒な事になるかもよ？」

「……そうなった所で、俺の計画に大した揺らぎになどなりはせん。問題ないさ」

大して心配する様子もなく、ただ冷淡に答えるデュレン。そんな彼を見てヴィーヴルは肩をすくめ、やれやれと首を振った。

「相変わらず、君の考えている事は良く分からないなあ……。一体、何の為にこんな事をしているのか……」

「……何の為、か……分かり切った事だ……」

意味深に呟き、デュレンはゆっくりと歩きながら静かに空を見上げる。

「全ては俺の渴望を満たす為……その為には……」  
「奴」の力が必要なのだよ」

その言葉を最後に、デュレンの姿が消える。まるで最初からそこに存在していなかったかのように、跡形も無く消えてしまったのだ。

一人残されたヴィーヴルはしばらくその場に佇むも、やがて小さく息を吐いて踵を返す。

(まあ良いさ……どちらにせよ、ボクの仕事は使い物にならなくなった他のイレイザーの処刑だ……最強最速の名に恥じぬよう、ただ冷徹に、粛々と実行するだけ……)

既にアスカとクレンの存在は頭から抜け落ち、ヴィーヴルもまたデュレンに与えられた命令を遂行する為に動き出す。

その影で……

——…カシヤツ——

「——成る程……大体分かった」

歩き去っていくヴィーヴルの背中に向けて、レンガ倉庫の屋根の上から二眼レフのカメラを片手で突き出し、静かにシヤッターを切る者がいた。

「……にしても、コイツはまた厄介な事になったものだ」

ヴィーヴルが姿を消した後、構えを解いたカメラが首から掛けたカメラストラップでぶら下がる重みを感じながら、男は誰に言う訳でもなく独りごちた。

（装者達も着々と力を増して来てはいるが、ロンドンの“アレ”を今のアイツ等の力だけでどうにか出来るものか……さて……）

其処まで考えながら、男は懐から一つのアイテムを取り出す。

それは、まるでバーコードを模した様な頭をした謎の仮面の戦士の横顔のレリーフが左端に描かれ、中央から右端に掛けてスロットのようなギミックが施されているマゼンタのラインが入った蒼いブレスレット。

手の中でそのブレスレットを弄び、男は無言で空を見上げる。

「……………そろそろ見極め始める必要があるか……………クロスを……………この世界を、”破壊”すべきか否かを……………」

何処か憂いを帯びた声で呟くと、男は踵を返して歩き出す。

その眼前に灰色のオーロラが突如現れるも、男は構わずに潜り抜け、そのままオーロラと共に何処かへと姿を消したのであった――。



駈  
k  
e  
走  
ル  
E  
N  
D  
第八章／繫 x X 式・調（ツキ）が読み解くわたしの答え×黎明・それでも m e 侶は

風鳴翼&マリア・カデンツァヴナ・イヴ編（前編）

第九章／運命ノ少女×破壊者 in the load

—ロンドン・オールドストリート—

——ロンドン。それは、イングランドの首都であり、世界有数の大都市でもある。

産業革命の発祥地としても有名だ。特に有名なのはビッグベンと呼ばれる時計塔であらう。

そんな古都の街並みの一角にある、とある路地裏にて……。

「——ハアツ、ハアツ……！」

薄暗い、人気の無い路地裏の壁に手を付き、肩で荒々しく呼吸を繰り返す男がいた。

男の年齢は三十代後半ぐらいか。黒いスーツ姿の長身の男だ。

「ク、ソ……クソウツ……！まさか、あれほどの怪物だったなんて……聞いてないぞ……！！」

そう言いながら、男は壁を殴りつける。

拳の皮が破れ血が滲み出ていたが、それを気にする事無く、何度も、何度も、怒りをぶつけるように。

「どうしてだ!?俺は今まで上手くやってきた筈なのに!!どうしてこうなった?!!」

叫ぶ度に歯軋りの音が鳴る。握り締めた拳が震える。

だが、どれだけ叫んでも、己の感情を吐き出しても、現状は何も変わらない。

男は錬金術としての才能に恵まれていた。

その才能を生かし、これまで何人も人間を自分の研究の実験台にしてきた。

実験に成功した者もいれば失敗した者もいた。だが、そんな事は些細な事だった。

自分が天才であるという事実さえあればそれで良かった。

だからこそ、今の状況に納得がいかなかった。

「俺が……俺こそが、世界の王に相応しい存在なんだ……!!」

男が目指していたのは錬金術の頂点。誰もが認めざる得ない絶対的な王者の存在。

それが、つい先日、突然現れた異形の化け物によって全てを奪われた。

そして、自分は命辛々逃げ出してきたのだ。

「ふざけるな……！……こんな所で死んでたまるか……！！絶対に生き延びてやる……そして必ず復讐を……！！」

「——大した気骨の精神だ……あれだけの目に遭いながら尚も折れず、復讐に心を燃やせるだけのゆとりがあるとは……」

不意に背後から聞こえた声。それに、男はビクツと体を震わせる。

恐る恐ると振り返れば、そこには黒い長髪を後ろで一つに纏めた一人の男が、いつの間にか薄暗い路地の奥に佇んでいた。

年の頃は二十代半ばといった所か。

背丈は180cm前後。体格は細身ではあるが引き締まっており、纏っている雰囲気はまるで氷の様に冷たい。

一見すると、何処にでも居そうなく普通の青年だ。

しかし、彼がそうでない事を、男は知っていた。

「きつ、貴様……!? どうして此処に?!」

「愚問だな……あんな捨て駒にもならないアルカ・ノイズ風情をけしかけたところで、この私を始末出来ると本気で思っていたのか?」

淡々と、まるで世間話をするかのように語る青年の態度が、逆に男の恐怖心を煽る。

「まあ良い……それより、お前には訊ねたい事がある」

「ひっ……………」

一歩近付く毎に後退る男を見ても尚、青年は無表情のまま男との距離を詰めていく。

「貴様ら錬金術に指示して造らせた例の”少女”…………いや、今回の計画の最後の要となる”鍵”と言った方がいいか…………奴を何処へ連れ出した？」

「し、知るか…………あのガキならもう此処にはいない!!アジトから無理矢理連れ出した後、道中で俺の手を振り払って一人で逃げやがったんだ…………!!本当だ!!」

「……………」

必死の形相を浮かべ、男は青年に対して捲し立てるように答える。

それを聞いた青年の眼差しが僅かに鋭くなるも、男は気付かない。

「そ、そうだ…………なあ、此処は取り引きしないか?！」

「…………取り引きか？」

「そ、そう！俺ともう一度手を組まないか?!あのガキを探したいなら、人手は多くても困らないだろ?!なんせ、アイツがいなきや計画は進められないし、何より”鍵”が手元に無いんじゃない俺達の目的も果たせないだろう?!」

「…………」

「ど、どうだ…………?悪い話じゃないだろう…………?いや、寧ろメリットしかないと思うけどなあ…………?」

男は内心でほくそ笑む。

この青年は錬金術師ではなく、その知識に関しては自分に劣る。

ならば例の”鍵”を見つけろにせよ、自分の知識が必要となる筈だし簡単には殺せは



しないでだろう。其処につけ込み、このままコイツを口車に乗せて自分の目的の為に利用してしまえばいい。

「ふむ……確かに、それは魅力的な提案だな」

「そ、そうだろ?! なら——!」

「だが、断る」

「……………えっ……………?」

あっさりとは即答され、思わず呆気にとられる男だったが、次の瞬間、男の胸倉を掴んで引き寄せるとそのまま壁に叩き付けた。

背中を強く打ち付け、一瞬息が詰まる。

痛みを耐えながら顔を上げれば、其処には間近に迫った青年の顔があった。

「ひいつ……!!?」

「何か勘違いをしているようだから、一つ訂正しておこうか。先に裏切った以上、お前は私に取り引きを持ち掛けられるだけの立場ではない。そもその話、何故私がお前如きの誘いを受けねばならない? たかが雑魚一匹を処分する為にわざわざこんな場所まで足を運ぶだけでも手間だというのに、肝心の“鍵”が見付からないとあらばその手間すら無駄にされたのだぞ? それだけでも、十分過ぎる程に腹立たしい事だというのに……お前は私の貴重な時間を潰してくれたのだ。そんな奴を生かしておく理由などあるまじい。」

「あ……あ……まつ、待ってくれ! 頼む!! お、俺が悪かった……!! あのガキを見つける為なら何でもする!! だ、だから助け——!!?」

青年の冷たい声に恐怖し、まるで悲鳴のように声を荒らげて懇願する男だが、その言葉が最後まで紡がれる事は無かった。

目にも止まらぬ速さで、いつの間にか青年の手に握られていた刀が横一閃に振り抜かれ、男の首の付け根から上を消し飛ばしたからだ。

首を失った胴体が崩れ落ちると同時に血飛沫が上がり、壁や床一面に飛び散る。

返り血を浴びた青年は表情一つ変えずにそれを見下ろしていたが、やがて興味を失くしたかのように刀に付いた血を軽く払って跳ばし、踵を返して路地の出口に向かって歩き出す。

だがその道中、男はピクつと何かに反応して突然足を止めた。

「……………。人の頭の中に前触れもなく声を届けるのは止めて欲しいと、前にも断りを入れた筈だが？」

『——そう言わないでつて。こつちだつて色々と事情があるんだからさあ』

青年の声に応えるように、今度は脳内に直接響くような飄々とした声が聞こえてく

る。

青年はその声の正体を知っているのか、特に驚く様子も無く平然と会話を続ける。

「まあいい……それよりも、丁度報告したい事があつた所だ。こちらから連絡する手間  
が省けたと思えば、今は寧ろ有り難い」

『……………報告？』

脳内に響く声が不思議そうな色に変わる。

すると、青年はゆっくりと振り返り、男の死骸を見据える。

「貴方と貴方が寄越した後任が留守の間、アジトに残つて研究を続けていた錬金術達が一  
斉に謀反を起こしてな……。例の計画の最終段階に使う予定の”鍵”、例の少女が外  
へ連れ出されてしまった。裏切り者は今し方最後の一人を処理した所だが、肝心の少女  
の方は奴らも見失つてしまい、現在行方不明らしい」

『まじで？あー……………こうなるかもしれないってのは予想はしてたけど、よりにもよってこのタイミングでかあ……………めんどくさいなあ……………』

「何か問題でも？」

『や、実は日本に戻ってる間に傷を負っちゃってね……………ちよつと今本調子じゃないんだよ』

「傷……………？貴方程のイレイザーがか？まさか、日本にいる装者達に？」

『それもあるんだけど……………一番の要因はやっぱり彼かな……………君にも以前、話した事があるだろ？』

「……………クロス、か……………」

その一言で誰の事を指しているのか理解し、青年は忌々しげに顔を歪める。

そんな青年の反応から彼の心境を理解しているのか、脳内に響く声の主は特に何も言うことなく、淡々と話を続けてきた。

『僕としても、彼がここまでやるとは思つてなかつたよ……ともかく、そつちでの計画が最終段階に移行する以上、彼もいずれ異変を察して動き出すだろう。例のあの子の事も早めに対処しないと面倒になるのは間違いないし、計画を悟らせない為にこつちで一応足止めを考えてみるよ。君にはその間に、早急に“鍵”の回収を頼みたいんだけど、構わないかい？』

「……仕方無いな」

青年は小さく溜め息を吐いてから承諾の意を示し、その場を後にする。

そして誰も居なくなつた路地裏に静寂が訪れ、血溜まりの中に浮かぶ男の死骸だけが残つた。



「はあ……はあ……はあ……はあ……！」

同じ頃、ロンドンの街から少し離れた郊外にて。

人通りの少ない街道を必死の形相で駆け抜ける一人の少女の姿があった。

見た目の年齢は12〜13歳程だろうか。風に揺れるセミロングの銀色の髪は薄汚れて葉っぱ等が幾つも張り付き、身に纏っている検診衣のような衣服はあちこち破れており、靴すら履いていない素足は泥で汚れてしまっている。

身体中汗だくになりながらも足を止める事無く走り続け、時折背後を振り向いては追手がいないかどうかを確認する。

(撒いた……か……?)

後ろを確認しながら走る速度を落としていくが、それでも警戒を怠らない。

やがて完全に立ち止まり、その場で膝に手を置いて荒くなつた呼吸を整える。

それから数分後、漸く落ち着きを取り戻した彼女は建物の陰に身を隠し、改めて周囲を見渡してから安堵のため息を漏らす。

(っ……やっと、抜け出せたんだ……あの暗闇から……やっ……)

今まで閉じ込められていた檻から抜け出せた事を実感しながら、その目に涙を浮かべる。しかしそれも束の間。不意に吹き抜けた冷たい風が彼女の全身を襲い、思わず身震いしてしまう。

(寒いっ……外の世界は、こんなにも寒かったのか……)



両腕で寒さに震える身体を抱きながら空を見上げれば、どんよりとした厚い雲に覆われて太陽が見えず、更に気温の低下に拍車をかけている。

彼女がいる場所は民家の陰になっており、陽の光が一切差し込んでこない為、余計に寒さを感じてしまう。

だが、いつまでもここに居る訳にもいかない。

そう思った彼女は意を決して顔を上げると、周囲を見回し、近くに野良猫達が残飯を漁るゴミ捨て場を発見する。

「……………めんなさい……………」

小声で呟きながら、少女がその場所に近付くと、野良猫達はいきなり近づいてきた少女に驚いたのか、慌てて逃げ去ってしまう。

その光景を見て悲しげに目を伏せる彼女だったが、すぐに気を取り直して目の前にあ

る大量のゴミ袋の中に手を突っ込むと、中からまだ食べられそうな物を選んで両手で抱え込み、たまたま目に付いた一緒に捨てられている穴だらけの布切れを拾って頭の上から被り、なるべく人目に付かないよう小走りでその場を後にする。

(どこか……どこかもつと遠くへ……アイツらに見付かる前に、早くっ……)

少女は手にしている食べ物を抱え直し、とにかく人の目を避けて歩き続ける。

自分がこれからどうすればいいかなんて分からない。

だけど、このままではいけない事だけは分かる。

だから、今はただひたすらに逃げるしかない。

そう自分に言い聞かせ、少女は生まれて初めての外の世界を宛もなく走り続けた――  
|。

# 第九章／運命ノ少女×破壊者 † on the load

## ① (前)

— s y m p h o n y ・ 4 0 5 号室 —

「……………」

S・O・N・G・管轄のマンション、s y m p h o n y の蓮夜の自宅前。その玄関前にて、立花響は一人頭を抱えていた。

彼女の手には、蓮夜の為に家で作ってきた献立が幾つか入れられたバックが握られており、これを渡さなければと思いつつも中々インターホンを押す事が出来ずにいた。

その理由は勿論、先日の彼とのデートで蓮夜からいきなり爆弾投下された愛の告白のせいである。

（この間はイレイザーの事件の事もあつたから普通に話したりは出来てたけど……いざ二人つきりになると緊張しちゃうなあつ……）

数日前の事件の最中も、合間を縫っては蓮夜と普通に接したりは出来ていたのだが、いざこうして日常生活で会うとなるとあの日の事を思い出してやはり意識してしまい、どうしても緊張してしまう。

しかし、そんな事ばかり言つてはいられない。

（いつまでもこうやって玄関先で考え込んでいる訳にはいかないし……今日は未来も用事でいいんだから、此処はちゃんとしてしっかり渡しておかないと……！）

何せ食生活に関して悪食ばかりの彼の事だ。自分達が目を離せば、その隙にまたも缶詰ばかりの生活に逆戻りしてしまうやもしれない。

それを防ぐ為にも、響は一度深く深呼吸した後、「よしっ」と意を決してチャイムを押

そうと指を伸ばして……

「——♪……つて、あつ……」

「へ？……あれ、クリスマスちゃん？」

近くのエレベーターが不意に音を立てて開き、そこから鼻歌を歌いながら降りてきたのは、何やら買い物袋を手にした私服姿の雪音クリスマスだった。

突然現れた彼女に響は驚き、インターホンに伸ばした手を途中で止めて思わず固まってしまう。それは相手も同じ事であつたらしく、クリスマスも同じく驚いた様子で響を見ていた。

「な、何だよ。お前も不器男に用があつて来たのか？」

「え……あ、う、うん。未来と一緒に作った献立を蓮夜さんに渡そうと思つて……そういうクリスマスちゃんは……？」

「は？あ、ああ。あたしは、そのお……」

まさかのタイミングで鉢合わせしてしまった事に動揺を隠しきれず、クリスは言葉を詰まらせながら視線を泳がせて買い物袋を背中に隠すも、響はそれを見逃さなかった。

「その荷物……ひよつとして、蓮夜さんの所に持つていくつもりだったの？」

「そ、そんな訳ねえだろツ!?これは、その、あれだ！その……ちよつとした暇潰しに、街をぶらついてたら偶然見つけた店で買ったモンであって別にアイツの家に行くついでに寄ろうかなとか思ってた訳じゃなくて……!」

「……………（分かりやすいぐらいにテンパってる……）」

顔を真っ赤にして必死に言い訳を並べるクリスだが、どう見てもただの照れ隠ししか見えない。そんな彼女の分かりやすい反応に響も苦笑を浮かべる中、クリスは息を吐く間もなく喋り過ぎたせいで肩を上下に揺らしながら荒い呼吸を繰り返した後、咳払い

をして誤魔化した。

「と、とにかくっ……！あたしはあたしで不器男に用があるっただけなんだっ。お前との長話に付き合ってる暇はねーんだよっ」

「え、あ、ちよっ！待ってよクリスマスちゃん！」

慌ただしく会話を切り上げると、クリスはそのまま駆け足で響の横を素通りし、彼女の制止の声にも構わず合鍵のカードキーを使って家の鍵を開ける。そして勢いよく家の中へと入っていく彼女の後を、響も慌てて追いかけた。

「ご、ごめんください……」

「おーい、不器男！いるなら返事しろー！あたし等がきてやったぞー！」

恐る恐ると声をかけながら玄関に入る響の横で、クリスが奥に向かって叫ぶ。しかし、蓮夜からの応答はない。

「あれ……いないのかな……？」

「いや、そんな筈は……っつか、不器男の靴があるじゃねえか。出掛けてる訳でもなさそうだし、もしかしてまだ寝てんのか？」

「そうなのかな……ん？」

ふと玄関先の隅を見ると、そこには見慣れた女性物の靴が二組置かれているのが見えた。

「これ……調ちゃんとか歌ちゃんのじゃない？」

「なんだ、アイツらも来てたのか？ ったく、幾らこつちにもあたし等の部屋があるからって、来てるんなら連絡ぐらい入れとけよなあ……」

呆れた様子で呟きながらクリスは靴を脱いで廊下を進み、リビングへと向かう。その



後を響も追い、リビングの扉を開いた。

「おい、後輩共っ！いるんなら返事くらい……って、あん？」

「……あれ？誰もいない？」

室内を見回してみるものの、そこには二人どころか家主の蓮夜の姿すらなかった。響とクリスは揃って首を傾げる。

「おかしいな……玄関にはちゃんと靴があつたし、出掛けてる筈はねーだろうに……」

「うーん……？もしかして、私達が借りてる部屋の方にいるのかなあ？それか蓮夜さんの自室とか？」

キヨロキヨロと見渡してみたり、耳を澄ませてみても、リビングに人の気配は感じられない。

もしかすると自分達が借りている部屋にいるのかもしれないと思った二人はそのままリビングから移動し、自分達が使っている部屋の扉を開けて室内を確認するが、其処にも誰もおらず、自分達が持ち込んだ私物だけが綺麗に整頓された状態で置かれていた。

「うーん……此処でもないかあ……じゃあ、残るは蓮夜さんの部屋？」

「かもなあ……つたく、わざわざ来てやってんのに手間取らせやがって……」

ブツブツと文句を垂れるクリスに苦笑いを浮かべつつ、響は彼女と共に移動して蓮夜の自室の前に立つと、コンコンツと軽く扉をノックする。

「蓮夜さん、いますかー？」

『……』

「蓮夜さーん？」

何度か呼びかけるが、やはり反応はない。

仕方ないとばかりに響はクリスの方へ振り返ると、彼女はコクリと小さくうなずいた。

「……蓮夜さーん、勝手に入りますよー？」

返事を待たず、扉のドアノブを手を取ってガチャツと回し、中へ入る。

室内は家具選びが分からないという蓮夜に代わって自分達が選んだカジュアルな家具が置かれており、その部屋の隅には、何やら不自然に掛け布団が盛り上がっているベッドが存在した。

「やっぱり此処にいたんだ……」

「つたく、まだ寝てんのかよ。呑気な奴だなあつ」

「……………う……………ううぐうつ……………」

二人が近付いていくと、蓮夜はベッドの上で仰向けに倒れ込んだまま魘され、苦しそうな声を上げている。そんな彼の姿を見た響とクリスは顔色を変え、すぐさまベッドに駆け寄り慌てて声を掛けた。

「れ、蓮夜さん!?!大丈夫ですかッ!」

「お、おい、どうした!不器男!」

「……………」

「あ、あれ……………?蓮夜、さん?」

「何か様子が変わだぞこいつ……………!取り敢えず布団引つpegせ!なんかヤバいかもしれねえ!」

「わ、分かった！」

どう見ても尋常ではない様子の蓮夜から緊急事態を感じ、響とクリスは彼を起こすべく強引に掛け布団を勢いよく引つpegがして……

——何故か蓮夜の両脇に寝そべり、彼の身体に抱き着きながら二人を見てギョツとした顔を浮かべる切歌と、彼女と同じく無表情のまま蓮夜の胸元に顔を埋めて抱きつき、二人を無言で見上げる調の姿を発見したのであった。

「……………」

「……………あ……………アハ、ハ……………あ、あのデスね……………？コ、コココレはそのつ……………」

「……………」





## 第九章／運命ノ少女×破壊者† on the load

## ①（中）

— S. O. N. G. 本部・発令所 —

—— 先の騒動から数時間後。弦十郎から突然の招集命令がかかり、蓮夜と響、クリス、切歌、調の五人は本部の発令所に集められていた。

「よし、皆集まってくれたな。早速だが本題に……うん？どうした、お前達？何やら疲れた顔をしているが……」

「あー……えーと、そのお……」

「……ちよつと朝っぱらから色々あつてな……」



「うぐうつ……」

「気にしないで下さい。別段大した事は何もなかったのです」

「いや十分に大した事だったろうが!! つか当の本人のお前がそれ言えた口じゃねえーよ!!」

「ううつ……ごめんなさいですー……」

蓮夜達が本部にやって来るなり、響とクリスは妙に疲労感を漂わせており、蓮夜に至っては腹を抑えて何時も以上に生気が感じられない程に疲弊してしまっている。

そんな彼等の様子に疑問を抱く弦十郎だったが、調だけはいつも通りの無表情で淡々と言葉を返し、その返答にクリスは思わずツツコミを入れるが、調本人は特に問題ないとはかりに無反応を貫き、反対に切歌は申し訳なさそうに項垂れていた。

「ううむ……事情は良く分からんが、まあいいだろう。それよりも、今日君達に呼び出し

をかけたのは他でもない、この前の戦闘で突然現れ、我々を襲撃してきたシンフォギア装者に関してだ」

「ッ！」

「それって、あのヴィーヴルとかいう装者の事か？」

弦十郎の言葉を聞き、響はハツとなり、クリスも顔付きが変わり深刻げに聞き返す。

先日、自分達を襲撃してきた謎の装者、ヴィーヴル。彼女の話題になった瞬間に一同の間の緩んだ空気が一瞬で引き締まり、弦十郎はクリスからの問い掛けに静かに首肯する。

「そうだ。正体不明の聖遺物のギアを身に纏い、その圧倒的なまでの強さで響君とクリス君を一方的に追い詰めた謎の装者……どうやらその彼女が、翼とマリア君が現在滞在中に活動しているロンドンで姿を現したらしいという報告を受けた」

「…翼さんとマリアさんがいるロンドンに?!」

「どーゆーことだ……日本とイギリスじゃ随分距離があるだろ?普通ならこっからイギリスまで飛行機を利用して半日ぐらいかかるほどに離れてるつてのに、一体どうやって……まさか、錬金術師達も使つてた転移用のジエムをヤツらも持つてんのか……?」

「……いや、奴らならそんな道具も必要としないだろうな」

弦十郎の話聞いて響とクリスが困惑していると、蓮夜が腕を組みながら口を開いた。蓮夜の発言に二人は疑問符を浮かべると、蓮夜は深刻そうな顔付きで話の続きを語り出す。

「皆も知つての通り、奴らイレイザーには並行世界間を自由に移動出来る独自の手段を持つている。その力を使えば大した時間も労力も掛けず、国と国の間を転移して簡単に行き来する事もできる。……そのヴィーヴルとかいう装者がイレイザーに与しているなら、奴らから同様の力をもらつていたとしても不思議じゃないが……」

「或いは、彼女が持つギアの並外れた機動力がそれを可能としている、というのも有り得ます。響さんとクリスさんと交戦した彼女の戦闘データをこちらでも計測しましたが、あれだけのスピードにただの人間の肉体で耐えられるなんて先ず有り得ない……そう考えると、彼女も普通の人間ではないという可能性が濃厚だと思われませんが……」

「……そういえばあの子、自分はこの世界の住人じゃないみたいだな事を言ってた……此処とは違う世界、私達がフロンティア事変で消えた後の世界で造られた存在だって……」

蓮夜とエルフナインの話を聞きながら、先の戦闘の最中でヴィーヴルが語った言葉を響は思い返す。

自分が異世界からやって来た人間だと彼女は語っていたが、それが本当なのか嘘なのかは分からない。だが少なくとも、ヴィーヴルの持つ力は響達の想像を超える程のものなのは、彼女と実際に戦った時に手も足も出せなかった事から嫌という程痛感させられた。

「恐らく、その装者がこつちの世界に現れたのもイレイザーの連中の仕業だろうな……お前達が『記号』を得て着実に力を身に付けてきた以上、向こうもその対抗策に戦力を増やしてきたという事なんだろう……」

蓮夜が語る通り、ロンドンにいる翼とマリアを除いて今現在ここにいるシンフォギア装者達は『記号』の能力を手に入れ、以前とは比較にならないほどの実力を身につけている。

故に、イレイザー側もシンフォギア装者と互角に渡り合える力を持つ謎の装者を仲間に加える事で、こちらの戦力と拮抗させようとしてきたのであろう。

「確かにそれなら辻妻が合うけど……そのヴィーヴルっていう人は、どうしてイレイザーの仲間になんか……」

「さあな……けど、気になるような事は幾つか言ってたな。自分は『処刑人』だの、奴のギアがあたし等が消えた後に、とある機関に造られただの……」

「ああ。そして、彼女のギアの聖遺物のあまりの力に適合出来る者が現れず、適合者がいないのならいつそ作り出した……とも」

調とクリスの呟きに弦十郎が肯定すると、響が重苦しい表情で弦十郎に顔を向ける。

「それってつまり、ヴィーヴルちゃんは人間には危険な聖遺物の為の適合者として、人工的に作られた存在って事ですか……？」

「……恐らくは、そういう事になるだろう」

弦十郎の言葉を聞き、その場は一瞬静まり返った。違う世界での出来事とは言え、自分達がノイズとの戦いで消えた事で彼女が生み出され、その命を弄ばれてしまった事に誰もが心を痛めてしまう。

そんな中、同じように沈黙していた蓮夜が不意に口を開いた。

「いずれにせよ、そのヴィーヴルとやらは今はイレイザーに与する敵だ。どんな事情が

あるにせよ、情報も少ない今は一先ずその装者の事は置いておくしかない。それよりも問題なのは……」

「ああ。その彼女が何故、ロンドンにいたのか……それについてももう一つ、向こうで翼とマリア君の支援を行っている緒川から気になる報告を受けた。藤堯、友里。例の映像を」

「はー」

指示を受け、藤堯と友里はコンソールを操作してモニターに映像を映し出す。それは翼とマリアのギアに備え付けられた視点カメラの映像であり、其処に映し出されていたのは……

『FINAL ATTACK RIDE : FIR・FIR・FIR・FIR・FIRST!』





一部始終。

その中で、腰にマゼンタのバックルのベルトを巻き、バツタを模した姿のダークブルーの謎の戦士の突然の襲撃に遭って一方的に追い詰められ、バツタの戦士が放った渾身の跳び蹴りによりマリアが張った障壁ごと粉碎され二人が吹き飛ばされる姿が映っていたのだった。

「なんだアイツ……？つてか、先輩達を襲ってるアイツの腰のアレは……?!」

「ベルト……？まさか……仮面、ライダーっ？」

「……………」

映像の中に映し出される衝撃的な光景を目の当たりにし、クリスや響達も驚きの声を上げる中、蓮夜だけが険しい顔付きで黙り込んで映像を凝視している。エルフナインはそんな一同の方に振り返り、説明をするように語り始めた。

「今の映像は、翼さんとマリアさんがロンドンに潜伏していたアルカ・ノイズの製造器具の密売を行っていたとある錬金術師を追っていた際、お二人がギアに取り付けていた視点カメラのモノです。お二人が例の錬金術師を追い詰めた際、目の前で突然錬金術師が黒い炎に焼かれて変死し、その現場近くでヴィーヴルらしき装者を翼さんが発見して後を追ったそうです。……ですがその道中、映像にも映っている謎の戦士の妨害に遭い、そのままヴィーヴルらしき装者と謎の戦士に逃げられてしまつたらしく……」

「マリア達に、そんな事が……」

「そ、それより、翼さん達は?!二人は大丈夫だったの?!」

「はい。お二人の怪我は幸いにも軽傷で済んだようで命に別状はなく、既に回復して謎の戦士の追跡を続けているそうです」

「そ、そっか……それならよかつたあつ……」

マリア達の無事を聞いて安堵したように胸を撫で下ろす響。だが、一方で蓮夜の方は

相変わらず難しい顔を浮かべたまま、一時停止されたモニターの映像に映る、謎の戦士の腰に巻かれたマゼンタのバツクルを見つめていた。

(あのベルト……なんだ……？ 記憶にはない筈なのに、何故か見覚えが……)

初めて見る筈のベルトに何処か既視感を覚え、蓮夜は訝しげに眉間にシワを寄せて考え込み、そんな蓮夜の様子に気付いた弦十郎が声をかける。

「どうした、何か気になることでもあるのか？」

「……いや、大した事ではないんだ。気にしないでくれ。それより、このベルトの戦士について、他に何か情報は？」

「いえ、この戦士について大した情報はあまり……。ただ、声の感じからして性別は恐らく男性であること。それから翼さんと交戦する前、彼は自分の事をこう名乗ったそうです。……『通りすがりの仮面ライダーだ』、と」

「仮面ライダー!？」

「やっぱり、コイツも不器男のクロスと同じって事なのかよ……」

見た目の系統こそ蓮夜の変身するクロスとは全く異なるが、腰に巻かれているベルトを用いて戦う姿は何処かクロスと通ずるモノがある。それを察して呟くクリスに、弦十郎が首肯と共に言葉を続ける。

「それに加えて、翼とマリア君を撃退した直後に気になる発言を残したそうだ。……『これ以上この件に関わるつもりなら日本にいる仮面ライダー、クロスを頼る事だ』、と」

「……!」

「それって……この仮面ライダーはクロスを、蓮夜さんのことを知ってるって事ですか?!」

「何だかますますキナ臭くなって来やがったな……先輩達の邪魔をしたといい、この

「バッタ野郎もヴィーヴルやイレイザーの仲間なんじゃねえのかっ?」

「その可能性も十分に有り得る。加えて、イレイザーに与するヴィーヴルがあの場合にいたのなら、件の錬金術師の変死も彼女の仕業という線が濃厚だ。もしかするとイレイザー達は錬金術師とも結託し、ロンドンにまで勢力を伸ばして何か良からぬ目的を企んでいるのかもしれない。……其処で蓮夜君、君に頼みたいのが」

「……分かつてる。イレイザー達が潜んでいるかもしれないロンドンに向かい、奴等の目論見を暴きつつ、この謎のライダーの正体も探ればいいんだな……?」

「そうだ。翼とマリア君の件もある以上、此方としても放置しておく訳にはいかない。何よりイレイザーがこの件に関わっているとすれば、『記号』の力を持たない二人の身が危ない。そこで、蓮夜君には翼達のサポートもお願いしたい。頼めるか?」

「了解した。なら、今からでも出発の準備を――」

「ちよつと待つて下さい!」

弦十郎の指示に従い、頷く蓮夜だったが、そこで響から突然待ったが掛けられた。

「私達も一緒に行きます！蓮夜さん一人じゃ心配だし、翼さんとマリアさんのことだつて——！」

「駄目だ。お前達の同行は許可出来ん」

「えっ……」

「何言つてんだよおっさん……！向こうにはイレイザーがいるかもしれないだろ?!しかも先輩達を襲ったあのバッタ野郎も敵かもしれないねえんだ。相手の戦力がどれだけの規模かも分かんねーなら、『記号』持ちのあたし等の誰かが不器男と同行した方がいいだろ！」

響の提案を即座に却下した弦十郎に詰め寄るように言うクリス。だがそれでもなお弦十郎の意思は変わらず、険しい表情のまま首を横に振った。

「お前達が『記号』持ちだからこそ、だ。ヴィーヴルの存在が確認されたとは言え、イレザーの存在までは未だ不確か……。もし仮にコレが敵の罠であり、我々の戦力を分散させる目的も連中が視野に入れていると仮定した場合、クロスと装者が数名、ロンドンへ出向いた状況下でこの国に残っているイレザー達がその隙を突き、突然襲撃を仕掛けてくる可能性も捨て切れない」

「……風鳴司令の言う通りだな。そんな状況で、もしアスカやクレンのような上級イレザーまで出張って来れば、少ない戦力で奴等に挑むのは危険過ぎる。そう考えると、響達には日本に残ってもらい、奴等の襲撃に備えてもらうのが堅実だ」

「っ……………」

「そ、それはそうかもデスけど……………」

「……………でも、やっぱりもどかしい……………マリア達が危険な目に遭ってるかもしれないのに……………」

弦十郎と蓮夜の言い分に納得せざるを得ないのか、クリスと切歌は渋々ながら口を閉ざし、調も二人の言葉にも一理あると考えながらも納得し切れてないようだった。

そんな彼女達に蓮夜は視線を向けると、苦笑を浮かべながら口を開く。

「そんな顔をしないでくれ。何も皆が頼りないから同行を拒否してる訳じゃない。寧ろ、皆の力を頼れるから、俺は安心して行く事が出来るんだ」

「……蓮夜さん」

「ロンドンにいる二人の装者の事は任せて欲しい。必ず二人を助けつつ、イレイザー達の目的も阻止して彼女達と一緒に無事に戻ってくる。俺を信じてくれ」

自身の胸に手を当て、自信に満ちた声色で言う蓮夜。

響達はそんな蓮夜の言葉と真剣な眼差しを受けて互いに心配を帯びた顔を見合わせ



るも、今一度蓮夜の淀みのない表情を見て、やがて観念したように全員揃って溜め息を吐いた。

「……分かりました。蓮夜さんと師匠の言う通りにします」

「……そうか。ありが」

「でも！もう前みたいに無茶をするのはダメですからね?! 本当に、絶対につ！」

「え……あ、ウン、ハイ……それはちゃんと肝にも銘じて」

「お前の肝にどんな信用があるってんだよつ。この前もその前も、どんだけ死ぬような無茶を繰り返してきたと思ってやがんだっ」

「いや、その……今までのソレも全部不可抗力というか……どれも仕方なかったと言うかだな……」

「仕方ないで済まされるレベルですか？」

「『お前の物語を顧みろ』とか言う前に、蓮夜さんは一度真面目に自分をもつと顧みるべきだと思うデス」

「――」

「（み、皆さん……蓮夜さんにすごい厳しいですねっ……）」

「（うむ……まあ、実際に皆に心配を掛けるような無茶を繰り返してきたのは事実だからな……さもありなん、だ）」

響、クリス、調、切歌と順に責め立てられて心做しか若干涙目になりつつ項垂れる蓮夜。

エルフナインと弦十郎はそんな彼の様子を憐れみの籠った瞳で見つめながらも、響達の心情も理解出来るので暫し静観を決め込んでいたが、徐々にこちらを放つて説教が

ヒートアップしつつある響達を見てこれ以上は話が脱線すると思い、弦十郎が小さく咳払いをした。

「ンンツ！話が十分逸れたな。……ともかく、蓮夜君には一人でロンドンに向かってもらう。皆もそれで納得してくれるな？」

「むう……正直不満がない訳じゃないですけど……分かりました」

「私も……蓮夜さんが心配だけど、信じます」

「……（タスカッタ……このまま前のようにまた延々と叱られ続けるかと……）」

弦十郎の一声で渋々ながらも納得し、漸く引き下がってくれた響と調達を見て蓮夜も密かに安堵し、胸を撫で下ろす。

エルフナインはそんな蓮夜の反応を見逃さず苦笑いを浮かべると、蓮夜に歩み寄って彼にタブレット端末を手渡した。

「蓮夜さん、取り敢えずコレを。ロンドンにいる緒川さんが送って頂いた、今分かっている情報を僕なりに分かりやすく纏めておきました。何処かのタイピングでいいので、一度目を通してお願い下さい」

「ん……ああ、すまないわざわざ。……ところで一つ大事な確認なんだが、コレは俺が触っても大丈夫だろうか……？」

「ふふっ。はい、蓮夜さんが機械が苦手なのは伺ってますから、その辺りもちやんと考慮してあります。滅多な事では壊れないようにしてありますし、響さん達からも教わったとお聞きした携帯端末と同じ要領で使えますよ」

「そうか……何から何まで手間を掛けてすまないな……ん……？」

エルフナインの配慮に感謝しつつ、彼女から受け取ったタブレット端末の画面に映し出された幾つかの項目の内、気になるワードを発見し、蓮夜はその項目を画面をタップして開く。

その内容を無言で目で追っていく蓮夜の反応が気になり、響達も蓮夜の両脇からタブレットの画面を覗き込むと、其処には……

「……『MASKED RIDER FIRST』？」

蓮夜が目を走らせるタブレットの画面には、今も発令所の大型モニターに映し出されている謎の仮面ライダーについて今現在まで判明している情報の詳細が事細かに載っており、その項目欄のタイトルに『MASKED RIDER FIRST』と名前らしきワードがあつたのだ。

それを響がポロリと口にすると、弦十郎が軽く頷きながら答える。

「それが翼とマリア君を襲撃した、我々が名付けた謎のライダーの呼称だ」

「映像の中で、この仮面ライダーが使用していたベルトの音声からその名前が分かったんです。形状やシステムこそ異なりますが、蓮夜さんの使うベルトと幾つか類似してい

る点を踏まえると、恐らくそれがあの仮面ライダーの名称なのではないかと」

「FIRST……蓮夜さんが仮面ライダークロスなら、あのライダーは仮面ライダーfirst、つて事になるのかな……」

『FIRST（始まり）』、ねえ……先輩達をいきなり襲っておきながら、御大層な名前してやがるっ」

「……………」

MASKED RIDER FIRSTの名称を『仮面ライダーfirst』に言い換えながらマジマジとタブレットの画面に映るfirstの情報を目で追う調の隣で、クリスが気に入らなそうに舌打ちをする。

そんな中、調同様にfirstの情報を見ていた蓮夜が不意に顔を上げ、大型モニターに映し出されているfirstの静止画に目を向けた。

「(仮面ライダー f i r s t ……何処か聞き馴染みがある気がするが……しかし、なんだ？何故かアレをそう呼ぶ事に違和感があるような……)」

胸に湧き上がる奇妙な感覚に眉根を寄せ、蓮夜は首を傾げる。

しかし、幾ら思考を繰り返し、タブレットの画面に再び目を落として f i r s t の情報を追ってもその正体を掴むには至らず、妙な感覚は蓮夜の胸の内ですれすれと燻り続けていたのだった。

## 第九章／運命ノ少女×破壊者† on the load

## ①（後）

— 航空機内 —

——あれから翌日。ロンドンへ出発するに当たって、響達の手を借りて何とか昨日の内に荷物を纏め、出発日となった今日、本部に向いた蓮夜が案内されたのは、S. O. N. G. が非公式に所有しているという飛行機だった。

弦十郎曰く、アスカやクレン達イレイザーにこちら側の動きを勘繰らせない為、蓮夜をロンドンに送り届けるのはS. O. N. G. の息が掛かった信頼出来る、ごく僅かな政府の人間のみで秘密裏に行うらしい。

（……まるで響達と一緒に観たスパイ映画のような展開だな……此処まで規模の大きい一面を見せられると、S. O. N. G. が本当にとんでもない組織なんだと改めて実感



させられる……）

まあ、それも政府という後ろ盾があつてこそ初めて可能な事なのだろうと、離陸してから暫くが経ち、窓側の席に座つた蓮夜は白い雲が移ろい流れていく青空の風景を窓からただジツと眺め続ける空の旅にもそろそろ飽き始め、自分以外に乗客がいないガラんとした機内を静かに見回していく。

弦十郎から聞いた話では、この航空機に乗つてるのは機体を動かす機長と副操縦士がコックピットに二人、残りのクルーが数名搭乗しているとのこと。

乗組員の数を出来るだけ少なくしたのも非公式且つ機密に自分を送り届ける為なのもあるが、一番の理由は政府に自分がクロスである事を秘匿している為。

故に此処にいるのは蓮夜がクロスである事を知らされているクルーばかりらしく、その中でも特に信頼出来る優秀な人材だけを取り揃えたいのだが……

（それは有り難い話ではあるんだが……正直、此処までしてもらおうというのもそれはそ

れで落ち着かない……この航空機も表向きには大層な金持ちでも払えないような、高額は豪華旅客機という扱いになっているようだし、尚更……)

何せ、こちらはずいこの間まで根無し草の生活を送っていたホームレス。

S・O・N・Gと協力関係を結んでからは彼等からの支援のおかげでまともな暮らしをさせてもらってはいるが、それでも根っこに根付いた貧乏性な性格は治りそうになく、このようなVIPみたいな扱いをされると内心ソワソワしてばかりでどうにも落ち着かない。

(せめて俺のマシンの次元移動が使えていれば、直ぐにでも向こうへ行けたんだが……風太郎達の世界から戻った後、そのシステムが起動せずにまたただのバイクに戻ってしまったしなあ……)

例の並行世界間を移動出来るシステムが起動してから、幾つか閲覧出来るようになったクロスレイダー内のブラックボックスの内容をエルフナインが解析したところ、どうやら例の機能を起動させる為には未知の特殊なエネルギーを必要としているらしい。

幸いクロスレイダーにはその未知のエネルギーを自力で充填出来る機能も備わっているらしいのだが、それでもそのエネルギーが完全に溜まるまではあのマシンを用いての空間転移は不可能なようだ。

（知らず知らずの内に使ってたとは言え、便利なのか不憫なのか分からんマシンだな……まあ、もしかしたら以前より弱体化したという俺にも原因があるのかも分からんが……）

そんな風に考えた所で、いよいよ他に思考するだけの内容もなくなってしまった。

ロンドンに潜んでいるかもしれないというレーザーやヴィーヴル、例の仮面ライダー first の事も昨夜に散々考えて結局結論は何も出なかつたし、此処でまた同じ推論を繰り返したところでまた同じような結論になるだけだろう。要は時間の無駄だ。

（ハア……何か気を紛らせそうなものはないのか……あ）

そうだ……と、蓮夜は思い出したように顔を上げる。

確か出発前の準備で、響達やエルフナインから色々と預かっていた筈だ。

その事を思い出し、そういえばまだちゃんと中身を確認していなかったなどと、蓮夜は席の足元に置いておいた荷物の一つを手にとって隣の空いた席の上に置き、中身を開けて漁ると、響達から預かった品物の一つ一つを取り出していく。

まず最初に取り出したのは、調や切歌、未来が蓮夜に似合うだろうと思って選んでくれた服の数々。

どれもこれも出発前に彼女達に強く薦められた物なのだが、やはり女の子が選ぶだけあってセンスがあり、どれを着ても自分なんかでもそれなりに似合いそうだ。

次に手に取ったのは、クリスが選んだ帽子。

どうやら蓮夜の髪の色に合わせたようで、未来達にプレゼントされた服との色合いが

バツチリと合っている。

お次に響が渡してきたのは、彼女がいつも未来と一緒に作って持ってきてくれる献立のレシピだ。

どうやら向こうでも食生活に気を付けろという彼女なりの心配りのようであり、相変わらずだなど苦笑しつつ、これもまたありがたく頂戴しておく。

そして最後はエルフナインが用意してくれた、ロンドンの地形を分かりやすく纏めてくれた地図とガイドブックの資料。

これには昨夜、弦十郎達からロンドンへの到着時間を教えてもらった際に、蓮夜が少しでもロンドンを歩きやすいようにと、彼女からの提案で渡されたものだった。

ロンドンに辿り着くまでに時間が掛かるので、その間に目を通しておくといいとエルフナインに言われていたが、まさかこれ程早くに目を通す機会が来るとは。

（皆、俺の為にこんなにも用意しててくれたのか……）

自分の事を考えて、こんなにも沢山の贈り物をくれた皆の優しさに胸が暖かくなり、申し訳なさを感じつつも同時に嬉しさを小さく微笑む。

皆から渡された物を一つ一つ丁寧に確認し、彼女達の心遣いに感謝しつつ、蓮夜は響達からの贈り物を荷物に大切に仕舞うと、早速とばかりにエルフナインがくれた資料に目を通し始め、飛行機がロンドンに到着するまでの時間潰しに費やそうとした、その時……

「——へえ。君の為に其処まで用意してくれてるなんてねえ……随分と良い仲間を持つたじゃないか」

「——ッ!？」

突如背後から聞こえた、飄々とした青年の声。

聞き覚えのあるその声と共に、背筋を走ったおぞましい感覚に反応した蓮夜は思考するよりも速く身体が勝手に動き、バツ！と勢いよく席から通路の方へと素早く移動して、自分が今まで座っていた席の後ろに目を向ける。

其処には、つい先刻まで誰もいなかったはずの座席の後ろのスペースに、CAの格好をした一人の若い青年がニヤついた表情を浮かべながら立っており、蓮夜はその顔を見て驚愕で目を丸くした。

「お前は……クレン……?!」

「やあやあ、暫く振りだねえ蓮夜くん？記憶を失ってからの空の旅、楽しんでるか？」  
軽薄な口調と共に手を軽く振りながら呑気に挨拶をしてきたのは、この間の事件にて

調と切歌と共に追い詰め、あと一步の所で逃げられてしまったと彼女達から聞かされていた上級イレイザー、クレンだったのだ。

何故奴が此処につ……?と、いきなり現れたクレンに対する疑問と驚愕で脳内を埋め尽くし動揺のあまり反射的に身構えたまま固まる蓮夜だが、そんな彼を他所に、クレンはまるで友人に接するかのような馴れ馴れしい態度のまま語り掛けてくる。

「なんで僕が此処にいるのか、って言いたげな顔だね?生憎、君達の動きに関しては僕らも常に目を光らせてるんだ。君達がロンドンに目を向けて動き出した以上、こちらとしても放置して訳にはいかない。んで、その為に僕自ら出向いたって訳さ。小規模の改竄の力で、この飛行機に乗る関係者の記憶をちよちよいと弄りながら、ね」

「つ……そうやってこの機内に忍び込んだという事か……」

「そつ。やろうと思えばこんな芸当なんていつでも使えるんだよ。……ただ方針が合わないせいで、そんな真似も下手に打てない訳だけど」



「……………？何の話だ……………？」

「おおっと、こつちの話さ。気にしないでくれ。ま、そんな事より……………」

蓮夜の質問に適当に返しつつ、クレンはスツと目を細めながら悠々とした足取りで座席のスペースから通路の方へと出ていく。

そんなクレンから異様な空気の変化を感じ取った蓮夜が静かにクロスベルトを腰に巻き付けて警戒心を強めるが、クレンの方は変わらず話を進めていく。

「君と一つ、取り引きをしたいと思ってるね。君はロンドンへ向かうらしいけど、それ、今からでも取りやめにして大人しく日本に引き返えしてもらえない？」

「……………なんだと？」

唐突に告げられたクレンの言葉に、蓮夜は思わず眉根を寄せた。

いきなり現れて何を言っているのかと怪しみ、同時にクレンの真意を探ろうとする蓮夜の視線を受け止めたクレンは、口元に笑みを浮かべて両手を軽く広げる。

「こつちとしてもさ、君にこのまま目的地に着かれるのは困るんだよ。けど、君達にやられたこの間の傷のせいで僕の方もまだ万全でなくてね。出来れば力づくでつてのは避けたいワケ。だからここは穏便に話し合いで済ませたいんだけど……どうかな？」

「……そんな提案に俺が乗ると、本気で思ってるのか？」

自分の事を舐めきっているのか、それとも何か企んでいるのか。

どちらにせよ、こんなふざけた申し出を受ける気などさらさらない。それに、

「お前がわざわざ自分からこんな所にまで出向いて、そんな取り引きを持ち掛けてきたという事はロンドンにはやはり何かあるんだろう？なら尚のこと、お前の提案に従うつもりはない。邪魔をしようとするのであれば……容赦するつもりもない」

ロンドンにイレイザーが潜んでいるかもしれないという情報は半信半疑ではあったが、こうしてクレンが直接自分の前に姿を現した以上、その可能性は極めて高くなった。ならば余計に、ロンドンに行く目的を果たす為にも目の前に立ち塞がるクレンを退けなければならぬ。

そう判断した蓮夜は既に戦闘態勢に入っている事をアピールするかのようカードを構えるが、そんな彼の姿を目にしてクレンは小さく溜め息を吐くと、やれやれといった様子で肩をすくめる。

「やっぱこうなるかあ……。口で言って簡単に利くようなら苦労はしないよねえ。うん、分かってた分かってた。」

——「なら、不本意だけどしょうがない」

半ば諦めにも似た眩きと共にクレンが天井を仰ぎ、薄く溜め息を吐いた。次の瞬間、

それを合図のように、機内中の扉が勢いよく開け放たれ、其処からC Aの服装をしたダストの群れが一斉に雪崩込んで蓮夜に目掛け押し寄せてきた。

「?!ダスト……?!」

『グルウアアアアアツツ!!』

『ガアアアアアアツツ!!』

突然の事に蓮夜が戸惑う中、真っ先に飛び掛かってきた一体のダストが鋭い爪を振り下ろしてきた。

蓮夜は咄嗟にその爪を脇を掻い潜って避け、更に後続のダスト達の襲撃を次々に上手く捌きつつ距離を離し、カードをバックルへと素早く装填して瞬時にクロスに変身した。

『Code x:clear!』

『クツ……!何故ダストがこんなにも……?!一体いつの間?!』

「ハツハハツ。さつきも言つたら?こんな芸当は容易いもんだつて。本来搭乗する予定だったクルーの皆さんには、事前に僕の改竄の力で記憶を弄つた後に大人しく降りてもらつた。んで、代わりに乗せたダスト達を僕の力で普通の人間に偽装させて、後は簡単この通り、つてね?」

『つ……!!貴様……!!』

まるで世間話をするような軽い口調で語るクレンに対し、クロスは仮面の下で思わず歯噛みしながら拳を強く握り締めるも、その背後からダスト達の猛攻が迫ってくる。

その攻撃を最小限の動きでかわしながら振り向き様の裏拳で殴り倒し、続け様に前方や左右から振り下ろされる爪による斬撃を回避しつつ反撃を繰り返すも、狭い機内での戦闘は思うように動く事が出来ない。

加えて、クロスにとっての最大の懸念事項は此処が航空機の中であるという事だ。

クレンの話を鵜呑みにするのなら、この飛行機に搭乗してる人間のクルーは一人もいないらしいが、それでももしクロスが派手に戦えば機体が大きく揺れてしまう、或いはダストを倒して下手に爆発でもさせれば他の機材に誘爆して大惨事になってしまう恐れがある。

故にあまり無茶な動きも出来ず、クロスはダスト達の攻撃で機内を下手に傷付けぬように上手く捌きつつカウンターで相手の頭をへし折るか、鋭い貫手で胴体を穿つだけに留めて爆発させぬように仕留めていくも、それを上回る速さで次から次にダストの群れが押し寄せてクロスの迎撃も間に合わない。

『(クソツ……！このままじゃ勢いに押し込まれる！)』

正面から抱き着いてくるように襲ってきたダストの両腕を跳躍で回避し、そのままそのダストの頭を踏み台にして真横の客席の上を伝い、反対側のガラ空きの通路へと一旦

退避するクロス。

しかし、それで終わりではないとばかりにダスト達は一斉に座席の下からも飛び出し、クロスの両足に数人掛かりでしがみついてくる。

『チイツー！離れろっ！』

足にしがみつかれたままでは満足に身動きが取れないと判断したクロスが、纏わりつくダスト達を力任せに引き剥がそうとする。

しかしその時、機内全体が突然ガクンツ！と大きく揺れ出し、その衝撃で機内中のシート上部の天井付近から、全ての緊急用マスクが激しく揺れながら一斉に落ちてきた。

『っ?!何の揺れだ……?!』

「あーあ、言わんこつちやない……君が素直に頷いてさえくれれば、ここまでの大事には

ならなかったのにねえ？」

『っ、どういう意味だ?!』

やれやれと首を振るクレンの言葉に、クロスは思わず眉根を寄せて聞き返す。

すると、そんなクロスの反応を見てクレンはニヤリと口元を歪ませながら、何処か楽しげに語り出す。

「言つたろ? この飛行機に本来乗る予定だった筈のクルーは、そのダスト達と総入れ替えしておいたって。んで、この場にはそのダストが全員出揃ってる訳なんだけど……さて、今この機体は一体誰が操縦してるんだろーねえ？」

『……!!?』

クレンの発言の意味を理解した瞬間、クロスは思わず息を呑む。



乗組員が自分を除いて全てダストだったのなら、当然機体の操作もダスト達、或いはクレンが行っている筈。

つまり、今この場に全員が揃ってる以上、航空機の操縦室に今は誰も――

『馬鹿なっ……正気なのかっ?!このまま機体が堕ちれば、お前もただでは……!』

「勿論正気さ。というか、君の方こそ忘れてないかい？僕の能力を、さ」

『……っ?!まさか……!』

ハッとクロスがそう口にした途端、クレンはクロスに向けて不敵な笑みを浮かべると、その全身がみるみる内に流動体へと変化していき、そのまま床へと吸い込まれるように溶けて完全に消え去ってしまった。

『（水分身！やられたっ……!）』

自身の思考の浅さに腹が立つ。奴が本気でこの機体を墮とすつもりなら、初めからクレン本人がこの場に出向く筈がない。最初からこうして自分の油断を誘う為に仕組んだ罠だったのだと、何故もつと早くに気が付かなかったのか。

『(っ、いやっ、今は後悔なんてしている場合じゃないっ……！)』

既に状況は最悪と言ってもいい。こうなってしまうえば、機体の墜落は最早時間の問題だ。

身体を捻り、クロスはダスト達にしがみつかれる両足を強引に振り解いてそのまま通路を塞ぐ他のダスト達を蹴り飛ばしながらその場から脱出。

その隙に急ぎ操縦席へと向かうも、その間にも機体の高度は徐々に下がっていき、不安定な足場によるめきながらもクロスがコックピットの扉を無理矢理蹴り破って誰もいない無人の座席に着いた時には、機体は既に水平飛行から垂直に近い角度で傾き始めていた。

『まずいつ……！……どうすればいい?! どうすれば……！……！』

機体を制御しようにも、そもそも機体の状態が分からない。機械に疎いながらも計器類や操縦桿等に手当り次第に触れてみても何も反応はなく、恐らくこの機体は完全に機能停止に陥っている。きつとこれもクレンによる仕業なのだろう。

『ツ！奴め、とんだ置き土産を——!!』

『ガアアアアアアアツツ!!』

焦燥感を募らせるクロスの後から、ダスト達が一斉に操縦室へと雪崩込んできた。

慌てて振り返るクロスにダスト達が次々に飛び掛かって操縦機材の上に押し倒してしまい、其処へ更に他のダスト達も集まり始め、瞬く間に操縦室の出入口付近はダスト達の山で埋め尽くされてしまった。

『グウツ！離せつ、邪魔をするなあつ！』

ダスト達を押し除けて何とか立ち上がろうとするクロスだったが、ダスト達はそんなクロスに構わず次から次に覆い被さるように押し掛かり、クロスの動きを完全に封じてしまう。

その間にも機体はどんどん傾いていき、やがて機体の先端部分が海面に接触すると同時に、凄まじい衝撃音と共に一瞬だけ機体が大きく跳ね上がる。

そして機内が完全に海水で満たされると同時に、機体全体を包み込むように大爆発が巻き起こったのだった——。

# 第九章／運命ノ少女×破壊者 † on the load

## ② (前)

—ロンドン・ハイドパーク—

——英国でも屈指の観光名所である、ロンドンの中心街にある広大な公園。人々の憩いの場としても有名であり、特に夏場には多くの観光客が訪れる。

そのハイドパークの一角にて、一つのベンチに腰掛ける二人の女性の姿があった。

「——では、あれから搜索に進展はないと……？」

『……ああ。機体の反応が途絶えた位置を中心に今も探索を続けているが、未だに手懸かりすら見つかっていない状況だ』

早朝……まだ朝の早い時間帯にも拘わらず、風鳴翼は人目を避けるように帽子を深く被って俯きがちにベンチに座っていた。

その傍ら彼女と同様の変装をして腰掛けているのは、彼女の相棒であるマリア・カデ  
ンツアヴナ・イヴ。

二人は翼が持つタブレット端末の通信機能を使い、弦十郎とここ数日連絡を取り合っている。

その内容は無論、数日前に今二人が滞在しているここ、ロンドンに到着する予定だった筈の蓮夜を乗せた飛行機の墜落事故についてだ。

「あれから二日……まさかクロスを……いえ、黒月蓮夜、だったかしら……彼を乗せた旅客機を直接狙ってくるだなんて……」

『我々も警戒を怠っていたつもりはなかった……。襲撃に備えて最小限の人員で動いたつもりだったが、どうやらイレイザー達にはこちらの動きは筒抜けだったようだな……』

本来あの日搭乘する予定だった筈のクルーも、全員が意識を失い縛られた状態で付近の倉庫内に放置されていた……所々の記憶の欠如は見られるが、それでも彼等が無事だったのは喜ばしいところではある……』

マリアの言葉に深刻げに応えつつ、弦十郎は苦々しい表情を浮かべて目を伏せる。しかしすぐに真剣な表情に切り替り、話を戻していく。

『今現在も、本部は機体が墜落した海域に駐在して周囲一帯の搜索を続けているが、やはり彼の生存の手掛かりになる情報は何も得られていないのが現状だ。……しかしそれでも彼の事だ。必ず生きているに違いない。そう信じて我々は勿論、響君達も諦めず血気になって彼の搜索に励んでいる』

「立花達が其処まで……」

「報告で度々話には聞いていたけれど……本当にあの子達からも慕われているのね、その仮面ライダーの彼は」

『ああ。此方でも色々とおったからな。……それ故に、今の響君達の落ち込み様はともではないが見ていられん……彼女達の為にも、一刻も早く彼を見つけ出してやらねば……』

「司令……」

そう言つて弦十郎は再び目を閉じると、静かに深呼吸をした後にゆっくりと瞼を開く。

そして次の瞬間、まるでスイッチを切り替えたかのように普段の毅然とした態度に戻つた。

『——すまない、少し話が逸れてしまつたな……。それで、そちらの状況はどうだ？例のマスクドライバーfirstの行方や、イレイザーの痕跡に関する手掛かり等については』

「……申し訳ありません。こちらでも独自に調査を進めてはいるのですが、捜査に難航



が続き、大した進展も特には……」

「例の変死した錬金術師のアジトも隈無く調べてはみたけれど、イレイザー達との確固たる繋がりになりそうな、コレといった手掛かりになる証拠も見付からなかったわ」

『そうか……むう……やはりそう簡単に尻尾を掴ませてはくれないか……』

「ですが、奴らの尾の先程度までは捉えられてはいると思います。日本で立花達とも交戦したという、例の装者……ヴィーヴルの存在がこちらでも確認出来た以上、この国の中で、奴らが何かを目論んでいるのは先ず間違いない。それも、錬金術師達を使ってまで」

錬金術師達を利用するイレイザーの目的の全容は未だ掴めないが、少なくとも、このまま連中を放っておけば何か良からぬ事が起きるといふ嫌な予感がするのは確かだ。

行方不明の蓮夜の安否も気にはなるが、そちらは本部と響達任せ、自分達は引き続きイレイザーとヴィーヴル、そして仮面ライダーfirstの行方を追う意向を伝える

翼の言葉に、弦十郎も画面側の向こうで神妙に頷く。

『分かった。蓮夜君の事はこちらで引き続き搜索を続けるが、そちらも気を付けろ。このタイミングで彼が襲撃に遭ったという事は、イレイザー側には彼をそちらへ行かせたくないそれ相応の理由があるに違いない。もし仮に連中と相對する事になっても……』

「承知しています。出来る限り交戦は避け、深追いは決してしない、と」

「例の『記号』とやらの力を私達がまだ持っていない以上、仕方がないと分かっているけど……やはり業腹ね……。仮に奴らの尻尾を掴めたとしても、戦う事もままならないなんて……」

『こればかりは流石に我々の力だけではどうにもならんからな……。その為にも、蓮夜君は必ず見つけ出す。そちらでも何か進展があれば報告を寄越してくれ。頼んだぞ』

「了解」

最後にそれだけ告げると、翼達は通信を切り、同時に深い溜め息をつく。

「ああは言ったものの、どうにもままならないものだ……。私達がこうしている間にも、敵が水面下で計画を進めているかもしれないと考えると気を逸らせてしまう……」

「それも何時ものこと……。なんて、簡単に割り切れられれば気も楽になるのだけどね。こればかりは何度繰り返しても慣れる物でも無し……。何より、今回は私達も煮え湯を吞まされている訳だから、歯痒さを募らせるのも無理もない話だわ」

そう言いながら MARIA は脳裏に先の first との戦闘で敗北を喫してしまった事を思い起こし、陰鬱な表情を浮かべて二度目の溜め息を吐き出してしまおう中、隣に座る翼も難しい顔で暫し遠くの空を眺めていたが、一度目を伏せた後、やがて徐にベンチから重い腰を上げた。

「とはいえ、此処で腐っていても仕方がない。今は司令の指示通り、黒月蓮夜の搜索は立花達に任せて、私達は私達で動くしかない」

「……そうね。なら一旦ホテルに戻りましょうか。調査に出ている緒川さんも、もうそろそろ戻ってくる頃でしょうし」

翼の提案に同意しつつ、マリアもまた立ち上がると二人はそのまま公園を出ていこうとするが……

「——っ……………う……………」

(……………あの子……………?)

翼の後に続いてその場から離れようとしたマリアの視界の端で、フラフラと覚束無い足取りで歩く小柄な少女の姿が映り込んだ。

体格からして、歳は恐らく年齢は12〜13歳程か。

何故か穴だらけのボロ切れの布で顔を隠すように頭から被り、何処か危なげな様子の少女の事が少しだけ気になったマリアは足を止めてその少女を暫し見つめていたが、ふ

らつきながらも何処へ行くとも分からぬ少女の足が不意にガクリと崩れ落ち、そのまま地面に倒れ込んでしまった。

「?!ちよつとつ!」

「!………マリア?」

突然慌てて駆け出したマリアを見て不思議そうに声をかける翼だが、マリアはそんな声を無視して倒れる少女の下に駆け寄り、その小さな身体を抱き起こしていく。

すると抱き上げられた衝撃からか、少女が微かに反応を見せた。

「………あ………う………」

「大丈夫!?!しっかりして!!」

意識が薄れているのか、虚ろな瞳のまま僅かに口元を動かす少女の様子にマリアが必

死に声を掛けると、少女はよろよろと顔を上げてマリアの顔を見つめ、暫し間を置いた後、突然ハッと目を見開いて尻餅を着いたままマリアから勢いよく離れ、頭の布切れを深く被り直しながら顔を逸らしてしまう。

「なんでも、ない……気に、するな……」

「気にするなって……」

「マリア、どうしたんだ？」

「あ、いえ、この子が……って、ちよつと待ちなさい?!」

遅れて駆けつけた翼に事情を説明しようとするマリアだが、目を離した隙に立ち上がった少女がフラフラと歩き始めた事に気付いて慌てて呼び止めながらその手を掴んだ。

「ッ?!は、離なせ……!離して!」

「何を言ってるの……?! そんなボロボロの状態のまま放っておける訳ないじゃない! 貴方、親御さんは? 一体何処から……」

「いやああ!! 触らないでえ!! 嫌だアああ!!」

「ちよつ、ちよつと! 落ち着いて……!」

　　マリアに手を掴まれた途端に錯乱し、悲鳴を上げて暴れ始める少女に困惑しながらもマリアは何とか宥めようと声をかけるが、一向に収まる気配はなく、しまいには通り掛かる通行人の視線が集まり始めてしまい、このままでは騒ぎになってしまうと判断した翼はマリアの肩に手を置いて首を横に振った。

「マリア、一先ず手を離してやれ。こんな街中で騒いでいては余計に目立つ」

「だけど……」

「いいから。まずは彼女を落ち着けるのが最優先だろう？それにそんな状態では、聞ける話も聞けんぞ」

「……分かったわよ」

翼の言葉を聞き入れてマリアは渋々といった様子で少女の手をゆっくり手放して解放すると、少女はマリアに掴まれた手をもう片方の手で庇いながら怯えるように距離を取り続け、翼は二人の間に割って入りながら視線を合わせるように屈み、少女へ話しかける。

「君、名前は？随分と汚れた格好をしているが……保護者の方は？帰る家はないのか？」

「……」

翼の問いかけに対し、少女は何も答えずにただただ俯くばかり。

その様子に困り果てた翼とマリアはお互いに顔を見合わせ、どうしたものかと考え込



んんでいると……

「——やっと見付けたぞ」

「……ッ!!?」

不意に聞こえてきた男の声に、少女はビクッと震え上がりながら反射的に振り返り、翼とマリアもその視線を追うように声が聞こえてきた方に振り向く。

すると其処には、黒い長髪を後ろで一つに纏めた長身の男の姿があり、その男の姿を見て、少女は大きく目を見開いた。

「随分と探し回させてくれたな。全く、無駄な時間を取らせてくれたものだ」

「あ……ああつ……」

そう言つて面倒そうに溜め息を吐きながら男がゆつくりと歩み寄ると、少女は何か恐ろしいものを見るかのように後退りを始める。

そのただならぬ様子を見た翼とマリアは咄嗟に少女を庇うようにして男の前に立ち塞がり、険しい表情を浮かべて警戒する。

「誰なの、貴方は？」

「失礼を承知で聴くが、この子の知り合いなのか？」

「……………」

少女との間に突然割つて入ってきた二人の質問に対し、男は何も言わず歩みを止める。

そして翼とマリアの顔を交互に見て、一瞬何かを考える素振りを見せた後、すぐに平静を装い軽く頷く。

「ああ、そうだと。その娘は知り合いから預かった大切な子でな。我が家の留守番を任せていた所を、勝手に抜け出されて困っていた所だ。さあ、分かったなら大人しくこちらに渡してもらおうか？」

淡々とそう言つて、男は翼達の背後にいる少女に向かつて手を差し出す。

だが、そんな男の行動を見て少女は更に怯えた様子を見せ、頭に被った布切れを深く被り直しながら身体ごと顔を背けて俯き、その小さな身体を小刻みに震えさせている。

翼とマリアはその少女の反応を見て、目の前にいる男が自分達の後ろにいる少女にとつて恐怖の対象である事を察し、少女を護るべく前に一步踏み出した。

「悪いけど、そう簡単に引き渡す事は出来ないわね」

「…………何だと？」

マリアの言葉を聞いて男がピクリと眉を動かす。鋭い眼差しで睨みつけられるも、翼は臆する事なく言葉を続けた。

「お前が何者なのかは知らんが、この子のお前に対する怯え様は異常だ。それに何よりこの子の出で立ち…………何処をどう見ても一般家庭の子供の身なりではない。これではまるで浮浪児だ」

「貴方が本当にこの子の保護者であるなら、きちんとした証拠を見せなさい。それが出来ないのなら、この子は私達が病院に連れていく。別に構わないわよね？ 貴方が本当にこの子の保護者であるのなら、ね」

「……………」

翼とマリアの言葉に、男は黙ったまま二人の顔を交互に見つめ、やがて小さく鼻で

笑った後、口を開いた。

「成程、確かに道理だな。ならば——これでどうだ?」

そう言つて男は徐に親指と中指を擦り合わせ、パチンツと音を鳴らす。

すると次の瞬間、男の身体から突然波紋状の振動が広がり、一瞬にして翼やマリア、少女だけでなく周囲の人々をも包み込んだ。

「ぐっ?!っ……なんだ、今のは……?!」

「貴方、今何を……!?!」

「……コイツ等には効いていない……そうか、お前がその二人の近くにいるせいかな? ファートムよ」

「っ……」

翼やマリアが謎の現象に困惑している一方、男はそう言いながら二人に守られてる少女をファートムと呼び、少女はその名前にビクッと反応を示すが、翼とマリアは事態を未だ飲み込めずにいる。

「一体何の話をしている……?!今の現象はなんだ?!」

「……そう急かしてくれんな。その答えなら、周りを見渡せば一目瞭然だろうよ」

「なんですつて……?」

男の言葉を聞いた二人は、周囲を見渡していく。其処には……

「——あら?私、こんな所で何してるのかしら?」

「いけない!早く家に帰らないと、お兄ちゃんが帰って来ちゃう!」

「そうだった、課題を提出に早く戻らないと……」

今まで翼達の様子を不審げに傍観していた筈の周囲の人達が、突如として不自然なまでに普段の日常へと何事も無かったかのように戻って蜘蛛の子を散らすように散り散りになり、あつという間に公園内だけでなく、公園の外にいた人達までも次々と姿を消していく光景が広がっていたのだ。

やがて自分達以外、完全な無人となった園内と外を見て翼達は啞然としてしまう。

「何なの……これは一体……?!」

「……今ので半径数km内の人間の記憶、その全てを書き換えた。これで直ぐに済む話かと思っただが、よりにもよってソイツの影響を貴様らが受けるとは……一々面倒事を増やしてくれる」

「書き換えた……?……ツ！まさか、貴様つ……!」

男の不穏な口振りからその正体を即座に察し、翼とマリアがそれぞれの首から下げたギアのペンダントを握り締めながら男に敵意を向ける。

しかしそんな二人を見ても男は特に動じる様子もなく、何処かつまらなそうに右腕を荒々しく振るうと、その手に無から出現した刀が握られると同時に男の姿がみるみると変貌していく。

まるで武者鎧とカマキリの要素を足し合わせた、全身に紫色の刃状のラインが走る灰色の異形の姿。

徐に刀を握る右腕を下ろすその佇まいに何処か武人らしさを滲ませている一方で、その緑色の瞳は無機質に冷たい光を放っていた。

「その姿は……!!?」

「やはりイレイザー………立花達が日本で戦ってるという件の怪人か!」



弦十郎から情報だけ聞かされていた特徴と一致するイレイザーと初めて相対し、思わず息を飲むマリアと翼。

しかしそんな彼女達の反応になど意にも介さず、異形となった男……マンティスイレイザーは淡々と言葉を紡いでいく。

『本来なら此処で正体を明かす予定などなかったんだがな……こうなってしまった以上、背に腹は変えられんか』

気だるげにそう言って、マンティスイレイザーは後ろ腰に回していた左手から幾つもの塵屑を目の前に振り撒く。

瞬間、塵屑の一つ一つが次々に人型を成して無数のダスト達に変化し、マンティスイレイザーの前でワラワラとゾンビのような不気味な動きで蠢きながら身を起こしていく。

「っ、マリア！」

「ええっ！」

現れた大量のダスト達に怯む事なく、翼とマリアは短い掛け合いを交わしながら少女を背にそれぞれのギアペンダントを手に取って身構え、聖詠を口ずさんだ。

「Imyuteus amenohabakiri tron……」

「Seilien coffin airgetlahm tron……」

聖詠を紡いだ瞬間、二人は一瞬にして青と白銀の光に包まれ、同時にその身に纏われたインナースーツの上からアーマーとプロテクターが次々と装備展開されていく。

そうして光の中から姿を現してそれぞれの得物を手にし、少女を守るべく二人は武器を構えながらマンティスレイザー達と対峙する。

『やはり装者か……見覚えのある顔にもしやとは思ったが、まさかこんな所で顔を合わ

せる事になるとは思わなかつたぞ』

「それは此方も同じよ。だけど丁度いいわ。こちらから探す手間が省けた今、貴方達には聴きたい事が山のようにある。それも全部此処で吐いてもらおう……！」

「つ、マリア、今この場で奴らを相手にするのは——！」

防衛の為にギアを纏つたとはいえ、未だレーザーへの対抗手段を持たない今、此処で戦うのは得策でない事ぐらい彼女も承知しているハズ。

マンティスレーザーを前に勇むマリアを翼が宥めようとすると、マリアはマンティスレーザーと対峙したまま目線だけを彼女に向け、声を潜めて答える。

「(言われなくとも分かっているわ。風鳴司令からも散々釘を刺されたのだし、此処で奴らとまともに戦うつもりはないけど、相手は何故かその子を狙ってる……。敵の目論見を知れる取っ掛りにもなり得るなら、そういつた意味でも彼女をこのまま奴らに渡す訳にはいかない)」

「それはそうだが……何か考えがあるのか？」

「（その子連れて逃げるにせよ、奴らを撒くにはそれなりに時間を稼ぐ必要がある。その子連れて逃げるなら、脚の速い貴方の方が向いている。だから私が連中の足止めをしている隙に、貴方はその子と一緒に安全圏にまで……）」

「（……判った。ではその作戦で——）」

マリアが考える意図を汲み、翼は何時でも動き出せるように自分達の後ろでマンティスレイザー達に怯えた目を向ける少女を見遣り、マリアも二人が逃げ切る時間を稼ぐ為、マンティスレイザー達に挑み掛かるべく逆手持つ短剣を手に踏み出そうとして……

『——なんだ。探し物を見付けたと聞いて来てみれば、コイツらも一緒だったのか

……  
』

……翼とマリア、そして少女の背後から、腰にマゼンタのベルトを巻いたダークブルーのバツタのライダー……firstが悠々とした足取りで、首元のマフラーを風で揺らしながら音もなく姿を現したのだった。

「?! 貴様は……?!」

「マスクドライダー……first……?!」

『遅いぞ。今まで一体何処で油を売っていた?』

『随分な言い草だな……。お前達の失態にこうしてわざわざ付き合っているとやっていると、口から出るのはお小言だけか?』

『身の証も満足に立てられていない奴がどの口でほざく？我々の信用を得たいのであれば、それ相応の働きで示してからにしろ』

『此処まで人をコキ使つておいて、まだ信用が足りないと？全く、相当疑り深い連中だな……』

ヤレヤレと、マンテイスレイザーの冷たい対応に腰に手を添えながら、溜め息と共に首を横に振るfirst。

一方でそんな二人の会話を他所に、翼とマリアはいきなり現れたfirstの出現に動揺を隠せないまま、慌ててfirstにも警戒心を向けて得物を構え対峙していく。

「どうしてfirstがこんな所に……?!」

「つ……このタイミングで現れた上に、今のやり取り……貴様、やはりレイザーに与しているのか……?!一体何者だ！何が目的で……！」



「ひっ……!!」

「っ、翼っ!」

「くっ……!! はアあああッ!!」

マンテイスイレイザーからの指示を受け、まるで獲物を見付けた獣のような雄叫びを上げて無数のダスト達が一斉に三人へ襲い掛かる。

マンテイスイレイザー達とfirstに前後を挟まれて窮地に陥り、それでも怯える少女の前に出て即座にダスト達を迎え撃つ二人だが、其処へマンテイスイレイザーが翼に、firstがマリアへ攻撃を仕掛けて混戦へと突入してしまうのであった。



## 第九章／運命ノ少女×破壊者 † on the load

## ② (中)

『ガアアアアッ!!』

『シャアアアアアッ!!』

「くツ……ハアアアッ!!」

ファートムと呼ばれる謎の少女を巡り、翼とマリアの装者、無数のダストを率いるマ  
ンティスレイザー、そしてそのマンティスレイザーに味方するように装者達を襲い  
始めたfirstが入り乱れ、戦場は混沌を極めつつあった。

その中で、翼は入れ替わり入れ替わりに襲い来るダストの襲撃を謎の少女、ファート  
ムを背に何とか守りながら迎撃しアームドギアの刀を振るい続けているが、彼女が斬り

付けるダスト達は斬られた箇所から不気味に肉が泡立ちながら忽ち修復してしまい、撃破には至らぬ苦戦を強いられていた。

「クツ……！（やはりこちらの刃が通じないっ……！クロスが齎す『記号』とやらの力がない限り無力化されるか……！）」

翼が手にする日本刀型アームドギアの切れ味を以てしても、ダスト達に刻まれた切断面は瞬く間に再生して元通りになってしまい、倒せない。

ならばと、翼はアームドギアの刀身から蒼ノ一閃を繰り出し、ダストの群れを一網打尽にしてみせる。

しかし、その一撃を受けても尚、ダストの群れは怯む事なく襲い掛かり続け、翼は思わず舌打ちしてしまうが、そんな彼女の死角にいつの間にか回り込んだマンティスイレイザーが鋭い横蹴りを放ち、彼女を吹っ飛ばした。

「ぐあああつ?!——っ、がはっ?!」

「っ、翼っ!」

咄嗟の不意打ちに反応してガードしたものの、凄まじい衝撃を全身に受けてしまい、そのまま地面の上を転がっていく翼。そんな彼女に追い討ちを掛けるようにマンティスレイザーは追い掛け、刀を振り下ろす。

それに対し翼はどうか片膝を着いて起き上がりながらアームドギアを盾のように構えて攻撃を防ぐと、マンティスレイザーは冷淡な眼差しで翼を見据えながら吐き捨てた。

『この程度の雑魚を相手に手間取っているようでは話にならないぞ。お前の剣はその程度なのか?』

「貴様……ッ!!」

マンティスレイザーの挑発的な言葉に翼は齒を食い縛り、アームドギアの力押しで

相手の刀を徐々に押し返し何とか身を起こして立て直そうとするが……

「——いやあああつっ!!」

「……!!?」

突然背後から聞こえてきた悲鳴に驚き、翼が慌てて振り返ると、そこにはダスト達に取り囲まれたファートムの姿があった。

ファートムは乱雑に両腕を振り回し必死に抵抗しているが、ダスト達の数に押されて次第に追い詰められていく。

「しまったっ……!クッ!」

——ドゴオオオツ!!——

『ヌウ……!』

翼は急いでファートムを助けに向かうべく、鏢迫合うマンティスレイザーの横腹に蹴りを叩き込み、よろめいた隙を突いてファートムの下へ駆け出し、彼女に群がるダスト達を背後から擦れ違い様に斬り付けながらファートムの前に庇うように立った。

「無事か?!」

「っ……ありが、とう……」

「礼などいい!それよりも、私から離れるなよ!」

翼の言葉にファートムがコクリと小さく首を縦に振ったのを確認すると、翼は再びダスト達に向けてアームドギアを構える。その一方で……

—ガギイイイイツ!!ギインツ!!—

「くうっ!はあああつ!」

『フンツ……！ハアツ！』

翼達とマンティスイレイザー達から少し離れた場所では、マリアがfirstを相手に防戦一方の戦いを強いられていた。

マリアが振りかざす短剣型のアームドギアをfirstは左腕の前腕のみで受け止めて防ぎつつ、すかさず右腕の拳をマリアの顔面に目掛けて放つ。マリアはそれを反射的に顔の前に伸ばした左腕で防御するも、firstの攻撃の威力を殺し切れずに両足で地面を削りながら吹き飛ばされてしまう。

「ぐうっ……!? (なんて、馬鹿力……!!)」

マリアは苦痛に顔を歪めながらも、どうにかfirstの攻撃を凌いで反撃の機会を探るが、その僅かな隙にfirstはマリアとの間合いを詰めており、マリアの腹部目掛けて強烈な掌底を放つ。

「くっ!?」

　　マリアはその攻撃を避けきれずにまともに喰らってしまっても、どうか地面に着地して膝をつくことは回避した。しかし、f i r s t は間髪入れずに追撃を仕掛けようとしてくる。

「っ、舐めるなあっ!」

　　その瞬間、マリアは身体を回転させて勢いをつけながらアームドギアを蛇腹剣に切り替えて薙ぎ払い、それを見たf i r s t が後ろに飛び退いて回避すると、マリアは更に回転の勢いを付けながら連続でアームドギアを振るい、次々と銀色の斬撃を放っていく。

　　だが、マリアの連続攻撃はどれも空を切り、やがてアームドギアを元の短剣に戻して動きを止めると、其処にはf i r s t の姿はなく、いつの間にかマリアの背後に回り込んでいた。

「なっ……!?—ガシイツ!—ぐあうっ!か、はっ……?!」

背後から忍び寄ってきた *first* に気付いて振り返ろうとするも、それよりも先に彼の右手がマリアの首を鷲掴みにし、そのまま強引に身体を持ち上げられてしまう。

ギリギリと首を締め上げられ、マリアは呼吸困難のあまり顔を歪めながらも *first* の右腕を何度も殴って逃れようとしてもビクともせず、逆に *first* はそんなマリアを見て、訝しそうに小首を傾げた。

『解せないな……。未だクロスも引き連れずにレイザーを相手に戦うとは。俺の忠告に聞く耳を持ち合わせていなかったのか?』

「あ、ぐ、っ……なにを、白々しいっ……!!彼を乗せた飛行機を襲撃しておきながら、どの口でっ……!」

『……何だっ?』



マリアの言葉聞いた途端、firstはピタリと動きを止め、マリアの首を絞め上げる手の力を緩めた。

その隙を見逃さず、マリアはすかさず短剣を振るいfirstのボディを斬り裂いて拘束から逃れると、その場に膝を着いて喉を抑えながら何度も激しく咳き込み、一方で胸から派手に火花を撒き散らしながら後退りしたfirstは特に大したダメージを受けた様子もなく胸の汚れを払うように手を動かしつつ、顔を背けて軽く舌を打った。

『そういう事か。最近連絡が付かないと思えば、アイツ……余計な事を……』

「っ——敵を前に、余所見をオおおツ!!」

—HORIZON†CANNON—

一瞬だけ意識を逸らすfirstに目掛けて、マリアは怒声を上げながら立ち上がった。アームドギアの短剣を左腕部ユニットの肘部側から装甲内部に納刀するように接続し、左腕部ユニットが多数の光り輝くフィンを有する射撃形態へと変形。更に掌部を変

形させて形成した砲身から、高出力の銀色のエネルギー光波を迸らせた。

並の相手なら直撃すればひとたまりもない一撃。

しかしそれでもfirstは顔色一つ変えず、悠々と佇んだまま右手のグローブの内側から溢れ出す水をまるで水掛けのように右手を振るって目の前に撒き散らし、更に左手を前に突き出して今度は掌から白霧の冷気を放出。

冷気を浴びた宙を舞う水は一瞬の内に凍り付き、氷の盾を形成してマリアが放ったエネルギー光波を受け止めた直後、凄まじい爆発を起こして辺り一帯を白霧が包み込んでいった。

「くツ?! (これは、目眩し……?!不味い、敵の姿が視えない……!」

視界を奪われ、慌ててアームドギアを構え直そうとするマリア。

が、そんな彼女の背後に全身に雷を身に纏ったfirstが超速度で回り込み、既に

拳を振り上げていた。

「?!しまっ——!——バキイイイイツ!!——ぐああううっ?!」

咄嗟にアームドギアを短剣に切り替えて振り向き様に防御を試みるも、firstの雷を纏った右ストレートがアームドギアを砕くと同時に彼女の身体にも衝撃を与え、マリアはそのまま吹き飛ばされて地面の上を転がっていく。

「マリアっ?!」

その光景を目の当たりにして、翼は思わず悲鳴に近い叫びを上げるも、マリアはどうか受け身を取って僅かによろめきながらも身を起こしていく。

「はあっ、っ……!……まだっ……この程度、でっ……!」

『流石のしぶとさだな。だが……』

ふらつきながらも立ち上がるマリアを見てその不屈の精神力に感心するように眩き、firstはマゼンタのバツクルの両サイドのハンドルを開くと、左腰のカードケースから取り出した金色のカードをマリアに見せつけるように翳す。

『……それだけでは、俺には及ばない』

『FINAL ATTACK RIDE：FIR・FIR・FIR・FIR・FIRST！』

バツクルにカードを投げ入れて装填し、両サイドのハンドルを閉じるようにスライドさせて電子音声で鳴り響く。

直後、firstの足元からマリアの下にまで絶対零度の冷気が放出され凄まじい速さで地面が凍り付いていき、マリアだけでなく、彼女の背後で翼とファートムに襲い掛かるうとしてた複数のダストの足まで一瞬で凍らせてしまった。

「これはっ……!!？」

『ゲアツ、ガツ?!』

『ガゲエアツ?!』

突然の事に動揺するマリアと、動けなくなった事で狼煙を上げているかのようにならない鳴き声を上げて暴れるダスト達。

その隙に *first* は両脚を揃えて空高く跳躍すると、空中で一回転してから右足を突き出し、足に炎を纏いながらマリアに向かって急降下していく。

『ハアアアアアツ!!』

「くツ?!」

「ツ!!マリアアツツ!!!」

頭上から迫り来る *first* を前に凍り付いた足では身動きも取れず、目を見開いて



爆風と共に熱波が二人を背中から襲い、翼とマリアはそのまま地面に落下して倒れ込む。

パチパチツと、二人の周囲で火の粉が舞う中、どうにか翼の腕の中で庇われたマリアは痛みで表情を歪めながら顔を上げて振り返ると、其処にはダスト達を焼き払った炎の中心地で徐に身を起こす、*first*の姿があつた。

「(なんて奴なの……あれだけの数を、一瞬でっ……)」

『……流石にあの程度でやられるほどヤワではないか。さて、次はどうするか——』

『——貴様ア！一体何のつもりだ?!』

次の行動に移ろうとしていた*first*だったが、そんな彼の下に怒りの形相を浮かべたマンティスレイザーが駆け付け、声を荒げながら*first*の肩をド突いて詰め寄った。

『急に何だ？こつちはお前達の要求通り、装者達の足止めに協力してやってるだろ？』

『味方を巻き添えにしておいてどの口で言っているっ?! 貴様のせいでこちらが余計な被害を被っているんだぞっ?!』

『ソイツを俺に言われてもな……あの雑魚共を率いてるのはお前だろう？なら、こつちの戦いに巻き込まれないように統率し切れなかったお前の監督に責任があるんじゃないのか?』

『っ、貴様アツ……!!』

飄々とした口調でダスト達を巻き込んだ事を詫びれもしない *first* に、マンティスレイザーが怒りに震えて今にも彼に殴り掛かりそうな雰囲気醸し出す中、マリアはそんな二人のやり取りを遠巻きに見て訝しげに眉を顰めていた。

「(何だか知らないけど、揉めている……?仲間同士という訳ではないの?……いえ、どちらにせよ今がチャンスに違いない!)……翼!起きて、しっかりしなさい!」



「——っ……マリ、ア……?」

マンティスレイザーとfirstが言い争いしているこの隙に態勢を立て直すべく、先程の爆風を受けて隣で気絶する翼の背中を何度も揺さぶり意識を取り戻させるマリア。

その声と身体を揺さぶられる感覚から翼も意識を取り戻し、徐に顔を上げる姿を見て一先ず安堵するマリアだが……

「——いや、だっ……! 離せえっ!」

「……っ?!」

悲痛な悲鳴が聞こえ、二人は慌ててそちらに目を向ける。

其処には、先の爆発から生き残ったダスト達に両脇から腕を掴まれ、捕らえられて逃

げようと必死に暴れるファートムの姿があつた。

「不味い……！あの子が！」

「つ、その少女を離せっ！」

捕らわれるファートムを救出すべく、すぐさま地面から起き上がった翼とマリアがファートムの下へ走り出す。

が、其処へマンティスイレイザーが横合いから刀を振りかざしながら飛び掛かり、二人の前に立ち塞がってしまう。

「ツ！貴様っ！」

「邪魔よっ！其処を退きなさいっ！」

『邪魔なのは貴様らの方だ……ファートムを連れていけ。これ以上、面倒を増やされて

は困る』

「っ……い、嫌だ……もう戻りたくないっ！私はあんなっ、嫌だアッ！」

ダスト達によって両腕を拘束されながらも激しく抵抗を見せるファートムだが、ダスト達は一向に拘束を解く気配がなく、寧ろ力尽くで彼女を何処かに連れ去ろうとしている。

その様子を見た翼とマリアは焦燥感を募らせるが、これより先には進ませまいと刀の切っ先を向けるマンテイスレイザーが立ち塞がっているせいで前に進めず、立ち往生してしまう。

そうしている間にもダスト達に連れ去れるファートムの背中がどんどん遠ざかっていき、一体どうすればいいのかと二人が焦りに駆られながらも必死に思案に暮れていると……

——……オオオオオオオオオオオオオオオオオオツツ………!!——

「……………」

『……………うん?』

『なんだ……この音は……?』

緊迫したこの状況下の中、不意に何処からともなく謎の不審な音が聞こえてきたのだ。

まるで何かが飛来してくるような、そんな轟音を響かせながら近付いてくるその異質な音の正体を察する事が出来ず、マンティスレイザーと翼達が思わず辺りを見回す中、彼等と同様に音の発生源を探していたfirstがふと空を見上げ、彼方から少しずつ近づいてくる謎の物体に気付く。

『アレは……』

「え………ツ！あれは………！」

『……ミサイル、だと？』

firstの眩きを聞き逃さず、マリアが彼の視線の先を追って空を見上げたのを見て翼とマンティスレイザーも顔を上げると、ロンドンの街の上空を猛スピードで突っ切り、こちらに向かって空の向こうから赤い弾頭の一基の大型ミサイルが飛来してくる姿が見えたのだ。

何故ミサイルが？とマンティスレイザーが困惑を隠せない一方、翼とマリアにはそのミサイルに見覚えがあった。

「あのミサイル、確かクリスの……？」

「まさか……雪音か！」

『何?!』

そう、遠方から飛来してくるそのミサイルは、翼とマリアが共に戦ってきたクリスが武器に、そして時に長距離間の移動や空中戦での足場としても使用するソレに酷似しているのだ。

もしや本部からクリス、或いは他の装者達が救援に駆け付けてくれたのか。

マリアと翼がそう予測する中、その間にも大型ミサイルは一同が入れ乱れる戦場の真上を猛スピードで通過すると同時にミサイルの上から人影らしき影が飛び降り、戦場に目掛けて急速に降下していく。

『ツ！何者か知らんが、これ以上邪魔者が増えられてたまるか……！奴が降り立つ前に迎え討てツ！』



『……?!—ドゴオオオオツ!!—ゴアアアツ?!』

乱入者の右腕のパーツが稼働し、パイルバンカーとなった拳を振りかざして最初のダストの頭に打ち込み、バンカーが起動して炸裂し頭部を丸ごと綺麗に吹き飛ばしたのだ。

更にそれだけに終わらず、乱入者は身動きが取れない空中でバンカーを打ち込んだ衝撃とダストが消し飛んだ爆風を利用して別のダストへ飛び掛かりながら続けてパーツを起動した左腕のバンカーを叩き込み、再度爆砕。

其処から同様の動作を繰り返して次々にダスト達を撃退していき、ラストに両サイドから同時攻撃を仕掛けようとした二体のダストそれぞれに両腕を交差させた両拳を叩き込み、バンカーを作動して同時に撃破。瞬く間にダストの群れを全滅させたのである。

『な、なんだと?!』



差し向けたダスト達を一瞬で撃破されたマンティスレイザーが動揺する中、乱入者は連鎖爆発が立て続けに巻き起こる空からクルリと身を翻し、戦場のど真ん中に着地した瞬間、粉塵が勢いよく舞い上がってその姿を遮ってしまう。

しかし、砂埃の向こうで橙色の装甲と、強風ではためく翼のようなマフラーが微かに見え、マリアと翼が目を見張る。

「あれは GANG ニール……？立花響なの?!」

「立花？……いや、アレは……？」

『……フツ……』

見覚えのある色合いとマフラーから救援に駆け付けたのが響だと思い驚くマリアだが、その横に立つ翼は何か違和感を感じ訝しげな顔を浮かべ、静かに事の成り行きを傍観していた first は何かを察した様子で仮面の下で意味深に笑い、踵を返し、悠々

とした足取りでその場を後にしていく。

そして未だ粉塵が漂う向こう側で乱入者がユラリと身を起こす姿を微かに捉え、マンティススレイザーが困惑と忌々しさの混じった声音で怒号を上げる。

『何だ貴様っ……一体何者だ!』

『——見て判らないのか……?』

「ツ……この声……男……?」

「(やはり……!だとすれば、まさか……!)」

乱入者が発した聞き覚えのない男の声にマリアが戸惑う一方、翼は相手の正体に気が付いて驚きの表情を浮かべ、やがて煙の中から現れた姿を目の当たりにして確信を得る。

煙が晴れていくと共に徐々に姿を現したのは、滑らかさと刺々しさが溶け込むように

両立した形状のオレンジ、白、黒の三色が入り交じったボディと、両肩の肩甲骨部から生えた橙色に輝く二翼の光のマフラー。

金色に近い橙色の瞳でマンティススレイザーをまつすぐに捉え、オレンジと白の仮面の戦士は冷淡な声音で告げる。

『御覧の通り——お前達の……敵だ……！』

純白と橙色の右腕で煙を払い除け、完全にその姿を現したのは仮面ライダークロス・タイプガングニール。

二日前、飛行機墜落事故以来消息不明だった、黒月蓮夜その人の姿であった——。

## 第九章／運命ノ少女×破壊者† on the load

## ②（後）

『クロス、だと……?!馬鹿なつ、何故貴様が此処に?!』

「!クロスつて、まさか……」

「旅客機墜落事故から消息不明と聞かされていた、黒月蓮夜なのか……?!」

突如として戦場に現れたクロスを見てマンティスイレイザーが驚愕する中、マリアと翼も同じく戸惑いを隠せずにいた。

確かに、目の前にいるのは間違いなく二日前に行方知れずとなった筈のクロスであり、同時に自分達が探し求めていた人物でもある。

しかし、今まで何処に居たのか？どうして今になって現れたのか？疑問ばかりが浮かぶ二人だが、そんな二人の心境など知る由もなく、クロスは空手のままマンティスレイザーへゆつくりと歩み寄っていく。

『くツ！何を呆けている！さっさと奴を始末しろ！』

『『『グルアアアツ!!』』』

迫るクロスを前に我に返り、マンティスレイザーが残ったダスト達を全て差し向けて迎え撃とうと試みる。

しかし、クロスは瞬時に両脚のパワージャッキを稼動させて凄まじい瞬発力でダスト達の間を一瞬ですれ違い、それと同時にダスト達の急所を正確に狙った打撃を次々に打ち込んでいき、両脚で地面を削るようにブレーキを掛けてダストの群れの背後に止まった瞬間、ダスト達は断末魔を上げる間もなく連鎖的に爆発を起こし散っていった。

『何……?!』

「凄い………たった一瞬で………！」

「（立花の戦い方と酷似している………？アレもクロスの力的一端なのか………？）」

数秒すら経たずにダスト達を瞬く間に撃退したクロスの力にマンティスイレイザーやマリヤ達も目を見張り驚嘆を覚える中、クロスは燃え盛る炎を背に、マンティスイレイザーに鋭い眼差しを向けていく。

『これで………終わりか？』

「っ、舐めてくれるなあっ！」

クロスの挑発的な言葉に激昂し、怒りに任せて両手で握り直した刀を構え、力強い踏み込みから一気に距離を詰めて斬りかかるマンティスイレイザーだが、クロスは素早くサイドステップを踏みながら斬撃を避け、逆に右拳を叩き込んだ。

『ぐおおおおおっ?!』

派手に殴り飛ばされ、マンティスイレイザーは火花を散らしながら後退りして苦悶の叫びを上げてしまう。

たった一撃であれだけ自分達が苦戦したマンティスイレイザーを吹き飛ばす程の威力を誇るクロスの攻撃にマリアと翼も啞然としてしまうが、クロスはそのままマンティスイレイザーとの距離を詰めつつ、両腕のバンカーとパワージャッキを用いた連続攻撃で拳や蹴りを立て続けに放っていく。

『グッ?!速いっ……!!』

『ふっ、ハアアアアアッ……!!』

防御に徹し続けるマンティスイレイザーに対し、クロスは反撃の余地を与えないように素早い動きで攻撃を繰り返していき続ける。

そして遂にクロスの猛攻に耐え切れなくなったマンティスレイザーがクロスの拳を避けるように後方へ飛び退くと、刀を八相の構えに構え直し、その刀身に紫色の炎を纏わせていく。

『！何だ……？！』

『あまり凶に乗ってくれるな……！！紫炎ッ！』

—ズバオアアアアツツ!!—

『ツ！クツ……!!』

紫色の炎を纏った刀を上段から思い切り振り下ろした瞬間、マンティスレイザーの刀から巨大な紫炎の斬撃波が放たれてクロスに襲い掛かった。咄嗟に身を翻した事で直撃こそ免れたものの、マンティスレイザーは追撃の手を緩めず刀を連続で振るい、紫炎の斬撃波を何度も撃ち放つ。



『チツ……！』

―ドガアアアツ！ドゴオオオツ！バアアアンツ！―

クロスはパワージャッキを起動した両足の連続回し蹴りで斬撃波を打ち消し何とか防ぎ切るが、それでもマンティスレイザーの攻撃の手は一向に止まない。

それどころかマンティスレイザーは次第に斬撃の勢いを強めてクロスの身体が徐々に後退していくが、不意に斬撃波の猛攻が止み、紫炎の斬撃波を打ち消した事により発生した紫色の煙を向こうを訝しげに見据えると、其処にはいつの間にかマンティスレイザーの姿がなく、何処かへと消えてしまっていた。

『消えた……？』

『――黒月蓮夜!!後ろだ!!』

『!』

マンテイスイレイザーが忽然と姿を消した事に戸惑うクロスだったが、そんな彼に向けて切羽詰まった翼の音が響き渡り、クロスは反射的に振り返ると同時に両脚のパワージャッキを 작동させて後ろに跳躍すると、彼の背後にいつの間にか紫色の雷を体中に身に纏って回り込んだマンテイスイレイザーが振るった刃の切っ先が紙一重で胸の装甲を掠り、空を切る。

『チツ、今のも外すか……』

『ツ……全身に雷を纏った高速移動か……随分と多芸な奴だ……』

『感心するのはまだ早い。本領は此処からだ……紫電・連覇斬!!』

クロスの言葉に不敵な笑みを浮かべながらそう返したマンテイスイレイザーは全身に紫雷を纏い再び姿を消すと、次の瞬間には四方八方から無数の斬撃をクロスに目掛けて放った。



の力を込めた右ストレートを放ち、その衝撃でマンティスレイザーを吹き飛ばした。

しかし、マンティスレイザーは受け身を取ってすぐに体勢を立て直すと、クロスから距離を取り再び紫雷を身に纏いながら高速で動き出し、姿を消してしまふ。

『また消えたかつ。だが……！』

『Final Code x……clear!』

左腰のカードケースから取り出したカードを素早くバックルに装填すると、電子音声と共にクロスの全身の装甲が両脚から上半身に掛けて順に部分展開されていき、露出された内部装甲が橙色に激しく発光する。

直後、クロスは全身の内部装甲から稲妻状の閃光を走らせながら凄まじい速さで駆け抜けると、対するマンティスレイザーも全身から紫電を走らせ同等の速さで真つ向から立ち向かい、お互いに拳と刀を振りかぶる。

『ハアアアアアアアッ!!』

『紫炎ツツ!!』

互いの光を纏った煌拳と紫炎に覆われた刀がぶつかり合った瞬間、二人を中心に強大な衝撃波が発生して半径十数メートル内の周囲の大地が吹き飛んで捲れ上がり、周りの木々が激しく揺れ動く。

しかしそれだけに終わらず、二人は再度超スピードで動き出すとまるで弾かれたように何度も激突し、激しい攻防を繰り返していく。

何も無いあちこちの空間で絶え間なく巻き起こるけたたましい轟音と衝撃波。それはまさに二人の戦闘のレベルの高さを表していた。

—ドゴオオオオオンツツツツツ!!!  
ドゴオオオオオンツツツツ!!!  
—

「っ、なんて速さだっ……!」

「ええ……とてもじゃないけど目で追い切れない……なんて戦いの……」

そんな二人の壮絶な戦いを前に、翼とマリアもただただ呆然と立ち尽くす事しか出来ずにいる。それほどまでに目の前の戦いは常軌を逸していたのだ。

そうして何度目か分からない衝突の後、マンティスイレイザーから一度距離を離してヒラリと身を翻しながら地上に着地したクロスは左腰のカードケースから新たにカードを素早く取り出し、バックルから立ち上げたスロットにカードを装填し掌で押し込むように戻した。

『Code Z a b a b a……』

『clear!』

『ツ！姿を変える気かツ！だがやらせんツ！』

クロスが新たな姿になろうとしている事を察したマンティスイレイザーは即座に距

離を詰め斬り掛かる。

だがクロスは今まで身に纏っていたガングニールのアーマーを盾代わりにするようにパージしてマンティスイレイザーの刀を凌ぎ、その隙に新たなアーマーを次々に纏い、タイプザババに姿を変えたクロスに再度斬り掛かるマンティスイレイザーの斬撃を避けるようにその身体が桃色と緑色の光と化して左右に別れ、タイプシュルシャガナ、タイプイガリマとなり分身し、実体化した。

『なっ……!』

「分身した……?!」

「あの姿……もしかして、シュルシャガナとイガリマ?!」

突然二人に分身したクロス達を見て驚愕するマンティスイレイザーと翼。

一方で、マリアは調のシュルシャガナと切歌のイガリマを彷彿とさせる二人のクロス

の姿に戸惑いを隠せない中、そんな一同の反応も他所にタイプイガリマは大鎌を手に、タイプシユルシャガナは両腕のアーマーからチェーソーの刃を展開しながら両脚のランドスピナーの車輪を回転させ、マンティスレイザーに同時に仕掛けてゆく。

—ガギイイインツ!!ギイイインツ!!ガガガガガガガガガガガガガガガガガアアアアツツ!!—

『ハアアアツツ!ぜええああツツ!!』

『ハアアアアアアツツ!!』

『チイツ!小癩な……!!』

二人に増えたクロス達の攻撃を捌く為に紫雷を纏った斬撃を繰り出す事で応戦するマンティスレイザーだが、大鎌のリーチを活かすタイプイガリマに繰り出す刀を次々に弾かれ、その隙に両脚のランドスピナーで身体をコマのように回転させ懐に潜り込んだタイプシユルシャガナが両腕のチェーソーブレードによる高速回転斬りを喰らわせ



てゆく。

更にチェーンソーの連撃を受けたマンティスイレイザーが怯んだ瞬間を狙い、透明化したタイプイガリマが背後に素早く回り込んで透明化から姿を現し、大鎌による連続攻撃を仕掛けてトドメに渾身の一撃でマンティスイレイザーを斬り飛ばした。

『グアアアウツツ?!?ぐつ、このままではっ……!こうなればせめてファートムだけでもッ!!』

「ヒツ……!!?」

「——そうはいかないわ!」

このままでは流石に分が悪いと踏み、せめてファートムだけでも回収すべくクロスに残ったダスト達を全て始末された事で解放され、離れた木陰に隠れていたファートムの下へ一目散に走り出すマンティスイレイザー。

しかしその前にマリアが横から滑り込むように立ち塞がり、そんなマリアにマンティスレイザーが忌々しげに舌打ちしながら素早く刀を突き出して刺突を放つが、対するマリアも咄嗟に左腕の掌を突き出し、銀色の逆三角形の障壁を前方に展開。正面からマンティスレイザーの刀を受け止めて拮抗し、激しく火花を撒き散らす。

——ガガガガガガガガガガガガガガガガガガアアアツツ!!——

『チイイツ！邪魔をしてくれるな装者アツ！貴様らなんぞに用などないツ！』

「そちらにはなくともこちらにはあるのよっ！翼アツ！」

「——承知ツ！」

——千ノ落涙——

マリアの声に応えるようにいつの間にか遙か上空に跳躍した翼が高らかに刀を掲げると、無数の青い光剣が彼女の周囲に次々出現し、それら全てが雨の如くマンティスイ

レイザーに向けて降り注いでいく。

それを目にしたマンテイスイレイザーは慌ててマリアから距離を離しつつ、目にも留まらぬ高速の斬撃で飛来する光剣を全て薙ぎ払い、反撃に転じようとするが、

『?!なん、だ……?身体が、動かない……?!』

突然、まるで何かに拘束されているかのように身動きが一切取れず焦燥感を露わにするマンテイスイレイザー。

一体何が起きてる?そんな疑問と共に辛うじて動かせる顔を下に向ければ、其処には先程弾いた筈の翼の無数の光剣が自分の足元の影に突き刺さっている事に気付く。

—影縫い—

『これは……?!』

「——貴様の動きを封じさせてもらった。これでもう、お前は自由には動けまい」

『つ………！貴様っ！』

翼の放った最初の光剣は陽動で、真の狙いはマンテイスイレイザーの動きを封じる事。

まんまとそれに引つかかってしまった事実に苛立ち、マリアの隣に着地した翼を睨みつけるマンテイスイレイザーだが、その隙を逃さず、マンテイスイレイザーの背後からクロスがタイプザババから通常形態へと戻りながら疾走してバックルにカードを装填し、マンテイスイレイザーへと飛び掛かった。

『Final Code x::clear!』

『ハアアアアアッ!!』

『ッ！おのれっ——紫炎ッ!!』

蒼光を纏った右脚を突き出しながら背後から迫るクロスに気づき、マンティスレイザーは自身の両脚から足元の地面に掛けて紫色の炎を放出し、自身の影を縫う翼の光剣を地面ごと焼き払い拘束から逃れてしまい、クロスの飛び蹴りが当たる寸前に身を翻して直撃こそ免れたものの火花を撒き散らして左肩を掠め、そのままふらつきながらクロスから距離を離して真横へ跳び退くも、直後に片膝を着いて蹲ってしまう。

『ぐつ、う……………ま、さか……………これ程までとは……………！』

『……………どうする……………？まだ続けるつもりか……………？』

『ッ……………』

振り返るクロスの静かな言葉にマンティスレイザーが悔しげに歯噛みしている間にも、翼とマリアがクロスの背後に駆け付けてそれぞれ身構えていき、そんな三人を前にマンティスレイザーは視線を動かしてfirstの姿を探す。

『(奴はいない……クロスが駆け付けたのを察して先に逃げたのか……? クツ、やはり奴は信用ならん……!)』

自分を置き去りにした first への悪態を内心で吐き、マンティスレイザーは地面に突き立てた刀を杖代わりにフラリと起き上がる。

それを見て翼とマリアが更に警戒心を強める中、マンティスレイザーは離れた場所の木陰に隠れるファートムを一瞥した後、クロスに再び視線を戻す。

『……ファートムの身柄は今は預けておいてやる。だが忘れるな……次こそは、必ず――！』

そう言いながらマンティスレイザーは地に突き立てたままの刀で地面を削る様に斬り、其処から巨大な紫炎を巻き起こす。

その突然の行動に驚く翼とマリアだったが、やがて炎は静かに消えていき、完全に消えると同時にマンティスレイザーは姿を消してしまっていた。

「…………消えた？」

「逃げたのね…………」

『……………』

マリアの言葉にクロスは無言のまま俯いてしまう。

今の状況では敵であるマンティイスレイザーを逃がす結果になってしまった事を悔いているのだろうか、そんなクロスの背に翼がアームドギアの刀を収めながら声を掛ける。

「敵には逃げられはしたが、救援に駆け付けてくれたのは助かった。礼を言わせて欲しい、黒月蓮夜」

『……………？俺の、名を……………？』

「ええ、貴方の事は風鳴司令との情報通達で度々聞かされていたから。それに先の事件だと、調と切歌が世話になったそうね。その件についても、改めてお礼を言いたいと思つてて」

『……調……切歌……ああ……そうか……貴方達が、天羽々斬とアガートラムの装者……の……』

「……？黒月蓮夜？どうした？」

「何だか様子が可笑しいけど、もしかしてさっきの戦闘で受けた傷が——？」

何やら言葉がたどたどしく、明らかに言動が可笑しいクロスに翼とマリアが怪訝な表情を浮かべて彼に歩み寄ろうとし、



——クロスの全身のスーツの隙間から、突然夥しい量の赤い血が流れ出した。

「なっ……」

「なに、これ……？血……!? ねえ！貴方——?!」

『ア……ッ……がふッ……!!』

マリアの呼び掛けに答えようとするも、クロスはいきなり身体をくの字に折り曲げながら仮面のクラッシュャーの隙間から赤い鮮血を吐き出し、そのまま変身が強制解除され、元の姿に戻った蓮夜の露わになった姿を見て翼とマリアは思わず絶句してしまう。

何故なら、変身が解けた蓮夜の姿は全身から流血が流れ出てるだけでなく、ボロボロに焼き焦げて破けた服の隙間のあちこちから重度の火傷が見え隠れするなど、とてもじゃないが生きているのが不思議なぐらいの重傷を負っていたからだ。

「そ……その傷は……?!」

「…………え…………あ、す、まない…………すこし、耳がとおくて…………何故か、声が聞き取りづ、ら…………あ…………」

—ドシヤアアツ!!—

「ちよつ、ちよつとつ?!」

翼の声が聞こえていないのか、蓮夜は血に濡れた顔で苦笑いを浮かべながら聞き返そうとするも、そのまま前のめりに倒れてしまう。

そんな蓮夜に二人も慌てて傍に駆け寄って地面に膝を突き必死に大声で彼に呼び掛けるが、完全に意識を失っているのか、どれだけ必死に呼び掛け続けても返事どころか僅かな反応さえ返ってこず、しかも流血が止まらず血溜まりが広がっていく事に二人は愕然としてしまう。

「何なのこれ…………?! 一体どうして此処までの傷を?!」

「この火傷……………ツ！まさか、旅客機の墜落事故からそのまま駆け付けてきたのか……………？治療もまともに受けぬままっ……………！」

「そんな状態で戦ってたつていうの?!なんて無茶を……………！とにかく、早く救急車を……………！！」

「ダメだ血が止まらない……………！急げマリアッ!!このままでは本当に彼が死んでしまうツ！！」

蓮夜の身体の傷口を両手で抑え込んで必死に流れる血を止めようと試みる翼だが、出血量が多過ぎて一向に止まる気配がなく、それを見てマリアは携帯端末を取り出して一刻を争う事態である事を理解しながらも冷静さを保ちつつ、救急への連絡を急ぎ試みる。と、其処へ……………

「——少し、通してくれ……………」

「…………え…………？」

不意に二人の背後から聞き覚えのある声が響き渡り、二人が振り返ると、そこにはいつの間にか木陰に隠れてたファートムが立っていた。

「あ、貴女…………？」

「…………時間がない。邪魔するぞ」

「何…………？おい待てっ、いきなり何を?!」

ぶつきらぼうにそう言つてファートムは二人を押し退け蓮夜の側にしゃがみ込むと、彼の身体を無造作に仰向けに寝かせ、その胸元に両手で触れていく。

そんなファートムの突然の行動に翼も異を唱えようと彼女の肩を掴むが、すぐに手を離して驚いたように目を見開かせる。

「なんだ……？手から、何か光が……？」

そう、翼の言葉通り、蓮夜の胸元に手を当てたファートムの手からは眩いばかりの白い輝きが溢れ出ていたのだ。

更にそれだけでなく、白い光に包まれる蓮夜の傷口が徐々にだが塞がれ始めていた。

「傷が、治って……?!」

「……あくまでも応急処置だ。完全には治せないから、早く病院に運んで適切な処置を。……彼が本当に黒月蓮夜なら、このまま彼に死なれるのは私も困る……」

「え……？」

「待て、何故彼の名前を知っている？それにその力……お前は、一体……？」

「……………」

蓮夜の傷を治癒出来る謎の力や、まるで彼の事を知っているかのような口振りをするファートムに翼が訝しげな眼差しと共にそう問い掛ける。

その質問に対し、ファートムは蓮夜の治療を続けたまま何かを考え込むかのように目を伏せた後、やがて徐に目を開き、重く口を開いた。

「私の名はファートム。数多の錬金術師と、ソイツらを集めたイレイザー達の手によって造られた、人間もどき。——ホムンクルスの技術と、イレイザーの力を掛け合わせて生み出された……化け物だ……」

「……………なっ……………」

無愛想に、まるで何処か他人事のようにファートムの口から告げられたのは、二人も予想だにしてなかった内容。

その衝撃的過ぎる事実を理解が追い付いていないのか、翼もマリアも驚きのあまり目

を剥いて硬直してしまう中、ファートムはそんな二人の反応を背中越しに察して一瞬物悲しげな顔を見せるも、すぐに真剣な表情に切り替わり、力の行使に意識を集中させ蓮夜の治療に専念してゆくのだった。

## 番外編⑤

メモリア05/Die Geburt der Tra  
g・die×SINの墮天使（前）

— ???の世界・研究施設 —

——とある世界の、何処かにある謎の研究所の一室。

薄暗い暗がりの中で、何かを培養しているらしき薄気味悪い光を放つ無数の生体ポットが何処までも並んでいるその部屋にて、白衣を着た研究者達が忙しなく動き回る中、部屋の中央に置かれた巨大なカプセルの前では数人の男が額を突き合わせて話し合っていた。



「——やはり駄目ですな……培養液に浸かっている間も侵食が止まらない……」

「うむ……この異常なまでの侵食速度……やはり、埋め込まれた『彼』の細胞に被検体の身体が先に持たないのか……」

「研究員の一人の言葉に、他の者達も難しい表情を浮かべて同意を示すように首を縦に振る。」

「彼らが見つめるカプセルの中には、まるで水のような液体の中に浸かっている異形の怪人がいた。」

「全身を包帯のように黒い繊維状のもので巻かれており、その隙間から覗く肌にはびっしりと不気味な血管のような模様が広がっている。そして、顔の半分以上を占める大きな眼からは赤い光が灯っていた。」

「しかし、これが上手く行けば『彼』の計画も夢物語ではなくなる」

「ああ、分かっているさ……全ては我々、イレイザーの未来の為に！」

そう言つて男達……この場にいるイレイザー全員は決意を新たにす。

とその時、一人の若い男が息を切らしながら何やら慌ただしい様子で部屋の中に駆け込み、血相を変えて叫んだ。

「た、大変ですっ！ たった今、監視カメラの映像を確認したところ、侵入者を発見しましたっ！」

「?! 何だと? 馬鹿な、この場所はイレイザー以外に見付からぬように改竄の力で隠されてるハズ……一体どうやってこの場所を突き止めた!?’」

「分かりません……! ただどうやら相手はかなりの手練れらしく、既に護衛のイレイザー達を倒してこの場所に向かっているよう——!」

報告の途中で、突如として男の頭が破裂したかのように弾け飛ぶ。

飛び散った脳漿と血液を浴びながら、その場にいた全員が驚愕に目を見開いた。

「な……ッ!？」

突然の出来事に唾然としていた一同だったが、やがて我を取り戻した者達が一斉に身構えると、出入り口の扉から一人の男性が悠然と姿を現した。

「——ほう？中々の設備が揃っているじゃないか……ただ、流石はデュレンがスポンサーを務めるだけあって陰気臭さが滲み出ている……まあ、それも奴らしいと言えづらいがな……」

感慨深そうに言いながら、男は不気味な生体ポットが並ぶ研究所内の光景をマジマジと眺めていく。

外見年齢は恐らく二十代後半辺りだろうか。

漆黒の長髪に、真赤い瞳。

黒を基調としたロングコートに身を包み、右手には奇妙な形状の剣を握っており、腰にはソレを収める為のホルダーのような物が装着されている。

一見すると剣士のように思える風貌だが、よく見ると足運びが非常に独特であり、独自の歩法を用いている事が分かった。

「な、何だ貴様?! どうやって此処まで……?! 何者だ?!」

「……おや? 随分つれない反応じゃないか。嘗ての出資者の顔を忘れるとは……少々薄情ではないか? Mr. プロスペクト」

「……何?」

男の口から放たれた言葉に、プロスペクトと呼ばれた研究者の一人が怪しげな物を見るような視線を向ける。

そんな彼に男が口元を歪めて不敵な笑みを浮かべると、その笑みを見た瞬間、プロスペクトは男の正体を思い出したのか、まるで恐怖に襲われたかのように顔を青ざめさせた。

「馬鹿、な……まさか貴様、そんな……！生きてたというのか?! 黒月蓮夜と、その父親……！ 貴様の息子の手によつて死んだ筈ではっ?!」

有り得る筈がない、そんな事はと、プロスペクトが目の中の男を見てまるで幽霊でも目の当たりにしたかのように狼狽を隠せず後退りしていく中、男はそんなプロスペクトの言葉に何処か自嘲を含むように笑う。

「死んだ筈、か……まあ、それもある意味間違いではない。奴らに敗北した事で、今の俺は嘗ての俺ではなくなったのだからな」

「つ……そ、そうだ……！ 聞いているぞ！ 貴様が奴らに敗れた事で、組織からも除籍させられたと！ そんな男が、今更何をしに……!?!」

まるで目の前の男への恐怖を押し殺すかのように、男を指差し敢えて大声を荒らげて虚勢を張るプロスペクトだが、男はそんな彼の心を見透かしているかのようにはっきり、右手に持つ奇妙な剣を腰のホルダーに収めながら冷淡に告げる。

「愚問だな……。此処に辿り着くまでに多くのイレイザーを殺し、研究に必要と思われる機材の殆どを壊し回ってきた……。此処までして、お前達をこの研究所ごと消し潰す以外に目的があると思うか？」

「な、何故っ……。？組織を除籍させられたとは言え、貴様も我々と同じイレイザーだろう?! どうして我々の邪魔をする?!」

「どうして?.....ハッ、貴様らしくもなく察しが悪いなあ、Mr. ....」

狼狽するプロスペクトを見て肩を僅かに揺らしながらクツクツと嗤うと、男は徐に懐から一つのバックルを取り出した。

そのバックルの造形は仮面ライダージウガのジウガドライバーに酷似しているが、配色は黒、金、赤色が入り交じり、バックルの左部分には鋭角なアレンジがされた『SiN』の文字が刻まれている。

更にバックルの右部分には、プリミティブドラゴンワンダーライドブックに造形が似た白い縁の黒い長方形のパーツが空きスロットに装填されているような状態で存在し、本の上半部分である天から下が空洞。まるで中身のないブックカバーのような形状をしている。

そしてそのブックカバーのラベルには、漆黒のローブを身に纏った黒い仮面の戦士が己の右手を意味深に見つめる絵が本の表紙のように描かれていた。

「べ、ベルト……?!」

「まさか、貴様?!」

男が取り出したバックルを見て研究員達とプロスペクトが戸惑う中、男は無言のまま

自身の腹部にバックルを押し当てると、バックルの端の部分からベルトが伸びて男の腰に巻き付きドライバーとなる。

それと同時にドライバーの両脇に携行用ホルダーが出現し、右腰側のホルダーにはワンドライドブックのような本型のアイテムが上段と中段と下段、それぞれに一冊ずつ収まっており、男は徐に一番上の上段に収められている黒と金の配色の本型のアイテムを抜き取る。

「察しが付かない様なら直々に教えてやる。先ず一つに、俺が出資していた研究所をデュレン如きに再利用されるのが単純に気に入らん……奴とは組織に居た頃から、どうにも反りが合わなかったのだな」

言いながら、男は己の顔の横に掲げた本型のアイテムの左側面に備え付けられたスイツチを親指で押し込む。

直後、本型のアイテムの表紙部分に闇夜に浮かぶ満月を背に黒い天使の異形が漆黒の翼を広げて空から舞い降りる絵柄が出現し、同時に電子音声で鳴り響く。



『Tragoedia quae velum in proximum incidit  
 Manifesta peccata tua hic et nunc』

常人には聞き取れない、謎の言語の電子音が響き渡り、男は黒き天使の異形の本を腰に巻いたバックル右部分のブックカバー状のスロットの空洞に、上から差し込むように装填する。

『Fall Down……』

「……第二に。デュレンが目論む目的は俺自身の目的と衝突し、いずれ障害に成り得る……故に、その前に潰す必要がある……そして——」

おどろおどろしく、不気味なバイオリンのメロデーの待機音と共に黒金の本を装填した手でブックカバー状のスロットの表紙に触れ、恐怖で顔を引き攣らせて後退りするプロスペクトや他の研究員達の顔を見渡し、男は歪に口元を歪める。

「明日を信じて止まない、希望に満ち溢れたお前達はその曇り無き瞳の煌めきを絶望で濁らせ、新たな『悲劇』を彩るといいうのも悪くはない……フツ。そうは思わんか、プロスペクト……?」

「ツ……き、貴様アアアアツツ!!」

嘲るように嗤う男の言葉に激昂するかのように、プロスペクトが両腕を荒々しく広げながら咆哮し、その姿を徐々に変化させ、灰色のフクロウの異形……オウレイレイザーへと変貌したのを始め、他の研究員達も後に続き、雄叫びと共に全員レイザー態に姿を変えていく。

数は数えてざつと十。

しかし男はそんな光景を前に臆するどころか、その鋭い瞳を細めて抵抗の意志を見せるオウレイレイザー達を逆に嘲笑った後、スつと無表情となり、感情の機微もなく、淡々と告げる。

「――変身――」

『Porta sursum』

静かな声音と共に男がブックカバー状のスロットの表紙を片手のみで右側へと開いた瞬間、スロットの中に装填されている黒金色の本の表紙も共に開かれ、黒い仮面の戦士の右半身と右腕を掬い上げるように掲げる姿が描かれた1ページが露わになり、そして……

『In fine mortiferum peccatum novum levat vel  
 『Scribere carmina recentissima sanguine』  
 『Suprema tragedia est hic…!』

壮大且つ不穏なメロデーと共に流れる電子音声と共に、バックルから放出された暗く深い闇が男の身体を覆い包み込む。

そして全身がまるで影のようなシルエット姿になった男の身体が徐々に変容してい

くと、黒の波動、赤の波動、最後に金の波動を順に身体から放ちながら漆黒のマントを勢いよく首元から展開し、同時に全身を覆い隠していた闇が弾け飛ぶように晴れて一瞬でその姿が露わになっていく。

闇の中から現れた男の姿は変貌し、仮面ライダージウガに酷似した全身に金色のラインが縁に走る漆黒の装甲と、仮面ライダーエターナルに似た黒いアンダースーツを足し合わせたような外見をし、両肩の黒いアーマーが丸びを帯びている他、仮面の右目側がエターナルの複眼に酷似した血のように赤い瞳、左目側の複眼が『S i N』の文字を崩して混ぜ合わせたかのような形状をしており、更に首元からはローブのような黒いマントを装備している。

全ての変身の工程を完了し、ただ其処に存在しているだけなのに周囲の空間自体が酷く重たくなるような圧倒的な威圧感と存在感を放ち、その姿を直視し続けていけば畏怖のあまり思わず平伏しそうになる暴力的なまでの力の波動を前にオウルレイザー達もただただ圧倒されてたじろぐ中、男が変身した漆黒の仮面の戦士は天を仰ぎ、徐に両腕を広げながらまるで唄うように芝居掛かった口調で告げる。

『<sup>グランギニョル</sup>恐怖劇を此処に……さあ、謳うが云い……お前達の悲劇を……』

『ツツ……!!ふ、ふざけるな……ふざけるな裏切り者がア……!!黒月 八雲オオオオオオオオオオオツツ!!』

恐怖心のあまり心折れそうになる己の心を奮い立たせるように喚き散らし、両腕から巨大な鉤爪を生やしてオウルレイザーが先陣切つて飛び出し、そんな彼に続くように他のレイザー達も雄叫びを上げて一斉に飛び掛かる。

その光景を前に男……”黒月 八雲”が変身した『仮面ライダー SiNメモリー』は鷹揚と佇んだまま指先一つ動かさず、迫り来る自分と同じ同族達の姿を視界に捉えるようにゆっくりと顔を上げていく。

——その仮面の下で、愉悦に満ちた不気味な微笑みをうつすらと浮かべながら。

メモリア05/Die Geburt der Tra  
g・die×Sinの墮天使(中)

——研究施設外・採石場——

『』——がアあああああああああああツツ?!?!?』

——研究施設の裏手に存在する広大な採石場。

他にはない、この世界でしか採掘出来ない特殊合金の鉱石が大量に眠る場所であり、八雲がまだデュレンと同じ組織に属していた頃に出資者として施設をこの近くに建造するのを決めたのも、その鉱石の採掘、研究施設への運搬を効率よく進めるのが目的だったからだ。

そんな場所へ何体ものイレイザー達が無様に宙を舞いながら次々に吹き飛ばされて

いき、最後に吹っ飛ばされてきたオウルイレイザーがゴロゴロと地面を転がりながらも咄嗟に身を起こして睨み付けた先には、施設が建つ遙か崖の上からゆつくりと浮遊して降りてくるSiNメモリーの姿があり、地上に降り立ったSiNメモリーはオウルイレイザー達の顔を見渡し、肩を竦めた。

『どうした……？一息で簡単には死なぬようにこちらも加減してやっているんだ。もう少し歯応えのある抵抗を魅せてくれ……』

『お、おのれえええっ……!!』

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ!!』

何処か落胆を込めて首を振るSiNメモリーの言葉に屈辱を覚えるオウルイレイザーの両脇を勢いよく駆け抜け、二体のイレイザーがSiNメモリーへと果敢にも挑み掛かっていく。

しかしSiNメモリーは立て続けに襲い来るイレイザー達の攻撃を身体の僅かな重

心をズラすだけで顔色一つ変える事もなく難なく回避し続け、右側の死角から殴り掛かってきたイレイザーの渾身の拳をスッと伸ばした掌だけで受け止めながらそのまま押し返すように掌から黒の波動を放ち、軽々とイレイザーの身体を弾き飛ばす。

其処へ息を吐かせる間も与えまいと、背後から次に飛び掛ってきた二体目のイレイザーの奇襲もまるで背中に目が付いているかのように身を翻しながら逆に流れるような動きで背後に回り込み、軽い裏拳をその背中に叩き込んだだけで、イレイザーの身体が勢いよくきりもみ回転しながら派手に吹っ飛ばされてしまう。

『ぐああああううっ?!う、ううっ……!!』

『く、くそっ……!!』

『……………』

派手に地面に身体を叩き付けられて痛みにも苦しみ悶え、尻餅を着いたまま怯え切った眼差しを向けてくる二体のイレイザー達をつまらなげに一瞥しつつ、S i Nメモリーは



バックル右側部分のスロットの表紙を無言で閉じ、そのままリバイスドライバーやジュウガドライバーと同様の動作でスロットを右側に一度ロール操作した後、再び表紙を開け放った。

『カタストロフ  
アイスキュロス  
トラゴエディア』

くぐもった不気味な電子音声採石場内に反響して響き渡る。

直後だった。

SiNメモリーと戦う二体のレイザーの右腕と背中……彼に先程触れられた部分からブクブクと内側から気持ち悪く肉が膨れ上がり、急激な速さで膨張し始めたのは――

『ひ、ひいいいいっ!!? な、なんだよコレええええええええっ!!?』



『ま、待てお前たち……?!逃げるなあッ!』

あまりにも惨い同士達の最期を目の当たりにし、遂に恐怖に屈してしまったオウルイレイザー以外のイレイザー達が一齐に背中を向けて逃げ出した。

その情けない姿を見てSiNメモリーも興が削がれたかのように今まで浮かべていた仮面の下の笑みをフツと消して無表情になり、バックル右側部分のスロットの表紙を再び閉じると、今度は二回ロール操作を行い、再度表紙を開け放った。

『Cat<sup>カ</sup>ast<sup>タ</sup>ro<sup>ス</sup>ph<sup>ロ</sup>e<sup>フ</sup>』

『ソポクレス トラゴエディア』

先程とはまた別の電子音声が入るから流れる。

次の瞬間、赤い風がSiNメモリーの両脇を吹き抜けると共に何かを立て続けに切り裂かれるような音が響き、直後に流れたのは、水が勢いよく噴き出すような飛沫の音。

——それは我先にと逃げ出そうとした三体のイレイザー達の首が、何かによって無惨にも根元から綺麗に切り落とされ、立ったままの死体の首の断面図から赤い血が噴出し流れる音だった。

首無しの死体が次々に地面へ倒れてゆき、それまで宙を舞っていたのか彼等の首が空から落ちて何度もバウンドしながら無造作にあちこちに転がっていき、その内の一体の首が生き残った他のイレイザーの足元に転がって止まり、上向いた眼球の目と思わず目が合ってしまう。

『ヒ、イイイイイツ!!?』

『な、にが……なにが起きたんだ今アああッ……!!?』

S i Nメモリーとは確かに距離が離れていたにも関わらず、一気に三体ものイレイザーが原理不明の攻撃で絶命した。

訳も分からず、突然の残酷な死を立て続けに見せられた事で恐怖心が加速しパニックに陥るイレイザー達に向かって、SINメモリーは悠々とした歩みで砂利を踏み鳴らしながら近付き、退屈そうに口を開く。

『あまりくだらん真似をしてくれるなよ……俺の息の根を止める事もせず、逃げ切られると本気でそう思ったのか……？お前達が生き延びられる方法はただ一つ——』

そう言いながら、SINメモリーはバックルのスロットの表紙を閉じて黒金の本型のアイテムをドライバーから抜き取り、右腰にある携行用ホルダーの中段に収まっている金の縁の純白の本を手にとって顔の横に掲げ、親指で側面のボタンを押し込む。

『PRIEST』  
 『Sacerdos ridet benedictione Dei』  
 『Cum spero credo in corde meo, alis albis evolutis』  
 『Credo quod futurum est ante lucem promissam』

解説不能の言語を発する純白の本の表紙に、絵柄が浮かび上がる。

それは無数の白い羽根が舞う光差す空間の中、聖職者を連想させる姿をした戦士が、まるで神に祈るように両手に握る剣を胸の前で掲げる姿の絵。

まるで絵画のような神々しさを感じさせる絵柄が出現した純白の本を、S i Nメモリーはベルトのバックル右部分のブックカバー状のスロットに上から差し込むように装填する。

『F a i l   D o w n……』

『——此処で俺を仕留めるしか道はない……俺を前にした時点で、そんなのは分かり切ってた筈だろう……？』

『p o r t a   s u r s u m』

バックル右部分のスロットの表紙が開かれ、中に装填された純白の本の中身が露わになる。

現れたのは、美しく神々しい純白の本の見た目とは全く真逆のイメージのページ。

血塗れた女性や多くの子供達が地に倒れ付す中で、道化師のような姿をした異形が天を仰ぎ見、まるで狂ったように踊っているという猟奇的な1シーンが描かれていた。

『disastrous root』

『Homorrit maledicent Deum non esse』

『insanus choruscustodiant chorum』

『Rideate cum Corydon larva』

『Lacrimas sanguinis effundentes, quae numqua

詩を謳うように鳴り渡る電子音声と共に、バックルから黒い闇が放たれてSiNメモリーの全身を包み込む。

闇が不気味に流動して体中が変容していき、やがて、全身を覆う闇が勢いよく弾けると同時にその姿の全貌が明らかとなる。





先程の同士達の凄惨な最期を目の当たりにし、逃亡は不可能と断じたオウルレイザー達は最早破れかぶれにと、それぞれが得物と鋭爪を構えて雄叫びを荒らげながら一斉にSinメモリーへ突っ込み、立て続けに攻撃を仕掛けていく。

——が、最初にSinメモリーに殴り、斬り掛かった二体のレイザーの攻撃が何かその身体を透過し、それどころか攻撃が空ぶった勢い余ってそのまま纏めてSinメモリーにぶつかり掛けるも、Sinメモリーの身体には触れられずにすり抜け、無様に地面を転がってしまう。

『?!な、何だコレ……?!』

『攻撃が、当たらない?!』

『くそ、くそくそくそくそオツ！何がどうなってる?!』

目の前に、確かに其処に姿が存在する筈なのに、幾ら攻撃を繰り返しても掠りもしない。

まるで形のない霞を掴み取ろうとしているかのようで手応えもなく、それでも自分達  
 が死なない為に必死にS i Nメモリーを殺そうと足掻くイレイザー達の姿を静かに見  
 回すと、S i Nメモリーは右手にミリタリー色が強い紫色の刃が煌めく機械製の短刀  
 ……S i Nクラウンエッジを華麗な手捌きで回転させながら出現させて構え、表紙を閉  
 じたバックルのスロットから抜き取った純白の本をS i Nクラウンエッジのグリッ  
 プ部分に装填し、トリガーを引いた。

『P R I E S T』

『m i s e r a b l e e n d』

『――！離れろ!!』

不気味な電子音声から直感的に嫌な予感を感じ取り、オウルイレイザーが両腕の羽根  
 を咄嗟に羽ばたかせて後方へと逃げるように飛び退く。

次の瞬間、S i Nメモリーの身体が紫色の霧と化して一気に霧散し、イレイザー達の



次第に彼等の声が弱まり、静っていくにつれて霧の濃さも薄れて景色がクリアになっていく。

霧が完全に晴れた向こう側には、死屍累々……自ら首を絞めて骨を折って倒れる者、自身の武器で自らの身体を何度も串刺して息を引き取った者、互いに互いの急所を貫き、相手にもたれ掛かるように崩れ落ちた者達――。

泉のような赤い血溜まりが何処までも地に広がり、その中に沈むイレイザー達の屍が無惨にも転がる姿があったのだった。

『な、何が……一体……!』

『――そう難しい話ではない。今まで積み重ねてきた己が罪の幻影に向き合えず、その重さに耐え切れず精神が崩壊して自ら命を絶った。それだけのつまらん話だ』

『……?!』

不意に背後からの声に驚き、オウルレイザーはすぐに振り向き様に両腕の羽根から無数の刃を乱射する。

しかし、オウルレイザーの背後にいつの間にか姿を現し、回り込んでいたライダー……SiNメモリーはオウルレイザーの羽根をやはりすり抜けてしまい、自身の胸を無言で軽く手で払う。

『ツ……！な、何なんだ……その姿は一体?!それに奴等に何を……?!』

『同じ説明を二度も繰り返す気はない。それに、解らない事を解る事に解明するのが技術者という者……俺の下に一時でもいながら、その程度の事も学ばなかったのか?』

『くっ……貴様あツ!!』

嘲るような口調と挑発するような視線を受け、オウルレイザーは思わず顔を怒りに歪ませながら両手の羽根を刃状に変化させてSiNメモリーへ斬り掛かりに行くが、それでもまたも攻撃が当たるとはならず、逆に腕を掴まれてしまう。

『ぐう?!は、離せえ!私はまだ此処で終わる訳にはいかん!私には、私には絶対に成し遂げねばならん目的があるのだ!!』

『目的?.....ああ.....』

必死の形相で抵抗するオウルレイザーの言葉を聞き、S i Nメモリーは思い出したかのように呟くと、オウルレイザーを拘束から解放するように軽く突き飛ばす。

『そういえば、俺の元へ来た時にそんな事を言っていたな.....確か、元の世界で殺人犯に殺された妻と娘と共に暮らせる人生を、再び取り戻したいんだったか.....?』

『ツ.....そ、そうだ.....!私は貴様が組織からいなくなった後も、その目的を果たす為だけに執念を燃やしてきた!死んだ妻と娘にもう一度会う為なら、私は悪魔とだって手を組む覚悟でいる!!』

『その最初の相手が俺で、次にデュレンだった、と.....フフツ.....今の俺が言えた義理で

はないが、お前も中々の道化っぷりだな、Mr. プロスペクト……』

『……何……?』

顔を背け、仮面の口元を片手で覆いながらクツクツと嗤うような声を上げるSiNメモリーの反応に、オウルレイザーは怪しげなものを感じ取る中、SiNメモリーは徐に顔を上げて淡々と口を開いた。

『貴様の妻と娘、死因は確か押し入りによる殺人だったな。配達員を装った男が二人を玄関先でナイフで殺害し、その後リビングで首を括って自殺している姿が発見されたのだとか……動機は幸せな家族の姿を見て、嫉妬による衝動的な犯行だったと、犯人がその場で描き殴りしたと思われる遺書が死体の傍に置かれていたのを見付けて判明した………だったか?』

『つ………だからなんだつ、今更貴様の口から説明されるまでもない!!私あの時の事を……!あの絶望を片時たりとも忘れたりしなかつた!!殺してやりたいほど憎んだ相手すら失いつ、行き場を失ったこの憎しみを執念に昇華させて此処まで来たのだ……!!

それを貴様に邪魔立てされる筋合いなどない……！私を散々利用してきた、貴様には特になあ！』

『フツ……ああ、貴様の復讐に横から口を出すつもりなどないさ。』

——何せ、不本意とは言えど嘗て俺の手で描いた筋書きなんだ。邪魔などする筈もないだろう？』

『……………』

『……………は？』



唐突に告げられた目の前の男の言葉に、脳が一瞬理解に追い付かなかった。

今、奴は——なんと言った？

『しかし、今にして思えば懐かしい物だ……俺がまだ組織に属していた頃、とあるプロジェクトに必要な技術者の数に欠員が出てしまい、その埋め合わせをどうするべきか思案していた中、優秀な頭脳を持つという貴様の存在をデュレンの口から聞かされたのが始まりでなあ……貴様をどうにかこちらへ引き入れられないかと考え、お前の妻と娘に着目したのは我ながら良い出来だったと、今でも思うよ』

『……何を……言つて……？』

『ただ、デュレンの奴が実行を命じたレーザーの手腕は稚拙にも程があつたがな……貴様の家族を殺した男の運命を改竄の力で操り、殺人犯の役に落とし込むのはまだ良いとして、其処に至るまでの経緯があまりに粗末が過ぎる……風情のないつまらん男だとは常々思っていたが、まさか彼処までとは流石の俺も——』

『——何の話をしてると言っているんだ!!!』

饒舌に語り続ける S i N メモリーに対し、オウレイレイザーは思わず大声で遮るように叫ぶ。

まるでそれ以上先を口にされたくないと言わんばかりのその反応に、しかし、S i N メモリーは小さく肩を揺らしながら残酷な笑みを浮かべた。

『何だ、此処まで話してまだ理解出来ないのか?……ああ、それとも、既に理解していながら認めたくないだけなのか?』

『黙れえっ!!』

オウレイレイザーは叫びながら羽根を刃状に変化させると、そのまま S i N メモリーへと斬り掛かる。だが、やはり攻撃は当たる事はなく、逆に胸倉を掴み上げられると、地面に叩き付けられるように遙か遠くへ放り投げられてしまう。

『ぐあああうっ?!?』

『聞きたくない、知りたくない、認めたくはない、か……フフツ……ならば、誤魔化しようのないようにはつきりと教えてやろうじゃないか……』

『っ!!や、やめ——!!』

『——貴様の復讐や願い、その全てを叶える為の舞台装置を用意したのは、他ならぬこの俺だ。貴様が今まで信じていたものは全て、この俺が用意した偽りの筋書きに過ぎないんだよ。Mr. プロスペクト?』

『やめろと言っているんだアあああああああああああああッ!!!』

仮面の下から響く嘲笑混じりの声が入った瞬間、オウルレイザーは激昂のままに両腕の羽根から無数の矢羽を射出させる。

狙いも何も付けずに放つただけの無差別攻撃だったが、それでもS i Nメモリーに直撃する軌道を描いており、S i Nメモリーの周囲に降り注ぐと共に巨大な爆発が巻き上がる。

オウルレイザーは肩を上下に揺らしながらその光景を見て確かな手応えを感じたが——直後に、その期待は無慈悲にも裏切られる事となる。

『In fine mortiferum peccatum novum levat  
 『Scribere carmina recen-ti sanguine』  
 『Suprema tragodia est hic!』』

『ツ…………!!』

不意に聞こえてきた壮大且つ不気味な電子音声に、オウルレイザーは思わず息を飲む。

爆煙が晴れていく中、そこには無傷どころか汚れ一つ付いておらず、最初に彼が目にした通常形態と思われる黒金の姿に戻って佇んでいるSiNメモリーの姿があった。

『あ……………そんな、なっ……………』

『——レイザーに身も心も墜した以上、死ねばその肉体は消滅し、魂は行き場さえなく、塵と消えるしかない。何せ、俺達は総ての物語から追放されし者……………輪廻転生など、そんな上等な救いがある筈もない』



その怒りと憎しみに塗れた無様な姿を前にSiNメモリーも仮面の下で愉悦に満ちた笑みを浮かべつつ、バツクル右側部分のスロットの表紙を閉じて四回ロール操作を行い、再度表紙を開け放った。

『catastro<sup>カ</sup>stro<sup>タ</sup>rophe<sup>ストロ</sup>』

『tragic The END』

おどろおどろしい電子音声がり響いた直後、二人の周囲を覆う闇から無数の黒い手が一斉に飛び出し、オウレイレイザーの身体に纏わり付いて拘束してしまう。

『ツ?!こ、れは……!!!?』

突然の事態に動揺を隠し切れないまま、何とか振り解こうと暴れるオウレイレイザーだったが、幾重にも巻き付いた無数の腕はまるで全身に縫い付けられているかのようにビクともしない。

その一方で、SiNメモリーはその全身から炎のように勢いよく噴き出した漆黒の闇を身に纏い、同時に右足から金と赤の二色の凄まじい雷を放出しながら天高く跳躍し、遙か天上から猛スピードで急降下。

まるで隕石が如く勢いでオウルレイザー目掛けて降り注ぐと同時に彼の腹部へ強烈な飛び蹴りを叩き込んだ直後、あまりの威力と衝撃に周囲の闇にも影響が及び、黒い空間全てに白の亀裂が無数に走る。

『Acta est fabula』

『ぐつ、が——アあああああああッッ!!?!』

オウルレイザーが苦悶の声を上げ、その身体が軽々と吹き飛ばされると共に周囲を覆っていた闇がガラスが割れるように碎け散り、世界が色を取り戻していく。

そして、空中で漆黒のマントを翻しながら流麗に着地したSiNメモリーはその姿を見届けると、まるで劇上の演者を称えるかのように右腕を高く掲げながら背を向け、芝





メモリア05/Die Geburt der Tra  
g・dieXSiNの墮天使（後）

「——うう……ああ……ああ……」

戦いが終わった事で、周囲に再び静寂が訪れる。

そんな中、地面にうつ伏せで倒れるオウルレイザーは元の人間態であるプロスペクトの姿に戻り、その肉体は灰のように徐々に崩壊を始め、下半身は既に完全に無くなってしまうている。

それでも必死に這ってでも前に進むとすると、最早指一本動かせない程にまで衰弱しきっているプロスペクトの元へ変身を解除した八雲が近付き、彼の傍に落ちている金色の機械製のカードを拾い上げた。

「コイツが管理者権限を持つ、マスターキーか……やはりお前が持っていたようだな」

「……あ、ああ………く、ろ……やく、も……オオオオオツ………!!」

金色に煌めくカード……施設のシステムの中核にアクセスする為に必要なマスターキーを手に入れて何処となく満悦げな八雲に対し、プロスペクトが痙攣で身体を震えさせながら顔を上げ睨み付ける。

瞳の奥に深い憎悪を宿すその眼差しを受け、八雲は口端を僅かに吊り上げながら視線を向けた。

「永らくご苦労だったなあ、プロスペクト。何も知らぬまま仇である筈の俺やデュレンに散々に利用された挙句に、この結末……嗚呼、流石の俺も深い同情の念と共に敬意を表しようとも」

「ツ……!!ふ、ぎけるな……ふぎける、なアアアツ……!!」

まるで憐れむように、しかし明らかにわざとらしい物言いをする八雲の言葉を聞き、プロスペクトが血を吐くように絶叫する。

しかしそんな事はお構いなしにと、八雲は片膝を着いてプロスペクトの顔を覗き込んだ。

「さて……どうせまともに答えやしないだろうが、一応訊いておこうか……デュレンは俺の残した施設やお前達を使って、今度は何を企んでいる気だ？まさか、また何処ぞの世界でも破壊させるつもりなのか？」

「っ……だ、まれええッ……！貴様などに、誰が話すものか……ッ!!」

もはや自分の命運は尽きてしまったと理解しつつも、なおも悪足掻きを見せるプロスペクトを見て、八雲は溜息混じりに肩をすくめる。

「そうか、まあいいだろう。どの道あの男には然るべき報いを受けて貰うつもりでいるんだ。その時が来たら嫌でも分かる事だからな……貴様としても、家族の仇が地獄を見

る様になるのは本望だろう？」

「ぐ、ううううウウツ……！う、ああ……あああつ……！！」

プロスペクトは何も答えず、ただ悔しさに齒噛みする事しか出来なかった。

そんな彼の姿を見て小さく鼻を鳴らした後起き上がり、八雲は踵を返してその場から離れていく。

「ゆるさ、ないっ……ゆるさないっ……！お前たちだけは、決して……！！しねっ……しねえええええっ……！！いつか、お前たちもっ——！！」

遠ざかる背中に向けて怨念じみた声音で呪言のような言葉を吐き出すプロスペクトだったが、それも途中で途切れ、遂には力無く項垂れてしまう。

そしてそのまま、彼は二度と動く事も喋る事も無く、静かに絶命していった。

「……最後の最後まで、馬鹿げた戯言しか吐けんとは何処までも救いようがない……死などという救済が、俺に訪れる筈があるものか」

そんな呪詛の言葉を背にまるで自嘲するような呟きを漏らした後、八雲は風に吹かれて灰のように消滅していく。プロスペクトを尻目に振り返る事なく、施設に向かって歩みを進めていくのであった。



——全てのレーザーを残らず駆逐した後の研究施設に、再び足を運んだ八雲。

壁や床などに夥しい鮮血の痕が飛び散っているのも他所に、先程プロスペクト達が集まっていた研究区画の大型モニターの前に立ち、プロスペクトから手に入れた金色のカードをリーダーに通した後、滑らかな指の動きでコンソールのキーボードを操作していた。

(システムにアクセスし、施設の管理システムを掌握している今なら……)

やがて目的のデータを見つけ出した八雲は、そのデータを画面に拡大させ目を通していく。

それはこの世界ではない複数の別の異世界に関するデータであり、そこには八雲が想像していた通りの情報が記されていた。

(やはりそうか……此処と同様、他の世界にも幾つか拠点を敷いているようだが、中には恐らく俺の様な追っ手に見付かる事を想定して重要度の低いダミーも多く存在する筈……奴がどの世界を中心に行き来しているか、その足取りを追えば……)

そう考えつつ、八雲はコンソールの操作を更に進めていく。

あのデュレンの思考を予測し、モニターに表示されたダミーと思われる複数の異世界を一つ一つ表示から消して数を少しずつ絞っていき、最終的に残った一つだけを画面上

に映した。

その映し出された世界の幾つかの映像を見た瞬間、八雲は思わず目を細めながら口角を上げる。

（『戦姫絶唱シンフォギア』の物語……成る程。此処を本拠地に置きつつ、各世界を経由して計画に必要な材料をかき集めているという訳か……）

そう独りごちながら、八雲はほくそ笑む。

（さて、ともかくこれで奴の居場所は絞り込めた……後はこちらから直接出向いて、奴の首を……うん……？）

最早此処には用はないと、この施設を破壊する為に外へ出るべく踵を返そうとした八雲だが、モニターを切る直前、画面に映る複数の映像の中で気になるモノを発見した。

再びモニターと向き合い、コンソールを操作してその映像を拡大させると、其処に映



し出されていたのは二人の仮面ライダー……シンフォギアの世界にて、イグニスレイザーやポセイドンレイザーと戦うクロスと、ロンドンで翼とマリアと戦うマゼンタのドライバーを腰に巻いたfirstの姿だった。

(……そういう事か……デュレンめ、まだ諦め悪く高望みな野心を捨て切れなかつたようだな……)

上級レイザー達との数々の激闘の記録に映るクロスを見てデュレンの目論見を察し、何処までも呆れた奴だと八雲は内心で溜息を吐きつつ、今度はマゼンタのドライバーを巻いたfirstが映る映像に目を向けていく。

(まあ、貴様も出張っているのなら最悪の事態にもそうなりは済まい……あの阿呆共が既にいるなら、デュレンの始末は奴らに押し付けても構わんだろう……)

こうなればわざわざこちらが出向く必要もないだろうとこの件に早々に見切りを付け、今度こそ施設を出ようと踵を返して歩き出す八雲。

……が、何故か道中で不意に足を止めて何やら思索するように顎に手を添えて暫し考える素振りを見せ、口端を僅かに吊り上げた後、八雲は近くの適当なPC機材の前で近付き、キーボードを操作し始める。

「とは言え、わざわざ此処まで足を運んでおきながら雑草狩りだけというのも些かつまらんからな。……せめて奴へのささやかな嫌がらせ程度は、こちらから贈らせてもらうとしようか……」

素早いタイピングの後、Enterキーを押して何らかのデータを何処かへと送信する八雲。

そしてデータの送信完了を見届けた後、八雲は瞬時に空間を跳躍して一瞬で施設の遙か上空へと移動。

空を浮遊しながら手の平を上にして右手を掲げ、その上に赤黒い小さな光球を生成した後、球が破裂して閃光が辺り一帯を包み込むように一瞬で広がり、

——次の瞬間、一つの世界が丸ごと跡形も残さず消滅し、この世から完全に消えてなくなつたのであつた。



—S·O·N·G· 本部・エルフナインの研究室—

「——ダメだ……これじゃ蓮夜さんの消息を掴める手掛かりにはならない……」

自身の研究室のPC機材のモニター前で、難しい表情を浮かべながらそうゴチるのは、部屋の主であるエルフナインだ。

彼女が視線を向けるモニターには、今現在消息不明となつている蓮夜が本部に残した彼のマシンであるクロスレイダーのデータが表示されており、それを見ながら彼女は先

程からずつと頭を悩ませている様子を見せていた。

(以前蓮夜さんとクリスさんが違う世界へ跳ばされた時、このマシンは追尾機能を自動で起動してお二人の座標位置へ回廊を繋いでくれた……その機能を応用すれば蓮夜さんの行方を掴めるかもしれないと思っただけ、それには先ずこのマシンの更なる深部を明かさないと解析と転用が出来ない……先の一件から解放された幾つかのブラックボックスの中にもそのデータは存在しないし、他に何か方法は……)

あまり手をこまねいている時間もない。

今こうしている間にも蓮夜の命が危機に瀕しているかもしれないし、本部が今現在駐在しているこの海域……蓮夜を乗せた飛行機の墜落現場で、響達は今も休む間も惜しんで蓮夜の捜索に必死に励んでいるのだ。

そんな彼や彼女達の為にも、自分も早く打開策を見付けねばと焦燥感に駆られるエルフナインだが、ふとその時、

—……PP!—

「……………え……………?」

エルフナインが操作するPC画面に、突然一通のメールが送信された则表示されたのである。

(これは……添付メール……?けれど送信元は不明……いや、それ以前にどうやってボクのパソコンに……?セキュリティが掛かっている以上、外部からの任意外のメールやデータは受け付けないはずなのに……?)

いきなり送られてきた不可解な謎のメールに困惑するエルフナインだったが、とりあえず今はまず中身を確認する方が先決だと、エルフナインはウィルスの危険性も考慮して保護プログラムを起動しつつ、恐る恐るマウスを操作して画面をクリックした。

すると、画面には新たに別のウィンドウが開かれ、其処には……

「え……コレは……設計図……？」

画面に映し出されたのは、バックル中央に空きスロットが備わった奇妙な形状をしたベルトの立体的な図形……。

蓮夜のクロスベルト、そしてつい先日保護して今なお意識不明で眠り続けている謎の青年が所持していた謎のベルトと何処か雰囲気似ている、仮面ライダーのドライバーの設計図だった――。

風鳴翼&マリア・カデンツァ・イヴ編 (前編)

第九章／運命ノ少女×破壊者† on the load

③ (前)

——イレイザーと錬金術師の技術を組み合わせ生み出されたと名乗るホムンクルスの少女、ファートムを巡り、マンティスイレイザーやマスクドライダーfirstと激闘を繰り広げるも苦戦を強いられていた翼とマリア。

其処へ飛行機墜落事故から今まで消息不明となっていた黒月蓮夜ことクロスの思わぬ参戦により、マンティスイレイザー等を退ける事に何とか成功。

しかし戦闘直後、墜落事故で負った重傷の身のまま戦った事で傷が更に悪化し、蓮夜は意識不明に陥って一時は命の危機に瀕してしまうも、ファートムの謎の力による治癒能力のおかげで一先ずは一命を取り留めた。

その後、マリアの連絡により駆け付け付けた救急車で病院へ急ぎ搬送され、緊急手術。

数時間の手術の末にそのまま入院となった後、翼とマリアは状況が落ち着いた頃合いを見て本部に連絡する為に蓮夜が眠る病室にファートムを残し、一度病院前の玄関先に出て日が完全に沈んだ夜の下、専用端末からこれまで起こった出来事を本部の弦十郎、そして蓮夜の捜索に参加していた響達に報告を済ませていた。

『——それじゃあ、蓮夜さんは無事だったんですね……!』

「ああ。とは言え、かなりの傷を負っていて一時は危ない状態だった」

「しかも医師の話によると、墜落した飛行機の破片とかが体中に突き刺さってたらしくてね。そんな状態で無理を押しして戦ったのが祟って傷が更に悪化して……さつき話したファートムって子の治療能力がなければ、今頃どうなっていたやら……」

『っ……あの馬鹿ならやりそうだなあ、ったく……!』



『でも、無事に生きててくれて良かったデスよう……！』

『うん……ホントに良かった……』

またも無茶をした蓮夜に激しく憤るクリスの横で、切歌が思わず涙ぐみ、調も胸を撫で下ろして心からの安堵を浮かべている。

そんな彼女達の反応に、翼の横から端末の画面を覗き込むマリアが訝しげに首を傾げた。

「もしかしてと思うけど、彼のこういった無茶な行動は過去に何度もあつたりするの……っ？」

『何度』も、なんて生易しい話じゃないデスよ！』

『以前にも、皆の中の私に関する記憶が改竄された事件じゃ上級イレイザーとの戦いで

骨にヒビが入ったり重度の火傷を負ったり、クリスちゃんと一緒に別の世界に飛ばされた事件でも同じような目に遭ったり、調ちゃんも切歌ちゃんも関わった事件でも死ぬような怪我をしても、それでも戦ったりして……しかもどれも私達を庇ったりして出来たもので、自分の体の事とか全然顧みたりしないから余計に悩みの種になって……』

『そんな感じに戦いで無茶は勿論、全然関係ねーところで無駄に怪我はするわ、トラブルを起こすわで……あの不器男に関しては最早日常レベルに過ぎんだよっ』

『無茶な事はもうしないって、前に約束したのに……今度という今度はもう、絶対にお説教しないと気が済まない……』

(……し、調が此処まで分かりやすく怒りを見せるなんて……それだけ相当な事をやってきてたのね、彼……)

響達がこれまでの蓮夜の無茶を思い返して揃って頭を抱える中、グツと拳を固く握り締め、怒りのオーラを漂わせているのが画面越しに伝わるほど分かる調の珍しい憤りっぷりにマリアも若干気圧され冷や汗を流すと、そんな彼女の隣に立つ翼が溜め息混じり

に納得するように頷く。

「成る程、ようするに普段の立花から更に酷くさせたような人柄という訳か……それならば皆の苦勞も領けるな……」

『……え？つ、翼さん？其処で私を引き合いに出されると、何か、私も立つ瀬がないかなーつてつ……』

『元々お前にそんなもんある訳ねーだろ、バカ』

『ひ、酷い?!というかクリスちゃんだつて人の事言えないよね?!前の事件の時、まだ蓮夜さんから『記号』の力を貰ってなかった時なんて一人で無茶して上級レイザーに挑んだりとかしてたし!』

『あ、あん時は不器男と色々と行き違いがあつたからそうなつたつてだけだ!その後はその、な、なんつーか……!』

蓮夜の安否を知れた事で緊張が解れたからか、いつもの調子でガヤガヤし出した響達のやり取りを背に弦十郎もヤレヤレと肩を竦めると、翼とマリアに目を向けて話の続きを語る。

『それで、そちらで保護したという例のホムンクルスの少女……ファートム君からは、何か他に情報を聞き出せたのか？』

「いえ、それについては「彼が意識を取り戻してから話す」との一点張りで……」

「というか、取り付く島もない感じなのよね、あの子……初めて出会った時も人と関わろうとするのを避けたり、触られると尋常でないぐらい反発したりとか……あまり信用されてる感じがしないわ」

『……その少女が本当にイレイザーと錬金術の技術によつて産み出されたのだとするなら、奴らにそれ相応の目論見があるのだと考えるのが妥当だ。その為に彼女を利用する事を視野に入れているのだとすれば、奴らの元においてまともな仕打ちを受けていたはずもない……。その結果がお前達の言うように人を避け、人に触れられるのを極端なまで

に拒否しているのだとしたら……」

「……彼女のあの様相の原因は、イレイザーやそれに与していた錬金術師達の仕業によるものかもしれない、と」

『……！』

重々しい雰囲気、弦十郎と翼のやり取りを耳に、マリアと響達が衝撃を受けたようにハッと息を呑み、弦十郎も翼の推察に対して無言で頷き返す。

『とは言え、これも彼女本人の口から直接事情を聞き出すまでは推測の域を出ない。蓮夜君が目覚め次第、二人もそのファートム君から可能な限り話を聞いてみてくれ』

「分かりました。……それから逃亡したイレイザーとfirstの足取りについては、現在緒川さんが追っている最中です。そちらも情報を掴み次第、追ってこちらより連絡します」

『ああ、頼む。蓮夜君の安否が確認出来た以上、我々本部もこのままこの海域を発つて日本へ戻る予定だ。……本当ならこちらからもあと一人くらい増援を送れば良かったんだが、日本に残っているであろう上級レイザーやヴィーヴル達が大人しくしてくれてくれる保証がない現状では、下手に戦力を分散するのも難しくてな……』

「気にしないで頂戴。元よりこの件には私達だけで挑むつもりだったのだし。散々向こうには煮え湯を吞まされてきたのだから、リベンジの機会を得られて寧ろ好都合よ」

心做しか申し訳なさそうな弦十郎に対し、強気な口調からレイザー達に対する意気込みを口にするマリアの隣で、彼女の意見に同意するように翼も神妙な表情で頷く。

そんな二人の毅然とした様子から弦十郎も要らぬ杞憂だったかと苦笑した後、一先ずはヴィーヴル本人の口から詳しい情報を聞き出す為にも蓮夜の回復を待つ方針に結論を固めて日本に戻る準備を進めるべく通信を切り上げようとした所、マリアが其処で先程から気になっていたある疑問を訝しげに口にする。

「ところで、エルフナインは？今回の件に鍊金術やホムンクルスが関わっているから、あ

の子の意見も聞いておきたいと思ったのだけど……」

『ああ、エルフナイン君は今席を外しててな……。少々重要な案件を急に抱える事になった為、今はそちらの調査を進めてもらっている所だ』

「重要な案件……？」

翼が怪訝に聞き返すと、画面の向こうの響達が不思議そうにお互いの顔を見合わせている。

その反応からしてどうやら彼女達も今の件について初耳だったようだが、弦十郎は構わず話を続けていく。

『それについてはエルフナイン君の調査が進み次第、皆にも改めて説明する予定だ。今とはともかく、敵の目的や勢力の規模が分からない以上警戒を怠らないでくれ。翼、マリア君。ロンドンに滞在してる間、蓮夜君とファートム君の事を頼んだぞ』

『本当に、ほんつとー！にお願いしますね！二人とも！』

『ぜってえー目を離さないでくれよ？ほつとくとマジで何処までも無茶しがるからなアイツ！』

『ついでに、目を覚ましたらアタシ達にもソツコー連絡するように伝えたい欲しいデス！』

『お説教2時間コース……場合によっては延長もアリ』

「え……ええ、了解したわ……けど、ほどほどにねっ？」

最後に何度も念を押してくる響達からの圧力に圧倒されつつも領き、マリアは本部との通話を終えながら静かに溜め息を吐く。

「何だか色々大変な事になってきたわね……錬金術やイレイザーに加えて、まさか今度はその二つの勢力が結託してホームンクルスを生み出してたなんて……」



「そうだな……だが逆に言えば、手掛かりらしい手掛かりを得られなかった今までと違い、漸く敵の尾の先を掴み、僅かにでも前進したとも言える。黒月蓮夜も見付かった今、敵の目論見を打壊するには今がまたとない機会だ」

「……確かにね。当面の問題だったイレイザーへの対策も一先ずは心配せずに済むし、そういう意味では前向きに捉えた方が建設的かもね」

まだ完全に安心出来る状況ではないものの、それでも蓮夜の生存やイレイザー達の目的を知る手掛かりとなるファートムを保護した事で、少なからず光明が見えてきた事に安堵の表情を浮かべるマリア。

そんな彼女に釣られるように翼もフツと小さく微笑み、病院の建物を徐に見上げていく。

「取り敢えず、私達もそろそろ病室へ戻ろう。彼が動ける状態でない今、奴等がいつ襲撃を仕掛けてきても対応出来るように厳戒態勢を取っておかねば」

「そうね……あの子達からも目を離さないようにと何度も釘を刺された事だし、私達がしっかりと守ってあげないと」

先程までの響達との会話を思い出しながら呟きつつ、翼とマリアもヴィーヴルの待つ蓮夜が眠る病室へ戻るべく歩き出した。

第九章／運命ノ少女×破壊者† on the load  
③（後）

——蓮夜が眠る病室。

本部への報告を終え、外に出ている翼とマリアが扉を開けて室内に足を踏み入れると、其処には二人が先程部屋を出た時と変わらず未だベッドの上で眠り続ける蓮夜に寄り添うように、ファートムが傍らの椅子に座ったままジツと蓮夜の顔を見つめている光景があり、扉の開閉音に気付いたファートムが無表情のまま二人の方に顔を向ける。

「ただいま、ヴィーヴル。さっきは急に出て行ってごめんなさいね」

「……………」

謝罪するマリアにファートムは無言で小さく首を横に振って応え、視線を蓮夜の方に

戻して再び黙り込んでしまう。

そんな彼女の淡白な反応に翼は些か怪訝な表情を浮かべるが、今はそれよりもすぐに気を取り直し、ヴィーヴルの隣にまで歩み寄って眠っている蓮夜の様子を覗き込んだ。

「黒月の様子はどうか？」

「……」

翼の問い掛けに対し、ヴィーヴルは一度彼女の顔を横目に見た後、すぐに蓮夜の方へと向き直す。

「今の所、特に問題は無いとは思う。私も出来る限りの処置をして、手術も無事に終えた今、後は彼の体力次第になるが……」

「……そうか」

「こればかりは、彼自身にどうにか頑張ってもらうしかないわね。……で、それまでは貴女の事情も訊かせてもらおう訳にはいかないのよね？」

「……二度手間は好きじゃない……人に何度も説明するほど愉快な話ではないし、何より、事情を説明した所でお前達が協力してくれる保証はないだろ……」

「っ、保証って、そんな言い方……」

あまりに不躰な言い方をするファートムに思わず反論しようとするマリアだが、そんな彼女を翼が軽く手で制し、ファートムを見下ろしながら淡々と言葉を紡ぐ。

「確かに、そう言われれば否定もし切れない。何せこちらも、まだお前とあのイレイザー達の間になんか繋がりがあるのか分からないのが現状だ。……状況証拠だけを鑑みれば、お前は奴らの元から逃げ出したように思えるが、それだけではまだお前の事を信用し切れないからな」

「ちよつと、翼……!」

「……彼の命を助けて、こうしてお前達と接触を図っていること事態、奴らの考えた詭謀かもしれないと……?」

「少なくとも、私はその可能性も考慮している。本部からのこれまでの報告で、イレイザーという連中はこれまでも狡猾且つ悪辣な手段で何度となく立花達を貶めようとしたと訊く。……仮にお前にその意志がなかったとしても、向こう側がお前も預り知れない所でこの状況を利用しようと目論んでいても不思議はない」

「……なるほど。何事においても警戒心を怠らないという点においては、流石はシンフォギア装者といったところか……」

「……褒め言葉として受け取っておこう」

皮肉を込めて淡々と返す翼だったが、ファートムは特に気にする素振りも見せず、そのまま蓮夜の方に意識を向けたまま口を開く。

「なら、お前達の望む疑問に一つだけ答えてやる。奴らの目的は至極単純明快。……このロンドン全域の支配を皮切りに、お前達の物語を手中に収める……私という存在は、その為だけに生み出された”鍵”に過ぎない」

「……何だと……？」

「鍵って、それは一体どういう——」

「……………う……………」

フアートの言葉の意味を尋ねようとする二人だが、その時、蓮夜の口から微かに声が漏れ、それに気付いた二人は驚きと共に揃って蓮夜の方へ目を向ける。

すると、今まで固く閉ざされていた瞼が僅かに動き始め、ゆっくりと開かれていくと、ぼんやりとした様子で天井を見つめながら、蓮夜は掠れた声で小さく呟いた。

「ハ、ハ）……は……」

「黒月……?!目を覚ましたのか!」

「……………っ?おまえ………たちは……?」

まだ意識がハッキリしていないせいなのか、焦点の合わない瞳を揺らしながら起き上がろうとする蓮夜に、翼とマリアは慌てて駆け寄っていく。

「無理に動かない方が良く!まだ手術をしたばかりで、身体の方は万全ではないんだ!」

「っ、俺の……手術……?」

「ええ……貴方、重傷を負った状態のままイレイザー達と戦ったせいで、戦い終わった後にそのまま倒れたのよ。覚えていないの?」

「……………そう、いえば……」



マリアの言葉を聞きながら、蓮夜は少しばかり記憶を呼び起こすような仕草を見せた後、すぐに何かを思い出したように目を見開く。

「そうだ、奴らは……!? あ、ぐっ!」

勢い良く上半身を起こした蓮夜だったが、腹部に痛みを感じたのか、すぐさま顔を歪めて腹を押さえ始める。

そんな彼に翼とマリアが心配し慌てて身を乗り出すと、そんな二人の様子を見て、蓮夜は申し訳なさそうに眉間にシワを寄せて謝罪した。

「すま、ない……確か、風鳴翼と、マリア・カデンツァ・ヴナ・イヴ、だったか……響達から度々話を聞いてた……助っ人に来たハズが、来て早々迷惑を掛けてしまうなんて……不甲斐ないっ……」

「そんなことは良いっ。それよりも、傷が開いたりしたら大変だ。今は安静にしている」

「っ……しかし……」

「焦る気持ちは分かるけど、無理をしたところで状況が好転する訳じゃないわ。貴方のおかげでイレイザー達も退けられた訳だし、今はゆっくり休んで」

「……………申し訳ない……………」

翼とマリアに諭され、蓮夜はすまなそうに項垂れながら謝罪の言葉を口にし、再びベットに横になろうとしたところで、ベットの傍らの椅子に座るファートムの存在に気付いて怪訝に眉を寄せた。

「彼女は……?」

「ああ、彼女はファートム。イレイザーに追われていた今回の件の関係者で、瀕死のお前を治療して一命を取り留めてくれたのも彼女だ」

「……………イレイザーに、追われていた……………?」

翼の説明を受け、蓮夜は更に疑問を深めてファートムの方へと視線を移すと、当の本人は特に気にした様子もなく、ただ無表情で彼から視線を逸らすだけだが、翼はそんなファートムに目を細めて問い質すように口を開く。

「黒月の今に至るまでの経緯も気になるが、先にファートム、彼はこうして目を覚ました。そろそろ詳しい事情を、先程の続きを含めて説明して貰おうか」

「……………」

黙ったまま俯くファートムだが、その態度こそが何よりも雄弁に語っていた。

恐らく翼やマリア、そして蓮夜の三人に対してこれ以上隠し事をするつもりはないのだろうが、一方で、目覚めたばかりの蓮夜は今自分が置かれている状況に理解出来ておらず、そのせいか困惑するように三人の顔を見回してしまう。

「何の話だ……？俺が眠っている間に、何か……？」

「大した事ではないのよ。ただ彼女が詳しい事情を説明するのは、貴方が意識を取り戻してからと頑なに拒んでいるだけで」

「……俺が？」

自分が目を覚ます前に何があったのか。全く見当がつかない蓮夜は困った様子で首を傾げるが、そんな彼の反応を横目に、ファートムは漸く重い口を開いた。

「約束は守る。ただ私も全てを知る訳じゃない。分かる範囲でしか答えられないぞ」

「それでも構わない。続けてくれ」

翼の言葉に小さく息を吐き、ファートムは静かに語り始めた。

「目覚めたばかりの彼の為にももう一度説明するが、私の名はファートム。錬金術師と

「レイザー、双方の技術と知識を掛け合わせた事で生み出されたホムンクルスだ」

「!?何だどつ……?」

「其処までは私も翼も訊いた話よ。問題はその先……何故貴方という存在が生み出され、今こうして此処にいて狙われているのか。その理由を聞かせて欲しいわね」

「……分かった」

起き抜けにとんでもない情報を聞かされて驚愕する蓮夜の傍に移動したマリアに向けて小さく首肯すると、ファートムは淡々とした口調のまま説明を続ける。

「私が生み出された理由は、奴等の計画における鍵を握る為……それは既に語った通りだ。私という鍵が手元になれば、奴らは計画を実行出来なくなる。だから私は隙を見て奴らの元から逃げ出した……アイツらの計画を達成させない為に」

「計画……?」

ファートムの説明を聞きながら翼が訝しげに聞き返すと、ファートムは椅子から徐に立ち上がり、窓の外を眺めながら静かな声で呟く。

『既存の摂理は終わりを迎え、森羅万象はその意味を変える事となる』……』

「……？何の話？」

「私を作った錬金術師共が口を揃えて、いつも偉そうに語っていたご高説だ。私にも意味はさっぱり分からないが、どうやら連中はこのロンドンを丸ごと乗っ取るなんて大それた計画を企てているらしい。それを叶える過程の中で私という存在が犠牲になる事を知っていたから、私は死にたくない一心でこの街まで逃げてきて、どうにかして見付けようと思った。錬金術師達の目論見を阻止し、イレイザーを殺せる存在……お前をだ、黒月蓮夜」

ファートムはそう言って振り返ると、真っ直ぐに蓮夜の方を見つめて指差す。

そんな彼女の瞳には、今までの無機質な印象とはまるで違う感情が宿っている事に気付くが、それを指摘する間もなく、ファートムは指を下ろして再び話を続けた。

「お前の噂は、私がいた施設の錬金術師達の間でも知れ渡っていた。異世界からの異端者。イレイザーと聞けば情け容赦なくその命を刈り取る卑劣漢。……其処まで恐れられる男なら、必ず奴らを止めてくれるだろうと期待してな」

「……卑劣漢か……会った事もない相手に、随分と好き放題言ってくれる……」

何の面識もない錬金術達からの誹謗中傷を聞かされて何処か不快げに顔を歪める蓮夜。そんな彼に対し、ファートムは更に言葉を続けていく。

「しかし、想定外のトラブルもあった。本来の私の脱走プランでは、研究に必要な材料集めの為に人が出払い、施設の警備が薄くなる日を狙って奴らが常備している転移用のジエムをどうにか入手し、そのままお前の存在が確認された日本へと向かう予定だった。だが、私欲に目が眩んだ錬金術師共が突然イレイザーを裏切り、私を秘密裏に施設から連れ出したんだ。……最も、そんな目論見も見抜かれていたようで、連中が内輪揉

めで混乱している隙にどうか目を盗んで逃げ出せはしたが、肝心の転移用のジエムを手に入れる暇すらなく……後はお前達も知る通り、街まで何とか逃げ果せた私とお前達が偶然にも出会い、追っ手のイレイザーと戦う羽目になったって訳だ」

「……そんな事があつたのね」

「錬金術師とイレイザーの間の同盟関係は、既に瓦解しているという訳か……それで、お前を利用してロンドンを乗っ取るとやらの計画、他に何か情報はないのか？いつ何時なんときどんな方法を使つてかなどは？」

「それについては、私もそれとなく奴らに問いだした事はあつた。……ただそれで返つてきた返答は、「道具如きが余計な詮索をするな」と、躰という名目で半日以上以上の暴行の末、3日間の断食を命じられて独房に幽閉されて終わつたがな……」

「つ……何よそれ……酷いっ」

（……司令が語っていた推察、あながち間違いではなかったという訳か……しかし、今の



話は何処まで信用出来る？こちらの同情を誘おうとしている線も捨て切れないが……)

左腕を強く抑え、何処か遠く見つめるその瞳に何処か悲哀の念を宿しながら遠い記憶を思い返すファートムから聞かされた事情に、マリアは静かに憤り、翼も自分と弦十郎の懸念と推測が少なからず的中していた事に複雑な心境になりつつも、彼女の話の全てを信用出来るか否か見定めるように怪訝な眼差しをファートムに向けつつ、質問を続ける。

「もう一つ質問する。あのマスクドライバー……firstは何者だ？何故奴はイレイザーに与している？」

「……あの飛蝗男か……生憎、私も奴の事は何も知らない。何の前触れもなく、ある日ふらっと施設に現れて、何度かイレイザーの連中と話してる所を目にした程度だ……ただその時の会話の内容からして、あまり良好な関係には見えなかったが」

「……そう……(ファートムもfirstの事は知らない……戦場でのやり取りからして彼等が信頼し合っていないのは見て取れてたけど、彼は一体何者なの……?)」

firstについてはファートムも何も知らないらしく、ますます謎が深まるfirstの正体について最早不気味さにも似た感覚を覚えて険しい表情を浮かべてしまうマリア。

一方、未だ目覚めたばかりではつきりとしめない頭に何とか一同のやり取りを叩き込んだ蓮夜は口元を手で覆いながら何やら思案する素振りを見せると、口元から手を離しながらゆっくりと視線を上げていき、ファートムの顔をジッと見つめる。

「正直な話、こちらとしては意識を取り戻したばかりで、お前の話の全てを今すぐ理解し切れるとは言えない。……ただ一つ、確認させて欲しい。俺の命を助けてくれたのは、俺にお前をイレイザー達から守って欲しいからか？」

「……そうだ。この中で奴らを消せるのは、現状お前の力しかない。連中が何を企んでいるかなんて知らないが、少なくとも、奴らの目論見が果たされれば私もきつと無事ではいられない。そんな確信がある」

「……………」

「死にたくない。勝手な理由で造られて、勝手な理由で犠牲にさせられるだなんて私はぜったいに御免だ。……だから頼む。私を、助けてくれ」

まっすぐ、淀みない瞳を向けて助けを願うファートム。

その目には今までの無機質な印象とはまるで違う感情が宿っている事に気付き、蓮夜は目線を落として少しの熟考の後……

「……………分かった。お前からの頼みを引き受ける」

「……………！本当か……………？」

「ああ。理由がどうであれ、命を救ってもらった恩義はきちんと返すつもりだ。ただ、俺個人はともかくとして、S. O. N. G. であるこの二人が賛同してくれるかはまた別な話なんだが……………」

そう言いながら翼とマリアに目を向ける蓮夜に釣られるように、ファートムも二人に視線を向ける。

そんな二人からの視線に一瞬キョドってしまふマリアだが、一度咳払いをし気を取り直した後、気を引き締めた真剣な表情に切り替えて頷く。

「私も別に構わないわ。助けた縁もあるのもそうだし、奴等が貴方を狙っているのなら、傍に置く事でその目論見を暴く事も出来るかもしれない。そうでしょう、翼？」

「……そうだな。今の私達にはイレイザー達の目的を知る手掛かりを何一つ得ていない。未だ疑い、信頼出来ない部分はあれど、お前と行動を共にすれば向こうからの接触が望める以上、調査を進めるに当たったってはこれ以上ない手掛かりとなる」

「……そうか。利害が一致してる以上、私はお前達の力を利用して自分の身を守り、お前達も私を利用して奴等の目的を探る……正にギブアンドテイクという訳だな。いいぞ。そういう打算的な関係の方が、私としても逆に信頼出来る」

フツ、と、マリアと翼からの返答に目を伏せて小さく微笑むと、ファートムは蓮夜の傍らに歩み寄り、そつと右手を差し出した。

「では、これで交渉成立と受け取ってもいいな？ 私も何か重要な情報を思い出せば、お前達に惜しみなく提供する。その代わり……」

「……ああ。俺達三人で、お前を必ず守り切る」

そう言つて、差し出された手を握り返す蓮夜。

一方で翼はまだファートムへの疑心を捨て切れていないのか、その様子にどこか浮かない顔を見せており、マリアはそんな彼女を横目に見つめた後、あからさまに話題を逸らすように両手をパンツと叩いて皆の注目を自分に集めた。

「さて、それじゃあ話も纏まった事だし、次は貴方の番よ。黒月蓮夜」

「……………？俺の、番？」

「ええ。貴方、飛行機が墜落してから今の今まで何処で何をしていたの？私や翼は勿論、風鳴司令やクリス達も相当心配してたわ。その辺の経緯、聞かせてもらえるわよね？」

「それは構わないが。……………いや、待て。待ってくれ。クリス達も心配してた、と言ったか……………？」

「……………？ああ。雪音はともかくとして、普段は温厚な立花や、物静かな月読すら大層ご立腹な様子だったぞ？確か……………目を覚ましたらすぐに連絡しろ、目覚め次第説教の二時間コース延長有り、とも」

「……………」

響達からの伝言を思い返すように顎に手を添えて伝える翼の言葉を聞き、途端、蓮夜の顔色が見ると真つ青に染まっていく。

「…………ちよ、ちよっと、大丈夫？何だか急に顔色が悪くなってきてるようだけど…………？」

「……………問題、ない……………ただ、一つだけ頼みを聞いてもらえると助かるんだが、良  
いだろうか……………？」

「……………？」

弱々しい声で呟きながら、恐る恐ると手を挙げる蓮夜。

そんな蓮夜の先程とは打って変わってこ様子に翼とマリアが小首を傾げると、蓮夜は  
目を泳がせながら酷く怯えた様子で…………

「皆への連絡は、俺の方からする……………その時に二人にも今までの経緯を説明したいと思  
うんだが……………その前に、その……………胃薬を、沢山用意して貰えると……………助かる……………ホント、  
凄く……………」

「……………（……………ああ、成程）」

絞り出すような声で、胃の辺りを抑えながら言う蓮夜の一言で全てを察したのか、二人は揃って何とも言えない微妙な苦笑いを浮かべ、響達への連絡の前に彼の為に胃薬を用意する事に決めたのだった……。



## 第九章／運命ノ少女×破壊者 † on the load

## ④ (前)

——翼とマリアに頭を下げ、二人に買ってきてもらった胃薬をこれでもかと飲み込んでから本部へ無事意識を取り戻した事を報告する為に連絡した蓮夜。

そんな彼を待ち受けていたのは、最初は彼が目覚ましてくれた事への大きな喜び。

そうして次に待っていたのはやはりと言うべきか否か、無事であったのならどうしてすぐに連絡しなかった上に重体の身で戦ったりなどしたのかと、怒り心頭な響達からのお叱りであった。

その件で大いに心配を掛けてしまった彼女達からの暫しの説教を素直に受けてる最中、いい加減状況を見兼ねて仲裁に入った弦十郎からの助け舟で話題を逸らしてもらってから、蓮夜はこれまでの自分の身に起きた出来事について説明し始めた。

先ず始めに、自身が乗っていた旅客機を墜落させた首謀犯がクレンであったこと。

次に旅客機が墮ちた後、蓮夜は飛行機の爆発の後から意識を失ってしまったらしく、それから目を覚ますと、いつの間にか何処かの見知らぬ孤島の浜辺に無数の飛行機の残骸と共に漂着していたらしい。

怪我の具合はその時から既に酷かったらしく、破いた服などを包帯代わりに傷口を塞ぎ応急処置を施していた最中、遠方からイレイザーの気配を察知し、その現場へ駆け付けるべくすぐさまタイプイチバルに変身した後、以前クリスに見せてもらったミサイルサーフィンによる全速力で気配がする方角を頼りにロンドンにまでどうにか辿り着けたとのこと。

以降は翼やマリアも知る通り、現場に到着すると同時に成り行き上、ファートムを狙うマンティスイレイザー達との戦闘に入る事となり、何とか彼女を守り切って二人との挨拶を交わす最中に体力の限界が遂に訪れ倒れてしまった……というのが、今に至るまでの蓮夜に身に起きた経緯の全て。

つまり要約すると、事故から数日間、怪我の治療も何もしていない昏睡状態から目覚めてすぐに翼とマリア達の救援に駆け付け、そのまま無理を通して戦ったせいで傷が更に悪化し危険な状態になってしまったという訳だ。

無論、そんな話を聞かされて響達が黙っている筈もなく、火に油を注がれたが如く怒髪天。

彼女達からの再度のお叱りを受ける流れで蓮夜がいたたまれないあまり思わずベツドの上で土下座しようとした途端、『そんな重体で無茶な態勢しない!!』と響達は更に激怒。

結果、調が宣告していた通り蓮夜への説教は延長コースに突入してしまい、蓮夜がお叱りを受けているのを他所に、弦十郎は酷く呆れながらも翼とマリアに引き続き蓮夜とファートムの護衛を頼みつつ、緒川と共に姿を消したイレイザーとfirstの動向を探るようにと指示し、まだまだ説教し足りさそうな響達をどうにか宥めて通信を終えたのが、先程までの話。

そして、現在――



――本部との通信を終えた暫し後、蓮夜は三人と一緒に点滴スタンドを傍らに病院内の自販機がある待合所へ移動し、マリアが奢ってくれた缶ジュースを片手に淀んだ空気を漂わせながらすっかり疲れ切った様子で備え付きのソファアアの上に座り込んでいた。

「……………ええつと、その……………だ、大丈夫……………？何だか物凄い憔悴し切ってるようだけどっ」

「嗚呼……………しんぱい、いらぬ……………きにしなでくれ……………」

とても大丈夫そうとは思えない状態の蓮夜を氣遣つて恐る恐る声を掛けるマリアだったが、当の本人は心ここに在らずといった感じで項垂れたまま力無く返事をするだけだった。

そんな彼を見て流石に同情を禁じ得なかつたのか、隣に立つ翼が目尻を下げて苦笑いと共に口を開く。

「まあ、なんだ……………慰めと言うにはアレだが、立花達も立花達ですつと気を張り続けていたよだからな。皆もそれだけ身を案じていたという事なのだろう。決して憎からずああして責め立てた訳ではないだろうから、どうかその辺りの気持ちは汲んでやって欲しい」

「……………ああ……………心配を掛けたのは俺なのだし、悪いのは俺だと重々承知している……………してはいるんだが……………それはそれとして、毎回こう何度も何度も絞られるとどうにも気が重くなってしまふというか……………最初は響だけだったのが、何故か最近ではクリス、切歌

に調からまで叱れるようになるとは……どうしてこうなったんだっ……」

翼の言葉に弱々しく返答するが、やはり普段から散々心配を掛けてきた手前、今回の件は素直に申し訳なく思っているのは本心のようで蓮夜は深く溜め息を吐いてしまう。

そんな蓮夜のやつれた様子に翼とマリアも互いに何とも言えない顔を見合わせる中、ひと足先にジュースを飲み終えたファートムが自販機に隣接されてるゴミ箱に空き缶を捨てつつ、溜め息混じりに口を開く。

「そんな事より、これから一体どう動くつもりなんだ……？ イレイザー達は黒月蓮夜が合流した事に暫くは警戒を覚えるかもしれないが、もし今彼がこんな状態である事が知られれば、これ幸いにと一気に攻め込んでくる可能性もある。何しろ奴等にとつてクロスは一番の障害だ。それを排除出来る絶好の機会を、奴らがみすみす逃すとも思えない」

「……そうね。それにファートムの話だと、奴らはこのロンドンを支配する事で何かをしようと企んでようだし……少なくとも、私達がこうしている間にも着々とその準備を

進めてると考えるべきでしょうね」

「ああ。ファートムは己自身を『鍵』と称していたが、それが具体的にどういった意味なのかもまだ見当すら付いていない状況だ。その辺りも含め、慎重に情報を集める必要があるが……ファートム、今からでも何か思い出せる事はないのか？ 例えば、お前が囚われていたという奴らのアジトの場所などは……」

翼が腕を組んだままファートムに視線を向ける。しかし、その問いにファートムは目を伏せて静かに首を横に振った。

「生憎、アジトから連れ出された時の記憶は状況が混沌としたのも相まってあまり良く覚えていない。……そもそもその話、私は外の世界についての知識はほぼ無知とっていいぐらいだ。仮にアジトの外観程度を覚えてたとて、それが何処の場所に当たるのかさえも皆目見当がつかない」

「む……となると、やはり緒川さんが奴らの足取りについて何か掴んでくれる事を期待するしかないか……」

「……………？緒川さんと言うと、確か……………」

「翼のマネージャーで、S. O. N. G. 調査部に所属するエージェントよ。情報収集といった裏工作に関して敏腕のスペシャリストだから、今も逃げたイレイザーとf i r s tの足取りを追ってもらってるわ」

「ああ……………そういえば以前、風鳴司令や響達から話を聞かせてもらった事があったな……………」

確か翼のマネージャー兼お世話役という表を顔を持ち、その正体は忍びの末裔としてS. O. N. G. を陰ながら皆をサポートする現代の忍者でもあるとか。

最初にその情報を聞かされた時は何かの聞き間違いかと耳を疑ったりなどしましたが、そもそもシンフォギアやノイズのような超常な存在、もつと言えば自分やイレイザーのような存在がいるのだから、忍者の実在くらい寧ろ健全な方だろうと自分を納得させた記憶もある。



「でも、そうなってくると私達は情報集めの方面で大して役立てそうにはないわね。……やっぱり、今はこの二人の身辺警護に専念すべきかしら。特に彼はまだ満足に動ける身体ではないのだし」

「ああ、いや、俺の事なら気にしなくていい。クロスベルトを巻いておけば身体の傷も勝手に治してくれる。これまでの経験上、それで安静にさえしていれば、明日になる頃には普通に歩ける程度にまで回復してる筈だ」

「ベルトを巻くだけで……たったそれだけでそんな大怪我を治せるっていうの、貴方？」

「確かな事は分からないが、少なくとも俺はそう思ってる。そうでもなければ、毎回毎回あんな死ぬような怪我を負いながらたった数日で完治するだなんて説明が付かない」

「……何となしに言っているが、そうして理知外の回復力を頼りに自らを軽視して顧みようとしないから、立花達も彼処までの憤りを見せるのではないか？」

「そうね……あの子達があんなにも怒りを覚えるのも、何となくその片鱗が見えてきた気がするわ……」

「……いやまあ……その節がないかと問われれば確かに否定は辛い……いや待て。その目はやめてくれ。あまりの既知感にどうしてもこちらがいたたまれなくなってしまう……」

そう言いながら片手で遠慮がちに制しつつ、自分を説教する時の響達のソレと似たような眼差しを向けてくる翼とマリアから気まずげに顔を逸らしてしまう蓮夜だが、視線を逸らした先で半ば呆れたような怪訝な眼差しでこちらを見るファートムと目が合っ  
てしまい、気を取り直すように軽く咳払いし、重い腰を上げ立ち上がった。

「とにかく……奴等の計画を探る為にも、人手は多い方がいい。俺はイレイザー達の気配を感じ取る事が出来るから、直接街を出歩けば何かしらの発見を得られるかもしれない」

「……レイザーの気配を感知出来る、ね……それは貴方自身の力なの？それとも、ベルトの力？」

「……分からない。ベルトを外していても奴等の気配を読み取れはするんだが、果たしてこれがベルトを着け続けた事により身に付いたものか、それとも元々ある俺自身のモノなのか……どちらにせよ、俺自身に記憶がない以上、どういった理屈なのかと聞かれても困る。答えようがない」

「今はその事を追求しても仕方がない、という訳ね……わかったわ。でも、あまり無茶はしないで頂戴。いくら貴方が強いといっても、相手は人間離れた身体能力を持った化け物よ。幾ら何でも、一人でどうにかなる程甘くはないと思うわ」

「分かっている。奴らの目的を知る為に必要最低限の情報を集めるだけだ。……ただそれでも、クレン——上級レイザーもこの件に一枚噛んでる以上、何処かで無茶を強いられる必要が出てくるかもしれない。そうなれば、俺一人でこのロンドンで起きている異常事態を止めるのは難しい。だから……」

そう言うと、蓮夜は二人を見据えて真剣な表情を浮かべた。

「無茶を言ってるのは自覚している。ただそれでも、どうか協力して欲しい。一人では満足に戦えない俺には、二人の助力が必要なんだ……頼む」

そう言いながら貴方を深く頭を下げる蓮夜。その言葉に、翼と MARIA は一瞬呆気にとられたようにキョトンとした顔をするも、やがて互いに目配せして小さく微笑みながら同時に頷き、連夜を見る。

「ええ。言われるまでもないわ」

「ああ。私達が不在の間、立花達を救ってもらった恩もある。それを返す為にも、微力ではあるが尽力しよう」

「……ありがとう」

二人の返答を聞き、頭を上げた蓮夜もまた静かに口元を緩めて安堵の笑みを作る。

そうして話が纏まったところで、蓮夜はファートムの方に振り向いた。

「一先ず、俺達の方はその方針で動くつもりだが……お前はこれからどうする？」

「そうね。イレイザー達は貴女のことを狙ってるようだし、此処は嚴重な警護を付けて何処かに身を隠しておいた方が賢明——」

「いや。私もお前達と行動を共にする」

間髪入れない即答に、思わず目を丸くさせる三人。そんな彼等の反応を見て、ファートムは目を伏せて淡々と言葉を続けた。

「警護なんて付けられたところで、普通の人間程度がイレイザーに傷一つ付けられる筈もない。寧ろ無駄な被害と犠牲を出してしまうのが目に見える。なら、此処は唯一奴らを倒せる黒月蓮夜と行動を共にしてた方が断然マシだろう」

「それ、は……確かに一理あるけれど……」

「それに、私としても奴らに関する情報収集に協力してやりたいと思ってる。何せ奴等の狙いは私だ。なら私が街を適当に出歩いていけば、向こうから勝手に姿を現してくれるかもしれないだろう？」

「……つまり、奴らを誘き寄せせる囮役を自ら買って出る……と？」

「早い話が、な……。私としても一刻も早くこの状況を打破して自由の身になりたい。その為にも私はお前達に同行する。その方が効率的だし、そちらとしても、事態を早く終息させたいのなら手っ取り早い方がいいだろう？」

「それはそうだけど……だからといって狙われてると分かっている貴女を白昼堂々歩かせるといふのも……」

尤もらしい理由を述べながらファートムは自ら囮役になるのに積極的なようだが、翼とマリアの方はそんな危険な役回りをこんな小さな少女にやらせるのはあまり賛同寄

りではなく悩ましい表情を浮かべているが、そんな二人の心配を他所に、ファートムは相変わらず冷静な面持ちで蓮夜の方を見た。

「お前はと思う？…この二人が反対するように、やはり危険過ぎると思うか？」

「……………」

ファートムから問い掛けられた蓮夜は無言のまま口元を片手で覆いながら考え込む。

翼とマリアの心配も最もではある。敵の狙いがファートムにあると分かっている以上、普通であれば安全な場所に彼女を隔離しておくのが正しい判断だと思う。

しかし相手が不条理を当たり前とする以上、正攻法が通じる筈もないと考えた方がいい。

「……………念のため聞いておくが、仮にもし俺達がその提案を蹴った場合、素直にこちらの言う事に従ってくれるのか？」

「それが100%、私の安全を保証してくれるのなら文句はない。……そうでなければ、私は私の身を守る為に自己の判断を優先して動かせてもらう」

「……下手に目を離すよりかは、見える範囲で傍にいてももらう方が幾分マシ、か……」

絶対と呼べる安全策がない現状、ファートムの身柄を誰かに預けるのも本人が言うように不安の方が勝る。

顔色一つ変えないファートムの宣言に思わず溜め息を漏らしながらも、翼、マリアと互いに困った表情を突き合わせた後、最終的に小さく肩をすくめた蓮夜は仕方がないと諦めた様子でファートムに再び目を向けるのであった。





「……………う……………あ……………う？」

一方その頃、S・O・N・G・管轄の医療機関。

此処には別世界からの漂流者である謎の青年が医療室に収容され、長らく意識不明の状態で眠り続けている。

しかし、その青年の瞼が今、ピクリと僅かな反応を示した後、ゆっくりと開かれ、久しく差し込んだ光に眩しそうに目を細めた。

「……………う？どっだ……………(っ)……………う？」

まだ意識がハッキリとしないのか、寝惚けたようにボヤける視界に映る見知らぬ天井を眺めながら眩く。

そして自分が何故此処にいるのかを思い出そうとしながら僅かに頭を上げて辺りの

様子を伺おうとした際、点滴や心電図などの医療機器に繋がれている自身の身体を目に入れてギョツとなる。

「う、おおお……な、んだこりや……？俺、なんでっ……あだあ?！」

驚きのあまり思わずベッドから上体を起こそうとした途端、ベッドに突いた手を踏み外し、青年はそのまま顔面から床へ派手に勢いよく倒れ込んでしまう。

と、其処へ……

「———つたく！かもしれねえと思いはしたが、ホントに無茶する馬鹿がいるかつての、あの不器男……!！」

「正直、アレでもまだまだ怒り足りなかったかも……」

「ま、まあまあっ……取り敢えずコレで心配事もなくなったわけデスし、今は一先ず蓮夜さんの無事を喜ぶべきデスよっ」

「二応反省自体はしてくれてたようだしね。……それでちゃんと聞き入れてくれるかはまた別問題なんだけど……」

「その見込みがねえから言っつてんだよつ……はあつ、こうなりや先輩とマリアも味方に引き込んで、一度徹底的……に……？」

「あ、だだだだつ……うんつ……？」

個室の扉が開き、談笑を交わしながら部屋の中へ入ってきたのは響、クリス、切歌と調の四人。

蓮夜が不在の間、定期的な青年のお見舞いを彼から任されて足を運んだ少女達と、フラフラと床に強打した頭を擦りながら身を起こした青年は互いの存在に気付き、ガラス板越しに視線が交わり、暫し硬直。で……

「ひ——人だアあああつ!!助かったあああああつ!!」

—バアアアンツ!!—

「ギョエエエエエツ!!?こ、こつちも生き返ったデスよおおおおつ!!?」

「切ちゃん、不謹慎……!どつちも死んでない!」

「い、意識を取り戻したのか……!?!お、おいっ!オツサンに連絡っ!急げっ!」

「わ、わかったっ!?!」

先に我に返った青年が、突然歓喜の声を上げながら抱き着いてきそうな勢いでガラス板に張り付いてきたのである。

その勢いに反射的に身を仰け反らせながら絶叫する切歌の隣で調も慌てふためきつつも彼女を落ち着かせようとすると、響はクリスに促されて青年が目覚めた事を弦十郎に連絡する為、急いで部屋を飛び出していくのだった。